# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～Remember my heart～

アルフォンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｒｅｍｅｍｂｅｒｍｙ　ｈｅａｒｔ～

【Ｎコード】
Ｎ３６３４Ｌ

【作者名】
アルフォンス

【あらすじ】
ゆりかご決戦に負けた管理局は、何とか生き残ったティアナとフィルを中心に最後の決戦に挑んだ。クアットロを倒し、すべてが終わったかに見えたが……。
この物語は、オリキャラのフィル・グリードが女神の力を借りて逆行し、再びスカリエッティに戦いを挑んでいく物語です。
彼は、歴史を正しき道に戻し、六課のみんなを、助けることができるのだろうか……。

＊第２部連載開始しました。

# prologue

新暦７７年　４月

ゆりかご決戦に負けた管理局は、今や一部のレジスタンスが生き残っているだけで、もはや風前の灯火だった。
ゆりかご決戦で生き残ったのは、ミッドチルダにいた局員では、陸士１０８部隊の一部と機動六課からはスターズのフォワードの二人とロングアーチスタッフ一人だけ。後は別任務でミッドチルダにいなかった戦艦数隻だけであった。

クロノ・ハラオウン提督が率いる艦隊が迎撃に向かったが、ゆりかごの砲撃の前に全て消し去られてしまった。
ミッド上空で戦っていたアースラはガジェットやゆりかごからの攻撃で大破してしまった。
何とか不時着が出来たのだが、ガジェットの大群に遭遇し、たった一人しか助からなかった。
地上本部の方も、戦闘機人とガジェットの大軍によって壊滅状態になった。
事件の初期にスカリエッティが無限書庫を危険視していた為、戦闘機人のドゥーエによってユーノ・スクライアは暗殺されていて、ゆりかごに関する情報が殆どなかったのだ。
本局の方は、すぐには落ちなかったが、決戦から半年後、クアットロ達の総攻撃の前に滅んだ。

機動六課のメンバーは、まず八神はやて部隊長だが、決戦時ゆりか

ごの主砲の前に一緒にいた局員達と共に消え去り、遺体も何も残らなかった。
ヴォルケンリッターは主の八神はやて部隊長が死んだと同時に消滅してしまった。

フェイト・Ｔ・ハラオウン隊長はスカリエッティのアジトを発見したが、ＡＭＦの罠に落ち、戦闘機人のトーレとセッテと戦い、何とか勝つことは出来たが、クアットロが基地の放棄を決め、スカリエッティと共に爆発に飲まれた。全ての力を使い果たしたフェイト隊長は動くことも出来なかった。

ライトニングのエリオは、ルーテシアと名乗る少女の召喚獣ガリューと戦ったが、結果は同士討ちになってしまった。その後、キャロもヴォルテールで白天王と戦うが、互いの砲撃が二人を貫き、やはり同士討ちの結果になった。

そして、高町なのは隊長は、ゆりかご内部に突入し、ヴィヴィオを見つけ出すが、スカリエッティの策略によって、レリックを埋め込まれたヴィヴィオと戦うことになった。
ヴィヴィオを元に戻したらしいが魔力が底をつきてしまい、クアットロの策略によってヴィヴィオもろとも殺された。
ゆりかごが軌道ポイントに到達してしまえば、連中にとってヴィヴィオは用済みだったのだ。

そして、決戦で壊滅的に陥った管理局は、生き残ったメンバーで地下組織を作った。
リーダーをスターズのセンターガードだったティアナ、そして、サブリーダーをアースラでの唯一人の生き残り、この俺『フィル・グリード』がつとめ、何とか戦ってきた。

苦労のかいがあってか、何体かは倒すことが出来ていたが、それでもまだ劣勢だった。
スバルとギンガも生き残って一緒に戦ってくれていたが、半年前、残っていた戦闘機人達との戦いで二人とも死んでしまった。
俺たちは別の所で戦っていたので、二人の応援には行けなかったのだ。
だが二人の犠牲は無駄ではなかった。
二人が最後の力を使って自爆をし、クアットロ以外の、一緒にいた戦闘機人達を吹っ飛ばしたのだ。

これが切欠となり、俺たちは残った戦力で『アースラ』でゆりかごへ特攻をかけることにした。
アースラはあのとき完全には壊れてなかった。
連中も壊れたアースラには何の興味もなく、ほったらかしにされていた。
しかし、長年の奴らとの戦いで、残存艦隊も全滅しまった為、ロクな機材をそろえることが出来なくなってしまった。
さらにクアットロ達に見つからないように行っていた為、飛ばすようにするのがやっとだったのだ。
したがって武装もないアースラに残された手段は特攻しかなかった。

特攻した俺たちはガジェットと交戦に陥ったが、残った連中は俺とティアをクアットロの所に行かせる為に自分の身を盾にし突破口を開いてくれた。

仲間の屍を無駄にするわけにはいかない。
俺とティアは、ゆりかごの玉座の間に向かっていた。

「……ねえ、フィル。これで終わらそうね。なのはさん達やエリオやキャロ、キンガさん……そしてスバル……今日こそみんなの敵を取ろ！！」

「もちろんだ、俺だってロングアーチのみんなの敵を討たなきゃならないんだ。あのとき俺を逃がす為にみんなは……」

決戦時、アースラを不時着させ、何とか離れることには成功したが、しばらくしてガジェットの大群に遭遇してしまった。
その時交戦はしたが、戦闘要員でないロングアーチのみんなは、一人、また一人と目の前で殺された。
この中で何とか戦闘が出来る俺は、グリフィスを守ってこの場を離れようとしたが、俺の油断からガジェットの砲撃を喰らいそうになり、グリフィスが代わりなってくれた。
俺は怒りのあまりガジェットに特攻を仕掛けそうになったが、グリフィスが……

「……フィル、君がここで死んで……どうなる……逃げろ……生き延びて……最後まで……戦ってくれ…」

グリフィスは最後の力で俺の腕にしがみつき、特攻を止めた。
そして俺に希望を託し、死んでいった。
俺はみんなの意思を無駄にしないように、今日まで訓練をし、ティア達と一緒に戦えるまでになった。

「ティア、決して死に急ぐなよ。……クアットロを倒したって、生きて帰らなきゃ意味がないぞ。スバル達はそんなことは望んでない」

「……分かってるわよ。でもね、あたしはみんなの敵を討つ為だけにここまで生き残ってきたのよ。……そのためなら……例えこの命と引き替えにしても……」

「……ティア」

「……とにかく急ぎましょう。あいつの……クアットロの反応はこの先みたいよ」

ティアがエリアサーチをし、クアットロを探していたが、ＡＭＦのせいでなかなか見つからなかったが、場所が近づくにつれ反応が出てきて、ようやく発見することが出来た。

「……ここみたいね」

「そのようだな……・離れてろ」

くそっ！！　念入りに魔力防御の処理がされている。
通常の攻撃じゃ駄目だ。

「仕方がない【プリム】スターライトブレイカーだ」

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

スターライトブレイカー
かつてなのはさんが得意としていた集束魔法の奥義だ。
なのはさんがもしもの時のために、残してくれた手紙と画像データを元に、ティアは必死でこの奥義を覚えた。
『本当は直接ティアナに教えたかった』と手紙に書かれていて、ティアは泣きながら読んでいたのだ。
俺もティアが覚えてから教わりながら何とか習得をした。
魔力の少ない俺たちが、戦闘機人と戦う為には、魔力を周りから集めて集束魔法を撃つしかなかったからだ。

集束を行う時、なのはさんは桃色、ティアはオレンジ色、俺がやると白色になるのだ。

白色の魔力が俺に集まり、発射準備が整った。

「スターライト……ブレイカー！！」

扉は豪快な音を立て破壊された。
この魔法は身体に負担が大きいので1回が限度である。
ティアの方が集束技術が上手いので、今回は俺が撃った。
切り札は取っておいた方が良いからだ。

玉座の間にはへらへら笑っていたクアットロがいた。
その面を見ているだけでも反吐がでやがる。

「……とうとう見つけたぞ、クアットロ！！」

「あ～ら、お久しぶりね。ティアナ・ランスター、フィル・グリード。ま～だ生きてたの～」

「……あんたのせいで、なのはさんが……スバルが……みんなが死んだのよ！！　許せない……今日こそ、あんたを……殺す！！」

「そんなこと言って良いのかしら、管理局員が～」

「その管理局もあんた達のせいでもう無い。だけどね、そんなことは関係ない！！　あたし達が戦う理由は一つだけよ！！」

「クアットロ、お前は俺たちから大切な人たちを奪った。その人達の怒りを貴様に叩きつける！！　それが俺たちが戦うただ一つの理由だ！！」

怒りに震えていた俺たちはティアはクロスミラージュを、俺はプリムの銃口をクアットロに向け、カートリッジをロードさせ、それぞれ攻撃魔法を放った。

設定は殺傷設定。

「クロスファイアシュート！！」

「ブラストブレイザー！！」

ブラストブレイザーは、原理はディバインバスターと同じで単純だが高威力の攻撃魔法だ。
ただし、俺もティアも、隊長達みたいに魔力が多い訳じゃないので、そう何回も打てない。
まして俺はさっきスターライトブレイカーを撃っている。これで決めたい。

クロスファイアシュートは、数個の光弾が集まって一つの砲撃となりブラストブレイザーは白色の砲撃となりクアットロに命中した。

「よし！！」

「やったわ！！」

白煙が収まると、無傷のクアットロがたっていた。

「そ、そんな。確かに命中したのに！！」

「ああ、間違いなく俺たちの攻撃は命中した。なのに……まさか！！」

「そのとおりよ～　これは聖王の鎧。そんな攻撃ぐらいじゃ蚊に刺されたくらいにしか感じないわ～」

その後、ティアがダガーモードで斬りつけたりしたが、やはり傷一つ付かなかった。

「気は済んだかしら～　それじゃ、こちらからいきますわよ～」

「ぐわぁぁぁ」

「きゃぁぁぁぁ」

クアットロの放った砲撃はとてつもなく、俺たちは壁際に叩き付けられた。
軽く見ても、なのはさんのエクセリオンバスターくらいはある。

「くっ……どういう事だ。あいつにはあんな能力はなかったはずだ……」

「ええ、今までの戦いで使ってたＩＳは『シルバーカーテン』だけのはずよ。こんな能力はなかったわ……」

「教えて差し上げますわ～。ここは玉座の間。かつて聖王陛下と高町なのはが戦った場所」

「ここには未だにあの二人の魔力がたっぷり残ってますのよ～　それを私は聖王の鎧の力を使って、魔力を集めて、魔力砲を撃ったんですわ～これがオリジナルにない力ですわ～」

「……くっ、まさか……これほどとはな……おまけに俺には殆ど魔力が残ってない」

これまでなのか……俺たちはみんなの敵も討てずに……ここで死ぬのか……

「あきらめないで！！」

「ティア……」

「まだあたしがいるのよ。こんな時の為に、あの時あたしに魔力を使わせなかったんでしょう！！」

「お前……」

「おかげで何とか魔力は残っている。……やるわよ！！」

「……スターライトブレイカー……もうそれしか……ないか…」

さっき俺は扉を破壊するのに使ってしまっている。
もうティアに全てを託すしかない……

「……分かった。俺はクアットロの動きをなんとしてでも止める……頼む、ティア！！」

「任せて、その代わりあいつの動きをなんとしても止めて。チャージ時間を長くして威力を限界ギリギリまで上げる。だから……頼んだわよ！！」

「あ～ら、作戦は決まったのかしら～　何をしても無駄なのに～」

「……その油断が、命取りになるんだぜ！！」

俺は残っている魔力でレストリクトロックをクアットロにかけた。
これが俺が使える最高のバインドだ。

「……くっ、こんな物！！　って、全然解けない！！」

「……俺の全魔力でかけてるんだ。そう簡単に解かれてたまるか！！」

今の俺にはこれが精一杯だ。
だからこそ、このバインドは絶対に解かれるわけにはいかないんだ！！

「やれっ！！　ティア、クアットロに俺たちの怒りを叩き付けてやれ！！」

「……いくわよ。クロスミラージュ！！」

《Ｏｋ！！　Ｂｌａｚｅ　Ｍｏｄｅ》

ティアがクロスミラージュを、フルドライブモードである『ブレイズモード』に変形させ、スターライトブレイカーの発射準備にかかった。

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ》

オレンジ色の魔力光がティアに集中し始めていた。
ティアは玉座の間に残された、なのはさん達の魔力の欠片を全て集めていたが、先ほどのクアットロの砲撃で周囲の魔力の欠片は、殆ど使われてしまっていた。

「……これじゃ、まだ足りない……こうなったら……あたしの命を……魔力に変換して……」

《駄目です。それじゃ貴女が死んでしまいます！！》

「お願い、クロスミラージュ！！　ここであいつを倒さなきゃ、あたしは何の為に今まで生きてきたの。全てはこのときの為なのよ……そのためなら、この命だってくれてやるわ……だからお願い！！」

《……わかりました……Ｌｉｍｉｔ　Ｂｒａｋｅ……Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ！！》

「……ありがとう、クロスミラージュ……リミットブレイク……ブラスターモード！！」

ティアの周りにブラスタービットが二つ展開され、そしてティアから、更なる力がわき出てきた。
ティアの奴、最後の切り札のブラスターモードを使いやがったな！！

ブラスターモード
「ブラスターシステム」を使用した、なのはさんとレイジングハートのリミットブレイクモードにして最後の切り札。
それをティアは俺に頼み、クロスミラージュに組み込んだ。
もちろん俺は反対だったが、そうでもしないと対抗できないということで、仕方が無く組み込んだのだ。
だが、これを使えば、最悪の場合は死に至る物だ。
ましてやティアはなのはさんよりも魔力が少なく、同じ力を出そうとしたら、当然命を削らなくてはならない。

「やめろティア！！　お前死ぬ気だな……俺もやる！！　プリム、スターライトブレイカーだ！！」

《……ｓｏｒｒｙ》

俺のデバイスはレストリクトロックの制御で精一杯だった。

俺のデバイスはインテリジェントデバイスではなく、ストレージデバイスなので組み込んだ魔法を発動させるだけなので、複数の処理は出来ないのだ。

ゆりかご決戦当時の俺じゃ、インテリジェントは使いこなせなく、今日まで使い慣れている相棒をつかっていたが、相棒を単体での魔法処理速度が速いのと強度が強いからという理由で、ストレージのままにしておいたのは失敗だった。

「……ここで、レストリクトロックを解除したら、元もこうもない……どうすれば……」

「フィル、任せてっていったでしょう……大丈夫よ……絶対決めるから……」

ティアの前に巨大な魔力が集まり、ブラスタービットにも魔力が集まり、発射準備が出来た。

「……これが、あたしの全て……あたしの命……喰らいなさい、クアットロ！！」

「スターライト……ブレイカー！！」

三つのスターライトブレイカーはクアットロに命中したが、それでも聖王の鎧のせいで、ダメージは受けていない。

「何度やっても同じですわよ～　この聖王の鎧の前ではね～」

駄目なの、あたしの命を使っても……

『ティア、フィル……今度生まれ変わっても、また3人でトリオやりたいね……』

スバル……

『ティアナ、フィル……私達の分もお願いね……みんなが笑顔になれる世界を取り戻して……』

ギンガさん……

そして……

『本当はわたしが直接教えたかったんだけど、わたしの最大の切り札スターライトブレイカー……これは自分の身を守るために使ってね……ティアナ、生きてね。そして幸せになってね……』

なのはさん……

冗談じゃない！！　このスターライトブレイカーはたくさんの願いが込められているんだ。

あたし達を信じて、自爆してまで道を切り開いてくれた、スバルとギンガさん。

万が一のためにあたしやフィルのために、自分の全てを残してくれたなのはさん。

決戦後も、切磋琢磨しながら一緒に戦ってきたフィル……

負けられない……絶対負けられない。

あたしは絶対に決めなきゃいけないんだ！！

そのためには……どんなことだってしてやる！！

「言ったでしょう、クアットロ。これはあたしの命そのものだって！！」

これが最後の賭よ！！
だけど……これを使えば……

『ティア、ブラスターモードのファイナルリミット【ブラスター３】は絶対に使うな。魔力の少ないお前が使えば間違いなく死ぬぞ！！
いいな、それだけは絶対に約束してくれ！！』

ごめんね……フィル……

「やめろ、それ以上解放するな！！　本当に死んでしまうぞ！！」

「ファイナル・リミット……リリース……ブラスター３！！」

あたしは残っていたカートリッジを全てロードした。
スターライトブレイカーはさらに威力が上がったが、同時にデバイスとビットも耐えきれなくなってきて、ひび割れてきた。

お願い、クロスミラージュ……もう少しだけ耐えて……

砲撃に耐えられなくなり、クアットロの聖王の鎧を崩し始め、しだいにクアットロに焦りの表情が出てきた。

「……こ、こんな馬鹿な！！」

「あんたはあたし達をナメ過ぎたのよ。大事な物を奪われた者の悲しみと怒りを……思い知りなさい！！」

「……い、いやぁぁぁぁぁぁ」

クアットロの聖王の鎧は完全に砕け

そして……

スターライトブレイカーの閃光はクアットロを飲み込み、中心で大爆発を起こした。

クアットロの最後だ……

だが、その代償として、全ての力を使い果たしたティアはその場に倒れてしまった。

「ティア！！」

俺はティアを抱きかかえ、叫び続けた。

「しっかりしろ！！　遂にクアットロを倒したぞ！！　みんなの敵を討ったんだぞ！！！」

「……よかった……これで……なのはさんに……怒られなくて……すむわ……」

「馬鹿なことというな！！　ここで死んだら、それこそなのはさんは怒るぞ！！……それになのはさんが言ってた自分の幸せをつかんで無いじゃないか……」

「……辛い戦いの連続だったけど、あたしは幸せだったよ。フィルといた5年間は……考えてみたらスバルと一緒で、第四陸士訓練校時代からだもんね。あんたとのつきあいって……」

「……ああ、そうだったな。俺たちはいつも一緒で、六課に入ってもそれは同じで……」

「……アグスタの事件の後も、一緒に自主練に付き合ってくれたりしたし、模擬戦であたしが無茶した時も励ましてくれたしね……」

「……なのはさん、あの時意識が朦朧としていたティアに、追撃のクロスファイアを撃ったろ。あのときは、いくら何でもあれはないだろって思ったけどな……」

「……ふふっ、やっぱ優しいよね……あの時はあたしが悪かったっていうのにね……ゴホッ……ゴホッ……」

ティアの身体からどんどん生命反応弱くなってきた。
吐血して、喋るのもきつくなっている。

ブラスター3を使い、命まで使ってしまったティアは、もう時間の問題だ。

「……あ……あのね……ホントは……あたしね……フィルのことが好きだったんだよ……いつもあたしの側にいてくれて……欲しい言葉をくれる……あんたが……」

ティアの言葉に俺は涙が止まらなかった。
ティアは俺のことを、ずっと好きでいてくれていた。
その気持ちに気づかなかったなんて……俺は本当に馬鹿だ。

「ティア！！」

「泣かないで……あたしは……いつもそばに……いるから……大好きだよ……フィル……」

ティアはその言葉を最後に、俺の腕の中で息を引き取った。

「……ティ……ア……」

「……う、嘘だろ……冗談なんだろ……目を……目を開けてくれよ！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺はプリムを握りしめながら泣き叫んだ。
何だよ……何なんだよ……こんなの……こんなのありかよ……

《……》

ストレージなので意思はないのだが、埋め込んでいる宝玉が光り、ティアの死に悲しんでいるように感じた。

なのはさん、フェイトさん、八神部隊長、エリオ、キャロ、ロングアーチのみんな、スバル、ギンガさん……

そしてティア……

みんな俺の大切な人たちは死んでしまった。

「何でだよ。何でティアが……死ななきゃいけないんだよ……畜生……畜生っっっ！！！」

俺は床を力一杯叩き付けた。
そんなことをしたってティアが戻らない事は分かっている……

その時、一つの光弾が俺の心臓を撃ち抜いた。

「……な、……ク……クアットロ……まだ……生きていたのか」

「……た、ただでは死にませんわ……一緒に逝きましょう……」

最後の力を使い果たしたクアットロは息絶えた。

「……ティア……どうやら……すぐに会えそうだ……向こうへ行ったら……幸せに……なろう……な……」

俺も力がつきその場に倒れた。体温が冷たくなるのが分かる。
これで、俺も……

『死ぬのは、まだ早いですよ…』

謎の声が聞こえたと同時に、俺の身体も光に包まれゆりかごから消えた。

「……ここは」

辺り一帯を見渡してみると、真っ暗で地面も何もなかった。
俺も空間内で宙に浮いている状態であった。

『ここは生と死の狭間……いわば境界線といったところです』

突如。目の前に金髪の女性が現れ、俺に語り始めた。
生と死の狭間。いったいどういう事なんだ。

「あんたは何者だ……」

『私は時の女神……いわば時間が正しき道を進むように管理する者です』

「その女神が俺に何の用だ……」

目の前にいる女性が、神って事に驚きはしたが、今最も気になるのは……

「……一つ聞きたい。やはり俺は死んだのか」

『……いえ、正確には死んではありません。貴方は今、精神体の状態なのです』

「精神体……どういう事だ」

『はい、貴方は本来あのときに死ぬはずでした。ですが、貴方にお願いがあり、私がこの空間に呼び寄せました』

「……いったい俺に何をさせたいんだ……もう一度生き返るのはごめんだぜ……みんながいない世界なんて……正直興味がない……」

『……実は、本来ならあのＪＳ事件と呼ばれた事件は、二年前に解決して犠牲者もこんなには出なかったのです……正しき歴史では、機動六課のメンバーも重傷者はいましたが、死亡者はいません。それがどういう訳か歴史が狂ってしまい、実際は……』

「何だと！！　じゃあその狂った歴史のせいでみんな死んじまったっていうのか……ふざけるな！！」

俺は女神の胸ぐらをつかみ叫んだ。

あいつらは、そんなことの為に犠牲になったって言うのか。
隊長達も、スバル達も、そしてティアも……

「冗談じゃない。だったらさっさと歴史を戻しやがれ。それがあんたの仕事なんだろ！！」

『……残念ですが、過ぎ去った時間は私は管理できないのです。ですが……』

「ですが何だ！！」

「私が直接でなく、間接的に行うのなら可能です。……お願いというのは、貴方に時間移動してもらい、正しい歴史にして欲しいのです」

「！！」

俺は驚きのあまり、胸ぐらから手をほどいた。
俺が過去に戻り、やり直せるだと……
もし、さっきの話が本当だとすると、みんな死ななくてすむって事だ。

「……だが、今のまま戻ったとしても俺には力がない。それじゃ結果は同じだ！！」

『確かにその通りです。ですから私が力を貸します。それで幾分かましになると思います』

そういうと女神は聖なる力で、珠を作り出し俺の前に出した。

『これには強大な魔力が込められてます。これを受け入れられれば、貴方は大きな力を手に入れられます……しかし……』

『しかし、力を受け入れられない時は、その時は……本当の死になります』

「デッド、オア、アライブってことか。やってやるよ……意地でも受け入れてやる！！」

女神は俺に珠を渡すと、珠は俺の身体に入った。
だが、次の瞬間体中に激痛が走った。

「ぐわぁぁぁぁぁ……がぁぁぁぁぁぁ……」

『頑張ってください。それは貴方の味方なんです。強引に押さえようとしないで受け入れるのです』

「……み、味方か……そうか……」

俺は激痛に耐えながら、力の流れを感じ、体中に行き渡るようにした。

「……俺の中で暴れ回っている力よ……心あるなら聞いてくれ……」

「俺は、力が欲しい……だが、それは自分の為じゃない……大切な仲間の為……親友の為……」

「そして……かけがいのない愛する人の為に、俺に守る為の力を貸してくれ！！」

次の瞬間力の暴走が収まり、強いがどこか暖かな力を感じた。

『どうやら……うまくいったみたいですね……』

「はぁ……はぁ……何とかな……」

『その力はいつか貴方の力になるでしょう。今のところ殆ど魔力量は変わってませんが、魔力量は訓練次第で上がります。ですから、これ以降はあなた次第ですよ』

「魔力量はこれからの訓練次第ってことか。今はこれで十分だ。後はこの相棒と一緒にやるさ」

『……そのデバイスはストレージデバイスですね。……珍しいですね。このデバイスには意思が感じます』

「どういう事だ。インテリジェントでもないのに……」

『それには魂が宿ったみたいですね。ごくまれにあるんですが、大切に使われた物には魂が宿るんですよ……』

『感じますね……どうやらさっきの戦いの時、複数の魔法処理が出来なくて、とても後悔しているみたいです』

「分かるのか、そんなことが……」

『一応女神ですから……このまま持って行っても、残念ながら今の貴方には役に立たない物になってしまいますね。よかったら私が力を授けましょうか』

「出来るんだったら頼む！！　こいつはかけがいのない相棒なんだ。」

そういうと俺はプリムを女神に渡した。
女神はプリムを見ながら笑っていた。

『ふふっ、あなたは本当に持ち主に大切にされてるんですね。私が力を貸します。ですから、今度は後悔しないように、しっかりサポートをしてくださいね』

女神はプリムに力を注ぎ込むと、プリムが光り出し、姿が少し変わり、ストレージからインテリジェントに変化した。

《マスター……》

「プ、プリムなのか……本当に意思があったんだな……」

《ごめんなさい！！　あのときバインドと攻撃魔法の両方出来ていたら、ティアナさんは……ティアナさんは！！》

「俺たちはあのとき、最善と採れる方法で戦ったんだ。誰のせいでもないよ……」

《でも！！》

「……そう思うなら、これからも俺に力を貸してくれ。今度はお互いに後悔しないようにな」

《はい！！》

『それと……貴方にもう一つ、力を与えます』

そう言って女神は右手から俺に力を注ぎ込んだ。

俺自身も何かの力が身体に入ったのを感じた。

「今のは……」

『今のは高速転移の術式。いわゆるワープです。但しかなり扱いが難しいので注意してください。サポートとして貴方のデバイスを使

うといいでしょう』

「ワープ？　隊長達が使っていた物と同じか？」

『少し違います。これは戦闘用の転移魔法で、発動時に魔法陣も展開しないので、相手に気づかれることは殆どありません。しかも場所特定ではなく、相手の魔力を感知してその場所に行くことが出来る能力です。……うまく戦闘で生かして下さい』

「色々すまない……」

『あと、これを渡しておかなくてはなりません』

女神が取り出したのは、クロスミラージュだった。
そう、あのとき、いくら探してもゆりかごでクロスミラージュは見つからなかったのだ。

「クロスミラージュ、あんたがどうしてこれを！！」

『そのデバイスはティアナ・ランスターが死んだ時、主と共に精神体になったからです。先ほども言いましたが、ここは生と死との境界線です。ティアナ・ランスターは死ぬ時、私に会いました。その時あなたのことを聞かされました。いつかあなたが死んでしまったら、ここでこれを渡して欲しいと、ティアナ・ランスターから託されたからです……』

「ちょっと待て、ティアに会っただと！！　だったら何故、ティア

にあの話をしなかったんだ。彼女だって犠牲者なんだぞ！！」

「……私の力では、正直言って過去に戻せるのは一人が限度なんです。そのことを話したら、自分よりも貴方にと言ったのです……」

「……ティアらしいよ……自分よりも他人を優先させるなんてな……」

『そして彼女は、自分の持っていた能力の全てと自分の想いをクロスミラージュに託したのです……受け取ってください。彼女の思いを……』

俺はクロスミラージュを受け取ると、クロスミラージュにティアからの通信がきた。

《フィル……聞こえるかしら……フィル》

「ティア！！　本当にティアか！！」

《突然でごめんね。フィル、あたしは今、死後の世界から話してるんだけど……》

《事情はもう聞いてると思うから省略するわね。フィル、あっちに行って、もしあんたが全てを託せると思った人がいたら、クロスミラージュを渡して欲しいの。きっと何かの役に立つと思うから……》

「ティア！！　クロスミラージュはお前の相棒だぞ！！　それを！！」

《だからこそよ……あたしはもう一緒には戦えない。だからあんたが愛した人にその思いを託したいの。それがあたしに出来る最後のことだから……》

「……ばか……やろ……」

なんでそんなに心が強いんだよ……
お人好しにもほどがあるぞ……

「……わかった……お前の思い、確かに受け取ったよ」

《……ありがとう……それと、過去のあたしが、色々あんたのことを困らせると思うけど……お願いね……》

「……どこまでやれるか解らないが、やってみるよ」

《大丈夫よ、自信を持ってやりなさい！！　でも無茶しちゃ駄目だからね。あんたって昔からそういう所あるから……》

「うっ……」

ティアには本当に頭が上がらないんだよな。
昔から俺が暴走すると必ずティアが止めていたからな……

でも、そんなティア達と過ごしていた日常が一番好きだったんだ……

《……これは大切なことなんだけど、ちゃんと幸せになってね。どんな形でも良いから……》

「幸せって……俺にはそんな資格は……」

《資格なんて要らないわよ。大切なのはお互いに愛し合う心だから、一方的な想いじゃなく、二人の心が一つならそれで良いと思う。それが何よりも大切なことだから……》

《それにあたしはあんたを縛り付ける存在にはなりたくないの。あたしが何より望むのはあんたの幸せなんだから……それだけは忘れないでね》

「ティア……」

《あたしが駄目でも……フェイトさんなら、きっと……》

「……そんなこと言わないでくれ……俺は……」

《あたしは本気よ、フィル。残念だけど過去のあたしじゃ、あのままじゃあんたの悲しみを埋めるには、少し役不足だしね。フェイトさんならもしかしてって思うの》

《あの人は人の心の痛みをすごく分かる人だと思う。あの人に育てられた、エリオやキャロを見ればそれは分かるわ。だから、あの人ならあんたのことを任せられる！！》

本当にティアは、昔から自分のことより他人のことを優先するよな。

《最後になっちゃうけど、未来が変わることを祈ってる。そして何より、あんたが幸せになること……いいわね……フィル……》

ティアの通信が終わり、クロスミラージュが俺に語ってきた。

《フィルさん、絶対に変えましょう。あんな未来はもうたくさんです！！》

「ああ、俺だってあんな未来はもうたくさんだ。……いこう過去へ！！」

ティアの遺志を受け継いだ以上、ここでじっとしているわけにはいかない。
俺はクロスミラージュをポケットにしまった。

『それでは、過去にとばしますね。行き先はどこに……』

「そうだな、新暦７３年４月、俺たち三人がＢランク昇格試験を受ける２年前にしてくれ」

《マスター何で２年前に行くんですか。別にランク試験の時にでも良いんでは？》

「いや、今のまま八神部隊長が六課を作っても、地上と確執を持ったままじゃ奴らの思うつぼだ。だから俺からレジアス中将に話をする。あの人とは知らない関係じゃないし、卒業して訓練生じゃなければ局員として動けるからな」

《予備工作というわけですね》

「まあな。それに闇の書事件は八神部隊長は被害者だからな。それがきっかけであの人が背負わなくても良いものまで背負ってしまっているからな。せめて少しでも無くしてあげたいかな。俺のエゴだけどな……」

《マスター……》

「プリム、もしレジアス中将の説得がうまくいっても、この事は部隊長には絶対に言うなよ。これはあくまで俺が勝手にやるんだからな」

《……本当に良いんですか、それで……》

「ああ……」

《分かりました……》

「……ありがとうな」

マスター、今は八神部隊長に話すことは黙っておきますけど、あの人が自分で聞いてきたときは私は話しますからね。

たぶんあの人は、自分で気づくと想いますよ。

『それでは行き先はそれで良いんですね』

「ああ、頼む」

『分かりました。それでは行き先をイメージしてください』

俺はあのときのことをふり返っていた。
このイメージがしっかりしてないと送れないらしい。

俺の身体が光に包まれ、この場から消えていくのを感じた。

『……最後になりますが、過去に行ったら絶対一人でやろうとはしないでください。貴方は一人じゃないんですよ!!』

「……そうだな。肝に銘じておくよ」

そして、俺の身体が全て消え……過去に向かった。

# 第1話　再会

新暦７５年４月

《マスター、何とかここまできましたね》

「そうだな。六課のことは俺にはあれ以上のことはできないしな。後はあの人の努力次第だよ」

《ですね。今度はマスターの番ですよ。今のマスターは経験値はあっても力は当時のままなんですからね》

「そうなんだよな。これは仕方がないよな……そういえば、戻る前こんな事言ってたしな」

『過去に戻ったら、魔力はＢランクの状態になってるはずです。これは魔力は無くなったわけではなく、封印されているだけです。貴方が本当に力を欲した時、リミッターは解除されるはずです。それと経験や知識は受け継がれますので、今まで覚えたことは使えますよ』

（とはいうが、Ｂランクのままじゃ、今まで気軽に使えてた物も考えて使う必要があるな）

「どうしたの、フィル。ぼけ～として、もうすぐ始まるよ」

考え事をしていた俺に、スバルが話しかけてきた。
そうか……もうすぐ始まるんだな、昇格試験。

Bランク昇格試験
俺たちが三人そろって受けた大切な思い出。この試験では、様々なことがあったが、またこうして受けることになるとな。
そして、ティアとスバル……またこうして会えるなんて夢にも思わなかった。
二人の顔を見てると、涙が出そうになっていた。

スバル……懐かしいな。俺にとっては半年以上前になるんだよな。
戦闘機人との戦いで命を落としたスバル。あのときスバル達がああしてくれなかったら、クアットロを倒すことは出来なかっただろう。

「そうよ、フィル。そんなんじゃ試験落ちるわよ。……ていうかスバル、あんたは人の心配をしてる場合じゃないでしょう。始まる前からそのオンボロローラーを酷使してたんじゃ途中でいかれるわよ」

「ティア、嫌なことを言わないで。ちゃんと油を差してきた」

ティア、相変わらずだな。考えてみれば、訓練校の時から、俺たちは凸凹トリオとか言われてきたが、それでも、ティアはスバルをスバルはティアを、互いに認め合っている。

未来でもスバルの死に、一番悲しんだのはティアだった。

もうあんな想いをするのはたくさんだ。まずはこの試験からだ。

しばらくして試験管のリイン曹長の姿が通信で現れた。
そういえば前の時もリイン曹長だったけな。

「おはようございます。さて魔導師試験受験者の三名そろってますか」

「「「はい」」」

「確認しますね。スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士、それにフィル・グリード二等陸士ですね」

「「「はい」」」

「所有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いありませんね」

「はい」

「間違いありません」

「そうです」

俺たちは試験管であるリイン曹長に確認の意味で宣言した。

「はい、本日の試験官を務めますのは、私、リインフォース？（ツヴァイ）空曹長です。よろしくですよ～」

「「「よろしくお願いします」」」

俺たちはリイン曹長に敬礼した後、試験の簡単な説明を受けた。
内容は前回と同じで、各所に設置されたポイントターゲットを破壊し、制限時間内にゴールすることだった。
その後、リイン曹長の通信も切れ、スタートのカウントダウンが始まった。

「「「レディ」」」

「「「ゴー！！」」」

俺たちはまず、最初のターゲットのあるビルを目指した。

「ティア、フィル」

「なに」

「何だ」

「中のターゲットはあたしがつぶしてくる。ティアとフィルは援護をお願い」

「……分かったわ、でも、手早くね」

「オッケー」

「……って、ちょっと待て！！」

「どうしたの、フィル。時間がないんだよ。さっさと片付けないと！！」

「そうよ。余裕がないんだからね」

「急がば回れって言うだろ。プリム、ビルの中をサーチし、最短経路を割り出してくれ」

《了解です。サーチ開始します》

プリムと使ってサーチしていると、ティアが疑問に思い、質問してきた。

「あれ？、確かあんたのデバイスってストレージじゃなかったっけ……」

「最近、プリムのＡＩに使うプログラムが完成してな。インテリジェントに改造し直したんだよ。おかげで情報処理が複数出来るようになって色々と便利になった」

「そういえばあんたのデバイスは自分で作ってたんだったわね」

「お前らの使ってるのだって、自分で作った奴じゃないか」

「フィル、あたしはそこまで器用じゃないよ。このローラーだって何とか機能しているって所だよ」

「……あんた、昔からそういった事、得意だったけど……進む道、間違えてるんじゃない。ある意味デバイスマイスター並みよ。それって……」

俺たちが雑談をしてると、サーチの結果がでた。

《結果が出ました。最初のターゲットは情報通り１０階の右よりに集中してます。ですから、最短で突入するには、１０階の左寄りの窓から突入するのがベストです》

以前スバルは何も確認しないで、窓ガラスをぶち破り、中に入っていってしまったんだったな。
今思うとかなり無茶やってたんだな。俺たちって……

「よし、それじゃスバルは内部に突入し、ターゲットを叩く。俺たちは別のビルに移りお前を援護する」

「オッケー」

「わかったわ」

「それじゃ、ゴー！！」

スバルがウイングロードで突入した後、俺たちは別のビルに移り、スバルの援護をすることになった。
内部でスバルが次々、リボルバーシュートでターゲットを破壊していった。
俺たちもそれぞれシュートバレットでターゲットを破壊していき、スバルを援護した。
情報を確認してからやったせいか、前回よりも早く破壊が終わり、スバルと俺たちは合流し、次の場所に向かった。

その様子をフェイト執務官と八神捜査官がヘリの中で見ていた。

「うん、良いトリオだね。特にフィルは、いきなり飛び込もうとしたスバルを止めて内部の情報を得ていた。実戦では状況が全く分かってないことがあるから、ああやって情報を得てから行動した方が良い。その辺を分かってるみたい」

「せやね、けど、まだ難関は続くよ。特にこれが出てくると、受験者の半分以上が脱落する最終関門……大型オートスフィア」

「今の三人のスキルだと防御も回避も難しい。中距離狙撃型の狙撃スフィア」

「どうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所や」

次の場所に行くと攻撃がさらに増していた。スフィアも増えているし攻撃のスピードもアップしている。

「スバル、単独で動くな！！　ここはオプティクハイドを使ってクロスシフトでスフィアを瞬殺。いいな」

「了解」

「いいわ、それでいきましょう」

スバルを一旦、後退させ、俺とティアはオプティクハイドで三人を不可視状態にした。幻術魔法は得意ではないが、これはティアに教えてもらって出来るようになったものだ。
それにティア一人だと時間が短いが、二人分の為、多少は時間が長くなるはずだ。

「……10……9……8……7…6…5……4…3……2…1…」

「0」

カウントダウンが終えると同時に、オプティクハイドが切れ俺たちはそれぞれ、魔法を展開した。

「クロスファイアー……」

「リボルバー……」

「ブラスト……」

「「「シュート！！」」」

俺たちの放った砲撃は全てのスフィアを撃破した。

「イエィ！！　ティア、フィル、一発で決まったね」

「まあ、あんだけ時間があればね」

「普段はあまりマルチショットの命中率があまり高くないのに、やっぱりティアは本番に強いね～」

「うっさいわよスバル。さっさと片付けて次に……あっ！」

「……まずい、二人とも防御を！！」

破壊し損ねてたスフィアが俺たちに攻撃をしてきた。
まずい、前の時の事で分かっていた事なのに。油断した。
何とかスフィアは破壊したが、ティアは足をねんざしてしまった。

「ティア！！」

「スバル、騒がないで。何でもないから……」
「嘘をつくな。……お前ねんざしたな」
「フィル、だから何でもないって……痛っ！！」
ティアは自力では立ち上がれない状態だった。
ったく、この意地っ張りが……
「……ティア、ごめん。油断してた」
「……あたしの不注意よ。あんたに謝られるとかえってムカ付くわ……走るのは無理そうね……最終関門は抜けられない」
「ティア？」
「あたしが離れた位置からサポートするわ。そしたらあんた達二人ならゴールできる」
「ティア！！」
「何言ってんだ！！」
「っさい、次の受験の時はあたし一人で受けるってってんのよ」
「次って半年後だよ……」
「迷惑な足手まとい達がいなくなれば、あたしはその方が気楽なの

よ。分かったらさっさと……ほら早く！！」

「……ティア、あたし前に言ったよね。弱くて、情けなくて、誰かに助けてもらってばかりの自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入った。……魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って人助けの仕事に就いた……」

「……知ってるわよ、聞きたくもないのに。そのことは何度も聞かされたんだから……」

スバルはいたたまれなくなり、ティアに自分の気持ちを伝えた。
そして俺も、今の自分の想いをティアに伝えた。

「……なあ、俺はずっとお前らと一緒にいたから、ティアがどんな夢を見ているのか……魔導師ランクのランクと昇進にどれくらい一生懸命かよく分かっている……」

「フィル……」

「だから、こんな所で……俺の目の前で、ティアの夢をちょっとでもつまずかせるのはゴメンだ！！　俺たちだけが行くなんて冗談じゃないぞ！！」

「じゃぁ、どうすんのよ！！　走れないバックスを抱えて、残りちょっとの時間で、どうやってゴールすんのよ！！」

確かのその通りだ。このままティアを一緒に連れていたとしても、

到底時間内には間に合わない。
しかし、俺には考えがあった。以前はスバルが考えた物だがな。

「俺に考えがある。裏技になる可能性があるが、上手くいけば三人そろって合格できる」

「フィル……あんた……」

「スバル……やれるな……これが俺たちに残された最後の手段になる」

「うん、あたしやるよ。三人そろって合格しよう！！」

「……ふう、あんたまでお節介焼きとはね。……でも、ありがとう……フィル」

残り、３分４０秒……

プランはこうだ。まずティアのフェイクシルエットでスフィアを攪乱させる。こうしてティアの方に目を向けさせ、その間に俺とスバルで大型オートスフィアを撃破する。
ただし、フェイクシルエットは多量の魔力を必要とするので短時間しか使えない。よって一発で決めなければならない。

「スバル、フィル、一撃で決めなさいよ。でないと三人そろって落第よ」

「うん！！」

「任せておけって！！」

ティアのフェイクシルエットは何とか時間を稼いでくれていたが、おそらくもうすぐこっちの動きも察知するだろう。俺たちは作戦の最終確認をしていた。本当はもっと情報を仕入れてから行う行動なのだが、そんなことはいってられない。幸い、今回は試験なのでスフィアの情報とかはあるので、その上で考えたのだ。

「いいか、着いたと同時に、お前は全力でスフィアに殴りつけろ。お前がバリアを破壊したら、お前と俺が同時に砲撃を撃つんだ……それしかない」

「フィル……フィルって冷静沈着って思ってたけど、結構感情型なんだね。あの時、ティアを見捨ててゴールしたって文句は言わなかったのに……」

「……ティアは執務官になるって夢があるんだ。だったら俺たちがいる時にランクは取った方が良い。」

「……やっぱり、フィルって……優しいよ……いつだって……今だって……」

「……そんなことはない。唯、俺が受かる最善の道を考えただけだ。

そんなんじゃない」

「じゃぁ、そういうことにしておいてあげるね……やるよフィル」

「……ったく、こっちはいつでも良いぜ！！」

「いっけぇ！！　ウイングロード！！」

スバルの作り出したウイングロードは、巨大スフィアのいるフロアにたどり着き、俺はスバルにしがみつきローラーで全力疾走した。壁を突き破り、スバルは大型スフィアに殴りつけた。スフィアが展開しているバリアはなかなか硬かったが、スバルはバリアを破壊した。

「……いくぜ、プリム。カートリッジロード！」

《了解です、マスター。カートリッジロード》

俺はプリムにカートリッジをロードすると、砲撃魔法の準備に取りかかった。

同時にスバルも、リボルバーナックルにカートリッジをロードさせた。

「一撃必倒、ディバイン……」

「ブラスト……」

「バスター！！」

「ブレイザー！！」

俺たちの攻撃は何とかスフィアを破壊した。今回は壁を撃ち抜かないで済んだようだ。

さっきスバルには念を押したからな。意味無い力を使うんじゃないって。

実際に毎回建物を破壊していたら、二次災害の危険もあるからな。

「……はぁ、はぁ……や、やったよフィル」

「喜ぶのはまだ早い。ティア。残り時間は！！」

「あと1分少々よ。スバル、フィル」

「うん」

「ああ」

ティアはスバルにおぶさり、俺はリングバインドの応用で、二人三脚の要領でスバルの右側にいた。このままだと引きずられて足がボロボロになってしまうので、足を少し浮かした状態で、足のリングバインドをしてある。

三人分の体重でローラーは悲鳴を上げていたが、それでも全力でゴールを目指した。

俺たちの中で一番早い移動手段を持っているのはスバルだからだ。
それに、ティアは走ることが出来ないので、必然的にスバルの背中におぶさることになった。

「後、何秒」

「16秒。まだ間に合う！！」

ティアが最後のターゲットを破壊し、これでオールクリアとなった。
後はゴールにはいるだけなのだが……

「魔力全開！！」

「ちょっとスバル、止まる時のこと考えてるんでしょうね」

「大丈夫だ！！　それは俺に任せておけ。全力で突っ走れ！！」

「いっけぇぇぇぇぇ！！」

リイン曹長がヤバイって表情をしているが、今回は秘策がある。
未来で覚えた風の魔法と、なのはさんが以前、この試験で俺たちに使ったあの魔法をやる。
あとはどのくらいの成功率なのだが……

「プリム、俺は、風の魔法でブレーキをかける。お前はゴールに飛

び込む瞬間、念のために、前面にアクティブガードとホールディングネットを張ってくれ。……後、この作戦の成功率は!!」

《計算の結果、８０％以上の確率でうまくいきます。っていうか、私とマスターがやるんです。大丈夫、絶対成功させます!!》

「それでこそ俺の相棒だ!!……いくぜぇぇぇぇぇ!!」

「うわぁぁぁぁ」

「きゃぁぁぁぁ」

「いくぜ!!　ウインド・ブレス!!」

《Ａｃｔｉｖｅ　Ｇｕａｒｄ　ｗｉｔｈ　Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ》

俺はウインド・ブレスでブレーキをかけ、前回とは違い、壁のだいぶ前で止まることが出来た。
しかし、ウインド・ブレスの威力が強すぎて俺たちは後にこけるはめになった。
アクティブガードとホールディングネットは保険ですんだが、これじゃなぁ……

「ついたたたたっっ!!……すまん、スバル、ティア……」

「いったぁぁぁぁ、フィル～こういう事は先に言っておいてよ。おもいっきりこけちゃったじゃない」

「スバル、重い！！　早くどきなさい！！……ったく……それと……」

俺はリングバインドを解除し、体勢を立て直した。っていうかティアの視線が、もの凄く怖いんだけど……

「……フィ～ル～～～あんたねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「仕方ないだろ！！　あれしか手段がなかったんだ！！」

「あんたって、切れ者かと思っても、どっか抜けてるのよね……」

「……言わないでくれ……本人が一番自覚している……」

未来で少しは経験を積んで、何とかなるって思っていたけど、やっぱり俺ってどっか抜けてるんだな。

俺たちが談笑してるとリイン曹長がやってきて注意し始めた。

「三人ともあんな危険なことをして減点ですよ。全く頑張るのも良いですが、怪我をしたら元も功もないですよ！！。そんなんじゃ魔導師として駄目駄目です～！！」

二人はリイン曹長を見て、驚いている様子だった。

そういえば俺も初めてあった時は今の二人みたいに驚いてたな。

「まあまあ、ちょっとびっくりしたけど無事でよかった……。とりあえずは試験終了ね。お疲れ様」

試験の様子を見ていたなのはさんが、バリアジャケット姿で空から降りてきた。
以前の試験ではなのはさんに助けてもらったんだよな。

なのはさん……

本当になのはさんなんだ……

表情には出さなかったが、涙が出そうにはなっていた。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験管出来ていたよ」

「わ～い、ありがとうございます。なのはさん」

バリアジャケットを解いて俺たちの前になのはさんがやってきた。

「……まぁ、細かいことは後回しにして、ランスター二等陸士」

「……あっ、はい」

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで」

「あっ、治療なら私がやるですよ～」

リイン曹長が治療魔法をかけると、ティアの足の腫れがひいてきた。

「これでだいじょうぶですよ～」

「す、すみません……」

「……なのは……さん……」

「うん」

「あっ、いえ、あの、高町教導官、一等空尉！！」

スバルが直立状態でいると、なのはさんが……

「なのはさんで良いよ、みんなそう呼んでるから……四年ぶりだね、背伸びたねスバル」

「あの……その……」

「またあえて嬉しいよ」

なのはさんが、スバルの頭にそっと自分の手を置いて微笑んだ。
それが切欠となりスバルは泣き出してしまった。

スバルは四年前になのはさんに助けられたのが切欠で、魔導師を目指したんだったな。

よかったな、スバル。ちゃんと覚えてくれていたよ、なのはさんは。

# 第2話　機動六課

試験が終わり俺たちは、フェイト執務官と八神捜査官に呼ばれていた。
そこで聞かされたのは、ミッドチルダ臨海空港火災事件のこと。それが切欠で新部隊を作ることになったこと。そして四年ほどかかって、やっと設立できると言うことだった。
その部隊ってのは機動六課のことなんだけどな。

「部隊名は時空管理局本局、遺失物管理部機動六課。登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「……遺失物……ロストロギアですね……」

「そう、でも広域捜査は一課から五課までが担当するので、うちは対策専門」

八神捜査官の説明の後、ティアの質問にフェイト執務官が補足を加えた。

「んで、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士、それにフィル・グリード二等陸士」

「「「はい！！」」」

「私は三人を機動六課のフォワードとして見変えたいと考えている。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろ……」

「「「……あの……えっと……」」」

俺たちが混乱していると、フェイト執務官がさらに……

「スバルは高町教導官に直接魔法戦を教われるし……」

「はい……」

「執務官志望のティアナとフィルは、私でよければアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、いえ、とんでもない！！」

「そうですよ、というか恐縮です……」

フェイトさん……

かつてゆりかご襲撃の時は、スカリエッティの基地に単独で向かって命を落としてしまった。

以前の時もいろいろティアや俺がお世話になっていた。なのはさんの訓練で疲れ果てた時もいろいろ励ましてくれた。

そして俺がいろんな意味で憧れていた人でもあった。

また一緒に仕事が出来るなんて思わなかったけど、もう一度死なせるなんてゴメンだ……

こっちのフェイトさんも相変わらず優しいんだな。俺たちのことを本当に考えてくれている。

以前はティアは、執務官になる夢は果たせなかったからな……

過去の俺は執務官になりたいと思っていたけど、今は……

そんな中なのはさんが試験結果を持ってやってきた。今回は果たしてどうなのだろうか……

「……とりあえず、試験の結果ね。三人とも技術はほぼ問題無いんだけど……一つだけ聞いて良いかな。フィル、試験中あれだけ慎重に行動し、スバル達の行動をまとめてきたのに、何で最後はあんな事をやったの……もしあの時スピードを殺しきれなくて、壁に激突するって思わなかった……」

「そのことはずっと頭にありました。ですから俺のデバイス、プリムにあらかじめ計算をしてもらいました。そして俺の持っている魔法で、今回やったプランなら安全に止まれるって事になって実行しました」

「……そして、もし失敗するって結果が出ていたら、二人には悪いが、俺は失格を選んだ」

「「えっ……」」

「スバル、ティア。無茶することと頑張ることは違うんだ。あの時、もし失敗するって出て、それが分かっていて実行して取り返しのつかないことになったら、それこそ自分の夢を叶えるどころじゃない。それに、ティアは足をねんざしていたんだ。ここで無茶する必要はない。それだったら、半年後受け直した方が良い……それに死んじまったら、何もかも終わりなんだ……」

「「フィル……」」

「……そっか……うん……」

なのはさんは何か納得した様子だった。だけど今の言葉は俺の本心なんだ。

そう、事故とかで死んでしまったら、悲しみと後悔しか残らない。

残される者には特に……

「……じゃあ、改めて結果を言うね。今回は三人とも合格とします」

「「「や、やったぁぁぁぁぁ」」」

「その代わり、三人にはそれぞれ課題というか、講習を受けてもらうね。スバルとティアナは本局武装隊に行って、来週から十日間、本局の厳しい先輩達に揉まれて安全とルールを学んでこよう。フィ

ルはよく分かっていたみたいで、今回はそれに助けられている部分が大きいんだからね。本当は二人は不合格なんだけど、そうするとフィル、絶対辞退するでしょう……」

「そ、そんなことは……」

「ううん、分かるよ。フィル、あの時の事……計算して失敗するって結果だったら、失格を選ぶつもりだったんでしょう。それだけ二人のことを思っていて、自分だけ受かるって事は考えてなかったんでしょう。だからあんな作戦をとった。違うかな……」

「……参りました……その通りです……」

そこまで見抜かれていたなんてな……
さすがというべきなのかな……

「それで、フィルはわたし達の知り合いのメカニックマイスター、マリエル・アテンザさんの所へ行って、デバイスの理論をきっちり学んできて。独学であれだけのデバイスを作れるなら、ちゃんと学べばさらにスキルアップすることが出来ると思う。もし、機動六課に来てくれるなら、その力は絶対に必要になるから、フォワード達だけでなく、私達も助かることになるから……」

「……ありがとうございます。高町教導官。こんなチャンスをくれて恐縮です……」

「そんなにかしこらなくて良いよ。普段はなのはさんで良いよ。それと三人とも講習頑張ってきてね」

「「「はい、ありがとうがございます」」」

「三人とも講習が終わるまでは、それに集中したいやろ。私への返事はそれが終わってからって事にしとこうか」

「「「すみません、恐れ入ります！！」」」

俺たち三人は八神捜査官に敬礼してその場を離れた。

「ふう、緊張したね、フィル、ティア」

「全くだ。補習付きとはいえ、合格できて本当によかったぜ」

「……」

「どうしたんだティア。何落ち込んでるんだ……」

「フィル、ゴメンね。色々迷惑をかけて……」

「ん、何だよいきなり……」

「あんたがいなかったらあたし達は落第していた。いつもあんたには助けてもらってばかりで……」

「それは違うぞ。俺がいなかったとしても、ティアとスバルはちゃんと受かっていたよ。それに俺は、お前らとだからあんなに頑張れたんだ。俺一人じゃ駄目だったよ……それに……」

「俺はティアが頑張っているのは知っているから、だから、そんなことを言わないでくれ……」

俺はティアの肩にそっと手を置き励ました。正直こういう柄じゃないんだが、ちゃんと言ってやらないと駄目だからな。

「……あ、ありがとう」

「あの～お二人さん。何こんなところでラブコメしてるんですか」

「「ス、スバル！！」」

そういえばスバルがいたことをすっかり忘れていた。

「な、な、なにいってんのよあんたは！！」

「そ、そ、そうだぞ！！」

「二人ともそんな態度じゃ説得力無いよ」

「「あっ……」」

俺って今、ティアの肩に触れてるんだよな。しかも、かなり恥ずかしいことを言って……

「まあ、二人をからかうのはこれくらいにして……どうするの二人とも、行くの新部隊に」

「……そうだな、お前は行きたいんだろ。なのはさんはお前のあこがれなんだし、同じ部隊なんて滅多にないぞ」

「まぁ、そうなんだけどさ……」

「……あたしはどうしようかな。遺失物管理部の機動課って言ったら、普通はエキスパートとか、特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょう。そんな所に行ってさ、いまのあたしがちゃんと働けるかどうか……って、何よ気持ち悪いわね、スバル……」

「そんなこと無いよ、『ティアもちゃんと出来る』って、言って欲しいんでしょう。特にフィルに！！」

「なにいってんのよ、バカいってんじゃないわよ！！　そんなんじゃないわ！！」

「い、いたたたた、ギブ、ギブゥゥゥゥゥゥゥ」

「なにやってんだお前らは……」

スバルにつねくり攻撃をし、少しは鬱憤がはれたのかそっぽ向くように解放した。
そんなティアにスバルが……

「……ねぇ、ティア。あたし達は知ってるよ。ティアはいつも口ではふてくされたことを言うけど、本当は違うんだって……フェイト執務官にも、内心ではライバル心メラメラでしょう」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたもんじゃないけど……知ってるでしょう。執務官は私の夢なんだから……勉強できるならしたいって気持ちはあるわよ」

「だったらさ、やろうよティア、フィル。あたしはなのはさんに色々なことを教わって、もっともっと強くなりたい。ティアとフィルは新しい部隊で経験を積んで、自分の夢を最短距離で追いかける」

「うん」

「ああ」

「それに、当面三人でやっと一人前扱いなんだしさ。まとめて引き取ってくれるとうれしいじゃん」

「それ以上言うな!!　あんたのせいで、どこへ行ってもあたし達はトリオ扱いなのよ!!」

「それにお前には言われたくはないぞ、スバル!!」

「いたいよぉぉぉぉ、ティア、フィル～」

今度は俺もスバルの頬を一緒につねってやった。一言多いんだよ。

「ふん、まぁいいわ。うまくこなせればあたしの夢への短縮コース。スバルのお守りはゴメンだけど……まっ、我慢するわ」

「「ぷっ、あはははははっっっ」」

「何よ、何笑ってるのよ……」

全くティアって素直じゃないよな。こんなんだからスバルにからかわれるんだろ。
あの二人は良いコンビだよ。全く……

そんな様子をビルの中で様子を見ている人物がいた。

「あの三人は、まぁ入隊確定かな……」

「……だね」

「なのはちゃん、嬉しそうやね」

「三人とも育てがいがありそうだし、時間をかけてじっくり教えられるしね」

「ふふっ、それは確実や」

「新規のフォワード候補は後二人だっけ、そっちは」

「二人とも別世界。今、シグナムが迎えに行ってるよ」
「なのは、はやて。お待たせ……」
「お待たせです～」
「ほんなら、次に会うんは六課の隊舎やね」
「お二人の部屋、しっっっかり作ってあるですよ」
「うん」
「楽しみにしている」

私達はそれぞれの職場に戻っていった。新部隊設立まではそれぞれが準備をしなければならないからだ。
やることはいっぱいあるのだ。

―ミッドチルダ駅構内―

「えっと……あっ……お疲れ様です。私服で失礼します。エリオ・モンディアル三等陸士です」
「……ああ、遅れてすまない。遺失物管理部機動六課のシグナム二

等空尉だ。長旅ご苦労だったな……」

「いえ」

「ん、もう一人は……」

「はい、まだ来てないみたいで……あの、地方から出てくるとのことですので迷ってるのかも知れません。捜しに行ってもよろしいでしょうか……」

「頼んでも良いか」

「はい！！」

僕はシグナム二等空尉に許可を得て、もう一人の新人の女の子『キャロ・ル・ルシエ』を捜しに行った。
いったいどこにいるんだろう。そうしてると女の子の慌てた声が聞こえてきた。

「すみません、遅くなりました……」

ルシエさんがエスカレーターを走って降りてきた。大丈夫かな……

「そんなに慌てなくて良いですよ……って危ない！！」

心配してたとおり、バランスを崩して転げ落ちそうになった。
僕はソニックムーブで何とかルシエさんを助けることが出来た。けど、制御に失敗して上まで駆け上がってしまい、もつれるような状態になってしまい、何とか僕がクッションになることでルシエさんは怪我をしなかった。

「……っっててて、大丈夫ですか……」

「いえ、ありがとうございます。助かりました……あっ……」

「……あっ！！　す、すみません！！」

「い、いえ……」

僕はルシエさんの胸に触れるような格好になってしまった。
ルシエさんも恥ずかしいのか、顔が真っ赤になってしまった。当たり前だよな……よく引っぱたかれなかったな僕……

「キュウゥゥゥ」

「フリードもごめんね。大丈夫だった……」

「キュクゥゥゥ」

「竜の……子供……」

「あの、すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士ですよ

ね……」

「あっ、はい！」

そういうとかぶっていたフードを取り、僕に自己紹介をしてきた。

「初めまして、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。……それと、この子はフリードリッヒ……わたしの竜です」

「キュクゥゥゥ」

これが後にライトニングのコンビとなる二人の出会いであった。

翌日、ティアとスバルは本局に行って、特別講習受けることになった。本局の武装隊は厳しいので有名だから、徹底的に叩き直されるだろう。俺もそっちでよかったのだが、どうやら試験でプリムの性能に気づいて急遽変更したな。

まぁ、確かに今後のことを考えると、デバイスのことを再勉強し直した方が良いんだけど……。ったく、なのはさんも人が悪いぜ。

そして俺も、メカニックマイスターであるマリエルさんの所に向かっていた。今回の目的はデバイスの理論の再認識と、今後、ティア達が使うデバイスの改造プランのヒントを得る為だ。マリエルさんなら、もっと効率の良い方法を教えてくれるかも知れないし、俺もプリムをさらに進化させたいしな。

「初めまして、マリエル・アテンザです。君がフィル君……」

「はい、初めまして。フィル・グリード二等陸士です。よろしくお願いします」

「そんなに硬くならなくて良いよ。マリーって呼んでね。私もそんなに気を張ってる方じゃないしね」

「わかりました。じゃ、マリーさんって呼ばせてもらいます」

どうやらこの人はすごく話しやすい人みたいだ。メカニックマイスターっていってたから、もっと気むずかしい人なのかと思ってたけど……

「……早速で悪いんだけど、君のデバイス見せてくれるかな……」

「……へえぇ、独自でここまでのデバイスを作るなんて……ちょっと構造を見ても良いかな」

「……はい、その代わり個人端末でしてもらえますか」

俺はマリーさんにプリムの構造を教えて良いものか迷ったが、ティア達のデバイスを改良するのに協力してもらう為には、ある程度知ってもらう必要があるので、条件付きでマリーさんがデバイスの構造を見ることに許可した。

マリーさんはプリムを自分の端末にかけ、構造を見てもの凄く驚いていた。

「ちょ、ちょっと、何これ！！　明らかにBランクの持つデバイスじゃない。インテリジェントだけど、普通のものじゃなく、ユニゾンデバイスに近いＡＩが入ってるし、それにモードチェンジもあって、多方面にわたって使える物になっている……でも、なによりも……」

「……リミット……ブレイクですね」

「そう、何でこんな危険なものを組み込んでいるの！！」

「……マリーさん、これから話すことは、絶対誰にも言わないでさい。機動六課の皆さんには時期を見て俺から話しますから……」

「……分かったわ」

俺はマリーさんに未来で起きたことを話すことにした。機動六課の設立、ジェイル・スカリエッティのこと、ゆりかごのこと、そして管理局が負けてその後のこと……。そして過去を変えるために、未来から戻ってきたことも……。話し終わった時はマリーさんは顔面が蒼白していた。

「……何、それ……嘘じゃないのよね」

「荒唐無稽な話と思いますが、事実なんです……」

「……でも、それならつじつまも合うところもある。これに使っている技術は、今ではまだ完成していないものもある。……その主

なのがリミットブレイクシステム。これはまだ未完成のものなのよ」

「そうですね。これはなのはさんとフェイトさん、二人のデバイスにしか組み込んでませんものね。しかも……術者の負担が相当なもので、他の人には使えない」

「……そこまで知ってるのなら、君の言ってることは本当の事みたいね。だってこれは現段階ではトップシークレット扱いのことですもの。君のランクの人間が知っている事じゃない。それこそ実際に見てきてない限りは……」

「本当は、言わないつもりだったんですけれどね。局内にもスカリエッティに繋がっているのがいるので……」

「だから個人端末でって事だったのね。局のものを使うと、そこから漏れてしまうものね」

「そういうことです。でも、まだリミットブレイクも完全ではないんです。これに組み込んでいるのはあくまで使えるようになっているだけで、しかも術者への負担はなのはさん達のよりは大きいんです。そして……魔力の少ない俺では使いこなせないんです」

「……なるほど、君がなぜ話をしてくれたのか分かったわ。完成させたいのね、リミットブレイクを……」

「はい、残念ながら俺ではここまでが限界でした。だけど、メカニックマイスターのマリーさんなら、これを参考にして、完全版のシステムを作れると思ったんです」

「……確かに、ここに組み込んでいるのをヒントにすれば、なのは

さん達のも完成を早められるし、欠点も見つけることが出来る……
…いいわ、一緒に完成させましょう！！」

「ありがとうございます！！」

「私も君の経験してきた未来はごめんだからね。でも、みんなには
いつかちゃんと言ってよ。それと、もう一つ！！」

「君の本当の力がどのくらいあるのかは分からないけど、リミット
ブレイクを完成させても、むやみに使わないこと！！　いくら負
担を減らせても危険なことには変わらないんだからね！！」

「はい」

あれから一週間がたち、マリーさんと俺は、ティア達のデバイスプ
ランとなのはさん達のリミットブレイクの改良に昼夜問わず続けて
いた。
同時進行だったので、ティア達のデバイスについては、俺が六課に
合流してから、シャーリーさんと一緒に本人達のデータを取りなが
ら完成させることになった。

一方リミットブレイクについては、何とか術者の負担を軽減させる
方法が見つかったが、フレームとか最初から見直すことになり、そ
の為最初からの作成となり、完成までにはもう少し時間が掛かりそ
うだ。

そして俺はティア達よりも一足早く返事をしてたので、今日、六課
に合流をすることになった。マリーさんとも一時お別れになる。

「じゃ、頑張ってね。無茶しちゃ駄目よ。なのはさん達にも、君が無茶しないようによく言っておくから……」

「少しは信用してくださいよ。マリーさん。それとまだ未来でのことは言わないでくださいね」

「それは大丈夫よ。でも、君が無理をすることは別よ!!　この一週間殆ど睡眠取ってないでしょう!!　いくらみんなの為だからって、君が倒れたんじゃ駄目でしょう!!」

「……はい、すみません……」

「ともかく、私もなのはさん達のシステムが完成次第、組み込む為に、六課に合流するから……」

「それじゃ、マリーさん、六課で……」

「ええ、また会いましょう……」

俺はマリーさんと別れ、自分のバイク『ロードサンダー』で機動六課隊舎へ向かった。
車も良いんだけど、俺は風を感じることが出来るバイクの方を好んでいる。
マリーさんがロードサンダーを時々いじっていたみたいだけど、何か仕掛けがあるんじゃないだろうな。

「よう、きてくれたな、フィル。ようこそ機動六課へ……」

「いらっしゃい、フィル」

「よくきてくれたね、嬉しいよ」

隊舎に着いた俺を迎えてくれたのは八神部隊長達だった。隊長陣勢揃いとは正直驚いた。しかもクラッカーのおまけ付きだった。たがが、一介の二等陸士に、これは……

「あ、あは、あははは……ど、どうなってんの……これ」

「驚いたやろ、マリーさんから連絡を受けてたんでな。ちょっと驚かせてみたんやけど……」

「はやて。フィル、どん引きしているよ」

「……まぁ、はやてちゃんって、いつもこんな感じだから。フィルも慣れておいた方が良いよ」

八神部隊長の性格は分かっていたつもりだったが、ここまではっちゃけていたっけな。

「まあ、それはともかく来た早々で悪いんやけど、オリエンテーション後に部隊長室にきてくれへんか」

「はい、分かりました」

俺はなのはさん達に機動六課の隊舎の案内をされた後、自分の部屋を紹介され、一旦荷物を置いた後、八神部隊長の待つ部隊長室に向かった。

「失礼します」

「あっ、ようきたな。まあ楽にしてな」

「あっ、はやてちゃん、フィル」

「はやて、フィル。もう始まっちゃってる……」

「いいや、これからやで。そこに座って話をしようか」

俺たちは部隊長室にあるソファーに腰をかけ、話をすることになった。

いったい何の話なのだろうか……

「実は、フィルのチーム所属何やけど……」

「はい、いったいどこになるんですか。ロングアーチですか、それとも……」

「それなんやけど、フィルの能力やと本当なら、ロングアーチが向

いてると思うんやけどなぁ。メカニックマイスターが認める能力は欲しいし……」

「ランク試験で見せた、あの指揮能力は無視できないよ。スターズかライトニングに入ってもらった方が良いよ」

「そうだね、スターズはティアナが入る予定だから、やっぱりライトニングかな……」

「でも、ティアナとスバルの暴走を止められるのはフィルだけなんだよね……」

「「「はぁぁぁ……」」」

「あ、あの……」

なんか、すごく嫌な予感がするのは気のせいか……

「せやから、フィルは訓練及び戦闘時はスターズ5として動いてもらい、デバイス関係とかで協力してもらう時はロングアーチで働いてもらう」

「ちょっと待ってください！！　二足のわらじなんて無理ですよ！！」

「無理言ってるのは分かってるよ。でも、フォワードとしての能力は高いのに、それをそのままにしておくのは正直もったいないと思う。元々、フォワードとしてスカウトをしたんだから……」

「なのは隊長……」

「でもな、機動六課にはデバイスマイスターと言われているのがシャーリーだけなんや。フィルのその力を新人達や私達に貸してほしいんや……」

「八神部隊長……」

「フィル、フィルの訓練は私達が責任を持つ。時間も出来るだけ訓練に集中できるようにするから……だからお願い。フィルの力をロングアーチに貸して欲しいの」

「フェイト隊長……」

「わかりました。その代わり、出来るだけフォワードとしての任務を優先にしてくださいね。シャーリーさんもいるんだし、どうしようもない時だけは俺が一緒にやるようにします」

「ありがとうな、本当にありがとうな……」

「ありがとうフィル。引き受けてくれて……そして、ごめんね。こんな無茶な配置になっちゃって」

「八神部隊長、フェイト隊長、いいですよ。それに見越してたんでしょう。こうなることは……そうですよね、なのは隊長」

でなきゃ、わざわざマリーさんの所まで研修に行かせたりはしない。そのくらいのことは俺でも分かる。

「にゃははは。わかってた……」

「わかりますよ。そうでなかったら、わざわざマリーさんの所に行かせたりしませんよね。スキルアップも目的だったんでしょうけど、本来はフォワード達のデバイスをシャーリーさん達と一緒に、考えて欲しかったというのが狙いですよね」

「……正解だよ、フィルはあの四人を正確な目で見ることが出来る。だから一緒に訓練して長所や短所、そして何を望んでいるのかを見ることが出来ると思う」

「そういったところをデバイスを作る時に、一緒にやって欲しいんや。それにマリーさんから届いてるで。新人四人の新デバイスプラン……これフィルが考えたもんやろ。これだけあの四人の特徴を捉えてあるものを作れるんやから、いまから新しく考えるより、これを採用した方がええってことや」

八神部隊長に見せられたのは、マリーさんのところで考えていた、ティア達のデバイスの設計図だった。

マリーさん、部隊長達に見せるなら先に言っておいてくれよ。

「これらのプランは、これから一緒に訓練をしてさらに煮詰めて行かなくてはなりませんけどね。あの四人の力はまだ未知数な所もありますし……」

「シャーリーからは私からも行っておくよ。あんまりフィルに頼る

なってね。さっきも言ったけど、フォワードなんだからね。フィルは……」

「お願いしますフェイト隊長。デバイスの設計図はシャーリーさんに渡しておいてください。細かいデータはこれから取って、一緒に考えていく事にしますよ」

俺は部隊長室を後にし、今後のことを考えていると……

《マスター、大変なことになってしまいましたね》

「ああ、まさかスターズとはな。フォワードになってティアと一緒に戦えるのは良いけど、デバイスのことと同時進行じゃ厳しいな」

《弱気にならないでください。新デバイスとリミットブレイクシステムについては、私も協力します。ですからマスターはティアナさん達のことを守ることに集中してください！！》

「ありがとうプリム。本当にたいした相棒だよお前は……」

正式運用まで三日と迫っていたが、その間もほかのスタッフが集結してきていた。その中にティアとスバルの姿もあった。どうやら六課に入ったみたいだな。

そして一週間が経ち、機動六課の正式な立ち上げの日がやってきた。

# 第3話　集結

機動六課の正式運営日の日がやってきた。六課全員食堂に集められ八神部隊長の就任の挨拶を聞いていた。

「……とまぁ、長い挨拶は嫌われるんで以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

就任式が終わった後、俺たち五人はなのは隊長と共に廊下を歩いていた。

エリオやキャロとは二度目になるが、自己紹介とコールサインの確認をし会った。

なのは隊長がそのことを確認し終わった後、午後の訓練の説明をし始めた。

八神部隊長とフェイト隊長は首都クラナガンにレリックのことを説明に行ったとのことだった。

「なのはさ～ん」

「シャーリー」

わたしが訓練場で新人たちを待っていると、シャーリーがやってきた。今日来てもらったのは新人たちのデータを取る為だ。

しばらくしてフォワード五人がこっちにやってきた。新人たちがやってくると、事前に預かっていたデバイスを渡した。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから、ちょっとだけ大事にしてね。それと、メカニックのシャーリーとフィルから一言ずつ……」

「え～、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャーリーと呼ぶのでよかったらそう呼んでね。みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。デバイスについての相談があったら遠慮無く言ってね」

「「「「はい」」」」

「今更自己紹介をするのもおかしいが、スターズ5、兼、機動六課デバイスアドバイザーのフィル・グリードです。本来はスターズのフォワードなんだけど、諸事情でデバイスのアドバイザーもやっている。いずれ事情は話すが、シャーリーさんと一緒にお前らのデータを取ったりもするので、改めてよろしくな」

「「「「ええっ！！」」」」

「フィル、あんた本当にデバイスマイスターになっちゃたの……」

「フィル、すごいね。前から器用だったけど、本当にデバイス関係の仕事をやるなんて……」

「ティア、言っておくがデバイスマイスターじゃない、アドバイザーだ。本業はお前らと同じフォワードだ」

「そんなことありませんよ。フィルさんは……」

「シャーリーさん、それ以上は……」

「あっと、そうでした……」

「それでもすごいですよ、フィルさん」

「はい、わたしはそんな器用じゃないのでうらやましいです」

「エリオ、キャロ、器用貧乏って言葉を知ってるか。なまじ出来るとこうやって辛い目に遭うんだ。本当ならな、フォワードとしての登録だったはずだ。それなのに……それなのにいいいいいいい！！！」

「……まぁまぁ、無理を言ってるのはこっちとしても申し訳ないから、基本的にはフォワードがメインになるからね。訓練も進まなくなっちゃうからね」

「まぁ、シャーリーさんがあまり無茶な注文をしなければ、アドバイザーの仕事はないんですけどね……」

「……にゃ、にゃははは、シャーリー、極力フィルには頼らないでね。一応フォワードなんだから……」

「すみません、フィルに聞くと、デバイスの大概の問題が解決するので、つい聞いてしまうんです……」

シャーリーさんは俺にデバイスのことで色々聞いてくるのだが、正直言って俺は、本来フォワードなんだからそっちに集中させて欲しい。

更に今回は、フォワード陣のデバイスを俺が設計してしまったから、俺が中心となってくれって言うもんだから時間がいくらあっても足りない。

「それじゃ早速訓練に入ろうか……」

「はい……」

「でも、ここでですか……」

「ふふ、シャーリー」

「は～い」

シャーリーさんは端末を展開すると、何らかの準備をし始めた。久しく忘れていたが、ここって六課の訓練スペースだったな。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター……ステージセット」

俺たちの目の前に小さな街が現れた。この訓練スペースは色々な状況に対応する為に作られたんだったな。ティア達も驚いていたが、正直俺もびっくりだ。

「よしっと。みんな聞こえる……」

「「「「「はい」」」」」

『じゃ、早速ターゲットを出していこうか。まずは軽く8体から』

『動作レベルC、攻撃制度はDってとこですかね』

『うん』

シャーリーさんが端末でターゲットの設定をし、8体の訓練用のターゲットを出現させた。

『わたし達の仕事は、捜索指定ロストロギアの保守管理、その目的の為にわたし達が戦うことになる相手は……これ！！　自立行動型の魔導機械。これは近づくと攻撃してくるタイプね』

実は、訓練前なのはさんにしばらくの間、訓練でプリムを使うのは禁止されたのだ。したがって今使ってるのは、俺が作ったカートリッジ式簡易ストレージデバイスのガンタイプだった。

なのはさんは俺がプリムに頼っていることに気づき、自力を上げないとこれ以上成長しないということに気づいていた。

確かにこれでは今後の為にならないし、自分の魔力の封印を解き、それと使いこなせるように身体を作らないといけない。

『では、第1回模擬戦訓練。ミッション目的：行動するターゲットの破壊、又は捕獲。15分以内！！』

「「「「「はい！！」」」」」

『それでは、ミッション……スタート！！』

なのはさんの開始の合図と同時に、スバルとエリオは前衛として、ティアとキャロがペアとなり、後方支援として左側のビルへ、俺も後方支援として右側のビルの屋上に向かった。

「……くっ！！　何これ動き、早っ！！」

スバルがローラーを全開にしてターゲットを追いかけ、攻撃を仕掛けるがなかなか当たらず、同様にエリオの攻撃も避けられてしまう。

「だめだ、ふわふわ避けられて当たらない……」

「前衛二人、分散しすぎ！！　ちょっとは後のことを考えて！！」

「エリオ、スバル！！　闇雲に攻撃するな。お前らがターゲットを分散させてどうするんだ！！　敵を引きつけるのも前衛の役目だぞ！！」

「あっ、はい！！」

「ごめん、ティア、フィル！！」

ティアがアンカーガンに魔力を込め、シュートバレットの準備をした。そしてキャロに魔力強化をかけてもらいターゲットに放った。

「シュート！！」

ティアの放ったシュートバレットは確実にとらえたかと思ったが、ターゲットの前でかき消されてしまった。

「バリア！？」

「違います……フィールド系！！」

「……ＡＭＦ……か……」

『そう、ガジェットドローンにはちょっとやっかいな性質があるの。攻撃魔力をかき消すアンチ・マギリングフィールド。通称ＡＭＦ。普通の射撃は通用しないし……それに……』

「くっ、くそ！！」

スバルが焦りでウイングロードを作り出して追いかけようとした。

「待てスバル、冷静に行動しろ！！」

俺の制止も聞かず追いかけてしまったが、次の瞬間……

「え、あっ、き、きゃぁぁぁぁぁ」

ウイングロードをガジェットドローンにかき消られてしまい、バランスを崩してビルにつっこんでしまった。

『飛翔や足場作りの、移動系魔法の発動も困難になる……スバル、大丈夫……』

「な、何とか……」

スバルは多少のダメージはあるみたいが、なのはさんの通信に返事をしていたから大したことはないだろう。とにかくあのガジェットを何とかして破壊しなきゃならない。俺たちは今持ちうる手札でどうするか、必死で考えた。そして……

「チビっ子。名前なんと言ったけ……」

「キャロであります」

「キャロ、手持ちも魔法とそのチビ竜の技で、何とか出来そうなのある？」

「……試してみたいのが、いくつか……」

「……あたしもある。フィル！！」

「……ああ、あのフィールドを貫通させるには、あれしかないな！！」

「やっぱり、あんたも同じ事を考えてたのね。……スバル！！」

「オッケー、エリオ。あいつら逃がさないように先行して足止めできる！！」

「あ、えっと……」

「ティア達が何か考えてるから時間稼ぎ！！」

「やってみます！！」

＊　＊　＊　＊

「……へえ、みんなよく走りますね」

「危なかっしくてドキドキだけどね……シャーリー、デバイスのデータは採れそう」

「いいのが採れてます。四機とも良い子に仕上げますよ」

「それにしても、フィルの持ってきたデバイスの設計図……」

「ええ、フォワード陣の新デバイスのプラン。ハッキリ言って凄いの一言です。あそこまで性格に合わせたものを作ってるなんて……本当に彼ってデバイスマスターじゃないんですか。自信なくしますよ、本当に……」

「フィルが言うには、ティアナのについては実用可能のレベルらしいけど、残り三人のについてはデータが足りなくて未完成のところが多いんだって……特に一番難しいのはスバルのだって言ってたよ」

「確かにスバルの魔法、ウイングロードは先天性のものだから、術式も普通のと違うんですね。今回のデータ収集でしっかり取ります」

「お願いね。フィルもフォワードとデバイスの事と両立させるのは大変だからね。シャーリーが中心となって完成させて欲しいって言ってたよ」

「本当はフィルが中心になってくれる方が助かるんですけどね。でも基礎設計がしっかりしていますからね。絶対完成させますよ！！
　レイジングハートさんも協力してくださいね」

《Ａｌｌ、ｌｉｇｈｔ》

俺たちはガジェットを撃滅する為に作戦を開始した。
この作戦は前衛の二人が、ちゃんと引きつけてくれるかにかかっている。

「いくよ、ストラーダ。カートリッジロード！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

僕はストラーダのカートリッジを一発ロードさせ、今自分が立っている橋を破壊してガジェットの進路を止め、上空に上げさせた。

「潰れてろ！！」

あたしは上空に上がったガジェットに魔力を込めた拳でで力一杯殴りつけた。
でも、魔力が消されちゃうといまいち威力が出ない。

「そんなら、うりゃぁぁぁぁぁぁ！！」

マウントポジションになり、リボリバーナックルの回転力を使って1体破壊した。
こいつら、物理的破壊なら通用する。

「連続行きます。フリード、ブラストフレア……ファイア！！」

フリードから放たれたブラストフレアはガジェット達をショートさせ、動きを止めることに成功した。

そしてわたしも錬鉄召喚の詠唱を唱えた。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」

アルケミックチェーンは3体のガジェット達の動きをとらえ、活動を完全に停止させた。

「こっちだって射撃型。無効化されて、はいそうですかって下がってたんじゃ、生き残れないのよ！！」

アンカーガンに、二発カートリッジをロードさせ、あたしは発射準備をした。
こいつにはシュートバレットじゃ駄目だ。だったら！！

「スバル、あたしとフィルが、上からしとめるからそのまま追ってて！！」

「おう！！」

「攻撃用の媒体を無効化されないよう膜状バリアでくるむ。フィールドを突き抜けるまで外殻のバリアが保てば……本命の弾はターゲットに届く！！」

ティアがヴァリアブルシュートの発射準備をしていた頃、俺もティアと同じくヴァリアブルシュートの発射準備をしていた。

「……くっ、やっぱつらいな。プリムがないと……」

元々デバイスを強化して戦っていた俺だ。ある程度の能力はあっても、こうして自力で戦うのは得意ではない。こうして模擬戦をしてみて、改めてプリムに頼ってたんだなって感じた。

「だが、絶対成功させる!!　このくらいであきらめてたんじゃ、これからのことなんか出来やしないんだよ!!」

二人が攻撃しようとしていた頃、ビルの屋上でその様子を見ていたなのはとシャーリーは……

「魔力弾。ＡＭＦがあるのに……」

《いいえ、通用する方法があります》

「うん……フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殻射撃。ＡＡランクのスキルなんだけどね……」

「ＡＡランク!?」

「「固まれ……固まれ……」」

ティアも俺も外殻を固まらせるのに全神経を使っていた。今の俺たちじゃこれが精一杯の攻撃だ。
特に俺はプリムの補助がないので制御が難しい。それに自力だけで発射するのは、これが初めてだ。

「「うぉおおおおおおお！！」」

外殻が固まり俺たちは引き金を引いた。

「「ヴァリアブルシュート！！」」

オレンジと白の魔力弾はガジェット達のＡＭＦを貫き、残っていた４体を完全破壊した。

「ティア、フィル！！」

「「……はぁ……はぁ……」」

「ティア、フィル。ナイスだよ！！　やったね、さすが！！」

「……スバル……うるさい……このくらい……当然よ……」

「……はぁ……はぁ……何とか……なったな……」

ティアも俺も疲れ果ててその場に仰向けで倒れ込んだ。
しかし、ティアってやっぱ才能あるよな。俺は未来での経験があったから何とかなったが、ティアは自分の努力でやったんだからな。
以前は一緒にＢランクは採ったけど、俺はＡＡ＋になるまで、ティアよりも相当時間がかかったんだよな。あんな悲惨な経験じゃなかったら、あそこまで強くならなかったかも……

その後、１５分の小休憩の後、訓練が再開し夕方まで続いた。初日にここまでやるか普通……
俺たちは宿舎に戻る体力もなく、体力が戻ったのは夜になってからだった。
やばい、完全にスペック負けしてるよ。これじゃ元のスペックに戻すのも時間がかかりそうだ。

こうして俺たちの機動六課での初日が終わった。

# 第4話　ファースト・アラート

ティア達が機動六課に来てから二週間がたった。
訓練の方も、更に厳しいものとなってきて俺たちはそれについて行くのに精一杯だった。

「はい、整列！！」

「「「「「はぁ……はぁ……はぁ……」」」」」

「じゃ、本日の早朝訓練。ラスト一本。みんなまだ頑張れる」

「「「「「はい！！」」」」」

「じゃ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハート」

《Ａｌｌ、Ｌｉｇｈｔ……Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのはさんの周りに１１個のアクセルシューターが現れた。
相変わらずのハイスペックぶりだ。

「わたしの攻撃を5分間被弾無しで回避し続けるか、わたしにクリーンヒットを決めればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう」

「「「「「はい！！」」」」」

そうは言うが、正直ボロボロの俺たちじゃ5分間も回避してづけるのは厳しい。
そうなると取れる手は一つ！！

「みんな、今の状態から考えると、回避の策を取るのは賢明じゃない。そうなると残されてるのは……」

「そうね、正直5分間もしのぎきれる自信はないわ」

「あたしも無い」

「同じくです」

「じゃ、何とか一発入れるしかないな。やれるなキャロ」

「はい」

「ようし、いくよエリオ！！」

「はい、スバルさん！！」

スバルはリボリバーナックルを、エリオはストラーダを構え、臨戦体勢になった。

「準備はオッケーだね。それじゃ、レディ……ゴー！！」

なのはさんの右腕が下ろされ、アクセルシューターの大群が俺たちに襲ってきた。

「全員撤退、回避！！　２分以内に決めるわよ！！」

「「「「おう！！」」」」

ティアの合図で俺たちは散開し、スバルはウイングロードでなのはさんの背後に回った。

「うおおおおおお」

ティアと俺はビルの中に移り、シュートバレットでなのはさんを狙った。

「……っ、アクセル！！」

《Ｓｎｉｐｅ．Ｓｈｏｔ》

三つのアクセルシューターが俺たちに向かってきた。

しかし、命中したのは俺たちが作ったシルエットだった。

「……シルエット。やるね、ティアナ、フィル」

そして上空からスバルが、本命の攻撃を仕掛けた。

「うりゃぁぁぁぁぁぁ」

なのはさんはラウンドシールドを展開し、スバルの拳を防いだ。
スバルはなお突破を試みるが、強固な防御力を誇っていて突破できなかった。
さらに、アクセルシューターがスバルに襲いかかってきた。スバルはローラーでバックし、何とか直撃は避けた。

「うん、良い反応……」

「う、う、うわぁぁぁぁぁ」

しかし、バランスを崩してしまい、後退を余儀なくされてしまった。
さらに、シューターがスバルを追ってきていた。

「スバル、バカ！！　危ないでしょ！！」

「ゴメン……」

「待ってなさい、今撃ち落とすから……」

ティアがアンガーガンで、撃ち落とそうとしたその時……

ガチャ…

「えっ！！」

引き金を引いたが、アンカーガンが作動不良を起こしてしまい魔力弾が撃てなかった。

「うわぁぁぁ、ティア～　援護～」

「この肝心な時に！！」

「替われ。俺がやる！！」

ティアの代わりに、俺が援護用のシュートバレットを撃った。

だが……

ガチャ……

「くそ！！　駄目だ。俺のも、もう使い物にならない！！」

何とかスバルの援護は出来たが、これじゃ俺もティアも戦闘続行は無理だ。
何とか決めてくれよ。エリオ！！

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に……駆け抜ける力を」

《Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　……Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

僕はキャロの補助魔法ブーストアップ・アクセラレイションで、ストラーダの機動力をアップしてもらい、なのはさんに仕掛けるチャンスを狙っていた。今の僕たちじゃ、これしか手がない。
だからこの一撃に全てをかける。

「あの、かなり加速が付いちゃうから気をつけて……」

「大丈夫！！。スピードだけが取り柄だから……いくよストラーダ！！」

ストラーダのバーニアが出力が上がり、後はタイミングを見てなのはさんに仕掛けるのみ！！
なのはさんはフィルさんの誘導弾とフリードのブラストレイ避け、僕に向かってきた。

「エリオ、気付かれたぞ！！　今しかない。やれぇぇぇぇ」

「いっけぇぇぇぇぇ」

《Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ》

「てやぁぁぁぁぁぁ」

僕のストラーダとなのはさんが空中で激突し、黒煙を上げていた。

僕は何とか近くのビルに着地したが……

「エリオ！！」

「外した？」

「……どうだろうな」

黒煙が収まり、なのはさんの姿が見え始めた。

《Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「おみごと、ミッション・コンプリート」

「本当ですか……」

「ほら、バリアを抜いてジャケットまで通ったよ」

なのはさんは自分の左胸にある、焦げた部分を指しエリオの攻撃が通ったことを言った。
俺たちの作戦がうまくいったんだ。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

「「「「「はい！！」」」」」

なのはさんも地上に降りてきて、バリアジャケットを解いて俺たちの所にやってきた。

「さて、みんなもチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

「「「「「ありがとうございます！！」」」」」

「ティアナとフィルの指揮も筋が通ってきたよ。二人とも指揮官訓練受けてみる……」

「い、いやぁ……あの……戦闘訓練だけで一杯いっぱいです……」

「お、俺もティアと同じです……それに指揮官って柄じゃありませんよ……」

「うふふふ……二人とも謙遜しちゃってさぁ～」

俺たちが和んだ空気でいると、フリードが何かに気付いたみたいな様子だった。

「キュク……キュクゥゥゥ？」

「ん、フリードどうしたの……」

「何か焦げ臭いような……」

「あっ、スバル。あんたのローラー」

ティアの声で俺たちはスバルのローラーを見てみると、煙が吹き出していた。訓練で酷使しすぎたせいだ。

「あっちゃぁぁぁぁ、しまった……無茶させちゃった」

「オーバーヒートかな……後でメンテスタッフに見てもらおう」

「はい……」

「ティアナのアンカーガンとフィルのデバイスガンも結構厳しい……」

「はい……騙し騙しです……」

「俺のは完全に駄目です。……これじゃ新しく作った方が早いです」

「……みんな、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな……」

「「「「新……デバイス……」」」」

訓練が終わった俺たちは、一旦シャワーを浴びにいく為に寮に戻ることになった。

「じゃ、一旦寮でシャワーを浴びて、着替えてロビーに集まろうか」

「「「「「はい」」」」」

「ん、あの車って……」

俺たちが寮へ向かう途中、黒いスポーツカーが俺たちの前で止まった。
中にはフェイトさんと八神部隊長が乗っていた。

「すご～い、これフェイト隊長の車だったんですか」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

「みんな練習の方はどないよ……」

「あ……ああ……」

「頑張ってます……」

スバルが返答に困っていたが、ティアナが代わりに答えた。

「エリオ、キャロごめんね。私は二人の隊長なのに、あまり見てあげられなくて……」

「あ……いえ、そんな……」

「大丈夫です……」

エリオもキャロも、フェイトさんに心配させないようにしているんだろうな。

もう少し子供らしく色々と言っても良いんじゃないか……

「五人とも良い感じで慣れてきているよ。いつ出動があっても大丈夫」

「そうか、それは頼もしいな」

「二人はどこかにお出かけ……」

「ちょっと6番ポートまで……」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなで一緒に食べようか」

「「「「「はい」」」」」

「ほんならな～」

＊　　＊　　＊　　＊

なのは達と別れ、はやてと私は、はやてを聖王教会本部に送る為に向かっていた。

「聖王騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官。カリム・グラシアさんか……私はお会いしたことがないんだけど……」

「そやったね……」

「はやてはいつから……」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばっかのころのはずやから……8年くらい前かな」

「そっか……」

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべき事も全然ちゃうんやけど……今回は二人の目的が一致したから……そもそも六課の立ち上げ、実質的なところをやってくれたんは、ほとんどカリムなんよ」

「そうなんだ……」

「おかげで私は人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ……」

「う～ん。仕事や能力は凄いんやけど……あんまり上司って感じはせえへんな。どっちかっていうと、お姉ちゃんって感じや」

「ふふ、そっか……」

「まぁ、レリック事件が一段落したらちゃんと紹介するよ。きっと気が合うよ。フェイトちゃんもなのはちゃんも……」

「うん、楽しみにしている……」

―機動六課シャワー室内―

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃、それにフィルさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね……」

「うん、そうだよ」

「訓練校でも、前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「あたしは魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし……ティアとフィルもカートリッジシステムが使いたいからって」

「で、そうなると自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナル

デバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね……」

「あっ、もしかしてそれで、スバルさん達、お友達になったんですか……」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って……」

「あははは……」

「でも、デバイスは、ティアよりもフィルの方が目立ってたよね」

「あいつのデバイスは素人のレベルじゃないわ。それこそ資格持ちの人が作るものよ……」

「それに、以前よりさらに改良していたね。プリム……」

「あたしが必死で作ったアンカーガンと同じものだって、今回の訓練に間に合わせる為に、2日で作ったしね」

「ええっ、あの銃をたったそれだけの日にちで……」

「……正直へこんだわよ。あたしがこれを、どれだけ苦労して作ったか……それをたった2日で作られたんじゃ……」

「しょうがないよ。フィルはその辺が得意分野なんだから……」

「まぁ、フィルにはあたしも、デバイスの事じゃ色々参考になったしね……」

「やっぱり、フィルさんって凄いんですね……」

「まぁ、あんまりフィル達を待たせてもまずいし、そろそろ出ようか」

「そうね……」

「はい」

あたし達はティア達と着替えに戻り、先に上がっていたフィル達と合流しロビーに向かった。

―ミッドチルダ北部　ベルカ自治領「聖王教会」大聖堂

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました」

「早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい」

「はい」

「それから、お茶を二つ……ファーストリーフの良いところをミルクと砂糖付きでね」

「畏まりました」

「よしっと……」

コンコン

「どうぞ……」

「カリム、久しぶりや」

「はやて、いらっしゃい」

私とカリムは久しぶりの再会をし、その後少し雑談を交えて、部隊の話になっていった。。

「ごめんな。すっかりご無沙汰してもうて……」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね」

「ふふ、カリムのおかげや」

「うふふ、そういうことにしておくと、色々お願いもしやすいかな」

「なんや、今日会って話すのはお願い方面か」

「……」

カリムは雰囲気が変わり、カーテンを閉めガジェットの資料をいくつか出した。

「これ……ガジェット……新型？」

「今までの？型のほかに二種類。戦闘性能はまだ不明だけど……これ、？型は割と大型ね」

「本局にはまだ正式報告はまだしていないわ。監査役のクロノ提督には、さわりだけお伝えしたんだけど……」

「……っ、これは！！」

私はカリムの出したデータの中にあった、ある物体に気付き驚いた。

「それが今日の本題。一昨日付で、ミッドチルダに運び込まれた不審貨物……」

「……レリックやね」

「おそらく、間違いないわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし……」

「ガジェットがレリックを見つけ出す予想時間は……」

「調査では早ければ今日明日……」

カリムの話を聞いていて、私はある疑問が浮かんだ。

「せやけどおかしいな。レリックが出てくるのが、ちょう早いような……」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか……」

「……」

「レリック事件も、その後に起こる事件も対処を失敗するわけには……いかないもの」

「……」

私は画面を操作すると、情報画面を閉じ、カーテンをあけた。

「はやて？」

「まぁ、何があってもきっと大丈夫。カリムが力を貸してくれておかげで、部隊はいつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。予想外の緊急事態にも、ちゃんと出来る下地が出来ている。そやから大丈夫！！」

ー機動六課、メンテナンスルームー

「うわぁ……、これが……」

「あたしたちの新デバイス……ですか……」

俺たちの前に４機の新デバイスがあり、まるで持ち主を待っていたかのようだった。

「そうでーす。設計主任はフィルと私。協力者は、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「ティアナのはクロスミラージュ、スバルのはマッハキャリバー。エリオとキャロのは今まで使っていたのと同じ名前だよ……」

ティア達がデバイスを見ていると、エリオとキャロがあることに気付いた。

「あれ、ストラーダとケリュケイオンは変化無しかな……」

「うん、そうなのかな……」

「違います！！　変化無しは外見だけですよ」

「リインさん……」

「はいです」

エリオとキャロの前にリイン曹長が現れ、ストラーダやケリュケイオンの事を話し始めた。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、感触に慣れてもらう為に、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで最低限……」

「……本当に…」

「みんなが扱うことになる4機は、六課の前線メンバーとフィルとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に併せて、そして、エリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です」

そういうとリイン曹長は4機のデバイスを宙に浮かせ、さらにデバイスの存在意義のことを話してくれた。

「この子達はみんなまだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められてて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

そしてリイン曹長はティア達に、それぞれデバイスを渡してくれた。

「だから唯の道具や武器と思わないで、大切に。だけど性能の限界までおもいっきり、全開まで使ってあげて欲しいです」

「そういえばさっき、フィルが設計主任になったって言ってたけど？」

「そうだ！！　さっきは聞き流してしまったけど、いつ俺が設計主任になったんだ！！」

「だって、基礎設計はフィルがやったものでしょう。私はそれを元に完成させたんだから……」

あのねっ！！　それはティア達には言わない約束でしょう。あくまでアドバイザーとして登録しているんだから！！

「「「「ええっっっ！！」」」」

「フィルがあたし達のデバイスを設計したって本当なんだ！！」

「じゃ、訓練を一緒にしながら、ずっとデータ取りも並行して……」

「……フィルさん」

「フィル。あんた本当に……あたし達のデバイスまで……」

ティアが申し訳ない気持ちが一杯なのか、ずっと下にうつむいたま

まだった。
俺はそんな顔が見たくてやったんじゃないんだ。

だから言いたくなかったんだよ。

「前の部隊で一緒にやっている時、約束したろ。今使っているデバイスで対応できなくなったら、いつか俺が新しく考えてやるって…
…まぁ余計なことしちゃったかもしれんがな……」

「……そんなことないわよ……あんただって、あたし達と一緒に訓練をしていて、身体はボロボロのはずなのに……」

「俺は今、自分が出来ることを精一杯やっただけだ。俺はティアのそんな顔が見たくてやったんじゃないんだ。だから……」

「あっ……」

俺はクロスミラージュを握っているティアの手に、自分の手を添えて、出来るだけ優しく言った。

「……だから、そんな風に思わないでくれ。俺はティア達が生きてかえってくる為なら、どんなことだってする。これもその一つなんだ……」

「だけど……」

「だったら、俺たちが作ったそのデバイスを大切に、そして使いこなしてくれ。きっとクロスミラージュもそれを望んでいるから……」

「……うん」

「あの～あたし達もいるんですけど……」

「「あっ……」」

「まったくフィルって時々、素でそういうことを、恥ずかしげもなく言うよね……でも、本当にありがとう、フィル……」

「……礼ならシャーリーさんに言ってくれ。俺はウイングロードの解析が出来なくて、お前のデバイスは頓挫していたんだからな……」

「そういったとこ、相変わらず素直じゃないよね。フィルって……やっぱ似たもの同士だよ。お二人さん」

「「スバル！！」」

「「「「「ははははっ」」」」」

スバルのおかげで、こんな調子になってしまったが、これらのデバイスは俺とシャーリーさん達が、全能力を使って完成させたんだ。決して足手まといにはならないはずだ。

「ごめん、ごめん。おまたせ……」

「なのはさん！！」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をしようかと……」

「そう、すぐに使える状態なんだよね」

「はいです！！」

シャーリーさんは四機のデバイスの画像を出し、説明を始めた。
実はこのデバイス達はとても高性能な為、ある仕掛けをしてあるのだ。

「まず、その子達みんな、何段階かに分けて出力リミッターをかけてあるの。一番最初の段階だと、そんなにビックリするほどパワーが出る訳じゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、わたしやフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから……」

「ちょうど、一緒にレベルアップしていく感じですね」

「あっ、出力リミッターって言うと、なのはさん達にもかかってますよね」

「ああ……わたし達はデバイスだけでなく、本人にもかかっている

んだけどね」

「「「「ええっ」」」」

「能力限定って言って、うちの隊長と副隊長はみんなだよ。わたしとフェイト隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「え～と……」

「ほら、部隊ごとに保有できる、魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「あ……え……そうですね……」

「一つの部隊で優秀な魔導師をたくさん保有したい場合は、そこに上手く収まるように魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まぁ…裏技っちゃぁ……裏技なんだけどね」

そう、管理局では一つの部隊が保有できる魔導師の総合ランクが決まっているのだ。
そのせいで、こういった事が起こっているのだ。

「うちの場合だと、はやて部隊長が４ランクダウン、隊長達は大体

2ランクダウンかな」

「4つ!!　八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか」

「はやてちゃんも色々苦労しているです……」

「なのはさんは……」

「わたしは元々S＋だったから、2．5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人でみんなの相手をするのは辛くなってくるかな」

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除が出来ないですし……許可は滅多なことでは出せないそうです」

「……そうだったんですね」

「まぁ、隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。今はみんなのデバイスの事……」

「「「「はい……」」」」

「……」

「フィル？」

「い、いや……何でもない……」

「そう……」

シャーリーさんがみんなのデバイスのデータを表示し、説明を始めた。

「新型はみんなの訓練データを基準に調整されているから、いきなり実戦で使っても違和感はないはと思うんだけど……」

「午後の訓練の時にテストでもして、微調整をしようか」

「遠隔調整も出来ますから、手間は殆どかからないと思いますよ」

「ふぅ、便利だよね最近は。レイジングハートは遠隔調整が出来ないから……」

「俺のプリムのそうですよ。最も普段から自分で調整してますから、遠隔機能は必要ないんですけどね……」

「あっ、そうそう。スバルのリボリバーナックルとのシンクロもうまくいったから、収納機能と瞬間装着の機能が付いてるぞ」

「本当!!　ありがとうフィル、シャーリーさん」

ーミッドチルダ首都高速ー

はやてを送った私はグリフィスと通信をしながら、公安地区の捜査部に向かっていた。

「……うん、はやては向こうに送ったから。そろそろ会談が始まっているんじゃないかな」

「はい、お疲れ様です」

「私はこの後、公安地区の捜査部に寄っていこうと思うんだけど、そっちは何か急ぎの用事とかあるかな」

「いえ、こちらは大丈夫です。副隊長お二人は交替部隊と一緒に出動中ですが、なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので……」

「そう……っ、えっ！！」

私が通信を切ろうとして時、第一級警戒態勢のアラートが鳴った。一体何があったんだろう……

ー機動六課、メンテナンスルームー

「このアラートって……」

「一級警戒態勢！！」

「グリフィスくん！！」

「はい、教会本部から出動要請です！！」

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて！！」

聖王教会に行っていた八神部隊長から通信が入った。
同時にフェイト隊長とも通信回線が開いていた。

「こちらフェイト、状況は……」

「教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。場所は、エイリム山岳丘陵地帯。対象は山岳リニアレールで移動中」

「移動中って！！」

「まさか！！」

「……そのまさかや。内部に進入したガジェットで、車両の制御が奪われている……リニアレール車内のガジェットは最低でも３０体。大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれへん」

「いきなりハードな初出動や……なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか……」

「わたしはいつでも！！」

「私も！！」

「スバル、エリオ、キャロ、ティアナ、フィル。みんなもオッケーか！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「よし、良い返事や。シフトはＡ－３。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制」

「「はい！！」」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮！！」

「うん！！」

「ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「……了解、みんなは先行して。私もすぐに追いかける！！」

「うん」

私はなのはとの通信を切ると、車を緊急車両モードにし、全速で向かった。

ー聖王教会、大聖堂ー

「シャッハ、はやてを送ってあげて。機動六課の隊舎まで最速で！！」

「畏まりました、騎士カリム！！」

シャッハは、はやてを送る為、急いで準備をしていた。

「聖堂の裏に出て。シャッハが待ってる……」

「おおきにな、カリム。今日のお茶おいしかったよ……」

「ふふ……」

「ほんなら、行ってきます！！」

ー機動六課ヘリポートー

「急いでください！！　出動準備は出来てます！！」

ヴァイス君がすでにヘリの準備をしていて、私達は急いで乗り込んだ。

全員が乗り込んだのを確認し、ヘリは全速力で現場に向かって飛び立った。

「新デバイスでのぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね……」

「はい……」

「頑張ります……」

「エリオもキャロ、それにフリードもしっかりですよ」

「「はい！！」」

「キュクゥゥウゥ」

「危ない時はわたしやフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」

「「「「「はい！！」」」」」

いよいよ戻ってきての初実戦だ。ここでしくじらないようにしないとな……

俺たちはそれぞれの不安や思いを持ち、現場である山岳地帯に向かっていた。

# 第5話　自分の力、大切なもの

新暦７１年　４月

「アルザスの竜召喚の娘。ルシエの末裔、キャロよ……」

「わずか６歳にして、白銀の飛竜を従い、黒き炎竜の加護を受けた……お前は、誠にすばらしき竜召喚師よ」

「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ……」

「……！！」

「すまぬな……お前をこれ以上、この里に置くわけには行かぬのじゃ……」

（竜召喚は危険な力……人を傷つける怖い力……）

ー現在ー

「問題の貨物車両速度７０を維持、已然進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

「時間の問題か……」

「！！　アルト、ルキノ、広域スキャン。サーチャーを空へ！！」

サーチャーを空にかけてみると、大量のガジェット反応があり、その数に驚いた。

「ガジェット反応！！　空から！！」

「航空型、現地観測隊を補足！！」

「こちらフェイト、グリフィス。こちらは現在パーキングの到着。車を止めて現場に向かうから、飛行許可をお願い……」

「了解、市街地都市飛行。承認します」

パーキングに止め、車から降りた私は、バルディッシュを取り出し、セットアップの準備をした。

《Ｇｅｔ、ｓｅｔ》

「うん……バルディッシュ・アサルト……セットアップ！！」

《Ｓｅｔ　ｕｐ……ＢｅｒｒｉｅｒＪａｃｋｅｔ、Ｉｍｐｕｌｓｅ　Ｆｏｒｍ》

「ライトニング１、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。行きます！！」

バリアジャケットを装着した私は、飛行魔法で全速力で現場に向かった。

＊　　＊　　＊　　＊

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる！！」

「ウッス、なのはさんお願いします！！」

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバッとやっつけちゃおう」

「「「「はい！！」」」」

「……ん？」

フォワード陣は気合い入っていたが、一人だけキャロが下をうつむいていた。

「キャロ、大丈夫か……」

「は、はい！！　大丈夫です」

とてもそうは見えない状態だ。
多分、未来の世界でキャロから聞いた、故郷を追い出された事を思い出しているのだろう。
俺はキャロの頭に手を置いた。

「……キャロ、自分の力が怖いか」

「！！」

「やっぱりか……」

フィルさんに自分の心の内を読まれてしまった私は、驚くしかなかった。
そしてフィルさんは真剣な顔をして語り始めた。

「なぁ、キャロ……俺は力って奴は、自分の心……そのものだと思うんだ。どんなに否定したって、その力はずっと自分に付いてくる物だからな」

「自分の……心……そのもの……ですか……」

「ああ、俺も自分の力が怖いって思うことはある。使い方を間違えてしまえば、例えBランクの力だって、殺してしまうことも可能だからな」

「フィル……ちょっとあんた！！」

「黙って聞いてくれないか……これはキャロにとっても大事なことなんだ」

「……」

フィルの真剣な表情にあたしは黙るしかなかった。
あんな表情は初めて見た……
スバル達もなのはさんもリイン曹長も、そしてヴァイス陸曹まで黙って聞いていた。

「スバル、お前には言ったことがあるな。不用意に魔法を使うと、二次災害を作ってしまう。そして使う時は最大限注意して使えって」

「うん、それは昇格試験の時に聞いたよ……」

「……そういうことだ。非殺傷という言葉に甘えるな。例え非殺傷でも使い方を間違えれば、人が死ぬんだ！！」

「……っ！！」

わたしは唇をかんで黙るしかなかった。
昔わたしが里を追い出されたのは、仕方なかったのか……

「でもな、自分の力ならば、ほかの誰でもない自分が制御できるんだ……」

「えっ……」

「本当に怖いのは強大な力じゃない。小さい力だってコントロールが出来ていなかったら、そっちの方が怖いんだ。たとえば……」

俺は懐からナイフを取り出し、自分の首へ刃を向けた。

「こうやって刃をむけたって、自分でやってるんだから怖くないだろ。力はこれと同じだ……」

「だから、自分の力を受け入れろ!!　そうすることで一つ成長するし、自分の為になるんだ」

「!!」

フィルさんの言葉に何かが吹っ切れたような気がした。確かに優しくされることは嬉しい。
でも、今のように厳しく言ってくれる人はいなかった。

そしてフィルさんはわたしの頬に手を添えて……

「きついことを言ってゴメンな。なのはさんなら、もっと上手いことが言えるんだけどな……」

「フィルさん……」

「なのはさん」

「なに、フィル……」

「今回俺はライトニングと行動します。スターズにはティアがいますし、それにこんな事を言った手前、キャロのことほっとくわけにはいかないでしょう」

「分かったよ。フィルは今回はライトニングと行動して。でも、さっきの話ビックリしたよ……」

「すみません……もう少し言い方があったんですけど……」

「ううん、本当はわたしがああいった憎まれ役をやらなくちゃいけないのに、ごめんね……」

「いえ、これ以上は俺だと難しいですので、後のフォローはお願いしますね。なのはさん」

「了解、後は任せて……ヴァイス君ハッチを開いて！！」

「わかりやした！！」

《ｍａｉｎ　Ｈａｔｃｈ、ｏｐｅｎ》

わたしは新人達の為に、先陣を切ってヘリから飛び降り、レイジングハートを起動させた。

《Ｓｔａｎｄｂｙ、Ｒｅａｄｙ》

「レイジングハート・エクセリオン……セットアップ！！」

《ＢｅｒｒｉｅｒＪａｃｋｅｔ、Ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ　ｍｏｄｅ》

「スターズ１、高町なのは。行きます！！」

バリアジャケットを装着したわたしは、アクセルフィンを展開し高速飛行をしガジェット達を殲滅に向かった。

なのはさんが出陣した後、ヘリ内でリイン曹長が今回のミッションの説明をしていた。

「任務は二つ。ガジェット達を逃走させず、全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること。ですから……」

「スターズのティアナとスバル、ライトニングの二人とフィルの分隊に分かれて、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです」

「レリックはここ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニングのどちらか先に付いた方が、レリックを確保するですよ」

「「「「「はいっ！！」」」」」

「で……私も現場に降りて、管制を担当するです」

＊　　＊　　＊　　＊

「スターズ1、ライトニング1、エンゲージ！！」

「こっちの空域は二人で抑える。新人達の方フォローお願い……」

「了解」

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん……」

「うん、なのは……」

こっちの動きに気付いたのか、ガジェットの大群がこっちに向かってきていた。

《Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔａｒ》

《Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ》

私達はそれぞれ迎撃し、空域静圧を行っていた。
しかし、ガジェットはいくら倒してもなかなか減らず、完全制圧には時間がかかりそうだ。

＊　　＊　　＊　　＊

「さーて新人ども、隊長さん達が空を押さえてくれているおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。……準備は良いか！！」

「「「「「はい！！」」」」」

俺たちはまず、スターズの二人から降下をし、その後エリオとキャロ、そして俺が最後に降下することになった。

「スターズ３、スバル・ナカジマ」

「スターズ４、ティアナ・ランスター」

「「行きます！！」」

「……いくよ、マッハキャリバー」

「……お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップ！！」」

《《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ、Ｒｅａｄｙ》》

バリアジャケットを装着したティア達は、浮遊魔法を使ってリニアレールの最前車両に着地した。

「次、ライトニングとフィル！！　……チビども気いつけてな」

「「はい！！」」

二人が飛び降りようとしていたが、キャロがまだ緊張しているみたいだったので、俺はエリオの肩をぽんと叩き、キャロに聞こえない程度の声で話した。

「エリオ、キャロと手をつないで降りてやれ。最初の実戦で緊張しているみたいだからな。緊張してるのはお前も一緒だけど、男の子なんだから、しっかりキャロのこと見てやれよ」

「は、はい」

「キャロ、一緒に降りようか……」

「……うん！！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「行きます！！」」

「ストラーダ」

「ケリュケイオン」

「「セットアップ！！」」

同じようにバリアジャケットを装着し、リニアレールの最後尾に着地した。

四人が着地したのを確認し、俺も降下を始めようとしたその時……

「……フィル」

「何ですか、ヴァイス陸曹」

「……あいつらのこと……頼むな……」

「……はい！！」

「スターズ5、フィル・グリード……行きます！！」

「久しぶりの戦闘だ。頼むぜ相棒……」

《任せてください！！　思いっきり暴れてやりましょう》

「ああ、行くぜ！！　プリム……セットアップ！！」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ、Ｒｅａｄｙ》

俺もバリアジャケットを装着し、ライトニングの待つ最後尾に着地した。

「あ、あれ……このジャケットって……」

「……もしかして」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしているですよ。フィルのは独自に作ってますけど……」

「ちょっと癖はあるが、高性能に仕上げたつもりだ。まぁ、俺のはこの方が使いやすいから、このデザインを採用しているけれどな」

俺が装着しているのは、現在、クロノ提督が使っているバリアジャケットをベースに、八神部隊長のバリアジャケットの腰の所にある、金属パーツをつけた物と考えてもらったら良いと思う。

「「リイン曹長……」」

「「フィルさん……」」

スバル達の疑問に、スターズにはリイン曹長が、ライトニングには俺が答えた。

「へぇ……」

「……はっ、スバル、感激は後！！」

スバル達の前に車両内から、ガジェットがビームを放ってきた。何機か屋根を突き破って、出てきそうな状態であった。

《《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》》

それぞれのデバイスが起動し、ティアはクロスミラージュを、出てこようとするガジェットに向けていた。

《Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｂａｒｒｅｔ》

「シュート！！」

ティアの放ったヴァリアブルバレットは、ＡＭＦを突き抜けてガジェットに命中し破壊した。

「うぉぉぉぉぉ」

スバルもガジェットが開けた穴から突入し、リボルバーナックルで一体のガジェットを破壊した。
その後、マッハキャリバーで内部を進んでいったが、リボルバーシュートでガジェットを破壊した時、屋根も破壊してしまい、その勢いでスバルも外に放り出されてしまった。

「う、うわぁぁぁぁ」

《Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ》

マッハキャリバーがウイングロードを発動し、スバルは何とか別の車両の屋根に着地することが出来た。

「……うわぁ……マッハキャリバー、お前って、もしかしてかなり凄い……」

「加速とか、グリップコントロールとか……それにウイングロードまで……」

《私はあなたをより強く、より速く、走らせる為に作り出されましたから》

「……うん！！　でも、マッハキャリバーはＡＩとはいえ心があ

るんでしょう。だったら、ちょっと言い換えよう。……お前はね、あたしと一緒に走る為に生まれてきたんだよ」

《同じ意味に感じます》

「違うんだよ、いろいろと……」

《考えておきます》

「うん！！」

その頃、内部に突入していたティア達は、ケーブルを破壊してレールを止めようとしたが……

「ティアナはどうです」

「駄目です。ケーブルの破壊、効果なし」

「了解、車両の停止は私は引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください」

「了解！！」

《Ｏｎｅ　Ｈａｎｄ　Ｍｏｄｅ》

あたしはクロスミラージュを二丁から一丁にし、スバルと合流する為に中央部に向かった。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、弾体生成までサポートしてくれるんだね」

《はい、不要でしたか》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的にはよくないんだけど……でも、実戦では助かるよ」

《Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ》

（フィル……本当にあたし達のことを考えて作ってくれたんだね……大切に使わせてもらうね……）

＊　　＊　　＊　　＊

『スターズＦ、４両目で合流。ライトニングＦとスターズ５、１０両目で戦闘中』

「スターズ１、ライトニング１、制空権獲得」

「ガジェット？型、散開開始。追撃サポートに回ります」

「ごめんな、おまたせ」

聖王教会から八神部隊長が戻ってきて、ロングアーチスタッフが全

員そろった。

「八神部隊長！！」

「おかえりなさい」

「ここまでは、比較的順調です」

「うん……」

「ライトニングF、スターズ5、8両目に突入……エンカウント、新型です！！」

＊　＊　＊　＊

「「「くっ！！」」」

俺たちは新型のガジェットと遭遇し戦闘状態になり、触手みたいなものがこちらに向かってきたが、何とかかわすことができた。

「フリード、ブラストフレア！！」

「キュクゥゥゥゥ」

「ファイア！！」

ブラストフレアは触手に跳ね返されてしまい、崖に命中した。

「おりやぁぁぁぁ」

エリオはストラーダの切っ先に魔力を込め、ガジェットに斬りかかったが、装甲が硬くダメージを与えられなかった。さらにＡＭＦが発動し、ストラーダの魔力が消されてしまった。

「ＡＭＦ！？」

「こんな遠くまで……」

「ちょっと厄介だな……エリオ、俺も中に行く。何とか持ち堪えろ」

「はい！！」

俺はエリオを援護する為、内部に突入しブラストシュートの準備をした。

本当はブラストブレイザーなら破壊できるかもしれないが、内部で使うとリニアレールが爆発し、レリックも何らかの影響を受けてしまうかも知れないので迂闊には使えない。

「エリオ、ブラストシュートでＡＭＦを中和するから、何とかストラーダで攻撃してくれ」

「は、はい！！」

触手にストラーダの両端をつかまれ、取られないようにするのに精一杯だが、この状況では大技は使えないのでエリオに頑張ってもらうしかなかった。

「あ、あの……」

「大丈夫。任せて！！」

「キャロ、こっちは大丈夫だ！！」

キャロが上から心配そうにこちらを見ているが、ＡＭＦがある以上、フルバックのキャロはこちらに来てもどうしようもない。

エリオが何とか触手を払いのけ、上空へ飛び上がり反撃をしようとした。

「よし、いくぞ。ブラストシュート！！」

「うぉぉぉぉぉ」

俺の放ったブラストシュートはＡＭＦを中和させられたが、触手の動きが速く、なかなか反撃のチャンスがない。

さらにガジェットからビームが放たれ、上空のエリオをとらえ、触手で壁に叩き付けられた。

「うわぁぁぁぁ」

俺はシュートバレットでガジェットの注意をこちらに向けた。
エリオの奴はさっきの攻撃で、気を失ってしまっている。
とにかくエリオから少しでも離さないと……

「お前の相手はこっちだ！！」

《マスター、隣の車両にレリックがある以上、これ以上の車内での射撃・砲撃は危険です。レリックと反応して誘爆の危険があります》

「くそ！！、何とかしてこいつを列車の外に出さないと……」

「エリオくん……フィルさん……」

ー新暦７２年２月　時空管理局本局保護施設ー

「確かにすざましい能力を持っているんですが、制御がロクに出来ないんですよ」

「竜召喚だって、この子を守る竜が勝手に暴れ回るだけで、とても

じゃないですけどまともな部隊でなんて働けませんよ。精々単独で殲滅戦に放り込むしか……」

「ああ、もう結構です……ありがとうございました」

「では……」

「いえ、予定通り私が預かります……」

施設を出てみるとあたりは一面雪景色だった。
寒さに震える中わたしは、引き取られた女性にマフラーを掛けてもらった。

「……わたしは今度はどこへ行けば良いんでしょう」

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ……キャロはどこに行って、何がしたい」

「……」

考えたこともなかった。わたしの前にはいつも、わたしが行っちゃ行けない場所があって、わたしがしちゃいけないことがあるだけだったから……

ー現在ー

「うわぁぁぁぁぁ」

俺とエリオは触手に捕まってしまい、身動きが取れないでいた。
さらに列車の屋根を突き破って、二人とも空に放り投げられてしまった。
まずい、エリオの奴、まだ目を覚ましてない。気を失っていて体勢を立て直せないんだ。

「……しかたがない！！」

俺は何とかエリオの腕をつかみ、エリオにサークルプロテクションを掛け、列車にめがけて放り投げ、車両に落とすことが出来たが、こっちが体勢を崩してしまった。

「……キャロ……後は……頼むな……」

「……フィル……さん……」

「フィルさんっっっっ！！」

＊　　＊　　＊　　＊

「ライトニング４、飛び降り！！」

「ちょ、あの二人、あんな高々度でのリカバリーなんて！！」

「いや、あれでええ……」

「そ、そっか！！」

「そう、発生源から離れればＡＭＦは弱くなる。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が！！」

（守りたい……本当の意味で、わたしに優しくしてくれた人を……わたしに笑いかけてくれる人たちを……自分の力で……守りたい！！）

《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

わたしはフィルさんの手を掴み、ケリュケイオンを起動させ、魔力で浮遊しフィルさんの身体を必死に抱きしめた。
フィルさんは気を失っているみたいだったが、大丈夫みたいだ。

「フリード、不自由な思いをさせててごめん。わたしちゃんと制御するから……いくよ！！」

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……」

「竜魂召喚！！」

召喚呪文が終わると、白き巨大な竜が出現し、わたし達をその背に乗せ、羽を羽ばたかせ飛翔した。

「召喚成功、フリードの意識レベル、ブルー！！　完全制御状態です」

「これが……」

「そう、キャロの竜召喚。その力の一端や……」

＊　＊　＊　＊

「あれが……」

「チビ竜の本当の姿……」

「はいです。あれがフリードの本当の姿です。……それと、もしかしたらフィルは、ワザと崖から落ちたかもしれないですね」

「えっ」

「どういう事ですか……」

「推測なんですけど、キャロに自分の力を受け入れさせる為に……」

「フィル……何考えてるのよ、あのバカ！！　自分の命をチップ代わりにするなんて！！！」

「まったく、これじゃあたし達より無鉄砲だよ……」

「誉められた方法じゃないですけど、そのおかげでキャロは、自分の力を受け入れたみたいですね。全く無茶しますね！！……まぁ、あの様子だと救援はいらないみたいですね。さて、レリックを回収するですよ」

＊　＊　＊　＊

「……フィルさん……」

「……う……う……ん」

「フィルさん、気がついたんですね！！」

「キャロ……どうやら……受け入れたようだな……」

「はい……」

今のフィルさんの言葉、何かが引っかかる。

まるでわたしを信じて、わざと落ちたような……

って……まさか！！

「……イチかバチかだったが……うまくいったみたいだな……」

「……バカ……」

「キャロ？」

「フィルさんのバカ！！　どうしてそんな無茶したんですか！！」

キャロは大粒の涙を流しながら、俺に怒っていた。
確かに危険な賭だったが、前の時と少し違う状況になってしまったので、こうするしかなかったのだ。
キャロの心を傷つけただけになってしまったかも知れないな。

「キャロ……ごめん。騙すような形になって……」

「そんなことは良いんです！！　どうして自分の命を！！」

「俺は……自分の大切な人達の為なら、どんなことだってする……それが自分の命を駒にすることだってな」

「でも、もしわたしが制御できなかったら、死んでたかも知れないんですよ！！」

「そうかもしれない……でも俺は信じたいんだ……自分の仲間を……大切な人達を……」

「フィルさん……」

「さて、今は戦闘中だ。エリオに使ったプロテクションもそろそろ限界だ」

エリオに張っていたプロテクションは、ガジェットの攻撃でそろそろ限界が近かった。
エリオはまだ目を覚ましてないので、このままだとまともに食らってしまう。

「エリオくん！！」

「まずいな……仕方がない、こうなったら……」

（おい、エリオ起きろ！！　いつまでも寝てんじゃない！！）

「えっ、フィ、フィルさん……」

俺は念話で直接エリオの頭の中に叫んだ。うまくいくか分からなかったが、意識を取り戻すことは出来たようだ。

「た、確か僕は、ガジェットの触手に捕まれて……」

「説明は後でするが、とりあえず攻撃態勢になれ。そろそろそのプ

ロテクションも限界だからな……」

僕はフィルさんの声でストラーダを構え、攻撃態勢になった。
どうやらフィルさんがこのプロテクションを作ってくれたみたいだ。
そのおかげで気絶している時でも無事だったんだ。

「フィルさん、キャロ……その白竜はもしかして……」

「ああ、フリードだ。キャロが竜魂召喚に成功したんだ。キャロはもう大丈夫だ……」

「エリオくん、フィルさん、本当にごめんなさい。もう大丈夫だから……」

「キャロ……うん！！」

「じゃ、反撃開始と行きますか。キャロはフリードで攻撃を頼む。
俺は射撃魔法で援護する」

「行きます。フリード、ブラストレイ……ファイア！！」

「ブラストシュート連続発射！！」

ブラストレイとブラストシュートは命中こそしたが、ＡＭＦが思ったよりも硬く、ダメージにはならなかった。

「やっぱり……硬い」

「となると、俺の手持ちの魔法だと……これしかないか。プリム！！」

《マスター、さっきも言いましたが、ブラストブレイザーだと誘爆の危険があります。それよりもここは……》

「そうだな……キャロ、ストラーダにブーストを掛けてくれ。その後、エリオは最大戦速で一気にガジェットを貫け。その後はお前に任せるぞ、エリオ！！」

「「はい！！」」

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

《Ｅｎｃｈａｎｔ　Ｕｐ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｄｅ》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ》

「いくよエリオくん！！」

「了解、キャロ！！」

「ツインブースト、スラッシュ＆ストライク！！」

「うおおおおおお」

キャロのブーストを受けたエリオは魔力刃と作り、カートリッジを二発ロードさせ、ストラーダのバーニアを最大戦速にまで上げ、一気にＡＭＦを貫いた。

「一閃必中！！　でりゃぁぁぁぁぁ」

そして、魔力刃を上空に振り上げ、ガジェットを真っ二つし殲滅に成功した。

「やった！！」

「よっしゃ、やったなエリオ！！」

「車両内及び上空のガジェット反応、全て消滅！！」

「スターズＦ、無事レリックを確保！！」

『車両のコントロールも取り戻したですよ。今止めます』

「ほんならちょうどええ。スターズとリインの三人はヘリで回収してもらって、そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしようかな」

『はいです』

「ライトニング達はどうします」

「現場待機、現地の局員に事後処理の引き継ぎ……よろしくな」

レリックを無事回収できた俺たちは、ティア達は中央のラボへ、俺とキャロ達は現場で事後処理の引き継ぎを行った。
引き継ぎが終わった後ヘリに戻ろうとしたが、俺はキャロに引き留められた。

「あの……フィルさん……」

「なんだ、キャロ……」

「お願いですから……もう、あんな無茶しないでくださいね……」

「……それは……」

「フィルさんは、自分が死んでも誰も悲しまないって思っていませんか……そんなことはないんですよ！！」

「少なくてもわたしは嫌です。フィルさんが死んだら……わたしは……わたしは……」

キャロはあの時のことを思い出して涙が抑えられなくなっていた。
キャロの性格を考えたら、こうなるって分かってたのに……

「あっ……」

「キャロ……」

「フィルさん……グス……フィルさん……ヒック……」

俺はキャロが泣きやむまでそっと抱きしめていた。
しばらくして、キャロも落ち着いたみたいなので、そっと離れた。

「あっ……」

わたしはフィルさん抱きしめてもらっている時、安心感というか安らぎを感じていた。
フィルさんが離れてしまった時、恥ずかしさよりも、寂しさみたいなのが感じた。

なんなのかな……この気持ちって……

色々なことがあったが、こうして機動六課の初出撃は無事終わることが出来た。

しかし、このとき俺たちのデータを取られていたことは誰も気付いていなかった。

「……ふむ……」

「追撃戦力を送りますか……」

「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材がそろっている上に……」

「この子達を……生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……」

「さらに……」

「フィル・グリード……か……今のところ目立ってはいないが、何か隠された物が感じる……もしかしたら……プロジェクトFの残滓よりも、貴重なサンプルになるかも知れないな……」

「フ、フハハハ……」

待っていたまえ、時空管理局、機動六課、そしてフィル・グリード……

# 第6話　進展

初出動から数日後、俺たちは訓練がチーム戦から、個別スキル訓練に移行していた。
個人訓練になると、それぞれがメニューが違ってきていて、内容も濃くなってきていた。

ーヴィータ、スバルサイドー

「おら、いくぞ！！　てやぁぁぁぁ！！」

「マッハキャリバー！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

「でやぁぁぁぁ！！」

「くっ！！　うわぁぁぁぁぁぁ」

あたしはプロテクションで、ヴィータ副隊長のハンマーを何とか防いだが、攻撃が重く徐々に押されていた。
そして、第２撃があたしをとらえると、後方の木まで押し戻されていた。

「っっっ、いたた……」

「……なるほど、やっぱりバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「えへ……ありがとうございます」

「あたしやお前のポジション……フロントアタッカーはな。敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりするのが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間を長く取れるし、サポート陣にも頼らないで済む……って、これはなのはにも教わったな」

「はい、ヴィータ副隊長」

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされないように、下半身の踏ん張りとマッハキャリバーの使いこなしを身につけろ」

「頑張ります！！」

《学習します》

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからな……グラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ」

「はい！！」

ーフェイト、エリオ、キャロサイドー

「エリオとキャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避が最重要。例えば……」

フェイトさんは攻撃スフィアが放った二発の弾を、左右のステップでかわし、その後も低速でわかりやすいように見本を見せてくれた。

「まずは動き回って狙わせない。攻撃が当たる位置に長居しない……ねっ……」

「「はい！！」」

「これを低速で確実に出来るようになったら……スピードを上げていく……」

「「あっ！！」」

「こんな感じでね……」

さっきと同じ事だが、今度は攻撃のスピードも上がっていたので、難易度はかなり上がっていた。
しかし、フェイトさんは目でとらえきれないスピードで攻撃をかわしていた。

しかも、いつの間にか僕たちの後に立っていた。

「……す、すごい……」

「今のもゆっくりやれば、誰でも出来るような基礎アクションを、早回しにしているだけなんだよ」

「「は、はい」」

「スピードが上がれば上がるほど、感やセンスに頼って動くのは危ないの……ガードウイングのエリオはどの位置からでも攻撃やサポートを出来るように、フルバックのキャロは素早く動いて、仲間の支援をしてあげられるように、確実で有効な回避アクションの基礎をしっかり覚えていこう」

「「はい！！」」

ーなのは、ティアナ、フィルサイドー

「うん、良いよティアナ、フィル。その調子」

「「はい！！」」

「ティアナ達みたいな精密射撃型は、いちいち避けたり逃げたりし

てたんじゃ、仕事が出来ないからね」

「はっ！！　バレット、レフトＶ、ライトＲＦ」

《Ａｌｌ　Ｌｉｇｈｔ》

ティアが弾丸のセレクトをしていると、別のスフィアがティアの後方から接近していた。

「ちっ！！　プリム、ティアの後方のスフィアを落とす」

《了解！！》

その動きに気付かれ、なのはさんは俺の方にスフィアを多くとばしてきた。

そして、ティアは何とか回避は出来たが、その場を大きく動いてしまっていた。

「ほら、そうやって動いちゃうと後が続かない……いつもフィルの助けが、ある訳じゃないんだよ！！」

「くっ……・」

《Ｂａｒｒｅｔｔ　Ｖ　ａｎｄ　ＲＦ》

なのはさんはあたし達に、それぞれ直射型と不規則型のスフィアをとばしてきた。
今度はあたしもその場で対応して、迎撃用のバレットを放った。
フィルはさっきから、殆どその場を動いていないでスフィアの対応をしていた。避けきれないで喰らいそうなのは、フィールド系の防御で最低限のダメージに押さえていた。

「さすがに、この数はきついな……」

《マスター、本格的なセンターガードの訓練は受けてなかったんですよね……》

「ああ、未来ではティアの動きをまねて、何とか対応していたに過ぎないからな」

《マスターはどこのポジションでも出来ますけど、専門職にはかないませんからね……》

「……そうなんだよな。おまけに現状じゃ、攻撃用のバレットと防御を同時にしていたんじゃ、すぐにガス欠してしまう……」

「フィル、防御をフィールドに頼らない。状況を広域で判断して、それに併せた攻撃で対応する！！」

プリムはクロスミラージュと違って二丁にはならない。
ティアと同じ事をやるなら、自身の対応速度を上げるしかない。

「だったら、これならどうだ！！」

俺は前後から来るスフィアに、最初は前のスフィアを落とし、身体を反転しないで誘導弾を作り、スフィアの動きを読み、それで後のスフィアには対応した。

「そう、視野を広く、出来るだけ最小限の動きで最大の効果を出す……射撃型の神髄は！！」

「あらゆる相手に、的確な弾丸をセレクトし命中させる……」

「判断力と命中精度！！」

《《Ｒｅｌｏａｄ》》

「チームの中央に立って、誰より速く中長距離を制する。それが私やティアナやフィルのポジション、センターガードの役目だよ」

「はい！！」

＊　　＊　　＊　　＊

訓練場の外でヴァイスとシグナムは新人達の訓練の様子を見ていた。

「いやぁ、やってますな……」

「初出動が良い刺激になったようだな……」

「いいっすね、若い連中は……」

「若いだけあって成長も早い。まだしばらくの間は危なっかしいだろうがな」

「……そっすね」

「シグナム姐さんは、参加しないんで……」

「私は古い騎士だからな。スバルやエリオのように、ミッド式と混じった近代ベルカ式の使い手とは勝手も違うし、剣を振るうしかない私は、バックス型のティアナやキャロ、それにフィルに教えられるようなことは何もないしな……」

「まっ、それ以前に私は、人に物を教えるという柄ではない。戦法など、届く距離に近づいて斬れくらいしか言えん……」

「ははは……すげぇ奥義ではあるんっすけど……まぁ、確かに連中には、まだちぃっと早いっすね……」

＊　＊　＊　＊

なのはさんの笛が鳴り、午前の訓練が終了した。

「じゃぁ、午前の訓練終了……」

「「「「「はぁ……はぁ……はぁ……」」」」」

俺たちフォワードは午前の訓練で、くたくたになっていた。
やっぱり個別スキルになると、メニューの内容もきつい。

「はい、お疲れ……個別スキルに入ると、ちょっときついでしょう……」

「……ちょっと……というか……はぁ……はぁ……」

「……はぁ……はぁ……かなり……」

「フェイト隊長は忙しいから、そうしょっちゅうつきあえないけど、あたしは当分お前らにつきあってやるからな」

「あ、ありがとうございます……」

スバルはヴィータ副隊長の申し出に、苦笑いで答えていた。
確かに訓練じゃ容赦ないからな。ヴィータ副隊長は……

「それからライトニングの二人は特になんだけど、スターズの三人もまだまだ身体が成長している最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように……特にフィル。初出動の時みたいな行動はもうしな

いでね……」

「ぐっ……は、はい……なのはさん……」

「そうですよ。フィルさん、もうあんな真似はしないでくださいね……あのときは……フィルさんが死んじゃうって……」

キャロはあの時のことを思い出し、また泣き出しそうになっていた。

「……キ、キャロ、俺が悪かったから、頼むから泣かないでくれ……」

「ふふっ、フィルもキャロには頭が上がらないみたいだね。でも、良い薬になったでしょう。フィルにも悲しんでくれる人はいるんだって事が分かったんだしね」

「フェイトさんまで……本当に勘弁してください。あの後ティアに、さんざん説教されたんですから……」

「当たり前よ！！　あんたの無茶は今に始まった事じゃないけど、あれはやり過ぎよ！！」

「ティア、分かったから……もう勘弁してくれ……」

ー初出動後、フィルの部屋ー

「「フィル！！」」

「な、何だ二人とも、そんな血相を変えて……」

「あのね、あんたあれはどういうつもりよ！！」

「えっ……」

「こないだの事件のことだよ……フィル、何であんな無茶したの。あれじゃあたしのこと言えないよ！！」

「……あのことは済まなかったと思う。でも、キャロの力を受け入れさせるには、あれしか思いつかなかったんだ……」

「だからといって、あんたが死んだら意味がないでしょう！！」

「そうだよ！！」

「……とにかく、二度とあんな無茶はしないでね。今度あんな真似したら、これぶち込むからね」

お願いだから、クロスミラージュをこっちに向けないで下さい。こりゃマジで怒ってるな。

結局ティア達が自分の部屋に戻ったのはそれから一時間後だった。

ー現在ー

「まぁ、フィルのことはここまでにしてお昼にしようか」

「「「「「はい！！」」」」」

俺たちはお昼の為、食堂に向かっていると、ちょうど八神部隊長が外回りに行くところだった。

「あっ、みんなおつかれさんや」

「「「「「はい！！」」」」」

「はやてとリインは外回り……」

「はいです、ヴィータちゃん」

「うん、ちょうナカジマ三佐と話をしてくるよ……スバル、お父さんとお姉ちゃんに何か伝言とかあるか」

「いえ、大丈夫です……」

「じゃぁ、はやてちゃん、リイン、行ってらっしゃい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね……」

「うん」

「行ってきま～す」

八神部隊長とリイン曹長は、隊のジープでナカジマ三佐の１０８部隊の所へ出かけていった。
そして俺たちも、フォワード陣全員で食事を取ることになった。

「……なるほど、スバルさんのお父さんとお姉さんも陸士部隊の方なんですね」

「うん、八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって」

「へぇ……」

「しかし、うちの部隊って関係者つながりが多いわね。確か隊長達も幼なじみ同士だったわよね」

「ああ、なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃、確かその世界で暮らしてたはずだ……」

「確か……管理外世界の９７番でしたっけ……」

「そうだ」

「９７番って、うちの父さんのご先祖様が住んでいた世界なんだって……」

スバルがスパゲティを食べながら話してるが、話す時は全部飲み込んでからにしろ……

「そうなんですか……」

「そういえば、名前の響きとか何となく似ていますよね、なのはさん達と……」

「そっちの世界には、あたしも父さんも行ったことがないし、よくわかんないんだけどね……あれ、エリオはどこ出身だっけ」

「あっ……僕は……本局育ちなんで……」

「「「あっ……」」」

「本局……住宅エリアって事……」

「本局の特別保護施設育ちなんです……8歳までそこにいました……」

（（この……バカ！！））

（……ゴメン…）

ティアと俺はスバルに念話で注意したが、もう少し早く言うべきだった。

エリオのことは以前聞いていたんだから、止めることは出来たはず

なのに……

「あ、あの……気にしないでください……優しくしてもらってましたし……ぜんぜん普通に幸せに暮らしていましたから……」

「そういえば、その頃からフェイトさんはお前の保護責任者だったな……」

「はい、物心を付いた頃から色々お世話になっていて、魔法も僕が勉強を始めてから、時々教えてもらってて……本当にいつも優しくしてくれて……僕は今もフェイトさんに育ってもらってるって思ってます……」

「フェイトさん、子供の頃、家庭のことで、ちょっとだけ寂しい思いをしたことがあるって……」

ー１０８部隊隊舎ー

「今日はどうした……古巣の様子を見にわざわざくるほど、暇な身って訳でもねえだろうに」

「えへへ……愛弟子から師匠へのちょっとしたお願いです」

呼び鈴のブザーが鳴ると、一人の女性がリインと一緒に入ってきた。

「失礼します……」

「ギンガ！！」

「八神二佐、お久しぶりです」

「ギンガ……積もる話もあるだろうが、後にしてくれや」

「す、すみません、八神二佐失礼します……」

「またな、ギンガ。後でゆっくり話そうな……」

「はい」

ギンガとは一旦分かれ、私は本題をナカジマ三佐にお願いすることにした。

「お願いしたいんは、密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで扱っているロストロギアか……」

「それが通る可能性が高いルートがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持ってきていますので、後でお渡ししますが……」

「まっ…うちの捜査部を使ってもらうのはかまわないし、密輸調査

はうちの本業っちゃ本業だ。頼まれねぇことはないんだが……」

「お願いします……」

「八神よ……他の機動部隊や本局捜査部でなくて、わざわざうちにくるのは、何か訳があるのか」

「密輸ルートの捜査自体は彼らにも依頼しているんですが、地上のことはやっぱり、地上部隊の方がよく知っていますから」

「まっ、筋は通っているな……いいだろう。引き受けた」

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ。二人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろう」

「はい、六課の方は、テスタロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと……」

八神部隊長と別れた私は、リイン曹長に今後のことを聞いていた。

「そうですか……フェイトさんが……」

「そうです。六課の捜査主任ですから、一緒に捜査を当たってもらうこともあるかもですよ」

「これは凄く頑張らないといけませんね」

「はい。あっ、そうだ。捜査協力に当たって、六課からギンガにデバイスを一機プレゼントするですよ」

「デバイスを……」

「スバル用に作ったのと同型機で、ちゃんとギンガ用に作り直してるんですよ」

「それは……その……凄く嬉しいんですが……実は……」

そう、私は以前フィルと約束をしていたのだ。
私のデバイスは彼が作ってくれるって……遠い昔の約束なんだけどね……

「というか、このデバイスは、フィルがギンガ用に開発した物なんです……だから他の人には扱えないって言ってました」

「えっ……まさか六課にいるんですか、フィル！！」

「えっ、スバルから聞いてませんでしたか。フィルはスターズのフォワードとして働いているんですよ。最も、シャーリーとデバイス作成も担当してますので、かなり大変なんですけどね……」

「スバルったら、肝心なことを言ってないじゃない……そのことは、後でじっくり聞くとして……」

「それとフィルから伝言があるんです……『いつかの約束……守り

ましたよ……』です」

「！！」

覚えてくれたたんだ。
フィルが士官学校時代にスバル達と４人で話した、他愛のない話だったのに……
それを今まですっと忘れないでいてくれたんだ……

「ギンガ……フィルとの約束が何なのかは分かりませんが、フィルはデバイスを作るのに、かなりの無理をしたんです。訓練と並行でやっているから、中々時間が取れないって言ってましたけど……それでもシャーリーと一緒に必死で完成させたんです」

「だから……受け取ってください……フィル達の思いを……そして、大切に使ってあげてください……」

「ありがとうございます……リイン曹長……そしてフィル……」

私はフィルの思いに涙が止まらなかった。
ありがとう……大切にするね……
だから、フィルもこれ以上無茶はしないでね……

「スバルに続いて、ギンガまでお借りする形になってしもうて、ちょっと心苦しくあるんですが」

「なに、スバルは自分で選んだことだし、ギンガもハラオウンのお嬢と一緒の仕事は嬉しいだろうよ……しかし、まあ気がつけばお前も俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早いな」

「魔導師の階級なんて唯の飾りですよ。中央や本局に行ったら、一般士官からも小娘扱いです」

「……だろうな。っとすまんな、俺まで小娘扱いしてるな」

「ナカジマ三佐は、今も昔も尊敬する上官ですから……」

「……そうかい」

「失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です」

私達の前に、カルタス陸尉からの通信が入り、ナカジマ三佐からカルタス陸尉へ捜査協力についての話をしてくれた。

「おう、八神二佐から外部協力任務の依頼だ。ギンガ連れて会議室でちょいと打ち合わせをしてくれや」

「はっ、了解しました」

「つうこった」

「はい、ありがとうございます」

「打ち合わせがすんだら、メシでも食うか」

「はい、ご一緒します」

ー時空管理局、首都中央地上本部ー

「レリック自体のデータは以上です」

「封印はちゃんとしているんだよね」

「はい、それはもう厳重に。それにしても良く判らないんですよね。レリックの存在意義って？」

「うん……」

「エネルギー結晶体にしては良く判らない機構がたくさんあるし、動力機関にしてもなんか変だし」

「まぁ、すぐに使い方が判るものなら、ロストロギア指定はされないもの。……ん、こっちはガジェットの残骸データ」

「はい、こっちはシグナムさんやヴィータさんが捕獲してくれたものと変わりありませんね。新型も内部機構はそう大差ないし……」

「……ん、ちょっと待って。さっきの？型の残骸の写真。気になるのが写っているの」

「は、はい」

私の気のせいなら良いんだけど、内部機構の中にあったもの。
あれは、まさか……

「これ……宝石？　エネルギー結晶かなんかですかね」

「……ジュエルシード」

「えっ？」

「随分昔に私となのはが探し集めていて、今は局の保管庫に管理されているはずのロストロギア」

「ほぁ、なるほど……って、何でそんなものが！！」

「シャーリー、ここ、この部分を拡大して。何か書かれている」

シャーリーに拡大してもらったプレートには名前見たいのが書かれていた。

「これ、名前ですか？ジェイ……」

「ジェイル・スカリエッティ」

「えっ？」

「……ドクター・ジェイル・スカリエッティ。ロストロギア関連事件を初めとして、数え切れない位の罪状で、超広域指名手配されている一級捜索指定の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者……」

「ちょっと事情があってね。この男の事は何年か前からずっと追っているんだ」

「何でそんな犯罪者が、こんな分かりやすく自分の手がかりを……」

「本人なら挑発、他人だとしたらミスリードねらい。どっちにしても、私やなのはがこの事件に関わっているって知っているんだ」

だけど、もし本人ならロストロギア技術を使って、ガジェットを制作出来るのも納得出来るし、レリックを集めているのも想像出来る。

「シャーリー、急いでこのデータをまとめて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて、緊急会議をしたいんだ」

「はい、今すぐに……」

ーはやてサイドー

「ん、了解や。すぐ戻るから対策会議しよう。丁度捜査の手も借りれた所やしな」

ナカジマ三佐とギンガと夕食を食べていた所に、フェイトちゃんからの通信が入った。
フェイトちゃんからの通信は、驚くことがあった。
まさか、そんな大物が関わっているなんてな。

「何か進展ですか？」

「うん、事件の犯人の手がかりがちょっとな……」

「と言う訳で、すみませんナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます」

「おう」

私はせめてここの勘定を払おうと伝票を取ろうとしたら、先にナカジマ三佐が奪い取った。

「そんな」

「さっさと行ってやんな。部下が待ってるんだろ」

「はい、ギンガはまた私かフェイトちゃんから連絡するな」

「はい、お待ちしています」

ーフェイト・シャーリーサイドー

データをまとめた私達は車で急いで六課に向かっていた。

「ドクター・スカリエッティでしたっけ。あの広域指名手配犯」

「うん」

「その人がレリックを集めている理由って例えばどんな？」

「あの男はドクターの通り名の通り、生命操作とか生体改造に関して異常な情熱と技術を持っている。そんな男が、ガジェットみたいな道具を大量に作り出してまで探し求めるからには……」

ージェイル・スカリエッティサイドー

「ゼストとルーテシア、活動を再開しました」

「ふむ。クライアントからの指示は？」

「彼らに無断での支援や協力は極力控えるようにと、メッセージが届いています」

「自立行動を開始したガジェットドローンは、私の完全制御下と言う訳じゃないんでね。勝手にレリックの元に集まってしまうのは、大目に見て欲しいね」

「お伝えしておきます」

「彼らが動くならゆっくり観察させてもらうよ。彼らもまた貴重で大切なレリックウエポンの実験体なんだからね」

さて、君たちはどう動くかね。機動六課……

ー機動六課、訓練場ー

「はい、夜の訓練お終い」

「「「「「ありがとうございました」」」」」

「「「「「お疲れ様でした」」」」」

「は～い」

「ちゃんと寝ろよ」

フォワードの訓練が終わった後も、なのはは今日の訓練のデータをまとめていた。
こいつ本当に連中に付きっきりだな。

「しかし本当に朝から晩まで……疲れんだろ」

「わたしは機動六課の戦技教官だもの。当然だよヴィータちゃん」

「後あれだ。なんつうか。もっと厳しくしないで良いのか。あたしらが昔受けた新任教育なんて、歩き方から挨拶まで、もう何でもかんでも厳しく言われてたんじゃんか」

「戦技教導隊のコーチングって、どこもこんな感じだよ。細かいことで叱ったり、怒鳴りつけている暇があったら、模擬戦できっちり打ちのめしてあげる方が、教えられる側は学ぶことが多いって、教導隊では良く言われているしね」

「おっかねえな……おい……」

「わたし達がするのは真っ新な新人を教えて育てる教育じゃなくて、強くなりたいって意志を持った魔導師達に、今よりハイレベルの戦闘技術を教えて導いていく戦技教導だから……」

「ふぅ、何にしても大変だよな……教官ってのも」

「でも、ヴィータちゃんもちゃんと出来ているよ。立派立派」

「撫でるな！！」

隊舎に戻る途中、なのははレイジングハートに頼んで、データを送ってもらっていた。

連中はどんだけ幸せか気付くまで、結構時間が掛かるだろうな。

自分勝手に戦っている時も、何時だってなのはに護られてる幸せに……

あたしはスターズの副隊長だからな。お前のことはあたしが護ってやる。

# 第7話　コンタクト

数日後、機動六課のメンバーは、第９７番管理外世界『地球』でロストロギアがあるとの連絡があり、メンバーの殆どは地球へ向かったが、俺はミッドに残っていた。理由も事前にマリーさんに言って、裏を合わせてもらったので問題なく通った。なぜ残ったかというと、あることを防ぐためにこっちへ残ったのだ。

ユーノ・スクライア司書長暗殺を防ぐために……

未来ではスクライア司書長は、機動六課のメンバーが地球へ行っている間に、戦闘機人のドゥーエに殺されたのだ。
司書長は内密にスカリエッティのことやレリックのことを調べていたのだが、それが向こうに知れてしまい、危険視され、殺されたのだ。
実際、無限書庫跡から見つかったデータは、後にゆりかごに突撃をかける時にずいぶんと役だったのだ。
もしかしたら司書長は、自分が殺されることが分かっていたのかも知れない。
それでも、なのはさん達のために……

なのはさん達も司書長が死んだ時は、一時期は悲しみでどうしようもない状態だった。

しばらくすると立ち直ったが、なのはさんは表面上は立ち直っていたが、一人になったりすると泣いている姿が見られた。
ヴィヴィオを引き取ったのも、一人でいるのが辛かったからなのかも知れない。

こんな悲しみはもう二度と繰り返したくない。
だから、俺は例えドゥーエを殺すことになっても止める。

―無限書庫、司書長室―

「司書長、本局から緊急の資料の請求がありました」

「それは、クロノからじゃないだろうね……」

「いいえ、提督からのものは昨日終わらせましたので……当分はないはずです……」

「そう、それじゃみんなはもう帰っていいよ。後は僕がやって置くから……」

「でも、それじゃ司書長が……」

「大丈夫。これくらいなら数時間で終わるよ。それよりクロノの依頼がない時に休んでおかないと……」

「た、確かに……」

「という訳でみんなは解散ね」

「申し訳ありません。それじゃ失礼します……」

司書のみんなは、副司書長がその旨を伝えるとみんな喜んで帰っていった。

絶対ここの環境って劣悪だよな……。

今度、上層部に文句を言ってやる。

「失礼します」

「あっ、どうしたんだいドゥーエ……」

「いえ、ちょっと忘れ物をしまして……」

彼女はドゥーエ。僕の秘書をやっている。

半年前から地上本部から送られたんだが、良くやってくれている。

「忘れ物ってなんだい」

「それはですね……」

私はドクターの命令で、このユーノ・スクライアの監視をずっと続けてきた。

なにも無ければ放置だったのだが、最近になって私達の廻りのことを調べ始めている。
このままだと最大の障害になるかも知れない。
だから私は今日司書達を追い払ってある計画を実行することにした。
そう、暗殺を……

『忘れ物ってのは、司書長の命かい。戦闘機人さんよ……』

「えっ……」

「だ、誰！！」

「ここだよ……」

「「なっ！！」」

いつの間にか私の背後に一人の男が立っていた。
馬鹿な、さっきまで何の気配もなかったはずなのに……
スクライアが驚いている所を見ると、彼も知らない人物のようだ。

「何者なの……あんた。私の正体も気付いているようだし……」

「フィル・グリード……管理局の二等陸士さ……」

「クッ！！」

こいつが何者かは分からないけど、任務の障害になる奴という事は分かる。
少なくても私がここに入る前まではこいつはいなかった。
だとしたら、何らかの方法で後から入ったことになる。
私は距離を取り、ＩＳを起動させ反撃にうつった。

「はぁぁぁぁ！！」

「ちぃぃ……ピアッシングネイルか……プリム……モード２だ」

《了解、セイバーモード》

俺はプリムをセイバーモードに切り替え、ドゥーエのピアッシングネイルを受け止めた。

「無駄だ……お前のＩＳ【ライアーズマスク】は変身とかは最上級だが、運動能力自体が上がる訳じゃない」

「ちぃぃ……」

俺はドゥーエの攻撃を余裕でかわしているように見せているが、実際は均衡状態なのだ。
元々ドゥーエは肉体能力は、そんなに高くないから何とかなっている。
でもちょっとしたことで均衡は崩れる……短期決戦で決めるしか

ない。

「だったら、これならどう……」

突如地面からチェーンが現れ、俺の体に巻き付いた。

「なんだこれは!!　くっ、身動きがとれん!!」

「どう、スクライア用に作られた特製バインドは、魔力も吸い取られるでしょう」

俺の体にチェーンバインドに似たバインドがかけられたが、術式はもっと複雑で簡単には解除出来ない。

「ちくしょう……」

「そうやっているうちに私は、任務を実行させてもらうわ……」

しまった。司書長もさっき、同じものがかけられてしまったのか……

まずい……このままじゃスクライア司書長は殺されてしまう。

司書長は総合Ａランクだが、戦闘技術は殆どない……

このままじゃ……このままじゃ……

冗談じゃない……

みんなの……

なのはさんの……

あの乾いた笑顔を見るのは……もう二度とごめんだ……

「……ふざけるな……」

＊　　＊　　＊　　＊

「ふざけるんじゃねぇぇぇぇぇ！！」

「えっ……なにこの魔力は、さっきとは比べものにならない」

「……プリム……今こそ解除する……いいな……」

《……ええ、出し惜しみしている場合じゃありませんものね……でも気をつけてください。マスターと与えられた魔力が融合していないので、無理矢理力を上げてるだけです。しかも15分が限度です……》

「それだけあれば十分だ。いくぜ……リミット……リリース！！」

「うおりやぁぁぁぁぁ！！」

バインドは木っ端みじんに砕け、俺はドゥーエを殺気を込めて睨み付けた。

リミットを解除した以上、もう勝手にはさせない。

覚悟しろよ、ドゥーエ。

「……な、何なのこいつは……こんな事聞いてないわ……」

「……ストラグルバインド……」

俺はドゥーエにストラグルバインドを掛けＩＳの機能を停止させ、変身を解除させた。

通常のストラグルバインドじゃ効果はないが、これは俺が戦闘機人用に組み替えたものだ。

「クッ！！……し、しまった……」

「これですむと思うなよ……モードチェンジ、ガンモード……カートリッジロード！！」

俺はプリムをガンモードに戻し、カートリッジをロードさせ、ドゥーエに銃口を向けた。
設定は……殺傷設定だ……

「ブラスト……」

《マスター！！》

「！！」

《駄目です！！　彼女たちは操られているだけです！！　クアットロのように自分の意思でやっているんじゃないんです！！》

そうだ、何をやってるんだ……俺は殺しをしに来たんじゃない……止めるために来たんだ。
俺はソニックムーヴでドゥーエの後ろに回り込み、手刀で意識を刈り取った。

その後スクライア司書長のバインドを解除し、ドゥーエに近づくと、戦っている時から感じていた違和感を調べた。

「プリム、こいつを全身スキャンしてくれ……」

《了解です。スキャニング開始しますね……》

《……こ、これは!!　マスター、この戦闘機人からあるパーツが関知されました。未来でも使われていた……あれです……》

「……【ブレイン・コントロール・チップ】、通称ＢＣＣか」

「どういう事……未来って……それに君は……」

「それは……後でお話しします……プリム、あれは確か……」

《はい、人の脳に直接念波を送り人を自在に操るもので、ギンガさんや戦闘機人達に組み込まれていたものです。そしてこれを作ったのは……》

「クアットロ……だな……」

《……はい……》

クアットロ……未来でもここでもゲスなやり方は変わらないんだな……

だが、これならドゥーエを殺さないで済むかも知れない……

「プリム、これを壊す方法は……」

《はい、この波長と正反対の魔力をぶつければ機能は停止します。但し……》

「ただし……何だ……」

《今のマスターはリミットを無理矢理解放した反動で、身体にかなりのダメージがあります。この方法はチップが体内から完全に出るまで魔力を送り続けなくてはなりません。その間マスターが正反対の魔力を放ち続けられるかどうか……》

かつてなのはさんが、ヴィヴィオを元に戻した時と同じか……
レリックを外に出さないといけないのと同じで、こいつも外に出さないとまた動き出してしまうって訳か

「……やるしかないんだ……いくぜプリム、カートリッジロード！！」

俺はプリムのカートリッジをロードさせ、自分の魔力を底上げし、正反対の波長の魔力を作り上げた。
これはかなりつらいな……

「くっ……やっぱり制御するのが難しいな……いくぜ！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

「頑張るんだドゥーエ」

俺はドゥーエの頭に魔力球を近づけ、魔力エネルギーを送り続けた。
あまりの痛みにドゥーエの意識が戻り、発狂していたがバインドをかけていたので暴れることはなかった。
これで元に戻ってくれればいいのだが……

魔力を送り続けていると、チップが体外に出てきて、魔力に耐えきれなくなり粉々に砕けた。
チップが砕けたと同時に再び意識を失ってしまったが、しばらくして……

「……う……んっ……私は……」

「気が付いたようだな……」

「私は、今まで……」

「それをこれから説明してやる……」

俺はドゥーエに今までのことを説明した。
自分はクアットロに操られていたこと。
それによってスクライア司書長を暗殺しようとしたこと。
そして、推測だが残りのナンバーズにも、同じものが埋め込まれている可能性があること。

「そ、それじゃ……ウーノ姉さんや妹たちも……」

「十中八九間違いないだろうな……」

「何なの……それじゃ……私はいいように操られてきたって事なの……そんな……」

「ドゥーエ……」

「スクライア司書長……」

「分かっているよ……僕からはこれ以上いうつもりはないよ……」

「すみません……感謝します……」

スクライア司書長は自分が暗殺されそうだったのに、ドゥーエを許してくれた。
やっぱり伊達にその若さで、無限書庫の司書長はしていないな。

「そのかわり、君の事を全て聞かせてもらうよ……それでいいかい……」

「はい、元々お話しするつもりでしたので、それはかまいません。後、ハラオウン提督にも出来れば……」

「クロノには僕から連絡しておくよ。それとカリムにもね……」

「カリム・グラシアさんにもですか……」

「そうだけど、何か都合が悪い？」

「そう言うわけではないんですが……」

グラシアさんには関係ないのかも知れないけど、ヴィヴィオが生み出す切欠になったのは１０年前に、聖王協会から盗み出された聖骸布なんだよな。
まぁ、あの人を恨んでもしょうがないんだけどね。

「分かりました、全てお話ししましょう。えっとこの部屋は外部からの傍受対策は……」

「伊達に最機密を扱う所じゃないよ。そういった対策は万全だよ……」

「それじゃ今から三時間後ここで対談しましょう。時間はそれでいいですか」

「時間はそれで大丈夫だよ。二人とも今日の夜に会う予定になっていたからね……」

その後ドゥーエは逮捕はせず、あえてもう一度、スクライア司書長の秘書として過ごしてもらうことにした。
これは、スカリエッティ側を騙す意味もあるが、ドゥーエの瞳を見て、こいつは大丈夫だと判断したからこその処置でもあった。

そして三時間後、司書長室に俺とスクライア司書長、ハラオウン提督とカリム・グラシアさんに来てもらった。

「お忙しい所申し訳ありません。自分は機動六課所属フィル・グリード二等陸士であります」

「ああ、ユーノから話は聞いているよ。何でも戦闘機人の一人を倒したそうだね……」

「はい、その辺の話もお話し致しますので、今は……」

「そうだったな……」

少しして、カリム・グラシアさんも聖王教会からやってきて会談が始まった。

「まず、私のことからお話ししなければなりませんが……信じられないと思いますが……私は……この世界の人間ではありません」

「それは……どういうことなんだい……」

「はい、それは……」

俺は全員に今までのことを話した。
未来でのことを……ジェイル・スカリエッティのこと、ゆりかごのこと、そして管理局が負けて、その後のこと。
そして過去を変えるために、未来から戻ってきたことも。
話し終わった後は、マリーさんのときと同じく全員が驚きを隠せな

かった。

「じゃ、あなたは全てを知っているんですね……これからのことを……」

「はい……グラシアさん。あなたのレアスキルのことは詳しくは知りませんが、予言の大体の内容は知っています。『旧い結晶と無限の欲望が交わる地　、死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる』でしたね……というよりも体験してきたんですから、当然ですけれどね……」

「そうね……」

「信じがたい話だが……これを見せられてはな……」

クロノ提督のいうのはプリムの記録データのことだ。
これは今までの事を残してあるだけでなく、映像データとして残っているのもあったからだ。
それをみて納得してくれたらしい……
本当は見せたくはなかったんだがな……ティア達の死ぬ所なんてな……

「じゃ……きみの世界では、なのはも……」

「……率直に申し上げます。スクライア司書長……ゆりかご決戦で、機動六課のメンバーで生き残ったのは、私とスバル・ナカジ

マとティアナ・ランスターの3人だけでした」

「……そう……」

「……皆さんに話したのは……もうこんな悲劇を繰り返したくないからです……お願いです。皆さんの力を貸して下さい！！」

俺は頭を下げてお願いするしかなかった。こんな話信じてくれないのが当たり前だ。
それでも一人で出来ることはたがが知れている……
今回だって、たまたまうまくいったに過ぎない。もう限界が来ているんだ……

「頭を上げてよ……フィル」

「スクライア司書長」

「君が嘘やデタラメを言ってないことは目を見れば分かるよ……それに僕を命がけで助けてくれたんだしね……」

「ああ、未来がどうこうでなく、君はユーノを命を懸けて守ってくれた。それは芝居なんかで出来る事じゃない」

「ハラオウン提督」

「私もこれからのことを知っているとかでなく、あなたの心は信じられるわ。だから私達はあなたを全面的にバックアップします」

「グラシアさん」

「皆さん……ありがとうございます」

＊　＊　＊　＊

「それで、これからどうするんだい……」

「はい……皆さんにはそれぞれ、お願いしたいことがあります……特にハラオウン提督には、かなり無茶なことをお願いすることになりますが……」

「まぁ……そうなると思ってたよ……で、何をして欲しいんだい……」

「……アースラを確保して欲しいんです……あれが最後の戦いでキーになると思いますので……」

「それはかまわないが……別にアースラでなくても、もっと強力な戦艦だってあるのに……」

「確かにクラウディアを始め、もっと強力な戦艦はあります。ましてやアースラは、廃艦寸前なものですしね……」

「それだったら、なぜ……」

「あんまりこちらの動きを見せないようにすることと、アースラの方がミッドで戦う場合、動きやすいんです」

ＸＶ級戦艦は火力はあるが、小回りがきかないので機動六課のメンツで使うには、あのくらいで丁度いい。それと強力な戦艦を表沙汰で用意して、あまりこっちの動きを知られたくない。
それにアルカンシェルは積んだままなので改修すれば、まだまだ戦えるしな……

「あと、ＸＶ級をこちらに廻してもらうより、そのほかの補給物資を充実させたいんです……例えば……」

他にも輸送用のヘリじゃなく、戦闘用のを一機でもいいので回して欲しいし、前から考えていたアースラの大改造をすれば少しは優位に戦える。

「……なるほどな……それならＸＶ級を回すより安くすむし、効果的だ……しかし、良く戦えたよな。輸送用のヘリで……」

「ええ、未来でスバル達が生き残ったのも、正直奇跡ですよ……」

「この件に関してはまかせてくれ……全部で何時までに間に合わせればいい……」

「今が5月ですから……遅くても8月末までにはアースラの改修も終わらせないと……改修のプランはマリーさんと俺が中心となってやります」

「分かった、欲しいものがあったら言ってくれ……あと僕のことはクロノでいい……」

「ありがとうございます、クロノ提督……」

クロノ提督の方はこれで充分だ。
後はスクライア司書長には聖王のことと、ゆりかごのことを調べてもらわないとな。

「それでスクライア司書長には……」

「分かってるよ……ゆりかごのことと、聖王のことについてだね……」

「はい、ゆりかごの能力は一部しか知りません。もしかすると無限書庫に、弱点が書かれたものがあるかも知れませんので……現にスカリエッティも、それを恐れていたんですから……」

「任せてよ……なのは達は絶対死なせないから……僕に出来ることは全力でサポートするよ……それと僕もユーノでいいよ」

「はい、ユーノ司書長」

「一つ聞いてもいいかしら……」

「はい、グラシアさん……何でしょうか……」

「それだけ分かっているのなら、スカリエッティの基地に乗り込むなりすればいいのでは……」

それは真っ先に考えたのだが、調べてみたら基地の位置が前回と違うのだ。
これでは動きようがないし、相手にこちらの情報を与えてしまっては終わりだ。
それに相手はあのスカリエッティとクアットロだ。二重三重の策は用意してあると思う。

「確かにそれは考えましたが、調べてみましたら基地の位置が以前とは違うのです……」

「それですと、かえってこちらから動くのは危険ですね……」

「はい……残念ながら……」

「ごめんなさい……すでにやれることはやっていたんですね……」

「ですから、グラシアさんには教会騎士団の戦力アップを図って欲しいんです。正直、戦闘機人に対抗出来るのが、シスターシャッハだけというのは心持ちません……」

「わかりました……それと私もカリムでかまいませんよ」

「えっ……ですが……」

「あら、お二人は名前で呼んで、私は駄目なんですか……」

「そうじゃないんですが……女性を名前で呼ぶのは慣れて無くて……」

「でも、機動六課の皆さんは名前で呼んでますよね……それとも私は仲間ではありませんか……」

「……分かりました……俺の負けです……カ…カリム……さん……」

「少しずつ慣れて下さればいいですよ、フィルさん……」

カリムさんは笑顔で言っているが、どうにも年上の女性には頭が上がらないんだよな。
なのはさんといい、フェイトさんといい……

「あと、申し訳ありませんが、機動六課にはまだ内密にしてもらえませんか……」

「……なるほどな」

「どういう事ですか、クロノ提督」

「いくつか理由があるが、フォワード陣が君に頼りすぎないようにすることが主な目的かな」

「それもあるんですけど、何よりまだ、みんなに言う勇気がないんです……」

「分かった……こちらからは何も言わないよ」

「すみません……」

それからしばらくして会談は終了となり、俺はマリーさんの所へ向かった。

「というわけで、機動六課の後見人の方々には全てを話しました」

「これでアースラは確保出来るね……でも、この改修プランは殆ど作り直しに近いよ……」

アースラの改修プランは
まず前後左右に対空砲撃用の砲門の追加。これは前にしかない砲門では対応が仕切れないからだ。
エンジンの強化は速度アップがねらいで
内部コンピュータの独立化は本局と地上本部が機能停止しても戦えるようにするためだ
装甲板の総取替は劣化してしまっている部分を直す意味がある。
だが、何よりも必要なのは……

「……アルカンシェルの出力アップ……これが一番きついかな……正直、予定の期間で間に合うかどうかよ……」

「でもやるしかないんです……最悪アースラだけで、戦うかも知れない状況も、充分考えられるので……」

「そうね……少しずつ変わってきているしね……スクライア司書長が殺されなかったことが、どう変わってくるか……」

「そうですね……」

「あっ、フィル君。ロードサンダーは置いてってね。改造するから……」

「……えっ……今……何と……」

「だから改造するって言ったのよ」

「ちょっと待って下さい！！　どうやって六課まで帰ればいいんですか」

「大丈夫、代わりのバイクは用意してあるよ。それに、この改造は必要になってくると思うの。これを見て……」

マリーさんはスクリーンにロードサンダーの改造プランを映し出した。

そこにはＡＭＦ下での行動に対応するための、さまざまな強化プランが記されていた。

なんか物騒な大砲が付いてるのは気になる。
でもこのプランは、どこかで見たことがあるが……

「こ、これってもしかして……」

「そう、プリムの中にあった改造プランをもとに、私が作ったものよ。基本は出来ていたけど、変形機構と転送システムが未完成だったから、私が考えてみたの」

ロードサンダーの改造プランはある程度はあったのだが、変形システムと部品転送システムが、どうしても駄目だったので諦めていた。

「変形機構のプログラムは、プリムかクロスミラージュのＡＩを使うことで解決したわ。作動させる時にデバイスを使えばシステムは動くわ。変形後のオプションは、六課のコンピュータかアースラのを使えば転送可能になるよ」

「この手があったか……」

「でも、ロードサンダー本体もＡＩを組み込む必要があるので、約一月ぐらい掛かるの……」

「分かりました。ロードサンダーのこと、よろしくお願いします……」

「任せてね……君の大切な相棒は完璧に仕上げるから……」

「それじゃ、そろそろ六課に戻りますね……みんな帰って来る頃ですし……」

「フィル君！！」

「戦いが終わったら……メカニックマイスターの資格、本気で考えてみない……」

「……そうですね……平和になったら……色々と考えてもいいかも知れませんね……」

「その時は、私がみっちりと仕込んであげるから！！」

「ははっ……お手柔らかにお願いします……」

本当に平和になり、そんなことを考えられるようになったらいいな……

何としてもこの戦い勝たないとな。

# 第8話　ホテル・アグスタ

ユーノ司書長暗殺未遂事件から数日後、機動六課はホテルアグスタで行われる、オークションの警備に当たることになった。

この時なんだよな……ティアが思い詰めてしまう切欠になるのって……

地球から戻ってきた時も、どことなくおかしかったからな。

ホテルの警備前にスカリエッティのことを、ここではじめて俺たちに話されるが、いくらなんでも、もう少し早く言って欲しい。
実際戦っているのは俺たちなんだし、その辺は言ってくれてもいいと思う。
少し違う話になるが、訓練も基礎が大事なのは分かるけど、なにも目標がないのと、明確な目標を持って行うのでは意味が違ってくる。

このアグスタのことだって……もうフォワード達と隊長陣がもう少しお互いに話していれば、あんな事にはならなかったはずだ。

―ホテル・アグスタ裏口―

俺たちはホテルの外でそれぞれ警備をしている。
ただ俺とティアはそれぞれ別の位置に配属になっている。
センターガードが同じ所に二人いてもしょうがないのは分かっているが……
そんな中ティアから念話が入って来た。

（そっちはどう……）

（特に今のところは変わりなしかな……どうしたんだいきなり念話なんて……）

（ちょっとね……ねぇ、フィル。あんたは八神部隊長のこととか、結構知っているわよね……）

（まぁ……それなりかな……でもティアが知っている程度のことだ。俺たちの階級じゃレアスキルの機密事項は、そんなに知ることは出来ないからな……）

（そう……なんだけどね……）

（ティア……もし、何か悩んでいるならいってくれよ……一人で抱え込むなよ……）

（そんなんじゃないから……大丈夫よ……）

そう言ってティアからの念話は切られた。
やっぱり抱え込んでいるな……でも、今のティアには言葉は逆効果だ。
事の成り行きは流れに任せるしかない。

ティア……無茶はするなよ……お前は決して凡人なんかじゃないんだからな……

＊　　＊　　＊　　＊

あたしはフィルとの念話を切り少し考え事をしていた。
この六課の戦力は、はっきり言って無敵を通り越して異常だ。
八神部隊長がどんな裏技を使ったか知らないけど、隊長格全員がオーバーS。副隊長でもニアSランク。
他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。
あの歳でもうBランクを取っているエリオと、レアで強力な竜召喚師のキャロはフェイトさんの秘蔵っ子。
危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

そして……同じセンターガードだけど、あたしよりもうまく立ち回り、デバイスマイスター並みの知識のあるフィル。

六課で凡人なのは……あたしだけか……

だけどそんなのは関係ない。あたしは立ち止まる訳にはいかないんだ……

そんな時、山中からガジェットがホテルに向かって進行してきていた。

「クラールヴィントのセンサーに反応。シャーリー！！」

「はい、来ましたよ。ガジェットドローン、陸戦？型。機影３０……３５……」

「陸戦？型……２……３……４……」

シグナム副隊長とザフィーラといっしょに警備をしていたが、ロングアーチからの連絡を受け、僕達は副隊長の指示に従うことになった。

「エリオ、キャロお前達は上に上がれ。ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインの設置をする」

「「はい！！」」

「ザフィーラは私と迎撃にでるぞ」

「心得た」

「えっ、ザフィーラって喋れたの……」

「びっくり……」

「守りの要はお前達だ……頼むぞ……」

「う、うん……」

「頑張る……」

＊　　＊　　＊　　＊

「前線各員へ、状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います」

「スターズ3、了解！！」

「ライトニングF、了解！！」

「スターズ4……了解！！」

「スターズ5、了解！！　シャマル先生、状況の確認をしたいんで、前線のモニターをこっちに回してくれませんか」

「シャマル先生、こっちも前線のモニターをもらえませんか」

俺とティアはシャマル先生に、前線のモニターを回してもらうようにお願いした。
とにかく状況を知ることが先決だ。

「了解、クロスミラージュとプリムに直結するわ……クラールヴィント、お願いね」

《Ｙｅｓ》

（シグナム……ヴィータちゃん……）

私は建物内で待機している二人に呼びかけ、前線の情報を送った。

「おう、スターズ２とライトニング２……出るぞ、シャーリー！！」

「了解、グラーフアイゼン、レヴァンティン、レベル２起動、承認……」

「グラーフアイゼン！！」

「レヴァンティン！！」

《《Ａｃｔｉｖａｔｉｎｇ》》

あたしとシグナムは騎士甲冑を身につけ、ガジェット共の殲滅に向かった。
新人達のとこにはいかせはしねえ。あたしが全滅させてやる！！

＊　　＊　　＊　　＊

「紫電……一閃」

山岳地帯に着いた私は、とりあえず？型を一機殲滅したが、ザフィーラやヴィータはどうなったか……

「ここは通さん……てやぁぁぁぁぁ！！」

俺は鋼の頚を使い？型のガジェットの粗方を殲滅した。
これである程度は片が付いたはずだが、まだ増援が来るかも知れないな……

「副隊長達とザフィーラ、すごい……」

「これで……能力リミッター付き……」

「ああ……」

俺たち3人は一旦合流して前線の様子をモニターで確認していた。
分かってはいたが、相変わらずすごいな。副隊長達……

ティアの奴、やっぱり気にしているみたいだな……
落ち着けよ……焦ったら自分の力は発揮出来ないぞ……

ーホテル前、山道ー

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア……」

「……ごきげんよう」

「何の用だ……」

「冷たいね……近くで状況を見ているんだろ。あのホテルにレリックはなさそうなんだけど、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少しは協力してはくれないかね……君たちなら、実に造作もないことのはずなんだが……」

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ……」

「ルーテシアはどうだい。頼まれてくれないかな……」

「……いいよ」

「優しいな……今度ぜひ、お茶とお菓子でも奢らせてくれ。君のデバイス『アスクレピオス』に、私が欲しい物のデータを送ったよ」

「……うん、じゃ……ごきげんようドクター……」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ」

ドクターとの通信が終わった後、私は召喚を行うためコートを脱いだ。

「いいのか」

「うん、ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのこと、そんなに嫌いじゃないから……」

「……そうか」

「吾は乞う……」

＊　＊　＊　＊

「どうしたのキャロ……」

「近くで誰かが、召喚を使っている……」

わたしはケリュケイオンの反応で、誰かが召喚を使っているのを感じた。
しかも強力な召喚魔法。

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応って……」

「お、大きい……」

ロングアーチのセンサーでも魔力反応をキャッチしていた。
これはかなりの大きさだ。

「小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚インゼクトツーク」

私はアスクレピオスに魔力を注ぎ、召喚呪文を行いインゼクトツークを呼び、ミッションを行うことにした。

「ミッション……オブジェクトコントロール……いってらっしゃい

……気を付けてね……」

召喚虫達は、ガジェットドローンに取り憑き、ホテルの方へ飛んで進行を再開していた。

取り憑いたガジェットは運動能力も上がり、副隊長陣も少し苦戦をし始めた。
単体で行動していたが、私はヴィータと一旦合流することにした。

「こいつら急に動きが良くなったぞ」

「自動機械の動きじゃないな」

「有人操作に切り替わった……もしかしてさっきの召喚師の魔法。シグナム、ヴィータちゃん……」

「分かっている……ヴィータ、ラインまで下がれ。召喚師がいるなら、新人達のもとに回りこまれるかもしれない」

「わ、わかった……」

「ザフィーラ……シグナムと合流して……」

「心得た」

―スカリエッティ、基地内―

「やはりすばらしい。彼女の能力は……」

「極少の召喚虫による無機物自動操作、シュテーレ・ゲネゲン……」

「それも彼女の能力の一端に過ぎないがね……」

―ホテル前、山道―

「ブンターヴィヒト……オブジェクト１１機、転送移動」

私はガジェットをホテル前に転送し、おとりをしてもらうことにした。
その間にホテルの中にあるドクターの頼まれたものを探した。

「ドクターの捜し物も見つけた。ガリューちょっとお願いしていい。じゃまな子はインゼクト達が引きつけてくれる。荷物を確保して……」

私はガリューをホテルにとばし、捜し物を回収することにした。

―ホテル前―

「遠隔召喚……来ます」

キャロの声と同時に、召喚魔法陣が四つ現れガジェットが数機出て来た。
こいつらは今までのガジェット違うはずだ。訓練と同じと思っていたらやられる。

「あれって、召喚魔法陣……」

「召喚ってこんな事も出来るの……」

「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんだ。エリオ、スバル気を抜くなよ」

「何でもいいわ。迎撃行くわよ」

「「「おう!!」」」

「まて、少し冷静になれ。闇雲に突っ込んでも倒せないぞ」

「フィルは黙ってて。今はあたしの指揮に従って!!」

(今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、あたしはそれでいつもやってきた)

ティアはバレットを撃っているが、あれじゃ闇雲に撃っているだけで意味がない。
訓練でもあんなミスはしなかったのに、完全に頭に血がのぼっちまっている。

「防衛ライン、もう少し持ちこたえていてね。ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから……」

「シャマル先生、守ってばかりじゃ行き詰まります。ちゃんと敵機を落とします」

「ちょ、ティアナ大丈夫。無茶しないで……」

「大丈夫です、シャーリーさん。毎日朝晩練習してきているんですから」

「エリオ、センターに下がって。あたしとスバルのツートップで行く」

「は、はい」

「スバル、クロスシフトA。いくわよ！！」

「おう！！」

「やめろ、今の状況でクロスシフトは危険だ。戻れ！！」

俺の制止の声も聞かず、スバルとティアは先行しクロスシフトの体勢になった。
これじゃ前の時と同じだ。スバルへの誤射が起きてしまう。
しかも今度は、ヴィータ副隊長が間に合うかは分からない。

「エリオ、済まないが、キャロといっしょにその場を守ってくれ。俺はあの二人を止める。このままじゃ取り返しの付かないことが起きる！！」

「えっ、それって何なんですか……」

「ティアの奴、冷静さを欠いてしまっている。このままじゃ、味方のスバルを打ち落とすことも考えられる。その前に止める！！」

俺はエリオ達に防衛ラインの死守を任せ、ティア達のもとに向かった。
間に合ってくれよ……

（証明するんだ……特別な魔力や才能が無くたって……一流の隊長達や部隊だって……どんな危険な戦いだって……）

「あたしは……ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって……」

スバルがウイングロードでガジェットを引きつけてくれている。

あたしはクロスミラージュのカートリッジを四発ロードし13個の誘導弾を作った。
訓練でもやったことがないけど、やってみせる。

（まずいぞ、ティアの奴、限界以上の能力を使ってやがる。あの数じゃ今のティアじゃ制御はできない。シャーリーさんの注意も聞いてないみたいだし、このままじゃ……）

俺は何とか追いついたが、すでに発射態勢になっていた。

「クロスファイア……シュート！！」

ティアはクロスファイアでガジェットを破壊した後もさらにバレットを乱射していた。
このままじゃスバルに当たってしまう。
まずいぞ、ヴィータ副隊長も間に合うか分からない……

こうなったら、スバルにあたりそうなのは、こっちが当てるしかない。

「プリム、カートリッジロード。プラストシュート、スタンバイ！！」

《了解です。マスター、今は数よりも精密射撃を優先させましょう。誘導弾の制御は私がやります。マスターは発射のタイミングをお願

いします》

「わかった……頼むぞ！！」

そうしているうちに一発のバレットがスバルに向かっていた。
いかん、あれは確実にスバルに命中する。当たり所が悪ければ、落下して死ぬ可能性だってある。

「間に合ってくれ！！」

「プラスト……シュート！！」

あたしはティアのクロスファイアをよけながらおとりをしていたが、一発の銃弾がこっちに向かってきた。
あたしも気付いたのが遅かったので、今からじゃ回避は無理だった。

あたしは喰らうのを覚悟したが、次の瞬間白色の魔力弾がティアの弾丸を撃ち落としていた。
白色の魔力色……もしかして……

「どうにか間に合ったな……」

「フィル……どうして……」

「どうしてじゃねぇ……ティア、何であんな無茶をした！！」

「あの……フィル……いまのもコンビネーションの内で……」

「ふざけるなスバル！！　直撃コースだ、今のは！！」

そう、今のは明らかに直撃コースだった。

俺が落とさなかったら、間違いなくスバルは大怪我、もしくは……

「違うの、いまのはあたしがいけないの。ティアのせいじゃ……」

「うるせぇよ馬鹿共！！」

「「ヴィータ副隊長……」」

「さっきから黙って聞いてりゃ、フィルがいなかったら直撃だったじゃないか。それをぐだぐだ言いやがって……」

「もういい、あとはあたしがやる。二人まとめてすっこんでろ！！」

「フィル、おめえはエリオ達と合流して、防衛ラインの指揮を取れ。あの二人だけじゃ厳しい……」

「でも、ティア達は……」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ。さっさといけ！！」

「……はい」

俺はエリオ達と合流するために、ホテル前に向かった。
前の時もそうだったが、隊長達も副隊長達も注意はしても、ティア達に何のアフターケアをしていない。
確かにこの誤射は大変な事故になりかけていたので、あの判断は正しいと思う。
でも、その後もほったらかしにされたんじゃ……
前から思っていたが、ティアは隊長達みたいに、強い魔力を持っている訳じゃないんだ。
その辺を理解しない限り、なのはさん達は永遠にティアの気持ちは判らないだろうな……
「うん、ガリュー……ミッションクリアだよ。じゃ、そのままドクターに届けてあげて……」
「品物は何だったんだ……」
「分かんない……オークションに出す品物でなく、密輸品みたいだけど……」
「そうか……」
ホテルの方を見ると爆炎も収まり、戦いの終わりを告げていた。
「戦いも、もう終わりだ。前線の騎士達がなかなか良い戦いをした。

さて、お前の捜し物に戻るとしよう……」

「……うん」

＊　　＊　　＊　　＊

ガジェットの方は増援の方はなく、副隊長達が全機撃墜をした。
召喚師の方は追い切れなかったみたいだが、いるのが分かっていれば対策は立てられる。

「そういえばティアナは……」

「はい、裏手の警備に……」

「スバルさんも一緒に……」

「……」

ヴィータ副隊長は何か煮え切らない表情をしていたが、今はティア達のことだ。
俺はすぐにもティアの側に行きたかったが、スバルもいるし、何より今声をかけてもきっと届かないと思う。
今回のことでティアの心には、深い傷が残ってしまったな……

本当、俺、馬鹿だよな……こうなるって分かっていたのに……

「ティア……向こう終わったみたいだよ……」

「……あたしはここを警備している。あんたはあっちに行きなさいよ……」

「あのね……ティア……」

「いいから行って……」

「ティア……全然悪くないよ。あたしがもっとちゃんと……」

「行けっていってんでしょ！！」

「っ！！……ごめんね……また……後でね……ティア」

そういってスバルは立ち去った。
正直、今は誰とも顔を合わせたくない。

「あたしは……あたしは……」

あたしはもう、いたたまれなくなり……ただ声を殺して泣きたかった。

兄さん……あたしは何も証明出来ないの……やっぱり凡人は何も出来ないの……

教えてよ……兄さん……

# 第9話　互いの思いとフィルの思い

「えっと……報告は以上かな。現場検証は調査班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね。しばらく待機して何もないようなら撤退だから」

「「「「はい」」」」

「で……ティアナは……」

「……」

「ちょっと……私とお散歩しようか……」

「……はい」

私とティアナはみんなから少し離れ、森の奥に入っていた。
ここで少し話そうかと思う。

「失敗しちゃったみたいだね……」

「すみません……一発逸れちゃって……」

「私は現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に叱られて、もうちゃ

んと反省していると思うから改めて叱ったりはしないけど……」

「ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっとヤンチャしちゃうんだ。でもね……」

「ティアナは一人で戦っている訳じゃないんだよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右全部が味方なんだから、その意味と今回のミスの理由、ちゃんと考えて同じ事を二度と繰り返さないって、約束出来る……」

「……はい」

「なら、私からはそれだけ……約束したからね……」

＊　＊　＊　＊

「……んっ…ティア……」

「ティア！！」

「……フィル……スバル……」

「色々……ごめん……特にフィルには、カバーまでしてもらったのに……」

はぁ……やっぱり気にしていたか……

確かに無茶はまずかったが、いい加減に切り替えないと自分が参る

ぞ……

「ううん、全然……なのはさんに怒られた？」

「少しね……」

「そう……」

なのはさん、絶対曖昧にしてるだろうな……
優しいのはいいんだけど、なんでティアがああいった行動をしたのか理解しないと意味無いぞ。

「ティア、少し向こうで休んでていいよ。検証の手伝いは、あたしとフィルでやるから……」

「そう言うことだ……お前は少し休め」

「ううん、大ミスまでしてサボりまでしたくはないわよ。一緒にやろ」

「うん！！」

「そうだな」

＊　＊　＊　＊

「えっと、シャーリーさん……」

「はいなー」

「フェイトさんと一緒にいらっしゃる方、考古学者のユーノ先生って伺ったんですけど……」

「そう、ユーノ・スクライア先生。時空管理局のデータベース、無限書庫の司書長にして、古代遺跡の発掘や研究で業績を上げている考古学者。局員待遇の民間学者さんってのが、一番しっくり来るかな。なのはさん、フェイトさんの幼なじみなんだって」

「はぁ……はっ……」

＊　＊　＊　＊

「そう……ジュエルシードが……」

「うん……局の保管庫から、地方の施設に貸し出されていて、そこで盗まれちゃったみたい……」

「そっか……」

あのとき、フィルにスカリエッティのことは聞いているが、やはり高エネルギー体のジュエルシードは目に付けられたという訳か。おそらくガジェットに組み込まれていたのはコピー品のはずだ。あれは物が物のだけに量産型に入れる訳はないし、何より数が２１しかないのに無駄に使う訳がない。

「まぁ、引き続き追跡調査の方はしているし、私がこのまま六課で事件を追っていけば、きっとたどりつくはずだから……」

「……フェイトが追っている……スカリエッティ？」

「うん……でも、ジュエルシードを見て、懐かしい気持ちも出て来たんだ。寂しいさよならもあったけど、私にとっては、いろんな事の始まりの切欠でもあったから……」

「うん……」

ジュエルシードの話が終わると、ユーノが今までにない真剣な表情で話をし始めた。

「フェイト、今から僕が話すことは、まだはやてにもなのはにも言わないでね」

「えっ？」

「フィルのことなんだけど……」

＊　　＊　　＊　　＊

「そ、そんな……それじゃフィルは……」

「これ以上のことは直接フィルから聞いてね。僕も全部知っている訳じゃ無いから……」

「……うん」

ユーノから聞かされたことは驚きを隠すことは出来なかった。
荒唐無稽なことだらけだが、ユーノがこういう顔で嘘をつくことは絶対にない。
ということは全部本当の話だ。

でも信じられない……フィルが……

「ユーノ君、フェイトちゃん」

「なのは」

「なのは、丁度良かった。アコーズ査察官が戻られるまで、ユーノ

先生の護衛を任されているんだ。交代お願い出来る……」

「うん、了解！！」

「エリオ、キャロ。現場検分を手伝ってくれるかな」

「あっ、はい」

「今、行きます……」

「じゃ、また後でね……」

「うん」

私はエリオとキャロと一緒に、現場検分をするために、なのはにユーノのことを任せた。

「今日は偶然なのかな……」

「うーん、アコーズ査察官は今回のオークションに、機動六課が護衛に派遣されてくることはご存じだったみたいだよ。それで、オークションの見物がてらって事で同行して下さったんだ」

「そうだったんだ……」

ー ホテル内喫茶店 ー

「部隊、うまくいっているみたいだね……」

「うん、アコーズ査察官のお姉さん、カリムが守ってくれているおかげや」

「うん、僕も何か手伝えたらいいんだけどね……」

「アコーズ査察官は遅刻とさぼりは常習やけど、基本的にはいそがしいんや」

「ひどいや」

「ふふ、カリムも心配しとるんよ。かわいいロッサのこと、いろんな意味で……」

「心配はおあいこだよ。はやてだって、僕とカリムにとっては、妹みたいなものなんだから……」

「うん……あっ、そういえばロッサ。ユーノ君とはお友達やったん」

「僕が無限書庫に調べもので行った時に、彼が直々に案内して下さってね。つい最近のことだよ……」

「ふぅ～ん」

―ホテル近郊の森内―

「そういえばなのは、さっき新人の子に、何か言っていたみたいだけど……」

「ユーノ君見てたの？……うん、スターズのフォワードの子がね。ちょっと……」

私は機密事項に引っかからない程度に、ユーノ君にさっきのことを話した。

「なのは……」

「なに、ユーノ君」

「何で彼女が、そんな無茶をしたか分かる？」

「多分……彼女の過去が、原因じゃないかな……」

「……そう……なのははそう思うんだ……」

「えっ？」

「なのは……教導官は、ただ戦闘技術を教えればいいってものじゃないよ……それと……」

「……みんな、なのは達みたいに、力に恵まれている訳じゃないんだ。その事は忘れないで……」

「分かってるよ、大丈夫……」

（なのは……分かってないよ……さっきあの子に何であんな事をしたのか聞いたの。人の過去なんて根本にはなっても、今の苦しみと問題が違うよ。でも、これは僕が言うことじゃない。部外者に近い僕じゃ説得力は無いし、できれば自分で気づいてほしい）

「ユーノ君？」

「どうしたの、なのは？」

「なんか……難しい顔をしてたから……」

「何でもないよ……」

時間が経ち、撤収準備が整い機動六課メンバーは隊舎へ戻ってきた。

「みんな、お疲れ様。じゃあ、今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね」

「「「「「はい」」」」」

なのはさん達が一足先に隊舎に引き上げ、俺たちもという段階になったとき……

「……スバル、フィル……」

「あたし、これからちょっと、一人で練習してくるから……」

「自主練？　じゃあ、あたしも付き合うよ」

「あ、じゃあ僕も！！」

「わたしも！！」

「ゆっくりしてねって言われたでしょ……あんた達はゆっくりしてなさい」

「それにスバルも……悪いけど、一人でやりたいから……」

「うん……」

一人でやりたいと言うことは、昼間のことが原因だな。

正直心配だが止めてもやるのなら、こっちで注意しておけばいい。

「ティア……俺は止めないけど、やりすぎはするなよ。コンディションを整えるのも仕事だからな」

「フィル……ありがとう……」

ティアは隊舎に一回戻り、訓練の準備をしに行った。
多分裏でやるんだろうな。

ティア……無理するなよ……

「フィル……」

「スバル……今は一人にしてやろう。ガムシャラになるのも、いいのかも知れない」

「だけど……」

「だから、ティアが本当に無茶をしている時は、俺たちが止めればいい。ティアのことを信じてやろうぜ」

「うん、そうだね！！」

「エリオもキャロも悪いが、この件はそっと見守っててくれ。手助けして欲しい時はこっちから言うから……」

「はい！！」

「任せて下さい！！」

エリオもキャロも本当にいい奴だよな。
本当はティアのことが心配で、どうしようもないのに……

ー六課隊舎内ー

「……あのさ……二人とも、ちょっといいか」

ヴィータちゃんから声をかけられ、わたし達は休憩コーナーに移動し、改めてヴィータちゃんの話を聞くことにした。

「訓練中から、時々気になってたんだよ……ティアナのこと」

「うん……」

「強くなりたいなんてのは、若い魔導師ならみんなそうだし、ムチャも多少はするもんだけど……時々ちょっと度を越えてる。あいつ……ここに来る前、何かあったのか？」

「うん……実は……」

わたしは話すことに少しためらったが、昼間もユーノ君に聞いてもらっているので、みんなの意見も聞きたく話すことにした。

―隊舎、女湯―

「ティアさんの……お兄さん？」

「うん……」

湯船につかりキャロが聞いているが、あたしはこのことを話す時はどうしても暗くなってしまう。
エリオにはフィルが同じ内容を話しているが、フィルの方が辛いんだろうな……

「執務官志望の、魔導師だったんだけど……ご両親を事故で亡くしてからは、お兄さんがひとりでティアを育ててくれたんだって……」

「だけど……任務中に……」

「亡くなちゃったんですか……」

「うん……ティアがまだ１０歳の時にね……」

ー隊舎、男湯ー

「えっと、フィルさん。ティアさんのお兄さんのこと知っているんですか……」

「まぁな……ティーダさんには一時期、俺もお世話になったことがあったんだ。……精密射撃の基本はその時にティーダさんに教えてもらったんだ」

「フィルさん……」

「でも、そのあとが問題だったんだ……」

「問題って……」

「それはスバル達と一緒に話すよ。とりあえず上がろう……」

俺たちは風呂から上がって、食堂でキャロ達を待つことにした。

＊　　＊　　＊　　＊

「ティアナのお兄さん、ティーダ・ランスター。当時の階級は一等

空尉。所属は首都航空隊……享年２１歳」

目の前にウィンドウを展開し、ティアナのお兄さんのデータを表示し説明をした。

「けっこうな、エリートだな……」

「そう……エリートだったから……なんだよね」

「どういうことだ？」

あたしはフェイトの言うことに、ちょっと引っかかる物があった。いったいどういう事なんだろう。

「一等空尉が亡くなった時の任務……逃走中の違法魔導師に、手傷は負わせたんだけど、取り逃がしちゃってて……」

「まぁ、地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで、犯人はその日のうちに取り押さえられたそうなんだけど……」

「その件についてね……心ない上司がちょっとひどいコメントをして、一時期、問題になったの……」

「コメントって……何て……」

一六課食堂一

「『犯人を追い詰めながら取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだった』とか……」

「もっと直球に、『任務を失敗した役立たずは』云々とか……」

「ひどい……」

「あんまりです！！」

エリオとキャロは大人達の行ったことに怒りを思えていた。
ティアはあのときどんなに傷ついたか……

俺もあの葬儀で、ティーダさんのことをあんな風に言われて憎しみすら覚えた。
まぁ、それでもちゃんと言ってくれた人もいたんだけどな。
ティアはもしかして、忘れてしまっているかもしれないけどな。

「当時、ティアはまだ１０歳……たったひとりの肉親を亡くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかったなんて言われて……あいつはすごく傷ついたんだ……」

「だから、ティアは証明するんだって……お兄さんが教えてくれた魔法は、役立たずなんかじゃないって……どんな場所でも、どんな

任務でもこなせるって……」

「それで……残された夢を……ティーダさんが叶えられないで、終わってしまった執務官になるって夢を叶えるんだって……ティアが……あいつが、あんなに一生懸命で必死なのは、そのせいなんだ」

―夜間、隊舎裏―

俺が様子を見に行ってみると、ティアはまだ裏庭でのトレーニングを続けていた。
周囲にターゲットとして配置し魔力スフィアが多数。その中のどれかひとつがランダムに発光する仕組みになっていて、発光したスフィアに素早く照準を合わせる。
そうすることでターゲティングの速さと正確さを高めることを目的とした訓練である。
俺はティアに近づこうとしたが、ヴァイス陸曹が同じように様子を見ていたみたいで一旦様子を見ることにした。

「もう4時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ……」

「ヴァイス陸曹……見てたんですか……」

「ヘリの整備中に、スコープでチラチラとな……」

「ミスショットが悔しいのはわかるけどよ……精密射撃型のスキルはそうホイホイうまくなるもんでもねぇし、ムリな詰め込みで妙なクセを付けんのもよくねぇぞ」

「……って、昔なのはさんが言ってたんだよ。俺はなのはさんやシグナム姐さん達とは、割と古い付き合いでな」

ヴァイス陸曹の言い方には、何か実体験を感じさせる物があった。
確かヴァイス陸曹は……

「それでも……詰め込んで練習しないと、上手くならないんです。……凡人なもんで……」

「凡人か……俺からすりゃ、お前は充分に優秀なんだがな……うらやましいくらいだ……」

「まっ……邪魔する気はないけどよ。お前らは体が資本なんだ。体調には気ぃつかえよ……」

「ありがとうございます……大丈夫ですから……」

とりあえずヴァイス陸曹が殆ど言ってくれたので、俺は隊舎の方へ戻ることにした。
でも、このままじゃ前の時と同じだ。

《マスター、まさかティアさん達の自主練、一緒にやる気じゃないですよね！！》

「それは……出来ない。なのはさんの教導に対する思いを……知ってるからな……」

なのはさんの俺たちに対する思いを知ってる今、前の時のようにティア達と自主練をするわけにはいかない。

だけど、ゆりかご決戦後のティアの、あの悲痛な思いは今でも忘れない。

『あの時……もう少しクロスレンジの技術があったら、もう少し早く戦闘機人を倒せて、エリオ達を助けにいけたかもしれないのにね……』

《それでしたら、なのはさんとティアさんにそれぞれの思いを、マスターから話してたら……》

「それは、駄目だろうな。なのはさんはともかく、今のティアは余裕がなくなっている。例え、話したとしても、納得はしない……」

《辛いですね……なのはさんの思いをしている分、それがティアさん達に伝わっていないことが……》

「プリム……俺はいったいどうしたら良いんだろうな……」

《……結局は、様子を見るしかありませんね》

「それしか……ないか……」

＊　　＊　　＊

翌朝

「ティア、起きて……ティア……」

「あっ……ごめん……起きた……」

「練習行けそう」

「……行く」

「そう……じゃ、トレーニング服」

「ありがとう……」

「さて。じゃ、あたしも……」

「って、なんであんたまで！！」

何かごく普通に会話していたが、どうしてスバルまで……

「一人より二人の方が、いろんな練習できるしね。あたしも付き合う」

「いいわよ、平気だから……あたしに付き合ってたら、まともに休めないわよ」

「知ってるでしょ。あたし、日常行動だけなら4、5日寝なくても平気だって」

「日常じゃないでしょう。あんたの訓練は特にキツイんだから、ちゃんと寝なさいよ」

「嫌だよ～」

「あたしとティアはコンビなんだから。一緒にがんばるの！！」

「……勝手にすれば」

「うん」

一六課隊舎裏庭一

「で、ティアの考えてることって？」

「短期間で、とりあえず現状戦力をアップさせる方法。うまくできれば、あんたとのコンビネーションの幅もグッと広がるし、エリオやキャロのフォローも、もっとできる……」

「ティア……いったいどうするの」

「実はね……」

幻術は切り札にはならないし、中距離から撃ってるだけじゃ、それが通用しなくなった時に必ず行き詰まる……だから新しい技を身につけたい……

「何かわくわくするね」

「そうね……」

ー六課隊舎前ー

「ふぅ、何とか今日の仕事も終わったかな」

私はエリオ達の訓練を見た後、スカリエッティのことを調べていた。
アグスタ事件の後、ずっと私はユーノの話をずっと考えていた。
フィルのことを聞かされ、正直戸惑いが隠せなかった。
そんなことを考えていると、隊舎裏から射撃音が聞こえてきた。

「今のって射撃の音だよね。いったい誰が？」

気になって裏庭に言ってみると、ティアナ達がこんな夜遅くまで自主練をしていた。

「ティアナ、それにスバルまで……」

何でこんな無茶なことをやっているの。昼間のなのはとの訓練で身体がボロボロになっているのに……

しかも今やっている内容は普段の逆、ティアナが近接戦闘の要になっている。
これじゃなのはが教えていることの全くの逆だ。
確かに間違いじゃないんだけど、今のティアナ達の技量じゃ……

しばらくすると、自主練を終了してティアナとスバルが隊舎に戻っていった。

「そこで隠れていないで、出てきたらどうですか。フェイトさん」

「フィル！！　いつからそこにいたの！！」

「自主練の最初からですよ。これで一週間繰り返してますよ。フェイトさんのその様子じゃ、結構前から見ていたみたいですね……」

「フィル、貴方がいてなぜこんな無茶をさせるの。こんなことをやって身体を壊したんじゃ、取り返しが付かないことになるよ！！」

「……わかってますよ。それは……」

「だったら何で！！」

「……たとえ間違っていても、時には足掻くしかないときがあるんです。特に俺やティアみたいなタイプは」

そうさ、俺はなのはさんたちみたいに天才じゃない。
だからこそ、俺は今のティアの気持ちがすごく分かるんだ。

「……今ここで止めても、ティアナ達、またやるよね」

「ええ、止めるのは出来ます。だけど、自分で本当に納得しない限り、また同じ事をしますよ。最悪の事態になる前に、俺が必ず止めます。お願いです。もう少しだけ、ティア達の好きなようにやらせてください！！」

本当は俺が真っ先に止めなきゃいけない。
だけど、今ティア達に言っても、きっと元の木阿弥になってしまう。

「……分かった。フィルを信じて、このことは今は、私の胸の内に納めておくね。でも、最悪のことになる前に必ず止めること！！止められないときは私に報告してね。私が何とかするから……」

「すみません……」

「でも、どうしても一つだけ言っておくことが……」

「……ティア達のフォーメーションのことですね」

「うん……」

そう、あのフォーメーションは、明らかに今のティアナ達には向かない物だ。
センターガードのティアナが前線に出て、攻撃を仕掛けるなんて……

「フェイトさん、センターガードってなんだと思います」

「えっ？」

「センターガードってチームの中央に立って、誰より速く中長距離を制する。確かにそれが第一なんですけど、実際はいろんな所から攻撃も来ますし、その場で立ってなんてやってられないです。そんなことをしてたら蜂の巣になるのがオチです。なのはさんみたいに魔力が高い人は、プロテクションを張りながらとか出来るかもしれないけど、俺たちみたいに魔力が少ない奴らはそんなことは出来やしない」

「それに、単体で戦う時はそんな固定砲台みたいなことをやっていたら、あっという間にやられてしまう。なのはさんの考え方は味方が必ずいるという前提の考え方だ」

「それは……」

なのはさんの言っていることは、正しくもあるが間違いでもある。

チーム戦でなら、これ以上ないことなんだけど、単体で行動するときはこのセオリーは通用しなくなってくる。

「……なのはさんの気持ちはわかるんです。でも……」

「……そうだよね。未来から来たんだから、なのはの事は私たちから聞かされていても、不思議じゃないよね」

「！！」

どうしてフェイトさんから、未来なんて言葉が……

「まさか！！」

「ごめん……ユーノから聞いてたの。全部じゃないけど、ある程度のことは……」

「……そう……ですか……」

いつかはバレることだけど、こんな形でとはな……

「……未来じゃどんなことがあったの。センターガードのティアナ

達が前線で戦うほどのことだったの？」

「……あれは……地獄ですよ……絶望しかないあの世界は……」

そう、あれは地獄でしかない。

人々が生きる希望をなくし、犯罪者が好き勝手なことをやり、罪もない人が次々と殺されていく。

「……確か、スカリエッティとの戦いでみんな死んじゃったんだよね。なのはも私も……」

「六課で生き残ったのはスターズの二人と、俺だけだったんですよ。しかも、戦っていくうちにスバル達も死んでしまい……そして、最後はティアまで……俺が見殺しにしてしまったようなもんですけどね……」

そうさ……スバルやギンガさん死ぬ時も、ティアが死ぬ時も俺は無力だった。

「結局、俺は……誰も守れなかったんですよ……誰も……」

大事な人は、誰一人守れなかったんだからな……

「フィル……」

いつの間にか雨が降り出し、フィルはずっと辛い表情をして立っていた。
雨のせいで泣いているのか解らなかったが、心はずっと泣いていたんだ。

私は、悲痛な表情をしているフィルを抱きしめていた。
今フィルにしてあげられることは、これくらいしかないから……

今にも砕けてしまいそうな、そんな雰囲気だから……

フィルはずっと一人で戦っていたんだね。
こっちの世界でもティアナ達のことを考えたり、世界のことを考えたり……
色々とユーノやクロノに協力をしてもらって居るみたいだが、それはあくまで世界のことだ。
フィル自身の心はずっと孤独のままなんだ。

仲間を……そして愛する人を亡くしてから……ずっと独りぼっちだったんだ。

「フィル……私じゃ駄目かな……」

「……フェイト……さん？」

「私はフィルの上司だけど、ただ教導するだけじゃないんだよ。だから少しは私を頼って欲しいし、何よりフィルの心の支えになってあげたい……」

「フィル……一人で全てを抱え込まないで……あなたの悲しみも苦しみも、私が一緒に背負うから……」

「だから一人だなんて思わないで。私もいるんだから……ね……」

フェイトさんの言葉が切欠になり、俺は声を殺して泣いた。
こっちに来てから俺はずっと一人だった。

ティアを失ってから、俺は人に頼ること……そして好きになることに怯えを持っていた。
また失ってしまうんじゃないかって……

「俺は……俺は……」

俺は、人目を気にせずひたすら泣き続けていた。
そんな俺を、フェイトさんはずっと抱きしめてくれていた。

数日後

「悪いわね、クロスミラージュ。あんたのことも、結構酷使しちゃって……」

《お気になさらず》

「明日の模擬戦が終わったら、シャーリーさんかフィルに頼んで、フルメンテしてもらうから」

《ありがとうございます》

あたしはこんなに乱暴にしているに関わらず、黙って付いてきてくれる相棒に感謝をした。
そうだよね……クロスミラージュはフィルが一生懸命考えてくれたデバイスなんだよね。
大事にしてあげなくちゃね……

「ただいまー」

「ティア。スポーツドリンク、飲む……」

「ありがとう」

スポーツドリンクを飲みながらあたし達は、明日の模擬戦のことを考えていた。

「明日の模擬戦……いけるかな？」

「成功率は、約６割くらいかな……」

「うん、そんだけあればきっと大丈夫」

「でも……あんたは本当にいいの……」

「何が？」

「あんたは……憧れのなのはさんに、ある意味逆らうことになる……から……」

「あたしは怒られるのも叱られるのも慣れてるし……逆らってるって言っても、強くなるための努力だもん。ちゃんと成果を出せば、きっとわかってくれるよ。……なのはさん、優しいもん」

「さぁ、明日の早朝特訓は最後のおさらい！！　早く寝とこ……」

「うん」

＊　　＊　　＊　　＊

翌日　訓練場

「さーて、じゃあ、午前中のまとめ。２ｏｎ１で模擬戦やるよ！！」

「まずはスターズからやろうか。フィルはちょっと外れていてね。バリアジャケット、準備して」

「「はい」」

「エリオとキャロ、フィルはあたしと見学だ」

「「「はい」」」

（ティア……）

俺はエリオ達と一緒に近くの廃ビルの屋上に行った。

「やるわよ、スバル！！」

「うん！！」

バリアジャケットをまとった二人はやる気十分だった。

「……あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん……」

「私も手伝おうと思ってたんだけど……」

「今はスターズの番……」

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ってたんだけどね……」

「あぁ、なのはも、ここんとこ訓練密度濃いからな……少し休ませねぇとな……」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ……訓練メニューを作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり……」

「なのはさん、訓練中もいつも僕達のことを見ててくれるんですよね……」

「ほんとに……ずっと……」

「……」

確かに訓練メニューを真剣に考えてくれていると思う。でも、それだけなんだ……
結局今日までスターズの隊長も副隊長も、今日まで特訓については一度も言ってこなかった。

いくら俺が気を付けていたとはいえ、オーバーワークには違いなかった。
ヴィータ副隊長の様子を見ていると、不安とかは見られない。考えたくはなかったが……

ずっと見ててくれるのは訓練の時だけで、それ以外の場所じゃ、ちっともティア達を見てないのかよ。

それを認識した瞬間、俺は苛立ちが募っていた。
拳を握りしめ、少し血が出ているが、それ以上に隊長達に悲しみを感じていたのだ。

（勝手すぎるよ……あの時……事件の後……ティアがどんな気持ちだったと思ってるんだ。せめて……その事だけでも、聞いて欲しかった……）

俺のそんな様子を感じたのか、フェイトさんがこっちに近づいてきた。

「フィル、気持ちは分かるけど、なのはの気持ちも、分かってあげて……」

「そう……ですね……すみません。色々と……」

「いいよ。結局なのはは、あれから……」

俺は無言で横に首を振った。

「その代わりフェイトさんが、あの日から毎日こっそり、見に来てくれていたみたいですけどね」

「き、気づいてたの……」

「一応気配は探れますから……フェイトさんだって色々疲れているのに……本当に嬉しかったです」

「言ったでしょう、訓練を見るだけが上司の仕事じゃないって。それにフィルが対応出来なくなったときに、そばにいなくて、何も出来ませんでしたじゃお話にならないしね。何より、あんなフィルを見て、ほっとける訳無いよ……」

「フェイトさん……」

そんな中ティアが、牽制用のクロスファイアを撃とうとしていた。

「クロスファイア……シュート」

「……ん？、なんか、キレがよくねぇな……」

「コントロールは、いいみたいだけど……」

「それにしたって……」

（フィル……）

（ええ……）

このクロスファイアはあくまで囮、速度を落として相手に回避運動をさせやすくする。

その分コントロールを重視し、狙い通りの位置に導くのが狙いだ。

なのはさんはウイングロードで、迫ってくるスバルはフェイクだと思っている。

通常なら相手に余力があるのに真っ正面からの攻撃は自殺行為に等しい。

だけど……

「！！」

「フェイクじゃない……本物！！」

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

放たれた魔力弾はスバルに向かっていくが、プロテクションで対応しそのまま向かっていった。

「うおぉぉぉぉ……りゃぁぁぁぁぁぁ！！」

スバルはディバインシューターをしのぐと、リボルバーナックルとなのはさんの展開したラウンドシールドと激突するが……

「っ……きゃぁぁぁぁ！！」

なのはさんは激突のエネルギーを利用してスバルをはじき飛ばした。なんとか維持されていたウイングロードの上に着地した。だが、これは計算尽くの行動だった。

「こら、スバル、ダメだよ。そんな危ない機動！！」

「すいません……でも、ちゃんと防ぎますから！！」

「ティアナは……？」

わたしはティアナを探していたが、さっきのクロスファイアから姿が見えないのだ。
そんなときクロスミラージュのレーザーポインターが、わたしの頬に当てられているにの気付いた。

「砲撃！！……ティアナの奴が！！」

ヴィータ副隊長がティアの行動に驚いているが、これもフェイクだ。
実際の狙いは、なのはさんの意識をスバルから離すことだ。

（特訓の成果……クロスシフトC！！……いくわよ、スバル！！）

「おうっ！！」

スバルはリボルバーナックルのカートリッジをロードし、咆哮と同時に突撃をかけた。
なのはさんもラウンドシールドで防ぐが、それが俺たちの狙いなんだ。
今度ははじき返すことは出来ず、砲撃体制に入っていたティアの方へ視線を向けた。

しかし……

「！！」

「あっちのティアさんは幻影……」

「本物は？」

ティアはその間にクロスミラージュのトリガーを引き、カートリッジをロードさせ魔力刃を作り、ウイングロードを駆け上っていく。

（バリアを斬り裂いて、フィールドを突き抜ける！！）

そう、これが今回のクロスシフト。

空中では戦いにくいあたし達が、なのはさんに対抗するため、フロントアタッカーのスバルが動きを押さえ、あたしが本命の攻撃をたたき込む。

だが、これには欠点もある。現在のあたしでは、なのはさんの防壁を貫ける砲撃は持っていない。

あたしが足止めという考えもあったが、空で機動力を持たないあたしでは攻撃の手段が限られ、足止めにはならない。したがってスバルしかいない。

だけど、魔力を一点集中すれば、あたしでも攻撃出来る。それに懸けた。

対砲撃型魔導師用シフト……クロスシフトC……

（一撃、必殺！！）

この一撃で防御壁を貫く。全力でやっても破壊出来るかどうかなので、全力でやれる。

破壊した後はスバルがフリーになるので、それでとどめの一撃を打てばいい。

「っ、けぇぇぇぇぇぇ！！！」

魔力刃はなのはさんに迫っていた。

が……

「……レイジングハート、モードリリース……」

ボソっとつぶやいた瞬間……爆発が起き、衝撃がこっちまできた。

「なのは！！」

「ティア、スバル！！」

どうなったんだ……決まったのか……それとも……

「……おかしいなぁ……二人とも、どうしちゃったのかな……」

ティアの魔力刃も、スバルのリボルバーナックルも、なのはさんが直接受け止めていた。

頭上から一撃を加えたティアはその場に留まり、桃色の魔力光に包まれている。

おそらくはなのはさんが、浮遊の効果をティアに与えているのだろう。

だが、ティアを守っているはずの、なのはさんからは……

感情の色が完全に抜けていた。

「がんばってるのはわかるけど……模擬戦はケンカじゃないんだよ……」

その言葉にスバルはハッとし身動きが取れなくなり……

「……練習の時だけ言うこと聞いてるフリで、本番でこんな危険なムチャするんなら……練習の意味、ないじゃない……」

次の言葉でティアが息を呑んだ……

「……ちゃんとさ、練習どおりやろうよ……」

二人は完全に戦意は消失しているが、さらになのはさんは言葉を続けた。

「ねぇ……」

「あ……あああ……」

「わたしの言ってること……」

「わたしの訓練……そんなに間違ってる……」

＊　　＊　　＊　　＊

「……プリム」

《……何ですか》

「……止めるなよ……」

《誰も止めたりなんかしませんよ……彼女の思いも知っていましたから、ここまでは止めませんでしたが……》

なのはさんがやっていることは、明らかにやりすぎだ。
これ以上は教導の意味はない。

「……ありがとうな……やるぞ！！」

《はい！！》

もう、形振りなんて構っていられない。
今、ウイングロードはティアが立っている一直線分しかない。

このまま、なのはさんがティアを落とすと……

ティアの命はない！！

《Ｂｌａｄｅ　ｅｒａｓｅ》

魔力刃を解放し、背後のウィングロードへと飛び移り、ティアはなのはさんへとクロスミラージュをかまえる。ティアもういい。やめろ……やめるんだ！！

「あたしは……もう誰も、傷つけたくないから！！」

スバル……フィル……

「失いたくないから！！」

兄さん……

「だから……」

「強くなりたいんです！！！」

そんなティアの悲痛な叫びも無視し、なのはさんはスフィアを作り……

「……少し……頭……冷やそうか……」

「クロスファイア……」

「わぁぁぁぁぁぁぁっ！！！……ファントム、ブレイ」

「……シュート……」

ティアのファントムブレイザーよりも早く、桜色の魔力弾の渦はティアを吹っ飛ばしていた。

「ティア！！……っ！！　バインド」

「じっとして……よく見てなさい……」

スバルもいつの間にかバインドがかけられ身動きが取れなくなっていた。
さらになのはさんは、さっきと同じクロスファイアをティアに撃つつもりだ。
意識が朦朧としているのに……それでも、残された力で立ち続けるティアに向けて……

「っ！！　なのはさん！！」

スバルが悲鳴に誓い叫びでなのはさんに言ったが、全く意に介さず……

発射された砲撃は……

強大な桜色の閃光となって、ティアに迫るが……

「そこまでです……なのはさん……」

間一髪のところで、自分の身体を盾にして、ティアが砲撃を受けるのを防いだ。

「……うっ……」

どうやら意識はあるみたいだな……

ティアの状態を確認すると、俺はなのはさんの方を向いた。

「どういうつもりなの……」

「それはこっちのセリフです。まだティアを痛めつける気ですか。これ以上は何の意味もない……」

「邪魔……しないで……」

なのはさんはまたティアにクロスファイアを放った。
まずい、完全に切れている。

「ぐっ…ぁぁぁ……」

俺が盾になっているから、ティアの方は大丈夫だけど、そうは持たない。

「どうして邪魔するの……フィル……」

「なのはさん……あんた、ちゃんとティア達に言ったのかよ。自分の教導の思いを、ちゃんと自分の言葉で伝えたのかよ!!」

わたしの教導の思い……

「なのはさんがやっていることは間違ってないよ。だけど、それをちゃんと言葉で伝えようとせず、ただプログラムを組んで、それをやればちゃんと伝わっている。そんな風に思っているんだったら、

それは間違いだ！！　それじゃ何も伝わらない……」

「あっ……」

「人ってそんな器用じゃないでしょう。思っているだけじゃ、相手には伝わらない。それはよく知っていることでしょう！！」

なのはさんは俺の言葉を、ただ黙って聞いていた。

「それとティア、お前にも言っておくことがある……」

意識を取り戻したティアに言っておかなくてはならない。
これだけは、今でなければいけないんだ。

「お前が無茶をして、俺みたいに庇う奴が出てくる。身近な相手だと、俺とスバルになる……」

「あ……ああ……」

「お前が攻撃することを否定してるんじゃない。だけど、仲間がいるんなら、パートナーを信じろ。でないと最悪なことが起きて、取り返しが付かないことになる。それがいやなら、もっと練習して実戦で使えるようになってからにしろ。後、強くなりたいなら、何でなのはさん達に相談しなかったんだ……」

「それは……」

「ティア、人に聞くことは、決して恥なんかじゃないんだ。なのはさんに言いにくかったら、俺でもよかったんだぞ。そんなに信用ないか？」

「ごめん……なさい……」

「いや、俺もちゃんと言葉で、言えばよかったんだよな。さっき、自分で言っておいて何だけどな。思っているだけじゃ、お前に伝わっていなかってんだからな……」

「フィル……」

結局、ティアとなのはさんがこうなったのは、俺のせいじゃないか……

俺が、あのとき誰かに相談していれば……

だけど、後悔するのは後だ。今は……

「少しは……落ち着きましたか……」

「うん……」

なのはさんも落ち着きを取り戻したな。

そして、なのはさんにも見せなきゃいけない物がある。

「これを……見てください……」

「これは！！」

ウィンドウを出して見せたのは、もしティアをあのまま墜としていたらのシミュレートだった。

二度目のクロスファイアを放っていた場合、ウイングロードの上には落下せず、地面に激突していた。

しかも仮に助かったとしても、岩が多いところなので、それで失明していた可能性があったと、プリムのシミュレートでは、はじき出していた。

「そんな……わたしの手で……ティアナを……」

「これはあくまでシミュレートです。けど、これに近い結果にはなっていたと思います……くっ！！」

「フィル、どうしたの……えっ……その傷は！！」

さっきの砲撃を受けて、俺の右肩から出血がしていた。

出血はそんなでもないけど、バリアジャケットの防御力を上回ってしまったのか。

リミッターはかかっていても、オーバーSランクは伊達じゃないってことか。

「……わたしのせいで……フィルに……」

「今回は大したことはありませんが、もしかしたらティアが、こうなっていたんです……」

フィルの言葉でようやく実感した。

私の手で、ティアナを潰そうとしていたことを……

「さっきティアにも言ったんですけど、もう少し自分の周りに相談してください。なのはさんならフェイトさんや八神部隊長に話せば良いんです。親友って、楽しいときだけじゃなくて、苦しいときも分かち合える物でしょう」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

わたしはこんな優しい人を傷つけてしまった。

私の思いこみのせいで……

「後でいいですから……ティア達と……話し合ってくださいね。なのはさんの思いとティアの思い、それぞれあると思いますしね……」

「うん……本当にごめんね……」

「じゃ、俺は戻りますね……」

俺はなのはさん達の元を離れ、近くの木陰に移動した。
そこで待っていたのはフェイトさんだった。

「もう……無茶しないの」

「……すみません」

「フィル、どうしたの？」

「もっと早く、なのはさんとティアに、話しておけばよかったのかなって……」

「それは駄目だったと思うよ。今の所、六課で、フィルのことを知っているのは、私だけでしょう。何も知らない人が、あのことを話しても伝わらないし、結局、遅かれ早かれこうなったと思うよ」

「……フェイトさん」

「それにね。こういうのは、あまりお節介しすぎても駄目。ちょっと乱暴だけど、意見のぶつかり合いも良いんじゃないかな。最悪のことになる前に、周りが止めれば良いんだから……だから、大丈夫だよ。きっと……」

「ですね……」

なのはさんもティアも、不器用なだけなんだ。
ちゃんと言葉で話せば、きっと大丈夫だ。
前の時だって、なのはさんの思いを、ちゃんと言葉で言ってくれたら、ティアは理解したしな。

「あと、フィルにも言っておくけど、自分で抱え込まないで相談してね。ティアナもフィルも、本当に似ているから……」

「そんなに似てますか？　俺とティア」

「そっくりだよ。そうやって自分だけで解決しようとするところもね」

結局、俺もティアも人のことは言えなかったんだな。
俺はまだまだ、未熟者ということだ。

# 第１０話　大切な人

「フェイトさん……」

「どうしたの？」

「俺……みんなに全部話そうかと思います」

「そっか……決心したんだね」

「もう隠すことは出来ないと思うし、何より……俺が思っていることも、ちゃんと言葉で伝えなくちゃいけないんです。正直、みんなに言うのは怖いんですけどね……」

「大丈夫だよ。みんなもちゃんと分かってくれるよ。だから恐れないで……」

「ありがとうございます……」

「多分、なのはも夜に、自分の思いをティアナ達に伝えると思うから、その時に話すと良いよ」

そして、その日の夜

なのはさんが、みんなを集めて、ティア達に自分の過去と、教導の思いを伝えていた。

前の時とは違い、本人が自分の言葉で伝えている。

なのはさんはちゃんとティア達に話した。
今度は、俺がみんなに全てを話す番だ。

「部隊長すみません。少しだけお時間をもらいたいんですけど……」

「なんか、話があるんか？」

「……みんなに、話しておかなきゃいけないんです。俺のことを……」

「せやな。話してもらえるか。あの時から正直、気になってたんや。なんであんな力を持っているか、話してくれる」

「はい……」

《マスター、話しにくいのなら、私が……》

「いや……自分で言うよ……これは俺がしなきゃいけないことだから……」

《分かりました……》

八神部隊長に頼んで、みんなにその場に残ってもらうようにしてもらい、俺は全てを話すことにした。

「……それでは、お話しいたします。これから話すことは、信じられないかも知れませんが、全部、本当のことです。俺は……未来から……きたんです……」

「はぁ……何の冗談だ。それ……ふざけんのもたいがいにしろよな！！」

ヴィータ副隊長が怒るのは当然だよな。
俺だって、自分がこういう経験してなかったら、なかなか信じないだろう。

「ふざけてなんかいませんよ……単刀直入に言いますと……」

「管理局は……機動六課は……スカリエッティに……負けたんです」

「「「「「！！」」」」」

「それはどういうことや！！」

「口で説明するより、映像を見てもらった方が早いですね……プリム……」

《はい……いいんですね……》

「ああ……やってくれ……」

スクリーンに映し出されたのは、この世の地獄だった。

地上本部の壊滅……

聖王のゆりかごの復活……

蹂躙されていくミッドの街……

ゆりかご決戦での八神部隊長の最後……

スカリエッティ基地内でのフェイトさんの最後……

ゆりかご内での戦闘……そして……なのはさんの最後……

さらに軌道衛星上にたどりつき、更に力を増していくゆりかご。その後、本局への襲撃

その後……生き残った俺たちの戦闘記録……

自爆で戦闘機人を一緒に道連れにし、最後を迎えたスバルとギンガさん……

そして……

ゆりかご決戦から2年後……

クアットロを倒したが……その後……

俺の腕の中で……息を引き取ったティア……

「そして俺はクアットロに心臓を貫かれ、死を迎えるはずだったんですが……あるきっかけでこの時代にいたんです……」

話が終わった時全員顔面蒼白状態になり、何も言えなくなっていた。しばらくしてヴィータ副隊長が……

「なんだよ……なんなんだよ、これは！！」

「ヴィータ……」

「これがこれから起こることだって言うなら、あたし達のやって来たことは全部無駄って事かよ！！」

ヴィータ副隊長がこうなるのも無理ない。
俺だって何度見たって辛いんだ。
今でも忘れはしない……

息を引き取る時のみんなの表情は……

「だけど……これが未来だって証拠は、なんでこんな映像を持っているの……」

「その疑問は当たり前ですよね。なのはさん……この映像は……スカリエッティ達から送りつけたれた物なんです」

これらの映像を持っているのは、あのクアットロのせいだ。
あいつが俺たちに絶望を与えるために、わざと送りつけてきたのだ。
ゆりかご内にある記録装置からと、それ以外にも様々な方法で撮っていて、ティアやスバルが最初に見た時は涙が止まらなかった。

「それと、これを見て下さい」

取り出したのは、砕けてしまったレイジングハートだった。

「これって……まさかレイジングハート！！」

「はい、これのおかげで色々知ることが出来たんです。生き残った俺たちにスカリエッティ達が送りつけてきたんです。エースオブエースを失ったって、心理的にダメージを与えるために……」

だが、コアに残されていたシステムの情報で、ティアにブラスターを組み込むことが出来たんだ……

そして最後の戦いでティアは、ファイナルリミットまで解放してしまい……命を落としてしまった……

レイジングハートが完全なら、完璧なシステムを作れたかもしれないけど、色々情報が欠けていてあれが精一杯だった。
だから完成したシステムは、本家以上にピーキーになってしまったのだ。

「フィルが色々知っていることには納得した。けどな、あのときフィルが使っていた力は何や……こっちが調べた時はそんな力はなかったはずや」

八神部隊長の本題はこのことだよな。
だけど、こんな荒唐無稽な話しても良いのかな。
最も、未来から来たって事がすでに、現実から離れてるんだけどな。

「これは……俺を助けてくれた女神からもらった力なんです……」

「女神やて……そんなおとぎ話みたいな……」

「事実なんです。現にその力でここに戻ってきたんですから……」

「それで、そんな力があるんやな」

「はい……それと……」

「模擬戦の時に、ティアナを助けに来た時の力だね……」

「そうです……あれは転移です」

「ちょっと待て!!　あたし達も転移くらいは使えるが、お前が使った時は魔法陣すら出ていなかったぞ!!　しかもあんな短時間で!!!　ミッドにしろベルカにしろ、魔法の反応があればあたしだって気づいたぞ!!」

ヴィータ副隊長、痛い所付いてきたな。
まぁ、実際俺が使っているのは少し違う物だしな。

「俺が使うのは隊長達が使うのとは少し違って、これは相手の魔力を感知し、その場所に行く魔法……まぁワープって考えてもらえればいいです」

「ワープ！！　だから動きが見えなかったんだ……」

「そしてこの魔法の最大の特徴は、相手に気づかれずにアクションを起こせること。だから戦闘時にも動きを察知されにくいんです」

「……とんでもない魔法だね。まさに戦闘用に特化しているね。もしかして、フィルの最大の切り札だったんじゃないの？」

「……確かに切り札の一つなんですけど、あのときはやむをえず使ったんです」

正直、使いたくなかったんだけど、あの時はそんなことを言ってられなかったしな……

「それでリミットを解除した時のフィルは、どのくらい魔力があるんや……」

「多分、ＡＡ＋くらいじゃないですか……未来でもそのくらいでしたし、元々の魔力は殆ど上がっていないんです……」

「それに、女神からもらった力はまだ完全に物にしていなくて、おまけに時間制限があるんです。完全に使いこなすにはもっと訓練が必要なんです……」

現在の使用時間は約１５分くらいが限度だろう。
簡単に言えば、タンクに水はたくさんあるが、それを調節する蛇口が細すぎて、全開にしても普通の状態といえば良いかもしれない。
訓練をすれば、完全に自分の物になるって言ってたけどもう少し時間が掛かるな。

「やっと……分かったよ。なんでティアナが、クロスレンジの練習をしていたのを、止めなかったのかが……」

俺だって、今のティア達がクロスの練習するのは早いと思っていたけど、やらなきゃ納得しないことだってある。
ゆりかご決戦後、ティアはずっとクロスの技術で悩んでいたしな。

「見てもらって分かったと思いますが、あの世界では……生きるか死ぬかだった……」

「スバル達を失った俺とティアは、クロスレンジを覚えるしかなかった……時にはガードウイングもやったし、フルバックの役目だってやるしかなかった……」

「仲間を失った俺とティアは、たった二人で戦うには、そんなこと言ってられなかったんだ！！」

フィルが見せてくれたこの映像では、フィルもティアナも個人戦をかなりしていた。
センターガードの二人なのに一対一で戦い、射撃じゃなく斬り合いで仕留めていることもあった。
そんなギリギリの戦法で二人は戦っていたんだ……

「……フィルは知ってたんだね。だから訓練中に時々、悲しみが混じった表情になってたんだね」

「はい……」

「本当にごめんなさい……これじゃ、教導官として失格だよね……ティアナ達のこともちゃんと見ていなかったし……」

「失敗は誰だってします。俺だってそうです。もっとも俺は、失敗ばかりですけれどね……」

「フィル……」

不器用なんだよ……なのはさんもティアもな……

「フィル……」

「どうしたんですか、シグナム副隊長」

「本当にすまなかった。私達はお前達の事を、ちゃんと見ていなかったんだな……」

「もう止めましょう。この事はお互い様ですよ。俺だってみんなに隠していたんですから……」

「そう……だな……しかしフィル」

「何ですか……」

何か嫌な予感がするのは、俺の気のせいか……

「今度全力で一対一の模擬戦を……」

「却下！！」

「むう……なぜだ、お前の本当の力、是非確かめたいのだが……」

「冗談じゃありませんよ、俺を殺す気ですか！！」

何を考えてるんだ。元々の力は滅茶苦茶差があるんだぞ。

近戦専門のシグナム副隊長相手にタイマンなんて冗談じゃない。

その後、ヴィータ副隊長にも謝られたが、さすがに模擬戦をやれとか言われなかったのですごく助かった。
そんなことをやってたら、いつのまにかティアの姿がいなくなっていた。

＊　　＊　　＊

ロビーを離れたあたしは、六課施設で海が見える所に来ていた。
なのはさんの教導の思い……
フィルの経験してきたこと……
色々なことを聞いて、あたしは頭が整理しきれないでいた。

「ここに……いたんだね……」
「……なのはさん」
「少し……話……してもいいかな」

「はい……」

そういってなのはさんは、あたしの横に座って話をし始めた。

「まずはゴメンねティアナ。わたしがしっかり自分の思いを言えてなかったばっかりに、辛い思いをさせてしまって……」

「いえ……あたしの方こそすみませんでした。あんな無茶をしてしまって……」

ーフォワードサイドー

「ティアとなのはさん、何を話してるんだろう……」

「そうですね……」

「さっきから二人とも互いに謝ってから、殆ど話をしていないみたいですし……」

「3人とも、何のぞき見をしてるんだ」

「「「フィル（さん）」」」

「趣味悪いことしてるんじゃない……と、言いたいけど俺も気になってな。結局俺がティアを追い詰めてしまったような物だからな……」

「フィル……」

フィルっていつもこうだ。
何でも自分で抱えてしまってどんなに辛くても人に話そうとしない。
今回、やっと話してくれたけど、
こんなんじゃ、いつかフィルがつぶれちゃうよ……

「俺のことよりも、どうやら二人の会話が再開しそうだぞ」

ーなのは・ティアナサイドー

「じゃ、お互いに謝ったところで、私からちょっとお説教しておこうかな。あのね、ティアナは自分が凡人で射撃と幻術しか出来ないっていうけど、それは大きな間違いだからね」

「えっ……」

「ティアナもほかのみんなも今はまだ原石の状態。でこぼこだらけ

だし、本当の価値も分かりづらいけど、だけど磨いていく内にどんどん輝いてくる部分が見えてくる。」

「エリオはスピード……」

「キャロは優しい支援魔法……」

「スバルは、クロスレンジの爆発力……」

「フィルは、四人をまとめられる統率力……」

「そしてティアナは、幻術を駆使して、その視野の広さと判断力で、どんな状況でも切り抜ける。最も射撃だけでなく、斬撃も使いこなしていたみたいだけどね。映像のティアナはそういった感じだったしね」

「なのはさん……」

「そんなチームが理想型で、ゆっくりだけどその形に近付いている……って言いたかったんだけど、模擬戦でもう少しでティアナを自分と同じようにしてしまいそうになって、それをフィルに止められ……さらにフェイトちゃんにも言われて……自分も未熟だなって気づかされたの」

ーなのは・ティアナサイドー

「そして、ティアナ達の考えたことは間違ってはいないんだよね。現にフィルはクロスミラージュに、そのためのモードを組み込んであるんだし……」

そう言ってなのはさんは、クロスミラージュを持って何かをし始めた。

「システムリミッター、テストモードリリース」

《ｙｅｓ》

「命令してみて、モード２って」

「モード……２……」

《Ｓｅｔ　ｕｐ　Ｄａｇｇｅｒ　Ｍｏｄｅ》

「あっ……」

クロスミラージュが変形した姿は、クロスレンジ用のモードだった。

「これって……」

「ティアナは執務官志望だもんね。ここを出て執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし、実際にそんな場面が

殆どだったみたいだしね。あの記録を見て、それが痛感したよ。フィルは解っていたんだね。ティアナがこのことで苦しむって、そして少しでも力になってやりたいって……」

「フィル……なのはさん……」

なのはさんの言葉にあたしは涙を堪えることが出来なくなっていた。フィルもなのはさんも、それぞれ考え方は違っていても、あたし達のことを常に考えてくれていたんだ。

「クロスもロングも、もう少ししてから教えようと思っていた。だけど、出動は今すぐにもあるかもしれないでしょう。だからもう使いこなせている武器を、もっともっと確実な物にしてあげたかった」

「だけど、私の教導って地味だから、あんまり成果が出ていないように感じて苦しかったんだよね。本当にごめんね、ティアナ……」

「うわぁぁぁ……ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

ーフィルサイドー

（どうやら、なのはさんとティアは大丈夫だな……）

「ほら3人ともいつまでも見ているな。後はそっとしておいてやろう」

「そうだね……」

「「はい」」

スバル達はそういって自分たちの部屋に戻っていった。
少ししてなのはさん達も、それぞれ自分たちの部屋に戻っていった。
だけど、俺は少し頭を冷やしたい気分になってしまった。

本当にこれで良かったのだろうかって……

＊　＊　＊　＊

時間が経ち、空気が冷えてきたからか、みんなもなのはさん達も部屋に戻っていった。
だけど……今はそれがちょうどいい。

「なぁ……プリム」

《何ですか、マスター》

「……もしかしたら、過去に戻ってこなかった方が良かったのかもな」

《どういう事ですか？》

「今回のことも含めいろいろさ……俺がいることで余計な事まで起きている気がしてならないんだ。結果的にティアとなのはさんは打ち解けたけど、これって俺がいなかったら、もっとまとまったんじゃないのか」

《マスター……》

「本来なら俺は、ロングアーチの一局員でここまでティア達に関わることはなかった。現に歴史もズレが出てきている」

そう、俺はロングアーチの一人に過ぎなかった。

コンビネーションの練習の時は、ティア達と訓練したりしたが、基本的に裏方の仕事が中心だった。

こんな風に表には出てこなかった。

「やっぱり……俺は、戻ってくるべきじゃなかった」

《マスター！！》

「それは間違っているよ……フィル」

「えっ？」

俺の後ろに立っていたのはフェイトさんだった。
確かミーティングが終わった後、自分の部屋に戻ったはずなのに……

「フェイトさん、どうしてここに……」

「フィルだけ帰ってこないから、気になって……」

時計を見ると夜11時を過ぎていた。いつの間にかこんな時間になっていたんだな。
俺がいつまでも戻ってこないのに気づいて、ずっと探してくれていたんだ。

「盗み聞きするような真似をしてごめんね……」

「別に……構いませんよ……」

「それはそうと……フィル」

そう言ってフェイトさんは両手で俺の顔を挟み込んだ。

「今の言葉は、聞き捨てならないよ。どうしてそんな風に思うの」

「……」

「私には……話せないかな……」

これ以上誰にも迷惑を掛けたくない。

けど、この人なら……

「……怖いんですよ」

「怖い？」

「今は……何とかうまくいっていると思います。けど……」

「けど？」

「これが原因で俺が知っている結果よりも、最悪なことになるんじゃないかって……色々ズレも出てきている。もう俺が知っている未来じゃない……」

確かにフィルが知っている未来とはかなり違ってきている。

でもそれは良い方向に変わってきているんだよ。

「私も……あまり人のことは言えないけど、それ以上にフィルは抱え込みすぎだよ。それと誰がフィルのことを要らないなんて言ったの。そんなこと誰も言ってないよ！！」

《フェイトさんの言うとおりですよ。マスターはマイナス思考になると、トコトンにまでなってしまいますからね。確かにあんな世界で生きていたらそうなるかもしれません。でも、ここでは皆さんは生きているんですよ！！》

「プリムの言うとおりだよ。フィルがいなかったらユーノだって助からなかった。なのは達だって分かり合えた。それはフィルのおかげなんだよ！！　だから、そんな風に思わないで！！」

「フェイトさん……プリム……」

「いつか言ったよね。私がフィルの心の支えになれないかって……その答え……聞かせてくれない」

フェイトさんの瞳は真剣そのものだった。
その場の雰囲気で言ってるんじゃなく、考え抜いて言ってるんだ。
だったら俺も真剣に答えを言わなくちゃいけない。

「フェイトさん……俺はかつての世界で、貴女のことは憧れでした。あっちの世界でも一局員だった俺に対しても、貴女はすごく優しく接してくれていた。俺にとっては貴女はまぶしすぎるくらいの人だった」

ロングアーチの一局員でしかなかった俺にも、フェイトさんは優しくしてくれた。
それがどんなに嬉しかったか……

「そして、こっちに戻ってきてからも、それは同じでした。ティア達の訓練を見守ってくれただけじゃなく、なのはさんと俺がぶつかりあったときも、俺たちを信じて手を出さないでくれた……」

本当は止めたかったはずなのに、俺たちを信じて飛び出さないでくれた。

俺となのはさん、そしてティアのことを信じて……

だから……

「俺は……貴女が……フェイトさんのことが好きです。憧れの存在としてではなく、一人の女性として……俺じゃ釣り合いがとれないのは解ってます。でも……」

「はい、そこまで」

そう言ってフェイトさんは、俺の唇に自分の人差し指を当てた。

まるでそれ以上言うのは許さないって言っているみたいだった。

「あんまり自分を卑下するのは感心できないよ。それじゃフィルを好きになった私もその程度って事なのかな」

「違う、それは違います！！」

「だったらもう少し自分を好きになって、自分を労れないんじゃ人を愛する事なんて出来ないし、それに私も悲しいよ。自分の愛している人に何かあったら……」

「フェイトさん……それって……」

「私の返事は最初から決まっているよ。私はフィルのことが大好きだよ。もちろん私の大切な男性としてだからね。だから……」

そういってフェイトさんは、俺を自分の方に抱き寄せた。

「せめて私にだけは弱さを見せて。そして……それを一緒に分かち合って、共に歩んでいきたい……」

「……だけど、一度弱くなってしまったら俺は……」

「フィルは自分が甘えすぎだって思うくらい甘えてくれて良いよ。そのかわり私も思いっきり甘えるから……ね……」

「……ありがとう……ございます」

俺はもう、フェイトさんの言葉に涙を堪えることが出来なかった。

「……フィル……」

フェイトさんが瞳を閉じると、俺もその唇に引き寄せられるように、自然とキスをしていた。

それは……すごく気持ちが安らぐキスだった……

＊　　＊　　＊　　＊

キスが終わると、二人して顔が真っ赤になっていたが、いやな気持ちはちっともしなかった。
それどころか、もっとフェイトさんを感じたいっていう想いが増すばかりだった。

「えへへ」

フェイトさんもそれは同じみたいで、年相応の笑顔だった。
いつもの凛々しいって感じじゃなく、本当にどこにでもいる普通の女の子って感じだった。

これがフェイトさんの本当の姿なのかもしれない。

「なんか……身体が少し冷えちゃったね」

「そうですね……」

フェイトさんが俺に身体を預けてきて、俺もそんなフェイトさんを抱き寄せた。

「フィル……後悔はしてない。私を選んだことに……」

「えっ？」

「だって未来ではティアナのことが好きだったんでしょう。それなのに……」

ティアのことは話していないのに、どうして分かったんだ？

「……どうしてそう思ったんですか」

「ティアナを見ている時のフィル、スバル達を見ている時とは違う表情をしていたから……もしかしてって思ったの」

本当によく見ていたんだな、俺たちのこと。でも、そこまで見ているとは思わなかったな……
そんなことを話していると、ポケットにしまっておいたクロスミラージュが突然光り出し、その光がフェイトさんを包み込んだ。

＊　＊　＊　＊

「ここは……」

何だろう、この真っ白な空間は……
外敵反応は見られないけど……

『ここはクロスミラージュが作り出した異空間です』

「誰……ってティアナ！！　……でも雰囲気がちょっと違う？」

『そうですね……あたしは、あっちの世界のティアナ・ランスターなんです』

「そっか……」

『あたしはずっとクロスミラージュの中で、フィルのことを見守ってきました。そして同時にフィルのことを助けてあげられない自分に対して、ものすごく腹を立てていました』

「ティアナ……」

『フェイトさん。貴女は遠慮しすぎです！！　あたしの願っていることはフィルの幸せなんです。この世界でフィルは貴女だけには唯一、自分の弱さを見せた。それは本当に貴女のことを愛しているからなんですよ。フィルって本当に好きな人じゃないと心を開かないから……』

「でも……それは、私じゃなくも……」

『……いえ、今のフィルを支えられるのは貴女だけなんです。訓練以外でも、あたし達やフィルのことを見ていてくれた貴女しか……』

『だから、あたしの分までフィルのことをお願いします。フィルが幸せになってくれることが、あたしの一番の願いなんです。これ以上フィルに、大切な人を失う悲しみを背負わせないでください！！』

ティアナは、もう涙を抑えることが出来なくなっていた。
辛いよね……本当は自分が愛する人の支えになってあげたいのに、それが出来ないんだもんね。

「……約束するよティアナ。絶対にフィルの事を守るよ。身体だけじゃなく心も……」

『それを聞いて安心しました。本当はこの世界のあたしに、もう少し頑張って欲しかったんですけど、フェイトさんなら全てを託せます……』

ティアナはすごく優しい笑みをしていた。
残念だけど、私にティアナみたいな心の強さは無い。そんなティアナが本当にすごいと思う。

「ティアナ……本当に強いんだね。心が……」

『残念ですが、時間みたいですね……それじゃフィルのことをお願いします……いつかまた……』

「うん、またね……ティアナ……」

＊　＊　＊　＊

「……う……ん……ここって……」

「気がつきましたか」

気がつくと私は見慣れない部屋にいた。

確か外にいたはずなのに……

「ここって、もしかしてフィルの部屋」

「すみません。時間も時間だったので、やむを得ずここへ……」

「私、ずっと気を失っていたんだね。どのくらい気を失っていたの」

「時間は３０分ぐらいですよ」

「そっか……」

「ティアの思い……聞けたみたいですね」

「うん……確かに受け取ったよ。ティアナの想いを……」

「そうですか……」

ティアがフェイトさんに、どんなことを話したかは解らないけど、きっと当人同士の秘密なのだろう。

「フィル……」

「何ですか……」

「決して一人で抱え込まないでね。苦しみも悲しみも、二人でなら乗り越えられるから……だからお願い……私を頼ってね」

「フェイトさんこそ俺を頼ってくださいよ。そっちこそ、一人で抱え込むことが多いんですからね」

「ふふっ、それもそうだね。じゃ、私も遠慮しないで甘えようかな～」

そう言って俺に寄りかかってきた。

やっぱりフェイトさん……かわいい……

「ねぇ、フィル～」

「ど、どうしたんですか……」

「私って甘えるとこんな感じだよ～　やっぱり……嫌かな……」

「言ったよね。普段のフェイトさんも今のフェイトさんも、全てが好きなんだよ。他の奴が見れない一面を見られてすっごく嬉しいしね……」

「あれ、フィルってそんな話し方だっけ？」

「親友とかにはこんな砕けた話し方だよ。それとも元に戻す」

「嫌だよ。やっと本当のフィルが見れたんだから戻しちゃ駄目だよ。私も本音で話したいから……ね……」

「そっか……だったらそうするよ」

「うん！！」

色々話していて、時刻も午前二時を過ぎようとしていた。

「なんか……戻りたくない」

「それはまずいだろ。俺も一緒にいたいが、こんな所をあの部隊長やシャーリーさん達に見つかったらと思うとゾッとする……」

「確かにね……はやてはまだいいんだけど、シャーリーやアルトは時々暴走するから……」

「「はぁ……」」

「今日の所は戻った方が良いかな。残念だけどね……」

「うん……明日も訓練があるしね」

フェイトさんはドアを開けて出て行こうとしたが、何か俺に訴えているような気がした。
何か俺にして欲しいみたいだけど……

「むぅ～」

「どうしたの」

「……お休みのキス……」

「あっ……」

言い終わったフェイトさんは顔が真っ赤になっていた。
女の人に言わせちゃうなんて、駄目だな俺は……

俺はフェイトさんを抱き寄せその唇にキスをした。
フェイトさんも別れを惜しむかのように長いキスをしてきた。

「……おやすみ、フィル……」

そう言ってフェイトさんは自分の部屋に戻っていった。

フェイトさんがいなくなったら、この部屋がすごく広く感じた。
昨日まではそんなことは全く思わなかったんだけどな。

そばにいて欲しい……

抱きしめたい……

そんな感情がいっぱいになっている……

好きな人がいると、こういう感じなのかもしれないな……

# 第１１話　機動六課のある休日

「はぁ……はぁ……やっぱりきつい……」

「そうね……はぁ……はぁ……」

「はぁ……はぁ……何か今日は特にそうでしたね……はぁ…はぁ…」

「はぁ……本当に……はぁ……」

「あぁ……」

「……あ……あんた……どうしてそんなにタフなの」

フィルはあの翌日からメニューが更にきつい物になっていた。
なのはがフィルのためにメニューを考えてくれたのだ。
そのおかげで、フィルも効率よく訓練が出来ている。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。でね、なにげに今日の模擬戦が第２段階クリアの見極めテストだったんだけど……どうでした。フェイト隊長、ヴィータ副隊長」

「「「「「えっ？」」」」」

「合格」

「「はや！！」」

「まっ……こんだけみっちりやってて、問題あるようなら大変だってことだ」

「「ははははっ……」」

エリオもキャロも、ヴィータ副隊長の言葉に苦笑いしか出なかった。

「わたしもみんな良い線いってると思うし……じゃ、これにて2段階終了！！」

「「「「やった！！」」」」

「やれやれだぜ……」

「デバイスリミッターも一段階解除するから、後でシャーリーの所に行って来てね」

「明日から、セカンドモードを基本形にして訓練すっからな」

「「「「はい！！」」」」

「明日から……ですか？」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日私達も、隊舎に待機する予定だし……」

「みんな入隊日から、ずっと訓練漬けだったしね……」

フォワード陣はちゃんとした休暇って、まだなかったからな。

そろそろティア達も限界が来ていたからな。

「まっ……そんな訳で……」

「今日はみんな一日お休みです。街にでも出て遊んでくると良いよ」

「「「「わ～い」」」」

「……それで、申し訳ないんだけど、フィルは……」

「「「「えっ？」」」」

「……ごめんなさい……わたしたちと一緒に、隊舎待機でお願い」

これはなのはさんに事前にお願いしておいたことだ。

俺はこの時期の休みは良いので後に回してくれって……

リミットブレイクはまだ完成してないけど、限定解除の調整もあるしな。

「ちょ、ちょっと待ってなのは!!　フォワードの中で一番休ませなきゃいけないのはフィルだよ。それなのに!!」

「フェイト隊長。わたしだってフィルを休ませてあげたいよ。でもね、これはフィルが言ってきたの。やることが多いから時間が欲しいって」

「なのはさん、それは!!」

「どういうことなのかな……フィル……」

「ちょ……ちょっとフェイトさん……」

「……言ったよね。一人で抱え込まないでって……」

「でも、これは俺の仕事だから……フェイトさんやティア達のデバイスのサポートは」

フェイトさん達は俺たちを鍛えてくれるのが仕事で、俺はみんなのデバイスに関することをサポートするのが仕事だ。

「でも、それでフィルが倒れたら意味がないよ。それとも……また、自分なんていなくても同じなんて、言うんじゃないんでしょうね……」

ヤバイ、フェイトさんの雰囲気がいつもと違う。

笑顔なんだけど、目が笑ってない……

しかも、何だこのプレッシャーは……あの時のなのはさんに匹敵する物を感じるぞ。

「エ、エリオくん……フェイトさんが物凄く怖い……」

「う、うん……僕もあんなフェイトさん見たことがない」

「テ、ティア……」

「言わないで……今のフェイトさんから感じるプレッシャーは、あの時のなのはさん以上だから……」

お前ら、他人事だと思って言いたいこと言ってくれるな。
フェイトさん……マジで怒ってるし……

「……ふぅ……こうなったら、誰かが一緒に付き添って、強制的に休みを取らせた方が良いね」

「なのは？」

「フェイト隊長。八神部隊長にはわたしとヴィータ副隊長が言っておくから、フィルを連れてどっか息抜きに行ってきて」

「本当にいいの、なのは。そんなことをして……」

「心配ないよ。このままフィルに無茶させて倒れられた方が、今後に支障が出てきちゃうよ。それに……」

（せっかく恋人同士になったんだから、一緒に出かけてフィルに甘えてきたら）

（な、なのは……どうしてそれを！！）

（にゃははは。やっぱりね。もしかしてって思ったんだけど、フェイトちゃん最近良い表情するようになったもん。わたしの感を見くびってもらっては困るよ）

（降参です。私ってそんなに分かりやすかったのかな……はぁ……）

「おい、なのは、フェイト。何さっきからコソコソ話してるんだよ」

「ごめんねヴィータちゃん。実は……」

「わぁぁぁぁ！！　ちょっと待ってなのは！！」

「……どうせフィルのことだろ。六課はあたし達に任せて、フィルとどっかに行ってこい。帰りにアイスでも買ってきてくれればいいからよ」

「……もしかして、私とフィルの事って、みんな……」

「今の所、はやてちゃんの所まで入ってないみたい。でも知ったら、六課中お祭り騒ぎになっちゃうよ」

「はやてだけならともかく、シャーリーやアルトに知れたら、面白可笑しくしそうだしな」

ああ見えても、はやては分別はわきまえる。
お祭り好きだけど、親友が嫌な思いをすることはしないしな。

「……否定できない……かも」

「その話はひとまず置いといて、フィル」

「は、はい」

「機動六課スターズ隊長として命令します。フィル・グリード二等陸士、現時刻をもって強制休暇を命じます。以降こちらからの指示があるまで仕事復帰は許しません」

「ちょ、ちょっと待ってください！！　まだやり残したことがたくさんあるんですよ。そんな時間は……」

デバイスの調整もそうだが、先日改造が終わったロードサンダーのテストだって残っているんだ。
そんなことを考えていると、なのはさんから念話が入ってきた。

（あのね、ちょっとは休まないと身体持たないよ。そんなんじゃフェイトちゃんだって、気が気でしょうがないよ）

（何でそこでフェイトさんの名前が出るんですか……）

（隠さなくても良いよ。付き合っているんでしょう、フィルとフェ

イトちゃん）

（……な、何のことでしょう）

（往生際が悪いよフィル。答えるまでにそれだけの間があったんじゃ、自分で白状しているのと同じだよ）

（ごめんフィル。なのは達にはとっくにばれていたみたい……）

ていうことは、知らぬは当人ばかりなりって事か……

（というわけで、フェイトちゃんと一緒に気分転換でもしてきてね。もし隠れて仕事していたら、はやてちゃんとシャーリーに言うからね）

（それだけは勘弁してください。特に後者は……分かりました。それじゃ遠慮無く休ませてもらいます）

（うん、フェイトちゃんのことよろしくね。最近スカリエッティのことを調べていて全く休んでいないから）

（フェイトさんもクロノ提督と一緒で、ワーカーホリックな所ありますからね）

（そういうこと）

「おい、なのは。そろそろ終わりにしようぜ。新人達に休みをやれなくなっちまうだろ」

「そうだね。今日はみんな一日お休みです。街にでも出て遊んでくると良いよ」

「「「「わ～い」」」」

「じゃ、今日はこれで終了。解散です」

「「「「はい、お疲れ様でした」」」」

ーフィルの部屋ー

「それにしても、まさかあんな形で休暇を取らされるとは」

《マスターは少し休んだ方が良いですよ。ずっと走りっぱなしじゃ、いつか息切れしてしまいますよ》

「それは、そうなんだが……」

《デバイスのことはシャーリーさんに任せておけばいいですよ。フェイトさんが怒りのオーラをまとってシャーリーさんに言いに行ってましたから。正直あれは怖いです……》

「あ、あはは……シャーリーさん。ご愁傷様です」

さっきのあれは、本当にシャレにならなかったぞ。
あれはなのはさんのプレッシャーよりきつかったぞ。

普段穏やかな人なだけあって怒るとすっごく怖い。
今頃シャーリーさん。フェイトさんに怒られているんだろうな。

教訓：フェイトさんを本気で怒らせてはいけない……

ー機動六課メンテナンスルームー

「シャーリー……」

「どうし……たん……ですか……フェイトさん」

「デバイスのこと……フィルに任せきりになっていたって本当なの」

「え……えっと……それは……」

やっぱい。フェイトさん滅茶苦茶怒っている。
考えてみたらティアナ達のデバイスのことも、なのはさん達のフルドライブに関しても、フィルに任せきりにしちゃっていた。

だって、こっちが考えたことよりフィルのプランの方が、色んなところで良い点が多かったんだもん。

「シャーリー、フィルにデバイスのことで聞くのは良いけど、任せきりにしているのは駄目だよ。あくまでもフィルはフォワードなんだからね」

「それは分かってます……」

今のフェイトさんは、下手なごまかしは言えない。
そんなことを言ったら、ティアナみたいに頭を冷やされてしまう。
比喩じゃなくて、今のフェイトさんなら本当にやる。

「それに六課のデバイスマイスターはシャーリーなんだからね。基礎設計は完成しているんだから、ここからはシャーリー達が中心になってやっていくことだよ」

「はい、すみませんでした」

「私からはこれ以上言わないけど、フィルの負担を出来るだけ減らしてあげてね」

そういってフェイトさんは部屋から出て行ったが、あんなフェイトさんは見たことがなかった。
怒鳴りはしなかったけど、ものすごく怒っているのは雰囲気だけで分かった。

でも、最近フェイトさんも変わったかも。ちょっと前まではあんなに自分を出す人じゃなかったのに。

「……確かに最近、フィルに頼ってばかりだったかも……」

「お邪魔するですよ～」

「リイン曹長」

「どうしたんですかシャーリー。何かあったんですか」

「さっきフェイトさんに怒られてしまいまして。最近フィルに頼りすぎだって」

「……確かに、フィルはなのはさんとの訓練とデバイスプランを、同時進行でやってましたから」

「リイン曹長。私ちょっとフィルに甘えすぎていました。だからこれ以降のことは、私たちロングアーチの総力をあげて完成させて見せます」

「そうですね。明日から四機の調整で慌ただしくなりますし、今の内になのはさんとレイジングハートの限定解除モード【エクシードモード】の最終調整もしておきたい所です」

「バルディッシュさんのザンバーもですけどね」

「あっ、リイン曹長もそろそろ完全チェックをしておきましょうか」

「そうですね。お願いするです」

そう、ちゃんとメンテナンスをしておかないと、いざというときに動けないなんて言うこともありえます。
そんなことな絶対にさけなくてはならない。

「最近はどなたともユニゾンされてないですね」

「ですね。はやてちゃんはもちろん、シグナムもヴィータちゃんも、私を使う程の状況にならないですし……」

「それ自体は良いことなんですけどね」

「でもいざというときに働けなくては、祝福の風リインフォースの名が泣きますから、それに……」

「これ以上フィルの負担にはなりたくないですから、私と蒼天の書のメンテナンス、よろしくですよシャーリー」

「はい」

＊　＊　＊　＊

俺が部屋でのんびりしているとフェイトさんが入ってきた。
あの日以来、フェイトさんは俺の部屋に来ることが多い。
これだけ頻繁に俺の部屋に来たりしていたら、バレても不思議じゃ

ないな……

「ねぇフィル。ロードサンダーのテストってこれからなんだよね」

「うん、慣らし運転もまだしてないんだ」

「そ、それでなんだけど……あ、あのね……」

「どうしたのフェイトさん」

「よ、よかったら私を一緒に、乗せてくれないかな……だ、だめかな……」

言い終わったフェイトさんは、真っ赤になってうつむいてしまった。
遠慮なんてして欲しくないんだけどな……

「良いよ。せっかくだから、俺のとっておきの場所にでも行ってみる」

「でも本当にいいのフィル。私を乗せたりして」

「俺……好きな人が出来たら、一緒にツーリングしてみたかったんだ。まさか、こんな一時を過ごせるなんて思ってみなかったけどな」

「フィル……」

そうだよね。今までそんな日常も得られなかったんだよね。
でもね……

「ねぇ、フィル。私にはいっぱい甘えていいんだからね。ずっと一人で頑張ってきたんだから……フィルが気を張ってばかりじゃ、私もつらいから……ねっ……」

「フェイトさん……ありがとう……」

俺たちはどちらからともなく、顔を寄せてキスをしていた。
やがて深いキスとなっていたが、互いに受け入れ、求め合っていた。
キスが終わると、二人とも恥ずかしさで顔が赤くなっていた。

「やっぱり……ちょっと恥ずかしいね……」

「でも、すごくフェイトさんを感じられる……そんな感じがする……」

こうして抱き合っていると、心までつながっている気がする。
人の温もりってこんなにも暖かい物だったんだな。

＊　＊　＊　＊

「さてと、ガレージからサンダーを持ってきますかね」

「フィルのロードサンダーって、確かＡＩが付いているんだったね」

「今回のプランでどうしても必要になってね。でもマリーさん達かなり悪ノリしていたからな……」

「確か、ティアナ達のデバイスもマリーさんの所に行った時に、基礎設計をしていたんだよね」

「クロスミラージュは俺のプリムを参考にして設計したから、さほど時間がかからなかったけど、他のデバイス、特にスバルのマッハキャリバーは途中で頓挫していたからな」

「さらに未完成だった私たちのフルドライブまで……本当にごめんね」

「謝らないで欲しいな。そう思うなら、無茶しないようにしてくれればいいから……」

「うん……」

「仕事の話はこれまでにしようか。ちょっと取ってくるから……」

「それじゃ私もエリオ達の準備を手伝ってくるね」

俺はガレージにあるロードサンダーを取りに行った。
フェイトさんも、エリオとキャロの支度を手伝ってから合流することになった。

ー六課ガレージー

「よっフィル、どっか出掛けるのか？」

「ヴァイス陸曹、脅かさないで下さいよ」

「わりぃ、わりぃ」

「で、何のようですか。ただ世間話をしに来た訳じゃないでしょう」

「……お見通しかよ。最近お前らの訓練を見たりするんだけどよ。ティアナの奴、いい動きをするようになったじゃないか。以前はシングルでも何でも動きが同じだったけど、最近は臨機応変に動けてきている気がするぜ……お前が色々やったおかげかもな」

実はあの日以降、俺のことは機動六課の全員が知ることになった。
なのはさん達に言ったのだから、別に隠すつもりはないがあっという間に広まるとは思わなかった。

「切欠にはなってるかもしませんが、ティア自身が吹っ切れたんじゃないですか。今はチームリーダーとして色々みんなのことも見れるようになりましたしね」

「ったく、本当はお前の方が強いくせによ……なのはさんに正面で、あれだけのことを言う事が出来るんだからな……」

「それは、もう言わないでくださいよ……」

「とにかくお前は今じゃ六課の中心的人物なんだからな。しっかり休んでリフレッシュしてこい。ここんとこロクに休んでないだろ」

「な、何のことでしょうか？」

「誤魔化すな。大方シャーリーが無理言ってきたんだろうが、あんまり自分に抱え込むなよ。フェイトさんすごく心配してたんだからな」

「なんか、本当にフェイトさんに心配かけていたんですね、俺って……」

「そう思うなら、フェイトさんには悩みとかを隠すなよ。女性に言えないことなら、俺やグリフィスだって良いんだからな」

ヴァイス陸曹……ありがとうございます。
その時はお願いします。

「そういえばさっきティアナの奴が、俺の所にバイクを借りに来ていたぞ。あいつもスバルと出かけるらしいな」

「そうですか。ティアもスバルも、何も言ってなかったのにな……俺って、のけ者になってるのかな」

「そうじゃねえよ。もう少しお前は女心を学んだ方が良いかもな……」

「えっ、どういうことですか？」

「それは自分で考えろよ。お前も出かけるんだろ。引き留めて悪かったな」

「いえ、それじゃ失礼します」

フィル、お前はもう少し自分の周りを見た方がいいぞ。
お前のことが好きなのは、フェイトさんだけじゃねえんだぞ。

ー六課隊舎玄関前ー

俺が隊舎前でフェイトさんを待っていると、なのはさんが見送りに来てくれた。

「なんか、すみません。俺のためになのはさんやフェイトさんにまで迷惑をかける形になって……」

「その事は気にしなくて良いよ。さっきも言ったけど、ここでリフレッシュしてくれないと、六課全体の志気に関わってくるの。特にフェイトちゃんは、フィルに万一のことがあったらどうしようもなくなってしまうから……」

「そこまではどうかと……」

「フィル、分かってない。今までなら大丈夫だったよ……だけど、今は違う。人は大切な人がいる時はとても強くなれるんだけど、それを失ってしまうと、とたんに脆くなってしまう。それはフィルも経験していることでしょう」

「あっ……」

そうだった。この事は誰よりも理解している事じゃないか。
なのはさんが言うまで、何で気づかなったんだよ。俺は……

「だから、フェイトちゃんの事を本当に好きなら、ちゃんと自分のことも気遣うこと。そうしないと共倒れだからね」

「なのはさん……」

「というわけで、なのはさんからのお話はこれでおしまい。もうすぐフェイトちゃんも来るしね……」

なのはさんと話していると、エリオとキャロを見送ってきたフェイトさんがこっちにやってきた。
俺の方からもエリオに、困った時のチケットを渡してあるので大丈夫だろう。

「フィル、ごめんね。待たせちゃって……あれ、なのはどうしたの？」

「どうしたのは無いんじゃない。わたしは二人の見送りに来たんだよ。ったくフェイトちゃん、最近わたしに冷たいよ～。やっぱ好きな人が出来ると、女同士の友情なんてこんな物なのかな～」

「な、なのは～」

「ふふ、冗談だよ。せっかくなんだから楽しんできてね」

「うん、ありがとう。なのは」

《相棒、そろそろ私のことを紹介してくださいよ》

「えっ、バイクがしゃべった？」

ミッドのバイクとかには簡易ＡＩは組み込んであるけど、ここまではっきりと意思があるなんて……

「そういえば、まだなのはさんには言ってなかったですね。紹介します、もう一つの相棒【ロードサンダー】です」

《はじめまして、私がロードサンダーです。よろしくお願いします、高町一等空尉》

「そんなかしこまらなくても良いよ、よろしくねロードサンダー」

《そうですか。それでしたら遠慮無くさせてもらいますよ、なのはさん。いやぁ、どうも堅苦しくていけませんね》

「お前な……」

「あ、あはは……」

なんか砕けた性格なんだね、ロードサンダーって……
でも、フィルの相棒には、これ位の方が良いのかも……

《いいじゃないですか。私は相棒が認めている人達には、本音で話したいんですよ。最も、フェイトさんは相棒の大事な恋人でもありますけどね～》

「なっ！！」

こいつは、いったい誰に聞いたんだ。
色恋沙汰に、こんなに突っ込む奴だったのか

《サンダー、その辺にしておいてくださいよ。この二人とってもウブですからね。うふふ……》

プリム、お前かい！！　サンダーに要らんことを教えていたのは！！見ろ、フェイトさんも顔が真っ赤になっちまってるじゃないか！！

「……恋人……か……ちゃんと見えているんだね。私たち……えへへ……」

「本当は俺の方がもっと頑張らないと、釣り合いがとれないけどね」

「そんなこと無いよ。私の方こそフィルに相応しいのかって思うんだよ！！」

「フェイトさん……」

「フィル……」

「あの……お二人さんそろそろ出発した方が良いんじゃない。ていうか、これ以上独り身のわたしにラブコメシーンを見せないで！！」

ヤバイ。そういえばなのはさんがここにいることをすっかり忘れていた。

俺はロードサンダーのエンジンをかけ、フェイトさんも俺の後ろに座った。

「そ、それじゃ行ってきます。なんかあったらすぐに戻ってきますから」

「だから仕事のことは一旦忘れなさい。フェイトちゃん、フィルのことしっかり頼んだよ」

「まかせて、しっかりリフレッシュさせるからね」

《任せてください。相棒のことは私たちがしっかりと休ませますから》

俺たちはなのはさんに見送られて出発した。

＊　＊　＊　＊

「フィル達行ったよ。ティアナ」

「……すみません、なのはさん」

フィル達がくる前にあたしは、スバルを待つためにここにいたんだけど、なのはさんが……

『フィルとフェイトちゃんも、ここで待ち合わせをするみたいだから……』

そう言われて、あたしはなのはさんに頼んでここに隠れさせてもらっていた。
正直言って、今フィルにあうのは辛いから……

「……なんかティアナには、辛い物を見せちゃったね」

「いえ、あたしがちゃんとフィルに告白しなかったのがいけないんです。それに……フィル、すごく良い表情してました。フィルのあんな表情見たことがなかった……」

「うん、それはフェイトちゃんも同じだよ。わたし達と一緒にいた時でもあんな顔は見たことがなかった」

「今のあたしじゃフィルの事を支えられないですから……」

「ティアナ……」

「……あっ、そろそろスバルも来るみたいです」

「ごめ～んティア」

「ったく遅いわよ。あんたっていつもそうなんだから」

「だから、ごめんってば……」

スバルとティアナも、バイクに乗ってクラナガンに向かった。
ティアナ、いつかその辛い気持ちも良い思い出に変われる日が来るから……

ー機動六課食堂ー

『以上、芸能ニュースでした。続いて政治経済です。昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、来年度の予算会議が行われました』

『当日は、首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中将による、管理局の防衛思想に関しての表明も行われました』

フィル達を見送った後、わたしははやてちゃんとフェイトちゃんをのぞいたメンバーでちょっと遅い朝食を取っていた。

何気なくテレビを見ていたんだけど、そんなとき画面は、体格の良い厳つい顔をした人の映像に切り替わっていた。
レジアス・ゲイズ中将である。

『魔法と技術の進歩と進化。素晴らしいものではある……が、しか

し！！　それが故に、我々を襲う危機や災害も、十年前とは比べ物にならない程に危険度を増している。進化する世界の平穏を守るため、我々も本局の魔導師たちに負けじと、錬練し続ける事で対処してはきたが……ついに、兵器運用の強化が必要な状況になってしまった。しかしこんなところで立ち止まるわけにはいかん！！　現状では首都防衛の手すら、未だ足りておらん。地上戦力においても、我々の要請が通りさえすれば、地上の犯罪も発生率で２０％の減少、検挙率においては３５％以上の増加を、初年度から見込む事が出来る……』

「このおっさんは、まだこんなこと言ってんのかよ……」

「レジアス中将は古くからの武闘派だからな。だがなヴィータ。言っていることはあながち間違ってはいないぞ」

「何でだよ？」

「良いか。レジアス中将がここまで力を入れなかったら、首都のクラナガンでさえ、ロクな状態ではなかったはずだ。まぁ、いささかちょっと行き過ぎな面もあるがな」

「……そうだね。わたし達なら、自分の身は自分で、ということも出来るけど……」

「そういうことだ。一般人では犯罪者に襲われたらひとたまりもない。フィルが経験してきた未来でもそうであったようにな」

「うん……」

あの時、フィルから見せられた映像にはクラナガンの人々の悲惨な記録も残されていた。

ガジェットから逃げまどう人々の姿。

治安が崩れた町では数々の犯罪を繰り返していた。

中でもひどかったのは、女子供への性的犯罪だった。

魔力を持たない非力な子供や女性は、犯罪者の格好の的になっていたのだ。

地上本部が消えて、犯罪者を取り締まる組織がいなくなったことで滅茶苦茶になっていたのだ。

フィル達だけでは、とうてい対応なんて無理だった。

「まぁ、我々も今までは、お前と同じような考えをしていたがな。だがな、今後スカリエッティに対抗するには、地上本部と本当の意味で連携を取らなくてはならないんだ」

「そうだね……」

「そのことに関しては、主はやてに任せるしかないだろう」

「そうだぜ、後のことは、はやてがやってくれるって、あたし達は前線を守るのが仕事だしな」

そうなんだけどね。大丈夫かな、はやてちゃん一人で抱え込まなき

ゃいいんだけど……

ーフィル・フェイトサイドー

「う～ん。気持ちいいね～」

「ああ、車とはまた違った物があるしな」

俺たちは今、ミッドチルダ外れの山道を走っていた。
高速を走るのも良いが、偶にはこうやってツーリングするのも良い。
ただ俺の背中に感じる……その……胸が……
理性持つかな……俺……

「私は車がメインだからね。一応二輪の免許は持ってるんだけどね……」

「俺は逆にバイクがメインだからな。でも偶には車も良いかなって思うんだ。フェイトさんの車、格好いいしね」

「だったら今度私の車を運転してみて良いよ。結構いじってるから

ちょっと癖あるけどね」

「俺もサンダーを運転させてあげたいんだけど、こいつが自分で認めないとな……」

そう、ロードサンダーはＡＩがあり自分の意志でドライバーを選ぶ。今の所、俺とティアしか運転が出来ないのだ。

《相棒、私はフェイトさんなら構いませんよ》

「サンダー？」

《フェイトさん、貴女は相棒を本当の意味で救ってくれた。プリムから聞きましたが、アグスタの後、貴女だけはティアナさん達のことをちゃんと見ていてくれていた。それに……》

《相棒が好きになった人です。それだったら私にとっても、大切な人です。だから遠慮しないで乗ってください》

「……ありがとう、ロードサンダー。とっても嬉しいよ」

《ただし、私に乗る以上全開で回せる腕がないといけませんよ。相棒もティアナさんも、全開でエンジンを回しますからね……》

「……ふふっ、だったらその挑戦を受けて立っちゃおうかな。ちょっと変わってもらって良いかな、フィル」

「良いよ。フェイトさん、思いっきり回して構わないから……」

「楽しみだな。バイクを運転するのって久しぶりなんだ……」

俺は近くの路肩に停車して、フェイトさんと運転を代わることにした。

フェイトさんは俺と入れ替わると、ハンドルを握りエンジンを勢いよく回していた。

あ、あの……本当に久しぶりなんですか。

慣らしの仕方といい、ギアの入れ方といい、明らかに熟練者のものですけど……

「さて、しっかりつかまっててよフィル」

「目的地はサンダーにインプットしているから、それに従っていけば迷わないから……」

「分かった。じゃ行こうか」

フェイトさんはサンダーのスロットルを全開にすると、ホイルスピンをさせながら発進した。

ーティアナ・スバルサイドー

あたしとスバルはヴァイス陸曹にバイクを借りて、クラナガン中央部に来ていた。
ここに来るのもなんか久しぶりなのよね。

「なははっ、やっぱりここのアイスは見た目から素敵だ」

「本当にアイスが好きよね、あんたは」

「好き好き大好き～」

あたしはダブルで押さえたのだが、スバルのは七つも乗せている。
明らかに常識の範疇外でしょう、あれは……

「さて、それじゃ……」

「「乾杯」」

アイスで乾杯ってのは何だが、まぁこれもあり……かな……

「……はぁ……ひぃ……ふめたい……」

「スバル。そんなんじゃ、すぐになくなるわよ」

「平気平気。ねぇ、アイス食べ終わったら、ゲーセンでも行かない」

「いいわね。久しぶりね」

まぁ、今はこうやってスバルと一緒に楽しみますか。

ーフィル・フェイトサイドー

「やれやれ、ひどい目にあったぜ。全くあんなに全開で走らなくても……」

「ごめんね。でも良いテストになったでしょう」

俺たちはクラナガンの外れにある海岸になってきていた。

シーズンオフということもあり、ここにいるのは俺たちくらいなものだった。

《相棒、私が愚かでした。女性だから大丈夫なんて思ってましたが、限界ギリまでブン回されるとは思っていませんでしたよ。考えてみればティアナさんもそうでしたね……》

まさかフェイトさんが、俺やティア以上に全開走行する人とは想わなかった。
あきらかに慣らしの運転じゃないぞ……あれ……

「そういえば、フェイトさんの車ってスポーツカーだったよな。しかもミッドチルダで最高スペックの……おまけに値段も……」

《はっきり言って、あの車は町中で乗るには、明らかにハイスペックです。さらにエンジンからサスペンションに至るまでフルチューンしてますし、彼女はあれでサーキットでも走る気なんですか》

もしかしたらフェイトさんって、ハンドル握ると性格が変わるタイプなんじゃないか。
サンダーを運転してる時、普段の雰囲気とは全然違ったぞ。

「フィル、何してるの。早く行こう～」

「ああ、今行くから」

さてと、お姫様の所に行くとしますか。

＊　＊　＊　＊

「はいどうぞ。時間がなかったから、こんな物しか作れなかったけど」

「そんなこと無いよ。本当にごめん、弁当まで作ってもらっちゃって……」

あの短時間でこれだけの弁当を作ってくるとは、やっぱりフェイトさん料理上手なんだな。
弁当の中身は、三種のサンドウィッチ（ツナ、玉子、ハムとチーズと高原野菜）
おかずは唐揚げと卵焼き。
生野菜はレタスとトマトとアスパラガスのサラダ。
デザートとしてりんご。それもうさぎ形にむいてあった。

「じゃ、いただきます」

「ちょ、ちょっと待って……あ、あ～ん……して……」

そう言ってフェイトさんは、唐揚げを持ったまま顔を真っ赤にしていた。
これってあれだよな。恋人同士がやる……
めっちゃ恥ずかしいけど、これで一人で食べられるからなんて言ったら、絶対泣くだろうな。
それにフェイトさんが勇気を出して、こんな事してくれてるんだ。

「あ……あ～ん」

「……う…」

「ど、どうしたの……美味しくなかった……」

「うまい！！」

「ん、もう～　脅かさないでね」

「ごめん、でもマジで美味しい！！」

「よかった。頑張って作ったんだよ。フィルに喜んで欲しくて……」

やっべぇ、俺涙出そうなんだけど……
手料理なんて、久しく食べてなかったからな。
いつも自炊か食堂のご飯だったし……

「ふぅ……ごちそうさま。本当に美味しかった」

「はい、おそまつさま。よかった、喜んでもらえて」

「今度は俺がなんか作るね。フェイトさんにも俺の手料理を食べて欲しいし……」

といっても料理じゃフェイトさんには敵わないしな……

「楽しみだな。ティアナ達が言ってたけど、フィルって料理だけじゃなくて、洋菓子も作れるんでしょう……」

「まぁ、それなりにだけどね。女の人だとケーキとかの方が良いかもね。フェイトさんって何が好きなの？」

「ケーキは何でも好きだけど、チョコ系が特に好きかな」

「分かった。とっておきの作るから、楽しみにしていてね」

「ありがとう。私、楽しみにしているね！！」

＊　＊　＊　＊

フェイトさんの手料理を食べ終わった後、俺たちは砂浜に座って、海を眺めていた。

「波の音が、気持ちいいね……」

「ああ、昔はよくここに来たものさ。任務で失敗した時とか、嫌なことがあった時ここに来てた……」

なんか懐かしいな。誰にも言えないことがあったりすると、よくここに来ていたもんだ。

「じゃ、フィルの大切な思い出の場所って訳だね。ティアナ達とかは知らないの？」

「フェイトさんが初めてだよ。元々俺は一人になることが多かったしね……」

「嬉しいな。でも私で良かったの」

「当たり前でしょう。フェイトさんは、俺の……大切な彼女なんだから……」

「彼女……か……初めてだね。フィルがちゃんと、私のことを彼女って言ってくれたのは……」

「そう……かもしれない……やっぱ心のどこかでフェイトさんのことを高嶺の花って思っていたから。彼女って言うのに勇気が無かったんだ」

「フィル。女の子はちゃんと言って欲しい時があるんだよ。例え心が通じ合っていても、言葉で欲しい時があるんだから。いつまで経っても、私のことを彼女って言ってくれないから、不安になっちゃったんだ……」

「今まで不安にさせてごめん。これからはちゃんと言うよ。俺はフェイトさんの彼氏なんだしね」

「うん！！」

フェイトさんの本当の笑顔って初めて見たかもしれない。
なのはさんが言ったように、まだ俺はフェイトさんのことを分かってないんだな。

「……フィルがちゃんと彼女って言ってくれたから、私もちゃんと言うね。これからもよろしくね、私の大切な彼氏さん」

女の人の上目遣いでの仕草って、本当にグッと来るものがあるな……
ましてフェイトさんだと、さらに破壊力があるな……
ていうか俺ってこんな事考える奴だったっけ。

「もう少し、そばに来てくれる……」

「うん」

そう言ってフィルは私を自分の方へ引き寄せた。
フィルがこんな事をするのには、ちょっと驚いたけど、フィルが私に心を開いてくれたんだなって思うとすごく嬉しかった。
私もフィルに甘えたかったので、フィルに身を任せた。

やがてどちらかとも無く、顔を寄せキスをしようとした時……

『こちらスターズ1、高町なのは。フェイト隊長、フィル応答して……』

それぞれのデバイスになのはからの通信が入ってきた。

「こちらライトニング1、どうしたの？」

『休暇中にごめんなさい。さっきキャロから緊急通信が入ったの。サードアベニューF－23の路地裏にてレリックとおぼしきケースを発見。ケースを持っていた小さな女の子が一人一緒にいるの』

「フィル、もしかして……」

「ああ、間違いないな……」

『救急の手配はこちらでしているから、二人は急いでエリオ達と合流して！！』

「「了解！！」」

さて、お休みはこれまでか。頭を切り換えて現場に向かいますか……

ー聖王教会　本部ー

「それにしても、あなたの制服姿はやっぱり新鮮ですね」

「ああ、制服が似合わないって言うのは、友人どころか妻にまで言われますよ」

「ふふ、そんないつもの防護服姿と同じ位、凛々しくいらっしゃいますよ。クロノ提督」

「ありがとうございます。騎士カリム」

「失礼します」

クロノ提督と話をしていると、シャッハと一緒にシグナムがやってきた。

「ああ、シグナム。お帰りなさい」

「合同捜査の会議はもう……」

「ええ、滞りなく……」

「こっちは丁度、六課の運営面の話がすんだ所だよ」

「ここからは今後の任務についての話。あなたも同席して聞いておいてね」

「はい」

話を始めようとした時、はやてからの直接通信が入った。
いったい何があったんだろうか。

サードアベニュー路地裏

「「エリオ、キャロ」」

「フィルさん、フェイトさん……」

私達が現場に到着すると、すでにフォワード陣がそろっていて、女の子を保護していた。

「この子か……ずいぶんまたボロボロに……」

「地下水路を通ってきて、随分長い距離を歩いてきたんだと思います」

「こんなにちっちゃいのに……」

「ケースの封印処理は」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います」

「……うん」

「それから、これ……」

エリオが持っていたのは、封印処理をしたケースと同じ形のものだった。

「ケースがもう一つか……」

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

「……フィル」

「ああ……間違いないですね」

「なのは隊長とシャマル先生、それとリイン曹長がこっちに向かっ

ているから、俺たちはとりあえず現状を確保しつつ周辺警戒だな」

「「はい」」

「「うん」」

「サンダー、お前はこの子のバイタルとかを確認してくれ。今器具を取り付ける」

《了解です》

「えっ、そんなことも出来るの？」

「サンダーには、緊急用のメディカルウエポンが積んであるんです。シャマル先生がつくまでの、応急処置程度なら対応可能なはずです」

「そうなんだ……」

「フェイトさん、この子に心電図用のコネクターをつけてくれませんか。その後血圧のチェックを……俺は酸素飽和度を調べますから」

「分かった」

フェイトさんにバイタルチェックを任せ、俺はサンダーのシステムを使ってＳｐｏ２（酸素飽和度）を調べていた。
酸素とか使う状態でなければ良いんだけどな。

ー機動六課、作戦司令室ー

今回の事態に対して、レリックがらみになると判断した私は、後見人であるカリムに通信を入れていた。
ちょうど、六課のことで話をしていたクロノくんとも話をすることが出来た。

「そう、レリックが……」

「それを小さな女の子が持ってたってのも気になる。もしかしてフィルが言っていたことと関係するのかも知れない」

「ええ……」

フィルが経験してきた事件は、この事は以前もあったらしい。
でも、今回もうまくいくとは限らない。
現に、ユーノくんは生きているし、少しずつ歴史は変わってきている。

「ガジェットや召喚師が出て来たら、市街地付近での戦闘になる。なるべく迅速に確実に片づけなければあかん」

「近隣の部隊にはもう……」

「うん。ちゃんと地上本部と市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。

でないと後で情報の混乱が生じるからね」

「ああ」

「……もしかしたら、奥の手も出さな……あかんかもしれん」

「そうならないことを祈るがな……」

「……シグナム、あなたも向こうに戻っておいた方が良いわ」

「はい」

「シャッハに送ってもらえばすぐ戻れるから……」

「ありがとうございます、騎士カリム」

私が出来ることはこれくらいしかありませんが、後は頼みましたよはやて、フィル。

ーサードアベニュー路地裏ー

検査も終わり、しばらくすると隊長達を乗せたヘリがやってきて、シャマル先生が女の子の体調を調べていた。

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

「はい」

「よかった……」

「それにしても、私がすることは殆どなかったわね。フィルが殆どやってくれていて、私は再確認ぐらいしかすることがなかったわ」

「いえ、ちゃんとしたことは調べられませんから……」

「それでも現状で出来ることは全てやれているわ。心電図なんて本当はこんな所じゃ出来ないのに……」

「まぁ、現段階で緊急性がなかったからよかったですけど、大怪我とかはどうしようもありませんからね」

サンダーに積まれているのは、あくまでも応急的なものであって、その場でどうにかしようとするものは積まれていない。
だからこの子が緊急性がある状態なら、この場では難しいのだ。

「ごめんね、みんな。せっかくのお休みなのに……」

「いえ」

「平気です」

「ケースと女の子は、このままヘリで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「「「「はい」」」」

「なのはちゃん、この子をヘリまで抱いてってもらえる」

「はい」

「あっ、俺がやりますよ」

俺は女の子を抱えヘリに連れていく事になった。
その間、ティア達は現場調査のための準備をしていた。

ー機動六課、作戦司令室ー

スクリーンにガジェット反応が現れ、機影を写した。

「ガジェット来ました!!、地下水路に数機ずつのグループが少数。16……20」

「海上方面、12機単位の小グループ」

「……多いな」

「どうします。八神部隊長」

「そうやな……」

『スターズ2からロングアーチへ。こちらスターズ2。海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている。それからもう一人……』

『108部隊ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

「うん、お願いや。ほんならヴィータはリインと合流。協力して海上の南西方向を制圧」

『南西方向ですね。了解です』

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から」

『『了解』』

「ヘリのほうは、ヴァイス君とシャマルに任せてええか」

「お任せあれ」

「しっかり守ります」

『ギンガは地下でスバル達と合流。道々別件の話も聞かせてな』

「はい」

ーフォワードサイドー

「さて、みんな短い休みは堪能したわね」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れていこう！！」

「「はい！！」」

《《《《《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ》》》》》

「「「「「セットアップ！！」」」」」

あたし達はバリアジャケットを装着し、地下道へ潜ることにした。

「「Ｇｏ！！」」

ー地上・ヘリポートー

「フォワードのみんな、ちょっと頼れる感じになってきた」

「うふふ、もっと頼れるようになってもらわなくちゃ……」

そう、それぞれが、一人前のストライカーとなってもらわなくちゃならない。

それが未来からきたフィルの願いであり、私達の願いでもあるから……

「早く事件を片づけて、また今度お休みを上げようね」

「うん」

「それはそうとフェイトちゃんも楽しめた。フィルとは少しは進展したの～」

「な、なのは！！」

フェイトちゃんはわたしの言葉に顔が真っ赤になってしまった。

それじゃ、フィルと何か進展しましたって言っているのと同じだよ。

まったく、そんなんじゃはやてちゃん達に知られたら、格好の餌だよ。

「と、とにかく私達も出よう……」

「はいはい……」

バリアジャケットを装着し、空に飛び上がり迎撃することにした。

ーヘリ内部ー

ヴィータちゃんと合流するため、私はシャマルとヴァイス陸曹と別行動を取ることになり、シャマルにハッチを開けてもらい、今から向かうことになった。

「気を付けてね」

「はいです」

「ヴァイス陸曹もよろしくですよ」

「うっす」

「ストームレイダーも二人を守ってあげて下さいです」

《Ａｌｌｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ》

ービル屋上ー

「ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹たちが回収します。お嬢様は地下の方に……」

「うん……」

「騎士ゼストとアギト様は……」

「……別行動」

「お一人ですか？」

「一人じゃない……私にはガリューがいる」

「失礼しました。協力が必要でしたらお申し付け下さい。最優先で実行します」

「うん」

ウーノからの通信が切れ、私は行動を開始することにした。

「行こうかガリュー。捜し物を見つけるために……」

ー機動六課、作戦司令室ー

「スターズ1、ライトニング1、現場に進行。後1分ほどでエンゲージです」

「スターズ2、リイン曹長と合流」

「フォワード陣、ガジェットの目標点に進行中。このペースなら先行出来ます」

ー地下道ー

「ギンガさん、お久しぶりです」

『うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょう』

「いえ、現場リーダーはフィルです。今回はフィルの方が適任だったもので……」

「えっ、フィルそこにいるの」

「久しぶりですね、ギンガさん。時間がないので簡単に説明します。

ひとまず南西のＦ－９４区画を目指して下さい。途中で合流しましょう」

『……Ｆ－９４、了解。フィル後で会いましょうね』

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね」

「そう、あたしのシューティングアーツの先生で、歳も階級も二つ上」

「ほぇ～」

「ギンガさん、デバイス同士で総合位置把握と独立通信が出来ます。準備は良いでしょうか？」

「うん、ブリッツキャリバーお願いね」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ！！》

私はブリッツキャリバーを起動させ、バリアジャケットを装着した。

フィル、あなたの作ったブリッツキャリバー、使わせてもらうね。

ー機動六課、作戦司令室ー

「スターズ１、ライトニング１、エンゲージ」

なのはちゃん達がガジェットを迎撃してくれているが、いかんせん数が多い。
これで終わればいいんやけどな……
そして今、ギンガから事故現場の状況を聞いていた。

「私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです。丁度5～6歳の子供が入る位の……。近くに何か重いものを引きずって歩いた後があって、それを辿っていこうとした最中、連絡を受けた次第です」

「そうやったんやね」

「それからこの生体ポッド、少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです」

「私も……な……」

「……人造魔導師計画の……素体培養器……」

「これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素体として作り出された子供ではないかと……」

ーフォワードサイドー

「人造魔導師って？」

「優秀な遺伝子を使って、人工的に産み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な能力や魔力を持たせる。それが人造魔導師……」

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたって色々無理が生じる。コストも合わない。だから、よっぽどどうかしている連中でない限り、手を出したりしない技術のはずなんだがな……」

でも、スカリエッティはそれに手を出した。未来で戦闘機人が出て来ていたのがその証拠だ。
そしてあいつらのせいで、みんな殺されたんだ……

《動体反応確認。ガジェットドローンです》

「っ！！、来ます。小型ガジェット六機！！」

「スターズ1、ライトニング1、共に2グループ目を撃破。順調です！！」

「うん」

「スターズ2とリイン曹長も、1グループ目、撃破です！！」

「おしっ、いい感じだ！！」

「リインも絶好調です！！」

「ガンガン行くぞ。さっさと片づけて、他のフォローに回らないと……」

「はいです！！……って、あれは！！」

リインが気付いたのは増援のガジェットだった。
だけど何かがおかしい気がする……

「この反応……」

「……うん」

なのは達も何か気付いたようだな……

「ふふふ、クアットロのインヒューレントスキル。シルバーカーテン。嘘と幻のイリュージョンで回ってもらいましょう」

いくら機動六課の隊長達に力があったって、この幻影には手こずるでしょうね。

さて、どういう風に動きますか。じっくり見せてもらいますわよ。

ー機動六課、作戦司令室ー

「航空反応増大!!、これ……嘘でしょう!!」

「なんだ……これは……」

「波形チェック!!　誤認じゃないの!!」

「どのチェックも実機としか……」

「なのはさん達も目視で確認出来るって……」

「グリフィス君!!」

「はい！！」

嫌な予感が的中してしまったな。
もう出し惜しみしてる場合やないな……

ー海上、なのは・フェイトサイドー

私となのはは迎撃を繰り返しているが、このガジェット達は全部が本物という訳ではないみたいだ。

「幻影と実機の構成編隊……」

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね……」

「ここまで派手は引きつけをするって事は……」

「ヘリか地下道に主力が向かっている」

なのはがオーバルプロテクションを使って防戦の状態になっているが、このままじゃ状況は悪化する一方だ……

「なのは、私がここに残ってここを抑えるからヴィータと一緒に……」

「フェイトちゃん!?」

「コンビでもこのまま空戦していたんじゃ、時間が掛かる。限定解除すれば広域殲滅でまとめて落とせる!!」

「それはそうだけど……」

「何だか嫌な予感がするんだ……」

「でも、フェイトちゃん……」

「割り込み失礼。ロングアーチからライトニング1へ。その案も限定解除申請も、部隊長権限にて却下します」

「はやて?」

「はやてちゃん、なぜ騎士甲冑?」

「嫌な予感は私も同じでな。クロノ君から私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ……」

「ちゅうことでなのはちゃん、フェイトちゃんは地上に向かってヘリの護衛。ヴィータとリインはフォワード陣と合流。ケースの確保を手伝ってな」

「「了解！！」」

ー聖王教会、本部ー

「君の限定解除許可を出せるのは、現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使ってしまって良いのか……」

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するのは嫌やからな。私かてあんな未来はごめんやし……」

「場所が場所だけに、ＳＳ（ダブルエス）ランク魔導師の投入は許可出来ない。限定解除は3ランクのみだが、それでいいか……」

「……Ｓ（シングルエス）、それだけあれば充分や」

「ふう……」

僕は魔法陣を展開し、はやての限定解除を行うことにした。
確かに現状ではこれしかないが、なるべくなら使いたくはなかったな……

「八神はやて、能力限定解除3ランク承認。……リリースタイム1

２０分」

「リミット……リリース！！」

能力限定解除されると同時に、ベルカ式の魔法陣が強い光を放ち、力が解放された。
そしてスクリーンには魔法陣の光が強く輝いているはやての姿があった。

「完全解除で無い分、許諾取り直しも幾らか優しくなるかも知れませんし……ね……」

「……気休め程度ですがね。地上部隊は上層部が厳しいです」

＊　＊　＊　＊

とうとう使ってしまった……切り札の限定解除。
でも、ここで使わなくちゃどうしようもない。
だけど、フィルの限定解除は、最後の切り札や。
出来るだけ、出したくない。

「よし……久しぶりの遠距離広域魔法、行ってみようか！！」

ー地下道、フォワード陣ー

ガジェットと交戦している私達は、通信やサーチャーで現状を知ることが出来た。
どうやら向こうも本格的に動いてきているみたいね。

「空はどうやら大変みたいね……」

「うん……」

「ケースの推定位置までもうすぐみたいです」

「うん」

ケースの推定位置に向かおうとした時、壁が爆破し誰かが現れた。
煙が引くとそこには……

「ギン姉ぇ！！」

「ギンガさん！！」

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットは、殆ど叩

いてきたと思うから……」

「うん！！」

「フィル……」

「うわっ……ちょっとギンガさん」

再開もつかの間、いきなりギンガさんが俺に抱きついてきた。

「フィル……本当に会いたかった。私、どうしてもあなたに、直接お礼が言いたかったの」

「俺は約束を果たしただけですよ。ギンガさんが全力を出せるように……ね……」

「フィル……あたし……」

「ギンガさん、今はそんなことをしている場合じゃないでしょう。今は先に進まないと……」

「そうね、ティアナ。とにかく急ぎましょう……」

ー機動六課、作戦司令室ー

「ロングアーチ1シャリオから、ロングアーチ0八神部隊長へ」

「はいな」

「サイティング・サポートシステム、準備完了です。シュベルトクロイツとのシンクロ誤差、調整終了」

「うん、了解。ごめんな、精密コントロールとか長距離サイティングとか、リインと一緒やないと、どうも苦手で……」

「その辺はこっちにお任せ下さい。準備完了です」

「……おおきにな」

シャーリーからの通信が切れると、ガジェットを殲滅するために夜天の書を出し、シュベルトクロイツを構えた。

「来よ、白銀の風……」

「天よりそそぐ矢羽となれ！！」

ベルカ式の魔法陣が足下に展開され、全面にはミッド式の魔法陣が展開された。
私は、なのはちゃんとフェイトちゃんが安全域まで退避したのを確認し、撃つことにした。

「第1波、行くよ！！」

魔力チャージが完了し、前面の魔法陣も強い光を放っていた。

「フレース……」

「ヴェルグ！！」

五つの白き砲撃はガジェットに向かって、一直線に向かっていた。

ー機動六課、作戦司令室ー

「フレースヴェルグ、第1波発射」

「発射軌道……正常！！、グループEに着弾します」

「5……4……3……」

「2……」

「1」

「0」

カウント0と同時に光弾の一つが広域爆発を起こし、ガジェットのグループを殲滅した。

続いて第2波、3波が発射され次々とガジェットのグループを消滅させていった。

「シャーリー、消滅時のデータから幻影と実機の判別パターンの割り出しを。フィルのくれたデータがあれば必ず見分けられる」

「うん、全力で見つける!!」

こっちにはフィルがくれた戦闘機人のデータがあるんだ。

必ず判別パターンを割り出してやる。

ーフォワード、ギンガサイドー

俺たちはガジェットと交戦しながらケースの在処に向かっていた。
ギンガさんも加わったおかげでかなりの戦力アップがした為、ガジェットも全機殲滅をし、ケースの近くまで来ていた。
そして……

「ありました！！」

キャロがケースを見つけたその時、何かを蹴って近づいている物音がした。
物音の正体は球体で、ケースを持っているキャロに近づいていた。

「きゃぁぁぁ！！」

黒い物体はスピードを上げ、地面に落下すると衝撃でキャロが吹っ飛ばされてしまった。
どうやら今の衝撃でケースもどこかに行ってしまったみたいね。
すぐにエリオが迎撃するが、手傷を負わせられたみたいね。

「エリオくん！！」

黒い物体の幻影が解けると、そこには一匹の魔物が立っていた。
違う、あれは召還獣だ。それもかなり力がある奴だ……

「あっ！！」

召還獣に気を捕らわれていると、紫の髪の少女がケースを奪おうとしていた。
キャロが気が付いて取り返そうとしたが……

「……邪魔」

少女の攻撃にキャロはプロテクションで防ぐが、至近距離で受けてしまったためプロテクションが破られ吹っ飛ばされてしまった。
スバルとギンガさんが魔物に対応しているが、二人がかりで何とかの状態だ。
どうする……考えろ……今すべき事は……

「こらぁ、そこの女の子。それ危険なものなんだよ！！こっちに渡して！！」

スバルの言葉にも全く介さない様子だった。

「……ごめんね。乱暴で……でもね、これ本当に危ないものなんだよ」

「……くっ！！」

そう、スバル達が引きつけてくれている間に、ティアはオプティクハイドを使って少女に近づいたのだ。
クロスミラージュの魔力刃を首元に近付け、動きを封じることに成功した。

（ルールー、1．2，3で目をつぶれ。いいか……）

（1……2……）

（スターレンゲホイル！！）

ティアが少女を逮捕しようとした次の瞬間、紫の炎が飛んできて強烈な爆音と閃光が発生した。
あまりの音に耳を塞ぐことになり、少女から注意をすらしてしまった。
その隙に逃げようとしていたが、なんとかクロスミラージュを向けたが、召還獣の攻撃に吹っ飛ばされてしまった。

「ちぃぃぃ……」

今はこいつに構っていられない。
俺は吹っ飛ばされたティアに代わって、少女に威嚇用の魔力弾を撃った。

「えっ！！」

しかし、召還獣が自分の身で少女を庇い攻撃は通らなかった。
さらに、少女の使い魔なのか分からないが、赤い髪の小さな少女が現れた。

「ったく、あたし達に黙って勝手に出掛けたりするからだぞ。ルールーもガリューも」

「……アギト」

「おう、本当に心配したんだからな。まぁ、もう大丈夫だぞ。何しろこのあたし……」

「烈火の剣精……アギト様が来たからな！！」

「おらおら、お前らまとめてかかってこいや！！」

召喚師に召還獣……それに烈火の剣精と名乗るあの少女。
おそらくあれはリイン曹長と同じユニゾンデバイス。

さて、どう切り抜けるか……

# 第12話　ナンバーズ

「う～……はっ！！」

「くっ！！」

「ううっ……」

俺達はアギトと名乗る、融合騎の攻撃の前に防戦一方の状態になっていた。
キャロはさっきの攻撃で、意識を奪われてしまってまだ回復していない。
おまけに召喚師の少女が召喚したあの召還獣は、こっちの戦力じゃ現状じゃギンガさんしか対抗出来ない。
融合騎の攻撃もかなりの連続攻撃で、隙がない。
接近戦能力は無いが、中距離戦には秀でている感じだ。

「ティア、フィルどうする？」

「任務はあくまでケースの確保だ。撤退しながら引きつけるしかない」

「こっちに向かってきている、ヴィータ副隊長やリイン曹長にうまく合流出来れば、あの子達も止められるかも……だよね」

「スバル……救援を期待するな。あっちもガジェットに対応していて、なかなかこれない状態みたいだ」

予想以上にガジェットの数が多くて、全部片付けるにはもう少し時間が掛かるみたいだ。

＊　　＊　　＊

「ちぃぃ、どうなってやがるんだ！！　いくら片付けてもきりがない！！」

「幻影と実機の複合パターンなのは分かっているんですけど、こう多いと……」

くそったれ！！　フォワード達が危ないってのにこれじゃ助けにいけない。

フィル、すぐに片付けるからなんとかもち堪えてろよ！！

＊　　＊　　＊

「じゃ、どうするの！！」

「……一か八か、俺のワープでヴィータ副隊長達に合流する」

「ちょっと待って、あんたのワープって一人を運ぶのが限度のはずでしょう！！」

「だから、キャロの力を借りるんだ。俺にブーストをかけてもらい、魔力を一時的にあげる」

リミットを解除してもいいが、１５分しか使えないんじゃデメリットの方が大きい。

「う……ううん……」

「キャロ、気がついたのね」

「はい、すみません……今まで……ってどうしたんですか？」

俺はさっきの案をキャロに説明した。

キャロは少し考えていたみたいだが、どうやら可能みたいだ。

「確かにわたしのブーストを使えば、可能かもしれません。でも、それじゃフィルさんに相当の負荷が……」

「大丈夫、俺を信じてくれ。キャロ」

「フィルさん……」

フィルさんはいつもそうだ。自分の事より仲間のことを優先してしまう。

そんなフィルさんだから、いくら止めても駄目だろう。

だったら、わたしが出来ることを全力でやろう。

「……皆さん、全員を転移させるとなるとかなりブーストをかけなくちゃなりません。すみませんがその間、わたしとフィルさんに敵を近づけさせないようにしてください」

「キャロ……あんた……」

「分かったよキャロ。あいつらの攻撃は、あたし達が何とか食い止めるよ！！」

「キャロ、フィルさん、お願いします。」

「フィル、あなたに賭けるわ。私はスバル達を援護するね」

「みんな……頼むぞ……だけど、俺とキャロの周りから離れないでくれ。転移の範囲はそんなに広くないんだ」

「……だったら、あたし達全員でプロテクションを張るから、その間に済ませて」

「ティア、すまない」

「フィル、今はあんたの策に賭けるしかないでしょう。あんたは余計なことを考えないで集中して！！」

「わかった……その前にヴィータ副隊長聞こえますか。こちらスターズ5、フィル・グリード応答願います」

＊　＊　＊

「なんだよフィル、どうしたんだ。こっちはガジェットの相手で手一杯なんだ」

（時間がないんで簡潔に言います。現在レリックを狙う召還師と召還獣と地下で交戦中です。ただ、ここで戦うのはかなり不利なので転移で場所を移動します）

（わかった。だったら、あたしかリインのどっちかが降りた方がいいか？）

（そうしてもらえると助かります。副隊長達が空にいますと転移した時、投げ出される形になっちゃうのでリイン曹長かヴィータ副隊長のどちらか、ビルか地上に降りてもらえませんか）

「わかりました、私が近くのビルに行きますので、私の魔力を目印にしてください」

（すみませんリイン曹長）

＊　　＊　　＊

「これで転移が出来るぞ……やるぞ、キャロ！！」

「はい！！」

俺はプリムと一緒にワープの術式を発動させ、キャロもブーストの準備に取りかかった。
そしてティア達も全員で、俺たちの周囲にサークルプロテクションを張った。

「ケリュケイオン！！」

《Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　Ｍａｇｉｃ　Ｐｏｗｅｒ》

「我が乞うは、強き魔力……」

＊　　＊　　＊

「ルールルー……あれってもしかして！！」

「……増幅魔法……ブースト……」

「へっ！！　何するか知らねえが、バリアごとぶち抜いてやる。くらえ！！」

炎の球は俺たちに一直線に向かってきた。

「「「「うわぁぁぁぁ！！」」」」

何とか持ちこたえたが、何度も喰らうとプロテクションが持たない。

「フィル、キャロ。まだなの！！」

「……気高き戦士に……さらなる力を……」

キャロの詠唱が終わると、魔法陣が強く輝き、キャロの両手に力が集められた。

「ブーストアップ、マジックパワー！！」

キャロの魔力増幅を受け、俺は何とか広範囲のワープが出来るようになった。

「みんなつかまれ！！」

「うん！！」

「はい！！」

「ええ！！」

「分かりました！！」

「ＯＫよフィル！！」

「全員つかまったな。いくぜ、ワープ！！」

次の瞬間、俺たちの姿はこの場から完全に姿を消した。

＊　　＊　　＊

「リイン、そっちはどうだ。フォワード達の反応はあったか」

「まだです。こっちには来てません……」

フィルに言われてビルに来ていますけど、お願いです。無事でいてください……

「フィル……ってこれは！！」

「どうしたリイン！！」

「転送反応あり！！　フォワードのみんなです！！」

「本当か！！」

次の瞬間、白色の魔力球に包まれたフィル達が現れた。
転移が成功したんですね。

「フィル、無事だったんですね！！」

「ティアナ達も無事みたいだな」

『はい！！』

ヴィータ副隊長も俺たちと合流することが出来た。
これで体勢を整えられる！！

「……逃がさない……」

合流できたのも束の間。紫色の転送用魔法陣が現れ、ルーテシアと

アギト、そしてガリューが出現した。

「……どうやら、戦うしかないな。だがなさっきみたいに行くと思うなよ。みんないいな！！」

『おう！！』

「フォワード陣とギンガはフィルの指示に従って動け。あたし達はあの召喚獣を何とかする。お前達は召還師をなんとか押さえろ！！」

『はい！！』

「散れ！！」

ヴィータ副隊長の合図で、副隊長達は召還獣に、俺たちはルーテシアに攻撃を仕掛けた。

「ふっとべぇぇぇぇぇぇ！！」

あたしの一撃は完全に捕らえたかと思われたが、召還獣がベルカ式の魔法陣を展開し防がれてしまった。

「くっ！！　こいつ！！」

《この程度の攻撃で、やられる俺と思うな……》

「こいつしゃべれるのか！！」

《俺は巫女を……ルーテシアを守るために存在する。そう簡単にやられるわけにはいかん》

「そうかよ……だったらこれならどうだ！！」

《！！》

あたしは自分の周りに幾つもの鉄球を出現させた。

シュヴァルベフリーゲン……

通常ならグラーフアイゼンで撃ち出さなくてはならない。

だけどな……

《無駄だ……お前は古代ベルカの騎士みたいだが、察するにその鉄球は単体では威力はないはず……打ち出す時間など与えん！！》

「……はん！！　言ったろ。ベルカの騎士を甘く見るなって……こいつは、こういう使いかたもあるんだ！！」

合図と同時に、鉄球は一斉に召還獣に向かっていった。

アイゼンでぶっ叩いてないから、威力は１００％じゃないけど……

《くっ……だが、この程度ではやられん》

確かにこの鉄球は足止め程度にはなっているが、倒すほどの威力はない……
けどな……

「何度も言わせんじゃねえ!!　あたしをなめんなよ。こいつが本命だ!!」

アイゼンをギガントフォームにスイッチし、フルパワーでぶっ叩いた。

「ふっとびやがれ!!」

《しまっ……》

召還獣も気づいたが、時すでに遅し。
ギガントフォームの一撃が、決まり近くのビルに叩きつけられていた。

＊　＊　＊　＊

副隊長達が召還獣と戦っている時、俺たちもルーテシアとアギト、そしてルーテシアの召還した新たな召還虫と戦っていた。

「なんなの！！　このデカブツは！！」

「気をつけろ！！　こいつは重力で相手をつぶすだけでなく、放電能力もある。そいつを喰らったらバリアジャケットがあっても、しばらく動けないぞ！！」

「分かってるわよ！！」

フィルから事前に、こいつらのことは聞いているけど、実際に遭遇するとやっぱりやっかいよね。
副隊長達があっちを押さえてくれているから、こいつだけですんでいるけど……

「ティア、呑まれるな。召還虫が厄介と言っても、俺たちで何とかなる奴だ。それにルーテシアを押さえれば……」

「……そうね。あいつは自立行動は出来なそうだから、召還師を押さえればどうにかなるわ。あとはあの融合騎ね……」

「フィル、あの融合騎はあたしが何とかするから、あんたとスバルで召還虫のほうを押さえて！！」

「分かった。お前のサポートはギンガさんに任せる。頼むぞティア！！」

「あんたの方こそ、ドジ踏むんじゃないわよ！！」

「確かにな……行くぞ、スバル！！」

「うん！！」

「ギンガさんは、あたしのサポートをお願いします。……散って！！」

ティアの合図を切欠に俺たちはそれぞれの相手に向かっていった。
俺とスバルは地雷王に、ティアとギンガさんはアギトに……

＊　＊　＊　＊

「スバル、俺がシューターであいつを攪乱するから、お前はその隙を突いてディバインバスターを叩き込め！！」

「でも、あいつかなり身体が硬いよ。普通に撃ち込んでも……それに、電撃で迂闊には打ち込めない」

「それについては俺に考えがある。俺を信じてくれ」

「……分かった。今はフィルの作戦を信じるよ」

「任せなって……プリム、カートリッジロード」

《了解です》

カートリッジを2発ロードし、俺はスフィアを展開した。

「うそ！！　そのスフィアの数！！」

スバルは驚いているが、たがが16個のスフィアにすぎない。
現になのはさんなんて、この倍以上のスフィアを自在に操ってるんだぞ。

「……言ったと思うが、未来ではこのくらいのことは当たり前にしてたんだ。それになのはさんなら、この位あっさりやるぞ」

「そ、そりゃそうだけど……」

「とにかく、あいつの動きが止まったら全力でぶちかませ。いいか、チャンスは一回だぞ」

「分かったよ、フィル」

「……いくぜ、ブラストシューター！！」

一斉に放たれたスフィアは、地雷王の周りを攪乱していたが攻撃は一つも当たっていない。
ううん……当たっていないと言うよりわざと当てていないって感じ……

フィルは何を考えているの。まるで、何かから注意をそらしているって感じ……

《ウォォォォォン……》

「よし……奴さん。俺に集中してきたな」

《ええ……地雷王はスフィアしか見ていませんね。シューターが、かなりイライラするみたいですね》

「ルーテシアも地雷王を信じて、何かをする様子は見られないな。だがな、ブラストシューターは、攻撃用に撃ったんじゃない。こいつはあくまで囮だ」

《でも、それも限界ですね。これ以上は危険です》

「分かっている……本命はこれからだ。やれ、キャロ！！」

「はい！！　錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」

地雷王の足下に魔法陣が展開され、周囲から拘束用の鎖が召還され

た。
おまけにこいつは鋼鉄の鎖だ。
地雷王が電撃を出してもアースの役割で、全部地面に吸い込ませられる。

《ウォ……ウォォォォン！！》

「地雷王！！……くっ！！」

「おっと……そうはさせないぜ。ルーテシア、お前の相手は俺がする」

「フィル……グリード……」

牽制用のバレットはギリギリでかわされてしまったが、動きを止めることは出来た。

「スバル、キャロが動きを止めているうちにやれ！！」

「オッケー！！　行くよマッハキャリバー！！」

《了解です。ウイングロード展開》

「一撃……必倒……ディバイン……」

こいつを昏倒させるには、普通に撃っても効かない。
眉間に……それもゼロ距離で撃つしかない！！

「スバル！！　無茶だ！！」

「フィル、あたしを信じて！！　絶対に決めるから！！」

そう、この位出来なきゃ、これから先は戦っていけない。
絶対に決める！！

「バスター！！」

《グォォォォォン！！》

ディバインバスターは、地雷王の眉間に正確にヒットし、意識を刈り取った。

「やった！！　ってうわぁぁぁ！！」

「スバル！！」

ディバインバスターを命中させたはいいがバランスを崩しやがった。

《ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

「きゃぁぁぁ！！……ってフィル？」

「ったく、お前って奴は本当に後先考えないな。攻撃に全てを使っちまったらああなるに決まっているだろ」

「えへへ、ごめん。だけど今のあたしにはあれしか通じそうになかったから。それにフィルがいたからフォローはしてくれるっておもったんだ」

実際ソニックムーブで助けてくれたしね。
でもフィルがいなかったら、もっと安全策でいったよ。

「確かに全力でぶちかませって言ったのは俺だからな。ああなるとは予測してたけどな……」

「本当は助けてもらってばかりじゃいけないんだけどね。だけどフィルがいるって思うとあたし達は全力で戦えるんだよ」

「……だったら、もう少し配分を考えて戦え。そんなんじゃすぐ倒れちまうぞ」

「うん、そうだね。戦いはこれで終わる訳じゃないんだからね」

「ああ、地雷王は押さえたが、まだ……」

そう、召還師であるルーテシアを押さえなくちゃ意味がない。
スバルはさっきのディバインバスターで殆ど余力が残ってないし、
キャロもさっきのブーストとアルケミックチェーンで、相当の負担
がかかってしまった。

「地雷王……戻って……」

どうやら地雷王は、送還したみたいだな。
あとはルーテシアを止めるだけだな。

＊　　＊　　＊　　＊

「地雷王!!　ちっくしょう!!　やりやがったな、あいつら!!」

「あんたもいい加減に観念しなさい。あたし達をなめすぎたのが、
あんた達の敗因よ!!」

「うるせぇ、まだあたしは負けてねえ!!　これでもくらいやがれ
!!」

なに、あのでかい魔力球は……
あの融合騎、とんでもない攻撃しようとしている。

まずいわね、あっちは空、こっちは地上。
迎撃しようにも、空戦が出来ないあたしじゃ……

「ティアナ、ここは私に任せて」

「ギンガさん？」

「あれが発射されるには、少しタイムラグがあるわ。あたしが囮になる」

「でも、ウイングロードじゃ気づかれてしまいますよ」

「だから、貴女の幻術が必要なのよ」

「そういうことですね……分かりました、やってみます！！」

「頼むわよティアナ。じゃ……」

「ええ……」

「「ＧＯ！！」」

＊　　＊　　＊　　＊

「へっ！！　何小細工しようといてるか知らねえが、こいつでまとめてぶっ飛びやがれ！！」

「これでも喰らいなさい！！」

「そんなへなちょこ弾に当たるかよ！！」

そんな攻撃に当たってたまるかよ！！
こいつの攻撃はおとりだ。

こいつらの本命は……

「反対側にいるてめえの方だ！！　くらえ！！　轟炎！！」

こいつを倒しちまえば、あのオレンジ髪の奴なんて大したことない。

「……ふっ、甘いわね」

「う、嘘だろ！！　受け止めやがった！！」

＊　　＊　　＊　　＊

「ギンガさん、もう少しだけ頑張ってください……」

あの融合騎はあたしが作った、シルエットあたしに気をとらわれている。
もっともあたしのシルエットのシューターに気づかれたら、それまでなんだけどね。
未熟なシルエットは、ギンガさんのフォローで何とかカバーできる。

「ここからが本番ね、クロスミラージュ！！」

《ｙｅｓ》

「距離はギリギリだけど、やってみせる！！」

「これくらいやらなきゃ、フィルと一緒には戦っていけない……」

今のあたしに使える最高の砲撃……
なのはさんとフィルが教えてくれた、クロスファイアの最終形態

《ティアナ、集中してください。スフィアは多く展開しなくていいですから》

「それは分かっているんだけど……」

《集束系は集中力が大事なんです。少ない魔力でも一点に集めれば破壊力は増します。フィルのブラストブレイザーと同じ原理です》

とはいっても、やっぱりきついわね。

なのはさんもフィルも本当にすごいわ。
でもね……

「ランスターの弾丸に、貫けない物はないのよ！！」

次の瞬間スフィアは一点に集まり、一つの魔力球となった。

＊　　＊　　＊　　＊

（集束反応……ティアナね……だったらこれで私の役目は終わりね。
この魔力球も、ここで押さえておく必要はないわね）

「はぁぁぁぁぁ！！」

「まじかよ！！　あれを蹴り飛ばしやがった！！」

あたしの轟炎を……
非常識にもほどがある……

「おい、逃げる気か！！」

おかしい……あたしに攻撃をするわけでもなく……

なんだこの反応は……魔力反応……
まさか！！

＊　　＊　　＊　　＊

「気づくのが、少し遅かったわね」

《集束完了、今です！！》

「いっけぇ！！　クロスファイアシュート！！」

引き金を引かれたクロスファイアシュートは、一直線にターゲットに向かっていった。

「し、しまった！！　かわせるか！！」

クロスファイアはギリギリでかわされたが、リイン曹長が隙を突いてバインドをかけ動きを封じることに成功した。

「「リイン曹長！！」」

「二人ともよく頑張りましたね。フィル、こっちも捕まえましたですよ」

＊　　＊　　＊　　＊

「アギトまで……」

「ルーテシア……」

俺が彼女の近くに行こうとすると……

「来ないで！！」

召還されたダガーが俺の身体を貫いた。

「ぐわっ！！」

アギト達が捕らえられて我を忘れているな。
魔法が殺傷設定状態になっている。

「フィル！！」

《マスター！！》

「来るなスバル！！」

「何言ってるのよ！！　相手はあんたを殺す気なのよ！！」

いつの間にかティアとギンガさんが合流していた。
どうやら、そっちはうまくいったみたいだな。

「ティア、ここは俺に任せてくれないか……頼む……」

「フィル……」

あんた、いったい何考えているのよ。
でもああなったフィルは、絶対に引かない……

「分かった……でも、死んだら許さない！！」

「すまん……」

「ティア！！　どうして止めないの。このままじゃフィルは！！」

「スバル、いくら言っても無駄よ。ああなったフィルは止められないって、昔から知っているでしょう」

「……うん」

そう、フィルはいつもそうだ。

自分よりも人のことを優先してしまう。

「今はフィルを信じましょう……」

＊　　＊　　＊　　＊

「ぐっ……ぐわぁ！！」

《マスター、これ以上は危険です！！　攻撃してください！！》

「駄目だ……」

《何でなんですか！！　このままじゃマスターが死んでしまいます！！　せめてプロテクションだけでも！！》

マスターの身体はダガーの攻撃で全身傷だらけだ。
最も酷いのは、右肩と左足に刺さったダガーだ。
もしかしたら、動脈も切っているかも知れない。出血も酷い。

「プリム、これは最初で最後のチャンスなんだ。ルーテシアに魔法の本当の怖さを教える……」

《どういうことですか……》

「いいか、ルーテシアは母親を取り戻すためだけに簡単に殺傷設定にしてしまっている。それではいつか本当に殺人鬼になってしまう」

《だからといって！！》

「未来で、キャロと同士討ちになったのは覚えているな。あのとき……キャロに殺傷設定の魔法を何発も使っていた。キャロは最後までルーテシアを信じ……攻撃を受けていた」

《！！》

「そして、キャロは最後の力で、何とか白天王を止めたけど……」

《そう……でしたね……》

キャロがしたのは、ヴォルテールで白天王と相打ちにすることだった。

二つの強大な召還獣の力が激突して、二人とも助からなかったんだからな……

「だから、ここでルーテシアに、人を傷つけることの怖さと命の尊さを伝える……殆ど賭だけどな……」

《マスター……全くあなたって人は……》

《分かりました……でも、せめて右肩と左足の傷は私が治しますか

らね。そんな傷があったら伝える前にマスターが死んでしまいますから……》

「サンキュー……相棒……」

プリムに治療魔法を掛けてもらうと幾分か回復した。
右肩と左足の治療に集中したせいで、他の所は殆ど代わっていなかったが、大分ましになった。

「まだ……来るの……来ないでよ!!　なんで、何で倒れないの!!」

「倒れるわけにはいかないんだよ……お前が……間違いに気づくまでな……」

「なんで……私……何、間違っているの。私はお母さんを助けたいだけなのに!!」

「母親を助けたいからと言って、平気で人に殺傷設定の攻撃魔法を使うんじゃない!!　それと召還獣達にむやみな殺しをさせるんじゃない!!」

「違う!!　ガリュー達にそんなことさせてない!!」

「ガリューはともかく、自立行動のとれない他の召還獣達は、お前の行動一つで決定するんだぞ!!」

「私、殺しなんてやってない!!」

「こっちを見ろ、ルーテシア！！」

「えっ……っ！！」

なんで……確か私、ちゃんとコントロールしたはず……
どうして、あんな傷だらけなの……

「ちゃんと見るんだ……ルーテシア……」

「私……何を……」

「いいか、お前の感情一つで簡単に人を殺せるんだぞ。お前の持っている力はそう言う物だ……」

「あ……あああ……」

ルーテシアの奴、どうやら理性を取り戻してきたみたいだな。
混乱はしているが今なら、話も聞いてくれそうだ……

「ルーテシア……」

「あっ……」

俺は出来るだけ優しく彼女を抱きしめてた。

ああきついことを言った時は、これ以上責めたりするのは逆効果だからな。

「でもな……お前がちゃんと気づいてくれれば、俺はそれでいいよ。お前はまだ、誰も殺していないんだからな」

「だけど……だけど、あなたが……」

「心配するな、死にはしないよ。この程度ならな」

「でも……」

「だったら俺がちゃんと教えてやるよ。お前の力の正しい使い方を、そして……」

「そして……俺はお前の友達になりたい」

「とも……だち……」

「ああ、友達だ。今まで独りぼっちだったんだろ。母親がいなくなってから、ずっと……」

「……うん」

確かにアギトもガリューも、一緒にはいてくれたけど……

「それになにより、俺がお前と友達になりたい。そしてお前の笑顔

を見たい。それじゃ駄目か……」

「いいの……私で……」

本当に甘えていいの。私……

この人は管理局の人なのに、だけどすごく暖かい物を感じる。

まるで……

「お前の場合はこっちが待つよりも、多少強引にやった方がいいみたいだな。いいか、もうお前は俺の友達だ。お前が嫌わない限りな……」

「うん！！」

「良い笑顔だ。よろしくなルーテシア」

こうして抱きしめてもらっていると、なんか心が温かくなる。

何でだろ……不思議だな……

『フィル！！』

「フェ、フェイトさん！？」

いつの間にフェイトさんから通信が入ったんだ。

いったい、誰が？

『また、無茶やったの！！　その傷だらけの身体はどういう事！！』

《聞いてくださいよ、フェイトさん。マスターったら、本当に無茶なことをして……》

「こらプリム、余計なことを言うんじゃない！！」

『説明……してくれるんでしょうね』

「はい……」

俺はさっきまでのことをフェイトさんに報告した。

するとフェイトさんは、プルプル震えだして……

『こ……この大ばかぁぁぁぁぁぁ！！』

「うわっ！！」

『どうしてフィルは、いつもいつも無茶ばかりするの！！　私が、どれだけ心配していると思っているの！！』

「す、すみません！！」

『謝るくらいなら、そんな無茶しないで！！　もう知らない！！』

「本当にごめんなさい！！」

『全くフィルは、いつもいつも……』

うわぁ……フェイトさん完全に説教モードに入っているぞ。

「フェイトさん、落ち着いてください。今はフィルさんとその事で話している場合じゃないですよ」

「そうですよ。フィルさんにはわたし達からも言いますから……」

『エリオ、キャロ。ごめんね、ついね……』

「その気持ちは分かりますから、さっきも広範囲のワープをやって無茶しているのに……」

「キャロ！！　それは！！」

『フィル……』

「は、はい！！」

『事件が終わったら、みっちり話があるから……』

そう言ってフェイトさんは通信を切った。

はぁ……こりゃ覚悟しておこう……

「おーい、お前ら無事か？」

「ヴィータ副隊長！！　無事だったんですね」

「あたしを誰だと思ってるんだ。ほれ、連れてきてやったぞ」

「ガリュー！！」

ヴィータ副隊長が連れてきたのはガリューだった。
傷だらけの戦士に、バインドを掛ける真似はしなかった。

『ルーテシア、無事か』

「うん、ガリュー……ごめんね。私が無理を言ったから」

『気にするな。それと良かったな……』

「えっ？」

『リンクでお前の気持ちが伝わってきた。良き仲間が出来たみたいだな……』

「うん……」

『仲間を……友を大切にな……』

「ありがとうガリュー……ガリューも傷だらけだよ。戻って傷を癒して……」

『そうさせてもらう……また、必要な時は呼んでくれ』

「うん……」

ガリューはルーテシアが送還用の魔法陣を作るとそこに入っていった。

＊　＊　＊　＊

「さてと、こっちは何とかなったけど……」

「なのはさんとフェイトさんは、さっきの通信でもう片が付いて、こっちに向かっているって聞いたけど……」

「それでもかなりの距離だからな。しばらくは掛かるだろうな」

「はやての方も、ガジェットが幻術と実機で多数出現したけど、そろそろカタが付きそうだしな」

「でも、フィル。あんた本当に大丈夫なの……その傷……」

今俺はキャロとルーテシアに治療魔法をかけてもらっている。

ルーテシアが自分のせいでこうなってしまったんだからといって、治療魔法をかけてくれていたんだけど、

途中からキャロも一緒にかけてくれた。
キャロ曰く、この傷は二人でかけても、この場では完全には回復しないとのことだ。

「大丈夫だ。キャロとルーテシアにやってもらったからな。かなり楽になったよ」

「本当にごめんなさい……私のせいで……」

「ルーテシア、もう気にするな。ほら、そんな泣き顔じゃなくて笑顔の方が良いぞ。俺は大丈夫だから……」

「うん……」

まぁ、気にするなと言っても、なかなか厳しいかな。
でも、無理した甲斐はあったってもんだよ。

エリオにキャロ……そしてルーテシア……
これで3人を、あんな形で戦わせなくてすむんだからな……

＊　＊　＊

廃ビルの屋上に水色のボディスーツの上にケープを纏った、大きな丸メガネの少女。そして自分の身長よりも大きな長物を杖のように立て、遠くを見渡していた少女がいた。

「ディエチちゃ～ん、ちゃんと見えてるぅ？」

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える」

少女は左目の瞳孔がまるで望遠レンズのように収縮し、遥か遠くを睨んでいた。
その瞳で捕捉しているのは、機動六課のヘリ、ＪＦ７０４……

ディエチちゃんが砲撃の準備をしていると、通信ウィンドウが開いた。

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あ～ら、それはまた……フォロー……します？」

『……良いわ。あの様子だと、もう取り戻せそうにないから、セインにも撤退してもらったわ……』

「そうですか……じゃ、あれ処分しましょうか……」

駒がもうこちらの思うようにいかないのなら、あれはもう置いておく必要なありませんものね。

『それなんだけど……あれはもう無いわ』

「どういう事ですの、ウーノお姉様！！」

『……やられたわ。フィル・グリードにね』

＊　＊　＊　＊

リイン曹長にＢＣＣを解除してもらった後、みんなはルーテシアのお母さん、メガーヌ・アルピーノさんのことを考えていた。

「でもどうするの、スカリエッティがルーテシアのお母さんを人質にしていると、こっちにルーテシアが来ちゃうと……」

「そうだよ、ルーテシアと友達に慣れたのは嬉しいけど、あっちにとっては裏切り行為になっちゃってるよ」

「そうだぜ！！　あの変態とアバズレ。ルールーのお母さんを殺しちまう！！」

「……うん」

「フィルさん、このままじゃ殺されちゃいます！！」

「フィルさん、何とかならないんですか！！」

みんなメガーヌさんのこと、心配してくれているんだな。
さっき仲間になったばかりだって言うのにな。
ホントこいつらは、俺には出来過ぎた仲間だよ。

《マスター、もう種明かししても良いんじゃないですか》

「そうだな、そろそろクアットロ達も、事の異変に気づいていると思うしな」

「おい、フィル。何か隠してるんだったら言えよ。何となく予想は出来るんだけどな。ルーテシアの関係する事だろ……」

ヴィータ副隊長、もしかして感づいてます。

「あのな、もう隠していても意味がないから言うけど、ルーテシアのお母さん。メガーヌ・アルピーノさんは俺が助け出してるぞ」

「「「「「ええっ！！」」」」」

「やっぱりな……」

「だと思いました……」

「副隊長とリイン曹長は驚かれないんですね……」

「お前が考えなしでこいつを保護するとは思わなかったからな。絶

対事前策を取ってると思ってた」

「今までのフィルの行動を考えれば、この結論に達するのは簡単ですよ」

「本当に勘が良いですね。お二人の予想通り、スカリエッティの事を調べている時に、偶然発見したんですよ」

俺がスカリエッティの基地を探っている時、すでに基地は破棄していたが、人造魔導師や戦闘機人の素体がそこにはたくさんあった。そこで見つけたのはメガーヌ・アルピーノとかかれていた生体ポッドだった。

「基地を破棄していたせいか、生命維持装置がもう限界状態だったんだ。すぐにポッドから出して、とある所に連れて行ったんだ」

「とある所？　お母さんは無事なの！！　どこにいるの！！」

「大丈夫、発見したのが早かったから無事だよ。それと１１番のレリックはもう必要ないからな。まぁ、後のことは六課に戻ってから話すよ。ここじゃ誰が聞いているか分からないからな」

あのクアットロのことだ。近くにスパイ用のサーチャーかなんかがあっても不思議じゃない。
迂闊なことを言ったら、今まで秘密裏にしてきたことが全てお釈迦になってしまう。

「そうですね。詳しいことは六課に戻ってからにしましょう。レリックの確保もありますしね」

「キャロ、それじゃお願いね」

「はい」

キャロはレリックの封印作業を開始した。
これでもう大丈夫だな。

＊　＊　＊　＊

『こないだ、メガーヌ・アルピーノのことで破棄した基地内を調べていたんだけど、すでにポッドから奪還されもぬけの殻だったわ』

「……忌々しいですわ。ディエチちゃん！！」

「なに……」

「作戦を変更しますわ。六課のヘリ、完全に撃墜しますわ！！」

「でもいいのか？　クアットロ。撃っちゃって……ケースもマテリアルも破壊しちゃうことになる」

「ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから、大丈夫…

…だそうよ。それに……」

「ここまでコケにしてくれた、あのフィル・グリードに、これ位しなければ気が済みませんわ！！」

「まぁ……いいけどね……」

ディエチはイメースキャノンでヘリの狙撃準備に取りかかった。
まぁ、私もあの男にやることがありますわ……

＊　＊　＊　＊

「ふう……封印完了です」

「ご苦労さん、キャロ」

「えへへ……はい！！」

俺がキャロの頭にポンと置いてやると、すごく喜んでいた。
訓練の時もこうしてやると、キャロはいつもご機嫌になる。
理由はよく分からんがな……

事件はこれで、終わりのはずだが……
いや、まてよ。確か……

「しまった！！　ヘリの護衛に行かないと！！」

「おい、待てよ！！　お前はフォワード達と一緒に戻れ！！　その怪我じゃ無理だ！！」

「ヴィータ副隊長、まだ終わっていないんです。クアットロは間違いなくヘリを狙っています。だから急いで向かわないと！！」

そうだった。ルーテシアのことでヘリのことを忘れていた。
あいつのことだ、絶対狙撃してくる！！
そんなとき……

『ごきげんよう、六課の皆さん……』

「「「「「「！！」」」」」」

「……クアットロ」

『お初にお目に掛かりますわ。私はクアットロ。ドクターの最高傑作の一人ですわ』

ついに出てきやがったか、クアットロ。
相変わらず、その面を見るだけで反吐がでやがる！！

「出やがったな、アバズレ！！」

『あ～ら、誰かと思ったら、欠陥融合騎のアギトさんじゃありませんか～』

「なんだと！！」

「落ち着けって、何のようだクアットロ！！」

『フィル・グリード……あなたには、随分煮え湯を飲まされましたので、こちらもそれ相応のことをと思いましてね……』

「何をする気だ。メガーヌさんはこっちの手にあるし、ルーテシアのＢＣＣも解除してあるぞ」

『くっ！！　本当に忌々しいですわ。ですけど、その余裕も今の内ですわ～』

＊　＊　＊　＊

「見えた！！　良かった、ヘリは無事……」

ガジェットはなのはに任せ、私は何とかヘリを目視で捕らえられる距離まで来ていた。
正直なのはだけに任せるのは心苦しかったけど、何かさっきから嫌な予感が止まらないんだ。

それに、もしヘリに長距離砲撃が来たら、今の私の位置からじゃ間にあわないかもしれない……

そしてその事が、現実の物になろうとしていた。

『市街地にエネルギー反応！！』

『大きい……』

『そんな……まさか！！』

『攻撃のチャージ確認……物理破壊型、推定Ｓランク！！』

そんなチャージ時間が早い！！

あの威力だったら、もっと時間が掛かるはずなのに！！

このままじゃ、ヴァイスとシャマルが！！

「バルディッシュ！！　ソニックムーブ全開！！」

《ｙｅｓ、ｓｉｒ　ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

＊　＊　＊　＊

「インヒューレントスキル、ヘヴィバレル……発動」

廃ビルの屋上では、イメースカノンを構えたディエチが、エネルギーチャージを行っていた。
私は口の端を歪め、話しかけることにした。

「バカな！！　もう発射態勢になっているなんて！！」

魔力反応があってから、いくら何でも早すぎる！！

『驚きましたか。これがドクターの技術ですわ。あなた達の常識じゃ無理でしょうけどね』

「くそっ！！　間に合うか！！」

『無駄ですわ、もう発射しますわ～　フィル・グリード、あなたは『また』何も守れませんわ……』

「！！」

「発射……」

ヘヴィバレルは一直線にヘリに向かっていた。
このままじゃ、シャマル先生とヴァイス陸曹は！！

『フィル、心配しないで！！　あれは、私が止める！！』

「フェイトさん！！」

＊　　＊　　＊　　＊

ソニックムーブで、何とか発射線上に着いた私は、急いでシールドを展開した。

「バルディッシュ、ラウンドシールド展開！！」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

「くっ！！　なんて衝撃なの！！」

《このままだと、シールドが持ちこたえられません……》

「頑張ってバルディッシュ！！　なのはがもう少しで来るから……」

『その期待は無駄ですわ。フェイトお嬢様』

「クアットロ！！」

『高町なのはは、トーレお姉様が押さえてますわ。いくら待っても無駄ですのよ～』

「くっ！！」

＊　　＊　　＊　　＊

「ここから先には、行かせるわけにはいかん」

「あなたは、誰なの？」

「私はトーレ。戦闘機人の一人だ」

せっかくガジェットを、全滅させてきたって言うのに……
この人、とんでもない戦闘能力を持っている。
今のままじゃ、勝てない！！

「レイジングハート、エクシードモード、ドライブ！！」

《ｉｇｎｉｓｉｏｎ》

杖はエクセリオンモードを改良した形になり、バリアジャケットも短期決戦用の物に切り替わった。

「そこをどいてもらうよ。わたしは、フェイトちゃんを助けに行かなきゃいけないんだから！！」

「通れる物なら通ってみるが良い！！　ＩＳ、ライドインパルス！

！」

「エクシードモード、Ａ．Ｃ．Ｓ始動！！」

ＡＣＳとインパルスブレードの激突で、空中で大爆発が起こった。

＊　　＊　　＊　　＊

『そう言うことですわ。諦めなさい、フィル・グリード』

クアットロはそれだけ言って通信を切った。

「くそったれ！！」

俺は急いで、リミットを解除しようとしたが……

《無茶です。今解除したら身体が持ちません！！》

「今は、そんなこと言ってる場合じゃない！！」

《駄目です！！　死ぬつもりですか！！》

「プリム、俺はもう愛する人を失うのはたくさんだ！！　フェイト

さんが死ぬかも知れないってのに、黙っていられるか！！　ぐっ……」

今ここで、やらないでどうするんだ！！
また、あの悲劇を繰り返す気か！！

ティアを失った時みたいに……

《その身体では立っているのがやっとです！！　いくら何でも無茶です！！》

「畜生……動きやがれ！！　俺の身体！！」

「フィルさん！！」

「キャロ……」

キャロは俺に治療魔法を使った。痛みが引いていく。
これは、さっきのと違う魔法か……

「フィルさん、今使ったのは、痛みを止めただけです。傷口がふさがったわけではありませんので、無理はしないでください……っていっても無理ですよね」

「すまないキャロ。　リミットリリース！！」

リミットを解除すると、魔力が溢れてきた。
制限時間は１５分……絶対に止めてみせる！！

「フィル、急げ！！　フェイトはもう持たないぞ！！」

「間に合ってくれ！！」

＊　　＊　　＊　　＊

『フェイトちゃん、今行くから待っててな！！』

私の位置からじゃ、間に合わないのは分かっている。
それでも、やらずにはいられないんや！！

「無理だよ……はやて、そこからじゃ間に合わないよ……それにもう持たない……かな……」

『諦めたらアカン！！　最後まで希望を捨てたら駄目や！！』

「ごめんね……みんなのこと……フィルのことお願いね……」

ラウンドシールドも、もう限界に来ている。後少ししか防げない……

『バカなこと言ったらアカン！！　フェイトちゃん、フィルを一人にする気か！！　大切な人に……愛する人に、これ以上悲しみを背負わす気か！！』

フェイトちゃんは、リインフォースみたいに全てを託して、フィルに辛い思いをさせる気なんか！！
私はそんなの絶対に許さへんよ！！

「はやて……まさか！！」

『知ってるに決まってるやろ！！　私をナメたらあかんよ。私はな、フェイトちゃんが本当の笑顔を見せてくれるようになって本気で嬉しかったんや。だから……あえて黙っといたんや！！』

「はやて……」

『だからそんな簡単にあきらめたらアカン。そんなんじゃフィルが怒るで！！』

「そうですよ。フェイトさん……」

「えっ……フィ……フィル！！」

そこに現れたのはフィルだった。
どうして……出血が酷くて、治療魔法でも直りきらない状態なのに……

「ラウンドシールド、三重展開！！」

フィルが作り出したラウンドシールドは砲撃を押し返すように展開した。
それでもしだいにシールドに罅が生じてきた。

《第1シールド大破、第2シールドも、そう耐えられません！！》

「……くそっ！！　なんて威力なんだ。このままじゃ耐え切れん！！」

『うっふふ～　これは思わぬ収穫ですわ。フェイトお嬢様だけでなく、あなたまで始末できるなんてね』

これまでか……フェイトさんを……好きな人一人守れないのか俺は……

（フィル……）

（なんだ……この声は……）

（今こそあなたの力になるね……みんなを……そして……）

（そして……『私』を助けてね……）

次の瞬間、溢れんばかりの魔力が宿った。
与えられた魔力が全部一つになったのか……

さっきの声、そしてこの魔力の暖かさ……

女神から渡された魔力の正体は……

まさか！！

《マスター、その力は！！　完全に一つになったんですね！！》

「ああ、フェイトさんが……俺に力を託してくれた……」

《フェイトさんが……どういう事ですか？》

「あの時渡された力は、未来のフェイトさんの魔力だったんだよ。
ティアと同じように、俺に全てを託してくれたんだ……」

《そうだったんですね……ティアさんもフェイトさんも、本当に素敵な人です。死して尚、マスター達の力になってくれているなんて……》

ティア……フェイトさん……本当に……ありがとう……

二人の想い、決して無駄にはしない！！

「やるぞプリム！！　フルドライブ……【フリーダム】起動！！」

《今の状態じゃ自殺行為です！！　本当に死んでしまいますよ！！》

「プリム、今はこれしかないんだ。頼む、俺を信じてくれ！！」

《……分かりました、フルドライブ【フリーダム】起動します！！》

俺はフルドライブを起動させると、バリアジャケットが変化した。

フリーダムは以前、なのはさんの攻撃を受けたとき、防ぎきれなかったことで考えた物だ。

防御力を高めて、さらに機動力を増すことができる。

このことをコンセプトにして改良し、ようやく完成した物だ。

これは普段なら、通常の状態でも使うことができるが、今の俺には維持するのもきつい。

《マスター、終わったら、絶対に病院に行ってもらいますからね！！》

「すまないな……見せてやるぜ、完全解除した力を！！　ラウンドシールド・リフレクター！！」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ　Ｒｅｆｒｅｃｔｅｒ》

次の瞬間ラウンドシールドが鏡のようになり、砲撃を上空へはじき飛ばした。

『う、嘘でしょう！！　ディエチちゃんのフルパワーの攻撃を弾くなんて！！』

「はぁ……はぁ……はぁ……やったぞ……こちらスターズ５、何とかフェイトさんとヘリの防衛成功させました」

＊　　＊　　＊　　＊

「やった！！　ギン姉。フィルがやってくれたよ！！」

「まったく無茶ばかりやるんだから……」

「でも、本当に良かった。間に合って……」

「「……」」

「どうしたの？　ティア、キャロ」

「キャロ、あんたも同じ事考えてたの」

「はい……フィルさん、これ以上無茶しなければ良いんですけど……」

「痛み止めの効果は、後どれくらい持つの？」

「１０分……おそらくそれが限界です」

フィル、その前にケリつけなさいよ。
あんたが倒れたら、そこでおしまいなんだからね。

＊　＊　＊　＊

「す……すごい……ラウンドシールドであんな事出来るなんて……」

「未来でティアが考え出したオリジナルのシールドです。完全版なら相手にはね返せるんですよ。最も、魔力を多量に使うのと、術式が複雑なのであまり多用していなかったんです」

『きぃぃぃ！！　どこまで私の邪魔をすれば気が済むんですの！！』

「今度はこっちから反撃させてもらうぞ！！」

＊　　＊　　＊　　＊

「見つけたぞ、クアットロ！！」

「フィル・グリード、あんたいつの間に！！」

俺とフェイトさんはワープで、クアットロを見つけ出した。
こいつの気は嫌と言うほど知っているからな。

「観念しなさい、市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！！」

「今日は遠慮しておきますわ～　ＩＳ起動……シルバーカーテン！！」

シルバーカーテンで姿をくらませたつもりだろうが、俺にはお前の気が分かるんだぜ。

《マスター、捕らえました。方位、１０時の方向、距離４ｋｍ》

「八神部隊長！！」

＊　　＊　　＊　　＊

「待っとったで、こっちは詠唱完了してるんや！！」

「はやて、場所は分かっている？」

「大丈夫、データはフィルに送ってもらったから、位置はしっかり特定できとるよ。後は任せておき！！」

私は戦闘機人の姿を捕らえ、広域空間攻撃【デアボリック・エミッション】の発射準備をしていた。
この魔法は本来は自身を中心として発動させる魔法だが、こういったこともできるんや！！

覚悟せぇ、私の大事な仲間を……家族を……

そして、親友を殺そうとしたこと後悔させたる！！

「追ってこない……何で……」

「まさか！！」

「広域……空間攻撃！！」

「うそ～ん」

「遠き地にて、闇に沈め……」

「デアボリック・エミッション！！」

頭上の闇が一瞬収束したかと思うと、爆発的に膨れ上がり、二人を
を飲み込もうと迫っていた。
ディエチちゃんを抱えたままだと逃げ切れないわね……
しかたないわね。こうなったら多少のダメージは覚悟しますか。

私はダメージを負いながらも、何とか離脱をしたが……

《投降の意志なし……逃走の危険ありと認定》

《砲撃で昏倒させて捕らえます》

前方にはフェイト・　T・ハラオウンが砲撃準備で待ちかまえていて
後方にはフィル・グリードがデバイスを突きつけ、同じく発射態勢
になっていた。

＊　　＊　　＊　　＊

「クアットロ、ディエチ！！　くそっ！！」

「おっと、逃がさないよ」

「高町なのは！！」

「フェイトちゃん達の邪魔はさせない。今度はあなたが足止めされる番だよ」

「ちぃぃぃ！！」

フェイトちゃん、フィル。こっちは押さえるから後は任せたよ。

＊　　＊　　＊　　＊

「ここまでだな、クアットロ。トーレはなのはさんが押さえてる。お前の援軍はないぞ！！」

《マスター、痛み止めの効果はあと5分です！！　これで決着をつけないと……》

「分かっている、これに全てをかける！！　やるぞプリム！！」

《了解です！！》

「フェイトさん！！」

「分かってる……フィル、ここで終わらせるよ！！」

「はい！！」

「プリム、一か八かあれでやるぞ」

《マスター？》

「フェイトさんの得意技、フォトンランサー・ファランクスシフト……それでやる」

《さっきのフルドライブで、もうマスターの身体は限界なんです！！　せめてブラストブレイザーで！！》

確かにブラストブレイザーなら、リミットを完全解除した状態なら、そんなに負荷が掛かる訳じゃない。

だけど……

「こいつに一直線の攻撃じゃ逃げられる可能性がある。全方位で囲んで仕留めるしかない！！」

《……だったら、フォトンランサーの誘導は私がやります。マ

スターはスフィアを作り出すことを考えてください！！≫

「サンキュー、相棒！！」

俺は今作り出せる量のフォトンスフィアを作りだし、クワットロの全方位を囲んだ。

３８基。これが俺が出来る限界だ。

「トライデント……」

フェイトさんが、バルディッシュのカートリッジをロードさせ……

「フォトンランサー・ファランクスシフト……」

俺もプリムのカートリッジをロードし、発射準備をした。

今の状態じゃ撃ったら間違いなく、俺の攻撃能力が無くなる……

「スマッシャー！！」

「ファイア！！」

３６０。全方位からのフォトンランサーとフェイトさんのトライデントスマッシャーの同時攻撃だ。

回避は絶対不能だ。

白と金の魔力はクアットロに命中して、爆炎をあげた……

「やった……」

「……はぁ……はぁ……はぁ……」

頼む、これで倒せていてくれ……

「……残念でしたわね、フィル・グリード。私はまだ生きてますわよ～」

「！！」

「くっ……駄目か……」

そこには自分の周囲に防御壁を張っていたクアットロの姿があった。
ディエチの方は気絶しているみたいだが、あいつは全くの無傷だ。

あの砲撃からは回避は不能だ。
おまけにフェイトさんと俺、二人とも手加減なしで撃ってる。

あれは……クアットロの周りに張られているシールド……

あの防御壁の七色の光……

外れていて欲しかったが……やはり……

「やっぱり気づいてたんですね……そう、私は未来でティアナ・ランスターとあなたに殺された、あのクアットロですのよ。いつ気づきました……」

やはり、俺が逆行者って言うことを知っていたか。

「言葉の節に『また』って使った時だ。あんな言葉は、俺のことを知っていなければ、出てこない言葉だからな」

本来ならこの世界では、俺は表舞台には立っていなかったんだからな。

今の段階で俺のことを知っているのは、おかしいしな。

「それはとんだミスでしたわ。さすがですわね」

「そんなことより、なぜ貴様が生きている!!　あのときティアのスターライトブレイカーでお前は死んだはずだ!!」

ティアが命と引き替えにして放ったスターライトブレイカー。
あれで間違いなくあいつは死んだはずだ。

「そんなこと私は知りませんわ～。だけど、ここにいるのは事実。せっかく、あなたと同じく再び生を与えられたんですから、思う存分楽しませてもらいますわ～」

「そしてフィル・グリード、あなたには再び恐怖と悲しみを与えてあげますわ。今度はどうやってお仲間を殺してあげましょうか～」

「……黙れ」

「以前と同じじゃおもしろくありませんわ。今度はあなたの大事な人をなぶり殺しにでもしてみましょうか～。あはははっ!!」

「黙りやがれ!!　その減らず口を二度とたたけないようにしてやる!!」

「出来るのかしら～　さっきの砲撃で殆ど力を使ってしまっていうのに～」

くそっ!!　腐ってもやはり参謀型って訳か。
こっちの状態を正確に把握してやがる。
おまけに、痛み止めの効果はもうすぐ切れてしまう……

「今日のところは引き上げますわ～　またお会いしましょう～」

「待ちなさい！！」

フェイトさんがプラズマランサーをクアットロに放ったが、当たる直前にシルバーカーテンで姿をくらませてしまった。

「待てクアッ…ト……ロ……」

《マスター！！》

「フィル！！」

さっきのフォトンランサーで力を使い果たし、出血多量のため、俺は浮遊も保てなくなっていた。
そんなとき……

「ふぅ……間に合った……」

「なのは！！」

「なのは……さん……」

なのはさんが間一髪の所で、俺を抱えてくれた。

「その怪我で無理しすぎだよ、フィル！！」

「すみ……ません……」

「完全解除が出来るようになったと言っても、その怪我で無理しずぎ！！」

フィルの怪我はかなりの物だ。
元から重傷箇所があったのに、それを治療魔法で無理矢理治して、さらに痛み止めの魔法を使って動いてたんだから……

リミットの解除……

フルドライブの使用……

多量の魔力を使う攻撃魔法……

これだけの悪条件があれば、こうなって当たり前だ。

「まったく、フェイトちゃんをあまり泣かせちゃ駄目だよ。最も、心配してるのは、わたしもなんだからね……」

「はい……」

「ほら、ヘリまで飛ぶから一緒に行くよ……」

「大丈夫ですよ……自分で飛べますから……」

「だ～め。無茶ばかりする悪い子の言うことは聞けません～」

そう言ってなのはさんは俺の腕に抱きついてきた。

そんなに密着しないでください。

なのはさん……そんなに密着されると……胸、当たっているんですけど……

「むぅ～」

フィルったら、なのはの胸が当たってデレデレして……

私だってなのはには負けてないのに……

「フェイトちゃんもすればいいじゃない。遠慮してたらわたしが取っちゃうよ～」

「だ、駄目！！」

今度はフェイトさんが反対側の腕に抱きついてきた。

「……私だって、なのはには負けてないんだよ……」

充分すぎるほど分かります……
ですからここで、なのはさんと張り合わないでください！！
なのはさん、あんた絶対わざとだろ！！
フェイトさんと俺の反応を見て、楽しんでいるだろ！！

「ごめんごめん、ちょっとからかいすぎたね。冗談はこの位にしてヘリに運ぼう」

「なのはったら……」

「勘弁してくださいよ……」

こうして俺はヘリに運ばれたんだけど、二人に密着されてきたもんだから、後でヴァイス陸曹とシャマル先生に散々からかわれることになったけどな……

＊　＊　＊　＊

「それにしても、散々だったな。私は高町なのはには押さえられ、レリックとお嬢様達は六課に奪われる。最悪だな……」

「そうでもありませんわ、トーレお姉様」

「どういう事だ、クアットロ」

「確かにルーお嬢様達とレリックは奪われましたけど、フィル・グリードは当分戦闘には参加できませんわ。これで六課に大きな痛手を負わせることが出来ましたわ」

「確かに……な……」

「それに、すぐに取り返せば良いんですから～」

「お前な……」

「それよりも、機動六課の連中に、もっと苦しみを与えてあげましょう。そのほうがおもしろいですから～」

そう、正直レリックの一つや二つどうでもう良い。
やはりフィル・グリードはこっちに来ていたみたいね……

あなたの大切な物……かならず壊して見せますわ……

＊　＊　＊　＊

聖王医療院

ここの特別病棟の一室に、機動六課によって保護された少女が寝かされていた。
意識は戻っていなく、衰弱状態もまだ回復してないが……

「フェイトちゃん、保護した女の子とフィルの状態は……」

「保護した女の子は検査の方は一通り終了、大きな問題はなさそうだよ。フィルの方も今は麻酔が効いて病室で眠っているよ。傷口は治療魔法でふさがっていたからそんな大事には至らないって、ただ出血がかなりしていたから、しばらくの間は任務は禁止だって……」

「フィル、本当に無茶して……でもある意味良かったかも、これでやっと休暇を取らせられるよ」

「皮肉だけど……こんな事でもないとフィルって休まないもんね」

「フェイトちゃん、フィルのことお願いね。任務をしようとしたら……」

「大丈夫、私が無理矢理でも休ませるから、それにフォワード達やシャーリー達にも良い機会かもよ」

「フィルにどれくらい頼ってたかって事だね……」

実際、スバル達の報告書とかを見ても、ティアナ以外の物はフィルが手直ししていることが殆どだ。
エリオやキャロは、事務仕事に慣れていないのはしょうがないとしても、スバルはもう少しその辺はちゃんとして欲しい。

シャーリー達もフェイトちゃんが言ってくれたから、今は大丈夫だけど、それまではかなり頼っていた面があった。

「まぁ、フィルは何もなければ明日には退院みたいだし、それに報告書を書くために、わたし達も戻らないとね……」

「そうだね、資料とかはここに来る前にそろえてあるから、そんなに時間が掛からないよ」

「にゃはは、ありがとう……あっ、そうだ。ちょっと女の子の様子見てくるね」

「だったら私も行くよ」

「いいよ、ちょっと見てくるだけだから。フェイトちゃんは駐車場で待ってて……」

「分かったなのは、じゃ外で待ってるから」

「うん、じゃ３０分後にね……」

フェイトちゃんと別れたわたしは部屋に向かうため、廊下を歩いていると売店があり、くまさんとうさぎさんのぬいぐるみがあった。なんとなくうさぎさんのほうがかわいかったので、うさぎさんの方を買った。

わたしはそのぬいぐるみを女の子の頭の近くにそっとおいた。
目が覚めた時に、それに気づいてくれれば良いんだけどね。

「……ママ」

意識は戻って無くても、夢は見ているのかもしれない。
何か怖い夢でも見ているのかな……

「大丈夫だよ、ここにいるよ。こわくない……」

わたしは語りかけながら少女の頬をそっとなでていた。
もしかしたら、無意識のうちに自分の小さい頃と照らし合わせたのかもしれない。

わたしはしばらくの間、少女のことを見守っていた。

# 第１３話　命の理由

「ごめんねフェイトちゃん、車出してもらっちゃって……」

「気にしなくて良いよ。わたしもフィルの迎えがあったしね……」

「うん……」

「……でも、何かしらの白黒が付いたとしても、どうなるんだろうね」

「当面は六課か教会で預かるしかないと思う。受け入れ先を探すにしても長期の安全確認が取れてからでないと……」

そんな話をしていると、病院から通信が入った。

「フェイト執務官、聖王教会シャッハ・ヌエラです」

「どうされました」

「すみません、こちらの不手際がありまして、検査の間にあの子が姿を消してしまいました」

「わかりました。すぐにそちらに向かいます」

「お願いします」

私は全速力で病院に向かった。

＊　＊　＊　＊

現在、検査の結果と今後の過ごし方について医者に説明を受けている。

治療魔法で傷口は何とかなっていたが、出血の方は輸血をしなくてはならないほどだったので少し身体がけだるい状態だ。

「フィルさん、一応退院の許可は出します。しかしそれはあくまで日常生活が出来るということです。戦闘はしばらく許可できませんよ」

「先生、どのくらいの期間になりますか」

「最低でも１０日、全快になるには2週間と見てください。補助魔法程度なら大丈夫ですけど、攻撃魔法なんて絶対に使わないでください。いいですね、六課の担当医にもその事は伝えておきますから」

「分かりました」

まぁ、しばらくでかい戦闘は無いはずだから、ここはゆっくりしておきますか。

戦闘以外でもやることはいっぱいあるしな。

《マスター、良い機会です。少し休んでください！！　私があれほど言っても、全く聞いてくれないし！！》

「……すまん……」

＊　　＊　　＊　　＊

わたし達が到着すると、シスターシャッハが走ってこっちやってきた。

「申し訳ありません！！」

「状況はどうなっていますか」

「はい、特別病棟とその周辺の封鎖はすんでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見られていません」

「外には出られないはずですよね」

「ええ……」

「では手分けをして探しましょう。フェイト隊長はシスターシャッハと一緒に、わたしは別の方を探してみます」

「フィルにも一応連絡する？高町教導官」

「ううん、フィルには言わないでくれるかな。まだ完治している訳じゃないから……」

「そうだね……それじゃ探しに行きましょう」

私とシスターシャッハは東の方、なのはは西の方を探すこととなった。

＊　＊　＊　＊

「検査では一応危険反応は見られなかったのですよね」

「ええ、魔力量はそれなりに高い数値でしたが、それも普通の子供の範疇でした」

「しかし、それでは……」

「悲しいことですが、人造生命体なのは間違いないです。どんな存在的な危険を持っているか……」

「待ってくださいシスターシャッハ！！　あの子のことは騎士カリムがフィルから聞いているはずです！！」

「だからこそです！！　聞いた話が本当なら、あの子はとてつもな

く危険な存在です！！　それだったら今の内に……」

「今の内に……何ですか……」

「「フィル！！」」

「……今の言葉、どういうつもりか言ってもらおうか。シスターシャッハ……」

＊　＊　＊　＊

わたしは女の子を捜して西の外れの方にやって来ていた。
今の所フェイトちゃん達からも連絡がない所を見ると、東の方にはいないかも知れない……
そんなとき、茂みの中からウサギのぬいぐるみを持った小さな女の子が出てきた。

「あっ……」

女の子は怯えているみたい……
今は不安にさせちゃいけないね……

「心配したんだよ……」

＊　＊　＊　＊

「どういうつもりかって聞いてるんだよ……」

「待ってフィル！！　これは！！」

「ごめんフェイトさん。今は下がってもらえるかな。答えろ、シスターシャッハ。どういうつもりなんだ！！」

「そのままの意味です。あなたの話が本当なら、あの子が世界の破滅の鍵になっているじゃないですか。　それだったら、今の内にあの子を何とかすれ……ば……」

「……ふざけるな……」

な、何なのこの殺気は……
なにも力を解放してないのに、この押しつぶされそうなプレッシャーは。

「ふざけるなよ……あんた……人の命をなんだと思ってるんだよ！！」

「別に私は命を軽んじてなんかはいません！！　ただ私は危機が分かっているのに手を打たないのがおかしいって言ってるのです」

「その考えが傲慢なんだよ！！　聖王教会はいつから人の命をそん

な風に扱うようになったんだ！！　あの子はなんにもしてないだろうが！！」

「何かあってからじゃ遅いんです！！　……って、あれは！！」

シスターの視線の先には、なのはさんと女の子が庭先にいた。

「逆巻け、ヴィンデルシャフト！！」

「しまった！！」

「待って、フィル！！」

「どうして止めるんですか！！　このままじゃ！！」

「ここはなのはに任せよう。史実とちょっと違っちゃったみたいだけど、これってあの二人にとっては大事な出会いじゃなかった」

「あっ……」

そうだった。ヴィヴィオはこの時の出会いから、なのはさんのことを意識し始めたんだ。

「大丈夫、本当に危なくなったら私が止めるから、それにフィルは、今は魔法使用禁止でしょう」

「うっ……」

確かに俺は、攻撃魔法使用禁止だった。

「今はなのはを信じよう……」

「はい……」

＊　＊　＊　＊

ヴィンデルシャフトを構えたシスターシャッハは、今にも女の子を攻撃しそうな勢いだった。
女の子も怯えてしまい、ぬいぐるみを落として尻餅をついてしまっていた。

「シスターシャッハ、とりあえず武器を下ろしてもらえませんか……」

「はぁ……でも……わかりました……」

シスターシャッハを止めたわたしは女の子に歩み寄ることにした。
まずはお話をしなくちゃね……

「ごめんね、ビックリしたよね……大丈夫？」

「……うん」

地面に落ちていたウサギのぬいぐるみを渡してあげると、それを受け取り少女は立ち上がった。
ついでに服に付いていた埃も払ってあげた。

（緊急の危険はないようです。大丈夫ですよ）

（はい……）

「初めまして、高町なのはって言います。お名前言えるかな？」

「ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオ、可愛い名前だね。ヴィヴィオ、どこかに行きたかった？」

「ママ……いないの……」

「！！」

そうだった。この子は……

でもここで不安にさせちゃ駄目だよね……

「……ああ、それは大変。じゃあ、一緒に探そうか？」

「……うん」

＊　＊　＊　＊

「どうやら大丈夫みたいだね」

「……考えてみれば、なのはさんがいるんだから大丈夫だよな」

「そうだよ。普段は私よりも冷静沈着なのに……　まぁ、ヴィヴィオにもしもの事があったらと思うと、ああなっちゃうかも知れないけど」

「……すみません……」

《まぁ、シスターシャッハのあの一言は、私もカチンと来ましたけど……》

「プリムも気持ちは分かるけど……ね……」

本当はフェイトさんも、いつバルディッシュを起動させてもおかしくなかった。

それでも、あの二人のためにギリギリまで手を出すつもりはなかっ

たんだな。

「ともかく一旦六課に戻ろうか」

「はい」

俺たちはフェイトさんの車で六課に戻ることになった。
もちろんヴィヴィオも一緒に。

＊　＊　＊　＊

六課に戻った私達は、部隊長室で私とフィルとはやてが、今後のことについて話し合っていた。

「臨時査察とフィルと私の出頭!!」

「うん、こないだの戦闘でフィルが完全解除したやろ。あれが地上本部のお偉いさんに見つかって、今日二人で地上本部に出頭しろって……」

「はぁ……やっぱり突っ込まれたか」

「まいったね。元々六課って保有制限オーバーしているのに、さらにフィルがあんな能力を持っているとなると……そして、地上本部の査察は、海の査察と違って甘くないからね……」

でも、地上の査察が厳しいのではなく、海の査察が甘すぎるだけで、この位の査察は結構あるのだ。
私も最近知ったんだけどね。まだまだ勉強不足だ。

「うぇ～、うちは只でさえ、ツッコミどころ満載の部隊やしなあ……」

「今、配置やシフト変更があったら致命的だよ。特にフィルだったら……」

ここに来てこれはかなり痛手だ。
もしフィルがシフト変更となると六課の機能が著しく低下してしまう。

「う～ん、なんとか乗りきらな」

「……ねぇ。これ、査察対策にも関係してくるんだけど。六課設立の本当の理由……そろそろ、聞いてもいいかな」

「そうですね。もう教えてくれても良いと思いますよ。俺に言いにくいのなら一旦席を外しますから……」

「……いや、フィルにも知っておいてもらいたいし。……実はな、今日これから聖王教会本部、カリムのところに報告にいくんよ。クロノ君も来る」

「クロノも？」

「本当はそこでまとめて話したかったんだけど、フェイトちゃんとフィルにはまた今度話すわ。今回はなのはちゃんと二人で行ってくるわ」

「わかった。なのは、戻ってるかな？」

私は手元でパネルを操作し、なのはの部屋に回線を繋いだ。

『うわぁぁぁぁん！！　やだぁぁぁ！！　いっちゃいやだぁぁぁ！！』

回線が繋がるとヴィヴィオの大きな泣き声が聞こえてきた。

＊　＊　＊　＊

「あの……どんな騒ぎ？」

『あっ、フェイト隊長。実は……』

なのはの自室はヴィヴィオの泣き声でちょっとした戦場状態になっていた。

なのはにも仕事があるから、いつまでもこのままというわけにはいかない。

しかもこの後なのはは、はやてと一緒に聖王教会行きなのだ。それはさすがに外せない。

さらに私もフィルと一緒に地上本部に出頭しなければならないので、そう時間はない。

「ちょっと待っていてね、そっちに行くから……」

『うん、出来るだけ早くお願い……』

＊　　＊　　＊　　＊

「よう、苦労してるみたいだな」

「フィル！！」

「八神部隊長、それにフェイトさん」

俺たちがなのはさんの部屋に来てみると、ヴィヴィオが未だになのはさんの服をつかんだまま泣きじゃくっていた。
スバルの奴が何とかしようと一生懸命になっているのは分かるけど、それじゃ逆効果だぞ。
エリオとキャロが一歩離れているのはティアがしたんだな。

「エースオブエースにも、勝てへん相手はおるもんやね」

（フェイトちゃん、はやてちゃん、フィル、その……助けて）

「スバル、とりあえず落ち着け。こういう時は一旦引くんだ。子供はそういう所すごく敏感だぞ」

（フィル～　それだったら、フィルがどうにかしてよ～）

（スバルお前な～　もう少し子育てのスキル身につけろ。女の子なんだから、そんなんじゃ将来困るぞ。ていうかティア、こういうのはお前の方が得意なんだから、どうにか出来たろうに……）

（そうなんだけどね。何かなのはさんのあの慌てようは、中々見れないから……）

（ったく、ティア良い根性してるよ……）

念話で話してるからみんなには聞かれないけど、聞かれたらシャレにならないな。
まぁ、俺がティアの立場だったら同じ事してるかもな。
とはいえ、いつまでもこうしてるわけにはいかないな。

（フェイトさん、ちょっと良いですか）

（どうしたのフィル？）

（とりあえず、ヴィヴィオに泣きやんでもらわないといけないんですけど、どうやります）

（一応落ちているぬいぐるみを使って、何とかしようと思ったんだけど……）

（だったら、ちょっと俺に手伝わせてもらえませんか）

（えっ、どうするの？）

（それは見てのお楽しみと言うことで。プリム）

≪（話は聞いてました。私も協力すれば良いんですよね）≫

（ああ、うまくやってくれよ）

結局フィルは私に教えてくれなかった。
いったいどうするんだろう。

＊　　＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオ、はい、これ……」

俺は落ちていたぬいぐるみを拾って、埃を払ってしゃがみ込んで、
自分の視線をヴィヴィオの高さにあわせた。
相手に話す時は、まず目線をあわせることが大事だ。
さっきみたいに大泣きはしてはなく、ぐずる位にはなったので、俺
の持っているぬいぐるみに興味を持っているみたいだ。ちょっと手を
動かしてみると、それにつられている。
これだったら、あの手で大丈夫だろう。

（プリム、準備は良いな）

≪（いつでも良いですよ。マスター）≫

とりあえずぬいぐるみに、魔力で創った糸を巻き付け操れるように
する。ただこれだと丸見えなので、幻術で見えないようにする。つ
いでに魔力隠蔽もしておこう。
で、プリムにしてもらうことは……

《こんにちはヴィヴィオ》

「えっ……」

『ええっ！！』

あの、エリオとキャロはともかく、スバルお前まで驚いてどうする。
これはお前とティアは見たことがあるだろ。
俺はフェイトさんと目があってウインクをすると、それで分かってくれたみたいでこっちにやってきた。

「ヴィヴィオ、この子はあなたのおともだち？」

「ヴィヴィオ、こちらフェイトさんとフィルくん、なのはさんの大切なお友達」

《あっ、フェイトお姉さんだ～》

俺がぬいぐるみを動かして、プリムがそれ合わせて話すんだけど、これ二人の呼吸が合わないと、ちぐはぐしちゃうから結構難しいんだよな。

「どうしたのかな、うさぎくん」

《あのね、フェイトお姉さん。僕ねヴィヴィオと遊びたいんだけど、ずっと泣いちゃってて……でも、僕少しの時間しかいられないから……》

「そっか……じゃお姉さんも一緒に話してあげるね」

《ありがとう、フェイトお姉さん》

それにしてもフェイトさん、打ち合わせもなしでよくあわせられるな。

さすがエリオとキャロの世話をしていただけはあるな。

「ヴィヴィオ、うさぎくんね、ヴィヴィオと一緒に遊びたいんだって、だけどほんの少ししかいられないから、すごく寂しがっているよ」

俺はうさぎのぬいぐるみの手を動かし泣き真似をして見せた。

ついでにのの字を書く仕草もしてみた。

《い～もん。い～もん。ヴィヴィオは僕より、なのはさんの方が良いんだ～》

「あっ……」

ヴィヴィオは完全に泣きやみ、意識はもうフェイトさんとうさぎに向いていた。
なのはさんのスカートを握りしめていた手も離れていた。

「ねぇ、ヴィヴィオ、なのはさんはこれからお仕事なんだって……」

「うん」

《だから、その間は僕と一緒に遊ぼう。もう少しだけだけど一緒にいられるからね》

「うん！！」

「良かったね。ヴィヴィオ」

「ということです、なのはさん……って、あの……」

「あっ……えっ……」

あらら、なのはさんもすっかり驚いてしまっているよ。
まぁ、初めて見るとちょっとビックリするかもな。

（ということで後は頼んだティア）

（いいわ。　っていうかあんた、最初からあたしに引き継がせるつもりだったでしょう）

（お見通しか……さすがティア）

（まぁ、あんたもこれからフェイトさんと一緒に地上本部に行くんですものね。でもぬいぐるみを操っている間はあたしは何も出来ないわよ）

（お前はもう報告書は書いてあるだろ。だったらスバルの奴は自分でやらせろ。ていうか、なのはさん達にも念を押させてるからな。少し自分でやらせろって）

（確かにね。あとエリオとキャロにも手伝わせるわよ。それで良い）

（その辺は任せるよ。じゃ、後は頼んだ）

（はいはい、さっさと行ってらっしゃい）

＊　　＊　　＊　　＊

「おい、フィル早くしろよ」

「すみません、あとサンダーを格納庫に入れればオッケーです」

実は本当は俺とフェイトさんは、車かサンダーで地上本部に行こうとしたんだけど、八神部隊長が行きはヘリで送るって言ってくれたのでヴァイス陸曹に頼んでヘリで送ってもらうことになった。
でも、帰りは何の乗り物も無くなってしまうので、サンダーを格納庫に入れていたのだ。

「搬入完了です。それじゃヴァイス陸曹お願いします」

「んじゃ行くぜ！！」

俺たち四人を乗せたヘリはヘリポートから飛び立った。

「ごめんねフィル、フェイトちゃん。お騒がせして」

「いやぁ、ええもん見せてもらったよ。ってかフィル、いったい何をしたんや？」

「そうだよ、レイジングハートにも何の反応もなかったし、いったいどうやってやったの？」

「ふふっ、フィル。そろそろなのは達に教えても良いんじゃない」

フェイトさんにはさっき種明かしをしたんだけど、なのはさん達にも言っておくか。

「まぁ、種明かしをしますと魔力で創った糸で操っていただけなんです。声はプリムに担当してもらっていたんですよ」

「でも、糸は全く見えてなかったで。魔力反応もなかったし」

「魔力反応は幻術で隠蔽したんですよ。糸が見えていたらバレちゃいますしね」

「私もフィルからその事を聞いて驚いたよ。まさかバルディッシュまで騙すんだから」

「幻術は俺とティアの得意分野ですからね。この分野に関しては隊長達にも負けませんよ」

「ってことは今頃ティアナは大変だね。わたし達が戻ってくるまで、ぬいぐるみを操っていなければいけないんだから」

「その辺は大丈夫ですよ、なのはさん。ティアのことですから適当なところで『僕はもう帰らなくちゃ』とかいって何とかしますよ」

「まぁ、それなら……ってことはもしかしてティアナもフィルと同じ事出来たんじゃない！！」

「そうですけど、大方スバル達がパニックになって、それの対応で精一杯だったんでしょう」

ティア、本当のことは言わないでおいてやるから今度なんかおごれよ。

＊　＊　＊　＊

ヘリで地上本部のヘリポートに下ろしてもらった後、俺たちは地上本部の入り口に来ていた。
呼ばれることは予測していたけど……

「……フィル、本当にレジアス中将が呼んだのかな？」

「出頭命令状には、間違いなく本人の名前が記載してあるからね」

「でも、ちょっと腑に落ちないんだよね。何で二人一緒に？」

「こればっかりは行ってみないと分からないな……」

ロビーの受付嬢に俺たちが来たことを伝えると、最上階の部屋に来るようにと伝えられた。

＊　＊　＊　＊

「……失礼します」

「入れ」

私たちが中にはいると、そこには強面の体格の良い中年の男性と眼鏡をかけた凛とした女性がいた。
レジアス・ゲイズ中将とオーリス・ゲイズ三佐である。

「機動六課所属執務官フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、同じく機動六課所属二等陸士フィル・グリード。先日のことの報告にて出頭いたしました」

「ご苦労……まぁ、そこに座りたまえ」

「「失礼します」」

私たちはソファーに座り、中将達も腰をかけた。
早速先日のことで話をするのかと思えば……

「あ、あの……」

「ん、どうしたのかね。ハラオウン執務官」

「中将が私達を呼び出したのは、先日のことで説明ってことで、六課の方に出頭命令をしたんですよね。でも……」

そう、さっきから中将もオーリス三佐も、フィルと世間話をしているだけで、全く本題に入ろうとはしない。

「申し訳ありませんが、私達も時間が限られてますので、出来れば本題の方に……」

「……ぷっ」

「「「あははは！！」」」

「えっ、えっ？　何か私、変なこと言いましたか？」

「おい、フィル。ハラオウン執務官にまだ言ってなかったのか」

「実は……まだ……」

「駄目じゃない。彼女ポカンとしちゃってるじゃない。またあなたのいたずら癖が出たの。訓練生時代から変わってないわね」

「オーリス姉、勘弁してよ。昔のことは……」

「ええっ！！」

もう私は訳が分からなくなっていた。
いったいどうなってるのよ！！

＊　＊　＊　＊

《マスター、いい加減にフェイトさんに話さないと……》

「そうだな。フェイトさん色々混乱してると思うけど、レジアス中将達と俺は古くからの顔なじみなんだ。そして……地上本部で唯一、話が分かる人でもある」

「ちょっと待って！！　まさかレジアス中将に！！」

「ご推察の通りです。私達はフィルから全てを聞いてます。そして……フィルが経験してきたことも……」

「そう……ですか……」

「追求されないんですね。もっと言われるかと思われましたが……」

「私はフィルがあなた方を信じて、全てを話されたのなら何も言うことはありません。それにいくら本局側だけ強化しても、地上がちゃんとしてないと意味がない。ミッドの町を守っているのは地上の人間なんですから……」

フェイトさんの言葉には嘘は感じられなかった。
本局の人間なのにちゃんと地上のことも見てたんだな。

「ほう……」

「どうやら、私達の目に狂いはなかったですね……」

「どういう事ですか？」

「本局の人間というのは、大半、次元世界を守るという名目で、地上の優れた人間を根こそぎ持って行ってしまう。実際、機動六課にはティアナ・ランスターとフィル・グリードという人材が持って行かれてしまっている」

「本来ならどちらかという約束だったのですが、リンディ・ハラオウン統括官が三提督に根を回して二人とも持って行かれてしまったのです」

「ちょっと待ってください！！　三提督って六課って、そんな大物がバックにあるんですか！！」

「フェイトさん、俺もオーリス姉に聞くまで知らなかったんだけど、機動六課ってかなりのバックボーンがあるんだよ」

「フィル、それいつから知ってたの！！」

「こっち戻ってきてからすぐ。中将達に話した時に聞いたんだ」

「冗談じゃないぞ！！　ティアナ嬢ちゃんまで持って行きおって！！」

「テ、ティアナ嬢ちゃん……ねぇ、フィル。レジアス中将ってティアナとも知り合いなの？」

「ティーダさんのことは知ってますね。その時にティアにティーダさんのことを『無能な奴』といった馬鹿を制裁したのがレジアス中将だったんだよ。俺もその時からの知り合いなんだよ」

「あのときは馬鹿な部下のせいで、ティアナ嬢ちゃんの心に深い傷を追わせてしまった……」

「でも、あのとき中将が一発ぶっ飛ばしてくれたから、最悪の事態にはならなかったんですよ。もし中将がいなかったら……」

多分ティアは最悪精神崩壊していたか、自殺していたかも知れない。
ティアは両親がいなくなったから、ティーダさんの存在はかけがいのないものだったからな。

「そうだったんだね。人の噂なんて当てにならないんだね。私が聞いたレジアス中将のことって……」

「言わんでも良い。強引すぎる政策とか、メタボ親父とかそういったことだろう……」

「は、ははは……」

「いささかやり過ぎと言うことは認めているが、まだまだ若いモンには負けんぞ！！」

「きゃっ！！」

そう言って中将は上着を脱いで、上半身裸の状態でポージングをし始めた。
中将の肉体は歴戦の傷と鍛え抜かれた筋肉で構成されていた。
とても噂のようなメタボの身体ではない。

「中将……女性の前で醜いものを見せないでください。ハラオウン執務官、顔真っ赤になってしまっているじゃありませんか」

「オーリス、相変わらずきついな。すまんなハラオウン執務官、儂も少し興奮していたようだ」

「いえ……その、結構な肉体美で……あの……」

「レジアスの親父さん……あまり刺激の強いもの見せないでくれ。フェイトさん……本当に男性の裸とかにウブな所あるから……」

「フィル、お前まで言うか。せっかく身軽になったことだし、久しぶりに力比べでもするか」

「勘弁してくれ。純粋な力比べじゃあんたには勝てないよ。それに、そろそろ本題に入らないと……」

「それも、そうだな……」

レジアス中将は上着を羽織り、身なりを整えると目つきが仕事のものになっていた。
これからが本番だ……

＊　＊　＊　＊

「さて、今日二人を呼んだのは先日の一件でのことでだ……」

「フィル、あなた限定解除したわね」

「……はい」

この二人を欺くのは正直無理だ。

例えこの場は何とかなっても、査察が入ってしまってはアウトだ。

「正直不味かったわね。あなたも知っているでしょう。六課の戦力はリミッターをかけてギリギリだと言うことを……」

「儂も正直ビックリしているぞ。まさか隊長達と殆ど遜色ない力を持っていたなんてな」

「実際は完全には使いこなせてないんですけどね。何とか完全解除が可能になったというだけです」

「ハラオウン執務官、あなたの意見も聞いておきたいのですが、あの場で直接見たフィルの力はどんなものでしたか」

「はい、現在のフィルの力は魔力に関しては、私に匹敵するくらいの物を持っていますが、その魔力を使った戦闘技術についてはまだ未熟な所があります」

さすがフェイトさんだ。俺の弱点を即座に見抜いていた。
今まで少ない魔力を使った戦い方はしていたが、大きな魔力を使った戦闘技術に関しては苦手だ。
こないだもファナンクスシフトを使っただけで、魔力の殆どを使ってしまっていた。
せっかく魔力があっても、只全開で出しているだけじゃ意味がない。

「六課のチーム編成は見せてもらったが……まさかメガーヌの娘も戦うつもりなのか」

「やりきれないですよ。いくら保護観察処分とはいえ、こんな少女を戦場に出さなくてはならないなんてな……本当はメガーヌさんと静かに暮らして欲しかったんだけど……」

「ルーテシアがしてしまった罪は、お前に対する殺傷魔法とアグスタの件だけだからな。殺傷魔法のことも被害者のお前は何もする気はないんだろ」

「ええ、そんなことをするんでしたら、最初からこんな真似はしませんよ」

「そうだった！！　フィルお願いだから、もうこんな無茶はしないで！！」

「ハラオウン執務官の言うとおりですよ。あなたは昔からそうでしたね。自分を省みず行動するのは！！」

「フェイトさん、オーリス姉、勘弁してよ……」

「「そう思うならしっかり反省しなさい！！」」

「……はい……すみません……」

「ハラオウン執務官、オーリス、その件は後でゆっくりとするとして今は本題の方をするぞ」

後で追求されるのか……

お願いだから、お手柔らかにして欲しい……

「今話したように、今後ルーテシアまで加わるとなると、フォワード陣も編成を変更をすることになるし、お前と他のメンバーとの訓練内容は大きく変わってくる。それではお前は自由に訓練が出来ないし、フォワードの成長も妨げてしまう」

「そんなことは！！」

「言い切れるのか。今は良いかもしれないが、このままお前を中心にやっていては、お前にもしもの事があった時や別行動をする時に支障が出てきてしまうぞ」

「！！」

痛いところを突いてくるな……

確かにこのままじゃ俺も本格的な訓練が出来ないし、ティア達にも良いとは言えない。

「そこでだ、フィル。お前フォワードを一旦抜けろ……」

「待ってください！！」

「勘違いをするな。別に機動六課から異動しろと言うことではない。むしろこれからのためだ」

「これからの？」

「お前には単体で今後は動いて欲しい。そこでハラオウン執務官、君にはフィルに付きっきりで教導してもらいたい。リミッターが掛かっていては厳しいので、君だけになるが儂の権限でリミッターを撤去する」

「「ええっ！！」」

マジかよ。リミッター撤去って！！
地上本部は本局より厳しいのに！！
現に八神部隊長なんてかなり面倒な手続きをしなきゃいけないのに！！

「本当はしたくないんですけど、リミッターが掛かっていて死んでしまいました。なんていうのではお話になりませんからね。昨日の戦闘だってあやうく……」

「あっ……」

そうだった。俺が何とか間に合ったからフェイトさんは死ななかったけど……

「そういうことだ。今お前がすべきことはお前のレベルアップだ。それには同等以上のパートナーが必要になる」

「ハラオウン執務官、フィルのことお願いしますね。この子は私達にとっても大事な子ですから……」

「……分かりました。フィルのことは、私が責任を持って鍛えます。覚悟してね！！」

「望むところですよ」

「ハラオウン執務官のリミッターは今から解除してもらうんだが、その人物がまだ来てないんだ……」

「いったい誰なんですか？　私のリミッターを解除してくれる人物は」

「すぐに分かる。ヒントを一つだけ言っとくと、君も知っている人物だ」

誰なんだろう。私が知っている人物って？

『失礼します、レジアス中将。来賓の方々がお見えになりました』

「分かった。こっちに来てもらうように伝えてくれ」

『了解しました』

しばらくすると、ドアからノックが聞こえてその人物が入ってきた。嘘でしょう。あなた達は！！

「久しぶりだね。フェイト、フィル」

「お久しぶりね。フィル」

「ユーノ！！　それにあなたは確か戦闘機人の……」

「ええ、私はドゥーエ。ご推察の通り戦闘機人です。今はスクライア司書長の補佐をしているの」

「詳しい経緯はフィルに聞いてね。それよりも……」

「フェイト、今日僕がここに来たのは、レジアス中将に頼まれて君のリミッターを解除しに来たんだ」

「そうだったんだ。ユーノだったんだね。リミッターを解除してくれるのは」

「うん、一応無限書庫司書長には提督権限もあるんで、君たちのリミッターを解除できるんだ。但しその場合は地上本部の許可が必要なんだけど、まさか大元から解除申請が出るとは思わなかったんだけどね」

「しかたなかろう。だが特例はこれっきりだからな。只でさえ六課は……」

「そう……ですよね」

機動六課は地上にあるけれど、あくまで本局所属だ。
六課の存在は、地上の上層部にとっては煙たいものになっている。

「私たちもフィルから聞くまでは、八神二佐のことは誤解していたんですけどね」

「ちょっと良いですかオーリス三佐。八神二佐のことはいつ知った

んですか？」

「フィルが私たちに未来であったことを話したときにですよ。あれは六課ができる二年前になりますね」

「「ええっ！！」」

「ユーノ知っていたの！？」

「いや今初めて知ったよ。そんな前からフィルは準備をしていたんだ！！」

「……あのね、それは言わない約束だったでしょう。オーリス姉」

「フィル、これは言っておいた方が良いことよ。いつまでも隠しきれるものじゃないわ」

「だけど！！　これは俺が勝手にしたことだ。八神部隊長ならちゃんと……」

「確かに八神なら六課を作ること自体はできるだろう。だが本局で育てられた八神では、地上のことを頭では理解しても行動には移せん。例えナカジマに師事してもな……」

「それが分かっていたからこそ、あなたは事前策として、私たちにコンタクトを取ったんでしょう。少しでも六課と地上本部との確執をなくすために……」

全てを見抜かれ、俺は何も言えなくなってしまった。

「ともかくだ。今はリミッターの撤去をしてしまおう。スクライア司書長」

「そうですね。それじゃフェイト、今から撤去するからじっとしていてね」

「分かった…」

そういってユーノは翡翠の魔法陣を展開し、リミッター解除の呪文を唱え始めた。

「我、ユーノ・スクライアの名の下に彼の者の束縛を解き放て。リミット完全撤去・リリース!!」

次の瞬間、私にかけられていたリミッターが完全に外され、魔力が体に満ちあふれてきた。

「……久しぶりかな。何にも制約がないのって」

「ハラオウン執務官、これは非公式ですので、この後代わりのリミッターはつけてもらいますよ」

「オーリス姉、それは俺がやるよ。自力で解除できるタイプなら普段から俺が使っているしね」

「そうね、それじゃそれで行きましょう」

「フェイトさん、と言うわけで一応リミッターはつけますけど……」

「フィルが普段やっているヤツと同じ物でしょう。それだと自分で解除できるし、自力を上げる訓練にもなるしね」

「分かりました……じゃプリム頼むわ」

《了解しました。それじゃやりますね》

プリムが疑似封印の魔法陣を展開すると、フェイトさんの体を包み、再び魔力が封印された状態になった。

「改めて言う必要はないと思うけど、このリミッターは自分で解除できるから不自由はしないと思います」

「ありがとう、フィル」

「……」

「フィル？」

（……本当はこんな物、つけたくなかったんだけどな）

「これで用件は終わりだ。後は八神にこの意見書を渡しておいてくれ。査察の代わりだとでも言っておけばいい」

「えっと、これは俺に渡されてもどうしようもないんで、フェイトさんに……」

「いや、これはおまえが直接渡すんだ。今回のことも含めて八神とちゃんと話し合え」

「中将……」

「そうだね……それにはやては気づいていると思うよ。だからこそフィルを無理に六課に入れたんだと思う。自分へのリミッターを強くしてでもね」

「フェイトさん……」

「フィル、僕からも一言だけ言っておくよ。あまり自分で抱え込まないこと。はやての件といい、僕のことといい、一人でやっていたよね」

「……はい」

「でも、それは言い換えれば、仲間を信用していないってとれるんだよ。だから……」

ユーノ司書長は俺の肩に手を置き……

「もう少し、肩の力抜いてみたら。そうした方がうまくいくこともあるから……」

「ユーノさん……」

「ふふっ、少し前の司書長もフィルと同じだったんですよ」

「ドゥーエ、それは！！」

「いいえ、良い機会なのではっきり言わせてもらいます。いつもいつも三徹四徹あたりまえのようにやっていて、自分を省みないでやって、周りがどれくらい心配していると思っているんですか！！」

「……は、はい」

「それでも最近はマシになったんだよ。クロノの無茶な依頼をドゥーエが説得して、減らしてくれたおかげで大分ゆとりができたしね」

「……ごめんユーノ、義妹として謝らせて……」

「フェイトが気にしなくても良いよ。これは元々あいつが悪いんだ

から……」

「そうですよ。クロノ提督には、私からきっちり『お話』しておきましたから……」

ドゥーエこわいぞ。その笑み。なんか切れたときのなのはさんみたいだぞ。

ていうか、女性って切れるとこんな感じなのか。

「フィル、とにかく六課に戻りましょう。はやてたちも戻ってくるだろうしね」

「もうこんな時間なんだ。たしかに部隊長たちも聖王教会から戻ってくる頃ですし……」

俺たちはそれぞれ解散し、俺とフェイトさんはサンダーで六課に戻ろうとしたんだけど……

「あのね……フィル、一つだけ聞いて良いかな」

「どうしたの？」

「あのとき、私にリミッターをかけたとき、何で辛い表情をしていたの？」

「！！」

「……やっぱりそうだったんだね。以前なのはから私たちのリミッターのことを話していたときも、そんな表情をしていたって聞いていたから……」

「なのはさんが？」

なのはさん気がついていたんだ。
あのとき無意識だったけど、リミッターに嫌悪感を持っていたことに。

「そこまで、気づかれていたのなら話すよ」

俺はフェイトさんに、リミッターに対しての不満を全部言った。

こんな物があったら、事件現場に行ったとき自分より能力が高いヤツに遭遇したときはどうするのか。
知恵と判断力で乗り切れることなんて、たがが知れてる。

ティーダさんの時だってそうだ。殉職したときの犯罪者はＡＡＡの魔力持ちだった。
自分よりランクが上の相手を相手にするってことはそれだけ命がけのことなんだ。

「……そっか、ティアナのお兄さんのことは、フィルにも深い傷として残っていたんだね。それに気づかなかったなんて、恋人として失格だね」

「それは違う！！　これはあくまで、俺個人が思っていたことで、フェイトさんが気にすることじゃ！！」

《マスター、少しはフェイトさんのことを考えてください！！　彼女は少しでも、あなたの力になってあげたいんですよ。例えどんな些細なことであってもです》

「プリム……」

《何回も言いますが、マスターは少しフェイトさんに甘えてください。そのくらいで丁度良いです！！》

「そうだね。前も言ったけど、フィルは甘えてくれるくらいで丁度良いから。はやてのことだって、私は全く知らなかったし……これ以上隠してることはないでしょうね！！」

「無い無い。さすがにこれ以上はない！！　俺がやっていたことは、

ユーノさんやマリーさんたちに、もう全部託しているし」

「分かった……信じてあげるけど、これ以上隠していたら酷いからね」

「大丈夫だから……それと悪いんだけど、明日の午後、ルーテシアを外に連れ出して良いかな」

「ルーテシアを……あっ、そういうこと」

「うん、メガーヌさんと会わせてあげたいと思ってね」

「良いけど、一つだけ条件があるよ。私も一緒に連れて行くこと。理由は知っていても、一応保護観察処分だから」

「それもそうだな。でも良いの？　そっちだって、スカリエッティの捜査で時間がとれないのに……」

スカリエッティのことはフェイトさんにだけは、俺の知り得ることは全部教えているけれど……

「それに関しては大丈夫。ギンガもいるし、アコーズ査察官も調べてくれているしね」

「そっか……じゃお願いします」

「うん！！」

俺たちはサンダーに乗り、六課に帰還した。
途中でヴィヴィオにおみやげとしてアイスを買ってあげたんだけど、
それをティア達に見つかってしまい、今度みんなに手作りアイスを
作る羽目になってしまったのは余談である。

＊　＊　＊　＊

六課に戻った俺たちは、それぞれ情報交換を行った。
八神部隊長からはカリムさんの予言のことと六課の意義について
俺たちからはレジアス中将から渡された文書とその内容について

「そっか……ありがとうな。査察を覚悟してた分、このくらいですんでよかったと思っているわ。最悪フィルが異動って言うのも、十分考えられたからな」

「でも、フィルをスターズから外せって、これは十分きついよ！！」

「なのはちゃん、これは近いうちに話すつもりやったんだけどな。ルーテシアが六課に入ってくれることになったやろ。これを機会に、スターズとライトニング再編成をしようと思ってな。現にスターズ

にティアナとフィル、二人のセンターガードがおるやろ。それもふまえてな」

「確かにエリオとキャロに対して、スターズの方に戦力が傾いているね。フェイトちゃん、レジアス中将の文書ではどうなってるの？」

「えっと、フィルをスターズから外し、所属をフリーにすること。後フォワードには組み込まないで、単独で行動する権利を与えること。その責任者として私がすること。以上のことが書いてあるよ」

「つまり今後の訓練は、フォワード陣をなのはちゃんが中心で、フィルの訓練はフェイトちゃんが中心というわけやな」

「うん、基本的には私がやるけれど、なのはもフィルに直接教えたいことがあるだろうから……」

「そうだね……フィルにはちゃんと教えておいた方が良いね。集束魔法……スターライトブレイカーを……」

「なのはさん……」

「まぁ、訓練のことは、明日以降やっていくとして、三人ともお疲れ様や」

「うん」

「はい、お疲れ様です」

「情報は十分……大丈夫だよ……」

私たち三人は部隊長室を出て、廊下を歩いているとはやてがやってきた。

「あ……あのな……」

「どうしましたか部隊長？」

「その……」

「俺……席外しますね。どうやらなのはさん達に話があるみたいですし……」

「いや、フィルにも聞いて欲しいんや！！」

「……本当にどうしたのはやて？」

意を決し、はやては話し始めた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんは私の命の恩人で、大切な友達や！！　そしてフィルは、六課のことで必死で本局と地上の溝を埋めてくれた。そのおかげで、私は六課をつくることができた！！」

「……何のことですか。俺は何もしていませんよ」

「隠さなくてもええよ。私は知っていたからこそ、フィルを無理矢理でも六課に入れたんやから。地上が人材不足なのは知っていたけれど、フィルにはどうしても直接恩を返したかったんや！！　我が侭なのは分かっていたけどな……」

「八神部隊長……」

「六課のことは、出向の時にちゃんと聞いたよ」

「私もなのはも、ちゃんと納得してここにいる。大丈夫……」

「そうですね。レジアスの親父さんには悪いけれど、六課に来れたのは、すごくうれしかったんですよ」

「なのはちゃん、フェイトちゃん……フィル……ありがとうな。フィル、一つだけ聞いてもええかな」

「なんですか？」

「どうして私を助けてくれたんや。一年前から闇の書事件のことを言う人間は本当に少なくなった。代表格だったレジアス中将が六課に対して、これだけ甘くなるなんて」

「……そうですね。理由は俺のエゴですけれど、被害者が攻め続けられるのはおかしい。そう思っただけですよ」

「「「えっ？」」」

三人とも驚いているけれど、闇の書事件はちょっと考えれば部隊長は立派な被害者だぞ。
ランダムで選ばれ自分の命が危険にさらされて……
守護騎士がしてしまったことは許されないことでも、それはあくまで彼女たちがしたことだ。
八神部隊長は、むしろそれを止めていたし、自分の命を犠牲にしようとしたんだぞ。

「なのはさんもフェイトさんも、この事件は当事者なので、よく知っているでしょう。闇の書のページを集めていたのは守護騎士の意志で、部隊長本人はむしろ自分の命を犠牲にしようとしていた」

「そうだね……はやてちゃんは、あのとき自分を犠牲にしようとしていた」

「そして、そんなはやてを助けたくて、シグナム達は……」

「せやけど守護騎士のしてきてことは、主である私の責任や！！」

「それが間違っているんです。騎士達の罪は、あくまで騎士達の罪です。ましてや部隊長は、闇の書を消滅させた。その時点で被害者達の無念を晴らしているんですよ！！　なのになぜ、誹謗中傷受けなければならないんですか！！」

「「「あっ……」」」

「八神部隊長、平和を守るために、この道を選んだことは、俺は何も言いません。だけどそれを、罪の償いとしてやるのはやめて欲しいんです。あの事件は、誰がなんと言おうとあなたは被害者なんですから！！」

「……私は……ゆるされても……いいんか……」

「許すもなにも……ないです……本来、受けなくても良いことまで言われ続けてきたんですから……」

「フィル……」

「八神部隊長……俺は、あなたの苦しみを少しでもなくせましたか……」

フィル……私のためにここまでしてくれていたんや。
もう限界だった。
私は涙がこらえきれなくなりその場で泣き崩れてしまった。
フィルもそんな私をみてそっと抱きしめてくれていた。

「……ごめんな……こんなみっともない姿を見せて……」

「みっともなくないですよ。辛いことははき出した方が良いんですから。俺もそうでしたし…
…」

「せやな。あれ？なのはちゃん達は？」

「そういえば……」

（二人とも……おおきにな……）

＊　　＊　　＊　　＊

「はやてちゃん……よかったね……」

「うん……」

わたしたちは、はやてちゃんが泣き崩れてしまったとき、そっとその場を離れて、近くの廊下で様子を見ていた。

「でもフィル、本当に色々手助けしてくれていたんだね。今回のはやてちゃんのことだって……」

「そうだね。あの言葉は第三者のフィルが言ったからこそ、伝わったんだと思う。当事者の私たちじゃきっと駄目だった」

「はやてのことはフィルに任せて、私たちは戻ろうか……」

「そうだね……って、ちょっと様子が変だよ……」

＊　　＊　　＊　　＊

「……フィル、一つお願いがあるんやけどな」

「何ですか。俺にできることなら良いですよ」

「あ…あのな、仕事以外の時は、私のことをはやてって呼んで欲しいんや」

「なのはちゃん達は名前で呼び合っているのに、私だけいつも八神部隊長やん。何か一人だけ距離を置かれている感じがして嫌なんや……」

「ですけど……」

「それとも……私みたいな女には、魅力がないかな……」

「そんなこと無いです！！　部隊長は魅力的な人ですよ。でなければ何かしたりはしないですよ！！」

「あ……ありがとうな……」

「なのはさんにはなのはさんの、フェイトさんにはフェイトさんの、そして……はやてさんには、はやてさんの魅力があります。ですか

らそんな風に言わないで欲しいです」

あかんわ。フィルに名前で呼んで欲しかっただけだったのに、こうもストレートに言われると思わなかったわ。

＊　　＊　　＊　　＊

「うわ……ねぇ、フェイトちゃん。フィルって、あれ本気で言ってるよね……」

「……苦労するね、フェイトちゃん」

「……うん」

お願いだから、これ以上ライバルを増やさないで！！
ティアナだって、完全にあきらめたら訳じゃないのに、これではやてまで自覚されたら……
それに……・なのはだって、最近ちょっと怪しいし……

＊　　＊　　＊　　＊

「そ、それじゃ、フィルお休みな」

「お休みなさい。八神部隊長」

「違うやろ。今は名前で呼んでな」

「はい……お休みなさい、はやてさん」

「うん！！」

はやてさんは笑顔で自分の部屋に戻っていった。

なんか今日はいろいろありすぎだろ。

それと……

「そろそろ出てきたらどうですか、フェイトさん」

「気づいてたの？」

「あのね、俺は魔力反応を読める能力があるんだから気づきますよ。

少しは自分の彼氏を信用して！！」

「だ、だって……何かはやてと良い雰囲気になってたし……」

「そういうつもりじゃ……」

「分かってる。でもやっぱり不安になっちゃうんだよ。女の子ってそういう物だから……」

「それは俺も同じだから。フェイトさんが他の男性と話していると、やきもきするし……」

「フィル……」

「フェイトさん……」

俺はフェイトさんを抱き寄せ、キスをしようとしたとき……

「じ～～～」

「「うわっ！！」」

「何してるのかな、二人とも」

「なのはさん！！」

「なのは！！」

「フェイトちゃん、いつまでたっても戻ってこないし、心配して見に来てみれば……」

「ごめん、もしかしてヴィヴィオも……」

「フェイトちゃんとフィルを連れてくるって言って出てこられたけど、これじゃ本当にフィルも連れてこないと寝てくれないかも。ヴィヴィオ、フィルのことをずっとパパって言ってるし……」

ちょっとそれってどういうこと。
ヴィヴィオが俺のことをパパって言ってるって？

「はぁ……本当に自覚がないんだね。あのときフェイトちゃんと一緒にヴィヴィオの世話をして、さらにあれだけヴィヴィオのことを、気にかけてくれているんじゃ、懐かれて当然だよ」

「なのは、ということは……」

「うん、今日はフィルは、わたしたちの部屋で一緒に……っていない！！」

「そ、それじゃ、お休みなさい！！」

「「ああっ！！」」

「こらっ！！　逃げるな！！」

「フィル、私たちと一緒に寝ようよ！！」

冗談じゃない。只でさえ理性が限界に近いのに、蛇の生殺しなるのは御免被る！！
ったく自覚してくれよ。二人とも美少女なんだと言うことを……

＊　　＊　　＊　　＊

部隊長室に戻った私は、アルバムを見ていた。
懐かしいな……
アリサちゃんやすずかちゃん達との思い出、シグナム達八神家での思い出
そして……

「グレアムおじさん……」

「私の命はグレアムおじさんが育ててくれて。うちの子達が守ってくれて。なのはちゃん達に救ってもらって……」

「そして……私の心の闇は、フィルに助けてもらった……」

「だからこそ、これ以上フィルに悲しみを背負わせたらあかん！！
そのために私の命を使う。それが私ができるフィルへの恩返しなんや！！」

# 第１４話　新たな出発

翌日

機動六課スターズとライトニングのフルメンバーと、新たに加入するルーテシアとアギトで、緊急ミーティングをおこなうことになった。
内容はメンバーの再編成とフィルのことである。

「えっとな、今回新たに、ルーテシア達が六課で一緒に活動してくれることに伴い、チームの再編成をすることになったんや」

「「「「ええっ！！」」」」

「まぁ……そういうことだ。それに伴い、俺がスターズから抜ける」

「そんな！！」

「考えてみろ。今スターズにはセンターガードが二人いて、ライトニングには指揮できる人間がいない」

「それは……そうだけど、でも、あたし達のコンビネーションには、フィルが起点になる物もあるんだよ！！」

「スバル、それこそ甘えだ。今後の戦いは、それぞれのレベルを上げなくちゃいけないんだぞ。臨機応変に動けなくちゃ死ぬだけだ」

「でも！！」

「スバル、フィルの言うとおりよ。そろそろ自分たちのレベルを上げなくちゃいけないし、何より……」

「今のあたし達じゃ……フィルの邪魔になってしまう」

「「「ティア　（さん）……」」」

ティアの考えは少し違う。
今の俺は魔力は高いけど、指揮能力じゃティアの方が高い。
だからこそフォワードのリーダーを任せられるんだぞ。

「ティア、今おまえが思っていることは違うからな。なのはさん達も俺も、おまえがみんなのリーダーとして引っ張れると思ったからこそ、俺の離脱を賛成したんだ。今後の戦いは、俺自身もレベルを上げなくちゃ生き残れないしな……」

「フィル……」

「ティア、みんなのこと頼んだからな。俺もティア達に負けないようにがんばるから……」

「任せなさい。あんたの分もあたしが頑張るから。だからあんたは自分の事に集中しなさい」

「ありがとう……ティア……」

これで俺が抜けた後も大丈夫だ。
むしろ俺という異分子がいなくなる分、よりよいチームになってくれることを願う。

「それじゃ改めて、新チーム体制を発表するね」

新チーム体制は、隊長陣はそのままでフォワードに変更があるくらいだ。
スターズはティアとスバル、そしてルーテシアとアギト
ライトニングはエリオとキャロ

そして俺は……

「最後にフィルなんだけど、フォワードのみんなとの訓練の時は、ライトニングに入ってもらうんだけど、基本はフリーという形になるね」

「なのはさん、すみません。その場合、俺はコールサインとかはどうなるんですか？」

「そうだったね。ルーテシアはスターズ５を、アギトはスターズ６として登録になるね。それでフィルはね……」

「それは私から言うね」

「フェイトちゃん、決まったんだね。昨日から考えてたみたいだけど……」

「うん、フィルにはスターズとライトニング、どっちにもつながって欲しかったという願いを込めて、単純だけど『ライトニングスター』にしたんだ」

「ライトニングスター……ありがとうございます。実は寂しかったんですよ。スターズを抜けることになって……」

「よかった。気に入ってもらえて」

「最後になるけど、改めてみんなに紹介しないとな。二人とも入ってきてや」

部隊長の声で扉から入ってきたのは、ルーテシアとアギトだった。二人とも六課の制服に身を包んでいた。

「……あの……ルーテシア・アルピーノです。よろしく……」

「おう、あたしはアギトだ。まぁ……よろしくな……」

「緊張しなくても良いからな。俺が言うのもおかしいけど、こいつらみんな本当にお人好しだから……」

「「「「フィル　（さん）に言われたくないよ　（ありません）！！」」」」

「ぐはっ！！」

まさかティア達だけでなく、エリオとキャロまでに突っ込まれるとは……

「あんたって、昔から世話焼きばっかりやってるもんね。主にスバルのおもりだけど……」

「そうそう、あたしのおもりって……ちょっと酷いよティア！！」

「事実でしょう。あたしとフィルは、いつもあんたのおもりをさせられてるんだから……」

「実際、この中で一番世話焼きなのは、フィルさんですよ」

「キャロ……勘弁してくれよ」

「でも、キャロの意見は合ってますね。僕もそう思いますから……」

「エリオ、お前もかよ！！」

「ルーテシア、心配しなくても良いわよ。むしろフィルが抜けて、ストッパーがいなくなった分、あたしはあんたを大歓迎するわ」

「ちょっとティア、さっきから酷いよ。もちろんあたしも歓迎だよ」

「ルーちゃん、チームは違うけど同じフォワードとして、そして同じフルバックとして一緒に頑張ろうね」

「そうだよ、僕も一生懸命頑張るから一緒に頑張ろう」

あのな、お前らも人のことといえないだろ。
こないだあれだけ死闘をしていた中なのに……
お前らも十分お人好しだよ。

「ふふっ……ふふふっ……」

「ルールー？」

「アギト……ここは本当に暖かいね。私はみんなにあんな酷いことをしたのに……」

「まぁ、これがあいつらの良いところだ。だからお前らも、あいつらと友達になってくれると嬉しい」

「フィル……さん……ありがとう……」

「別に……礼を言われることじゃない……」

「照れなくても良いじゃんかよ。あれ？　お前ってもしかしてツン

デレってやつか！！」

「よく分かったね、アギト。そうなんだよ、実はティアとフィルはツンデレなんだよ」

「「誰がツンデレよ　（だ）！！」」

「ほら、似たもの同士」

「スバル……」

「ちょっと、頭冷やそうか……」

「え……えっと……二人とも、何でデバイスを構えてるのかな……」

「なに……ちょっとその脳天気な頭に、活を入れるだけだ……」

「そうね……少しはまともになるかもね……」

洒落になってないって！！

銃口に集まっている魔力、半端じゃないって！！

「まあまあ二人とも、その辺にして」

「そうですね……」

「確かに……」

「助かった……」

「それで今日は訓練はお休みで、ルーテシア達はこの後オリエンテーションをするね。フォワードのみんなはこないだの事件のまとめをしておいてね」

「「「「はい！！」」」」

「あっ、忘れるところだった。ルーテシアとアギト。オリエンテーションが終わったら、俺かフェイトさんに声をかけてくれ」

「何か……あるの？」

「約束したろ。お前のお母さんに会わせるって……」

「あっ……」

「ということで俺とフェイトさんは、少し抜けますね」

「了解や、でも今度ちゃんとメガーヌさんに会わせてや」

「分かってますよ。八神部隊長」

ルーテシアとアギトは、なのはさんと一緒にオリエンテーションに、ティア達は事務処理に。

俺は事務処理は終わっているので、時間までヴィヴィオの世話をす

ることになった。

「ねぇ、フィルパパ。今日は一緒に遊んでくれないの？」

「少しの時間ならいてあげられるけど、午後から大事な用事で出かけなくちゃいけないんだ」

「ええっ～～～」

「そのかわり、良い子で待っていたら、またヴィヴィオの大好きなお菓子を作ってあげるからな」

「うん！！」

《マスター、やっぱりヴィヴィオには甘いですね》

「そっか……そんなつもりはないんだがな……」

どうも俺はヴィヴィオにすごく甘いらしい。
それでもフェイトさんよりは、厳しくしているつもりなんだけどな。

「フィル、そろそろオリエンテーションが終わるよ」

「了解、じゃ行ってくるからな。アイナさんとザフィーラさんのと

ころにいるんだぞ」

「うん！！　いってらっしゃい。フェイトママ、フィルパパ！！」

＊　＊　＊　＊

ヴィヴィオと別れた俺とフェイトさんは、俺の部屋に戻っていた。
今回、メガーヌさんのところに行く手段は俺の転移魔法だからだ。
まだメガーヌさんの居場所を公式にするわけにはいかない。
少しして二人がやってきた。

「……遅くなってごめんなさい」

「お疲れさん。オリエンテーションは退屈だったろ」

「全くだよ。でもルールーのためだしな。しょうがないさ」

「こんな事言ってるけど、アギトの方が真剣に聞いてたんだよ」

「ルールー！！」

「「あははっ！！」」

「それはともかくとして、忘れ物はないな。ルーテシアもお母さんに渡す物ちゃんと持ったか？」

「うん……大丈夫」

「じゃ、始めるか。プリム、ワープスタンバイ！！」

《了解！！》

「みんな、俺につかまってくれ」

俺はワープを使い、目的地に向かった。

＊　＊　＊　＊

「ここは……」

「なんか戦艦の中みたいだな……」

「フィル……もしかしてここって」

「フェイトさんの想像通りですよ。ここはアースラの中です」

「そのとおりです」

「マリーさん!!　どうしてここに!!」

「えへへ、実は私はフィルとクロノ提督の依頼で、ずっとアースラの改造をしていたんですよ」

「ええっ!!」

フェイトさん驚いているな。
確かにこれはまだ、はやてさんにもオフレコのことだからな。
でも、さすがマリーさん率いるメカニックだな。予定より進んでいるよ。

「あっ、その子がルーテシアちゃんね。話は聞いているわ。お母さんに会いに来たんだよね」

「うん……お母さん、ここにいるの」

「ええ、そこの部屋にね。さっきまでメディカルポッドに入っていたから、眠っているかもしれないけど……」

「フィル、メディカルポッドって？」

「ああ、俺とマリーさんとで開発した新型医療マシンのことさ。外傷や体力の回復とかなら、このマシンでできるんだよ。ただし病気や内臓関係とかには駄目なんだけど……」

「……本当に、いつの間にそんなことやってたの」

「元々メディカルポッドは、未来で使っていた技術の一部と応用しただけだし、アースラの改造はマリーさん達がやってくれていたんだから、俺はそんなにやることはなかったよ」

「何言ってるの！！　確かに改造は私たちがやっていたけど、結局新型エンジンの問題部分はフィルが考えたんじゃない！！　っていうか、よくあんな発想できたね」

「アースラ自体が実験艦という形で地上本部から認証がおりましたからね。だったら徹底的に新開発の物を詰め込んだというわけですよ」

「クロノ提督も言ってたよ。予算は気にしないで良いから、最高の形にしてくれって。そして……妹のことを頼むって……」

「……クロノ提督」

本当にすみません。アースラの改造は相当予算を使うのに……

「じゃ、ごゆっくりどうぞ。何かあったらよんでね」

「「ありがとうございます」」

代表して俺が扉をノックすると……

「はい……どちら様です」

「あの、フィル・グリードです。お見舞いに来たんですけど……」

「どうぞ、入ってちょうだい」

「失礼します」

「どうも……」

「ん？……ほらルーテシア、お母さんに元気な姿見せてあげな」

「あっ……」

俺に押されて入ってきたルーテシアを見て、メガーヌさんは……

「ルー……ルーテシア、ルーテシアなの……」

「お母さん……」

「ルーテシア！！」

「お母さん！！」

メガーヌさんは娘を必死で抱きしめ、ルーテシアも母親のぬくもりにふれていた。

二人とも涙が止まらなくなっていた。

（フェイトさん……）

（どうしたの……ああ、そういうことね）

（せっかくの親子の対面だ。俺たちは少し出ていようか）

（あたしも出るよ。ルールーとお母さんの時間がやっとできたんだもんな）

（いや、アギトはここにいてくれ。きっとルーテシアもそれを望んでいると思うから……）

（すまないな……）

念話で伝えて、そっと俺たちはその場を離れた。

今は親子の再会をゆっくりしてくれ……

＊　＊　＊　＊

少し時間をつぶすために、俺たちはマリーさんを呼び作戦集合室にきていた。
マリーさんも俺たちに話があったので丁度よかったらしい。
俺たちはマリーさんの話を聞くため、いすに座ることにした。

「さてと、まず報告からしておくね。現在アースラはエンジン部分を覗いて、ほぼ改造は終わっているわ。ただ、やっぱり新型アルカンシェルの問題なんだけど……」

「……やっぱり、撃てて1回ですか」

「ええ……何とかエンジン強度は増すことができたんだけど、それ以上にアルカンシェルのパワーが強くて1回が限度なのよ。通常のアルカンシェルなら2～3回は撃てるけれど……」

「ちょっとフィル！！　どうしてアルカンシェルのパワーを強める必要があるの。元々アルカンシェルはとんでもない魔導砲なんだよ！！」

「……最悪のことも考えておかなくちゃいけないんだ。もしアースラだけで戦うことになったら、あのゆりかごはアルカンシェル一発

じゃ倒せない！！」

「そんな！！」

「フィルの話だけで推測になるんだけど、もし単体で戦うとなると、アルカンシェル3発以上のエネルギーが必要になるの」

「そんな化け物なの。聖王のゆりかごは……」

「ああ……」

ゆりかごの力は今でも覚えている。

軌道上に乗ったゆりかごは、あらゆる次元空間を無視して攻撃できるし、アルカンシェル以上の魔導砲ももっていやがる。

「……本当はこんな物、作りたくはなかったんだけどな……」

「フィル……」

「アルカンシェルは最後の切り札と言うことで、あと、フェイトさんのリミットブレイクが完成したよ」

「本当ですか！！」

「まったく、出力をあげても身体への負担を最小限にしろってコンセプトだから、何度もやり直しになるし……でも、結局最後はフィ

ルに手伝ってもらったんだよね」

「それは当たり前ですよ。任せきりというわけにはいかないでしょう。それでなのはさんのブラスターも、何とかなりそうなんでしょう」

「まあね、このデータを元にブラスターシステムも大幅に改良できたしね。なのはさんの方はもう少し時間ちょうだいね。多分後一月ってとこかな」

「ギリギリ……ですね。できるだけ早くお願いします」

「分かったわ」

よし、これで二人のリミットブレイクの負担は大幅に減らせるぞ。リミットブレイクは諸刃の剣だからな。

「それと近々六課の方に行くことになると思うから、八神部隊長にはそのときに全部説明するから、まだアースラのことは話さないでね」

「「分かりました」」

「そろそろいいんじゃないか。ルーテシア達も落ち着いたと思うし」

「そうだね」

＊　　＊　　＊　　＊

「どうも。お邪魔します」

「お邪魔します」

「フィルさん、フェイトさん……」

「久しぶりの親子対面は……大丈夫みたいだな」

「うん……本当にありがとう。お母さんを助けてくれて」

「別に……偶々発見できただけだから……」

「ふふっ、娘が言って通り、本当にツンデレなんですね」

「メガーヌさん……勘弁してくださいよ。それとルーテシア、俺はツンデレじゃないから、それはティアだけで十分だ」

「「「「あはは！！」」」」

スバルのやつ。ルーテシアにいらんことを覚えさえおってからに。帰ったらおしおきしてやる！！

「そろそろお暇した方が良い。メガーヌさんもまだ完治してないな。時間ができたら、またきますね」

「うん……お母さん。またね……」

「またね。元気になったら、今度はそっちに行くからね」

「待ってる……」

「それじゃ良いか。プリム頼むわ」

《はいはい、でもマスターあなたもまだ本調子じゃないんですから、補助魔法を使ってください。これだけの人数を転移するのはきついですよ》

「それじゃ私がフィルに魔力を渡すね。それで大丈夫だと思うから……」

《お願いします。それでは行きます！！》

俺はフェイトさんの魔力をもらったおかげで、無事ワープを発動させ六課に戻ってきた。

やっぱ完治していないのに、行きの多人数の転移はまずかったな。

プリムのやつ、分かってたんだな。

＊　＊　＊　＊

戦闘機人との最初の戦闘から、一ヶ月が過ぎた。
その間俺たちはそれぞれのレベルアップを図っていた。
ティア達フォワードは予定よりも早く、デバイスの最終リミッターを解除するために、訓練と言うよりも修行になっていた。
実際終わった後は、みんな立つ気力もなくなるほどの物だった。
俺もフェイトさんの元、全魔力を使った戦い方をマスターするため模擬戦を繰り返していた。

「……はぁ……はぁ……はぁ……」

「フィル。そんなんじゃ私の魔法を全部マスターなんて、できないよ！！」

「……はぁ……とんでもない強さだ。本当に俺は、あの人の魔力を持っているのかよ。レベルの差がありすぎるぞ」

さっきから俺が攻めても、ソニックムーブで交わされるし、攻撃魔法を放っても相殺されてしまう。

《マスターは魔力は持ちましたけど、スピードとか戦闘技術は相手の方が遙かに上なんですから……ましてやフェイトさんは執務官なんですよ》

「そうだった……普段はぽややんとしてるけど、フェイトさんはなのはさんと並ぶ双璧だと言うことを忘れてた」

「どうしたの。それで終わり……」

「まだだ！！　俺はまだやれる！！」

今の俺がフェイトさんに通用しような魔法は、これしかない！！

「モードチェンジ、セイバーモード！！」

俺はプリムをセイバーモードにした。

《マスター、まさか！！》

「プラズマザンバーブレイカー……こいつで真っ向勝負をする！！」

《何を考えてるんですか！！　それだったら幻術を使って困惑させて、バインドを使って捕縛とかの作戦の方が……》

「プリム、この模擬戦の目的を忘れたのか。これは勝つための模擬

戦じゃない。俺が全力と使いこなせるようにするための物だ。だからここで逃げの戦い方はできない」

《マスター……分かりました。私も全力でサポートします。この魔法はマスターと私が一体となってできる魔法ですから……やるからには全力でぶちかましましょう！！》

「さすが俺の相棒だ。行くぜ！！」

俺は飛行魔法で空へあがり、プリムに魔力を集中し上段の構えを取った。

フェイトさん、真っ向勝負だ。

「……フィル……うん、いい目をしてる。……いいよ。フィルの全力、全部受け止めてあげる。バルディッシュ！！」

《ｙｅｓ　ｓｉｒ　Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ》

「いくよ……フィル……雷光一閃、プラズマザンバー……」

「こっちも行くぞ、プリム！！　雷光一閃……プラズマザンバー……」

「「ブレイカー！！」」

白と金、二つのプラズマザンバーブレイカーは空中で激突し、その場で拮抗していた。

「くぅぅ！！」

「はぁぁぁ！！」

これでも駄目なのか。

今の俺ができる最高の魔法だぞ。

「……くっ……まずい……少しずつだが押されている……」

《マスター……頑張ってください……まだ、マスターは自分の力をおそれてます。私のことは気にしないで全力を出してください。私はそんなに柔じゃないです！！」

「プリム……」

そうだった。俺にはこいつが……心強いパートナーがいるんだ。

「ありがとうな……行くぜ、これが正真正銘、今の俺の全力全開だ！！」

白のプラズマザンバーブレイカーはさらに威力が上がり、フェイトさんのブレイカーを押し戻してた。

「そんな！！　さらに威力が！！　きゃぁぁぁ！！」

ブレイカーはフェイトさんに命中し、大爆発を起こした。
その爆発の中からフェイトさんが落下していた。
まずい、向こうも飛行するほどの力が残っていないんだ。

「プリム！！」

《ど根性ぉぉぉ！！　マスター、ワープです！！》

俺は最後の力を使ってワープをし、フェイトさんを地上ギリギリでキャッチすることができたんだけど、どっちも魔力がゼロになってしまったので、結局は地面に激突してしまった。

高さはちょっと高い木から落ちた程度の物なので、たいしたことはなかった。

「あいたたた……失敗失敗……」

「いたたた……ごめんね、フィル」

「あはは……まさかそっちが魔力がゼロになるとはね」

「私も驚いたよ。あそこまでちゃんと使えるようになるなんてね」

「プリムのおかげですよ。俺だけだったら怖くて、あそこまで出せなかった」

「やっと分かったみたいだね。いくら魔力があっても、デバイスとの信頼関係がちゃんとしていなかったら、私もあそこまでの魔法は使えないって事に」

そうだった。いくらフェイトさんがSランクオーバーの魔導師だといっても、バルディッシュが無いと全力は引き出せないと言うことを……

「はい……俺はプリムが壊れるのを恐れていたんですね。こいつはかけがいのない大切な相棒ですから……」

《マスター、それは嬉しいんですけど、ある意味悲しかったです。私は信用されてなかったのかって思いましたよ》

「悪かったな、これからは全力で使うから覚悟しろよ！！」

《望むところです！！　それこそが私の生き甲斐なんですから！！》

これからもよろしく頼むな。相棒。

＊　＊　＊　＊

新暦７５年９月５日

ギンガさんが１０８部隊から出向という形でやってきた。
同時にマリーさんも出向してきた。

「さて、今日の訓練の前に連絡事項です。陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく出向となります」

「はい、１０８部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします！！」

「「「「「「よろしくお願いします！！」」」」」」

「それから、もう一人……」

「どうも……」

「十年前から隊長陣のデバイスを見てくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです。もっともフィルは初対面じゃないんだけどね」

「そうですね」

「そうそう、フィル。これが終わったら話があるからよろしくね」

「はい、分かりました」

多分リミットブレイクのことだろう。
なのはさんのやつは完成が遅れていたからな。

「自己紹介も終わったことだし、それぞれの訓練に入るか」

「「「「「はい！！」」」」」

「スターズ集合だ。今日もティアナはあたしと一緒に訓練だ。あとルーテシア達は今日はライトニングと合流。合同訓練になる。いい

な！！」

「はい！！」

「了解……」

「あいよ」

「それじゃ、すみませんがなのはさんとフィルは、少し私と一緒に来てください。話がありますので」

「「分かりました」」

なのはさんと俺はマリーさんと一緒にメンテナンスルームへフォワード陣は訓練となった。

＊　＊　＊　＊

「まず、これを……」

「これは……」

「なのはさんのリミットブレイク、ブラスターシステムです。先日やっと完成したんです」

「本当ですか！！」

「はい、苦労したんですよ。でもその甲斐があって、当初よりもずっと高性能になりましたから。そして身体への負担も、最小限に抑えることに成功したんです！！」

すごい、フィルから話は聞いていたけど、最初に考えていた物より、より洗練されている。
無駄が全くない。

「ありがとうございます。マリーさん……」

「お礼ならフィルに言ってください。彼がいなかったら当初の予定はもっと負担のかかる物になっていたんですから」

「フィル……本当にありがとう。フェイトちゃんのも一緒に考えてくれていたんだよね」

「俺はほんの少し手助けしただけですよ。ほとんどマリーさんがやったんですから……」

「何言ってるの！！　肝心なシステムの中枢部はフィルが考えたくせに！！　それがなかったらフェイトさんのも出来てなかったんだから！！」

「そういえばフェイトちゃんのって、先に完成してたんですよね」

「ええ、フィルがすっごく一生懸命になってやっていたから……」

「ふぅ～ん、やっぱり自分の恋人のは優先してたんだね……いいですよ。どうせ私のはついでなんだから……」

「な、なのはさん……」

「冗談だよ。わたしのシステムはピーキーだから、時間がかかるって言うのは聞いてたしね」

「あのね……」

「でも、ちょっと妬けちゃうかな……フェイトちゃんがうらやましい」

「なのはさんなら、いい人なんてすぐに見つけられると思いますけど」

「だったら、フィルがもらってくれる。フェイトちゃんと一緒で良いから……」

「えっ……」

「ふふっ、冗談だよ、驚いた」

「ったく、からかうのも程々にしてくださいね……」

「「あはは！！」」

＊　　＊　　＊　　＊

「うん、みんな良い感じの子達ね」

デバイスの説明が終わった俺たちは、ティア達と合流していた。
マリーさんもシャーリーさんと話をしていた。
どうやらいない間にギンガさんを含めたメンバーで、隊長達と模擬戦をしていたみたいだな。
なのはさんがいなかった分、若干優位にはなったみたいだけど、それでもやっぱり駄目だったみたいだな。

「エリオ達ですか、それともデバイスの方」

「両方」

どうやらマリーさんもティア達のことを気に入ってくれたみたいだな。
デバイスを作った身としてはやっぱり気になるしな。
そんなときヴィヴィオがやってきた。

「おはようございます」

「あっ、えっと、おはようございます」

「おはようヴィヴィオ」

「あっ、失礼します」

「ああ……どうも……ご丁寧に」

「転んじゃ駄目だよ」

「あっ、ザフィーラ久しぶり。シャーリー、あの子は確か？」

フィルから一応は聞いてるんだけど、ヴィヴィオだよね。
なのはさんが預かっている……

「ママ、パパ！！」

「ヴィヴィオ」

「危ないよ。転ばないでね」

「うん……ふぁっ……」

『あっ……』

心配してたとおりヴィヴィオは転んでしまった。

「大変！！」

「大丈夫、地面柔らかいし綺麗に転んだ。怪我はしてないよ」

「それは……そうだけど……」

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「ふぇ……ふぇぇ……」

「怪我してないよね、頑張って自分で立ってみようか」

「ふぇぇ……ママ……」

「うん、なのはママはここにいるよ」

「ふぇぇ……ぇぇぇん……」

あちゃ……ヴィヴィオ本格的に泣き始めちゃったぞ。

なのはさんやっていること間違っちゃいないんだけど、あれじゃ子

供との距離空きすぎだぞ。

「なのは駄目だよ。ヴィヴィオまだちっちゃいんだから！！」

「ちょっと待って、フェイトさん」

「フィル、どうして止めるの！！」

「ここは俺に任せてくれないかな」

「う、うん……」

フェイトさんを引き止めた俺は、ヴィヴィオのそばに寄っていった。

「大丈夫かヴィヴィオ」

「うぇぇ……パパ……」

「そうだよ、フィルパパだよ。怪我はしてないな」

「うん……ヒック……」

「だったら自分の力で立ってみよう。パパがそばにいて力を貸してあげるから、頑張ろう」

「うん……よいしょ……よいしょ……」

「そうだ、あと少し！！　立てたじゃないか、偉いぞヴィヴィオ」

「うん！！　えへへ……」

自分の力で立てたヴィヴィオは、すっごくうれしそうだった。

さてと……

「お二人にちょっと言っておきます。まず、フェイトさんは少し甘すぎです。助けるのは良いけど、ある程度は厳しくしないと自立心がつきませんよ。俺たちにはちゃんと厳しくできるのに、エリオ達やヴィヴィオのことになると甘くなってしまいますね……」

「ごめん……」

「それより酷いのはなのはさんです。あれじゃただ突っぱねているだけですよ！！　やるならちゃんと子供との距離を考えてやってください。遠くで頑張れっていわれても、全く効果ありませんから。教育するならちゃんとコミュニケーションを考えてください！！」

「すみません……」

うわ……フィルめちゃくちゃ怖いんだけど、わたしだけでなくフェイトちゃんにまでお説教している。
もしかしてこの中で誰よりも子育てに向いているんじゃない。

「聞いてるんですか二人とも！！」

「「はい！！　すみません！！」」

＊　　＊　　＊　　＊

「うわ……なのはさん達、本気で怒られている……」

「スバル、関わらない方が良いわよ。あんたが行くとやぶ蛇になるから……」

「そうだね。私たちの中で考え方がフィルに近いのって、ティアだけだしね」

「別にそういう訳じゃないけど、今回は偶々あいつの考え方に賛成なだけよ」

まぁ、どれが正しいというわけじゃないんだけど、なのはさん達のは両極端というだけだし、それの中間がフィルって言うだけね。

「午前の訓練も終わりだし、フィルを止めてご飯を食べましょう」

「「「「「はい！！」」」」」

「ほら、フィル。いつまでもお説教してないで、ご飯を食べましょう。ヴィヴィオも待ってるでしょう」

「ああ……悪い」

（（助かった……））

「じゃ、一緒に行こうか」

「うん！！」

ヴィヴィオはフィルの手をしっかりつかんでいた。

あいつ、やっぱり世話焼きよ。

＊　＊　＊　＊

「ヴィヴィオ、髪の毛かわいいね……」

「うん……似合ってる……」

「なのはママのリボン」

「アイナさんがしてくれたんだよね」

「うん！！」

訓練が終わって俺たちは少し遅い食事を取ることになった。
スバル、エリオ、ギンガさんといった大食感の連中はとんでもない量を頼んでいた。
エリオとスバルに関してはもう見慣れたけど、ギンガさんも食うのをすっかり忘れていた。

キャロ、ルーテシアは今ヴィヴィオと一緒にこっちにやってきた。
こっちのグループは普通のグループだな。

俺とティア、そしてなのはさん達は、一足早く来てみんなを待っていた。

全員がそろうとそれぞれ食事を始めた。

「あ……ん……んふふ……おいしい……」

「よく噛んでね……」

「うん！！」

なのはさんとフェイトさんがヴィヴィオと一緒に食べている。

こうやってみると、ほのぼのしてるよな……

「しっかし、まぁ……子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね」

「スバルのちっちゃいころも、あんなだったわよね」

「えっ……そうだったかな……」

スバルのやつ、いきなり自分の小さい頃のことを言われるとは思わなかったんで照れてるな。

「リインちゃんも……」

「ええっ！！　リインは最初っから割と大人でした！！」

「嘘をつけ」

「身体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃないか」

申し訳ないが、お二人の意見に賛成だ。
今のリイン曹長をみても……

「ルー、そのスパゲティおいしい？」

「うん……エリオ、少し食べてみる」

「いいの？」

「その代わり、その唐揚げもらうね」

「もちろん良いよ。じゃ、いただくね」

エリオとルーテシアも何かちょっと良い雰囲気だな。
訓練中でもよく二人で話しているしな。

「そう言えばキャロ。最近、あの二人仲が良いよな」

「そうですね。ルーちゃん、エリオ君とよく話してますから」

「おや？複雑な気持ちか。パートナーをとられて？」

「そうじゃありません……本当、フィルさん……鈍感です……」

「ん？　何か言ったか。キャロ」

「いいえ、何も言ってません」

（フィルさん、他人の事はよく気づくんですけど、自分への好意は本当に鈍感です）

＊　＊　＊　＊

「あっ……ヴィヴィオ駄目だよ。ピーマン残しちゃ……」

「う～～……苦いの嫌い！！」

「ええっ……おいしいよ」

「しっかり食べないと、大きくなれないんだから」

「ううっ……」

「ヴィヴィオ。ちょっとこれ食べてみない？」

ピーマンに苦戦してるみたいなので、ちょっとお節介をすることにした。

「ちょっとフィル！！」

「なのはさん、文句は後で受け付けますから……はい、どうぞ」

「いただきます……うん、ぷるぷるしていておいしい！！」

「そっか……」

よし、食べてくれたな。
そろそろ種明かしをしますか。

「ヴィヴィオ、そのゼリーおいしかったかい」

「うん、とってもおいしかったよ！！」

「よかった。実はね、それはピーマンで作ってあるんだよ」

「「「ええっ！！」」」

「えっ……ピーマンって嘘でしょう。どう見てもコンソメゼリーだよね」

「信じられない……」

「これ……ピーマンなの……」

「そうだよヴィヴィオ。気づかなかったでしょう」

「うん……」

まぁ、気づかれてしまったらアウトだったんだけどな。

「ヴィヴィオ、本当に駄目なら形を変えても食べられないよ。でも、これは食べられたよね」

「うん……」

「だったら、その残したピーマンも食べてみよう……ね……」

「うん……あーん……・んんっ……苦い……」

「よく頑張りました。少しずつ馴れていこうね」

「うん！！」

ちゃんと食べたときは、ほめてあげないとな。

「たいしたもんやな、フィルは」

「はやてさん……」

「一部始終見せてもらったけど、あんな物用意していたとはな。恐れ入ったわ」

「実はこれで終わりじゃないんですよ。そこで、にんじんをエリオに渡そうとしているキャロ！！」

「は、はい！！」

ふふっ、どさくさ紛れに嫌いなにんじんを処分しようとしていたみたいだけど、ヴィヴィオにやってお前にやらないわけ無いだろ。二人とも今日できっちり克服してもらいます！！

「キャロ……前から思っていたけど、にんじんをちゃんと食べなって」

「ううっ……ごめんなさい」

「キャロ、今日のおかずのクリームコロッケは全部食べたろ？」

「はい、玄米が入っていて、とってもおいしかったです」

「あれ、ベースはにんじんだから……」

「ええっ！！」

本日二度目の驚き。
こうも術中にはまってくれるとはな。

「嘘……全然気づかなかったです」

「気づかれないようにするのに、苦労したんだぞ……」

「じゃ、ヴィヴィオのゼリーも、わたしのコロッケも、フィルさんの……」

「そういうこと。今日の食事は二人の分は、俺が作ったおかずを混ぜてもらったんだ。料理長も話を聞いて協力してくれたんだ」

「フィルさん……」

「そういうわけだから、このグラッセ、頑張って食べてみよう。なんなら俺が食べさせてやろうか」

フィルさん、ちょっと意地悪です。
だからわたしも、ちょっと意地悪してみます。

「はい……お願いします……」

「「「「なにぃ！！」」」」

「フィルさん……食べさせてくれないんですか……」

ぐっ……キャロ、その上目で見る技術、いつ身につけたの。
天然でやっている分タチが悪い。

「……わ、わかった。ちゃんと食べるな、キャロ」

「はい！！」

「じゃ……あーん」

「あーん」

「「「「ああっ！！」」」」

「ん……おいしいです。にんじん食べられました！！」

「よかった。でも、食べさすのはもう勘弁してくれよな」

「はい！！」

キャロのこんな笑顔を見たら、そんなきついことといえないよ。

っていうか、なのはさん達とティアの視線がものごっつい痛い……

「フィル、自業自得よ。もう少し考えて行動しなさい」

「はい……痛いほど分かりました……」

ギンガさんの言葉に俺は返す言葉がなかった。

＊　　＊　　＊　　＊

「えっと、これで全部のはず……」

「まっ、見つからなかったら勝手に探すわよ。さっさと行ってきな

さい」

「そういうことだ。こっちは心配しないでいいぞ」

「うん、ありがとう。ティア、フィル」

本当に御免ね。
いつもいつもこういった事務作業を二人の負担にしちゃって……

「あっ、そうだ。スバル、あんたがよく検診の時に買ってきてくれた……あれ……」

「ああっ！！　チョコポッド！！」

「そうそう、あたし達も出すから隊長達とちびっ子達の分、買ってきてあげてよ」

「りょう～かい」

＊　　＊　　＊　　＊

「機動六課の方は、今のとこ順調のようです」

「そっか……公開陳述会まで間もないからな……最高評議会の方の

動きは？」

「今のとこ……目立った動きはありません」

「引き続き注意する必要があるな……」

「中将……それよりも今注意することは、本局の査察部と一部の部隊が、こちらの動きを調べ回っているようです」

「儂らだけのことなら良い。だが……あいつの……フィルのことまで余計な詮索をさせてしまうのは避けねばならん」

「ええ……」

「あと、アインヘリアルの方はどうだ」

「3号機まで完成してますが……」

「分かっている。正直あれは使い物にならん。最高評議会の命令で並行してやっているが、あれにはもう予算を回すな」

「はい」

正直言って固定砲台なんて、強力な魔導師が攻めたらひとたまりもないぞ。

「オーリス、引き続き頼むぞ」

「了解しました……」

＊　＊　＊　＊

「二人ともハードワークだと思うけど、調子悪いところとか無い」

「ありませーん。もうめっきり好調で」

「私もです。むしろハードワークって言うのはフィルの方です」

「確かにそうだね。フェイトさんやなのはさんと特別メニューをこなして、それであたし達のデバイスのこともやってたんでしょう。正直あたし達より人間離れしてるよ」

「「「あはは……」」」

あたし達も丈夫さでは自信あるけど、フィルほどあんなには絶対無理。

身体スペックとかじゃなくて、精神的に……

「それじゃ、定期検診始めましょうか……」

「「はい……」」

＊　　＊　　＊　　＊

「あは～ん、ウーノ姉様お素敵です～」

「新しい身体……どう……」

「良いに決まってるわ。あなたたちの動作データが生きているもの」

「妹たちもみんな順調です～。ナンバー７セッテ、ナンバー８オットー、ナンバー１２ディードも基本動作とＩＳ動作までは完璧です」

「９番ノーヴェと１１番ウェンディの固有武装も無事完成……」

「２番ドゥーエ、５番チンクはすでに任務中……良いペースね……」

（うふふ～、みんな順調に進んでいるわね～。　私も良いもの手に入りましたしね～）

待ってなさいフィル・グリード。

あなたが何かを考えていても、そんなもの何の役に立たないってこ

とを教えて差し上げますわ……

＊　　＊　　＊　　＊

「はい、お待たせしました」

「ありがとうございます。あっ、それとすぐに食べる分3つくださ
い」

「はい、お待ちくださいね」

支払いも終わり、みんなの分のチョコポッドを受け取ってギン姉と
合流した。

「お待たせ」

「うん、あら今日はまたずいぶんたくさん買ったわね」

「えん、みんなの分。ギン姉あーん」

「ん、あーん……うん、おいしい」

「えへへ……」

「でも、よかった。機動六課でスバルもティアナも、そしてフィルも三人とも生き生きしていて、なんだか嬉しいな」

「まぁ……色々あったり大変なこともあったりするけれど、六課に呼んでもらって本当によかったと思ってる」

「親友と一緒にやれて、さらにあこがれの人とも働けるんですもの」

「あっ、ギン姉もあたしの目標なんだよ。もっと強くなっていつか追いつくんだ……」

「ふふっ、そう簡単には追いつかせないわよ。私も追いつかなきゃいけない目標があるから……」

「フィル……だね……」

「ええ、私もフィルから、あの話を聞いて驚いた。そしてフィルは強くなった……いろんな意味でね……」

「うん……」

そう、フィルは本当に強くなった。
フロントアタッカーである私とスバルが、二人がかりでかかっても勝てないことがある。
本来ならセンターガードなのにもかかわらずだ。

一度フィルに聞いたことがあったけど……

『実際はギリギリなんですよ。俺はある意味ズルしてますから……』

多分、それは経験と与えられた魔力のことを言ってるんだと思う。
でもそれは使いこなしている以上あなたの力なんだからね。

「……スバル、この先、フィルが言うとおりだとすれば、戦闘機人戦が間違いなくあるわ」

「うん……」

「……しっかりやろうね。私もあんな未来にしたくないから……」

「大丈夫、あたし達には母さんが残してくれた、リボルバーナックルとそして……」

スバルが出したのはマッハキャリバーだった。

「フィルが作ってくれた、キャリバーズもあるし……」

《Ｃａｌｉｂｕｒｓ？》

「マッハとブリッツでキャリバーズ。マッハキャリバー、ブリッツのお姉さんだね」

「……そうね。私のブリッツキャリバーもフィルが作ってくれたんだったわね」

「あの頃、フィルは本当に徹夜続きだったみたいだよ……」

「本当にフィルには頭が上がらないわね……」

「フィルが言ってたよ。生きて帰ってきてくれればそれで良い。それが何より嬉しいからって……」

「フィルらしいわね。その気持ちに報いるためにも頑張りましょう、スバル」

「うん！！」

あたし達が話していると、マリーさんが来るまでやってきた。
その車に乗り、六課に戻った。

＊　＊　＊　＊

機動六課、部隊長室

私となのはちゃん、フェイトちゃん、そしてフィルで今後の対策について話し合っていた。

「今日、教会の方から最新の予言解釈がきた。やっぱり公開意見陳述会が狙われる可能性が高いそうや。フィルの経験してきたことでもそうやったしな……」

「うん……」

「やはり……」

「もちろん、いつもより警備もうんと厳重になる。機動六課も各員で警備に当たってもらう。ほんまは前線丸ごとで警備させてもらえたらええんやけど、建物の中に入れるのは私たち3人だけになりそうや」

「大丈夫……3人そろっていれば大抵のことは何とかなるよ」

「前線メンバーも大丈夫。副隊長達も、今までにないくらい万全だし……」

「フォワードのみんなも、デバイスリミッターを明日からリミッターをサードにまであげていくしね」

「そっか……みんな何とか使いこなせるようになったんですね」

「フォワードのみんな、本当に頑張ったんだよ。フィルの足手まといになりたくないって。ルーテシアだって一生懸命にやってたしね」

「みんな……」

「ここさえ押さえれば、この事件は一気に好転する。ここが正念場や」

「「うん」」

「ええ」

そう、ここがまさに正念場なんだ。

絶対乗り切ってみせる。

時空管理局地上本部　公開意見陳述会まで　あと7日

# 第１５話　その日、機動六課　前編

新暦７５年９月１１日

機動六課は公開陳述会の会場の護衛のため、隊長陣、副隊長陣とフォワード陣が当たることになった。
一気に出発するわけにはいかないので、分割して出発することになった。

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や。明日１４時からの開会に備えて現場の警備はもう始まっている。なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード７名はこれから出発。ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠取った？」

「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝中央入りする。それまでの間よろしくな」

「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」

＊　　＊　　＊　　＊

機動六課、ヘリポート

「あれ、マリーさんも？」

「私は別件。ちょっと中央方面に用事があってね」

「そうなんですか……」

フォワード全員とリイン曹長達がヘリに乗り込み、残るは俺となのはさんだけになったとき……

「あれ……ヴィヴィオ、どうしたの」

「ヴィヴィオ、ここは危ないぞ」

「ごめんなさいね。なのは隊長、フィル君。どうしてもママとパパのお見送りをするんだって……」

「もぅ……駄目だよ。アイナさんに我が侭言っちゃ……」

「……ごめんなさい」

「なのはもフィルも、夜勤でお出かけは初めてだから」

「あっ……そっか……」

「しまった……うっかりしていた」

今回みたいに離れることは今まで無かったしな。

「なのはママもフィルパパも、明日にはちゃんと帰ってくるから」

「絶対……」

「絶対に絶対。良い子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるから」

「パパも……」

「ああ……もちろん。だったら俺は、なのはママのキャラメルミルクに合うケーキを作ってあげるから、一緒に食べような」

「ママとパパと約束ね」

「うん……」

俺となのはさんは、それぞれヴィヴィオと指切りの約束をした。

＊　＊　＊　＊

ヘリ内

「それにしても、本当に懐いてしまってますね」

「まったく」

「そうだね……結構厳しく接しているつもりなんだけどな……」

「分かるんですよ。なのはさんが優しいって」

「うん……私もそう思う。なのはさんだけでなく、フィルさんもだけど……」

「ちょっと待てルーテシア。俺はなのはさんみたいにずっと一緒にいる訳じゃないぞ……」

「時間の問題じゃない……フィルさんの優しさには、私とアギトも救われたから……」

「確かにな。あんたのおかげで、ルールーも笑顔を取り戻したしな

……」

「ルーテシア……アギト……」

「あっ、そうだ！！　いっそのこと本当になのはさんの子供にしちゃうとか」

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。良い受け入れ先が見つかって、ヴィヴィオがそこに行くことに納得してくれれば……」

「納得しない気が……」

「うん……」

「無理……」

「だな……」

「「うんうん」」

確かに無理だと思う。

ヴィヴィオ、なのはさんとフェイトさんに完全に懐いてしまってるからな。

「そりゃ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、本当に良い行き先が見つかったら、ちゃんと説得するよ。良い子だもん……ちゃんと

幸せになって欲しいから……」

「なのはさん……」

「でも、そんな家庭が見つかるまでは、私が責任を持ってまもっていくよ。それは絶対！！」

「ですね」

「「「はい！！」」」

「だな」

＊　＊　＊　＊

「はい、これでよしと」

なのはが不在で寝る準備のため、フェイトはヴィヴィオの髪を結っていたリボンを外してあげた。
さて自分も着替えようか、と思ったところで、宙にウィンドウが開いた。

「……あれ？　母さんからだ」

『はぁーい、元気だったぁ？』

「こんばんは、母さん……」

『ヴィヴィオも、こんばんは』

「こんばんは」

「何か、ありました？」

『うん、明日の陳述会なんだけどね。私も顔だそうかどうしようかな～って……』

「ああ、大丈夫だと思いますよ。クロノも別の任務中ですし、本局の方も、あまりいらっしゃらないとか」

『あ、そう？　しばらくぶりに娘の顔も見たいし、ヴィヴィオとも、会いたいんだけど……』

「あの、母さん？　私は警備任務ですし、ヴィヴィオは寮でお留守番ですから」

『あ～そっか、そうよねぇ。でも随分会ってないから寂しくて……それに、娘の彼氏にも会いたいし』

「ちょ、ちょっと母さん！！」

いきなり何を言い出すの。

彼氏って事はフィルだよね。まだ母さんには言ってないのに……

『以前、あなたがエリオとキャロと親子としての接し方が分からないって、私に相談してきたじゃない。』

「うん……」

『実は……ユーノ君とアルフを通じて、彼から事前に言われてたの』

「えっ……フィルが？」

『近い将来フェイトがこの事で相談しにくると思うからって。でも、この問題に関しては自分が介入してはいけない。それに……』

「それに？」

『このことはあの三人がちゃんと向き合わなきゃいけない、避けられないことですから……とも言ってたわ……』

「フィル……」

『本当に良い子よ。私も彼にあなたたちの状況を、聞くまで分からなかったんですものね。これじゃ母親失格よ』

「違うよ！！　私がもっと早く相談すればよかったんだよ。私は抱え込みすぎるって、フィルにも言われてたのに……」

あのときフィルはエリオとキャロとの問題は、自分達で解決してく

れって言ってたのはそう言うことだったんだね。
それでもフィルは、一緒に食事をしてこいって3人分のディナー券を渡してくれて、時間を作ってくれた。

後から聞いたんだけど、あの日ガジェットが出撃してたんだけど、フィルが私たちには通信をシャットアウトしてしまって、ガジェットをフィルとなのはが全部たたいたって聞いたときは、本当にびっくりした。

なのはもフィルからの話を聞いて、私たちに通信を入れようとしないで一緒に破壊してたし……

ヴィータから話を聞いたら、

『悪魔が二人になりやがった……』

シグナムも

『あのときの二人とは、私も戦いたくはないな……』

いったいどんな地獄絵巻だったの……

『でも、本当にあのときはお世話になったから、いつかちゃんと会ってお礼がしたいのよ』

「そうだね……落ち着いたら、母さんにもちゃんと紹介するよ」

『フェイト、これから大変なことになると思うけど頑張りなさい。私も出来うることは協力するから……』

「うん……ありがとう……」

『あっ、そうそう～　次にあったときに子供出来ちゃいました、なんてのは勘弁してね～』

「母さん！！」

『じゃぁね～』

そう言って母さんからの通信が切れた。

まったく……

＊　＊　＊　＊

地上本部

公開意見陳述会が始まるまで１２時間を切り、警備の方もさらに厳戒態勢になった。

機動六課のメンバーもそれぞれ配置についていた。

「ふぃ……」

ヘリパイロットである俺は基本的に朝までやることはない。
朝一番に六課に残っているメンバーを迎えに行くことが仕事だ。
さて、どうやって時間をつぶそうかと思っていたら、ヘリの扉をたたく音がした。

「おっ……フィル、ティアナ、どうした」

「警備部隊の方から、お茶の差し入れをいただきましたんで、お届けに……」

「いいね……ありがとうよ」

ヴァイス陸曹とティア、そして俺はヘリの外で一息を入れていた。

「失礼かと思ったんですけど、ヴァイス陸曹のこと少し調べちゃったんです。数年前までエース級の魔導師だったって」

「なんだそりゃ……エースなもんかい。魔力値なんざお前の半分以

下なんだぞ」

「それでも、アウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃手だったと……」

「昔はどうあれ、今の俺は六課のヘリパイロットだぞ。お前が聞いて参考になる話はないぞ……」

「……」

ティアはそれでも、ヴァイス陸曹の方を、じっと真剣なまなざしで見ていた。

「だいたいお前は余計なことを考えている場合か！！　ボケッとしているとまたミスショットで泣くぞ！！」

「……すみませんでした」

「分かればよし、行け！！」

「はい……」

ティアはその場を立ち去り、みんなのところ行った。

「じゃ……俺も行きますね……」

「フィル」

「……何ですか」

「ありがとうな……余計な口挟まないでくれて……」

こいつは俺の過去を全て知っているが、それでも余計なことは言わないでくれた。
一見冷たいように感じるが、こういうときはそっとしてくれる方がありがたかった。

＊　＊　＊　＊

スバル、ギンガ、なのは

「さて、じゃあそろそろわたしは中に入るよ」

東の空は白み、もうすぐ日の光が上ろうとしていた。

ナイトシフトから通常シフトに切り替わり、警戒態勢は更に強化されることになる。

「でね、内部警備のとき、デバイスは持ち込めないそうだから……スバル、レイジングハートのこと、お願いしていい？」

「あ……は、はい」

スバルが両手で、レイジングハートを受け取った。

「前線のみんなで、フェイト隊長たちからも預かっておいてね……」

「はい！！」

＊　＊　＊　＊

朝になり、はやて部隊長、シグナム副隊長、そしてフェイトさんが合流した。

同様に聖王教会からも、騎士カリムとシスターシャッハが到着していた。

レジアス中将のように、すでに会場入りしている人も多く、現場は緊張感に包まれていた。

『公開意見陳述会の開始まで、あと三時間を切りました。本局や各世界の代表による、ミッドチルダ地上管理局の運営に関する意見交換が目的のこの会、波乱含みの議論となる事も珍しくなく、地上本部からの陳述内容について、注目が集まっています。今回は特に、兼ねてから議論の絶えない、地上防衛用の迎撃兵器、アインヘリアルの運用についての問題が話し合われると思われます。陳述会の開始まで、ライブの映像と共に、実況を続けて参ります……』

＊　＊　＊　＊

外回り　ヴィータ、ライトニングF、ルーテシア、アギト

「始まりましたね」

「ああ……」

「ひとまず、何も起こらなそうな気配ですが……」

「油断すんなよ。しっかり警備してろ」

「はい」

「ルールー……どう思う。旦那のこと……」

「多分……来ると思う……」

「そうだよな……」

旦那はずっと、レジアスのおっさんに会うことを考えていた。
旦那の体調も考えると、もう時間は残されてない！！

＊　＊　＊　＊

「それにしても、どうなってやがるんだ…・」

どうも気になり、あたしは建物内の警備にあたっているなのはに念話を飛ばした。

（どうしたのヴィータちゃん？）

（いまいち分からねぇ。予言どおりにことが起こるとして今回は内部のクーデターって線は薄いんだろ？）

（うん、間違いなくスカリエッティ一味が絡んでいるはずだよ）

（それにしても今回はフィルが、各方面に手を回しているから、そう簡単にはやられはしないだろうけど……）

（何か胸騒ぎがしやがるんだ。どうにもさっきから嫌な予感しかしやがらねえ！！）

（不安になるのは分かるけど、あんまり考えてもしょうがないよ。信頼できる上司が命令をくれる、わたし達はその通りに動こう）

（……そうだな）

ここまできたら、もう行動するしかないんだ。

＊　＊　＊　＊

公開意見陳述会開始から四時間と少し。
太陽は大きく傾き、空は一面、夕暮れに染まっていた。
厳戒態勢の中、特に大きなトラブルもなく、事態は推移していた。

「……中の方も、そろそろ終わりね」

「最後まで気を抜かずに、しっかりやろう！」

「「はい！！」」

「あれ、ギンガはどこに？」

「北エントランスに報告に行ってくれてますよ」

＊　＊　＊　＊

時空管理局ミッドチルダ　地上本部から十数キロほど離れた上空

「連中の尻馬に乗るのは、どうも気が進まないが……それでも、貴重な機会ではある。今日ここで全てが片付くなら、それに越した事はない」

（レジアス……）

もうすぐだ。答えが分かる……

＊　　＊　　＊　　＊

同時刻、スカリエッティラボ

「ナンバーズ、ナンバー3トーレから、ナンバー12ディードまで、全機配置完了」

『ゼスト殿も、所定の位置に付かれた』

『攻撃準備も全て万全、あとはゴーサインを待つだけです～』

前線指揮のトーレとクアットロから、報告が上がってくる。
これで出撃準備は、全て完了した。

「ふっふふふふ、くくくく……あはははっ！！」

「楽しそうですね……」

「ああ……楽しいさ。この手で歴史の変える瞬間を、研究者として……技術者として、心が沸き立つじゃないか。なぁ、ウーノ」

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我らの想いと、研究と開発の成果を。さあ……始めよう！！」

「はい」

私の号令と同時にウーノがパネルを操作しはじめ、各地に散らばっている私の娘達もそれぞれミッションに入った。

さぁ、始まりだよ。地獄へのカウントダウンがね……

＊　＊　＊　＊

中央管制司令室

「エネルギー反応……？」

「おい、嘘だろ！？」

「通信管制システムに異常？　クラッキング！？」

「侵入されてます！！」

クラッキングされた地上本部は次々とシステムダウンが起こってい

る。
モニターも次々やられ、管制システムは次第に操作不能になっていった。

「こっちの通信機だけじゃないのか！！　通信システムそのものがおかしい！！」

「緊急防壁を展開、クビラサーチシステム立ち上げ急げ！！　……まさか本当に、本部を狙ってくるとは……」

＊　＊　＊　＊

「ふふっ……クアットロさんのＩＳ、シルバーカーテン。電子が織りなす嘘と幻。銀幕芝居をおたのしみあれ！！」

フィル・グリード。あなたは色々手を打っていたみたいだけど、そんなもの何の役に立たないですわよ。
私を甘く見ないことですわ。

＊　＊　＊　＊

クラッキングのせいで司令部は大混乱と化していた。
そんな中、司令室の天井から、二本のハンドグレネードを持った、たおやかな女の手が生えてきたが……
誰も気付く事など出来はずもなく……

右手を開放すると、グレネードは重力に引かれて落下し、空中で弾けた。
小さな爆風に乗って室内に撒き散らされる麻痺性ガス。瞬く間にガスに巻かれた管制局員達は、なす術も無く、全員が等しくその場に倒れ伏した。

＊　　＊　　＊　　＊

地下動力炉

そこでは、灰色の地味なコートを纏った、長い銀髪の少女がひとり、人知れずたたずんでいた。
身長は１３０センチほど、それに見合った幼い顔には、不釣合いな黒い眼帯がかけられている。

セインのＩＳディープダイバーによる手引きを受け、侵入し潜伏していたナンバーズが５番、チンクだった。

彼女はどこからともなく、複数のスローイングナイフ・スティンガーを取り出した。彼女が両腕を振るうと、スティンガーは勢いよく空を切り裂き、そして回りの機械や配管に突き刺さる。

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター」

かざした左手の正面に、黄色い環状テンプレートが発生し、同時にナイフの柄にも同様の環状のテンプレートが発生した。
そして、右手の指を鳴らすと……設備に刺さったナイフが爆発した。

＊　　＊　　＊　　＊

「防壁出力減少。ディエチちゃん、よろしく～」

「ＩＳ、ヘヴィバレル……バレットイメージ、エアゾルシェル」

脇に担いだイメースカノンの砲頭に、オレンジ色のエネルギーが収束し、弾頭が形成され、目標である時空管理局ミッドチルダ地上本部、中央タワーを完全にとらえていた。

「発射……」

凄まじいエネルギーの砲撃が、地上本部中央タワーに向かって飛翔し、僅か数秒でそれは着弾しタワーの壁を突き破った。
壁を貫通した事で弾殻から解放されたエネルギーは、空気と触れる事で反応を起こし、麻痺性のガスに変質され、着弾点近辺にいた局員は、ガスにやられて次々と倒れていった。

＊　　＊　　＊　　＊

陳述会が行われている大会議室にも砲撃の余波は届いていた。
着弾の衝撃で部屋全体が揺れ、何事かとざわめく参加者たち。
そんな中、レジアスの下には、部下が報告にやってきていた。

「何事だ……」

「多数の敵が攻めてきました……」

「どんな連中だ？」

「度々出現の報告の上がっていました、ガジェットドローンです。数は無数……数え切れません」

「分かった。特殊部隊とその装備の方は」

「万全です。いつでも出撃可能です」

「分かった。オーリス。儂も部隊と一緒に行く。ここは任せるぞ」

「……あまり無理はなさらないでくださいね。もう年なんですから……」

「うるさい！！　まだ儂は現役だ！！」

まったく、儂はまだまだやれるわ！！

「会の中止はせんぞ。地上本部の防衛は鉄壁だ。進入など絶対させぬわ！！」

＊　＊　＊　＊

「別に～　中まで侵入する必要はな～いもん　囲んで無力化しちゃえば」

ガジェットなんて沢山あるんですし、１０や２０潰されたってどうってことありませんもの。

チンクちゃんがメインの魔導炉を壊してくれたから、残ったサブの魔導炉だけじゃ防ぎようありませんわ。

＊　＊　＊　＊

大会議室

「閉じこめられたか！！」

「ＡＭＦ濃度が高い。魔力が結合できなくなっています」

「通信も通らへん……やられた！！」

完全にしてやられた。

フィルがこうなることは分かっていたから、事前にしていてくれて

いたのに……
完全に私たちの油断や。

＊　　＊　　＊　　＊

「セッテ。お前は初戦闘だが……」

「心配御無用、伊達に遅く生まれていません……ＩＳ発動、スローターアームズ」

「ライドインパルス」

「「アクション！！」」

二人の戦闘機人は航空魔導師隊に接敵し、反撃など微塵も許さぬまま、次々と撃墜していった。
航空魔導師隊の戦力ではどうしようもなかった。

＊　　＊　　＊　　＊

持ち場の周りを片付けた俺たちは、中央タワーに向かっていた。

「ガスは、致死性ではなく麻痺性……いま防御データを送る！！」

俺はプリムでガスの分析をし、副隊長達とフォワード全員のバリアジャケットに防御データを転送した。

「通信妨害が酷い。ロングアーチ！！」

『外からの攻撃は、ひとまず止まってますが……中の状況は不明です！！』

くそっ！！　中の状況をつかむことが出来ない！！
フィル、すまない。何とか頑張ってくれ……

＊　　＊　　＊　　＊

「副隊長、あたしたちが中に入ります。なのはさんたちを、助けに行かないと！！」

「待て！！　スバルにティア！！　それだったらこいつに乗っていけ！！　サンダー！！」

俺はプリムのカーソルを押し、ロードサンダーをここに来させた。
サンダーにはＡＩがあるので、オートコントロールは可能だった。

「これって……ロードサンダー！！　あんた持ってきていたの！！」

「こういう事を想定してな……サンダー、本当の能力を解放するぞ！！」

《待ってましたよ！！　このときを！！》

「ロングアーチ聞こえるか！！　ロングアーチ！！」

＊　＊　＊　＊

中の様子が分からない状態で手をこまねいていたとき、フィルからのスクランブルが入った。

『こちらロングアーチ！！　フィル、どうしたの！！』

「シャーリーさん。時間がありませんので、簡単に言います！！
サンダーのオプションを転送してください！！」

『転送って……もしかして、マリーさんが話していたシステム？』

「今からこっちがプロテクトを解除します。そしたら、そちらに解除レバーが出ますので、それを引いてください！！」

『分かったわ！！』

＊　＊　＊　＊

「よし……やるぜ。ロードサンダー、ファイナルシステム。プロテクト解除。システムコード……スーパーサンダー！！」

俺はサンダーのカーソルを打ち、プロテクトを解除した。
同時にロングアーチから解除用のレバーが出たことを確認した。

「シャーリーさん、それを思いっきり引いてください！！」

『了解、ファイナルプロテクト、リリース！！』

ロングアーチからプロテクトを解除されると、サンダーのコンソールに次の文字が現れた。

『ＦＩＮＡＬ　ＰＲＯＧＲＵＭ　ＳＵＰＥＲ　ＴＨＡＮＤＥＲ』

「よし、ティア！！　クロスミラージュをセットしてくれ！！」

「えっ？　どこにセットするのよ！！」

「差し込むスロットがある。一旦、デバイスをカード型にするんだ」

「わ、分かったわ」

あたしはフィルに言われるままクロスミラージュを差し込んだ。
次の瞬間、サンダーが白い光に包まれ光が収まったときには、全く違う姿をしていた。

「な、何これ！！　姿が全然違う！！」

「これが、俺とティアが機動力を増すために開発した戦闘用マシン。名付けてスーパーサンダーだ！！」

「「「「「「「「スーパーサンダー！？」」」」」」」」

「ティア、時間がないので、サンダーのスペックは移動しながら聞いてくれ。ちなみにクロスミラージュはもう出しても大丈夫だぞ」

フィルに言われ、あたしはクロスミラージュをスロットから出した。よかった。デバイスなしで戦うのかと思ったわ。

《相棒、こちらに向かってくる魔導師がいます。ランク推定は……オーバーSです！！》

「「！！」」

「……まさか」

「間違いないな……」

「旦那……」

ルーテシア達も感じたんだろう。
これは間違いなくゼストさんだ。

「リイン！！」

「はいです！！」

「そっちは、あたしとリインが上がる。地上はこいつらがやる！！
……こいつらのことは、頼んだ」

「待ってくれ、あたしも連れてってくれ！！　旦那のこと、どうしても止めなきゃいけないんだ！！」

「ヴィータ副隊長、俺からもお願いします。おそらく、こっちに向かってきているのは、ゼストさんです。もしかしたらアギトなら止めることが出来るかもしれない。お願いします！！」

「分かった。アギト、一緒に行くぞ！！」

「すまねえ。フィルの兄貴。ルールーのことお願いするぜ！！」

「任せなって！！　悪いが先に行くぞ！！」

俺とティアは副隊長達から、隊長達のデバイスを受け取り、中央タワーに向かった。
一刻を争う以上、サンダーで走った方が早い！！

「リイン、ユニゾン行くぞ！！」

「はいです！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

あたしとリインは融合すると、リミッターはかかっているが、相乗効果によって魔力が跳ね上がり、リインの影響で、深紅の騎士甲冑が白く変色した。

あたしとリイン、そしてアギトは接近する魔導師……ゼストを止めるために飛翔した。

＊　＊　＊　＊

会議室や非常口への道は、完全に隔壁ロックされてるね。中との連絡が付かない」

「エレベーターも動かないし……外への通信も繋がらない」

「とにかく、ここでジッとしているわけにはいかない。ちょっと荒業になるけど、フェイトちゃん、つきあってくれる？」

「当然」

エレベーターの扉をこじ開けようとしている局員たち。
それを手伝うため、近付こうとしたとき、誰かに後ろから声をかけられた。

「なんだお前たち、まだこんなところにいたのか？」

「「えっ？」」

そこに立っていたのはシグナムだった。
どうなっているの？　会議室の隔壁もしまっているはずなのに？

「シグナム、いったいどうやってここに！！」

「ああ、レジアス中将とその特殊部隊がこじ開けた」

「レジアス中将が？」

「ああ、たいしたもんだ。あの年とは思えないパワーだった」

シグナムが感心していると、レジアス中将が率いる特殊部隊がこっちにやってきた。

「ん？　何だ。お前達ここから行くつもりか？」

「「は、はい……」」

「そっか……ここは儂がこじ開ける。お前達は下がってろ」

そう言ってレジアス中将は、エレベーターで作業していた作業員を下げ、エレベータの扉に手をかけ……

「はぁぁぁぁ！！」

「無茶です！！　この扉をこじ開けるなんて！！」

「そうです！！　わたし達も手伝います！！」

「下がっていろと言ったはずだ！！　ここは儂の仕事だ。お前達はやることがあるだろ！！」

「「レジアス中将……」」

レジアス中将は、ここまで来る間に、かなりパワーを使ってしまっていた。
いかに身体を鍛えているとはいえ、やはり年には勝てない。
いまのレジアスを支えているのは、プライドとフィルやティアナの事を思う親心だった。

「儂を……舐めるなぁぁぁぁぁ！！」

掛け声と同時に、何かが弾けたような乾いた音と共にロックが壊れ、エレベーターシャフトが姿を覗かせた。

「はぁ……はぁ……はぁ……これで良いだろ……」

「「う、嘘……」」

「何をボケッとしておる。さっさといかんか！！　お前達の部下は、外で必死に戦っているんだぞ！！」

「「は、はい！！　ありがとうございます！！」」

中将の一喝に、慌てて敬礼すると、私達はエレベーターシャフトに飛び込んだ。
中将は、必死で私達に道を作ってくれた。
その思い、決して無駄にするわけに行かない！！

「こんなの陸士訓練校以来だけど、いろんな事やっておくもんだね」

「だね！！　緊急時のルートは指示してある。目標合流地点は地下通路、ロータリーホール！！」

「うん」

＊　＊　＊　＊

『こちら管理局。あなたの飛行許可と、個人識別票が確認できません！！　直ちに停止してください！！』

「ん？　この声は……」

『それ以上進めば、迎撃に入ります！！』

警告を無視していると、眼下の雲海に、１２の赤い光が浮かび上がり、こちらに向かって飛んできた。
空中で停止し、軸をずらして避けると、魔力を帯びた赤い光弾は上空に向かって通り抜けていった。

「くっ……」

こちらも迎撃のため魔力弾を放ったが……

「実体弾か！！　だがこの程度のもの！！」

「ギガントハンマー！！」

「何だと！！」

鉄球の防御しながらじゃこいつを防げないだろ！！
グラーフアイゼンが直撃し、圧縮された魔力が炸裂するが……

（はずしたです！！　相殺と防御で防がれました！！）

「ダメージは通った、続けてブッ潰す！！」

多少の手応えはあったものの、決定打というには程遠かった。
白煙が晴れると、ゼストは静かに佇んでいた。依然として健在だ。

（ヴィータちゃん……）

「ああ……とんでもねえな」

「二人とも気をつけろ。ゼストの旦那は身体がボロボロでも、実力は半端ねえぞ……」

「……アギトか」

「旦那……」

どうやら、酷い扱いは受けていないようだな。
そのことは安心したぞ……

「アギト、今は下がってろ……管理局機動六課、スターズ分隊副隊長、ヴィータだ！！」

「……ゼスト」

＊　　＊　　＊　　＊

地上本部中央タワーに突入し、俺たちは合流地点の地下通路ロータリーホールを目指して移動していた。
先行していた俺とティアだったが、サンダーが接近する異変を察知した。

《相棒!!》

「サンダー、プロテクションだ!!」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

脇からのエネルギー弾は対応できたが、間髪入れずに本命の攻撃……本人による蹴りがきた。

「あぶない！！」

スバルが間に合い、その蹴りを受け止めたが、強烈な回し蹴りだったため吹っ飛ばされてしまった。

「スバル！！　くっ……これは！！」

エリオ達も合流していたが、いつの間にか俺たちの周りはエネルギー弾に囲まれていた。

「ノーヴェ、作業内容を忘れてないッスかぁ？」

「うるっせぇよ、忘れてねぇ」

「捕獲対象三名、全部生かしたまま持って帰るんスよ？」

「旧式とはいえ、タイプゼロがこれくらいで潰れるかよ……」

「戦闘……機人か……」

「ふふん……あれ？　ルーお嬢様もいっしょなんすね」

「……ウェンディ……」

まずいな……こうしている間も地上本部は破壊されている。

「……ティア、ここは俺に任せてみんなを引き連れ、なのはさん達と合流しろ」

「何言ってるのよ!!　無茶よ、あんた一人で!!」

「良いから行け!!　今俺たちがすべきことは何だ!!　なのはさん達に一刻も早くデバイスを届けることだろ!!　心配するな、こいつらなら俺だけでもどうにか出来る!!」

「フィル……」

「へぇ……そいつは聞き捨てならないっすね。あんただけであたし達を相手にするっていうんすか」

「お前らみたいな単純バカは、俺だけで十分だって言ってるんだよ」

「なんだとコラ!!　舐めるのもいい加減にしやがれ!!」

しめた、二人の意識がこっちに向いたぞ。
これでティア達はフリーになる。

（ティア、あいつらの意識が俺に向いてる間に急げ！！）

（……分かったわ。絶対死ぬんじゃないわよ！！）

（……ああ……みんなのこと頼んだぞ）

「スバル、エリオ、キャロ、ルーテシア、ウイング開くから、サンダーに飛び乗って！！」

ティアはサンダーのウイングを展開し、エリオ達の足場を作った。スーパーサンダーは、多人数で任務をこなす用に作っているのでこういったことも可能だ。

「うん！！」

「「はい！！」」

「分かった……」

エリオ達が飛び乗ったのを確認すると、全速力で合流地点に向かった。

フィルお願い……あたし達が戻ってくるまで持ちこたえて！！

＊　　＊　　＊　　＊

戦指揮所のロングアーチでは、地上本部内部の状況は相変わらず掴めていない。
回線が復旧するまで外部への警戒をしていたが……。

「そんな……高エネルギー反応二体、高速で飛来！！」

メインスクリーンでは、エネルギー反応を示す光点が、かなりの速度で六課に向かって移動している。

「こっちに向かってます！！」

「待機部隊、迎撃用意！！　近隣部隊に応援要請！！　総員、最大警戒態勢！！」

まずい、今六課には主力部隊はいない。
ここで襲撃を受けたらひとたまりもないぞ。

『バックヤードスタッフ、避難急いでください！！』

機動六課隊員寮の廊下を走るアイナとザフィーラ。
アイナの腕には、ヴィヴィオが抱えられていた。

＊　＊　＊　＊

「ふっふふふふふ……ふっはははははは！！」

まだだ。まだこんなものじゃないよ。
フィル・グリード、君には本当の絶望を味わせてあげるよ。

# 第１６話　その日、機動六課　後編

「はあああ！！」

「やあああああ！！」

現在、ヴィータと旦那が交戦中なんだけど、ユニゾンしているヴィータ達と互角に戦っている。
だけど、こうしている間も旦那の身体はどんどん蝕まれている。
このまま戦ってもしフルドライブなんて使ったら……

「旦那、もうやめてくれよ！！」

あたしはいても立ってもいられず、戦っている二人を止めた。

「アギト」

「下がってろって言ったろうが！！」

『そうです、今は私たちに任せてください！！』

「悪いな……これはあたしがしなきゃいけないんだ。フィルの兄貴とレジアスのおっさんのメッセージを伝えるのは……」

「どういう事だ？」

あたしの言葉に旦那も気になり、デバイスの構えを解いた。
ヴィータ達も戦闘目的じゃないので、グラーフアイゼンを下ろしている。

「これを……見てくれないか」

「これは？」

「あたしが世話になっている兄貴からの手紙さ」

旦那が手紙を受け取り、その内容を見ると旦那の顔が一変し、驚きを隠せないでいた。

「アギト、この内容に嘘はないんだな……」

「……ああ、フィルの兄貴がレジアスのおっさんから、預かってきたものだって言ってたからな」

「そうか……」

「旦那……それには何が……」

「ああ……俺の求める答えが書いてあったよ。そして、レジアスの後悔もな……」

『儂とお前があのときに交わした正義は今でも持っている。それは失ってはおらん。儂は表面上は最高評議会に従うフリをしながら、水面下で、戦闘機人計画が潰れるような工作と、それに変わる計画を、地道に、そして慎重に進行させていた。だが信用できるのは自分しかいない状況で、お前まで巻き込みたくなかった。結果、お前も部下を失わせることになってしまった。本当にすまない……。直接話したいが、おそらく儂は、今後自由はきかなくなるだろう。その前にせめてこの手紙を託す。　レジアス・ゲイズ』

「アギト」

「なんだい、旦那？」

「投降しよう……レジアスの真意が分かった以上、もう意味がない。それに……」

「もう……身体が持ちそうもないからな……」

「旦那……」

こうして旦那は機動六課に投降することになった。

＊　　＊　　＊　　＊

「ちぃぃ……こいつ、ちょこまかと！！」

「ウェンディ、こんなやつさっさと仕留めよう！！　てやぁ！！」

真後ろからの蹴り、あの野郎は気づいてない。

これで決まりだ……

「ふっ……」

決まったと思った瞬間、姿が消えてしまった。

「なにぃ！！」

「幻影？　ええっ！！　嘘っ！！」

現れたのは数十人ものフィル・グリードの姿だった。
しかも幾つかは質量もあり、余計に判別がつきにくい。

＊　＊　＊　＊

《マスター、相手は完全にこっちの思惑にはまりましたね》

「ああ、ああいうタイプは焦らせば、絶対あっちから仕掛けてくる。
そのときがチャンスだ」

《ですね……それじゃ一丁やりますか》

仕掛けは済んだ。
さぁ、今度はこっちの番だ！！

＊　＊　＊　＊

「あたしらを騙すって、こいつ戦闘機人システムのこと把握している」

「幻術だろうが何だろうが、要は全部潰せば良いんだろうが！！」

あたしはこの幻影どもをぶっつぶすため突撃した。
全部潰せば関係ねえ！！

「見つけたぞ！！」

幻影は全部消した。もう逃げ場はねえ！！

「……掛かったのはお前の方だ！！」

「何！！　なんだこれは！！」

あたしが突撃した瞬間、地面から無数の鎖が現れ、あたしの身体に巻き付いた。
しかも能力封じの処理が掛かっていて、脱出できねえ！！

「ノーヴェ！！　って、あいつがいない！！」

さっきまであそこにいたのに、どこにいったんすか！！

「どこだ、どこにいるんっすか！！」

「ここだよ！！」

次の瞬間、すでにデバイスに高密度の魔力を集束したフィル・グリードが真正面に現れた。
そんな、直前まで何の反応もなかったのに！！

「くっ！！　防御、間に合うっすか！！」

「遅い！！　ブラストブレイザー！！」

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

至近距離から、ブラストブレイザーを喰らったウェンディは動けなくなり、戦闘不能になった。
すぐにストラグルバインドで動きを封じ、向こうも観念したのか抵抗はなかった。

『ノーヴェ、ウェンディ』

「「チンク姉！！」」

『お前達、やられたのか！！』

「残念だったな。こっちは押さえさせてもらった」

『くっ！！』

よし、これでこいつらがあっちの応援に行くことはなくなった。
前の時は3人がかりで、ギンガさんがやられてしまったからな。

＊　　＊　　＊　　＊

合流地点　ロータリーホール

「ここで合ってるはずなんだけど……」

「ええ……なのはさんに言われたのってここでしたよね」

「間違ってないはずだよ」

「もしかして……あちらでも何かあったんでしょうか？」

「その可能性は十分ある……」

スーパーサンダーのおかげで、あたし達はすぐにここに来ることが出来た。
でも、まだなのはさん達が来ていない。

「ティアナ、スバル！！」

「エリオ、キャロ、ルーテシア！！」

「なのはさん、フェイトさん！！　無事だったんですね！！」

「わたしたちは何とか……フィルはどうしたの……」

「まさか！！」

「フィルは……あたし達をここに行かせるために、たった一人で戦闘機人二人の相手を……」

「「！！」」

いくら何でも無茶すぎる！！
たった一人で、戦闘機人二人を相手にするなんて！！

「なのはさん、これを！！」

ティアナ達から渡されたのは、預けていたわたし達のデバイスだった。

「済みませんが、あたし達は急いでフィルの所に戻ります！！」

「ギン姉……ギン姉！！」

「どうしたの？スバル！！」

「ギン姉と通信が繋がらないんです！！」

「……おそらく……あたし達が交戦したあいつら以外にもいるのよ」

「ギン姉……まさかあいつらと！！」

「それはないわ！！　少なくてもあの二人は、フィルが命懸けで押さえてくれてるんだから！！」

「もしかして……フィル。やられちゃったんじゃ！！」

何ですって……

「やっぱりフィル一人じゃ無理だったんだよ！！　それであいつらがギン姉の方に！！」

ふざけないでよ……

あいつが今、どんな思いで戦ってると思ってるのよ！！

「スバル！！」

パァァァァン……

「あっ……」

「今の台詞……もう一度言ってみなさい……」

今の言葉だけは絶対許さない！！
あいつは……フィルは、あたし達のために今も必死で戦っているのに……

「ティアナさん……」

「フィルはね……あたし達を行かせるために今も必死で戦ってるのよ！！　今の言葉はあいつの気持ちを踏みにじるものよ！！」

「スバルさん、お姉さんのことを心配する気持ちは分かります。でも、フィルさんのことも考えてください！！　わたし達のために、あそこに残ってくれたフィルさんのことも……」

「キャロ……」

「……ごめん……でも、ギン姉が！！」

今の僕たちにティアさん達を止める言葉はなかった。
スバルさんはギンガさんのことで、キャロとティアさんはフィルさんのことで……
ルーもどちらの気持ちが分かるから、言葉をかけられないでいた。

「ロングアーチ、こちらライトニング１」

『ライトニング１、こちらロングアーチ』

「グリフィス、どうしたの？　通信が」

『こちらは今、ガジェットとアンノウンの襲撃を受けています、持ちこたえていますが、もう……』

外の状況を確認したくて六課に通信したが、ノイズが酷くさらにあっちも大変なことになっていた。

「ここでじっとしていてもしょうがない。スターズはフィルとギン

ガの安否を、ライトニングはフェイトちゃんと一緒に六課に戻る。
ルーテシアは、八神部隊長にデバイスを届けしだいライトニングに合流！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「スバル、ギンガのことが気になるかもしれないけど、今は目の前のことに集中して！！」

「……はい」

「ティアナ、スバルのことはわたしが見るから、ティアナはそのバイクで一刻も早くフィルと合流して！！」

「はい！！」

スターズはなのはさんとスバルがギンガさんの方へ、あたしがフィルの方へ向かうことになった。

＊　＊　＊　＊

「はぁ……はぁ……さすがに戦闘機人二人はきつかったな……」

《戦略を立てるクアットロがいなかったですからね。これで綿密に

動かれていたらアウトでしたよ》

「あと、戦闘経験がなかったのが幸いだった」

ウェンディとノーヴェのＢＣＣを取り除いた俺は少し休憩をしていた。

固有武装は破壊してるので心配はない。

それに、戦闘機人二人を相手にするのはきつかった。

これで戦闘経験が豊富でもっと緻密な戦い方をされてたら……

「おい……」

「ん、何だ？」

「何で、あたし達を殺さないんだ」

「そうっすよ。あんた達にとってあたし達は敵以外の何者もないんっすよ！！」

彼女たちが言うことは分かる。

あっちの世界にいたときは、こいつらは敵以外の何者の無かった。

だけど……

「……お前らが言いたいのは、なぜ殺さないかって事だよな」

「「そうだ　（っすよ）」」

「そうだな……理由はクアットロ以外のお前らは、わかり合える気がする。そんな気がしたからかな……」

「どういうことっすか？」

「まぁ、　ＢＣＣを取ったから分かると思うけど、お前らは今、人を傷つけたりしたいと思うか？」

「いや、思わないっす。元々あたしは楽しければいいやと思ってやっていただけっすから」

「あたしも同じだ。強いやつと戦いたいと思うが、弱いやつ相手に暴力をふるう気はねえよ」

「だろ、そう言うことだ……」

「あきれたっすね……もし違ったらどうするんすか」

「多分大丈夫だろうと思ったよ。ドゥーエもそうだったしな」

「「ええっ！！」」

嘘だろ！！　ドゥーエ姉といったらあたし達の中でも冷酷無比なのに……

「今度会ってみろ。今じゃユーノさんの片腕だぞ。もっとも普段はユーノさんが尻に惹かれてるがな……」

「尻って……ぷぷっ……ドゥーエ姉らしいな！！」

「あはははは、それまじっすか！！」

「大マジだ。っていうか、あれがドゥーエの本当の性格だと思うぞ。好きなやつには尽くしているし……気づいてないのはユーノさんだけだぞ……」

「何度聞いても信じられねえ……あの冷酷無比な姉が……」

「俺だって最初は信じられなかったさ。あのドゥーエだぞ」

「「確かに！！」」

「でも、あんた本当におもしろいっすね、あたしはウェンディ。あんたの名前は」

「俺はフィル・グリードだ」

「あたしはノーヴェ。確かにおもしろいよ。お前は……」

「なんだよ、それ……」

「「「あははっ！！」」」

本当、あっちじゃこんな光景考えられなかったよな。
俺たちがこいつらとこんな馬鹿話をするなんてな……

ウェンディ達と話していると、ティアが全速力でやってきた。

「フィル！！」

「ティア……心配してくれたのか」

「当たり前でしょう！！　二人を相手にしたんから……でも、無事でよかった」

「心配かけたな……でも、もう大丈夫だ」

ティア、本当にありがとうな……
お前がみんなを引っ張ってくれているから、俺も安心して単独で行動できるんだ。

「ティア、スバル達は？」

「ライトニングはフェイトさんと一緒に六課へ戻ったわ。ルーテシアも部隊長にデバイスを届けたら、ライトニングに合流するわ。スバルは……」

「ギンガさんが気になって、単独先行したという訳か……」

「なのはさんが一緒についてくれているけど、多分あの子暴走するわ……」

「ったく……ティア、俺たちもスバルを追うぞ」

「ええ、でも、こいつらはどうするの？」

「ここにほっておくわけにはいかないから、一緒に来てもらう」

戦闘機人二人をここにおいていくのは危険すぎる。
もしかして仲間が回収すると言うこともある。

「いいっすよ。元々私達はもう、つかまってるんっすから」

「ああ、それにチンク姉のことも気になるしな」

「ノーヴェはチンク姉にべったりですもんね」

「うるっせえよ！！　ウェンディ！！」

「あんた達、喧嘩なら後でにしてよね。今は急ぐから……」

「ごめんっす……」

「わりい……」

「とにかく急ぐぞ。サンダー、ギンガさんの位置は」

《ここからすぐ近くにいます。最短ルートで向かいますよ！！》

俺たちはサンダーのエンジンを全開にし、ギンガさんの元に向かった。

＊　＊　＊　＊

機動六課　隊舎

「……たった二人でよく守った。だけど、もう終わり。僕のＩＳ、レイストームの前では、抵抗は……無意味だ」

天に向かって右手を掲げると、その手のひらの上に、足元のテンプレートと同じ緑色に輝く、球状テンプレートが発生した。それは眩いばかりの光を放射し、無慈悲に六課の隊舎へと降り注いだ。

「クラールヴィント、防いで！！」

防御結界のおかげで、隊舎への攻撃は防げてる。
フィルが事前に、私とザフィーラのリミッターを消去してくれたおかげね。

「シャマル、このままじゃやられる。一か八か……」

「待って、このまま攻撃させて」

「何を言ってるんだ。このままじゃお前が持たないぞ！！」

「いいのよ……あっちはこれだけの攻撃をするのに、かなりの力を使っているわ」

これだけのエネルギーを使った攻撃。してる最中、もしくはその直後は完全に無防備になる。
昔、なのはちゃんがスターライトブレイカーを打った直後、私にリ

ンカーコアを抜き取られて時みたいに……

「シャマル、お前、まさか！！」

「二度と使いたくなかったんだけどね……でも、やるわ。みんなを守るために、そして……」

「かわいい弟を……フィルの大事なものを守るために……」

「シャマル……分かった。俺はもう一人のやつを押さえる」

この状況圧倒的に不利に見えるけど、この二人さえ抑えればどうって事無い。
それにこっちはリミッターは無い。１００％で戦える！！

「いくわよ、クラールヴィント」

《ｊａ》

私はクラールヴィントの石を分離させ、ペンダルフォルムに変形させた。
覚悟しなさいね……

「旅の鏡！！」

「うわぁぁぁぁ！！」

その胸から出てきたのは、戦闘機人のリンカーコアとも言うべきもの。

「オットー！！」

「貴様の相手は、俺だ！！」

「くっ！！」

「鋼の軛！！」

周りに現れた鋼の軛は、致命傷は負わせられなかったが、防御障壁は完全に砕くことは出来た。
ザフィーラのねらいは最初からこれだった。

「今だ！！　やれ、シャマル！！」

「いくわよ！！　コア摘出！！」

「ぐっ……がぁぁぁ！！」

さすがにきついわね。両手で二人のコアを一気に抜いているんですもの。

でも、これを抜いてしまえばもう終わりよ！！

「エネルギー結晶体摘出……そのまま眠りなさい！！」

私は両手に魔力を纏わせ、両手のひらの中のエネルギー結晶体を、力の限り容赦なく握り潰した。

「……何とかなったな」

「ええ……もう二度と使いたくなかったんだけど……」

これはあのとき封印したものだった。

はやてちゃんの騎士として、生きていくと決めたときに……

「この二人……意識は失っているが、命に別状はないみたいだな」

「命までは奪う気はないですもの。この子達だって操られているだけですもの」

「そうだったな……シャマル、ＢＣＣを抜いた後、治療魔法をかけてやれ」

「そうね……」

＊　＊　＊　＊

炎上する隊舎内では、ロングアーチスタッフや、逃げ遅れたバックヤードスタッフが、救助を信じて待ち続けていた。ほんの数人、交代部隊の魔導師が残っていたが、取り巻く炎や煙からスタッフの身を守るのが手一杯で、とても反撃に移れるような状況ではない。

そんな中、たった一人で戦っている魔導師がいた。

ヴァイス・グランセニックである。

「オーケー、まだ撃てる！！　腕はまだ鈍っちゃいねぇ！！」

＊　＊　＊　＊

六課に向かっている私はエリオ達と一緒に急行していた。

だが突如、正面の空域に閃光が浮かび……

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

異変を察知した私は、射線上に躍り出て半球型のバリアを展開した。

と同時に、桃色のエネルギー弾がバリアに当たって弾け飛んだ。

「……戦闘、機人」

視線の先には、二人の戦闘機人。

どうやら、攻撃してきたのは見慣れないあいつの方……

「エリオ、キャロ。先に行って！！」

「でも、フェイトさん……」

「すぐ追いかける。行って！！」

「……フリード！！」

僕の声でフリードはこの場から離れてくれた。
今ここにいるのは、フェイトさんの邪魔になるだけだ。

「あっ……エリオ君！！」

「空戦で、アウトレンジで撃てる相手がいるんだ。フィルさんならともかく、僕たちがここにいたら、フェイトさんが全力で戦えない」

「……うん」

「バルディッシュ、サードフォーム！！」

《Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ》

バルディッシュがハーケンからより、近接戦闘に特化されたザンバーに姿を変えた。
紫電を帯びた金色に輝く刃を構え、私は対峙した。

＊　＊　＊　＊

「フィル、もっと急いで！！」

「落ち着け！！　これだけ乗ってるんだ。これ以上は無理だ！！」

今サンダーに乗っているのは、スバルとティア、それにウェンディとノーヴェの計5人だ。
なのはさんは地上に戻り、ガジェットの掃討に向かった。

「じゃ、あたしが先に行くよ！！　ギン姉が！！」

「少しは頭冷やせ！！　例えお前が先に行っても、ギンガさんが苦戦している相手なんだ。やられるのが関の山だ！！」

「でも！！」

「そんなカッカした状態じゃ悪いけど、フォワードのリーダーとし

て任務に参加させたくないわ……」

「ティア……」

スバルには悪いが、ティアの判断は正しい。
今のスバルは判断力が欠いてしまっている。

俺もサンダーを全速で飛ばし、長い廊下を駆け抜け、ホールに出ると、そこには……

＊　＊　＊

「う……嘘でしょ……ギン姉！！」

「「チンク姉！！」」

「「ギンガさん！！」」

俺たちの前にあった光景は、ギンガさんと戦闘機人のチンクが、互いにずたぼろの状態でなっていたのだ。

正確に言うと、倒れているのはチンクの方だけで、ギンガさんはその場に立っていたのだ。
しかも……

「ギン姉……ちょっと雰囲気が怖い……」

「ああ……ごめんね。ちょっと……」

見ると、ギンガさんの目は金色になっていた。

「ギンガさん、その目は！！」

金色の瞳、その中には戦闘機人の証、魔法陣状のテンプレートが浮かび上がっている。

「え？　ああ……体術なら、機人モードの方が強いから」

私はもう戦闘機人であることに対する忌諱など無い。

だけど、今でこそそうだが、昔はスバルも私もかなり辛い思いをした。

そのことを無くしてくれた切っ掛けは、スバルの訓練生時代、パートナーに秘密にしているのが耐えられなくなって、スバルは決死の覚悟で二人に打ち明けた。
だけど、二人はだからなんだと言わんばかりの態度だった。
クローン等、人造生命体に対する偏見は決して少ないわけではない。
だけど、フィルもティアナも、相方がクローンだろうが何だろうが、本気でどうでも良かったのだ。
それをスバルから聞いて、凄く嬉しかった。
そして、それは私に対してもだった。

フィル曰く
『人造生命体だからとか、そんな些細な事で人の見方を変える奴の気が知れない。そんなこと言う方が腐ってるよ……』

ティアナに聞いても、ほとんど同じ答えが返ってきた。

私とスバルは、この二人に本当に救われたのだ……

「派手にやりましたね……」

「まぁね……相手が強かったんで、私も全開にならないと対処できなかったから……」

「通信にでられなかったのは、機人モードになっていたからなんですね」

「そういうこと、このモードの時って、通常の通信機器とか全部駄目になっちゃうから……」

「ブリッツキャリバーでなら可能ですけどね」

「ちょっと余裕もなかったし、でもＢＣＣも解除済みだからもう大丈夫よ」

さすがギンガさん。
ＢＣＣのこともやっておいてくれてたんだ。

「そのおかげでスバルが大変だったんですよ。ギン姉が、ギン姉がって」

「そうですよ。もうティアやなのはさんの命令も効かないし、大変だったんですよ」

「ちょっと、ティア、フィル！！」

「スバル……」

「は、はい！！」

あっ、ギンガさんが怒りモードになった。
しかも機人モードの状態で、スバルの頭に拳骨をした。

「いったぁぁぁ……」

「まったく、あれほど戦闘中は冷静になりなさいっていってるのに、さらにフィルやティアナの言うことまで無視して！！」

「ごめんなさぁぁい！！」

「謝る相手が違うでしょう！！　ティアナとフィルにちゃんと謝りなさい！！」

「ティア、フィル、本当にごめんなさい……」

「……スバル、今回あんたは、してはいけないこともしてる。あんたは暴走しすぎて、フィルのことまで信用してなかった」

「うん……」

「何の話だ？」

「……あんたが一人でこいつらを食い止めていたときの事よ。ギンガさんのことであんたのことを信じていなかった」

「まぁ、そう思ってもしょうがないだろう。実際かなり無茶だった

しな」

「だけど、あたし達を信じて、あの場に残ってくれたあんたを信じなかったのは、正直許せなかった！！　それはキャロも同じ気持ちよ！！」

「ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

ティアの言うことに、スバルは泣きじゃくるしかなかった。
自分のパートナーを信じられなかったこと。
自分の行動で、仲間を危機にしそうになったこと。
そう言った感情でスバルの頭は混乱状態になっていた。

「ごめん……あたしも言い過ぎた。でも、これだけは分かって。パートナーを信じられなかったら、一緒に戦うのは無理だってことはね。フィルはあたし達を信じていたからこそあんな事をしたの。なのはさん達にデバイスを渡して、戻ってきてくれるって信じてね」

「……本当にごめんなさい……」

「スバル、あまり自分を責めるな。ギンガさんが心配だったのはわかるから……な……」

「うん……」

今回のことは俺が、あそこで一人で食い止めたことが原因だ。
誰か一人でも残ってもらえばよかったかな……

＊　＊　＊　＊

「チンク姉、チンク姉！！」

「ノーヴェ……ウェンディ……お前達無事だったのか。フィル・グリードと戦って……」

「その……フィルがあたし達を助けてくれたんっすよ」

「どういう事だ……そういえばノーヴェも」

「チンク姉、わりぃ。完膚無きまで叩きのめされた……」

確かに、固有武装は使えないようにされている。
だけど、身体的には致命傷は見られない……

「多分、フィルが回復魔法をかけたんでしょう……」

「「「タイプゼロ！！」」」

「その呼び方はやめて欲しいんだけど、一応ギンガ・ナカジマって名前があるのよ」

「そうだったな。すまん……」

「やけにあっさりしてるわね……」

「……あれだけお前に叩きのめされれば、嫌でも従う……」

「あ、あははは……」

ちょっとやり過ぎちゃったかな……

周りの壁や柱を見ると、所々破損の後がある。

しかもここって地上本部よね。

修理費、経費で落ちるかしら……

「……まったく、とんでもないパワーだな。てっきり機人の力を使うことに抵抗があると思っていたのに……」

「昔だったらそうでしょうね。でも、私とスバルは、フィルとティアナのおかげで、自分らしく生きられるようになったの」

「フィル・グリード……か……うらやましいな。私達も、もう少し

早く出会いたかったものだ」

「「チンク姉……」」

「別に今からでも遅くないわ。あなたたちが私達と手を取り合う気持ちがあるならね」

「えっ？」

「フィルもティアナも、人造魔導師だから何？、戦闘機人だから何？　そんな感じよ。あの二人は」

「そっか……」

やっとわかった気がする。
何で私が勝てなかったか。そしてこの二人が生き生きしているか。

「私も……お前達の仲間になれるだろうか……」

「ええ、チンク」

「ギンガ……」

私がギンガが差し出してくれた右手をつかもうとしたとき……

『あ～ら、そんな簡単にハッピーエンドにはさせませんわ～』

声と同時にギンガの背後から、ガジェットが現れ、ギンガは背中からザックリ切られてしまった。

「ギンガ！！」

「「ギンガさん！！」」

「ギン姉！！」

ギンガさんが謎の敵にやられたことに気づき、俺たちはギンガさんの元に駆け寄った。

「誰だ！！」

「あそこっす！！　あれは……？型っすよ！！」

「ギン姉！！　ギン姉！！」

「……大丈夫よ……これ……くらい……」

「ギン姉！！」

「……これは……くそ！！　刃に毒が仕込んであったんだ！！」

ギンガさんの傷は明らかに致命傷だ。
俺が治療魔法をかけているが、それでもギンガさんの容態は刻々を低下している。

『うふふのふ～　フィル・グリード、いかがかしら、ホッとした一時から一気に絶望を味わうのは～』

「クアットロ！！　貴様！！」

『その傷では助かりませんわね。ルーお嬢様か、あのピンク髪のおチビちゃんがいればちょっとは違ったんでしょうけど～』

確かに俺たちの補助のスペシャリストは二人とも六課に向かっている。
この状況じゃどうしようもない……

『あっ、それとあなたたちに捕まってしまった出来損ない達はどうでも良いですわ。もういらないですし～。まぁ、せいぜいそのポンコツが死ぬまで、己の無力を嘆くと良いですわ～　おっほほほほほほっ！！』

「「クア姉！！」」

「クアットロ……」

その言葉を残しガジェットは姿を消してしまった。
クアットロ、どこまで腐ってやがるんだ。
自分の姉妹を使えなくなったら、ゴミ同然に扱うなんて。

「フィル、このままじゃギンガさん本当に死んでしまうわ！！」

「ティア……治療魔法……使えるか……」

「使えると言っても、最低限のものよ……」

ギンガさんの生命力がどんどん低下している。
治療魔法が追いついてない……

「こうなったら俺がギンガさんに魔力を与えて、ギンガさんの生命力を上げるしかない……」

「無茶よ！！　あんただって、もう残り少ないのよ！！」

「心配するな。魔力を全解放すれば大丈夫だから……」

「フィル……あんた……」

俺の中にあるフェイトさんの魔力を全解放して、ギンガさんに注ぎ込む。

もうこれしか、ギンガさんを助ける手段はない！！

俺は両手に魔力を集め、同時にティアが治療魔法を再開し、そして、ギンガさんの身体に集めた魔力を注ぎ込んだ。

「うっ……あっ……」

魔力を注ぎ込むと、ギンガさんの顔色が少しずつだがよくなってきた。

「くっ……うっ……はぁ……はぁ……」

「フィル！！」

「もう少しだ……もう少しで……」

《マスター、これ以上は危険です。マスターの魔力も、もう限界です！！》

さっきノーヴェ達と戦って、基本魔力を結構使ってるからな。
でも、まだ足りない。
切り札としてフェイトさんの魔力は残しておきたかったけど、そんなことは言ってられない。
こうなったら、全部注ぎ込んでやる！！

「くっ……あっ……」

「「フィル！！」」

ギンガさんに魔力を渡して、殆ど使い果たしてしまった俺は、その場でよろけてしまった。
バリアジャケットを保つのもきついくらいだ。

「大丈夫……だ……それより……ギンガさんは……」

「ぐす……大丈夫、ギン姉は助かったよ……ぐす……」

「泣くなよスバル。ギンガさんは助かったんだから……」

「そう…だね……」

『それはどうかしらね』

「なに！！」

声と同時にフィルの背後に現れたガジェットは、フィルを背中から刃で貫いていた。

魔力を殆ど使い果たしていたフィルはバリアジャケットの強度も弱かったのだ。

「「フィル！！」」

「がはっ……ぐっ……」

『おっほほほほほほっ～　引っかかりましたわね。フィル・グリード』

「クアッ……トロ……」

『元々、そこのポンコツはどうでもよかったんですの。最初からあなたを始末するためでしたのよ～』

「クア姉！！　そこまで腐ってるのかよ！！」

「そうっす！！　クア姉、最低っすよ！！　人の心をもてあそんで！！」

「クアットロ、そこまで外道に落ちたか！！」

「フィル、しっかりして！！　お願い、気をしっかり持って！！」

駄目だ。あたしの付け焼き刃程度の治療魔法じゃどうしようもない。せめてルーテシアかキャロがいてくれれば……

「フィル……ギン姉……」

「スバル？」

スバルの方を見るとエメラルドグリーンの瞳が、金色に書き換わっていた。

「……よくも……」

「よくも、ギン姉とフィルを！！」

「待ちなさい、スバル！！」

怒りに狂ったスバルはガジェットに殴りかかっていた。
ガジェットがシールドを張るが、スバルはひたすら殴り続けた。
拳が血まみれになりながらもやめようとしなかった。

『無駄ですわ。ゼロ・セカンド。あなたのＩＳ、振動破砕でも、そう簡単にはこのシールドは貫けませんわ～』

「黙れ、黙れ、黙れぇぇぇぇ！！」

怒りの攻撃は次第にシールドを破壊し、スバルの拳はガジェットをとらえた。
次の瞬間、ガジェットは自爆しようとした。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

間一髪、マッハキャリバーがプロテクションを張ったおかげで死なずに済んだが、マッハキャリバーはシステムダウンしてしまい、スバルもバリアジャケットはボロボロになり、左腕からは機械部品が見えているほど重傷を負っていた。

「うっ……うわあぁぁぁぁぁぁ！！」

「スバル……」

最悪よ……みんな……みんなやられてしまった。
なにがフォワードのリーダーよ……

誰一人、守れなかったじゃない……

「ティアナといったな。落ち込んでいる場合じゃないぞ。彼らを一刻も早く運ばないと……」

「……そうね……敵だったあんた達に言われるとはね……ありがとう……」

まだ戦いは終わった訳じゃない。
クアットロ、あんただけは絶対許さない！！
この借りは必ず倍にしてお返ししてやるわ！！

＊　　＊　　＊　　＊

機動六課、作戦司令室

「……システム、完全にダウン。防御システムも、もう……」

「くッ」

アルトとシャリオを脱出させ、最後まで粘っていたが、残っていたルキノから報告を受けた。
ごめんフィル、せっかく隊舎の防御を強化してくれたのに……

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

くそったれ……いったい何体がガジェットがいやがるんだ。

正直もう限界だぞ……

「！！」

廊下の角から、小柄な人影が現れた。

「ラ……ラグナ……」

六年前

武装隊狙撃手としての最後の事件。
ビルに立てこもった強盗を狙撃するという任務。
要求を通すため、人質を盾に、窓際に姿を現した強盗を狙うと言う、
任務自体はオーソドックスなもので、普段のヴァイスの腕なら何の
問題もない任務だった。
だが、その強盗に取られていた人質と言うのが、ヴァイスの妹のラ
グナだったのだ。

結果は……失敗。

魔法弾は狙いをそれ、ラグナの左目に命中。
これが原因でラグナは左目を失明してしまい、以降、ヴァイスは銃を手にする事が出来なくなった。

震える手を無理矢理抑えつけながら、銃口を彼女に向ける……が……

「くっ……くそ……」

「邪魔ですわ……」

少女の指先から放たれた魔力弾はヴァイスに命中し、壁際まで吹っ飛ばした。

「これで……邪魔者は片づきましたわね。それにしても情報通りでしたわね～」

少女は姿を変え、元の姿に戻ると……

「まぁ、これでマテリアルを探すだけですわ～」

ナンバーズ４、クアットロの姿が現れた。
そう、事前に六課のメンバーの情報は調査済みで、今回もヴァイスの心理を突いたのだ。

＊　＊　＊　＊

「くっ……馬鹿な……」

「私達がこうも簡単に……」

「私を舐めすぎたのが敗因だよ。ＡＭＦが無い空ならリミットを解除していれば、あなたたちなんかに負けない」

私はトーレとセッテと名乗る戦闘機人と交戦することになったが、フィルから聞いていたことと、リミットを自分の意志で解除できることでこの二人相手でも何とか勝つことが出来たのだ。

「……お嬢様を舐めていた、私達の負けです……」

「でも、どうして……六課のメンバーは自分の意志じゃリミッター

は解除できないはずなのに……」

「……フィル・グリードですね。我々のことを知っていて、フェイトお嬢様のリミッターは無くしていた」

「そういうこと……そのおかげで、あなたたちに勝つことが出来たんだけどね」

「悪いけど、私はフィルほど甘くはない。このままあなたたちを逮捕します」

私は戦闘機人二人を逮捕すると、近くの部隊にこの二人を預け再び六課に急行した。

＊　＊　＊　＊

機動六課隊舎

フリードに乗ったわたし達がようやく到着した時には、既に隊舎は炎に包まれ、辺りをガジェットが闊歩しているような状況だった。

「あっ……」

「酷い……」

「……あれは！！」

「あの子……ヴィヴィオ！！」

二人が見つけたのは、クアットロに連れ去られようとしていたヴィヴィオの姿だった。

「ストラーダ！！　フォルムツヴァイ！！」

《Ｄｕｓｅｎｆｏｒｍ》

ストラーダは噴射口が槍の側面部にも４機表出し、後方噴射口も形状が変更した。
これで一気に飛ぶ！！

「キャロ、フォローお願い！！」

「エリオ君！！」

「でやぁぁぁぁぁ！！」

「あら、まだいたんですの～」

ストラーダの槍先は虹色の防御壁の阻まれてしまい、そこから進まなくなってしまった。

「くそっ！！」

「無駄だということがまだわかりませんの～」

クアットロの指先からエネルギー弾が放たれ、それはエリオをとらえ爆発を起こした。
エリオは気絶してしまい、海に落下してしまった。

「エリオ君！！　あっ！！」

そしてわたしも、バインドに掛かってしまい海に落下してしまった。

「さっきのはFの遺産ね。死んでいてもいなくてもどっちでも良いんですけど～」

マテリアルも手に入りましたし、後はゆりかごを起動させるだけですわ。

フィル・グリード。例えあなたが生きていたとしても、私はさらに悪夢を用意をしてあげますわ。

＊　＊　＊　＊

「はぁ……はぁ……」

フリードとエリオ君は何とか助けられたけど、六課は……

『これより五分後に、上空の大型ガジェットと航空戦力による、施設への殲滅作戦を行います。我々の目的は施設破壊です。人間の逃走は妨害しません、抵抗せず、速やかに避難して下さい』

「まずいわね。六課にはまだ傷ついた仲間が残っているのに……」

「ああ、だが我らも、もう動けん……」

戦闘機人を倒し、六課の周りのガジェットを掃討していたが、やはりクアットロの罠にはまり、私とザフィーラは致命傷こそ避けられたが行動不能に陥っていた。

「なんで……こんな……」

なんで……どうして壊すの……
わたし達の大切な場所を……

「竜騎……召還……」

足下には量感用の魔法陣が展開され、両手にはめられたケリュケイオンの水晶が、強い光を放つ。
膨れ上がる魔力は、以前のフリードの時とは比べ物にならないほど強大なものだった。

「ヴォルテールっっっ！！」

海上に巨大な召喚魔法陣が描かれ、巨大な魔法陣から燃え盛る爆炎と共に、黒い巨体が雄大にせりあがった。

「……壊さないで……」

キャロのつぶやきにヴォルテールの口と両肩、三ヶ所に発生した巨大な魔力球が集中し始め……

「わたし達の場所を……壊さないで！！」

強烈な輝きを放ち、膨大なエネルギーを内包した熱線が照射された。
熱戦はガジェットを全て破壊したが……

＊　＊　＊　＊

「遅かった！！」

八神部隊長にデバイスを届けた私は、急いで六課へ戻ろうとしたのだが、地上本部のガジェットがあまりにも多く、しかたなく地上部隊と一緒に掃討していた。
なんとかなのはさんがきてくれて、戻れるようになったのだが……

「あれは、ヴォルテール！！　しかもあれは暴走状態！！」

いまのヴォルテールは召還師のキャロの感情が暴走していて、ちゃんと制御できていない。
このままじゃキャロの手で六課を壊してしまう。

「キャロ、落ち着いてキャロ！！」

「離して！！　お願い！！」

「落ち着いて！！　もうガジェットは全部消えたから！！」

「うっ……ううう……」

何とか落ち着きを取り戻したキャロは、ヴォルテールを制御することが出来た。

「ごめんなさいヴォルテール。ただ闇雲に暴れさせちゃって……」

『気にするな。これから注意してくれればいい……』

「……ありがとう、ヴォルテール」

『それにしても良い友に会えたようだな……我に臆せず、そなたを止めにきた』

「うん……」

本当にルーちゃんには感謝しきれない。
もし、あのまま感情のまま暴れていたら、もしかしたら私の手でこの場所を壊していたかもしれないんだから……

『必要なときがあったら、またそのときに会おう……』

ヴォルテールは魔法陣の中に消えてしまい、自分の世界に戻っていった。

＊　　＊　　＊　　＊

公開意見陳述会の行われていた大会議室の大画面に、ジェイル・スカリエッティが映し出されていた。

『ミッドチルダ地上の管理局員の諸君。気に入ってくれたかぁい。ささやかながら、これが私からのプレゼントだ。治安維持だの、ロストロギア規制だのと言った名目の下に圧迫される、正しい技術の進化を促進したにもかかわらず、罪に問われた稀代の技術者達……今日のプレゼントはその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ』

今回の戦い、クアットロ、ディエチ、セイン以外の戦闘機人は管理局に捕まったが、そんなことは関係ないと言わんばかりの態度だった。

実際クアットロもスカリエッティも、自分さえいればどうとでもなると思っているからだ。

『しかし私もまた、人間を、命を愛するものだ、無駄な血を流さぬよう努力はしたよ。可能な限り無血に人道的に、忌むべき敵を一方的に制圧出来る技術、それは十分に証明出来たと思う。今日はここまでにしておくとしよう……この素晴らしき力と技術が必要ならば、いつでも私宛に依頼をくれたまえ。格別の条件でお譲りしよう……ふふふふふ……ははははは！！』

スカリエッティの勝利宣言とも言うべき発言は、ミッド中に広まっていた。

「予言は覆らなかった。それどころか……」

「最悪やな……」

私とカリムは悔しさしかなかった。

だけど、まだ終わったわけやない。

機動六課は……私達は……まだ終わってないんや……

# 第17話　翼、ふたたび

『……こちらは昨日、テロ事件の被害を受けた、時空管理局、ミッドチルダ地上本部の上空です。施設の被害や負傷者の数、事件の詳細については、未だ、管理局側からの発表はありません。事件直後に、犯人らしき人物から犯行声明があった模様ですが、その内容については、慎重な検討の後に公表すると、広報部からの報告がありました……』

バアン！！

「くそ！！　本部をみすみす落とされるとは！！」

「……中将」

「これでは。何のためにあいつが警告してくれたのか！！」

地上本部が落とされ、管理局内のシステムは、まだほんの一部しか回復していない。

「状況はあまり良いとはいえません。先程、委員会より連絡がありました。中将への緊急査問が行われるそうです」

「……やはり、現場に出たのは拙かったか」

「はい。また、非魔導師によって構成された部隊による成果が大きかったのも、一因かと」

「それならかまわん。むしろ好都合だ」

儂らがした戦い方は、魔法が使えない奴らでも戦えるやり方だ。己の肉体を磨き上げ、そこら辺にある道具で対応していたのだからな。

「同時に、アインヘリアルの運用も……」

「中断されたのか？」

「はい」

「……やっとか。むしろ止まってくれた方がありがたい」

あんなガラクタない方がマシである。

守るべき市民もろとも、街ごと吹っ飛ばすような大砲を向けたところで、抑止力になるわけがない。
犯罪が無くなるどころか、むしろ増える。

「オーリス、お前にはしばらく苦労をかけるが、フィルのこと頼んだぞ」

「はい、おそらくこれが、あの子にしてあげられる……最後のことでしょうから……」

先ほど八神はやてから、後で話がしたいと連絡があった。
さて、あなたがあの子のしてきたことを託せるか、見定めてもらいますよ。

＊　＊　＊　＊

機動六課

昨夜、襲撃を受けたこの場所も、地上本部に負けず劣らず酷い有様だった。
地上本部と同じく、破壊された施設にガジェットの残骸が散乱、本

局や地上本部の調査班が現場検分を行っている。
昨日の戦闘で、傷がなかったティアナは検分に立ち会っていた。
とはいえ、フィルが抜けてしまった事は、全員の心に深い傷となっていた。

「酷い事になってしまったな……」

あたしが検分を行っていると、後ろからシグナム副隊長が近付いてきた。

「あ、シグナム副隊長。病院の方は？」

「重傷だった隊員達も、峠は越えたそうだ」

「そうですか……良かった。とりあえずはひと安心ですね」

「高町隊長は？」

「中です」

「様子はどうだ」

「いつも通りです、しっかりお仕事されてます。さらわれちゃった

ヴィヴィオの事とか
……負傷した隊員たちのことを確認だけしたら、後は少しも……」

「そうか……」

「あっ……」

「こちらは私が引き継ぐ。お前も病院に顔を出してくるといい」

「ですが……」

「行ってやれ。ギンガやスバルのこともあるからな……」

「……はい」

正直ありがたかった。
今はスバルのそばに一刻も早く言ってあげたかったから……

あたしは、フィルの残してくれたサンダーを取りに行くため、格納庫に向かっていた。
あのバイクは、あいつとの思い出のバイクでもある。

あたしは今後の予定を組み立てつつ、歩きながらなのはさんに念話を飛ばした。

（なのはさん、ティアナです）

（ああ……なに？）

（シグナム副隊長が、現場を変わってくださって。ちょっと病院のほうに行ってきます）

（そう。フェイト隊長も、向こうに向かってるはずだから……）

（了解しました……行ってきます）

（うん、気をつけて……）

ティアナとの通信が終わり、しばらく歩いていると……

「あっ……」

そこにはヴィヴィオが持っていたウサギのぬいぐるみが、ボロボロになって落ちていた。
それを拾い上げたときは、いたたまれない気持ちでいっぱいになっていた。

なんで、わたしはあの時ヴィヴィオを助けにいかなかったんだろう。
何のためにフィルが傷ついて、戦闘機人と戦ったんだ。

＊　　＊　　＊　　＊

聖王医療院

「ごめんなさい……ごめんなさい……留守を預かっていたのに……六課のこと守れなくて……うわぁぁぁぁぁ……」

「シャーリーのせいなんかじゃないよ。泣かないで……」

「それにヴィヴィオのことも……なのはさんや、みんなに、なんて謝っていいか……」

「シャーリー……アルト……」

交代部隊は六課に残っていたとは言え、彼らには悪いが、正直対ガジェットや戦闘機人戦の戦力としては、ほとんど役に立たない。あの時六課に残っていて、敵に対抗できるだけの力を持っていたのは、シャマルとザフィーラ、そして辛うじてヴァイスだけだった。

完全に私達のミスだ！！

フィルから聞いていて、この事は予測できていたことなのに！！

そしてフィルは、クアットロの罠に落ちてしまった……

フィル……本当にごめんなさい……

私……肝心なときに助けてあげられなかったよ……

＊　＊　＊　＊

「無理すんな……酷い怪我だったんだぞ……」

「平気よ。ザフィーラに比べれば、私の怪我は軽いもの……」

戦闘機人は何とか倒したが、あの二人を倒すのに、魔力の大半を使ってしまった私達には、六課を守りきる力はのこされていなかった。

正直、生きていることが奇跡かもしれない。

「そっちは、大丈夫だったの」

「ああ……ゼストのおっさんも投降してくれてからな。今は保護観察として、いてもらってる」

「そう……」

「ザフィーラは完治まで時間が掛かるだろうって……ヴァイス君も……峠を越えたとはいえ、当分は……」

「ああ……」

＊　　＊　　＊　　＊

サンダーをかっ飛ばして、病院に駆けつけたあたしは、スバルとギンガさんとエリオの収容されている病室の位置を確認していた。

でも、ここにフィルはいない。

フィルは最後の力を使って、転移でどこかに行ってしまったから……

フィル、今あんたはいったいどこにいるのよ……

「「「あっ……」」」

室に入ると、それに反応したチビッ子トリオが振り向いた。
左腕をつってはいるが、何とが動けるエリオと、ヴォルテールの暴走で、魔力を使いすぎてしまったキャロ。
その暴走とまとめようとして、真竜の間近までいき、キャロを止めたルーテシア。

「……ティア」

「ティアナ……」

スバルもギンガさんも、身体の損傷の方は問題なさそうだったが、精神的に参っているようだった。

「差し入れ。色々買ってきたわよ。どうせ五人とも、ロクにご飯も食べてないんでしょ？」

両手に提げていた巨大な袋を、テーブルの上にと置いた。

エリオ達にはパンを、スバルとギンガさんには缶ジュースを渡した。
ギンガさんの方は、もう殆ど支障はない状態になっている。
毒素も完全になくなっていて、フィルが魔力を与えたので、もうじき完全に回復する。

「もう……動かせるんだ……」

「神経ケーブルがいっちゃってたから……まだ、うまく動かせないんだけど……何日かで元通りだって……」

「ちびっ子たちには、どこまで？」

「……あたしとギン姉の生まれとか、その辺は……」

「悪かったわね。あたしが止めてたの、スバルの身体のこと。しばらく秘密にしときなさいって……」

「あっ……」

「いえ……」

スバルは相変わらず落ち込んでいるのか、動きに精彩を欠いて目にも力が無い。
ギンガさんも同じような状態だった。

（エリオ君、ルーちゃん……）

（あっ……）

（うん……）

「スバルさん、ギンガさん、あったかいスープとか、欲しくないですか？」

「食堂で売ってましたから、買ってきます！！」

「ちょっと……行ってくる……」

エリオとキャロとルーテシアは病室から出て行った。

＊　　＊　　＊　　＊

「ティア……ごめんね……」

「ごめんなさい……」

「ふぅ……何に対してのごめんよ。あたしやフィルの言うことを聴かずに先行しすぎたこと？　大怪我してみんなに迷惑かけたこと？

ギンガさんは……もしかしてあのこと気にしてるんですか……」

「……ええ……」

「……色々……」

「後で、マッハキャリバーにも謝っときなさいよ。酷い破損状況だったんだから……」

「うん……」

ギンガさんもスバルも、後悔でさいなまれてしまっている。
こういった時、あいつならどういう風に言うんだろう……

「私は……取り返しのつかないことをしてしまった……私の油断のせいで、フィルをあんな目に！！」

「ギンガさん……」

「私がいなければ、フィルはあんな目に遭わなくて済んだのよ！！フィルだってきっと私のこと恨んでる！！」

「ギン姉！！」

「ギンガさん！！」

「……そんなこと、これっぽっちも思ってないよ……」

「「「フィル！！」」」

病室の扉が開き、そこにはフィルの姿があった。
嘘でしょう……あの傷は……どうみても……

「フィル……あんた、いったい今までどこに？」

「説明は後だ。それよりギンガさん……」

俺はギンガさんの元にいき、しゃがんで視線を同じにし、ギンガさんの両肩に手を置いた。

「ギンガさん、それ以上自分を責めないで。そんなこと誰も望んでないです……」

「だけど、私のせいであなたは！！」

「ふぅ……少しはプラスに考えましょう。前の歴史だとギンガさん、スカリエッティに連れさらわれ、スバルとガチで戦っていたんです

よ。そう考えれば、俺の怪我くらいですんだんですから……」

「……ばか……本当に馬鹿よ……あなたは……」

「馬鹿で大いに結構。それが俺の性分ですしね」

ギンガさんも落ち着き、俺もそっと離れた。
少し時間がいると思い、俺とティアは部屋から出た。

部屋から出てから、ティアの様子が少し違っていた。
さっきもそうだったが、ああいったときは普段なら、怒鳴られるところだが……

「あんた……今までどこにいたのよ……あの傷は、正直そんなすぐに治るものじゃないわよ」

傷の具合から見て、昔、なのはさんが受けた傷よりもずっと深いものだったはず。
それが、こんな短期間で直るはずはない……

「そうだな……ティアには話しておくよ……実はな……」

＊　　＊　　＊　　＊

昨日　アースラ艦内

「ルーテシア……大丈夫かしら……」

自分の娘が管理局員となって戦っているのは、親として不安でしょうがないが、自分がしてしまった罪の償いと、それを自分の意志で戦うと決めた、あの子の気持ちは止められない。

そんなことを考えてると、フィルが転移で現れた。

「……ぐっ……っうううう……」

「フィル！！　酷い傷！！　急いでメディカルポッドに入れないと！！」

私は緊急通信でマリーさんに連絡を入れて、フィルをメディカルポッドに運んだ。
傷がかなり酷く、正直メディカルポッドを使っても、助かる可能性は１０％以下だそうだ。

「どうですか……フィルの容態は……」

「傷は何とかふさがったけど、魔力が足りないの。このままじゃ……」

生命力とも言える魔力が決定的に少なすぎる。
このままじゃ間違いなくフィルは死ぬ。

＊　　＊　　＊　　＊

（フィル！！　フィル、応えて！！）

さっきからフィルに呼びかけてるけど、生命力がほとんど無く、全く反応がない。

さっき、ギンガに魔力を殆ど渡しちゃったから……
こうしてる間も体温が低下してきてる。

（……もう……これしかない……）

私は、かつて女神と会ったときのことを思い出していた。

＊　　＊　　＊　　＊

異空間

「フェイトさん、あなたにお願いがあるんです……」

「お願いって何ですか」

私はあのゆりかご決戦で、命を落としてしまったフェイトさんの魂を呼び寄せていた。
彼女はスカリエッティを倒したけど、クワットロの罠で命を落としてしまった。

これから呼び寄せるフィル・グリードに対しても、好意を持っていた。

彼女しか彼を助けられない。

「私は、これからフィルの魂をここに呼び寄せます。そして、彼に過去を変えて欲しいと頼むつもりです」

「過去を……ですか？」

「先にティアナ・ランスターにお願いしたのですが、生き返るチャンスは、彼に与えて欲しいと言われ……」

ティアナ、相変わらずフィルのことが優先なんだね。

その一途な気持ちは、うらやましい。

「単刀直入に言います。あなたの魔力を彼に託してほしいのです。今のまま行っても、返り討ちになってしまいます。ですから……」

「何で私なんですか。それでしたらティアナでも……」

「……情けない話ですが、フィルと合う魔力波長が、あなたしかいなかったんです。安らかな眠りについていたあなたに、こんな事を頼むのは申し訳ないのですが、これしか手が浮かばなかったんで

す。私のことをいくら恨んでくれてもかまいません。お願いです。彼の力になってあげてください！！」

「頭をあげてください……むしろ感謝しますよ」

「えっ？」

「どんな形にしろ、もう一度戦うことが出来て、過去の世界にしても、みんなの力になれるんですから……」

「フェイトさん……」

「だから、私はフィルのために力を貸します」

「ありがとう……ございます……」

こうして私はフィルに力を貸すことになった。

具体的には魔力融合すると、フィルの魔力が上がり、私が使えていた技が使えるようになる。

それによって戦闘機人達とも互角に渡り合える。

だが、万が一ということもある。

最後の切り札として女神に渡された力で、私が持ってる魔力を全て、生命力に変えることによってフィルの命を助けることが出来る。

その能力でフィルを助けるしかない。

ごめんね……フィル……
もう、あなたの力になれないけど、このままあなたが死ぬよりはずっと良いから……

（私の魔力……お願い……命となってフィルを救って……）

フィル……私達はずっと一緒だよ。そして、この世界の私、フィルのことお願いね……

金色の光がフィルを包み込み……そして……

＊　　＊　　＊　　＊

「フェイトさん！！」

「気がついたのね、フィル」

「メガーヌさん、マリーさん、ここは？」

「アースラの医務室よ。あなたは最後の力でここにきたのよ」

「そう……だった……最後のあがきで、何とかアースラにワープしたんだった」

「それにしても、よくあの傷が治ったわね。いくらメディカルポッドを使ったといっても、直る見込みはほとんど無かったのよ」

「えっ？　でも俺、完全に直ってますよね」

傷口を見ても完全にふさがっているし、体力も完全に復活してる。あれ……おかしいぞ。魔力がいつもより少ない？

「マリーさん、治療中に何か変わったことありましたか！！」

「えっ？」

マリーさんは、治療中の様子をモニターで確認すると……

「これは！！　魔力？　フィルのとは違うわね……どちらかというとフェイトさんに近い？」

まさか……そんな！！
感じられない…・フェイトさんの魔力が、全く身体の中から感じられない！！

（マスター）

（どうしたんだ、プリム）

（お話ししたいことがあります。お一人できてもらえますか）

（わかった）

俺はプリムをおいてある、自分の部屋に戻った。

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　フィルの控え室

《マスター……》

「いったい何があったんだよ！！」

《……》

「プリム！！」

プリムがようやく口を開き、話し始めた。

《落ち着いて聞いてください……彼女は……マスターの命を助けるために、魔力を命に変換したんです！！》

「なん……だと……」

《……彼女からの……最後のメッセージがあります。聞いてください……》

プリムが、フェイトさんからのメッセージを再生すると……

『これを聞いてるって事は、フィルは助かったって事だよね。勝手なことをしてごめんね。でも、あのままあなたを死なせることは私には出来なかった。もう残された手段は、私の魔力であなたの命に

なること。それしか無かったの……』

「フェイト……さん……」

『フィル、悲しまないでね。元々私は、スカリエッティとの戦いで死んでしまってるの。だから私は、みんなの元にいくだけ……本来のあるべき所へね……』

「……はい……」

『最後まで一緒に戦えなくてごめんね。信じてるよ……フィル達が勝つのを……』

そこで再生メッセージは終了した。

《これが彼女からの最後のメッセージです。マスター！！》

「……ああ……分かってるさ……プリム、絶対勝つぞ、この戦い！！」

《はい！！》

今は泣いてはいけない。

今まで俺の力になってくれたあの世界のフェイトさん。

そして、俺に希望と託したティアのためにも、俺は負けるわけにはいかないんだ！！

見ていてくれ、ティア、フェイトさん
二人のためにもみっともない戦いは出来ない！！

＊　　＊　　＊　　＊

「と、いうわけだ……」

フェイトさんの魔力が無くなったことはぼかしているが、それ以外のことは全部話した。

「……そう……」

「ティア？」

ティアがいきなり俺に抱きついてきた。
驚いてティアの顔を見ると、ティアは涙をボロボロ流していた。

「ティア……」

「心配したんだからね！！　あんたがこのままいなくなったらって……うわぁぁぁぁ……」

何やってるんだよ、俺は。
身近な人が傷ついて、一番傷つきやすいのはティアじゃないか。
ティーダさんの時で、それは分かっていたことだろうが！！

「ごめん……ティア……」

俺はただごめんとしか言えなかった。

＊　　＊　　＊　　＊

地上本部、最上層エリア直通エレベーター

「……それで、私に聞きたいこととは？」

「レジアス・ゲイズ中将のお仕事についてと……フィルが私達に極秘で動いていたことです」

「特秘事項が多分に含まれます。個人として解答出来ることは、ほとんどありませんが」

「聞くだけ……聞いていただけますか……」

正直レジアス中将のことはどうでも良い。

でも、フィルがどのくらい私達のためにしてくれていたのか……

オーリス三佐……お願いや。

せめてそのことだけは教えて欲しいんや……

＊　　＊　　＊　　＊

陸士１０８部隊、部隊長室

「まずは、どっから話したもんかな……」

『三佐が追っていらした、戦闘機人事件からでしょうか』

モニター越しに提案してきたのはクロノ・ハラオウン提督。
隣には聖王教会騎士カリム・グラシアの姿もあった。

テーブルを挟んだ反対側のソファーには、機動六課の高町なのは、
フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、シグナム、ヴィータの四人
が座っている。

「出来れば、ギンガとスバルの事。奥様の事についても……」

「ああ……戦闘機人の大元は人型戦闘機械。これはずいぶん古くか
らある研究でな。旧暦のかなり古い時代から行われてきた。人間を
模した機械兵器、いろんな形式で開発されたが、ものになった例は
あまり多くない。それがあるとき劇的な進化を遂げた……25年前
ばかりのことだ……」

『機械と生体の融合自体は、特別な技術ではない。人工骨格や人工
臓器など、それこそ古くから使われている。ただ……』

『足りない機能を補うことが目的ですから、強化とはほど遠く拒絶
反応や長期使用におけるメンテナンスの問題もあります』

「だが、戦闘機人はな。素体になる人間の身体の方を弄る事で、それを解決しやがった」

「「「！！」」」

「誕生の段階で戦闘機人のベースとなるよう……機械の身体を受け入れられるよう……遺伝子レベルで調整された子供達……それを生み出せる技術を、あの男は作り出した……」

それが……ジェイル・スカリエッティ

「十一年前。まだスカリエッティなんて男が絡んでるとは知らなかったが……うちの女房は陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追ってた。違法研究施設の制圧、暴走する試作機の捕獲。スバルとギンガは、事件の追跡中に女房が助けた戦闘機人の実験体なんだ。……うちは子供が出来なくてな。二人とも、髪の色や顔立ちも、なんだか自分に似てるしってよ……」

「まあともかく、俺達の娘として、人間として育てる……って言い出した。技術局でのメンテだの、検査や研究協力だのも多少はあったが、二人とも、実に普通に育ったよ」

「女房が死んだのは、あいつらに、それなりにものごころがついた頃だった。特秘任務中の事故だとかで、死亡原因も真相も未だに闇の中だ。女房はどっかで、見ちゃいけねぇものを、踏み込んじゃいけねぇ場所に踏み込んじまっただろうと思っている……命を捨て

る覚悟で、事件を追っかけりゃ良かったんだが……女房との約束でな。ギンガとスバルをちゃんと育ててやるってのは。だがまあずっと、地道に調べてはいたんだ。そのうち、告発の機会もあるかもしれねぇってな……」

俺はすっかり冷め切った湯飲みの茶を、一気に飲み干した。

「八神は自分の所の事件に戦闘機人がからむって予想して、俺に捜査の依頼をしてきたって訳だ。あのちびだぬきはよ！！」

「「「「ふふっ」」」」

「まぁ、家の女房と娘達についてはこんなとこだ……後は合同捜査の方だが……お嬢……」

「はい……」

私は現在進行形で行われている、捜査についての報告に移行した。

＊　＊　＊　＊

地上本部

その廊下を私と会議を終えたオーリス三佐が歩いていた。
その表情は厳しいものだった。

「戦闘機人、人造魔導師。いずれも、かつてはレジアス中将が、局の戦力として採用しようとした技術です」

「随分と昔の話です……」

「安定して数を揃えられる量産可能な力。倫理的問題を問われず、量産によるコストダウンさえできれば実現可能な計画。レジアス中将はその計画をどこかで、秘密裏に進めてはいませんでしたか？」

「スカリエッティは、その依頼先として理想の存在です。違法研究者でさえなければ、間違いなく歴史に残る天才ですから」

なるほど、一応そこにはたどり着いていたんですね。
でも、まだ足りない…・

「恐らくは、スカリエッティとの司法取引が行われ、中将は、機が熟するのを待っていた。スカリエッティが、人造魔導師や戦闘機人を大量生産し、それを地上本部が発見、摘発する……という状況を

作れるのを。そうなれば、摘発したそれらを試験運用、という形にもって行けるでしょうし……その途中、掴まれたくない事実に近付いた捜査員を事故死させるのも、優秀な人造魔導師素体を得ることも！！」

「……というのが……2年前までなら言えたんですけど……」

「ほう……」

「最近は地上本部の動きが違ってきてます。機動六課のこともそうですけど、何よりアインヘリアルの計画が事実上停止している状態です。これをおかしいと思わない方が変です……」

「正直、そのことよりもこっちが本題なんです。フィルが私達に内緒でしていることは何ですか！！」

「何をとは……どういう意味ですか……」

「もう……隠さないで欲しいんです。フィルが私達に、危害が及ばないようにしてるってのはわかります。でも、私は機動六課部隊長として、そして……」

「大切な仲間として、もうフィルだけに背負わせるのは嫌なんです！！　お願いです！！　フィルがしようとしていることを教えてください！！」

「……八神二佐」

「はい……」

「これを……」

オーリス三佐が私に渡したのは一枚の書類だった。
その書類の中身は……

「これは！！」

「後は……頼みましたよ……」

＊　　＊　　＊　　＊

ミッドチルダ　秘密ドック

私はオーリス三佐から聞いてこの場所にやってきた。
あの書類では、フィルはもう半年前からこの事をしていたとのことだった。
クロノ君と連携を取っただけでなく、地上本部から許可を得たり、スカリエッティにばれないように隠密に行動したりしてた。

本局のことだけでなく、地上のこと、そして今後のことも考えてのことだった。

その結果、この新型実験艦アースラが完成したのだ。

「フィルは……たった一人でここまで進めていたんやね」

「ああ……クロノ君の協力もあったけど、実質やっていたのは彼だったからね……」

「ロッサ、私は本当に部隊長として失格やね。ヴィヴィオもさらわれてしまったし、部隊員も怪我させてしまった」

「はやて……後悔ならいつでも出来る。今は彼が作ってくれた道を受け継ぎ、そして今度は君がそれを引き継ぐ番だよ」

「せやな。フィルはここまで道を作ってくれた。今度は私がやる番や！！」

フィル、今度は私が頑張るよ。

だから、フィルは心配しないでな……

「アースラ……この戦いは私達の未来が掛かってる。私達と一緒に

もう一度羽ばたいてや……」

本当なら廃艦となっていたはずのアースラ。
だけど、この戦いのために生まれ変わった。

だから私も、もう一度羽ばたくんや！！

＊　　＊　　＊　　＊

機動六課、仮隊舎　屋上

「なのは……さん？」

「フィル……」

「どうしたんですか……こんなところで……」

なのはさんのいつも感じさせている活発な印象は全くなく酷く落ち

込んでしまっている。
珍しく濃い目の化粧をしているようだけど、そんなんじゃごまかせない。
恐らく昨日は一睡も出来ず、目の下に出来た隈や、やつれた顔を誤魔化すためにやっている。

「ヴィヴィオの事……考えてましたか？」

「うん……約束……破っちゃったなって……」

脳裏によぎったのは、最後の指切りの約束……

「わたしがママの代わりだよって……守っていくよって約束したのに……側にいてあげられなかった……わたしは守ってあげられなかった！！　あの子……きっと、泣いてる……」

「なのはさん……」

取り乱しそうな、なのはさんの身体を、俺はきゅっと抱き寄せた。

「ヴィヴィオがひとりで泣いてるって、悲しい思いとか、痛い思いをしてるかもって思うと、身体が震えて、どうにかなりそうなの！！」

「今すぐ助けに行きたい！！　だけど……わたしは……」

「大丈夫、ヴィヴィオは絶対大丈夫ですから……」

「う……うっ……うわぁぁぁぁ……」

なのはさん、今はいっぱい泣いてください。
俺に出来るのは、そんなあなたに泣く場所を貸すことくらいです……

しばらくして、なのはさんも思いっきり泣いたせいか幾分か落ち着いた。

「……本当にありがとう。ずっと……ぎゅっと、してくれてたんだね」

「……俺に出来るのは……これくらいでしたから……」

「……暖かいね。こうやって、わたしのことを包み込んでくれていると安心する。不安も消えていく……わたし一人じゃ、ヴィヴィオのことで押し潰れてた」

「……俺も、ヴィヴィオのことは後悔してた」

「えっ？」

「何で俺がここに残らなかったのか、どうして転移で真っ先に戻らなかったんだ……そんな後悔でいっぱいなんですよ」

「後悔してたのは、わたしだけじゃなかったんだね……フィルも……すっと後悔してたんだね……」

「だから、お互いに、これ以上後悔しないように助けましょう……二人できっと……」

「うん！！」

さっきとは違い、満面の笑みでなのはさんは、俺に抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと……なのはさん……」

「なぁ～に」

「あのですね……こんな所、誰かに見られたら……」

離れる気は全くないみたいで、いつもとは違う猫なで声で、さらに

強く抱きついてきた。

「別に良いよ。フェイトちゃんなら、今日くらいは許してくれると思うし、それに……」

「それに？」

「実は……さっきから、見られてたんだよ。わたし達……」

「えっ？」

そう言って扉の所を見ると、フェイトさんだけでなく、ティアとキャロ、そしてルーテシア、さらにははやてさんまで覗いていた。

「お、お前ら……」

「ごめんフィル……でも、あんたはきっと、なのはさんと同じように後悔してるって……そう思ったから……」

「ティア……」

「フィルさん、きっとわたし達がヴィヴィオのことを言っても、逆にこっちが励まされてしまうと思いましたから、悪いとは思いましたが……」

「申し訳ないと思ったけど、フィルさんとなのはさんのことずっと見てた。今のフィルさんとなのはさん、同じ後悔を持っている同士だったから……」

「そっか……済まないな。みんなに気を遣わせて……」

「ほら、そうやって自分よりみんなを優先しようとする。やっぱり良かったよ。あの場で気持ちをはき出させて……似たもの同士だよ、なのはもフィルも……」

「「あ、あははは……」」

そんなに似てるか。俺となのはさん。
少なくても俺の方が、もう少し自己中だぞ。

「でもね……」

そう言ってフェイトさんは人差し指で、俺のおでこをツンとして……

「二人じゃないよ。三人だからね。私だってヴィヴィオのママなんだからね……」

「「フェイトさん　（ちゃん）」」

「それも違うで」

「「はやてさん　（ちゃん）」」

「みんなでや。六課のみんなでヴィヴィオを助けるんや。そやろ、ティアナ、キャロ、ルーテシア！！」

「そうよ、あたし達のこと忘れんじゃないわよ！！」

「みんなで力を合わせて」

「ヴィヴィオを……助ける」

「「みんな……」」

そうだ、俺にはこんなにも心強い仲間がいる。

大丈夫、俺たちは負けない！！

この仲間達がいる限り……

＊　＊　＊　＊

スカリエッティ・ラボ

処置台の上に両手、両足をバインドで動きを封じられたヴィヴィオの姿があった。
右側にはディエチが、左側にはクアットロの姿があった。

「あ……ああ……ふぇぇ……」

「はい、お姫様。怖くないですよ～」

「バイタルも正常。魔力安定よし、移植準備オーケー」

「ふむ、良いタイミングだ」

扉が開くと、スカリエッティとウーノが現れた。
スカリエッティはウーノからレリックを受け取った。

「ああっ……いやぁぁぁぁぁ！！」

「お姫様、きっと分かるのよ。自分がこれからどうなるのかってことを～」

「ママッ！！　パパッ！！」

「泣いても叫んでも、だ～れも助けになんか来てくれませんよ～」

うっふっふ～、やっぱり子供の泣き叫ぶ声は、何度聞いても快感ですわ。

「うわぁぁぁ……うわぁぁぁぁぁ……」

レリックを持ったスカリエッティが、ヴィヴィオに近づき……

「さて、始めようか。聖王の器に王の印を譲り渡す。ヴィヴィオ、君は私の最高傑作になるんだよ！！」

「ママァァァ、パパァァァ！！」

＊　＊　＊　＊

翌日、機動六課　仮隊舎　ミーティングルーム

八神部隊長の命令で、負傷者以外のメンバーが全員集結させられた。
負傷者もモニター越しに話を聞いていた。

そこで話されたことは、今後六課の戦闘員は移動基地に移り、そこで今後活動していくこと。
さらにそのことに俺が関わっていたことを公表され、一時はパニックになったが、殆どのメンバーは何を今更という感じだった。

いよいよアースラの出番になるわけだが、秘密ドックまではトランスポーターを使うので、その座標を打ち込んでいた。

といっても仮隊舎なので、ポーターが3基しかないので、全員の移動にはかなり時間が掛かることになる。
しかも、先に俺が行っておかないと、向こうとの連携が出来ないのでそれも苦労する。
事前には連絡してあるが、それでも六課メンバーとマリーさん率いるメカニックとの連携をとる必要があるからだ。

だから、こっちの方はティアとフェイトさんに任せることにした。

「これで最後ですね」

「うん、私となのはで最後だよ」

「それじゃ、出発前にデータを消しておきますね。ここからドックの居場所がばれないように……」

「お願いね、ティアナ」

「はい！！」

あたしはポーターを操作し、この転移が終わったら座標データは完全に消去するようにした。
これでばれてしまったら、今までの苦労は水の泡になってしまう。

フィルが何のために、今まで苦労して秘密裏でやってきたと思うのよ。
操作が終わると、あたし達はドックに移動した。

＊　　＊　　＊　　＊

ドックに来ると、はやてを始め全員がそれぞれ部署に就き始めている。
ティアナもフォワードと合流し、自分たちの部署に散っていった。

フィルがマリーさんと一緒に進めていたこともあって、メカの方はすでに万全の状態になっていた。

戦闘班もそれぞれ各部署の武器の説明を受け、シミュレートをしていた。

管制室の方もグリフィスが中心となり、発進準備を始めている。

そして私となのはは、ブリッジに向かった。

「はやて、発進準備はどのくらい出来てる」

「現在、８５％といったとこや。現在合流出来るメンバーは全員乗り込んだよ」

「武器と補充物資の方は」

「そっちの方は万全や。前々から準備していただけあって、とんでもないものもあるで……」

スクリーンの映し出されたのは、一機の戦闘用ヘリだった。

「戦闘用ヘリ、ＪＦ７０５　ＸＸ　六課で、どうしても手に入れられなかったヘリや」

「それが、どうして？」

「フィルや。レジアス中将に話をつけてくれて、やっと一機だけ回してくれたんや」

「「フィル……」」

画面にはフィルが各部署に指示を出している姿があった。
今、この場で的確な指示が出来るのはフィルだ。
ここの現場を知らない私達よりも、的確に正確に指示することができる。

だからこそ、スムーズに発進準備ができている。

そんなとき、本局のクロノから通信がきた。

『……こちら……クラウディア……アースラ……応答してくれ……』

通信スクリーンに出されたのは、ボロボロの艦内とノイズだらけの通信だった。

「こちらアースラ、いったい何があったんや！！」

『……よく……聴いてくれ……本局は……次元艦隊は……スカリエッティによって壊滅した』

「「「！！」」」

次元艦隊が壊滅。

いったい何があったというんや！！

『俺たちクラウディアも……君たちを助けに……向かうため、本局で準……備してい……たんだが……クアットロのサイバー……テロで……本局にある……艦隊は全部……やられてしまった……』

「そんな！！」

「クロノ、被害状況はどのくらいなの」

『本局のコン……ピュータと艦隊のコンピ……ュータは、少なくても……アウトだ。クラ……ウディアもこの通り……だ……』

ノイズが酷くなり、話も聞き取りづらくなってきた。

『残念ながら……もう……アースラが……最後の希望だ……俺たちも……ポーターだけでも復帰させ……そっちに援軍を……送る……ようにする……』

「分かった……こっちは何とかするよ。だからクロノ君達も頑張ってな……」

『済まない……何とか……頑張っ……』

「クロノ！！」

「クロノ君！！」

クラウディアからの通信は切れてしまった。
通信関係も、とうとうやられてしまったのだろう。

「二人とも聞いての通りや。援軍は正直期待できない。私達だけでやるしかないんや！！」

「「うん！！」」

フィルが危惧していたことが本当になってしまった。
幸いアースラはコンピュータが独立していたので、サイバーテロは

避けられた。

「フェイトさん！！」

フィルが報告のためブリッジにやってきた。
血相変えてきたのは、さっきの通信のことを知ったのだろう。

「……本局が、やられたんですね……」

「うん……」

やっぱり、本局を攻撃してきたか。
俺があっちの立場なら、真っ先に本局をたたく。
艦隊さえ押さえてしまえば、地上の戦力じゃゆりかごは押さえられないからな。

「フィル、報告の方は？」

「はい、各部署、全機関オールグリーンです。いつでも発進可能です」

「了解や。乗組員に次ぎます。これよりアースラは発進します。全員部署についてください」

『了解！！』

部隊長の号令で全員各部署に就き、発進を待った。
発進も間近になったとき、爆発がおき、ドック全体が崩れ始めた。

「な、何や！！」

「どうしたの！！」

「フィル。もしかして」

「どうやら……ここがバレたみたいですね」

外の様子をスクリーンに出すと、大量のガジェットがドックを攻撃していた。
数は５００機以上、どうやら本気で、ここで俺たちを生き埋めにしたいらしいな。

ドックも本格的に崩壊しだしたとき、マリーさんから通信が入った。

『フィル、ここは私達に任せて、あなたたちは発進して！！』

「マリーさん！！　でも、このドックの武装じゃ……」

お世辞にもここの設備は武装が十分とは言えない。
ばれないように作ったため、最低限の設備しかなかったのだ。

『大丈夫、アースラを発進させたら、私達もこのドックを破棄するから、何とかその間くらいなら持ちこたえてみせる！！』

「……分かりました。八神部隊長！！」

「了解や！！　アースラ、緊急発進！！」

ドックの射出口が開き、アースラはその巨体を大空に羽ばたいた。

＊　　＊　　＊　　＊

スカリエッティ・ラボ

「やはり、出てきましたわね。アースラ……」

「うむ……」

「本当なら、真っ先に叩いておきたかったんですけど～」

今まで色々調べたけど、アースラだけはどうしても場所特定が出来なかった。
他の戦艦は全部掌握出来たのに、アースラだけは掌握できなかった。

「色々面倒になりそうですわね～」

「心配することはないさ。本局の戦力は無力化したし、たがが一隻で何が出来ると言うんだね」

「それもそうですわね～」

まぁ、アースラ一隻くらい大目に見ましょう。
そのくらいの戦力がなかったら、張り合いもありませんものね。

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　ブリッジ

「ふぅ……何とか発進したな……」

「まったくやで。一時はどうなるかと思ったわ」

アースラを発進させた後、ドックは完全に制圧されてしまった。
マリーさん達も粘ってくれたが、発進させるのがやっとで、すぐにドックを破棄したのだ。
スタッフは全員無事で、とりあえずナカジマ三佐の所に向かうそうだ。

「八神部隊長……これを……」

「これは……」

八神部隊長に渡したのは鍵だ。
発進前、マリーさんから託された最後の希望……

「アースラの……最終兵器、アルカンシェル・ノヴァの封印を解くキーです……」

「アルカンシェル・ノヴァ……」

「そうです。これが、俺たちの残された最後の武器です……」

本局艦隊がいない今、俺たちが対抗できる手段はもうこれしかない。

「……八神部隊長……マリーさんから託された鍵、あなたに託します……」

「フィル……」

重いわ……マリーさんとフィルはこれを完成させるために、血の滲む思いをしてきたんや。
この鍵はみんなの……そしてミッドの人々の思いが込められてる。

「はやてちゃん」

「はやて」

鍵を握っている私の手に、なのはちゃん達が手を添えてくれた。

「なのはちゃん……フェイトちゃん……」

二人は、うんと言って、私を励ましてくれた。
そしてもう一人……

「フィル……」

「はやてさん……」

私達三人の手に、さらにフィルの手がのった。

「みんな、ありがとうな。それにフィルも、私のこと名前で呼んで

くれて……」

「あっ……済みません。任務中に……」

「ええよ。むしろそう呼んで欲しかったんや。私な、いつも思ってたんや。なのはちゃん達は、今では任務中だって名前で呼んでるのに、私は部隊長って呼ばれて、私だけ疎外感がある感じやったし…だから、この戦いの間は名前で呼んで欲しいんや！！」

「「はやて　（ちゃん）……」」

「本当に……良いんですね」

「もちろんや。部隊長って言ったら怒るで。今だけは部隊長として考えないでな。一人の仲間としてみてや。ちなみにこれは命令やで」

「分かりました。この戦いの間だけは部隊長としてでなく、一人の仲間として考えます。……はやて……さん」

「うん！！」

スカリエッティとの戦い……前の時はみんな死んでしまった……

もう、あんな思いは二度とごめんだ。

クアットロ……

お前への借り……必ず返してやる

# 第１８話　ゆりかご

聖王医療院

入院病棟の一室のベッドに、ヴァイス・グランセニックが横になっていた。
そんなヴァイスの眠るベッドサイドに立ってたのは、アルト・クラエッタだった。

「ヴァイス陸曹……手術お疲れ様でした……機動六課の、私たちの７０４式ヘリは壊れちゃいましたけど……ヴァイス陸曹のストームレイダーは無事でしたよ……」

アルトが持っていたのは、ヴァイスのデバイス、ストームレイダー六課跡からシグナムが見つけていたのだ。

「……後のこと、何も心配ないですからね……落ち着いてゆっくり休んでてください……」

病室を出て、私はヘリポートに戻り、回復したロングアーチをアースラに連れて行くため、ＪＦ７０５　に搭乗した。
六課に残されたヘリは、これ一機だけだ。

「行こうか、みんな……」

『おう！！』

（ヴァイス先輩の後輩として……六課のロングアーチスタッフとして……みんなを運ぶ仕事はわたしが引き継ぎます！！）

ヘリポートから、アースラと合流するために旅立った。

＊　　＊　　＊　　＊

時空管理局次元航行実験艦　Ｌ級巡航艦アースラ

既に次元空間の長期航海に耐えられるだけの、在りし日の力は失われ、退役を待つばかりだった艦だったのだが……

フィルが回収し、様々な改修・改造を施し、外見は殆ど変わらないが、中身はＸＶ級を超えるほどの戦闘力を秘めている。

全方位に対応する主砲・副砲。
戦闘によるダメージを軽減する全方位バリア。
長期間の航海を復活させた新型エンジン。
装甲板の強化により、耐久力の強化。

さらに、新型エンジンと新型魔力炉によるアルカンシェルの強化。

通常のアルカンシェルを3発連続発射を可能にし、さらに最終手段としてアースラのアルカンシェルにはもう一つの顔がある。

「ルキノ、コントロールは大丈夫？」

『はい、フェイトさん。この子の……アースラのことは、隅から隅まで知ってますから……』

ルキノは元、アースラ勤務。当時は事務員として搭乗していた。
基本操作は元のままなので、そんなに苦労はしないで済んだみたい。

＊　＊　＊　＊

「……アルトさんとルキノさんが」

「うん、アルトは療養中のヴァイス君に代わって、ヘリパイロット」

「ルキノは、アースラの操舵手」

アースラ内の会議室には、俺と、スターズからなのはさんとティア、ライトニングからフェイトさんとキャロ、輸送隊からアルトさんと、六課各部門の代表メンバーが集まっていた。
他にも、操舵室にいるルキノさんとも内線が繋がっていた。

「ああ、みんなお揃いやな」

会議室の扉が開き、グリフィスさんを引き連れたはやてさんが入ってきた。

「ちょうどよかった。いま、機動六課の方針が決まったところや」

地上本部の事件への対策は、残念ながら後手に回っている、と言うのが現状だ。もっとも、ただでさえ少ない戦力で、襲撃後の混乱の中、それは避けようがない。
さらに、本局艦隊はほぼ壊滅状態になってしまい、現状では復帰のめどは立ってない。

スバルも当初は本局で治療する予定だったが、マリーさんの機転で、退院後はクラナガンの施設に移っていたのだ。

「そやけどな……私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格としてのスカリエッティでもない。ロストロギア・レリック……その捜査線上に、スカリエッティやその一味がおるだけ。そう言う方向や……」

「その過程において誘拐された、なのは隊長とフェイト隊長の保護児童。ヴィヴィオを捜索・救出する……そう言う線で動いていく。両隊長、意見があれば……」

「理想の状況だけど……また無茶してない？」

「大丈夫？」

「……正直、まだ後見人の皆さんと連絡が取れてないんで、今後の作戦は、私達の独断と言うことになってくる。でもな……」

「こんな時のための機動六課なんや！！　ここで動けな、部隊を興した意味ない！！」

「了解」

「なら、方針に異存はありません」

「よし。ほんなら、捜査出動は本日中の予定や。万全の体制で、出動命令を待っててな……」

会議は締めくくられ、はやてさん達とフェイトさん達は会議室を出て行った。

俺とスターズの二人はまだ、会議室に残っていた。

「ティアナ……スバルはまだ……」

「はい……まだクラナガンの方に……でも、午後には合流できるそうです。ギンガさんが迎えに行ってます。それにしても、あのまま本局でしてたらスバル達も……」

「マリーさんの機転のおかげだな、クラナガンの施設にしたのは正解だったな……」

「そうだね……」

＊　＊　＊　＊

クラナガン　技術研究室

「うん……神経系は完全回復してるわね。全力で動かしても痛みはないはずよ」

「はい」

試しに左手を全速でパンチを出してみたが、痛みは全くなかった。

「うん、ありがとうございます。マリーさん」

『後は、マッハキャリバーだね』

「……はい」

マッハキャリバーは、あたしが無茶をしてかなりのダメージを負ってしまった。
自己修復機能では追いつかず、大修理となってしまった。

「……ごめんね、マッハキャリバー……あたしのこと、怒ってるよね……」

《「怒る」という感情が、私にはおそらく存在しません。心配は無用です》

「マッハキャリバーは、ＡＩだけど心があるって。一緒に走る相棒だって言ったのに……あたしあの時、マッハキャリバーの事、全然考えてなかった……」

「自分勝手に、道具扱いして……こんなに傷付けちゃった！！」

《いいえ、問題あったのは私の方です。あなたの全力に応えきれなかった。私の力不足です》

と、そのときシャーリーとマリーが部屋に入ってきた。

「あっ…ごめん。大事なお話し中？」

「いえ……」

《反省会です》

「シャーリーさん、もう良いんですか」

「六課が大変な時期だし、デバイス達の面倒も見ないとだし、寝ていられないよ」

もうあんな思いはごめんだ。
ヴィヴィオが連れさらわれ、何も出来なかった自分を責めるのは。
今、みんなのデバイスのことを見られるのは私だけだ。
フィルが前線で戦う今、甘えてなんかいられない！！

「ねぇ、スバル、マッハキャリバーね、修理ついでにって、強化システムのプランを自分で考えちゃったのよ」

「えっ？」

「アウトフレームの強化とか、、走行強度のアップとか……」

「かなり重くなるし、扱いづらくもなるから、スバルに聞かないとって言ったんだけど……」

「魔力消費1．4倍……本体重量2．5倍……やれます！！　この程度なら確実に！！」

「じゃ、このプラン採用。良かったね、マッハキャリバー」

《ありがとうございます》

シャーリーさんは、マッハキャリバーの改修のためのパーツを取りに部屋を出たが……

「ねぇ、スバル」

「はい、何ですか。マリーさん」

「何でフィルがマッハキャリバーを作るときに、最初からこのスペックで作らなかったか分かる」

「えっ？」

言われてみればそうだ。
フィルは未来からきたんだから、この事を想定して作っていても不思議じゃなかったはずなのに

「フィルね。こんな事言ってたの。最初からハイスペックで作ってあいつらに渡して、時期が来たら封印を解除してもいいかもしれない。でも、それでは本当の成長は望めない。あいつらが成長してデバイスと信頼関係が出来たとき、互いに成長していくことを考えられるような関係にしたいんだ。それこそが魔導師とデバイスの完成型だと思う。そして自分たちが考えて導き出した答えは、俺が考えるものなんかよりずっとすばらしいものに違いないから……そうい

ってたの」

「フィルが……そんなことを……」

「実際、フィルの考えは正しかったみたいね。こうしてマッハキャリバーは、スバルと一緒に戦うために、自分で考えたんですもの」

「マリーさん……」

「スバル、マッハキャリバーの気持ちに応えてあげてね」

「はい！！」

そして、マリーさんも部屋を出て行った。

《もう一度私にチャンスをください！！　今度は必ず、あなたの全力を受け止めます》

《あなたが、どこまでも走れるように》

「……うん……今度は絶対、一緒に走ろう。マッハキャリバー」

マッハキャリバー、本当にありがとう。
フィル、私にマッハキャリバーを作ってくれて、本当にありがとう。

あたし、絶対フィルとマッハキャリバーの思いに応えるよ。

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　通路

「訓練データの移行、大丈夫だった？」

《問題なく終了しました》

「うん」

拠点がアースラに移ったことで、訓練施設もアースラの訓練室へと場所を変えていた。

レイジングハートは破壊された六課のシステムからデータをサルベージし、バックアップと手持ちのデータから補填しながら、アースラへのシステム移行を完了させていた。

「あっ……なのはさん、レイジングハート」

「リイン。そっちは大丈夫なの」

「はいです。おかげさまで絶好調ですよ。もっとも私とヴィータちゃんは殆ど傷ついてなかったんですけどね……」

「そっか」

「シャーリーから、クロスミラージュ達のファイナルリミッター解除を頼まれたですよ？」

「うん……私がお願いしたの……」

手を差し出すと、リインはその上にちょこんと座った。
そしてリインを肩の上にもっていって、そこに座らせた。

「本当は、もう少し慎重にいきたかったんだけど、そうも言ってられない状況だからね……」

「でもみんな、きっとちゃんと使いこなせるですよ」

「だね……」

「……なのはさんとレイジングハートの方は……」

「ん？」

「ノーマル状態のエクシードはともかく、ブラスターモードは、やっぱり危険ですから……」

「……使わないよ。ブラスターは、わたしとレイジングハートの、ホントに最後の切り札だからね」

《Ｉｔ' ｓ　ｓｏ》

「エクシードだけでも十分すぎる威力があるんだし、それで最後までしっかりキメてみせるよ」

《Ｙｅｓ》

そうは言うが、なのはさんとレイジングハートのコンビは、いざとなったら絶対に使う。

そして、シャーリーから聞いたことだけど、フィルも同じ、ブラスターモードを持っている。

きっとフィルも、ヴィヴィオを助けるために、そして……クアットロを倒すためになら、絶対に使う！！

この二人はそういう人達だ。

（もうすぐだよ……なのはママが、すぐに助けに行くから……）

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　フィルの部屋

会議後、俺は自分の部屋で待機していたが、エリオ達の様子を見てきたフェイトさんがやってきて、今は一緒にいた。

「エリオ達どうです？」

「さっきまでエリオはシグナムと訓練してたよ。ルーテシアがそれを見て、こんな時まで訓練して怪我したらどうするのって怒ってた」

「あらら……エリオもルーテシアに心配かけるんじゃないっての」

「エリオとルーテシア……お似合いだね」

「あいつらばれてないと思っているけど、六課の殆どの人間は知ってるぞ。アギトも二人きりになるように結構気を遣ってるのにな……」

本人達は隠してるつもりだが、はっきり言ってバレバレだ。

「そうね……ふふっ……」

「だな……ははっ……」

「……」

「……どうしたの？」

「……フェイトさん」

「なに？」

「……勝てるのか……俺たちは……」

フェイトさんの技は辛うじて使えるけど、魔力が失われた今、そんな無茶は出来ない。

そんな状態でどこまで戦えるのか……

「……フェイトさん？」

「……大丈夫だよ……例え、私の魔力が無くなっても、フィルには私がいるから……」

「！！」

気づかれていた！！
ティアに説明するときも、この事はぼかしていってる。
だから、この事はプリムしか知らないはずなのに！！

「分かるよ……いつものフィルと違っていたから……」

「フェイトさん……」

「だから……」

そう言ってフェイトさんは、自分の魔力の一部を分けようとしたが……
魔力ははじかれてフェイトさんの体内へ戻っていった。

「どうして……どうして、魔力が入らないの！！」

「俺の元々のキャパは今の状態がＭＡＸだから。フェイトさんの魔力はイレギュラーだったから、受け入れられないんだと思う」

元々俺とティアは、六課の中でも魔力キャパは少ない方だった。

フェイトさんの魔力が入っていたおかげでキャパは広がって、多少は魔力値は高くなっているけれど、それ以上にはならない。
だからフェイトさんが俺に魔力を渡してくれようとしても、これ以上は入らないのだ。

「そんな……」

「大丈夫、未来ではこの状態で戦っていたんだから、心配することないって！！」

「大丈夫なわけ無いでしょう！！　未来では、その状態で戦ってティアナとフィルは命を落としてるのよ！！」

「まだ俺には……最後の手段があるから……」

「ブラスター……モード……」

最終手段として、なのはさんと同じブラスターシステムをプリムに組み込んでいる。
さらに、なのはさんのレイジングハートにはつけなかった最終兵器もある。

「出来れば、使わないようにするけど……」

「フィル、やめて！！　ブラスターを使うのだけは、それでティアナは命を落としたんでしょう！！」

ブラスターは自己ブースト、いくら改良したとしても、なのはくらい魔力があればまだ良いが、ティアナやフィルみたいに魔力が少ない人間が使うのは自殺行為に等しい！！

「フィル、今回の任務はフォワードと一緒に、地上の警護に回ってもらうから、だからこれ以上無茶はしないで！！」

「それだけは駄目だ！！　例えそうされても、ワープで俺はクアットロの所に行く！！」

「フィル……」

もう、フィルを止めるのは無理だ。
止めたとしても、命令違反覚悟でフィルはゆりかごにいく。

「わかった……もう止めない。でも、私も一緒に行動するからね！！　それが駄目なら、プリムを取り上げるからね！！」

「ありがとう……フェイトさん。大丈夫……技は全部使えるんだか

ら、後は俺の戦い方次第で、どうとでもなるよ」

そうさ、あの時誓ったんだ。
魔力が無くなっても、最後まであきらめないで戦うって……

「フィル……」

そう言ってフェイトさんは、俺にキスをしてきた。
しかも、深いキスを……

息継ぎのため、唇を離すと……

「フィル……キス……しよ……この不安を消して……例え離れても、心がつながっているって思えるように……いっぱい……いっぱい……しよ……」

フェイトさんは不安な表情でいっぱいだった。

そうだよな……俺だって不安でいっぱいなんだ。フェイトさんはそれ以上に不安なんだ。

「いいよ……いっぱいしよう……お互いのぬくもりを……いっぱい感じたい……」

「うん……」

俺たちはお互いが気持ちが一つと思えるように、そして……深くつながっていると思えるよう……キスをした……

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　医務室

現在、ヴィータがシャマルから検診を受けていた。
先の襲撃事件でゼストとやりあった事で、外傷はなかったが、身体にかけられた負担が馬鹿になっていない事がわかったからだ。

「シャマル、まだか？」

「うん、もうちょっと……」

「仕事たまってんだよ。さっさと済ませて戻らねーと」

「あと少しだから、じっとしてて！！」

「傷の治りが遅くなってるのとか、蓄積ダメージが抜けづらくなってんのなんて、もう何年も前から分かってることじゃんかよー」

「……再生機能だけじゃないのよ。守護騎士システムそのものの異常も不安なの。私たち同士の相互リンクも弱くなってるし、緊急時のはやてちゃんからのシステム復旧とか、魔力供給も……だんだん出来なくなってきてる」

以前からあったけど、さらに低下してしまっている。

このままじゃ、何かあったら……

「別に、そんなの日頃からしっかりやってりゃ何の支障もねぇ。もういいな……いくぞ……」

「ヴィータちゃん……」

「……あたしらの身体の異常さ、多分これ、守護騎士システムの破損とか異変とか、そういうんじゃねぇと思うんだ……あたしたちが闇の書の一部だった頃から、心のどこかで望んでたことが叶い

始めてんだ。……死ぬこともできずに、ただずっと生きてきたあたしたちが、最後の主の、はやての下で、限りある命を大切に生きられるようにって……」

「初代リインがあたしたちにくれた大切な贈り物……それの続きさ。いいじゃんか、ケガしたら中々治らねぇのも、やり直しがきかねぇのも。なんか普通の人間みたいでさ」

「……シグナムもザフィーラも同じこと言うのよね。最初で最後の私たちの命。大切に……だけど精一杯使って生きればいいって……」

「私も同じよ。危険は怖くないし、永遠になんて興味ない……」

「でもね。私たちの優しい主、はやてちゃんの事と同じくらい、私はヴィータちゃんやシグナム、ザフィーラたちの事が心配。みんなで一緒に、誰もいなくならずに、はやてちゃんとリインちゃんの事、ずっと支えていきたいから……」

モニターウィンドウを全部閉じたシャマルは、ヴィータに歩み寄り、かがんで視線を合わせながら、その小さな身体をギュッと抱きしめた。

「なら、心配ねぇ。二代目祝福の風が、リインが力を貸してくれる。あたしとシグナムは絶対に墜ちねぇ。ザフィーラもすぐに目を覚ます。十年の間に、守らなきゃならねぇものがずいぶん増えちまってな……キッチリ全部守って、ちゃんと元気で帰ってくるさ。心配性

で料理の下手な湖の騎士を泣かせたりしないようにな……」

「……ばかね……」

＊　　＊　　＊　　＊

クラナガンから戻ってきたスバルとギンガは、ティアナ達と合流していた。

「あっ、ティア、みんな」

「ティアナ、みんな」

「スバルさん、ギンガさん、お帰りなさい」

「怪我……大丈夫……」

「あと、マッハキャリバーの方は……」

「うん、あたしもマッハキャリバーも無事完治」

完治したことは、スバルの手に輝くマッハキャリバーが証明してい

た。
直後、艦内は警報音と警告灯の赤い光に包まれた。

＊　　＊　　＊　　＊

「くそ！！　魔法が通りづらい！！」

「対フィールド弾を撃てる奴、固まって迎撃！！　地上指令隊！！
指令隊！！　応答しろ！！」

山岳丘陵地帯の深い森の中に建造された、アインヘリアル一号機。
その巨大な魔導砲は、周辺地域もろとも、大量のガジェットによる
猛攻を受けていた。

レジアスがアインヘリアルを推進しない理由の一つは、これだ。ア
インヘリアル自体の攻撃力は高くても、あくまで固定砲台であるが
故に、後方支援的な役割しか果たせず、そのものを攻められたら弱
いのだ。いざ攻められれば、逃げると言う選択肢は無く、防御に徹
して守り通さなければならないが、基本、どうしても篭城戦のよう
な形になってしまうので、ガジェットのような数にものを言わせる
相手に攻められれば、ご覧の有様である。
こんな時のための三機同時配備、だったはずなのだが……同時に攻
撃を受けたのでは、何の役にも立たなかった。

警備部隊の隊長が通信した先、一号機よりも標高の低い、ガレ場付
近に建造された三号機周辺では、警備部隊が、既に全滅していた。

これでは通信に応答できるはずも無い。

戦闘機人が殆どいないとはいえ、ガジェットの大量投入で充分おつりが来るのだ。

＊　　＊　　＊　　＊

スカリエッティ・ラボ

ガジェット達がアインヘリアルを破壊している様子を見ている二人の男女。

スカリエッティとウーノ

「いよいよ、夢が叶うときですね」

「ああウーノ……聖王の器も見事な完成を見た」

「この聖王のゆりかごを発見し、触れることが出来て以来、この起動はあなたの夢でしたから……そのために聖王の器たる娘を捜し求め、準備も整えてきた」

「まだまだ、夢の続きはこれからなんだよ。古代ベルカの英知の結晶。ゆりかごの力を手にしてこれから始まるんだ……」

「誰にも邪魔されない。楽しい夢の始まりだ！！」

……と、その時

「私たちの方に、侵入者？」

研究所の防衛システムが、異変を知らせてきた。

＊　　＊　　＊　　＊

研究所内で、猟犬の透明なシルエットが数匹、防衛システムによって攻撃され、霧散していた。

「こんな、洞窟の奥に？」

透明な猟犬が突入した、周囲を森に囲まれた入口に、おかっぱの女性と白スーツの男性。
聖王教会シスター、シャッハ・ヌエラと、管理局査察官ヴェロッサ・アコース。

「僕の猟犬を発見して、その上、一発で潰した。並のセキュリティじゃない、ここがアジトで間違いないね」

「すごいですね、ロッサ。こんな場所、よく掴めました」

「シャッハ……いい加減、僕を子供扱いするのは止めて欲しいな。これでも一応、カリムやはやてと同じ、古代ベルカ式の、レアスキル継承者なんだよ」

「無限の猟犬、ウンエントリヒ・ヤークト。貴方の能力は存じ上げていますよ」

「……ま、今回の発見は、フェイト執務官や、ナカジマ三佐の部隊をはじめ、協力してくれた地上部隊の、地道な捜査があってこそのものだけどね……ん？」

茂みや森の中に隠して配置されていたガジェットが、二人の周囲を取り囲んだ。

「……奥からも出てくる」

「大人しく帰してくれる気はなさそうですね」

「あんまり戦闘は得意じゃないけど……まあこのくらいなら」

「お任せください」

私はヴィンデルシャフトを起動させ、戦闘態勢に入った。
私の役目はカリムとロッサを守ることだから……

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　ブリッジ

「アインヘリアル一号機、二号機、ガジェット撤収が始まっています」

メインオペレーター席から、シャーリーの報告が上がった。

「前回よりも、動きが早い」

「早めに叩かんと、取り返しのつかんことになるけど……嫌な感じに拡散してる。隊長たちの投入はしづらいなあ」

ガジェットの動きを見ながら動的に作戦を練るグリフィスとはやて。その時、シャーリーの手元では、パネルのボタンが点滅し、緊急入電を示していた。

「アコース査察官から、直通連絡！！」

『はやて、こちらヴェロッサ。スカリエッティのアジトを発見した。シャッハが今、迎撃に来たガジェットを叩き潰してる。教会騎士団からも戦力を呼び寄せてるけど、そっちからも制圧戦力を送れるかい？』

「ああ……もちろんやけど」

『廃棄都市から別反応、エネルギー反応増大！！』

操舵室でアースラを操縦しながら管制補助をしている、ルキノから通信が入る。

『これは……巨大な竜!!　大変です!!　まっすぐ地上本部に向かってます!!』

『映像が、今』

廊下を移動中だった俺とフェイトさん、なのはさん、スバル、ティア、キャロとルーテシアは、足を止めてモニターウィンドウを見ていた。

切り替わった画面に現れたのは、巨大な黒竜の姿だった。

その姿に驚いたのはキャロとルーテシアだった。

「あれは……まさか!!」

「フレイム……グロウ……」

「キャロ、ルーテシア、何だ、そのフレイムグロウというのは？」

「はい、私も言い伝えでしか知らないんですが、ロストロギアに封じられた邪悪な竜。それがフレイムグロウなんです」

「しかも……あれはこのミッドの山奥深くに封印されているはず……いったい誰が……まさか!!」

「クアットロのヤツしかいない……戦闘機人がいなくても良いという言葉はこういう事だったんだ……」

「フィル……」

＊　　＊　　＊　　＊

スカリエッティ・ラボ入口前

撃破したガジェットの残骸が、これでもかと言うほどに散乱していた。
にもかかわらず、さすが本拠地だけって、増援が緩むような気配は無い。

「……まだまだ来るよ。ここにとどまるのはキツいかな」

「なんの、まだまだ」

二人とも、疲れた様子は全く無いが、これだけの膨大な量を捌くとなると、さすがに精神的にきついものがある。
そのとき、あたりが激しく揺れ始め、大地が唸るような地響きが鳴り始めた。

「さあ……いよいよ復活の時だ」

『私のスポンサー諸氏。そして、こんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う、聖王教会の諸君。見えるかい？　これこそが君達が忌避しながら求めていた、絶対の力』

地震がいよいよ激しくなり、そこかしこに地割れが起きた。と思ったら、森の一部分を切り取ったかのように、地面がせり上がる。付着した木や岩をバラバラと振り落として姿を現したのは、魔力で浮遊する、全長数千メートルにも及ぶ、超巨大機動要塞。

その様子はスカリエッティの手によって、世界中に配信されていた。

『旧暦の時代。一度は世界を席巻し……そして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知』

「聖王の……ゆりかご」

シャッハを抱きかかえて上空に逃れていたロッサが、戦慄しながら呟いた。

『見えるかい？　待ち望んだ主を得て、古代の技術と英知の結晶は、今、その力を発揮する』

アースラのなのはの元にも、その様子は届いていた。
聖王のゆりかご、玉座の間。
その椅子に座っているのは……ヴィヴィオ

「ママ……パパ……あっ……いたいよ……こわいよ……ママァァ……パパァァァ！！」

「ヴィヴィオ……」

「うっ……あああ……うわぁぁぁ……」

『さあ。ここから夢の始まりだ！！　わはははははは！！　うわはははははははははははっ！！』

ヴィヴィオの悲鳴になのはさんは身体を震わせて、レイジングハートを握りしめていた。

『どうかしら、フィル・グリード。高町なのは。フェイト・T・ハラオウン。自分の娘の悲鳴は～』

「「「クアットロ！！」」」

スカリエッティの画面と別にクアットロがスクリーンに現れた。
こっちの回線を傍受しやがったのか！！

『最高の気分ですわ。ゆりかごも復活しましたし、それに伝説級の竜も復活させられましたし～』

「やっぱり貴様が原因か！！」

『苦労しましたわ。保管場所を見つけるのに、ずいぶん念入りに封印してあったんですもの。でも、封印していた人間を始末してやっと手に入れましたわ～』

始末しただと……どこまで人の命を奪えば気が済むんだ！！

『そんなことはどうでも良いんですの～　いかがかしら、中々の音

楽でしょう。少女の悲鳴というのは～』

黙れ……

『題名はそう……【悲劇】なんてどうかしら。娘が奪われ、その思いも届かず、こうやって悲鳴を上げているんですものね。最も、私にとっては快感なんですけど～　あはははははっ！！』

「「黙れ！！」」

もう我慢の限界だった。
俺とフェイトさんはクワットロの画面に、プラズマランサーをぶち込んだ。
映像なのでダメージなんかはありはしない。
でも、もう怒りを抑えるのは無理だ。

『あはははっ！！　その顔、最高ですわ。フィル・グリード』

「……ゆりかごで待ってろ。必ず……殺す！！」

「スカリエッティ、お前もだ！！　私が決着をつけに行く！！」

『これるものならきてもらいましょうか。フィル・グリード。フェイト・T・ハラオウン。お待ちしてますわよ。あはははっ！！』

『我々はゆりかごで待つよ。だが、その貧弱な戦力でどこまで出来るか楽しみだよ。ふふふふっ……あはははははっ！！』

そう言い残し、スカリエッティとクアットロの画面は消えた。

# 第１９話　無限の欲望

「巨大船、地上より浮上！！」

「まさか、これは！！」

聖王教会本部、カリム・グラシアの執務室。
シャッハが出払っているため、代わりに護衛の任に就いている二人の教会騎士が、驚きの声を漏らした。
カリムと二人の騎士が見ている画面の中では、土ぼこりを巻き上げながら、浮上する巨大要塞の様子が、映し出されている。
その現場の間近にいるシャッハから、通信が入ってきた。

『騎士カリム。これがフィルが言っていた……』

「踊る死者たち。死せる王の下、聖地より還った船。古代ベルカ、聖王時代の……究極の質量兵器。天地を統べる聖者の船」

「聖王の……ゆりかご」

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　ブリッジ

「一番なってほしくない状況に、なってもうたか……」

アースラブリッジの艦長席で彼女の目の前のウィンドウは、聖王教会のカリムと通信が繋がっている。

『教会の……ううん、私の不手際だわ。予言の解釈が不十分だった！！　さらにフィルからの情報で、ゆりかごのことは分かっていたことなのに！！』

「未来なんて、わからへんのが当たり前や。カリムや教会の皆さんのせいとちゃう……さて、どないしよか」

私が頭の中に色々な考えを巡らせていると、もう一つ、通信ウィンドウが開かれた。

『はやて……クロノだ……』

「クロノ君!!　通信機能が回復したんか!!」

『ああ……何とか本局のコンピュータと通信機能は、何とかなった。だが、次元航行艦隊の方は、目処は立たない状態だ』

「そっか……やっぱ援軍は、無理か」

『残念ながら、本局の機能を回復させるのに精一杯だ。ゆりかごに対しては、君たちが中心となり、地上部隊と連携を取って、事態にあたる。多少の無理はかまわない』

「行けるか……はやて……」

「うん」

＊　＊　＊　＊

時空管理局　本局内某所

最高位の機密レベルに属する、闇に満ちた空間。
立ち入りの出来る人間の極めて限定されたその中で、人の話し声が響いていた。

本局内にあってこの場所は、各機関と独立しているため、今回のサ

イバーテロの被害には全くの無傷だった。
螺旋を描いた配管に支えられ、ぼんやりと光る三本のシリンダー

時空管理局、最高意思決定機関　最高評議会

「……ジェイルは、少々やりすぎたな」

「我らが求めた聖王のゆりかごも、奴は自分の玩具にしようとしている」

「止めねばならんな」

「だが、ジェイルは貴重な個体だ。消去するにはまだ惜しい」

「しかし、かの人造魔導師計画のゼストは失敗し、成功には至らなかったが……聖王の器は、完全な成功のようだ。そろそろ、良いのではないか？」

「我らが求める、優れた指導者によって統べられる世界。我らがその指導者を選び、その陰で、我らが世界を導かねばならん」

「そのための生命操作技術、そのためのゆりかご」

「旧暦の時代より、世界を見守るために、我が身を捨てて永らえた

が……もうさほど長くは保たぬ」

「だが次元の海と管理局は、未だ我等が見守ってゆかねばならぬ」

『……失礼します』

音声オンリーの通信ウィンドウが開き、そこから女性の声が聞こえてくる。

「ゼストが五体無事であればな。ジェイルの監視役として最適だったんだが」

新しいウィンドウが開かれ、そこにはゼストの顔写真が表示されていた。

現在、ゼストや戦闘機人が捕まったことは本局には連絡は入れてない。

とある人物の知恵で連絡をあえて入れなかったのだ。

この事を知っているのは、機動六課と極一部の人間だけである。

構わず話を続ける評議会の三人のところに、制服姿の印象の酷く薄い女性が、滑るように動く浮かぶ板に乗ってやってきた。

「皆様、ポットメンテナンスのお時間ですが」

「ああ、お前か」

「会議中だ、手早く済ませてくれ」

「……はい」

「お悩み事のようですね」

メンテナンスに来た女性局員が、ポットのパネルを操作しながら言った。

「なに、瑣末な厄介ごとよ」

「お前が、気に掛ける事でもない」

「……はい」

「レジアスや地上からは、何の連絡も無いのか？」

「ええ……未だに、どなたからも」

「そうか。しばらくは慌しくなりそうだ。お前にも苦労をかけるな」

「いいえ。私は望んで、ここにいるのですから」

女性局員は、うっすらと、そしてどこか含みのある笑みを浮かべながら、答えた。

＊　　＊　　＊

アースラ

ブリッジと会議室は通信で繋がり、恐らくこの事件において最後の大規模な出撃になる。

現在、作戦の最終確認を行っていた。

メンバーは、部隊長のはやてと、フィル、スターズ分隊、ライトニング分隊のフルメンバー、リインと、輸送部からアルトが参加している。

『今回の発端は、最高評議会がジェイル・スカリエッティを利用しようとして、逆に裏切られたことから始まった。どこからどこまでが誰の計画で、なにが誰の思惑なのか、それはわからへん』

『……そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中に大量のガジェット

と巨大な竜が現れて、市民の安全を脅かしてる……これは事実。私たちは、これを止めなあかん』

「ゆりかごには私達が向かう。地上のガジェットは、各部隊が協力して対応に当たる」

「だけど、高レベルなＡＭＦ戦をできる魔導師は多くない」

正直、地上部隊にＡＭＦ戦が出来る魔導師は少ない。
そのことを危惧してレジアス中将は、非魔導師でも戦えるように訓練や装備を考えていたのだが、結局間に合わず、戦えるのは中将の特殊部隊くらいになってしまった。

「だからわたし達は、ゆりかごと地上、二グループに分かれて、各部署に協力することになる」

ただでさえ少ない戦力を分散させるのは賢いやり方とは言えないが、この状況ではやむをえないだろう。
アジトの方は引き続き、聖王教会が中心となって担当する。

本局の応援がない今、六課の方はこれ以上戦力は分散できない。

「フェイトさん！！」

「フィルさん！！」

「あの……」

私達は作戦会議が終わり、会議室から出ようとしたが、キャロとルーテシアとエリオの三人に、心配そうな表情を浮かべながら、後ろから呼び止められた。

「別グループになっちゃったね。ごめんね……私、いつも大切な時に、二人のそばに居られないね」

フェイトさんはエリオとキャロの肩を、俺はルーテシアの肩を抱き寄せた。

本当は俺もみんなと一緒に行動したかった。

ましてエリオ達は、この戦いで死んでしまったんだ。

あの時の悲劇はもう繰り返したくない。

さらに今回はあの黒竜が相手なんだ。

「そんな……」

「フェイトさん、フィルさん……たった二人で、スカリエッティのところになんて、心配で……」

「ドクターも、クアットロも、本当に危険……どんな罠を仕掛けてるか……」

作戦会議の結果、フォワードチームは地上本部へ侵攻中の黒竜に対応。
はやてがアースラでゆりかご周辺の制空権の確保。
シグナムは、何かあったときのため地上に待機。
なのはとヴィータはゆりかごに突入して、内部から停止または破壊。

そして私とフィルは、なのは達とゆりかごに突入はするが、その後はスカリエッティとクアットロの討伐。

この任務で最も危険な位置にいるのが、私とフィル。

「緊急事態のために、シグナムには地上に残ってもらいたいし、フィルも一緒だよ。一人じゃない……三人とも頑張って。絶対無茶とかしないんだよ!!」

「エリオ、キャロとルーテシアのこと、しっかり守ってやれよ。いいな……」

「はい……」

「それは、フェイトさん達もですよ……」

「そうですよ。フィルさん……」

＊　　＊　　＊　　＊

『第1グループ降下ポイントまで、あと3分です』

ルキノさんのアナウンスが、艦内に響く。

ティア以下フォワードチーム六名と、俺となのはさんとヴィータ副隊長は、発進口前で出撃の準備を完了させていた。

アギトは秘密任務のため、地上に降りている。

「今回の出動は、今までで一番ハードになると思う」

「それに、あたしもなのはもフィルも、お前らがピンチでも助けに

いけねぇ」

「みんな、目をつぶって今までのことを思い出してみて。ずっと繰り返してきた基礎スキル、磨きに磨いたそれぞれの得意技、痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になっても繰り返してきたフォーメーション練習、いつもボロボロになるまでわたし達とやった模擬戦……」

フォワード全員、今までのことを思い出して、本当にきつい思い出ばかりよぎっていた。

「目、あけて良いよ。まぁ、わたしが言うのも何だけど、きつかったよね……」

「「「「「あ、あはは……」」」」」

あれはきついなんてもんじゃない。
そんな言葉では片付けられない、一種の地獄だったぞ……

「それでも、ここまでよくついてきた」

「六人とも誰よりも強くなった……とは、まだ言えないけど……」

「「「「「「うぅ……」」」」」」

「だけど、どんな相手がきても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた。守るべきものを守れる力、救うべきものを救える力、絶望的な状況になっても立ち向かっていける力、ここまで頑張ってきたみんなはそれがしっかり身についている。夢見てあこがれて、必死で積み重ねてきた時間、どんなに辛くても止めなかった努力の時間は、絶対自分を裏切らない！！　それだけ、忘れないで……」

「キツイ状況を、ビシッとこなして見せてこその、ストライカーだからな」

「「「「「「はい！！」」」」」」

「フィル、最後にみんなに一言お願い……」

「えっ？　俺ですか？」

「うん……フォワードのみんなとは、別行動になっちゃうでしょう。だからお願い……」

「……わかりました」

なのはさん達があいう励ましをしたのなら、俺がみんなに言えることはたった一つだけだ。

「……俺からティア達に言うことは……死ぬな……だ…」

「「「「「「えっ？」」」」」」

「……もう……誰にも死んで欲しくない……あんな思いをするのは、俺だけでたくさんだ！！」

「「「「「「フィル（さん）……」」」」」」

そうさ、何も残りはしないんだ。
残されるのは悲しみだけ……

「だから、みんな。絶対生きて、このアースラに戻ってくるぞ！！いいな！！」

「「「「「「おう！！」」」」」」

「うん」

「だな」

「機動六課、フォワード隊出動だ！！」

「「「「「「うん　（はい）！！」」」」」」

ティア達は待機している戦闘用ヘリに向かったが、スバルだけが残っていた。

「先に……行ってるね……」

なのはさんとヴィータ副隊長は先に立ち去った。

「どうした？　もうみんな行ってたぞ……」

「うん……」

「ヴィヴィオのことは心配するな。必ず助けるからな……」

「違うの！！　ヴィヴィオのことも心配だけど、それより、あたしは……フィルのことが心配で……」

「ありがとう……でも大丈夫だ。一番心配だったのは、今回の戦いに参加できないことだったんだ。でも、何とか戦えるようになった。現場に出ることが出来れば、後は何とかなるからな……」

俺はスバルの頭を、多少乱暴気味になでていた。

「ちょ、ちょっとフィル！！」

「それとお前も、六課自慢のフロントアタッカーの一人なんだぞ。俺が作ったマッハキャリバーで思う存分暴れてこい！！」

「うん！！」

俺たちは互いに握り拳を作り、それをコツンとぶつけあった。

＊　＊　＊　＊

六課襲撃の時に破壊されてしまったＪＦ７０４に代わり、この戦いのために用意された戦闘用ヘリＪＦ７０５　ＸＸ　。

そのカーゴルームで、クロスミラージュを確認しながら、あたしは出撃の時を待っていた。

第三形態、長距離特化型のブレイズモード。

苦しい訓練の末、なのはさんからお墨付きをもらえ、何とか実戦投

入が可能になった。

そんな時、カーゴルームに、スバルが泣きながらやってきた。

「……出動前に、何、泣いてるのよ……」

「フィルに頑張ってって……ぐすっ……言おうと思ったのに……ぐすっ……」

「逆に、あいつに励まされて帰ってきた？」

「うん……」

「馬鹿ね……こうなるって事は、少し考えれば分かることでしょう。あいつの性格を考えればね……」

「うん……」

＊　＊　＊　＊

ミッドチルダ上空

雲上を滑るように飛ぶ艦、アースラ。
フォワードチームを乗せた赤い戦闘用ヘリが出動し、アースラから離れ、雲海に突っ込んでいた。

「ほんなら、隊長陣も出動や！！」

「「うん！！」」

「おう！！」

「はい！！」

「みんな……本局艦隊がいない今、私とリインは全体の指揮をしなければならない……そやから、一緒に戦うことができない……」

悲痛な表情ではやてさんは俺たちに言った。

「その代わり……アースラは……みんなの帰ってくる場所は、私が必ず守る！！　だから絶対に帰ってくるんやで！！」

「「「「はい！！」」」」

そして第二降下ポイントに到達し、隊長陣は既にスタンバイを終えていた。
これが最後の戦いだ。
いや……最後にしなきゃいけないんだ！！
俺たちが倒れるか……クアットロが破滅するかだ！！

『降下ハッチ、開きます』

ハッチが開くと同時に、ピンク、金、赤、白、四色の光が、アースラ底部から大空に躍り出た。

『機動六課隊長、副隊長一同……能力限定、完全解除！！　はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん、そして……フィル。皆さん……どうか！！』

聖王教会でカリムさんが、機動六課隊長陣のリミッター解除プログラムを展開した。
いつかクロノ提督の権限で行ったのとは違う完全解放だ。
フェイトさんのは、完全解除されているので必要はない。

「迅速に解決します」

「お任せください」

『リミット、リリース！！』

解除プログラムの中心を人差し指で押したのと同時に、空を流れていた四条の光が、爆発的な光量を放つ。

その閃光が収まると、四人はバリアジャケット姿に変身していた。

「エクシード……ドライブ！！」

「フリーダム……フルドライブ！！」

《《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！》》

なのはさんと俺は、それぞれフルドライブを起動させ、バリアジャケットをチェンジした。

デバイスの方も、なのはさんはエクシードモードに、俺はプリムをブレイズモードにしていた。

「なのは、フィル……」

「フェイトちゃん　（さん）？」

「なのはとフィルのリミットブレイク……ブラスターモード。二人とも言っても聞かないだろうから、使っちゃ駄目とは言わないけど……お願いだから、無理だけはしないで……」

なのはと違って、フィルは魔力が少なくなってるから、術者にかかる負担はかなり大きい。
しかも、フィルは、なのはには無いシステムも付けている。

「わたしは、フェイトちゃんの方が心配……」

「ええ、フェイトさんとバルディッシュのリミットブレイクだって、高性能な分、危険も負担も大きい……」

「私は平気……大丈夫……」

「む……もう、フェイトちゃんは、相変わらず頑固だな……」

「まったくだ……」

「な、なのはやフィルだって、いつも危ない事ばっかり！！」

「だって、航空魔導師だよ。危ないのも仕事だよ。フィルも、それは分かってるし……」

「だからって、なのはとフィルは無茶が多すぎるの！！　私が、私たちがいつも、どれだけ心配してるか」

「知ってるさ……ずっと心配してくれてたこと、よく知ってる」

「だから、今日もちゃんと帰ってくる。ヴィヴィオを連れて、一緒に元気に帰ってくる」

「なのは、フィル……うん！！」

「そろそろスピードアップするぞ。フェイト隊長もフィルも無茶するなよ……」

「頑張ろうね、フェイトちゃん、フィル」

「うん、頑張ろう」

「ええ、頑張りましょう」

俺たち三人は、拳をコツンと合わせた後、ゆりかごに向けて、更なる加速に入った。

悲しい出来事、理不尽な痛み、どうしようもない運命、そんなのは嫌いで、認められなくて、打ち抜く力が欲しくて、わたしはこの道を選んで……

同じ思いを持った子達に、技術と力を伝えてく仕事を選んで……

この手の魔法は大切な物を守れる力、思いを貫き通すために必要な力……

「見えた！！」

「あれが……」

「ゆりかご……」

「ついに捕らえたぜ……クアットロ！！」

待ってて……ヴィヴィオ

＊　　＊　　＊　　＊

時空管理局本局内某所

脳だけの姿になった最高評議会の三人がいる空間に、ガラスの割れるような音が二度響いた。
培養液が床一面にこぼれ落ち、シリンダーの中に浮かんでいた脳髄は、床に落ちた衝撃で、あたりに散乱していた。
ポットのメンテナンスをしていた女性局員の右手には、鋭い鈎爪が装着され、そこからも培養液が滴り落ちていた。

「な、何故！！　何故だぁぁぁぁ！！」

メンテナンスを行っていたはずの女性が、いきなり鈎爪でポットを破壊したのだ。
一つだけ残されたポット……評議会議長は、何が起きているのか理解できないかのように叫ぶ。
女性局員は、感情の乏しい声で答えた。

「……ご老体に無理をされては、良くありませんからね。そろそろ、

お休みを」

「貴様は、ジェイルの！！」

やっと気付いたか、とでも言いたげな薄い笑みを浮かべる女性局員。
その身体の輪郭に、別のシルエットが重なったかと思うと……一瞬にして、その姿は別のものに書き換わっていた。
水色を基調としたボディスーツ、首のプレートに刻み込まれた？の文字。
元ナンバーズ2番、ドゥーエだった。

「正確に言えば、もうドクターのではありませんけどね。私は……」

「何だと！！」

「今は、たった一人の大切な人のために動いてるわ。私は闇、そう光を支える闇ですね……」

ユーノ司書長、独断で行動してごめんなさい。
でも、この事だけは決着を付けなくてはいけないの。

ジェイル・スカリエッティを生み出し、世界を自分たちの都合の良いようにしようとした。
こいつらだけは、私の手で始末を付けなきゃならなかった……

「貴方が見つけ出し、生み出し育てた、異能の天才児。失われた世界の智慧と、限りなき欲望をその身に秘めた、アルハザードの遺児。開発コードネーム、アンリミテッド・デザイア……ジェイル・スカリエッティ。彼を生み出し、利用しようとした時点で、この運命は決まっていたのですよ。どんな首輪を付けようと……いかなる檻に閉じ込めようと。扱いきれるはずもない力は、必ず破滅を呼ぶものです」

そしてドゥーエは、清々しい笑みを浮かべた。

「ようやく、枷から解き放たれる時が、やってきました」

「馬鹿な!!　馬鹿なっ!!」

「おやすみなさい……永遠にね!!」

ドゥーエは静かに、鈎爪を装着した右手を振り下ろした。

＊　＊　＊　＊

ゆりかごの周辺では、空戦魔導師とガジェットで、激しい空戦が行われていた。
ミッドに残った空戦魔導師を総力で集めて戦っていた。

「魔導師部隊、陣形展開!!　小型機の発着点を叩いて!!」

フェイトさんの指揮で、作戦を次のフェイズに移行させていた。

「でぇい!!」

ヴィータ副隊長も、ガジェットを真っ二つにしていた。

「中への突入口を探せ!!　突入部隊、位置報告!!」

桃色と白色の光が戦域を両断する。

砲撃は、その空域に集められたガジェットを爆散させた。

ストレイトバスター
密集隊形をとる敵に対して効果絶大の砲撃。
その効果は伝播し、爆発の連鎖を引き起こす、反応炸裂砲。

これを俺となのはさんはぶっ放していた。

「第七密集点撃破、次！！」

「邪魔者は全部消しとばす！！　だから、さっさと指示してくれ！！」

『は、はい！！』

タイムリミットが迫ってるんだ。
ゆりかごが軌道ポイントに到達したら、全てお終いだ！！

＊　＊　＊　＊

アースラ

なのは達が出撃した後、それを待っていたかのように、ガジェットの大群がアースラを攻めてきた。
その数は測定不能……

アースラの主砲と副砲のおかげで迎撃は出来ているが、これ以上先には進めない。

「ルキノ、ゆりかごが到達するまでの時間、計算できたか」

『はい、軌道ポイントの到達まで……推定、約三時間です！！』

「三時間……」

# 第２０話　最終決戦

ＸＶ級艦クラウディア

何とか修理をし、応援に向かおうとしていたが、思ったより被害が大きく、修理が完了しても、ポイント到達時間には到底間に合わない。

事態への対策を練るため、艦長席にいるクロノは、本局のリンディ、無限書庫のユーノと、通信を繋げていた。

『……ええ。艦隊運用部も通信部も、大騒ぎよ。　ただ、レオーネ相談役が上層部を取りまとめてくれてるし、運用部はレティたちが上手く立ち回ってくれてるから、これ以上の被害は出ないと思う』

「助かります。ユーノ、そっちは？」

『聖王のゆりかごのデータ、さすがにかなり少ないけど、発掘は無事完了。今送るよ』

僕は書庫内から見つけ出したデータを、クロノに転送した。

「ああ。こちらから、アースラに全てに送信する」

『あの船の危険度は？』

『極めて高いです。先史時代の古代ベルカですら、既にロストロギア扱いだった古代兵器。失われた世界、アルハザードからの流出物とも……』

「……アルハザード」

『我が家にとっては、あまり思い出したくない名前だけど……』

『……その真偽はともかくとして、最大の危険は、軌道上に到達される事。軌道上、二つの月の魔力を受けられる位置を取る事で、極めて高い防御性能の発揮と、地表への精密狙撃や、魔力爆撃が可能となるっていうのは、教会の伝承にある通りだけど……こっちの調査では、次元跳躍攻撃や、次元空間での戦闘すら可能とある。その性能が完全に発揮されれば、次元航行隊の艦隊とも、正面から渡り合える。これはフィルが経験したことで立証されている』

『軌道上に上がる前に、止めないといけないのね』

「対抗策は？」

『鍵となる聖王がそれを命じるか、本体内部の駆動炉を止める事が出来れば……』

ゆりかごに突入予定のなのはかヴィータが、駆動炉を破壊する。
或いは……

「……鍵の聖王、ヴィヴィオは、スカリエッティの戦闘機人に、操作されている可能性が高い」

『スカリエッティの殲滅でも、止まる可能性はあるのね？』

『おかあさん、クロノ。スカリエッティの殲滅は、フェイトがやってくれるよ』

『アルフ……』

『フェイトがずっとがんばって、今まで追いかけてきたんだ。きっとやってくれる！！』

＊　＊　＊　＊

ゆりかご　周辺空域

戦線には地上の航空魔導師隊も加わり、戦闘は熾烈を極めていた。
そんな、空戦魔導師たちがガジェットをシラミ潰しに叩いている中、

ゆりかごの砲門が開き、高エネルギーが集中し始めた。

さっきまで街を攻撃していたレーザー砲とはケタが違うエネルギー量だ。

ターゲットは、アースラ!!

「何だ、あの馬鹿でかいエネルギーは!!」

「フィル、あれは何なの？　まだポイントに到達してないのに、あれだけの出力があるなんて!!」

「あれは……まさか!!」

前の時、はやてさん達を消滅させた、悪魔の兵器……

「カイザー……ジャッジメント……」

「何なの、それは?」

カイザージャッジメント……
ゆりかごの主砲で、軌道ポイントに行ったゆりかごが使用すると、
威力はアルカンシェルを遙かにしのぐ。

「くそ!!　奴ら、今あるエネルギーで、アースラを沈めようとしてるんだ!!」

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　ブリッジ

ゆりかごの様子は、こちらのモニターで確認できていた。
ゆりかごに集中しているエネルギーは、命中すればアースラなんて簡単に消し飛ぶ。

「グリフィス君、アルカンシェルは？」

「今からでは間に合いません!!　チャージをするのが精一杯です

！！」

「エネルギーのチャージは、可能なんやな」

「ですが、あっちの方が早いです！！」

計算の結果、ゆりかごの主砲が発射されるのに６０秒、こっちが発射できるのには９０秒かかる。
落ち着け、落ち着くんや…・…

「まだ、逆転の策はある！！　シャーリー、チャージしたエネルギーを、全部プロテクションに回して！！」

「はっ！！　そうか！！」

シャーリーは私の意図が分かり、全速でキーボードを打ち、アルカンシェルのエネルギーを、防御システムに集中させた。

＊　　＊　　＊　　＊

ゆりかご

「ふふっ。まず、最初は還る所を無くしてあげますわ～　自分の無力さを嘆きなさい。フィル・グリード」

ゆりかごの主砲は軌道ポイントにつかないと、最大のパワーは発揮できないが、一発撃つだけでしたら、今でも出来ますのよ。

「カイザージャッジメント、発射ですわ～」

クワットロがキーボードを操作し、起動スイッチを押すと、主砲が発射され、その凶悪な砲撃は、一直線にアースラに放たれた。

「終わりですわ！！」

＊　＊　＊　＊

アースラ　ブリッジ

「高エネルギー体接近！！」

「八神部隊長！！」

「エネルギーバイパス完了！！　これで出力はあがります！！」

「ようやった、シャーリー！！　プロテクション全開！！　総員対ショック防御！！」

「はい！！」

「プロテクション展開！！」

シャーリーの操作で、アースラ全体にプロテクションが展開された。
通常ならこんな防御くらいじゃ防ぎきれないが、今はアルカンシェルに回そうとしたエネルギーもある。
そう簡単には破られない！！

『きゃあああ！！』

「うわぁぁぁ！！」

「みんな頑張ってや！！」

何とかしのぎきったが、ゆりかごの主砲のエネルギーはすさまじく、アースラの所々を破壊している。

『エンジン出力６０％まで低下！！』

『魔力炉出力１５０％オーバー、これ以上の負担には耐えられません！！』

『左舷主砲３番、５番大破！！　右舷後方副砲使用不能！！』

『プロテクションシステム、２番回路、３番回路、ダウン！！』

各機関からブリッジに報告が来ていた。

もうすこしなんや、頑張ってやアースラ。

『あ～ら、しのいだんですの～』

『クアットロ！！』

アースラの通信パネルに、クアットロの姿が映し出された。
その嫌ったらしいしゃべり方、聞いているだけでも反吐がでそうや！！

「あんたらの思うとおりにはならんで！！　アースラを……機動六課を舐めんなや！！」

『そうやって言ってられるのは、今の内ですわ。見ましたでしょう。ゆりかごのパワーは。軌道ポイントにあがればあんな物じゃありませんわ。おほほほほほ！！』

クアットロからの通信は切れた。

＊　　＊　　＊　　＊

「はやてさん！！　みんな！！」

『心配しなくてもええよ……こっちは何とか生きてるよ』

「はやて、本当に大丈夫なの？」

『大丈夫……言ったやろ、アースラは必ず護るって……』

「はやてちゃん……」

『なのはちゃん、フェイトちゃん、フィル、こっちのことは心配しないで、みんなはゆりかごを止めることに専念してや！！』

『高町一尉、奥へ進めそうな突入口が見つかりました、突入隊二十名が先行しています！！』

ヴィータ副隊長と合流して、突入口を検索していた俺となのはさん達の元に、通信が入った。

「フェイトさん！！」

『外周警戒は航空部隊の方で引き受けます。六課の皆さんは突入してください！！』

「おう」

「了解」

「お願いします」

「機動六課、スターズ1、2、ライトニング1、ライトニングスター0、内部通路突入」

壁をぶち破ってゆりかご内に突入した機動六課メンバー。
出た場所は天井の高い、通路で、まず着地するために速度を緩めたところで、なのはさんの足元に発生しているフライヤーフィンが大きく揺らぐ。

「ＡＭＦ！！」

「内部空間、全部に？」

「フィル！！」

「分かってますよ！！　プリム！！」

《了解です！！》

俺たちはそれぞれ魔力を集中させ、館内廊下に着地した。

この程度のＡＭＦで、今更驚きはしないよ。
俺たちがこの程度のこと、予測してないと思っていたか！！

＊　　＊　　＊　　＊

廃棄都市区画

降下ポイントまであと一歩……というところだったが、ガジェット？型に捕捉されてしまったＪＦ７０５。
最新鋭の戦闘用ヘリでも、飛行タイプであるガジェット？型に比べれば、機動力は確実に劣ってしまう。
どうにかして振り切ろうとしてはいるが、どれも上手くはいっていない。

「ゴメンねみんな、思いっきり揺れるから、しっかり捕まってて！」

アルトは何の躊躇も無く、ビル街にヘリを突っ込ませた。
その甲斐があり、何とがガジェットは振り切ることが出来た。

「よし、振り切った！！」

「アルト、すごい！！」

『ありがとうスバル。さぁ、降下ポイントについたよ。みんな準備は良い！！』

「「「「「「「「おう　（はい）！！」」」」」」」」

後部ハッチが開き、降下準備が完了する。
同時に、最終ブリーフィングをした。

「確認するわよ。あたし達はミッド中央、市街地方面、敵戦力の迎撃ラインに参加する。地上部隊と協力して、あの黒竜を叩く。それがあたし達の仕事」

「他の隊の魔導師はＡＭＦ戦の経験がほとんど無い。だからあたし達がトップでぶつかって、とにかく向こうのガジェットを叩いて戦力を削る！！」

「私達があの黒竜を止めれば、後は迎撃ラインで何とかしてくれる。そこまでが勝負ね……」

「でも、なんだか……ちょっとだけエースな気分ですね」

「そうね……任務のランクもエース級になっちゃたけどね」

伝説のロストロギア、フレイム・グロウ
そんなの相手にしなければならないんだから、正直厳しいとしか言えない。

本来なら、なのはさんとかエース級の魔導師が必要な任務だ。

「ガジェットも黒竜も迎撃ラインを突破されたら、市街地や地上本部まで一直線です！！」

「ガジェットは何とかなっても……あの黒竜を行かせたら、大惨事になる……」

「絶対行かせる訳にはいかないよね」

「そして、あの黒竜に対してだけど、キャロ、ルーテシア、二人とも外に出たら、それぞれフリードとガリューを召還して黒竜に対応。召還時間が短いヴォルテールと白天王は最後の切り札よ。出来るだけ温存して」

本当は一気にカタつけたいんだけど、ヴォルテールと白天王は最大級の召還魔法のため、短時間しか召還してられない。

「ギンガさんとスバルはガジェットを叩きつつ、キャロのフォロー。エリオはルーテシアのフォロー。そしてあたしはサンダーで降下して、全体の様子見ながら、みんなの指揮をするわ。状況が変わったらその都度指揮するから……」

「了解、お願いね。ティアナ」

「じゃ、みんな行くわよ！！」

「「「「「「Ｇｏ！！」」」」」」

ヘリの後部ハッチから、７つの光が廃棄都市に舞い降りる。
高架道路に着地するスバルとギンガ。
顕現したフリードとガリュー、フリードの背に乗るエリオとキャロとルーテシア。
そしてスーパーサンダーに乗って着地したティアナ。

『グォォォォォン！！』

その叫び声ですべてを飲み込もうとするプレッシャー。
膨大な魔力の余波を周囲に撒き散らした
巨大な黒き竜。フレイム・グロウ

ガリューを召還した私は、さっきからプレッシャーに押しつぶされそうになっていた。

怖い……こんなこと、今まで思わなかったのに……
なのはさん達やフィルさんのいない状況で……
そんなときエリオが私の手をぎゅっと握って……

「エリオ？」

「ルーのことは僕が絶対に護るから……僕はフィルさんみたいに力は無い。でも、ルーのことを護りたいって気持ちは誰にも負けないから……」

「エリオ……ありがとう……」

「ルー……」

「ガリュー、あの竜に突撃する！！　僕に力を貸して！！」

『了解だ。いくぞエリオ』

エリオはストラーダを、ガリューは爪を構え、攻撃態勢になり突撃した。
しかし、二人の攻撃は全く効かず、竜は傷一つ付いてない。

「スバル！！」

「うん！！」

「「ディバインバスター！！」」

二人のディバインバスターは命中するが、やはりダメージは与えられなかった。

「フリード！！　ブラストレイ！！　最大火力！！」

『ガアアアアア！！』

「「キャアアアア！！」」

最大火力のブラストレイで攻撃したが、黒竜からそれ以上の火炎がはき出され、逆に押し戻されフリードの背に乗っていた二人が、バランスを崩して落ちてしまった。

「キャロ、ルー！！」

エリオがストラーダのバーニア全開にしてるけど、このままじゃ間に合わない。

「サンダー！！」

《分かってますよ！！》

スロットルを全開にし、バーニアを全開にし空中に飛んだ。
何とか空中で二人を助けることが出来た。

「「ティアさん！！」」

「ギリギリセーフって所ね……」

近くの高速道路に着地し、キャロ達はこっちにきたフリードに乗り、また空に戻っていった。

「いい、こんな化け物相手に、バラバラに攻撃しても通じないわ！！　あたし達が持っている力を一点に集中させるわ！！　あたしが弱点を見つけるから、何とかそれまでしのいで！！」

「「「「「はい！！」」」」」

サンダーの全能力を使って、あいつの弱点を調べる！！
みんな、それまで何とか持ちこたえて！！

＊　　＊　　＊　　＊

「アイゼン！！」

「プリム！！」

「「はぁぁぁぁぁ！！」」

ヴィータ副隊長と俺はやってくるガジェットを片っ端から叩いていった。
なのはさんとフェイトさんには魔力と体力の温存のため、俺たちがガジェットを叩いている。

「ヴィータちゃん、フィル、あんまり飛ばしすぎると……」

「うるせぇ……それにセンターや後衛の魔力温存も、前衛の仕事のうちだ」

「そういうことです。二人には最後の戦いのため、出来るだけ温存して欲しいんです……」

「でも、フィルは、かなり魔力を使ってしまったよ。それじゃ……」

フィルの今の魔力量は、推測だけどＡＡＡ－くらいだ。
確かに若干上がっているけれど、それでもかなり使ってしまっている。

今のフィルでは、これ以上は危険すぎる。

「フィル」

「なのはさん？」

突然なのはさんは自分の魔力を、俺に与え始めた。
そしてフェイトさんも同じように自分の魔力を俺にチャージし始めた。

「待ってください！！　二人とも、魔力を少しでも温存してください！！」

「駄目だよ！！　一緒にスカリエッティ達と戦おうっていったでしょう。フィル一人に負担をかけたくないの！！」

「だったらヴィータ副隊長に渡してください！！　俺よりガジェットを叩いてるんですよ！！」

「あたしを舐めんなよ。心配しなくてもおめぇより魔力はあるんだよ。それに今のおめぇは、あたしとそう大差ないんだろ……」

「気づいてたんですね……」

「フェイトちゃんが気づいてるんだよ。教導官のわたし達が気づかないわけ無いでしょう。隠しているつもりでも、魔力の波長は分かるからね。以前の魔力の波長が消えていたから……」

なのはさんの言うとおり、俺の身体から魔力が無くなってしまって魔力パターンは元の通りになってしまった。

「だから今は素直に私達の魔力を受け取って。お願いだから……」

「フェイトさん……」

二人の魔力をもらったおかげで、フルパワー状態に回復することが出来た。

「済みません……結局二人に負担をかけてしまいました」

「気にしないの。ヴィータちゃんとフィルが戦ってくれたおかげで体力は万全だから。魔力を渡したといってもそんなに消費しないから」

「そういうこと。私達は回復系は苦手だけど、これくらいは出来るから……」

「なのはさん、フェイトさん……」

魔力を回復させ先に進もうとしたとき、緊急通信が入ってきた。

『なのはちゃん、ヴィータ、フィル、フェイトちゃん、応答してや。こちらアースラ、八神はやて。駆動炉と玉座へのルートが判明したんや』

ウインドウに展開された情報によると、駆動炉と玉座は真逆方向。
これも以前と違っていた。
前の時は駆動炉は、そんなに離れていなかったのに……

「はやてさん、応援部隊はこっちに回せませんか？」

『正直厳しい状況や。アースラの方も迎撃で精一杯だし、各地から招集しても間に合わへん……』

「……わかりました。スターズ１，２とライトニング１、そしてライトニングスター０、別行動を取ります」

『どういうことや？』

「駆動炉と玉座の他に、スカリエッティ達がいる場所があるんです。俺とフェイトさんはそこに向かいます」

『それしかあらへんな……みんな、絶対生きて帰るんやで！！』

はやてさんからの通信が切れ、俺たちは別行動を取ることにした。

「フィル！！　無茶だよ！！　戦力を分散させるなんて」

「駆動炉と玉座のヴィヴィオ。片方止めただけでは駄目なんです。

どっちも止めないとゆりかごは停止しない。それにスカリエッティ達を始末しないと意味がない。こうしてる間にも、外は危なくなってる」

「でも、ヴィータちゃんもフィルも……ここまでの消耗が」

「だったらあたしが駆動炉に回る。フェイトとフィルはスカリエッティ達をぶっ飛ばして、お前はさっさとヴィヴィオを助けてこい」

「でも……」

「あたしとアイゼンの一番の得意分野、知ってんだろ……破壊と粉砕……鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン、砕けねぇものなんかこの世にねぇ」

グラーフアイゼンを肩に担ぎながら、ヴィータ副隊長は笑っていた。

「一瞬でぶっ壊して、おまえ達の援護に行ってやる。さっさと上昇を止めて、表のはやてに合流だ」

「気をつけて……絶対、すぐに合流だよ!!」

「たりめーだ。あんま余計な心配すんな。それよりもフェイト、フィルのことちゃんと見てろよ。こいつの方が、あたしよりもあぶねぇからな」

「うん……」

ヴィータ副隊長は、なのはさん達に背を向け、艦尾に向かってと歩き始めた。
もう、飛ぶ魔力も厳しいのか……

「じゃ、わたしも行くね……フィル、フェイトちゃん、絶対死んだら駄目だからね！！」

なのはさんもヴィヴィオを助けるため、玉座の間に向かった。

「フェイトさん……俺たちも行こう。あいつの気を感じて、直接飛びます」

「うん」

俺はワープでクアットロの元に向かうため、魔力を集中した。
くそ！！　スカリエッティは分かるが、クアットロは感じ取れない。
迷彩をかけていやがるな。

それだったら、先にスカリエッティを倒すまでだ！！

＊　　＊　　＊　　＊

『スターズ1、玉座の間へ。スターズ2、駆動炉へと向かいました。
ライトニング1とライトニングスター0は、転移で別の場所へ向かいました』

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、フィル……」

悔しい……本当ならみんなと一緒にゆりかごで戦いたい。
でも、今の私はアースラを預かっているんや。
だから、みんな絶対生きて帰ってきてや……

＊　　＊　　＊　　＊

「でぇやあぁぁぁ！！」

駆動炉へ向かったヴィータは、グラーフアイゼンを振り下ろし、進路を阻んでいたガジェット?型を一蹴した。
ペースを上げ、駆動炉のある動力室は、もう目と鼻の先まで迫っていた。

「ここまでくりゃ、もうちょっとだ。カートリッジもまだある、楽勝だ……」

こんな時が一番危険だと言う事を、経験から良く分かっていた。
左手に持っていた未使用のカートリッジをポケットに仕舞うと同時に、勢い良く後ろを振り向いて、横薙ぎにグラーフアイゼンを一閃した。
何もなかったはずのその空間から、金属同士が激しく衝突したような音が響き、一瞬遅れて、アイゼンを振りぬいた射線上にある壁で、爆発が起きた。

「やっぱりそうか……フィルから、聞いていたからな。あたしが死んだ原因をな。この時、後ろから攻撃を受けて、死んだんだったな……冗談じゃねえ、死んでたまったかよ!!」

刃物の手足を持つ鋭角的なフォルムの、多脚生物のような機械兵器

を、アイゼンの一撃で破壊したのだ。

「あの時、なのはを墜としたのは……てめーらの同類か」

もう姿を隠す気はないのか、動力室の方から、ガチャガチャと大量の同型機が迫ってくる。
アイゼンを肩に担いでカッと目を見開き、その瞳の色は、鮮やかなブルーに変貌していた。

「ざけんなよ……一機残らずブッ潰してやらぁ！！」

ゆりかご　軌道ポイント到達まで　あと2時間16分

＊　　＊　　＊　　＊

ゆりかご　玉座

玉座には苦痛の表情のヴィヴィオとクアットロ、ディエチがいた。
クアットロはキーボードを叩いて、ゆりかご内の様子を見ていた。

「この作戦……あまり気が進まない」

「あ～ら、どうして」

これはずっと思っていた。
こんな小さな子供を使ってまで、この船を動かさなくちゃ行けないのか。
そしてそこまでしてやる必要があるのか

「ドクターの言って事は、嘘でまかせですわ～」

「えっ？」

「ドクターの目標は最初から一つだけ。生命操作技術の完全なる完成。それが出来る空間作り。このゆりかごはそのための船であり、実現できる力。まっ、今回の件で何万人か死ぬけれど、百年立たずに元に戻りますわ。ドクターの研究は人々を救う力ですもの～」

「どうしたの～ディエチちゃん。ドクターやお姉様の言うことが信じられなくなっちゃたの～」

「そうじゃないよ……そうじゃないけど……」

この子は関係ないのに……

「何を今更。姿を見る前までは平気でトリガーを引けたのに……ねっ……」

「……ごめん……気の迷いだ……わすれて……命令された任務はちゃんとやる……」

そう言ってディエチはイメースカノンを持って、所定配置に向かった。

「お馬鹿なディエチちゃん。あなたも、捕まったチンク達みたいに、つまんない子なのね」

キーボートを叩いて展開された画面には、突入したメンバーや外で戦っている六課メンバーの様子が映し出されていた。

「うふふふ……なんも出来ない無力な命なんて、その辺の虫と一緒じゃない。いくら殺しても勝手に生まれてくる。それをもてあそんだり、蹂躙したり、かごに閉じこめた虫を眺めるなんて、こぉんなに楽しいのに……ね……」

玉座にはクアットロの高笑いが響いていた。

＊　　＊　　＊　　＊

聖王医療院

『ミッドチルダ東部山中、森林地帯より浮上した巨大船は、未だ上昇を続けています。同時に第七廃棄都市区画方面から、首都クラナガンに向かって、自動機械や巨大な竜が移動中。周辺各区には、緊急避難勧告が出されています。市民の皆様は、案内放送と、管理局員の誘導に従い、落ち着いて避難をして下さい』

一般入院病棟の一角にある病室で目を覚ましたヴァイスは、ベッドから上体を起こしながら、ニュースが放映されていたウィンドウを

閉じた。
ヴァイスと同じく、激しい傷によって入院を余儀なくされていた、
ザフィーラ。
彼もニュースを見ていた。

「目覚めたか……」

「たった今っす……今日は何日の何時っすか？」

「六課襲撃から丁度一週間だ。新たな事件が起こっている。動ける
六課メンバーは全員出動している」

「ヘリ無しですか！！　くそ！！　俺はこんな大事なときに！！」

「ヘリはアルトさんが操縦するって、シグナムさんとアルトさんが
教えてくれたの」

「ラグナ……」

ドアから入ってきたのは、ヴァイスの妹ラグナだった。
彼女の左目には眼帯がしてあった。

「それからフィルさんが、お兄ちゃん怪我して大変だから、お見舞
いしてあげてって。お兄ちゃん、大丈夫？」

「ああ……」

「怪我は、そんなに心配しなくて大丈夫だって、静かに入院していればすぐ直るって」

「……そうかい」

「あのね……あの時の……あの事故の後から、私達なんだかうまく話せなくなっちゃったけど、昔みたいに戻れたらって……左目もね」

そう言って眼帯を取ると……

「傷、もう消えたでしょう。それと……左目なんだけど、見えるようになったんだよ」

「何だって!!　どういう事だ!!」

「フィルさんが……私のために、必死でこの義眼を作ってくれたんだ。私達の絆を、もう一度取り戻して欲しいって……」

「あいつが……」

「お兄ちゃん、お兄ちゃんがこの事で、すっと気にしていたのは知っていたよ。でも、もう大丈夫だから。私は光を取り戻したから……だからお願い、お兄ちゃんも、もう一度自分を取り戻して!!」

「ラグナ……」

俺は何をしていたんだ。
フィルが、俺とラグナのために、ここまでしてくれていたのに……
そしてラグナも俺と正面から話してくれたのに……

「どう生きるか……どう戦うか……選ぶのはお前だ」

「旦那……」

《今こそ立ち上がるときですよ、相棒》

「ストームレイダー……」

ラグナ、旦那、ストームレイダー……

「そうだな。ラグナが、ちゃんと俺と向き合ってくれたんだ。今度は俺が応える番だ！！」

「お兄ちゃん！！」

「済まなかったな、ラグナ。もう大丈夫だ。ストームレイダー、俺に力を貸してくれ！！」

《ずっと待っていましたよ。その言葉を！！》

「ヴァイス、その様子なら大丈夫だな。いくか……」

「行くかって、旦那どこに？」

「決まっている、皆の所にだ」

「ですね！！」

ヴァイスは戦闘服に着替えると、ザフィーラと共に、バイクを止めてある駐車場へと向かった。

＊　　＊　　＊　　＊

ゆりかご　スカリエッティ研究室

「待っていたよ、フェイト・テスタロッサ、そしてフィル・グリー

ド」

「「スカリエッティ！！」」

ワープでスカリエッティの所に突入した私達の前にいたのは、強化スーツを身にまとっていたスカリエッティの姿だった。

『外で戦っているFの遺産と竜召喚師も、聞こえてるかい？　我々の愉しい祭りの序章は、今やクライマックスだよ』

スカリエッティは、街で戦っているエリオ達にもここでの様子を見せていた。

「なにが、なにが愉しい祭りだ！！　今も地上を混乱させている重犯罪者が！！」

「重犯罪？　人造魔導師や戦闘機人計画のことかい？　それとも、私がその根幹を設計し、君の母君プレシア・テスタロッサが完成させた、プロジェクトFのことかい」

「全部だ！！」

「いつの世も、革新的な人間は虐げられるものだね」

「そんな傲慢で、人の命や運命を弄んで！！」

「貴重な材料を無差別に破壊したり、必要もなく殺したりはしていないさ。尊い実験材料に変えてあげたのだよ。価値のない無駄な命をね」

「こ、この！！」

フェイトは、スカリエッティの傲慢極まりない言葉を聞き、激昂した。

感情の昂りに任せ、ザンバーの黄金の輝きがより一層強くなった。

一撃でスカリエッティを倒そうとし、宙に舞い上がる……が……

スカリエッティが指を鳴らすと、足元に赤い小さなテンプレートがいくつも現れ、そこから出てきた赤い糸が脚に絡みつく。

またその糸は、ザンバーの魔力刃にも幾重にも巻きつき、動きを完全に封じてしまった。

「フェイトさん！！」

「ふっははは。普段は温厚かつ冷静でも、怒りと悲しみには、すぐに我を失う」

「今、その糸を切る。待ってて！！」

プリムをセイバーモードにし、糸を切ろうとしたが……

「そうはいかないよ」

「なに！！　しまった！！」

俺の足下にも糸が現れ、俺の身体に巻き付き動きが完全に封じされてしまった。
しかも魔力結合が出来ないなっていて、バリアジャケットを維持するのに精一杯だった。

「それは特別製でね。それしか完成できなくてね。君のために作ったんだよ」

「くそったれが！！」

「そこでじっくりと見ているが良い。フェイト・テスタロッサの最後をね」

「スカリエッティ！！」

俺が苦戦している間に、フェイトさんもザンバーを砕かれ、脚を拘束していた糸に引っ張られ、床に引き摺り下ろされた。

「君のその性格は、まさに母親譲りだよ。フェイト・テスタロッサ」

＊　　＊　　＊　　＊

ゆりかご内部　なのは

別れた後、なのはは艦首方向に向かって飛行していた。
いくらゆりかご内部が広いからと言っても、壁や天井に仕切られた空間を高速で飛ぶわけにもいかず、
かなり焦りがあった。

そんな中ヴィヴィオの聖王教会での検査結果を受け取った時のシスターシャッハとのやり取り思い出す。

「遺伝子データの照合で、ヴィヴィオの元となった人物の出身年代が判別しました。約３００年前、聖王時代の、古代ベルカの人物で

す。ヴィヴィオのママは、その当時の人物でしょうから……」

「もう、この世にはいないってことですね。ただ、ヴィヴィオはママって言葉を、自分に特別に優しくしてくれる人のことだと思ってるみたいですし」

「でも、本当によく懐かれていますね。このまま、ご自分の娘さんに？」

「受け入れ先は探してます。あの子を必要としてくれて、受け入れてくれる温かい家庭を……」

「あの子は、いやがりますでしょうに……」

「幸せにしてあげる自信がありません……」

「どうして？」

「わたしはいつも自分のことばっかりで、優しい母親になれる資格も、たぶん……ありません……それに何より、わたしは空の人間ですから……」

「……縁起でもない！！」

一瞬遅れて反応するシャッハ。

彼女の言うところの意味は、いつ死ぬか知れない、空にいればその可能性が高いと言うことだ。

「可能性の話です……一度、堕ちてますしね……」

「ですが！！」

しかし、それ以上反論は出来なかった。

彼女もまた戦う者として、それは身に染みてよく理解しているからだ。

「ママ？」

アルフとボール遊びしていたはずのヴィヴィオが、いつの間にか足元にやってきていて、心配そうな目で見上げていた。

「うん？」

わたしはかがみこんで、ヴィヴィオと視線を合わせた。

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「ママ、しょんぼりしてたから」

「本当？」

「うん……」

いつか自分がそちら側になるのではないかと言う不安は、払拭する事など出来ない。

そんな不安が、表に出てしまっていたということか。

「ママ、いい子」

ヴィヴィオは少し背伸びをすると、その小さな手をなのはの頭に乗せて、ゆっくりと撫でた。

「……ヴィヴィオは優しいね」

目の前の少女がどうしようもなく愛おしくなってしまったなのはは、ヴィヴィオを抱き上げると、ギュッと抱きしめた。

「平気だよ。ヴィヴィオが元気で、笑顔でいてくれたら、なのはママもいつだって、笑顔で元気だから」

「えへへ」

「あはは」

＊　＊　＊　＊

一刻も早く玉座の間に辿り着きたい。
出現するガジェットを、一機ずつ潰していられない。

「いちいち相手してられない……レイジングハート！！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｆｌａｍｅ》

レイジングハートを槍型。エクシードモードに変形した。

先端には超高密度の魔力刃、穂先からは魔力翼が展開された。

「A．C．Sドライバー！！」

《Ｃｈａｒｇｅ》

ガジェットの密集する中に、構わず突撃をかけた。
レイジングハートの先端に発生した魔力刃を頂点に、円錐状の攻性フィールドが発生し、触れるもの全てを破壊した。
通路を塞いでいたガジェットは、通過と共にその全てが爆散した。

＊　＊　＊　＊

「駄目だ、クアットロ。手が付けられない」

ディエチからの報告で、なのはの様子はよく分かっていた。

「まぁ、予想の範疇よ。あの人の終幕はここ。玉座の間だから……どこも思ったよりは粘っているけれど、まっ、時間の問題ね」

画面に映し出されていたのは、機動六課の戦っている様子だった。
どこも苦戦している様子で、クアットロはそれを見て悦に浸っていた。

ゆりかご　軌道ポイント到達まで　あと１時間４４分

# 第２１話　金の閃光

「あの小さな子のお母さん……だっけ……」

スクリーンを見て、こっちに向かってきているなのはを見て、つぶやいた。
イメースキャノンを構え、その光はなのはを捕らえていた。

「あんたに恨みはないけれど、５…４…３…２…１…」

「！！　エクセリオン……」

なのはも異変に気づき、エクセリオンバスターの発射態勢に入った。

「０」

「バスター！！」

二つの砲撃が激突し、拮抗していた。

「……ブラスターシステム、リミット1……リリース！！」

《Ｆｉｒｓｔ　ｓｔｅｐ》

次の瞬間全身が魔力に包まれた。
ブーストで魔力が上がった証である。

「ブラスト……シュート！！」

エクセリオンバスターは一回り大きくなり。威力もさらに上がり、
それはイメースキャノンの砲撃を押し切り、その凶悪な砲撃はディ
エチを飲み込んだ。

「はぁ……はぁ……」

「くっ……抜き打ちで……この威力……こいつ、本当に人間か……」

「じっとしてなさい……突入隊があなたを安全な場所まで護送してくれる」

ディエチとイメースカノンをバインドでロックして動けなくし、わたしは先に進むことにした。
後は突入隊に任せるしかない。
今は一刻も早く、ヴィヴィオの元に行かなくては……

「この船は……わたし達が停止させる！！」

＊　＊　＊　＊

「それにしても、すごいね。ブラスターを使っても、殆ど身体への負担がないなんて」

《フィル達が必死で改良しましたので、そんなに負担はかからないと思います》

フィルとマリーさんが改良したブラスターシステム
従来型と比べて、自己ブースト時の身体への負担が、３分の１以下

にすることが出来た。
但し、ファイナル・リミットであるブラスター3は、威力は倍以上に上げられるが、身体への負担は大きい。

「にゃはは……そのことは、フェイトちゃんにも散々言われたからね……」

《でも、ファイナルは出来るだけ使わないでください。そのときの保証は出来ません》

「分かってる。私も出来るだけ使いたくはないからね……ブラスター1はこのまま維持。急ぐよ、レイジングハート」

《Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ》

＊　　＊　　＊　　＊

「あはは……少しは、改良してあるみたいですわね。以前のブラスターよりはマシですけれど、結局の所自己ブーストですわ」

「ねぇ陛下。あなたのママは相当お馬鹿さんですよ～」

「ううっ……うっ……・」

玉座の間の入口の扉が、凄まじい衝撃を受け、内側に向かってひしゃげ、次の瞬間には、そこを桜色の奔流がぶち抜いた。

「いらっしゃい～　お待ちしてました～」

ヴィヴィオが座っている玉座の横に立っているクアットロが言った。

「こぉんなところまで無駄足ご苦労さま～　さて、各地で貴女のお仲間は、たぁいへんなことになってますよ～」

スクリーンを複数展開してなのはを挑発していた。
スクリーンには、各地の六課メンバーの様子が移されていた。
どこも、苦戦していて良い状況ではなかった。

「大規模騒乱罪の現行犯で、あなたを逮捕します。すぐに騒乱の停止と、武装の解除を」

「仲間の危機と自分の娘のピンチにも、表情一つ変えずにお仕事で

すか……いいですね～　その悪魔じみた正義感」

クワットロがヴィヴィオの?に、いやらしくさわろうとしたとき……

「その汚い手で、ヴィヴィオに触らないで!!」

一切の躊躇も容赦もなく、クアットロに向けて、砲撃を撃ち込んだ。
しかし、砲撃を受けたクアットロの姿は、掻き消えてしまった。

『でも、これを見てまだ平静でいられます～』

通信ウィンドウが開き、不敵な笑みでなのはを挑発した。

「ふぁ……あああああ!!」

「ヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオの悲痛な悲鳴を聞き、ヴィヴィオの元に行こうとしたが、虹色の光で行く手を遮られてしまった。

「くっ！！　うわぁぁぁ！！」

ついに耐えきられず、中央まで押し戻されてしまった。

『良いこと教えてあげる。あの時ケースの中で眠ったまま、輸送トラックとガジェットを破壊したのは、この子なんですのよ～　あの時フェイトお嬢様とフィル・グリードが、ようやく防いだ砲。でも、例えその直撃を受けたとしても、物ともせずに生き残ったはずの能力。それが古代ベルカ王族の固有スキル……聖王の鎧』

「なんですって！！」

『レリックとの融合を経て、この子はその力を完全に取り戻す。古代ベルカの王族が、自らその身を作り替えて作った究極の生体兵器。レリックウエポンとしての力を……』

「ママ！！　嫌だ！！　助けてママ、パパ！！」

「ヴィヴィオ……ヴィヴィオ！！」

「うわぁぁぁぁぁ！！」

『すぐに完成しますわ。私達の王が、ゆりかごの力を得て、無限の力を……究極の戦士に』

「ママ、パパ！！」

「ヴィヴィオ！！」

その身体から放出されたのは、虹色の光。カイゼル・ファルベ失われし古代ベルカ、聖王の血統に頻出されると言われている魔力光。

ヴィヴィオの魔力はあっという間に高まり、その圧力は、なのはですら気を入れていないとよろけるほどだった。

その光が収まると、成人の姿をしたヴィヴィオの姿があった。

「あなたは……ヴィヴィオのママを……どこかにさらった……」

「ヴィヴィオ、違うよ！！　わたしだよ！！　なのはママだよ！！」

「違う！！」

「！！」

「嘘つき……あなたなんかママじゃない！！　ヴィヴィオのママを……返して！！」

ヴィヴィオの足下にベルカ式の魔法陣が展開され、魔力の嵐も一段と強くなった。

「ヴィヴィオ！！　くっ！！」

『その子を止めることが出来たら、このゆりかごも止まるかもしれませんね～』

「レイジングハート！！」

なのはもミッド式の魔法陣を展開し、戦闘態勢に入った。

『さぁ、親子で殺し合いなさい。あははは！！』

高笑いと共にクアットロのウィンドウはその場から消えた。

「ヴィヴィオのママを……返して！！」

「ブラスター……リミット２」

＊　　＊　　＊　　＊

第七廃棄都市区画、都市部との境界線に近い場所に展開された防衛ライン。その一角を担っている陸士１０８部隊の部隊長、ゲンヤ・ナカジマは、機動六課臨時本部となっているアースラの、グリフィス・ロウランと連絡を取っていた。

「ああ、市街地戦の防衛ラインは、何とか持ちこたえてる。ガジェット共が相手なら、なんとかならぁな」

『はい』

「応援に来た航空隊の空戦魔導師たちはそこそこ対応出来てるし、陸上警備隊の陸戦魔導師たちの出力不足はどうにもなんねえが、それでも防御に徹する事は出来る。ガラクタ共に対抗する方法は、レジアスのとっつぁんが示してくれたからな。力自慢が暴れまわって、

何とかやってる」

『あ、あはは……』

「だが、現状でギリギリだ。他に回せる余裕はねえし、残りの戦闘機人や、こっちに向かっているあの竜がこっちにきたら、もうアウトだ」

戦闘機人は、殆どはこないだの時に逮捕したが、まだ全部ではない。そいつらがきたら対応は不可能になる。

『黒竜とガジェットは、六課前線メンバーと交戦中です』

「そうかい……」

＊　　＊　　＊　　＊

フレイム・グロウと交戦している六課メンバーだったが、攻撃が全く通用せず、前線メンバーも限界が近づいていた。

「はぁ……はぁ……」

「頑張ってスバル。ティアナが、もう少しで解析が終わるから……」

「うん、ティア……お願い。こっちは、そろそろ限界かも……」

「スバルさん、ギンガさん、こうなったら、わたしとルーちゃんがヴォルテールと白天王を召還して、最大パワーで攻撃すれば」

「それしか……ないね……」

「いくよルーちゃん」

「うん……」

『駄目よ！！　ヴォルテールと白天王を召還しちゃ駄目！！』

キャロとルーテシアが召還しようとしたとき、ティアナからの通信が入った。

「どういうことですか！？」

『今か解析が終わったの。それを見てもらえば分かるわ……』

ティアナがみんなに送ったデータは次の通りだった。
フレイム・グロウは、確かにヴォルテールと白天王の最大パワーで倒すことは可能だが、その瞬間フレイム・グロウの身体を形成している分子が、ミッド中に巻き散らばってしまい、それによってミッドの人間は全滅してしまう。
クアットロの本当のねらいはこれだったのだ。

『あはははは！！　良く気づきましたわね。ティアナ・ランスター』

「「「「「「クアットロ！！」」」」」」

あたし達の前に、いやったらしい笑みをしたクワットロのウィンドウが展開された。
その面を見ると、吐き気がするわ。

「あたし達を甘く見ないことね……」

『さすが、高町なのはの弟子ですわね。娘を目の前にして冷静にしていた、あの悪魔の弟子だけありますわ』

「黙りなさい！！　それ以上なのはさんのこと貶すな！！　あの人がどんな思いだったか！！」

ヴィヴィオがさらわれて、あの人がどんなに苦しんだか。
フィルがいなかったら、きっと潰れていた。

『そんなことはどうでも良いですわ～　どうしますか。ルーお嬢様達の召還獣で倒して、ミッドを毒で滅ぼすか、フレイム・グロウがミッドを蹂躙するか。どっちにしても、ミッドはお終いですわね。あははは!!』

満足したのか、クアットロはこの場から通信を切った。

「みんな、一旦集まって!!」

ティアナの声で、フォワード全員、現場から少し離れたビルに集合していた。

「どうするのティアナ。このままじゃ、本当に打つ手はないわよ」

「「ティアさん……」」

「ティア、このまま手をこまねいてるの！！」

「スバルさん……僕だって悔しいです。でも……」

「……全て解析で来たっていったでしょう。当然、あの化け物を退治する手段もね……」

「「「「「ティア　（さん）！！」」」」」

『そこから先は、僕が説明するよ』

「「「「「スクライア司書長！！」」」」」

ウインドウに現れたのは、かつてのなのはの魔法の師匠であり、現無限書庫司書長のユーノ・スクライアだった。

スクライア司書長が説明してくれたのは以上のことだった。

まず、ティアナ、キャロ、ルーテシアに、無限書庫で発見した特別な魔法術式を、それぞれのデバイスに転送。

次にキャロとルーテシアが全魔力を使って、その術式を使った捕縛魔法でフレイム・グロウを捕縛。

その間スバル・ギンガ・エリオは、ティアナの方に意識をむけさせないように、注意を引く。

最後にティアナが術式を混ぜた集束魔法で、弱点であるリンカーコアさえ打ち抜ければ……

成功すれば、肉体は消滅するので毒がまかれることはない。

但し、これは本来なのは級の砲撃の威力が必要なプランなので、ティアナの威力で成功する確率は低いが……

「みんな、絶対成功させるわよ。これくらいの任務を成功させなくて、なにがストライカーよ。ここで失敗したら、フィルに合わせる顔がないからね！！」

「「「「「はい　（おう）！！」」」」」

『……どうやら、心配しなくても良いみたいだね。やっぱりなのはの弟子だよ。君は……こんな無茶なプランなのに……』

「スクライア司書長。あたしはなのはさんの弟子である前に、あのフィルのパートナーなんですよ。無茶はお得意分野です」

『確かにそうだ……ティアナ、後は頼んだよ』

「任せてください！！」

スクライア司書長は、この場はあたし達に託し、通信を切った。

「やろう、ティア！！」

「捕縛まではうまくいくと思うけど……リンカーコアまであたしの

砲撃が届くか……」

「それは私が何とかするわ」

「「「「「「シャマル先生！！」」」」」」

「ティアナ、捕縛してくれたら、私が旅の鏡であいつのコアを引きずり出すから、それを打ち抜いて！！」

「足止めは俺も加わろう。多少は役に立つはずだ」

「「「「「「ザフィーラ　（さん）」」」」」」

これで目処が立った。

成功率も上がった。これで失敗したら、大馬鹿よ。

「みんな頼んだわよ。まず、ナカジマ姉妹！！　あいつの注意を引きつけて！！」

「いくよギン姉！！　マッハキャリバー！！」

「オーケー、ブリッツキャリバー！！」

「「フルドライブ！！」」

《《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》》

「「ギア……エクセリオン！！」」

《《Ａ．Ｃ．Ｓ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ》》

マッハキャリバーとブリッツキャリバーのモード3、フルドライブモード、ギア・エクセリオンが解放された。左右の足首から、大小二枚ずつの魔力翼が展開され、アクセラレート・チャージ・システム……瞬間突撃システムの発動準備が完了した。
マッハキャリバーは、自分たちでここにたどり着いたが、ブリッツキャリバーは、予めフィルが組み込んでいたため、同じシステムを使えるのだ。
これはギンガなら、最初からこのスペックが使えるだろうと考えたからだ。

二人ともウイングロードを展開し、注意を引きつけていた。
フルドライブになりスピードも上がり、フレイム・グロウも動きについて行けてない。

「行くよ、ルーちゃん」

「うん、キャロ」

「「錬鉄召喚、アルケミックチェーン！！」」

スバル達が注意を引きつけている間に二人は、術式を組み込んだアルケミックチェーンを召還し、フレイム・グロウの捕縛に成功した。
だが、術式を組み込んだ特別製のため、ヴォルテールと白天王を召還するくらい、二人の身体に負担がかかっていた。

「……くっ……はぁ……はぁ……」

「頑張ってルーちゃん……わたし達が、ここで解いてしまったら……お終い……だよ……」

「うん……」

しかし、ルーテシアはもう限界が近づいていた。
ガリューでさっきまで攻撃していたことと、エリオをサポートしていたことで、魔力をキャロより多く使ってしまっていたのだ。

「もう……だめ……」

「ルーちゃん！！」

「諦めるな！！　鋼の軛！！」

ザフィーラが放った鋼の軛は、動きを封じるサポートになり、二人の負担を減らせられた。

「二人とも、俺も全力でヤツの動きを止める。頑張るんだ」

「ありがとう、ザフィーラ！！」

「ありがとう……」

ザフィーラのおかげで、負担が減った二人は持ち直し、動きを完璧に封じた。

「シャマル先生！！」

「了解……いくわよ、クラールヴィント」

《ｊａ》

クラールヴィントの石を分離させ、ペンダルフォルムに変形させた。絶対見つけて引きずり出してやるわ！！

旅の鏡で体内のリンカーコアを探していると、一際高い魔力の固まりがあった。

「見つけた！！」

《ガァァァァァ！！》

リンカーコアを摘出されたフレイム・グロウは咆吼をあげていた。
間違いないあいつのリンカーコアだ。

「ティアナ！！」

「任せてください！！　クロスミラージュ！！」

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

私はすでにクロスミラージュをブレイズモードに展開し、魔力を集束させ発射態勢に入っていた。
あたしが撃とうとしている魔法はなのはさんの十八番、スターライトブレイカー。

まともに撃っても威力が足りないので、サンダーの秘密兵器、魔力

集束システムを補助に使って威力を上げていた。
これはフィルが万が一を考えて、大気にある魔力素をサンダーが集めて、それを術者に与えるという物だ。
これはブラスターと違って、術者に負担は殆どかからない。
欠点は1回しか使えないことと、外でしか使えないと言うことだ。

「落ち着け……この一発に、全てがかかってるんだ……」

あたしは深呼吸をし、精神を落ち着かせた。
この一発で全てが決まる。やり直しはきかない

《ティアナさん、一人じゃないんですよ。私もついてます。私はこの時のために、相棒からあなたのことを託されたんです。絶対成功させます！！》

《私もいますよ。サポートはサンダーだけじゃありません。ティアナ、あなたは全力で撃ってください！！》

「サンダー……クロスミラージュ……ありがとう……いくわよ！！」

オレンジ色の魔力光がティアナの周りに集まり始めた。
自身の魔力だけでなく、サンダーが集めた魔力も合わせていた。

「発射１０秒前……スバル、エリオ、ギンガさん、そこから退避して！！」

「「「了解！！」」」

注意を引きつけていた前衛グループの３人は、一斉に退避した。
そのときティアナに気づき、フレイム・グロウはティアナに魔力弾を放った。

発射態勢に入っていたティアナは、その場から動けず、直接は命中しなかったが、髪を縛っていたリボンは魔力弾の余波で消し飛んでしまい、ロングヘアの状態になっていた。

「全力……全開……」

「スターライト……ブレイカー！！」

放たれたオレンジの砲撃。
ティアナのそしてサンダーとクロスミラージュの思いがこもったスターライトブレイカーは、一直線にリンカーコアに向かっていった。

《ガァァァァァ！！》

砲撃が着弾し、リンカーコアが消滅すると、身体の方も維持できなくなり、消滅していった。
毒素の反応もなくサンダーが完全消滅を確認した。

「や……やった……」

『やった！！』

この場にいる全員が喜び、その場で大声をあげていた。
ティアナも本当はそうしたかったが、スターライトブレイカーで全力を使い果たしてしまい、立つ気力もなかった。

《ティアナさん！！》

「ごめん……もう、限界……ちょっと休ませて……」

《本当にお疲れ様です……今はゆっくり休んでください……ティアナ》

＊　　＊　　＊　　＊

「以前トーレが捕まる前に言ったと思うが、君と私は、親子のようなものだ」

スカリエッティは、赤い糸の檻に囚われの身となっているフェイトに向かって言った。

「君の母親、プレシア・テスタロッサ……実に優秀な魔導師だった。私が原案のクローニング技術を、見事に完成させてくれた。だが肝心の君は、彼女にとって失敗作だった。甦らせたかった実の娘アリシアとは、似ても似つかない、単なる粗悪な模造品……んっふふふふふっ。それ故、まともな名前すら貰えず、プロジェクトの名をそのまま与えられた。記憶転写クローン技術、プロジェクトF・A・T・Eの最初の一葉……フェイト・テスタロッサ」

「フェイトさん……」

廃棄都市区画に中継されているラボの様子を見て、エリオ達は心配していた。

＊　　＊　　＊　　＊

「ライオット！！」

スカリエッティの作った糸の檻に閉じ込められていたフェイトは、最後の手段に出る事にした。
このままでは、他の援護に回ることは出来そうにない。
ならば目標を、目前のスカリエッティ殲滅に定めて、自分の役割を完遂する。

そしてフィルを解放し、クアットロのことは彼に託すことにした。

それが、フェイトの出した答えだった。

《Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ》

ライオットブレード……バルディッシュのフルドライブモード。
巨大な両手剣の形態を取っていたバルディッシュが、片刃の片手剣へとその姿を変える。
その刀身の魔力密度……つまり切れ味は、ザンバーの比ではない。

「はぁっ！！」

ライオットを一閃すると、ザンバーでは手が出なかったスカリエッティの糸の檻は、いとも簡単に切り裂かれた。フィルが閉じこめられていた糸の檻も破壊し、解放した。

「それが君の切り札かい……成程、このＡＭＦの状況下では消耗が激しそうだ」

「フェイトさん！！」

スカリエッティの言うとおり、この状況下ではかなり消耗してしまう。
いくら負担を少なくすることが出来たといっても、ゼロではない。

「フィル、行って！！　ここは私が相手をする。フィルはクアットロの所に行って！！」

「でも、居場所が分からないと！！」

すると、フェイトさんが念話で……

（大丈夫。さっきここに来る前にサーチャーを飛ばしておいたの。やっと居場所が分かったの）

（もしかして、それを待っていたんですか）

（本当は一人でなんて行かせたくない。でも、私は、スカリエッティを止めるだけで、精一杯だから……）

本当は一人で行かせたくない。
でも、ここで二人とも倒れるわけにはいかない。

（座標はプリムに転送するから行って！！）

（了解……）

転移の術式を展開し、フェイトさんが調べてくれた座標に向かうことにした。

「しまった！！　逃がすものか！！」

スカリエッティが気づいたが、どうやらこっちの方が、早く転移できそうだ。

「俺の分まで……幸せになってね……」

「えっ？」

「……さよなら……フェイト」

「フィル！！」

私はフィルを止めようとしたが、すでに転移してしまった。

今……間違いなく言った。
私のことを『フェイト』って……
普段なら、絶対言わないのに……

そして……今のは……

私への別れ……

フィルは死ぬ気だ！！

「バルディッシュ！！」

《Ｇｅｔ　ｓｅｔ》

「オーバードライブ……真・ソニックフォーム」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ》

フェイトの身体が、金色の眩い閃光を放ち、魔力も爆発的に膨れ上がった。
高速戦闘型にしては鈍重なイメージだったバリアジャケットのコートとジャケットが消滅し、それを構成する魔力までもが速度上昇に回される、フェイト自身のリミットブレイク。

《Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

バルディッシュがカートリッジをロードし、ライオットブレードが二本に分裂した。
激しく帯電した、金色に輝く、二振りの刃……ライオットザンバー・スティンガー

＊　　＊　　＊　　＊

「魔力値が、増大……はっ！！」

別室で膨大な情報処理をこなしながら、戦域管制を行っていたウーノは、膨れ上がった魔力反応に、怪訝そうな声を上げた。
緑色に光る魔力の粒子が、ウーノの周囲に発生したかと思うと、緑色のバインドが襲い掛かった。

「探しましたよ、お嬢さん……」

「お前は、ヴェロッサ・アコーズ!!　なぜここに!!」

「ゆりかごが浮上したときに、忍び込んだのさ。スカリエッティのもうひとつの頭脳、戦闘機人１２体の指揮官。ナンバー１、ウーノ。君の頭の中……ちょいと査察をさせてもらうよ……」

＊　＊　＊　＊

「ウー姉……」

唯一残っていた戦闘機人のセインだったが、元々クアットロの案には乗り気ではなかったので、ウーノが捕まったことで投降しようと思っていた。

「あのさ……」

「何ですか？」

「正直、クア姉がしている事って、嫌なんだよね。ウー姉も捕まったみたいだから、投降していいかな……」

「戦闘意志がない相手に、戦う事はしませんよ。良いですよ……」

「ありがとう……」

「その代わり、あなたの体内にあるＢＣＣは取り除かせてもらいますよ」

「うん……良いよ」

セインはヴェロッサと一緒に潜入した、シスターシャッハに投降した。

＊　　＊　　＊　　＊

既に残されているのは、スカリエッティのみになっていた。

それでも、スカリエッティは最後のあがきで、フェイトに攻撃を仕掛けていた。

「装甲が薄い。当たれば墜ちる！！」

「そうかな……」

スカリエッティは強化スーツの能力で攻撃しようとしたが、動きが速すぎて、捕らえることが出来なかった。

「何！！　強化スーツで、トーレ以上の戦闘力があるはずなのに！！」

フェイトのスピードは速いなどと言うレベルではない。
目で捉えることが出来ないどころか、認識すら出来なかった。

そしてフェイトはスカリエッティの強化スーツをじわじわと破壊していった。

今のフェイトの攻撃は蝶のように舞い、蜂のように刺す。
その表現がぴったりだった。

そしてとどめを刺すべく、二振りのライオットザンバー・スティンガーを重ね合わせた。
瞬時にしてそれは、巨大な一振りの大剣に化ける。

ライオットザンバー・カラミティ……通常のザンバーとは比べ物にならないほどの魔力密度を持つ魔力刃。
この巨大さで、しかし振るうスピードは先程までの片手剣二刀流と何ら変わらない。

フェイトが、今までの鍛錬で培ったからこそなせる技だ。

「覚悟しろ!!　スカリエッティ!!」

フェイトはザンバーを大きく振りかぶり、スカリエッティの頭上に打ち下ろした。
それを、両手で受け止めた。しかしそこまでだった。
床が保たず、足首まで床にめり込んでしまったために、身動きが取れなくなる。

「こんな……馬鹿な!!　戦闘力なら君よりも遙かに上なのに、ど

うしてこんな魔力刃くらい砕けない！！」

「このライオットザンバー・カラミティは、私の全てを込めている。そして……フィルの思いもだ！！」

「くだらん！！　感情論で強くなるわけはない！！」

「……哀れだね……愛の力を知らないって……」

「何だと！！」

「だから……この私が、引導を渡してあげる！！」

ライオットザンバー・カラミティがさらに力を増し、魔力刃もさらに巨大になり、密度もさらに増し、その力はつかんでいるスカリエッティの手を、消滅させるほどの物だった。

「馬鹿な！！　こんな事が！！」

「スカリエッティ……光になりなさい！！」

「こんな、バカなぁぁぁぁぁ！！　ぎゃぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁ！！」

ライオットザンバー・カラミティを完全に振り下ろすと、スカリエッティの身体は、断末魔と共に、完全に消滅した。
振り下ろした地面は、フェイトの半径３０ｍにわたってクレーターが出来ていた。
それほどの威力と言うことだ。
単純破壊力なら、スターライトブレイカーやプラズマザンバーブレイカーを上回る。
これが、フィルが新たに付けた能力。物質消滅能力。
殺傷設定で使用したときに使える能力。

今回フェイトはスカリエッティを逮捕ではなく、殲滅をすることを選んだ。

元々、スカリエッティとクアットロは、広域次元犯罪者の特Ａ級だったので、現場の判断で殺すことも許されていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

リミットブレイクをフルで使ってしまったため、立っているのがやっとだった。
こんな所でグズグズしてられないのに……

「嫌だよ……こんなのって無いよ……」

馬鹿だ……私……なんで、あの時、一緒にスカリエッティと戦おうって、言わなかったんだろう。

私は復讐にとらわれて、フィルのこと考えていなかった。

フィルを一人で行かせたら、こうなるって分かっていたじゃない。

助けに行きたいのに、身体が思うように動かない……

お願い、誰か……フィルを助けて……

＊　　＊　　＊　　＊

ゆりかご最深部

「まぁ、みんな使えないこと……」

髪を下ろし、眼鏡を取り去ったクアットロは完全に戦闘モードに入った。

「それでも、私がいれば大丈夫ですけどね。あはははは！！」

『そのくだらない野望も終わりだ。クアットロ！！』

声がすると、最深部の扉が轟音と白色の光と共に破壊された。
扉が破壊され、そこに現れた人物は……

クアットロに銃口を向けていた、フィル・グリードだった。

「決着を付けようぜ、クアットロ！！」

「いいですわ……フィル・グリード。未来から続いた、あなたとの因縁……ここで終演にしましょう！！」

ゆりかご　軌道ポイント到達まで　あと１時間３５分

# 第２２話　ファイナル・リミット

「はぁ……はぁ……大丈夫か、アイゼン」

《問題ありません》

いくらダメージを負わなかった後はいえ、あれだけのガジェットをたった一人で片付けた代償は大きかった。
グラーフアイゼンも傷だらけになり、自身もかなり魔力と体力が消耗してしまった。

「なのはも玉座の間に着いてるだろうな……フェイトもスカリエッティと戦っているし……」

《Ｊａ》

「はやてもアースラで、あたし達がゆりかごを止めるのを信じて待っている……」

「そしてフィルの奴も、自分の因縁と……クアットロと戦っているんだ……あたしがこんなところで、休んでなんかいられないんだ！！」

ヴィータはアイゼンを杖代わりにして、ゆりかご動力室に踏み込んだ。

動力室に入り見たものは、巨大なエネルギー結晶体のようなものだった。

遺失技術で製造されていて、現在使用されている魔力炉とは、何もかもがまるで違っている。

「こいつをぶっ壊して、この船を止めるんだ！！」

「リミットブレイク……やれるよな」

《Ｊａｗｏｈｌ》

グラーフアイゼンのシャフトがスライドし、カートリッジがロードされた。

上がる魔力と共に、グラーフアイゼンのハンマーヘッドがドリルに変形した。

巨大なハンマードリルは、振りかぶると更に巨大さを増した。

《Ｚｅｒｓｔ？ｒｕｎｇｓｆｏｒｍ》

「ツェアシュテールングス……ハンマー！！」

カートリッジがロードされ、ドリルと反対側のブースターに火が入ると、ジェット噴射の加速を載せて、ヴィータはアイゼンを打ち下ろす。

しかし……

爆発による爆風が晴れると、傷ひとつ付かず、駆動炉の姿が現れたのだ。

《危険な魔力反応を感知しました。防衛モードに入ります。これより駆動炉に接近するものは無条件で攻撃されます》

さっきの爆発的な攻性魔力に反応して、駆動炉の防衛システムが起動してしまった。

動力室内にはキューブ状のスフィアが幾つも発生し、駆動炉に接近するものに対して無条件に攻撃を行うとの警告が発せられ、照準が合わせられた。

「……上等だよ」

アイゼンを構え直し、もう一度駆動炉に突っ込んでいった。

＊　　＊　　＊　　＊

アースラ　ブリッジ

「巨大船の軌道ポイント到達まで、あと３８分。このままではアースラだけでは、どうしようもなくなってしまいます！！」

「主砲の照準は、ミッド首都に向けられています……このままポイントに到達すれば……」

「ミッドは消滅やろうな……」

「……私は、このままここで、手をこまねいてみているしかないんか！！」

「八神部隊長……」

本当なら今すぐに、フィル達の応援に行きたい。

でも、私が離れると言うことは、アースラを放棄すると言うこと。
それは、アルカンシェルを撃つことが出来る人間がいなくなってしまういうことだ。

「……フィル、お願いや。無事に帰ってきてや……」

手に握られているアルカンシェルの封印を解くキーを握りしめながら、己の無力を呪っていた。

＊　＊　＊　＊

「うっ……くっ……」

ヴィヴィオの攻撃で壁にたたきつけられたなのはは、本気を出せないでいた。
本気を出せば何とかなるが、それでヴィヴィオを殺してしまうんじゃないかと躊躇っていた。

「ヴィヴィオ……」

「気安く呼ばないで！！」

ヴィヴィオは虹色の魔法弾を放った。
形は違うが、クロスファイアである。

アクセルフィンによる加速で移動し、一瞬前にいた空間に複数の魔法弾が着弾し、爆発を起こした。

《Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ》

ヴィヴィオの背後に回りこみ、レイジングハートの自動詠唱によるチェーンバインドで、ヴィヴィオの動きを封じようと試みるが……

「こんなの……効かない！！」

あっさりとバインドは破られてしまった。
今のヴィヴィオはなのはの捕縛魔法程度では動きを抑えられない。

両手に四個の魔法弾を発生させ、なのはに向かって射出した。
虹色の魔法弾は、着弾直前に弾けて無数に分裂し、それがなのはを取り囲む。
さっきと同じと思っていたなのはは、避けることが出来ず、まともに攻撃を受けてしまった。
さらに吹っ飛んでいったなのはに対し、追撃をかけるべく大きな魔法弾を発生させ、それを拳で撃ち抜いて射出した。

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

間一髪レイジングハートが自動防御で対応したが、そう何度も耐えられるものではない。

「ブラスター２！！」

《Ｂｌａｓｔｅｒ　２ｎｄ》

やむをえず、なのはは再度ブラスターシステムを開放した。
膨れ上がったの魔力の余波が、衝撃波となってヴィヴィオの身体を押し返した。
同時に、周辺に、レイジングハートの穂先を模したビットが現れた。

ブラスターモード時に使える、ブラスタービットだ。

「ブラスタービット、クリスタルケージ……ロック！！」

ビットが射出され、ヴィヴィオの周りを舞った。
ビットが引いていたバインドが、ヴィヴィオに絡みつき、更にビットはピラミッド型の結界を構築し、ヴィヴィオをその中に閉じ込めた。

「これは、もう覚えた！！」

だが、さっきと同じくチューンバインドは破られ、クリスタルゲージも拳で打ち砕こうとしていた。
術者のなのはも、ゲージを維持することがだんだん厳しくなってきた。

＊　＊　＊　＊

「くそったれが……」

最深部にいるクアットロの所に行った俺だったが、魔力の差と『聖王の鎧』のレプリカのせいで、俺の攻撃はことごとく通用しなかった。

魔力を振り絞って、プラズマザンバーで斬りつけたが、クアットロには届かず、クロスファイアもシューターも、そしてブラストブレイザーも全部はじかれてしまい、クアットロはノーダメージだった。

魔力の差を補うため、ブラスターモードをブラスター2まで引き上げたが、それでも、クアットロのスピードについて行くのがやっとだ。

ワープで背後に回っても、聖王の鎧がある限り攻撃は通じない。

「いいざまですわね……フィル・グリード。あなたといい、高町なのはといい、本当にお馬鹿ですわね。ブラスターは自己ブースト。撃てば撃つほど、守れば守るほど術者とデバイスは命を削っていく。優秀なサポートがいて、後先考えず一撃必殺を撃てる状況なら、怖いスキルですけど、一人で戦うんじゃ役に立たないですわ」

確かにそうだ。

ティアがこいつを倒したときは、俺がサポートしていたからティアはスターライトブレイカーに集中できた。

でも、今はだれもサポートがいない。

「どうやら、あっちも苦戦してますわね」

クアットロが展開しているウィンドウには、ヴィヴィオがクリスタルゲージを破り、なのはさんと激突しているシーンだった。

「なのはさん！！」

「あはははは。何度見ても快感ですわ。親娘で殺し合う光景は！！そう思いません、フィル・グリード」

「……貴様……どこまで腐っていやがる！！」

「いくら足掻いても無駄ですわ。私にこの聖王の鎧がある限りね。あはははは！！」

「くっ！！」

あの聖王の鎧がある限り、どうしようもない。

なのはさんクラスの砲撃ならともかく、俺じゃ単体じゃどうしようもない……

「諦めなさい。何をしても無駄なんですのよ……ん？　これは……駆動炉のチビ騎士？」

ゆりかごに揺れが感じ、クアットロが調べると駆動炉での様子が映し出された。

＊　＊　＊　＊

「はぁ……はぁ……ちくしょう……なんでこわれねぇ……」

これまで何発とぶっ叩きまくったが、一向に壊れる気配はない。
叩くそばから修復されてしまうから、ダメージが蓄積しない。
そして駆動炉自体がエネルギーを生み出しているから、修復に必要なエネルギーのガス欠はあり得ない。

「こいつをぶっ壊さなきゃ……みんなが困るんだ……はやてのこと

も……なのはのことも……フェイトのことも……フィルのことも……守れねんだ！！」

「こいつをぶち抜けなきゃ意味ねえんだ！！……だから……」

「アイゼン！！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

あたしの残り魔力とアイゼンの状態から考えて、撃てるのは後一発。この一発に全てを込める！！

「うおあぁぁぁぁ！！」

ボロボロになってヒビ割れだらけのグラーフアイゼンに、カートリッジをロードさせ、最後の一撃を放とうとしていた。

「ぶち抜け！！」

グラーフアイゼンは初撃と比べても遜色の無い一撃で、駆動炉に刺

さった自らのドリルの先端を、強烈に撃ち抜いた。そして、そこを中心に、小規模な爆発が起こった。

今の一撃による衝撃で、ドリルの部分を完全に失ってしまった。
次の瞬間、アイゼンの全身に入っていたヒビが更に広がり……光と共にその全てが砕け散った。

そして自身も全ての力を使い果たしてしまい、地面に落下していった。

「駄目だ……守れなかった……はやて……みんな……ごめん……」

力尽き、もはや、地面に激突するしかなかったが……
次の瞬間、白き光が落下を防いだ。
その声の人物は、ヴィータを慈しむように抱えた。

「謝る事なんて……あらへん……」

「えっ？」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンが、こんなになるまで頑張って……」

駆動炉がグラーフアイゼンのドリルの先端からひび割れを起こし、
そのひびはだんだん大きく広がり……

「それでも壊せへんもんなんて……この世のどこにも……」

「あるわけないやんか……」

ついに駆動炉は大爆発を起こし、木っ端みじんに砕け散った。

「は……はやて……」

アースラで指揮をしているはずのはやてがここにいた。
どうして……

「リイン……も……」

「はいです……」

「どうして……ここに……」

「家族が必死で戦ってるのに、助けに行かないわけないやろ……」

「でも……アースラは、フィルから託されたのに……」

「リンディさんや……クラウディアのポーターが何とか動いてくれて、本局にいたリンディさんが来てくれたんや……だから私もここに来ることが出来た……」

「あとは私に任せて、ヴィータはここで休んでいてや……」

「うん……」

ヴィータははやての声で安心したのか、その場で眠ってしまった。
回復すれば、自力で起き上がれるだろう。
本当は一緒に付いていてあげたいが、そうもいかない。

「いくよリイン……なんか嫌な予感がするんや……」

「リインもです……なんかこう……胸が苦しくなるんです……」

ここに来る前、ユーノ君が言っていたことが本当なら、フィルは死ぬ気だ。
フィル、私が着くまで早まったことはせんでや！！

＊　　＊　　＊　　＊

「駆動炉が……」

「終わりだ、クアットロ……」

「ほざきなさい！！　防御機構フル稼働、予備エンジン駆動、自動修復開始……まだまだゆりかごは堕ちませんわ」

「さっきも言ったが、お前はもう、お終いなんだよ！！」

ブラスタービットが射出され、クアットロの周りを何重にも舞った。
ビットが引いていたバインドが絡みつき、完全に動きを封じた。

聖王の鎧の弱点。
それは砲撃や斬撃に対しては無敵を誇るが、こういったバインド系は反応は示さない。
前回の戦いでも、聖王の鎧があったにもかかわらず、バインドが出来たのを覚えていたのだ。

「くっ……相変わらず堅いバインドですわね。でも、あなたの砲撃の威力じゃ、どうしようもありませんわ！！」

「俺の砲撃だったら……な……」

「ま、まさか！！」

《なのはさん！！　レイジングハート！！　今です！！》

プリムが通信していたのは、なのはさんだった。
そう、俺はヴィータ副隊長が駆動炉を破壊してくれるのを待っていたのだ。

「……待ってたよ、この時を！！」

プリムの通信と同時にヴィヴィオは、バインドに絡め取られていた。
これまでのように、容易には抜け出せない。
今度はブラスタービット４基によるチェーンバインドで、床に縫い付けられたのだ。

「ま、まさか……あなたはずっとこの時を待っていたというの。あのチビ騎士が、駆動炉を破壊するのを……」

「駆動炉を破壊してしまえば、お前の聖王の鎧はフルに発揮しない。

本物じゃない、お前の聖王の鎧の動力源はあの駆動炉だからな」

まさか……そのことを見破られていたなんて……
しまった!!　スクライアだ。あいつがこの事を調べたんだ!!

そしてクアットロは、フィルが何をしようとしているのかが分かった。

高町なのはだ。あいつの砲撃で私を倒そうとしているんだ……
なのはの砲撃の恐ろしさは、クアットロも知っていた。
だからこそ、ヴィヴィオをなのはにぶつけていたのに……

プリムから座標を送られ、クアットロがいる方向にレイジングハートを向けた。

「壁抜き!!　そんな馬鹿げたことが……はっ!!」

脳裏に浮かんでいたのは、四年前に起きた、あの空港火災のビジョン。
空港内から、行く手を全て薙ぎ払って天を衝いた、桜色の砲撃。

「あ……あっ……あああああ……」

レイジングハートを突きつけられ、身体を震わせ、カチカチと歯を鳴らし、膝は笑い、今にも崩れ落ちそうになっていた。

《通路の安全確認。ファイアリングロック解除。殺傷設定ＯＮ》

「ブラスター……３！！」

ブラスターシステムの最終リミッターを、全く躊躇せず解放した。
レイジングハートの穂先から、眩い桜色の巨大な魔力翼が展開され、同時に魔力も膨れ上がる。

「ディバイィン……」

詠唱に入るが、魔力ブーストはブラスター３だけに留まらず、その状態から、レイジングハートが大口径カートリッジを５連ロード。
魔力は、更にふた回り以上も増大する。

ヴィヴィオを傷つけたこと……

未来でみんなを殺したこと……

わたしは決して許さない！！

「バスターーーー！！」

放たれた砲撃……桜色の奔流が、ゆりかごの強固な壁と床をブチ抜きながら、クアットロに迫った。

「あああ……嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

クアットロの頭上に桜色の砲撃が降り注ぎ、辺り一面破壊した。

そして……クアットロの存在を、跡形もなく消し去った。

バインドで動きを封じられたクアットロには、ディバインバスターを防ぐ手はなく、聖王の鎧も例え１００％の力を発揮したとしても、この砲撃の前には何の効力もない。

ディバインバスターは、貫通力と一点の破壊力はスターライトブレイカーに劣らない。
まして、ブラスター３を使用して、殺傷設定の最大砲撃だ。

存在は跡形もなく消え去る。

《終わりましたね……》

「ああ……終わったよ……みんな……フェイトさん……そして、ティア……」

これで、死んでいったみんなも救われる……

ティア……お前の敵は取ったよ……

「いや……まだだ……ヴィヴィオを……俺たちの娘を助けなきゃな……」

《そうでしたね。行きますよ、マスター！！》

ヴィヴィオを助けることもだけど、俺にはまだやらなきゃいけないことがある。

＊　＊　＊　＊

第七廃棄都市区画、最終防衛ライン

バリケードを張ってラインを死守していた魔導師や戦士たち。その動きが止まった。

クアットロが消滅したことで、制御が完全に失われた。

「ガジェット完全停止！！　他の地点も同様です！！」

「六課の連中が、上手い事やったか」

ひとまず肩の荷が下りたゲンヤだった。

＊　　＊　　＊　　＊

「なのはさん！！」

「フィル！！　無事だったんだね！！」

「はい、今はそれよりヴィヴィオを！！」

「ううっ……」

強引にバインドを解いたヴィヴィオが頭を抱え、俺たちの方を向き……

「なのはママ……フィルパパ……」

「「ヴィヴィオ！！」」

ヴィヴィオの元に駆け寄ろうとしたが……

「駄目、逃げて！！」

近づいた俺たちに拳を振りぬいた。

「ヴィヴィオ……もう……帰れないの……」

「ヴィヴィオ！！　今助けるから！！」

「駄目なの！！　止められない！！」

ゆりかごの自動防衛モードが発動し、揺れが出始めている。

このままじゃ本当にやばい！！

なのはさんと俺は、最後の力を振り絞って何とか立ち上がった。

「もう……こないで……」

「何……だと……」

「分かったの…私…ずっと昔の人のコピーで…もう、ママは死んじゃってて……なのはマ……なのはさんも、フェイトさんも、フィルさんも……本当のママやパパじゃないんだよね」

「私は……この船を飛ばすための只の鍵で……玉座を守る只の兵器……」

「違うよ……」

「守ってくれて……魔法のデータ収集が出来る人を探してただけ……」

「違うよ！！」

「違わないよ！！　悲しいのも、痛いのも、全部偽物の作り物……私はこの世界に居ちゃ行けない子なんだよ！！」

悲しそうに、色違いの瞳から涙すら流して、少女の姿のヴィヴィオは告げていく……

「それは違う……生まれ方は違っても、今のヴィヴィオは……そうやって泣いているヴィヴィオは、偽物でも作り物でもないんだ！！」

「そうだよ……甘えん坊で、すぐ泣くのも、転んでも一人で起きら

れないのも、ピーマン嫌いなのも……わたしが寂しいときにいい子ってしてくれるのも……わたしの大事なヴィヴィオだよ……」

「そうだ……俺はヴィヴィオの本当のパパじゃない……だけど、これから本当のパパになれるように努力する。だから居ちゃいけない子なんていうな！！　本当の気持ちを俺たちに聞かせてくれ……」

「私は……私は……なのはママとフィルパパのことが……大好き……ママ達とずっと一緒にいたい……」

「ママ……パパ……助けて……」

ヴィヴィオの悲痛な叫びに、俺もなのはさんも涙が止まらなかった。

《マスター、ここでやらなかったら男じゃないですよ！！》

「……助けるさ」

「……いつだって」

「「どんなときだって！！」」

足下に白色の魔法陣が展開され、俺はヴィヴィオに向かっていった。

繰り出されたヴィヴィオの拳を何とか受け止め……

《Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ》

「やりますよ、なのはさん！！」

「うん！！」

「プリム、ブラスター３、起動だ！！」

《了解です！！》

ヴィヴィオの動きを封じた後、俺はファイナル・リミットのブラスター３を起動し、さらに上空へ飛び上がった俺たちは、共にスターライトブレイカーの発射態勢に入った。

もしかしたら、なのはさんだけでも大丈夫かもしれない。

でも、俺もヴィヴィオのパパとして娘の涙に応えたいんだ！！

ブラスターの反動なんて、ヴィヴィオの苦しみに比べたら大したことねぇ！！

「ヴィヴィオ……少しだけ痛いの、我慢できるか……」

「……うん……」

「いい子だ……」

「防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン……いけるね、レイジングハート」

《いけます！！》

「頼むぞプリム……絶対、ヴィヴィオを助ける！！」

《当たり前です！！　命に代えても絶対に成功させます！！》

「いきますよ、なのはさん！！」

眩い桜色の巨大な魔力翼が展開され、ブラスタービットからも魔力が展開されていた。
そして反対方向でも、白色の魔力が展開され、同じくブラスタービットが展開され魔力が集まっていた。

「「全力……全開　！！」」

「「スターライト……」」

「「ブレイカーーー！！」」

桜色と白色の魔力が合計7方向から発射され、ヴィヴィオに放たれた。
ヴィヴィオは苦痛に耐えているが、まだレリックは現れない。

「まだか……このままじゃヴィヴィオは耐えられないぞ！！」

《もう少しです……見てください！！》

すると、ヴィヴィオの胸元にレリックが出現した。

「ようやく……出てきたか……」

しかし、レイジングハートがヒビだらけになり、もう限界が近づいていた。
プリムはフレームは強化してるが、レイジングハートは複雑な機構のため、フレームの強化が難しく、プリムほど強化が出来なかった。
さらにブラスター3で強化された、なのはさんの魔力が強力なため、それに耐えきれなくなっていた。

「レイジングハート！！」

《マスター、私にかまわず、このまま撃ってください》

「けど！！」

《レイジングハートのいうとおりですよ。ここで止めたら、レイジングハートはきっと後悔します！！　肝心なときに力になれなかったって……あんな思いをするのも、させるのも、もう沢山です！！》

かつて私は、ティアナさんを助けることが出来なかった。

そんな思いをこの二人にはさせたくない……

《なのはさん、レイジングハートを信じるなら、自分の相棒を信じて全力で撃ってください！！》

「……わかったよプリム。レイジングハートお願い、わたしに力を貸して！！」

《もちろんです！！　いっしょにヴィヴィオを助けましょう！！》

「……ありがとう……レイジングハート……」

もう、なのはさんにもう迷いはなかった。

最高の相棒達の思いに応えるためには、ヴィヴィオを救うことだ！！

「「ブレイク……」」

「「シューーート！！」」

「あああああっっっっ！！」

レリックが砕けると同時に、大爆発がおこり、ヴィヴィオが居たところに巨大なクレーターが出来ていた。
煙がまだはれないので、クレーターの中の様子はまだ分からなかった。

なのはさんはレイジングハートを杖代わりにして何とか歩いていた。
俺も何とか歩くことは出来るが、もう限界だった。

「ヴィヴィオ……」

「来ないで……二人とも……」

俺たちの目に映ったのは、ヴィヴィオが自分の力で立とうとしている姿だった。
何度も転んでいたが、それでも諦めようとせず、何度も立ち上がろうとしていた。

「ひとりで……たてるよ……」

「あ……ああ……」

「強くなるって……約束したから……」

なのはさんも俺も涙が止まらなかった。

「ヴィヴィオ！！」

なのはさんは、自分の力で立ち上がったヴィヴィオを抱きしめていた。
俺もそばに行ってやりたいが、今はそっとしておこう。

やっと……絆を取り戻したんだからな……

＊　　＊　　＊　　＊

対ゆりかご前線指揮所となっているアースラブリッジでは、ゆりかごの異変が観測されていた。
詳細データを計測していた、操舵室のルキノが、報告を上げてくる。

『ゆりかご船速低下、上層速度激減！！』

『周りに張られていたバリアも弱まってきています！！』

「このまま……終わってくれれば良いんだけど……」

リンディは、何か嫌な予感が頭から離れなかった。
そしてそれは、現実のものになろうとしていた。

＊　　＊　　＊　　＊

『聖王陛下、反応ロスト、システムダウン』

俺たちがヴィヴィオを抱えてクレーターから出てくると、艦内に警告音が鳴り響いていた。

「なのはちゃん、フィル！！」

「「はやてちゃん　（さん）！！」」

『艦内復旧のため、全ての魔力リンクをキャンセルします』

次の瞬間ＡＭＦ濃度がさらに高くなり、なのはさんはフィンが維持できなくなり、はやてさんもリイン曹長とのユニゾンが解けてしまった。

『艦内の乗員は休眠モードに入ってください』

＊　＊　＊　＊

フレイム・グロウを消滅させ、少しの休憩を取った後、全員集合した。
フレイム・グロウを何とか消滅させたが、こっちも大きなダメージを負ってしまった。
ギンガさんは前線でスバルやエリオのフォローをしながら戦っていたため、ダメージもかなり負ってしまった。
ルーテシアも戦えないほどじゃないけど、かなりの疲労があった。
そこにアルトがヴァイスと一緒にヘリでやってきた。

「ヴァイス陸曹！！　怪我は大丈夫なんですか！！」

「まあな……今はそんなことより、どうやら船の上昇は抑えられたみてえだが、あの中じゃまだ、戦いが続いてんだ。突入した隊長たちと、連絡がつかなくなったらしい」

「「「「「ええ！！」」」」」

「インドアでの脱出支援と救助任務。陸戦屋の仕事場だぜ！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「でも……ゆりかごって、もう、かなり浮上しちゃってるんですよね。ヘリでそこまで行くの無理なんじゃ？」

「なあに心配するな、このＪＦ７０５型は、ちょいとスペシャルチューンしてあってだな。ゆりかごが軌道ポイントに到達していなか

ったら何とかなる」

このＪＦ７０５型はフィルがスペシャルチューンをしてある機体だ。こんな事もあろうかと思ってではないが、かなりの悪条件でも飛べる優れものなのだ。

フォワード達を乗せたヘリは、フィル達を助けるべくゆりかごへ全速力で向かった。

# epilogue　約束の空へ

「ダメです、魔力結合できません！！　通信も！！」

「しゃあない……歩いて脱出や……」

「でも……なのはさんとフィルが……」

「はぁ……はぁ……大丈夫、歩けるよ……」

「俺も大丈夫です……」

ブラスター3を使ってしまったなのはさんは、その反動で疲れ果ててしまっていた。

レイジングハートを杖にして、やっと身体を支えているような状態だ。

俺もブラスター3は使ったが、かろうじてまだ戦える。

《乗員は所定の位置に移動してください……繰り返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや！！」

俺たちはなのはさんがぶっ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

それに俺はここで、まだやるべき事がある。

「ウインド・ブレス！！」

「「「「きゃあぁぁぁ！！」」」」

ウインド・ブレスで、なのはさん達を吹っ飛ばしたが……

「くぅぅぅ……」

「はやてさん！！」

はやてさんが、俺のジャケットの端をつかみ、吹っ飛ばされないようにしていた。

なのはさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は隔壁が閉じる前に出すことが出来たが、隔壁が閉鎖されてしまい、はやてさんを脱出させることが出来なくなってしまった。

「「フィル！！　はやてちゃん！！」」

＊　　＊　　＊　　＊

地上本部中央タワー

別任務で離れていたシグナムとアギトは、その任務が終わったため、アースラの護衛に向かうことになった。
任務は、アースラ発進後にレジアス中将が、最高評議会の手によって拘束され、連れさらわれてしまったのだ。
そのことをオーリスより通信を受けた六課は、派遣者としてシグナムとアギトを選んだ。
地上におりたシグナム達は、中将直属の部隊とゼストと合流した。
ゼストはこの事をオーリスより知り、オーリスと部隊の隊長の手により一時的に釈放された。

彼らと一緒に救出に向かった先には、数多くのガジェットが待ちかまえていた。
だが、ガジェットなど彼らの手にかかれば、そんなに手こずる相手ではなかった。

無事救い出したのだが、そのとき背後から、レジアスを殺そうとしたガジェット?型が現れ、レジアスをかばい、ゼストが戦死してしまった。

元々レリックウエポンの試作機とされていた彼にとって、どのみち長くなかったのだ。
親友を救うことが出来たゼストの顔は安らかなものだった。

レジアスのことを彼らに任せた後、シグナム達はアースラに合流するためにここに戻ってきた。

「アギト。準備はいいな……」

「ああ……死んでいった旦那のためにもやってやる!!」

『ユニゾン・イン!!』

二人の身体が灼熱の炎に包まれ、強い光を放ち始めた。

＊　＊　＊　＊

ゆりかご周辺空域に到達した、ヴァイスの駆るＪＦ７０５。
フィルが改造したこいつは、ヘリと呼べるようなシロモノではなかった。
ローターはあくまでも低空用と、ヘリとして登録するために付いているだけで、既に用を成していない。
このヘリは魔導エンジンが、無理矢理搭載されているのである。
この魔導エンジンは、アースラの新型エンジンを作るときに試作したもので、いくら大出力が得られると言っても、ヘリなどに搭載したら、自殺装置以外の何物でもない。まさに空飛ぶ棺桶である。
だから、アルトが操縦するときはリミッターがかかっていたが、ヴァイスが操縦するとなると、リミッターは全解除できる。
というよりこの高度になると、アルトの操縦技術じゃ追いつかないのだ。

そして、ヴァイスは今、カーゴルームからストームレイダーを介しての遠隔操縦を行っていた。

「いいか。船の中は、奥に進むほど強度のＡＭＦ空間だそうだ。ウイングロードが、届く距離まで寄せてやる。そいつで突っ込んで、隊長たちを拾ってこい！！」

「「はい！！」」

なのは達救出にはフォワードの中で、比較的軽傷のスバルとティア

ナが行くことになった。
重傷のギンガとルーテシア、軽傷だが体力と魔力を使い切ってしまった、ライトニングコンビはここに残ることになった。
それにバイクを運転できるのが、この二人しかいなかったのだ。
ちなみにスーパーサンダーはティアナが運転することになった。

「ごめんなさい……肝心なときに……」

「「「すみません……」」」

「いくぜ……ストームレイダー！！」

そう言って、ライフルモードのストームレイダーを構えた。
魔法弾は、確実にガジェットのボディへと吸い込まれていく。
ヴァイスの命中精度は以前と全く変わらなかった。

「前に言ったな……俺はエースでも達人でもねえ。身内が巻き込まれた事故にビビって、取り返しの付かないミスショットもした。死にてえくらい情けない思いもした……それでもよ……」

《Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｂａｒｒｅｔ》

ストームレイダーがカートリッジを三発ロードし、高密度の多重弾殻弾頭弾を生成する。

「こんな俺でも……後輩達の道を作ってやるくらいのことは出来るんだよ！！」

発射された弾丸は寸分違わず、砲台として配置されていたガジェット？型の丸い巨体の中心を貫いた。

「よし！！　行け！！」

「はい！！」

「ウイングロード！！」

カーゴルームの床に、強い輝きを放つ、水色のベルカ式魔法陣が生成され、そこから一直線に、ヴァイスが確保した突入口に向かってウイングロードが伸びる。

と同時に、ティアナはサンダーのスロットルを全開にした。

「「Ｇｏ！！」」

スーパーサンダーは、勢いよくヘリから飛び出し、ゆりかご内部に突入した。

＊　　＊　　＊　　＊

「はやてさん、なんで！！」

「フィル……あんた、死ぬつもりやったろ……」

「な……何を言ってるんですか？　俺一人だったらワープで出られたんですから、そんなことは……」

「嘘やね……」

はやてはフィルの嘘を見破っていた。

ここに来る前、ユーノからゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシェルではゆりかごを破壊できないと聞かされてい

たのだ。
そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていたのだ。

「そうだったんですね……ユーノさんが……」

「馬鹿や……何で一人でやろうとしたんや……」

「今魔力が使えるのは俺だけです。なのはさんもブラスターを使ってしまい戦闘不能だし、フェイトさんもいない……だから……」

「……私じゃ、駄目なんか……フィルの役にはたたんか……」

「はやてさんがラグナロクを使えれば、良かったんですけど……」

「正直、厳しいな……ラグナロクは……」

リインとユニゾン出来ていれば、もしかしたら何とかなったが、リインも外にいる以上それは望めない。
それにさっきもユニゾンアウトしてしまったことから、おそらくユニゾンは出来ない。

「やっぱり……俺がやります……」

そう言ってフィルが取り出したのは、銀色のカートリッジだった。

《駄目です!!　マスター本当に死んでしまいます!!　『スパイラル』だけは使わないって約束したじゃないですか!!》

「なんや……そのスパイラルってのは？」

《スパイラルモード……ブラスターの最終形態……体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……間違いなく……死にます!!》

「そうだな……だけど、ここでコアを破壊しなかったら、全てお終いなんだ!!」

そう言って、カートリッジを挿入しようとしたとき……

「駄目!!」

俺の手からカートリッジを奪い、自分の杖でカートリッジを破壊してしまった。

「なんて事を！！　カートリッジはあれしかないんですよ！！」

「フィル……」

はやてさんの目には涙がこぼれていた。

「自分が犠牲になるのは、絶対にあかん！！　そんなことは、私が許さへんよ……」

「はやてさん……」

「さっき、私がラグナロクを使えれば破壊できるって言ったよね。だったら、フィルが私をサポートしてくれれば……」

「だけど、はやてさんが魔力を使えなければ……はやてさんのデバイスはＡＭＦ対策の処理をしてない」

ＡＭＦの処理は俺とティア、フェイトさん、そしてなのはさんのデバイスにしか付けられなかった。
このシステムはかなり複雑なため、大量に作れず、結局４つしか完成させられなかった。

さらに、これはインテリジェントデバイスにしか搭載が出来ない。
シュベルトクロイツはアームドデバイスだった為、付けられなかったのだ。

《だったら、はやてさんが私を使って、ラグナロクを撃ってください！！》

「そっか！！　その手があったんや！！」

《だけど、ＡＭＦの影響で、本来のラグナロクの威力は、出ないかもしれません……》

「それだったら……これを使って、俺も撃つ……」

《これは！！　クロスミラージュ！！》

取り出したのは、未来でティアに託されたクロスミラージュだった。
これにもプリムと同じ、ＡＭＦ対策は施してある。

ブラスターを使って、俺もスターライトブレイカーを撃てば……

「きっとティアも……力を貸してくれると思います……」

『そうよ……あんたが、幸せになるためだったら、いくらでも力を貸してあげるわよ。だから、精一杯やりなさい！！』

「ティア！！」

「どうしたんや、フィル？」

「今……ティアの声が……聞こえた気がしたんです……」

「そっか……」

死者の声が聞こえたなんて非現実的なことなのに、はやてさんは俺の言うことを馬鹿にはせず、きちんと聞いてくれた。

「わかるよ……私も昔、大切な人を亡くしたから……」

「リインフォース……さん……ですね……」

「うん……知ってたんやな……」

「少しだけですけど……」

「だから、私はフィルの言うこと馬鹿にしたりせんよ……私もそう思うときがあるから……リインフォースが話しかけてくれて、力を貸してくれるって……」

「ありがとう……はやてさん……」

プリムをブレイズモードに変形させ、はやてさんに託した。
俺もクロスミラージュを同じくブレイズモードにした。

＊　　＊　　＊　　＊

『小型航空機、地上に降下しています！！　空戦魔導師、誰かいないか！！』

アースラ操舵室で通信を受け取ったルキノは、検索を開始する。

「該当地点で、今動ける魔導師は……あっ！！」

「います！！　機動六課ライトニング２、シグナム二尉！！」

「この声、ルキノか」

『はい！！……あ、あれ？　シグナム副隊長、そのお姿は？』

艶やかなピンク色だった髪は色素が抜けたような淡い色に、マリンブルーだった瞳も、魔力光と揃いのラベンダーに。騎士甲冑も、籠手の色がシルバーからゴールドに、甲冑自体も濃いピンクを基調としていたのが、青紫色を基調としたものに変わっていた。

そして何より、あふれ出す魔力が、２対４枚の羽となって背中から生え、轟々と燃えさかっていた。

「ああ……アギトとユニゾンしているからな……お前は初めて見るんだったな……現在位置で迎撃する」

『はい！！』

シグナムの、そしてアギトの見据える先には、ゆりかごから発進してきた、大量のガジェット。

『機影４８……まだ増える』

「やれるか……アギト」

『やれるさ……猛れ炎熱、烈火刃！！』

「レヴァンティン！！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

シュランゲフォルム……鞭状連結刃と化したレヴァンティンに、更にアギトの炎が上乗せされ

「おおおおお！！」

『おおおおおっ！！』

レヴァンティンを一閃すると、向かってきたミサイルは、それを発射したガジェットもろとも斬り捨てられた。

「剣閃烈火！！」

アギトと共にかざしたシグナムの左手に、剣を模した炎が形作られる。

そして……

『火龍』

「……一閃！！」

勢いよく左手を振り抜くと、二人の炎は、空を斬り裂いて両断した。
次の瞬間、クラナガンの地上本部へと向かっていたガジェットは、
その全てが爆散し、消滅した。

『き、機影５０　…一瞬で、全部撃破……』

唖然とするルキノの報告を受けながら、シグナムはレヴァンティン
を剣状のシュベルトフォルムに戻すと、
何かをかみ締めているかのように大きく息を吐き、軽く身を震わせ
た。その艶やかに潤んだ瞳は、恍惚と虚空を見つめていた。

「やっぱり……いいものだな……お前とのユニゾンは……不思議と
心が温かい……」

「アギト……？」

『なんでもねえ、なんでもねえよ！！』

アギトはシグナムの中で、ぼろぼろと涙を零していた。
記憶など、とうの昔に失くしてしまった。自分の名前はおろか、きっといたはずのロードのことさえ、何ひとつ覚えていない。ルーテシアやゼストに救われてからも、ずっと心に、ぽっかりと大きな穴が開いたままだった。
フィル達に助けてもらってから、シグナムと出会い、ようやく巡り会ったのだ。

『距離４５０、第二編隊来ます！！』

ルキノからの通信が入り、遠くを見据えると、ガジェットの第二波が飛翔しているのが確認された。

「ああ……行くぞアギト」

『おう、シグナム！！』

＊　　＊　　＊　　＊

ヴィータは血塗れのまま、グラーフアイゼンを振り下ろし、キューブ状のスフィアを破壊した。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「無茶です、ヴィータ三尉！！」

「うるせぇ！！」

ヴィータは乱れた息を整えながら、合流していた突入隊の魔導師二人に言った。

リンクを完全キャンセルするＡＭＦによって、ヴィータもあとの二人も、魔力が使えなくなっている。

デバイスはかろうじて通常フォルムをとれているが、三人の中で、魔法なしで敵と戦えるのは、ヴィータだけだ。

そして、砕けていたはずのグラーフアイゼンが元に戻っているのは、

夜天の書の主であるはやてが現れたために、通常行動が可能なレベルにまで回復してもらえたからだ。

何とか、奥に進もうとしていたヴィータの耳に、バイクのエンジン音が聞こえてきた。

「な、なんだ！！」

「ヴィータ副隊長、ご無事で！！」

ティアナとスバルがスーパーサンダーに乗って、向かってきているところだった。

「なのはさんと八神部隊長達の救出、行ってきます！！」

「ここまでの通路はクリアになってますから、早く脱出してください！！」

ここまでの状況を説明し、ティアナたちはヴィータたちを追い抜いていった。

「か、彼女達は？」

「うちの新人達だよ。あたしらは邪魔にならねえように離脱すんぞ」

「は、はい」

ヴィータたちは、ティアナたちが侵入してきた突入口へと歩き始めた。

＊　＊　＊　＊

「プリム、ごめんな。ほんまに迷惑をかけて……」

《大丈夫です。はやてさんは、ラグナロクの術式を展開することだけを考えてください。ＡＭＦのキャンセルや細かいサポートは、全部私がやります！！》

「ほんまに、ありがとうな」

《礼を言うのはこっちです。はやてさんのおかげで、マスターがスパイラルモードを使わなくて済んだんですから。もし、あの時一人だったら……間違いなく使ってました……》

実際フィルはその覚悟があって、私達を吹っ飛ばして外に出そうとしたのだから……
私があの時、咄嗟にフィルのジャケットをつかんでなかったら……

「プリム……」

《はやてさん、絶対成功してみんなで帰りましょう。そのときこそマスターは、本当の意味で解放されるんです！！》

「せやな……みんなで生きて帰って、この事件を終わらせる……フィルがたどった未来はここで変わるんや！！」

＊　＊　＊　＊

「クロスミラージュ……俺に力を貸してくれ……」

クロスミラージュ……かつてティアが託してくれたデバイス。
そして、ティアの形見……

《もちろんです。私はあの時……相棒であるティアナを救えなかった……》

「クロスミラージュ……お前……」

そっか……お前、ずっと後悔してたんだな。
ティアを死なせてしまったことを……

《フィルさん絶対成功させて生きて帰りましょう。あなたを待っている人のためにも……》

「……そう……だな……」

「やるで、フィル！！」

「はい！！」

俺たちは玉座にあるコアに向けて銃口を向けた。

はやてさんはラグナロクを、俺はスターライトブレイカーの発射態勢に入った。

俺もはやてさんも魔力色は白色。

違うのはミッド式かベルカ式の違いだった。
プリムは女神が古代ベルカ式の魔法術式は組み込んであると言っていた。
だからはやてさんが使うことも可能なのだ。

「響け、終焉の笛……ラグナロク！！」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！　貫け……閃光！！　スターライト……」

はやてさんは銃口にベルカの魔法陣が、俺はミッドの魔法陣が展開されていた。
やはり2度もブラスター3を使うのは厳しい。

でも、はやてさんも慣れないデバイスで必死でやってるんだ。
俺が泣き言を言ってられるか！！

カートリッジをロードすると魔力はさらに増大した。

これが最後だ。

この一発に全てを込める！！

「「ブレイカーーー！！」」

二つの光は一つとなり、コアに一直線に放たれた。

そして……

二つのブレイカーが命中すると、コアは木っ端みじんに砕け散った。
ラグナロクとスターライトブレイカーのWパワーは半端でなく、コアだけでなく壁そのものも消し去っていた。

＊　　＊　　＊　　＊

「何!!　今の揺れ!!　半端じゃなかったけど?」

「ええ……これは!!　魔力が結合できる!!」

「本当、ティア!!」

「間違いないわ。でも、どうして?」

今まで全然駄目だったのに、突然ＡＭＦが消滅した。
どういう事なの?

《分かりません……でも、相棒達の反応はあります!!》

「ということは、フィル達は生きてるって事ね!!」

「そうだよ!!　急ごう!!」

スーパーサンダーのスロットルを全開し、フィルの元に急いだ。
途中で出口に向かっていたなのはさんとヴィヴィオ、リイン曹長に会い、玉座の間の様子を聞くことが出来た。
フィルは最初、自分以外の人間を脱出させるつもりだったが、八神部隊長がそれに気づき、自分も残った。
本当は何とか中に入ろうとしたが、魔力が使えない状況と、ヴィヴ

ィオのこともあって出口に向かっていたのだ。
そして、この揺れは玉座の間にあったコアを破壊したからだと、リイン曹長が話してくれた。
それに、ＡＭＦが消えた今、あいつが自力で脱出するのは可能だ。

ゆりかごも崩壊し始めて、このままだとあたし達も生き埋めになってしまう。

「とにかく急いでここを出ましょう！！」

「はやてちゃんとフェイトちゃんのことが気になるけど……ここでみんな死ぬ訳にはいかないね。フィルのことを信じて、わたし達はここを脱出しましょう！！」

「「「はい！！」」」

あたし達はフィルが脱出することを信じ、急いでゆりかごを出ることにした。

＊　＊　＊　＊

「……もう……だめかな……」

リミットブレイクの影響で、この場から動くことが出来ないほど疲弊していた。
ゆりかごの崩壊も酷くなってきていて、この場もかなり崩壊が始まっていた。
そして天井が崩れ、頭上に落下してきた。

「ごめんね……フィル……」

《Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

天井の下敷きになる直前、一条の白き閃光がフェイトを間一髪のところで助けた。
実はワープで移動し、目にしたのは天井の下敷きになる直前のフェイトの姿だったのだ。
フィルは残る魔力でソニックムーブを発動し、フェイトを救出したというわけだ。

「フィル！！　はやて！！」

「何とか……間に合ったな……」

「フィル……本当にフィルなんだね！！　もう会えないと思っていたんだから！！」

泣きながらフェイトさんは、俺の胸を叩いていた。
叩かれているところは、それほど痛くない。
だけど……それ以上に心が痛い。

「……はやてさんが、止めてくれたんだ。スパイラルを、使おうとした俺を……」

フェイトさんの魔力を失った俺には、スパイラルを使うしか残されていなかった。
だから、あの時フェイトさんに別れの言葉を言ったんだ。

「そうだったんだ……ありがとう、はやて」

「礼は後や……今は一刻も早く出ないと！！」

「そうだね……みんなは、どうしたかな？　通信してみるね」

フェイトさんが通信すると、ティアが応答した。
どうやら六課メンバーは俺たち以外、全員ヴァイス陸曹のヘリにいるようだ。

「じゃ、行きますよ。二人とも、しっかり捕まってください！！」

「「うん！！」」

そう言って、フェイトさんが左側に、はやてさんが右側にそれぞれぎゅっと抱きついた。

これが最後のワープだ。

俺はみんながいるヘリに向けてワープをした。

＊　　＊　　＊　　＊

『内部に突入した魔導師、第一隊から第四隊まで退避。最深部に突入した機動六課メンバーも全員ヘリ内に帰還』

「ふぅ……」

はやてと交代したリンディは安堵の溜息をついた。

「いよいよ……これの出番ね……」

「アルカンシェル・ノヴァ……発射準備！！」

リンディの声でブリッジスタッフが、それぞれの役割を始めた。

「アルカンシェル・ノヴァ、バレル展開！！」

アースラの前方に魔力が集まり始め、巨大なエネルギーとなっていった。

何しろアルカンシェル・ノヴァは通常のアルカンシェルの3倍の威力だ。

下手に撃ったら、地上に被害が出てしまう。

「ゆりかごが成層圏に入ると同時に発射します。射程圏にいる六課メンバーは早急に退避してください！！」

アースラからの通信を受け、ヴァイス陸曹の駆るヘリは全速力で射程圏から離脱した。
同時にリンディも発射スイッチにキーを差し込んだ。

「六課メンバー、射程圏より離脱。ゆりかご成層圏に突入」

「アルカンシェル・ノヴァ……発射！！」

キーをひねると、巨大な魔力がゆりかごに放たれた。
命中するとゆりかごを中心にブラックホールが発生し、爆発するのではなくそこを中心に飲み込まれていった。

そしてブラックホールが消えると、ゆりかごも完全に消滅した。

『ゆりかご撃墜！！　任務完了です！！』

ルキノからゆりかご撃墜の通信が入ってきたが、それを聞いていたのはシャマルとザフィーラ、そしてリインだけだった。
他の全員は多大なダメージと極度の疲労で、既に意識を手放して夢の中だ。
特に隊長陣とフィルは、リミットブレイクや最大クラスの魔法を使った反動で死んだように眠っていた。

「本当に……みんな、おつかれさま……」

レリック事件をきっかけに始まった今回の任務……

フィルが経験してきた未来では、みんな死んでしまったが、こうして無事に全員生きて帰ってきました。

いくつもの出来事の絡み合ったこの事件が、ジェイル・スカリエッティ事件、またはＪＳ事件と呼ばれるようになったのは、事件が終わって、ずいぶん経ってからのこと……

＊　＊　＊　＊　＊

新暦７５年　１０月中旬

機動六課の隊舎も復活し、なのはさん達の怪我も回復し、俺たちは再出発することになった。
それを記念して今日は六課食堂で事件解決記念パーティーをすることになった。
はやてさん曰く、本当はもっと早くやりたかったのだが、俺がブラスターの反動のせいで、入院期間がかなり長くなってしまったので、今日まで延ばしていたとのことだ。

俺のことは気にしないで、みんなで楽しんでくれって言ったのだが、それを言ったら、隊長陣全員に滅茶苦茶怒られてしまった。

特にフェイトさんはその場で泣き崩れてしまい、泣きやんでもらうのに大変だった。
さらに「さん」付けで呼んでしまったから、さらに大変なことになってしまった。

事件が解決してからは、フェイトって呼ばないと、すねちゃって返事もしてもらえなくなってしまった。
あの時は最後だと思って呼んだけど……

その罰じゃないけど、今日の料理とデザートは、はやてさんと一緒に用意する羽目になった。

「えっと……今日は明日より六課が再出発することと、先日の事件の労いもかねて、ささやかながらパーティをすることにしました。今日は無礼講ですので、みんな楽しんでください。長い挨拶は私も嫌いなので、さっさと乾杯してしまいましょう……というわけで、乾杯！！」

『乾杯！！』

乾杯の後、それぞれグループに分かれてパーティーを楽しんでいた。

フォワード陣はエリオとスバルとギンガさんが大食い競争は始めてしまい、ティアとキャロが少し引いてしまっていた。

お前らな……大食い大会をやるなら、どっか行って賞金でも稼いでこい！！

なのはさんはヴィヴィオと一緒にほのぼのと楽しんでいた。

フェイトはどうしても外せない仕事があってここにはいなかった。

うん、あそこを見ていると俺もなごむ……

はやてさんは八神家全員集合状態になっていて、大家族といった会話をしていた。

ここでも狼形態のままのザフィーラさんが、哀愁を誘っていた。

ザフィーラさん……ご愁傷様です……

アルトさん達はロングアーチメンバーと一緒になって酒盛りをやっていた。

俺の感があそこは、深く関わらない方が良いと警鐘を鳴らしていた。

ルーテシアは体調が回復したメガーヌさんと一緒に楽しんでいた。
家族が一緒になれて本当に良かったよ。

さてと、俺も料理を作ってばかりでなく、みんなの所に挨拶にでも行くか……
まずは……

＊　　＊　　＊　　＊

フォワード　グループ

「あっ……フィルさん、お疲れ様です」

「お疲れ、フィル」

ここで俺を出迎えてくれたのは、ティアとキャロだった。
スバル達は食べ物の方に夢中だった。

「お疲れさん……ていうか、あの三人まだ食べているのか。俺とはやてさん、かなり作ったんだけどな……」

「エリオ君、フィルさん達の料理がおいしくて、夢中になってるんですよ。わたしもフィルさんみたいに、料理が出来たら手伝えたんですけど、簡単なのしかできないから……」

「その気持ちだけで十分だよ。ありがとう、キャロ」

「あ、あの……フィルさん、これ、良かったら食べてみてください……」

そう言って渡してくれたのはクッキーが入った袋だった。
かわいいラッピングがしてあって、いかにもキャロらしい物だった。

「これ、キャロの手作り？」

「はい……ちょっと不格好ですけど……」

「そんなことないよ。綺麗に出来てる……食べて良いかな」

「はい！！」

「じゃ、いただくね……うん、美味しい！！」

キャロの作ったクッキーは、バタークッキーとチョコクッキーだっ

た。
甘さもきつくないし、食べやすいものだった。

「よかったです。喜んでもらえて……」

キャロと話していると、大食い大会をしていたエリオ達を止めに行ったティアが、二人を連れて戻ってきた。

「あっ、フィル、お疲れ！！」

「お疲れじゃねえだろ！！　お前ら食い過ぎだ！！」

「良いじゃない、誰にも迷惑かけてるわけじゃないんだから！！」

「思いっきり迷惑だ！！　料理作る俺の身にもなれ！！」

お前らの料理を用意するに、朝早くからずっと作ってたんだぞ！！
それとギンガさん、あんたが食べるのは知ってたけど、一緒になって食べないで、お願いだからスバルを止めて！！

「ごめんなさい……フィルさん……」

「エリオは気にしないで良いぞ。お前はもう少し子供らしく、甘えても良いんだからな。ちょっと食べすぎではあるがな……」

「ずるい！！　エリオだけ何で！！」

「お前とギンガさんを基準にしていたら、俺はずっと参加できなくなるわ！！　おかしいから！！　３０人前用意して３０分持たないなんて！！」

エリオだって精々５人前だったんだぞ。
あんたらの胃袋、どうかしてるぞ。

「ごめんね……フィルの料理久しぶりだったから、つい……」

「食べてくれるのは料理人として嬉しいですけど、ちょっと疲れたかな……」

「本当にごめん。今度私がフィルに、手料理ごちそうするから」

「じゃ、そっちに行ったときにお願いしますね。楽しみにしてますよ！！」

「任せて！！　最高の料理で、もてなすから！！」

ギンガさんの料理は、クイントさん直伝なのでかなりうまい。

「そう言えばティア、お前ちゃんと食べてるか。エリオ達の面倒見ていて、食べてないだろ」

「あんたほど忙しくなかったから、ちゃんと食べてるわよ。それにしてもまた腕上がったわね」

「退院してからヴィヴィオにせがまれて、リハビリ代わりに、ずっとなのはさん達の食事作ってたからな……」

「……いいな……なのはさん達。あたしも食べたかったかな……」

「ティアならいつでも良いよ。言ってくれれば何か作ってやるよ」

「……今度……あたしだけのために……その……ケーキ……作って欲しい……以前、あたしの誕生日に作ってくれた……あのケーキを……」

「分かった……今度のティアの誕生日に作ってやるよ……」

「ありがとう……でも、ちょっと悔しいな。フェイトさんも、あのケーキを食べたことあると思うと……」

「無いぞ。あれは大切な思い出の物だからな。ティアにしか作ってないぞ」

誕生日にティアに作ったケーキは、ティアにしか作ってない。
あれはティアとの大切な思い出だからな……
ちなみにそのときに作ったケーキはレアチーズケーキだ。

「そっか……嬉しい……」

「楽しみにしててくれ……いけね、他の所にも行っておかないと……」

「そうだね。さっきから部隊長やアルトさんが手招きしてるね」

「……出来るだけ、あのグループは避けたいのだが……はぁ……」

特にアルトさんとシャーリーさんの所。あそこは絶対酔っぱらいの集団だ。
酔っぱらいの相手は疲れんだよな……

「……終わったら、愚痴聞いてあげるから、頑張ってきなさい」

「ありがとう……お前くらいだよ、そう言ってくれるのは……」

ティア達の所を離れ、次のグループの所に行くことにした。

＊　　＊　　＊　　＊

メガーヌ・ルーテシア

「こんばんわ、メガーヌさん、ルーテシア」

「こんばんわ、フィルさん……」

「ごきげんよう、フィル」

本当なら六課メンバーとは違うのだが、はやてさんが、『無礼講だから、ある程度は身内連れてきて良いよ』という鶴の声で、メガーヌさんが来ていた。

「ここにいたんだ、ルーテシア」

「うん、お母さんと話してたの……滅多に会えないから」

「そうだね、メガーヌさんもまだ、完全に回復した訳じゃないからね」

日常生活には支障ないくらいになったが、魔導師として復帰するにはもう少し時間がかかる。

「メガーヌさん、メディカルポッドで大分回復してますが、ちゃんと通院はしてくださいね」

「ええ、でも、本当にありがとう。こうして親娘で一緒の時間を過ごせるのも、あなたのおかげよ」

「俺も、こうして二人が穏やかな時間を、過ごせるようになって良かったです……」

「フィルさん……本当にありがとう……フィルさんがあの時教えてくれなかったら、今でも私は……」

そう言ってルーテシアはうつむいてしまった。
あの時のことを思い出してしまったのだろう。

「だから、気にするなって言ってるだろ。あれは俺が勝手にしたことなんだから……な……」

「うん……」

「まぁ……悪いと思うなら……スバルとエリオの暴走を止めてくれ……特にエリオはお前の彼氏なんだから、責任を持って止めてくれよ」

「え……えっと……その……あの……知ってたんですか……」

「あれで隠してるつもりだったのか。メガーヌさんを含め、六課のスタッフ全員知ってるぞ」

「あぅぅ……」

ルーテシアは恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまった。
うん、初々しいね。

「げっ！！　アルトさんとシャーリーさんが手招きしていやがる……これ以上、時間稼ぎは無理か」

「それじゃ俺は、あっちが呼んでますので、これで失礼しますね。二人とも楽しんでね」

メガーヌさん達と別れて、いよいよ魔窟とも言うべきグループの一角に行くことになった。

＊　　＊　　＊　　＊

ロングアーチ　グループ

「遅いよ！！　フィル！！」

「そうだよ！！　待ってたんだよ！！」

出迎えたのはアルトさんとシャーリーさんのお祭りコンビだった。
ヴァイス陸曹はラグナちゃんと一緒にいて、こっちには来られないみたいだ。
開始早々にグリフィスさんは潰されてしまい、止める奴がいなくなってしまった。

「ねぇ、フィル。今日こそ教えてよ。どうやって、フェイトさんとつきあうことになったのかを！！」

「アルトさんしつこいですよ！！　言いたくありませんって、何度も言ってるでしょう！！」

「いいじゃない！！　減る物じゃないし～」

「シャーリーさんもいい加減にしてください！！　あんまりしつこいと、お二人のことを『クアットロ』って呼びますよ！！」

「「それだけは勘弁してください！！」」

六課内ではクアットロという名前は、最低最悪という意味を持っている。
この名前を出すだけで、嫌悪感がでるくらいなのだ。

「アルト、シャーリー、その辺にしておけ。お前らだって、いつか彼氏が出来て、そんな風に根掘り葉掘り聞かれたくないだろ」

見るに見かねてヴァイス陸曹が、ラグナちゃんと一旦離れてこっちに来てくれた。

「「は～い」」

「済まなかったな……さっきからこっちのグループに顔出すの躊躇ってたの、こいつらが原因だろ」

「ははは……」

ヴァイス陸曹だけなら別に良いのだが、ゴシップ好きのアルトさんとシャーリーさんが一緒だと、いつも俺とフェイトのことを聞かれる。

あの時のことは、誰にも言いたくはないしな……

「俺はお前とフェイトさんが、どうやってつきあうようになったかなんて、別にかまいやしねえよ。だけどな……」

「フェイトさんのこと……絶対に悲しませるなよ……泣かすなら、嬉し涙だけにしろよ……」

「ヴァイス陸曹……」

「言いたいことはそれだけだ。まだ、行ってない所あるんだろ。こいつらの面倒は俺が見るから行ってこい」

ヴァイス陸曹と別れた俺は、はやてさんの所に行くことにした。

＊　　＊　　＊　　＊

八神家　グループ

「おっそいで！！　何しとったんや！！」

「そうですよ！！　待ってたんですから！！」

「済みません。ちょっと色々なところに行ってましたから。そのかわり、ちゃんとおみやげありますから」

取り出したのは、さっきできあがったばかりのバケツアイスだった。

「まじかよ！！　良いのか、これあたし達で食べて！！」

「試作品なので、味はあまり期待しないでくださいよ」

「サンキュー、リイン、一緒に食べようぜ！！」

「はいです！！　ヴィータちゃん！！」

ヴィータ副隊長とリイン曹長はアイスを持って、別のテーブルに行ってしまった。

「良いのか？　全部渡してしまって」

「あれは、あの二人のために作ったやつですから」

「お前も苦労性だな。今日一日料理を作りっぱなしだし、こうやってみんなの所に顔を出したりと……」

「そうでもないですよ、シグナム副隊長。はやてさんの方がよっぽど大変じゃないですか」

「そうですね。はやてちゃんもフィルも、一人で悩み事とか抱え込んでしまうところとか、本当に似てますよ」

「「シャマル（先生）！！」」

確かに俺もはやてさんも、あんまり人には話さないかも……

「やっぱり……ええな……こうしてみんなで、バカ騒ぎ出来るのって……」

「そうですね……」

みんなとこうして、馬鹿騒ぎできる一時……
こんな時が来るなんて思わなかったな……

「はやてさん、今日はいっぱい飲んでくださいね。明日から、また書類地獄が待ってますよ」

「……うわ……思い出したくなかったのに……」

「頑張ってくださいね。はやてさん」

「フィルのいけず……」

「はいはい、はやてちゃん。あまり飲み過ぎないようにね……」

はやてさんがやけ酒を始めてしまったが、シャマル先生がいるから、適当なところで止めてくれるだろう。

「フィル、はやてちゃんのことは私に任せて、はやくヴィヴィオの所に行ってあげて。さっきから待っているみたいよ」

「あちゃ……なのはさんとヴィヴィオ、かなり待ってたんだな……ヴィヴィオ、もう疲れて眠っちゃってるよ」

「一応顔は出しておきなさい……ね……」

俺はシャマル先生とはやてさんに一言挨拶して、なのはさんのところに向かった。

＊　　＊　　＊　　＊

なのは　ヴィヴィオ　グループ

「フィル、ほんっとうに遅い！！」

「済みません……こんなに時間がかかると思わなかったので……ヴィヴィオの笑顔で、最後癒されたかったから、後にしたんだけど、寝ちゃいましたね」

「うん……ヴィヴィオ、ずっと待ってたんだよ。フィルパパはいつ来るのって、ずっと言っていて大変だったんだから……」

「ごめんな……ヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオの？にそっと触れた。

「そういえばなのはさん、決めたんですね。ヴィヴィオの本当のママになること……」

「うん……」

「これで俺のヴィヴィオのパパの役目は終わりですね。いつか、なのはさんに素敵な相手が出来て、その人がパパになってくれれば……」

「残念だな……フィルなら、ヴィヴィオのパパにピッタリなのに……」

「なのはさんなら、すぐに見つかりますよ。大丈夫です」

「そうでもないよ。だってわたしって管理局内じゃ、鬼の教導官とか、ヴィータちゃんが広めてくれた白い悪魔とか言われてるんだよ……これじゃ、いつの日やら……」

「そんな風に外面だけで見る男なら、なのはさんのためにもヴィヴィオのためにも、結婚なんかしない方が良いです。突き放すようで悪いけど、ちゃんとした相手でなかったら、二人でいた方がよっぽど幸せですよ。ヴィヴィオだって、きっとそう思いますよ……」

なのはさんの外見や、収入だけを見ている男なら止めた方が良い。
絶対不幸になるだけだ。

「やっぱり……優しいよ。そうやって、わたしやヴィヴィオのこと、真剣に考えてくれるんだもの……」

（フェイトちゃん……フィルのこと大切にしなきゃ駄目だからね。でないとわたしが奪っちゃうよ）

時間も経ち、パーティもお開きになり、俺も自分の部屋に戻った。

＊　　＊　　＊　　＊

「何してるの？」

眠れなくてベッドに座っていたら、仕事から戻ってきたフェイトが、俺の部屋にやってきて隣に座った。

「フェイト……か……ちょっと眠れなくてこうしてたんだ」

「……まだ、呼び方慣れてないみたいだね」

「当分は無理かも……」

「ふふっ……駄目だよ。頑張ってちゃんと呼んでね。でないと、またすねちゃうよ」

そう言ってフェイトは俺の肩の上に頭を預けた。
反射的に俺もフェイトの髪を撫でていた。
フェイトはこうされるのが好きで、目を細めて甘えていた。
二人はしばらく無言で寄り添って、何もない時間を満喫していた。

「部屋に……戻らないの？」

「一旦戻ったんだけど、なのはとヴィヴィオがベッドを占拠していて、私の場所がないの」

「……そっか……」

あの二人、よっぽど疲れたんだな……

でも、そのおかげでこうしてられる。
ちょっとだけ、感謝かな……

「……フィル」

そう言って、フェイトは俺を押し倒し……

「……フィル、私を抱いて……」

「……ずっと、我慢してたんだからね……事件が解決するまでは、我慢しよって……一生懸命、自分に言い聞かせたんだから……」

言い終わると、フェイトは顔が真っ赤になってしまった。
そして、俺はフェイトを抱きしめ、今度は俺が上になった。

「……いいんだな」

「……うん……フィルじゃなきゃ……いやだ……」

瞳を閉じ、俺たちはキスをし……

「あっ……」

「……愛してるよ……フェイト……」

「……私も……愛してるよ……フィル……」

フェイトは、俺にギュッと抱きついて……

「……優しく……してね……私……初めてだから……」

「……大切に……するよ……俺も、そうだから……」

俺はフェイトにキスをすると、フェイトは、最初は緊張したが、段々自分からキスを求めてきて、深いキスをしばらく繰り返していた。

そして俺たちは……

二人が、一つになり……

身も心も……結ばれた……

＊　　＊　　＊　　＊

新暦７６年４月２８日　機動六課隊舎

「長いようで短かった一年間、本日をもって機動六課は任務を終えて解散となります。みんなと一緒に働けて、戦えて、心強く嬉しかったです。次の部隊でも……頑張ってください……」

はやてさんの挨拶が終わった後、俺たちは練習場に集められて、そこで最後の模擬戦をした。

まぁ、俺たちらしい終わり方だなと思ったよ。

六課解散後は、それぞれ各地に散らばっていった。

エリオとキャロ、ルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはクロノ提督の口利きで、執務官補佐をすることになった。自分が執務官だったこともあり、教えられるだろうとのことで、クロノ提督の補佐として、クラウディアに配属になった。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式になのはさんの養子になり、名前も高町ヴィヴィオとなり、本人の希望で聖王教会系列の魔法学院に通っている。

なのはさんはＪＳ事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空戦魔導師としての道を選んだ。

戦闘機人の連中は、ギンガさんの更正プログラムを受け、それぞれ管理局内で働くことになった。

何人かはナカジマ三佐が、養子として引き取った。

こんな事、俺がいた世界じゃ、絶対考えられなかったのにな……
本当に、良い意味で歴史は変わったよ。

そして、俺はフェイトの補佐として次元航行部隊に配属になった。
執務官は本当に大変で、いつもフェイトに教わっていた。
でも、絶対執務官になってみせるんだ。

そして数年後……

『おめでとう、フェイトちゃん、フィル！！』

無事執務官になった俺は、フェイトにプロポーズをし、本日結婚式を迎えることになった。
旧六課メンバーもみんな来てくれて、盛大な結婚式になった。
さらに戦闘機人のみんなも来てくれていた。

みんなに祝福される結婚……

こんな時を迎えられるなんて思わなかった。

「……私達……ずっと……一緒だよね」

「誓うよ……俺たちは、ずっと一緒だ……」

俺たちはみんなが見守る中、誓いのキスをした。

不器用で、優しい恋人同士が、永遠の愛を誓い合った。

幸せな……誰よりも幸せな二人……

空は、そんな二人を……

祝福するかのように、晴れ渡っていた……

# キャラ設定資料

設定資料

名前：フィル・グリード
性別：男
年齢：１７歳（逆行前は１９歳）
身長：１７２ｃｍ
髪：黒髪短髪
魔力色：白銀
術式：ミッド式
性格：超真面目、何手も先に考える
出身：ミッドチルダ西部エルセア
所属：時空管理局　本局古代遺物管理部　機動六課　ライトニングスター単独分隊（逆行前はロングアーチ所属）
階級：二等陸士
役職：ライトニングスター単独分隊センターガード
コールサイン：ライトニングスター０
魔法術式：ミッドチルダ式・陸戦Ｂ　（逆行前はＡＡ＋）　（完全解放時：Ｓ＋　（フェイトの魔力を受け継いた為））
（最終決戦時：ＡＡＡ－）
所持資格：災害担当部隊シューター・大型バイク免許・普通自動車免許
§スターライトブレイカー

※使用魔法

未来ではフィルとティアナが使用できる最強の集束砲撃魔法。
限界を超える大出力ゆえに術者とデバイスにかかる負担も大きいため、1発が限度である。
本来なのはは直接ティアナに教えたかったのだが、ゆりかご決戦で戦死してしまい、ティアナは残された手紙とデータで習得した。
その後ティアナに教えてもらい、フィル自身も使える様になった。
そして、なのはに完全版を教えてもらい、使いこなせるようになっている。

§ブラストブレイザー

基本はディバインバスターと殆ど同じで、高密度で圧縮された魔力が減衰することなく対象を打ち抜く、強力な集束型砲撃魔法。
威力は術者の魔力に比例するが、未来ではスターライトブレイカー以外で主力の魔法となっていた。
逆行直後はBランクになってしまっていたので、そう多様は出来ないでいた。

§レストリクトロック

フィルが使える最大最強の拘束魔法。
指定空間内の物体をその場に固定する機能を持ち、密着状態で発動した場合極めて強固な強度を誇る。
状況によって拘束の仕方が異なる。

§ブラストシュート

複数の誘導弾によって空間制圧を行う事を目標として組んだ中距離誘導射撃魔法。
空中に複数の魔力スフィアを形成し、同時に発射する。
ヴァリアブルシュートと同じでＡＭＦを突破する効果もある。
なのはのアクセルシューターと同系統の魔法になる。

§ウインド・ブレス

第１話でスバルの速度に、ブレーキをかける時に使った風系攻撃魔法。
風系の攻撃魔法で、相手の動きを止めるだけでなく、鎌鼬を作り攻撃を行う事も可能。

§ヴァリアブルシュート

攻撃魔法の弾を、ＡＭＦを突破する外殻の膜状バリアでくるんだ多重弾殻射撃。
外部の膜状バリアが相手フィールドに反応してフィールド効果を中和、その間に中身をフィールド内に突入させる。
本来はＡＡランク魔導師のスキルで「射撃型最初の奥義」と言える技術。

§ストラグルバインド

通常のバインドに、対象の魔力の機能を打ち消す効果を込めた捕獲魔法。
通常のストラグルバインドは発生速度や距離・拘束力と言った面は振るわないが、フィルの場合は自分で構成を変更して威力を上げＩＳにも効果が出るようにしている。

§高速転移　（ワープ）

女神に与えられた転移術式。
相手の魔力及び気配を感知し、瞬時にその場所に行く魔法。
戦闘用に特化していて相手に察知されにくい。
一人で使うには魔力は殆ど使わないが、多人数を運ぶ時は魔力を多く必要とする。
おまけに術式が複雑なので、最初の頃はプリムがないと発動が難しかった。
最終決戦前には、完全に使いこなせるようになり、デバイス無しでも行える。

§魔力リミット

女神に力を授かったが、リミッターが掛かっていて、完全に使いこなせている訳ではなく時間制限がある。魔力の正体は、未来のフェイトの魔力で、それがフィルに託された。

§飛行魔法

高々度高速飛行魔法のことを指し、陸士が使える浮遊とは違うものになる。
これは空間把握能力、各種安全装置、必要な魔力の安定維持など、様々な能力が必要となる。
フィルは未来でティアナと一緒にこの魔法をマスターしていた。

§ラウンドシールドリフレクター

ラウンドシールドを鏡面化し、相手の砲撃を跳ね返す。
魔力を多量に使い、術式も複雑なので使いどころは難しい。

§フォトンランサー・ファランクスシフト

フォトンランサーのバリエーションにして、１期時点でのフェイトの最大攻撃魔法。
３０発以上のフォトンスフィアより繰り出される、フォトンランサーの一点集中高速連射魔法。
クアットロに使ったときは、９歳時点のフェイトと同じくらいの物になったが、完全な時ならプラズマランサーで撃つことも可能。
元々消耗が激しい魔法だが、フィルが使った時は出血と傷が酷く、使い終わった後は殆ど動けなくなってしまっていた。

※使用デバイス

プリム　（Ｐｕｌｉｍ）
分類：インテリジェントデバイス　（ストレージデバイス）
本来はストレージデバイスだったのだが、女神の力を受け、インテリジェントに生まれ変わった。
随分と人間くさい面もあり、フィルの精神的な支えになっている。
基本はクロスミラージュと一緒で、この小説では姉弟機という設定になっている。

デバイス時の形状は、外見は基本的にクロスミラージュとそんなに変わらないが、出力は上になっている。そしてストレージ特有の処理速度の速さもそのままなので、両方の良いところを兼ね備えたデバイスといえる。
変形機構はガンモードとダガーモードのみだったが、インテリジェントになりクロスミラージュと同様、ブレイズモードが追加になった。

§待機モード
待機モードは、小さな銃の形になりペンダントになって持ち歩いている。

§ガンモード
通常の射撃時はこのモードで戦う事が多い。連射性能も優れていて小回りもききやすい。

§セイバーモード
インテリジェントになって追加された機構の一つ。
単独戦闘用のモードで、近接戦向けになっている。
クロスミラージュと同様、両端（銃口側とグリップ側）から魔力刃が伸びる。　さらにグリップの周りも魔力刃でガードされている。
ダガーモードと違い、長さもそこそこあり一つの剣となっている。
超圧縮をしてフェイトのザンバーモードに匹敵する威力を持つことが出来る。

§ブレイズモード
同じく追加された機構の一つでプリムのフルドライブモード。
長距離特化型で、ロングレンジ戦闘用の形態。
ガンモードで対処できない長距離戦での牽制・狙撃を行う、遠距離狙撃砲形態。
主に集束魔法とかを使う時に使用する物である。

§フリーダム
魔力を完全解放した時のみ使えるフィル自身のフルドライブモード。
位置的に言うとなのはのエクシードモードに当たる。
なのはのエクシードと同じで一部バリアジャケットも替わるが、防御能力と機動性を高めてる。
決戦前、フェイトの魔力を無くしてしまったが、使用は可能。

§ブラスターモード
ブラスターシステムを使用した、なのはとレイジングハートの、そしてプリムのリミットブレイクモードにして、最後の切り札。

使用者、デバイス、双方の限界を超えた強化を主体としており、その意味ではエクセリオンモードに近い（魔力消費も含め、あらゆる点で超越した）機能を持つ。
フィルとマリーが負担度をかなり減らしたが、それでも、危険性が高く、フェイトは何度も、使用を自重するように、釘を刺していた。

本来の使用方法は、前衛の味方と連携しての後方からの一撃必殺。
長時間連続使用は不向き。

§スパイラルモード
プリムの最終リミットブレイクにして、ブラスターの最終形態。
体内にある生命力を、全て力に変えるシステムで、使用すれば、間違いなく術者の命を奪う、禁断のシステム。その危険さ故、普段は封印されている。
システム封印解除には、特殊なカートリッジが必要になる。

## if　ending　キャロ（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

## if　ending　キャロ

あたし達は、ゆりかごに残されたフィル達を助けに行くため、ＪＦ７０５に乗ってゆりかご制空権まで来たが、突入出来るメンバーはあたしと、後一人が限界だった。
救出して連れてくるスペースの関係上、これでもきついくらいだった。

「ティアさん、わたしを一緒につれてってくれませんか……」

「なにいってんの！！　キャロだってかなりのダメージなんだよ！！　だったらあたしが行く！！」

「スバルさん、ここでスバルさんが抜けてしまったら、誰がルーちゃん達の守りをするんですか。ヴァイス陸曹だって、いつまでも遠隔操作でやるわけにはいかないんですよ」

「だけど……」

「それに、エリオ君達のおかげで、戦えないほどダメージは受けてません。だからお願いです！！　一緒に連れてってください！！」

キャロの目は真剣そのものだった。

今のキャロは、誰にも止められない。

「……分かったわ。行きましょう。キャロ」

「ティアさん！！」

「スバル、ギンガさん達のこと、頼んだわよ」

「任せてよ、ティア！！」

「……キャロ、フィルのことお願いね……」

「ギンガさん……はい！！」

「みんな……キャロに自分の残った魔力を渡して。少しでも力にして……」

ヘリに残るメンバーは、キャロに残った魔力を託した。
自分たちが行けない分まで、彼女に託したのだ。
そのおかげで、キャロはフルパワー状態になった。

「みなさん、ありがとうございます。絶対フィルさん達を連れて戻ってきます！！」

「キャロ、行くわよ！！」

「はい！！」

二人を乗せたスーパーサンダーは、ヴァイスの合図でバーニアを全開にし、ゆりかご内に突入した。

＊　　＊　　＊

「くそったれ……」

クアットロを倒し、ヴィヴィオを救出に成功したフィル達だったが、聖王が失われたことにより、防衛システムが起動してしまい、ＡＭＦの濃度がさらに高くなってしまった。

何とか残っていたメンバーは、隔壁が閉じる前にフィルの機転で、外に出すことが出来た。

フィルが一人残ってやろうとしたのは、玉座の間にあるゆりかごの

コアの破壊だった。
このコアを破壊しないと、バリアが完全に解けず、アルカンシェルが通らないのだ。

なのははブラスターのせいで戦闘不能。
はやて達は、ユニゾンが解けてしまい、戦力にはならない。

それに、元々フィルは死を覚悟してしたのだ。

「砲撃も、斬撃も今のままじゃ通じない……ブラスターもファイナル・リミットまで解放しているってのに……」

ブラスターを解放して、俺のもてる技を全てぶつけてみたが、コアには傷一つ付かなかった。

《マスター……》

「もう……これしかないか……」

フィルが取り出したのは、銀色のカートリッジだった。

《まさか……スパイラルを!!　駄目です!!　死ぬ気ですか!!》

「……元々、ゆりかごを止めるのが、俺の役目だったんだ。それに……」

「俺がいなくなっても、あいつらなら大丈夫さ……」

『バカなこと言わないでください!!』

謎の声がする方向に振り向いてみると、そこにはキャロの姿があった。

「キャロ!!　どうしてここに？」

《転送魔法ですね。それだったら壁とかは関係ありませんから!!》

「はい……ティアさんと一緒に壁の外まで来て、そこから転送魔法の応用でここに来たんです」

「そうだったのか……なのはさん達は無事なのか？」

「ティアさんがみんなを連れて脱出してるはずです。フェイトさんも一緒です……」

「そっか……これで心配することはなくなった。キャロ、お前も早く脱出しろ。転送魔法でみんなの所に帰るんだ」

「嫌です！！　わたしはフィルさんを助けに来たんです。フィルさんが、スパイラルを使うのを、止めに来たんです！！」

「！！」

どうして、キャロがスパイラルのことを知っているんだ。あれは誰にも話してないのに……

《……》

「プリム、まさかお前！！」

《話しました……彼女だけに全てを……》

「何でキャロに話したんだ！！　答えろ！！」

《マスター……分からないんですか！！　彼女の気持ちが！！》

「キャロの……気持ち？」

《そうです！！　彼女はマスターのことを……》

「待って、プリム！！　その先は自分で言うよ」

《キャロ……》

プリムが話そうとしたのを止めたキャロは、自分の口で伝えることにした。
中々切り出せないでいたが、意を決したのかようやく話し始めた。

「……本当は、こんな形で伝えたくはありませんでした。だけど、今伝えなくちゃ、永遠に言えないから……」

「フィルさん……わたし……フィルさんのことが大好きです……誰よりも大好きなんです！！」

キャロの告白に、俺は驚きを隠せなかった。
キャロが俺のことを、好意を持っていてくれてるのは分かっていたけど……

「だから……だから、死んでも良いなんて……いなくなっても、かまわないなんて……言わないでください！！」

キャロは泣きながら、勇気を振り絞って、俺に自分の気持ちを伝えてきた。
そして、真剣なまなざしで、俺の答えを待っていた。

「……ありがとうな、キャロ」

俺はキャロを自分の方へ引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

「俺は、今まで自分のことを愛してくれる人なんて、死んでしまったティア以外いないと思っていた。だから、俺は仲間のためなら、命を捨てるつもりでいた。だけど、それは間違いだったんだな。俺にもこうして思ってくれる人がいたんだな……」

「フィルさん……」

「キャロ……」

俺たちはお互い見つめ合い……

そして俺たちは、どちらからともなくキスをしていた。

「……あ、あの……」

「これが……俺の気持ちだから……いい加減な気持ちで、こんなことはしないから……」

「フィルさん！！」

「キャロ……泣かないで……」

「だって……フィルさんと両思いになれるなんて……思ってませんでしたから……わたしとフィルさんは年も離れてますし……それにわたし……フェイトさん達に勝てる物なんて無いですから……」

「キャロ、恋愛に年齢は関係ないよ。大人だって、相手のことを思いやれなければ、すぐに裏切るし、キャロの年齢くらいの人だって、本当に相手のことを思えれば、俺は良いと思う」

「それと、フェイトさん達に勝てるとか思わないこと。キャロには、キャロにしか無い魅力があるんだから……」

「はい……」

キャロは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
俺もかなり恥ずかしいことを言ってしまい、同じようになっていた。

《あの……ラブコメ全開の所、申し訳ないんですけど、今どういう状況か分かっていますか》

「「あっ！！」」

《まったく……でも、マスターさっきと違って、いい顔してますよ……》

考えてみれば、俺たちは最大の危機なのに……
だけど、プリムもキャロも、そして俺も、もう焦っていなかった。

大切な相棒と、そしてキャロがいれば、どんなことだって大丈夫だから……

＊　　＊　　＊

「フェイトさん！！」

「ティアナ！！　どうしてここに？」

「何とかあの黒竜を片付けて、フェイトさん達の救援に来たんですよ。なのはさん達は先に脱出してますよ」

「そう、よかった……フィルは、フィルはどうしたの！！」

「フィルの方は、キャロが行ってます。後は、キャロを信じましょう……」

「キャロ……」

キャロ……フィルのことをお願いね。
二人とも、絶対一緒に帰ってくるんだよ。

＊　　＊　　＊

「フィルさん、わたしに考えがあるんですけど」

「考えって？」

「ヴォルテールの力を……使うんです」

「ヴォルテールの？　だけど、ここに召喚は無理だろう」

確かに、ヴォルテールの力ならコアの破壊は可能だろう。
だけど、ここにあの巨体は召喚は無理だ。

「ヴォルテールそのものを召喚するんじゃないんです。ヴォルテールの力を借りるんです」

《キャロ、もしかして……》

「はい……わたしがヴォルテールの力をここに召喚します。だけど、わたしには砲撃のスキルはありません……そこで……」

「俺が、プリムを使ってその力を解放する」

「その通りです。だけど、この方法ですと、フィルさんにかなりの負担が……」

「何を今更、ブラスターのファイナル・リミットだって使ってるんだ。それに……」

「約束したしな。ずっとキャロと一緒にいるって……」

「フィルさん……はい！！　ずっと一緒ですからね！！」

召喚魔法の為、キャロは自己ブーストをかけ、両手にはめられたケリュケイオンの水晶が、強い光を放った。
そして、その膨れ上がる魔力は、以前とは比べ物にならないほど強大なものだった。

「天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠の護り手。我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者……竜騎招来、天地轟鳴！！」

ケリュケイオンの放つ光がよりいっそう強くなり、キャロの頭上数メートルに、巨大な魔法陣が描かれ、そして……

「その偉大なる力を我に！！　ヴォルテール！！」

ヴォルテールの力がフィルの方に向かい、その力は、フィルに吸い込まれていった。

「なんて魔力だ……制御するのが精一杯だ……」

《頑張ってください！！　キャロだって苦しいんですよ。これだけの力を召喚して、負担だって大きいんですからね！！》

「キャロ……」

キャロの方を見ると、苦悶の表情を浮かべていた。
キャロも、あの小さな身体でこれだけの力を召喚したんだ。
その負担度はブラスターをつかっているのと、そう大差ない。

「これで決めなきゃ男じゃない！！　やるぞ！！」

プリムをブレイズモードし、ブラスタービットを使って魔力の制御をし、ヴォルテールの力を解放することにした。

《やりますよ、マスター！！》

「いくぜ……」

集められた魔力は、銃口とビットに集まり、砲撃の発射準備は完了した。
人と竜の魔力の融合。

そして俺とキャロの思い……

これで決める！！

「《スターライト・ギオ・エルガ！！》」

俺自身が集めた、集束した魔力と、ヴォルテールの魔力。
二つの魔力は融合し、炎熱効果を伴う大威力砲撃となり、コアに放たれた。
そして……

コアは跡形もなく消え去り、ゆりかごも完全に機能をストップした。

「はぁ……はぁ……やった……」

「やり……ました……ね……」

「《キャロ！！》」

キャロは全ての力を使い果たし、その場に倒れてしまった。

「大丈夫か！！　キャロ！！」

「大丈夫です……ちょっと……疲れただけですから……」

「そっか……」

見たところ、魔力は空っぽだけど、その他は大丈夫だった。
これなら休めば大丈夫だ。

「心配したんだぞ……」

「えへへ……普段、無茶しているフィルさんに言われてしまいましたね」

「ったく……」

俺はキャロのおでこを、人差し指でツンとつついた。

「もうここには用はない……脱出だ！！」

俺は最後の力を使い、みんなのいるアースラにワープをした。

＊　　＊　　＊

「キャロ、フィル！！」

ワープアウトしたところは、アースラのブリッジだった。
そこには、先に戻っていたはやてさんが、アルカンシェル・ノヴァの発射準備をしていた。

「二人とも無事か！！　もうゆりかごには誰もいないんやな！！」

「俺たちが最後です。遠慮無く発射してください！！」

「よっしゃ！！　アルカンシェル・ノヴァ……発射や！！」

アースラから放たれたアルカンシェル・ノヴァは、命中するとゆり

かごを中心に、ブラックホールが発生し、爆発するのではなく、そこを中心に飲み込まれていった。

そしてブラックホールが消えると、ゆりかごも完全に消滅した。

こうして、機動六課は誰も死者を出すこともなく、無事ＪＳ事件を終結させることが出来た。
だけど、フィルはブラスターの反動で、入院することになった。

＊　　＊　　＊

聖王医療院

「フィルさん、あーん」

「あーん」

「どうですか？」

「うん、おいしいよ。キャロ」

「よかった！！」

キャロが俺に食べさせてくれたのは、キャロの手作り弁当だった。
料理がそんなに得意じゃないキャロは、はやてさんやフェイトさんに聞いたりして料理を勉強した。
お見舞いに来てくれたフェイトさんから、その事を聞いたとき、俺は泣きそうになってしまった。

そしてフェイトさんから一言

『私の娘を泣かせたら承知しないからね』

絶対フェイトさんに、ばれているな……

「えへへ～～～」

「どうしたんだ？　そんな、ふにゃとした顔になって……」

「幸せなんですよ。こうして大好きな人と一緒にいられるんですから……」

「お、お前、よくそんなこっぱずかしいこと、平気で言えるな……」

「言えますよ。だって、わたしフィルさんのこと、愛してますから……」

「俺も……恋人として……一人の女の子として、愛してるのは……キャロだけだから……」

「フィルさん……」

俺は、はにかんでいたキャロに、そっと唇を重ねた。
最初はフレンチキスだったが、やがて深いキスになり、しばらくの間二人はキスをしていた。

＊　　＊　　＊

「ティア……どうしよう。これじゃ、中に入れないよ」

「ったく、あの二人は……」

フィルのお見舞いに来たあたし達は、中に入ろうとしたが、キャロとフィルのキスシーンに遭遇してしまい、中にはいることが出来なかった。

「あーあ、エリオだけでなく、キャロにまで、先を越されるなんてね……」

「ティア……」

「結局、フィルに告白出来なかったあたしの負けよ。キャロは勇気を出してあいつに告白した。だから二人は、つきあってるんだしね」

「ねぇ、ティア」

「何よ」

「今日は飲まない。朝まで……」

「そうね……酒は無理でも、やけ食いは出来るわね」

「うん！！」

フィル、キャロのこと大切にしなさいよ。
キャロ、フィルのこと支えてあげてね……

＊　　＊　　＊

半年後、機動六課は解散し、俺たちはそれぞれの道を歩むことになった。

エリオとルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはフェイトさんの元で、シャーリーさんと一緒に執務官補佐をすることになった。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式になのはさんの養子になり、名前も高町ヴィヴィオとなり、本人の希望で聖王教会系列の魔法学院に通っている。

なのはさんはＪＳ事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空戦魔導師としての道を選んだ。

そして俺とキャロは……

「フィルさん、起きてください……」

「う……ん……」

「起きませんね……こうなったら……」

わたしはフィルさんの頬にそっと近づき、キスをした。

「……おはよう……キャロ……」

「おはようございます……フィルさん」

そう、俺とキャロは六課解散後、フェイトさんに俺たちのことを正式に話し、一緒に住んでいるのだ。

今俺は、はやてさんの元で特別捜査官の見習いをしている。

キャロは休職という形で専業主婦をしている。

キャロの年齢が結婚出来る年齢になっていないので、同棲という形

になっているが、キャロが16歳になったら籍を入れる予定になっている。

「今日はせっかくの休みだな。キャロ、どっかに行くか？」

「それでしたら、ここに行きたいです」

「なるほど、クラナガンのケーキショップか。そうだな、俺も興味あるし、サンダーで行くか」

「はい！！」

俺とキャロはサンダーでクラナガンに向かうことになった。
最近のキャロはスタイルの方も良くなってきていて、こうやってバイクでツーリングをすると……

「フィルさん」

「何だ？」

「わたしの胸でちゃんと感じますか」

「バ、バカ！！　何言ってるんだよ！！」

そう、こうやってわざと俺の背中に自分の胸を押しつけてくるのだ。
しかも、成長期に入っていて、それなりのボリュームもあるので、
俺も理性をフル動員しているのだ。

「だって……わたし、フェイトさんみたいに、おっぱい大きくないから……」

「そんなことしなくとも、充分ドキドキしてるっての。こないだだって、そうやって、俺の理性を吹っ飛ばして大変だったろうが……」

「えへへ～～～」

「とにかく今は勘弁してくれ。ケーキ食べに行きたいだろう」

「はい！！」

それでもキャロは、さらにギュッと抱きついてきた。

「フィルさん……」

「わたし……すっごく幸せです！！」

これからも俺たちには、色々困難があるだろう。

だけど、キャロとなら乗り越えられる。

彼女が……キャロが……最愛の人がいてくれる。

それだけで、幸せなのだから……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　なのは（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

# if ending なのは

事件解決パーティーが終わり、みんなそれぞれの部屋に戻っていたが、何となく眠れなかったので、俺は外に出て風に当たっていた。

「うーん……良い風だな」

今までクアットロのことで、ずっと戦っていたからな……こんなに気持ちになれるなんてな。

「こんな所で、何してるの？」

「なのはさん……」

俺が夜風に当たっていると、なのはさんがやってきた。

「ちょっと……眠れなくて、夜風に当たってたんですよ。なのはさ

んは？」

「私も一緒。何か興奮して、眠れなくてね」

「ヴィヴィオは？」

「部屋で眠ってるよ。フェイトちゃんと一緒にね。だけど、合い鍵も持ってないから、部屋に入れないんだ」

「あらら……」

「……」

「最近……どうしたんですか？」

「さっきも……普段なら、あんな事言わないのに、何か……あったんですか？」

いつもと、同じ様にしていたつもりだったのにな……

隠しきれない……かな……

「……ねぇ……フィル……パーティで、私に言ってくれたこと……覚えてる？」

「ええ……」

「あの時……自分の結婚のことで、フィルに相談したよね。だけど、フィルは相手が、外見だけで見るような人なら、結婚なんかしない方が良いって言ったよね」

「忘れてください……あれは……俺の勝手な思いですから……」

「……わたし、すごく嬉しかった。フィルが、わたしやヴィヴィオのことを、本気で心配してくれたんだって……」

「なのはさん……」

なのはさんの真剣な表情に、俺は何も言えなくなってしまった。
そして、意を決したなのはさんは……

「……すき……フィルが好き!!　大好き!!」

「好きなの!!」

「!!」

なのはさんの告白に、俺は驚きを隠せなかった。

「でも……だめなの」

「駄目って……何がですか？」

駄目って、今の言葉はどういう意味なんだ。

「フィルは亡くなったティアナのことが好きだから、この気持ちは抑え込んでしまおうって思ってた」

「でも……無理だった……」

「気持ちを隠せば隠すほど、胸がどんどん苦しくなって……ティアナのことが好きだって、知っているのに……こんなことを言って……」

知らなかった。なのはさんがそんな風に思っていたなんて……

俺も、自分の気持ち、ちゃんと伝えなきゃな……

「……なのはさん……」

「俺も……なのはさんのことが……好きです」

なのはさんと出会い、今まで一緒に戦ってきて色んな事があった。
辛いこともあったけど、それ以上に楽しい思い出があった。

ティアとの模擬戦で、お互いの意見をぶつけ合ったこと。

ヴィヴィオが来て、一緒に料理をしたり、ご飯を食べたりしたこと。

ヴィヴィオがクアットロに誘拐されて、俺となのはさんが一緒に助けたこと。

本当に色んな事があった。

そんな思い出の中心に、いつもなのはさんがいた。

「で、でも、それじゃティアナは……」

「ティアのことは、俺にとって大切なパートナーでした。大切だし、好きだったけど、それは恋人としてではないです」

今なら分かる……
あのとき、ティアが俺に幸せになってほしいって、言った意味が……

「いつも笑顔でいてほしいと思うのも、そばにいてほしいって思うのも……なのはさん……あなただけです……」

「フィル……」

フィルの言葉に、わたしは今度は、嬉し涙を押さえられなかった。

こんなにも強く、誰かに何かを、望んだ事なんてなかった。

これが好きということ……

これが……恋なんだ……

「フィル……」

「今日は……離れたく……ない…」

「なのはさん……」

なのはさんは、自分の頭を、俺の方にコトンと預けてきた。

俺もなのはさんと一緒の気持ちだ。

俺たちは、隊舎の俺の部屋に行くことにした。

＊　　＊　　＊

「そういえば……何で、俺のことが好きになったんですか？」

「ん……」

「表裏がないところかな」

「そうですか？　かなりありますよ。みんなのこと、かなり騙してましたし……」

「騙してたといっても、それはスカリエッティに、ばれないようにするためだよね。普段のフィルは、正直だよ。ヴィヴィオもすごく懐いているし……」

「わたしには無いものだから……すごく憧れる……」

「聞いてくれるかな……わたしの話……」

なのはさんは自分の幼少期のことを語り始めた。
かつて父親が事故にあって、それで家族が大変なことになり、自分も何か手伝えることはないかって頑張ったのだが、みんな大丈夫だからと、自分は力になれなかったこと。

せめて自分が出来ることは、良い子でいること。

それで、それからは良い子でいることにしていた。

そして、いつの間にか、本音でぶつかることが、言葉で話すことが怖くなってしまっていた。

だから、あの時、自分の中で思っていても、ティア達に伝え切れていなかった。

フェイトさんやはやてさんにも、相談出来ずに……

「だけどね。もう、良い子でいるのはおしまい……」

「フィルのことが、本気で好きだから……」

「なのはさん……」

俺はなのはさんをぎゅっと抱きしめ、まっすぐに瞳を覗き込むと……

なのはさんは瞳を閉じて……

そして、俺は……なのはさんの唇に、キスをした。

「抱いて……フィル……あなたのぬくもりを……もっと感じたい……」

「なのはさん……」

「なのは、って呼んで、フィル……」

「なのは……」

「フィル……」

そして、俺たちは……一晩中、お互いの気持ちを確かめ合った。

＊　　＊　　＊

「あ、目が覚めたんだ。おはよう、フィル」

目を覚ますと、なのはさんが俺の隣にいた。
そうだった……

昨日、俺はなのはさんと一緒に過ごしたんだった。

「あ、ああ、おはようございます。なのはさん……」

「むぅ～～～」

「えっ？　どうしたんですか？」

「なのはだよ。フィル。それと敬語は禁止！！　もう一度！！」

「……おはよう、なのは」

「うん！！　おはよう、フィル」

なんか、すごく照れるんだけど。
なのはさんのこと、なのはって言うだけなのに……

「じゃあ、おはようのキス～♪」

「えっ？」

「……して……くれないの……」

その上目遣いは反則です！！
俺だって、理性がある方じゃないんですから……

キスをするのを躊躇っていると……

「ん！！　んんん！！」

なのはが、抱きついてきて、俺にキスをしてきた。
しかも、深い方のキスだった。

しばらくすると、満足したのか唇を離した。

「あ……あの……なのは。そんなことされると、俺も理性が持たなくなるから……」

「……いいよ。そのときは、またいっぱい……しよ……」

「なのは……」

「フィル……」

今度は俺の方から、なのはにキスをした。
やっぱり、深いキスをしてしまった。

＊　　＊　　＊

「おはよう、なのは」

「おはよう、フェイトちゃん」

「なのは、昨日はごめんね。部屋の鍵、私が持っていたから、入れなかったでしょう」

「大丈夫だよ。昨日はフィルの部屋に泊まったから……」

「ぶはっ！！」

しまった！！　話の流れで思わず言っちゃった。
フェイトちゃんも、飲んでいたコーヒーを吐いてしまったし……

「なのは……どういうことか、話してくれるよね」

「にゃ、にゃはははは……」

フェイトちゃんのあまりの迫力に、わたしはもう隠せないと悟った。
そして、わたしは昨日のことを、フェイトちゃんに話した。

「……なるほどね。やっと、言ったんだね……」

「えっ？　もしかして、フェイトちゃん……」

「知ってたよ。でも、これはなのはが自分で、気づかなきゃいけないことだからね……」

「フェイトちゃん……」

「でも、良かったね。両思いになれて……」

「うん……」

フェイトちゃんと話していたら、ヴィヴィオが起きてきて、こっちにやってきた。

「なのはママ……」

「ヴィヴィオ！！　ただいま」

「おかえり……ねぇ、フィルパパは？」

「あっ……その……えっと……」

「ヴィヴィオ。フィルなら、今日なのはママの部屋に来てくれるって」

「本当！！」

「ちょ、ちょっと、フェイトちゃん！！」

「本当だよ。だから、今日一日良い子でいようね」

「うん！！」

「なのは、今日私は、泊まりの出張に行くから、好きにして良いよ。じゃあね！！」

「フェイトちゃん！！　もう……」

絶対嘘だ。こんな急にそんな仕事が、入るわけ無いじゃない。
でも……ありがとう……

＊　　＊　　＊

「こんばんは、ヴィヴィオ」

「あっ、フィルパパだ！！」

「パーティーの時、一緒にいてあげられなかったからね。今日は一緒にいよう」

「わーい！！」

実は、ここに来る途中、フェイトさんに会って
『今日は戻らないから、なのは達と一緒に過ごしてね』
そう言ってたけど、明らかにおかしい。

もしかして、フェイトさん。俺たちのこと……

「いらっしゃい、フィル」

「お邪魔します……」

「違うよ」

「えっ？」

「ただいまだよ。これから、わたし達は『家族』になるんだから……」

家族か……

そうだよな……俺もヴィヴィオのパパになるんだからな。

「……そうですね」

「それと、前も言ったけど、普段は敬語は禁止！！　家族の間で、そんな他人行儀はしないの！！」

「きんし～～」

なのはとヴィヴィオの二人に、そう言われてしまったら、敬語は止めるとするか。

「それじゃ、食べてね」

「わーい！！」

なのはが用意していたのは、ヴィヴィオの大好きなハンバーグを始め、クリームシチューと野菜サラダといったメニューだった。
俺も、ヴィヴィオの大好きなケーキを作ってきた。

「「「いただきます！！」」」

「はい、ヴィヴィオ。あーん」

「あーん」

「美味しい？」

「うん！！　おいしい！！」

なのはがヴィヴィオに、ハンバーグを食べさせてあげている。
うん、実になごむ。

「ヴィヴィオ、俺のも食べるか？」

「うん！！　食べる！！」

「じゃ、あーん」

「あーん」

「美味しいか？」

「おいしいっ！！」

ヴィヴィオは、俺が食べていたピーマンを食べた。
実は、苦手だったピーマンも大分克服してきていた。

そうやって、娘が成長しているのを見ると、すごく嬉しかった。

「さて、そろそろ、ケーキも出そうかな」

「「ケーキ？」」

「ああ、さっき持ってきた箱はパウンドケーキさ。なのは達と食べようと思ってね」

俺たち三人はパウンドケーキを食べ、その後は三人で一緒にゲームしたり、テレビを見たりして過ごした。
夜も遅くなり、俺はそろそろ戻ることにしたのだが……

「フィルパパ……帰っちゃうの？」

「もう、遅いしな。なのはママにも悪いしね」

「そんなこと無いよ！！　お願い、今日はヴィヴィオと一緒に、寝てほしいな～～」

「パパ……」

二人のお願いに、俺はＮＯとは言えなかった。

「それじゃ、今日は三人で一緒に寝ようか」

「「わーい」」

＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオ……寝ちゃったね」

「そう……だな」

あの後、俺は、なのはとヴィヴィオの三人で寝ることになり、ヴィヴィオが眠るまで、俺が絵本を読んであげていたのだが、それでも、眠る気配がなかったので、なのはが子守歌を歌ってあげて、ようやく眠ったのだ。

「こうしてみると、本当かわいいよな。ヴィヴィオ」

「うん……ねぇ……フィル……」

「ん、何？」

「フィルは、これからどうするの？　六課が解散してから……」

「二つ考えてるんだ。一つは、このまま管理局に残って、執務官か捜査官を目指していく。もう一つは……」

「管理局を辞めて、もう一つの夢だった洋菓子店を開く」

ブラスターの反動は、予想以上に俺の身体を蝕んでいた。
このまま、魔導師でやっていくにしても、長くはやれないと思う。

「……それだったら、わたしと一緒にやらない。洋菓子店……」

「なのは？」

「正直ね。わたしも、今までの無理がたたって、そう長くはやれないと思うの。わたしの思いは、ティアナやスバル達にちゃんと伝わったし、ティアナ達なら、いつかわたしを超える魔導師になれるから……」

「……いいのか。空を飛ぶのは、なのはの生き甲斐だったじゃないか！！」

そのために、あんなに辛いリハビリにも耐えたのに……
俺のために、その夢を捨ててほしくない。

「なのは……俺は……」

「勘違いしないでね。これは前から考えてたことなの……」

「多分……やれても、後、4～5年くらいだと思う。だったら、完全に駄目になる前に、辞めようと思うんだ。ヴィヴィオのためにもね……」

「分かった……そこまで思っているなら、もう止めないよ」

「ありがとう……」

「じゃ、そのために一生懸命頑張らなくちゃな……」

「そうだよ、がんばってね。フィル……」

「ああ……俺には、こんなにかわいい彼女がいるんだからな……」

「……バカ」

＊　　＊　　＊

4年後

カランコロン……

「いらっしゃいませ！！」

「おじゃまするっすよ！！」

「おそいよ、ウェンディ！！」

「いやぁ、すまないっす。道が混んでいて……」

「もう、みんな来てるわよ」

店の中にいたのは、スバル、ティアナ、そして、ＮＡＲのメンバーと、聖王教会に世話になっているオットーとディードだった。

「ったく、相変わらずだな。お前の、そのいい加減さは……」

「ノーヴェにいわれたくないっす」

「何だと！！」

「お二人さん……店の中で喧嘩は止めてくれるかな……」

「「ごめん　（っす）」」

ノーヴェとウェンディの喧嘩を止めたのは、この店のマスターである、フィルだった。

六課解散後、フィルとなのはは管理局を退職し、その時に、二人は籍を入れ、なのはの両親に挨拶にいったのだ。

最初は、何年か翠屋で修行をするつもりだったが、元々フィルは、プロのパティシエの腕を持ってたので、修行は短期間で済んだ。

その後、師匠でもある高町桃子のお墨付きをもらい、二人でミッドチルダに喫茶店を出したのだ。

店の方も、なのはのネームバリューが効いていたおかげで、お客さんがなのはを見たさにやってきた。

段々となのはの力でなく、味で評価されてきて、最近ではよく雑誌の取材を受けるようになっていた。

そして、この店はティアナ達のたまり場にもなっていた。

「あいかわらず、大繁盛ね。今日だって、事前に予約してなかったら、大変だったんだから……」

「すまんな、ティア。夜だと、比較的大丈夫なんだけどな……」

「あんたが謝ることはないわよ。いいじゃない、繁盛してるのは……」

「モグモグ……そうだよ……モグモグ……」

「スバル……食べるか、しゃべるか、どっちかにしろ」

「だって、あたし普段は、滅多にこれないんだから！！」

このメンバーが集まれるのは、あまりない。
大体スバルが、緊急出動でいないことが多い。

「まぁまぁ……いいじゃない。誰かに迷惑をかけてる訳じゃないしね」

「なのはさん！！」

「みんな、今日は楽しんでいってね。わたしもフィルも、腕によりをかけて作るからね」

「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」

＊　　＊　　＊

「ねぇ……フィル」

「何だ？　なのは」

「この店やって……本当に良かったね……」

「ああ……」

この店は、俺となのはの夢だ。

みんなが楽しく、俺の作ったケーキや料理をおいしく食べてくれる。

そして、笑顔になってくれるのが、何より嬉しい。

ここでは、戦闘機人だからとか、そんなのは関係ない。

それは、スバル達を見ていれば、よく分かる。

そして……

「いらっしゃいませ～～～」

「あっ、ヴィヴィオ！！　今日も手伝いなの？」
「はい、パパとママのお手伝いです」

ヴィヴィオはこの喫茶店の制服に着替えて、ウェイトレスをしていた。
学校が終わると、こうして手伝ってくれるのだ。

「そういえば、この雑誌に載ってたぜ。かわいい母娘と素敵なマスターがいるって……」
「何だそりゃ？　かわいい母娘は分かるが……」
「フィル、少しは自覚するっす。視線に気づかないんっすか？」

ここに来ている女性客の半数は、フィルの方を見ていた。
相変わらず、この方面には疎いままである。

「……ノーヴェ」
「は、はい！！」

「その雑誌……見せて……」

なのははノーヴェから雑誌を取り上げると、その記事の所を確認していた。

「……そう……それで、女性客が増えたのね……」

なのはが、不機嫌オーラ全開でいたとき……

「なのは」

「なに、ん……んんん！！」

「「「「「「「「「ああっ！！」」」」」」」」」

俺はみんなの見ている前で、なのはにキスをした。

「……もう、いきなり、なにするの！！」

「そんなの気にするなって……俺が、愛してるのは、なのはだけだから……」

「……もう……ばか……でも、わたしもだよ。愛してるよ……フィル……」

ヤキモチ焼きで、甘えん坊の年上のかわいい奥さん。

母親に似て、やっぱり甘えん坊のかわいい娘。

そんな二人に囲まれて、俺は幸せをかみしめていた。

この店も、そんな俺たちを見守ってくれる。

喫茶店　『Ａｍｏｕｒ　ｅｔｅｒｎｅｌ』

地球のフランスの言葉で、永遠の愛

その想いを込め、俺たちはこの店の名前にした。

俺たちの愛が、永遠に続くように……

## if endingはやて（前書き）

ifエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

## if ending はやて

俺たちは何とかヴィヴィオを助けたが、ゆりかごの自動防衛モードが作動してしまい、ＡＭＦの濃度も上がってしまったため、魔法が使えなくなってしまった。
助けに来たはやてさんも、ユニゾンが解けてしまい、なのはさんもブラスターの影響で、戦闘不能になってしまった。

この中で唯一ＡＭＦ対策をしていた俺は、みんなを何とか外に出そうと、ウインド・ブレスで隔壁が閉じる前になのはさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は外に出すことに成功したが、はやてさんが俺のやることに気づき、俺のジャケットに、しがみついてこらえていた為、はやてさんがここに残ってしまった。

「はやてさん……」

実は、はやてはフィルの嘘に気づいていたのだ。
ここに来る前、ユーノからゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシェルではゆりかごを破壊できないと聞かされていたのだ。
そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていた

のだ。

「ばかや……何で一人で、やろうとしたんや……」

「今、魔力が使えるのは俺だけです。なのはさんも、ブラスターを使って戦闘不能だし、フェイトさんもいない……だから……」

「……だめなんか……私じゃ……フィルの役にはたたんか……」

「そんなこと無いですよ……はやてさんがいたからこそ、俺は……」

「えっ？」

「最後だから告白します……俺……はやてさんのこと……大好きでした……はやてさんがいたから、機動六課に、また入ったんです……」

フィルの告白に、私は驚きを隠せなかった。

正直嬉しかった。フィルが私のことを好きでいてくれてたなんて……

だけど……

「まさか！！　フィル、死ぬ気やな！！」

「……」

フィルは私の質問には答えず、懐から、銀色のカートリッジを取り出した。

《止めてください！！　『スパイラル』だけは使わないって、約束したじゃないですか！！》

「なんや……そのスパイラルってのは？」

《スパイラルモード……ブラスターの最終形態……体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……間違いなく……死にます！！》

「フィル！！」

「……はやてさん……幸せになってくださいね……」

そう言って、カートリッジを挿入しようとしたとき……

「だめぇぇぇぇぇ！！」

俺の手からカートリッジを奪い、自分の杖でカートリッジを破壊してしまった。

そして、カートリッジを壊した後、俺のそばまで来て……

パアアアン！！

「はやて……さん？」

俺の左頬に平手打ちをした。

「ばかや……ほんまに……ばかや……フィルが犠牲になって……それで、私が喜ぶとでもおもったんか……」

はやてさんの目には涙がこぼれていた。

「大好きな人が犠牲なるのは、もうたくさんや！！　自分の愛する人が、死ぬのは絶対嫌や！！」

「まさか……」

「私もフィルのことが好きや。大好きや！！　だから、死ぬなんて言わないで！！」

馬鹿だ……こんな優しい人に、また悲しみを刻ませる所だった。
リインフォースさんのこと、知ってたのに……

俺は、はやてさんをギュッと抱きしめた。

「ありがとう、はやてさん……俺のこと、好きになってくれて……」

「礼を言うのは、私の方や。私のこと好きになってくれて、ありがとうな……」

「はやてさん……」

「……お願い……私のこと……はやて、って呼んでや……」

「はやて……」

「うん……」

俺とはやては、お互いに瞳を閉じ……

そして……

気持ちを確かめ合うように、キスをした……

「えへへ～～　これでフィルと私は、恋人同士や」

「……まさか、はやてさんと、こうなれるとは、思ってなかったんですけど……」

「……その話し方……他人行儀で嫌や……それと、さん付けも止めてや……」

「……分かった。これで良いの……はやて」

「うん！！」

《あの……お二人さん……盛り上がっているところ、大変申し訳ないんですが……》

「「あっ……」」

《まったく……でも、その様子でしたら、二度とスパイラルを使うなんて、言わないですしね……》

「ああ……」

はやてを残して死ぬなんて、今の俺には出来なかった。
絶対生き残って、はやてと一緒に生きたい。

「あのな、フィル、プリム……」

「何か……策があるの？」

「一つだけある……だけど、これはフィルにもプリムにも、かなりの負担がかかってしまうんや。それでも……やるか？」

「なにを今更、スパイラルを使う覚悟があったんだ。生きて帰るためなら、どんなことだってやるさ！！」

《その通りですよ。例え、スターライトブレイカーとラグナロクを、同時に展開しろって言われても、やって見せますよ！！》

「プリム……気づいてたんか……」

《スパイラルを使わない以上、それしか、私達に残された手段はあ

りませんから……》

１００％のラグナロクなら、破壊は可能だが、このＡＭＦの状況下では威力は半減してしまう。
さらに、シュベルトクロイツはアームドデバイス。ＡＭＦの対策は何もしていない。

そして、フィルはヴィヴィオを助ける時に、ブラスター３の、スターライトブレイカーを使ってしまっている。
今のフィルでは、ラグナロク以上の威力は出せない。

「……二つの魔法の融合……ということか……」

「そういうことや……それしか、あのコアを破壊する手段は……ない」

「……プリム、覚悟は出来てるか？」

《当たり前ですよ。私はマスターの相棒ですよ。このくらいのこと、やって見せますよ。それに……》

《私は、マスター達のこれからを……未来を……見ていきたいんですから……》

「「プリム……」」

＊　　＊　　＊

俺は、プリムをブレイズモードにし、銃口をコアに向けた。
今回の方法は、二つの魔法の融合。
だから、プリムは俺とはやての魔法の術式を、同時に処理しなければならない。

《大丈夫ですよ……絶対成功させて、みんなでアースラに帰りましょう……》

「……そう……だな……」

正直不安だった。
こんな事、今までやったことがないんだ。
失敗して、はやてを死なせることになったら……

「フィル……」

はやては、プリムを握っている俺の手に、そっと自分の手を添えた。

「大丈夫や……一人やないんや。私も、そしてプリムもいるんや……絶対成功する！！」

「はやて……」

『フィル、あたしもついてるから……頑張って……そして、はやてさんのこと幸せにしなさいよ……』

気のせいじゃない。
確かにティアの声が聞こえた。

（ティア……ありがとうな）

俺には大切な人達がそばにいてくれる……
これ以上のサポートはない。

「やるぞ！！　はやて、プリム」

「うん！！」

《はい！！》

「響け、終焉の笛……ラグナロク！！」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！　貫け……閃光！！　スターライト！！」

銃口にミッドとベルカの二つの魔法陣が展開され、その魔法陣は一つに融合した。

二つの白銀の魔力が融合し、その力は計り知れない物になっていた。

だが、その力に耐えきれなくなり、プリムのフレームはひび割れを起こしていた。

「「プリム！！」」

《心配しないでください。私は、このくらいのことで壊れたりしません！！　だから、全力で撃ってください！！》

ここで、中止するのはプリムを侮辱することになる。

プリムは俺たちを信じて、こんな危険な賭に乗ってくれたんだ。

「フィル……」

「はやて？」

「一緒に撃とう……トリガーを一緒に引こう……」

そういってはやては、プリムのトリガーに自分の指を入れた。

「……ありがとう……はやて」

「何言ってるんや。好きな人の苦しみは、一緒に分かち合うもんやで……」

もう、俺に迷いはなかった。

「いくよ……はやて！！」

「いつでも、ええで！！」

「「スターライト・ラグナロク……」」

「「発射！！」」

放たれた砲撃……

白銀の奔流が、コアの強固なシールドをブチ抜き……

そして……

コアは跡形もなく消し去り、その後ろは融合魔力の力で、外にまで穴が通じていた。
それほどのパワーだったのだ。

「フィル、脱出するで！！」

コアが無くなったことによって、魔力結合が復活したので、はやてが俺を抱え、外に飛び出した。
外で待機していたヘリに乗り込むと、急いでアルカンシェル・ノヴァの射程圏から離脱し、俺たちが離脱した後、リンディ統括官がアルカンシェル・ノヴァを発射した。

こうして、後に史上最大の凶悪事件と言われるＪＳ事件は、幕を閉じた。
重傷者は数人出たが、機動六課は誰も死者を出すことがなかった。
しかし、俺はブラスターの影響で、入院することになってしまった。

＊　　＊　　＊

「はい、フィル。あーん」

「あ、あーん……」

「どう……おいしい？」

「うん、はやては、やっぱり料理が上手だ……とってもおいしいよ」

「よかった……口に合わないかと思ったわ」

はやてが俺に食べさせてくれたのは、手作りのお弁当だった。
病人が食べやすいように、薄い味付けの物になっていた。
こういう気配りが、はやての優しさなんだな。

「そんなことないよ……本当においしいよ」
「嬉しいわ……大好きな人に、そう言ってもらえるのは……」
「は、はやて……」
「えへへ～～」

俺もはやても、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

「はやて」
「な、なんや？」
「もう一つだけ……食べたいもの……あるんだけど……」

「何が食べたいんや。遠慮無く言ってや」

「……はやての……唇……」

「えっ……」

はやては俺の発言に驚いていたが、少し考えて……

「……ええよ」

はやては瞳を閉じ、俺は、はやての顔に近づき……そして、俺たちはキスをした。

最初は唇が触れているだけだったが、次第に気持ちを確かめ合う様に、深い物になり、しばらくの間ずっとキスをしていた。

＊　　＊　　＊

退院後、俺は、八神家のみんなに、俺とはやてのことをちゃんと伝えた。
最初は驚いていたが、はやての幸せを心から祈って、俺たちのことを認めてくれた。

ただし、たった一つだけシグナム副隊長から、条件が出された。

それは……

『命を粗末にすることはするな。お前は、もう一人じゃないんだからな……』

その言葉には、すごく重みを感じた。
今までの俺は、どこか自己犠牲の所があった。

だけど、いまは大切な人がいる。
その人を悲しませることはしたくない。

＊　　＊　　＊

新暦７５年　１０月

重傷者の隊員が無事復帰し、本日事件解決記念のパーティーを開くことになった。
料理は、はやてと俺で用意することになった。

最初はなのはさんやフェイトさんが、手伝ってくれるって言ってくれたのだが、はやてが、『フィルと2人でやるから、他の所頼むわ』と言って、結局2人でやることになってしまった。

「えっと……今日は来週より六課が再出発することと、先日の事件の労いもかねて、ささやかながらパーティをすることにしました。今日は無礼講ですので、みんな楽しんでください。長い挨拶は私も嫌いなので、さっさと乾杯してしまいましょう……というわけで、乾杯!!」

『乾杯!!』

乾杯の後、それぞれグループに分かれてパーティーを楽しんでいた。しかし、開始早々、はやてが酔っぱらって倒れてしまい、俺ははやてを介抱することになり、そのままパーティー会場を出ることになった。

はやての部屋だと、かなり遠いので、やむなく俺の部屋に一時的に行くことにした。

「着いたよ、ほら」

「う～～　気持ち悪い～～」

「大丈夫？　今、水を持ってくるから」

はやてをベッドに座らせ、俺は水を取りに行こうとしたが、はやてが、俺の服の裾をつかんで離さなかった。

「……待って……行かないで……」

「そのままじゃ辛いだろ。今、水を……」

「大丈夫……酔っぱらってもいないし……気持ち悪くもないよ……」

「まさか……」

「ごめんな……どうしても、フィルと二人きりになりたかったんや……」

「そっか……」

俺ははやての隣に行き、はやての肩を抱き、自分の方へ引き寄せた。
はやても俺の肩の上に、自分の頭を預けた。

そして俺は、はやての髪を撫でた。
はやてもこうされるのが嫌いではないようで、目を細めて甘えてきた。

二人はしばらく無言で寄り添っていた。

「実はな……俺も……はやてとこうやって、二人きりになりたかった。みんなには悪いけど……」

「よかった……私だけじゃなかったんやね……」

「……はやて」

「……なに……フィル」

「俺……はやてが……欲しい……」

「……ええよ……そのつもりで、二人きりになったんやから……

私も……フィルが欲しい。そのぬくもり感じさせて……」

俺は、はやてをそっと、ベッドに横にし……

「あっ……」

「はやて……」

「優しく……してな……」

そして……

俺とはやては、その夜、お互いのぬくもりを感じ合った。

＊　　＊　　＊

「おはよう……フィル……」

「おはよう、はやて……」

「昨日は……ありがとうな……優しく……してくれて……」

「俺の方こそ……ありがとう、はやて……綺麗だったよ……」

「……あほ……そんなこと……言わんといて。恥ずかしいわ……」

「本当のことだから……これで、コンプレックスは無くなったでしょう」

「うん……」

実は、はやては、なのはさんとフェイトさんに若干のコンプレックスを持っていた。

あの二人は、スタイルが良いので、自分はそれに見劣りするのではないかと、ずっと思っていた。

だけど、はやても女性の平均より、スタイルは良い方だ。

そのことを、昨日一晩かけて取り除いた。

「はやて……」

「ん、何や？」

「……また……はやてを抱きたい……」

「……フィルが望むなら、いつでもええよ。私も、フィルに抱きしめて欲しいから……」

俺たちは、ベットの中でキスをした。
今はキスしかできないので、せめて深いキスをすることにした。

＊　　＊　　＊

数年後

私とフィルは、地球にやってきていた。
この場所は、リインフォースとお別れをした場所。

ここに来ると、あの時のことを思い出してしまうけど、今はフィルがいる。

「リインフォース、久しぶりやな……今日はな、報告があってここにきたんや」

「私な、来月、結婚するんや。相手は、機動六課時代から付き合っていたフィルや。今日、一緒に来てるんや」

「リインフォースさん、初めまして、フィル・グリードといいます。はやてと六課の時から付き合っています。はやてには色々助けてもらいました。仕事だけでなく、心も……俺は、そんなはやてが好きなんです……」

実は、六課解散後、フィルは私の捜査官補佐をして、その後特別捜査官の資格を取って、私と一緒に働いていた。
同棲もしていたんやけど、どうしても結婚だけは出来なかった。

その理由は、どうしても、リインフォースに、一言だけでも伝えたかったから……

私は、今、幸せなんやと、伝えたかったから……

だけど、あの時のことを思うと、どうしてもあの場所だけは、行くのが辛かった……
だけど、やっと決心し、ようやくここに来たのだ。

「リインフォース、私とフィルのこと、そっちの世界から見守っていてや……」

『我が主……』

「えっ？」

『お幸せに……私はいつでも見守ってますよ……』

「リイン……フォース……」

「どうした？　はやて」

「今、リインフォースの声が聞こえたんや……幸せに、って……」

「そっか……俺も以前、ティアの声が聞こえたんだ。はやてのこと、幸せにしろって……」

リインフォースさん、そしてティア……

「幸せに……なろうな……フィル……二人で一緒に……」

「ああ……二人でなら大丈夫だ……幸せになろうな……はやて……」

そんな二人を祝福するかのように、優しい風が吹き抜けた。

祝福の風……

その優しい風は……

二人の未来を……

そっと見守っていた……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ティアナ（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

# if endingティアナ

「あはははは！！　もう観念しなさい」

「……くっ……」

フェイトさんのおかげで、クアットロの居場所を見つけた俺は、一人乗り込んだが、クアットロの聖王の鎧の前に、手も足も出ないでいた。

砲撃を撃っても、全てはじかれてしまうし、最後の手段で、ブラスターを使って、ザンバーで斬りつけたが、通用せずはじかれてしまい、床に倒れてしまった。

ヴィータ副隊長が駆動炉を破壊して、パワーが落ちるはずなのに全く落ちる気配がない。
ヴィヴィオもなのはさんが元に戻したから、ゆりかごは停止しても良いはずなのに……

「なぜ、ゆりかごが停止しないのか、分からないみたいですね」

「……ああ、ゆりかごのキーは二つとも失ったはずだ。だが……」

「簡単なことですわ。それは、コアが失っていないからですわ～～」

「コア……だと……」

「そうですわ。聖王も駆動炉も、ゆりかごのほんの一部に過ぎませんの」

「だからか……お前の力が失っていないのは……」

「その通りですわ～～　さらに、教えておいてあげる。私はそのコアと融合してますのよ～～」

「！！」

これで納得した。ユーノさんが教えてくれたゆりかごの情報で、二つのキーを止めても、もしかしたら駄目かもしれない、その言葉の意味がやっと分かった。
ゆりかごのエネルギー源は、コアと融合したクアットロそのものだったんだ。

「これで分かったでしょう。あなたがしてきたことは全て無駄だったのよ……そして……」

クアットロは魔力を刃にし、倒れている俺に突きつけ……

「これで……お終いですわ！！」

（これまでか……ごめん……ティア……）

『待ちなさい！！』

突如、入口の扉が、凄まじい衝撃を受け、内側に向かってひしゃげ、次の瞬間には、オレンジの奔流がぶち抜いた。

「ティアナ・ランスター！！　あなた、いつの間に！！」

「機動六課フォワードを舐めんじゃないわよ！！　あんな竜くらい、あたし達で仕留めたわよ！！」

「ティ……ア……」

あたしが目にしたのは、ボロボロになったフィルの姿だった。

「フィル！！　しっかりして！！」

「……ティア、無事だったんだな。みんなは……」

「キャロ達も全員無事よ。なのはさん達はスバルが助けに行ったわ。もう、全員脱出してるわ……」

「そっか……それを聞いて、安心したぜ……」

俺は、最後の力を振り絞って、何とか立ち上がった。

「……ティア……お前、どのくらい魔力残ってる？」

「正直言って、殆ど残って無いわ……幻術1回が限度よ……」

ここに来る間に、フレイム・グロウを倒すのに、スターライトブレイカーを撃ってしまった。
強力な攻撃魔法は、もう無理だ。

「……俺に考えがある……俺に、命を預けてくれるか？」

「……いいわ……あんたに、全て賭けるわ……」

「ありがとう……ティア……」

俺が考えた作戦は、まずティアが幻術でクアットロの視界を狂わせ、その間に、俺がブラスタービットを使ってバインドをする。
そして、動きを封じたら、俺が最後の切り札を使う……

「簡単にいってくれるじゃない……あんただって、ブラスター使って、それが出来なかったんでしょう……」

「俺一人だったから駄目だったんだ。だけど、ティアが来てくれたことで、何とかなる!!」

「分かったわ。あたしは、あの馬鹿の動きを何とか止めるから。フィル……任せたわよ!!」

「任せとけ!!」

「じゃ、いくわよ……」

「「Ｇｏ!!」」

＊　　＊　　＊

「クアットロ！！　あんたの相手はあたしよ！！」

「ティアナ・ランスター……いいですわ。まず、あなたから片付けてあげますわ！！」

「そう、上手くいくかしら！！」

「何！！」

次の瞬間、ティアナの姿が何十人にも増え、クアットロは混乱した。

「くっ！！　幻術！！　めんどくさいですわね。こうなったら、全部排除して差し上げますわ！！」

クアットロから放たれた魔力弾は、次々とティアナの偽物に命中し、ついに最後の一人になってしまった。

「もう……幻術をする魔力も、ありませんのね……終わりですわ。ティアナ・ランスター！！」

クアットロはティアナにとトドメを刺そうと、巨大な魔力弾を作るため、一瞬だが動きが止まった。

「今よ！！　フィル！！」

「待ってたぜ！！　この時を！！」

次の瞬間、ブラスタービットが射出され、クアットロの周りを何重にも舞った。
ビットが引いていたバインドが絡みつき、完全に動きを封じた。

「はぁ……はぁ……やったわ……」

「くっ！！　ティアナ・ランスターはおとりでしたのね！！　私の動きを封じるための！！」

「気づくのが、少しだけ遅かったな……」

「喜ぶのはまだ早いですわ。あなたの砲撃の威力では、私の聖王の鎧は貫けませんわ。それは、証明済みですわ！！」

「……クアットロ……」

「何ですの。負け惜しみですか。あはははは！！」

「……一緒に……地獄に付き合ってもらうぞ」

《マスター！！　まさか！！》

俺は銀色のカートリッジを取り出した。
そして、それをプリムに挿入した。
これが、俺の最後の切り札だ。

「プリム……約束破って……ごめん……でも、これしかないんだ！！」

《……覚悟してましたよ。この戦いが始まったときから……いいんですね……》

「……ああ……俺の命で、ティアが助かるなら……それでいい……」

《マスター……》

「……いくぜ！！」

「……ブラスターシステム、コード・ファイナル……スパイラル……起動！！」

《Ｂｌａｓｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ　ｃｏｄｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｐｉｒａｌ　ｍｏｄｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！》

スパイラルを起動した瞬間、魔力は爆発的に上がり、俺の周りは魔力が放電現象を起こしていた。

＊　　＊　　＊

「な、何ですの！！　この魔力は！！」

「……フィル……あんたまさか！！　やめてぇぇぇぇ！！　今すぐスパイラルを止めて！！」

プリムから聞いていた、ブラスターの最終リミット、スパイラルモード。

フィルは自分の命と引き替えに、クアットロを倒す気だ。

止めなきゃいけないのに、身体が思うように動かない……

「ティア……」

「やめてよ……死んじゃいやだよ……」

「ごめんな……これしか……あいつを倒す手段がないんだ……」

次の瞬間ブラスタービットが、あたしの周りを取り囲み、三角錐型のシールドを作り出した。

「この中にいれば……クアットロの攻撃から、護ってくれる。ティア……」

「大好きだったよ……」

「！！」

「……幸せになれよ……俺の分も……」

「いやっ！！　こんなのいや！！　お願い、ここから出して！！」

クリスタルゲージは、完全にあたしの動きを封じてしまっている。

お願いだから、出してよ！！

「……フィル・グリード……あんた、まさか……自分の命を……」

「そうさ……俺の命で、魔力に変換しているんだ。これなら、お前の聖王の鎧もつらぬける！！」

「あ……ああ……あああああ！！」

クアットロはプリムを突きつけられ、身体を震わせ、カチカチと歯を鳴らし、膝は笑い、今にも崩れ落ちそうになっていた。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！」

プリムの銃口に、巨大な魔力が集まりだし、巨大な魔力球が展開されていた。

「貫け……閃光！！」

カートリッジがロードされると、魔力は、更にふた回り以上も増大

した。

「これで……最後だ！！」

さよなら……ティア……

「スターライト……」

「ブレイカーーー！！」

放たれた砲撃……

白銀の巨大魔力弾が、クアットロに迫った。

「あああ……嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

クアットロに白銀の砲撃が襲い、辺り一面破壊した。

そして……クアットロの存在を跡形もなく、消し去った。

しかし……

「フィル！！」

全ての力を使い果たしてしまったフィルは、その場に倒れてしまった。

その瞬間クリスタルゲージは消え、あたしはフィルの元に駆けつけた。

「フィル！！　しっかりして、フィル！！」

「……うっ……」

「フィル！！」

「俺は……どうして……」

どういうことだ？
俺は間違いなくスパイラルで、生命力を、全部使い果たしてしまったのに……

『それは、あたしが説明するわ』

「ティア！！」

「えっ？　あたし？　どういうこと？」

『混乱してるみたいね。簡単に言うと、あたしは未来でフィルと戦っていたティアナよ』

「つまり、未来のあたしということ？」

『そういうことね』

「それより、なんで俺は生きてるんだ？」

『……あんたの持っている、クロスミラージュを見て』

ティアに言われて、俺が持っていたクロスミラージュをみると、フレームはヒビだらけで、今にも砕けそうだった。

「これは！！」

『クロスミラージュに託した、あたしの魔力を、あんたの命に変換したの』

「そういうことだったのね……」

「だけど、それじゃお前は！！」

『心配しないで、あんた達がクアットロの馬鹿を倒してくれたおかげで、未来は変わったわ。だから、あたしも、いなかったことになる。というより、無かった未来になるんだから、最初からいないのと同じね』

「そんな……」

確かに、未来は変わった。
でも、こんな形でティアと別れるのか……

『フィル、悲しまないで。むしろ感謝してるんだからね。あんな未来にならないことにね。それに……』

『どうやら、あんた達、両思いみたいよ』

「待て！！　あれは、俺の一方的なことであって……その……」

最後だからと思って、ティアに告白したけど、あれは俺の一方的な思いだ。

「……片思いなんか……じゃないわよ……」

「ティア？」

「あたしも……あんたのことが、大好きなんだから……誰よりも大好きなんだから！！」

「だから、お願い……あんな真似、二度としないで！！」

ティアの目には涙があふれていた。

考えてみれば、俺はティアを泣かせてばかりだった。

アグスタの時も……

地上本部襲撃の時、俺は一人でウェンディ達を止めて、戻ってきたときも……

そして、その後、ギンガさんとスバルの所に戻ってきたときも、そうだった。

そして、今回スパイラルを使って、ティアの心に深い傷を作ってしまった。

「本当に……ごめんな……泣かせてばかりで……」

「いいの……こうして、フィルがそばにいてくれれば……それだけで良いの……」

「ティア……」

「フィル……」

俺とティアは、お互いに瞳を閉じ……

そして……

静かに……優しいキスを交わした。

「何か……照れるわね……」

「そうだな……」

ティアも俺も少し落ち着きを取り戻し、今度はお互いに照れくさくなっていた。

でも、決して嫌な気持ちじゃない。

ティアもそれは同じで、表情を見れば分かる。

元から何となく表情で分かることがあったが、こうしてお互いの気持ちが両思いになり、さらに分かるようになっていた。

『あの……あんた達、何、自分たちの世界に入ってるのよ！！』

《そうですよ！！　まったく！！》

「「あっ……」」

『……ったく、こっちのあたし、フィルのこと頼んだからね！！浮気しないように、ちゃんとあんたの魅力で繋ぎ止めておきなさい！！』

「分かってるわよ！！　あたしだって、フィルをなのはさん達に渡す気は、更々無いわ！！」

「えっ？　なんでなのはさん達が、そこで出てくるんだ？」

「『《はぁ……》』」

おい、お前ら、何で三人でため息をつくんだ。
そんなにおかしいこと言ったか？

『あ、相変わらずなのね……あいつは』

《はい……だからティアさんも苦労したんです》

「そうね……よく、両思いになれたって思うわ……」

『そのおかげで、誰にも取られなかったんだから、結果オーライということにしましょう』

「……そうね」

《そうですね……》

＊　　＊　　＊

そう言うと、ティアの身体が段々透けて、今にも消えかけていた。

『そろそろ……時間ね……』

「ティア……」

「未来のあたし……湿っぽいのは無しよ。また会いましょう！！」

『ふふっ、そうね。あんたがちゃんと、女に磨きをかければ、あたしなんてすぐに抜けるわよ』

「そう出来るように頑張るわよ。あたしには、大好きな人が……フィルがいるんだからね！！」

「ティア……」

『じゃあね……フィル、あたし……』

未来のティアは、消えてしまった。
だが、俺たちに悲しみはなかった。

これは別れじゃない。

未来での再会の約束だから……

＊　　＊　　＊

「それにしても……いろいろあったな……」

「どうしたの？　何考えてるの？」

「事件が終わってからのこと……思い出してたのさ……」

二人でベッドに座っていた俺たちは、事件が終わってからのことを思い出していた。

ＪＳ事件が終結し、俺はブラスターとスパイラルの影響で入院をし

ていたが、退院したその日、ティアがとんでもない爆弾発言を、みんなの前でしてくれた。

『あたしとフィルは恋人同士ですので、誰も取らないでくださいね！！！』

普段のティアじゃ、絶対あり得ない行動だ。

言い終わった後、相当恥ずかしかったみたいだけどな。

最初はかなり驚いていたけど、みんな祝福してくれて、六課を上げて盛大なパーティーまでしてくれた。

おまけに、はやてさんが変に気を利かせて、次の日から俺とティアを同じ部屋に変更していた。

荷物も俺とティアが訓練中に、ロングアーチのみんなで引っ越しをしていた。

あの時はさすがに驚いたぞ。

そのおかげで、俺たちは一緒の部屋で過ごしているのだ。

「あれは、さすがに驚いたわよ。部屋に戻ったら、あたしの荷物が全くないし……」

「確かにな……俺の場合は、なんでティアの荷物が、ここにあるんだって思ったからな……おまけに、下着まで落ちていたし……」

「……フィルのエッチ……でも、どうだった？　あたしも、ああいうのも、ちゃんと付けるんだよ……」

あの時落ちていた下着は、かなり過激な物もあった。

「うーん、下着も良いんだけど、やっぱり……」

「あっ……」

俺は、ティアを押し倒し……

「ティア自身のほうがいいな……こうして、ぬくもりを感じられるしな……」

「うん……あたしも……そうだよ……」

そう言って、ティアはギュッとしがみついてきた。

「ティア……いいか……」

「……いいよ……いっぱい、フィルを感じさせてね……」

俺はティアに、そっと唇を重ねた。

「んっ……フィルとのキス、やっぱり落ち着くね」

「だったら……もっとしないとな」

「もう……ばか……」

ティアは少し怒ったように言ったが、拒むことはしなかった。
再び唇を重ね、今度は貪るように刺激的なキスをした。

「きて……フィル……」

月明かりの下……

二人の身体は重なり、気持ちも一つになった。

＊　　＊　　＊

翌日、俺とティアは、なのはさんから休暇をもらうことが出来た。
ロードサンダーも修理が終わり、試運転も兼ねてツーリングする事にした。
目的地はとりあえず、クラナガンで良いかな。

「それにしても、気持ちいいわね」

「そうだな……あのな、ティア」

「んっ、何？」

「その……なんだ……そんなに密着するとだな……」

「胸が当たってるって、言いたいんでしょう……」

「……ああ」

「別に良いじゃない。あたしの胸なんて、何度も触れてるんだから……」

「そ、そう言う問題じゃなくてだな……」

ティアの胸が俺の背中に当たる度、理性がガリガリ削られているんだ。

正直蛇の生殺しだぞ……

「……よかった」

「えっ？」

「ちゃんと、あたしのこと、女の子として意識してくれてるんだ」

「当たり前だろ……ティアは俺の大切な……彼女なんだから……」

「ありがとう……フィル……すごく嬉しい……」

《相棒、ティアナさん、ラブコメってる所悪いんですけど、ちゃんと運転してください！！》

「す、すまん！！　サンダー」

「ご、ごめん！！」

そんなこんなで色々あったが、何とかクラナガンに着くことが出来

た。
サンダーは道中、散々俺たちのことをからかっていたがな……

クラナガンに着いた俺たちは、ウインドショッピングをしたり、アイスを食べたり、出店でたこ焼きが売っていたので、それを買って食べたりした。

ティアが俺に、たこ焼きを食べさせてくれるとき、顔を真っ赤にしていた。
普段、部屋でやるのは大分慣れたけど、やっぱり外だと照れてしまうようだ。

そして、時間も経ち、夜になると、俺たちはクラナガンの近くにある海岸に来ていた。

＊　　＊　　＊

「相変わらずここは、海が綺麗ね……」

「ああ……」

この場所は、俺とティアしか知らない秘密の場所だ。

海が見たくなったとき、よくここに来ていた。
そんな思い出の場所で、俺は今日、どうしてもティアに伝えたいことがある……

「……ティア」

「何？」

「俺たちは六課が解散すれば、それぞれの道に進んでいく」

「うん……」

「俺もティアも、執務官志望だけど、ティアはフェイトさんの所で、俺はクロノ提督の所でやっていくことになる」

「そう……なんだよね……」

執務官補佐は、二人までなので、フェイトさんはシャーリーさんとティアで精一杯なのだ。
そこで、クロノ提督が、俺の事を世話してくれることになり、六課解散後はクラウディア所属になる。

俺もティアも所属が違うので、執務官試験に合格し、コンビを組めるようになるまでは、一緒にいる時間はとれない。

「だから……」

俺はティアの左薬指に指輪をした。

「これ……もしかして……」

「執務官になり、コンビ組めるようになったら……」

「俺と……」

「結婚して欲しい……」

「あっ……」

あたしは嬉しさで、涙をこらえることが出来なかった。

「これ……もう……返さないからね……」

あたし、絶対執務官試験一発で合格するから、あんたも頑張って合

格してね。
そして……ずっと、一緒にいようね。

＊　　＊　　＊

二年後

「どうしたんだ？　昔の写真なんか見て」

「……ちょっとね。結婚式の時のやつが出てきたから……」

ティアが見ていたのは、俺たちの結婚式の写真だった。
一年前、俺とティアは猛勉強の末、執務官試験に一発で合格した。

正直、あの難関試験を一回で受かるとは思っていなかった。
クロノ提督もフェイトさんも喜んでくれたのだが、優秀な補佐がいなくなるって言って、引き止められそうになった。

俺たちはすぐにコンビを組み、地上の事件を解決していった。
白と黒の銃使いコンビなんて言われるようになって、仕事も増えてしまったけど……

そして半年前、ようやく旧六課メンバーと、元ナンバーズメンバーと、レジアスの親父さん達のスケジュールの合う日が出来て、結婚式をすることになった。

結婚式は、かなり内容の濃い物になった。

レジアスの親父さんがスピーチをしてくれたんだけど、緊張していて、普段の威厳が全くなかったり……

はやてさんが俺たちの結婚式のために、料理とウェディングケーキを作ってくれたり……

ウェンディとノーヴェが、相変わらずのどつき漫才を始めてしまったり……

スバルが俺たちに泣きついてしまって、それをギンガさんとチンクに止められたり……

エリオとルーテシアとキャロが、三人で一生懸命、歌を歌ってくれたり……

なのはさんとフェイトさんが、一言ずつお祝いの言葉をくれて、ティアと俺が泣きそうになってしまったり……

そして、俺とティアはみんなが見守る中で、誓いの言葉を交わし、

キスをしたんだ。

この一枚の集合写真……

これには、みんなの笑顔が写っていた。

素直じゃないが、似たもの同士の二人……

そんな、二人が結ばれ……

幸せを手に入れた……

「これからもよろしくね……あたしの素敵な旦那さん……」

# if endingシャマル（前書き）

ifエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

## if　ending　シャマル

「フィル！！　しっかりなさい！！　今、シャマル先生の所に連れて行くから！！」

「ねぇ、しっかりしてよ！！　お願いだから、目を開けてよ！！」

フレイム・グロウを倒し、なのはさん達の救出に向かったあたし達だったが、そこで見たのはスパイラルを使ってしまい、力尽きて倒れていたフィルの姿だった。

なのはさんの話だと、フィルは玉座の間にあるコアを破壊するために、たった一人玉座の間に残り、そこでスパイラルを使ってしまったのだ。

もちろん、なのはさん達も、その場でただ手をこまねいていた訳じゃなく、何とか中に突入しようとしたが、ＡＭＦの影響で部隊長とリイン曹長は、魔法が使えなくなっていたのと、なのはさんもブラスター３を使ってしまい、戦闘不能状態になっていた。

スカリエッティを倒したフェイトさんと合流したあたし達は、何とかサンダーの力で、隔壁を破壊して中に突入した。

倒れているフィルを、急いでアースラに運んだあたし達を待っていたのは、シャマル先生だった。

「シャマル！！　フィルが……フィルが！！」

「フェイトちゃん、落ち着いて！！　スバル、ティアナ、とにかく、アースラの医務室に急いで運んで！！」

「「はい！！」」

あたし達はシャマル先生の指示で、フィルを医務室に運んだ。
こうしている間にも、フィルの心臓は停止寸前になっている……

＊　　＊　　＊

「……フィル……」

連れてくるのが早かったのと、処置のおかげで何とか一命は取り留めているが……
モニタを見るかぎり、このままではフィルの命はない。
スパイラルを使って、その場で死ななかったのが不思議なくらいだ。

スパイラルはブラスター以上に危険なシステム……

（なんで……何でスパイラルを使ってしまったの……あのとき、私と約束したのに……）

＊　　＊　　＊

決戦前

私は、先日、大怪我をしたフィルの身体の状態を確かめるため、最後の検査をしていた。
メディカルポッドで回復しているのは、表面上だけだ。
あの大怪我を全て治すのは、こんな短時間では無理な話なのだ。

「フィル、分かっていると思うけど、あなたはまだ、完全に回復してるわけじゃないのよ」

「はい、分かってます……」

「本当は戦いには出したくないの。だけど、ここで止めても、あなたは行くんでしょう？」

「……はい、クアットロとは、最後の決着を付けなきゃいけないんです。それに、ヴィヴィオのことも助けないと……」

「フィル、まさか、あなた……」

「……大丈夫ですよ。ヴィヴィオは絶対助けますから……」

そう言って俺は、医務室を出ようとした。

「待ちなさい！！」

「シャマル先生？」

「あなた……まさか、スパイラルを使う気じゃ……」

「！！」

何で、スパイラルのことを知ってるんだ。

あれは、マリーさんにも話していないのに……

「ごめんなさい……プリムから、全て聞いたの……」

「プリム……お前」

《マスター……ごめんなさい。でも……》

「あれほど、言うなって言ったろうが……特にシャマル先生には……」

「フィル、そんなに、私が信用できないの！！」

どうして……

勝手にスパイラルの事を聞いたから……

でもね……私は……

「そうじゃ……ないんです……」

「それじゃ、どういう事なの？」

「……知られたくなかったんです。シャマル先生だけには……自分が……好きになった人だけには」

「えっ？」

「シャマル先生……俺……あなたのことが……好きです……」

「う、うそ……冗談よね」

「……冗談じゃないですよ。かつて、向こうの世界で、俺はあなたの優しさに救われました。六課襲撃のとき、俺はあなたに庇ってもらい……生き残ることが出来たんです……」

前の時、六課襲撃をくらい、ガジェットに対してヴァイス陸曹と一緒に奮戦したが、数の暴力と戦闘機人がいたため、ヴァイス陸曹は戦死。

そして、ザフィーラさんとシャマル先生も、死んでしまった。

しかも、シャマル先生は、俺の代わりに戦闘機人からの攻撃を喰らって……

『フィル……あなたは……生きなきゃ駄目よ……私達の分まで……みんなを……お願いね……』

今でも覚えてる。

あの時のシャマル先生の最後は……

「だから……私には……言えなかったのね……」

「片思いなのはかまわないんです！！　だけど、あんな事になるのは、もう嫌なんです……自分の好きな人が、俺のせいで死んで……えっ？」

俺がその先を言おうとしたとき、シャマル先生に抱き寄せられていた。

「……ばかよ……そんなになるまで、自分を責めて……」

「それにね……片思いなんかじゃないわ……私もね……大好きよ……フィル……」

「シャマル先生……」

「フィル……」

瞳を閉じ……

俺たちはそっと……

唇を重ねた……

「ふふっ……」

「あはは……」

「……なんか、ちょっと恥ずかしいわね……」

「同感です……正直、こうなれるなんて、思わなかったですから……」

「私も同じよ。ただ、フィルとはちょっと理由が違うのよ」

「と、いいますと？」

「だって……六課にはいっぱい、かわいい女の子がいるでしょう。はやてちゃんもそうだし、フェイトちゃんだって……それに一番フィルに身近なのはティアナかな。だから、こんな年上の女なんて……そう思っていたから……」

シャマル先生は話し終わると、顔が真っ赤になり、うつむいてしまった。

そんなシャマル先生を、そっと抱き寄せ……

「あっ……」

「そんなこと言わないでください。俺にとって一番好きな女性は、シャマル先生なんですから……」

「……ありがとう……フィル……」

私はフィルの言葉が嬉しかった。
年上って事もあるけど、私はこんな風に恋愛をすることは、無いと思っていたから……

「フィル……あのね……」

「はい？」

「私のこと……シャマル、って呼んで欲しいの。恋人同士だったら、お互いに名前で呼び合う物でしょう……」

「確かに、そうですね……」

「あと、その敬語も禁止ね。仕事の時はともかく、二人きりの時はやめましょう……」

「……わかったよ……シャマル」

「……嬉しいわね……好きな人に、そうやっていってもらえるなんてね……」

「シャマル……」

「フィル……」

俺たちは、再びキスをしようとしたとき、アースラ艦内に警報が鳴り響いた。

「時間……みたいだ……」

この警報は第一級戦闘配備。

降下ポイントまで、あと３０分を知らせる物だった。

「フィル……」

「どうしたの？」

「絶対……生きて帰ってきて！！　私を一人にしないでね！！」

「大丈夫だよ……ちゃんと生きて帰ってくるよ……」

＊　　＊　　＊

現在

「ちゃんと帰ってくるって……言ったのに……」

大切な人が、今にも死んでしまうってのに、私は何も出来ないの……

《一つだけ……方法があります……》

「クラールヴィント？　違う？　どこから？」

《フィルのポケットを見てください》

謎の声に従って、フィルのポケットを探ってみると、クラールヴィントがあった。

「どういう事なの？　クラールヴィントが二つあるなんて？」

《私はあっちの世界のクラールヴィントです。かつて、マスターからフィルに託された……》

「それでもおかしいわ。だって守護騎士システムで成り立っている私達は、死んでしまうとデバイスも一緒に消えてしまうのに？」

《最後の力で、私をシステムから切り離したんです。それで存在しているんです……》

「そういうことだったのね。それなら納得いくわ。それで、何か方法があるの？」

《はい……》

「お願い、クラールヴィント！！　フィルを助ける方法を教えて！！　フィルを助けるためなら、どんなことだってするから！！」

フィルが助かるなら、どんなことだってしてみせる！！

例え、私の命と引き替えだとしても……

《方法というのは……私のコアを……フィルに飲ませてください》

「なん……ですって」

《知っての通り、私のコアは魔導師一人分に匹敵する魔力を持っています。それを生命力に変換し、彼を助けるしかありません》

「だけど、そんなことをしたら、あなたが！！」

《私のことは良いんです。かつて私は、マスターを守れなかった……こっちに来てからも、そんな後悔でずっといました。だから、今度は後悔したくないんです！！　マスターが好きになった人を助けられるなら、それで私は本望なんです！！》

「クラールヴィント……」

クラールヴィントの思いに、私は涙を抑えられなかった。

「……ごめんなさい……あなたの命……使わせてもらうわ……」

《喜んで……マスター》

《幸せになって……くださいね……あんな未来は……なくなったんですから……》

「ありがとう……クラールヴィント……」

私は涙をこらえながら、クラールヴィントのコアを取り出した。
ここで、中途半端なことをしたら、クラールヴィントに申し訳がない。

「フィル……お願い、これで……蘇って！！」

＊　　＊　　＊

医務室前

医務室前には、スバルとティアナが外で待機していた。
さっきまで、六課主要メンバー全員いたのだが、シャマルの指示で、今は二人だけになっていた。

「ティア……」

「何よ……」

「フィル……大丈夫だよね……」

「大丈夫に決まってるでしょう！！　あんたは余計な心配なんかしない！！」

スバルにはああいったけど、正直言ってフィルの容態はかなり酷い。
あの時のシャマル先生、打つ手がないって顔をしていた。
そんなことを考えてると……

「「シャマル先生！！」」

「もう、大丈夫よ。フィルは……峠を越したから……」

「本当ですか！！」

「ええ……」

「あたし、みんなに知らせてきます！！」

「ちょっと待ちなさい！！　あたしも行くわよ！！」

スバルとティアナは、フィルの無事を知らせるために、みんなの所に走っていった。

「……あなたのおかげで、フィルが助かったわ……本当にありがとう……クラールヴィント……」

私の手に握られた、コアのないクラールヴィント……
私はあなたがしてくれた事、決して忘れないから……

＊　　＊　　＊

二週間後

フィルも意識を取り戻し、今は一般病棟に移っていた。
一時は面会謝絶だったが、ここまでになると、面会も許可が出て、食べ物も普通の物を食べられるようになっていた。

「はい、フィル。あーん♪」

「あ、あーん……」

「どう……かな……」

「うん、美味しいよ」

「よかった！！」

「よかったな、シャマル。私の所でいっぱい勉強したもんな」

「は、はやてちゃん！！　それは……」

そう、私は、はやてちゃんにお料理を教えてもらっていたのだ。
好きな人に、自分の手料理を食べて欲しくて……

「しかし、驚いたわ。海鳴にいた頃は、あれだけ教えても駄目だったのに、たった１０日でこれだけ出来るようになったんやから……きっと、愛の力やね」

シャマルの手を見ると、包丁の切り傷で一杯だった。
それだけ、一生懸命練習した証だった。

「シャマル……」

「あはは……なんか……恥ずかしい物、見せちゃったわね……」

そう言って、シャマルは自分の手を、後ろに隠してしまった。

「そんな訳ないだろ。その傷は、俺のために一生懸命してくれた証だろ。はやてさんから聞いたけど、本当に料理が苦手だったのに、これだけの物を作ってくれたんだから……」

「本当に……ありがとう……シャマル……」

「フィル……」

「あの……お二人さん、良い雰囲気になるのはかまわないんやけど、私がいないときにしてくれるかな……」

「「あっ……」」

はやてさんの言葉に、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

そんな俺たちを見て、はやてさんはさらにからかってきた。

でも、俺もシャマルも、そんな一時が嬉しかった。

＊　　＊　　＊

「そっか……クラールヴィントが……」

「ええ……自分のコアをあなたに託したの……」

退院して一ヶ月が経った頃、シャマルから、初めて俺が助かった理由を聞かされた。

クラールヴィント……ありがとうな……

お前がくれた命、大切にするから……

「シャマル……俺……」

「フィル、クラールヴィントのことを、少しでも思ってくれるなら、二度とスパイラルは使わないで……もう、あんな思いは……嫌よ……」

シャマルの瞳から、大粒の涙があふれていた。

「約束するよ……二度とスパイラルは使わないよ……」

「ありがとう……」

あんな危険なシステム、もう二度と使いたくない。
大切な人を二度と悲しませたくはない……

＊　　＊　　＊

「あ……あの……シャマル」

「なんで、俺はこんな事になってるのかな?」

俺とシャマルは、部屋に戻り、しばらくの間、ベッドに座ってのんびりしてたのだが、突然シャマルが俺をベッドに押し倒した。

「あ、あのね……私だって……女なんですよ……フィルったら、いつまでたっても、私のこと求めてくれないし……」

「私……魅力ありませんか……」

「違うよ！！　そうじゃない！！」

「じゃ、なんでなんですか！！」

「……だって、そんなにがっついたら、嫌われると思ったから……」

俺だって男なんだ。
好きな人と一緒にいて、ぬくもりを感じ合いたいと思うのは当たり前の感情だ。
だけど、自分勝手に求めるのは、そんなのは嫌だから……

「ばかね……そんなわけ無いでしょう。私は退院してから、ずっとフィルに抱きしめてもらいたいって思ってたのよ」

「シャマル……」

「あっ……」

「ごめんな……不安にさせて……本当に馬鹿だ……俺……」

俺は上体を起こし、シャマルを力一杯ギュッと抱きしめた。

「……フィル、私の不安を消して……いっぱい……いっぱい……抱いて……」

瞳を覗き込むと、シャマルはそっと目を閉じ……

俺は、そんな彼女の唇にキスをした。
最初はふれあう物だったけど、お互いに気持ちが抑えきれなくなり、だんだんと深い物になっていった。

「お願い……いっぱい抱きしめて……」

「ああ……いいんだね……」

「遠慮したら……怒りますからね……」

その夜……

身も心も結ばれ……

俺とシャマルは、お互いの体温を感じながら、幸せな気持ちになっていた。

＊　　＊　　＊

4年後

六課解散後、俺とシャマルは管理局を辞め、俺は医学の道を歩むことになった。
俺はスパイラルの影響で、現場で戦うことが出来ない身体になってしまった。

そんな俺にシャマルは、医学の勉強しないかと言ってくれ、必死で勉強し、何とか医師の免許を手に入れた。そして、俺はシャマルと結婚し、クラナガンで開業医として、一緒に働いているのだ。

ちなみに、俺が管理局を辞めることは、そんなに苦労は無かったのだが、シャマルの方が、闇の書事件のことがあって、かなり苦労し

た。

だけど、レジアスの親父さんが取りはからってくれて、条件付きでシャマルの退職を認めてくれた。

条件は、期間限定で、はやてさんが地上所属になり、地上の状況を勉強し直すこと。
実はこれは、レジアスの親父さんの親心でもあった。

はやてさんはいつか管理局のトップになれる素材だ。
だから、今の内に沢山勉強して欲しい。

そのことが分かっていたから、はやてさんも条件を呑んだのだ。

そして、はやてさんは俺たちに……

『フィル、シャマル、二人とも幸せになってや……私のことは気にせんといて……レジアス中将の真意は分かってるから……』

レジアスの親父さん、そしてはやてさん……

俺たちは、そんな優しい人たちのおかげで、今こうしている……

これから、俺たちは色んな困難に遭うだろう……

だけど、愛する人がいれば、それを乗り越えられる……

例え苦しいときでも、シャマルの笑顔が、俺に力を与えてくれる……

そして、今日も……

「フィル！！　今日も、一日頑張りましょうね！！」

穏やかな一時……

そんな日常を……

これからも一緒に歩んでいきたい……

大切な人と……シャマルと一緒に……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　フェイト（前書き）

この物語は、もう一つのフェイトｅｎｄｉｎｇになります。
それでは、二人の物語をお楽しみください。

# if ending フェイト

「ふぅ……やっと、お仕事が終わったよ……」

私は臨時のお仕事で、クラナガンに出張に行っていた。
本当は六課でパーティーに参加していたはずなのに……

「まったく……本当なら、フィルと一緒に楽しく過ごしていたはずなのに……」

「でも、これが買えたから良いかな？」

手に持っていたのは、クラナガンでも有名な喫茶店のクッキーだった。
これを一緒に食べるんだ。

「……あれは？」

寮に戻ろうとして、ふと目に付いたのは、海岸で空を見上げていたフィルの姿だった。

＊　　＊　　＊

「……ん……そうだ、脅かしちゃおっと♪」

私はフィルに気づかれないように、木陰から近づいて行った、そしてすぐ近くにまで来ると、フィルの呟きが聞こえてきた。

「終わったな……」

《そうですね……やっと終わりましたね》

「パーティ……楽しかったな……」

《マスター……は、はい……マスター……》

「これで……最後かと思うと……寂しいな……俺の役目も……これで終わりか……そして……」

「……後は……俺が……消えるだけか……」

『えっ？』

私は思わず、持っていた缶ジュースを落としてしまった。
その音で、フィルに気づかれてしまった。

「誰だ！？」

「あ……ああ……」

「フェイト？　いつから、そこに？」

フィルの言葉に、私は震えが止まらなかった。
うそだ、そんなのうそだ！！

「どういう……事……なの……」

「……」

「フィル！！」

「……元々、俺の命は、あの時に……クアットロに殺された時に、

終わってたんだ。女神に命をもらい、ここまで生きてきたけど、こうして未来が変わった今、俺はここには……いられないんだ……」

「そんな!!……ど、どうして……」

私の目からは、ぽろぽろと涙が零れていた。
さっきまでの楽しい気持ちが嘘のように、心の中は悲しみに満ちていた。

震える手から、持っていたクッキーがこぼれ落ちてしまった。

「これは？」

フィルがクッキーの入った包みを拾って、中身を見ると優しく微笑んだ。

「これ……俺たちがよく話していた、あの店のだね？　食べてもいい？」

「……うん、いいよ」

私は泣きながらも、何とかと頷いた。

「モグモグ……うん、おいしい。ありがとう、これ、美味しいよ」

そう言ってフィルは、私に一つ差し出した。
私はそれを食べてみたが……

「なっ、美味しいだろ？」

「……美味しくなんか……無いよ……これだったら、フィルが作ってくれた方が、よっぽど美味しいよ……」

「だって……こんなに……グス……しょっぱいんだよ……グス……」

「フェイト……」

「嫌だよ！！　居なくならないでよ！！」

私は、我慢しきれなくなって、フィルに抱きついた。
そして、そのままフィルの胸で泣き続けた。

そんな私を、フィルは優しく抱きしめて、頭を撫でてくれた。

「フェイト……俺も、本当は一緒にいたかった。一緒にいて、色んな所に行ったり、笑ったり、怒ったり、泣いたり……してみたかった……」

「だったら、一緒にしていこう！！　フィルはまだ、全然幸せになって無いんだよ！！　約束したじゃない……ずっと……そばにいるって……」

「幸せだったよ……フェイトと出会って、恋人同士になって……そして、俺にたくさんの優しさをくれた……たった一つだけ……心残りは、そばにいられないことかな……」

「フィル……」

フィルは私を抱きしめ、泣きながらそう言ってくれた。
目を開き、顔を見上げてみると、フィルの身体が、淡い光に包まれていた。

そして、フィルが段々と……消えていっている……

「どうやら……本当に……お別れだ……」

「嫌だよ！！　こんなの……こんなの……嫌だよ！！」

「フェイト……」

「お願いだよ……消えないでよ！！　ずっと、私のそばに居てよ！！」

抱きしめたフィルの体から、温もりが消えていっている……

そして……その体は、光の粒になって空へと昇っていってる。

「フェイト……こんな俺を、好きになってくれて……本当に……ありがとう……幸せに……なってね……俺の大好きな……フェイト……」

『ばかいってんじゃないわよ！！　あんたが消えてどうするのよ！！』

「えっ……？」

謎の声がしたと同時に……

俺の身体は復元されていき……

最後には……

完全に元の身体になっていた。

「フィル……フィルっっっ！！」

「フェイト……？」

「フィル……ぐす……フィル……ヒック……フィル！！」

俺の胸でフェイトは、大声で俺の名前を呼びながら、ずっと泣き続けていた。

「フェイト……ごめん……本当にごめんな……」

「フィル……もう二度と消えないよね……ずっと、私のそばに……いてくれるよね……」

「……ああ……ずっと一緒だよ……フェイト」

「フィル……」

俺たちは、お互いの存在を確かめ合うように、キスをした。

二度と別れたくない……

そんな思いを込めて……

『……幸せになりなさいよ……フィル……』

「ティア？」

「どうしたの、フィル？」

「いま……ティアの声が、聞こえた気がしたんだ……」

ポケットを探ってみると、あの時、ティアから託されたクロスミラージュが無くなっていた。

まさか……

あの声はティアだったんだ。
ティアが、俺のことを救ってくれたのか……

ティア……お前からもらった命、大切にするよ。

「……フィル」

「どうしたの？」

「……今日は……はなれたくない……」

「俺もだよ……」

フェイトも俺も、今日は離れたくない……
俺たちは、俺の部屋に行くことにした。

最初は、ベッドに座って話していたけど……
でも、今は、お互いのぬくもりをすぐにも感じたい。

俺たちにあるのは、その気持ちだけだった。

俺は、フェイトをベッドに押し倒し……

「あっ……」

「……フェイト」

「フィル、今日はいっぱい……いっぱい抱きしめてね。はなれちゃ……いやだからね」

「そのつもりだよ。今日は……寝かさないからな……」

「うん……」

その夜、初めて俺たちは結ばれた。

身体だけでなく、心も結ばれ、俺たちは本当の意味で一つになった。

＊　　＊　　＊

「はい、フィル。あーんして♪」

「あーん」

「おいしい？」

「美味しいよ。フェイトが食べさせてくれてるんだもんな……」

「そうだよ♪　このプリンには、私の思いをいっぱい込めてるんだよ。いっぱい食べてね♪」

「フェイト……」

「えへへ♪」

俺とフェイトは今、クラナガンの喫茶店にいた。
この場所は、以前からフェイトと話していて、来てみたかったところの一つだった。

あの夜、フェイトが持っていたクッキーはこの店の物だった。

なぜここに来ているかというと……
実は、はやてさんが、フェイトから、こないだの俺のことを聞いて、臨時でお休みをくれたのだ。

『フィル……もう、二度と離れたらあかんよ。フェイトちゃんと一緒の時間、大切にしてな……』

はやてさんの言葉には、本当に色んな思いが込められていた。
だから、一緒にいられる一時を大切にしたい……

そんなことを思っていると……

「ん？　なんか表が騒がしいね」

「行ってみるか」

俺とフェイトは、外の騒ぎが気になって、喫茶店を出て、その場所に来てみると……

「あっ、ハラオウン執務官！！　丁度良いところに！！」

「どうしたんですか？」

「実は……」

現場にいた管理局員によると、現在銀行強盗が立て籠もってしまい、人質こそいないが数十人が籠城している状態で、さらにその家の数人はＡＡランク以上の魔導師がいるとのことだった。

「というわけなんです。我々だけでは、どうしようかと思っていたのです……」

「フィル……」

「仕方ないな……」

「ここは私達が何とかします。皆さんは、現場の周囲の安全確保をしてください」

『了解しました！！』

フェイトの指示で、現場にいた局員達は、周囲の安全確保を行うことになった。

そして、俺たちは犯人達の説得をするために、建物の中に入った。

「おい！！　管理局が撤退していくぞ！！」

「どうせ、俺たちの事をビビッたんだろ！！」

『ははははははは！！』

建物の中にいた強盗団は、管理局が撤退したと思い、高笑いをしていた。

だが、彼らは知らない……

これから始まる地獄絵巻を……

後に、この事件は一部の人間で、ある意味ＪＳ事件よりも恐ろしいと言われる事になった。

＊　　＊　　＊

「動くな！！」

「管理局です！！　無駄な抵抗しないで、手を挙げてください！！」

「へっ!!　なめんじゃねえよ!!　たった二人でなにができるって言うんだよ!!」

「それにしても、偉くべっぴんが来たじゃねえか!!　そっちの男は冴えないみたいだけどな……」

「……いま、何て……言ったの……」

「聞こえなかったのかよ、姉ちゃん!!　そんな何の取り柄もなさそうな男と一緒にいて、かわいそうだなっていったんだよ!!　あはははは……えっ……？」

男達が俺のことをバカにして笑っていたが、その内の一人が壁に叩きつけられるのを見て、顔色が一変した。

「な、何が起こったんだ!!」

「……あなたたち……今の言葉……取り消しなさい……」

フェイトがバルディッシュを起動させ、いつの間にか、ライオットザンバーを手にしていた。
しかも、カラミティの方だった。

その一撃でさっきの男は、壁に叩きつけられたのだ。

まるでホームランを打つように……

「おい！！　そこの優男！！」

「なんだ……」

「あいつは誰なんだ！！　ＡＡランクのあいつを、ああもあっさり倒すなんて！！」

「知らないのか？　フェイト・Ｔ・ハラオウンを……」

『な、なにいいいいい！！』

犯人達は、フェイトのことを知ると、一斉に驚き始めた。

やっぱり、フェイトの名前は有名なんだな。

「フェイト・Ｔ・ハラオウンだと！！　あの金色の夜叉かよ！！」

「もしくは死神と言われている、あのフェイト・Ｔ・ハラオウンかよ！！」

「……おい、今なんて言った？」

「だから！！　金色のや……しゃ……」

犯人が言葉をいい終わる前に、一筋の白色の魔力弾が、犯人の頬をかすめていった。

「……俺のことは、かまわねえ。だけど……」

「フェイトのことを、そんな風に言うのは許さねえ！！　てめえらまとめて地獄を見せてやる！！」

俺は、プリムをブレイズモードにして、犯人達に全員バインドをかけた。

そして、フェイトもライオットザンバーの刃を、犯人達に向けていた。

「さて、あなたたち……」

「覚悟は……」

「「出来ているでしょうね（だろうな）！！」」

『ひいいい

『八神！！　聞こえるか、八神！！』

「聞こえてるで、どうかしたんか、そんなに慌てて？」

『これが慌てずにいられるか！！　これを見ろ！！』

「なんや……ぶはっ！！」

レジアス中将から送られた映像を見て、私は思わず口に含んでいたコーヒーを吹き出してしまった。

「な、なななな！！」

『……こういうことだ……八神、あの二人をどうにか止めてくれ……』

「……レジアス中将……私に死ねっていうんですか……フェイトちゃんもフィルも、完全にぶち切れてるやないか……いったい、現場の局員は何しとったんや……」

『実はな、建物にいる犯人達は、ＡＡランクの魔導師が数人いて、現場の局員では対処できなかったんだ。丁度、あの二人が現場の近くに来た物だから……』

「現場の局員がフェイトちゃん達に、助っ人を頼んだ……というわけか……」

『何とも情けない話だ。休暇中のあの二人の力を借りなければならないとは……』

「フェイトちゃん達には、後日ちゃんと休暇をあげるわ。それよりも……」

画面上の二人は、犯人達にバインドをかけて、身動きをとれない状態にしていた。
普段の二人なら、これで終わるのに、さらに二人は攻撃魔法を使おうとしていた。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待ちぃ！！　あれはまさか！！　プラズマランサー・ファランクスシフト！！」

二人の周りには、数十発のプラズマランサーが展開されていた。
しかも、二人分……

『……八神…』

「なんですか……」

『……こんなことは言いたくないが……儂は、犯人に同情するよ……』

「……不謹慎やけど、私もや……」

正直言って、あれを喰らったら、ある意味スターライトブレイカーを喰らうより地獄や。

３８の光球から秒間７発、４秒間で計１０６４発の雷の槍が撃ち出される。

しかも、プラズマランサーで……

『「あっ……」』

『みぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

そんなことを思っていたら、犯人達が、ファランクスシフトの嵐で、この世の地獄を見せられていた。

後に、この事件を見た人間は、こう語る。

この二人を、本気で怒らせてはならない。
あれは、高町なのは以上だ……

この事件以降、犯罪者の間では、高町なのはよりも、フィルとフェイトのコンビの方が恐れられるようになった。

＊　　＊　　＊

4年後

「フィル、何見てるの？」

「なに、昔のことをちょっと思い出したのさ」

俺が、昔の写真を見ていたら、後ろからギュッと抱きついてきた。
こうしてると、フェイトの胸が背中に直に感じる。

フェイトはいつもこうやって、俺の理性をガリガリ削ることをしてくる。

今も、俺の理性は陥落寸前になっていた。

「あれから……いろいろあったな……」

「そうだね……」

六課が解散した後、俺達はそれぞれ新しい道を歩むことになった。

エリオとキャロ、ルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはクロノ提督の口利きで、執務官補佐をすることになった。

自分が執務官だったこともあり、教えられるだろうとのことで、クロノ提督の補佐として、クラウディアに配属になった。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式になのはさんの養子になり、名前も高町ヴィヴィオとなり、本人の希望で聖王教会系列の魔法学院に通っている。

なのはさんはＪＳ事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空戦魔導師としての道を選んだ。

戦闘機人の連中は、ギンガさんの更正プログラムを受け、それぞれ管理局内で働くことになった。

何人かはナカジマ三佐が、養子として引き取った。

今でも、ノーヴェやウェンディ達とはよくつるんだりしてるけどな……

そして俺は、一年間フェイトの元で執務官補佐をして、執務官試験を一発で合格し、そのあとすぐ地球にいるリンディさんの元に、正式に結婚の挨拶に行った。

リンディさんとエイミイさんは、すぐに祝福してくれたのだが、クロノ提督だけが……

『大切な妹を、お前なんかにやれん！！』

その言葉に、フェイトが本気で切れてしまい、義兄であるクロノ提督に、バインドをした後、プラズマランサー・ファランクスシフトと、さらにリミットブレイクしてライオットザンバーで、ホームラ

ンしてしまったのだ。

しかも、女性陣は止めるどころか、ボロボロになって戻ってきたクロノ提督を、さらにボコっていた。

正直……お気の毒になるくらいだった……

そんなこんなで、ハラオウン家の女性陣の手で、俺とフェイトは無事一緒になることが出来た。

「あの時、クロノったら、フィルのこと認めようとしないし……」

「まぁ……クロノ提督からしたら、俺はかわいい義妹を奪い取る害虫みたいなものだからな……でも、クロノ提督、あの後本当に悲惨だったよな」

実は、これだけで終わらなかったのだ。

この話を聞いたなのはさん達が、クロノ提督を呼び出して、フェイトと一緒に三人で、伝説のフルボッコをしたのだ。

俺は、闇の書事件のことは、あの映像でしか知らないけど、あの時のトリプルブレイカーは恐ろしい物を感じたぞ……

それを、威力を押さえてるとはいえ……

絶対喰らいたくないな……

「……あの時は、かなり怖かったぞ……」

「そんな不安にならないで……フィルには、あんな事は絶対しないから！！」

「本当に？」

「お願い……信じてよ。私は、フィルを誰よりも愛してるんだから……」

「でもな……」

フィルは、こっちをちらちら見ながら、不安な顔の演技をしていた。

んっ、もう……あれをしなきゃ駄目なの……

「……これが、私の気持ちだよ」

そう言って、フェイトは俺に抱きつき、キスをした。
その気持ちを表すように、だんだんと深くつながるキスになり、キスが終わった後は、俺たちの間でその証が出来ていた。

「……恥ずかしいんだからね……もう……」

「ありがとう、フェイト。すっごく伝わった……理性が飛びそうになるくらいに……」

「えへへ♪　いっぱい、愛して欲しいんだもん♪」

「だったら、俺はフェイトに嫌われないように、いっぱい愛さなきゃな……」

「そうだよ。いっぱい、かわいがってくれなきゃ、すねちゃうからね♪」

甘えん坊で、ちょっとヤキモチも妬いたりするけど、大切な愛する奥さん……

これから俺たちは、色々あると思う。

でも、俺たちは二人なら、それを乗り越えられる。

フェイトの笑顔がある限り……

「フィル！！　ずっと……ずっと、いっしょだからね！！」

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　スバル（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

# if ending スバル

「フィル、今助けに行くからね……」

あたし達フォワードは、何とかフレイム・グロウを倒すことが出来、ヴァイス陸曹のヘリでゆりかごに進入することが出来た。
しかし、フレイム・グロウを倒す代償も大きく、あたしとティア以外は戦闘不能になってしまった。

戦闘不能になったメンバーは、あたし達に残った魔力を渡してくれ、ギン姉はあたしにブリッツキャリバーとリボルバーナックルを託してくれた。

突入したあたし達は、それぞれ役割を分けて行動することにした。
ティアはスーパーサンダーでなのはさん達の救出活動を、あたしは、クアットロを倒しに行ったフィルの援護に向かうことになった。

そしてあたしは、ついにクアットロのいる部屋に取り着くことが出来た。

「マッハキャリバー、ここにいるんだね」

《はい、フィルとクアットロの反応があります……これは！！》

「どうしたの、マッハキャリバー！？」

《相棒！！　急いでください！！　フィルの生命反応が殆どありません！！》

「嘘！！　キャリバーズ、ここをぶち破るよ！！」

《《了解！！》》

「いっけぇぇぇ！！」

あたしはリボルバーナックルで目の前の壁を破壊し、中に突入することが出来た。

そして、あたしが目にしたのは……

クアットロの攻撃で、ボロボロになって倒れていたフィルの姿だった。

「フィ……フィル……」

「あら……誰かと思ったら、ゼロ・セカンドですの。せっかくここ

まで来たんですから、このゴミ持って帰ってまらえますぅ～～」

そう言って、床に倒れているフィルを、あたしの方へ蹴飛ばした。

「……うそ……だよね……返事してよ……」

「……」

「あ……あああ……うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

戦闘機人としての力を解放すると、エメラルドグリーンの瞳が、金色に書き換わっていた。

「な、なんですの。この力は！？　ゼロ・セカンドに、ここまでの力があるなんて！！」

「……許さない……」

「フィルを……大好きなフィルを……返せぇぇえぇえぇ！！」

怒りで潜在能力を完全に引き出したスバルは、クアットロに振動破砕を放ち、聖王の鎧を完全に砕いた。
間髪入れず、さらにスバルは振動破砕を使用して、クアットロをひたすら殴り続けていた。

クアットロは幾度の振動破砕を受け続けて、全身は皮膚が破れ、体内の機械部品が見えるくらいボロボロになり、もはや戦闘能力は全く残っていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「……あ、あははは……まさか……あなたなんかに……やられ……るとは……ね……」

「……うるさい……しゃべるな……」

もうこいつの声を聞いているのも、耳障りだ……
あたしはトドメを刺そうと、拳を振り下ろそうとしたとき……

「やめろ、スバル！！」

フィルの手によって、あたしの右腕が止められていた。

「フィ……フィル……」

「こんなクソ野郎を殺して……お前の手を汚すな！！」

「だけど！！　こいつはギン姉を……フィルを……そして、未来ではみんなを……」

「スバル……」

これ以上スバルに、こんなクソ野郎を殴って、その手を穢してほしくない。
俺は、スバルの手を、そっと握り……

「お前のその手は……こんな奴を殴るための物か……そうじゃないだろ……」

「あっ……」

「お前のその手は、困っている人を助けるための物だろ。その優しい心を、こんな奴のために捨てないでくれ……」

「フィル……あたし……あたし……」

＊　　＊　　＊

（まったく、甘いですわね。でも、そのおかげで隙だらけですわ）

フィル・グリードの甘さのおかげで、私は何とか一撃を入れるだけの力が回復し、おまけに二人とも隙だらけになってますわ……

この毒針を打ち込めば……

＊　　＊　　＊

「フィルの手……暖かいね……」

「お前の手も……暖かいさ……お前の優しい心みたいな……そんな暖かさが……」

「フィル……」

俺とスバルが、気を抜いていたその時……

（終わりですわ！！）

背後からクアットロが、毒針を打ち込もうとしたが……
突如、上空から砲撃がクアットロの胸部を貫いていた。

「が……あ……あ……」

「「クアットロ！！」」

完全に油断していた。
クアットロが、背後から攻撃を仕掛けていたなんて……
だけど、だれがクアットロを？

「二人とも、大丈夫か？」

「はやてさん！！」

「八神部隊長！！」

俺たちを助けてくれたのは、八神部隊長だった。
しかも、リイン曹長とユニゾンまでしていた。

「……どうやら、無事なようやな」

「はやてさん、どうしてここに？」

「フィル達のことが気になってな。なのはちゃん達をヘリに戻した後、私だけ戻ってきたんよ」

『ちなみに、ゆりかごのコアも破壊してますから、魔法も使えるんです』

「それで、ユニゾンが可能になったんですね」

「そういうこっちゃ、スバル、フィル。こんな奴の為に、あんた達の手を穢す必要はあらへんよ。こういうのは私の仕事や」

はやてさんの言葉に、俺もスバルも目頭が熱くなるのを押さえられ

なかった。

「……はやてさん」

「フィル、何とかワープは使える？　二人は先にワープで行ってくれるか？」

「八神部隊長はどうするんですか？　もうすぐゆりかごは機能停止して、崩壊が始まりますよ」

「んー、大丈夫や。ちょっとだけお仕事したら、すぐ脱出するわ。リインもいるから、１回だけなら、フィルのワープが使えるから大丈夫やで」

『えへへ、実はメンテナンスの時、こっそりワープの術式をプリムに教えてもらったんです』

《ごめんなさい、どうしてもって言われて教えてしまったんです……》

「そういうことや、二人は先にアースラに戻って、待っててや」

「……わかりました。アースラで待ってますよ」

フィルとスバルは、ワープでアースラに戻っていった。

これで、後は……

＊　　＊　　＊

「や…がみ……はやて……」

「クアットロ……あんたは私達の大事な物を、たくさん踏みにじった」

私はシュベルトクロイツを構え、クアットロに向け私の最大の魔法、ラグナロクの詠唱をした。

「……その罪……自分の命で償いや！！」

「ひ……ひいぃぃぃぃ……」

クアットロは、歯をガタガタ震わせ、腰を抜かしてその場を動けなくなったが、そんなのは関係ない。

こいつを殺す……

これは、フィルの仕事やない。
フィル達に、これ以上手を汚させる必要はない。
これは、部隊のトップに立つ私の役目や。

「響け……終焉の笛……ラグナロク！！」

ラグナロクの詠唱が終わると、魔力球がクアットロの目前で、その凶悪なエネルギーを放たれるのを待っていた。

「……終わりや……」

「あ……あああああ……」

「ラグナロク・ゼロ距離砲撃！！」

「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

放たれたラグナロクは、クアットロを完全に消滅させ、クアットロ

のいたところは、巨大なクレーターになっていた。

＊　　＊　　＊

「……これで、本当に終わったな……リイン……」

『はいです……フィルもスバルも、こんな奴のために、手を汚しちゃいけないんです。でも、本当は、はやてちゃんにも、して欲しくなかったです』

「リイン……これは誰かがやらなきゃいけないんや。そして、これは部隊のトップである私の役目なんよ……」

『はやてちゃん……』

「……戻ろうか……みんなの所へ……」

『はいです！！』

私とリインは、ワープを使って、アースラに戻った。
私が戻った後、アースラのアルカンシェル・ノヴァで、ゆりかごは完全消滅した。

こうして、ＪＳ事件は幕を閉じることになった。
だが、フィルはブラスターの使いすぎで、身体のあちこちにダメージが出来てしまい、そのまま病院になってしまった。

＊　　＊　　＊

１０日後

「フィル、お見舞いに来たよ」

あたしはフォワードの中で比較的軽傷だったので、メンバーの中で一番早く復帰することが出来た。
今日も、フィルのお見舞いに来ていた。

「ありゃ……寝ちゃってるね」

こうしてみると、フィルの寝顔ってかわいいんだ。
本人に言ったら、怒りそうだけどね。

「布団はいじゃって……風邪……引いちゃうよ」

あたしはフィルの布団を直してあげると、持ってきたリンゴを剥き始めた。
リンゴをむいていると、ふとテーブルにあった一冊のノートに気づいた。

「これ？　なんだろ？」

あたしがノートを手に取ろうとしたとき、外からの風でページがめくれてしまった。

「いけない、元に戻しておかないと……」

ノートを戻そうとしたとき、そのページに書かれていた内容が目に

付いてしまい、あたしは申し訳ないと思いつつ、ノートを見てしまった。

「えっ……」

そこには、フィルの思いが書かれていた……

『スバルへ……このノートを見ていると言うことは、俺はゆりかごで、何らかの形でいなくなってしまったと言うことだな。本当は直接伝えたかったけどな。それもかないそうにないので、ここに俺の思いをここに書いておきます』

『スバル、俺はお前のことが大好きだった。お前の明るい笑顔が、どれだけ俺を助けてくれたか。未来でも、そして、こっちでも……』

「……フィル」

あたしは、震えを何とか押さえ、次のページをめくってみた。

『こんなことを言われても、きっとお前にとって迷惑なだけだよな。だから、このノートは見たら即刻捨ててくれ。お前は俺なんかに縛られる必要は無いんだから……そして、幸せになってくれよ。最後に、いつもそばにいてくれて……ありがとう……』

『さよなら……そして、幸せにな、スバル……フィル・グリード』

読み終わったとき、あたしは涙を抑えられなかった。
フィルが、あたしのことを大好きでいてくれたのは嬉しかった。
でも、フィルはゆりかごで死ぬ気だったんだ。

どうして……

フィルは自分の幸せを考えないの……

「いやだよ……こんな告白の仕方なんて……いやだよ……あたしも大好きなんだよ……だから……」

あたしは、フィルの唇に近づき……

そして……

気がつくと、フィルとキスをしていた……

＊　　＊　　＊

「う……うーん」

「フィル……」

「スバル？　今日もお見舞いに来てくれたのか」

「……う、うん」

「泣いてるのか？　お前、そのノート……」

俺はスバルが泣いていたことに疑問を持っていたが、まさか……

「ごめん、勝手に見たのは……でも、フィル……いやだよ……こんな告白の仕方なんて……いやだよ……」

「そっか……見られちゃったか……」

「……フィル……どうして、いつも自分のことは考えないの」

「考えてるよ。俺の幸せは、お前が笑顔でいてくれることだ。そのために俺の命はあるんだ……」

「だったら……だったら、自分が生きる事を考えてよ！！　あたしが助かって、そのためにフィルが……大好きな人がいなくなっちゃったら……」

「スバル……」

スバルは、涙を抑えることをせず、その場で泣き崩れてしまった。
俺はスバルを自分の方へ抱き寄せた。

「ごめんな……こんなつもりじゃなかったんだ……このノートはお前を傷つけてしまったな……」

「……ちゃんと、俺の口から言うよ。スバル、俺はお前のことが……大好きだ……誰よりも、お前のことが大好きだ……」

「フィル……フィル！！」

スバルは、俺にギュッと抱きつき、そのまま俺の胸に顔を埋めていた。

「……あたしも……あたしも……フィルのことが大好きだよ……」

「フィル、お願い……キス……して……くれるかな……」

「……えっ？」

「……ちょっと恥ずかしいけど、フィルと……ちゃんと結ばれたいから……」

「……分かった」

そう言って赤面してしまったスバルに、俺はそっとスバルの肩を抱き、そのままスバルの唇に、自分の唇を重ねた。

「……なんか……照れちゃうね……」

「……だな……」

「でも、すごく嬉しいんだ。だって、フィルと……その……こ、恋人……に……なったんだよね」

「そう……だな。改めて言われると、俺も……照れるぞ……」

「えへへ♪」

スバルは屈託のない笑顔で俺を見つめていた。
この笑顔に、俺は惹かれたんだよな……

「これから、よろしくね。あたし……ティアみたいにかわいくないかもしれないけど、でも、フィルのために頑張るから……」

「スバル……ありがとうな。だけど、俺はそのままのお前が大好きなんだからな。無理だけはするなよ」

「ありがとう。フィル……大好きだよ……」

＊　　＊　　＊

一週間後、俺は身体の方も回復し、退院することが出来た。
六課に戻ってからは、完全に回復するまで、スバル達の事務手伝いということになった。

「ほら、スバル。何やってるんだ。ここは、こうやるんだろうが……」

「う～～～　だって、あたし事務処理が本当に苦手なんだもん」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。いつも俺がいる訳じゃないんだから……」

「それは、分かってるよ。だから、こうやってフィルに聞いて、一生懸命頑張ってるでしょう」

「ったく……」

相変わらずだよ。スバルの奴の事務処理の苦手なのは。
だけど、訓練校ではトップで卒業してるんだから、このくらい軽いはずなんだよな……

「……あの、ティアさん」

「どうしたの？　キャロ」

「フィルさんとスバルさん、なんかいつもと雰囲気が、違う気がするんですけど……なんか、フィルさん、スバルさんを見ているときの目が、すごく優しい感じがするんです」

「そうかもね……」

あたしは、あの二人が付き合うとは、正直思わなかった。
あたし達はそのくらい身近にいすぎたから……

あたしは、フィルのことが大好きだけど……
だけど、それと同じようにスバルのことも好きなのよね。

だから、あたしは二人のことを祝福することにした。

「ほら、あんた達はスバル達のこと、気にしてる場合じゃないわよ。自分の仕事を片付けてしまいましょう」

「「「はい！！」」」

スバル、フィルと幸せになりなさいよ。

あんたのことを全て知っていて、それでも好きになってくれる人なんて、フィルしかいないんだからね。

＊　　＊　　＊

「なんか……緊張しちゃうね……」

「……ああ……」

俺とスバルは、仕事が終わった後、俺の部屋で過ごしていた。
最初はスバルは自分の部屋に戻ろうとしたが……

『あんた達、恋人同士なんだから、一緒にいられるときは、いっぱい二人で過ごしなさい。というわけで、今夜はあんた、フィルの部屋に泊まりなさいね』

そうティアに言われて、スバルは閉め出されてしまった。

「ティアの奴……」

「気を遣ってくれるのは……分かってるんだけど……」

露骨すぎだっての。

これじゃ、今夜二人きりでどうやって過ごせっていうんだよ。

「あ、あのね……」

「な、なんだ……」

「その……ね……あたしのこと……女の子として魅力……あるかな……」

「あたりまえだろ。今だってドキドキしてるんだから……」

正直、さっきから心臓がバクバク言ってしょうがない。

好きな女の子と一緒にいて、平然といられるかっての……

「お願いが……あるんだ……」

「フィル……あたしを……抱いて。あたしが……フィルの彼女だって思えるように……」

「スバル……本当に良いんだな……」

「うん……でも、ちょっと怖いから……優しく……してね……」

俺とスバルはベッドに行き、そして俺はスバルをそっと押し倒した。

「あっ……」

俺はスバルの胸にそっと触れ……

「どう……かな……」

「やわらかい……それに……甘いにおいがする……」

「……はずかしいよ……フィル……」

「いいんだな……」

「うん……あたしを……抱いてください……」

そして……

俺とスバルは……

身も心も一つになり……

お互いのぬくもりを感じ合いながら、一夜を過ごした。

＊　　＊　　＊

数年後

機動六課解散後、スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍している。

俺は、ゆりかごでブラスターを多用しすぎたため、身体のダメージが蓄積されてしまい、魔導師として働くことは不可能になってしまった。

そこで俺は、戦闘機人であるスバルのメンテナンスを出来るように、マリーさんの所でメカニックマイスターの資格を取った。

今の俺は、スバルのサポートを全力ですることだ。

スバルの夢……

その手助けをしていくことが、俺の夢だから……

「フィル、いつもありがとうね……」

「あんまり無理するなよ……お前一人の身体じゃないんだからな……」

「大丈夫だよ……ちゃんと帰ってくるよ。だってあたしはフィルの奥さんなんだから！！」

そう、俺とスバルは、俺がマイスターの資格を取ると同時に結婚したのだ。

結婚の挨拶の時、ゲンヤさんに会いに行ったときは緊張したけど……

『スバルのこと……おめえなら、本当の意味でスバルのこと分かってやれる。頼んだぜ……』

この言葉で……俺は、スバルを本当の意味で護ろうと、改めて決意をした。

「じゃ、行ってくるね、フィル！！」

「気をつけろよ！！　ドジ踏むなよ」

「分かってるよ～～～」

今日も、スバルは困っている人を助けるために、出動する。

そんなスバルを、俺は全力で助けていきたい。

それが、俺が出来るスバルへの愛の形だから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ヴィヴィオ（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ヴィヴィオ

機動六課が解散してから、１０年が経ちました。
六課のみんなは、それぞれの所で活躍しています。

スバルさんはレスキューで、ティアナさんは執務官になって、時々無限書庫に、資料を請求しに来ています。

ノーヴェ達、戦闘機人のみんなも、それぞれの所で働いていて、私も時々会ったりしています。
特にノーヴェには、ストライクアーツのことでよくお世話になっています。

私自身は、今は、なのはママと一緒に暮らしています。
実は、なのはママ、六課が解散して一年後にユーノさんと結婚したんだ。

でも、あの二人をくっつけるのに苦労したんだ。
その裏には、フィルさんが一生懸命、ユーノさんとなのはママに言ってくれたから、二人が結婚することになったんだ。

でも、あの二人は未だに、それぞれの部署で現役なもんだから、一緒になるのは一ヶ月に数回なんだけど……

そして私は、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の初等科に入って、その後、パ

パの影響で、司書の資格を取って、今は、時々無限書庫で仕事をしたりしてるんだ。

なんで、司書になったかというと……

実は……

私、フィルさんの事が大好きで、執務官のフィルさんを手助けが出来たらいいなって思って取ったんだ。フィルさんに意識してもらいたくて、髪型もなのはママと同じ、サイドポニーにしたりしてるんだけどね。

もうすぐ高等科に入るんだから、もう少し意識してくれてもいいかなって思うんだけど……

私が六課にいたころは、パパの代わりだと思っていて、初等科時代は、かっこいいお兄さんだな……そのくらいに思っていたんだけど……

ある時、ティアナさんから、フィルさんのことを聞いて、すごいなって思ったと同時に、悲しいなって思ったんだ……

だって……

自分のせいで、みんなが死んだ。
今もフィルさんは、そう思っている。

その証拠に……

「フィルさん、このくらいの資料でしたら、私達が持ってきます！！」

「そうですよ！！」

「いいんですよ。俺も司書の資格はありますし、それに、皆さんは他の方のことで大変でしょう。だから、自分で出来ることはやりますから……」

フィルさんも司書の資格を持っているので、この無限書庫で調べることが出来る。
だから、みんな最初は負担が減って良かったと思っていたんだけど……

「フィル、お願いだから、君の場合はもう少し誰かに頼ってよ……」

「あっ、どうも、こんにちは。ユーノさん」

「どうもじゃないよ。フィル、君の場合は、任務の難易度がどっかのクロノと同じくらいの物が多いんだから、少しは人を頼りなよ……」

「結構、皆さんにお願いしまくって、申し訳ないくらいなんですけど……」

「……その台詞、クロノに聞かせてやりたいよ。あいつの請求量は半端じゃないのに、いつもキツキツのスケジュールで請求してくるからね」

「あ、あははは……」

「その点、君は、請求量は少ないし、殆ど、自分で調べてしまうからね。だから、もう少しはみんなに言って良いから……でないと倒れるよ……」

実際、フィルさんは殆ど自分でしてしまう。

こうやって、パパか私が直接言わないと、人に頼ることはしない。

このままじゃ、本当に倒れちゃう……

＊　　＊　　＊

「ただいま～～」

「おかえり、ヴィヴィオ」

「えへへ♪　ママ、ただいま」

私が家に戻ると、ママが家に戻っていた。
今日は、ママが出張から戻ってきていて、久しぶりに家族三人がそろうのだ。

「そういえば、ユーノ君は？」

「パパなら、もうすぐ帰ってくると思うよ。フィルさんの手伝いをしてから戻るって」

「そうなんだ」

「本当は、フィルさん、家族三人がそろう日は、少ないんだから帰

ってください、って言ってたんだけど、パパがフィルさんの無茶ぶりに手伝うことにしたんだ」

「……ねぇ、ヴィヴィオ……フィルって……まだ……」

「……うん……」

フィルさんが、あんなに無茶するのには訳がある。
それは……

「……ママ……なんで、フィルさんはあんなに、自分を大切にしないの？　いくら何でも無茶すぎるよ！！」

「……私だって、止めたいよ……だけど、フィルの時間は、あの時から止まったままなんだよ……」

フィルさんは、かつて未来でティアナさんの事が好きだった。
そのティアナさんを、自分のために死なせてしまった。
その事をずっと……後悔している。

「結局、わたし達じゃ、フィルのことを救ってあげられなかった…

…それどころか、未だにフィルに助けてもらってばかり……ユーノ君とのことだって……」

なのはママとユーノパパは、最初はお互いに異性としては全く意識していなかった。
正確に言えば、なのはママの方だけだったんだけどね。

だけど、フィルさんが、未来でのことを話し……

『なのはさん、自分の気持ちに後悔することはしないでください。あなたはユーノさんのこと……どう思ってますか？』

その事を言われてから、なのはママは改めてユーノさんのことを考えて……

そして、お互いに気持ちを伝えあったんだ。
フィルさんがいなかったら、二人とも良い友達で終わっていたって、よく言っている。

そんなことを話していたら、パパから通信が入ってきた。

『なのは……ヴィヴィオ……』

「どうしたの？　そんな顔をして……」

今のパパの表情は、いつもと違い悲壮感が漂っていた。

なに……？

何か……嫌な予感がする……

『……よく、聞いてくれ……フィルが……フィルが……』

『……車にはねられて……意識不明の重体だ……』

「「えっ……」」

私は目の前が真っ暗になった。

さっきまで、私はフィルさんと楽しく会話をしていたのに……

「ユーノ君！！　フィルの容態はどうなの！？」

『正直、芳しくない……詳しいことはこっちで話すよ。それで、二人にはフィルの家に行って、着替えとかを取りに行って欲しいんだ

……』

「……わかった。ヴィヴィオ、非常時のために、フィルの家の鍵を預かっていたから、それでフィルの家の中に入って取りに行ってきて！！」

「うん！！」

私は、フィルさんの家に荷物を取りに行った。
だけど、そこで信じられない物を見ることになった……

＊　　＊　　＊

「なに……これ……？」

そこで目にしたのは、何もない部屋だった。
正確に言えば、寝るためのベッドと、机しかなかったのだ。
服とかは、備え付けのクローゼットに入っていた。

ここは、生活をする空間じゃない……

ただ、寝るための仮眠室……

「……こんな……こんなところで……たった一人で……」

私は、あふれてくる涙を抑えられなかった。
私は、なのはママやユーノパパと一緒に暮らしていて、三人がそろうのは少ないけど、それでも家族としての温かみにあふれていた。

だけど、フィルさんはたった一人で、この部屋で暮らしていたんだ……

というよりも、ここはただ、寝にきている。

それだけの部屋なんだ……

でも、今は、ここでグズグズしているわけにはいかない。
私は着替えをまとめて、フィルさんの所に急いだ。

＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオ……」

「あっ……」

聖王医療院に着いた私を待っていたのは、ティアナさんだった。
ティアナさんも、パパからこの事を聞いて急いで駆けつけてくれた。

「ヴィヴィオ……あんた、フィルの部屋に行ったわよね。あれを見て……どう思った？」

「……」

私は正直、ティアナさんの質問に答えられなかった。
それくらい、衝撃的なことだったから……

「その反応が当たり前だと思うわ。あたしも最初見たときは、同じ事を思ったから……」

「えっ？」

「あいつ……この１０年……ずっと、一人で生きてきた……あんな部屋で１０年もよ……あたしだったら、たぶん……無理ね……」

ティアナさんが言うのはもっともだ。
私だって、さっきそう思っていたんだから……

「あたしの場合は、スバルと押しかけて、あいつと一緒に、お酒を飲もうとしようとした時に入ったの。でも、あの部屋を見て、あたし達は愕然としたわ……」

「フィルは……ずっと未来でのことを、後悔し続けている……それは今でも続いている……」

「あたしとスバルは、この数年、何とかフィルを助けてあげたかった。でも、逆にフィルに助けられていた……」

「……でもね」

そう言って、ティアナさんは私のことを見つめて……

「ヴィヴィオ、フィルはね、あんたのことをすごく大切に思っていた。六課にいるときからずっとね……」

「ティアナさん……」

「もしかしたら……ヴィヴィオなら、あいつの事、救ってあげられるかもね……」

「ヴィヴィオ……フィルのことお願いね……」

そう言って、ティアナさんは病院を出て行った。
仕事の忙しい合間を縫って、やっと来てくれたので、これがギリギリだったのだ。

本当はここにいたかったのだけど、明日から、ティアナさんは別世界に出張があるとのことだった。
ティアナさんが帰った後、私はフィルさんのいる病室に入っていった。

＊　　＊　　＊

フィルさんの病室にはいると、ママ達が座ってフィルさんのそばにいた。
パパの話によると、フィルさんは家に戻ろうとしたとき、女の子が風船を取ろうとして、道路に飛び出してしまい、そこに車がやってきて女の子が惹かれそうになったところ、フィルさんが身代わりになって女の子を助けたのだ。

「……どこまで……どこまで自分を大切にしないのよ……フィル……せめて、アースラのメディカルポッドがあれば……」

１０年前に使ったメディカルポッドの技術は、一応、民間にも普及しているけど、アースラで使っていたほどの性能はない。
細かい技術は、フィル自身の手で封印してしまったためだ。
これは、悪用されるのを防ぐためだった。

「なのは……」

「ママ……パパ……」

「どうしたの？」

「私……今日……ここに泊まる……」

「ヴィヴィオ！！　駄目だよ、ヴィヴィオだって明日学校が……」

「そんなの行ってられないよ！！　大好きな人が死ぬかもしれないのに！！」

私はフィルさんのそばから離れたくなかった。

本当に、死んでしまうかもしれないのに、勉強なんて集中できるわけ無いよ！！

「……分かった。フィルのことはヴィヴィオにお願いするね……」

「ありがとう……パパ……」

「ヴィヴィオ……」

「ママ……」

「フィルのこと……お願いね……本当は、わたしがしてあげなきゃいけないのに……」

「二人とも、明日も忙しいんだから、フィルさんのことは私に任せて……それに……」

「……なにがあっても……後悔だけはしたくないから……」

例え、フィルさんが死んでしまったとしても、何もしないのは嫌だ！！

いま、私が出来ることをするんだ！！

二人が帰った後、私はフィルさんの手を取り、フィルさんの手を握りしめながら、祈り続けていた。

「……フィルさん……お願い……戻ってきてよ……フィルさんのこと好きなのは、死んでしまったティアナさんだけじゃないんだよ……」

「私も……フィルさんのことが大好きなんだよ……誰よりも……」

「フィルさんが助かるなら、私の命をあげても良い……だから……お願い。ティアナさん、フィルさんを連れて行かないで……」

『大丈夫……安心して……』

「えっ？」

謎の声が聞こえたと思った次の瞬間……

「う……ん……」

「フィルさん！！」

さっきまで意識不明だったフィルさんが、意識を取り戻したのだ。
私は急いで、看護師さんとママ達に知らせに行った。

『……ヴィヴィオ……あのばかのこと……お願いね……』

＊　　＊　　＊

「はい、フィルさん。あーん♪」

「あ、あの……ヴィヴィオ……」

「なんですか♪」

「一人で……食べれるから……ねっ……」

「駄目です！！　一週間前まで生死の境をさまよっていたんですから！！」

「……それとも……私がやるのは……嫌ですか」

俺はヴィヴィオの悲しそうな目を見てしまい、もう断ることは出来なかった。

「……じゃ、お願いできるかな……」

「はい♪」

ヴィヴィオは、一生懸命おかゆをフーフーしてくれて、それを俺に食べさせてくれた。

なんか……心が温かくなる……

いつぶりだろうな……

こんな気持ちになるのは……

＊　　＊　　＊

「……今日は本当にありがとうな」

「えっ？　どうしたんですか」

「……俺が、未来から来たことは……知ってるよな」

「はい……ティアナさんから、全部聞いてます……」

ティアナさんから未来のことは全て聞いている。
そして……フィルさんの後悔のことも……

「……俺は、かつて……大切な人を失った……俺の力不足のせいで、死なせてしまったといった方が良いな」

それは違うよ……

「だから……もう二度と、そんな思いはしたくなかったし、相手に

もさせたくなかった。だから、俺は、一人で生きていこうと思った……」

そんなの駄目だよ……

「でもさ、今日ヴィヴィオが一生懸命……俺の世話をしてくれたとき、やっぱり……寂しくなってしまったんだ。一人でいる辛さが思い出して来ちゃったんだ……」

「駄目だよな……そんなこと言ったら……ははは……」

フィルさんの乾いた笑みは、もう見てられなかった……

たまらず私は、フィルさんに抱きついていた。

「ヴィ、ヴィヴィオ？」

「……どうして……どうして、そんなこと言うんですか！！　どうして、自分の幸せを願わないんですか！！」

「ちゃんと願っているよ……みんなが……ヴィヴィオ達が幸せになってくれれば、それで良いんだ」

「そんなの嫌です！！　私の幸せはフィルさんが笑顔になってくれることなんです！！　フィルさんがそんなボロボロになって、それで、私が幸せなんて思えるわけ無いよ！！」

私が小さかったときは、ゆりかごの中からブラスターを使ってまで、私を助けてくれた。
そして、今も人のために、自分を蔑ろにしてまで助けている……

こんな優しい人が、ボロボロになるの見るのなんて、もう嫌だよ。

私は……私は……

「私は……高町ヴィヴィオは……フィル・グリードさんのことが大好きです……心から愛しているんです！！」

＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオの告白に、俺はとまどいを隠せなかった。
あの小さかったヴィヴィオが、こんな風に俺のことを思ってくれていたなんて……

「フィルさん……ごめんなさい。こんなことを言って……」

ヴィヴィオは、告白をし終わった後、下を向いてしまい、涙をポロポロ流していた。
この告白は、勇気を振り絞って言ってくれたんだよな。

いつも、無限書庫で俺の手伝いをしてくれたり……

時間があるときは、俺の話し相手になってくれたり……

そして……

今回だって、重傷の俺の世話を必死でしてくれたり……

「本当に良いのか……俺で……」

「フィルさんじゃなきゃ……嫌だよ……」

「ヴィヴィオ……」

俺は、ヴィヴィオの頬にそっと触れ……

ヴィヴィオも、意味を理解し、瞳を閉じ……

二人は……

病室の窓から夕日が差し込む中……

優しい……キスをした……

そして、それはフィルの孤独が、ぬぐい去った瞬間でもあった。

＊　　＊　　＊

二週間後

「それにしても、この部屋も大分ファンシーになったよな……」

「えへへ♪」

なんで、こんな事になっているかというと、一週間前退院した後、俺はなのはさん達にヴィヴィオと付き合うことを正式に話しに行ったのだ。
その時に、二人が……

「よくやったね、ヴィヴィオ♪　フィルも、これで無茶しなくなるね♪」

「これで僕も安心だよ。フィルには返しきれない恩があるしね」

ヴィヴィオと付き合うことに、二人は諸手を挙げて喜んでくれた。
しかも、ヴィヴィオを俺の部屋に引っ越させることを提案したのも、この二人だったのだ。

ヴィヴィオが俺のそばにいることで、体調管理もしやすくなるし、なによりヴィヴィオがそれを望んだから……

しかも、なのはさん達に……

『今度から、わたし達のことはお義父さん、お義母さんって呼んでね♪』

などと、言われてしまうほどだった。

これは、結婚を前提で認められたということなのかな……

「正直、俺は、反対されるかと思ってたんだ……」

「そんなこと無いよ。二人とも私達が付き合うことに、大賛成してくれたよ♪　それとも、フィルさんはやっぱり……こういうのはいや？」

「そんなことないよ……俺も、嬉しいよ。こうして、ヴィヴィオと一緒にいられるんだから……」

「えへへ♪　よかった。これから、ずっと……一緒なんだからね♪　待っててね。今、夕食作っちゃうから」

ヴィヴィオの作るご飯は、かなりの物だ。
母親のなのはさんに、かなりたたき込まれたらしい……

「はい、どうぞ。めしあがれ♪」

テーブルに出てきたのは、所謂お総菜料理だった。
レストランみたいな料理ではないが、俺はこういうお袋の味的な物の方が大好きなのだ。
俺はヴィヴィオの料理を、腹一杯になるまで堪能した。

＊　　＊　　＊

「なんか……恥ずかしいね……」

「じゃ……やめるかい？」

「いやだ……だって、フィルさんと初めて結ばれるんだよ……やめたくなんかないよ……」

「ヴィヴィオ……」

「フィルさん……」

俺たちは、最初は唇が触れあうキスを繰り返していたけど、次第に気持ちの方も高まり、互いを求め合うような深いキスになり、終わった後は互いの間で、銀色の糸が出来るほど、求め合っていた。

「あっ……」

俺は、服の中に手を入れ、ヴィヴィオの形の良い胸に、そっと触れ……

「やわらかいな……」

「えへへ……他の男の人に触れられるのは嫌だけど、フィルさんなら……いっぱい……いっぱい……触って欲しいな……」

「そんなこと言われたら……理性押さえられないぞ……」

「押さえないでほしいな……だから、私のことを思いっきり愛してください……」

「もう……止まれないからな……」

「はい……きて……ください……」

その夜……

俺とヴィヴィオは……

何度もお互いを求め合い……

そして、身も心も解け合った……

＊　　＊　　＊

「おはよう……ヴィヴィオ……」

「おはようございます……フィルさん……」

結局俺たちは、朝までお互いを求め合っていて、寝たのは二時間くらいだった。

「……夢じゃ……ないんだよな」

「そうですよ……フィルさん、昨日は、その……激しかったです。私……初めてだったのに……」

「す……すまん……」

「いいんです……それだけ、私のことを愛してくれたんですから……」

「大切にするよ……ヴィヴィオ。だから、俺のそばに……いて欲しい」

「はい……もちろんですよ」

ヴィヴィオの笑顔は、本当に俺に安らぎをくれる。

こんな事、今まで考えなかったのにな……

＊　　＊　　＊

「気持ちいい♪」

「こら、そんなにはしゃぐと落ちるぞ」

「大丈夫、こうやってギュッと抱きついているから♪」

俺たちは、サンダーでクラナガンに買い物に向かっていた。
これからの生活用品を買いそろえるのもあるけど、恋人同士になって初めてのデートをしたかったというのが本音かな。

それにしても……

「ヴィヴィオ……お前、絶対わざとだろ……」

「何のことですか♪」

そんな笑顔で誤魔化しても、わかるっての！！
自分の胸を、俺の背中に押しつけて、俺の理性をガリガリ削っているし……

「ったく……勘弁しろよな」

「そんなこと言って、本当は気持ちいいんでしょう♪」

「ば、ばかやろ……」

「えへへ♪」

《あ、あの……相棒、どうでも良いんですけど、事故だけはしないでくださいね。ラブコメ中に事故りましたなんて、あんまりにも間抜けですので……》

《マスター、サンダーの言うとおりですよ。少なくても、安全運転だけはしてくださいね》

「「うっ」」

確かにサンダーとプリムの言うとおりだ。
こんな事で事故ったら、あんまりにも間抜けだ……

＊　　＊　　＊

クラナガンに着いた俺たちは、デパートで買い物をしたり、クラナガンで有名なケーキショップに入って、ヴィヴィオが自分のケーキ

を、俺に食べさせてくれたりした。
それだけなら良かったのだけど、その後ポッキーゲームをやらせられたときは、さすがに勘弁して欲しかった。

そんなこんなで町中で楽しんだ後、海が見える公園に来ていた。

「うーん、楽しかった♪」
「俺は、恥ずかしかったぞ……」
「さすがに、ポッキーゲームはやり過ぎちゃったかな♪」
「……まぁ、俺も……楽しかったしな……」
「フィルさん……ありがとう……」

俺とヴィヴィオは、互いに顔が真っ赤になってしまった。
そんなとき、ふと目に付いた露店があった。

「あれ、何だろうね？」
「行ってみるか？」

俺たちがそこに行ってみると、露店では指輪が売っていた。
ヴィヴィオは、その指輪が何なのかを知っているみたいだった。
そしてヴィヴィオは、迷わずにその指輪を買っていた。

「すみませ～ん。フォーチュンリングをください♪」

その瞬間、露店の主人は口笛を吹き、周囲の人たちからはちょっとしたどよめきが起こった。

（……なんだ？　何かおかしいことでもあったのか？）

こういう事に疎い俺には、ヴィヴィオが言った『フォーチュンリング』の意味すらも分からないでいた。
ヴィヴィオは嬉しそうに露店の主人と話していた。

「お嬢ちゃん、そっちの兄ちゃんにかい？」

「えへへ♪」

ヴィヴィオは照れ笑いをしていたりして、俺はまったくついていけなかった。
しばらくして、ヴィヴィオが主人から一つの白い指輪を受け取り、そしてすぐに俺の方を向いた。

「あ、あのね……このフォーチュンリングは……お互いの愛の証を表す物なんだ……」

「フィルさん……本当に私のこと……愛してくれますか」

そう言って、ヴィヴィオは買ったばかりの『フォーチュンリング』を俺に差し出した。

「……ああ……誰よりも……愛してる。俺に、人を愛することを、もう一度思い出させてくれたヴィヴィオを……心から……愛しているよ」

周囲に見物人がいるのが気にはなったが、それでも俺は返事をして、ヴィヴィオから指輪を受け取った。
その瞬間、周囲の見物人達が、大いに盛り上がり、祝福の言葉を掛けられた。

（……ん？　この指輪？）

受け取った指輪を見て、俺は首を傾げた。
ヴィヴィオからのプレゼントと思われたその指輪は、明らかに女性用のものだった。

（これを……俺はどうすれば？）

そんなことを考えていると、露店の主人が声を掛けてきた。

「なにしてんだ、あんた。その子の告白を……受けたんだろう？」

「え……あ、はい」

「だったら、こっちにリングを渡しな」

「えっ？」

俺が訳分からなくなっていると、ヴィヴィオが助け船を出してくれた。

「フィルさん、その指輪を露店の人に渡してください」

「あ、ああ……わかった」

とりあえず、俺はヴィヴィオの言うとおり、指輪を店の人に渡した。

「もしかして……あんた知らないのか？」

「はい……実は……」

「この指輪はな。女性からその指輪と一緒に愛の告白をされて、それを受け取ったとき、告白を受けたということになるんだ」

「それでヴィヴィオは……」

「そういうことだ。そして、告白を受けた男性は、今度はこの指輪

に互いの名前を彫り、愛の証にするんだ……」

「彼女のこと大事にしてやれよ……兄ちゃん」

「……はい」

そして俺は、店の人から、フォーチュンリングを受け取り、それをヴィヴィオの左薬指にはめた。
それを受け取ったヴィヴィオは、ふにゃっとした笑顔になった。

「フィルさん……幸せにしてくださいね……」

俺たちは、人前だったが、ここで誓いのキスをした。

孤独だった俺に、もう一度愛することを教えてくれたヴィヴィオ……

そんな彼女を、俺は一生かけて護りたい……

それが、今の俺の幸せなのだから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ギンガ（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

# if ending ギンガ

「ふぅ……やっとクラナガンに帰ってきたな」

《今回も長期任務でしたからね。でも、これでしばらくの間は休みがもらえますね》

「まあな……」

あのＪＳ事件から、４年の月日が経った。

機動六課が解散して、俺はフェイトさんの元で、ティアと一緒に執務官補佐を一年ほどした。

正直、あの難関試験を一発で受かるなんて思っていなかったけどな。

執務官になった俺とティアは、それぞれの地で活躍していた。

ティアは本局中心で、俺は最初はクラナガンを拠点にしていたんだけど、ティアとコンビを組んだり、フェイトさんの臨時パートナーをやったりしていて、ここ一年くらいは次元航行艦に乗って、長期任務をすることが増えてしまった。

そして今日、久しぶりにクラナガンに帰ってきたのだ。

「そう言えば、ギンガさん元気でやっているかな」

《ですね。ここ一年くらい会ってませんから……》

スバルやティアとは、時々クラナガンであったりしたりするんだけど、ギンガさんだけは中々会うことが出来なくていたのだ。

《マスター……最近、気になることを聞いてるんです》

「気になること？」

《ええ……あんまりいい話ではありません。ギンガさんのことです》

プリムが耳にしたことは、ギンガさんの所属している１０８部隊で、最近親の七光りで成金の佐官入ってきて、その佐官がギンガさんにアプローチをかけたんだけど、結局振られてしまって、その逆恨みで、ギンガさんのことを調べて、部隊内で不穏な空気が流れているとのことだ。

《ギンガさんが……戦闘機人だって知っているのは、部隊内でもごく僅かですからね》

「ゲンヤさんがいるから、外部に漏れている可能性は低いと信じたいけど……」

《人の口は、戸を付けられませんからね……》

「……今度、スバルかノーヴェに、それとなく聞いてみるか……」

あの二人なら、ギンガさんのことをよく見ているし、ノーヴェも何だかんだ言って、世話をしてくれたギンガさんのこと心配しているはずだからな。

「あれ？　フィルじゃない」

「えっ？」

突然後ろから声をかけられて、振り向いてみると……

「スバル！？　久しぶりだな！！」

「うん、半年ぶりだよね！！」

半年ぶりに再会したスバルは、雰囲気も大人っぽくなっていた。
たった半年で、こうも雰囲気が変わるんだ。

久しぶりに俺たちは、クラナガンの街で色々遊びまくった。
ゲーセンに行ったり、アイスクリームショップでスバルが、アイス七段重ねを食べたり、その他にもスバルに引っ張られて、色んな場所に行ったりした。

でも、いつものスバルと、どこかが違っていた。

なんか、悩みがあるのか？

それとも……

俺は、それとなくスバルに聞いてみることにした。

「スバル……お前、何か悩んでないか？」

「えっ……？」

「なんか普段のお前じゃないんだよ。たしかに楽しんでいたみたい

だけど、どこか上の空な所があった」

「やっぱ……分かっちゃうよね」

「当たり前だ。何年、お前らと付き合っていると思っているんだ……ギンガさんのことだな」

「……うん」

やっぱりそうか……

スバルがこんな表情しているんだ。ただ事じゃないと思っていたけど……

「よかったら話してくれないか……なんか、力になれるかもしれないから……」

「うん……」

スバルから聞いたことは、プリムが聞いていた話の通りのことだった。

しかも、タチが悪いことに、親が管理局の幹部ということだ。

その力で、１０８部隊に入ったこの男も一佐にまでなったという訳か。

「最悪だな……」

「しかも、父さんの話によると、ギン姉に振られたのを逆恨みして、ギン姉のことを調べて、１０８部隊の中でもかなり居づらい状態なんだって、カルタスさんや父さんが何とか頑張ってくれているけど……」

「そっか……」

「お願いフィル、ギン姉を助けて！！　このままじゃ本当にギン姉は！！」

「わかった。俺も出来る限り協力する。だから、そんな顔するな」

「ありがとう、フィル！！」

「とにかく、俺はその野郎の情報を片っ端から集めるから、お前も何か動きがあったら連絡してくれ」

「うん！！」

＊　　＊　　＊

「しっかし、こうして調べてみると、本当に親の七光りなんだな」

《まったくです……胸くそ悪くなりますね》

俺はあの日から、一週間かけて、あの男のことを調べ上げていた。

名前は、ディルギア・フォーカス

１０８部隊に所属の一等陸佐だ。しかも、調べ上げていく内に、とんでもないことが分かった。

親が管理局の上層部にいることを盾に、気に入った女の子を片っ端から犯してはもみ消す、それを繰り返していた。

しかも、自分の意のままにならないときは、親族に圧力をかけたり、あることないことを周りに流して、社会的に潰す。

本当に人間の風上にも置けない野郎だ。

《どうするんですか……マスターがいくら執務官といっても、そう簡単には逮捕できませんよ》

「……権力には権力をってね。本当は使いたくなかったんだけど……」

《そういうことですね……大丈夫ですよ。レジアス中将も、おそらくこのことは知っているはずです。だから、協力してくれますよ》

「そうだな。このことはもう少し調べて、オーリス姉に報告しよう」

《そうですね。オーリスさんに監査として入ってもらい、そこで……》

「ああ……」

ギンガさん、もう少しの辛抱です。
何とか、あの野郎の悪事は俺が暴きますから……

そんなことを考えていると、スバルから通信が入ってきた。

『フィル、大変だよ！！』

「どうしたんだ、そんなに慌てて？」

『ギン姉が……ギン姉が……』

『夕方、部隊隊舎から出てから、連絡が取れなくなちゃったんだよ！！』

「何だと！！」

嫌な予感がしやがる……

「スバル、ギンガさんと連絡が取れなくなってから、どのくらいだ」

『……3時間くらい……』

「分かった。俺も探しに出る。何かあったら連絡するから」

『お願い……』

スバルからの通信を切った後、俺は外に探しに出た。
こんな雨の中、傘も持たずに外にいるとしたら……

＊　　＊　　＊

「くそ……どこにいやがるんだ」

俺は思い当たる場所を片っ端から探しまくった。

クラナガンの繁華街
海が見える公園
ギンガさんとスバルがメンテナンスのために来る施設

これだけ探してもいないとなると……

「もしかして……」

＊　　＊　　＊

「あっ……フィ……ル？」

「やっぱり……ここにいたんですね……」

ここは、ギンガさんと俺が初めてあった場所。
何てことない公園だけど、ここは俺にとっても大切な場所だ。

「どう……したの……こんなところで……」

「ギンガさん……」

「あははは……私ね、もう疲れちゃったかな。いくら頑張っても、戦闘機人ということはどうしようもない事実だものね。カルタスさんや父さんが庇ってくれても、他の人は奇異の目で私のことを見る

……」

「……もういい」

「こんな私なんて……もういないほうがいいのかもね」

「そんなことといわないでください！！」

「だって、私がいることで、父さんにもみんなにも迷惑がかかっている。それだったら……私がいなくなれば……すむから……それに私の事なんて、誰も悲しまないしね……」

「……もう……いい」

「えっ？」

「お前がいなくなって誰も悲しまないだと……スバルやゲンヤさん達のことまで否定する気か！！」

もう、こんなギンガさんを見ているのは辛すぎる。
ギンガさんは、完全に生きていることを否定してしまっている。

今のギンガさんに必要なことは、優しくするだけことじゃない。
今のギンガさんを否定し、ちゃんと必要としている人がいるって事を分かってもらうことなんだ。

「フィ……ル……？」

「お前は間違っている！！　お前のことがいらないなんて、スバルも、ゲンヤさん達もそんなことはこれっぽっちも思ってない！！」

俺はギンガさんを自分の方へ抱き寄せ……

「……自分の好きな人が、そんな風に思っているのを見て、何とも思わない奴なんかいないから……」

「それって……もしかして」

「ギンガさん……俺はあなたのことが好きです……」

＊　　＊　　＊

「嘘じゃないよね……本当のことだよね……」

「嘘なんかじゃないよ……俺はずっとギンガさんのことが好きだった」

「あっ……」

嘘じゃないんだ……
フィルが、私のことを好きでいてくれた。
私の片思いじゃなかったんだ……

「フィル……私……私……」

もう、涙が抑えられなかった。
さっきまでの辛い涙じゃない。今度のは嬉しさからだ。
そんな私をフィルはギュッと抱きしめてくれて……

そして……

フィルが私の頬にそっと触れ……

私もその意味を理解し……

雨の中……

フィルと気持ちを確かめ合うように……

キスをした……

＊　　＊　　＊

「ということで、ギンガさんは俺の所にいるから……」

俺は、スバルにギンガさんが見つかったことを報告していた。
スバル達も、必死でギンガさんのこと探していたしな。

『……フィル、本当にありがとう……それでギン姉は？』

「とりあえず、雨で身体冷え切ってしまったので、風呂で身体を暖まってもらっている……」

『そうなんだ……ギン姉、相当参っていたんだね』

「ああ……俺が見つけたときは、ギンガさんはかなり参っていたよ。本当はそっちに戻った方が良いんだけどな……」

『ううん、フィルの話を聞く限りじゃ、そっちにいた方が良いよ。それに……』

『ギン姉は、フィルのことが好きなんだから……』

「……スバル、お前もしかして……？」

『分かるよ……フィルのことも、ギン姉のこともね……父さんにはあたしから言っておくから、だから、ギン姉のことお願いね……』

「ああ……」

スバルは、そう言って通信を切った。
通信が終わった後、ギンガさんが風呂から出てきた。

ギンガさんは、バスタオルを身体に巻いただけの姿だった。

「フィル……」

小さな音を立てて、バスタオルが床に落ち、ギンガさんの身体が露わになった。
向き合った二人は、じっと見つめ合い、それから、ごく自然に唇を

合わせた。

「フィル……大好きよ……」

「俺も……ギンガさんのこと大好きです……誰よりも……」

二人はベッドに移動し……

そして……

ギンガはフィルに全てを委ね……

フィルもそのギンガの気持ちに答え……

二人は、身も心も結ばれた……

＊　　＊　　＊

一週間後

ディルギア・フォーカスのことを調べ上げた俺は、オーリス姉に連絡を取り、１０８部隊を緊急査察を行うことになった。そこで、俺も同行することになった。

「ディルギア・フォーカス！！　あなたのことはすでに調べてあります。観念して縛に付きなさい！！」

オーリス姉が、逮捕状をディルギアに突きつけ……

「な、なんのことかね。証拠も無しにそんなこと……」

「証拠ならあるさ……これをみな！！」

俺はスクリーンに、今までこいつがしてきたことを全て映し出した。そこに映し出されたのは、今まで被害にあった女性達のことと、汚い手段で一佐にはい上がった事だった。
ただし、女性のことは名前は全て伏せておいた。
プライバシーの問題になってしまうからだ。

「こ、こんなもの……こいつが作り上げたでっち上げだ!!　お前達、こいつらをつまみ出せ!!」

ディルギアの部下達が、俺たちをたたき出そうとしたが、こいつら程度に後れを取る俺じゃなかった。
逆に全員バインドで縛り上げ、プラズマランサーで眠ってもらった。

「くっ!!」

「観念しろ……ディルギア」

「うるさい!!　執務官風情が僕に命令するな!!　僕は一佐なんだ。お前より地位は上なんだぞ!!」

「だからって、何しても良い訳じゃないだろ……お前は人一人を……ギンガさんの心をボロボロにしたんたぞ!!」

「うるさい!!　うるさい!!　戦闘機人の女一人が壊れたからといって何だって言うんだ!!　かわりならいくらでもいるんだ!!」

「……今……なんて言った……？」

「何度でも言ってやる……たがが女一人が壊れたくらいでギャアギ

ャア騒ぐな。そう言ったんだ！！」

今の言葉で、俺の堪忍袋の緒は完全に切れた。

「プリム……」

《言わなくても良いです……私も完全に切れましたから……》

完全に切れた俺は、ディルギアを魔力を込めた拳で、最初の一発で表に叩きだした後、襟首をつかんで、顔面を何十発も殴っていた。顔面が元の形が分からないほど殴った後、動けないようにバインドを三重にかけ、俺はプリムに魔力を込め砲撃体勢に入った。

「あ……ああ……ま、まさか……」

「知っているみたいだな……高町なのは直伝、スターライトブレイカーの恐ろしさは……」

「てめえみたいなやつに、この魔法はもったいないけど……」

「今まで、てめえに泣かされた人たちの悲しみを、少しでも思い知

れ！！」

白銀の魔力は、銃口に集まりだし、その凶悪な魔力は発射を待つだけになっていた。

「スターライト……」

「ブレイカー！！」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

巨大な白銀の奔流は、ディルギアを飲み込みその場で大爆発を起こした。

非殺傷なので死ぬことはないが、精神には充分なダメージを与えているはずだ。

ディルギアをオーリス姉達に任せた後、俺は、１０８部隊舎の中に戻っていった。

「フィル……」

ギンガさんは、未だに切れている俺に声をかけづらいみたいだ。
俺が切れているのは、ディルギアだけじゃない。
ディルギアと一緒に、ギンガさんを追い詰めた１０８部隊の連中にも怒っているんだ。

俺は近くにあった机を、力の限り、思いっきりけっ飛ばした。

『なっ！！』

ゲンヤさんもカルタスさんも、みんな俺の行動に驚いているけど、正直こんなのまだやり足りない。

「おい……お前ら、なに自分は関係ありませんなんて態度を取っていやがるんだ。今回のことはお前らだって責任はあるんだ！！」

「確かに首謀者はディルギアだ。だけどな、一緒にギンガさんを追い詰めたお前らも、充分加害者だ！！」

『……』

俺の言葉に、連中はただ黙り込んでしまった。
いまさら、そんな態度取るなっての。
人一人、あれだけ追い込んでおいてよ……

「フィル、本当にすまねえ……」

「ゲンヤさんが謝る必要はないですよ。むしろディルギアに脅されていたんですから……」

「知っていたのか……？」

「ええ……この事を調べているときに。ゲンヤさん、ノーヴェ達のことでディルギアの親に圧力をかけられていましたね」

「ああ……なさけねえ話だがな……」

「ゲンヤさん。もう少し早く誰かに相談して欲しかったです。部隊を預かる身として、ギンガさんだけを見るわけにはいかないのは分かります。けど、一歩間違えれば、ギンガさんは……」

「本当にすまねえ……これじゃ親として失格だな……」

「父さん……」

ゲンヤさんのことは、しかたがない。
ノーヴェ達のことを人質として取られている状態だったんだからな。
ゲンヤさんも、いろいろ苦悩し続けたんだから……

3日後、正式に処分が下された。

ディルギアの親は、この事件でゲンヤさん達に圧力をかけてきたこと、今までディルギアがしてきた悪事をもみ消してきたことで、管理局をクビになった。
108部隊は、結果的におとがめ無しと言うことになったが、ギンガさんが、もうこの部隊に入られないだろうというオーリス姉の判断で、異動辞令を出すことになったんだけど……

その行き先が……

「フィル、これからよろしくね♪」

まさか、俺の執務官補佐として配属させるとは……
ゲンヤさんも、オーリス姉もニヤニヤしているし……

「もしかして……はめられたか、俺？」

《いいんじゃないでしょうか。これで公認で二人でいられるんですから。それに……》

《このほうが、彼女にとって良かったんですよ。あの場所にいるのは、少し辛いと思いますから……》

「そう……かもな……」

いまのギンガさんは、心から笑ってくれている。
そんなギンガさんを、俺は全力で支えていきたい……

＊　　＊　　＊

「はい、フィル。あーん♪」

「え、えっと……やっぱしなきゃ駄目？」

「だーめ♪」

そう言ってギンガさんは、肉じゃがを箸でもって、俺に食べさせてくれるんだけど、やっぱり気恥ずかしい。
でも、俺が食べるとギンガさんが、すごくニコニコしてくれるのを見て、恥ずかしいなんて言えないよな。

「あ、あーん」

「どう……かな」

「やっぱり美味しいよ。さすがクイントさん譲りの腕だね」

「よかった♪」

「あれ、ギンガさん、あんまり食べていないね？」

ギンガさんの方を見ると、いつもならもっと食べるのに、今日は俺と同じくらいしか食べていない。

「だって……あんまりがっついて食べると、良いイメージしないから。それに……」

「大好きな人の前だから……もう、がっついて食べるのは止めたの。それでちゃんと足りているんだしね。元々、ストレスで食べていたところがあるから……」

「ギンガさん……」

「あっ、それと私のことはギンガって呼んでほしいな……」

「ギ、ギンガ……」

「うん♪」

俺たちはずっと、こんな感じで夕食を食べていた。
ギンガさんが食べさせてくれるので、美味しさもさらに感じた気がする。
最初は……気恥ずかしかったけどね。

＊　　＊　　＊

「やっぱり……まだ、恥ずかしいね」

「それは……俺もかな」

俺たちは、夕食が終わった後、ベッドでお互いのぬくもりを感じ合っていた。

さっきまで激しく求め合っていたから、二人ともかなり疲れていた。

「あのね……フィル」

「なに？」

「……これからも……私のこと、いっぱいギュッと抱きしめてね。フィルがギュッとしてくれると、私も頑張れるから……」

「俺で良かったら……いっぱいしてあげる。それに、ギンガを抱きしめていると、俺も頑張れるから……」

「ありがとう……フィル。幸せになろうね……」

俺はギンガをギュッと抱きしめて、またギンガを求めた。
ギンガも、同じ気持ちで俺にキスしてきた後、最初はただ唇が触れているだけだったけど、段々と深い物になってきて、終わった後は銀色の糸がお互いの間に出来ていた。

「きて……フィル……」

こうして、俺たちはまたお互いを求め合った。

＊　　＊　　＊

3年後

「ねぇ、何見ているの？」

「ん、ちょっと昔の写真を見ていたんだ……」

あの事件から三年が経ち、俺たちは結婚して今は二人で執務官をしている。
ギンガは俺の元で二年ほど執務官補佐をした後、昨年執務官試験に受かり、捜査官から執務官に転向した。

といっても、基本的にギンガは俺とコンビで動くので、今でも俺の補佐として動いていることが多いけどな。
仕事面でも、プライベートでも俺たちはお互いの支えになっていた。

「フィル……あのね……」

「どうしたんだ？　さっきから落ち着きがないけど……」

さっきから、そわそわしている感じで落ち着きがないけど……

「フィル、男の子と女の子、どっちが好きかな？」

「えっ？」

「赤ちゃん……出来たかもしれないの……」

「そっか……やったな！！」

俺は本当に嬉しかった。
ギンガはずっとこの事を気にしていたのだ。
自分は戦闘機人だから、もしかしたら子供は作れないんじゃないかって……

だけど、そんな心配はもうしなくて良いんだ！！

「フィル……私……本当に幸せよ……ありがとう……私にいっぱい大切な物をくれて……」

「俺の方こそありがとうだよ。ギンガ……これからもいっぱい幸せになろうな。今後は生まれてくる子供と一緒にね……」

「うん♪」

戦闘機人として、人知れず苦しんだギンガ……

だけど、そんな彼女も、今は心から笑ってくれている……

そして……近い将来、俺とギンガの子供も生まれてくる……

これからも、こんな暖かい日常を作っていきたい……

俺たち三人で……

希望あふれる未来を……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ヴィータ（前書き）

今回のアンケートで、ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧの人気Ｎｏ１になったヴィータ編です。
それでは、ヴィータとフィルの物語をお楽しみください。

## if ending ヴィータ

「うし、何とかここまできたな」

「ですね」

ゆりかごに突入した俺たちは、ゆりかごの機能を停止するため、それぞれ分担をすることにした。
なのはさんは玉座の間へ、フェイトさんはスカリエッティを倒すため最深部へ、そして俺とヴィータ副隊長は駆動炉へ向かっていた。

「ここまでくりゃ、もうちょっとだ。カートリッジもまだある、楽勝だ……」

ヴィータ副隊長がカートリッジの残数を確認していると、ヴィータ副隊長の背後が僅かだけど、地場の揺れが確認できた。

まさか、あれは……？

次の瞬間、鎌のようなものがヴィータ副隊長を襲った。

＊　　＊　　＊

「ここまでくりゃ、もうちょっとだ。カートリッジもまだある、楽勝だ……」

あたしは、カートリッジの残存数を確認すると、疲れからかすこしめまいがした。
やっぱ、ここまでガジェットを叩いてきたのは結構きつかったみたいだな。

「おい、フィル。おめえも大丈夫か？」

ふと、さっきまで横にいたフィルがいない？

「あれ、どうしたんだ。あいつ？」

フィルを探そうとして、他の方を向こうとしたとき、頭に液体が落ちてきた。

「何だ？　って血！？」

「こんなところで……血だと……はっ！！」

あたしはフィルに言われたことを思い出していた。
あたしは前の時、ここでガジェットに背中を貫かれて……殺されたんだ。

たしか、あたしがカートリッジの確認をしていたときに……

ま、まさか！！

あたしが後ろを振り向いてみると……

「よ……よかった……間に合った……」

「フィル！！」

そこには、あたしの身代わりになって、ガジェットの鎌で身体を貫かれたフィルがいた。

「あ……ああ……うわあああぁぁぁああ！！」

あたしはグラーフアイゼンを横凪ぎにし、フィルを貫いていたガジェットを破壊した。
鎌から解放されたフィルは、その場に倒れてしまった。

「おい……しっかりしろ……目を開けろよ！！」

「ヴィータ……副隊長……」

「しっかりしろ！！　死ぬんじゃねえ……死ぬんじゃねえぞ！！」

こうしている間も、フィルの身体からはどんどん血が流れている。
あたしの付け焼き刃の回復魔法じゃ、追いつかない！！

「ヴィータ……副隊長……行ってください」

「馬鹿いってんじゃねえ！！　おめえをここにおいていけるわけねえだろ！！」

「行ってください……俺なら……大丈夫ですから……」

こうしている間も、体温がどんどん低下している。
これじゃ、なのはの時と同じじゃないか！！

《ヴィータさん……行ってください》

「プリム！！　何言ってやがるんだ！！　このままじゃ、こいつは！！」

《あなたがいたところで、マスターは変わりませんよ。回復魔法なら、私が全力でかけます。それに……》

《いま、あなたがするべき事はマスターのそばでオタオタする事じゃない。一刻も早く駆動炉を破壊する。それが今のあなたの役目でしょう！！》

「！！」

《きつい言い方して済みません……でも、マスターのことを思って

くれるなら、お願いです。マスターのしたことを無駄にしないでください！！》

あたしは、何をしているんだ。

フィルが自分の身を犠牲にしてまで、あたしを助けてくれたのは何でだ。

あたしにすべてを託してくれたからじゃねえか！！

それなのに……ここであたしがウジウジしてどうするんだ！！

「プリム……フィルのこと、おめえに任せたからな……絶対……死なさないでくれよ……これ以上大切な奴を失うのは……いやだからな」

《絶対マスターは、死なせません！！　私の全てをかけて！！》

「頼んだ……ぜ……」

断腸の思いで、フィルのことをプリムに任せたあたしは、駆動炉に向かおうとしたが、目の前にさっきのガジェットと同型の機体が数え切れないほど現れた。

こいつらは、なのはだけでなく、フィルまで……

あたしの大切な奴まで……

許せねえ……

アイゼンを肩に担いでカッと目を見開き、その瞳の色は、鮮やかなブルーに変貌していた。

「てめえら……一機残らずブッ潰してやらぁ！！」

その先のことは、あんまり覚えてねえ。

無我夢中で、ガジェットを全機叩いて、そのあと駆動炉に行き、残った魔力を全て使って駆動炉を破壊したんだ。

そして、はやてが駆けつけてくれて、あたしは何とか死なないで済んだけど……

フィルは……

＊　　＊　　＊

「くっ……」

「ほら、無茶するんじゃねえ。ゆっくりで良いんだからな」

「はい……」

フィルは、あの時はやてに助けられ、なんとか一命は取り留めたんだけど、出血多量と傷が原因で、下半身不随になってしまった。ただ、医者のリハビリをすれば、完全に回復できると言うことということだ。

「ヴィータ副隊長、毎日済みません……俺のリハビリに……」

「そんなこと気にするんじゃねえよ。それに……」

「あたしを庇って……こうなったんだ。これくらいのことさせてくれよ……」

もう、なのはの時みたいに、何も出来ないのはいやだ。

あたしは、フィルのために自分が出来ることをしてやりたい。

そのためにあたしは、介護を勉強した。
介護は、テレビで言っているみたいに、決してきれい事じゃ出来ねえ。

食事介助とかだけじゃなく、排泄の世話とかもある。
今のフィルは、下半身に力を入れることが出来ない。

だから、トイレまではあたしが連れて行くことが必要だ。
そこまで連れて行けば、フィルが何とか自力でズボンを下ろしたりは出来るようになっている。

フィル、絶対良くなってくれよ。

そして、もう一度……

もう一度、あたしにチャンスを与えてくれ……

お前に、あたしの気持ちを言うチャンスを……

＊　　＊　　＊

三ヶ月後

「何とか……復帰できたな」

《ええ、ヴィータさんが、ほぼ毎日来てくれて、マスターのリハビリを手伝ってくれたおかげですよ。本来ならミッドの医療技術でも半年はかかると言っていたんですから》

ヴィータ副隊長のおかげで、俺は奇跡的に半分の三ヶ月で、完全に回復することが出来た。
リハビリを毎日欠かさずしたこともあったけど、ヴィータ副隊長が献身的に俺のサポートをしてくれたからこんなに早く社会復帰することが出来たんだ。

本当にヴィータ副隊長がいなかったら、俺は自暴自棄になったと思う。

《とにかく、六課に帰りましょう。みんな待っていますよ》

「だな……」

六課に戻った俺は、そこでみんなに盛大に迎えてもらった。

ドアをくぐったとたん、クラッカーの嵐に遭い、スバルとティアに泣きながら抱きつかれたり、なのはさん達からも泣かれてしまう状態だった。

その後、食堂でパーティを開いてくれて、みんなで盛り上がった。
こんな光景を、もう一度見られるなんてな……

＊　　＊　　＊

「ふう……ちょっと食べ過ぎたかな」

パーティが終わった後、外の空気を吸うために、俺は六課の野外訓練場に来ていた。
すこし歩いていると、そこにいたのは……

「ヴィータ……副隊長？」

「あっ……」

「どうしたんですか。こんなところに」

「べ、別に、お前を……待っていたわけ……ねえんだ……そ、その

……あたしは……」

「？」

なんか、いつものヴィータ副隊長と違う。
いったいどうしたというんだ。

「あ、あのな……その……よかったな。完全に治って」

「ヴィータ副隊長のおかげですよ。ヴィータ副隊長がいなかったら、俺はもしかしたら……」

「そんなことねえよ。おめえなら自分で立ち直ったよ。あたしはほんの少し……しただけだよ」

「その少しが、俺にはかけがいのないものだったんです。介護ってきれい事じゃないです。それでも、ヴィータ副隊長は毎日のようにしてくれた……」

「……あたりまえだよ……あたしは……あたしは……」

「おめえのことが……好きなんだからな……」

＊　＊　＊

「えっ……？」

とうとういっちまった。

本当は怖い……

ここから逃げ出したい……

だけど、どうしても言っておきたかった。

振られても良い……

それでも、自分の気持ちに嘘をつきたくなかったから……

「それ……嘘じゃないですよね」

「こんな時に嘘言える性格してねえよ……あたしのいつわりのない気持ちだ」

正直、フィルにはあたしなんかよりふさわしい女はいっぱいいる。
だから、これはあたしのケジメだ。
これで、フィルのことを忘れよう……

「俺も……ヴィータ副隊長のことが……好きです」

「えっ……嘘だろ」

「俺も、副隊長と同じですよ。こんなときに冗談や嘘は言いませんから……」

フィルはそう言って、あたしを自分の方へ抱き寄せた。

「だから……ヴィータ副隊長……俺と……」

「……ヴィータ」

「えっ？」

「副隊長なんて付けるな。おめえは自分の彼女に副隊長なんて付けるのか」

確かにあたしはこいつの上司だ。
だけど、こんな時まで副隊長なんて付けられるのはいやだ。

「ヴィータ……」

「ああ……」

あたしは、瞳を閉じ……

フィルも意味を理解してくれて、あたしの頬に手を添え……

そして……

あたし達は……

月の光が照らす、訓練場で……

キスをした……

＊　　＊　　＊

半月後

「ほら、ここ間違っているぞ」

「えっ、本当だ……」

「ったく、フィル、休みで勘が鈍っているじゃねえか。どれ、あたしが見てやるよ」

そう言って、ヴィータは俺の背中に抱きつく形になって、パソコンの画面を見ていた。

「あ、あの……ヴィータ副隊長……その……」

「何度も言わせるなっての、あたしのことはヴィータって呼べって言ってるだろう！！」

「ですけど、今は勤務中ですから……」

「なにを今更、あんたとヴィータ副隊長が付き合っているのなんて、みんな知っているわよ」

「「えっ……う、嘘」」

「知らぬは当人達ばかりなり……ってことです。というか、それだけいちゃついていて、気づかないなんて思ってたんですか」

ティアの言葉に、俺もヴィータも顔が真っ赤になってしまった。
そんなに周囲から見て、俺たちはいちゃついていたのか。

＊　　＊　　＊

「あーあ、とんだ恥かいちまったな……」

「ですね。六課にみんなに知れ渡っていたんですね。俺たちのこと」

「まぁ、でも、プラスに考えればあたし達のこと、これで気兼ねなく出来るからな」

「あ、あれで遠慮してたんですか。勤務中に俺に抱きついていたりしてたのに……」

「いいじゃねえかよ……あたしは、おめえの……その……彼女なん

だからよ……」

そう言って、ヴィータはぷいっと反対の方にむいてしまった。
こんなヴィータもかわいいんだけど、だけど……

「あっ……」

俺はヴィータを自分の方に向かせて……

「ごめんなさい。あんな態度取って……本当は俺も嬉しいんですよ」

「本当か……」

「嘘じゃないですよ」

「だったら……今日はいっぱいギュッとしてくれよな……部屋に戻るとおめえがいないから……寂しいんだ……」

「じゃ、遠慮しませんからね」

「遠慮なんかするなよ。でも、ごめんな。あたしこんな身体じゃねえか。もっとスタイルが良かったら……」

「あのですね。俺はスタイルで人を好きになったりはしないですから……」

「そりゃ……分かっているけどよ」

俺たちはもう、何度か一つになっているけど、それでもヴィータのコンプレックスは中々ぬぐい去れない。

だから……

「こら……やめろって……服の中に手を突っ込んで胸触るな……あん……」

「俺が、ヴィータを抱きたいって思ってもらうしかないから……今日は部屋に帰さないですよ」

「……だったら……いっぱいしてくれよな……」

俺はヴィータの服を全て脱がし……

そして……

今日も俺たちは、お互いの気持ちを確かめ合うように……

何度も求め合った。

＊　　＊　　＊

「はい、ヴィータ。あーん」

「あーん♪」

「どう、美味しい？」

「……うまいに決まってるだろ。おめえのアイスなんだからよ」

「そ、そう……ですか」

「もっと……食べさせてくれよな」

「ああ……」

こうやって、ヴィータが俺の作った物を喜んで食べてくれる。

ヴィータの屈託のない笑顔は、俺も穏やかな気分にしてくれる。

「ほら、もっと……食べさせてくれよな……何度も……言わすなよ……恥ずかしいんだから……」

「そうでした……はい、あーん」

こんな風に、俺たちの休日は流れていった。

＊　　＊　　＊

二年後

「フィル、何見てるんだ？」

「何、昔の写真をね……」

六課が解散して、俺ははやてさんに正式にヴィータとの交際を報告することになった。

六課時代は、一応非公式だったから、いままで報告は控えてたんだ

けど、はやてさんが……

「いまさら、何言ってるんや。あんたらが六課でいちゃついてるの見て、私らは毎日、口から砂糖吐いてたんやで」

はやてさんの言葉に、俺もヴィータも、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまった。
でも、後悔はしてないけどね♪

今、俺はヴィータと一緒に教導官をしている。
公私ともに一緒にいたいというヴィータの希望で、俺は必死で教導官の資格を取った。

最初は、人に教えるのなんて柄じゃないと思っていたけど、やってみるとかなりおもしろいと思った。
自分の教えたことが、生徒に伝わったときは特にだった。

なのはさんも、ヴィータもこれがあるから、教導官という辛い職業をやっていけてるんだろうな。

そして、今日は久しぶりの休日だった。

「おーい、今日はどこに行くんだ？」

「サンダーに乗って、クラナガンに買い物でも行こうか」

「そうだな。たまには、あの有名な所のアイスも食べたいしな」

「ヴィータは、いつも食べているでしょう。俺のだけどね」

「うっせーよ……いいだろ。アイスは好きなんだから……おめえのも好きだけど、あっちも好きなんだよ」

素直じゃないけど、こういうところがかわいいんだよな。

まぁ、手前味噌もあるかもしれないけど……

でも、やっぱかわいいと思う。

「フィル……」

「ん？」

「これからも……その……一緒だからな」

素直じゃないけど、心の優しいヴィータ。

俺はそんな彼女に、何度も助けられた。

これからもお互いに、助け合えたらいいと思う。

それが、お互いを思いやると言うことだから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　リイン（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

## if ending リイン

「フィル……待ってください！！　今、リインが行きます！！」

ゆりかごの非常システムが発動し、私とはやてちゃん、なのはさんとヴィヴィオは、玉座の間に閉じこめられようしていたが、フィルがウインド・ブレスで隔壁が閉じる前に、みんなを吹っ飛ばして外に脱出させた。

それだけなら良いんだけど、フィルは最初から玉座の間に残るつもりだったのだ。

ゆりかごのコアを破壊するために……

自分の命を……

「みんな、頑張ってください！！」

「わかっとる！！　このままフィルを死なせるわけにはいかんのや！！」

「リインが通る穴が空けば……そこから中に突入できるです！！」

「みんな、どいて！！　エクセリオン……バスター！！」

なのはさんが残った力で隔壁に砲撃を放ち、なんとかリインが入れるほどの穴を空けることに成功した。

「「リイン！！」」

「はいです！！」

フィル……

早まらないでくださいね……

＊　　＊　　＊

「はぁ……はぁ……」

《マスター……》

俺はコアに持てる魔力を全部使って、ありとあらゆる技をぶつけてみた。
ブラストブレイザーもプラズマザンバーも、全部コアのバリアにはじかれてしまい、ブラスター3を使ってしまった俺にはもう、手段はあと一つしかなかった。

《マスター……まさか！！　止めてください！！　スパイラルだけは！！》

俺はプリムの制止を振り切り、銀色のカートリッジをセットし……

《止めてください！！　本当に死んでしまいます！！》

「悪い……プリム……もう、これしかないんだ……」

俺は、コアに銃口を向け、スパイラルを起動させようとしたとき……

『やめてぇぇぇぇぇぇ！！』

銃口の前に、リイン曹長が立ちふさがっていた。

「リイン……曹長……どうして？」

「フィル、止めてください……スパイラルを使わないでください……」

「どうして……その事を……」

「ごめんなさい……プリムから聞いていたんです。ラストリミットのこと……」

「プリム……お前……」

《すみません……でも、どうしても彼女だけには、話しておきたかったんです》

いったいどういう事だ？

なぜ、リイン曹長だけには話しておきたかったんだ？

《マスター……彼女は……》

「プリム……その先は、私が自分の言葉で言います」

《リインさん……》

＊　　＊　　＊

（はずかしいですね……でも、今フィルに私の気持ちを言わないと、絶対後悔するです……）

私は、何度も躊躇ったけど、覚悟を決めて言うことにした。

「フィル……」

「は、はい……」

「私は……リインは……フィルの事が……大好きです……Ｌｉｋｅじゃなくｌｏｖｅの方です……」

「えっ……？」

とうとう言っちゃったです。
人間とデバイスの恋なんて、成立するわけないのに……

バカですよね……私……

「い、今言ったこと……忘れてください……バカですよね。デバイスが人間と結ばれるわけないのに……でも……でも……」

＊　　＊　　＊

リイン曹長は、俺に本音で告白してくれた。
デバイスと人間の恋なんて、成立しない。

それは、リイン曹長自身が一番知っているのに……

それでも、俺に思いを伝えてくれた……

「リイン……曹長……」

「あっ……」

もう、泣いているリイン曹長を見ているのは辛い……

俺はリイン曹長を、そっと包み込むようにした。

「リイン曹長……本当に俺で良いんですか？」

「それは……私の台詞ですよ。私で良いんですか」

「こんなこと……嘘は言わないですよ……もう一度聞きますけど、本当に良いんですね」

「はい……フィルじゃなきゃ……嫌です……」

「フィル……目をつぶってくれますか」

「こう……ですか？」

俺は言われるままに瞳を閉じると……

俺の唇に……

暖かな感触が……感じた

「も、もしかして……」

「えへへ♪　リインのファーストキスですよ♪」

「リイン曹長……」

「フィル、リインって呼んでください……それと、二人きりの時は、敬語は無しですよ。その方が嬉しいです……」

「リ、リイン……」

「はいです♪」

なんか、すごく照れるな……

リインのまっすぐな気持ちは、俺にすごく伝わってくる。

《あの……マスター、リインさん、なにラブコメしてるんですか。

今、どういう状況か分かっていますか！！》

「「あっ……」」

《まったく……でも、ありがとうリインさん。マスターを好きになってくれて……そして、止めてくれて……》

「リインは……大好きなフィルを失いたくなかっただけですよ。だから、これは当たり前のことなんです」

「リイン……」

「フィル……私に……命預けられますか……」

「何か……策があるんだな……」

リインの策は、スパイラルの代わりに、俺とリインがユニゾンをし、限界まで出力をあげるという手段だ。
だけど……これには、かなりの危険が伴う。

元々、リインは、はやてさんのユニゾンデバイスだ。
それを俺がユニゾンした場合、なにが起こるか分からない。

「いいんですよ……フィルがスパイラルを使うよりは、ずっと良いです……大好きな人と一緒に苦しみを分かち合えるんですから……」

「リイン……ありがとう……」

「行きますよ……」

「おう！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

「きゃあああああ！！」

「うわあああああ！！」

ユニゾン自体は何とか成功したけれど、俺もリインもかなりの負担がかかっている。
おそらくもって……後数分……

「リイン……大丈夫か……」

「大丈夫ですよ……私のことは心配しないでください……行きますよ、フィル、プリム！！」

「《おう　（はい）！！》」

俺たちは、残された魔力を全部、この一発にかけることにした。

スターライトブレイカー……

俺とリインの融合魔力……

これで決める！！

「「スターライト……」」

「「ブレイカーーーーー！！」」

放たれた白銀の魔力は、巨大な砲撃となりコアに向かって一直線に向かっていき……

そして……

コアは白銀の魔力に飲み込まれ……

跡形もなく消え去った……

「きゃあああ」

ユニゾンが解け、そこにいたのは……

「あいたたた……」

そこには、16~17歳くらいの女の子がいた。

「いたいです~~」

「えっ……？　もしかして、リイン？」

「何言ってるんですか？　私以外に誰がいるんですか」

「リイン……今の姿を、何かで見てみて」

リインは、近くの鏡面状の壁で自分の姿を見てみると……

「う、うそですよね……これが私ですか！？」

「信じられないかもしれないけど……」

「や、やったです！！　これでフィルと一緒にいても、違和感がなくつきあえます！！」

「い、いや……もう少し事の重大さを考えよう。これ、多分融合事故だから……」

「そうでしたね……えへ♪」

全く……良い根性してるよ。リインは……

＊　　＊　　＊

事件解決後、リインのことを詳しくメンテナンスしてみると、大変なことが判明した。

あの時の融合で、リインは俺以外と融合できなくなってしまい、はやてさんと一緒に戦うことが出来なくなってしまったのだ。

姿の方は、今までの省エネモードと大人モード（これはゆりかごでリインが名付けた）を自在になれるんだけど、今までは、はやてさんから魔力供給していたんだけど、今度は俺がリインの魔力供給をすることになってしまった。

「まぁ、なってしまったことはしょうがないわ。だけど、フィル……」

「リインのこと泣かせたら承知せえへんで……ええな」

「はい……リインのことは俺が守ります……俺の一生をかけて……」

「フィル……ありがとうです……」

「なんか……見せつけられた感じやな。でも、安心したわ。私の娘のことよろしくな」

「はい！！」

結果的に俺はリインの所有者になることが出来、リインもそれをすごく喜んでくれた。
リインに変わるデバイスを、はやてさんに作らなきゃいけないけど、それはリインがいてくれれば、すぐに作れる。

なにより……

「えへへ♪　これで、ずっっっっと一緒ですからね♪」

リインと一緒にいられるなら、こんなの苦労でも何でもないから……

＊　　＊　　＊

「はい、フィル。あーんです♪」

「こ、ここでか……」

「そうですよ……それとも、私がこうするのは嫌ですか……」

「そ、そんなことないよ……ただ、みんなが見ているからな……」

しかも、今のリインは大人モードだ。
かなりドキドキしてしまう。

「むぅーフィル、ちゃんとこっちを見てください」

「ちゃんと見ているって、ただ……」

「ただ……なんですか！！」

「その姿のリイン……滅茶苦茶かわいいんだよ。普段の姿も良いんだけど、俺たちと同じ背丈になると、なおさらなんだ」

「フィル……えへへ♪　ありがとうです♪」

『あああっ！！』

そう言ってリインは俺の頬にキスをしてきた。

食堂にいたフォワードのみんなや隊長陣はかなりびっくりしていた。

「フィル……大好きです♪」

「リイン……」

＊　　＊　　＊

「あの……フィル……その……私……こういったこと初めてですから……」

「俺も……そうだよ……」

俺とリインは今、ベッドの中にいる。

今まで俺たちは、一緒に添い寝とかはしていたけど、こういった行

為をするのは今日が初めてだ。

「やさしく……してくださいね……」

「ああ……」

俺は、リインの服の中に手を入れ、リインの胸にそっと触れ……

「あ……ん……だめ……ですよ……」

「やわらかいね……リインの胸……」

「えへへ♪　私にこんなことしていいのは、フィルだけなんですからね♪」

「大切にするよ……愛してる……リイン……」

「私も……愛してますよ……フィル……」

俺たちは最初はただ、ふれあうだけのキスだったけど、段々とお互いを求め合うようになり、キスをし終わった後は、お互いの間に銀色の糸が出来ていた。

今のリインは大人モードだ。
だから、こういった行為も人並みに興味を持っている。

「きてください……フィル……」

「リイン……」

俺たちは月夜の中……

お互いを何度も求め合い……

その行為を……

朝まで繰り返していた。

＊　　＊　　＊

「フィル、気持ちいいですね♪」

「リイン、しっかり捕まっていないと落ちるぞ！！」

「大丈夫ですよ。しっかりつかんでいますから」

俺たちは今、サンダーでクラナガンに向かっているんだけど、リインはわざと俺の背中に自分の胸を当てている。

最近では、省エネモードになるのは仕事の時だけで、俺と一緒の時は常に大人モードだ。

だから、こういう事をされると、理性がかなり厳しい。

「こりゃ……俺の理性がいつまで持つかな……」

「いいですよ、リインはいつでもフィルにギュッとしてもらいたいんですから……」

「リイン……」

《あ、あの……相棒、リインさん。もう少し自重してくれませんか。正直言って、私、人間だったら砂糖吐いてますよ……》

「「うっ……」」

《仲が良いのは良いんですけど、事故だけはしないでくださいね……》

「はいです……」

「すまん……」

こんな一騒動があったけど、俺たちは無事クラナガンに付くことが出来た。

＊　　＊　　＊

「えへへ、やっぱりあそこのケーキはおいしかったです」

「本当だな、リインの情報網はたいした物だな」

「えっへん、もっと褒めてください」

「本当、ありがとう……リイン……」

「……フィル」

俺がリインの頭を撫でてあげると、こういった感じで甘えてくる。

俺もそんなリインを見るのがすきだから、こうしてしまうしね。

「フィル……あれなんですかね？」

「行ってみるか」

「はいです」

俺たちが気になって行ってみると、そこでは露店で指輪を売っていた。

その指輪は、フォーチュンリングと言って愛の告白の時に使う物だって、ティアから聞いたことがある。

「すみませ～ん。このフォーチュンリングをくださいです♪」

その瞬間、露店の主人は口笛を吹き、周囲の人たちからはちょっとしたどよめきが起こった。

「お嬢ちゃん、もしかしてそこの彼氏にかい」

「はいです♪」

「えっ……もしかしてリイン、フォーチュンリングのこと……」

「もちろん知ってますよ。ですから……」

「フィル……私と……ずっと一緒にいてくれますか……」

リインに改めて言われるまでもない……
俺の気持ちは、ずっと変わらないから……

「……ああ、リインが望む限り……ずっと一緒だよ」

「だったら……一生……ですよ……」

リインからリングを受け取った俺は、それを店主に渡した。
それに、俺とリインの名前を彫ってもらうためだ。

名前を彫ってもらい、それを受け取った俺は、その指輪をリインの左薬指にはめた。

「これ……もしかして……」

「そういう……意味で取ってもらっていいよ……」

「ありがとう……フィル……本当に……嬉しいです……」

「リイン……」

人前だったけど、俺とリインは、誓いのキスをした。

これが嘘偽りのない、俺の気持ちだから……

＊　　＊　　＊

二年後

「フィル、今日は何しますか」

「そうだな。久しぶりの休みだからな……」

「たまには……家でのんびりしましょうか。身体を休めるのも必要ですしね」

「そうだな……そうしようか」

六課解散後、正式にはやてさんからリインのことを託され、それに変わるデバイスを作り、はやてさんは今でも現役で特別捜査官をしている。

そして俺は、一年間フェイトさんの元で執務官補佐をし、執務官試験に合格しリインと一緒に仕事をしている。

公私ともに俺たちは支え合っている、最高の関係だ。

リインがいることで俺も無茶をしなくなった。

スパイラルは正式に封印し、ブラスターも使わなくなり、力が欲しいときはユニゾンをして対応している。

それに、そうしないとリインが拗ねてしまうからだ。

「フィル……今日は何が食べたいですか……」

「そうだな……地球の和食が良いかな……そのあとは……」

俺は背後からリインを抱きしめ……

「リインを……かな……」

「もう……でも……いいですよ。いっぱいかわいがってくださいね♪」

ユニゾンデバイスと人との恋……

本来なら、成立はしない悲しい恋……

だけど……

本当に愛し合うことが出来るなら、そんな物は関係ない……

だって……

「フィル……ずっと、一緒ですからね♪」

こんなにも俺たちは愛し合っているのだから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ルーテシア（前書き）

ｉｆエンディングシリーズです。
基本は本編の流れに沿ってますが、フィルは誰ともつきあってません。

# if ending ルーテシア

ＪＳ事件終了後、私達フォワードは、六課解散までの間、なのはさん達に色々なことを教わっていた。
戦い方だけでなく、人とのふれあいも、私は六課で学ぶことが出来た。
それは、ゼストやアギト達と一緒にいたときには、得られなかった大切な物……
そして……

「よう……お疲れさま、ルーテシア」

「お疲れ様です。フィルさん……」

私は、事件が終わってから、ずっとフィルさんのことを考えている。
訓練の時も、食事の時も、そして寝る前まで……
フィルさんのことを考えると、胸が苦しくなる。
でも、決して嫌な気持ちじゃない……
もしかして……私……

ちょっと、キャロに相談に乗ってもらおう。
一人じゃ、ちょっと苦しいから……

＊　　＊　　＊

「ルーちゃん……それ、恋だよ。ルーちゃんは、フィルさんのこと好きなの？」

「……うん」

「そっか……ルーちゃん、でも、フィルさん……競争率が高いよ」

「そう……だよね」

実際、フィルさんのことが好きだと思う人は、知っているだけでも数人いる。
ティアさんにスバルさん、なのはさんやフェイトさんだってそうだ。

「ルーちゃん、思い切ってフィルさんに告白したら？」

「でも……フィルさん……私みたいな子は……多分……駄目なんじゃないかな」

「それ……間違ってるよ。ルーちゃん」

「キャロ？」

「ルーちゃん、自分の気持ちを伝える前から、そんなんじゃ駄目だよ。フィルさんは歳とか、そんなんで人を見たりしないよ。あの人は、本質で見てくれるから……だから、まず自分の気持ちを伝えなきゃ……」

「キャロ……ありがとう。私、フィルさんに自分の気持ちを……言うよ……」

「うん……それじゃ……これ、あげる」

「これは？」

キャロから渡された物は、一枚のチラシだった。
内容は、こないだクラナガンに新しくできたケーキショップのチラシだった。
割引券が付いていて、二人まで半額という物だった。

「これで、フィルさんを誘ってみてね。ルーちゃん、頑張ってね」

「ありがとう……キャロ」

＊　　＊　　＊

翌日、私は、フィルさんを誘うために何とか声をかけようとしたが……

いざ、その場になると緊張してしまう。

でも、頑張らなきゃ……

「あ、あの……フィルさん」

「ん？　どうしたんだ、ルーテシア」

「その……今度の休暇日……何か予定がありますか？」

「いや……特にないけど」

「それだったら……その……私と……」

「おーい、フィル！！」

意を決し、私が誘おうとしたとき、スバルさんがフィルさんに声をかけてきた。

「どうしたんだ、スバル？」

「フィル、今度の休暇、暇？」

「あっ……その……わりい、予定がある」

（えっ？）

さっき私が聞いたときは、予定はないって言っていたのに？

「そっか……それじゃ、また今度ね」

「おう！！」

そう言って、スバルさんは去っていった。

そして……

「ルーテシア、良かったら、俺と一緒にケーキ食べに行かないか？」

「えっ？」

「いやぁ、クラナガンに新しくケーキショップが出来たんだけど、一人じゃちょっと行きづらいから、一緒に食べにいかないか」

「いいんですか……私で……？」

「ルーテシアが良ければだけどね……いきなりだったから、予定があるかもしれないけど」

「いえ！！　私もフィルさんと一緒に行きたいです！！」

「それじゃ、明日が丁度休暇日だし、明日行くか？」

「はい！！」

まさか、フィルさんの方から言ってくれるとは思ってなかった。

明日が楽しみ……

眠れるかな……私……

＊　　＊　　＊

「ルーテシア、しっかり捕まっていろよ」

「はい……」

翌日、私はフィルさんのサンダーで、クラナガンに行くことになった。

サンダーに乗るのは、今回が初めてだ。

男の人に抱きつくなんて初めてだから、なんか照れちゃうな……

でも、フィルさんに、少しでも私を意識して欲しい……

恥ずかしいけど、私はフィルさんの背中に、自分の胸を押しつけてみた。

＊　　＊　　＊

（勘弁してくれよ……理性が……きつい……）

ルーテシアの奴、俺にしっかりしがみついているのは良いんだけど、その度にルーテシアの胸が当たるんだよ……

ルーテシアだって、成長期に入ってきている。

だから、胸の方だって、それなりにある。

頼むから、もう少しだけ力を抜いてくれ！！

≪（ルーテシア、頑張ってください！！　マスターの鈍感は直球で攻めないと、攻略できません。キャロと同じで私も応援しますよ）≫

＊　　＊　　＊

「それじゃ、ルーテシア、何を食べる？」

「そうですね……」

私がメニューを見ていると、色んなケーキがあって迷ってしまいそうだけど、そんなとき一つのメニューに目がいった。

（恋人限定……スペシャルケーキセット）

「あ、あの……フィルさん……これに……しませんか」

「どれどれ……って、これ……か……」

「……はい……だめ……ですか……」

言い終わった私は、もう恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまった。
今日の私、本当に大胆なことしすぎだ……

＊　　＊　　＊

ルーテシアが、恋人限定メニューのことを言った後、自分も恥ずかしくなってしまったのか、顔を真っ赤にしている。
こういっちゃ悪いが、なんか今日のルーテシア、かわいいかも……

「それじゃ……一緒に食べようか」

「えっ……？」

「すみません！！　この恋人限定のメニューを一つください」

俺は店員さんを呼び、注文を取ってもらうと、しばらくするとハート型のケーキも持ってきた。
それだけでも、インパクトがあるけど、それ以上に……

「フォーク……一つしかないんですね」

「どうする……もう一つ持ってきてもらう？」

「多分、これが正式ですね……フィルさん……その……」

「あ、あーん……してください……」

ルーテシアが、顔を真っ赤にしながら、フォークにさしたケーキを差し出してきた。
これは……恋人同士がやる……あれですか……

「あ、あーん……」

《マスター……いつまで惚けてるんですか。食べてあげてください！！》

「あ、ああ……あーん」

俺は、ルーテシアにケーキを食べさせてもらった。
でも、正直言って味なんか感じない！！
なんか甘酸っぱい気分だ……

「今度は……フィルさんが……食べさせてくれませんか……」

「あ、ああ……」

「ルーテシア、あーん」

「あーん」

俺は、ルーテシアの可愛く開けている口に、ケーキを食べさせた。
食べた後、ルーテシアは恥ずかしさで下を向いてしまった。

俺もさっき同じような状態になったけど、でも嫌な気持ちはない。
むしろ、もっとこうしていたいという気持ちになっていた。

俺……もしかして……

＊　　＊　　＊

「ここ……良い眺めですね」

「だな……」

夕方になり、私たちは海が見える公園に来ていた。
ここは、この時間になると、人は殆どいなくなる。

今日、私達は色んな所に行った。
ケーキショップで食べた後、ウインドウショッピングをしたり、私が言ったことがなかったゲームセンターにも行って遊んだりした。

色んな所に行って遊んで、本当に楽しかった。
それは、フィルさんと一緒だったから……

だから、余計楽しかったんだと思う。

フィルさんと一緒にいるだけで、私の心は安らぐし、それに……

私もフィルさんのことを、色々支えてあげたいと思う……

私じゃ、フィルさんの支えになれるか分からない……

でも……

後悔しないように、自分の気持ちは伝えよう……

「フィルさん……」

「どうしたんだ？」

「聞いて欲しいことが……あるんです……」

緊張で逃げ出したい……

伝えるのが怖い……

だけど、何もしないのはもっと嫌だ！！

「フィルさん……私は……あなたに助けてもらったときから、ずっとあなたのことを思っていました。最初は……優しいお兄さんと思っていました。でも……」

「一緒にいて……戦って……フィルさんと一緒に過ごしていくうちに……私の心は、どんどんあなたへの思いで一杯になんです……」

「私は……ルーテシア・アルピーノは……フィル・グリードさんのことを心から……好きです……」

＊　　＊　　＊

「ルーテシア……」

ルーテシアの告白に、俺は驚愕した。

俺のことを、そんな風に思っていてくれたなんて……

俺も、今日ルーテシアと一緒にいて、本当に楽しかった。

ティア達と一緒にいるときも楽しいんだけど、それとは違っていた。

その違和感が分からなかったけど……

今、それが分かった……

俺も……ルーテシアのことが……好きなんだ……

だから、ルーテシアに告白されて、驚いた以上に、それ以上に嬉しかったんだ……

「本当に……俺で良いのか……ルーテシアだったら、もっと良い奴が出来るだろうに……」

「フィルさんじゃなきゃ……いやです……私は、フィルさんと歳が離れています……でも、フィルさんのことが好きな気持ちは、誰にも負けないです！！　例えティアさんやなのはさんよりも……」

「歳とかで、俺は人を好きになったりは……しないよ……ありがとう、ルーテシア……俺のこと……好きになってくれて……」

「それは……私の台詞です……私の方こそ……ありがとうです……」

俺はルーテシアを自分の方へ抱き寄せ……

ルーテシアも瞳を閉じ……

俺たちはお互いに引き寄せられるように……

夕日の中……

キスをしていた……

＊　　＊　　＊

数年後

俺たちは六課解散後、俺は執務官補佐を、ルーテシアはエリオ達と辺境自然保護隊に
入隊してそれぞれ別の道を歩むことにした。

これはお互いがもっと成長するために、話し合って決めたことだ。
俺自身も色々やりたいことがあったし、ルーテシアもメガーヌさんとの時間を過ごしたいと思い、この事を考えたのだ。

まぁ、一月に1回以上は、必ず直接会ったりしたけどね。

その二年後、俺は何とか執務官試験を一発で合格することが出来、
その後は執務官としてでなく、マリーさんの元で三年間メカニック
マイスターの資格を取るための勉強をし、苦労の末何とか取得した。

取得後は、執務官として活動している。

ルーテシアの方も、三年間はエリオ達と一緒にやっていたんだけど、
彼女も思うところがあり、フェイトさんの元に執務官補佐としてやり、そして今年二回の不合格を乗り越え、ルーテシアも執務官の資格を取得した。

本当によくあの試験を合格したと思うよ。
ルーテシア、本当に頑張っていたからな。

今俺たちは、コンビを組んで一緒に活動している。
といっても、ルーテシアは調べることが専門で、実際活動するのは俺の役目だ……

役割がしっかりしているから、事件を解決するのも早くなる。

俺たちはそう言った意味で、最高のパートナーだと思う……

そして……

「フィルさん……やっぱり……恥ずかしいです……」

「俺も……いざとなると……緊張するな……」

ルーテシアの、16歳の誕生日……

今日、俺たちはお互いを求め合う……

今まで、我慢していたけど……

「フィルさん……いっぱい……してください……今までの分も……いっぱい……」

「ああ……ルーテシア……愛してる……」

「私も……愛しています……フィル……さん」

「フィルさん……」

「ルーテシア……」

俺たちは、キスをしているうちに、段々とお互いを求める気持ちで一杯になり、キスが終わったときはお互いの間に、銀色の糸が出来るほどだった。

「フィルさん……おねがい……します……きて……ください……」

俺たちは、今までの分も補うかのように……

何度も求め合い……

それは……

朝まで途絶えることがなかった……

＊　　＊　　＊

「おはよう……ございます……」

「おはよう……ルーテシア……」

「昨日は……いっぱい……抱きしめてくれて……ありがとう……」

「マジで……可愛かったよ……ルーテシア……」

「フィルさんの……ばか……でも……うれしい……」

ルーテシアは、恥ずかしさで照れてしまった。
でも、そんな彼女も可愛いと思ってしまう。

「これからも……よろしくな……ルーテシア……」

「はい……こちらこそ……よろしくお願いします……」

俺たちはまたキスをし、お互いの気持ちを確かめ合った。
こうしてキスをしていると、すごく安らぐ……

好きな人とつながっているのは、本当にいいな……

＊　　＊　　＊

一年後

「フィル……何見てるの？」

「ああ……ルーか。ちょっと、昔の写真をね」

あれから半年後、俺たちは結婚した。
元六課メンバーとメガーヌさん達に囲まれて、盛大な結婚式をした。

アギト達と元ナンバーズも来てくれて、大騒ぎもしたけど、本当に思い出の残る結婚式になった。

「フィル……私達……本当に色んな人に……恵まれたね……」

「そうだね……」

ルーテシアも結婚して、しゃべり方も少し変わった。
お互いに遠慮しないように、さん付けは無しにしている。

「フィル……」

「んっ？」

「私……あなたにあえて……本当に良かった……」

スカリエッティのせいで、親子共々辛い思いをしたルーテシア。

そんな彼女も、今は心から笑顔を見せてくれる……

そんな笑顔を、俺は守っていきたい……

それが、俺が生きる意味なのだから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　プリム（前書き）

この話は、プリムの話になります。
今までとｉｆ　ｅｎｄｉｎｇと少し違いますが、二人の物語をお楽しみください。

## if ending プリム

《マスター、頑張ってください！！　もう少しでヴィヴィオのレリックは砕けます！！》

「ああ……分かっているさ……何としても、ヴィヴィオは助けてみせる！！」

俺は、ヴィヴィオを助けるためにブラスター3を使って、最後の力でスターライトブレイカーを放ち続けていた。
だけど、俺の魔力だけでは、レリックはそう簡単には砕けてくれない。
なのはさんは、さっきのディバインバスターで全て使い果たしてしまっている。
もう、俺がやるしかないんだ！！

「くっ……あああ……くそったれ……」

クアットロとの戦いで、殆ど魔力を使ってしまい、さらにブラスター3まで使っている。
それに、プリムのフレームもひび割れし、いつ砕けてもおかしくな

い状態だ……

《……マスター……》

「なんだ……」

《……ごめんなさい……マスターとの約束……生きるって約束……破ります……マスターを死なせたく……ないですから……》

次の瞬間、プリムのコアの部分の宝玉が輝きだし、フィルの魔力がふくれあがっていった。
その魔力は、なのはさんに匹敵するほどだった。

「な、なんだ!?　いったいどういう事なんだ!?」

《黙っていてごめんなさい……これが、女神が私に、最後の切り札として組み込んだ最後のシステム……ブラスターエクセリオン……》

「ブラスター……エクセリオンだと……」

《マスターが最後の手段として作ったのは、スパイラルシステム。スパイラルは、術者の生命力を魔力に変換しますが、これは、私のエネルギーを全て使って、術者に力を与えるんです……》

「プリム、今すぐブラスターエクセリオンを解除しろ！！　このままじゃお前が！！」

プリムのひび割れはさらに進行してきている。
ブラスターエクセリオンのパワーで、フレームが耐えきれないんだ。

《マスター……私は、あの時から……ずっと……後悔してきたんですよ……ティアナさんを助けられなかったときから……ずっと……》

《だから……今度は……後悔したくないんです！！》

「！！」

プリムはさらにエネルギーを使い、スターライトブレイカーのエネルギーをさらに増幅させ、その魔力球はさっきよりふた回り以上大きくなっていた。

「やめろ……それ以上……それ以上、エネルギーを使うな！！　やめるんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺は引き金を離そうとしたが……

《マスター……私は、もうどのみち助かりません……ですから……
お願いです。私に……最後の仕事を、全う……させてください……》

「プリム……」

プリムは、自分の命を……全てを……これに賭けたんだ……

泣くのは、いつでも出来る……

今は、プリムの気持ちに応えることが、俺のプリムへの何よりの証
なんだ！！

「……わかった……プリム……」

俺は再びグリップを握り直した。

最後のトリガーを……引くために……

《ありがとう……マスター……》

「《ブレイク……》」

「《シューーーート！！》」

「あああああっっっっ！！」

レリックが砕けると同時に、大爆発がおこり、ヴィヴィオが居たところに巨大なクレーターが出来ていた。
煙がまだはれないので、クレーターの中の様子はまだ分からないが……

「ヴィヴィオ……」

「来ないで……」

俺の目に映ったのは、ヴィヴィオが自分の力で立とうとしている姿だった。
何度も転んでいたが、それでも諦めようとせず、何度も立ち上がろうとしていた。

「ひとりで……たてるよ……」

「あ……ああ……」

「強くなるって……約束したから……」

なのはさんも俺も涙が止まらなかった。

「ヴィヴィオ！！」

なのはさんは、自分の力で立ち上がったヴィヴィオを抱きしめていた。
だけど……その代償は……

《マ……マスター……よ……よかった……ですね……ヴィヴィオが……元に戻って……》

「プリム……プリム……」

ブラスターエクセリオンを使ってしまい、フレームが修復不能な状態になり、今こうやって起動していることが奇跡だった。

「プリム……大丈夫だからな。すぐに元通りにしてやるからな……」

《無理ですよ……ここまで……壊れてしまったんですから……マスター》

「馬鹿言ってるんじゃない！！　必ず俺が元通りにしてやる！！　部品がないのなら、どこからでも調達する！！　魔力がいるのなら俺の魔力を全部やる！！　だから、俺のそばにいてくれ！！」

《ありがとう……ございます……その言葉だけで……充分ですよ……》

プリムのひび割れはさらに進行し、今にも完全に砕けそうだった。

《マスター……私は本当に幸せなデバイスでした……マスターと苦楽を共にでき……時には喧嘩したり、時にはマスターの本音を聞けたりしたんですから……本当に……私はしあわせでしたよ……》

「……何言ってるんだよ……まだこれからだろ……俺にはまだまだお前が必要なんだ……お前は、俺の心の支えなんだ……俺を……一人にしないでくれ……」

《大丈夫ですよ……マスターなら、もっと高性能なデバイス作れますよ。これからはそのデバイスが……マスターを……助けてくれますから……》

「……関係……ねえよ……俺にとって、相棒は……心の一部は……お前だけなんだ……プリム、俺も……お前のこと……好きだったよ」

《……マスター……私のマスター……幸せに……幸せになってくださいね……いつも、心はマスターと一緒ですからね》

そして……

プリムはひび割れたコアを残し、完全に砕け散ってしまった……

「……プリ……ム……」

そのコアを拾うが……

「プリム……プリム……この……ばか……やろうが……」

「お前がいなくなって……何が幸せにだよ……お前がいなきゃ……俺は……俺は……」

いつも、俺のそばで支えてくれたプリム……

母のように……

姉のように……

友人のように……

そして……

恋人のように……

俺にとって、あいつは……プリムは、ただのデバイスじゃない。
たった一人の、大切な……人だったんだ……

「……プリム……返事してくれよ……いつものように、俺を励ましてくれよ……俺は、お前がいなきゃ……一人では……何も出来ないんだよ……」

＊　　＊　　＊

プリムか砕けてしまったあと、フィルは上を向いて必死で涙をこらえていた。
声をかけようとしたけど、今のフィルの悲しみの表情をみたら、何

も出来なかった。

わたしでは、プリムを失った悲しみは埋められないから……

「フィル……」

「……何でだよ……こんなの……こんなの……ありかよ……」

その後、はやてちゃんが救出にきてくれて、ラグナロクでゆりかご内にあったコアを破壊し、わたし達は脱出し、アースラのアルカンシェル・ノヴァでゆりかごを完全消滅させた。

こうして、ＪＳ事件は幕を閉じることになった。

一つの……大きな犠牲を払って……

＊　　＊　　＊

二ヶ月後

「うん、それでええはずや」

「はい」

六課隊舎も復活し、俺は、はやてさんにユニゾンデバイスの作り方を聞き、それを元にプリムのコアに俺のリンカーコアを使ってユニゾンデバイスを作成していた。

「はやてさん……本当にありがとうございます。ユニゾンデバイスはシークレットなのに、俺のために……」

「気にせんといてや。フィルには本当に返しきれない恩があるんや。私で出来ることなら何でもするよ。だから、プリムを復活させてあげてや」

「はやてさん……」

「どうやら……目を覚ますようやで……」

カプセルの中にいた、新しい身体を得たプリムは、フェイトさんが水色の髪になった感じの女性だった。

大人の女性と言うよりは、どちらかというと１０代の半ばくらいの感じだ。

「……ここは？」

「ここは、機動六課、メンテナンスルームだ。プリム、どうだ。その身体は？」

「あなたは……誰ですか？」

「！！」

俺のことを覚えていない！？
まさか……コアの方に欠落があったのか。

「……フィル、どうやらプリムのコア、私らのことを消えてしまっていたようやな……」

「そんな……そんなことって……」

「こんなん……こんなん……酷すぎるで……世界は、フィルをどれだけ悲しませれば気が済むんや！！」

「……初めまして……俺はフィル・グリード。君のマスターだよ」

「マスター……ですか。あなたが……？」

「ああ……君を作ったのは、俺だよ。よろしくね、プリム」

「マスター認証確認、フィル・グリード……登録完了しました」

「分かっていても……辛いな……フィル」

「……はい」

俺たちはプリムのことを、悲しんでいたが、次の瞬間、六課全体に警報が鳴り響いていた。
通信ウィンドウが開き、グリフィスさんが今回の事件のことを話し始めた。

内容は、クラナガンのデパートと空港で大火災が同時に起こってしまい、地上の局員だけでは対応しきれないとのことだった。

「どうやら……いきなり実戦みたいですね」

「無茶や！！　テストも無しで！！　そんなのは認められへん！！
この件はティアナ達に行ってもらう！！」

「はやてさん、隊長達がいない今、ティア達に一カ所は行ってもらうとしても、もう一カ所は俺が行くしかないです」

隊長達は、別件で今は本局に行ってしまっている。
だから、俺たちフォワードで何とかするしかない。

「それは……」

「俺は行きますよ……」

「……分かった。出来るだけ早く、なのはちゃん達にそっちに向かわせる。絶対無茶はあかんよ！！」

「はい！！　いくぞプリム！！」

「はい……マスター……」

やっぱり、いつものプリムじゃない。
会話も機械的でまだ、赤ん坊の状態だ。

それだったら、これから築いていけばいいんだ。
プリムが俺のそばにいてくれれば、何でも出来るから……

＊　　＊　　＊

クラナガン　第三空港

「マスター……これからどうしますか……」

空港に着いた俺たちは、燃えさかる炎に行く手を遮られていた。
情報によると、まだ取りのこされた人がいて、それぞれ別々にいるため二手に分かれなければならない。
しかも、他の局員は消火活動と、もう一つの火災の対応で精一杯だったのだ。

「プリム、お前は反対側に行き、もう一人を救出してくれ。頼んだぞ……」

「はい……わかりました……」

俺とプリムは二手に別れ、それぞれの救助を行うことにした。

＊　　＊　　＊

「うわあああああん！！　ママァァァァ！！」

「大丈夫ですよ……今安全なところに連れて行きますからね……」

「ヒック……ヒック……お姉ちゃん……ありがとう……」

私はマスターの命令通り、取り残された子供を救出することに成功した。
でも、何か引っかかる……

マスターと一緒に行動しなかったこと……

それが、さっきからずっと引っかかっている……

前にもこんな事があった……

確か……

＊　　＊　　＊

「くっ……これ以上は持たないか……」

プリムと別れた俺は、もう一人の救助者を見つけ出し、何とか保護は成功したんだけど、転移をするときに床が崩れてしまい、途中で転移をキャンセルしたため、一人しか転移させられなかったのだ。

そのせいで俺はここに取り残されてしまい、さらにデバイスもないから、転移をもう一回することも出来ない。
ラウンドシールドで炎から身を守るのに精一杯だった。

「ふっ……状況は違うけど、一つの魔法しか使えないってのは、ティアを失ってたときと同じだな……」

あの時はバインドで精一杯で、スターライトブレイカーを、同時進行できないという状況だったけど……

「ある意味……これが、俺の最後にふさわしいのかもな……」

プリム……

これで死んだら……

お前はきっと怒るだろうな……

今の俺には、ラウンドシールドを張る魔力も、もう残されていなかった。
おまけに、柱に足が挟まれて動くことも出来ない……

柱が崩れてきて、俺の方に倒れてきた。

「……もう……駄目だ……」

死を覚悟したが、衝撃は何も来ない。
そう思い、目を開けてみると……

「マスター……ご無事ですか……」

＊　　＊　　＊

間一髪の所で、私はラウンドシールドでマスターを助けることが出来た。
これは当たり前のことなんだけど、なぜか懐かしい感じがする。

「今……助けます」

私はまだ防御魔法と補助魔法しかインストールされていないので、攻撃魔法で柱を破壊することは出来ない。
だから、近くの鉄棒を使って柱をどかすしかなかった。

「プリム……すまない……」

なぜだろう……

この人を見ていると、何か暖かい物を感じる。

この感情は……

いったい何なんだろう？

「でも、本当に……良かった……プリム、無事だったんだな……」

なぜ、この人は自分のことより私の心配をするんだろう。

自分のことより、人のことを優先する。

「あっ……」

今のビジョンは何だ？

「私は生まれてから……間もないのに……今のはいったい？」

まただ……

浮かんだのは、マスターとオレンジ色の髪の女性

そして、マスターの慟哭……

「うっ……ぁぁぁぁ……」

頭が痛い……

でも、さっきからこの人を見ていると、色んな事が浮かんでくる。

この人は、私にとってどんな人なんだ？

またフラッシュバックされたのは、今度は……

「砲撃……マスターが？」

それは、銃型のデバイスで、少女に砲撃魔法を放っているシーンだった。

その後は、そのデバイスが砕けてしまい、マスターが悲しみで打ち震えているところだった。

そのデバイスの名前も、プリム……

「なんで……こんな記憶が……」

私がフラッシュバックの整理をしようとしていたが、状況はそれを許さず反対側から、また柱が崩れてはじめた。

「プリム！！　俺のことは良い！！　お前だけでも逃げろ！！」

「何言ってるんですか……デバイスがマスターを見捨てていけるわけありません！！」

「お前だけでも逃げろ！！　この状況じゃ二人とも共倒れになって

しまう！！」

「出来ません！！　命令は不当と見なし拒否します！！」

「……許せ……よ……」

「えっ……？」

次の瞬間、マスターは私の身体を突き飛ばしていた。
その直後、柱が崩れ、マスターの方に落下していた。

「マスターァァァァァ！！」

「……さよなら……俺の好きな……プリム……」

「あっ……」

今の言葉、聞いたことがある……

そうだ……

思い出した！！

私は……

マスターの相棒のプリム……

未来でも、こっちでも唯一無二の愛する人……

フィル・グリード……

＊　　＊　　＊

「プリム……さよなら……だな……」

今度こそ、俺は死を覚悟し、今までのことを思い出していた。

未来で一緒に戦ってきたこと。

こっちに戻ってきて、プリムと一緒にクアットロの対策を考えたこ

と。

ティアとなのはさんとのことで、悩んでいたときに一緒に考えてくれたこと。

そして……

ゆりかごでのこと……

「マスター！！　今助けます！！」

「えっ……？」

声と同時にプリムが使っていたのは、俺の得意魔法、ブラストブレイザー。

今のプリムにはまだインストールしていないのに？

まさか！！

「ブラストブレイザー！！」

プリムの放った白銀の砲撃は、落ちてくる柱を破壊し、炎もかき消していた。
その後、プリムは俺の足に挟まっている柱も破壊し、俺は自由になることが出来た。

「マスター、ワープは出来ますか？」

「いや……魔力が足りない。これじゃ無理だ……」

「それじゃ、ユニゾンして出力をあげますよ」

「えっ……？」

「ユニゾン・イン！！」

ユニゾンをした瞬間、俺は魔力がふくれあがりワープに必要な魔力を得ることが出来た。
そして、その魔力でワープをし俺たちは無事脱出することが出来た。

＊　＊　＊

事件が終わり、俺とプリムは、海が見える公園に来ていた。

「プリム……まさか……お前……」

「はい……記憶……全部思い出しましたよ。マスター」

プリムの記憶が戻った……
そのことで、俺は涙が抑えられなくなり……

「プリム……プリム！！」

「マスター……マスター！！」

気がついたら、俺はプリムを力の限り抱きしめていた。

一度は、失ってしまった俺の半身……

でも、俺の元に帰ってきてくれた。

＊　　＊　　＊

「マスター……あの……もう一度……私の気持ち……聞いてもらって良いですか」

「ああ……もちろん」

あの時は、最後だから話せたけど……

いざ、こうして気持ちを伝えようとすると、緊張で逃げ出したい。

だけど、ウジウジしているのは私の性分じゃありません！！

もう一度、マスターに私の気持ちを伝えるんです！！

「マスター……いえ、フィル・グリードさん……私は……あなたのことを……心から……愛しています……」

「デバイスが人にこんな感情を持つのは、変だと分かっています。

でも、もう一度だけ……私の思いを伝えたかったんです！！」

＊　　＊　　＊

「プリム……」

プリムの告白は、俺にとって何より嬉しかった。
俺もプリムと同じ気持ちだからだ。

俺のことを誰よりも分かってくれていて、誰よりも愛してくれている。

そんなプリムのことを、俺は愛しているんだ。

俺はプリムのことが愛おしくて、自分の方へ抱き寄せていた。

「マスター……」

「名前で……呼んでくれないかな。自分の恋人にマスターは無いだろ」

「えっ……？　それじゃ……それじゃ！！」

「ゆりかごで言ったけど、もう一度言うね。愛しているよ……プリム」

「フィル……」

俺はプリムの頬に手を添え……

彼女も意味を理解し、瞳を閉じ……

「プリム……」

夕日が照らす中……

俺とプリムは……

お互いの気持ちを……

確かめ合うキスをした……

＊　　＊　　＊

半月後

「はい、フィル。あーんしてください♪」

「ここでか……？」

「はい♪」

ここは、六課の食堂だぞ。

さらに、お昼時ということもあって、満員御礼と来ている。

「みんな……見ているんだけどな……」

「いいじゃないですか。それとも私にされるのは……いやですか……」

「そんなこと無いから、好きな人にされるのに、いやなはず無いだろ！！」

「よかった……嫌われているかと思いましたよ……」

「ああ！！　もう、いい加減にして！！」

「「ティア　（さん）！？」」

「プリムが記憶が戻ってから、そうやって毎日毎日いちゃついて！！　一緒にいるあたし達の身にもなってよ！！」

「「あっ……」」

た、確かにここ半月、ずっと俺はプリムとこうやっていたかも……

「あんた達が両思いで、一度は永遠の別れをしたんだから、気持ち

は分かるけど……」

「もう、あれから半月は経っているんだから、そろそろ勘弁して。でないとみんな口から、砂糖をはき出すわよ……」

「そ、それは……大げさじゃないですか」

「はぁ……大げさじゃないから……止めろとは言わないから、もう少しだけみんなの前では押さえてね」

「「す、すみません……」」

＊　　＊　　＊

「やっちゃったな……」

「ですね……私もつい嬉しくて」

「それは、俺も……だから……」

「フィル……」

訓練が終わり、俺たちは部屋に戻り、ベッドに座ってお互いに身体を寄せていた。

プリムの長い髪を、撫でていると、プリムも気持ちいいらしく、目を細めて俺の方に、頭をコトンと乗せてきた。

「プリム……」

「はい……」

「あのな……俺……お前のこと……欲しいんだ……」

「あの……もしかして……それ」

「プリムを……抱きたい……」

プリムは、一瞬驚いていたがすぐに……

「やっと……言ってくれたんですね。ずっと……待っていたんですよ……」

「ごめんな……俺、お前に嫌われるのが怖くて……言えなかった……」

「ばか……そんなわけ無いじゃないですか。私はあの時、恋人同士になったときから、ずっと……フィルに抱かれたいって思っていたんですから……」

俺は、もう押さえきれなくなり、プリムをベッドに押し倒していた。

「もう……遠慮しないからな……」

「遠慮なんか……しないでください。むしろ、フィルこそ覚悟してくださいね。今までの思いを、いっぱい抱きしめてもらうまで、止めませんからね♪」

俺たちは最初から、お互いを求め合うキスになり、息が続く限りそれを繰り返し、唇が離れる度にお互いの間に銀色の糸が出来るほどだった。

「いっぱい……いっぱい……してくださいね……フィル」

「プリム……」

俺たちは、月光を照らす部屋で……

何度もお互いを求め合い……

それは、朝まで……

途絶えることがなかった……

＊　　＊　　＊

3年後

「フィル、朝ですよ。起きてください！！」

「ん……もう少し寝かせてくれよ……」

「駄目ですよ。今日は久しぶりのデートなんですから、早く起きてください！！」

六課が解散してから、俺はフェイトさんの元で執務官補佐を一年ほどして、試験を一発で合格してフリーの執務官として動いている。
もちろんプリムは、俺の大切な相棒として一緒にいる。

ユニゾンデバイスになったことで、スパイラルとブラスターエクセリオンは正式に排除した。
封印だとまた使ってしまうため、二人で話し合い排除という形を取った。

それにユニゾンの方が遙かに魔力も上がるし、身体への負担も少ない。
現にユニゾンしてなら、ブラスター使用のなのはさんとも短時間だが互角に戦えるほどだった。

そのせいで、時々なのはさんと模擬戦をすることになってしまったけどね。

そして俺たちは、今一緒に暮らしている。
籍は入れられないけど、気持ちは夫婦なのだから……

「ったく……昨日あれだけ激しかったんだから……もう少し寝かせてくれよ……」

「ば、ばか！！　何言ってるんですか！！　……フィルの……ばか……」

こうやって、照れているプリムはやっぱり可愛いな。
だから、ついプリムをからかいたくなってしまう。

「でも……今日もいっぱい……してくださいね……フィルにしてもらうと、本当に愛されてるんだなって思うから……」

「ああ……俺もプリムとしていると、気持ちが安らぐんだ。だから……いっぱいしてもいいか」

「さっきも言ったでしょう。いっぱいしてくれなきゃ……拗ねますから♪」

プリムと俺……

俺たちは、未来からずっと一緒で、互いに、かけがいのない存在だった。

一度は悲しみでどうしようもなくなったけど……

今はこうして一緒にいて、お互いの支えになっている……

プリムも俺も、どちらが欠けても駄目なんだ……

だから、俺たちはずっと一緒にいる……

命が続くかぎり……

願わくは……

この幸せな時間が永遠に続くことを……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　フリードリヒ（前書き）

この話は、本当に独自設定を入れて書いています。
そういった話が苦手な方は、引き返してください。

それと、今回はキャラクター募集で来ましたキャラクターを、物語で使わせていただきました。

## if　ending　フリードリヒ

「あははは！！　もう観念しなさい」

「……くっ……」

フェイトさんのおかげで、クアットロの居場所を見つけた俺は、一人乗り込んだが、クアットロの聖王の鎧の前に、手も足も出ないでいた。

砲撃を撃っても、全てはじかれてしまうし、最後の手段で、ブラスターを使って、ザンバーで斬りつけたが、通用せずはじかれてしまい、床に倒れてしまった。

ヴィータ副隊長が駆動炉を破壊して、パワーが落ちるはずなのに全く落ちる気配がない。
ヴィヴィオもなのはさんが元に戻したから、ゆりかごは停止しても良いはずなのに……

「なぜ、ゆりかごが停止しないのか、分からないみたいですね」

「……ああ、ゆりかごのキーは二つとも失ったはずだ。だが……」

「簡単なことですわ。それは、コアが失っていないからですわ～～」

「コア……だと……」

「そうですわ。聖王も駆動炉も、ゆりかごのほんの一部に過ぎませんの」

「だからか……お前の力が失っていないのは……」

「その通りですわ～～　さらに、教えておいてあげる。私はそのコアと融合してますのよ～～」

「！！」

これで納得した。ユーノさんが教えてくれたゆりかごの情報で、二つのキーを止めても、もしかしたら駄目かもしれない、その言葉の意味がやっと分かった。
ゆりかごのエネルギー源は、コアと融合したクアットロそのものだったんだ。

「これで分かったでしょう。あなたがしてきたことは全て無駄だったのよ……そして……」

クアットロは魔力を刃にし、倒れている俺に突きつけ……

「これで……お終いですわ！！」

（これまでか……）

『キュクウウウウ！！』

突如、入口の扉が、凄まじい衝撃を受け、内側に向かってひしゃげ、次の瞬間、強力な火炎が扉をぶち抜いた。

「な、なんですの！？」

「フ、フリード！！」

『フィルさん、応答してください！！　フィルさん！！』

フリードの出現でとまどっていたとき、キャロから通信が入り……

「キャロ！！　良かった、無事にフレイム・グロウを倒したんだな！！」

『はい、何とかこちらは、片付けることが出来ました』

「で、何でフリードが、俺を助けてくれたんだ？」

『フリードは……フィルさんが危機になっているのを、本能で感じたんだと思います。だから、フレイム・グロウを倒したと同時に、ゆりかごへ全速で向かったんです……』

フリードの身体を見てみると、あちこち傷だらけになっていて、治療魔法も受けないで来たんだ。
しかも、ダメージが大きすぎて、完全体じゃなくなってしまっていた。

「……ありがとうな、フリード……俺のために……」

「キュクウウ！！」

フリードは、クアットロにブラストフレアを放つが、聖王の鎧で完全に防がれてしまい、その攻撃は全く効いていなかった。

「あはははは！！　そんな攻撃蚊にさされたほどにも感じませんわ～～～」

「キュクウウウウウウ！！」

フリードはさらに火力は上げるが、やはり効果は全くない……

「目障りですわ！！　チビ竜が！！」

「キュクウウ！！」

「フリード！！」

クアットロの放った砲撃はフリードを壁際まで吹っ飛ばし、行動不能にしてしまった。

「……これで最後ですわ！！」

クアットロの集めているエネルギーは、ディバインバスタークラス

の物だ。
あれがフリードに命中したら……

「消えなさい！！」

クアットロは、フリードに巨大な魔力球を放ち……

「……キュクウウ……」

「フリード！！」

このままじゃ、フリードが……

冗談じゃない……

死なせはしない……

俺の命に代えても！！

＊　　＊　　＊

（駄目だ……ボクの力じゃ……ここまでだ）

（ごめんね……フィル……助けてあげられなかった）

魔力球がボクに迫ってくる……

これで最後だね……

死を覚悟していた次の瞬間……

「無事か……フリード……」

フィルが自分の身を盾にして、クアットロの魔力弾を防いでくれた……

どうして……

どうして、ボクのために自分の身を……

「……絶対……死なせはしない……俺の……命に代えてもな……」

そして……

フィルは……

ボクの目の前で、崩れるように倒れた……

「あはははは！！　フィル・グリード、いいざまですわね。そんな肩を庇って自分がやられたんじゃ、ざまあないですわ！！」

黙れ……

「フィル・グリード、他人を庇って死ぬ。あなたらしい間抜けな死に方ですわ！！　あはははは！！」

許せない……

よくも、ボクの大好きなフィルを……

「うわあああああああ！！」

「な、何ですの、この光は！？」

突如フリードの身体から、巨大な光が放たれ、それは巨大な柱状と化していた。
そして、光が収まると、そこには１２～３歳くらいの金色の髪をした子供がいた。

「……竜の……人化……まさか、あの竜は……」

「まさか……ホワイトドラゴンの一族の末裔なの！？　もう、大昔に滅びたはずなのに……」

「ゆるさない……よくもフィルを……フィルを！！」

「じょ……冗談じゃありませんわ……ホワイトドラゴンの一族だなんて……人間の範疇を超えていますわ……」

フリードが右手をかざすと、炎で作った刃が、クアットロの両手と両足は焼き切り、再生も不可能な状態になった。

「……あ……あがが……」

「……お前なんて……お前なんて……」

「消えちゃえぇぇぇえええぇぇぇ！！」

フリードが魔力を集め、巨大な魔力弾を作り出すと、それをクアットロに放ち……

「ぎぃゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その汚い断末魔と共に……

クアットロは、この世から完全に消滅した……

＊　　＊　　＊

「フィル！！　しっかりして、お願い死なないでよ！！」

フィルの体温が、どんどん低下して、魔力反応もほとんど無い。
このままじゃ、本当に死んじゃう……

「フィル……」

ボクは、口づけをし……

自分の魔力をフィルに分け与えた……

「ん……うっ……」

すると、フィルの身体の体温が蘇ってきて、魔力反応も戻ってきた。

「フィル！！」

「助けに来たよ！！」

「ティアナ！！　スバル！！」

そして、スバルとティアナが、スーパーサンダーでフィルを助けに来てくれた。

「って、あれ？」

「あの子……誰なの？」

「ねぇ……君は……誰なの？」

「スバル、ボクだよ……フリードだよ……」

「「ええっっっっ！！」」

スバルとティアナが驚いて、何度もボクを見ているけど、そんなにびっくりかな。

「あ、あんた……まさか……そんな力があったなんて」

「うん……びっくりだよ。フリードが人間になっちゃうなんて……」

「ボクも、びっくりしてるんだけどね。そんなことより、フィルが！！」

「そうだったわ。フィル、しっかりしなさい！！　死ぬんじゃないわよ！！」

「すぐに、シャマル先生の所に連れて行くからね！！」

こうして、ＪＳ事件はクアットロの消滅という形で幕を閉じた。

フリードは、クアットロを消滅させるときに、かなり力を使ってし

まったため、竜に戻ることが出来なくなってしまった。

ヴォルテールの話によると、これは、弱くなったのではなく、むしろフリード自身が自分の力を完全に使いこなせるようになった証とも言えた。

事件後、しばらく六課内で騒ぎがあったけど、少ししたら、みんな受け入れてくれて、そのかわいさはフォワードのマスコットになっていた。

そして……

3年後……

「お久しぶり。フィル」

「お久しぶりです。フィルさん」

「えっ……キャロ、それに……君は……？」

久しぶりに俺はクラナガンに遊びに来ていたとき、キャロと再会したんだけど……
キャロは、すぐに分かったんだけど、隣にいる金色の髪をした可愛い女の子は誰なんだ？

「フィル……分からない……ボクだよ……フリードだよ」

「何だって！！」

う、嘘だろ……

どう見たって、かなり可愛い女の子にしか見えないぞ……

スタイルも良いし……

「もしかして……ボクのこと……男の子だと思っていた」

「ごめん……実は……」

「ひどいよ！！　ボクはれっきとした女の子だよ。その証拠にほら！！」

そう言ってフリードは、俺の腕を取って自分の胸に触れさせた。

「フ、フリード……！？」

「……これで……ボクが女の子だって分かってくれたでしょう……」

「あ、ああ……」

「フ、フリード……大胆だね」

「あっ……」

キャロに言われて、フリードは俺の腕をパッと放し、その後は顔が真っ赤になっていた。

「それじゃ、フリード。私は先に帰るけど、どうする？」

「ボクは、もう少し遊んでから帰るよ。それに……」

「ボクのことを男の子と勘違いしていたフィルに、たっぷり奢ってもらわなきゃ！！」

「あ、あはは……」

「フリード、程々にね。それじゃ、先に帰ってるね」

「うん、キャロ。じゃあね」

そう言ってキャロは、俺たちと別れてった。

＊　　＊　　＊

（キャロ……ありがとう）

ボクの気持ちを知っているキャロは、ワザとフィルと二人きりにしてくれた。
キャロ……本当にありがとうね

ボク……頑張るから……

「じゃ、フィル。レッツゴーだよ！！」

「お、おい！！　そんなに引っ張るなよ。店はにげやしないから……」

こうしてボクたちはクラナガンの町中を回りながらデートを楽しんでいた。
有名なアイスショップで、アイスを買ったんだけど、そこの店員さんのやりとりがおもしろかったな。

「はい、おまちどおさま♪　バニラアイスね」

「ありがとう！！」

「リオス君、バニラがもう無いから作っておいてね」

「分かりました。ヒヨリ店長……って、何やってるんですか！？」

「何って、たまには私も新作を作ってみようと思ってね。試食を、この可愛いカップルさんにしてもらおうと思ってね♪」

店長さんから差し出されたのは、一見まともなんだけど、何かまか不思議な臭いがしたアイスだった。

「店長、お願いですから止めてください！！　店潰すつもりですか！！」

「大丈夫だよ。今度のは自信作だから♪」

「そう言って、うちのスタッフを何度も病院送りにしているじゃないですか！！　味付けのことは僕に任せて店長はアイスの温度管理に集中してください！！　うちのアイスは、かなりデリケートですから、温度の管理は店長でないと駄目ですから……」

「ぶぅ……分かりましたよ。リオス君の意地悪……」

そう言って、店長さんは奥に行ってしまった。
同時にリオスさんも、他のお客さんの接客に入った。

「済みません。うちの店長……どうにも個性的なものを作ってしまうんです」

「店長、アイスの管理は神懸かりなんですけど……味はやっぱりリオスさんですよ！！」

スタッフにここまで言われる店長の味付けって……

よかった……

リオスさんが事前に止めてくれて……

＊　　＊　　＊

「あの店長、おもしろい人だったね」

「そうだな。それにマネージャーの、確かリオス＝コーネルドさんだっけ、何度も俺たちに謝っていたな」

あの後、店を出ようとしていたボク達の前にリオスさんが来て、店長のことで何度も謝っていた。
あの店長は時々自分の作ったアイスをお客に試食させて、その度に救急車の騒ぎになっているんだって。

「こっちは気にしてなかったのにね。でも、アイスをただにしてもらったのは嬉しかった♪」

「ちょっと申し訳ないかな。またあそこに食べに行こうかな」

「その時はボクも一緒だからね」

「フリードが良かったら、また一緒に行こうか」

「うん♪」

やっぱり、フィルとこうやっているときが一番楽しい。

キャロと一緒にいるのも良いけど、やっぱり違う。

大好きな人とこうして話したり、遊んだり……

何気ない一時……

だけど、大切な一時……

ボクは、フィルとずっとこうしていたい。

フィルは、ボクの事なんて、さっきまで男の子と思っていたくらいだ。

ボクのことを女の子として、意識してくれているかなんてわからな

い。

でも、ボクはフィルのことが大好きなんだ。

だから……

「フィル……聞いて欲しいことが……あるんだ……」

「んっ……？」

「あ、あのね……」

やっぱり、緊張する……

でも、フィルにボクの気持ちを知って欲しい。

だから、勇気を振り絞って言うんだ！！

「フィル……ボクね……フィルのこと……大好きなんだ。友達としてでないよ。その……一人の男の人としてだよ……」

＊　　＊　　＊

「フリード……」

フリードの告白に、俺は驚きを隠せなかった。
さっきまで男の子として思っていたフリード。

でも……

今日一日ずっと一緒にいて、フリードを女の子としてずっと意識させられていた。

ちょっとした仕草もやっぱり女の子としての物だったし、俺に大胆なスキンシップも今なら分かる。
フリードも本当は恥ずかしいのをこらえて、俺に意識して欲しかったんだ。

自分を女の子として見て欲しかったんだ……

俺もフリードと一緒にいて、楽しかったし、何より……

気持ちがすごく安らいだ……

フリードの一途さは、ゆりかごの時から分かっていた。

俺を助けるために、自分の命を分け与えてくれたんだ。

そんなフリードのことを、あのときからずっと、かけがいのない仲間として思っていたけど……

でも、フリードは違っていたんだ。

俺を男の人として思ってくれていたんだ。

それも3年間も……

俺は、そんなフリードをぎゅっと抱きしめ……

「ありがとうな……あれから3年間も俺のこと……思ってくれていたんだな」

「うん……正確に言えば、六課で戦っていたときからだよ。ボクは竜だったから、こんな風になることはないって思っていたけど、人になれてやっとフィルに気持ちを伝えられた……」

「俺で……いいのか」

「こんなこと……冗談で言わないよ。ボクはフィルじゃなきゃ嫌だ」

「フリード……」

フリードは瞳を閉じ……

俺はそんなフリードに顔を近づけ……

俺たちは、夕日が照らす中……

口づけを交わしていた……

＊　　＊　　＊

「あの……フィル……ボクね……ずっと思ってたんだよ。こうしてフィルに抱きしめてもらうのを……」

「フリード……」

街から戻った俺たちは、俺の自宅に戻っていた。
フリードの髪の毛は、結構長く、だけど綺麗に手入れしてあって触れるとすごく柔らかかった。

「えへへ♪　フィルに触られても良いように、手入れ苦労してやってたんだよ」

「フリード……ありがとうな」

フリードは、髪に触れられているのが気持ちいいのか、目を細めて自分の頭を、俺の肩にコトンとおいた。

「フィル……こうしてもらうのも良いんだけど……」

「ああ……いいのか……本当に…」

「うん……ボクを……フィルの女の子に……して」

俺はフリードを押し倒し……

「キス……してよ……フィル」

俺たちは、最初はおそるおそるキスをしていたけど、次第に本能がお互いを深く求めたくなり、キスも段々と深い物になり、それを何度も繰り返し、息継ぎの時は、お互いの口の間に銀色の糸ができあがっていた。

「フィル……はやく……抱きしめてよ……」

俺は、フリードの服をまさぐり、胸を触ると……

「あ……んっ……なんか……せつないよ……はやく……きて……」

この夜……

俺たちは、何度もつながり……

それは朝までずっと途絶えることがなかった……

＊　　＊　　＊

半年後

「フィル、早く起きてよ……せっかくの休みなんだから、どっかに行こうよ」

「う…ん……もう少し寝かせてくれよ。昨日だってあんなに激しかったんだから……」

「ば、ばかぁ……」

あれから俺たちは、クラナガンで一緒に暮らしている。

フリードはキャロの召還獣であるが、あのとき俺たちは一つになった時から、魔力回路が変わってしまい、フリードの主人は俺になってしまったのだ。

俺はかなり焦ったけど、キャロもフリードも、この事は予定調和だったと後から聞かされた。

あの時は、女ってこわいって思ったよ……

「ねぇ、フィル。今日はあのアイス屋に行かない。またリオスさんが作ったアイスが食べたいな♪」

「いいな……今日も暑いし、行くか」

「うん♪　ねぇ……」

そう言って、俺の背中にぎゅっと抱きついてきた。

フリードの胸は、結構ある。

しかも、家にいる時はいつもこんな感じで甘えてくる……

理性を保つのが大変なんだぞ……

「……これからも、ずっと、一緒にいようね。約束だからね」

「ああ……俺のこと嫌わない限り……ずっと、一緒にいるよ……」

「だったら一生だね。だってボクは、フィルのこと愛してるもん♪」

太古に滅んでしまった竜の一族の末裔……

フリードには、同族の仲間はいないけれど……

でも、彼女にはキャロやエリオといった親友がいる。

俺も、そんな彼女の心の支えになってあげたいと思う。

種族の垣根はあるかも知れないけれど……

それは、人同士だってあることだ。

二人なら、どんな困難だって乗り越えられると信じている……

お互いを……信じ合う心がある限り……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　フリードリヒ（後書き）

今回の特別出演

神崎はやて先生作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ
～氷翼の天使～より、リオス＝コーネルド様

夏菜先生作品：　魔法少女リリカルなのは～ヒヨリの日記。より、
ヒヨリ・Ｒ・マクスウェル様

以上、お二方に出演していただきました。

もちろん、募集で、きてくださったキャラクターは、これからの話で出演していただきますので、よろしくお願いします。

自分の技量が未熟なため、本来のキャラクターとは違ってしまっていますが、今後も頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。

## if endingエリオ（前書き）

この作品は、夏菜先生の熱い、ほんとぉぉぉぉぉぉに熱い希望で書くことになりました。
原案も考えてくださり、それに基づいて自分が書き上げた作品になります。

こういった展開が苦手な人は、即刻引き返すことをおすすめいたします。

それでは、どうぞ！！

# if　ending　エリオ

「はなせ！！　はなせぇぇぇぇぇ！！」

地上本部と機動六課が襲撃を受け、僕とキャロは急いで六課隊舎に戻った。
その時ヴィヴィオがクアットロに連れさらわれるのを見つけ、ストラーダで追撃をかけたんだけど、逆に捕まってしまい、今僕はスカリエッティの基地で貼り付けにされてしまっていた。

「ふふふっ……エリオ・モンディアル。プロジェクトFの作品で唯一の男性体。だけどね……」

「僕が作る作品は、全部女性体でなければいけないんだよ。それが僕の美学なんだ」

「狂っている！！」

「なんと言われようと、もう君にはなにもできないんだよ。エリオ・モンディアル。さぁ、始めようか！！」

「やめろ！！　やめろぉぉぉぉぉぉ！！」

＊　　＊　　＊

「……やめろぉぉぉぉ！！」

ガバッ！！

「目を覚ましたか」

「あ、あなたは？」

「私はトーレ、戦闘機人の一人だ。そしてお前の監視役を任されている」

「監視役……ですか？」

トーレと名乗る戦闘機人は、どこかシグナム副隊長に近い雰囲気を感じる。

「それは、そうと、自分の姿を確認してみろ」

そう言われて渡された鏡を見てみると……

「う……嘘だ……これが僕の……姿……」

鏡に映されていたのは、背丈も大きくなっていて、骨格も女性で、胸に女性の象徴である二つのふくらみがあった。

そして……

「僕の……男性の象徴が……無い」

「ドクターに完全に女性体に改造されたからな。ちなみに子供も宿すことは可能だ……」

嘘だ……嘘だ……

僕の身体が、女の子になってしまったなんて……

こんなの……

「こんなの嘘だぁぁぁぁぁぁ！！　うわあああああああ！！」

もう何も考えられなかった。
僕の身体は女性になってしまい、今までの僕は完全に消えてしまった。

何にこの気持ちをぶつけたら分からなかった。
壁を拳で殴りつけてもこの気持ちは収まらない。
残ったのは傷だらけになった拳だけ……

「私は、お前がこれからどうしようと何の興味もない。だから」

そう言ってトーレは床にある物をころがした。

これは……ストラーダ！！

「あとは好きにするがいい。脱出するのも、ここに残るのもお前の勝手だ」

「トーレ……」

そう言ってトーレは部屋から出て行った。

「僕は……僕は……」

いまさら六課に戻って何になる。
女性に変えられ、僕がエリオだってみんな分かってくれるか分からない。
そんな所に帰ってどうなるんだ。

いっそのこと……

でも……

「エリオ、決して自決だけはするなよ。命を自分から捨てる真似だけはしないでくれ」

フィルさんとの約束。

そうだ！！

例え、みんなに分かってもらえなくても、僕は帰るんだ。

みんなが待つ場所へ

そして……

フィルさんが待っている場所へ……

僕はトーレが落としていったストラーダを取り、デバイスを起動させた。

「どうやら、能力の方はかなり上がっているんだな。魔力も以前より大分上がっている」

スカリエッティがどういうつもりでやったのか知らないけど、少なくても今はありがたい。

僕はストラーダで壁をぶち抜き、ソニックムーブで出口に向かった。

ストラーダがここに連れさらわれるとき、ここの内部をトレースしてくれていたのだ。

データも消されなかったので、出口に行くことは簡単だった。

出口でガジェットが3体いたけれど、こんなの今の僕には雑魚に過

ぎない！！

「どけぇぇえぇぇぇぇ！！」

ストラーダを横凪ぎすると、３体のガジェット達は真っ二つに裂かれ、大爆発を起こした。
その後のことは、よく覚えていない。
ひたすら六課へ走り続けていたとき、体力が尽きて倒れてしまったのだ。
倒れている僕を助けてくれたのはフィルさんだったらしい。

＊　　＊　　＊

「どうなんや。エリオの様子は？」

「とりあえず、今は眠っていますね。だけど、信じられませんでしたよ。ストラーダに聞くまでは。魔力を頼りにワープしたんですけど、まさか……」

「スカリエッティに改造されていたとはな……」

俺は連れ去られたエリオを連れ戻すために、魔力を頼りに探していたんだけど、全く感知できなかった。
だけど、昨日エリオの魔力パターンを感知することが出来、それを頼りにこの場所に来てみた。

そこで発見したのは、一人の女の子だった。

まさかそれがエリオだなんて、その時は夢にも思わなかった。
手に握っていたストラーダと魔力波長がなかったら、分からなかったかもしれない。

「スカリエッティの奴！！　今度はエリオまで……いったいいくつの命を弄べば気が済むんだ！！」

「私かて…腸が煮えくりかえっているんや……だけど、体勢を立て直してでないと、無駄死にするだけやで」

「……はい」

エリオの奴があんな目に遭わされたのに、俺は何も出来ない……
自分の無力さが恨めしい。

「本当に無力ですよ……俺は……」

「それは……私かてそうやで……」

俺たちが自分の無力さに嘆いていたとき……

「はやてちゃん、フィル、エリオが目を覚ましたわよ」

シャマル先生から、エリオが目を覚ましたと通信で知らされた。

＊　　＊　　＊

俺たちが急いで医務室に向かうと、そこではエリオがフェイトさんに向かって電撃を放とうとしていた。

「フェイトさんには、関係ない！！　僕の気持ちなんて分かるわけ無いんだ！！」

「まずい！！」

急いで俺はフェイトさんの前に立ち、自分の身で電撃を防ぐこと出来たけど、バリアジャケットもないからかなりのダメージを受けてしまった。

「「フィル！！」」

正直、立っているのもかなり辛い。
だけど、ここで倒れるわけにはいかない。
エリオに、伝えなきゃいけないんだ。
お前は一人じゃないんだって……

＊　　＊　　＊

「……あ、ああ……」

僕は何てことをしてしまったんだ。
フェイトさんに電撃を放とうとしただけでなく、フィルさんに大怪我を負わせてしまうなんて……

「なぁ、エリオ……いまの悲しい気持ちも、やるせない気持ちも、俺は全部は分かってやることは出来ない」

「だけど……」

フィルさんは僕の手を自分の両手で包み込むように取り……

「だけど、少しでも分かりたい。お前が悲しんでいる気持ちを、少しでも分け合いたいと思ってる」

そして、フィルさんは僕を自分の方へ抱き寄せて……

「あっ……」

「エリオ、今はお前が生きて帰ってきてくれただけで良いんだ。俺との約束を忘れないでくれたんだから……」

「生きていてくれれば、一緒に楽しいことや嬉しいことも見つけていけるから。それを俺も一緒に探すのを手伝うから……だから……」

「頼むから……頼むから……そんな風に自分の心を傷つけないでくれ……そんなエリオを見ているのは、俺も悲しいよ……」

「フィルさん……僕……僕……」

フィルさんの優しさが、痛いほど伝わってくる……

「今は……泣いた方が良い……こうして誰にも見えないようにしてやる……」

「う……うわぁぁぁぁぁぁぁん！！」

もう限界だった。

僕は大声で、フィルさんの胸の中で思い切り泣いた。

フィルさんはずっと僕を抱きしめてくれていた。

本当に……本当に……ありがとう……フィルお兄ちゃん。

＊　　＊　　＊

「……うーん、気持ちいいな……ひゃあ！！」

いきなり僕の頭の上に冷たい物が乗せられて、振り返ってみると……

「よう、少しは落ち着いたか」

「フィルさん、もう、びっくりさせないでくださいよ！！」

「悪い、悪い、でも良い表情になったな」

「んもう……」

僕はフィルさんからもらった缶コーヒーを飲みながら、しばらくの間、フィルさんと一緒に屋上で涼んでいた。

「フィルさん……本当に……ありがとうございました」

あの時、フィルさんがいなかったら、今でもこんなにすがすがしい気持ちにはなっていなかったと思う。
悩んで、傷つけて、また孤立していったと思う。

「吹っ切れたんだな……エリオ……」

「はい！！　どんな姿になっても、僕は僕、エリオ・モンディアルですから！！」

「ああ、お前はお前なんだ。その事を忘れるなよ。辛いことがあったら、いつでも俺に言えよ。抱え込むんじゃないぞ！！」

「はい！！」

大丈夫だ。フィルさんは僕のことをちゃんと見てくれる。
こうやって男の子から女の子に変わっても、変わらず接してくれる。
こんなフィルさんが僕は大好きなんだ。

でも、今の気持ちは何なんだろう。
男の時と違って、今はフィルさんのことを考えると、胸が苦しくなる。

でも、決して嫌な気持ちじゃない。

「エリオ」

「はい？」

「……この戦いが終わったら、どっかに遊びに行こうな」

「はい！！　約束しましたからね。絶対ですよ！！」

「心配するなって、約束は必ず守るよ」

そう言って少し乱暴気味に、僕の頭をわしゃわしゃとした。

「フ、フィルさん……ちょっと痛いですよ」

「ごめんな……どうも力加減がうまくいかないな。今は女の子だったな」

「そうですよ。もう僕は女の子ですから、優しくしてくださいね」

「だな。じゃ、もう遅いからそろそろ休めよ。お休みエリオ」

「お休みなさい……フィルさん」

僕はフィルさんが出て行った扉を、しばらくの間じっと見ていた。

＊　　＊　　＊

「おはようございます。フィルさん」

「んっ、おはよう。エリオ」

「あの、もう僕はエリオじゃないんです。実は……」

エリオの話によると、あの後フェイトさんの所に行って、一晩中色々と話をして、親子の会話をしていたとのことだ。
その時にエリオという名前は、男の時の名前だから、新しい出発をしたいから、フェイトさんに名前を付けて欲しいとお願いをして、名前を付けてもらった。

「そっか……じゃ新しい名前をフェイトさんに付けてもらったんだな」

「はい、今日から僕は、エレナ・モンディアルです。ですから間違えないでくださいね」

「分かったよ。エレナ」

「はい♪」

もう、大丈夫だ。
エリオ、いやエレナはちゃんと自分の答えを見つけたんだ。
だったら、俺はエレナのために、俺が出来ることで支えてやるだけだ。

＊　　＊　　＊

「もう……立つことも出来ないや……」

僕たちフォワードはクラナガンに出現したフレイムグロウを、苦労の末に倒すことが出来たんだけど、ビルの中に一人の女の子が取り残されているのを発見し、それをストラーダを使って、女の子を外に出して助けたのは良かったけど、僕自身の体力と魔力がつきてしまい、動けなくなっていた。

「ストラーダもオートコントロールで、女の子を助けるのに使っちゃったし……もう駄目かな……」

そして天井が崩れ、僕の頭上に迫ったとき……

一条の光が現れて、僕を助けてくれた。

「……エレナ、約束通り……助けにきたよ」

「フィルさん！！」

いつの間にか僕はフィルさんに、お姫様だっこされていた。
恥ずかしいけど、それ以上に嬉しかった。
こうしてまた、フィルさんのぬくもりを感じることが出来たんだから……

「おい、エレナ。そんなにぎゅっと抱きつくなよ。ちょっと苦しいぞ」

「良いじゃないですか。今の僕は女の子なんですから♪」

「ったく、でも、間に合って良かったよ……」

「フィルさん……」

フィルさんが優しい笑みしてくれると、すごく温かい気持ちになる。

決戦前にも感じたこの気持ち……

今やっと分かった。

これは恋なんだ……

僕はフィルさんのことを、異性として好きなんだ。

＊　　＊　　＊

「ごめんなさい。突然こんな所に呼び出したりして……」

「どうしたんだ。こんな所に呼び出して？」

事件終了後、僕たち機動六課は、ささやかながら祝勝会を行った。
祝勝会は夜遅くまでやっていて、今さっき終わった。

だけど、僕は大事なことが残っていた。

フィルさんに自分の気持ちを伝えること。
それをやるのは今しかない！！
そう思って僕は、フィルさんに隊舎前の海に来てもらった。

「あ、あのですね……フィルさん……聞いて欲しいことがあるんです」

「聞いて欲しいこと？」

「はい……」

もう、後戻りは出来ない。
例えフィルさんに嫌われても言うんだ。
後悔はしたくないから……

「フィルさん……僕は……エレナ・モンディアルは……フィルさんのことが……好きです……」

「変ですよね……元は男だった僕にこんな事言われても……迷惑ですよね……」

「エレナ……」

「えへへ……忘れてください。フィルさんのことも考えないで、本当にごめんなさい……」

僕はここにいるのが辛くなり、立ち去ろうとしたとき、フィルさんに腕を捕まれて……

「この早とちり……なに自分で勝手に締めてるんだよ。俺の気持ちも聞かずに」

「えっ……？」

「俺はな……好きでもない奴に、お節介をするほどフェミストじゃないっての。少しは気付いて欲しかったな」

「でも……僕は元々は男ですし……」

「エレナ、それだったら、性転換した人は一生一人で暮らせっていうのか。それは違うだろ」

「はい……」

「俺はな……お前自身が好きなんだ。だから……」

そう言ってフィルさんは、僕を自分の方へ抱き寄せ……

「お前さえ良かったら……俺と付き合って欲しい……これが俺の偽りない気持ちだから……」

「フィルさん……僕……僕……嬉しいです」

僕は瞳を閉じ……

フィルさんは僕の頬に手を添え……

そして……

僕たちはキスをした。

それは気持ちが通じ合った瞬間だった。

＊　　＊　　＊

一週間後

俺とエレナはクラナガンにある遊園地に来ていた。
せっかく恋人同士になったのだから、どこかに遊びに行きたいという、エレナの希望を叶えてあげたくて色々探したんだけど、やっぱり定番の遊園地だろうということでここにきていた。

「平和になったからですかね。人が結構来てますね」

「そうだな。特にカップルが多いみたいだな」

俺はそう言ってから、自分たちもそうだと言うことに気づいた。
見ると、エレナも同じ事を思ったのか、頬を赤らめて立ちつくしていた。

「さ、さて……何から乗るか？」

照れてしまいそうになるのを誤魔化しながら、俺はとりあえず近くにあるアトラクションに向かって歩き出した。

すると、エレナが俺の服を掴んで……

「あ、あの……て……」

「手？」

俺が首をかしげていると、エレナはそっと手を差し出して小さく頷いた。

そっか……

カップルで遊園地と言えば、手をつなぐのが定番だったな。

俺は自分の迂闊さを嘆きながら、エレナの手を取ると、彼女はギュッと握りかえしてきた。

改めてこうすると恥ずかしい気もしたが、彼女が喜んでくれればいいかな。

俺たちはまず、コーヒーカップで楽しんだ後、定番のジェットコースターにも乗ったんだけど、俺もエレナもこの程度のスリルでは全然物足りなかったので、もう一度乗ったときは最前列で楽しんだ。

それで丁度良いくらいだったかな。

お昼になって、俺たちはパーク内のレストランで食事をすることになったんだけど、丁度カップル限定のストロベリーパフェがあったので、それを頼むことにしたのはいいんだけど……

「スプーン……一つしかないな」

「そうですね……」

そう、渡されたスプーンは一つしかなかった。
このメニューはこうやって食べるのが正式な物らしい。
それを確認しなかったのは迂闊だったよ……

「あ、あの……フィルさん……あ、あーん……してください」

「えっ……？」

いつの間にかエレナがアイスをすくったスプーンを差し出していた。
まさかこんな行動するとは思わなかったな。
エリオの時は、恋愛のれの字も知らない、まっすぐな奴だったんだけど、女の子になってからそう言うことを覚えたんだな。
せっかくエレナが精一杯してくれてるんだ。
俺もそれに応えてやらなきゃな……

「あ、あーん」

「ど、どう……ですか」

「甘いよ……色んな意味で……」

「今度は……フィルさんが……してくれませんか」

今度は俺がエレナに食べさせてあげると、またエレナがといった感じで、この繰り返しで俺たちはパフェを完食した。

なんかあまり味を感じなかったよ……

＊　　＊　　＊

「うわー　高いですね」

「中々良い景色だろ」

夕方になって、俺たちは観覧車に乗ってクラナガンの景色を楽しんでいた。

こうやって見ると本当に綺麗だな。

でも、景色よりも、俺はエレナの方に見とれていた。

エレナの外見は、贔屓目なしで可愛いと思う。

背も１６０ｃｍ近くあって、スタイルも平均以上の物になっている

し、何よりエレナが女性として自覚したことで、雰囲気がすごく柔らかい物になった。

それがエレナの魅力になっているのかもな。

「どうしたんですか？　僕の顔をじっと見て」

「いや……エレナ、すごく可愛いなって思ったんだよ。女性としての魅力が出てきたのかな？」

「そう思えるのでしたら、フィルさんのおかげですよ。好きな人にそう思われたいから、僕も少しずつ頑張っているんですよ」

「そっか……」

「そうですよ。だから……」

そう言ってエレナは俺の顔を上目遣いで見つめ……

「僕を女の子として見てくれるなら……キス……して欲しいです」

「ここでか……？」

「はい……嫌……ですか？」

「……へたしたら……キスで収まらないぞ……」

「……いいですよ。僕をフィルさんの……本当の彼女にしてください……」

「その言葉の意味……分かっているのか」

「分かってますよ……僕を……抱いてください……」

エレナの目は真剣そのものだった。
エレナは全てを理解した上で、言っているんだ。

「エレナ……」

「あっ……」

観覧車が頂上に来ると、少しの間動きが止まり、そして俺たちは、観覧車の中でキスを何度も繰り返した。

＊　　＊　　＊

観覧車を降りた俺たちは、クラナガンの町中に戻り、一つのホテルを見つけ、そこに入ることにした。

「本当に……良いんだな。今ならまだ止められるぞ……」

「フィルさん……ここで止められる方が……辛いです……抱いてください……いっぱい……」

俺は覚悟を決め、ベッドに押し倒し、エレナの唇にキスをすると、最初はフレンチキスだけだったけど、次第に舌を入れたりして、お互いに求め合い、その繰り返しをしていると、銀色の糸が出来るほどになり、気持ちも段々高ぶってきた。

エレナの上着を脱がし、ブラの上から胸を何度も揉みし抱き……

「あ……ん……なんか……ビリビリってきます……」

エレナの息づかいが荒くなるのを感じると、ブラを外し、今度は直接触ると……

「んんっ……さっきより……変な感じがします……なんか……あん……自分が自分でなくなりそうです……」

「その感じに身を任せ、気持ちよくなってしまえばいいよ。その方が俺も嬉しいよ……」

「フィルさん……はい……」

そして、俺たちは全ての衣類を脱ぎ去り……

「フィルさん……僕……こういったことは、本当に初めてなんです。男としても女としても……だから……その……」

「優しくするよ……エレナ」

「はい……お願いします……」

俺たちは手探りで、お互いの身体を求め合い……

エレナは次第に、女としての感覚を受け入れ……

深夜になるころには、何度も求め合うようになり……

その行為は、朝まで途絶えることはなかった。

＊　　＊　　＊

3年後

六課解散後、俺はフェイトさんの元で執務官補佐をした後、一年後何とか試験を合格をした。

正直、ギリギリだったので、受かるとは思っていなかった。

だけど、エレナが一生懸命俺を支えてくれたおかげで、プライベートでも仕事でも頑張ることが出来たんだ。

エレナの方は、戸籍が無かったので、一旦除籍という形を取ったんだけど、レジアスの親父さんと俺がその……裏工作を使って、エレナの戸籍を作成して、もう一度管理局に入り直しをしたのだ。

本当は戦いに身を置いて欲しくなかったんだけど、エレナの強い希望で、俺の補佐という形でやっていくことになった。

それに伴い、ストラーダの方も若干改造することになった。
あのままだと男性の骨格に合わせて作られているから、扱いきれない物になっている。
だから、デチューンをして使いやすく改造し直した。
カラーもエレナの希望で、青基調から赤基調になった。

この3年でエレナは、色々女性として身につけていったし、魅力も出てきて、俺がドギマギしっぱなしなんだけど……

「フィルさん、せっかくお休みなんだから、僕、クラナガンに行ってみたいなぁ♪」

この僕という一人称だけは、なぜか直せないでいる。
最初は違和感があるから、直してもらおうとしたんだけど、どうしても直らないので、もうこのままで良いかということで、このままにしている。

それと若干だけど、甘える仕草も出てきた。
俺としては嬉しいから、全然問題ない。

「じゃ、せっかくだからサンダーに乗って、クラナガンに行ってみ

るか？」

「やった！！　それじゃ、今日はこの雑誌に載っていたアイスクリームを食べよう」

「いいね。じゃ、早速行くか」

俺たちはサンダーで、クラナガンに行くことにしたんだけど、エレナの奴が自分の胸を押しつけるように、俺にギュッと抱きついてきた。

「エレナ……頼むから運転中はあんまり抱きつくなよ。その……いろいろきついから……」

「いやです。僕のことをいっぱい感じてほしいんだもん。だから、フィルさんのぬくもりをいっぱい感じるんだもん♪」

「……ったく……いくぞ、エレナ」

「うん♪」

スカリエッティに人生を持て遊ばれてしまったエリオ……

女性にされ、色々苦しんだけど、エリオいやエレナは、やっと心の底から笑顔が出るようになった。

だから俺はそんなエレナの笑顔を、これからも守りたい……

どんな形だって、本当に愛し合えるなら、きっと乗り越えていける……

それが真実の愛だから……

# ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　カリム（前書き）

久しぶりのＲｅｍｅｍｂｅｒの更新です。
原作キャラでのｉｆ　ｅｎｄｉｎｇは本当に久しぶりになります。
復帰してから初の恋愛話になりますが、お楽しみ頂ければ幸いです。

# if ending カリム

「ふぅ……ようやく抜け出せました」

連日の仕事で休む暇も無し、これでは息が詰まってしまいます。
シャッハも真面目なのは良いのですが、もう少し肩の力を抜いて欲しいです。

いつもいつも、教会で仕事ばかりしていたら息が詰まってしまいます。
それに……

申し訳ないと思いましたが、幸いシャッハは今日はセインとお出かけをしていていません。
このチャンスを逃す手はありません！！

「でも、教会から抜け出したのは良いのですが……一体どうしたらいいでしょうか？」

正直な話、教会の外に一人ではあまり出たことがない。
一体どうしたらいいのだろう……

そんなことを考えていると、一台のバイクがこちらにやってきた。

「……あれ？　もしかして……騎士カリム……ですか？」

「フィル……？」

それはＪＳ事件以来、会っていなかったフィルとの再会だった。

「一体どうしたんですか？　こんなところで、お付きの人もいないみたいですけど？」

「えっと……それは……？」

ま、まずいです。
もしフィルに私が教会を抜け出したと知られたら、きっと教会へ連れ戻すに決まっています。

せっかく苦労して抜け出したのに。
しかも、シャッハがいないチャンスなんて、滅多にないのに……。

「……なるほどね……」

フィルがため息をつきながら、言葉を吐く。
これは……完全に感づかれました……
これで……また教会に戻されてしまいますね……

「……あの、もしよかったら、俺と一緒に行動しますか？」

「えっ……？」

今、何と言ったのですか……
一緒に行動しよう……確かにそう言いました。

「……仕事が辛いのは何となく分かりますからね。たまには息抜きも必要でしょう……それに……」

フィルは少しおどけてウインクをしながら……

「世間のことをあまりご存じでないお姫様に、少し社会勉強して貰うのも悪くはないですからね♪」

＊　　＊　　＊

「あの……それでどこに連れてってくれるんですか？」

結局私はフィルのバイクに乗せられ、一緒に行動することになった。
正直フィルがこんな行動をするとは思わなかった。
私はてっきりすぐに教会に強制送還すると思っていたから……

「うーん……一日しかありませんから、そんなに遠くには行けませんけど、クラナガンの繁華街でしたら大丈夫でしょう」

「繁華街ですか……いいですね。私も行ってみたいと思っていました！！」

「それでしたら、少し飛ばしますのでしっかり捕まってくださいね」

「はい！！」

私はフィルの身体にしっかりしがみついて……

「あ、あの……騎士カリム。そんなにくっつかなくても……大丈夫ですよ。それに……」

「それに……何ですか？」

「その……言いづらいのですが……その……胸が……」

「あっ……」

た、確かにこれですと、フィルの背中に私の胸を押し当ててるようなものです……
ですけど……

ぎゅっ……

「え、えっと……騎士カリム……？」

「カリム……」

「えっ……？」

「今日くらい私のことは呼び捨てで呼んでください。今の私は聖王教会の騎士ではないんですから……」

今、この時だけでも良い。
普通の女性として謳歌してみたい。

「……前も言いましたけど、俺、女性を呼び捨てにするの慣れてないんですよ」

「それでしたら、フィルも私で慣れていきましょう。今日はその練習だと思ってください」

フィルは一瞬きょとんとしていたが……

「……分かりました。それでは今日はそう呼ばせて貰いますね。カリム」

「はい！！　あと、敬語も禁止ですよ♪」

「……えっ、そ、それは……ちょっと……」

「良いんです！！　思いっきり楽しみたいんです！！　だからお願いします！！」

「……分かった。カリム。今日だけだからな……」

「はい♪」

フィルはバイクのスロットルをさらに上げて、クラナガンへ全速で走らせた。

＊　　＊　　＊

「うわぁ……色んなものがありますね……」

「ここは、クラナガンでも有数のショッピングモールだからな。洋服だけでなく、アミューズメントも充実しているんだ」

「アミューズメント……ですか？」

「ああ……ゲーセンとかもあるし、レストランとかも入っているから、色々と楽しめると思うよ」

フィルの説明に私は心がワクワクするのを止められなかった。
今まで私は教会領のなかのお店とかなら行ったことがあるけど、こんなに遠くまで一人では来たことがなかった。
というより、私の場合立場上自由が利かず、どこに行くにしても制約が多かったのだ。

「それじゃ、カリムはどこに行ってみたい？」

「出来れば……全部回ってみたいです」

「了解だ。それじゃ大分気合い入れないといけないが、覚悟は良いな」

「はい！！　体力ならありますから任せてくださいね」

＊　　＊　　＊

「ここは……？」

「ここはゲームセンターだな。色んなゲームがあるだろ」

「ええ……でも、ちょっと騒がしいのですね」

「まぁ……ここは若者が多く集まるしね。でも、大人の人も来たりしているよ」

「そうなんですか……あっ……あれは何ですか？」

私が気になったのは、大きな箱形の機械だった。

そこにはカップルや若い女の子達がいっぱい集まって何かをしてい

る。

「ああ……プリクラだな」

「プリクラ……？　それは何ですか？」

「簡単に言うと、写真を撮ってそれをシールにして遊んだりするんだ。ほら、こんな感じかな」

フィルが見せてくれたのは、手帳に貼っていた数多くの小さな写真だった。

「これが……そうなんですね。でも……ずいぶん女性と撮っている写真が多いんですね」

「えっ……まぁ……殆どがティアやスバル達と写っている物ばかりだけどね」

そうは言うが、その他にもなのはさんやフェイトさん、さらにははやて達と写っている物まであった。

「ずいぶんおもてになるんですね。フィルは」

「もててないって……現にフリーなんだぞ俺は」

「そう……なんですか？」

「そう言うこと。今日だって一人寂しくバイクを走らせていたんだからな。まさかあそこでカリムと会うとは思わなかったけどね」

「ふふっ……確かにそうですね」

でも、もしあそこでフィルに会わなかったら、もっと早く教会の方に連れ戻されていただろう。
聖王教会だって私が黙っていなくなったらすぐに探し出す。

「よかったら……一緒に写真撮ってみる？」

「良いんですか。私で？」

「せっかく一緒に遊びに来たんだ。何か思い出を残さなきゃね」

まさか、フィルの方から言ってくれるとは思わなかった。
私は年上と言うことと恥ずかしさで、自分からは切り出すことが出来なかった。
だから、フィルの言葉は本当に嬉しかった……

「そうですね。それじゃ、お願いします！！」

フィルと私はプリクラの機械に行き、一緒にプリクラを撮ることになった。
私は初めてなので、操作はフィルにお任せすることになった。

「えっと……これはね、3種類撮ることが出来て、その後色々自分で書くことが出来るタイプなんだ」

「書くって……？　画像にですか？」

「うん、簡単に言うと合成が出来ると考えてもらえればいいかな。まずは写真を一緒に撮ってからだね」

その後私達は3回色んな表情の写真を撮った。
普通にピースしているのや、ふくれっ面の物や、後は少しだけ寄り添った物も撮ったりした。

「うん……上出来かな」

「うわぁ……すごいんですね」

フィルが渡してくれたのは、さっき撮った私達の写真だった。
写真には色々落書きをしてあって、とてもカラフルな物になったと思う。

一枚だけ私が全部やってみたのがある。

それには……

「その……なんだ……これは結構恥ずかしいかも……」

「良いじゃないですか。これは私の素直な気持ちですから♪」

『大切な人』

それがフィルに対する私の気持ちだった。

「まぁ……なんだ。俺もカリムのことは……大切な友人だと思っているしね」

「……そう……ですか」

「カリム？」

「何でもありませんよ。さぁ、次の所に急ぎましょう。時間は限られているんですから！！」

「お、おい！！　カリム！？」

そうだ。

彼にとって私は友人の一人にしか過ぎないんだ。

だから、この気持ちは私の胸の内に仕舞うことにしよう。

だけど……

今日だけは……

今日だけは、貴方を好きで良いですか？

＊　　＊　　＊

「うーん……今日は色々回りまくったな」

「そうですね。こんなにはしゃいだのは生まれて初めてです」

「そっか……それは良かった」

あれから私達はウインドゥショッピングをしたり、喫茶店で甘いものを食べたりした。

喫茶店では、おもいっきってカップル限定のメニューを頼んで、それを食べさせあったりした。

フィルは終始顔を真っ赤にしていたけど、それでも最後まで付き合

ってくれた。
色んな所を回って夜になり、今はクラナガンの海が見える公園に来て夜空の星を眺めている。

「本当に……本当に楽しかったです……今日は……ありがとう。フィル」

「俺も楽しかったよ。でも、カリムがあんなにはしゃぐ姿は見たこと無かったよ」

「そう……ですね。今まで私は……ずっと自由はなかったですから」

「カリム……」

そう……
私のレアスキル、プロフェーティン・シュリフテンを持っているため、私には自由が殆ど無かった。

確かに教会領の中ではある程度うごけたけど、それでも外に出るにはかなり制約があった。
この能力があるため、色んな犯罪者から狙われてしまっている。
だから、一人では外に自由に行くことも許されない……

「フィル……今日は……本当に楽しかった。そして……」

「そして……普通の女としているのも……今日でお終い……かな」

「えっ……？」

「……何で、私が教会を抜け出したか、分かりますか？」

「いや……正直分からないかな」

これだけは言っておきたいの。

これから言うことは、フィルにとって重荷になってしまうかもしれない。

だけど、これ以上自分に嘘をつくのは嫌だから……

「実は……私……」

「……結婚させられるんです……」

＊　　＊　　＊

「えっ……？」

カリムの言葉に俺は驚きを隠せなかった。
カリムの処遇は、今までのつきあいと今日の話で分かっているつもりだった。
だけど、まさか……

「それ……自分の意志なの……？」

「……いえ、教会側が決めた政略結婚という奴ですね……能力者同士結婚すれば、その能力を子々孫々にまで残せるって……そんな理由です」

「馬鹿げてる！！」

俺は思いっきりフェンスをけっ飛ばす。

「フィル……？」

ふざけるなよ。

聖王教会、どこまで思い上がった考えしてやがるんだ。

聖骸布を盗まれたことを隠蔽しただけでは飽きたらず、今度は一人の女性の人生も奪う気か……

「俺は……俺は、カリムにこんな不幸な未来を歩ませるために、ＪＳ事件を戦ったわけじゃない！！」

未来でも、この人は生き残った俺たちを必死でサポートしてくれ、そして、人々にもその優しい笑顔で生きる希望を与え続けてきた。

だけど……

それもクアットロが聖王教会に総攻撃をかけたときに……

カリムも……一緒に死んでしまった……

「今度こそ……今度こそ……自分の好きな人には……幸せになって

欲しかったのに……」

「えっ……？」

「ごめん……こんなこと……言うつもりは無かったんだ……でも……」

「そんな泣きそうなカリムの目を見ていたら……俺まで……辛いよ」

「フィル……」

カリムは必死で、これはどうしようもないんだ、仕方がないんだと思いこもうとしている。
そんなのあまりにも悲しすぎる……

「私だって……私だって……大好きな人と……フィルと一緒になりたい……」

「カリム……？」

「私は……貴方を……フィル・グリードのことを愛して……います……」

「！！」

「分かっています……こんなことを言っても、貴方には迷惑なのは……でも、どうしても伝えたかったんです」

カリムはその場にしゃがみ込み、とうとう泣き崩れてしまった。
まさか……カリムが俺のことを思っていてくれたなんて……

＊　　＊　　＊

とうとう言ってしまった……
こんなことを言ったってフィルにとって迷惑なだけなのに……

これで後悔はない。自分の気持ちを全部伝えられたから……

でも……でも……本当は……本当は……自分の好きな人と添い遂げたかった。
愛する人の温もりを感じたかった……

だけど、それは叶わない望み……

せめて今日の思い出を胸に、生きていこう……

「迷惑なわけ……ないよ。俺も……同じ気持ちだから……」

「フィ……ル……」

「だから……」

そう言ってフィルは私を自分の方へ力強く抱き寄せる。

「せめて、俺の前だけで良いから、悲しみを抱え込まないで……自分の愛する人が悲しんでるのなんて……辛いから……」

「フィ……ル……私は……私は……」

「今は……思いっきり……泣いて……ね」

「う……あああ……ぁぁぁぁ……ああ……」

もう、私には涙をこらえるのは無理だった。

フィル……

貴方の優しさ、心の芯まで伝わります……

だから、その優しさに甘えさせて貰いますね……
しばらくの間、私はフィルの胸の中で思いっきり泣いた……

そして……

「フィル……」

私とフィルは、互いの瞳を見つめ合い……

「お願い……キス……して……」

やがて、どちらからともなく……

お互いの唇と唇は……

それぞれの存在を確かめ合うように触れあった……

＊　　＊　　＊

「なんか……恥ずかしいですね」

「そう……だな」

「……でも、それ以上に温かいんですよ……好きな人と……こうして温もりを感じられるんですから……」

カリムは俺の肩に自分の身体を預けてきた。
こうしていると、カリムの気持ちが伝わってくる。

「あ、あのですね……その……」

カリムは顔を真っ赤にしながら、何かを言おうとしている。

「どうしたの……？」

「……今日は……」

そして、カリムは意を決し……

「今日は……帰りたくない……です」

＊　　＊　　＊

「本当に……いいんだな」

「はい……政略結婚なんかで、私の……大切な物を奪われたくないです。初めては……大好きな人と……結ばれたいですから」

「カリム……」

あの後、俺たちはクラナガンのホテルに泊まり、お互いにシャワーを浴びた後、今はこうしてベッドに座って寄り添っている。

カリムの髪をそっと撫でると、カリムも眼を細めて俺に甘えてくる。普段は年上の綺麗なお姉さんなんだけど、こうしていると可愛いという感じがする。

「フィル……」

カリムは潤んだ瞳で俺のことをじっと見つめる。
そんなカリムの瞳に、俺も吸い込まれるようにキスをする……

「んっ……んんんっ……」

最初は舌を絡ませると、びっくりしてしまっていたけど、段々こちらの舌に合わせるようになり、何度も繰り返している内にカリムの方から求めてくるようになった。

キスが終わった後は、お互いの間に愛の証として、銀色の糸がつながっている。

「キスって……こんなに気持ちいいんですね……」

「そうだな……でも、それは、気持ちがつながっているからじゃないかな……そうでないと不快なだけだし……」

「ふふっ、そうですね……ねぇ、これだけ……なんですか？」

「まさか……」

俺はカリムの期待に応えるように、カリムを押し倒し、上着を脱がし、下着も取り、その綺麗な胸に触れる……

「あっ……んんん……ふぁぁぁ……」

「……怖がらないで……その感覚に……」

「でも……こんな感覚、初めてなんです……なんだか、自分じゃなくなる気がして……」

「大丈夫、俺がしっかり抱きしめてるから……ね……」

俺の言葉に安心したのか、カリムはギュッと抱きついてきた。

「お願いです……これ以上は……もう……」

「ああ……カリム、カリムの初めて……もらうね」

「はい……私の初めてを……貰ってください……」

そして俺たちは月明かりが照らす部屋で……

お互いが結ばれ……

その後も、またお互いを求めて、何度も温もりを感じ合い……

それは数時間繰り返し……

身も心も完全にとけあった……

＊　　＊　　＊

半月後

俺はフェイトさんとティア、そしてレジアスの親父さんの力を最大限に使い、聖王教会の膿を全部調べ上げた。特に親父さんはものすごい乗り気で、『聖王教会の弱点を徹底的に調べ上げてやる』と、部下を総動員して徹底的に調べてくれた。

オーリス姉もカリムのことを聞き、同じ女性として道具扱いは絶対に許さないと、張り切って調べてくれた。

その結果、カリムを政略結婚に追い込もうとしていた一派の事を完全に調べ上げ、さらに隠蔽していた聖骸布のこともフェイトさんとティアが見つけてきてくれた。

この一件は知ってはいたけど、証拠不十分でどうしようもなかったので、証拠を見つけてきてくれた二人には本当に感謝だ。

これが決定的な一打となり、一派は完全に崩壊し、結婚のことも破談となった。

「よかったな、これで俺は用済みかな……」

「何言ってるんですか……私の大切な物を奪っておいて、それは無いんじゃないですか……」

「冗談だよ。それだったら、あの時抱いたりはしないから……」

「んもう……その冗談はタチが悪いですよ……」

カリムは頬をふくらせ、私、怒ってるんですよとアピールしている。でも、そんなカリムもなんか可愛く見えてしまう。

「なんで笑ってるんですか……私、怒ってるんですからね」

そう言っても本気で怒っているわけではない。

「だったら……どうしたら、許してくれる？」

答えは分かっている。
だけど、あえてカリムに聞いてみる……

「……それは、分かってるでしょう。フィル……」

「じゃ……」

そして、俺はカリムの唇にキスをする……

「……これだけじゃ……いや……」

「後は、夜になってからね……というか俺の理性が持たん……」

「求めてくれても……いいのに……」

「一応仕事でここには来たから……教会内でしたら、さすがにまずいだろう……」

「……だったら、もう一度キス……して。そしたら、夜まで頑張るから……」

実は、あの夜から俺とカリムはずっと俺の部屋で住んでいる。
今でこそ教会に戻っているけど、事件が収まるまでは、ずっと俺の部屋で過ごしていたのだ。

半月後、無事事件は解決したのだが、その後もカリムは教会領には戻りたくないと言い、仕方がなく俺の部屋で同棲という形を取っている。

だけど、クラナガンとここではかなりの距離がある。
だから、これは特別に許可を取って、クラナガンの俺の部屋とここをポーターで繋いだのだ。

そうしないと教会には戻りませんと言い始めてしまい、シャッハも俺も困り果ててしまったのだ。
今もシスター・シャッハはカリムに振り回されている。

「……夜、覚悟しろよ……火を付けたのは、そっちなんだからな……」

「望むところですよ。今日はいっぱい抱きしめてくださいね♪」

＊　　＊　　＊

「はい、フィル。あーんしてください」

「……やっぱ……しなきゃ駄目か」

「はい♪」

カリムが定時で仕事を終わって、すぐに夕御飯の支度をしてくれた。
しかも、その料理の内容は、うな重に肝すい、レバニラ炒めとどう考えても精力増強料理でしょう！！

「……あの……一人で食べられるから……ね」

「だぁーめ。こうして食べて貰うことが嬉しいんですから♪」

カリムは俺の隣に座って箸におかずを取って、俺にあーんと言ってさっきから食べさせてくれていた。
何度か良いよと言ったけど、その度に泣きそうな顔をしてしまい、ついつい俺も食べさせて貰ってしまっていた。

「美味しい……ですか。フィル」

「美味しいよ。カリムって、この半月で本当に料理がうまくなったよね」

実はカリムは事件が落ち着くまでの間、オーリス姉やはやてさんから料理を教わっていたりしていた。
特にはやてさんは、お姉さんのように慕っているカリムに料理を教

えられると言うことで、張り切って教えてくれた。

「まだまだ、はやてやフィルには及びませんけどね」

「そんなこと無いよ。こうして好きな人に作ってもらうとより美味しいよ」

「ありがとう……フィル」

こうして、カリムの手料理を食べた後、その後は……その……カリムも一緒に食べてしまった。
やっぱり、あの精力料理を食べ過ぎてしまったせいかな……

＊　　＊　　＊

3年後

「フィル……何見てるんですか？」

「ああ……ちょっと、結婚式の写真をね……」

あの事件から2年、俺とカリムは同棲を続けたんだけど、聖王教会とレジアスの親父さんがいい加減に一緒になれと何度も言われてしまい、俺たちも丁度良い機会だと思い結婚に踏み切ることにしたのだ。

結婚式は親父さんが陣頭指揮を取り、とんでもない規模の式になってしまった。

聖王教会のメンバーだけでなく、元六課メンバーが全員集まり、忘れられない式になった。

「カリム……今、幸せかい」

「当たり前ですよ。だって……こうして、愛する人と一緒にいるんですから……」

未来でたった一人で、俺たちを支えてくれた気丈な女性……

だけど、本当は誰よりも脆く、弱い女性だった……

その女性は、一度は自らを殺そうとしたけど、幸せを手にした……

そんなカリムを俺は一生支え続けたい……

二人の愛は永遠なのだから……

# if ending シャッハ（前書き）

この話は、ラモン先生の活動報告にありました原案を元に執筆してみました。

## if endingシャッハ

「むぅ……」

最近、恋人であるフィルがかまってくれません。
確かに仕事ですから、騎士カリムと一緒にいるのはしょうがありませんよ。
だけど……

「フィル、今日は何の飲み物を作ってくれたんですか」

「今日は、アールグレイの良いのが入りましたから、紅茶と一緒にゼリーも作ってみましたよ」

こんな感じで、仕事の時だけでなく、騎士カリムと一緒に過ごしていることが多くなっている。
しかも、騎士カリムも良い感じの雰囲気を出しているし……

「私って……こんなにヤキモチ焼きだったかしら……」

こんなんじゃ、フィルに嫌われてしまう……
フィルならそんなの気にしないかもしれないけど、でも……

そんなことを考えて廊下を歩いていたら、なのはさんとフェイトさん、そしてはやてがこちらに向かって歩いてきていた。

「あれ、シャッハやないか」

「はやて……？」

「お久しぶりですね。シスター・シャッハ」

「なのはさん、それにフェイトさんまで……。今日は一体どうしたんですか？」

この3人がそろうなんて、相当珍しい。
いったい何の用があって来たのだろう？

「えっと、実はフィルにちょっと聞きたいことがありまして……」

ピク

「えっと……どのような用件ですか……」

こらえろ……なのはさん達は仕事でここに来たんだ。
別にフィルに、こなかけに来たんじゃないんだ……

「実は私が担当している案件で、どうしても分からないことがありまして、それをフィルに調べて貰っていたんです。今日はそれを取りに来たんです」

「それで時間があったら、フィルとお茶でもしようかと思い……ま…し…」

＊　　＊　　＊

「ほほぅ……それはそれは……」

な、なんや……。シャッハの様子がめっちゃおかしい。
特にフィルの名前が出たところから、様子がものすごくおかしかった。

そう言えば最近シャッハ、フィルと会う機会がないってぼやいていたかも……

「お、おちついてな……シャッハ。私らは、シャッハからフィルを取ったりせえへんから！！」

「そ、そうですよ！！　シスターとフィルのことは私達も知ってるんですから！！」

「ですから、落ち着いてください。シスター・シャッハ！！」

結局、シャッハが落ち着いたのは、それから１０分後のことだった。もう、生きた心地せえへんかったわ……

「でも、本当にどうしたんですか。以前でしたら、こんな事くらいで動揺なんかしなかったのに……」

「そうやで……フィルとシャッハが付き合ってるのなんて、もうみんな分かってるんやからな……」

「シスター……もしかして……フィルとうまくいってないんですか……」

フェイトちゃんが言った次の瞬間、シャッハは……

「ふぇ……ふぇえええええええん！！」

その場で大声で泣き始めてしまったのだ……。

＊　　＊　　＊

「なるほどな……最近、フィルは騎士カリムと付きっきりというわけなんやな……」

シャッハから事情を聞いてみると、最近フィルは仕事がすごく忙しくて、中々会う時間が取れない。
しかも、騎士カリムと一緒にいることが多く、その時間がここんところ多くなってきている……か……

「あのな……そんなに心配やったら、コスプレでもしてフィルの部屋にでも押しかけてみいや！！」

「コスプレ……って、えええええええええ！！　そ、そんなの恥ずかしくて出来ませんよ！！」

「あの……シャッハ、こんな事言いたくないけど、このままじゃ、フィル誰かに取られちゃうよ……」

ナイスやフェイトちゃん。
今はシャッハの心を押す手助けが少しでも欲しいんや。

「シスター……はやてちゃんの言ってることは、ちょっと過激かもしれないけど、それでも、たまには……良いと思いますよ」

「なのはさんまで……」

「シャッハ、フィルの好みなら六課にいたときからのデータで熟知済みや。それでも、やらへんか……」

シャッハの目つきがかわり……

「はやて……」

「な、なんや……！？」

「その話、嘘ではないんですね……」

シャッハの私の手を握る力がものすごく強い。
痛い、いたい！！　リンゴを片手で潰す力で本気を出されたら、私の手なんて簡単に粉砕骨折してしまう！！

「ほ、ほんまや……だから、その手を離してや！！　手が潰れる！！」

「あっ……す、すみません！！　つい……」

ようやく離してくれたけど、物凄く痛い……

「まったく……でも、本当にフィルのこと好きなんやね……なんか羨ましいわ」

「はやて……」

「シャッハ、私らが責任を持ってプロデュースするから、しっかりフィルのハート掴むんやで！！」

「はい！！」

こうして、シャッハのドレスアップ作戦が始まった。
最初は修道院服で行くと言っていたシャッハだったけど、そんなんじゃあかん。

私が責任持ってやるんやから、もっと強烈なアピールをせんと！！

そんなこんなで3時間、アン○ミ○ーズ風から、Ｐｉａキャ○風、さらには巫女さんから、フリフリのドレスまで試してみた。

そして、決まったのが……

「うわぁ……よく似合ってますよ。シスター・シャッハ」

「うん、本当にお似合いですよ」

「そうやろそうやろ♪」

メイド服とおまけに猫耳を装着したメイドシャッハ　（猫耳ｖｅｒ）だった。

「は、はやて……さすがにこれは恥ずかしいですよ！！」

「シャッハ、フィルの好みはこれがど真ん中や！！　メイド服にはマジで萌えを感じていたんやで！！」

「そ、そうなんですか……？　でも……」

「ああ！！　もう！！　シャッハ、恥ずかしがってないで、さっさとフィルの部屋に行く！！」

ウジウジしているシャッハを私達3人で背中を押しながら、フィルの部屋に強制連行することにした。
実は、シャッハと付き合うようになってから、フィルはこの聖王教会の領内に家を構えている。

だから、フィルの家に行くのにそんなに苦労はなかったのだ。
幸い、フィルは未だに仕事中だ。

その間にフィルの部屋に行って待機してればいい。

＊　　＊　　＊

「ふぇぇ……はやての言葉に乗せられて、こんな格好してしまったけど……」

鏡を見ていないけど、正直恥ずかしさで顔が真っ赤になっているだろう。
でも……

「これで……フィルが少しでも興味を持ってくれれば……」

そんなことを考えていたら……

ガチャ

玄関の扉が開く音がする。

「い、いよいよ……ね……」

ドクンドクン……

心臓がさっきから鼓動が早い。

「ふぅ……今日も疲れたな」

来た！！

フィルが部屋にやってくる！！

そして……

扉が開かれ……

ガチャ

「お、お帰りなさいませ……ご主人様……」

＊　　＊　　＊

正直俺の頭の中は真っ白だ。
部屋に戻ってみたら、いきなりシャッハがいて、しかも、とんでもない格好をしているではないか。

フリフリの青いメイド服を着て、さらになぜかネコ耳まで付けている始末だ。
シャッハもこの格好が恥ずかしいのか、顔だけでなく耳まで真っ赤になっていた。

「あ、あの……シャッハ。何でそんな格好をしてるの？」

「……って……」

「？」

「最近……あまりプライベートで一緒に会うことが出来ないし、し

かも騎士カリムとずっと一緒にいるし……それがすごく不安になって……」

「シャッハ……」

馬鹿だ俺は……
シャッハがこんなに寂しい思いをしていたのに、まったく気づかなかったなんて……

これじゃ恋人として失格だ……

「ごめんな……全く気づかなくて……」

「いいんです。これは私の我が侭ですから……」

「シャッハ……」

シャッハの瞳が潤み、その瞳を見て、今何を求めているのか分かる。

「あっ……」

俺はシャッハの頬に触れ……

「フィル……私……」

そのまま俺たちはお互いの唇が近づき……

１０センチ……

５センチ……

２センチ……

そして……

ガチャ

「「！！」」

「フィル、こんな夜分にごめんなさい。この書類のことなんですけ……ど……？」

突然のカリムの乱入で、さっきまでの雰囲気は一気に吹っ飛んでしまう。

そして……

「もーーーーーーーーっ！！」

シャッハは、邪魔されたこともあって、涙目で大声で叫んでいた。

「……なんで……なんで……こうなるんですかぁぁぁぁ！！」

＊　　＊　　＊

「シャッハ……もう落ち着きなって……」

「だって……だって……なんであんなタイミングで乱入してくるんですか。あり得ませんよ！！」

騎士カリムの乱入があり、３０分くらい仕事の話をしていったが、帰った後シャッハの怒りは収まることが無く、１時間必死で宥めて、ようやく大分落ち着いてくれたのだ。

正直、あのタイミングはあり得ないでしょう。

まるで狙っていないとあんなにバッドタイミングにはならない。

「もう、忘れろって……今はこうして一緒にいるんだから……」

俺はシャッハを自分の方へ抱き寄せる。
シャッハの髪はショートヘアだけど、髪質がすごく柔らかくて撫でているだけで気持ちが良い。
本人はもっと長い髪にしたいらしいが、俺はこれでも充分に可愛いと思う。

「フィル……その……今日は、いっぱい……いっぱい抱いて欲しいんです」

「俺もシャッハをいっぱい抱きしめたい……」

俺たちはどちらからともなくキスをし、久しぶりにお互いを求めるのでキスも情熱的になっている。
普段ならシャッハからしてくることはないが、今日はシャッハの方から舌を絡めてくる。
キスが終わると、銀の糸がひくほど思いっきり求め合っていた。

「シャッハ……いいか……」

「はい……」

俺は、シャッハの上着を脱がし、ブラを少し乱暴にはぎ取り、その胸を両手で揉みし抱く。

「あっ……ん……はぁ……はぁ……」

「大丈夫か……シャッハ」

「大丈夫……です……むしろ、いつもよりふわふわしています……」

シャッハもどうやら気持ちよくなってくれている。

よかった……

こういう事は独りよがりは嫌だから……

そして、胸以外の全身も求め……

「お願い……これ以上は……切ない……です」

「ああ……いくよ……」

「きて……フィル」

こうして俺とシャッハは……

お互いの存在を何度も求め合い……

その度にベッドは激しくきしみ……

その行為は数時間にわたって繰り返された……

＊　　＊　　＊

一週間後

俺とシャッハは、今クラナガンのショッピングモールに来ている。
実は、先日のカリムのことを根に持っていて、それをカリムと会う度に黒いオーラを発していたのだ。

別に何かを言うわけではないが、カリムも会う度にシャッハのオーラを当てられたのではたまった物ではなかったらしく、気分転換に

二人でどこかに遊びにでも行ってきなさいと言ってくれた。

「シャッハ、それじゃどこに行こうか？」

「別に、どこでも良いですよ。こうして……」

ぎゅっ

シャッハは、俺の左腕にしがみつき……

「二人でいられるのなら……良いですから……」

「そっか……それじゃ適当なところに行ってみようか」

「はい♪」

＊　　＊　　＊

「あ、あの……シャッハ、マジでこれを食べるのか？」

「……たまには……してみたかったんです……」

目の前に置かれたのは、カップル限定のジャンボクリームソーダだ。
量的には1リットルくらいで、可愛い熊の頭の形をしたグラスにソーダが注がれていた。
ここまでは良いのだが……

「ストローが……つながっているとはな……」

ストローがハートの形をしていて、それは一つのストローとして形取られていた。

「これは、さすがにびっくりしました……」

シャッハも正直これは予想していなかったようだ。

「どうする……ストローをもう一本持ってくるか？」

俺はストローを頼もうとしたとき……

「いいです……こ、これで……一緒に飲みましょう……」

「い、いいのか……？」

「な、何度も言わせないでください！！」

結局、シャッハも俺も顔を真っ赤にしながら、ソーダを一緒に飲むことになった。

終始恥ずかしかったけど、これはこれで良い思い出かな？

＊　　＊　　＊

夕方になり、私達は海が見える公園に来ている。

ここで、私達は夕日を眺めながらベンチに座っていた。

「良い風ですね……」

「そうだな……」

さっきから心地良い風が、私達のほてった身体にとても気持ちよかった。

そして、ここから見える夕日が、心を穏やかな気持ちにさせてくれる。

「フィル……」

「んっ……？」

「こんな風に、のんびり出来る時間を、大切にしたいですね……」

「そうだな……それは俺も同じだ」

私達は平和を守る仕事故、いつ命を落としかねない……

だけど、こんな風な一時があるからこそ、戦っていられるのだ。

そして……

大切な人がいれば、私はいつでも還ることが出来る……

大好きなフィルの元に……

それが私の幸せなのだから……

# if endingアリサ（前書き）

今回の話は、本当に難産でした。
それでも、何とか形に出来ましたので、楽しんでいただければ幸いです。

# if ending アリサ

ＪＳ事件も無事解決し、六課メンバーは特に変わったこともなく穏やかな日々を過ごしていた。
しかし、その平穏も一つの通信で崩されることになる……

『……というわけで、本当に申し訳ないんだけど、誰か一人こっちに来て、護衛をお願いしたいの！！』

「せやかてアリサちゃん。知っとるやろ、管理外世界には事情がない限り手出しは出来ないことは……」

『その事は充分に分かってるわ。だけど、正直言ってあたしの所のＳＰだけじゃ心許ないのよ』

実は、アリサちゃんから通信は、とんでもない内容だった。
近々、アリサちゃんの会社で大々的なパーティがあるんだけど、その護衛をするＳＰのリーダーの鮫島さんが大怪我を負ってしまい、その穴を埋めるために、六課メンバーから一人貸して欲しいとのことだった。

「力を貸して上げたいのは山々なんやけど……六課メンバーは管理局の職員や。下手に個人に手を貸したりしたら……」

『……そうよね』

「……それでしたら、休暇中と言うことにして、その間にそちらの世界に行けばいいですよ」

「フィル、あんたいつの間に！？」

アリサちゃんと話していた為、フィルが部隊長室に入ってきたことに気づかなかった。
どうやらリインが部屋に通したようだ。

「済みません。話の腰を折ってしまって……。ですが、それでしたら、俺で良かったら力を貸しましょうか？」

『あれ、あんたは見ない顔ね。こないだの時も来ていなかったみたいだけど？』

アリサちゃんが、フィルを見て不思議そうな顔をしている。
そう言えば、フィルはこないだの海鳴任務には参加していなかったんや。

「あっ、そうでした。初めまして、自分は機動六課ライトニングスター所属、フィル・グリードです。失礼ですが、はやてさん達の友人ですか？」

『あたしはアリサ・バニングス。はやて達とは１０年来のつきあいをしてるわ。あんた以外のメンバーはこないだの時にあってるのよね』

「ああ……海鳴での任務の時ですね。そっか……あの時は……」

「あの時はユーノ君のことで、大変やったもんな、フィルは……」

フィルがあの時海鳴への任務に参加しなかったのは、ユーノ君を助けるためやった。

後からそれを聞いたときは、ほんまにびっくりしたんやで……

「ちょ、ちょっと……そのことは！！」

「大丈夫や。アリサちゃんはこの事を知ってるよ。大体のことは話してあるんや……」

『はやてからは大体のことは聞いてるわ。そっか……あんたがフィル・グリードか……へぇ、良い面構えしてるわね』

「ど、どうも……」

フィルはアリサちゃんの言葉にとまどいを隠せなかったみたいだ。
アリサちゃんって、はっきりと物言いするしな。
ティアナとはまた違うタイプやしな。

『照れるなんて、可愛いところあるのね』

「ちょ、ちょっと……からかわないでくださいよ。バニングスさん」

『アリサで良いわ。あたしもあんたのことはフィルって呼ぶから』

「俺はかまいませんが、でも、見ず知らずの女性に……」

フィルは、アリサちゃんのペースにすっかりはまっているみたいだ。
元々フィルは年上の女性に弱い傾向あるし……

『見ず知らずじゃないわ。はやてからあんたのことは聞いていたし、それにこうやって知り合いになったんだから、遠慮する必要は無いわ』

「は、はい……」

『うん……で、さっきの話に戻るけど、あんた何か策がありそうね……』

アリサちゃんはさっきとは違って、真剣な表情に戻っている。

「……これは、裏技になってしまうんですけど……」

「裏技って、何を考えてるんや？」

「はい、要するに管理局の人間としてではなく、休暇中に六課を離れるのなら、良いというわけです。休み中の行動は基本的にフリーなわけですし……」

「せやけどな……ポーターを使うには許可がいるんやで。いくら何でも……」

「ポーターは使いませんよ……」

「『えっ……？』」

ポーター無しでどうやって地球へ行くつもりなんや。
そんなこと、どうやっても不可能なはず……

「簡単な話です……俺のワープで……地球に行くんです」

「！！　そうか、フィルのワープなら距離は関係ない。相手の魔力、もしくは気配を知っていればその場に行くのは可能や！！」

「さすがに超長距離になりますから、かなり魔力を使いますけど、それでも行くことは可能ですよ。アリサさんの生体パターンは、もうインプットしましたから」

「あ、あんた……本当に何でもありやな」

もう、呆れるしかなかった。
次元跳躍まで可能って……とんでもないでほんまに……

『話は分かったわ。だけど、そいつで大丈夫なの？』

「その心配はないで。フィルは誰よりも強いで、なのはちゃんともガチで戦えるほどや」

「ちょっと！！　それは誇張しすぎですから！！」

『ふうん……はやてがそこまで推薦するのなら大丈夫そうね。じゃ、悪いけどパーティの前日に来て貰って良いかしら。一応テストしたいから』

アリサちゃんも、納得してくれたようで、フィルと話を始めている。

「……わかりました。よろしくお願いします」

「休暇の申請は心配いらへんで。その日を含めて４日間あたえたる。と言うより、やっとフィルの有給を消化できるわ。散々オーリス三佐から言われていて、頭を抱えていたんや……」

これで、これで……査察部からも、オーリス三佐からも叩かれないで済むわ！

『「あ、あははは……」』

そんなこんなで、アリサちゃんの護衛をフィルが担当することになった。

＊　　＊　　＊

「それじゃ、行ってきますね」

パーティ前日、俺はいよいよ地球へ向けて旅立つことになった。
本当は夜に来て欲しいとのことだったけど、長距離のワープはかなり魔力と体力を使ってしまう。
だから、早めに出て向こうで休息を取りたかったので、朝早く出ることにしたのだ。

「フィル、気をつけてね。アリサとすずかによろしくね」
「もし、向こうでお母さん達にあったら、よろしく言っておいてね」
「フィル、アリサちゃんには昨日のうちに伝えてあるから、ワープしても、どっきりするタイミングにはならへんで」
「助かります。ワープアウトしたら、お風呂中だったなんて洒落にもなりませんから……」

このワープの欠点は、場所ではなく相手の気配をたどって行くため、どんな状況か把握できない。
だから、昨日のうちにはやてさんに出発する時刻を伝えて、そう言ったトラブルを避けて貰ったのだ。

「確かにそんなことになったら、アリサちゃん、フィルのことをボコボコにしそうやな……」

「確実になりますよ。こないだ少し話しただけですけど、気の強い方だと言うことは分かりましたから……」

「ふふっ、それアリサが聞いたら、どうなるかなぁ～」

「フェイトさん、勘弁してくださいよ……」

間違いなく俺は、その場でフルボッコ状態になるな。
想像しただけでも恐ろしい……

「「「あははは！！」」」

「それじゃ……本当に行ってきますね。ティア達のことお願いしますね」

「大丈夫だよ。あたしからティアナ達には言っておいてあげるから」

実は、今日のことはティア達には話していない。
話したら、絶対ティアはついてくるって言い出すと思う。
心配してくれるのは嬉しいけど、ティアまで離れるわけにはいかないからな。

「じゃ、サポート頼むな、プリム」

《大丈夫ですよ。マスターは術のことだけを考えてください。細かいことは私がしますからね♪》

「すまないな……」

こうして、俺は地球に向けて旅立った。

＊　　＊　　＊

「さてと……そろそろのはずよね」

朝8時、昨日はやてから連絡があり、この時刻にあいつがやってくるからよろしくと言っていたけど……

確かに、いきなり現れて、身支度中でしたなんて言うことになったら、どっちも気まずくなってしまう。

しかも、はやての話で聞く限りでは、かなり生真面目だから冗談はあまり通じないみたいだしね。

そんなことを考えていたら、あたしの目の前で木の葉が揺れ、人影が現れた。

「すみません。遅れまして……」

「大丈夫よ。きっちり１０分前だから」

本当にこの青年は真面目なんだ。

この辺はうちのスタッフも見習って欲しい所ね。

「それでは、アリサさん、早速で済みませんが、先日言っていたテストを……」

「そんなに慌てないの。テストは昼に行うから、今は身体をゆっくり休めて。あんた魔力をかなり使って万全じゃないでしょう」

「それは……」

「だから、今はきっちり休んで、あんたの本当の実力を見せて貰うからね！！」

「……分かりました。それではその時に」

ふうん……

はやてが言っていたように、フィルって本当に真面目なんだ。

はやてだけじゃない。なのはもフェイトも本当に高い評価をしている。

なんか、お昼のテストが本当に楽しみね。

＊　　＊　　＊

「はあああああ！！」

「うあああああ！！」

あたしは信じられない光景を見ている。

テストで、フィルの格闘能力を見ているのだけど、鮫島以外のＳＰが次々と投げ飛ばされているではないか。

テストに用意したのは最初は５人だったんだけど、それでも全然相手にならず、結局選りすぐりのメンバー３０人を集め、模擬戦をしているんだけど……

「な、なんなの……フィルって魔導師よね。確か格闘に関しては、そんなに得意ではないはず……」

なのは達のことを知っているから、魔導師のことも多少は知っている。

魔導師は魔法に頼りがちだから、格闘能力はあまり高くない。

だけど、今あたしの目の前で繰り広げられている光景は、そんな常識を覆していた。

「ラスト！！」

「ぐあああああ！！」

最後の一人も、フィルに投げ飛ばされてしまい、模擬戦は終了となった。

「ふぅ……」

《マスター……良いのですか。この技術は……》

「わかっているさ……だけど、ここでは魔法は使えないんだ。昔の……忌まわしい格闘技術だけど、これしか戦う手段はないから……」

《そう……ですね》

＊　　＊　　＊

「アリサお嬢様、どうやら彼がいれば、私の分は充分果たしてくれますよ」

「ええ……はやてもとんだペテン師ね。この事を隠していたんですものね」

「はい、彼は戦い慣れていますね。動きに無駄が全くありません。まるで……」

「えっ……？」

鮫島が腕を組み、何か考えているが……

「いや、余計な検索はしないでおきましょう……」

鮫島はそう言って、部屋を出て行ってしまった。
いったいどういう意味なんだろう……？

気にはなるけど、今はフィルを出迎えて上げないとね。

「お疲れ様、フィル、あんた、どこがそこそこなのよ！！　うちのＳＰ全滅させて！！」

「本当ですよ。これじゃ俺たちの立場はないですよ……」

ＳＰの副隊長がフィルに向かって、愚痴をつぶやいている。
確かにあれだけ完膚無きまで叩きのめされたらね……

「あれは、偶々うまくいっただだけですよ。俺のやり方を知っていたら、ああうまくはまりませんよ」

「そう何度も投げられたら、こっちのおまんまが食いっぱぐれてしまうよ。でも、鮫島さんが怪我をしてしまって、一時はどうなるかと思ったけど、これで対策は万全だな」

「みなさん、俺は明日一日限りですが、みなさんの足手まといにならないように頑張りますので、よろしくお願いします！！」

そう言ってフィルは深々と頭を下げる。

「こちらこそよろしくな。フィル」

副隊長も右手を差し出して、フィルもその手を取りがっちりと握手をする。

「さてと、明日は忙しくなるぞ。フィル、早速で悪いが作戦会議に参加してくれ」

「了解です」

「さあ、みんなも隊舎に戻って作戦会議始めるぞ！！」

『はい！！』

フィル達は明日の対策を考えるために、部屋を出て行ってしまった。

「さてと、あたしもしっかりしないとね」

明日一日限りのフィルがあそこまで頑張ってくれるんだ。
当事者のあたしがしっかりしないでどうするのよ！！

＊　　＊　　＊

夜

「さてと……これで見回りは終わりだな」

明日の警備に当たって、俺は屋敷の周りをチェックしている。
地形をきちんと把握しておかないと、何かあったときに対応が出来ない。

「フィル殿」

「あっ、鮫島さん、こんばんは」

いつの間にここに来たんだろう？
さっきまで全く気配は感じなかったのに……

「少し、お話したいのですが、よろしいですか？」

「え、ええ……かまいませんよ」

「それでは、こちらの方へ」

そう言って鮫島さんに案内されたのは、一つの客間だった。
普段はこの客間は使わないそうで、バニングス家の人も殆どここには来ないそうだ。

俺は鮫島さんに座るように言われ、ソファーに座る。
やっぱりお金持ちはすごいな。

このソファーも全然質が違うし……

「どうぞ、温かい飲み物でも……」

「あっ、すみません」

鮫島さんが出してくれたのは、コーヒーだった。
しかも、インスタントではなく、ちゃんと豆から出している。
香りが全く違う。
さすがバニングス家の筆頭執事でもあるな。

「さて、お聞きしたいことがあるのですが……」

鮫島さんは、表情を引き締めると……

「あなたは……何者なんですか？」

「！！」

「何者と……おっしゃいますと？」

「今日のあなたの戦い方を拝見して思ったのです。あれは、明らかに戦い慣れているやり方です。とてもではありませんが、あなたの年齢で身につけられる戦い方ではありません……」

まさか、戦い方だけでそこまで見破られるなんて……

「……六課内での訓練で身についたと言っても……駄目でしょうね」

「ええ、あの動きはそんな訓練で身につけられるような物ではありません。実戦の中で自然と身についたとしか考えられませんから……」

「……」

これ以上隠し通しておくのは無理か……

「……それでは……お話しいたします。ですけど、これから話すことは、鮫島さんの胸の中に仕舞っておいてください」

「分かりました。それはお約束いたします」

「すみません……」

「実は……」

＊　　＊　　＊

「うーん……どうにも眠れないわね」

明日のことが気になって、ベッドに入っても中々眠れない。
少し散歩でもして、気を紛らわせようとしていたとき、いつも使っていない応接室から明かりが見えている。

なんか、それが気になり、あたしは応接室へ行くことにした。

「あれ、少し扉が開いているわね？」

応接室の扉が開いていて、そこから中の様子を見てみると、そこには鮫島とフィルが何か話している。
気になり、そっと話の内容を聞いていると……

『俺は……かつて全てを失いました。友人、仲間、大切な人……。それこそ全てを……』

『全て……ですか？』

『はい……本当に全部です。生きていることが嫌になるくらいの地獄でしたよ……』

えっ……？

なにそれ……そんなのはやてもフェイトも、なのはも一言も言っていなかった。

『でも、おかしな事がありますね。それだけの地獄でしたら、今のあなたが住んでいる世界は完全に崩壊していると言うことですよ』

そうだ。

フィルの話が正しいのなら、ミッドチルダは完全に崩壊している。

『……荒唐無稽なことを言いますが、俺は今から3年後の未来から来た人間なんです。本来は、ミッドも……その他の次元世界も、ある次元犯罪者に滅ぼされているんです……』

『ということは……その3年間であなたは……』

『はい、それこそ生き抜くために足掻きまくりました。その甲斐があり、何とか次元犯罪者は倒せたんですけど……』

『貴方の身にも何らかの事があり、この世界に来たと言うことですか？』

『……正解です。詳しくは言えませんが、奇跡が起き、俺はもう一度やり直せました。そして……今に至ります』

『……』

フィルは話が終わると、本当に悲痛な表情をしていた。
その顔を見て嘘を言っているとは思えない。

それに、フィルのあの悲しい目……

あれは、本当に色んな悲しみを乗り越えてきた人の目だ。
あたしも色んな人と接しているから、なんとかそれが分かる。

フィルの瞳は、そんな悲しい色をしているんだ……

『……なんか、つまらない話をしてしまいましたね。それでは、失礼します……』

「！！」

まずい！！
扉が開いて、フィルがこっちにやってくるわ。

偶然を装わなくちゃ……

ガチャ

「あれ？　アリサさん、どうしたんですか？」

「な、何でもない！！　少し眠れなかっただけよ！！」

気付かれてはいけない。
さっきのフィルの話を聞いていたことは……

「そうですか……」

フィルはどこか納得いかない表情をしているけど、気付かれてはいないわよね。

「す、少し散歩をしたら、眠くなってきたわね！！　おやすみ！！」

「お休みなさい。アリサさん」

あたしは逃げるように、フィルと別れ、そのまま自分の部屋に飛び込んだ。

「……あいつが……フィルが……あんな辛い過去を……」

あの時、鮫島との話の内容は驚きを隠せなかった。
言っていることは知らない人が聞いたら、なんて滅茶苦茶なことを言ってるんだろうと思う。

だけど、あいつやなのは達がいる世界は非現実なことが多い。

でも、まさか……未来から来たなんて……

だけど、それだったら色んな事に説明が付く。

何より……

あいつのあんなに悲しい眼……

あれは、本当にどん底を経験しなければならない眼よ。

それも、独りよがりの悲しみじゃない。

本当に大切な物を失わなければ、あれだけの強さも手に入らない。

フィル……

きっと……あんたは大切な人を……

「……そういえば、はやてが言っていたっけ。フィルは……」

フィルは、人のために本当に全力を尽くす……

そして……

最悪の場合、自分の命すら蔑ろにしかねないとも……

「……そんなの……そんなの悲しすぎるわよ……」

あいつは、未来ではやてやなのは、そして大好きだった人まで失ってしまった。

これはあたしの感だけど、フィルは好きな人を意識的に作らないようにしている……

もう、二度と愛する人を失う悲しみを得ないために……

「あたしは……」

あたしは、そんなフィルに何かして上げられるのだろうか……？

短いつきあいだけど、あいつはそんじょそこらの男なんかより、ずっと魅力がある。

悔しいけど、あたしも少しずつ興味を持ち始めている。

「でも……」

今は、明日のパーティを無事に終わらせる事よね。
あいつのことを考えるのは、それからでも遅くはないわね……

＊　　＊　　＊

「フィル！！　しっかり、しっかりしてよ！！」

今、あたしは救急車の中で、凶弾に倒れてしまったフィルと一緒にいる。
パーティ終盤、今まで何もなく無事に進行していたのだが、突然、窓ガラスが割れ数人のテロリストが現れ、まっしぐらにあたしの所にやってきて……

その時……

テロリストの放った一発の銃弾があたしに放たれたが……

フィルが咄嗟にあたしを庇って、その胸に銃弾を受けてしまった……

フィルの赤い血であたしの服は真っ赤に染まる……

あたしは何があったのか理解するのに、ずいぶん時間がかかった。

目の前でフィルが胸から血を吹き出しながら倒れ……

その身体から体温がどんどん失われ、精気もなくなっていく……

死……

今、あたしの目の前で、フィルが死のうとしている……

「フィル、お願いだから、生きてよ……あたしを庇って、死んだりしたら……フェイト達に何て言ったらいいのよ……」

＊　　＊　　＊

深夜　　海鳴総合病院

「先生、フィルの容態はどうなんですか！！」

「最善は尽くしました……ただ……」

医師の言葉に、あたしは胸騒ぎが止まらない……

「……ただ、何なの！？」

「弾が心臓のすぐ近くにあったことと、出血量が多く……助かる確立は……５％あるかどうかです……」

「そ、そんな……」

そんなの……そんなのって無いわよ！！

どうして、あいつがこんな目に遭わなければならないのよ……

＊　　＊　　＊

「フィル……」

今フィルは集中治療室で、一刻の予断も許さない状態だ。
医師によると、今夜が山だと言う……

あたしはどうしてもフィルの傍について上げたくて、無理を言って部屋に入れて貰っている。

「どうしたら……どうしたら、あいつを助けられるのよ……」

《アリサさん……》

「誰!?　あたしを呼ぶのは」

どういう事なの?
今、ここにはあたしとフィルしかいないのに……

《聞こえるんですか。私の声が!!》

「ええ、はっきりと聞こえるわ。あんたの声がね」

フィルがいつも大切に持っていたデバイスのプリム。
その声がはっきりと聞こえている。

《信じられない。通常私達デバイスの声は、リンカーコアを持っていなければ、聞こえないのに……でも、これでマスターを助けられるかもしれないです》

「どういうこと……話しなさい！！」

フィルはあたしの為にこんな目に遭ってしまったんだ。
あたしはどんなことをしてでも、フィルを助けなければならないの！！

《今、マスターは生命力が殆ど失われています。今はリンカーコアの魔力が何とか命を繋いでいますが、それも長くは持ちません。マスターを助けるには、コアを活性化するしかないんです》

「活性化って？　どうやってするのよ。あたしはなのは達みたいな魔導師じゃないのよ！！」

《今アリサさんは私の声が聞こえてますよね。それはアリサさんの中にリンカーコアがある証拠なんです》

「あたしの中に……リンカーコアが？」

信じられない。
あたしがなのは達みたいにリンカーコアがあったなんて……

《アリサさん自身のコアは魔法を使うほど覚醒はしてませんが、ですが……リンクするには充分な魔力はあります》

「いったい……何をしようっていうのよ？」

《アリサさん……マスターと……フィル・グリードと命を共にする覚悟は……ありますか？》

「……どういうことよ？」

次の瞬間、プリムから告げられた言葉は、衝撃的な物だった。

《助ける方法はただ一つ……貴女とマスターのコアを……直接リンクして魔力供給して生命力を上げるんです》

「……それで本当にフィルは助かるのね」

《少なくても、このまま何もしないよりはマシです……》

「……そっか」

あの時……

フィルがあたしを庇って倒れたとき、どうしようもない悲しみで一杯になった。

フィルが死んでしまう――

そう思ったら、今も涙がポロポロと抑えきれない。

「プリム……お願い。あたしのコアとフィルのコアと……リンクして」

《本当に……良いんですね。それをしたら普通の生活は出来なくなるかもしれませんよ……》

プリムは心配をして、最後通告をしてくれる。
その気持ちは本当に嬉しい――

「それこそ今更よ。あの時……フィルが庇ってくれなかったら死んでいたのよ。フィルが……自分の大切な人が死んでしまうってのに……何もしないのは嫌なのよ！！」

《アリサさん……あなた、まさか……》

いまやっと分かった……

昨日から思っていたもやもや感……

フィルのことを考えると、胸が苦しくなる感覚……

その答えがやっと分かった……

あたしは……

フィルのことが大好きなんだ……

＊　　＊　　＊

3日後

「……ここ……は？　痛っ！！」

突然左胸から激しい痛みが襲う……
あの時……
俺はアリサさんを庇って、テロリストの銃弾を胸に受けてしまって……

何とか上半身を起き上がらせると、ベッドサイドには……

「……すぅ……すぅ……」

「……アリサ……さん」

そこには疲れ切って眠っていたアリサさんの姿があった。

「……もしかして、ずっと俺の傍に……？」

よく見ると、化粧でうまく隠しているけど、目下のクマが少し見えている。
アリサさんは俺が意識を失っている間、ずっと傍にいてくれたんだ……

「だけど……正直もう助からないと思ってたんだけどな……」

心臓付近に弾を受け、さらにコアにまで損傷していたから、よほど

のことがない限り助からない。
まして地球の医療技術では、魔法医学は精通していないから、コアの修復なんて……

「！！　ま、まさか……！？」

考えたくはなかった……
だけど、それ以外に考えられない……

「アリサさん……あなた……まさか……」

俺とリンカーコアをリンクしたのか。
それ以外に俺が助かった理由が浮かばない……

「プリム、起きろ！！　プリム！！」

俺はプリムを起動させると、プリムはすぐに反応して……

《マスター、良かった……目を覚ましたんですね》

「俺のことは良い。プリム、俺の質問に答えてくれ。お前……まさか、アリサさんと俺を……」

《……はい、コアをリンクさせました》

やっぱり、そうだったのか……
出来れば外れていて欲しかった。

魔導師でないアリサさんとコアのリンクをするなんて、あってはならないことだ。

「プリム、分かっているのか。一般人とコアのリンクなんてしたら！！」

魔導師みたいに、コアが大きくない一般人のコアなんて使ったりしたら……

《分かってます……最悪の場合、二人とも死に至ります……》

「それが分かっているなら、何でしたんだ！！」

冗談じゃないぞ！！
これ以上俺に関わった人が死んでいくのなんて後免だ！！

《マスター……マスターは何も分かってないですよ》

「何だと……」

《マスター！！　貴方はアリサさんが助かれば、自分はどうなっても良い、そう思って自分の身体を盾にしました……》

「……ああ」

アリサさんはなのはさん達のかけがえのない親友だ。
その親友を、絶対死なせるわけにはいかなかった。

《……これは言いたくはなかったんですが、マスター……あなた、まさかティアさんの元に逝きたがってませんか……》

「！！」

《やっぱり……そうなんですね……》

＊　　＊　　＊

（そんな……）

あたしは少し前から目を覚ましていたんだけど、プリムとフィルが話をしているのを聞いて、動くに動けなくなってしまった。

でも、そのおかげで、フィルの本心が聞けるかも知れない……

フィルが、何であんなに自分を大切にしないかを……

「プリム……俺が未来で……ティア達を失ったことは覚えてるな」

《ええ……あれは忘れたくても、忘れられませんから……》

「俺は……今でも聞こえるんだよ。ティア達の……最後の言葉がな……」

フィルが今にも泣きそうな表情をしながら、淡々と話している。

未来のことは、あの時鮫島との話で聞いていたけど……

「正直言って……ＪＳ事件が終わったとき、俺の役目は終わったと思ってるんだ。みんなも助かったし……な……」

《マスター……》

なによ、それ……

「……だから、俺はいつ、あいつらの元に逝っても良いかなって思っている。だけど、只死ぬよりは、せめて、誰かを護って死ねたらなって……そう思うんだ」

ふざけないでよ……

「こんな俺でも……誰かを護れれば、少しは生きた証にはなるからさ……」

《ふ……ふざ……》

「ふざけるんじゃないわよ！！　このバカ！！」

もう、あたしは我慢の限界だった。

これ以上、フィルから自分をおとしめる言葉を聞きたくはなかった！！

「あ、アリサさん……？」

「あんたねぇ……さっきから黙って聞いていれば、自分を貶めることを言うのもいいかげんにしなさいよ！！　あんたが言っている言葉はね、死んでしまった仲間を貶めることを言ってるのと同義なのよ！！」

あたしはフィルの胸元をぐいっと掴み、自分の方へ引きつける。
そして思いっきり怒鳴ってやった。

「……死んでしまったって……？　まさか、アリサさん、昨日の話を！！」

「聞いてたわよ。全部ね……」

もうこれ以上隠しておく意味はない。
それよりも、フィルには言わなくちゃいけないことがある。

「どうして……どうして、そんなに自分を大切にしないのよ。どうしてそんなに死にたがってるのよ！！」

「……」

「答え……なさいよ、フィル！！」

もう、涙をこらえるのは無理だった。
自分の好きな人が、死にたがってるなんて、あたしには耐えきれないから……

「……好きな……人の元に……逝きたいからかな」

「えっ……？」

「俺は……未来の世界で、一人の女性が好きでした。だけど……戦いの中で、命をおとしてしまった……」

「フィル……」

その好きな人って言うのは、おそらく六課の誰かだと思う。
勘が当たっていれば……

ティアナ・ランスター……

彼女のことだと思う……

「鮫島さんとの話を聞いていたのでしたら、分かると思いますが、最後の戦いの時、俺は大切な人を守れなかった。それどころか……彼女に助けられてしまった……」

「彼女は最後に……幸せになってくれって言ってくれたけど、だけど……だけど……」

「俺を好きになってくれる人なんて……きっと……いないと思いますから……」

やっと……

やっと分かった……

フィルが何でそこまで自分を大切にしないかが……

フィルは、大切な人を作るのに怯えてるんだ。

だから、こっちの世界でなのは達と一緒になっても、どこか壁を作っていたんだ。

前の時に、なのは達と一緒に来なかったのが何よりの証拠……

フィルは一人で、全部抱え込もうとしてたんだ……

「……ばか」

「アリサさん？」

「ばかよ……本当に……こんなになるまで、自分の心を傷つけるなんて……」

フィルは元々戦うのには向いていない性格だと思う。

本当は、誰よりも優しいのに、未来でみんなを失って……

大切な女性を失って……

それで、フィルは強くならざるを得なかったんだ……

「……いなくならない」

「えっ……？」

「あたしは……あんたの傍に……ずっといる。だから……」

あたしはフィルの頬にそっと触れ……

そして……

「……分かる。あたしの温もりが……」

フィルの頭を自分の左胸に、押し当てた。

「どうして……どうしてそこまで……思ってくれるんですか？」

「……そんなのも分からないの」

フィルの鈍感さ加減に、あたしはふぅっとため息をつき……

そして……

「……好きだからに……決まってるでしょう……ばか……」

あたしは顔を真っ赤になりながら、一世一代の告白をした……

＊　　＊　　＊

「……アリサさん……」

正直、驚きを隠せなかった……
アリサさんの行動もそうだが、何より……

俺のことを好きになってくれたなんて……
今の今まで夢にも思わなかった。

「その言葉……すごく嬉しいです。アリサさんみたいな綺麗な人に、そこまで言ってもらうなんて、思いませんでした……ですが……」

もし、アリサさんを守れなかったら……

また目の前で失うことがあったら……

俺は……

「あのね……あたしはね。あんたに守られるだけになるつもりはないわ。あんた達の世界の事も知ってるし、それに……」

「今は、あんたとあたしはリンクしてるのよ。プリムから聞いたけど、コアをリンクしてるって事は、お互いにその魔力を……命を共有してるって事でしょう」

「……それは」

俺が反論をしようとすると、さらにアリサさんは……

「フィル、あたしはね、好きでもない人と命の共有なんてする気は更々無いわよ!!　あんたを愛してるからこそしたんだからね!!」

「アリサさん……」

「それでも信じないってのなら……」

すると、アリサさんは俺の頭をぐいっと抱き寄せ……

「んっ……んんん……」

俺の唇にキスをしてきた……

長いような、短いようなキスが終わると、アリサさんは……

「……これで分かるでしょう……」

「……充分なくらいに」

これで分からないほどバカじゃない。

アリサさんは本気なんだ……

「ずっと……ずっと一緒だからね。フィル」

「……はい」

「お願い……あたしのことが好きだって言うなら、ちゃんとアリサって言って……」

「あ、アリサ……」

「うん♪」

そして……

俺とアリサさんは、またキスをする。

今度はお互いの気持ちを確かめ合うように……

＊　　＊　　＊

１０日後

「さてと、なのは達の所に行きましょうか！！」

何とか怪我が回復し、動ける状態になったので、俺はアリサと一緒に機動六課に戻ることになった。
怪我は何とかなったのだが、コアの傷は相当深く、リンクした状態でないと命の危険があるのだ。
だから、一旦アリサにはミッドに来てもらう必要があった。

「……本当にいいのか？　ミッドに行ったら、そう簡単には戻っては……」

この１０日間、本当に色々なことがあった。
まず、アリサへの話し方の矯正から始まり、退院した次の日には両親の挨拶に行く羽目になってしまった。
鮫島さんから、ある程度のことは聞いていたため、そんなに拗れはしなかったけど……
むしろ……

『いやぁ、これでこのお転婆娘もお淑やかになるだろう！！　フィル君、孫を期待してるよ♪』

おかしいでしょう！！

こんな訳も分からない馬の骨に、大切な娘を任せるんですよ。
もう少し反論してください！！

『フィル君、君は自分を下に見すぎだ。君は充分にアリサを任せられる男性だよ……』

ご両親の真剣な言葉に、俺はこれ以上言うことが出来なかった。
ならば、その期待に少しでも応えられるように頑張るだけだ。

さらに、アリサが通っていた大学の問題は……

「ああ、大丈夫よ。どうせ、飛び級で今年の春卒業だったし、論文ももう出してきたし……」

アリサのＩＱは２００オーバーということはなのはさんから聞いていたけど、まさか本当に飛び級で大学を卒業するとは……

こんな感じで、アリサは俺の知らない間に、どんどん地盤固めをしていて、俺が断れないように外堀から埋めていっていたのだ。

「あのね、今更何言ってるのよ。あたしとあんたは今や一心同体でしょう。リンクを解除したら、あんたは死ぬかも知れないんだし……」

「それは……そうだが……」

「ウジウジいわないの。あたしが良いっていってるんだから！！」

「……そうだな。アリサ」

「そういうことよ。じゃ、出発するわよ！！」

そう言って、アリサは俺の左腕に自分の腕を絡ませ、自分の胸を押しつけて……

「あ、あの……アリサ！？」

「……このくらいで顔を赤くしてるんじゃないわよ」

アリサはフフンといった感じで照れている様子もなく……

「そ・れ・に……」

さらにアリサは……

「これから……いっぱい……いっぱいあんたに甘えるんだからね♪」

俺の頬にキスをした……

「……い、行くぞ」

「照れちゃって、可愛いんだ♪」

ったく……アリサの奴からかいやがって……

本当にかなわないよ……

＊　　＊　　＊

六課に戻ってきて、いきなりアリサがなのはさん達を集めて、みんなの前で爆弾発言をした。

それは……

「みんな、あたしはフィルと正式に付き合ってるから、誰も手を出すんじゃないわよ！！」

その発言を受け、最初はぽかんとしていた六課メンバーだったが……

『えええええええええ！！』

部屋一帯に響き渡る大声で、全員が驚き、その後、俺は尋問状態になってしまう。
色んな事を聞かれたけど、でも、みんな俺たちのことを心から祝福してくれた。

「あの時は参ったぞ……みんなの前で、あんな爆弾発言するんだからな……」

「ふふっ、良いじゃない。あれでフィルは、あたしの彼氏だって紹介できたんだし」

「それは……そうだが……」

なのはさん達は普通に祝福してくれたんだけど、アルトさんとシャーリーさんがゴシップ好きだから、本当に聞いて欲しくないことまで聞いてきたんだぞ……

「アルトとシャーリーは、あたしからもきつく言ったから、あれ以上はないわよ。そんなに心配しないの！！」

「ありがとう……アリサ」

「何度も言わさないの。今はそんなことよりも……」

そう言ってアリサは、俺の肩に自分の頭をコトンと預けてくる……

「だな……」

そして俺は、アリサの綺麗な金髪をそっと指で梳く。

アリサは、自分が嫌いな人に髪を触れられるのはとても嫌う。

俺とアリサはまだ短いつきあいだけど、その事はよく分かるようになった。

だけど、俺がこうするとアリサは眼を細めて、とても甘えてくる。

普段のアリサからは見られない仕草だ。

「ねぇ……あんたも、もう身体回復したでしょう？」

「おかげさまでな……」

「だったら……その……」

アリサは顔を真っ赤にしながら、指をツンツンしている。

「えっ……？」

「……察しなさいよ……ばか」

そう言ってアリサはぷいっと反対に向いてしまった。

「……ごめんな。俺、本当にそう言ったことに疎いから……」

俺が必死で謝ると、アリサはこっちを向いてくれて……

「そんなの分かってるわよ。あんたの鈍感はね……だから……」

いきなりアリサは俺の唇を奪う。

最初は唇が触れあう程度だったけど、しだいにそれだけでは物足りなくなり、舌と舌を絡め合い、何度も息継ぎを繰り返し、満足したときには互いの間に銀の糸が出来るほどだった。

「いっぱい……いっぱい分からせてあげる。あたしがどれだけ、フィルのことを愛してるかをね」

「アリサ……」

アリサは頬を赤く染めながら、必死で俺をリードしてくれる。
そんなアリサがとても愛おしく、俺はアリサの上着を脱がし、ブラもとり、その形の良い胸を何度も蹂躙する。

「あっ……んんんん……フィル……フィルぅぅぅ……」

アリサの喘ぎ声は俺の理性をどんどん崩していく。
好きな人が、自分の手で気持ちよくなってくれている。
それは最高の喜びだ。
そして、互いに理性は崩れ、お互いの身体を求め合っていき……

「フィル……あたし……初めてだから……その……優しくしなさいね」

「ああ……大切にする」

「ありがとう……フィル」

アリサは安心し、ニコッと微笑む。
それは普段のアリサとまた違った魅力ある笑顔だった。

「じゃ……いくよ」

「うん……来て……フィル」

俺はアリサの身体に溺れ……

アリサもまたその快楽に身を委ねていた……

そして……

そのみだらな行為は何度も繰り返され……

それは朝まで途絶えることはなかった……

＊　　＊　　＊

3年後

「くそ!!　冗談じゃねえぞ!!　なんで『白銀の閃光』と『灼熱の女神』に追われなければならねえんだよ!!」

「待ちなさい!!　止まらないって言うなら……」

あたしは炎のスフィアを多重展開し、それを槍状に変化させる。

「喰らいなさい!!　フレイム・ノヴァ!!」

スフィアは数百の炎の矢となり、犯罪者にめがけて一斉に放たれた。

「げえええええ!!　ぎ、ぎぃやあああああああ!!」

激しい爆音と共に、犯罪者は炎に包まれ、炎が収まるとその場に倒れる。
非殺傷設定だから火傷とかはしないが、疑似ダメージはあるので気絶はする。

「あ、あいかわらず……すごいな。アリサ」

「良いのよ。女性を侮辱する輩はあれでも足りないわよ！！」

ようやく地上警備隊が到着し、犯罪者は逮捕され、俺とアリサは現場の人間に引き継ぎをして、その場を離れた。

実はアリサは俺とのリンクを解除していない。
これはアリサが魔法を使って、俺の事を傍で支えたいと強い希望があったからだ。

最初俺は反対したが、アリサは何度言っても自分の意志を曲げることはせず、結局なのはさん達が提示した条件をクリアしたら魔導師として動いて良いとした。

条件とは、六課解散までにBランク試験をクリアすること。

はっきり言って、通常は不可能なことだ。

だが、アリサは持ち前のやる気でBランクどころか、その上のAランク試験にパスしてしまったのだ。

そして、俺はフェイトさんの元で執務官研修を受け、何とか執務官となり、アリサは俺の補佐官として動いてくれている。

しかも、アリサの成長は、今も止まることが無く、来年にはAAランク試験を受ける予定だ。
このまま行くと俺のAAAランクを簡単に超えることになりそうだ……

当然、仕事面だけでなく、交際も順調にいっている。
執務官になって、俺とアリサは同棲をしていた。

アリサは最初のころは人前だと甘えてこなかったけど、今では人前だろうが素直に甘えてくる。
現に今も……

「～♪」

街中だというのに、俺の腕に自分の腕を絡めて、胸を押しつける仕草をしている。

「あ、あの……そんなことされたら、持たないんだが……」

正直、俺の理性なんて、アリサの前では紙っぺらに等しい。
陥落するのは時間の問題だ……

「いいわよ。夜が楽しみになるだけだから♪」

アリサは、むしろそうなるのを望んでいる。
こんな感じで、いつも俺はアリサに主導権を取られている。

「ったく……でも、お前は最高の女性（パートナー）だよ、アリサ」

「あたりまえでしょう！！　何たってあたし達は心（コア）でつながってるんだからね♪」

あの日……

アリサとの通信で、初めてあったときは、とても勝ち気な女性だと思っていた。

だけど、会って話をして、色々知っていく内にアリサ・バニングスという女性の魅力に惹かれていった。

そして、その女性に命を助けられ、今では共に歩むパートナーとなっている。

こんな不思議な関係だけど、俺はいつもアリサに助けられている。

これからも色々あるけど、アリサなら俺を引っ張っていってくれる。

俺はそんなアリサを心から愛してるのだから……

## ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　すずか（前書き）

久しぶりのｉｆ　ｅｎｄｉｎｇになります。
今回はアリサ編以上に難産でした。うまくすずかのキャラクターを出せているか分かりませんが、全力は尽くしましたので、よろしくお願いします。

# if endingすずか

この日……

私はお休みで、久しぶりにアリサちゃんとお買い物に行く約束をしていた。
今、私は海鳴駅でアリサちゃんを待っている途中です。
しばらく待っていたら……。

「ねぇ、君。俺たちと一緒に楽しいことをしようぜぇ」

いつも思うことなんだけど、何故こういう人たちはみんな同じことしか言わないんだろう。
そう言う私もいつも言うことは決まっている。

「結構です。今、友達と待ち合わせをしていますので……」

って言うんだけど、これで帰ってくれた人は殆どいない。

「いいじゃんよぉ。君みたいな娘を待たせる子なんかほっといて行こうぜ！！」

そう言うや、否や話しかけてきた男の人は、私の手を掴み無理矢理引っ張って行こうとする。

「いや！！　やめてください！！」

いつもならアリサちゃんと一緒に行動してるから、鮫島さんがこういう輩を追い払ってくれるんだけど……。

男の人たちが無理矢理私を車の中に引っ張り込もうとしたとき……。

「あいたたたた！！」

「おい、いやがる女の人に何してやがる……」

男の人の手を引きはがし、その後こちらをみて心配そうな顔をして……

「大丈夫ですか？　怪我とかしてませんか？」

「は、はい、大丈夫です。ちょっと怖かったですけど……」

「そうですか……」

私が怖かったという単語を言ったとたん、彼の表情が険しい物になる。

「貴様ら……この人に何しようとしたんだ」

彼は淡々とした口調で話しながら彼らに歩いていく。

「うるせぇなぁ！！　お前には関係ねえだろうが！！　この子が一人で寂しそうにしていたから、俺たちがたっぷりと遊んでやろうとしたんじゃねえか」

そう言うと、男の人の周りに居た他の二人の男の人が、ニヤニヤしながら笑う。

「そうそう、遊んであげようとしたんだよ」

「たっぷりとなぁ」

イヤらしい言い方で一人の男の人が彼に話している。

残りの二人がこっちをみて、舌を舐めずりしている。

「そっか……」

「そう言うわけでとっとと消えな！！　お前は邪魔なんだよ！！」

そう言って彼の顔面に殴りかかった。
しかしその瞬間……

「いてててててて！！」

彼がその腕をとり、逆にその腕を捻りながら、その男の人を地面に叩きつけていた。

（えっ？　一体何が起きたの？）

あまりの早業に呆然としてしまったが、いつの間にか二人目の男の人も地面にくの字になって倒れていた。

「て、てめえ……ざけんじゃねえぞ！！」

残った男の人がポケットからナイフを取り出し、後ろから彼に斬りかかる。

「危ない！！」

もうだめ！！　そう思っていたが、次の瞬間信じられない物を見ることになる。

「う、うそだろ……」

後ろを振り向いた次の瞬間、彼はナイフを右手の人差し指と中指で挟み込み、完全に動きをロックしてしまっていたのだ。

「この……この！！　全くうごきやがらねえ！！」

いくらナイフを引き抜こうとしても、山のごとく動かすことが出来ず、男の人がただ独り相撲の状態になっていた。

「どうした……それで終わりか。だったら……」

バキン！！

次の瞬間、刃の部分を根本から叩き折ってしまったのだ。
その勢いでナイフを持っていた男の人が、地面にベタンと尻餅をついていた。

「ひいいいいいいいい……」

「まだやるか……」

彼が地面に倒れている三人組にひと睨みすると……

「じょ、冗談じゃねえ！！」

「ま、待ってくれよ！！」

「おいてかないでくれ！！」

恐れをなしたのか、あわてながらその場を去り、自分たちの車に駆け込み、さっさと走り去っていった。

＊　　＊　　＊

「ふぅ……」

「あの……本当にありがとうございました」

「いえ、別にたいしたことはしてませんから……」

俺はとある理由で無理矢理休暇を取らされ、しかもミッドにいたらまた仕事をするんじゃないかという理由で、なのはさん達の故郷、海鳴市に強制的にとばされてしまっていた。
幸いはやてさん達から地球の通貨は貰っているので、野宿という心配はないんだけど、その代わりになのはさんの実家である翠屋でケーキをおみやげに買ってくることを言われてしまった。

その店を探している途中で、あんな連中と遭遇するとは思わなかったけどな……。

「それでは、俺はこの辺で……」

「ま、待ってください！！　せめて何かお礼を……」

「俺はそんなつもりでしたわけじゃないですから。あんな馬鹿を見るのが不愉快なだけですから……」

俺は別にお礼をされたいから助けた訳じゃない。
泣きそうな人がいたから助けた。それだけなのだ……。

「でも……。だったらせめてお茶くらい奢らせてください」

「ですが……」

《マスター。別に急ぐわけではないんですから、そのくらいの御厚意は受けても良いと思いますよ。あまり無下にするのも失礼ですよ……》

プリムが念話で俺にそう言ってくる。

確かにあまりお断りするのも申し訳ないな。

「それでしたら……お言葉に甘えさせてもらいますね」

「はい♪」

その後、もう一人金髪の女性がやってきて、先ほどのことを説明すると……

「へぇ……あんたなかなかやるじゃない！！　普通は見て見ぬふりするのに、男気があるじゃない！！」

「べ、べつにそう言うわけでは……」

「謙遜しないの！！　あたしからも礼を言わせて貰うわ。そう言えば自己紹介がまだだったわね。あたしはアリサ・バニングス。よろしくね！！」

金髪の女性はとてもズバズバ言ってくるけど、人を傷つける物ではない。
むしろ人一倍気を遣っている感じだ。

「あの、月村すずかです。先ほどは本当にありがとうございました！！」

先ほど助けた長い紫の髪の女性はとてもおしとやかな印象を受けた。

「いえいえ、怪我が無くて良かったです。俺はフィル・グリードと言います」

「「えっ？」」

二人の女性は俺の名前を聞いたとたん、驚きの表情に変わり……

「もしかして……なのはちゃんの関係者の……？」

「えっ！？」

今度は俺が驚く番だった。
まさかここでなのはさんの名前が出てくるとは……

「まさか、お二人はなのはさんの友達……ですか？」

「そうよ！！　あたしとすずかは小学生時代からなのは達とは親友同士よ」

「こないだみんなで来たときはフィル君は来ていなかったけど？」

思い出した！！
アリサ・バニングス。月村すずか。
この二人はなのはさん達の地球での協力者だ。
まさか、ここでこの二人と会うことになるとは……

「そういえばあんた、こないだみんなで来たときはいなかったけど、何か理由があったんでしょう？」

「詳しいことは分からないけど、フィル君がすごく頑張ってくれたから、今、私たちが生きているって、はやてちゃん達が言っていたの」

「えっと……その……」

いったいはやてさん達は、この二人にどんなことを言っているんだ？
ずいぶんと買いかぶっているみたいだけど……。

「そっか……あんたがフィル・グリードか。でも、なんで地球にいるの？」

「そうだよね……何か事件でもあったの？」

二人が不安そうな表情で俺に尋ねてくる。
そう言う訳じゃないんだよな。なのはさん達の関係者だし、今回は俺の休暇で来ているだけだから、話しても良いかな。

「実は……」

俺が六課であった出来事を簡単に説明すると、最初はうんうんと頷きながら聞いていたんだけど、最後の方になると……

「はぁ……。確かにそれじゃ、はやてが強制休暇を出すのも当たり

前よ。一週間不眠不休って……」

「そうだよ。もう少し自分の体を大切にしなきゃだめだよ！！」

「は、はい……」

二人のあまりの迫力に、俺はたじろぐしかなかった。

というよりも、俺が昔から年上の女性には頭が上がらないのが原因かな。

結局俺は二人に連れられて、なのはさんの実家である翠屋に一緒に行く羽目になってしまった。

しかも、翠屋についたら、なのはさんのお兄さんである恭也さんも戻ってきていて、先ほどの話を月村さん達が話していると……。

「義妹を助けてくれてありがとう。ああいった輩は俺と父さんが、あらかた片付けたつもりだったんだけどな……」

恭也さんがこちらにやってきて、俺に頭を下げてお礼を言ってきた。

というか、月村さんと恭也さんが義兄妹だとは……。

「仕方がないですよ。どこにでもいますから、ああいうアホは……」

「顔とか分かれば、二度と馬鹿なことをさせないんだけどな……」

「とにかく今後は俺たちも気をつけるよ。今日はお礼と言ってはな

んだが、ここでのケーキ代はうちで持つよ」

「い、いえ！！　それは申し訳ないです！！　ちゃんと払いますから！！」

さすがにそこまでして貰うわけにはいかない。

ただでさえ、おみやげの買うお金だって、割り引いてくれたのに……。

「気にしないでくれ。もし、気にするんだったら、また店をひいきにしてくれればいいさ」

「そうだよ。ここは恭也義兄さんの厚意を素直に受け取ってね」

「あんたは遠慮しすぎなのよ。人の厚意は素直に受けなさい！！」

さすがに三人から言われてしまっては、断る方が失礼だ。

俺は御厚意に甘え、ごちそうになることにした。

＊　　＊　　＊

「さてと、おみやげも買ったし、ミッドに戻るとしますか」

「「えっ……？」」

「ちょっといくら何でも早すぎない！！　今日地球に来たばかりなんでしょう！？」

「ですが、仕事の方も残っていますから……」

アリサさんの言うとおり、今日の朝海鳴に来たんだけど、正直六課をあけるのは心苦しい。
頼まれたおみやげも買ったんだから、もう戻った方が良い。

「ねぇ、フィル君。せっかく地球に来たんだから、一日くらい観光しても怒られないと思うよ……」

「ですが……」

「あのね。はやてちゃんがフィル君にお休みをくれたのは、体を休めてほしいからだと思うよ。それを無視する方が良くないと思うな」

「……そう……ですね」

確かに月村さんの言うとおりだと思う。
今回の休みだって、徹夜を繰り返していることではやてさんに休まされたんだから。

「もし、一人で休むのが出来ないって言うなら、明日私と一緒に遊んでくれないかな。今日はあんな事があって予定が全部狂っちゃったから……」

「そうね。こいつは一人だとここでも仕事をしそうだしね。それが良いかもね。残念ながらあたしは明日は用事があって無理だけど、すずか、こいつのことはお願いね」

「うん。はやてちゃん達にも私から言っておくから心配しないでね！！」

もう、退路はふさがれてしまった。
これで無理矢理六課に戻っても、また強制的に休暇を取らされてしまう。
しかも、今度はデバイスまで取り上げられてしまうだろう。

「ふぅ……分かりました。それでは今回はお言葉に甘えて、海鳴の街を案内して貰います。よろしくお願いします。月村さん」

「うん。任せてね。それと、私のことはすずかでいいからね」

「は、はい……」

どうにも、月村さんいや、すずかさんの言葉にはどうにも聞かなきゃと言う気にさせられてしまう。
別に命令されてるわけではないんだけど、なぜかあの人が悲しそうな顔をしていると、胸が苦しくなってくるんだ。

結局俺は次の日、すずかさんに海鳴の街を案内されて、帰るのが一日遅れることになった。
でも、そのおかげでリフレッシュできたから良いかな。

＊　　＊　　＊

二ヶ月後

「ここが、はやてちゃん達が働いている機動六課……」

私は冬休みを利用して、今回はやてちゃん達がいる六課に見学に来ることにした。
さすがに何も断りもなく来たら駄目なので、事前に連絡をして都合がつく日に合わせて来ることになった。

「いらっしゃい、すずか。待っていたよ」

「フェイトちゃん。お久しぶりだね！！　元気にしてた！？」

「うん。色々あったけど、なのはもみんなも元気だよ」

こうやって会うのは、海鳴であったとき以来だけど、みんな元気そうでよかった。

「そういえば、フィル君はどうしてる？　元気にしてるかな？」

こないだ会ったときは、だいぶ無理していたからね。
私とアリサちゃんがあれだけ言ったんだし、もう無茶はしてないと思うけど……。

「う、うん……。元気と言ったら元気なんだけど」

なんか、フェイトちゃんの様子がおかしい。
どこか困惑して様子でなにか話すのをためらっている感じだ。

「フィルね。海鳴から戻ってきた一週間くらいはちゃんと休んだりして、無理しなかったんだけど、それからしばらくして今度は……」

そう言ってフェイトちゃんは六課内のオフィスを指さして……

「スバル、ほら、その書類を貸せ。お前もほかの書類がたまってるんだから、それを早く片付けろ」

「で、でも、それじゃフィルの方が……」

「人の心配をするより、自分の仕事を片付けろ。俺の方はもう終わってるんだから、助けるのは当たり前だろ！！」

「本当にごめんね。フィル……」

＊　　＊　　＊

「フィル君って、いつもあんな感じなの。フェイトちゃん……」

「うん……今日はまだ良い方。いつもだったら、夜中まで残ってシャーリーと一緒にデバイスのことを話し合ったりして、そのまま朝

までして、そのまま訓練なんて事もざらなの。それを注意はするんだけど……」

「それでもフィル君は、無茶ばかりし続けているんだね……」

「なのはや私たちには無茶はするなって言うんだけど、フィルの方がよっぽど無茶しているよ。このままじゃ本当にいつか……」

フィルはいつもそう……。
自分のことより、自分の周りの人のことを優先してしまう。
自分はどうなっても良い。だけど、仲間はどんなことをしても護りたい。
ＪＳ事件の時もずっとそうだったから……。
そんなことを考えながらオフィスを見学していたとき……

バタン

突然オフィスに大きな物音が響き渡る。
その音ですぐにその方向を見ると……

「フィル！！」

「フィル君！！」

目の前でフィルが突然バタンと倒れている。
心配していたことがついに起こってしまった。

目の前でフィルが倒れてパニックになっているキャロが、フィルを揺すっているが……。

「キャロちゃん、あんまり揺すらないで。原因が分からないのに、動かすのはかえって危険だよ」

「えっ？　は、はい！！」

いつの間にかすずかがフィルの前に駆けつけて、フィルの状態を確認していた。
確認が終わると、すぐに……。

「スバルちゃん、ティアナちゃん、急いでシャマルさんに連絡して！！」

「「は、はい！！」」

すずかの言葉でティアナ達がハッとして、すぐにシャマルを呼びに行った。
駆けつけたシャマルがフィルのことを見ると……。

「完全に過労ね。疲れがたまってそれが蓄積されて、それがどっと出たのよ。とりあえず医務室に運ぶわね」

シャマルが連れてきた救護班と一緒にフィルを連れて行く。
この場はティアナ達に任せ、私とすずかはその後をついて行くことにした。

そして、この後シャマルから、信じられないことを聞かされることになる……。

＊　　＊　　＊

医務室についた私とフェイトちゃんは、しばらくの間部屋の外で待機していた。
しばらくしてシャマルさんが、フェイトちゃんだけを部屋に入れて……

「話したいことがあるの……。機密事項に関わるから、すずかちゃんは後でフェイトちゃんに聞いて……」

「は、はい……」

正直フィル君のことが気になって仕方がなかったが、機密事項という言葉にこれ以上言うことは出来ない。
なんだろう……。

嫌な予感が頭から離れてくれない。

＊　　＊　　＊

「フィル……よく眠ってますね」

「ええ……本当によく眠ってるわ……」

シャマルは、さっきから話すことをためらっている感じだった。
話さなければいけない。だけど、どう話したらいいか……。
そんな感じがさっきからずっと感じられる。
そしてシャマルは意を決したのか……。

「フェイトちゃん。あの場では……過労って言ったけど、本当はそれだけじゃないの……」

「えっ……？」

「フェイトちゃん、フィルがＪＳ事件でブラスターを使ったのは覚えてるわね……」

「うん……」

あの事件でフィルは、ヴィヴィオとなのはを助けるために、自分の限界以上の力、ブラスターを使っている。
あの力は自己ブーストのため、自分の限界以上の力を使えるけど、その反面……。

「そのせいでなのはちゃんもフィルも、体にかなり負担をかけてしまっているの。しかも……」

「これを見てほしいの……」

そう言ってシャマルスクリーンに映し出したのは、フィルの検査結果。

「これは！！」

「見ての通り、もうフィルは限界に近いのよ。そこに来て、これだけの無茶の繰り返し……。正直言ってこのままだったら……」

「……フィルの命は……1年持たないわ」

「う、嘘だよね……。フィルの命があと一年だなんて……」

信じられなかった。
嘘だって言ってほしかった……。
だけど、シャマルの表情がそれを物語っている。

今言ったことは紛れもなく真実……。

「シャマル！！　フィルを助ける事は出来ないの！！」

「今のように無茶しなければ、大丈夫なんだけど……。だけど、今のフィルが、それを聞き入れると思う？」

絶対に無理だと思う。
フィルは、自分のことよりも大切な仲間の方を優先してしまう。
それこそ、大切な人が出来ない限りは……。

「知っての通り、フィルは未来でティアナを失っているわ。だからこれ以上の悲しみを生まないために、自分の体のことは二の次にしてる……」

「でも、このままじゃフィルは……フィルは……」

＊　　＊　　＊

「そんな……そんなのって……そんなのって……」

信じられなかった……。

フィル君がこのままじゃ死んでしまう……。

詳しいことは聞こえなかったけど、それでも肝心なことは聞こえてきた。

フェイトちゃんの必死な声がこっちまではっきりと聞こえてくる。

フィル君の容態は、本当に良くないんだ……。

「いやだよ……フィル君が死んじゃうなんて……嫌だよ……」

二ヶ月前、あの時は優しい男の子だと思っていた。

だけど、あの日フィル君と一緒にお話をして、その後も海鳴の街で一緒に遊んだりして、フィル君のことを知れば知るほど、フィル君のことが気になり始めていた。

今日だって、なのはちゃん達には悪いと思ったけど、本当はフィル君に会えたらなって思っていたんだ。

だけど……

知ったのは、悲しい現実……

「苦しいよ……フィル君のことを思うと、こんなに胸が苦しいよ」

この二ヶ月、フィル君に初めて会ってから、ずっともやもやしていた気持ち……。

その気持ちが今はっきり分かった。

私、フィル君のことが好きだったんだ。

＊　　＊　　＊

「よく……眠ってるね」

あれから数時間、フィル君の容態も落ち着き面会も出来るようになった。

さっきまでなのはちゃん達が代わる代わる来て、みんなに怒られたりしていたけど、それはみんながフィル君のこと本当に大切に思っているからだよ。

「フィル君……」

私はフィル君の黒髪にそっと触れ、何度もそれを繰り返していた。

ふとフィル君の顔を見ると、どこか安らいだ表情をしている。

「ふふっ、こうしていると普通の男の子なんだけどね」

本当、無茶ばかりしているんだね。
地球で話を聞いていたのだってかなり無茶だと思っていたのに、ここでみんなから話を聞いたら、あの時、聞いたのはほんの一部だったんだね。

「フィル君……」

本当はちゃんと言いたい。
だけど、私の思いはきっと今のフィル君には届かないから……。
それでも、後悔だけはしたくないから……

「実はね……。私も、なのはちゃん達にしか言ってない秘密があるんだよ。私もね……。普通の人とはちょっとだけ違うんだ」

「夜の一族っていって、私の家系は元来、吸血鬼の血を継ぐ一族の末裔……なんだ……」

これのせいで小さい頃私は、うまく人とお話が出来なかった。
だけど、アリサちゃんやなのはちゃん達と会って、たくさんの大切なお友達が出来た。
そのおかげで引っ込み思案の性格も、だいぶ直すことが出来たんだ。

「だからね……。本当は普通の人を好きになっちゃいけないんだけど、だけどね……」

言っちゃいけない……

「それでも、私は……私は、あなたのことが……」

だけど……それでも……

「好きになっちゃったから……」

自分の気持ちには嘘をつきたくなかったから……

だから私は、ほんの僅かの望みを託し……

そっと頬にキスをした……

「おやすみなさい……。身体……大切にしてね」

私はそっと、扉を開けて医務室から退室した。

＊　　＊　　＊

「……すずか……さん」

あの時……

俺は半分起きていたのだが、すずかさんが思い詰めた表情で話し始めたとき、起きてはいけない、そう思って眠ったふりをして話を聞いていた。

話を聞いたとき、驚きを隠せなかったのもそうだけど、なにより……

「俺のことを……好きになってくれたなんて……な……」

はっきり言ってとても嬉しかった。
すずかさんみたいに、とても心の優しい女性に好きだと言ってくれたのは……
だけど、その反面……。

「……でも、俺が人を好きになっても……良いのか？」

ティア……

かつて俺が未来で愛したたった一人の女性。

もし、お前がこの場にいたら、どう思うんだろうな……

《マスター、今ティアさんのことを思い出してますね……》

「分かるか……プリム」

《分かりますよ。マスターの今の顔、ティアさんのことを思っているときの顔でしたから……》

「そっか……」

やっぱ、プリムには分かってしまうんだな。

顔には出さないようにしていたんだけどな……。

《マスター、きっとティアさんなら、『あんたが幸せになってくれる方が、あたしは嬉しいんだからね』こんな感じで言ってくれると思いますよ》

「そう……だな」

きっとティアならそう言う……。
過去に送り出してくれたときだって、そのことをずっと言ってくれたんだから……。

もう一度すずかさんと、ちゃんと話をしよう。
答えを出すのはそれからだ……。

＊　　＊　　＊

「結局……フィル君とはあれから会っていないな」

フィル君が倒れて、次の日にはフィル君は仕事に復帰していた。
さすがに訓練はしていなかったけど、それでも事務仕事をしている

ときは、周りのフォローをしていて相変わらず自分を省みていない。
そんな感じで夜になっても全く会うことが出来なかった。
こうやって外を散歩していたら、もしかしたら会えるかもしれない。
そんな僅かな期待をしていたら……

「……あれは？」

ふと海岸の方を見ると、フィル君が砂浜で一人で座っているのを見つけた。

「フィル君……うん！！」

昨日は眠っているフィル君に一方的に言っただけだけど、今度はちゃんと伝えよう。
たとえどんな結果になっても……。

「フィル君！！」

「えっ……？　す、すずか……さん」

＊　　＊　　＊

「どうして……ここに？」

「こうやって外を歩いていたら、フィル君に会えるかなって思って……ね」

「そう……ですか」

まさか、こんなところですずかさんに会うとはな……。

正直、まだ自分の心に完全に向き合えたとは言えないのに……。

「これ……良かったら飲まない？」

そう言って渡してくれたのは暖かい缶コーヒーだった。

俺はそれを受け取り、すずかさんは俺の隣にすっと座り始めた。

そして俺たちは、それぞれの飲み物を飲んでいる。

しばらく俺とすずかさんは無言でいた。

夜の、人気のない海岸。

否応なしにも緊張はする。

そして……。

「フィル君……」

話を切り出したのはすずかさんだった。

「何ですか？」

「ねぇ……昨日の話、もしかして聞いていた？」

「……どうして、そう思うんですか？」

「昨日もいったけど、私は人とは少し違うから。だから、フィル君の息づかいが、寝ている物かどうかが何となくだけど……分かるんだ」

「そう……ですか」

あの時、すずかさんには分かっていたんだ。

「フィル君……あの時も言ったけど、私は……」

「私はね……あなたのことが……好き……大好きなんだ」

「すずかさん……」

その言葉を聞いたとき、俺は表情をゆるめるが、すぐに引き締め……。

「正直……嬉しいです。すずかさんのような女性に好意を向けられることは……でも……」

「でも？」

「俺には、女性を幸せにする資格は……やっぱり無いんですよ」

あの日、あれからずっと考えたけど、やっぱり俺は不幸を呼ぶ死神なんだ。
あの時だって、俺がもっとしっかりしてたら、ティアは死なずにすんだんだ……。

「……どう……して？」

「俺は……」

そして、すずかさんにすべてを話した。
俺は本来この世界の人間ではないこと……。

未来で、大切な人を自分のせいで失ったこと……。

過去を取り戻すためにこの世界に戻ってきたこと……。

そして……今に至る自分の存在価値を。

本来なら、こんな話は一般人のすずかさんにはしてはならないことだ。

だけど、すずかさんが必死な思いで、自分の出生を話してくれたんだ。

だから、本気の思いには本気の思いで答えなければいけないと思ったから……。

「俺のせいで……仲間が……大切な人が……死んでいったから……だからまた、俺のせいで大切な人が死んでしまうから……だから……」

その言葉を言い終わる前に……すずかさんが立ち上がって、俺の頭を自分の胸の方へ抱き寄せて……

「……すず、か…さん？」

「……大丈夫。私はフィル君のことを待ってあげるよ。そして、フィル君の帰る場所になってあげる」

「っ！？」

＊　　＊　　＊

もうこれ以上フィル君の口から、自分をおとしめる言葉は聞きたくなかった。
私も自分には自信がない方だけど、それでもフィル君はそれ以上に自分を傷つけすぎている。

きっとフィル君は、ティアナちゃんを失ったことで、恋人を作るのをおそれている。
だから、必要以上のつきあいはしなくなった。
それはなのはちゃん達も例外ではなく……。

だけど、そんなのはとても悲しいよ……。
それじゃいつか孤独で押しつぶれちゃうよ……。

自分の大好きな人が、これ以上心を傷つけていくのは、もう耐えられないよ……。

「……俺と一緒にいたら、すずかさんにだって、いつか危険な目に遭うかもしれない！！」

「……フィル君が守ってくれる」

「守りきれないかもしれないんですよ！！」

「信じてる」

「……簡単に信じないでくれよ……裏切られたらどうするんですか……」

フィル君がうめくように言う。

私は一度、フィル君を抱きしめる腕を解き、フィル君に笑顔を見せる。

自分が出来る最高の笑みを――――――。

「ねぇ……フィル君。人を信じるっていうのはね、その結果を見返りとして求めるからじゃないんだよ？」

「……えっ？」

「だから……信じた結果は問題じゃないの」

「……」

「私はフィル君を信じる。フィル君がその信頼に応えようとする。その、フィル君の信頼に応えようとする意思が大切なんだよ。だから……」

再びフィル君の頭を抱き寄せて……。

「私は、フィル君が守ってくれるって、言ってくれれば、信じられるんだよ」

「俺は……もう一度、人を……愛して良いんですか……？」

「うん……。フィル君が不安だって言うなら、何度でもこうしてあげる。フィル君が安心するまでね」

「すずかさん……」

そして、私はフィル君を解放し、お互い立ち上がり、もう一度向き合う。

「……すずかさん、俺は、あなたが……好きです」

「私も、大好きだよ。フィル君」

「俺は……あなたを……守りたい。すべての物から……」

「うん……」

そして、私とフィル君は静かに……

星空の空の元……

誓いのキスを交わした……

＊　　＊　　＊

翌日

「失礼します。フィル・グリードです」

「ええよ。入りや」

「どうしたんや。突然お願い事なんて？」

突然のフィルの訪問に正直私はびっくりしていた。
フィルはこんな形で突然来ることはあまりない。
大体が事前にコンタクトをとってから来ることが多い。だからこそ、
フィルのこの行動にびっくりしていた。

「あの……本当に突然ですみませんが、一日で良いので休暇を頂けませんか」

「えっ……？」

う、嘘やろ！？

今まで散々、こちらから休暇通告をしてきても、断り続けてずっと働き続けてきたフィルが！！

「そ、それはかまわへんけど、一体どうしたんや？　突然こんなことを言い出して？」

「あの……それは……」

フィルが答えるのにどこかとまどいを出している。
普段ならこんなことはないフィルが……。

もしかしたら……？

「フィル……答えにくかったらええんやけど、もしかして、休暇はすずかちゃんのために？」

「っ！？」

一瞬フィルの表情が、はっとした。
私はそれをみてこれで確信した。

すずかちゃんは、フィルにすべて告白したんや……。
そしてフィルも、すずかちゃんのすべてを受け入れた……。

「休暇の件はＯＫや。だけど、一日でええんか？」

「はい、さすがにそれ以上は厳しいと思いますから……」

こ、このワーカーホリックが！！
せっかくすずかちゃんと恋人同士になったと言うのに、こんな時に一緒にいなくてどうするんや！！

すずかちゃんとフィルは世界が違うから、そう簡単にはあえへんと言うのに！！
ふふふふ……

そんなに仕事が好きというなら……。

「そんじゃ、明日からの仕事を渡しておくわ。これに関しては拒否権は認めへんから……」

「はい、わかりました」

私はパソコンを取り出し、急いで命令書を作成する。
そして、はんこを押し、正式な文書とし、伝令をする。

「命令、フィル・グリード二等陸士。貴殿はこの命令書が発行された日時より、一週間月村すずか氏と一緒に行動することを命じます」

「えっ！？」

ふふふ。フィル、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしとるわ。

「ま、まさか！？　はやてさん……知っていたんですか！？」

「あんな……普段、休みを取らないフィルが、突然休みをくれなんて言い出すなんて、おかしいと思わないほうが変やで。それに……」

「すずかちゃんから、それとなく聞いていたし……。地球でのことは」

「えっ？」

元々、すずかちゃんがこっちに来たいというわけは、私たちに会うためというのもあるけど、出来たらフィルにも会ってお礼を言いたいということも聞いていた。

だから、もしかしてフィルのことを少なからず興味を持っているとは思っていた。

それに昨日、フィルが倒れてからのすずかちゃんの悲痛な表情を見ていたら、それはよく分かる。

「そうだったんですね……」

「せやで、だから、せめてすずかちゃんがこっちにいる時だけでも、

一緒にいたらんかい！！」

「はやてさん……」

「そ・れ・に」

私はわざとにやっとして、フィルの方に詰め寄る。

「ワーカーホリックのフィルは、こんな風に仕事というカテゴリにせんと、長期で休んでくれへんからな」

「……か、勘弁してくださいよ」

「ふふっ、冗談や。フィル、すずかちゃんとの時間、大切に使ってや」

「……はい、ありがとうございます！！」

すずかちゃん、フィル。

私が二人にしてあげられるのは、ここまでや。

後は二人がしっかりと芽生え始めた愛を育んでや。

＊　　＊　　＊

「というわけで、今日からすずかさんが帰る日まで、一緒にいることになりました」

「……はやてちゃん、完全に気づいてたんだね」

「ですね……。でなければこんな命令はしませんから」

「だね。でも、はやてちゃんには感謝かな。私が地球に帰る日まで、ずっとフィル君と一緒にいられるんだから♪」

「ですね……」

本当にはやてさんには感謝してもしきれない。

こうしてすずかさんと一緒にいられる時間を作ってくれたんだから……。

「フィル君、こうしていても時間がもったいないよ。休暇の一日と合わせても、あと8日しかないんだからね」

「ですね。それじゃ、クラナガンに出て、町を案内しますね」

「うん！！　初めてのデートだね。楽しみ♪」

そうだよな……。

時間は限られてるんだ。色々考えるのは、移動しながらでも出来るしな。

こうして俺とすずかさんは、サンダーに乗ってクラナガンに向かうことになった。
サイドカーがないので、すずかさんには後ろに乗って貰ったんだけど……。

「あの……、そんなに密着しなくても……。その……」

さっきからすずかさんの豊かな胸の感触が、俺の背中にずっと伝わってくる。
俺も一応まがりなりにも、健全な一般男子なわけで……。

「分かってるよ。ワザとしてるんだもん。いっぱい感じてほしいからね♪」

わざとだったんかい！！
全く、すずかさんはこんな風に、俺をちょっとだけ困らせるのが好きみたいだ。
本気で困らせるわけではないけど、普段見られない一面を見ることが出来るからということらしい。

「勘弁してくださいよ……」

「じゃ、その他人行儀な言葉使いを直してくれたら、やめてあげる」

「えっ？」

「だって……。恋人同士になったのに、そんな風に壁を作った話し方なんて」

「あっ……」

そう言えば、元々年上の人にはこんな感じで話していたから違和感がなかったけど……。

「だから、私にはティアナちゃん達と話しているように、壁……作らないでほしいな」

「すずかさん……」

「わかった……。これでいい？　すずかさん」

「駄目だよ。あと、さん付けも無しだからね」

「そ、それは……」

俺が返事にためらっていると、すずかさんがにっこりと……。

「い・い・よ・ね」

「あ、ああ……」

いまのすずかさん、いやすずかに逆らうことはしてはいけないと、俺の第六感がずっと言っている。

「……す、すずか。これでいいか？」

「うん♪」

そう言って、すずかはさらに密着してきて……

「ちょ、ちょっと待て！？　さらに密着してきてるぞ！！」

「そうだよ。これは恋人同士のスキンシップだもん。当たり前のことだよ」

「待て！！　言葉遣いを直したらやめるって言っただろうが！！」

「なんのことかな～♪」

謀られた！！

最初から、すずかはやめる気なんて無かったんだ。

「ったく……。でも、まっ、いいか」

自分の大切な人がこんなに笑顔でいてくれるんだ。
それに、俺自身も温かい気持ちになるからな……。

＊　　＊　　＊

「わぁ……。この指輪きれいだね」

「だな……」

私とフィル君は、クラナガンについて、真っ先に向かったのはジュエリーショップだった。
実は、恋人が出来たらペアリングをつけたいとずっと思っていた。
そこで、せっかくクラナガンに行く機会が出来たから、ジュエリーショップに行こうとお願いしたのだ。

「これ、小さいけど、真ん中に紫の宝石が付いてるんだな。すずか

の髪の色と同じだ……」

「うん。これサファイアだね。でも、無理しなくて良いよ。こんな高いやつでなくても……」

正直これは魅力的だけど、天然サファイアだけにお値段も相当高い。

「大丈夫。色んな任務をやってるから、危険手当は結構あるんだ」

「でも……」

「少しは見栄はらせて。毎回買う物じゃないんだから、ちゃんとした記念品を渡してあげたいんだ」

「フィル君……。ありがとう！！」

結局フィル君は、そのペアリングを購入してくれて、私に手渡そうとしてくれたんだけど……。

「兄さん、せっかく恋人が一緒にいるんだから、指輪……つけてあげたらどうだい」

「「えっ……？」」

店員のお兄さんが、指輪を交換したらどうだと勧めてくれ……。

「兄さん、女の子は、こういったことがすごく喜ぶんだから、やってあげな」

「……そう……なのか？」

「うん……。そうしてくれたら、すごく嬉しいな」

フィル君は最初恥ずかしがっていたけど、して欲しいというと……。

「じ、じゃ……」

フィル君は女性用の指輪を、店員さんから受け取り、私の右手をとり、その指輪を薬指にそっとはめてくれた。

「……ありがとう。大切にするね」

そして私も、同じように男性用の指輪を店員さんから受け取り、同じくフィル君の右薬指にはめた。

「な、なんか……照れるな」

「私もだよ……。でも、それ以上に嬉しいよ」

周りが私たちの事を見ていて、『熱いね』とか『お幸せにね』とか様々な声が飛んできた。
ハッと気づいたときは既に遅く、いつの間にか相当の人が私たちの周りにいた。

二人とも顔が真っ赤になっていたけど、それでもとっても良い思い出になったかな。

＊　　＊　　＊

「やれやれ……。色んな事があったな」

「そうだね。でも、私は楽しかったよ♪」

夜になり、俺たちはクラナガンのホテルの一角に来ていた。
昼間、ずっと街で遊びまくっていたから、早めに戻ろうって言ったんだけど……
すずかが、『フィル君、今日は六課に戻りたくないな』と俺に言ってきた。

その言葉の意味が分からないほど、俺も馬鹿ではないから……。

「本当に……楽しかったよ。今日は……」

「ああ……。俺もだ」

さっき俺たちはベッドサイドに座って、すずかも俺の肩に、自分の頭をコトンと乗せ、俺に甘えてきていた。

俺もすずかの長い紫の髪の毛に触れ、その感触を楽しんでいた。

髪の毛に触れると、すずかも目を細めて、さらに甘えてくる。

「こんな風にいられるのは……あと一週間もないんだね」

「ああ……」

そう……。

すずかは地球の人、俺はミッドの人間。

だから、こうしていられるのはあと僅かしかない。

「フィル君……」

すると、すずかが……

「お願い……離れていても、心が一つだって思えるように……いっぱい……いっぱい、抱いて」

「もう……止まれないからな」

「そんなことしないよ。だって、フィル君のこと……愛してるから……」

「すずか……」

「うん……」

気がつけば俺たちは、キスをしていて、最初はただ唇が触れる程度の物だった。

だけど、すぐに物足りなくなり、舌を絡め合うキスになり、息継ぎを何度も繰り返し、満足したときはお互いの間に銀色の証ができあ

がっていた。

「フィル……くん……私……その……」

「すずか……」

すずかが頬を赤らめ、恥じらっている。
そんなすずかがとてもいとおしくなり、そして同時にもっとすずかを味わいたい。

そう思った俺は、すずかの上着、そしてブラをはぎ取っていた。

「……恥ずかしいよ」

「綺麗だよ……すずか」

「あり……がとう。フィル君にそう言って貰うと……嬉しい……」

「すずか……」

「あっ……んんんっ……そこ……いい……」

すずかの喘ぎ声は、俺の理性を溶かすのに十分すぎるぐらいの起爆剤だった。
こうして自分の好きな人が、俺の手で気持ちよくなってくれる。

それだけで俺は嬉しかったから……。

「ねぇ……。もう、いいよ。一つに……なろう」

「本当に良いのか？　今ならまだ……」

「フィル君、それは覚悟を決めた女の子に失礼だよ。だから……」

すると、すずかが俺にキスをしてくる。

「いっぱい……いっぱい、フィル君を感じさせてね」

「そう…だな。今のは失礼だったな。じゃ……いくよ」

「うん……」

そして俺とすずかは、一つなり……

それは、身体だけでなく、心も気持ちよくなり……

その行為は、幾度となく繰り返され……

俺とすずかは、離れても心がつながっていると感じられるように……

深く……深く……

お互いの存在を求め合った……

＊　　＊　　＊

「ここで……いいのか？」

「うん、地球まで送ってもらったら、その後が辛くなっちゃうから……」

「そっか……」

すずかが帰る今日、俺は六課隊舎前ですずかを送り出すこととなった。

最初は俺がワープで地球まで送ろうかと思ったんだけど、すずかが、それだとかえって辛くなるからと言うことで、ここで別れることになった。

「フィル……君。かならず……必ず、私そっちに行くから！！　それまで、無茶しちゃ駄目だからね！！」

「ああ、待ってる。俺も必ず、すずかを迎えに行くから……」

六課解散後、俺はフェイトさんの元で執務官になるべく補佐官をすることになっている。

執務官資格をとりさえすれば、レジアスの親父さんのコネになってしまうが、すずかの通行許可書も発行してくれることになっている。

執務官がその責任者になることが条件なので、俺自身がとらなければならない。

フェイトさんが、代わりになってくれると言ってくれたけど、これは俺たちの問題なので、そこまでお世話になるわけにはいかない。

「フィル君、私もこっちで一生懸命頑張って、フィル君を支えられるようになるからね」

「すずか……」

本当は、泣きたいはずなのに、彼女は涙をこらえて笑って別れようとしてくれてる。
俺も本当は泣きたいけど、だけど、それをしたら彼女の気持ちを無にしてしまうから……。

「じゃぁな……。すずか」

「うん……また、会おうね。フィル君」

これは永遠の別れじゃない……。

これは、俺たちが成長するための必要な別れ……。

だから、前を向いて進んでいこう……。

二人の未来が一つになると信じて……。

# ＢＡＤ　ＥＮＤ（前書き）

これは、本編のｉｆの話です。
本編やｉｆ　ｅｎｄｉｎｇの雰囲気が好きな方は、引き返してください。

**BAD　END**

「ふぅ……やっと、お仕事が終わったよ……」

私は臨時のお仕事で、クラナガンに出張に行っていた。
本当は六課でパーティーに参加していたはずなのに……

「まったく……本当なら、フィルと一緒に楽しく過ごしていたはずなのに……」

「でも、これが買えたから良いかな？」

手に持っていたのは、クラナガンでも有名な洋菓子店のクッキーだった。
これを一緒に食べるんだ。

「……あれは？」

寮に戻ろうとして、ふと目に付いたのは、海岸で空を見上げていたフィルの姿だった。

＊　　＊　　＊

「……ん……そうだ、脅かしちゃおっと♪」

私はフィルに気づかれないように、そっと近づいて行った。
そしてすぐ近くにまで来ると、フィルの呟きが聞こえてきた。

「終わったな……」

《そうですね……やっと終わりましたね》

「パーティ……楽しかったな……」

《マスター……は、はい……マスター……》

「これで……最後かと思うと……寂しいな……俺の役目も……これで終わった……そして……」

「……後は……俺が、消えるだけか……」

『えっ？』

私は思わず、持っていた缶ジュースを落としてしまった。
その音で、フィルに気づかれてしまった。

「誰！？……フェイト？　いつから、そこに？」

フィルの言葉に、私は震えが止まらなかった。
うそだ、そんなのうそだ！！

「どういう……事……なの……」

「……」

「フィル！！」

「……元々、俺の命は、あの時に……クアットロに殺された時に、
終わってたんだ。女神に命をもらったけど、未来が変わった以上、
俺は、ここにはいられない……」

「そんな！！……ど、どうして……」

私の目からは、ぽろぽろと涙が零れていた。
さっきまでの楽しい気持ちが嘘のように、心の中は悲しみに満ちていた。

震える手から、持っていたクッキーがこぼれ落ちてしまった。

「これは？」

フィルがクッキーの入った包みを拾って、中身を見ると優しく微笑んだ。

「これ……俺たちがよく話していた、あの店のだね？　食べてもいい？」

「……うん、いいよ」

私は泣きながらも、何とかと頷いた。

「モグモグ……うん、おいしい。ありがとう、これ、美味しいよ」

そう言ってフィルは、私に一つ差し出した。
私はそれを食べてみたが……

「なっ、美味しいだろ？」

「……美味しくなんか……無いよ……これだったら、フィルが作ってくれた方が、よっぽど美味しいよ……」

「だって……こんなに……グス……しょっぱいんだよ……グス……」

「フェイト……」

「嫌だよ！！　居なくならないでよ！！」

私は、我慢しきれなくなって、フィルに抱きついた。
そして、そのままフィルの胸で泣き続けた。

そんな私を、フィルは優しく抱きしめて、頭を撫でてくれた。

「フェイト……俺も、本当は一緒にいたかった。一緒にいて、色んな所に行ったり、笑ったり、怒ったり、泣いたり……してみたかった……」

「だったら、一緒にしていこう！！　フィルはまだ、全然幸せになって無いんだよ！！　約束したじゃない……ずっと……そばにいるって……」

「幸せだったよ……フェイトと出会って、恋人同士になって……そして、俺にたくさんの優しさをくれた……たった一つだけ……心残りは、そばにいられないことかな……」

「フィル……」

フィルは私を抱きしめ、泣きながらそう言ってくれた。
目を開き、顔を見上げてみると、フィルの身体が、淡い光に包まれていた。

そして、フィルが段々と……消えていっている……

「どうやら……本当に……お別れだ……」

「嫌だよ！！　こんなの……こんなの……嫌だよ！！」

「フェイト……」

「お願いだよ……消えないでよ！！　ずっと、私のそばに居てよ！！」

抱きしめたフィルの体から、温もりが消えていっている……
そして……その体は、光の粒になって空へと昇っていってる。

「フェイト……こんな俺を、好きになってくれて……本当に……ありがとう……幸せに……なってね……俺の大好きな……フェイト……」

フィルの体は消えていった……

私の腕の中から……

この世界から……

そして……そこに落ちていたのは……

「プリ……ム……？」

フェイトは、それを拾い……

「ねぇ、プリム……」

《……》

しかし、何も反応はしない……

マスターを追って、魂が消えてしまったかのように……

「おねがい……応えてよ……プリム……」

「これから……どう生きていけばいいの……愛する人がいない……

この世界で……」

フェイトの悲しみに、答えてくれる人はいない……

空には、物言わぬ月が光っていた。

＊　　＊　　＊

「ねぇ……フィル、この2年の間……色々な事があったんだ……」

「ティアナはね、私の元で執務官補佐をして、執務官になったし、スバルもレスキューの仕事をしてるんだよ。なのはもはやても、それぞれ教導官と捜査官をしてるしね。みんな、それぞれの道で頑張ってるんだ……」

私がいるのは2年前、フィルと別れた海岸だった。
ここに来れば、フィルに会えるかもしれない。

この2年間、そんな気持ちで、ここには何回も来ていた。

「でもね……」

取り出したのは、一つのカプセル……

「もう……待つの……疲れちゃったよ……」

フェイトは、そのカプセルを飲み込み……

「フィル……」

ねぇ、フィル。こんな事をした私を、あなたは怒るよね。
でも、あなたの居ないこの世界で、一人で生きていくのは、もう駄目なんだよ……

そっちに行ったら、たくさん怒って良いから……

そのあとは、私を受け入れてね……

そして、いっぱい……抱きしめてね……

愛してるよ……フィル……

# ＢＡＤ　ＥＮＤ　ＩＦ（前書き）

この話は、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』を書かれてます、神崎はやて先生より、頂いた作品になります。

この作品も、一つのＩＦとしてお楽しみいただければ、幸いです。

# BAD END IF

戦いは終結した。

その後六課の隊舎も無事復活し、六課メンバーは今、ささやかながら祝勝パーティを行っていた。

料理を作ったのは、フィルとはやて。スバルとエリオという大食いコンビがいるため、必然的にそれは膨大な量となった。

その場の誰もが勝利を喜び、笑顔に包まれていた。

フィルはそんな皆を、部屋の端でちびちびとジュースを飲みながら満足げに見つめている。

彼女らを見ているだけで実感できる。

女神に命を貰い、力を貰い、過去へ来た自分がしてきたことは、決して無駄ではなかったのだと。

こうして彼女らの笑顔を見ることが出来たことが、誰でもない、フィルにとって一番の喜びであった。

そして、パーティも佳境に差し掛かった頃。

フィルは1人で、そっとパーティ会場を後にした。

去り行くフィルの背中を、1人の女性が見ていたことにも気づかずに。

「くっ、うぅ……」

浜辺まで来ると、フィルは1人、よろよろと砂の上へ倒れこむように腰を降ろした。

息は上がり、気だるそうに開かれた目が金色に輝く月を見上げる。

「いい、風だな。プリム……」

『ええ、そうですね。マスター』

待機状態のデバイスへ話しかける。

フィルの髪を、さらさらと風が撫でながら通り過ぎていく。

それが心地よくて、フィルはその身を任せる。

しかし――――――。

「ごほっ、ごほっ……」

『マスター！？』

咳き込むフィル。

その口に当てた手に、紅い迸りが付着し、夜の闇に黒々とした様相を放っている。

言うまでもなく、スパイラルを使った反動である。

「そろそろ、限界か……」

フィルはそう言って、自嘲した。

生命力を直接魔力エネルギーに変換する最後にして最大のシステム、スパイラルシステムを使ったのだ。これまでフィルが命を保っていられたのは奇跡だった。

実を言うと、これまでフィルはその驚異的な精神力でなんとか平静を保っていたのだが、それも体同様、限界に近かった。

「プリム……」

『……何ですか、マスター？』

「パーティ、楽しかった、な……」

『はい……』

「皆の笑顔が、見れたんだ……。もう、悔いはない、さ……」

言葉が途切れ途切れになる。

限界が近く、言葉を発するのもやっとの状態だ。

それでも、フィルは話し続ける。

まるで、この世に未練を残すまいとするかのように。

「皆、……フェイト。俺が、いなくて、も……幸せ、に……」

そう言い残し、目を閉じようとした。

その時。

「そんなの嫌だよ！」

不意に、そんな声がした。

振り返ると――――――。

「フェイ、ト……」

微笑み、崩れようとするフィルの体を抱きかかえ、フェイトは声の限り叫んだ。

「フィル！　しっかりして！　フィルッ！！」

「フェイ、ト。俺は……もう…だめ、だ」

「そんな……しっかりしてよ！　諦めちゃだめだよ！　今、シャマルを……」

「無駄だ…よ」

慌ててシャマルを呼びに行こうとするフェイトを、フィルの弱々しい声が呼び止める。

「解るんだ。女神に…貰った命、は……スパイ、ラルの時、使って、しまった……から。今、俺が生きていられるの、は……残り僅かな、残り滓みたい、な…命の、おかげだ、って……」

そんなフィルにフェイトは、ついに泣き出してしまった。

止め処なく流れ落ちる涙が、フェイトの陶器のように繊細で美しい顔を流れ落ち、服を濡らす。

「泣かない、で、くれ……フェイト」

「そんなの、無理だよぉ……」

「頼む、から。フェイト…に、泣き顔なん、て……似合わ…ない。だから……」

微笑み、彼女の頬に手を当て。

「今は……笑っ、て？」

「フィルッ！」

堪らなくなって、フェイトはフィルを抱き寄せた。
絶え間無くこぼれ落ちる涙の雫が頬を伝い、フィルの首筋に流れ落ちる。

「フェイ、ト。お願い…だ。俺が、いなくて……も、幸せ……に……」

終わりは、とても安らかに。
フェイトの頬に添えられていたフィルの手が、

「いや……」

何の抵抗もなくするりと滑り落ち、

「いや……」

力なく崩れ落ちて、砂浜に弱々しく横たわった。

「いやあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　フィル！　ねえ、フィル！　嘘でしょ！？　嘘って言ってよ！！　帰って、来てよ……」

涙がぽつぽつと、まるで雨のようにフィルの安らかな笑顔を濡らす。

自分の、誰よりも大切な人との、大切な日々。

それが、こうもあっさり崩れ去った。

もう彼は帰ってはこない。

以前のように、先程まで自分にしてくれていたように笑っては……

…くれない。

「フィルーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

神々しく神秘的な月光に照らされた夜の闇に、フェイトの慟哭が高く木霊した。

「……イトさん、フェイトさん！」

「え？……あ、ごめん。ティアナ」

隣のティアナから呼びかけられ、フェイトは思考の海から帰還した。

どうやら、いつの間にか物思いに耽ってしまっていたらしい。

「お疲れですか？」

「ううん、大丈夫。ただ、ちょっと昔のこと思い出しちゃって」

「フィルのこと……ですか？」

ティアナの問いにフェイトは答えることなく、代わりにその顔に苦笑を浮かべて俯いた。

彼、フィルがこの世を去ってから早くも2年が過ぎた。

今は六課の面々もそれぞれの道へ進み、それぞれの人生を歩んでいる。

当初はこの上ない悲嘆に暮れた彼女らだったが、2年という時間が、図らずとも彼女らの悲しみを癒していた。

しかし、フェイトは違う。

六課の運営期間が終了して、助手のシャーリー、それと新たに助手となったティアナとともに職務を全うしなければならなかったのだが、フィルを失ったことによる傷は浅くはなく、1年の間はほぼ仕事にならないほど窶れに窶れてしまった。

それでも最近では回復した方で、1年迷惑をかけた分だと言って、いつも以上に張り切って仕事をしている。

確かにティアナの言うとおり、最近少し無理している所為か疲労がたまっていたのかもしれない。

でも、それだけで2年も前のことを思い出すなんて。

本当に自分は、彼のことが好きだったんだ。

そう思う嬉しさと、ぶり返してきた彼を失ったことによる悲しみが

ない交ぜになって、なんともいえない表情となる。

「す、すみません」

フェイトの心境を察してか、ティアナが申し訳なさそうに頭を下げた。

「あ、ごめんごめん。そういうことじゃないの。もう、大丈夫」

「そう、ですか……。あ、残りの仕事、私がやっておきます。フェイトさんは行ってあげてください」

「え？　でも……」

「いいですから。今日、命日なんでしょう？　行ってあげてください。フィルもきっと喜びます」

「……そっか。じゃあ、甘えちゃおうかな。ありがとう」

「いえ」

フェイトは立ち上がり、上着を着るとオフィスの外へ出た。

車を走らせること数分。

着いたのは、砂浜。

そう、フィルが息を引き取った、あの砂浜である。

「ふぅ……」

吹きすさぶ風にその長い金髪を手で押さえ、フェイトは歩いていった。

墓は他の場所に置かれ、この浜には1つの慰霊碑が置かれていた。

フェイトはそれに近づき、まずは風で砂を被り放題に鳴っているそれを、持ってきた雑巾で綺麗に拭き取った。

それから、道中で買った花束を供え、手を合わせる。

すると。

「あ、フェイトちゃん……」

「なのは。はやても」

声のしてきた方向を見やると、栗色のサイドポニーを揺らしたなのはと、その後から花束を抱えたはやての姿があった。

「来てくれたんだね、2人共」

「うん。この日は仕事入れるわけにはいかないから」

「せや。こんな大切な日の仕事なんて入れたら、罰当たるわ」

「フフフ、そうだね」

微笑み、再び慰霊碑に視線を戻す。

その命を懸けてミッドチルダの未来を救った英雄の墓標は、フェイ

トが綺麗に掃除をした甲斐もあって、太陽を照り返して堂々とした輝きを放っていた。

「……フィル、いい人だったね」

「うん……」

「なのは。はやて」

決意の声音と表情と共に立ち上がったフェイトを、なのはとはやてもまた、真剣な表情で見つめ返す。

「私、決めた。もういつまでも沈んでいるのはやめた。フィルが命を呈して守ってくれたこの世界の未来を、絶対守ってみせる。誰でもない、私達の手で。だから2人共、力を貸して！」

そう言って、フェイトは手を差し出す。

そんな彼女の様子になのはとはやては顔を見合わせ、

そして。

「当たり前だよ、フェイトちゃん」

笑顔でそう答え、フェイトの手の上に自分の手を重ねる。

「そやで。ていうか、私達も一緒やなかったら、怒るで？」

はやてもそう言って、快く手を重ねた。

3人の手がトライアングルを描く。
それは、3人の決意の証。

自分達の大切な人の意思を受け継がんとする、決意の形だ。

「……ありがとう、2人共」

3人は、微笑み合った。

ミッドチルダの未来を命を懸けて守った英雄の物語は、こうして幕を閉じた。

しかし、彼の記憶、思いは残された者に永遠に受け継がれ、決して失われることはないだろう。

そう。これは記憶の物語。

永遠に失われることのない、思いの物語であるのだから。

## ＢＡＤ　ＥＮＤ（ｖｅｒ．夏菜&アルフォンス）（前書き）

この小説は、『魔法少女リリカルなのは～ヒヨリの日記。』を書かれています、夏菜先生より、自作『ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～』の三次作品として、頂きました。詳しくは活動報告で……

## ＢＡＤ　ＥＮＤ（ｖｅｒ．夏菜＆アルフォンス）

「ダメです、魔力結合できません！！　通信も！！」

「しゃあない……歩いて脱出や……」

「でも……なのはさんとフィルが……」

「はぁ……はぁ……大丈夫、歩けるよ……」

「俺も大丈夫です……」

ブラスター３を使ってしまったなのはさんは、その反動で疲れているようだ。

俺もブラスター３は使ったが、かろうじてまだ戦える。

《乗員は所定の位置に移動してください……繰り返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや！！」

俺たちはなのはさんがぶっ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

それに俺はここで、まだやるべき事がある。

「ウインド・ブレス！！」

「「「「きゃあぁぁぁ！！」」」」

ウインド・ブレスで、みんなを吹き飛ばしたが……

「くぅう……」

「なのはさん！！」

なのはさんが、杖を床に突き刺して吹っ飛ばされないようにしていた。

はやてさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は隔壁が閉じる前に出すことが出来たが、隔壁が閉鎖されてしまい、なのはさんを脱出させることが出来なくなってしまった。

「なのはさん、どうして？」

「フィルなら、このあと、どう動くかわかっちゃったから。コア、一人で壊すつもりだったんでしょ？」

「ど、どうしてそれを！？」

決戦前、ユーノからゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシェルではゆりかごを破壊できないと聞かされていたのだ。そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていたのだ。

「そうですか、ユーノさんが……」

「私も、手伝うよ。」

そう、なのはさんが言ってくれるものの、実際は、ほとんどの魔力を消費しているなのはさんでは厳しい。

そう思った俺は、無言で銀色のカートリッジを挿入しようとする。

《駄目です！！　マスター本当に死んでしまいます！！　『スパイ

ラル』だけは使わないって約束したじゃないですか！！≫

「なんなの？……そのスパイラルってのは？」

≪スパイラルモード……ブラスターの最終形態……体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……間違いなく……死にます！！≫

「そんな……駄目だよ！！」

「だけど、だけど！！　ここでコアを破壊しなかったら、全てお終いなんだ！！」

駆け出して、カートリッジを取ろうとしたが、なのはさんの手が、届く寸前にフィルは挿入し終わっていた。

「約束、破りますけど……すみません……」

「……ブラスターシステム、コード・ファイナル……スパイラル……起動！！」

≪Ｂｌａｓｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ　ｃｏｄｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｐｉｒａｌ　ｍｏｄｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！≫

スパイラルを起動した瞬間、魔力は爆発的に上がり、俺の周りは魔力が放電現象を起こしていた。
爆発的に増加した魔力を、俺はプリムの銃口に集中させ、普段の数倍は、あろうかと思う魔力球を作る。

「なのはさん、コアが壊れたらＡＭＦが消えますので……」

必死に、俺を説得しようとしているなのはさんに、クリスタルゲージを作る。

「みんな、ありがとう。そして、幸せになってくれ……」

今まで、合ってきた人たちの顔が、走馬灯のように浮かぶ。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！」

「貫け……閃光！！」

カートリッジがロードされると、魔力は、更にふた回り以上も増大した。

「これで……最後だ！！」

さよなら……みんな……

「スターライト……」

「ブレイカーーー！！」

砲撃を行った途端、自分の生命力が、魔力に還元されていくのはわかった。

視界が霞む、力が抜けて行き、今にも倒れそうになる。

もう、すべての感覚が麻痺している。

手が、優しい暖かさに包まれたと思った後、バリン！！、と音が聞こえ俺の意識は途絶えた。

「フィル、死んじゃだめだよ……フェイトちゃんの為にもね。それから、ヴィヴィオの事、お願いね……」

途絶えそうになってる意識の中、そんななのはさんの言葉を聞いた気がした。

＊　＊　＊　＊　＊

あたしとスバルが聖王の間についたとき、力尽きて倒れていたフィルとなのはさんの姿だった。
ゆりかごから2人を救出し、急いでアースラへ向かう。

「なんで、なんでこんなことになってるの……」

「わかんないわよ!!　私にだって!!」

アースラで2人をシャマル先生に託し、医務室前で待機していた。

「たぶん、スパイラルを使ったんやな」

そんな声に、顔を上げると八神部隊長がいた。

「スパイラル……ですか？」

スパイラルの話は、前にプリムから少し聞いたことがある。
まさか完成していたなんて……

医務室前は、まるで葬儀場のように静まり返り、戻ってきた六課のメンバーが、誰も話もせずに、時間が過ぎていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ここは……？」

気がつくと、俺は医務室に寝ていた。
スパイラルを使ったのに、なぜ死ななかったのだろう？
そんな考えが思い浮かぶも、突然の衝撃に掻き消される。

「よかった！！　よかったよぉおお！！」

フェイトはみんなの前で、恥ずかしげもなく、抱きついてきており、相当心配させてしまったようだ。

そのあと1ヶ月間、俺は精密検査を受け、スパイラルの影響が少なかったこともあり、要、安静ということで退院となった。

プリムのほうは、フレームに大きなヒビが入っていたため、シャーリーさんに任せて、直してもらっている。

退院してからは、あの戦いが嘘だったかのように平和だった。
俺は自宅で安静にしつつも、時折来る、シャーリーさんからの通信で、デバイス調整の話をして過ごしていた。

なにかが足りない……

そんな感覚を受けながら。

あの戦闘から2ヶ月がたち、やっと体調も安定してきた俺は、クラナガンの公園に、散歩に来ていた。事件後から、ずっと付き纏っていた、不足感は拭い切れなかったものの、こうして平和な公園を歩くのもいいものだ、そう思ったときだった。

公園の中心にひとつの大きな石があった。

なぜかわからないが、そこに逝けば、不足感は解消されるような気がして、俺は足早にそこに向かう。

そこにあった、ＪＳ事件慰霊碑。

慰霊碑に書いてあるの名を見た瞬間に、不足感は落胆と後悔に変わった。

なにか、足りなかった物。

それは……

【高町　なのは　新暦７５年、１９歳没】

「見ちゃったんだね……」

そう言われて振り返る。

「フェイト……なんだよ、これ……」

俺にはわからなかった。

あのなのはさんが死ぬなんて、ありえないと。

誰も死なせない為に戻ってきたのに……

「フィル、ちゃんと聞いてね。スパイラルを使ったとき、生命力を使い果たして、死に掛けていたの。なのはは、貴方を死なせないために、スパイラルに無理やり自分の魔力を繋げて……」

「フィルが目を覚ます2日前……なのはは逝ったの……」

「なら、なぜ！！　早く言ってくれなかったんだ！！」

「フィルが自分から立ち直るまで、教えないでいようって、お兄ちゃんとはやての提案があって……」

自分に無性に腹が立った。
こんな大切な人を忘れていたなんて……

そう思い、慰霊碑に触れた瞬間、時が止まり、辺りの色が白くなる。

そう、ここは前に1度来たことがある空間だ。

「女神なのか？　もう1度やり直せっていうのか……」

そう思い、顔を上げるとそこにいたのは、なのはさんだった。

「私ね、後悔してないよ。フィルに命を託したこと……」

「なんでなんですか！！　俺なんかより、なのはさんの方こそ、生きるべきだったはずだ！！」

「フィルは辛い未来を見てきたから、幸せになって欲しかった。フェイトちゃんが、あそこまで好きになる人……今までいなかったしね」

ニャハハと笑いながら、なのはさんはそう言って続ける。

「それに、私もフィルの事、好きだったから……だから生きて欲しかった」

「なのはさん……」

「フィル、フェイトちゃんを泣かせたら、わたしが許さないからね！！　ちゃんとまもってあげるんだよ？」

「はい……守りますよ！！　この命、尽きるまで幸せにして見せます！！」

「うん！！」

そう笑顔で逝ったなのはさんは、桃色の粒子になって消えていく。
周りの色がもどり、時間が動き出した。

「フェイト……俺、なのはさんと約束したんだ。だから、何時までも凹まないよ！！」

「うん、じゃあ……とりあえず、六課に戻ろうか？」

そう言って、俺とフェイトは六課に戻っていった。

＊　＊　＊　＊

7年後

「フィルパパおそ～い！！」

金髪に、オッドアイの少女、ヴィヴィオ・グリードが玄関から、そう叫ぶ。

「にゃはは、パパは集中すると、まったく駄目なんだよね……」

母親似の金髪をサイドポニーテールにして、呆れながら、笑って言っているのは、「ナノハ・グリード」

フィルとフェイトの長女にて現在6歳の女の子。
2人は6年前に生まれた長女に、親友の名前をつけた。

「わりぃ！！　集中してたら遅れた！！」

「ごめんねぇ～」

そう言ってフィルとフェイトが家から出てきた。

＊　　＊　　＊

俺たちは今、あの公園にいる。
7年前、ミッドが恐怖に怯え、俺たちの大切な仲間を失った場所。

『なのはさん……見てますか……今はすごく平和になりました。あなたの名前、娘にあげちゃいましたけど、許してくれますか？』

そんな事を思いながら、慰霊碑に手を合わせてると、『にゃはは、いいよ♪』とでも、聞こえてきそうに思えるから仕方がない。

「はやいな、もう7年たったんか……」

そう声が聞こえ、振り向くとはやてさんがいた。

「あの戦いでいっぱいの人が亡くなったんやな……だからこそ、今を生きる私たちが、平和を守らなアカン」

「私たちはみんな、犠牲になった人のおかげで、今を生きてる。忘れたらアカンよ。ナノハちゃんと、ヴィヴィオもな……」

「「はぁ～い」」

FIN……

## ～Ａｍｏｕｒ　Ｅｔｅｒｎｅｌ～（前書き）

この話は、『魔法少女リリカルなのは～ヒヨリの日記。』を書かれています、夏菜先生と一緒に考えました、もう一つのなのは編になります。

「ダメです、魔力結合できません！！　通信も！！」

「しゃあない……歩いて脱出や……」

「でも……なのはさんとフィルが……」

「はぁ……はぁ……大丈夫、歩けるよ……」

「俺も大丈夫です……」

ブラスター3を使ってしまったなのはさんは、その反動で殆ど動けない。
はやてさんも、魔力が使えなくて、疲れが見え始めている。

《乗員は所定の位置に移動してください……繰り返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや！！」

俺たちはなのはさんがぶっ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

「ウインド・ブレス！！」

「「「「きゃあぁぁぁ！！」」」」

ウインド・ブレスで、みんなを吹き飛ばしたが……

「うっ……くっ……」

「なのはさん！！」

なのはさんが、レイジングハートを床に突き刺して、吹っ飛ばされないようにしていた。

はやてさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は、隔壁が閉じる前に出すことが出来たが、隔壁が閉鎖されてしまい、なのはさんを脱出させることが出来なくなってしまった。

「なのはさん、どうして？」

「フィルがこの後、どう動くかわかっちゃったから……コア、一人で壊すつもりだったんでしょう？」

「ど、どうして……それを！？」

ここに来る前、ユーノからゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシェルではゆりかごを破壊できないと聞かされていたのだ。

そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていた。

「私も、手伝うよ」

なのはさんがレイジングハートを構えるが、ほとんどの魔力を、消費しているなのはさんでは厳しい。

そう思った俺は、無言で銀色のカートリッジを挿入しようとする。

《やめてください！！　『スパイラル』だけは使わないって、約束したじゃないですか！！》

「プリム……スパイラル、って、何？」

《スパイラルモード……ブラスターの最終形態……体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは、封印を解くキーなんです。そして、使えば……間違いなく……死んでしまうんです！！》

「そんな……駄目だよ！！」

「だけど、だけど！！　ここでコアを破壊しなかったら、全てお終いなんです！！」

なのはさんは駆け出して、カートリッジを取ろうとしたが、なのはさんの手が届く寸前に、挿入し終わった。

《……もう、後戻りは出来ませんよ……》

「今更だ……もう、これしかないんだ……」

俺は、みんなを助けるために、過去に戻ってきたんだ。
この命は、そのためにあるんだ。

《……マスター》

「やるぞ！！　プリム！！」

《……はい！！》

「……ブラスターシステム、コード・ファイナル……スパイラル……起動！！」

《Ｂｌａｓｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ　ｃｏｄｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｐｉｒａｌ　ｍｏｄｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！》

スパイラルを起動した瞬間、魔力は爆発的に上がり、俺の周りは魔力が放電現象を起こしていた。

爆発的に増加した魔力を、俺はプリムの銃口に集中させ、普段の数倍はあろうかと思う、魔力球を作る。

「なのはさん、コアが壊れたら、ＡＭＦが消えますので……」

「フィルやめて！！　今すぐスパイラルを止めて！！」

必死に、俺を説得しようとしているなのはさんに、クリスタルゲージを作る。

「幸せになってくださいね……なのはさん……」

今まで、出会ってきた人たちの顔が、走馬灯のように浮かび……

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！」

「貫け……閃光！！」

カートリッジがロードされると、魔力は、更にふた回り以上も増大した。

みんな……

「スターライト……」

さよなら……

「ブレイカーーー！！」

砲撃と同時に、自分の生命力が、魔力に還元されていくのはわかった。

視界が霞み、力が抜けて行き、今にも倒れそうになる。

もう、すべての感覚が麻痺している。

意識を失おうとしたとき……

「だめぇぇぇぇぇぇ！！」

クリスタルゲージが割れる音がし……

そして……

手が、優しい暖かさに包まれた。

「なのはさん！！」

「くぅぅぅぅ……」

「離してください！！　このままじゃ、なのはさんが！！」

スパイラルはプリムのトリガーから、術者の生命力を奪って魔力に変換する。
だけど、トリガーに手を添えていないとはいえ、プリムに触れている以上、少なからず生命力が奪われてしまう。
犠牲になるのは俺だけでいい！！

「いやだよ……フィルが死んじゃうなんて、いや！！」

「フィルが……大好きな人が、死ぬなんて……わたしはそんなの嫌だ！！」

「なのはさん……」

「だから……フィルの苦しみを……わたしにちょうだい……」

そう言ってなのはさんは、プリムのトリガーに指をかけた。
そして、俺への負担を減らしてくれた。

「なのはさん……」

「ねっ、二人でなら……大丈夫でしょう。一緒に撃とう、フィル……」

「……はい……ありがとう、なのはさん」

「じゃ、早く壊して、みんなの所に帰ろう!!」

「はい!! プリム、頼む!! 俺に、そしてなのはさんに……力を貸してくれ!!」

《任せてください!! 全力でサポートしますよ!! だから……三人で、絶対生きて帰りましょう!!》

次の瞬間、なのはさんと俺の魔力が融合し、さっきよりも数段大きい魔力球になっていた。
制御はきついけど、今は一人じゃない。

プリムが、そして、なのはさんがいてくれる……

「「ブレイク……」」

「「シューーーーート！！」」

なのはさんとプリム、そして俺の思いのこもったスターライトブレイカーは、コアを壁もろとも破壊し、コアのあった場所は、巨大な穴が出来ていた。

「はぁ……はぁ……俺たち……生きてるんですね……」

「はぁ……はぁ……うん……そうだよ……生きてるんだよ……」

もう、立っているのがやっとだ……

だけど、なのはさんが一緒に撃ってくれたおかげで、二人とも助かったのか……

「なのはさん……」

「何？」

「さっきの……告白……」

「……本気だよ。わたしは、フィルのことが好き！！　大好きなんだよ！！」

そっか……そうだったんだ。

なんで、あの時、スターライトブレイカーを撃つとき、心が温かい気持ちになったか……

やっとわかった……

「なのはさん……」

「俺も……なのはさんのこと大好きです！！　だから……」

「これからも、俺の心の支えになってください……ずっと……」

「……うん、もちろんだよ。大好きだよ……フィル……」

俺はなのはさんをぎゅっと抱きしめ、まっすぐに瞳を覗き込むと……

なのはさんは瞳を閉じて……

そして、俺は……なのはさんの唇に、キスをした。
キスし終わった後、なのはさんは、俺の胸に身体を預けてきた。

「フィル……ずっと、一緒にいようね」

「そうですね……なのはさん」

「フィル、その話し方……二人きりの時はやめてね。それと、なのは、ってよんで……」

「なのは……」

「うん！！」

こうして、ＪＳ事件は、幕を閉じることになった。
六課のメンバーも、誰一人死者を出すことが無く、終わらせることが出来た。

しかし、俺となのはは、スパイラルを使ったため、入院することになった。
なのはは、一週間で退院することが出来たが、主体で使っていた俺は、入院期間がさらに一週間延長された。

＊　　＊　　＊

「はい、フィル、あーん♪」

「じ、自分で食べられるよ……」

「だぁーめ♪　はい、あーん」

「あ、あーん」

「お、おいしい？」

「モグモグ……おいしいよ、なのは」

「よかった！！　これ自信作なんだよ♪」

こうやって食べるのは恥ずかしいけど、なのはの笑顔を見ると、そんなのは気にならなくなっていた。
やっぱり、好きな人の笑顔は曇らせたくないしな。

「なのは、こうやってお弁当を作ってくれるのは嬉しいけど、無理するなよ。そっちだって病み上がりなんだから……」

「大丈夫だよ。わたしは、フィルが笑顔になってくれれば、とっても嬉しいから……」

「なのは……」

「フィル……」

俺たちは、お互いに顔を近づけ、唇まで後、数センチになったが……

「あ、あの……お二人さん。二人が付き合ってるのは分かってるよ……だけど、そういうことをするのは、せめて私が帰ってからにして！！」

さっきから、この二人、私のことお構いなしで、ラブラブな空間を作っている。
お願いだから、もう少し周りのことも見てよ！！

「「ごめん　（なさい）……」」

＊　　＊　　＊

退院した俺は、六課に復帰したが、事務仕事と言うことで、訓練とかはしていない。
今日も一日が終わり、なのはが俺の部屋に来ていた。

ヴィヴィオは、今日はエリオ達の部屋に泊まりに行っていた。
だから、なのはも気兼ね無しに来ることが出来るのだ。

「そういえば……何で、俺のことが好きになったんだ？」

「ん……」

「表裏がないところかな」

「そっか？　自分では、結構あると思うんだけどな？」

「普段のフィルは、正直だよ。あの時、ゆりかごで、スパイラルのことを、黙っていたこと以外はね……」

「勘弁してよ～～～」

「だぁ～～め。あの時、わたし、すっごく傷ついたんだからね……」

「どうしたら……許してくれる？」

なのはは、俺にぎゅっと抱きついて……

「ずっと……一緒にいて、わたしのことをいっぱい……いっぱい、抱きしめて……」

「でなきゃ、許してあげないからね♪」

「なのは……」

俺は、なのはをベッドに押し倒し……

「あっ……」

「いいか……」

「うん……きて……フィル……わたしを離さないでね……」

そして、俺たちは……一晩中、お互いの気持ちを確かめ合い……

二人は身も心も一つになった。

＊　　＊　　＊

「ねぇ、フィル。これからどうするの？」

「そうだな……」

実は、スパイラルの反動は、予想以上に俺の身体を蝕んでいた。

生命力をかなり使ってしまったため、命こそなくならなかったけど、

魔導師としてやっていくには、正直厳しい。

「六課が解散と同時に、管理局……辞めようと思ってる。そして……」

「平和になったら、やりかたかったもう一つの夢、喫茶店をやる……」

今までは、こんな事考えなかったと思う。
だけど、今は大切な人のため、生きる道を選びたい。

「……それだったら、わたしと一緒にやらない。喫茶店」

「なのは？」

「正直ね。わたしも、今までの無理がたたって、そう長くはやれないと思うの。わたしの思いは、ティアナやスバル達にちゃんと伝わったし、ティアナ達なら、いつかわたしを超える魔導師になれるから……」

「……いいのか。空を飛ぶのは、なのはの生き甲斐だったじゃないか！！」

そのために、あんなに辛いリハビリにも耐えたのに……

俺のために、その夢を捨ててほしくない。

「勘違いしないでね。これは前から考えてたことなの……」

「多分……どんなにやれても、後、1～2年くらいだと思う。スパイラルの影響で、さらにダメージが蓄積されたから……」

「だから、完全に駄目になる前に、辞めようと思うんだ。ヴィヴィオのためにもね……」

「分かった……そこまで思っているなら、もう止めないよ」

「ありがとう……」

「じゃ、そのために一生懸命頑張らなくちゃな……」

「そうだよ、がんばってね。フィル……」

「ああ……俺には、こんなにかわいい彼女がいるんだからな……」

「……ばか」

＊　　＊　　＊

4年後

カランコロン……

「いらっしゃいませ！！」

「おじゃまするっすよ！！」

「おそいよ、ウェンディ！！」

「いやぁ、すまないっす。道が混んでいて……」

「もう、みんな来てるわよ」

店の中にいたのは、スバル、ティアナ、そして、N2Rのメンバーと、聖王教会に世話になっているオットーとディードだった。

「ったく、相変わらずだな。お前の、そのいい加減さは……」

「ノーヴェにいわれたくないっす」

「何だと！！」

「お二人さん……店の中で、喧嘩は止めてくれるかな……」

「「ごめん　（っす）」」

ノーヴェとウェンディの喧嘩を止めたのは、この店のマスターである、フィルだった。

六課解散後、フィルとなのはは管理局を退職し、その時に、二人は籍を入れ、なのはの両親に挨拶にいったのだ。

最初は、翠屋で修行をするつもりだったが、元々フィルは、プロのパティシエの腕を持ってたので、修行は短期間で済んだ。

その後、師匠でもある高町桃子のお墨付きをもらい、二人でミッドチルダに喫茶店を出したのだ。

そして、店の名前をつける時、地球の言葉を参考にした。

『Ａｍｏｕｒ　ｅｔｅｒｎｅｌ』

地球のフランスの言葉で、永遠の愛

その想いを込め、自分たちの店の名前にした。

店の方も、なのはのネームバリューが効いていたおかげで、お客さんがなのはを見たさにやってきた。
段々となのはの力でなく、味で評価されてきて、最近ではよく雑誌の取材を受けるようになっていた。

そして、この店はティアナ達のたまり場にもなっていた。

「あいかわらず、大繁盛ね。今日だって、事前に予約してなかったら、大変だったんだから……」

「すまんな、ティア。夜だと、比較的大丈夫なんだけどな……」

「あんたが謝ることはないわよ。いいじゃない、繁盛してるのは……」

「モグモグ……そうだよ……モグモグ……」

「スバル……食べるか、しゃべるか、どっちかにしろ」

「だって、あたし、普段は滅多にこれないんだから！！」

このメンバーが集まれるのは、あまりない。
大体スバルが、緊急出動でいないことが多い。

「まぁまぁ……いいじゃない。誰かに、迷惑をかけてる訳じゃないしね」

「なのはさん！！」

「みんな、今日は楽しんでいってね。わたしもフィルも、腕によりをかけて作るからね」

「「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」」

＊　　＊　　＊

「ねぇ……フィル」

「何だ？　なのは」

「この店やって……本当に良かったね……」

「ああ……」

この店は、俺となのはの夢だ。

みんなが楽しく、俺の作ったケーキや料理をおいしく食べてくれる。

そして、笑顔になってくれるのが、何より嬉しい。

ここでは、戦闘機人だからとか、そんなのは関係ない。

それは、スバル達を見ていれば、よく分かる。

そして……

「いらっしゃいませ～～～」

「あっ、ヴィヴィオ！！　今日も手伝いなの？」

「はい、パパとママのお手伝いです」

ヴィヴィオはこの喫茶店の制服に着替えて、ウェイトレスをしていた。

学校が終わると、こうして手伝ってくれるのだ。

「そういえば、この雑誌に載ってたぜ。かわいい母娘と素敵なマスターがいるって……」

「何だそりゃ？　かわいい母娘は分かるが……」

「フィル、少しは自覚するっす。視線に気づかないんっすか？」

ここに来ている女性客の半数は、フィルの方を見ていた。
相変わらず、この方面には疎いままである。

「……ノーヴェ」

「は、はい！！」

「その雑誌……見せて……」

なのははノーヴェから雑誌を取り上げると、その記事の所を確認していた。

「な、なんか……なのはさん、こわいぞ……」

「ノーヴェ、なんでそんな余計な物を持ってきたのよ！！　なのはさんにそんな話したら、こうなるって分かってたでしょう！！」

「ごめん、本当に悪かった……」

「ティア！！　そんなこと言ってる場合じゃないよ！！　見てよ、なのはさんを……」

「あっちゃぁぁぁ……」

「……そう……それで、女性客が増えたのね……」

なのはが、不機嫌オーラ全開でいたとき……

「なのは」

「なに、ん……んんん！！」

「「「「「「「「「ああっ！！」」」」」」」」」

俺はみんなの見ている前で、なのはにキスをした。

「……もう、いきなり、なにするの！！」

「そんなの気にするなって……俺が、愛してるのは、なのはだけだから……」

「……もう……ばか……でも、わたしもだよ。愛してるよ……フィル……」

＊　　＊　　＊

「ふぅ……やっと仕事が終わったな」

「そうだね……」

「まったく、パパ、ママ、あんな事もうしないでよ！！　店中でキスをするなんて、リオとコロナに見られたら、わたし、また学校でからかわれるんだからね！！」

「ごめん、ごめん。だけど、あんな雑誌を見たら……」

雑誌にはフィルのことが紹介されていた。

美味しいケーキを作る、イケメンマスター。

そんな風に書かれていて、店に来ていた女性客は、大半フィルのことを見ていた。

「もう、ママがパパのことを、大好きなのは分かるけど……ヤキモチはみっともないよ♪」

「ヴィヴィオ！！」

＊　　＊　　＊

「ごちそうさま。パパ、ママ、ちょっと外で魔法の練習してくるね」

「ちょっと待って、ヴィヴィオ」

「どうしたの、ママ？」

「ヴィヴィオも、もう４年生だよね」

「そうだけど……」

「実はな、なのはと話し合って、そろそろ、デバイスを渡していいんじゃないかって？」

「ほ……ほんとっっ！？」

そう言って、パパが持ってきてくれた箱を開けてみると……

「これ……」

「ああ……」

箱の中に入っていたのは、パパの相棒のプリムだった。

「どうして！！　プリムは、パパの大切なデバイスなのに！！」

「だからだよ。だからこそ、大切な娘のお前に託したいんだ。俺は４年前、スパイラルを使って、魔法が殆ど使えなくなってしまった……だから、お前に全てを託したいんだ……」

「それに、ヴィヴィオの聖王の力は、並半かな物じゃ耐えきれないの。だけど、プリムなら、大人になっても使ってあげられるから……」

「パパ……ママ……」

「だから、受け取ってくれ……俺となのはの思いを……」

パパは箱からプリムを取り出し、わたしに渡してくれた。

「……ありがとう……パパ……ママ……大切にするね」

「そうしてくれ。プリム、今日からヴィヴィオがお前のマスターだ。よろしくな！！」

《分かってます、ヴィヴィオ、これからよろしくお願いしますね》

「うん！！　よろしくね、プリム！！」

「ちなみに、あれも使えるように、データは組んでおいたから、後は自分が使いやすい形にするだけだ」

「実は、ずっと前から決めてるんだ。デバイスを持ったら、これにしようって、ずっと思ってたんだ！！」

＊　　＊　　＊

「マスター認証……ヴィヴィオ・高町・グリード」

「術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド……」

「いくよ、プリム」

《いつでも良いですよ、ヴィヴィオ！！》

「プリム、セーーーット・アーーーップ！！」

セットアップがすむと、そこにいたのは聖王モードの姿をしたヴィヴィオだった。

しかも、何故かフィルと同じく銃型のデバイスも持っていた。

「な、な、な、な！！」

「「やった！！　大成功！！」」

セットアップの成功に、なのはとヴィヴィオは、ハイタッチをしていた。

「なのは、お前、このことを知ってたのか？」

「うん、聖王モードのことは話したよね」

「それは知ってる。何度も見ているしな。だけど、何でわざわざ、おれと同じ銃を……」

「実はね、ストライクアーツやってたんだけど、ある時、フィルのことを……未来でのことを、ティアナから聞いて、それからティアナに、銃の使い方を教えてもらってたの。フィルのようになりたいからって……」

「そうだったのか……なんか、複雑な気持ちだ」

ヴィヴィオはストライクアーツをしていたから、てっきりスバルのような機能を選ぶかと思ったけど、まさか俺と同じ射撃タイプになるとは……

「パパ、勝手にティアナさんから教わっていたこと、ごめんなさい。でも、どうしてもパパのようになりたかった。だから、ティアナさんに教えてもらってたの」

「別に構わないよ。なのはには話してたんだろ？」

「うん、ママも協力してくれたの」

「ったく、なのはも人が悪いぜ。俺に黙っているなんてよ……」

「これでおあいこだよ。フィルがヴィヴィオにプリムを渡すなんて、聞いてなかったんだからね！！　さっき聞いて、びっくりしたんだから……」

「確かにな。俺もなのはとヴィヴィオを驚かしたかったしな……」

「「「あはははは！！」」」

「頑張れよ、プリムを使いこなすようになるまで、大変だと思うけど、困ったら俺やなのは、もしくは師事しているティアに相談しろよ」

「うん！！　ありがとう。パパ、大好き！！」

そう言ってヴィヴィオは、俺に抱きついてきた。
不謹慎なんだけど、その姿だと、ヴィヴィオって、結構胸あるんだよな……

以前も似たようなことがあって、なのは、すっごくヤキモチ焼いたんだよな。
相手はヴィヴィオなのにな。

「ああ～～～　ヴィヴィオ、ずるい！！」

「だったら、ママもパパに抱きつけばいいじゃない。いつもしてる

んだから♪」

ヴィヴィオの言葉に、なのははポンと手を叩いて、名案と言わんとばかりに……

「それもそうだね。えい♪」

「な、なのはまで……ったく、この甘えんぼさん……」

「そうだよ、わたしもヴィヴィオも甘えん坊だもん♪」

「だよ♪」

ヤキモチ焼きで、甘えん坊の年上のかわいい奥さん。

母親に似て、やっぱり甘えん坊のかわいい娘。

そんな二人に囲まれて、俺は幸せをかみしめていた。

願わくは、俺たちの三人の愛が、永遠に続くように……

# ～Ｌｏｖｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ　～（前書き）

夏菜先生とのコラボです。
この作品は、夏菜先生より頂きました。
タイトルの意味は真実の愛です。
～Ａｍｏｕｒ　Ｅｔｅｒｎｅｌ　～とはまた違った形のなのは編になります。
女性の観点から書かれました話をお楽しみください

「ダメです、魔力結合できません！！　通信も！！」

「しゃあない……歩いて脱出や……」

「でも……なのはさんとフィルが……」

「はぁ……はぁ……大丈夫、歩けるよ……」

「俺も大丈夫です……」

ブラスター3を使ってしまったなのはさんは、その反動で殆ど動けない。
はやてさんも、魔力が使えなくて、疲れが見え始めている。

《乗員は所定の位置に移動してください……繰り返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや！！」

俺たちはなのはさんがぶっ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

それに俺はここで、まだやるべき事がある。

「ウインド・ブレス！！」

「「「「きゃあぁぁぁ！！」」」」

ウインド・ブレスで、みんなを吹き飛ばしたが……

「うっ……くっ……」

「なのはさん！！」

なのはさんが、レイジングハートを床に突き刺して、吹っ飛ばされないようにしていた。

はやてさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は隔壁が閉じる前に出すことが出来たが、隔壁が閉鎖されてしまい、なのはさんを脱出させることが出来なくなってしまった。

「なのはさん、どうして？」

「フィルがこの後、どう動くかわかっちゃったから……コア、一人で壊すつもりだったんでしょう？」

「ど、どうして……それを！？」

ここに来る前、ユーノからゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシェルではゆりかごを破壊できないと聞かされていたのだ。

そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていた。

「そうですか、ユーノさんが……」

「私も、手伝うよ」

なのはさんがレイジングハートを構えるが、ほとんどの魔力を、消費しているなのはさんでは厳しい。

そう思った俺は、無言で銀色のカートリッジを挿入しようとする。

《駄目です!!　『スパイラル』だけは使わないって、約束したじゃないですか!!》

「なんなの？……そのスパイラル、ってのは？」

《スパイラルモード……ブラスターの最終形態……体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……間違いなく……死んでしまうんです!!》

「そんな……駄目だよ!!」

「だけど、だけど!!　ここでコアを破壊しなかったら、全てお終いなんだ!!」

駆け出して、カートリッジを取ろうとした、なのはさんの手が、届く寸前に挿入し終わっていた。

「約束、破りますけど……すみません……」

「……ブラスターシステム、コード・ファイナル……スパイラル……起動!!」

《Ｂｌａｓｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ　ｃｏｄｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｐｉｒａｌ　ｍｏｄｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ!!》

スパイラルを起動した瞬間、魔力は爆発的に上がり、俺の周りは魔力が放電現象を起こしていた。
爆発的に増加した魔力を、俺はプリムの銃口に集中させ、普段の数倍は、あろうかと思う魔力球を作る。

「なのはさん、コアが壊れたら、ＡＭＦが消えますので……」

必死に、俺を説得しようとしているなのはさんに、クリスタルゲージを作る。

「幸せになってくださいね……なのはさん……」

今まで、出会ってきた人たちの顔が、走馬灯のように浮かび……

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ！！」

「貫け……閃光！！」

カートリッジがロードされると、魔力は、更にふた回り以上も増大した。

「これで……最後だ！！」

さよなら……

「スターライト……」

「ブレイカーーー！！」

砲撃と同時に、自分の生命力が、魔力に還元されていくのはわかった。

視界が霞み、力が抜けて行き、今にも倒れそうになる。

もう、すべての感覚が麻痺している。

意識を失おうとしたとき……

「だめぇぇぇぇぇぇ！！」

クリスタルゲージが割れる音がし……

そして……

手が、優しい暖かさに包まれた。

「なのはさん！！」

「くぅぅぅぅ……」

「離してください！！　このままじゃ、なのはさんが！！」

スパイラルはプリムのトリガーから、術者の生命力を奪って魔力に変換する。
だけど、トリガーに手を添えていないとはいえ、プリムに触れている以上、少なからず生命力が奪われてしまう。
犠牲になるのは俺だけでいい！！

「いやだよ……フィルが死んじゃうなんて、いや！！」

「フィルが……大好きな人が、死ぬなんて……わたしはそんなの嫌なの！！」

「なのはさん……」

「だから、二人で撃とう……ね？」

そう言ってなのはさんは、プリムのトリガーに指をかけた。
そして、俺への負担を減らしてくれた。

「なのはさん……」

「うん、大丈夫。二人でなら……」

「……はい……ありがとう、なのはさん」

「じゃ、早く壊して、みんなの所に帰ろうか！！」

「はい！！　プリム、頼む！！　俺に、そしてなのはさんに……力を貸してくれ！！」

《任せてください！！　全力でサポートしますよ！！　だから……三人で、絶対生きて帰りましょう！！》

次の瞬間、フィルの魔力に桃色の魔力が結びつき、さっきより数段大きい魔法球になっていた。
なぜか体中が痛いはずなのに、暖かい気持ちが体中を駆け巡る。
制御はきついけど、今は一人じゃない。

プリムが、そして、なのはさんがいてくれる……

「「ブレイク……」」

「「シューーーーート！！」」

なのはさんとプリム、そして俺の思いのこもったスターライトブレイカーは、コアを壁もろとも破壊し、コアのあった場所は、巨大な穴が出来ていた。

「はぁ……はぁ……俺たち……生きてるんですね……」

「はぁ……はぁ……うん……そうだよ……生きてるんだよ……」

なんで、あの時、スターライトブレイカーを撃つとき、温かい気持ちになっただろう……

なのはさん、俺を好きって、大切だって本当ですか？

俺は……俺は……俺も、なのはさんが好きなんです……

そう思い……

「なのはさんが一緒に撃ってくれたおかげで、俺もなのはさんも、二人とも助かったのか……」

そう俺が呟いた途端、俺の体は地に倒れ、駆けつけて来たティアとスバルが、見えたところで俺の意識はなくなった。

＊　　＊　　＊

俺が目覚めたのは、ＪＳ事件終結から５日後。
フェイト隊長、八神部隊長、キャロ、スバル、ティアナ、エリオが囲んで、俺の回復を喜んでくれた。

「なのはさんは？」

「ここにいるよ？」

そう言って、フェイトさんの後ろで、恥ずかしそうに手を上げているなのはさんを見つけた。

「何してるんですか？」

「う、うん……なんでもないよ！！」

なのはさんは、そう言った後病室を走り去っていってしまった。

「フィル、何か、なのはちゃんに悪いことしたんか？」

「フィルぅ？　なのはを泣かせたんだったら、許さないよ！！」

「フィル？　ちょっとお話しよか？」

八神部隊長と、フェイトさんに睨まれ、俺は逃げ口を探そうと、スバルとティアに助けを求めるも、そこには既に姿はなかった。

なんでこうなった……

＊　　＊　　＊

俺も退院し、六課に復帰したが、スパイラルの影響で、思うように魔力が使えず、事務仕事に専念している。

なのはさんとはあれ以来、顔合わせておらず、会ってもなのはさんが、すぐにいなくなる為に、話が出来ない状態が続いていた。

俺の中で、なのはさんに対する気持ちは既に決まっている。

ゆりかごの中で、俺は既に決めていたんだ。

俺が退院した数日後、六課の隊舎も無事復活したことにより、六課

メンバーは今、ささやかながら祝勝パーティを行っていた。
パーティーが終わった後、俺はある場所に向かう。

「なのはさん！！」

そう、ここは。フォワード達の訓練スペース。
今は機械が動いておらず、海の向こうにクラナガンの夜景が見える。

「やっぱり、ここにいたんですね。探しましたよ？」

「フィル、事件のときはお疲れ様♪」

「いえ、なのはさんこそ……あの時はありがとうございました。あの時、助けてくれたから、今、こうして生きて入れるんです」

「……」

「なのはさん！！　あの……！！　俺……なのはさんの事が好きなんです！！」

「え……？」

俺の告白に対して、なのはさんが顔を赤くする。

「え、だって……私、ゆりかごの時に告白しちゃって……それから、上手く話が出来なくって……」

そんな事を言いながら、しどろもどろになるなのはさん。

（こうしていれば、普通の……19歳の女性なんだよな。）

「もう1回いいます。俺はなのはさんが好きです。俺と付き合ってくれませんか？」

「はい……」

「でも、約束して？」

「なんだい？」

「私のことを～さん付けで呼ばない事♪」

「な、なのは。」

「はい♪」

「ところで……何で、俺のことが好きになったんだ？」

「ん……」

「表裏がないところかな」

「そっか？　自分では、結構あると思うんだけどな？」

「普段のフィルはね、すっごく正直だよ。あの時、ゆりかごで、スパイラルのことを、黙っていたこと以外はね……」

「そ、それは、勘弁してよ～～～」

「だぁ～～め。あの時、わたし、すっごく傷ついたんだからね……」

「どうしたら……許してくれる？」

なのはは、俺にぎゅっと抱きついて……

「ずっと……一緒にいて、わたしのことをいっぱい……抱きしめて。私は甘えん坊だから。」

俺は、なのはの体を力いっぱい抱き返した……

＊　　＊　　＊

6年後……

「ごめん!!　ヴィヴィオは、フィルを起こしてきて!!」

「わかったぁ～」

ヴィヴィオは2階に行き、その後ドスン!!、と天井が動く。

「いたた……ヴィヴィオ、起こしてくれるのは助かるが、もう少し優しくできないか？」

「そんなんじゃ起きないでしょ？　フィルパパは」

俺はなのはと六課解体後、すぐに結婚し、クラナガンに家を建てた。

エリオとキャロ、ルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはフェイトさんの元で執務官補佐をして、無事、本局執務官になった。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式に、俺となのはの養子となり、ヴィヴィオ・高町・グリードと名乗っている。

なのははＪＳ事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空戦魔導師としての道を選んだ。ただ、ヴィヴィオもいるためか前ほど、仕事量は多くはしていない。

そして、俺は……

シャーリーさんの元、デバイスマイスターの資格を正式に所得。
なのはのサポートをしつつ、教導隊のデバイス調整をして日々を送っている。

『パパ、ママ、おはよぅ！！』

そして、俺達の子供達、ほのかとコロネ。

5年前に生まれた双子の女の子。
一人はなのは似、もう一人は俺似。

そんな4人に囲まれて、俺は幸せをかみしめていた。

願わくは、俺たちの5人の愛が、永遠に続くように……と。

## ～ June Bride ～（前書き）

この話は、ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ティアナ編の結婚式の話になります。
フィルとティアナの結婚模様をお楽しみください。

## ～ June Bride ～

「これで、ようやく執務官としてやっていけるな」

「そうね。本当に辛かったわよ。この一年……あんたに会えなかったこと……」

「ティア……」

「フィル……」

俺とティアは、この一年、執務官試験を突破するために、それぞれ俺はクロノ提督の元で、ティアはフェイトさんの元で執務官補佐をして、執務官に必要なことを猛勉強した。

その苦労のかいがあって、俺たちは無事一発で合格することが出来た。

なぜ、ここまで必死でやれたのかというと……

「フィル、六課解散の日に約束したこと……覚えてる？」

「ああ……俺たちが執務官になったら、一緒にコンビを組むことだろ」

「それじゃない！！　もっと……大切なことあったでしょう……」

忘れるもんか……
俺はそのことが、心の支えだったんだからな……

「忘れるかよ……ティア……あの約束は、俺の心の支えだったんだからな……」

「……結婚……しよう……ティア」

「……はい」

六課解散の日……
あの時二人で、約束したことは二つ……

一つは一緒にコンビでやっていくこと。
そして、もう一つは……

結婚して、ずっと一緒になる……

それが、ティアとの大切な約束だった。

＊　　＊　　＊

「それにしても、結婚式をするのも大変なのね」

「ああ、こんなに準備が大変だと思わなかったよ。特に招待客の選別……」

「そうね……」

俺たちは、半年後の六月の結婚式のための準備に、四苦八苦していた。

式場とかは、良いところが取れたので、そう問題じゃないのだけど……

「こうして、リストを作ってみると、あたし達って、とんでもない知り合いばっかよね」

「そうだよな……しかも、みんな絶対招待してねって、言われているからな……」

単純にあげられる人だけでも、なのはさん、フェイトさん、はやてさん、そしてフォワードのみんな。
さらに、親代わりとして色々してくれた、レジアスの親父さんとオーリス姉……

「でも、どうしよう。このメンバーじゃ、絶対全員はそろわないわよね」

「だよな。どうしようか……」

そんなことを考えていたら、通信が入ってきた。

『ご機嫌はいかがかな。フィル、ティアナ』

「親父さん!?」

「おじさん!?」

「親父さん、いったいどうしたんだよ。いきなり通信してきて?」

『いきなりはなかろう。儂はお前達が執務官試験が受かったと聞いて、お祝いの言葉をかけようとしただけなんだがな……』

「あ、ありがとう。親父さん……わざわざ」

「本当にすみません。わざわざ……」

『なあに、二人とも儂にとって、子供みたいなものだ。子供のことを心配しない親なんて……いないだろ』

親父さんの言葉は、本当に嬉しかった。

俺たちの事を、本当に思ってくれたんだ。

『そういえば、お前達半年後、結婚するんだったな。どうするんだ、メンバー集めは？』

「その事なんだけど……どうしようかと思って」

『と、言うと？』

「俺の知り合いって、かなり有名人が多いから、みんなの都合を合わせるのが上手くいかないんだ」

実際、今回の日取りを決めるのだって、かなり難航した。

六課解散前から、執務官試験に合格したら、その年の六月に結婚することは、みんなに言ってあったから、六課メンバーは何とかなるんだけど……

『フィル、ティアナ、その心配はないわよ』

「「オーリス姉　（さん）！？」」

『あなたたちが、執務官試験を一発で受かることは信じていたから、スケジュールを調整するときに、六月のこの日は空けられるようにしてあるわよ』

そんなこと言っているけど、レジアスの親父さんは今では、地上の統括をしている重要人物だ。

その人のスケジュールに、穴を空けるのはかなり困難なはずなのに……

『そういうことだ。だから、儂らも是非、お前達の結婚式に出させてもらうぞ』

『フィル、ティアナ、結婚式の前に、一回こちらに顔見せに来てね。色々語り合いたいしね』

「はい、フィルと二人で必ず伺います！！」

『楽しみにしてるわ。その時は事前に連絡してね。どんなことしても暇をつくるから……』

そう言って、二人からの通信は切れた。
親父さん……オーリス姉……
本当に……ありがとう……

＊　　＊　　＊

三月　某日

「フィル、式の参加者リストは何とかまとまったけど、式での料理とかはどうするの？」

「そうだな……」

六月の式まであと三ヶ月。
俺たちは、殆どのことは決まっていたけど、最後の問題として、式場で出す料理とウェディングケーキのことで悩んでいた。
式場はかなり雰囲気の良い所なんだけど、料理の方が普通で、これをどうにかしたかったのだ。

「一応、式の前日に俺が、料理関係を用意しようと思っているんだけど……」

「確かにあんたの料理なら、みんなに喜んでもらえると思うけど、正直あんたの負担が、かなりかかって来ちゃうわよ……」

「でも、一生に一度だからな……これで手抜きをしたくはないんだよな……」

「そうよね……あれ？　通信が入ったわね」

通信を開いてみると、それははやてさんからだった。

『フィル、ティアナ、久しぶりやな』

「「はやてさん！！」」

「お久しぶりです。お元気でしたか」

『フィル、相変わらず堅いな。でも、そっちも変わっていないようで何よりや。遅れてしまったけど、二人とも執務官合格おめでとう』

「「ありがとうございます！！」」

『それとなのはちゃん達から聞いたで。フィル、結婚式の料理で頭

悩ませているらしいな……』

実は、結婚式のことで、なのはさんに相談にして、その時に式場で良いところがあると、なのはさんが見つけてきてくれたのだ。

『あそこは、確かにロケーションは最高なんやけど、料理に関しては普通レベルやしな……』

「そうなんですよね……それでフィルが作るって言ってるんですよ。でも、そうなると、かなり負担になってしまうんです……」

『そんなことだと思ってたわ。そこでや！！』

『今回の結婚式の料理、私に任せてもらいないやろうか……』

「「えっ……？」」

『一生に一度の大切な事や。特にフィルにはかなり助けてもらったし、ここで少しでも恩返しをさせてほしいんや』

「だけど、はやてさんもかなり忙しいのに……申し訳ないです」

『そんなこと心配しなくても平気や。私らの有給はかなり余っているんやで。こんな時に使わなくて、いつ使うというんや。二人は余計な心配はせず、思い出に残る式を挙げてや』

「はやてさん……」

『ほなら、今度会うのは式前日やな。料理の方は任せておいてや！！』

はやてさんは、笑顔で手を振りながら通信を切った。

「フィル……あたし達って本当に、色んな人に支えられていたんだね……」

「ああ……はやてさんになのはさん、そしてオーリス姉……みんな俺たちの結婚式のために……」

「絶対……良い式にしようね」

「そうだな……」

＊　　＊　　＊

五月　某日

俺たちはレジアスの親父さん達に、自宅に招待された。
結婚前に、どうしても俺たちと話をしたかったらしい。

「いらっしゃい、フィル、ティアナ」

「お邪魔します。姉さん」

「遠慮しなくて良いわ。さあ、上がって」

俺たちを出迎えてくれたのは、オーリス姉だった。
ティアも、オーリス姉のことは姉さんといって慕っている。

オーリス姉に案内されて、入った部屋には親父さんが待っていた。

「よく来たな。フィル坊、ティアナ嬢ちゃん」

「その呼び方……久しぶりですね。親父さん」

「まあな。もうお前達は立派な社会人だからな」

「お久しぶりです。レジアスおじさん」

「ティアナ……本当に大きくなったな……」

「はい……おじさんや姉さんが、あたしのことを陰から支えてくれたから、あたしはここまでやってくれたんです」

「そう言ってくれると嬉しい……そうそう、オーリスがお前と話がしたいから、部屋に来てくれと言っていたぞ。儂もフィルと少し語り合いたいからな」

「分かりました。じゃ、フィル後でね」

そう言ってティアはオーリス姉の部屋に行くことにした。
俺も、親父さんと語り合いたかったからな。

＊　　＊　　＊

「それにしても……お前も結婚か……しかもティアナ嬢ちゃんと」

「ええ……俺が結婚なんてするとは、思ってなかったですけどね」

俺と親父さんは、親父さん秘蔵のブランデーを飲みながら、小さかったときのことや六課に入ってからのこと、そして、未来で経験してきたことなどを話していた。

「フィルよ……お前は未来で、ティアナ嬢ちゃんを失ってから、自分は人を好きになってはいけない。そう思っていたな」

「はい……でも、ティアがそれを取っ払ってくれたんです。ティアの一途な思いが……」

「あの子は一度思ったら、それに全力を出すからな。スバル嬢ちゃんとまた違った一途さがある……」

「ええ……本当に……」

「フィル……あの子を幸せにしてやるのが、お前の役目だ。そして……」

「儂は、お前にも、幸せになって欲しい。それが儂とオーリスの心からの願いだ。お前達は儂の自慢の息子と娘なんだからな……」

「親父さん……」

俺は親父さんの前で、涙を流していた。

小さいころの俺たちにとって、レジアスの親父さんはたった一人の理解者だった。

その親父さんに、少しでも恩返しをしたかった。

親父さん……

本当にありがとう……

俺、親父さんの息子で、本当に良かったよ……

＊　　＊　　＊

「今頃、あの二人かなり飲んでいるわね」

「そうですね……フィルも久しぶりにおじさんに会ったんですものね」

「ティアナ、あなた、そんなに飲む口だったかしら？」

「普段はそんなに飲みませんよ。でも、あたしも久しぶりに姉さんに会ったんだもの」

「そうね……」

あたしは別室で姉さんとお酒を酌み交わしている。
そこではフィルの話せないことや、オーリス姉さんの昔話をしていた。

昔姉さんは、兄さんと付き合っていた。
本当なら、兄さんと結婚するはずだったんだけど、結婚直前あの事件が起こってしまい、姉さんは今でも独身を貫いている。
本当に兄さんのことが好きだったんだな……

「ティアナ……」

「はい」

「私は……残念ながらティーダと結ばれることがなかった……」

「そんな思いはわたし達だけで良いわ。だから、必ずフィルと幸せになってね。私とティーダの分まで……」

「はい……ありがとう……姉さん……」

兄さん……姉さん……

本当にありがとう……

あたし、絶対フィルと幸せになるからね……

＊　　＊　　＊

六月　結婚式前日

「ほら、そこ!!　材料が違っているよ!!　明日の式まで時間がないんやから、急いでな!!」

結婚式前日、はやてさんが先に会場入りをしていて、そこで会場のスタッフとパーティー用の料理の下準備と特大のウェディングケーキを作っていた。

「フィル、来てたんか!?」

「ええ、どうしても気になりましてね」

「相変わらず心配性やね。でも、それがフィルやもんね……」

「そういうことです」

「ティアナはどうしてる?　宿泊先でしっかり休んでいるか?」

「大丈夫です。体調も万全ですよ」

「そっか……それならええんや。フィルも明日のために、ホテルに戻って休んでや。ここは私の仕事やからな。当日楽しみにしててや♪」

はやてさんの言葉を受け、俺はホテルに戻っていった。

はやてさんは、俺たちのために今一生懸命料理を作ってくれている。

俺たちは、明日の式を良いものにすることが、はやてさんに恩返しをすることになるんだ。

＊　＊　＊

「いよいよ……明日ね」

「ああ……なんか緊張するな」

ホテルに戻ってた俺は、ティアとベッドに座って外の景色を見ていた。

明日のことを考えると、何か眠れなかった。

「そうね……でも、戦う訳じゃないんだから、もっと肩の力を抜きましょう……ね……」

「そうだな……ありがとう、ティア」

「だから……」

そう言って、ティアは俺をベッドに押し倒し……

「今日は、独身最後の夜……なんだから……いっぱい抱いて欲しいな……」

「ティア、今日は明日のために止めようと思っていたけど、お前から誘ったんだからな。いまさら止めは無しだからな」

「そんなこと……言わないわよ……いっぱい……してね」

俺たちは、キスをしながらお互いの服を脱がし合い……

そして、お互いの体温を感じながら、身も心もとけあった。

＊　　＊　　＊

結婚式　当日

俺とティアは、式場の入り口で受付をしていた。
朝早くから、色んなメンバーが来てくれた。

まず最初に来てくれたのは、スバルとゲンヤさんに引き取られたナンバーズの面子だった。
スバルは俺たちを見るなり、「おめでとう！！　ティア、フィル！！」と大声で泣きながら、俺たちに抱きつこうとしたけど、ギンガさんとチンクがそれを止めてくれたおかげで、衣装を守ることが出来た。

次に来てくれたのは、なのはさんとフェイトさん、そしてヴィヴィオの三人だった。
相変わらず、仲の良いことで手をつないでやってきた。

俺たちも、こんな家族を作っていけたらと思う。

その後も、エリオ達やヴァイス陸曹達も来てくれて、最後にレジアスの親父さんとオーリス姉が来てくれた。

「ええ……ただいまより、フィル・グリードとティアナ・ランスター、両名の結婚式を始めたいと思います。まず最初に、レジアス・ゲイズ様よりご挨拶をお願いいたします」

実は今回の結婚式の司会は、ヴァイス陸曹がしてくれることになった。
本当は式場の人に頼むつもりだったけど、ヴァイス陸曹が俺がやってやると言ってくれたので、遠慮なくお願いすることにしたのだ。
司会の声で親父さんが、壇上に上がり俺たちのためのスピーチをしてくれた。
でも、いつもと違ってすごく緊張していて、マスコミに会見するときと全く違っていた。

「えっと……フィル・グリード君、ティアナ・ランスターさん、ご結婚おめでとうございます。二人には色々話したいことがいっぱいあるのですが、どうにも上手く言えなく……申し訳ない」

「だから、儂からは一言だけ言わせてもらいます。二人とも、お互いのことを信じ、幸せな家庭を作ってください……儂からは以上とさせてもらいます……」

親父さんのスピーチが終わり、会場のみんなから拍手がおこり、俺

たちも嬉しさで涙が出そうになっていた。
言葉は短いものだったけど、本当に親父さんが自分の言葉で話してくれたのはよく分かった。

「レジアス・ゲイズ様、ありがとうございました。続きまして……」

親父さんのスピーチの後、ウェンディとノーヴェが壇上に立った。

「二人とも、今日は本当におめでとっす!!　ティアナ、本当に綺麗っすよ!!　フィル、この幸せ者♪」

「おい!!　もうちょっと真面目に話せ!!　ったく……フィル、ティアナ、今日は本当におめでとう」

「ノーヴェ堅いこと言いっこなしっすよ。こういうときは明るくするのが良いんすから♪」

「あほか!!　だからといってこんな挨拶の仕方があるか!!」

「はは～ん、ノーヴェ、あたしに言いたいこと言われて、妬いてるんすね」

「んなわけあるか!!」

「あはははは！！」

この二人がそろって、堅い雰囲気になるとは思っていなかったけど、本当に予想通りとはな。
でも、こういう方が俺たちの結婚式らしいしな……

その後、収拾が付かなくなりそうだったので、ギンガさんとチンクに止められて、スピーチという名のどつき漫才は終了した。

これ、ビデオに撮っているから、後で見たら、俺たち絶対腹抱えてそうだな……

「……あ、相変わらずだよな……えっと、仕切り直しまして……」

ヴァイス陸曹が、仕切り直しで次のプログラムに進めたのは、エリオとキャロ、そしてルーテシアのお祝いの歌だった。

「フィルさん、ティアさん、ご結婚おめでとうございます。僕たちは皆さんみたいに、上手く言葉に出来ないと思い、キャロとルーと三人で歌を贈ることにしました」

「わたし達も、そんなに上手い訳じゃありませんが……」

「一所懸命……練習しましたので、聞いてください」

曲が流れ始めると、三人は一生懸命歌ってくれた。
それは、三人がこの日のためにいっぱい練習して、覚えて、俺たちのためにしてくれてたというのがすごく伝わった。

曲も友情をテーマにしているもので、エリオ達らしい選曲だと思った。

歌が終わった後は、今日来られなかった人たちの祝電をヴァイス陸曹が読んでくれた。
その中にユーノさんとクロノさんのがあったときはびっくりしたけどな……

「残すところ、誓いの言葉と口づけをするのみとなりましたが、その前に……」

「二人の師匠でもある、高町なのはさんとフェイト・T・ハラオウンさんから、それぞれ一言ずつお願いします」

「「ええっ！！」」

これは、ヴァイス陸曹のサプライズだった。
なのはさんもフェイトさんも急だったので、焦っているけど、でも、二人とも壇上に来てくれた。

「ったく……ヴァイス君、こういう事は先に言っておいてね」

「そうだよ……いきなりでびっくりしたんだからね」

「へへ、すみません。でも、こいつらにお祝いの言葉をかけてやってください。きっと二人とも喜びますから……」

「そうだね……えっと、フィル、ティアナ、結婚おめでとう。いきなりだったから、ちゃんとしたコメントは用意してないから、わたしとフェイトちゃんがそれぞれに一言ずつ贈るね」

「まず、わたしからね。わたしはティアナに贈らせてもらうね。ティアナ、六課の時からみんなのまとめ役として、そしてフィルの支えとして頑張ってきたね。これから二人は色んな困難にぶつかると思います。でも、一人でなく、二人でなら必ず乗り越えられると信じてます」

「二人で駄目なときは、わたしやみんなに頼ってください。決して抱え込まないでくださいね。そしてティアナ、あなたはわたしの大事な一番弟子なんだから、これからも頑張ってね♪」

「なのはさん……はい……」

なのはさんの言葉に、ティアは涙をポロポロ流していた。
嬉しさから来ていたので、押さえることはしなかった。

「じゃ、私からはフィルに贈らせてもらうね。フィル、今日は本当におめでとう。ここにいるメンバーはフィルのことを知っているから、未来のこと言わせてもらうね。フィルは未来であんな辛いことがあって、自分の幸せは二の次にしていた」

「でも、ティアナのおかげで、やっと自分の幸せを考えてくれた。フィル、自分が幸せになってはいけないなんて、二度と考えないでね。フィルにはティアナという、大切なパートナーがいるんだからね。なのはも言ったけど、二人には私達が付いているんだから、困ったときは遠慮なく相談してね」

「フィル……幸せにね……」

「フェイトさん……」

俺もティアと同様、フェイトさんの言葉で嬉しくなってしまい、声を殺しながらだけど、涙があふれてきた。
俺たちは、本当にいい人達に恵まれているんだな……

「なのはさん、フェイトさん、ありがとうございました。そして、

今日のメインイベント、二人の誓いの儀式です」

俺とティアは、神父の前に来て、誓いの言葉をたて……

「汝、フィル・グリード、汝はいかなる時もティアナ・ランスターの事を愛し続けることを誓いますか？」

「もちろん、誓います」

「汝、ティアナ・ランスター、汝はいかなる時もフィル・グリードの事を愛し続けることを誓いますか？」

「はい……誓います」

「では、誓いの口づけを……」

俺とティアは、みんなの見守る中……

誓いの口づけをした……

その後、みんなで記念撮影をしたんだけど、カメラのタイマーをセ

ットしに行ったウェンディが、お約束のボケをしてしまい、結局二回取り直してしまった。

そして……

「それ！！」

ブーケトスをするティアは、幸せにあふれた表情をしていた。
そんな、ティアを見て、みんな笑顔で祝福してくれていた。

これから俺たちは、様々な困難にあうと思う。

でも、なのはさん達の言葉にあったように、一人で駄目でも、二人でなら乗り越えられる……

それが、夫婦というものだから……

ティア……

一緒に、幸せになろうな……

## ～Significant other Thoughts～（前書き）

この話は、本編のフェイト編の結婚式になります。
ティアナ編とまた違った、結婚ストーリーをお楽しみください。

「エリオ君、ルーちゃん、フェイトさんとフィルさんのこと、どう思う？」

「どう思うって？」

「……もしかして、まだなの。あの二人」

「ルーちゃん……ルーちゃんの考えてること、あっているよ。まだなんだ……」

「何？　何なの？」

あのＪＳ事件から、３年……

わたし達は、辺境自然保護隊で忙しい日々を過ごしている。

ルーちゃんとエリオ君は、今では保護隊の皆さんが知らない人がいないと言うくらい、二人の仲は知れ渡っている。

だけど……

「エリオ君……本当に分からない？」

「キャロ……さっきから何の話なの？」

「エリオ……もう少し、女心……勉強しよ……」

「ルーまで！！　いったい何なの……ごめん、僕にはわからない」

「あのね……キャロが言っているのは、フェイトさんとフィルさんのことだよ。あの二人、未だに婚約はしているけど、結婚自体はしてないじゃない」

「二人とも、色んな人は助けているけど、自分たちのことは後回しにしている……特にフィルさんは」

「そういうことか……」

フェイトさんとフィルさんは、本当はすぐにも結婚したいんだけど、上層部が二人に、仕事をやたらと持ってきて、中々時間が取れない状態になっている。

優秀な執務官だからといって、もう少し二人のことを考えて欲しいと思う。

もしかしたら、二人の結婚の妨害工作じゃないかと思うくらいのことだった。

二人とも、正直かなり参っていると、こないだ無限書庫でユーノさんとドゥーエさんから聞いた。

「なんとか……あの二人に幸せになって欲しいんだけど……」

「そうなんだよね……」

「……あの、エリオ、キャロ……私に……考えがあるんだけど……」

「「えっ……？」」

ルーが出した考えはこうだ。

ユーノさんの話によると、クロノ提督とレジアス中将もこの事は危惧していて、何とか少しでも仕事を回さないようにしようとしているんだけど、その前に本局上層部が仕事を入れてしまう。

だから……

「元六課のみんなに連絡して、わたし達でフェイトさんとフィルさんの結婚式をしようっていうんだね！！」

「うん……リンディさんとエイミィさんに協力してもらえれば……こういったことも何とかしてくれるかもしれない」

「あの二人の事を考えると、こうした方が良いと思う……これじゃ、

二人ともかわいそうだよ……」

「僕も賛成だよ。フェイトさん、最近本当に元気がないんだ。フィルさんも長期任務が入れられちゃったから、中々会えないし……本当に酷いよ！！　本局のやり方は！！」

「じゃ、思い立ったら吉日だね。急いでみんなに連絡しよう！！」

「「うん！！」」

こうして、僕たちのフェイトさんとフィルさんの結婚式へのプロジェクトが開始された。

＊　　＊　　＊

「なるほどな……もう強行でやるしかないか……」

「だよね……フェイトちゃん、これじゃかわいそうだよ」

プロジェクトのため、わたしとルーちゃんは地球のエイミィさんの所に来ていた。

エリオ君には、別の所に行ってもらい、他の人へ協力をお願いして

もらっている。

偶々、クロノ提督も帰ってきていたので、この事をクロノ提督にも聞いてもらうことにした。

「ねぇ、クロノ君、本局に打診できないの!?　これじゃ、なのはちゃんの時みたいになりかねないよ……」

「俺も、何とかしたいんだけど、本局上層部が、彼らの能力が高いと言うことで、キツキツの任務を入れてくる。だから、自分たちの結婚の事なんて考えられないほどなんだ……」

「二人とも、似たもの同士ですから……自分たちのことより、困っている人を助けたい。そう思ってしまうんです……」

「あんなに愛し合っているのに……フェイトさんとフィルさん……」

『うーん……』

「だったら、私に任せなさい♪」

「「リンディさん!!」」

「お義母さん!!」

「母さん!!」

そこにいたのは、フェイトさんの義母にして、時空管理局総務統括官のリンディさんだった。

「母さん……いつからいたんだ……」

「さっきからよ。クロノ、話は聞かせてもらったわ。この二人のことは、私の方でも問題だったの。一部の上層部のせいで、二人の未来を潰してしまうんじゃないかって……」

「だから、私の方で三提督の方々に話してみようと思うの。これで駄目だったときは、二人ともレジアス中将の管轄に回すしかないんだけどね……」

でも、今のフェイトさん達にはその方が良いかもしれない。
このままじゃ、本当に潰されてしまうから……

「二人のことは私に任せてね。あなたたちは二人の結婚のことを進めていってね。あの二人はこうでもしないと、式なんて挙げないんだから……それに、早く孫の顔を見たいのよ♪」

「「「「あ、あはは……」」」」

こうして、ハラオウン家の協力を得ることが出来たわたしとルーちゃんは、エリオ君に連絡してはやてさんにその事を伝えてもらうことにした。

＊　　＊　　＊

キャロ達がハラオウン家に行っている頃、僕は、はやてさんの所に行き、六課メンバーに連絡をしてもらえないかとお願いしていた。

フェイトさんに内緒と言うこともあり、自分たちの人脈だけじゃ中々連絡が付けられない人たちもいたからだ。

「今通信が入ったで、リンディさんが全面協力してくれるって」

「そうですか。キャロ達、上手くいったんですね」

「せやな。今度は私達の番やね。あっちが式場とかの関係を進めていってくれるみたいだから、私達がすることは、六課メンバーを集結させて、プランを進めていくことやね」

「はい！！」

「とりあえず、殆どのメンバーには連絡は可能だから、その辺は任

せておいてや。向こうが式場とかを決めてくれれば、後は私が何とかするわ！！」

「ありがとうございます。はやてさん！！」

「安心するのは、まだ早いで。連絡が付いて、みんなのスケジュールが何とかなっても、肝心の二人の予定が出来なきゃアウトや……」

「そうなんですよね……」

そんなことを考えていると、レジアス中将から通信が入ってきた。

『八神、久しぶりだな……』

「「レジアス中将！？」」

『おっ、ハラオウンの所のエリオも一緒か。だったら話は早い』

「どういう事ですか？」

『さっき、ハラオウン統括官から儂に連絡が来た。あの二人のことを何とかしてくれないかってな……』

「「えっ……？」」

『儂も、あの二人には人並みの幸せを掴んで欲しいんだ。それを一

部のバカどものせいで、失うわけにはいかん！！　だから、勤務待遇を改善しなければ、有無を言わさず、地上所属にする！！　そう脅しておいた』

「あ、あいかわらずやな……強引なところは……」

『儂だってこんな強硬手段はしたくないわい。だけどな、このままじゃ高町の二の舞だ。それだったら何と言われようが、本局から引き抜いて少しでもマシなところに行かせる……』

レジアス中将の目は真剣だった。
あの目はフェイトさんが、僕たちのことを思ってくれているときの目と同じだ……

『八神、そう言うわけだから、あの二人のことは儂に任せろ。残念なのは、あの二人の結婚を直に祝えないことだがな……』

「「レジアス中将……」」

『お節介ついでに言っておくが、八神、お前達は式をどうしたいんだ？』

「えっと……一応リンディさんにお願いして、最高の所の式場を……」

『あのな……それじゃ、月並みの結婚式になりかねないぞ。ちゃん

と計画してやるならいざ知らず、短期間でやるんだったら、もっと趣向を変えた方が良い』

「だったら、レジアス中将ならどうするんですか！！」

『八神よ……お前達六課のスローガンは何だったんだ……それを思い出してみろ……』

「「あっ！！」」

僕たちは、すっかり忘れていた。

六課のスローガン。それは……

『家族……だろ……だったら、もっとアットホームなやり方でやってみたほうが良いぞ。儂が言えることはこれくらいだ……』

レジアス中将は、そう言って通信を切った。

「ありがとうございます……私らのやり方……それを思い出させてくれて……」

「はやてさん……」

「エリオ、もう一度作戦会議のやり直しや！！　みんなに連絡して、絶対成功させるんや！！」

「はい！！」

＊　　＊　　＊

三ヶ月後

「それにしても、はやてさんもずいぶんイキなこと考えるわね。まさか、六課跡地を借りて式をするなんて……」

「ええ、レジアス中将がこの日だけですけど、敷地を使える許可をくれたんです」

六課跡地では、着々と式に向けての準備をおこなっていた。
建物自体は、未だに誰も使っていなかったので、掃除をすればいつでも使用可能だった。

これは、いつか六課が復活することを考えて、レジアス中将とクロノ提督が、六課の建物を残していたから出来たことだ。

「キャロ、エリオ、ルーテシア、あんた達からこの事を聞いたときはびっくりしたわよ。でも、こんなイベントに一枚からませてくれたこと、礼を言うわ」

「ティアさん、そんな、こっちこそ済みません。ティアさんこそ忙しいのに……」

「執務官のお仕事は、ハードなのに……」

「本当に済みません……」

「そんなことはいいのよ。それに……」

「あいつには……幸せになって欲しいから……」

「ティアさん……」

ティアさんは、本局でもかなりもてると聞いているけど、未だにそう言った話は聞かない。

キャロが言っていたとおり、フィルさんのこと思っているんだな……

「とにかく、スバルも合流するから、みんなで作戦を考えましょう。絶対成功させるわよ！！」

「「「はい！！」」」

「ティア！！　みんな！！」

「「「「スバル　（さん）！！」」」」

そんな噂をしていると、スバルさんが走ってこっちにやってきた。

「みんな、久しぶりだね！！　元気だった！！」

「スバル……あんたは相変わらずなのね。でも、なんか安心したわ」

「むぅー。ティア、それって、どういう意味」

「そのまんまの意味よ」

「ティア、再会早々ひどいよ～～～」

「「「「あはははは！！」」」」

こうして、フェイトさんとフィルさんの結婚式のため、僕たちは必死で準備をしていった。

期日まで、もう半月もない。

でも、色んな人が二人のことを祝福したいと、心から願っている。

だから、忙しい中こうやって集まってくれたり、色んな手配をしてくれる。

フェイトさん……フィルさん……

みんな、お二人のことを心から好きなんですよ。

その事を、少しでも伝えたいから……

＊　　＊　　＊

当日

「フェイト、ここで六課の同窓会をやるんだね」

「うん。まさか、六課隊舎でやれるなんて思っていなかったけどね」

俺たちは、はやてさんに同窓会のお知らせを受け、六課隊舎にやってきていた。
本当はこの日も仕事が入れられていたんだけど、どういう訳かそれが無くなり、俺たちは二人とも参加することが出来た。

俺も久しぶりに、フェイトとこうやって安らぐ一時を過ごせることもあって、今日を楽しみにしていた。

「行こうか。みんなもう来ているみたいだよ」

そう言ってフェイトは俺の腕に自分の腕を絡ませて、さらに胸を押しつけてきた。

「フェ、フェイト……その……なんだ……胸……」

「わざと当ててるんだよ。フィルが他の女の子に目が行かないように、しっかりとアピールしておかなきゃね♪」

「大丈夫だって、少しは自分のパートナーを信じろよ」

「分かってるよ。でも、私がしたいんだもん。フィルとこうやっていると、すごく落ち着くから……」

「それは……俺もだよ……行こうか」

「うん♪」

俺はフェイトに抱きつかれたまま、六課隊舎の中に入っていった。
入ってみたけど、明かりも付いていなく、どういう訳か人の声も聞こえなかった。

確かに、場所はここであっているんだけどな……

すると、一つだけ、明かりが付いている部屋があり、そこに行ってみると……

パアン、パアン、パパアアン！！

「な、何だ！？」

「な、何なの！？」

いきなりクラッカーの嵐にあったと思ったら、そこには……

『おめでとう！！　フェイトさん、フィル！！』

「み、みんな……これはいったい？」

「今日は同窓会じゃ……ないのか？」

「実は違うんやな♪」

「「はやて　（さん）！！」」

俺たちの前に現れたのは、良い笑顔をしたはやてさんだった。

「フィル、フェイトちゃん。今日はな……二人にここで結婚式をしてもらうために、みんなを集めたんや！！」

「「ええっっっっ！！」」

「驚いたやろ。二人を驚かしたくて、今まで秘密裏にしてたんや。それに……」

「これは、エリオ達が考えたことやで……本局のバカなお偉いさん

のせいで、結婚が出来ないんじゃないかって、心配してたんやで……」

「エリオ、キャロ……」

「ルーテシア……お前もか……」

あたりを見渡してみると、壁一面にお祝いの飾り付けをしていたり、壇上も出来ていて、みんなもお祝い用の衣装に身を包んでいた。

そして……

「あれ……もしかして……ウェディング……ドレス！？」

「「「はい！！」」」

「僕たちのお給料じゃ、あれが精一杯だったんです……」

「でも、はやてさんが色々手直ししてくれたんです……」

「そのおかげで、綺麗なドレスが出来ました……」

確かに、ドレスには色々手直しした後が見られる。

でも、それをはやてさんが手直ししてくれたとは……

「ほんまに、苦労したで。でも、苦労した甲斐があって良いもんが出来たよ♪」

はやてさんの言うとおり、このドレスは有名人が結婚式で着ているドレスみたいに、華やかさと優雅さが備わっている。
下手なドレスなんて目じゃない。

「はやてさん……」

「フェイトちゃん……フィル、エリオ達の気持ち……受け取ったってや……」

＊　　＊　　＊

「はやて……」

はやてからドレスを受け取った私は、その思いを直に感じていた。
このドレスを買うために、エリオ達は自分たちの欲しい物を犠牲にしてまで……

さらに、今日の事も考えてくれて……

「エリオ……キャロ……ルーテシア……本当に……ほんとうに……ありがとうね……」

私はエリオとキャロを抱きしめながら、涙を抑えきれなかった。
三人とも……本当にありがとう

最高のプレゼントだよ……

「フェイトさん……フィルさんと、幸せになってくださいね」

「僕たちは、フェイトさん達が笑顔でいてくれることが、嬉しいんですから……」

「フィルさん……フェイトさんと……お幸せに……」

「ありがとう……ルーテシア……」

フィルも、ルーテシアを抱きしめながら、涙を流していた。
こんな風に祝ってくれるなんて……

みんな……本当にありがとう……

＊　　＊　　＊

「綺麗だよ。フェイトちゃん」

「ありがとう、なのは」

私は別室に行き、エリオ達がくれたウェディングドレスを着て、お色直しをしていた。
フィルも別室でタキシードに着替えている最中だった。

「フェイトちゃん……やっと、フィルと結婚できるね。今まで本当に忙しすぎて、こんな事考えられなかったでしょう」

「うん……正直かなり参っていたかな……私も、フィルも……」

「今後は、あんな殺人的な仕事は無くなると思うから、フィルと幸せになってね♪」

「えっ……？」

「ちょっと……リンディさん達と一緒に、本局のお偉いさんに、『お話』しにいったら、もう、こんな無茶な勤務はさせませんって、涙流しながら言ってたし♪」

「あ、あはははは……」

母さんも、レティ提督も、なのはも、いったい何をしたの？

あの本局のお偉いさんが、涙を流してなのは達の話を受け入れたなんて……

知らない方が……幸せね……

うん。

そう思うようにしよう。

「じゃ、行こうか。フェイトちゃん」

私はなのはに連れられて、フィルの元に行くことになった。
途中で、はやてに連れられたフィルに合流し、その後はエリオ達と交代し、一緒に壇上に向かった。

＊　　＊　　＊

俺たちは、みんなが待っている会場に到着すると、そこには六課メンバーだけでなく、元ナンバーズのみんなも来てくれていた。

ウェンディとノーヴェが、垂れ幕で俺たちの事を祝ってくれて、チンク達は近くに来たとき、それぞれ一言ずつおめでとうと言ってくれた。

本当に、俺が知っている未来と違うんだなって、改めて思った。

そして……

壇上に来ると……

そこには、神父姿のクロノ提督がいて俺たちを待っていた。

「二人とも……結婚おめでとう……」

「お義兄ちゃん……」

「クロノ提督……」

「フィル、今日からは、お前の義兄でもあるんだから……他人行儀はよせよ」

「はい……」

「フェイト、今まで本当に辛いことの連続だったけど、これからは二人で困難に向かっていき、そして、自分たちの幸せをつかんでくれ……」

「ありがとう……ぐす……クロノ……」

俺たちは、クロノ提督が誓いの言葉を読み上げ、それぞれ誓いの言葉を交わし、その後、指輪の交換なんだけど……

なのはさんが持ってきてくれた指輪は……

「これ……」

「もしかして……」

「うん、フィルが持っていた、あのレイジングハートだよ。それを加工して、二人の指輪の宝石にしたの」

あの時、六課で俺のことを話したときに、なのはさんにレイジングハートは返してしまったのだ。
そのレイジングハートを使ったのか……

「どうして……レイジングハートを……」

「あのね……このレイジングハートは、私にとって、とても大切な物だけど、壊れてしまって、悲しい思いをさせているくらいなら、このような形でも、幸せの象徴になって欲しいの……」

「『不屈の心』……それを二人に託したいんだ。未来のわたしでも、きっと……同じ事したとおもうよ……」

「「なのは　（さん）……」」

「受け取ってね……未来のみんなの分の思い……受け取ってあげて

……」

なのはさんから渡された指輪を、フェイトの薬指にはめると、フェイトはなのはさんから託された思いで、涙をポロポロ流していた。

それは、悲しみの涙ではなく、嬉しさから来ていたので、フェイトも涙を抑えることはせず、俺たちもじっと見守っていた。

そして……

二人は……

「……私達……ずっと……一緒だよね」

みんなが見守る仲……

「誓うよ……俺たちは、ずっと一緒だ……」

誓いのキスをした……

＊　　＊　　＊

1年後

「フィル……」

「どうしたんだ。ああ……結婚式の時のだな」

「うん……物置から出てきて、懐かしくなってね」

あの結婚式の後、俺たちは六課跡地で大パーティーを行った。

結婚式の時の、荘厳な雰囲気は全くなくなり、はやてさん達もみんな普段のストレスを晴らすかのように、バカ騒ぎをしていた。

俺たちみたいな職業は、いつ殉職をしてしまうか分からない。

でも、こうやって集まれたときくらいは、楽しく騒ぎたい……

そして、また、こうやってみんなでバカをやりたいな……

「フィル……」

「あの結婚式……本当に嬉しかったね」

「ああ……あれは俺の一生の思い出だよ……」

「これからも……いっぱい……いっぱい……思い出を作っていこうね♪」

俺たちは、本当に色んな人に支えられている……

それは、とても大切な絆……

その証拠に……

俺とフェイトの左薬指に輝く、レイジングハートの宝玉は……

優しい輝きをしている……

俺たちの愛を表すかのように……

# The bonds of friendship（前書き）

この話は、本編epilogueのゼスト殉職の話になります。

# The bonds of friendship

『お願いです……父を……レジアスを助けて……ください』

オーリスから緊急通信を受けたはやては、シグナムを地上には派遣することに決めた。
話を聞いたシグナムとアギトは、全速力で地上におり、そこでオーリスと合流した。

「オーリス三佐!!　レジアス中将はどうなった!!」

「はい……皆さんが、アースラを発進させてから、すぐに最高評議会が動き出して、自分の言うことを聞かない父を拉致してしまったんです!!」

「そっか……」

「それで旦那は無事なのか!?」

「ゼストさんは、別の部屋で軟禁状態でいてもらったから無事よ……」

「まずは……騎士ゼストの力も借りなければな……」

シグナムは、オーリスと一緒にゼストがいる部屋に行き、ゼストを一時的に釈放した。
本来はこんな事許させないが、緊急事態と言うこともあり、オーリスの権限で行った。

もちろん、本来なら懲罰物だが、今のオーリスにとってはそんなことは関係なかった。

「そっか……レジアスが……俺も救出に力を貸そう」

「旦那……」

「アギト……ロードが見つかったんだな……良かったな……」

「うん……」

「騎士ゼスト……私は烈火の騎士、シグナムです……」

「ゼスト・グランガイツだ……済まないな、レジアスのために……本当ならお前も、ゆりかごを攻略するために必要な戦力なのに……」

「そんなこと気にしないでください……私は自分の意志でここに来ました。レジアス中将がいなくなってしまったら、クラナガンは混沌になってしまう。それだけは避けなければならないから……」

実際、レジアス中将が行ってきたことで、何とか治安が保てているところが多い。
例え、スカリエッティを止められても、レジアス中将が死んでしまったら、また治安が崩れてしまう。

「シグナム……すまんな……」

「騎士ゼスト……行きましょう。レジアス中将を助けに……」

シグナム達は、ゼストとレジアス特殊部隊数名と一緒に、レジアス中将救出に向かった。

＊　　＊　　＊

「くっ……何て数のガジェットだ！！」

シグナム達は突入に成功したが、大量のガジェットが現れ、行く手をふさいでいた。

特殊部隊の猛者達が、ガジェットを破壊してくれているおかげで、何とか少しずつだが、レジアスのいる部屋に近づいていた。

そして、サーチャーはレジアスの生命反応がある部屋を見つけ出した。

「ここか！！　俺がやる！！」

「その身体で無茶です！！　ここは私が！！」

「いや……何かあったときのために、お前は温存しておいてくれ……いくぞ……フルドライブ起動！！」

次の瞬間、ゼストの身体から、溢れんばかりの魔力が放出され……

「うおりぁぁぁぁぁぁあ！！」

ゼストがフルドライブを起動し、その槍を振り下ろすと、鋼鉄製の扉は爆音と共に破壊された。

だが、フルドライブの影響で、さらにゼストの身体は限界が来てし

まった。

「ぐっ……はぁ……はぁ……」

「旦那！！　無茶だよ……その身体でフルドライブなんて！！」

「どのみち、この身体は長くは持たん……それだったら、友のために命を使いたい……」

「騎士ゼスト……」

煙が晴れ、そこにいたのはバインドで拘束されていたレジアスの姿だった。

「……ゼ、ゼストか……」

シグナムは、バインドを破壊し、レジアスの容態を確認すると……

「大丈夫だ……衰弱はしているが、命に別状はない。これなら大丈夫だ……」

「そっか……」

ゼストがホッとしていたら、レジアスの背後から鎌のような物が現れ、背後から斬りつけようとしていた。
気づいているのは、ゼストのみだった。

「レジアス！！」

「ゼスト？」

間一髪、レジアスを突き飛ばし、鎌から逃れさせることには成功したが……

「ゼストおおおおお！！」

その代わり、ゼストが鎌の餌食となってしまい、その身体を貫かれてしまった。
そして、さらにゼストの身体を貫き、辺り一面血しぶきがおこった。

「それ以上……騎士の身体を穢すのは許さん！！」

シグナムは、紫電一閃で、ゼストを貫いていたガジェットを撃破し、鎌を引き抜いたが、出血が酷く、さらにレリックウエポンの実験体としての限界がとっくに過ぎていたため、もうその命は燃え尽きようとしていた。

「ゼスト、しっかりしろ！！　ゼスト！！」

「レジ……アス……か……よかった……無事なんだな……」

「お前のおかげだ……お前が、儂をあの鎌から助けてくれたおかげだ……」

「最後の最後で……お前を助けられて……良かったよ……それに、お前の真意も……知ること……が…出来た……しな……」

「済まなかった……お前だけには、真実を話しておくべくだった……そのせいで、お前達を……」

「それを……聞け…た…だけ……で充分だ。お前は……俺たちを……裏切ったん……じゃなか……ったん……だか…らな……ゴホ……ゴホ……」

ゼストの口から吐血がおこり、もうしゃべることも出来なくなってきていた。

「レジ……アス……地上…のこ……と……たのん……だ……から……な」

ゼストはレジアスに全てを託し……

「ゼスト……ゼストォォォォォォ！！」

「旦那！！　だんなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その生涯を閉じた……

ゼストの顔は、親友を助けることができ、安らかな物になっていた。

だが……

その彼らにガジェットの大群が現れ、彼らを消そうと攻撃を仕掛けてきた。

「貴様ら……」

シグナムは、怒りに震え、レヴァンティンを抜き……

「気高き騎士の命を奪うだけでなく、魂をも穢そうとしているのか!!　下郎が!!　許せん!!　アギト!!」

「言わなくてもいい!!　旦那の敵!!　取らせてもらう!!」

「「ユニゾン・イン!!」」

二人の身体が灼熱の炎に包まれ、強い光を放ち始めた。

ユニゾンが完了すると、髪は色素が抜けたような淡い色に、マリンブルーだった瞳も、魔力光と揃いのラベンダーに。騎士甲冑も、籠手の色がシルバーからゴールドに、甲冑自体も濃いピンクを基調と

していたのが、青紫色を基調としたものに変わっていた。

二人からあふれ出す魔力が、２対４枚の羽となって背中から生え、轟々と燃えさかり、怒りを象徴していた。

「やるぞ……アギト」

『おおっ！！　猛れ炎熱、烈火刃！！』

「レヴァンティン！！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

シュランゲフォルム……

鞭状連結刃と化したレヴァンティンに、更にアギトの炎が上乗せされ……

「おおおおお！！」

『おおおおおっ！！』

レヴァンティンを一閃すると、向かってきたミサイルは、それを発射したガジェットもろとも斬り捨てられた。

「剣閃烈火！！」

アギトと共にかざしたシグナムの左手に、剣を模した炎が形作られる。

そして……

『火龍』

「……一閃！！」

勢いよく左手を振り抜くと、二人の炎は、空を斬り裂いて両断した。
次の瞬間、レジアス達を殺そうとしたガジェット達は、その全てが爆散し、消滅した。

しかし、次の瞬間、基地が崩れ始め、辺り一面爆発が起こっていた。
これは、最高評議会が最後の手段として、基地ごとレジアス達を殺そうとしていたのだ。

「急げ！！　ここから脱出するぞ！！」

その後、特殊部隊と一緒に基地を脱出した後、レジアスのことを彼らに託し、シグナム達ははやて達の救援に向かった。

「シグナム、旦那のためにも、この戦い、絶対に勝つ！！」

「ああ……騎士ゼストの魂のためにも、私は負けられん……いくぞ、アギト！！」

「おうよ！！」

みんな……

私が行くまで、生きていてくれ……

騎士ゼストが愛したこの地上……

それを穢す物は……

私とアギトが、全てをなぎ払う！！

## 受け継がれる思い　～風から愛へ～（前書き）

コラボ企画第2弾となります。
今回は、リイン編でありました、はやての新デバイスの話になります。

「やっぱり……ここだけがエラーが出てしまうな……」

「ですね……」

俺とリインは、はやてさんのために新たなるデバイスを作成していた。

最初はインテリジェントで開発していたのだが、はやてさんの能力に対応できず、結局ユニゾンデバイスで開発し直しすることになった。

「基本魔法の処理はどうにかなるんだけど、強力な攻撃魔法とか、複雑な処理とかになると、オーバーロードになってしまうんだよな……」

「フィル……ごめんなさい。私がもっと役に立てれば良かったんですけど……」

「そんなこと無いって、リインが色々データをくれたりしたから、ここまで作ることができたんだから、だからそんな風に思うなよ……」

「ありがとう……フィル……」

実際、リインがくれたデータがなかったら、ユニゾンの仕組みすら分からなかった。
こうして、彼女が支えてくれてるから俺も頑張れるんだしね。

「んっ？　どうしたんですか。フィル？」

「何でもないよ……リインはかわいいなって思ったんだよ」

「……ばか……」

＊　　＊　　＊

数日後

俺たちは、デバイスのことでマリーさんに相談に乗ってもらうために本局に来ていた。
久しぶりに本局に来たので、少し色々なところを回っていたのだが、そこで思わぬ人物にあった。

「フィルさん!!」

「えっ……」

「お久しぶりです。俺ですよ。コルト・リバティです!!」

声をかけられ、振り向いてみると、俺の後輩である、コルト・リバティがそこにいた。
コルトは訓練校での後輩で、今は教導隊に入隊していたはずだが……

「コルト!!　久しぶりだな。元気でやってるか!!」

「はい!!　おかげさまで教導隊で何とかやってます。でも……」

「お前……もしかして、ジャンガさんの元で働いてるのか……」

「……はい」

ジャンガさんは、訓練校で俺たちがいた頃の講師で、散々俺たちもしごかれていた。
ジャンガさん曰く、見込みある奴は徹底的にしごいて鍛えることをモットーにしていた。

そのおかげで、俺とティア、スバルは特別メニューを組み込まれてしまい、クリアするのに大変な思いを何度もさせられた。

卒業の時ジャンガさんは、俺を教導隊にスカウトしようとしたんだけど、卒業してまで一緒だったら身が持たないと思い、謹んで辞退させてもらった。

「コルト……お前まさか……」

「はい……教導隊に入ったのは良かったんですが、ジャンガさんが傍若無人ぶりを発揮して、僕を自分の部下にしてしまったんです……」

「お前も訓練校でかなり優秀だったからな……ジャンガさんもそれに目を付けたんだろうな」

「いえ……僕なんてフィルさんに比べたら……」

「謙遜するなよ。優秀だったからあの人だって、お前をスカウトしたんだろ」

コルトも訓練校じゃトップクラスの成績を叩きだしていた。
そして訓練でも人一倍頑張るやつだったしな。

「そのおかげで……僕は毎日生き地獄を見せられているんです……」

「よく……生きてるよな……お前」

「自分で自分を褒めてあげたいです。あれは訓練じゃありません！！　苦行です、苦行！！」

「あ、あははは……」

確かにジャンガさんの訓練は苦行の名にふさわしいかもな。
というか、なのはさんといい、ジャンガさんといい、教導隊は肉体言語が主流なのか！！

「ほほぅ……てめえら……なかなかおもしろい話してるじゃねえか」

ビクゥゥゥ！！

ま、まさか……

「「ジャ、ジャンガさん！！」」

そこには、泣く子も黙る素敵な笑顔でジャンガさんが、腕組みをして仁王立ちをしていた。

「フィル、てめえ……久しくあってないうちに生意気になりやがったな。おい」

「あ、あははは……お久しぶりです、ジャンガ教導官」

「相変わらずくそ真面目な奴だな。せっかくリインの嬢ちゃんと仲良くやってるのにな」

「ジャンガ！！　からかわないでください！！　私とフィルは、そんな……」

「今更隠すことねえだろ。そんだけくっついていたら説得力ゼロだぜ」

「「あっ……」」

ジャンガ教導官に言われて、俺とリインの今の状況を理解した。

さっきからリインは、ずっと俺の腕に自分の身を預けていたんだった。

この状態で本局内をうろうろしていたら、誰だって分かるな。

「ったく……真っ昼間から砂糖吐かせるなよな。まあいい……そ・れ・に・し・て・も、コルトくぅ～～ん」

「は、はい！！」

「なかなかおもしろい話してたじゃねえか……そんなに俺と『お話』をしたいのかな～～～」

「い、いえ！！　謹んで辞退させていただきます！！」

「遠慮すること無いぜ。丁度訓練スペースも空いてるしな」

そう言ってジャンガ教導官は、コルトの首根っこを掴んで、引きずるように訓練スペースに連行した。

「フィ、フィルさん！！　た、助けてください！！　もう肉体言語は嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「キーッキキキキッッ！！　キィーーーッッキキキキキキキーーーー！！」

あの笑いが出たと言うことは、間違いなく特別訓練になるな。
俺もティア達も、あの笑いが出たジャンガ教導官を見たときは身震いした物だ。

「フィル……」

「リイン……俺たちは何も見なかった。そして……何も聞かなかったんだ……」

「そうですね……」

俺たちがそう思った瞬間……

『ウギャアアアアアアアアアァァァ！！』

「「あっ……」」

訓練スペースの方から、断末魔の叫び声が聞こえてきた。
コルト……南無……

「マリーさんの元に急ごうか。リイン……」
「そうですね……」

＊　　＊　　＊

「それは、災難だったね。コルト君」
「ジャンガ教導官に捕まったのが、コルトの運の尽きですよ……」
「ですね……ジャンガ、相変わらずです……」

ようやく、俺たちはマリーさんの元に着き、遅くなった理由を交え、さっきあったことをマリーさんに話していた。

ジャンガ教導官のことは本局でもかなり有名だった。
ああいった風景は日常で見られるとのことだった。

「まぁ、コルト君のことはこのくらいにして、今日ここに来たのは、

はやてちゃんのデバイスのことだよね」

俺はマリーさんに今までの経緯を説明し終わると、マリーさんは顔をしかめて考え込んでしまった。

「それは……かなり厄介な問題だよね……」

「そうなんですよ……」

俺たちが悩んでいると、扉が開き１０歳くらいの男の子が入ってきた。

「よう……ずいぶん考え込んでいるようだな。マリー」

「だ、誰ですか。このちっちゃな男の子は？」

リインの言葉に、マリーさんは顔を青ざめてしまい……

「あ、あの……リインちゃん……一応、私の師匠なんだ……」

「「えええええええええええ！！」」

な、何の冗談だよ。

こんな少年が、マリーさんの師匠って……

「小さいとは酷だな。否定はしないが……で、なにをしてるんだ？」

「あの……実はですね。はやてちゃんの新しいデバイスについて話してたんですよ」

「そっか……何で悩んでいるんだ？」

「えっとですね……」

「詳しく聞かせてくれないか。あっ、自己紹介を忘れていたな。俺は高坂昭人だ。一応、この馬鹿の師匠をしている」

「あっ、どうも初めまして、フィル・グリードです」

「師匠……馬鹿は酷いですよ……」

「これくらいの問題で悩んでいてどうするんだ。実際お前が解決できない問題を、殆ど俺が解決してきたじゃないか……」

「ううっ……それを言われると……」

マリーさんは、昭人君の言葉でかなり凹んでしまった。

マリーさんをここまで凹ませるって、どんだけ頭が良いんだよ。彼……

「フィル君、君はそのユニゾンデバイスを作るときに、どこをメインに考えたんだ？」

「えっと、ユニゾンと言うことで、一応人格プログラムと複数の情報処理をメインに考えたんですけど……」

「なるほどな……着眼点は良いけど、まだ甘いな」

「というと？」

「一つのプログラムを作るのではなくて、人格プログラムに基本ベースを入れて、もう一つ戦闘用のプログラムを入れて、それを二つに分けて、負担度を軽くしてやればいい。その方が簡単に作れる……」

「でも、それですと、二つデバイスを作らないと……」

「最近のＩＣなら、何とか一つにまとめられるぞ。だから、二つ作る必要はない……」

そして、彼は腕を組んで考える仕草をした後……

「フィル君、今、その試作品は持ってきているかね」

「は、はい、これがそうです……」

俺はポケットから、剣十字の形をしたデバイスを取り出した。
彼はそれを受け取ると、すぐにそれを分析し始め、目に見えない速度でキーボードをたたき出した。

「は、早い……キーボードを叩く動きが全く追えない……」

３０分後……

「よし……これで良いだろう……あとは術者のリンカーコアをコピーすればＯＫにしてあるぞ……ほら」

「「えええええええ！！」」

「う、嘘だろう！！　ここまで考えるのに2ヶ月かかったのに……」

「ほう……2ヶ月か……俺なら3日だな……」

「……自信……なくすぞ……マジで……」

「ですよね……私は、何度もこの光景を見てきたんですから……」

「お察しします……マリーさん……」

俺たち二人は、同じ境遇同士お互いを慰め合っていた。

「だが、独学でここまでたどり着いたのか。なかなか見込みがあるな。フィル君、俺の元で本格的に勉強してみないか。そこの馬鹿弟子より、よっぽど見込みありそうだからな……」

「……酷すぎです……師匠……」

「だったら、お前ももっと勉強しろ。独学でやってるフィル君に負けてるようじゃ、メカニックマイスターとして失格だぞ……」

「……はぁーい」

「あは、あは、あはは……」

もう、苦笑しか出ないよ……
昭人君、どれだけチートなんだよ……

＊　　＊　　＊

「それじゃ、起動させます」

六課に戻った俺たちは、はやてさんのリンカーコアのデータをコピーし、デバイスに入力した。
ポッドの中には、１６２ｃｍくらいの髪の長い凛とした女性が眠っていた。

そして、起動させると……

「ここは……」

「ここは、機動六課メンテナンスルームや。私らのこと……分かるか」

「はい、登録データによりますと、あなたは私のマイスターの八神はやてですね……」

「よっしゃ！！　成功や！！」

「「「やった！！」」」

俺たち三人は、お互い抱き合って喜びを感じていた。

苦労は報われたんだ！！

でも、肝心なプログラムは、昭人君が組んでくれたんだけどね。

「あの……マイスター……」

「はやて、私を呼ぶときは、はやてって呼んでや。それと新しい名前を付けてあげなきゃな……」

「名前……ですか……？」

「リインが祝福の風やから……そうや！！」

「優しき愛……アメリア……どうやろか？」

「あれっ？　はやてさん。リインフォースの名前は受け継がないんですか。？　（ツヴァイ）の次ですから？　（ドライ）では？」

「リインフォースの名前は、リインの物や。この子はリインフォースとは違うし、それをこの子に当てはめるのは失礼やからな」

確かに、リインがいるのに、それをまたこの子に付けるのは失礼な話だろう。

「アメリア……良い名前をありがとうございます。主はやて」

アメリアは、優しく微笑んでお礼を言った。
なんか、落ち着いた感じの女性だな。

「なんか、シグナムみたいに真面目さんやな。それもありやな」

「ですね……はやてさんみたいに突っ走る性格には、合ってるかもしれませんね」

「フィル、それは酷いで！！」

「「あはははははは！！」」

＊　　＊　　＊

「これで、やっと……はやてさんに託せたな……」

「はいです……はやてちゃんのことは、アメリアが頑張ってくれると思います」

「だな……それにしても、アメリアなんか落ち着いた雰囲気だったな」

「フィル、アメリアみたいな女性が良いんですか……確かに私は、アメリアみたいにスタイルは……そんなにいいわけじゃありませんけど……」

「そんなわけ無いだろ。俺はリインが良いの。スタイルとか関係ないから……だから、そんな風にいうなよ」

「フィル……」

「それでも、不安なら……」

俺はリインを自分の方へ抱き寄せ……

「今日は、朝までずっと……リインを求め続けるからな……」

「……いっぱい……抱いてくださいね……私の不安を消してくださいね」

俺はリインの服を全部脱がし、俺も全て服を脱ぎ、リインをお姫様だっこの状態でベッドに連れて行き……

「フィル……」

リインは目を潤ませて、俺と一つになるのを待っていた……

俺はリインを力の限り抱きしめ……

そして……

俺たちは朝まで、離れることはなかった。

デバイスと人間の恋……

これからも色々と不安なことがあると思う……

でも、お互いに信じ合えていれば、乗り越えていける。

これからもよろしくな……

俺の大切な可愛い妖精さん……

## 受け継がれる思い　～風から愛へ～（後書き）

今回の特別主演

プワゾンクロウ先生作品：リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～より、ジャンガ様

イツキ先生作品：魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者より、コルト・リバティ様

夏菜先生作品：　魔法少女リリカルなのは～ヒヨリの日記。より、高坂昭人様

以上の方々に参加していただきました。

## ～Ｄｉａｍｏｎｄ　Ｍｅｍｏｒｙ～（前書き）

今回の話はティアナの結婚式に、リオス君がいたらというＩＦＳＴＯＲＹです。

「これで、ようやく執務官としてやっていけるな」

「そうね。本当に辛かったわよ。この一年……あんたに会えなかったこと……」

「ティア……」

「フィル……」

俺とティアは、この一年、執務官試験を突破するために、俺はクロノ提督の紹介先で、ティアはフェイトさんの元で執務官補佐をして、執務官に必要なことを猛勉強した。

その苦労のかいがあって、俺たちは無事一発で合格することが出来た。

なぜ、ここまで必死でやれたのかというと……

「フィル、六課解散の日に約束したこと……覚えてる？」

「ああ……俺たちが執務官になったら、一緒にコンビを組むことだろ」

「それじゃない！！　もっと……大切なことあったでしょう……」

忘れるもんか……
俺はそのことが、心の支えだったんだからな……

「忘れるかよ……ティア……あの約束は、俺の心の支えだったんだからな……」

「……結婚……しよう……ティア」

「……はい」

六課解散の日……
あの時二人で、約束したことは二つ……

一つは一緒にコンビでやっていくこと。
そして、もう一つは……

結婚して、ずっと一緒になる……

それが、ティアとの大切な約束だった。

＊　　＊　　＊

「それにしても、結婚式をするのも大変なのね」

「ああ、こんなに準備が大変だと思わなかったよ。特に招待客の選別……」

「そうね……」

俺たちは、半年後の六月の結婚式のための準備に、四苦八苦していた。

式場とかは、良いところが取れたので、そう問題じゃないのだけど……

「こうして、リストを作ってみると、あたし達って、とんでもない知り合いばっかよね」

「そうだよな……しかも、みんな絶対招待してねって、言われているからな……」

単純にあげられる人だけでも、なのはさん、フェイトさん、はやてさん、そしてフォワードのみんな。
さらに、親代わりとして色々してくれた、レジアスの親父さんとオーリス姉……

そして、俺がお世話になったあの人には、絶対出席して欲しい……

あの人のことだから、快く出てくれると思うけど、忙しい人だからな……

「でも、どうしよう。このメンバーじゃ、絶対全員はそろわないわよね」

「だよな。どうしようか……」

そんなことを考えていたら、通信が入ってきた。

『ご機嫌はいかがかな。フィル、ティアナ』

「親父さん!?」

「おじさん!?」

「親父さん、いったいどうしたんだよ。いきなり通信してきて?」

『いきなりはなかろう。儂はお前達が執務官試験が受かったと聞いて、お祝いの言葉をかけようとしただけなんだがな……』

「あ、ありがとう。親父さん……わざわざ」

「本当にすみません。わざわざ……」

『なあに、二人とも儂にとって、子供みたいなものだ。子供のことを心配しない親なんて……いないだろ』

親父さんの言葉は、本当に嬉しかった。
俺たちの事を、本当に思ってくれたんだ。

『そういえば、お前達半年後、結婚するんだったな。どうするんだ、メンバー集めは?』

「その事なんだけど……どうしようかと思って」

『と、言うと?』

「俺の知り合いって、かなり有名人が多いから、みんなの都合を合わせるのが上手くいかないんだ」

実際、今回の日取りを決めるのだって、かなり難航した。
六課解散前から、執務官試験に合格したら、その年の六月に結婚することは、みんなに言ってあったから、六課メンバーは何とかなるんだけど……

『フィル、ティアナ、その心配はないわよ』

「「オーリス姉　（さん）！？」」

『あなたたちが、執務官試験を一発で受かることは信じていたから、スケジュールを調整するときに、六月のこの日は空けられるようにしてあるわよ』

そんなこと言っているけど、レジアスの親父さんは今では、地上の統括をしている重要人物だ。
その人のスケジュールに、穴を空けるのはかなり困難なはずなのに……

『そういうことだ。だから、儂らも是非、お前達の結婚式に出させ

てもらうぞ』

『フィル、ティアナ、結婚式の前に、一回こちらに顔見せに来てね。色々語り合いたいしね』

「はい、フィルと二人で必ず伺います！！」

『楽しみにしてるわ。その時は事前に連絡してね。どんなことしても暇をつくるから……』

そう言って、二人からの通信は切れた。

親父さん……オーリス姉……

本当に……ありがとう……

＊　　＊　　＊

三月某日

「フィル、式の参加者リストは何とかまとまったけど、式での料理とかはどうするの？」

「そうだな……」

六月の式まであと三ヶ月。
俺たちは、殆どのことは決まっていたけど、最後の問題として、式場で出す料理とウェディングケーキのことで悩んでいた。
式場はかなり雰囲気の良い所なんだけど、料理の方が普通で、これをどうにかしたかったのだ。

「一応、式の前日に俺が、料理関係を用意しようと思っているんだけど……」

「確かにあんたの料理なら、みんなに喜んでもらえると思うけど、正直あんたの負担が、かなりかかって来ちゃうわよ……」

「でも、一生に一度だからな……これで手抜きをしたくはないんだよな……」

「そうよね……あれ？　通信が入ったわね」

通信を開いてみると、それは俺がお世話になったあの人からだった。

『フィル、久しぶりだね。元気にしてた？』

「「リオスさん！！」」

リオス＝コーネルド執務官
俺が執務官になるために、クロノ提督の紹介でお世話になった、俺が尊敬する執務官だ。

この人には、執務官になるための学力だけでなく、その考え方も教えられた。

『執務官は決して管理局法を押しつけて、任務を行ってはいけない』

その事は基本中の基本なんだけど、執務官になると、どうもそれを忘れて横暴な行為をする輩が多い。

俺はリオスさんに、戦い方だけでなく、人として大切なことを色々教えられた。

実は、未来でも俺はこの人に助けられていた……

未来では、リオスさんは地上で戦っていたんだけど、たった一人でガジェットを数千機叩くことが出来るリオスさんでも、クアットロに道で泣いていた少女を人質に取られ、その優しさ故、クアットロに殴り殺しにされてしまった。

リオスさんの実力だったら、クアットロなんて足元にも及ばないのに……

もしかしたら、リオスさんが生きていてくれたら、あんな未来はならなかったかもしれない……

でも、それはｉｆでしかないけどね……

「お久しぶりです。お元気でしたか」

『フィル、相変わらず真面目だね。でも、変わっていないようで何よりだよ。フィル、執務官はあくまで出発点なんだからね。それを忘れないでね』

「はい！！　その事はずっと忘れてません！！」

『うん、君なら大丈夫だね。それとフィル、結婚おめでとう……やっと好きな人と結ばれるんだね。未来で、かなわなかった恋、やっとかなうんだね。本当、ティアナのことになると惚気るからね。君は……』

「リ、リオスさん……勘弁してくださいよ……」

『ふふふ、ごめんね♪』

リオスさん、すごく面倒見が良いんだけど、時々こうやってからかってくるときがある。
まぁ、ティアとのことを本当に祝福してくれているから、こうやって言ってくれるんだけどね。

「えっ、リオスさんに未来のこと話していたの？」

「まあね。クロノ提督にも許可は得ていたしね。それに……」

「この人は俺にとって、数少ない信頼できる人だから……」

「なんか、ちょっと妬けるわよ……でも……リオスさんの所にいたときでも、あたしのことずっと思ってくれてたんだ……ありがとう、フィル……」

『……本当に君たちは思い合っているんだね。その一途な思いは、羨ましいよ……』

「「リオスさん……」」

『あっ、そう言えばなのはに聞いたんだけど、あの式場を使うんだって？』

実は、結婚式のことで、なのはさんに相談にして、その時に式場で良いところがあると、なのはさんが見つけてきてくれたのだ。

なのはさん達とリオスさんは親友同士だから、その事を聞いていてもおかしくないしな……

『あそこは、確かにロケーションは最高だけど、料理に関しては普通レベルなんだよね……』

「そうなんですよね……場所は最高なんですけど……」

「そんなことを言えるのはあんたくらいよ。あそこだってかなりのレベルだと思うわよ……リオスさん、実はフィルが結婚式の料理を作るって言ってるんですよ。でも、そうなると、かなり負担になってしまうんです……」

『そんなことだと思ってたよ。そこで……』

『今回の結婚式の料理、僕に任せてもらえないだろうか……』

「えっ……？」

『一生に一度の大切な事だからね。自分の大切な教え子には、記念に残る結婚式を挙げて欲しいしね……』

「だけど、リオスさん、かなり忙しいのに……申し訳ないです」

『そんなこと心配しなくていいの。僕の有給は余りまくっているしね。二人は余計な心配はせず、思い出に残る式を挙げて欲しいんだ……』

「「リオスさん……」」

『それじゃ、今度会うのは式前日だね。料理の方は任せてね♪』

リオスさんは、笑顔で手を振りながら通信を切った。

「フィル……あたし達って本当に、色んな人に支えられていたんだね……」

「ああ……なのはさん、オーリス姉……そしてリオスさん……みんな俺たちの結婚式のために……」

「絶対……良い式にしようね」

「そうだな……」

＊　　＊　　＊

五月　某日

俺たちはレジアスの親父さん達に、自宅に招待された。
結婚前に、どうしても俺たちと話をしたかったらしい。

「いらっしゃい、フィル、ティアナ」

「お邪魔します。姉さん」

「遠慮しなくて良いわ。さあ、上がって」

俺たちを出迎えてくれたのは、オーリス姉だった。
ティアも、オーリス姉のことは姉さんといって慕っている。

オーリス姉に案内されて、入った部屋には親父さんが待っていた。

「よく来たな。フィル坊、ティアナ嬢ちゃん」

「その呼び方……久しぶりですね。親父さん」

「まあな。もうお前達は立派な社会人だからな」

「お久しぶりです。レジアスおじさん」

「ティアナ……本当に大きくなったな……」

「はい……おじさんや姉さんが、あたしのことを陰から支えてくれたから、あたしはここまでやってくれたんです」

「そう言ってくれると嬉しい……そうそう、オーリスがお前と話がしたいから、部屋に来てくれと言っていたぞ。儂もフィルと少し語り合いたいからな」

「分かりました。じゃ、フィル後でね」

そう言ってティアはオーリス姉の部屋に行くことにした。
俺も、親父さんと語り合いたかったからな。

＊　　＊　　＊

「それにしても……お前も結婚か……しかもティアナ嬢ちゃんと」

「ええ……こんなに早く結婚なんてするとは、思ってなかったですけどね」

「お前はリオスに色々教えられたな……あいつは本当に世話焼きだからな」

「ええ……今回も結婚式の料理を作ってくれるんです。リオスさんの料理は、下手なコックなんか目じゃないですからね」

「それは言えてるな。儂も一回食べたことがあるが、あれは衝撃的だったぞ……」

俺と親父さんは、親父さん秘蔵のブランデーを飲みながら、小さかったときのことや六課に入ってからのこと、そして、未来で経験してきたことなどを話していた。

「フィルよ……お前は未来で、ティアナ嬢ちゃんを失ってから、自分は人を好きになってはいけない。そう思っていたな」

「はい……でも、ティアがそれを取っ払ってくれたんです。ティアの一途な思いが……」

「あの子は一度思ったら、それに全力を出すからな。スバル嬢ちゃんとまた違った一途さがある……」

「ええ……本当に……」

「フィル……あの子を幸せにしてやるのが、お前の役目だ。そして……」

「儂は、お前にも、幸せになって欲しい。それが儂とオーリスの心からの願いだ。お前達は儂の自慢の息子と娘なんだからな……」

「親父さん……」

俺は親父さんの前で、涙を流していた。
小さいころの俺たちにとって、レジアスの親父さんはたった一人の理解者だった。
その親父さんに、少しでも恩返しをしたかった。

親父さん……

本当にありがとう……

俺、親父さんの息子で、本当に良かったよ……

＊　　＊　　＊

「今頃、あの二人かなり飲んでいるわね」

「そうですね……フィルも久しぶりにおじさんに会ったんですものね」

「ティアナ、あなた、そんなに飲む口だったかしら？」

「普段はそんなに飲みませんよ。でも、あたしも久しぶりに姉さんに会ったんだもの」

「そうね……」

あたしは別室で姉さんとお酒を酌み交わしている。
そこではフィルの話せないことや、オーリス姉さんの昔話をしていた。

昔姉さんは、兄さんと付き合っていた。
本当なら、兄さんと結婚するはずだったんだけど、結婚直前あの事件が起こってしまい、姉さんは今でも独身を貫いている。
本当に兄さんのことが好きだったんだな……

「ティアナ……」

「はい」

「私は……残念ながらティーダと結ばれることがなかった……」

「そんな思いはわたし達だけで良いわ。だから、必ずフィルと幸せになってね。私とティーダの分まで……」

「はい……ありがとう……姉さん……」

兄さん……姉さん……

本当にありがとう……

あたし、絶対フィルと幸せになるからね……

＊　　＊　　＊

六月　結婚式前日

「ほら、そこ！！　材料が違っているよ！！　明日の式まで時間がないんだから、急いで！！」

「そっちも違ってるで！！　それはこっちに使うんや！！」

結婚式前日、はやてさんがリオスさんから料理を作ることを聞いて、式前日に駆けつけてくれて、そこで会場のスタッフとパーティー用の料理の下準備と特大のウェディングケーキを作っていた。

リオスさんもはやてさんも、普段は温厚なんだけど、こと料理に関しては妥協は全くない。
だから、ここのスタッフに檄を飛ばしまくっていたのだ。

「あれ！？　フィルどうしたんや。式は明日やで？」

「ええ、どうしても気になってしまって……」

「相変わらず心配性だね。でも、無理ないかな……」

「はい……」

「ティアナはどうしてるんや？　宿泊先でしっかり休んでいるか？」

「大丈夫です。体調も万全ですよ」

「そっか……さあ、フィルも明日のために、ホテルに戻ってしっかり休んでね。ここは僕とはやての仕事だからね。当日色々サプライズするから、楽しみにしててね」

「そういうことや。フィル楽しみにしててや♪」

二人の言葉を受け、俺はホテルに戻っていった。
はやてさんとリオスさんは、俺たちのために今、一生懸命料理を作ってくれている。

俺たちは、明日の式を良いものにすることが、殺人的なスケジュールを割いて来てくれた二人に、恩返しをすることになるんだ。

＊　　＊　　＊

「いよいよ……明日ね」

「ああ……なんか緊張するな」

ホテルに戻ってた俺は、ティアとベッドに座って外の景色を見ていた。
明日のことを考えると、何か眠れなかった。

「そうね……フィル、もっと肩の力を抜いて……そんなんじゃ明日大変よ。あんたはもう少し、お気楽極楽に考えた方が良いわよ」

「そうだな……ありがとう、ティア」

「だから……」

そう言って、ティアは俺をベッドに押し倒し……

「今日は、独身最後の夜……なんだから……いっぱい抱いて欲しいな……」

「ティア、今日は明日のために止めようと思っていたけど、お前から誘ったんだからな。いまさら止めは無しだからな」

「そんなこと……言わないわよ……いっぱい……してね」

俺たちは、キスをしながらお互いの服を脱がし合い……

「あ……ん……」

俺は、ティアの形の良い胸を触れながら……

「……胸だけじゃ……いや……」

そして、ティアを力一杯抱きしめ……

お互いの体温を感じながら、身も心もとけあい……

俺たちは眠りについた……

＊　　＊　　＊

結婚式　当日

俺とティアは、式場の入り口で受付をしていた。
朝早くから、色んなメンバーが来てくれた。

まず最初に来てくれたのは、スバルとゲンヤさんに引き取られたナンバーズの面子だった。
スバルは俺たちを見るなり、「おめでとう！！　ティア、フィル！！」と大声で泣きながら、俺たちに抱きつこうとしたけど、ギンガさんとチンクがそれを止めてくれたおかげで、衣装を守ることが出来た。

次に来てくれたのは、なのはさんとフェイトさん、そしてヴィヴィオの三人だった。
相変わらず、仲の良いことで手をつないでやってきた。
俺たちも、こんな家族を作っていけたらと思う。

その後も、エリオ達やヴァイス陸曹達も来てくれて、最後にレジアスの親父さんとオーリス姉が来てくれた。

「ええ……ただいまより、フィル・グリードとティアナ・ランスター、両名の結婚式を始めたいと思います。まず最初に、レジアス・ゲイズ様よりご挨拶をお願いいたします」

実は今回の結婚式の司会は、ヴァイス陸曹がしてくれることになった。
本当は式場の人に頼むつもりだったけど、ヴァイス陸曹が俺がやってやると言ってくれたので、遠慮なくお願いすることにしたのだ。

司会の声で親父さんが、壇上に上がり俺たちのためのスピーチをしてくれた。
でも、いつもと違ってすごく緊張していて、マスコミに会見するときと全く違っていた。

「えっと……フィル・グリード君、ティアナ・ランスターさん、ご結婚おめでとうございます。二人には色々話したいことがいっぱいあるのですが、どうにも上手く言えなく……申し訳ない」

「だから、儂からは一言だけ言わせてもらいます。二人とも、お互いのことを信じ、幸せな家庭を作ってください……儂からは以上とさせてもらいます……」

親父さんのスピーチが終わり、会場のみんなから拍手がおこり、俺たちも嬉しさで涙が出そうになっていた。
言葉は短いものだったけど、本当に親父さんが自分の言葉で話してくれたのはよく分かった。

「レジアス・ゲイズ様、ありがとうございました。続きまして……」

親父さんのスピーチの後、ウェンディとノーヴェが壇上に立った。

「二人とも、今日は本当におめでとっす！！　ティアナ、本当に綺麗っすよ！！　フィル、この幸せ者♪」

「おい！！　もうちょっと真面目に話せ！！　ったく……フィル、

ティアナ、今日は本当におめでとう」

「ノーヴェ堅いこと言いっこなしっすよ。こういうときは明るくするのが良いんすから♪」

「あほか！！　だからといってこんな挨拶の仕方があるか！！」

「はは～～ん、ノーヴェ、あたしに言いたいこと言われて、妬いてるんすね」

「んなわけあるか！！」

「あはははは！！」

この二人がそろって、堅い雰囲気になるとは思っていなかったけど、本当に予想通りとはな。

でも、こういう方が俺たちの結婚式らしいしな……

その後、収拾が付かなくなりそうだったので、ギンガさんとチンクに止められて、スピーチという名のどつき漫才は終了した。

これ、ビデオに撮っているから、後で見たら、俺たち絶対腹抱えてそうだな……

「……あ、相変わらずだよな……えっと、仕切り直しまして……」

ヴァイス陸曹が、仕切り直しで次のプログラムに進めたのは、エリオとキャロ、そしてルーテシアのお祝いの歌だった。

「フィルさん、ティアさん、ご結婚おめでとうございます。僕たちは皆さんみたいに、上手く言葉に出来ないと思い、キャロとルーと三人で歌を送ることにしました」

「わたし達も、そんなに上手い訳じゃありませんが……」

「一所懸命……練習しましたので、聞いてください」

曲が流れ始めると、三人は一生懸命歌ってくれた。
それは、三人がこの日のためにいっぱい練習して、覚えて、俺たちのためにしてくれてたというのがすごく伝わった。

曲も友情をテーマにしているもので、エリオ達らしい選曲だと思った。

歌が終わった後は、今日来られなかった人たちの祝電をヴァイス陸曹が読んでくれた。
その中にユーノさんとクロノさんのがあったときはびっくりしたけ

どな……

「残すところ、誓いの言葉と口づけをするのみとなりましたが、その前に……」

「二人の師匠でもある、高町なのはさんとフェイト・T・ハラオウンさんから、それぞれ一言ずつお願いします」

「「ええっ！！」」

これは、ヴァイス陸曹のサプライズだった。
なのはさんもフェイトさんも急だったので、焦っているけど、でも、二人とも壇上に来てくれた。

「ったく……ヴァイス君、こういう事は先に言っておいてね」

「そうだよ……いきなりでびっくりしたんだからね」

「へへ、すみません。でも、こいつらにお祝いの言葉をかけてやってください。きっと二人とも喜びますから……」

「そうだね……えっと、フィル、ティアナ、結婚おめでとう。いきなりだったから、ちゃんとしたコメントは用意してないから、わたしとフェイトちゃんがそれぞれに一言ずつ贈るね」

「まず、わたしからね。わたしはティアナに贈らせてもらうね。ティアナ、六課の時からみんなのまとめ役として、そしてフィルの支えとして頑張ってきたね。これから二人は色んな困難にぶつかると思います。でも、一人でなく、二人でなら必ず乗り越えられると信じてます」

「二人で駄目なときは、わたしやみんなに頼ってください。決して抱え込まないでくださいね。そしてティアナ、あなたはわたしの大事な一番弟子なんだから、これからも頑張ってね♪」

「なのはさん……はい……」

なのはさんの言葉に、ティアは涙をポロポロ流していた。
嬉しさから来ていたので、押さえることはしなかった。

「じゃ、私からはフィルに贈らせてもらうね。フィル、今日は本当におめでとう。ここにいるメンバーはフィルのことを知っているから、未来のこと言わせてもらうね。フィルは未来であんな辛いことがあって、自分の幸せは二の次にしていた」

「でも、ティアナのおかげで、やっと自分の幸せを考えてくれた。フィル、自分が幸せになってはいけないなんて、二度と考えないでね。フィルにはティアナという、大切なパートナーがいるんだからね。なのはも言ったけど、二人には私達が付いているんだから、困ったときは遠慮なく相談してね」

「フィル……幸せにね……」

「フェイトさん……」

俺もティアと同様、フェイトさんの言葉で嬉しくなってしまい、声を殺しながらだけど、涙があふれてきた。

俺たちは、本当にいい人達に恵まれているんだな……

「なのはさん、フェイトさん、ありがとうございました。そして、今日のメインイベント、二人の誓いの儀式です」

「それ、もう少しだけ……待ってもらって良いかな」

「「リオスさん！！」」

突然扉が開くと、リオスさんが布を掛けた物体を台車で運んできた。

いったいあれは何なのだろうか？

「フィル、ティアナ、式の途中でごめんね。でも、これをどうしても二人に贈りたかったから……」

そう言ってリオスさんが、布を取り去るとそこには……

「氷の……銅像？」

そこには、氷で作られた二人の人物の銅像があった。
もしかしてこれは……

「もしかして……あたしとフィル……？」

「うん、僕の魔法で氷を作って、今日、急いで作り上げたんだ。何とか間に合ったみたいだね」

リオスさんは氷結系魔法のスペシャリストだ。
氷を作るくらい訳ない。

でも、料理を作って、さらにこんな見事な氷の像まで作ってくれたなんて……

「フィル、ティアナ、僕からはこれくらいしかできないけど、君たちの式に、少しでも花を添えられればと思って作ったんだ」

リオスさんの方を見ると、手も凍傷になっていて、昨日から全く寝ていないから、目の下にクマもできてしまっている。

「リオスさん……俺……なんと言ってお礼を言ったら……」

「お礼なんか良いよ。これは僕の気持ちだから、君たちに幸せになって欲しいから、やっただけだよ……」

リオスさんは俺とティアの手を取り、俺たちの手を握らせる形にして、その後、自分の手も添えて……

「フィル、ティアナと幸せな家庭を築きあげていってね。それが、君のこれからの大切な役目であるんだからね。決して自分から命を捨てる行動はしないこと。そしてティアナ……」

「はい……」

「フィルのこと、しっかりと支えてあげてね。ティアナの愛が、いつもフィルを救っているんだからね。そしていつか、二人の元気な赤ちゃんを産んで、未来を……幸せな物にしてね。あんな悲しい未来は……もう無いんだからね」

「「リオスさん……」」

やっと涙も止まったと思っていたのに、また溢れてきている。

本当に、最高の贈り物だよ……

みんな……

俺たちのためにここまでしてくれて……

本当にありがとう……

俺……一生忘れないから……

「じゃ、神父がいないから、僕が代わりにするよ」

そして……

俺とティアは、神父になったリオスさんの前に来て、誓いの言葉をたて……

「汝、フィル・グリード、汝はいかなる時もティアナ・ランスターの事を愛し続けることを誓いますか？」

「もちろん、誓います」

「汝、ティアナ・ランスター、汝はいかなる時もフィル・グリードの事を愛し続けることを誓いますか？」

「はい……誓います」

「では、誓いの口づけを……」

俺とティアは、みんなの見守る中……

誓いの口づけをした……

その後、みんなで記念撮影をしたんだけど、カメラのタイマーをセットしに行ったウェンディが、お約束のボケをしてしまい、結局二回取り直してしまった。

そして……

「それ！！」

ブーケトスをするティアは、幸せにあふれた表情をしていた。
そんな、ティアを見て、みんな笑顔で祝福してくれていた。

これから俺たちは、様々な困難にあうと思う。

でも、なのはさん達の言葉にあったように、一人で駄目でも、二人でなら乗り越えられる……

なのはさん達だけでない……

リオスさんも俺とティアのために、本当に心からしてくれた……

リオスさんの言葉にあるように、ティアと一緒に未来を歩んでいくことが、大切なんだ……

これからもよろしくな……

俺の愛するティア……

## ～Ｄｉａｍｏｎｄ　Ｍｅｍｏｒｙ～（後書き）

ＳＰＥＣＩＡＬ　ＴＨＡＮＫＳ

神崎はやて先生作品：【魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～氷翼の天使～】リオス＝コーネルド様

## The Broken Thought（前書き）

今回の話の注意点です。

今回は神崎はやて先生が書いてくださった、未来でリオスがいたらという話になっています。

設定はフィルの先輩で、尊敬できる上司という設定になってます。
主人公の詳しい設定は、神崎先生の作品『魔法少女リリカルなのはStrikerS ～氷翼の天使～』を参照にしてください。

神崎先生の作品も、どうかよろしくお願いいたします。

それでは、どうぞお楽しみください。

# The Broken Thought

「フィル、準備はいいかい？」

「いつでもいいですよ、リオスさん」

これから始まる戦いに備え、僕は隣にいるフィルに確認した。

ここは、少数規模となってしまった管理局員が最後の砦としている基地。

落とされてしまった六課隊舎や地上本部に比べると設備も十分ではなく、負傷者の治療や武器の整備も十分に出来ない。

だが、漸くここまでやってこれた。

漸く、今まで幻術に紛れていたクアットロの本拠、ゆりかごの場所が判明したのだ。

これから僕達は、戦いに出る。

この少数勢力でどこまで出来るのかはわからないが、やれるだけのことはやらないと――――――。

「フィル。最悪、僕が死ぬことになったとしたら、その時は――――」

今まで圧倒的なまでの知略と力の差、そして底無しとも見える残虐さを見せ付けられ、弱気になっていたのだろうか。

自然と、そんなことを口にしてしまう。

そんな僕をフィルは、

「何言ってるんですか、リオスさん。そんなに悪い方向に考えないで下さい。俺だって、いつ死ぬか解らない。でも、最後まで諦めるつもりはないですから」

そう言って、励ましてくれた。

何をやっているんだ、僕は。

後輩がこんなに頑張っているのに、弱気になってどうする。

「ありがとう。大丈夫、僕も諦めないよ」

そう。

僕だって、負けられない理由が有る。

あの時――――――ゆりかごで看取ったなのはと、死の際に交わした約束。それを果たすまでは。

力強く答えると、フィルは微笑んだ。

不謹慎にも暖かな空気が流れる中で、その時は来た。

基地に鳴り響くアラート。

それに、僕はすかさず司令室で指揮を取っているティアナに通信を繋ぐ。

「司令室！　何があった！？」

『こ、コーネルド執務官！　大変です、スラムがガジェットに！』

「何だって！？」

ミッドが大変なことになっている今、一般住民はスラムに収容されている。

そこが襲撃されてしまったら――――――！

「フィル！」

「了解です。部隊を編成して、すぐに出撃します！」

「頼んだよ！　僕は今からひとっ飛びで現場に向かって、一掃してくるから！」

「はい、お気をつけて！」

頷き、僕は基地の外へ出ると、懐からネックレスを取り出した。

長年共に戦ってきた、相棒を。

「グロリアス、行くよ！」

『All right. Stand by ready.』

グロリアスをセットアップし、純白の騎士甲冑を纏うと、僕は飛んだ。

「リオス＝コーネルド、行きます！」

＊　＊　＊

「酷い……」

僕がスラムに着くと、そこは既に地獄絵図になっていた。

多数のガジェットがスラムの住人を襲い、その閃光で、刃で、次々にその毒牙にかけていく。

見ていられない。

だが、目を背けることは許されない。

なのはと約束したから――――否、それ以前に、目の前の命を助けなければならないから。

「フリーズシューター」

『Ｆｒｅｅｚ　ｓｈｏｏｔｅｒ．』

僕の呟きに呼応して、空色の魔力弾が膨大な量を形成する。

「フリーズシューター……フルバースト！」

魔力弾が一斉に、まるで蟻のようにうじゃうじゃとスラムを這い回るガジェット達に向かっていった。

遅れて、数百以上にもわたる爆音が辺りに響いた。

おそらく、これで半数は減らせたはず……。

「グロリアス。敵戦力をサーチしつつ、下に降りて迎撃」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．（解りました）』

グロリアスの返答に頷くと、眼下で弱き命を貪り狂うガジェット達を睨み付けながら、僕は下へ降りていった。

＊　＊　＊

「来たわね、霜天の閃光。リオス＝コーネルド……」

クアットロはそう呟き、彼がガジェットを次々に破壊していく様を憎々しげに見つめていた。

今もまた数十もの魔力弾が彼の周囲で渦を巻き、周囲を取り囲むガジェットたちをただの鉄屑に変えていく。

魔力量ＥＸ、魔導師ランクＳＳＳ＋は伊達ではないということか。

「あいつだけは私の手で倒したい。……でも、それには聖王の鎧だけでは役不足ですわねぇ」

鎧はあくまでも身を守るためのものだ。

自分の攻撃程度では、彼に傷１つつけられないことは解っているし、聖王の鎧も、もしかすると破られてしまうかもしれない。

前に、自慢の幻術を破られた時のように。

だが――――。

「どうやら、私が出ないことには始まらないみたいですわねぇ。まあ、目的さえ達すればいいわけですし、別に今彼をどうこうする必要はないんですけどぉ」

そう言って、クアットロはモニターを全て消すと、ガジェットに乗って飛んでいった。

最強の男が待つ、戦場へ。

＊　＊　＊

「氷牙連閃！」

高速で駆け抜け、すれ違い様の連撃。

冷気を纏ったそれを存分にその体躯に刻んだガジェットたちが、僕の背後で遅れて爆発を起こす。

これでよし。

そう思い、僕は一息つきながらも、未だ可能性の棄てきれない増援に備え、注意深く辺りに気を配る。

そこへ。

「はぁい、現管理局残党のエース様？　ご機嫌はいかがかしら？」

虫唾の走る声音と共に、目的の敵が現れた。

「最悪だね。とりわけ、君に出会ったことが今日何よりの不幸になりそうだ」

そう言って、双剣（ツインエッジ）にしたグロリアスを油断なく構える。

こいつ1人のせいで、どれだけ多くの人々の人生が狂わされてきたか……。

慎重になって、なりすぎることはないだろう。

「あらぁ、つれないですねぇ。まあいいですけどぉ。それよりどうですかぁ、この景色？　逃げ惑う悲鳴と焼かれた町並みのコントラストが最高でしょう？」

「五月蝿い。その小憎たらしい喋り方、背筋がむず痒くなるんだよ。苛々する口上はなしだ。さっさと始めよう」

そう僕が言うと、クアットロは溜め息をついて。

「いいでしょう。相手になって差し上げますわぁ」

そう言って、何の気なしにクアットロは砲撃を発射した。

なのはのエクセリオンバスターにも匹敵する、極大砲撃。

しかし。

「僕には通用しない！　グロリアス！」

『Ｓｔｒｉｋｅ　ｆｏｒｍ』

グロリアスに隠された３つのフォームの１つ、ストライクフォーム。

騎士甲冑のあちこちに、機械のスラスターのようなものがとりつけられ、絶対的な加速による高速行動を可能にする形態。

代わりに装甲が薄くなったり、防御魔法の出力が落ちたりと防御面に難はあるが、そんなものは、この速度の前には何の意味も成さない。

『Ｓｔａｒｔ　ｕｐ.』

超高速で砲撃をあっさりと回避すると、クアットロの背後に一瞬で回りこむ。

「！　何っ！？」

奴が驚愕の表情を浮かべ振り返るが、僕の攻撃は迎撃の手に移ることを許さない。

１撃、また１撃とクアットロに斬撃を連続で叩き込む。

音速すらも超えた超高速の連続斬りはクアットロの着用している聖王の鎧のレプリカに幾度も命中し、やがて僅かな亀裂を生じる。

「馬鹿な！？　この聖王の鎧に傷を付けるなんて！？」

クアットロの顔に、一層の驚愕が浮かぶ。

完全に鎧を砕くべく、一層の魔力を刀身に込め、振り下ろそうとするが……。

『Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ.』

「残念、時間切れだ」

そう言いつつも最後の斬撃はきっちりその身に浴びせ、僕は飛び退った。

ストライクフォームの限界時間が来たのだ。

それでもクアットロは、鉄壁の防御を誇るはずの自慢の一品を傷つけられ、声も出ない様子だ。

それが少々滑稽に見えて、僕は笑った。

「さあ、止めだ」

そう短く言い放ち、グロリアスを手に一歩一歩近づいていく。

しかし。

次の瞬間、焦っていたそれまでの様子が一変、クアットロの口角がつりあがった。

訝しむ間もなく、近くを歩いていた泣きじゃくる女の子を、クアットロは捕まえた。

「きゃあっ！？」

恐怖に目に涙を一杯にため、ガタガタと震える女の子。

「くそっ！」

女の子を助けようと、魔力弾を形成しようとするが、

「大人しくなさい、リオス＝コーネルド！　この娘がどうなってもいいんですのぉ？」

女の子の首筋に、ナイフが突き付けられた。

それに一層恐怖を煽られた女の子は、小さく「ひっ！」と声を漏らした。

「クアットロォッ……！！」

憎悪を以って睨みつけるも、すっかり余裕を取り戻したクアットロは、涼しげに厭らしい薄笑いを浮かべるのみ。

しまった、と思った。

もっと周りに気を配っておけば、こんなことには……。

一層厭らしい笑みをその顔に貼り付け、クアットロは予想通りの言葉を放つ。

「武器を捨て、バリアジャケットを解除なさい、リオス＝コーネルド。この娘がどうなってもいいんですのぉ？」

「くっ……」

案の定、人質にされた。

悔しげに睨みつけながら、女の子を救出すべく、必死に思考を巡らす。

グラスパーフォームで分身を作って、背後から……否、それより彼女が女の子を殺す方が速い。

ストライクフォームは、さっき使ってしまった。

ガーディアンフォームは……だめだ、論外。

最後の切り札――――――フルドライブもあるにはあるが、ここで見せるべき代物ではないし、おそらくあまり役には立たないだろう。

そもそも、フォームチェンジをするような暇を、彼女が与えてくれるとは思えない。

仕方ない。

こうなった以上は僕の責任だ。

ここは……。

「……解った」

大人しく従おう。

それを聞き、これ以上ないまでにその口の端を吊り上げたクアットロに屈辱的な思いを感じ、悪寒に身震いしながらもグロリアスを地面に放る。

『Ｍａ，ｍａｓｔｅｒ……』

「大丈夫だ、グロリアス。セットアップを解除して」

『……Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

騎士甲冑が消え、もとの管理局員の制服に戻る。

裁縫をする間もなく、ぼろぼろに解れたそれに。

その僕の姿を見て、女の子をガジェットに預けたクアットロは僕の目の前まで来ると、

「はっ！」

「がはっ……」

殴りつけた。

バリアジャケットで強化もしていない生身の肉体に、戦闘機人の人ならざる力で放たれた渾身の拳がめり込んだ。

これは、内臓がいったな。あと骨も。

かなり痛い。

クアットロはその後も嘲るように、狂った笑いを上げながら、何度も何度も殴り続けた。

腹。

「がはっ……」

背。

「がぁっ……」

頭。

「いっ、あっ……」

「あはははははは……あーはっはっはっはっはっはっは！」

高笑いをしながら、まるでサンドバックのようにひたすら蹴り、殴り、蹂躙するクアットロ。

骨が折れ、内臓が潰れ、吐いた血が口の中で鉄の味を漂わせる。

どれだけ殴られただろうか。

もうほとんど体の感覚もなくなってきた頃、漸くクアットロの拳は止まった。

「ちっ、お仲間のご到着のようですわね～。まあ、私は十分ストレス解消しましたし、これでおさらばするとしますわぁ。それでは英雄さん、生きていたら会いましょう？　くくくくく……あーはっはっはっはっはっは！」

高笑いを上げながらガジェットに乗って去っていくクアットロの姿を、僕は黙って見送るしか出来なかった。

＊　＊　＊

「どうなってるんだ、これは……」

漸く到着した俺達を待ち受けていたのは、凄惨な光景だった。

立ててあったプレハブの仮設住居は崩れ、至るところで煙が上がっていた。

だが、ガジェットの姿はない。

あるのは、かつてガジェットであっただろう鉄塊のみ。

「一体どうなってるんだ？」

「とにかく、行ってみない？」

「そうね。何か解るかもしれないし」

隣でスバルとティアナがそう言う。

俺は頷き、歩き出した。

この状況を知っているはずの、あの人――――――リオスさんに会うべく。

しかし、リオスさんは一向に見当たらない。

いつもなら事態が収拾すると、休みもそこそこに現場整理をしているはずなのに。

歩けど歩けど、見えるのは無惨にもガジェットに破壊された家屋と、泣きわめく人々の姿のみ。

まさか。

そんな考えが頭を過ぎるが、すぐに思い直した。

あの人が死ぬはずがない。
戦い方を、果てには人としての心構えを教えてくれた、あの人が。
だが、天はそんな俺の考えを嘲笑うかのように、

「そんなっ……」

非情な現実を突き付けた。

スラムの中心より少し離れた一角。

そこに出来上がった血溜まりの中に……俺達が尊敬する師の無惨な姿があった。

「リオスさんっ！！」

気付けば俺は、リオスさんの下へ駆け寄っていた。
後ろから、ティアナ達も次いで走ってくる。

そして俺達は、遠目には見えなかったリオスさんの惨状を見て、思わず息を呑んだ。
綺麗なプラチナブロンドの髪は頭部からの出血で赤黒く変色して見る影もなく、腹はひしゃげて未だに血を吐き出し続けている。
おそらく、内臓もやられているに違いない。

「リオスさん！　しっかりして下さい！！」

体を揺らし、呼びかける。
何回かやっていると、やがてリオスさんはその目を開けた。

「……うぅ……フィ、ル……？」

「そうです、俺です！　一体、何があったんですか！？」

衛生兵を呼んでくる、というスバル達の声に手早く返事をし、俺はリオスさんに尋ねた。

我が師だからと贔屓しているわけではないが、リオスさんは強い。それこそ、１人でガジェット１０００機を一度に相手に出来るほどに。

そんなリオスさんが負けたなんて、俺には想像もできない。

「フィル、あの、女の、子を、助けてあげてくれ……。親が、どこかに、いる、と、思うか、ら……」

確かに、リオスさんの言う女の子らしき少女は側にいる。よほど恐い思いをしたのか、未だに目に涙を溜めて放心状態だ。

けど――――。

この人は、自分がこんな状態なのに……まだ人のことを気にしてるのか！

「まずご自分の心配をしてください！　待っててください、すぐに救護班が！」

「もう、いい。自分の体の、ことは、自分が一番、よく、解って…るさ。僕は…もう、もたない」

「何を言うんです！　諦めないって、僕も諦めないって、リオスさん言ってたじゃないですか！」

「は、は……嘘つき、だね。僕。あの時も、なのはとの約束、守れなく、て……。それにね、フィル。僕、もう……」

震える声でリオスさんは俺の方を見て……否、焦点が定まっていない。

まさか――――。

「……君の顔も、もう見えないんだ……」

「リオスさんっ……！」

リオスさんはついで、暗闇しか見えないはずの目で空を見上げ、震える手で天を仰ぎ、困ったような表情を浮かべ、言った。

「ごめん、ね、なのは。約束、また守れそうに、な……い……」

リオスさんと、なのはさんとの約束。

『絶対、生きて幸せになってね。全てを終わらせて。絶対だよ……』

自分が今まさに死ぬのだという際に、それでも微笑みながら言った彼女のその言葉が、約束が、今までのリオスさんを突き動かしていた。

そして。

約束を果たせなかった罪を贖罪するように天を撫でたリオスさんの白い手は、無慈悲な現実を突きつけるように、水音を立てて血溜まりに崩れ落ちた。

「リオスさん……？　リオスさん！　しっかりしてください！　リオスさんっ！」

そう呼びかけていくら体を揺すっても、どんどん冷たくなっていくリオスさんは、答えてはくれない。

少し前まで見せてくれた優しい笑顔はもう――――ない。

「う、うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！」

大切なものを、また１つ失った。

その非情な現実に、俺は絶望に泣き叫び、慟哭した。

# Ａ　Ｐｉｅｃｅ　ｏｆ　Ｈｏｐｅ（前書き）

今回の話の注意点です。

今回は神崎はやて先生が書いてくださった、未来でリオスがいたらという話になっています。

設定はフィルの先輩で、尊敬できる上司という設定になってます。

主人公の詳しい設定は、神崎先生の作品『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』を参照にしてください。

神崎先生の作品も、どうかよろしくお願いいたします。

この話はＴｈｅ　Ｂｒｏｋｅｎ　Ｔｈｏｕｇｈｔとはまた違った結末になっています。

後書きにお知らせがありますので、よろしくお願いします。

それでは、どうぞお楽しみください。

# A Piece of Hope

「フィル、準備はいいかい？」

「いつでもいいですよ、リオスさん」

これから始まる戦いに備え、僕は隣にいるフィルに確認した。

ここは、少数規模となってしまった管理局員が最後の砦としている基地。

落とされてしまった六課隊舎や地上本部に比べると設備も十分ではなく、負傷者の治療や武器の整備も十分に出来ない。

だが、漸くここまでやってこれた。

漸く、今まで幻術に紛れていたクアットロの本拠、ゆりかごの場所が判明したのだ。

これから僕達は、戦いに出る。

この少数勢力でどこまで出来るのかはわからないが、やれるだけのことはやらないと――――――。

「フィル。最悪、僕が死ぬことになったとしたら、その時は――――」

今まで圧倒的なまでの知略と力の差、そして底無しとも見える残虐さを見せ付けられ、弱気になっていたのだろうか。

自然と、そんなことを口にしてしまう。

そんな僕をフィルは、

「何言ってるんですか、リオスさん。そんなに悪い方向に考えないで下さい。俺だって、いつ死ぬか解らない。でも、最後まで諦めるつもりはないですから」

そう言って、励ましてくれた。

何をやっているんだ、僕は。

後輩がこんなに頑張っているのに、弱気になってどうする。

「ありがとう。大丈夫、僕も諦めないよ」

そう。

僕だって、負けられない理由が有る。

あの時――――――ゆりかごで看取ったなのはと、死の際に交わした約束。それを果たすまでは。

力強く答えると、フィルは微笑んだ。

不謹慎にも暖かな空気が流れる中で、その時は来た。

基地に鳴り響くアラート。

それに、僕はすかさず司令室で指揮を取っているティアナに通信を繋ぐ。

「司令室！　何があった！？」

『こ、コーネルド執務官！　大変です、スラムがガジェットに！』

「何だって！？」

ミッドが大変なことになっている今、一般住民はスラムに収容されている。

そこが襲撃されてしまったら――――――！

「フィル！」

「了解です。部隊を編成して、すぐに出撃します！」

「頼んだよ！　僕は今からひとっ飛びで現場に向かって、一掃してくるから！」

「はい、お気をつけて！」

頷き、僕は基地の外へ出ると、懐からネックレスを取り出した。

長年共に戦ってきた、相棒を。

「グロリアス、行くよ！」

『All right. Stand by ready.』

グロリアスをセットアップし、純白の騎士甲冑を纏うと、僕は飛んだ。

「リオス＝コーネルド、行きます！」

＊　＊　＊

「酷い……」

僕がスラムに着くと、そこは既に地獄絵図になっていた。

多数のガジェットがスラムの住人を襲い、その閃光で、刃で、次々にその毒牙にかけていく。

見ていられない。

だが、目を背けることは許されない。

なのはと約束したから――――否、それ以前に、目の前の命を助けなければならないから。

「フリーズシューター」

『Ｆｒｅｅｚｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ．』

僕の呟きに呼応して、空色の魔力弾が膨大な量を形成する。

「フリーズシューター……フルバースト！」

魔力弾が一斉に、まるで蟻のようにうじゃうじゃとスラムを這い回るガジェット達に向かっていった。

遅れて、数百以上にもわたる爆音が辺りに響いた。

おそらく、これで半数は減らせたはず……。

「グロリアス。敵戦力をサーチしつつ、下に降りて迎撃」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．（解りました）』

グロリアスの返答に頷くと、眼下で弱き命を貪り狂うガジェット達を睨み付けながら、僕は下へ降りていった。

＊　＊　＊

「来たわね、霜天の閃光。リオス＝コーネルド……」

クアットロはそう呟き、彼がガジェットを次々に破壊していく様を憎々しげに見つめていた。

今もまた数十もの魔力弾が彼の周囲で渦を巻き、周囲を取り囲むガジェットたちをただの鉄屑に変えていく。

魔力量ＥＸ、魔導師ランクＳＳＳ＋は伊達ではないということか。

「あいつだけは私の手で倒したい。……でも、それには聖王の鎧だけでは役不足ですわねぇ」

鎧はあくまでも身を守るためのものだ。

自分の攻撃程度では、彼に傷１つつけられないことは解っているし、聖王の鎧も、もしかすると破られてしまうかもしれない。

前に、自慢の幻術を破られた時のように。

だが――――。

「どうやら、私が出ないことには始まらないみたいですわねぇ。まあ、目的さえ達すればいいわけですし、別に今彼をどうこうする必要はないんですけどぉ」

そう言って、クアットロはモニターを全て消すと、ガジェットに乗って飛んでいった。

最強の男が待つ、戦場へ。

＊　＊　＊

「氷牙連閃！」

高速で駆け抜け、すれ違い様の連撃。

冷気を纏ったそれを存分にその体躯に刻んだガジェットたちが、僕の背後で遅れて爆発を起こす。

これでよし。

そう思い、僕は一息つきながらも、未だ可能性の棄てきれない増援に備え、注意深く辺りに気を配る。

そこへ。

「はぁい、現管理局残党のエース様？　ご機嫌はいかがかしら？」

虫唾の走る声音と共に、目的の敵が現れた。

「最悪だね。とりわけ、君に出会ったことが今日何よりの不幸になりそうだ」

そう言って、双剣（ツインエッジ）にしたグロリアスを油断なく構える。

こいつ1人のせいで、どれだけ多くの人々の人生が狂わされてきたか……。

慎重になって、なりすぎることはないだろう。

「あらぁ、つれないですねぇ。まあいいですけどぉ。それよりどうですかぁ、この景色？　逃げ惑う悲鳴と焼かれた町並みのコントラストが最高でしょう？」

「五月蝿い。その小憎たらしい喋り方、背筋がむず痒くなるんだよ。苛々する口上はなしだ。さっさと始めよう」

そう僕が言うと、クアットロは溜め息をついて。

「いいでしょう。相手になって差し上げますわぁ」

そう言って、何の気なしにクアットロは砲撃を発射した。

なのはのエクセリオンバスターにも匹敵する、極大砲撃。

しかし。

「僕には通用しない！　グロリアス！」

『Ｇｒａｓｐｅｒ　ｆｏｒｍ.』

グロリアスに隠された３つのフォームの１つ、グラスパーフォーム。

黒の長ズボンに純白のシャツ、足元まで届くほど長い純白のコートという出で立ちのバリアジャケットで、分身と見切りの力のより敵を翻弄し、場の流れを一挙に支配する形態。

いかに力があろうと、単純な力だけではこのフォームの前には無力。

『Ｆａｋｅ　ｄｏｌｌ．』

分身を身代わりに砲撃をあっさりと回避すると、さらに肉迫の過程で数体の分身を出現させると、クアットロの背後に一瞬で回りこむ。

「！　何っ！？」

奴が驚愕の表情を浮かべ振り返るが、僕の攻撃は迎撃の手に移ることを許さない。

１撃、また１撃とクアットロに斬撃を連続で叩き込む。

周囲の分身がそれと同時に一斉にクアットロへ殺到した。

十を優に超える連続斬りはクアットロの着用している聖王の鎧のレプリカに幾度も命中し、やがて僅かな亀裂を生じる。

「馬鹿な！？　この聖王の鎧に傷を付けるなんて！？」

クアットロの顔に、一層の驚愕が浮かぶ。

完全に鎧を砕くべく、一層の魔力を刀身に込め、振り下ろそうとするが――――。

「く、舐めないで！」

クアットロが回転しながら砲撃を放ち、射線上の分身を薙ぎ払っていく。

砲撃を受けた分身は、霙状となって粉々に砕け散る。

ピンチを脱し、しかしそれでもクアットロは、鉄壁の防御を誇るはずの自慢の一品を傷つけられ、声も出ない様子だ。

それが少々滑稽に見えて、僕は笑った。

「さあ、止めだ」

そう短く言い放ち、グロリアスを手に一歩一歩近づいていく。

彼女の周囲に待機させた生き残りの分身も、同様に各々の得物を構える。

いつでも、踏み込めるように。

しかし。

次の瞬間、焦っていたそれまでの様子が一変、クアットロの口角がつりあがった。

訝しむ間もなく、近くを歩いていた泣きじゃくる女の子を、クアットロは捕まえた。

「きゃあっ！？」

恐怖に目に涙を一杯にため、ガタガタと震える女の子。

「くそっ！」

女の子を助けようと、魔力弾を形成しようとするが、

「大人しくなさい、リオス＝コーネルド！　この娘がどうなってもいいんですのぉ？」

女の子の首筋に、ナイフが突き付けられた。
それに一層恐怖を煽られた女の子は、小さく「ひっ！」と声を漏らした。

それを見て、僕は無表情にクアットロを見据える。
その視線の先を、悟らせまいとするように、ただひたすらに。

一層厭らしい笑みをその顔に貼り付け、クアットロは予想通りの言葉を放った。

「武器を捨て、バリアジャケットを解除なさい、リオス＝コーネルド。この娘がどうなってもいいんですのぉ？」

案の定、人質にされた。

だが。
次の瞬間、クアットロは信じがたい光景を目の当たりにすることになるだろう。

「くっ、ふふふふふ……」

僕は、笑った。

「な、何が可笑しいんですの！？」

これ以上もない程の驚愕をその顔に浮かべ、クアットロが焦ったように訊ねる。

やはり、いい。

外道の野望を打ち崩す瞬間とは、かくも愚かしく、かくも滑稽で。

そして、かくも愉しいものか。

「答えなさい！」

僕の態度に自信が少しずつ削がれてきたか、震えながらそう声を荒げるクアットロにより一層の滑稽さを感じ、それに愉悦を感じながら僕は答えた。

「君、本当に馬鹿だね」

「何ですって？」

睨みつけられるも、震えている所為か迫力など全くない。

それに多少なりとも笑いを堪えつつ、僕は言った。

「騙まし討ちは、君の専売特許じゃないって事さ」

「なんですって……！？」

クアットロは辺りを見回す。しかし、周囲にいるのは見える限りでは僕の分身だけで、それもグロリアスを構えたまま待機させてある。

そう。？見える限りは？。

「えっ！？」

ズキュン、という銃声とともにクアットロの手にどこからか発せられた魔力弾が当たり、ナイフを弾き飛ばす。

すかさずそれを拾おうとするクアットロに、それをさせまいと僕は駆けた。

間一髪間に合い、クアットロの首筋にグロリアスを突きつける。

「形勢逆転、だね」

「……まさか光学迷彩で分身を隠しておくなんて。不覚ですわ」

自身の敗北を悟り、クアットロの顔に苦渋の色が見える。

こちらも不敵な笑みをなんとか保つことが出来たが、内心はかなり安堵していた。

もし、上空に待機させておいた仕掛けを見破られていたら。

もし、ナイフを拾われてしまっていたら。

もし、最初にグラスパーフォームを選択していなかったら。

そう考えると、これはある種賭けだった。

どれか１つでも欠けていれば、女の子を盾にどんな無理を押し通されたか解らない。

だが、自分はそれに勝った。

それだけで、今は十分だ。

「クアットロ。君を殺す。そして敵を取らせてもらう！」

殺傷設定にしたグロリアスの刃が煌く。

それに一瞬だけ怯えを見せたものの、すぐに元通りの厭らしい笑みを浮かべて。

「……ふふふ。せっかくですけど、遠慮しておきますわぁ」

そう言った途端、クアットロが煙幕弾を地面に投げつけた！

途端に白煙が辺りを包む。

「げほっ、ごほっ……」

たまらず口元を押さえ、女の子を抱きかかえてその場から飛びのく。

視界が漸く晴れると、上空にてガジェットに乗ったクアットロの姿があった。

「今回はこれくらいにしておいてあげますわぁ。でもぉ～、この子達を置いていきますぅ。さぁ、精々楽しく踊り狂いなさい！　ははははははははは！」

そう高笑いを残してクアットロが去ると、その追撃を阻むように、竜族？フレイムグロウ？が１０体、その獰猛なる姿を現した。

「これはちょっと、骨が折れるかな……」

冷や汗の流れる顔に苦笑を浮かべると、それに答えるようにグロリアスのコアが発光する。

フレイムグロウ達は僕という?敵?の姿を認めると、一斉に口を開いた。

エネルギーが収束していく。

「へぇ。面白いね……」

フレイムグロウたちは１０の口径に溜めたエネルギーを次の瞬間、存分に解き放つ。

「うおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

僕はグロリアスをより一層強く握り締め、膨大なる光条の中へ飛び込んでいった……。

＊　＊　＊

「どうなってるんだ、これは……」

漸く到着した俺達を待ち受けていたのは、凄惨な光景だった。

立ててあったプレハブの仮設住居は崩れ、至るところで煙が上がっていた。

だが、ガジェットの姿はない。

あるのは、かつてガジェットであっただろう鉄塊のみ。

「一体どうなってるんだ？」

「とにかく、行ってみない？」

「そうね。何か解るかもしれないし」

隣でスバルとティアナがそう言う。

俺は頷き、歩き出した。

この状況を知っているはずの、あの人――――――リオスさんに会うべく。

しかし、リオスさんは一向に見当たらない。

いつもなら事態が収拾すると、休みもそこそこに現場整理をしているはずなのに。

歩けど歩けど、見えるのは無惨にもガジェットに破壊された家屋と、泣きわめく人々の姿のみ。

まさか。

そんな考えが頭を過ぎるが、すぐに思い直した。

あの人が死ぬはずがない。
戦い方を、果てには人としての心構えを教えてくれた、あの人が。
少し歩いていくと、誰かが倒れていた。
まさか。
まさか。
気だけが急いて、判断を鈍らせる。
だが、その時の俺の勘は半分は当たっていて、半分は外れていた。
「リオスさんっ！」
「やあ、フィル。スバルにティアナも一緒か。悪いんだけどさー、担架持ってきてくれないかな？　足骨折しててさ。凄く痛いんだけど……」
「生きて……るんですね？」
隣でティアナがボロボロの体に軽い回復魔法をかけつつ、そう遠慮がちに訊ねる。
「ははっ、当然でしょ。僕が……霜天の閃光が、死ぬわけないじゃない」
「……よかった」
俺は内心、嫌な予感がしていた。

リオスさんが死んでしまうような。

縁起でもない話だが、本当のことだから仕方ない。

だから俺は、ただ嬉しかった。

こうして、生きて話すことができたのが。

「ああ、それとグロリアス。お願いできるかな？　ＡＩとかには問題なさそうなんだけど、フレームが全部やられてて……」

リオスさんが指差した先には、罅が入ってコアが点滅しているグロリアス。

『Ｍａｓｔｅｒ，　ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？（マスター、大丈夫ですか？）』

「ああ、大丈夫だよ」

ノイズの混じった声に、リオスさんはにっこりと笑顔で答えた。

なんだかんだで、この２人の絆は強い。

俺もいつか、こうしてリオスさんに認められた存在になりたい。

この時は、素直にそう思えた。

「さ、返ろうか。皆の家へ！」

「「「はい！」」」

そうして、スラムでの激闘は幕を閉じた。

この時の怪我が原因で、リオスさんは戦線を離脱。

グロリアスも、フレームが破損してしまったため、ＡＩは無事であるものの、戦闘行動が行えなくなってしまった。

結果、襲撃作戦は俺達だけで行わなければならなくなった。

決して多いとはいえない、そんな数。

それほど時も経たない内に行われた作戦の中、スバルとギンガが戦死。

これを伝えた時のベッドの上のリオスさんの表情は、筆舌に尽くしがたい。

己の無力を、肝心な時に役に立つことが出来なかった不運を嘆くリオスさんの涙に、俺は答えることが出来ない。

俺は、なのはさんではないから。

そしてそんな悲しみを振り切る間もなく、最終決戦の時が来た。

そして。

物語は、過去へと繋がっていく――――――――――――。

# A Piece of Hope（後書き）

アル「神崎先生、本当にありがとうございました」

フィ「お前と違って、すばらしい作品だしな」

アル「言うなよ……これをいただいたとき、マジで自信なくしたんだからな……」

フィ「いつまでも凹んでないで、今回は告知があるんだろ」

アル「そうだった。実は……皆さんこの作品『Ｒｅｍｅｍｂｅｒｍｙ　ｈｅａｒｔ』のノクターンって需要ありますか？」

フィ「マジか……」

アル「マジです……でも、これは１００人ノクターン（１８禁小説）希望とあったときにやりたいと思っています。ちなみに１００件ではなく１００人ですので、複数回答は１回とカウントさせてもらいます」

フィ「お前のノクターンなんて需要あるのか？」

アル「多分……ないな……」

フィ「それだったら安心だな……」

アル「というわけで、皆様の一票お待ちしてます。ちなみに感想欄の方でお願いします」

## ～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ　～（前書き）

今回の話は、フィルが未来で一緒に戦ったティアナ・ランスターの話になります。
そして、今回の話は、本編のもう一つのエンディングであり、最終話になります。

フィルとティアナのラストストーリー、どうぞお楽しみください。

※後書きにお知らせがありますので、よろしかったらご覧なってください。

# ～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～

「終わったな……」

《そうですね……やっと終わりましたね》

九月某日

ゆりかご決戦が終わり、六課復帰祝いを兼ね、パーティをさっきまでやっていたんだけど……

「……」

《マスター……？》

「……やっぱ……ティアがいないと……な……」

こっちのティアも確かに、俺のパートナーだったティアだけど、俺が好きになった……

本気で愛したティアは……

もう……いない……

《マスター……ティアさんのこと……本当に愛していたんですね……》

「ああ……後にも先にもティアだけだよ。あれだけ人を愛したのは……」

取り出したのは一枚の写真……

まだヴィヴィオがいた頃、みんなで取った記念写真。
そこには、笑顔が溢れるみんなの姿が映っていた。

この頃になのはさんとリオスさんがつきあい始めて、ヴィヴィオにリオスパパって言われて、普段は冷静なのにオタオタする姿を見れたんだよな。

そして……

照れながら、俺と一緒にくっついて写真に写っているティア……

「あのころは……本当に何もかもあったよな。なのはさん達もいて、リオスさんもいて……そして、ティアも……いたんだ……」

写真を見ていたら、その頃のことを思い出して涙が溢れてきた……

「……大切な人を失って……改めて気づくなんて……あの時……ティアの代わりに、スターライトブレイカーを撃てば良かったんだ……やっぱ……馬鹿だ……俺は……」

《それだったら私だってそうです！！　私があの時、同時処理を出来ていれば！！　ティアさんだって……死ななくて済んだんです！！》

「それは違うよ……例え同時進行できたとしても、あの時は、魔力が決定的に不足していたんだ。俺にもっと力があったら……こんなことにならなかったんだ……」

そうさ……俺の力不足のせいでティアが命を失ったんだ……

後悔したって、あの時には戻れない……

分かっている……

だけど……

「……もう一度……もう一度だけ……ティアの笑顔を……みたい……よ……」

《……マスター……》

俺たちが未来でのことを思っていた時……

一人の女性がこっちにやってきて……

「……お久しぶりですね。フィル……」

「あんたは……女神……アルテミス……！？」

それは、かつて俺をこの世界に送ってくれた女神、アルテミスだっ

た。

「どうして、あんたが……？」

「迎えに……来たんですよ。あなたを……」

「どういうことなんだ……説明してくれないか？」

「そうですね。それではお話しいたします。あなたがこの世界を、正しき流れに変えてくれてたおかげで、あなたがいた世界にも影響があったんです」

「なんだと……いったい何が起こったんだ！？」

「あなたがいた世界では六課メンバーは死んでしまったことになっていましたが、ゆりかご決戦の時までは全員生きているんです。」

「！！」

みんなが……

ティアが生きているだって……

あの時、六課のみんなは死んでしまったのに……

「そして、以前と違うのは六課メンバーの代わりに、あなたが命を落としてしまっていることです……六課襲撃の時、あなたはみんなを逃がそうとして、たった一人で、ガジェットの大群に突撃をし、そして……消滅してしまったんです……」

「命を落としたことは変わりないけど、時期が違うという訳か……」

「……はい」

「でずが、今なら世界は、あなたを受けいれることを許してくれるはずです。正しき道に戻してくれたあなたを！！」

「フィル、私がもう一度あなたの世界に戻します。そして……今度こそ、あなた自身が幸せになってくださいね……」

ティアに、もう一度会える……

ティアだけじゃない……

クアットロの策略で殺されてしまったなのはさんとヴィヴィオ、そしてリオスさん……

戦闘機人との戦いで、自爆で果てたスバルとギンガさん……

みんなに……

みんなに会える！！

「……ありがとう……アルテミス……戻りたい……俺がいた……あの世界に……」

「でも、本当に良いんですね。あちらの世界に戻ったら二度と……この世界には戻れませんよ」

「この世界は、ティア達の世界だ。俺は……通りすがりの来訪者だからな……」

この世界にとって、俺は異分子みたいな物だ。
それに、ここはやっぱり俺の世界じゃないしな……

「……フィル、戻るんだね……自分の世界に……」

「リオスさん！！」

いつの間に、ここにいたんだ。

ここには俺とアルテミスしかいなかったのに……？

「悪いと思ったけど、グラスパーの光学迷彩で姿を隠して、話は聞かせてもらったんだ……」

「そうだったんですね……」

「フィル、君が……ずっと悩んでいたのは分かっていたよ……現にパーティの時も、表面上は笑っていたんだけど、どこか寂しさが混じっていたからね……」

「……リオスさんには……お見通しですか……」

「一応、これでも君の師匠だからね……だから、師匠として最後のことをしてあげなきゃね……」

そう言ってリオスさんが、ポケットから取り出して俺に渡してくれたのは、一つのマイクロチップ……

「これは……？」

「僕のグロリアスのフォームデータ……ストライク、グラスパー、ガーディアンの3つを入れたデータチップだよ。これをプリムに組み込めば、君も同じ能力を使うことが出来るよ……」

「！！」

グロリアスのフォームデータは、リオスさんの秘密中の秘密なのに……

それを俺なんかに……

「そんな……そんな、大切な物を、俺に！！」

「プリムとの相性との関係で、各フォーム1回しか使えない上に、制限時間まで付いちゃうけどね。それと、これを組み込んだら、スパイラルとブラスターエクセリオンは使えなくなるから。あんな命を粗末にするシステムは、今の君にはいらないだろ……」

「リオスさん……本当に……本当にありがとうございます……最高の贈り物です……」

このデータを作るのにリオスさんのことだ。何度も考えてくれたに違いない。

そうでなかったら、プリム用にデチューンなんて、簡単にはできない。

「……フィル、今度こそ後悔しないようにね。自分の愛する人を……護ってね……」

「はい！！」

「……フィル、それでは……時空間をつなげますね」

女神が手をかざすと、光の魔法陣が展開され、一つの入り口が出現した。

「それをくぐったら、ゆりかご決戦の時に行くはずです。あとはあなた次第ですよ」

「リオスさん……本当にありがとうございました。あなたから学んだ事、一生忘れません！！」

みんな待っていてくれ……

必ず……必ず助ける！！

＊　　＊　　＊

「はぁ……はぁ……」

『あはははは!!　エースオブエースもこうなっては形無しですわね。聖王陛下との戦いで、全魔力を使ってしまったんですものねぇ』

「くっ……」

スクリーンに映っているクアットロがいやらしく笑っている……

わたしは、ブラスター3を使い、スターライトブレイカーで何とかヴィヴィオを元の姿に戻すことが出来たんだけど、それで力を全て使い果たしてしまい、もう立つことも出来なかった……

『これで最後ですわね。高町なのは』

次の瞬間、数え切れないほどのスフィアが私とヴィヴィオに照準を合わせ、砲撃の発射態勢に入る。

あれを受けたら間違いなく……死ぬ。

ごめんね、リオス……

約束、守れなくなっちゃった……

『さ・よ・う・な・ら、高町なのは。あはははは！！』

スフィアから一斉に発射される、砲撃の嵐。
それが今まさに私達を焼き尽くそうとした時……
目の前に、黒髪の魔導師が現れた。

あれは……フィル！？

「ガーディアンフォーム……ドライブ……フリーズフィールド展開！！」

フィルの周囲に私達を包み込むように、空色の粒子の壁が出来上がった。
そしてその輝きに衝突した砲撃は、壁と接している面から凍りつき砕け散っていった。

これは……リオスのガーディアンフォーム？

どうしてフィルが……？

やがて砲撃が止み、全てを防ぎきったフリーズフィールドはその役目を終え消滅し……

《マスター、タイムリミットです！！》

「時間切れ、か……」

ガーディアンフォームの活動限界が来てしまい、元のフリーダムモードに戻ってしまった。

だが、なのはさんとヴィヴィオを助けることができた。

本当に、よかった……

リオスさん……

あなたの大切な人……

今度は救えましたよ……

「……フ、フィル……どうして、ここに……！？」

あの時……六課襲撃が襲撃を受けたあの時、フィルは皆を守ろうとして命を落としたはずなのに……

「女神の気まぐれで……戻ってきましたよ。この世界にね……」

「フィル……本当に良かった……生きていてくれたんだね……」

「話は後です。フェイトさん達も助けないと……」

女神の話の通りだったら、フェイトさんはゆりかご内のスカリエッティがいる部屋にいるはずだ……

集中しろ……

フェイトさんの魔力を感じるんだ……

「……見つけた！！」

俺はなのはさんとヴィヴィオを抱え、ワープを使いフェイトさんの所に向かった。

＊　　＊　　＊

「……もう、立つ気力もないや……」

私は何とかトーレとセッテの二人を倒し、スカリエッティもライオットザンバーカラミティの物質消滅能力で完全に消滅させた。

でも、リミットブレイクの代償は大きく体力も魔力も使い果たしてしまい、もう立つことすら出来なくなっていた。

「……フィル……あなたは、あの時たった一人で、みんなを守ってくれたんだよね。そのおかげで、六課のみんなは死ななくて済んだんだよ……」

思い浮かぶのは、フィルとティアナの微笑ましい恋人同士の姿……

「ねぇ、フィル……ティアナはあなたのことが本当に好きだったんだよ……そのティアナを悲しませて……馬鹿だよ……本当に……」

でも、私も人のこと言えないかな。
エリオとキャロに同じ思いをさせてしまいそうだし……

そして無情にも、天井が崩れてきて私の頭上に落ちてきた。

「……フィル、今……あなたの元に……行くからね……」

死を覚悟したとき……

一条の閃光が私を抱えて……

「あ……あれ？」

予想していた痛みも何もかも、感じなかったことを不思議に思っていると。

「……馬鹿なこと言わないでくださいね。あの世なんかには、俺はいませんよ」

私を抱えて飛んでいたのは、死んだはずのかけがえのない人だった。

「あ……ああ……ま、まさか……う、嘘じゃないよね」

「……嘘なんかじゃないですよ。正真正銘のフィル・グリードです」

生きていたんだ……

フィルは生きていたんだ……

でも、フィルの姿がいつもと違う。

まるでリオスのストライクフォームのような……？

「なのはさんにも言ったんですけど、話はこの事件を終わらせてからにしましょう」

「えっ……なのは!!　ヴィヴィオ!!」

フィルの横を見てみると、なのはとヴィヴィオの姿があった。

そっか……

なのは達もフィルに助けられたんだね。

《マスター、タイムアウトです!!》

プリムの声で、フィルのバリアジャケットがいつものフリーダムになった。

「これで……使えるのはグラスパーだけか……一旦脱出して……リオスさんと合流しましょう」

リオスさんなら、絶対生きている。
未来でだって、フレイムグロウの大群を一人で壊滅させてるんだから……

俺はリオスさんの魔力を探ると……

「……よかった。まだ生きている。でも、魔力反応はかなり低くなっている……」

リオスさん、今なのはさんが行きます！！
だから、死なないでください！！

間に合ってくれよ！！

＊　　＊　　＊

「……さ、さすがに……伝説の竜族を相手にするのは……きつかったな……」

その伝説の名の通り、フレイムグロウは一体だけでもミッドを焼き尽くすほどの力を持っていた。
しかも、普通に倒したのではその身体にある毒素で、人間はみんな死んでしまうという厄介な性質を持っていた。

それが、１０体。

その数のフレイムグロウからミッドを守るには、その全てを一気に消滅させる必要があった。
最後の切り札としてとっておいたフルドライブを使い、さらにフィルが残してくれた魔力集束装置を使い、外部から魔力を供給し続けることが出来たから、なんとか倒すことが出来た。

魔力量ＥＸなんて言われてはいるけど、それも無限じゃない。
数にものを言わせる人海戦術にでもかかれば、忽ち枯渇してしまう。
しかも、ミッド全員の命が人質という状態だから、余計に無駄打ちするわけにはいかない。

確実に、そして一撃で全てを仕留める。

結局、今放てる限りの特大の砲撃を放ってやった。

それでフレイムグロウは全部倒せたんだけど……もう僕に、動く力

は残されていなかった。

「フィル……約束は守ったよ……みんなを……守りきったから……」

フィルとの約束は果たした……

なのは……

本当は一緒に戦いたかった……

でも、僕はフィルとの約束を果たしたかったんだ……

愛する人を残して、死んでしまったフィルとの約束をね……

「……はは……死ぬ間際って……幻も見えるんだね……なのはとフィルがいるなんて……ね……」

なのははゆりかごで戦っている。それにフィルはあの時消滅してしまった。
だから、二人がここにいるわけがないんだ……

「……幻じゃないよ。正真正銘……あなたの恋人の高町なのはだよ……」

「えっ……？」

そう言ってその女性は、倒れている僕に膝枕をしてくれ……

「約束したでしょう……絶対生きて、全てを終わらせて、幸せになろうって……」

間違いない……

その太陽のような笑顔……

僕が愛した高町なのはだ……

そして……

「リオスさん……ただいま……戻りました……」

「フィル……生きていたんだね……」

「ええ……地獄の闇魔に追い出されましたよ……」

「……みんなに……ティアナに……悲しい思いをさせて。……この戦いが終わったら、いっぱい言うことがあるからね……」

「……はい……」

でも、本当に良かった。
フィルが生きていてくれたんだ……

＊　　＊　　＊

「ところで……ティアは、今どこで戦ってるか分かりますか……？」

「ティアナは今、ゆりかごの中でクアットロと戦っているはずだよ。本当は私かフェイトちゃんが行くつもりだったんだけど、ティアナがどうしても……自分の手でフィルの仇を取りたい、って……」

「ごめんね……ティアナの思い……どうしてもかなえさせてあげたかったんだ……」

何て無茶なことを……

たった一人でクアットロの相手をするなんて……

「なのはさん、フェイトさん……俺……行きますね……後のことはお願いします！！」

「いくら何でも無茶だよ！！　私も行くよ！！」

「私も！！」

「リミットブレイクを使い、ボロボロの状態のなのはさん達じゃ、申し訳ないないけど、足手まといになります……それに……」

「今は、リオスさんのそばにいてあげてください……」

「「「フィル……」」」

「……俺も……取り返さなきゃな……大切な人を……」

「そうだよ。今度はフィルの番だよ。ティアナのこと、ちゃんと捕まえておくんだよ♪」

「はい！！」

ティア……

今助けに行くからな……

＊　　＊　　＊

「あはははははは！！　どうしたんですのぉ。それで敵討ちだなんて片腹が痛いですわねぇ」

「……くっ……ぅぅぅ……」

クアットロ……

フィルを殺した憎っくき女……

こいつだけはどうしても、あたしの手で殺したかった……
そのためになのはさんから空戦の特訓を受け、さらにスターライトブレイカーも身につけたのに……
やっぱ、付け焼き刃の力じゃどうしようもないの……？

「それにしても……フィル・グリードもそうでしたけど、貴女も大した力がないのに、私に向かってくるんですものねぇ。そうですわ！！」

「あなたもフィル・グリードと同じように、私の砲撃で消し去ってあげますわぁ。あはははは！！　好きな人と同じ死に方が出来るんですもの。感謝して欲しいですわ」

クアットロが右手をかざすと、その掌の先に巨大なエネルギーの塊が渦を巻く。

「さようなら……お・ば・か・さ・ん」

そう嘲笑うように言い、倒れている私にそれを放とうとした、次の瞬間……

「ぎぃやあぁぁぁぁあああぁあ！！」

悲鳴と共に、クアットロの右腕が切り落とされていた。

「ぐぁぁあああぁ……いったい誰ですの……」

「忘れたのかよ……この俺を！！」

迷彩がかかっていたのか、光と共に姿が現れて……

「……ま、まさか……お前は……」

ま、まさか……

「引導を……渡しにきたぜ……クアットロ」

＊　　＊　　＊

「フィ……ル……本当に……フィルなの……？」

クアットロの腕を切り落とした後、フィルは倒れていたあたしの元に来て、回復魔法をかけてくれた。

「ああ……女神の気まぐれで、戻ってこれたよ」

「あっ……」

そしてフィルは、あたしをギュッと抱きしめてくれた。

「……ただいま……ティア……」

「フィル……フィル！！」

もう、あたしは涙を抑えきれなかった。

帰ってきてくれたんだ……

フィルが帰ってきてくれたんだ！！

＊　　＊　　＊

「よ、よくも……私の腕をぉぉぉぉぉお！！」

クアットロは残った左腕をかざし、今までよりもさらに巨大なエネルギーを収束する。
その威力はおそらく、スターライトブレイカーに匹敵するだろう。

「ティア……まだやれるか？」

そう言ってフィルは挑発的な笑みを見せ……
そしてあたしもそれに、同じように返す。

「当たり前でしょう。これくらいで参るあたしじゃないわよ」

「上等だ！！　さすが俺のパートナーだ！！」

「そうよ……あたしは……ティアナ・ランスターは、あんたの最高のパートナーなんだからね♪」

フィルはプリムを、あたしはクロスミラージュを構えその銃口をクアットロに向けた。

「消えなさい！！　フィル・グリード！！」

クアットロの放った砲撃は、フィルを直撃し、完全に消滅したかに見えた。

しかし。

「ふっ……ふふふふ……」

「な、何がおかしいんですの、ティアナ・ランスター！？」

やっぱり良いわね……

外道が罠にかかり、崩れていく様を見るのは……

決していい趣味とは言えないのは解っているけど、それでも止められない。

悪女と罵られても結構。

だって、最初にフィルを……愛する人を傷つけたのは、この女なんだから！

「……あんた……本当に馬鹿ね。クアットロ」

「何ですって！！」

「忘れたの？　あたし達の……戦い方を！！」

クアットロがあたりを見渡すと、そこにはフィルの分身体が数人いる。

まだクアットロは、それらが只の幻と侮っているみたい……

だけど……

それが大きな間違いなのよ！！

「きゃあああああ！！」

＊　　＊　　＊

俺の分身体から一斉にファナンクスシフトが放たれ、クアットロのありとあらゆる箇所に裂傷を作り、穴を開け、その身体からは火花が飛び散っていた。

リオスさんみたいに魔力があるわけじゃないから、一撃必殺とはならないけど、これだけ打ち込めば充分なダメージにはなる。

そして、打てるだけ打ち込み終えると同時にグラスパーのタイムリミットが来て、元のバリアジャケットに戻っていた。

「……き……きさ……ま……ら……」

それでも、クアットロはまだ最後の抵抗をしようと、三度（みたび）エネルギーを収束させ、魔力球を作り出す。

馬鹿正直に、何度でも。

往生際が悪いと思うだろうか。

だが、それしか奴には方法がないのも事実だ。

今追い詰められているのは……狩られるのを待つだけの獲物と化しているのは、他でもない、奴なのだから。

「だったら……」

「完全に……」

「消滅させてやる　（あげる）！！」

俺とティアは、それぞれブラスターを起動させた。

ブラスタービットを2つずつ出現させ、クアットロを囲むように展開した。

そして、残った魔力を全て、銃口とビットに集中した。

スターライトブレイカー……

これで……

これで、全てを終わらせる……

未来からの因縁を……全て！！

「「スターライト……」」

俺たちの声が重なり、それに呼応するかのように、デバイスの銃口とビットが激しい光を発し始める。

そこへきてクアットロが漸く事態に気付いたか、「ひっ！」と声を上げるが、もう遅い。

終焉の時が訪れたのだ。

そして……

「「ブレイカァーーーーーーーー！！」」

オレンジと白銀の光の奔流は、クアットロを飲み込み……

「いやあああぁぁぁぁあああぁぁああ！！」

断末魔のような悲鳴のみを残して……

その存在は……

この世から完全に消え去った……

「……終わったわね……」

「ああ……終わったよ。本当に……」

《はい……これで終わりました……全てが……》

未来から続いたクアットロとの因縁……
これで完全に終止符だ。

「フィル……」

「……ティア」

俺たちはどちらからとなくお互いを抱きしめ、その存在を確かめ合っていた。

「……暖かいね……フィルのぬくもりは……」

「俺もだよ……こうしてティアを……大好きな人を抱きしめられるとは、思ってなかったから……」

「もう、二度と離れないでね……もう、いやだよ……フィルが消えるなんて……」

「消えないよ……ティアが、俺のことを好きでいてくれる限り……」

「だったら……一生、あたしのそばからいなくなることは無いわね

……だって……」

そう言ってティアは首をあげて、俺の方を見上げた。

「あたしは……あんたのこと、ずっと……愛してるんだから……」

「ティア……」

ティアは瞳を閉じ……

俺もティアの頬にそっと手を添え……

俺とティアは……

誓いのキスをした……

「……やっと……あたし達恋人同士になれたわね」

「ああ……やっとな……」

「愛してるよ……ティア……」

「あたしも……愛してる……フィル……」

ああ……

ティアの体温を感じてやっと実感した……

俺はやっと、本当の意味でティアを救うことが出来たんだ。

このぬくもり……

二度と離すもんか……

＊　　＊　　＊

ＪＳ事件……

色々なことがあったけど、俺がいた過去の世界との違いは、まず、ルーテシアがクアットロに操られてしまい、キャロとガチンコで戦ったんだけど、キャロとエリオが必死で説得し、何とかＢＣＣを解除することに成功した。

それを助けたのが、ノーヴェ達戦闘機人の助けのおかげというのがびっくりしたんだけどな。

この戦いでこちらに味方したのはクアットロ、トーレ、セッテ、ウーノ以外のメンバーだった。
ドゥーエもこちらの世界でも、またユーノさんと一緒にいるなんて思わなかったけどな。

これも過去を変えた影響なんだろうな。

良いように変わってくれたよ。本当に……

こちらの味方をした連中は構成プログラムを受けた後、それぞれ条件付きだけど自由になれるとのことだ。
ルーテシアはエリオ達の嘆願のおかげで、１年間の能力封印後、六課解散後にエリオ達が行く所で一緒にやっていくとのことだ。

こんな事が出来るのは、レジアスの親父さんがこっちでも生きていてくれたからだけどな。

そして俺は、リオスさんからもらったフォームを使い、さらにブラスターを使ってのスターライトブレイカーを撃ってしまい、入院す

ることになってしまった。

ティアも1週間ほど入院していたんだけど、ダメージは軽傷だったため、先に退院して、俺の世話をしてくれていた。

「ほら、フィル、あーんしなさい」

「い、いいよ……何とか自分で食べられるから……」

「なに照れているのよ。あたし達はパートナーなんでしょう。これくらい当たり前でしょう」

「それに……あんたは今まで、色々辛いこと経験してきたんだからね……未来でのこととかね……」

あの後俺は、今までのことをティアに全部話した。
本来ならティアやみんなは、この事件が切っ掛けで全員死んでしまうこと。

それを変えるために過去に戻って事件を解決したこと。

そして、過去を変えたことによって、この時系列が変わり、ゆりかごでなのはさんを助けたことで歴史が変わり、この世界でもみんなを助けられたこと。

「だから……フィルには、いっぱい幸せを感じて欲しいの。今までの分もね……」

「ティア……」

「はい、あーん……」

「あーん」

「いっぱい食べて元気になってね。退院したら、今度はあたしが手料理を食べさせてあげるからね♪」

「楽しみにしてるよ……ティア」

「……うん……楽しみにしててね。今は……」

ティアは俺の唇にキスをして……

「これで……我慢してね……その時は、あたしの愛を、いっぱい感じてもらうからね」

「……充分感じるよ。ティア……」

「もっと……もっと感じて欲しい。あたしの気持ちを……」

「俺もティアに、俺の気持ちを感じて欲しいな……」

俺はティアにキスをし、最初はただキスをするだけにするつもりだったけど、お互いにもっと感じたくなってしまい、結局キスが終わったときはお互いの間に銀色の糸が出来ていた。

「……ふふっ♪」

「……お前な……」

「良いでしょう……あたし達はその……恋人同士……なんだから……」

言い終わると、ティアは顔を真っ赤にして下に向いてしまった。
照れてまで俺に言ってくれるティアは、本当に可愛いと思う。

「そ、そうだ……なのはさんとリオスさんはどうしてた？」

リオスさんも俺と同じ病院に入院していた。
あっちにはなのはさんが毎日のように面会に来ているんだけど……

「……あっちは、二人の世界を作っていて、あそこにいたら砂糖を吐きまくってしまうわ……」

「ま、マジか……？」

「大マジよ……あの二人に比べたら、あたし達の事なんて可愛い物よ」

「……それも、そうだな……」

「フィル……今はあたしだけをみてよ……余計なことは考えないの……」

「それも……そうだな……」

俺たちは再びキスし、お互いの気持ちを確かめ合っていた。

「……今はこれくらいしかできないけど、退院したらいっぱい……しような……」

「……ばか……」

＊　　＊　　＊

「あ、あの……ティア。なんでここにお前の荷物があるんだ？」

「えっ……何言ってるの。今日からあんたと二人で、ここに住むからに決まってるでしょう」

退院後、俺は立て直しした六課隊舎に戻ってきたのだが……

「こ、これはさすがに……まずいだろ……はやてさんが許可出さないだろうが……」

「そのはやてさんが、率先してやったのよ……あたしとフィルのことを知ってから、六課総出で引っ越しをしてあたしの荷物をここに全部移したのよ……」

「あ、あの人は……」

確かにあの人のことだから、こういったお祭り騒ぎは大好きだからな……

まさか本当にするとは……

「それに……あたしも……あんたと……一緒にいたかったから……」

「ティア……」

本音を言えば、俺もティアと一緒にいたい。
まして一度は失った大切な物だ……

「……いまさら無しなんて、言わせないからな……」

「……言うわけないでしょう。何度も言うけど、あたしはあんたと一緒にいたいんだからね」

＊　　＊　　＊

「……なんか……やっぱり恥ずかしいわね」

「だな……俺も緊張してる」

俺とティアは、月明かりが照らす部屋でベッドに座っていた。

「フィル……」

ティアは自分の頭を、俺の肩にコトンと預けてきて……

「……いっぱい……いっぱい……抱きしめてね。フィルがあたしの恋人だって……思えるように……」

「当たり前だろ……俺の恋人はティアなんだからな」

「でも……あんたは他の女の子にもてるから……」

ティアは、もじもじしながら口を尖らせていた。

「そっか……？」

「そうよ……だから……」

そう言ってティアは俺をベッドに押し倒し……

「……あんたがあたしの恋人だって……ちゃんと感じさせてね……」

「ああ……いっぱい感じさせてやる……」

俺はティアの服を一つずつ脱がして、ブラのホックを外し、その形の良い胸を触ると……

「あっ……んん……フィル……胸だけじゃ……いやだからね……」

「ティア……」

そして俺たちは全ての衣類を脱ぎ去り……

「お願い……きて……フィル……」

俺とティアは……

お互いの体温を感じ合いながら……

何度もぬくもりを感じ合い……

その行為は、朝まで途絶えることがなかった……

＊　　＊　　＊

「……んっ……朝か……」

「おはよう……フィル……」

ティアは、朝までお互いを求め合っていたから、髪も下ろしたままの状態でいた。
普段のツインテールも良いんだけど、やっぱり俺はこの髪型の方が好きかな。

「どうしたの……あたしをじっと見て？」

「いや、俺は……その髪型の方が好きかなって思ってたんだ……」

「そうなんだ……だったら、今日からストレートにしようかな……」

「あくまでも俺の好みだからな……それを気にしなくても……」

「女の子はね。好きな人にいつも綺麗って言って欲しいのよ。だから、フィルがストレートが好きだったら、それに合わせたいのよ」

「そっか……ありがとう。ティア……」

「だから……浮気なんかしないでよ……」

浮気なんかする気は更々無い。

ティアがいてくれたら、それだけで俺は幸せなのだから……

「フィル……あたしのために……過去から戻ってきてくれたんだよね……」

「ああ……お前がいない世界じゃ、やっぱり寂しくてな。お前が生きているって聞いて、戻る決意をしたんだ……」

「本当に嬉しかった……その事をプリムから聞いたとき……あたし……本当に嬉しかったんだよ」

「フィル……ずっと……忘れないでいてくれたんだね。あたしのこと……」

「当たり前だろ……愛する人を……忘れるわけ……ないだろ……」

俺はティアをギュッと抱きしめ、ティアに自分の思いを感じて欲しかった。

「フィル……ずっと……ずっと一緒だからね……」

「離すもんかよ……もう二度と……」

かつて失った大切な人……

だけど、過去を変えたことで再び希望が生まれた。

そして俺は、その希望を取り戻すことが出来た。

もう二度と離しはしない……

～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～

その言葉の通り、俺の心はティアを決して忘れなかった。

それはティアも同じ気持ちだった……

これからもずっと二人は一緒にいる……

二人の愛は永遠なのだから……

## ～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～（後書き）

皆様、いつも～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～を応援していただき、本当にありがとうございます。
ようやく納得のいく形で、第１部を完結を迎えることが出来ました。

そして今回、神崎先生には、リオス君の特別出演の許可と内容の添削までしていただき、本当にありがとうございました。

第２部は、アイディアがまとまり次第、開始していきたいと思っています。

その間は、他のキャラのｉｆ　ｅｎｄｉｎｇを書いていきたいと思いますので、どうか今後もよろしくお願いいたします。

## ～Ｃｈａｓｔｅ　Ｌｏｖｅ～（前書き）

今回の話は、最終話～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～の後日談。
リオスとなのはのその後の話になります。

※後書きに主題歌の発表があります。

## ～ Chaste Love ～

ＪＳ事件も無事終了し、僕はフレイムグロウを殲滅するときに使ったフルドライブの影響と肉体へのダメージが酷かったため、フィルと一緒に聖王医療院に入院していた。

「リオス、具合……どうかな」

「なのは……うん、大分回復したからね。あと少しで復帰できるよ」

「無理はしないでね、リオス」

「その台詞はそっくり返すよ。ブラスターを使ったんだから、かなりダメージは来てるんだからね」

なのはもゆりかご内でブラスター3を使ってしまい、肉体とリンカーコアにダメージを負ってしまったが、ブラスターシステムは、フィルが残してくれたデータを元に改良していたから、リンカーコアへのダメージは軽度で済んでいる。
でも、元のシステムのままだったら、命を失っていたかもしれないと医者から告げられていた。

そして僕も魔力集束装置が無かったら、植物人間になっていたとの

ことだ。

「……本当にフィルには感謝しなきゃね。わたしもリオスも、フィルに色々助けてもらった……わたしはゆりかごでフィルに助けられ、リオスはフィルが作った魔力集束装置で」

「うん、フィルが死んだとき、本当に六課メンバーは見る影もないくらい落ち込んでいたからね。特にティアナは……」

六課襲撃の時、フィルがたった一人でガジェットの大群を相手にし、そのおかげで六課に残っていたメンバーは助かったんだけど……

「クアットロの罠によって……フィルは……跡形もなく消されちゃたんだよね」

「僕は……あの時ほど、クアットロを憎いと思ったことはなかったよ……」

今でも覚えている。
フィルが消滅した瞬間を……

あの時もう少し、僕が駆けつけるのが早かったら……
そう思ってずっと後悔していた……

「でも、フィルは帰ってきてくれた。わたし達やティアナの元にね」

「だね……でも驚いたよ。フィルが僕のグロリアスの能力を使っていたなんてね」

「フィルの話だと、過去のリオスからデータチップをもらって組み込んだんだって」

「そうだったんだね……」

おそらく過去の僕は、プリムに積んでいた二つのシステムの危険性を知っていたから、こんな形でシステムの封印をしたんだ。

そして、彼なら3つのフォームを使いこなせるって判断した。

「なのは……」

「なに？」

「……フィルなら、僕のグロリアスの能力……使いこなせるよね」

「それって……まさか！？」

「……うん、僕は……フィルに全てを託すよ。僕の持っている力を……全てね」

あの戦いでグロリアスのフレームは、ＡＩ以外の部分は殆ど使い物にならなくなってしまっていた。

修理すれば完全に直るけれど、僕の身体の方がフルドライブの影響で、リンカーコアにかなりのダメージを負ってしまっている。

戦えないことはないけど、現役で執務官をやるのは難しい。

「そっか……」

なのはは穏やかな笑顔で、答えてくれた。

「だったら……わたしも……一緒に辞めるよ……管理局」

「えっ……？」

「今回のブラスターの影響で、わたしのリンカーコアはさらにダメージを負ってしまって、現役でやれるのは、あと数年だと思う」

実際なのはも今までのダメージが蓄積していて、シャマルさんからも長期休養がいるって宣告は受けている。

「だからね……わたしもティアナに自分の全てを託して、魔導師辞めようと思うんだ。フィルと二人でなら、きっと大丈夫だから……」

「そうだね……」

あの二人なら大丈夫。
二人とも一度大切な人を失って、命の大切さは知っているから……

「そうと決まったら、六課が解散するまでにやることが沢山あるね。僕はフィルにグロリアスのフォームの使い方の伝授を」

「わたしはティアナに、自分の戦闘技術の全てをたたき込まなきゃね。二人がどんな困難にあっても大丈夫なようにね」

＊　　＊　　＊

「リオスさん……なのはさん」

俺たち二人は、リオスさんの様子を伺いに来たんだけど、少しドアが開いていて話し声が聞こえてきたので、そっと聞いていたら……

「……ヒック……ヒック……」

「ティア……ここで泣くのは二人に失礼だ。俺たちがすべきことは、二人の想いに答えることだ……」

ティアは涙が止まらなくなり、俺の胸の中で声を抑えながら泣いていた。

「……うん」

そして、俺たちはリオスさんに気づかれないように、そっとその場から立ち去った。

リオスさん……なのはさん……

俺たち絶対二人の想いに応えて見せます！！
だから、二人は幸せになってください……

もう、あんな未来は無いんですから……

＊　　＊　　＊

３週間後、僕は無事退院して六課に復帰し、フィルにグロリアスのフォームデータを渡して、それを二人でプリム用にデチューンの作業に入った。

プリム自体完成されたデバイスだから、それとの相性で中々うまくいかなかったけど、スパイラルとブラスターエクセリオンを正式に排除することで、何とか解決することが出来た。

一方なのはも、ティアナに自分の技術を全部たたき込むとかなり張り切っていて、早朝から深夜までつきっきりで訓練をしていた。

ティアナも、そんななのはの想いが伝わってるのか、決して弱音を吐かず、どんどん自分から厳しいメニューを求めているとのことだ。

そんな二人の想いが嬉しくて、僕もフィルとの訓練はかなり厳しめにやっている。
グロリアスのフォームを使いこなしてもらうためには、魔力不足を補うには経験を積むしかない。

そして今日も無事訓練が終了し……

「リオス～♪」

「どうしたんだい。そんな風に甘えてくるなんて珍しいね？」

「えへへ。だって久しぶりなんだもん。二人きりになるのって♪」

いつもはこの部屋はなのはとヴィヴィオと三人で一緒に過ごしているんだけど、今日はヴィヴィオはエリオ達の部屋でお泊まり会をやっていた。

だから、今日はなのはと二人きりなのだ……

「ねぇ……今日は二人きりなんだよ……」

なのはは自分の頭を、僕の肩にコトンと預けてきて……

「そう……だね」

僕もなのはの身体を自分の方へ抱き寄せ、なのはの体温を感じていた。

「……あったかいね。こうしていると……リオスのぬくもりが感じるんだ」

「僕もそうだよ……こうやってまたなのはを抱きしめられるなんて、思っていなかった……」

「わたしもだよ……ねぇリオス」

「ティアナとの模擬戦でのこと……覚えてる？」

「忘れてないよ……あの時はなのはの想いは、ティアナ達にちゃんと伝わっていなくて、それでティアナとフィルは無茶をしてしまい……」

「うん……あの時はリオスが止めてくれたから、最悪のことはなら

なかったけど、あれはフォワードのみんなにちゃんと伝えてなかったわたしのせいだよね……」

あの時リオスが二度目のクロスファイアを、フリーズフィールドで止めてくれなかったら、きっとティアナは地面に叩きつけられてしまっていた。

そのせいでティアナとフィルが模擬戦であんな無茶な行動をしてしまった。

あれが全部間違っているのかと聞かれたら、そうではない。

あの時の二人のレベルでは駄目だったと言うだけのことだ。

だから、今の二人ならもっとうまくやれるだろう。

「ありがとうね、リオス。あなたがいたから、ティアナとフィルも、そしてわたしも救われたんだよ……」

「なのは……」

「リオス……わたし……あなたが……欲しい……」

そう言ってなのはは、ぎゅっと僕に抱きつき、僕にキスをしたかと思ったら、自分の舌を僕の舌に絡みつけ、その行為は息継ぎを繰り返しながら、何度も繰り返した。

それはお互いの唇の間に、銀色の糸が出来るほどに激しくキスをした。

「なのは……」

僕はなのはの上着を脱がし、ブラの上からやんわりとなのはの胸を、何度も揉みしだき……

「ん……あっ……リオス……そんなに胸ばかりじゃ……嫌だよ……」

「じゃ、全部脱ぎ去ろうか」

僕はなのはのブラを外し、そして全ての衣類を脱がし、僕も何もまとわない姿になり……

「リオス……」

僕はしばらく、なのはのぬくもりを全身で感じた後、なのはと一つになりたく……

「おねがい……もう……きて……リオス……」

なのはは瞳を潤ませて、僕と一つになるのを待っていた。

僕はなのはと一つになり……

月明かりが照らす中……

ベッドは何度もきしみ……

その行為は、何度も繰り返され……

それは夜が明けるまで、ずっと途絶えることはなかった……

＊　　＊　　＊

「んっ……あ、あれ……もう朝なんだ……」

「おはよう、リオス……」

目を覚ますと、そこには髪を下ろして、衣類を何もまとっていないなのはがいた。
朝日に照らされたなのはは、何か神秘的な美しさを感じた。

「どうしたの……そんなにじっと見て？」

「なのはが、綺麗だなって……見とれていたんだ」

「……んもう……お世辞なんていっても何も出ないからね♪」

「お世辞なんかじゃないよ……昨日は……本当に綺麗だったよ」

「……ば、ばかぁぁぁ……」

なのははぽかぽかと僕の胸を叩いているけど、ちっとも痛くない。

気恥ずかしさからきている行為だしね。

＊　　＊　　＊

3年後

機動六課解散後、僕となのはは管理局を辞職し、すぐに結婚をした。
周りからはかなり引き止められたけど、将来のことを考えたら、もう無理とかはしたくなかった。

愛する人と一緒に平和な一時を過ごしたかったしね。

僕となのはは、フィルとティアナにそれぞれの想いを託すことが出来た。
フィルはグロリアスのフォームを使いこなし、難事件も解決している。
ティアナの方も、なのはから全てをたたき込まれたので、魔力量は少ないけど、戦い方次第ではヴィータも倒せるほどの腕前になった。

その二人がコンビを組んでいるんだから、本局や他の部隊からスカウトの嵐だった。
でも、この二人は二人でやることに意味があると言って、どこの部隊にも所属していない。

今はフリーの執務官として動いている。
犯罪者の間では、ティアナとフィルを『黄昏の戦姫』『白銀の閃光』と呼ばれている。
それほど犯罪者の間では、恐れられる存在になっていた。

そして僕となのはは、今……

「いらっしゃいませ!!　アイスクリームはいかがですか!!」

僕たち二人はクラナガンで小さなアイスクリームショップをやっていた。
お店は、なのはのネームバリューもあって、開店当初からお客さんが来てくれて、今では月に1回は雑誌の取材を受けるくらいな店に成長した。

それでも従業員は雇わないで、なのはとヴィヴィオと親子三人でやりくりしてる。

ヴィヴィオも学校が終わったら、お店を手伝ってくれて、その姿を見たさに来るお客さんもいるくらいだ。

「いらっしゃいませ……って、ティアナにフィル！！」

「どうも、久しぶりにリオスさんのアイス食べに来ました」

「お久しぶりです。なのはさん、リオスさん」

店に入ってきたのは、ティアナとフィルの二人。
ティアナはフィルの腕にぎゅっと抱きついている。

本当にこの二人は愛し合ってるんだな……

「すみません……この……カップル限定アイスって何ですか？」

「ああ……これね。これは、うちの店特製のアイスパフェなんだ。パフェだから、店の中限定になるけどね。ティアナ、よかったらどうかな？」

この店はお持ち帰りだけでなく、中でも食べられるようにしている。
だから、こういったメニューも可能なのだ。

「フィル……今日はこれに……してみようか」

「ティアがいいなら……いいよ。ちょっと恥ずかしいけどね」

「良いでしょう。それともあたしじゃ……嫌かな……」

「分かってて言ってるだろ……そんなこと絶対言わないって……」

「ふふっ♪　まあね」

フィル達はアイスパフェを頼んだ後、店の中でしばらくの間、二人きりの世界を楽しんでいた。
あの二人……周りから見たら、本当に砂糖が吐くくらいのカップルなんだから……

「あの二人……本当に幸せそうだね……」

「そうだね……ティアナ、本当にいい笑顔してるよね」

フィル達の方を見ると、顔を真っ赤にしながら、二人でアイスを食べあってる姿は本当に初々しい。
でも、本当にお互いを好きなんだなって思える。

「リオス……この店をやって本当に良かったね」

「うん……この店は僕となのはの夢だよ。こうやって……人々の笑顔が溢れるのは、何よりも嬉しいんだ」

「そうだよ……この店はわたし達三人のお店なんだからね♪」

なのはと僕の愛を込めて付けたこの店の名前は……

『Ｃｈａｓｔｅ　Ｌｏｖｅ』

地球の言葉で純潔な愛……

二人のいや……三人の想いを込めてこの名前にした。

これからもなのはと一緒に人々の笑顔を見ていきたい。

そしてなにより……

なのはとヴィヴィオ……

2009

愛する二人の笑顔を、守っていきたい……

願わくは……

未来が優しいものであらんことを……

2010

# ～Ｃｈａｓｔｅ　Ｌｏｖｅ～（後書き）

主題歌のアンケート、たくさんのご意見本当にありがとうございました。
今回はこのようになりました。

ＯＰ：未来への咆吼（ＪＡＭ　Ｐｒｏｊｅｃｔ　ｆｅａｔｕｒｉｎｇ　影山ヒロノブ、遠藤正明、きただにひろし、福山芳樹）

挿入歌

ＢＡＤ　ＥＮＤ：消えないで……（ｙｏｚｕｃａ）
ＢＡＤ　ＥＮＤ　ＩＦ：久遠　～詩歌侘～（茶太）
最終話ラストバトル：Ｄｏｎ't　ｂｅ　ｌｏｎｇ（水樹奈々）

ＥＤ：君は僕に似ている（Ｓｅｅ－Ｓａｗ）

今後も他のｉｆ　ｅｎｄｉｎｇとかに合う歌とかがありましたら、順次更新していきたいと思います。

2011

# ～Ｔｒｅａｓｕｒｅ～（前書き）

この作品は『魔法少女リリカルなのは～ＦＡＮＴＡＳＹ　ＡＣＬＩＳＴＥＲ　２ＮＤ　ＳＥＡＳＯＮ～』を書いてます白姫　彼方先生とのコラボ作品になります。

2012

「お母様、ちょっと来てください！！」

「どうしたの、美沙？」

「これなんですけど……」

突然美沙が、血相を変えて私の所にやってきた。
私が美沙から見せられた資料は、とんでもないことだった。
それは……

「ちょっと、何これ！！　フィル君とフェイトが死ぬって！？　何かの冗談でしょう！！」

「……冗談じゃないんです。この二人、本局のバカのせいでこき使われてるんですの……」

「……最悪ね」

フィル君も、フェイトも自分のことより人のことを優先してしまう。

しかも二人とも能力が高いから、本局のバカどもはそれを利用してるんだろう。

「このままですと、フィルさんとフェイトさん……過労死してしまうんですの。それも2年以内に」

美沙は死を司る神『ザディアフ』でもある。
だから、こういった人の死をすることが出来るのだ。

「いやですよ!!　フィルさんがこんな形で死ぬなんて!!」

「美紗、あなたいつの間に!?」

「今さっき、来たんです。私もフィルさんとフェイトさんの終焉を見たんですけど、あんまりですよ!!　このままじゃ二人とも悲しすぎます!!」

美紗は、悲しみのあまり泣き崩れてしまった。

美紗も終焉の神『エンティ』だ。
その力であの二人の終焉を見てしまったのだろう。

「どうやら……私達が地上に降りて、どうにかしなきゃいけないみたいね……」

「お母さん!?」

「お母様!?」

「美紗、美沙、久しぶりに地上に行くわよ!! あの二人には幸せになってもらわなきゃね!!」

「「うん!!」」

フィル君もフェイトちゃんも、今まで本当に不幸が続いていたんだ。やっと幸せになれるかもしれないのに、本局のバカのせいで潰されてたまりますか!!

ましてフィル君は、未来で六課の仲間を……そして、ティアナちゃんを失っているのよ。

一人の人間に、これ以上悲しみを持たせていいわけがないでしょう!!

＊　　＊　　＊

「エリオ君、ルーちゃん、フェイトさんとフィルさんのこと、どう思う？」

「どう思うって？」

「……もしかして、まだなの。あの二人」

「ルーちゃん……ルーちゃんの考えてること、あっているよ。まだなんだ……」

「何？　何なの？」

あのＪＳ事件から、三年……

わたし達は、辺境自然保護隊で忙しい日々を過ごしている。
ルーちゃんとエリオ君は、今では保護隊の皆さんが知らない人がいないと言うくらい、二人の仲は知れ渡っている。

だけど……

「エリオ君……本当に分からない？」

「キャロ……さっきから何の話なの？」

2016

「エリオ……もう少し、女心……勉強しよ……」

「ルーまで！！　いったい何なの……ごめん、僕にはわからない」

「あのね……キャロが言っているのは、フェイトさんとフィルさんのことだよ。あの二人、未だに婚約はしているけど、結婚自体はしてないじゃない」

「二人とも、色んな人は助けているけど、自分たちのことは後回しにしている……特にフィルさんは」

「そういうことか……」

フェイトさんとフィルさんは、本当はすぐにも結婚したいんだけど、上層部が二人に、仕事をやたらと持ってきて、中々時間が取れない状態になっている。

優秀な執務官だからといって、もう少し二人のことを考えて欲しいと思う。

もしかしたら、二人の結婚の妨害工作じゃないかと思うくらいのことだった。

二人とも、正直かなり参っていると、こないだ無限書庫でユーノさんとドゥーエさんから聞いた。

「なんとか……あの二人に幸せになって欲しいんだけど……」

「そうなんだよね……」

「……あの、エリオ、キャロ……私に……考えがあるんだけど……」

「「えっ……？」」

ルーが出した考えはこうだ。

ユーノさんの話によると、クロノ提督とレジアス中将もこの事は危惧していて、何とか少しでも仕事を回さないようにしようとしているんだけど、その前に本局上層部が仕事を入れてしまう。

だから……

「元六課のみんなに連絡して、わたし達でフェイトさんとフィルさんの結婚式をしようっていうんだね！！」

「うん……リンディさんとエイミィさんに協力してもらえれば……こういったことも何とかしてくれるかもしれない」

「あの二人の事を考えると、こうした方が良いと思う……これじゃ、二人ともかわいそうだよ……」

「僕も賛成だよ。フェイトさん、最近本当に元気がないんだ。フィ

ルさんも長期任務が入れられちゃったから、中々会えないし……本当に酷いよ！！　本局のやり方は！！」

「じゃ、思い立ったら吉日だね。急いでみんなに連絡しよう！！」

「「うん！！」」

こうして、僕たちのフェイトさんとフィルさんの結婚式へのプロジェクトが開始された。

＊　　＊　　＊

「なるほどな……もう強行でやるしかないか……」

「だよね……フェイトちゃん、これじゃかわいそうだよ」

プロジェクトのため、わたしとルーちゃんは地球のエイミィさんの所に来ていた。
エリオ君には、別の所に行ってもらい、他の人へ協力をお願いしてもらっている。

偶々、クロノ提督も帰ってきていたので、この事をクロノ提督にも

聞いてもらうことにした。

「ねぇ、クロノ君、本局に打診できないの!?　これじゃ、なのはちゃんの時みたいになりかねないよ……」

「俺も、何とかしたいんだけど、本局上層部が、彼らの能力が高いと言うことで、キツキツの任務を入れてくる。だから、自分たちの結婚の事なんて考えられないほどなんだ……」

「二人とも、似たもの同士ですから……自分たちのことより、困っている人を助けたい。そう思ってしまうんです……」

「あんなに愛し合っているのに……フェイトさんとフィルさん……」

『うーん……』

「だったら、私に任せなさい♪」

「「リンディさん!!」」

「お義母さん!!」

「母さん!!」

そこにいたのは、フェイトさんの義母にして、時空管理局総務統括官のリンディさんだった。

「母さん……いつからいたんだ……」

「さっきからよ。クロノ、話は聞かせてもらったわ。この二人のことは、私の方でも問題だったの。一部の上層部のせいで、二人の未来を潰してしまうんじゃないかって……」

「だから、私の方で三提督の方々に話してみようと思うの。これで駄目だったときは、二人ともレジアス中将の管轄に回すしかないんだけどね……」

でも、今のフェイトさん達にはその方が良いかもしれない。
このままじゃ、本当に潰されてしまうから……

「二人のことは私に任せてね。あなたたちは二人の結婚のことを進めていってね。あの二人はこうでもしないと、式なんて挙げないんだから……それに、早く孫の顔を見たいのよ♪」

「「「「あ、あははは……」」」」

こうして、ハラオウン家の協力を得ることが出来たわたしとルーちゃんは、エリオ君に連絡してはやてさんにその事を伝えてもらうこ

とにした。

＊　　＊　　＊

キャロ達がハラオウン家に行っている頃、僕は、はやてさんの所に行き、六課メンバーに連絡をしてもらえないかとお願いしていた。

フェイトさんに内緒と言うこともあり、自分たちの人脈だけじゃ中々連絡が付けられない人たちもいたからだ。

「今通信が入ったで、リンディさんが全面協力してくれるって」

「そうですか。キャロ達、上手くいったんですね」

「せやな。今度は私達の番やね。あっちが式場とかの関係を進めていってくれるみたいだから、私達がすることは、六課メンバーを集結させて、プランを進めていくことやね」

「はい！！」

「とりあえず、殆どのメンバーには連絡は可能だから、その辺は任せておいてや。向こうが式場とかを決めてくれれば、後は私が何とかするわ！！」

「ありがとうございます。はやてさん！！」

「安心するのは、まだ早いで。連絡が付いて、みんなのスケジュールが何とかなっても、肝心の二人の予定が出来なきゃアウトや……」

「そうなんですよね……」

そんなことを考えていると、通信が入ってきた。

『久しぶりね、はやて、エリオ君』

「美緒ちゃん　（さん）！？」

「美緒ちゃん、どういう事なんや！！　美緒ちゃんは確か……」

『うん、私は最後の戦いの後、神界に帰ったんだけど、フィル君とフェイトのことがどうしても気になって、一時的に戻ってきたんだよ』

「えっ？　どういう事なんですか？」

僕たちは美緒さんから、詳しいことを聞かされた。

話の内容は、美沙ちゃんと美紗ちゃんの話によると、二人の神の力でフェイトさん達の未来を見たんだけど、このままだと二人とも過

労死してしまうということで、それを止めるために一時的に地上に降りてきたとのことだ。

「最悪やね……」

「そんな……あんまりです！！　これじゃフェイトさん達が可哀想ですよ！！」

『エリオ君、そんなに興奮しないで。それを止めるために、私達がここに来たんだから……』

「でも、美緒ちゃん、具体的にどうするつもりなんや？」

『そうね……色々あるんだけど、手っ取り早いのは、なのはを引き連れて『お話♪』かな』

「「それだけは勘弁してください！！」」

『嫌よ。それくらいしなきゃ、本局のバカどもは一掃できないから。いやぁ、久しぶりに暴れられるわ♪』

もし、そんなことになったら、間違いなく本局は壊滅だろうな。
なのはさんと美緒さん、この二人が組んだら、ほぼ無敵だから。
そんなことを考えていると、また通信が入ってきた。

『八神、久しぶりだな。おや、麻井じゃないか。久しぶりだな』

「「レジアス中将!?」」

『久しぶりね、レジアス中将。あなたもお変わりないようで』

『肩ッ苦しい挨拶は良い。おっ、ハラオウンの所のエリオも一緒か。だったら話は早い』

「どういう事ですか？」

『さっき、ハラオウン統括官から儂に連絡が来た。あの二人のことを何とかしてくれないかってな……』

「「えっ……？」」

『儂も、あの二人には人並みの幸せを掴んで欲しいんだ。それを一部のバカどものせいで、失うわけにはいかん!!　だから、勤務待遇を改善しなければ、有無を言わさず、地上所属にする!!　そう脅しておいた』

「あ、あいかわらずやな……強引なところは……」

『儂だってこんな強硬手段はしたくないわい。だけどな、このままじゃ高町の二の舞だ。それだったら何と言われようが、本局から引き抜いて少しでもマシなところに行かせる……』

レジアス中将の目は真剣だった。
あの目はフェイトさんが、僕たちのことを思ってくれているときの目と同じだ……

『八神、そう言うわけだから、あの二人のことは儂に任せろ。残念なのは、あの二人の結婚を直に祝えないことだがな……』

「「レジアス中将……」」

『お節介ついでに言っておくが、八神、お前達は式をどうしたいんだ？』

「えっと……一応リンディさんにお願いして、最高の所の式場を……」

『駄目よ。そんなのおもしろくないわよ。せっかく六課メンバー集まるんだから、私達にしかできないことをしなきゃ……』

「だったら、美緒ちゃん達ならどうするや！！」

『八神よ……お前達六課のスローガンは何だったんだ……それを思い出してみろ……』

「「あっ！！」」

僕たちは、すっかり忘れていた。
六課のスローガン。それは……

『家族……だろ……だったら、もっとアットホームなやり方でやってみたほうが良いぞ。儂が言えることはこれくらいだ……』

レジアス中将は、そう言って通信を切った。

『そういうこと、ちなみに私達も参加させてもらうからね。仲間はずれは嫌よ』

「ありがとう美緒ちゃん……きっとフェイトちゃん達も喜んでくれるで……」

「はやてさん……」

「エリオ、もう一度作戦会議のやり直しや！！　みんなに連絡して、絶対成功させるんや！！」

「はい！！」

みんながこんなに協力してくれるんだ。

フェイトさん達のためにも、成功させなきゃ……

『そうね。とりあえず私は憂いを絶っておかなきゃね』

「やっぱり……やるんやね……」

『当たり前でしょう。臭いのは元から絶たなきゃね。こっちは任せてね』

「あんまり、やり過ぎないでや。レジアス中将、また禿げてしまうから……」

『ふふっ、そうね。さてと本局のバカどもをお仕置きしなきゃね……うふ…うふ……うふふふふ……』

そう言って美緒さんも通信を切った。

本局……壊滅しなきゃ良いな……

＊　　＊　　＊

三ヶ月後

「それにしても、はやてさんもずいぶんイキなこと考えるわね。まさか、六課跡地を借りて式をするなんて……」

「ええ、レジアス中将がこの日だけですけど、敷地を使える許可をくれたんです」

六課跡地では、着々と式に向けての準備をおこなっていた。
建物自体は、未だに誰も使っていなかったので、掃除をすればいつでも使用可能だった。

これは、いつか六課が復活することを考えて、レジアス中将とクロノ提督が、六課の建物を残していたから出来たことだ。

「キャロ、エリオ、ルーテシア、あんた達からこの事を聞いたときはびっくりしたわよ。でも、こんなイベントに一枚からませてくれたこと、礼を言うわ」

「ティアさん、そんな、こっちこそ済みません。ティアさんこそ忙しいのに……」

「執務官のお仕事は、ハードなのに……」

「本当に済みません……」

「そんなことはいいのよ。それに……」

「あいつには……幸せになって欲しいから……」

「ティアさん……」

ティアさんは、本局でもかなりもてると聞いているけど、未だにそう言った話は聞かない。
キャロが言っていたとおり、フィルさんのこと思っているんだな……

「とにかく、スバルも合流するから、みんなで作戦を考えましょう。絶対成功させるわよ！！」

「「「はい！！」」」

「ティア！！　みんな！！」

「「「「スバル　（さん）！！」」」」

そんな噂をしていると、スバルさんが走ってこっちにやってきた。

「みんな、久しぶりだね！！　元気だった！！」

「スバル……あんたは相変わらずなのね。でも、なんか安心したわ」

「むぅー。ティア、それって、どういう意味」

「そのまんまの意味よ」

「ティア、再会早々ひどいよ～～～」

「「「「あはははは！！」」」」

「みなさ～～ん」」

僕たちが話をしていると、向こうからやってきたのは……

「お久しぶりです。みなさん」

「お久しぶりですの。スバルさん、ティアナさん」

「美紗、それに美沙まで！！　いつこっちに来たの！？」

「3日前にこっちに来たんです」

「ちなみにお母様も一緒ですの」

「でも、急にどうして、確か神界に帰って……？」

「そうなんですけど……実は……」

＊　　＊　　＊

美紗ちゃん達が、あたし達に、はやてさんの所で聞いた内容を話し終わると……

「とりあえず……本局のお偉いさんの所に……お話にいこうか」

「ティア！！　物騒なこと言わないで！！　なんかなのはさんに似てきてるから！！」

「そうですよ。本局の方は、お母さんとなのはさんが『お話』に行きましたから！！」

「「「「えっ……？」」」」

今、お話って言ったよね。
もしかして、お話じゃなくて『お話』。

「それって、いつ……？」

「一週間ほど前です。二人とも張り切ってましたから……」

「……はやてさんから聞いたんですけど、お母様達、大暴れしたらしいですの。本当に本局が壊滅するんじゃないかって思ったの……」

「ティア……」

「言わないで……改めて分かったわ。なのはさんと美緒さんの恐ろしさ……」

あの二人がタッグ組んだのなら、間違いなく本局のバカなお偉いさんは排除されているわね。
美緒さんがいるのだから、絶対三提督も絡んでいると思うし……

「あ、あははは……お母さん、本気で怒っていたから……」

「あれは本当に怖かったの……今思い出しても恐ろしいの……聞きますか？」

「遠慮しておくわ……聞くのが恐ろしいわ……」

絶対聞いて得することはない。
むしろ、あの二人の武勇伝を聞くだけで、何かを失う気がするから……

「もう、この事は忘れましょう。あと、私と美沙もお手伝いいたします」

「フェイトさんとフィルさんのためですの。私達もいっぱい恩返ししたいですの」

「ありがとう。美沙、美紗……あいつ、きっと喜んでくれるわ」

こうして、フェイトさんとフィルの結婚式のため、あたしたちは必死で準備をしていった。
期日まで、もう半月もない。
でも、色んな人が二人のことを祝福したいと、心から願っている。

だから、忙しい中こうやって集まってくれたり、色んな手配をしてくれる。

フェイトさん……フィル……

みんな、二人のことを心から幸せになって欲しいって思ってるんだからね。

その事を、少しでも伝えたいから……

＊　　＊　　＊

当日

「フェイト、ここで六課の同窓会をやるんだね」

「うん。まさか、六課隊舎でやれるなんて思っていなかったけどね」

俺たちは、はやてさんに同窓会のお知らせを受け、六課隊舎にやってきていた。
本当はこの日も仕事が入れられていたんだけど、どういう訳かそれが無くなり、俺たちは二人とも参加することが出来た。

俺も久しぶりに、フェイトとこうやって安らぐ一時を過ごせることもあって、今日を楽しみにしていた。

「行こうか。みんなもう来ているみたいだよ」

そう言ってフェイトは俺の腕に自分の腕を絡ませて、さらに胸を押しつけてきた。

「フェ、フェイト……その……なんだ……胸……」

「わざと当ててるんだよ。フィルが他の女の子に目が行かないように、しっかりとアピールしておかなきゃね♪」

「大丈夫だって、少しは自分のパートナーを信じろよ」

「分かってるよ。でも、私がしたいんだもん。フィルとこうやっていると、すごく落ち着くから……」

「それは……俺もだよ……行こうか」

「うん♪」

俺はフェイトに抱きつかれたまま、六課隊舎の中に入っていった。
入ってみたけど、明かりも付いていなく、どういう訳か人の声も聞こえなかった。

確かに、場所はここであっているんだけどな……

すると、一つだけ、明かりが付いている部屋があり、そこに行ってみると……

パアン、パアン、パパアアン！！

「な、何だ！？」

「な、何なの！？」

いきなりクラッカーの嵐にあったと思ったら、そこには……

『おめでとう！！　フェイトさん、フィル！！』

「み、みんな……これはいったい？」

「今日は同窓会じゃ……ないのか？」

「実は違うんやな♪」

「「はやて　（さん）！！」」

俺たちの前に現れたのは、良い笑顔をしたはやてさんだった。

「フィル、フェイトちゃん。今日はな……二人にここで結婚式をしてもらうために、みんなを集めたんや！！」

「「ええっっっっ！！」」

「驚いたやろ。二人を驚かしたくて、今まで秘密裏にしてたんや。それに……」

「これは、エリオ達が考えたことやで……本局のバカなお偉いさんのせいで、結婚が出来ないんじゃないかって、心配してたんやで……」

「エリオ、キャロ……」

「ルーテシア……お前もか……」

あたりを見渡してみると、壁一面にお祝いの飾り付けをしていたり、壇上も出来ていて、みんなもお祝い用の衣装に身を包んでいた。

そして……

「あれ……もしかして……ウェディング……ドレス！？」

「「「はい！！」」」

「僕たちのお給料じゃ、あれが精一杯だったんです……」

「でも、はやてさんが色々手直ししてくれたんです……」

「そのおかげで、綺麗なドレスが出来ました……」

確かに、ドレスには色々手直しした後が見られる。
でも、それをはやてさんが手直ししてくれたとは……

「ほんまに、苦労したで。でも、苦労した甲斐があって良いもんが出来たよ♪」

はやてさんの言うとおり、このドレスは有名人が結婚式で着ているドレスみたいに、華やかさと優雅さが備わっている。
下手なドレスなんて目じゃない。

「はやてさん……」

「フェイトちゃん……フィル、エリオ達の気持ち……受け取ったってや……」

＊　　＊　　＊

「はやて……」

はやてからドレスを受け取った私は、その思いを直に感じていた。
このドレスを買うために、エリオ達は自分たちの欲しい物を犠牲にしてまで……

さらに、今日の事も考えてくれて……

「エリオ……キャロ……ルーテシア……本当に……ほんとうに……ありがとうね……」

私はエリオとキャロを抱きしめながら、涙を抑えきれなかった。
三人とも……本当にありがとう

最高のプレゼントだよ……

「フェイトさん……フィルさんと、幸せになってくださいね」

「僕たちは、フェイトさん達が笑顔でいてくれることが、嬉しいんですから……」

「フィルさん……フェイトさんと……お幸せに……」

「ありがとう……ルーテシア……」

フィルも、ルーテシアを抱きしめながら、涙を流していた。
こんな風に祝ってくれるなんて……

みんな……本当にありがとう……

＊　　＊　　＊

「綺麗だよ。フェイトちゃん」

「ありがとう、なのは」

私は別室に行き、エリオ達がくれたウェディングドレスを着て、お色直しをしていた。
フィルも別室でタキシードに着替えている最中だった。

「フェイトちゃん……やっと、フィルと結婚できるね。今まで本当に忙しすぎて、こんな事考えられなかったでしょう」

「うん……正直かなり参っていたかな……私も、フィルも……」

「今後は、あんな殺人的な仕事は無くなると思うから、フィルと幸せになってね♪」

「えっ……？」

「ちょっと……美緒ちゃんと一緒に、本局のお偉いさんに、『お話』しにいったら、もう、こんな無茶な勤務はさせませんって、涙流しながら言ってたし♪」

「えっ……美緒、こっちに来ているの？　一体いつから！？」

「一ヶ月前くらいかな。美緒ちゃんと再会して、色んな話を聞いたんだ。話によると、二人ともあのままだったら、過労死してたんだって……」

「う、うそ……」

確かにオーバーワーク気味だったけど、まさかそこまでの事態だったなんて……

「それを聞いて、美緒ちゃんと二人でお偉いさんの所にお話に言ったんだよ。でも、美緒ちゃん本当に怖かったんだよ。あまりの殺気で、わたしあの場にいるのがやっとだったんだからね……」

「あ、あはははは……」

美緒も、なのはも、いったい何をしたの？

あの本局のお偉いさんが、涙を流してなのは達の話を受け入れたなんて……

知らない方が……幸せね……

うん。

そう思うようにしよう。

「何言ってるのよ。なのはだって、エクセリオンバスターなんてぶっ放していたでしょうが……」

「「美緒　（ちゃん）！！」」

扉が開くと、三年前にお別れした大切な友人。麻井美緒がそこにいた。

「美緒……本当に美緒なんだね……」

「久しぶりね、フェイト。そのドレス姿、本当に綺麗よ。やっとフィル君と結婚できるんだね」

「うん……美緒、本当にありがとう。私とフィルのために、色々してくれて……」

「当たり前でしょう、友達のためにするのは……」

「美緒……」

「フェイト、ちゃんとフィル君と幸せになりなさいよ……」

「うん……」

「それじゃ、私はあっちで結婚式に参加させてもらうからね」

そう言って美緒は扉を開けて出て行った。

美緒……本当にありがとう。

「じゃ、行こうか。フェイトちゃん」

私はなのはに連れられて、フィルの元に行くことになった。

途中で、はやてに連れられたフィルに合流し、その後はエリオ達と交代し、一緒に壇上に向かった。

＊　　＊　　＊

俺たちは、みんなが待っている会場に到着すると、そこには六課メンバーだけでなく、元ナンバーズのみんなも来てくれていた。

ウェンディとノーヴェが、垂れ幕で俺たちの事を祝ってくれて、チンク達は近くに来たとき、それぞれ一言ずつおめでとうと言ってくれた。

本当に、俺が知っている未来と違うんだなって、改めて思った。

そして……

壇上に来ると……

そこには、神父姿のクロノ提督がいて俺たちを待っていた。

「二人とも……結婚おめでとう……」

「お義兄ちゃん……」

「クロノ提督……」

「フィル、今日からは、お前の義兄でもあるんだから……他人行儀はよせよ」

「はい……」

「フェイト、今まで本当に辛いことの連続だったけど、これからは二人で困難に向かっていき、そして、自分たちの幸せをつかんでくれ……」

「ありがとう……ぐす……クロノ……」

俺たちは、クロノ提督が誓いの言葉を読み上げ、それぞれ誓いの言葉を交わし、その後、指輪の交換なんだけど……

なのはさんが持ってきてくれた指輪は……

「これ……」

「もしかして……」

「うん、フィルが持っていた、あのレイジングハートだよ。それを加工して、二人の指輪の宝石にしたの」

あの時、六課で俺のことを話したときに、なのはさんにレイジングハートは返してしまったのだ。
そのレイジングハートを使ったのか……

「どうして……レイジングハートを……」

「あのね……このレイジングハートは、私にとって、とても大切な物だけど、壊れてしまって、悲しい思いをさせているくらいなら、このような形でも、幸せの象徴になって欲しいの……」

「『不屈の心』……それを二人に託したいんだ。未来のわたしでも、きっと……同じ事したとおもうよ……」

「「なのは　（さん）……」」

「受け取ってね……未来のみんなの分の思い……受け取ってあげて……」

なのはさんから渡された指輪を、フェイトの薬指にはめると、フェイトはなのはさんから託された思いで、涙をポロポロ流していた。

それは、悲しみの涙ではなく、嬉しさから来ていたので、フェイトも涙を抑えることはせず、俺たちもじっと見守っていた。

そして……

二人は……

「……私達……ずっと……一緒だよね」

みんなが見守る仲……

「誓うよ……俺たちは、ずっと一緒だ……」

誓いのキスをした……

＊　　＊　　＊

1年後

「フィル……」

「どうしたんだ。ああ……結婚式の時のだな」

「うん……物置から出てきて、懐かしくなってね」

あの結婚式の後、俺たちは六課跡地で大パーティーを行った。

結婚式の時の、荘厳な雰囲気は全くなくなり、はやてさん達もみんな普段のストレスを晴らすかのように、バカ騒ぎをしていた。

俺たちみたいな職業は、いつ殉職をしてしまうか分からない。

でも、こうやって集まれたときくらいは、楽しく騒ぎたい……

パーティーが終わった後、美緒さん達は神界に帰っていたけど……

その時に言われた言葉で……

「フェイト、フィル君。もう、オーバーワークは駄目だからね。今度会うときは、二人の子供が生まれたときにでもくるからね♪」

別れは悲しいけど、また会えるって約束したんだ。

絶対会えると信じている。

「フィル……」

「あの結婚式……本当に嬉しかったね」

「ああ……あれは俺の一生の思い出だよ……」

「これからも……いっぱい……いっぱい……思い出を作っていこうね♪」

俺たちは、本当に色んな人に支えられている……

それは、とても大切な絆……

その証拠に……

俺とフェイトの左薬指に輝く、レイジングハートの宝玉は……

優しい輝きをしている……

俺たちの愛を表すかのように……

## ～Ｔｒｅａｓｕｒｅ～（後書き）

ＳＰＥＣＩＡＬ　ＴＨＡＮＫＳ

『魔法少女リリカルなのは～ＦＡＮＴＡＳＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲ　２ＮＤ　ＳＥＡＳＯＮ～』より
麻井美緒様、麻井美紗様、麻井美沙様

彼女たちのことを詳しく知りたい方は、白姫先生の所で連載してますので、そちらを参考にしてください。

## ～Ｔｒｉａｎｇｌｅ　Ｈｅａｒｔ～（前書き）

これは、今までにない形の話にしてみました。
是非、ご意見を頂けたらと思います。

そして、今回フィルの過去に少しだけ触れています。

「はい、これで今日の治療はお終いです」

「ありがとう、ごめんね。いつもこんな辺境なところまで来てくれて……」

「いえいえ、基本的にはワープできてますから、大丈夫ですよ」

ＪＳ事件が終わって1年、機動六課も解散し、私は養生のためこの無人世界カルナージに来ている。
ここは人は誰もいないけど、自然がとても溢れていて、空気も澄んでいるので養生目的には最適な場所とも言える。

医療の問題は、フィルがいつも定期的に見に来てくれて、問題はない。
メディカルポッドがあれば、大概のことは大丈夫なので本当に助かる。

このメディカルポッドは、アースラに付いていたのを、そのまま取り付けて使っている。
但し、使い方が複雑なので、基本的にはフィルにお任せになってしまうけど……

「それにしても、もう殆ど良くなってきていますね。これでしたら、あと半年くらいで現役復帰も出来ますよ」

「それもフィルのおかげよ。あの時……私を助けてくれなかったら……今頃は……」

もしかしたら、あのまま廃棄処分という形で死んでしまったかもしれない。

実際、私のポッドは停止寸前だったのだから……

「ママ、そんな悲しいこと言わないで！！」

「ルーテシア、あなたいつから？」

「ママがポッドの中から出てきてから、ここにいたの。ママ、今はこうしてフィルさんのおかげで良くなってきてるんだよ。だからそんなこともう言わないで！！」

「ごめんなさいルーテシア。つい……ね……」

娘に悲しい思いをさせていたんじゃ、母親として駄目よね。

「そうですよ、メガーヌさん。今はこうして親子二人で幸せに暮ら

せてるんですから……ね……」

「そうね……」

ルーテシアは六課解散と同時に、私の養生のため休業という形を取っている。
本当は止めさせたかったんだけど、フィルに対する殺傷設定の魔法砲撃の罪は決して消せる物ではなく、六課で働いていた分だけでは、あと少しだけ足りなかったのだ。

その事はルーテシアも納得していて、私が良くなったら、復帰する予定だ。
本人曰く、どこに復帰するのかは決めているらしい……

「今はしっかりと治すことが大事なんですからね。そのためでしたら、俺に出来ることでしたら何でもしますよ。と言っても、あまり出来ることはありませんけど……」

そんなことはない。
こうして週一で私の治療に来てくれることがどんなに助かってるか……

それだけじゃない……

ルーテシアだって、本来の明るさも取り戻してきている。

六課にいたときから、段々と性格は戻ってきていたけど、この一年で見違えるように変わってくれた。

「さてと、二人ともお腹がすいたでしょう。何か作るから少し待っていてね」

「やったぁ！！　私フィルさんのお料理大好き♪」

「ははっ、それだったらよりをかけてつくるからな」

そう言ってフィルは台所に向かい、手際よく料理をし始めた。
フィルの料理の腕前は、プロ顔負けな所がある。

こうしてフィルが来てくれたときいつも作ってくれるのだけど、私の方が自信をなくすほどなのだ……

「さて、出来たよ。二人ともいっぱい作ったから、沢山食べてね」

フィルが作ってくれたのは、ルーテシアの大好物のハンバーグを始め、私の好物のお野菜の煮物までである。
しかも、煮物の方は私のために、味を薄く作ってくれているという気配りも忘れていない。

「おいしいぃいい！！　やっぱりフィルさんのお料理は最高！！」

「本当に美味しいわ。いつも思うけど、同じように作ってもこの味は出せないのよね……」

「ははっ、俺からしたらメガーヌさんの料理の方が美味しいと思うな。俺、メガーヌさんの料理大好きだし」

「ふ、フィル……その……ありがとう……」

フィルはとても良い笑顔でそんなことを言ってくれた。
この子はこうやって天然で女性をドキッとさせる言葉を言うことがある。

「むぅ……」

ルーテシアは頬をふくれさせ、むくれてしまっている。
ふふっ……ヤキモチを焼いてるのかしらね。

「フィルさん、今度は私が手料理を作りますから、是非食べてくださいね♪」

「ありがとう、楽しみにしてるね」

そう言ってフィルは娘の頭を撫でている。

「えへへ♪」

ルーテシアもまんざらでもなく、ニコニコしている。
元々フィルのことが好きだもんね。ルーテシアは。

＊　　＊　　＊

「さてと、今日の所はこの辺で失礼しようかな」

「「ええっ！！」」

「フィルさん、今日は泊まっていってください」

「そうね。もうこんな時間だし……」

時計を見ると、午後９時を指していた。

「でも、女性二人の所に男性の俺がいるのも……」

「そんなの気にしないわよ。フィルだったら、むしろ……」

「えっ……？」

「……泊まっていって……欲しいかな……」

なぜか、今日はもっと一緒にいたい気持ちだった。
普段ならフィルを困らせることなんて言わないのに……

「ふぅ……それじゃ今日はお言葉に甘えさせてもらいますね」

「やったぁ！！　それじゃ、フィルさん、こっちで私と一緒にゲームして遊びましょう！！」

「お、おい……そんなに引っ張らなくても、時間は沢山あるし……」

ルーテシアはフィルの手を取って、自分の部屋へと連れて行ってしまった。

「本当……フィルって……優しいのよね……」

いつもルーテシアや私のために色々としてくれる。

治療だけでなく、心のケアもしてくれていた。

こうして、娘と一緒に暮らしているけど、やっぱり女手だけじゃ出来ないことも多い。

それをフィルは本当に手助けしてくれてた……

この家を建てるときだって、ガリューと一緒に慣れない大工仕事もしてくれたし、ルーテシアが休職するときも、立場が悪くならないように、色々と働きかけてくれた。

「フィル……グリード……か……」

そして、私自身もそんな彼に段々惹かれていった。

いつも一生懸命で、真っ直ぐで……そして……

自分よりも、大切な人を優先してしまうその心に……

でも……

あなたの幸せはどこにあるの……

＊　　＊　　＊

「う、う～～ん……やっと眠ってくれたよ……」

さっきまでルーテシアと色んなゲームをやって、中々決着が付かず、さきほどようやく眠ってくれたのだ。

そして、少し外の風に当たりたくて、俺は家の庭に出て、外の空気を吸っていた。

「……でも、本当に良かったよな。ルーテシアも、メガーヌさんも心から笑ってくれるようになって……」

《これも、マスターが必死でメガーヌさんを助けたからですよ。そうでなかったら、ルーテシアも心が壊れていましたから……》

「俺は大したことをしていないよ。ここまで回復したのはあの二人の努力さ。俺がしたことはほんの些細なことさ……」

実際、俺がしたことなんて大したことはしていない。

この親娘が幸せなのは、二人の努力のたまものだ。

「後はガリュー達が手助けしてくれたからだよ。ルーテシアにとって、ガリュー達は大切な友達だしね」

《マスター……》

「そろそろ……俺がすることも終わりだな……メガーヌさんも回復してきたし……それに……」

「これ以上……初恋の人の傍にいるのは……辛くなるから……」

＊　　＊　　＊

「う、嘘……でしょう……」

私はふと目がさめてしまい、少し外の空気を吸おうと庭に出ようとしたが、フィルとプリムが話しているのを見てしまい、出るに出られなくなってしまったのだ。

本当は盗み聞きするつもりなんか無かったのに……

「フィルの初恋の相手が……私…？」

実はフィルの事は大分昔から知っていた。

孤児院でフィルのことを知り、そこでレジアスさんに引き取られてからも、よく遊んだりしていた。

昔のフィルは、私のことをお姉さんとよく慕っていてくれた。

まさか、その時のことを覚えていてくれたとは……

「フィル……」

私がもう少しフィルの近くに行こうとしたとき……

ペキッ

「！！」

足下にあった枝を踏んでしまい、物音を立ててしまう。

「誰！？」

フィルはその音に気づき、私の方へ振り返ると、ハッとし……

「メガーヌ……さん……」

＊　　＊　　＊

「どうして……ここに……？」

さっきまで誰もいなくて、ここには俺とプリムしかいなかったのに……

メガーヌさんの気配に全く気づかなかった。

「ちょっと……眠れなくて、外の空気を吸いに……ね……」

「そう……ですか……」

「……」

それから、メガーヌさんは一言言ってから、言葉を発さなくなってしまった。

「あ、あの……」

「フィル……一つだけ……聞きたいことがあるの……」

さっきまでメガーヌさんはずっと黙ってしまっていたが、意を決し……

「あ、あのね……私のこと……どう思ってくれてるのかな……」

「どう……と言いますと……？」

「私のこと……その……異性として……見てくれてるのかな……」

「！！」

ま、まさか……

「ごめんなさい……プリムとの会話……聞いてしまったの……」

「そう……ですか……」

やっぱり聞かれていたんだな……

そうでなかったら、普段のメガーヌさんがこんな事言うわけがないから……

「あの時のこと……覚えていてくれたんだね……」

「……はい……」

メガーヌさんが言うあの時とは……

俺は、クラナガンの郊外で捨てられていた孤児だった。

それを偶々任務中のメガーヌさん達に拾われて、ある孤児院に預けられていた。

そこでしばらくの間は、幸せに過ごしていたんだけど、次元犯罪者がやってきて全ての物を蹂躙してしまい、孤児院は無くなってしまった……

その後レジアスの親父さんに助けられ、そこでメガーヌさん達に再会し、色々お世話になったんだ。

その時から俺は、メガーヌさんのことを優しいお姉さんと慕っていて、子供心ながら好きになってしまったんだよな……

これが俺にとって初恋になったんだよな……

「まさか、フィルがそんな風に思っていてくれたなんて……」

「ばかですよね……メガーヌさんにはちゃんと旦那さんがいたのに……あの時の俺は本当にガキでしたから」

その旦那さんも病気で亡くなってしまい、残されたのは幼いルーテシアだけだった。
それでもメガーヌさんは必死にルーテシアのために頑張ってきた。

「そんなこと……無いわよ。私は、嬉しいわ。フィルの……気持ちが……」

「良いですよ。気を遣わなくて……。俺みたいなガキが、メガーヌさんには釣り合わないですから……」

実際俺みたいなガキじゃ、大人の女性のメガーヌさんには釣り合わない。
だからこそ、この気持ちは言わないでいた。

＊　　＊　　＊

フィルの言葉は私にとって驚きを隠せないでいた。
私のことを、そんな風に思っていたくれたなんて……
その事はとっても嬉しい……
だけど……

「ねぇ……フィル。釣り合うって誰が決めるの。それは、貴方じゃないわ。この場合は私でしょう」

「メガーヌさん……」

「フィル……貴方は本当に素敵な男性よ。私だけでなく、娘のルーテシアや召喚獣達にまで色々してくれた。そんなに私達のことを思ってくれる人は、貴方以外に誰もいない！！」

「だから……」

私はフィルを自分の方へ抱き寄せ……

「……そんな風に自分を卑下しないで……それじゃあんまりにも……辛いよ」

そんな風にいつもいつも自分を殺していたら、誰が貴方のことを見てくれるの……

誰が貴方を愛してくれるの……

そんなのあまりにも悲しいから……

「メガーヌ……さん……俺…」

「私は……私はね。フィルのことが大好きよ。こうやって、いつも私やルーテシアのことを思ってくれる貴方のことが……大好きよ」

いつもフィルは私達のことを本当に思ってくれた。
そんな貴方だからこそ、私は惹かれたのよ……

「フィル……貴方のその性格は美点だけど、同時に駄目なところでもあるわ。もう少しあなたは自分に自信を持って……ね……」

「……でも……」

「それじゃ……」

私は……

「んっ……」

フィルの唇にキスをしていた……

「メガーヌさん……」

「これが……私の素直な気持ちよ。フィル、あなたの本当の気持ちを……聞かせて欲しいかな」

＊　　＊　　＊

突然メガーヌさんにキスをされ、俺は頭の中が真っ白になってしまった。
そして、メガーヌさんは俺に自分の気持ちを伝えてくれた。
だけど……

「……俺で……俺で本当に良いんですか。メガーヌさんだったら、もっと素敵な男性が……」

すると、メガーヌさんはふぅっ、とため息を吐きながら……

「だから、それがいけないの。もっと自信を持ちなさい。あなたは私が好きになった人なんだからね」

「だから……」

メガーヌさんはまた俺をギュッと優しく包み込むように……

「私と一緒に……いて欲しいな……」

「はい……」

「フィル……」

メガーヌさんは一旦俺を離し、その後瞳を閉じる。
その意味が分からないほど、馬鹿じゃない……

俺はメガーヌさんの頬に手を添え……

星空が照らす中……

俺たちはそのまま……

唇を合わせ、気持ちを確かめ合った……

＊　　＊　　＊

「メガーヌさん……俺、こういうの経験無いんです……」

「そっか……それじゃ私が初めてになるんだね……」

今まで俺は女性とそう言った経験が全くない。
恋愛経験のなさが災いしているな……

「いいわよ……私がいっぱい……いっぱい教えてあげるから」

メガーヌさんは俺にキスをすると、最初はただ唇が触れているキスだったけど、段々と舌を絡めてきて、深いキスをしてきている。
こうしてキスをしているだけで、メガーヌさんの気持ちが伝わってくる。

息継ぎの度に、銀色の糸ができあがるほどキスは情熱的な物になっている。

「メガーヌさん……」

「フィル、メガーヌって呼んで。恋人に【さん】付けは無いんじゃない……」

「それも……そうですね」

「ふふっ……フィルはここが弱いのかな……」

そう言ってメガーヌさんは、俺のありとあらゆる所を攻めてくる。
その度に俺の身体は、今までにない感覚に襲われた。

「ねぇ……フィル。フィルからも……お願い……」

「はい……」

今度は俺がメガーヌの上着を脱がし、さらにブラのホックをとり、
その大きな胸が露わになると、手が吸い込まれていた。

「あっ……ん……」

胸に触れると、メガーヌは敏感に感じてくれ、その度に俺の支配感
がどんどん生まれてきた。

「ねぇ……フィル……一つになりましょう。お互いが決して離れな

いように……ね……」

そして……

俺はメガーヌに包まれるように一つになり……

その感覚は今までに感じたことがない安心感に包まれていた……

その後も、何度も俺はメガーヌを求め、彼女もその度に応えてくれた……

＊　　＊　　＊

6年後

俺とメガーヌは一緒になり、今はクラナガンの郊外にマンションを買って、そこで親娘3人で暮らしている。

メガーヌは完治した後、管理局には戻らず専業主婦をしている。

今のメガーヌは、リンカーコアが大分傷ついてしまい、魔導師としては働くのはとても厳しかったのだ。

でも、その代わりルーテシアが、現在俺の補佐官として、俺をサポートしてくれている。

だから、何の心配もない。

俺たち親娘は穏やかに過ごしていたが……

「パパ、実は……大切な話があるの……」

「話って……なんだい？」

ルーテシアはいつになく真剣な表情をしている。

いったい何の話なんだろう？

「あ、あの……ね……こんな事いけないことは分かってるんだけど……」

「えっ……」

ぎゅっ……

「る、ルーテシア……？」

突然、俺の背中に抱きつき……

「好きなの……パパとしてでなく……一人の男性として……大好きなの！！」

「お、お前！！」

「分かってるよ。ママのことが大好きなのは……。でも、あきらめられないの！！　ずっと私とママを救ってくれたその優しさ、心、どれもが他の男性にはないの！！」

ルーテシアの告白は、衝撃的な物だった。
まさか……そんな風に思ってくれていたなんて……

「お願い……たった1回だけで良いの……私を……抱いて欲しい……」

「ルーテシア……」

ルーテシアの気持ちは物凄く嬉しい。
メガーヌと付き合っていなかったら、間違いなくルーテシアの気持ちに応えていただろう。

贔屓目で見るわけではないが、１６歳という年齢だけど、母親似で

スタイルは物凄く良い。
顔立ちだって間違いなく美人だ。

だけど、そんな大切な人だからこそ、俺はルーテシアを引き離そうとしたとき……

「応えてあげたら……フィル」

「ママ！！」

「メガーヌ！！」

メガーヌが扉の所から現れ、とんでもないことを言い出した。

「お前、分かっているのか。ルーテシアを受け入れると言うことは！！」

「分かっているわよ……分かっているからこそ、フィルに大切な娘を抱いて欲しいの」

「えっ……？」

「あのね……フィルは気づかなかったかもしれないけど、ルーテシアはね、六課にいたときから、ずっとあなたのことを見ていたのよ。それでも、私と付き合うようになって、必死でその気持ちを抑えよ

うとしてた……」

メガーヌの言葉に、俺は驚きを隠せなかった。
まさか、そんな前からルーテシアが俺のことを思っていたなんて……

「だけど、もう駄目だったのね。ルーテシアも頑張って他の人を好きになろうと努力した。だけど、どうしてもフィル以上の男性を見つけられなかった。そうよね、ルーテシア」

「ママの言うとおりよ。結局、パパ以上の男性なんて見つかったの。だから……」

「お願い……ママと一緒で良いから……私も……して……ください」

ルーテシアの目は真剣そのものだった。

「……後悔しないな。ルーテシアもメガーヌも……」

「言うわけ……無いでしょう……だって、これで……私達は、本当の家族になれるんだから……」

「世間的には、いけないことだと思うよ。だけど、自分の心を押し殺してまで生きるのは……もう嫌なの！！」

「……わかった……ルーテシアのこと大切にするな……娘としてだ

けでなく、一人の女の子としても……」

ルーテシアの表情は、一瞬驚いたが、すぐ花のような笑顔になり……

「ありがとう！！　パパ！！」

俺の胸に飛び込んできた。

「あ、あの……お願いがあるんだけど……」

「分かってる。その……くるか。俺の寝室に……」

「うん♪」

＊　　＊　　＊

「えへへ♪　パパの匂いだぁ～♪」

さっきから俺たちはベッドに腰をかけて、お互いに寄り添って、こ

んな感じで過ごしていた。
メガーヌも最初は普通に経験してねと、気を利かせてしばらくの間外に出かけていったのだ。

「ルーテシア……何度も言うけど、本当に後悔……しないな」

「後悔なんて、しないよ。むしろ、ここで止める方がずっと後悔するよ」

ルーテシアは俺の左腕にしがみつき、自分の胸を押し当てて……

「お願い……パパ。いっぱい……いっぱい……だきしめて……」

「ああ……」

俺はルーテシアのピンク色の唇にキスをし、最初は唇が触れあうだけの物だったけど、次第に舌を入れあい、お互いの存在を確かめ合うようなキスを繰り返していた。

息が続かなくなり離れると、お互いの唇の間には銀色の糸が出来ていた。

「あっ……」

そして、ルーテシアをベッドに押し倒し……

「……いいよ」

俺は、ルーテシアのTシャツをおもむろに脱がし、ブラも優しくとり、その両胸を何度も揉みし抱く。

「ふぁ……あ……ん……」

その可愛い声に俺の支配欲もどんどんふくれあがってきている。最初は背徳感があったけど、今はそれ以上にルーテシアのことが欲しかった。

さらに全身をくまなく求め、いよいよ……

「来て……お願い……」

俺は、ルーテシアの初めてを貰い……

ルーテシアも結ばれたことを幸せに思ってくれ……

俺たちは身も心も結ばれ……

その後も何度もお互いのことを求め合った……

＊　　＊　　＊

「なぁ……メガーヌ、ルーテシア」

「なぁに♪」

「どうしたの？」

「今更だけど……俺、二人のことを抱いてしまったんだよな」

結局あの後、メガーヌが戻ってきて、ルーテシアと3人で求め合うことになってしまった。

さすがに3人でするのは経験がなかったので、したあとは脱力感で動けなかったよ。

まさか、メガーヌが入って収拾が付かなくなる状態になるとは……

「そうね……でも、私は良いわよ。愛する夫と娘が一緒なんだからね」

「パパ、確かに私達がしていることは、世間から見たらおかしいと思うよ。だけど、私とママ、そしてパパが愛し合っているなら、それでいいの！！」

「……メガーヌ、ルーテシア……」

「「だから……」」

そして二人は、それぞれ俺の腕に抱きつき、その豊かな胸を押しつける。

「「幸せにしてよね、フィル　（パパ）♪」」

「あ、ははっ……女性は強しってか……俺なんかよりも肝が据わってるよ……」

＊　　＊　　＊

「はい、パパ、あーん♪」

「あ、あーん……」

翌日、３人が結ばれた朝、いつも通りの朝を迎えたのだが……

「どう、美味しい？」

「うん、美味しいよ。ルーテシア」

「えへへ♪　良かった」

「むぅ……」

いつもなら、メガーヌがこういったことをしてくれていたんだけど、ルーテシアは前々から、自分もしたかったらしく、こうして俺にあーんをして食べさせてくれている。

俺も愛する娘にされて、まんざらでもないしね……

「あっ……パパ。ほっぺにご飯粒付いてるよ」

「んっ？　ああ……」

俺が頬のご飯粒を取ろうとしたとき……

チュッ

「る、ルーテシア！？」

ルーテシアがキスでご飯粒をパクッと食べてしまった。

「えへへ♪　これで取れたよ♪」

「あ、ありがとう……」

ルーテシアはとても満足しているが……

「……むぅぅぅ……」

逆にメガーヌの方がふくれてしまっている。

「あ、あのな……その……」

「分かってるわ……いつもこういったことは、私がしていたんだから……」

いつもならこういうときはメガーヌがしてくれていた。
それをいつも見ていたルーテシアが今回真似したのだ。

「自分がするのは良いけど、娘とはいえ他の人にされるのは……やっぱり妬けちゃうわね」

「妬いてくれるんだ……」

「当たり前でしょう。まして娘の方が若いし……綺麗だし……」

メガーヌは自分が若くないと自分を卑下してしまっている。

「ふぅ……昨日、あれだけ愛し合ったのに、自分の旦那のこと信じられない……」

「……信じているわ。でも……んんんっ！！」

「あああああっ！！」

俺はメガーヌの唇を、強引に奪いそのまま舌を入れて口の中を蹂躙する。
キスが終わると、メガーヌの表情がぽわんとしていた。

「……帰ったら、思いっきり……するからな。覚悟してろよ」

「……うん……いっぱい……してね……」

「むぅぅ……いいな……ママだけ……」

「お前はこれから俺と一緒に仕事だろうが……それにメガーヌだけじゃないからな。お前も一緒だからな。言っとくが、朝からこんなんじゃ夜は理性は持たないからな。お前も覚悟してろよ」

正直朝からこんなことしてるんじゃ、理性を保つだけで一杯いっぱいだ。

「もちろんだよ。ママだけじゃなくて、ちゃんと私も可愛がってね♪」

「分かってるよ。今は……」

俺たちは玄関でキスをする。

「んっ……」

「これで、勘弁な……」

「……うん……パパ」

「何だ？」

するとルーテシアは屈託のない笑顔で……

「大好きだよ！！　いつまでも一緒だからね！！」

「ああ……お前が父親離れするまでは、ずっと一緒だ……」

「だったら一生傍にいてね。フィルパパ♪」

世間から見たら、俺たちのことはおかしいのかもしれない……

だけど、俺もメガーヌも、そしてルーテシアもお互いのことを必要とし、愛し合っている。

だから、周りが何と言おうと、俺は彼女たちを愛し続けたい……

形が人と違おうと、それが俺たち3人の愛の形なのだから……

## ～Ｔｒｉａｎｇｌｅ　Ｈｅａｒｔ　～（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

今回はメガーヌとルーテシアの親娘で話を書いてみました。

ちなみにルーテシアの性格は漫画のＶｉＶｉｄを参考にしてます。

この手の話を書くのは、本当に初めてでして、どうやったら二人の気持ちを描けるか何度も考えました。

そして、できあがったのが今回の話になります。

おそらく、最初で最後のハーレムストーリーになります。

# GUN×SWORD（前書き）

この話は、カガヤ先生より頂きましたシグナムストーリーになります。
自分ではとうとう果たせなかったシグナムの物語、どうか最後までお楽しみください！！

カガヤ先生が現在連載中の『魔法少女リリカルなのは～輝光戦記～』の方もどうかよろしくお願いいたします。

「「スターライトブレイカー！！」」

聖王の鎧を身にまとったクアットロに向けて、俺となのはさんで最後の攻撃を仕掛ける。
正真正銘、最後の一撃……

これで決める！！

今ここでクアットロを倒す。

その為に俺は、また戻ってきたんだ。

未来を救う為に……

ティアやフェイトさん達から受け継いだ全てを籠めて……

「いっけえええぇぇぇ～～～～！」

対するクアットロは両手を交差させて堪えている。

「こ、この程度…ゆりかごのコアと融合した私には…届きませんわ！」

ニヤリと邪悪に微笑むクアットロの言う通りだ。
俺となのはさんの決死のブレイカーは、クアットロを守る聖王の鎧を貫けない、届かない……

「……はずが……ないだろ！！」

プリムを握る手に力が入る。

「…皆がくれた力と、なのはさんの力が加わったこのブレイカー……」

「……届かないはずがないよ！！」

ピキッ

「えっ？……な、なぜ、ヒビが！？」

クアットロの体、胸元にヒビが入った……

効いてる！

このまま押し通せば…クアットロを倒せる！

「なのはさん…もう少しですよ！！」

「そう……だね……くっ！！」

なのはさんの息が荒い、苦しそうだ。

ブラスター3を使用しての全力ブレイカー、苦しくないはずがない。

かくいう俺も、結構やばい状況だ。

≪マスター…魔力が…もう尽きそうです！≫

くそっ、ここまで来て、肝心の俺達の魔力がもたないなんて……

「くっ、あはっ……あはははは！！　どうしました？　威力が落ちてますよ～？」

ヒビで狼狽していたクアットロが冷静さを取り戻したようだ……厄介な。

「あれですか～？　勇んでかっこよく決めようとしてもガス欠ですか？　だらしな～い」

「うる……さいっ！　その前に、お前を倒す！！」

「私達は……絶対に負けられないんだから！！」

強がってはみるが……ブレイカーは今にも消えそうだ。

「こうなったら……ブラスター3を……」

「ダメですよ、なのはさん！！　そんなことをしたら、あなたの体がもたない！！」

「無駄無駄無駄なんですよ、あなた達では私にヒビを入れるくらいしかでき……」

『ヒビが入っていれば十分だ』

「えっ……？」

ドスッ…ドボーン！

突然、俺となのはさんの間を一本の矢が高速で通りすぎ、クアットロの胸元へと突き刺さり、大爆発を起こした。

「あれは……」

「シグナムさんのファルケン！？」

すぐ後ろにアギトとユニゾンし、レヴァンティンを構えたシグナムさんが降り立った。

「何を呆けている！！　今がチャンスだ！！」

「「っ！！……はあぁぁぁぁ！」」

最後の力を振り絞り、ブレイカーに魔力を籠める。

「いや…いやぁ……いやあぁぁぁぁぁ～～～！！」

クアットロの体中にヒビが入り、そのまま大爆発を起こした。

「はぁ…はぁ……はぁ…」

「くぅ…はぁ……だ、大丈夫？　フィル？」

「2人とも、無茶をしすぎだ……」

倒れかかった俺となのはさんを両手で支えながら、呆れたようにシグナムさんが言った。

「あ、あはは……それにしてもシグナムさんはどうしてここに？外は大丈夫なんですか？」

そうだ、シグナムさんには外で大量に湧き出るガジェットを相手にしていたはず。

「それなら問題ない……。ヴィータが駆動炉を破壊したおかげかガジェットの射出が止まった」

「なるほど、それで残りのガジェットを全滅させてここに…って、流石シグナムさん…」

ははっ、と乾いた笑みを浮かべながら、俺の意識は静かに沈んでいった。

「ん？　フィル？　どうしたフィル！？　しっかりしろ！！」

「フィル！！……フィル！！」

今まで見た事もないほどのシグナムさんの狼狽ぶりを見ながら…
あぁ、そういう顔も綺麗で可愛いな、と呑気に思い、意識を失った。

＊　＊　＊

未来でクワットロを相討ちになり、女神の力で過去へと飛んだ俺は、
過去の世界で六課メンバーと共にゆりかごを落とし、クアットロや
スカリエッティを倒した。
そして…祝勝パーティーが開かれた。

「ふぅ……全く、みんなのはしゃぎっぷりと言ったら……」

≪そういうマスターも、結構はしゃいでましたよ？≫

パーティー会場の喧騒を尻目に俺は海岸を歩いている。
騒がしさから逃れる為……だけではない。
あそこに居づらい理由は……

「……はぁ、平和になったら、尚更、意識しちゃうんだよな……」

≪シグナムさん…ですね？≫

「……あぁ、同じ人……だけど、やっぱりあのシグナムさんとは少し違う、とはいえ……」

意識しちゃうのは、仕方ない…のかな。

未来の世界で、俺はよくシグナムさんに鍛えられていた。

遠距離型だった俺は、近距離への対応の仕方を習いたい、シグナムさんに願い出た。

『私は……教えるのは向かない。テスタロッサに頼めばいいだろう？』

そう言うシグナムさんに何度も頼みこみ、やっと教導をしてもらう事になった。

師匠で姐のような存在、シグナムさんと初めて出会ったのは全くの偶然だった。

訓練学校時代、実地訓練で一緒に任務を行う事になった部隊にシグナムさんはいた。

そして、ふとした不注意で危機に陥った時にシグナムさんに助けられた。

『最初から全てうまくやろうとするな。お前はまだ学ぶ事が多い、その中で自分が出来る事、やれる事を全力で行え、そして、いつかお前も誰かを助けられるように強く生きろ』

その時のシグナムさんの顔は今でも覚えている。
凛とした眼差し、流れるような髪、全身から溢れ出る真の騎士の佇まい。
自分の不注意に沈む俺の頭を撫でながら優しく、そして、厳しく諭すように言った言葉。

あの時から俺は…シグナムさんに憧れて、好きになったんだ。
いつか、シグナムさんのように強くなったら誰かを助けられる強さを身につけたら……
その時こそシグナムさんに自分の気持ちを告白しよう。

そして、六課に配属になり、シグナムさんと再会して約束をした。

『いつかシグナムさんに勝てたら、その時に話したい事があります』

対するシグナムさんは……

『……そうか』

と、どこか嬉しそうに頷いてくれたのが、嬉しかった。

だが……

現実は別れの言葉もかわせないまま……

シグナムさんは消えた。

ゆりかご決戦の時に主である八神はやてさんがゆりかごの砲撃によって消滅。
同時にシグナムさんもヴィータさん達と共に消滅してしまった。

その事を知った俺は…何も出来ない自分に絶望し無力感に苛まれた。
けれども立ち止まるわけにはいかなかった、そうして生き残ったメンバーと戦い、今に至る。

「今のような強さがあれば皆を……シグナムさんを助けられたかな、って思うよ……」

≪……マスター≫

気が付けば俺は泣いていた。
どうして、泣いているのか分からない。
シグナムさんも、はやてさんも、なのはさんも、ティアもスバルも皆生きてる。

全員生き残り、無事に事件は解決した…なのに。

「っぐ……な、なんで……ひぐっ……なんで涙が止まらないんだ……」

「……もう一度未来で戦いたいですか？」

「えっ？」

突然声をかけられ辺りを見渡すと、１人の女性が立っていた。

「女神……アルテミス……」

俺を過去へと送り届けた張本人がそこにいた。

「あなたのおかげで時間の流れは正常に……いえ、それ以上になりました。本当にありがとうございます……」

「……別に礼を言われる事じゃないさ…ただ俺は、皆を助けたいと思っただけだ」

「……なら、あなたが本当に助けたい人達を助けに行きますか？」

「……はっ？」

女神の言っている意味がよくわからない。
本当に助けたい人達？　シグナムさんたちなら、この世界でもう助け……

「まさか！！」

「はい、あなたの願いを1つ叶えましょう……歴史の流れを、正しき流れにして頂いた御礼です……」

「だったら俺が願うのはたった一つだけだ！！　俺を、俺を……未来に戻して欲しい！！」

未来の俺のいた世界の皆を助けたい！！

「えぇ、あなたを元に居た世界へと戻しましょう……もちろん、今の力はそのままで」

女神は優しく微笑んだ。
今の俺の力をそのままに…元の世界へ戻る。

助けられる……

今の俺とプリムの力なら……

元の世界の皆も助けられる！！

「……頼む、俺は……皆を助けたい！！」

「あなたが世界の流れを元に戻しれたおかげで、元の世界の歴史も大分変わっていますよ」

女神が言うには、元の世界もほとんどこの世界と変わらない歴史を辿っているらしい。
ユーノさんの暗殺は起きず、六課は襲撃されヴィヴィオは奪われてはいたが
俺が命をかけて皆を逃がしたおかげで、六課メンバーは全員無事、という歴史だ。

「ゆりかご決戦の時のミッドチルダへ、あなたを飛ばします……後はあなた次第ですよ……」

「わかりました……」

≪マスター、みんなへの別れはいいんですか？≫

元の世界へ戻ったらこの世界へは二度と戻っては来れない……

だから、別れを言うべきなのだろうけど……

「いいさ、元々俺は流れ者のイレギュラーなんだから……」

そう、これでこの世界も本当の意味で正しくなる……

「バカッ！！　あんたがよくても、あたし達が良くないわよ！！」

突然ティアの声が聞こえ、振り返ると……六課の皆がそこにいた。

「な、なんで、みんなここに！？」

「パーティーの主役がいつの間にかいなくなっていれば……探すのは当たり前だろ？」

「ヴィータの言う通りだよ……今の話は、全て聞かせてもらったよ」

フェイトさんが悲しみを秘めた眼を向けてきた。

「フェイトさん……クロノさんやリンディさん達によろしく伝えてください」

「うん、必ず伝えるね……フィル……私ね……」

「えっ？　なんですか？」

「……ううん、フィル、あなたに出会えてよかったと心の底から思うよ」

涙を浮かべながら笑うフェイトさんになのはさんがハンカチを差し出した。

「フィル……元の世界へ戻るんだね？」

「……なのはさん、はい……これからが俺の…フィル・グリードの本当の戦いですから……。ヴィヴィオとユーノさんと仲良く幸せに暮らして下さいね」

「……うん♪」

スバルが眼に涙を溜めて飛び込んできた。

「フィル……本当は止めたいけど…でも、でも…うぅ……」

「ほら、泣かないのスバル。確かに別れは辛いけど、フィルのためよ」

「フィルは私達の為に頑張ってくれたのよ。フィルにも幸せになってもらわなくちゃ……」

ギンガさん、ティア……

「フィルさん、向こうの世界でもがんばって下さいね、色々ありがとうございました」

「皆を……向こうの世界のエリオくんやフェイトさん達をお願いします！！」

エリオとキャロが揃って頭を下げた。

「2人とも……あぁ、絶対に皆を助けて見せるよ」

2人の頭を優しく撫でる。
あっちでもこっちでも、2人は俺の可愛い弟妹分だな……

「フィル、ほんまにありがとな……フィルのおかげで、皆無事に事件を終えられたんや……」

「フィルがいてくれたから、皆がんばれたんですよ」

「はやてさん、リイン曹長……夢、頑張って下さいね。親父さんやカリムさん達にも……」

「よろしく伝えておくから……安心してな」

はやてさんは涙を拭きながら笑顔で頷いた。

「無茶したらダメよ？　なのはちゃんと同じで、すぐに無茶するのは悪い癖なんだから……」

「ははっ……善処しますよ。向こうの世界のシャマル先生にも、よく言われましたから」

シャマル先生、最後まで俺の体の心配してくれてありがとうございます。

「少しくらい強くなったからって慢心するんじゃねぇぞ。まだまだ鍛え足りないんだからな」

「はい、向こうでもしっかりヴィータ副隊長にしごかれてきますよ」

俺も、もっとこっちのヴィータ副隊長の教導受けたかったですよ。

「フィル……元気でな」

「えぇ、ザフィーラさんも……」

ザフィーラさんと固く握手をした。

そして……

最後に……

「フィル……」

「シグナムさん……あの、俺…」

「お前が私を…私の後ろの誰を見ている事くらい……気付いていたぞ」

「……すみませんでした」

「なぜ謝る？　……お前は強くなった。その強さで、本当に助けたい人を助けにいってこい」

「……ありがとう……ございました！！」

「それと…自分で言うのもなんだが、【私】は堅物だからな？　色々手を焼くぞ」

「ははっ、もう色々分かり切っていますから、大丈夫ですよ」

「ふっ……そのようだな」

皆に別れの挨拶をすませ、女神の前に立つ。

「これでもう……思い残す事はなくなった……頼む」

「……最後にもう1つあなたに贈り物をしましょう。とはいえ、これは私からではありませんが……」

そう言いながら、女神はなのはさんや皆を集め、何かを話しこんでいる。

「……フィル、あなたに六課の全員の魔力を集めます」

「…はっ？」

「今のあなたは強く、転移魔法も使えます。しかし、それでも魔力が不足しています」

確かに……もう未来のフェイトさんやティアの魔力もない。
今の俺じゃ足りないかもしれない……

「なので……皆さんの魔力をあなたへ……。ですが、これでスパイラルとブラスターエクセリオンは使用できなくなります。あれはあなたが、本当の幸せを手にするには邪魔なものですから」

「……分かった。皆の魔力……ありがたく受け取られてもらいます

！！」

そうして俺を中心に六課メンバーが輪になる。
女神が手を空に掲げると、皆から魔力光が溢れ俺へと注ぎ込まれた。

「うぅ……ぐぅ……す、すごい！！」

≪これが…皆さんの魔力…≫

光が収まると、自分の中に何か強大で暖かい力が満ち満ちているのを感じる。

「……皆さん、本当にありがとうございました！！」

「おう！」

「しっかりね！」

「さようなら～！」

「お元気で！」

「ファイト～！」

「…行って来い」

「皆を頼んだで～」

「色々ありがとう！」

「私達ももっとがんばるから！」

「ヘマするんじゃないわよ！」

「じゃあね！」

「シグナムさんとお幸せにね～！」

「こ、こら、リイン！！」

皆の声援と魔力を胸に籠め……俺は、再び戦場へと向かった。

そして、元の世界のゆりかご決戦の地へと戻った俺は、まずははやてさんを助け、フェイトさん、エリオにキャロ、そして……

ゆりかごへと向かい……

なのはさんとリミットブレイクなしでヴィヴィオを助けて、クアットロとの最終決戦へと挑んだ。

＊　　＊　　＊

「んっ……ここは……？」

気が付くとどこかの病院で目が覚めた。
ボーっとする頭で考える…俺はクアットロを倒して、そのまま……

「そうだ！　みんな……ぐぅ…」

「こら…まだ安静にしていろ」

起き上がり頭痛がしたと思ったらまたベッドへと倒れこまされた。

「あっ…シグナムさん」

「あっ、ではないだろう。全く……」

シグナムさんの顔があった。
どうやらベッドのそばでリンゴを剥いていたようだ。

「……食べれるか？」

「あ、はい……頂きます」

小さく切られたリンゴを食べさせてもらいながら考える。
流石にみんなの魔力を使った反動は、すごかったようだ……
皆からの魔力はもうなくなっていたが、リンカーコアにも後遺症がなく、プリムにも問題はない。
あんな大規模な魔力行使で、これは奇跡とも言えた。

「気分はどうだ？」

「寝起きにシグナムさんの顔が見れたんで、絶好調ですよ」

「…！？　ば、馬鹿を言うな！　まだ寝ていた方がよさそうだな！！」

真っ赤になったシグナムさんに、無理やり布団を被せられてしまった。
うん…直球すぎたかな。

その後、はやてさんや皆が次々とお見舞いにやってきた。
ゆりかご決戦から1週間が過ぎていて、色々後始末の真っ最中のようだ。
俺は全てをシグナムさんやはやてさん達に話した。

皆が死んだ未来から過去へと戻り、そしてまた変化した未来へ戻ってきた事を……

最初は驚いた顔をしていたが、皆すぐに納得してくれた。

俺が過去を変えた影響は数々出ているようで、戦闘機人もほとんどが協力的になっており、レジアスの親父さんが頑張ったおかげで、管理局の膿も最高評議会と一緒に洗い流せたらしい。

「……やったんだ。俺、皆を救えたんだ……」

ようやく実感が持てた……

俺は大切な人を守れたと言う事に。

あとは体を早く治して、約束を果たすだけだ。

＊　　＊　　＊

数週間後

体もすっかり回復した俺は今訓練場にいる。

六課の宿舎も施設もすっかり元通りになっている。

「それじゃ、シグナムさん…今こそあの時の約束を」

「あぁ…全力で相手になろう、来い。フィル・グリード！！」

駆けだす。近距離が得意なシグナムさんにあえてこちらから近付く。
最初は牽制弾が来ると身構えていたのか僅かに目を細める。
だけど、動揺はない…当たり前か。

「はっ！」

≪ウインド・ブレス≫

「っ！？」

シグナムさんの間合いに入る直前で、ウインドブレスによる反動で後ろに下がる。
同時にレヴァンティンの斬撃が空を掠め、一瞬だが隙が生まれた。

「ブラストシュート！」

「背後に！？」

俺の背中にあらかじめスフィアを数個生成して、シグナムさんからは見えないようにしていた。
それを今解き放つ。

「甘い！　紫電一閃！」

紫電一閃でスフィアごとシュートをかき消され、返す刀で左から袈裟切りを仕掛けてきた。
右手にプリムを突き出していた俺は、反応が遅れ刃を止められない…

ガキンッ

「なに!?」

「俺の…勝ちです！」

左手に即座にセイバーモードのプリムを出し、レヴァンティンを防ぎ、右手にガンモードのプリムをシグナムさんの顔へと突きつけ、勝負は終わった。

「シグナムさんに…勝っちゃったね」

「うそだろ……クロスレンジでシグナムに勝ちやがった…」

「お、おぉ～！」

勝負を見ていた、なのはさんやヴィータさん達から歓声と驚きの声があがる。

「……はぁ～」

俺はプリムを解除すると、深く息を吐きその場に膝をついた。

≪やりましたね、マスター！≫

「あ、あぁ…正直うまくいくかかなり不安だったけど…やったな」

シグナムさん相手に遠距離でやってもすぐに間合いを詰められる。
ならば、逆にこちらから間合いの傍まで全速力で接近し、あえて攻撃を誘いカウンターを狙う。

それだけで倒せほど甘くはない事は知っている。
でも、一撃、一撃だけちゃんと受け止める事が出来れば……

そう思い、出来るだけ自然に左に斬撃が行くように誘ったのだ。

作戦は成功。

今まではワンハンドモードしかなかったプリムのツーハンドモード。
しかもティアと同じく左手でセイバー、右手にガンという異なるモードの二丁使い。
そして即座にプリムを出せるようになっていたおかげで勝つ事が出来た。

「まさか、ツーハンズモードとはな…本当に強くなったな、フィル」

「……あの時のシグナムさんの言葉があったから、こうして強くなれたんですよ……。いつか強くなって大切な人を…シグナムさんを守れるほどに強くなりたいと……」

「フィル……」

「シグナムさん…聞いてほしい事があります…あなたが好きです。ずっとあなたが好きでした。ずっとあなたを守りたかった……。いつもはやてさんや誰かを守るあなたを俺が守りたかった……」

でもあなたは死んでしまった。

俺の知る世界で別れも言えずに消えてしまった。

それからずっと後悔して、それも糧にして、やり直した過去でもずっと訓練を重ねて……

「でも、やっとここまで……あなたを守れる強さを身につけました…俺と…付き合って下さい！」

言えた……

とうとう言えたんだ。

少しばかりの満足感に浸っていた俺はシグナムさんの言葉を待った。

そして、顔を赤くしながらも困惑したシグナムさんの返事は……

「す、少し返事を待っていて欲しい…済まない」

告白を拒絶するわけでも受け入れるわけでもない、保留の返事だった、

それから数日、はやてさんやスバルなどにあの時の決闘を冷やかされつつ、なのはさんやヴィータさんの教導を受けながら平和な日々を過ごした。

シグナムさんとは話をしていない。
と言うのも、シグナムさんが仕事で六課を離れる事が多いのと……

顔を合わせても、シグナムさんが顔を背けたりして話が出来ないからだ。
話しかける雰囲気にもなれずに、ただただお互い素通りする日々。

スバルやティア達は気にかけてくれているが、本人の問題としてそっとしておいてくれている。
正直それがありがたい……

俺だってどうすればいいか分からないんだ。
シグナムさんに嫌われたのか、それすら分からない……

＊　＊　＊

とある居酒屋

「それで、話って？…って聞くまでもないかな」

今私とヴィータとシグナムはミッドのとある居酒屋にいる。
フィルとシグナムの一件以来、２人の仲がすごくぎくしゃくしているのは知ってる。

だけど、それは２人の問題だから、私の方かあれこれ言うのは…と静観していた。
今日、シグナムの方から相談したいと言われヴィータと居酒屋に来ていると言うわけだ。

「だな、フィルに告白されてどうすればいいかわからないんだろ？」

「うぐっ！」

ヴィータ、すごく直球で言っちゃうんだね。私もそうだと思うけど。

「ってかなんで保留にしたんだよ？　私はすぐにＯＫすると思ってたけどな」

「うん、私もそうだと思ってた」

「えっ、そうか？」

「だって…お前、フィルの事よく話してたから」

「うん、私にも」

「……なっ！？　そ、そんな事ないぞ！？」

「「……はぁ……」」

ヴィータと2人そろって溜息をついた。
シグナムには自覚がなかったようだ……

訓練校の任務で、シグナムがフィルと出会って、六課が発足してからシグナムはよく……

『昔、知り合った奴が入ってきた。私に憧れているとな』

『ふむ、なかなか骨があって伸びがいのある奴だな』

『私がもっとついてやれればいいだが……高町達にまかせっきりだ』

『あいつが今日、こんな約束をしてきたのだ……ふふっ、楽しみだ』

「なっ…な……なんだと！？」

もう酔ったのか顔を真っ赤にしたシグナム……まだそんなに飲んでないよね？
というか、さっきからウーロン茶しか飲んでないよね？
うん、こういうのもフィルが惚れたんだろうなぁ……

「本当にこういうのは鈍いんだよなぁ、シグナムは……」

隣でヴィータは、ぐびぐびとビールを飲んでいるけど、飲みすぎじゃない？

「これが飲まずにいられるかよ！　結局は惚気じゃんか！」

「の、惚気じゃない！…ただ、どうすればいいか分からないだけだ」

「……好きなのに、か？」

「……そうだ……ってちがっ、いや違くはないが…そう言う問題ではなくてだな」

「……（グビグビ）」

「ヴィ、ヴィータ。ちょっと飲みすぎだって！　それでシグナム…なんで返事を保留にしたの？」

そうだ……
これだけフィルの事を気にかけて好きなら、なんであの時返事をしなかったのか……

「……正直嬉しかった、フィルが生きていた事を知った時以上に嬉しかった。あの時の訓練生が、私を守りたい為……だけとは言わないが、それでも……私を守る為に、あれだけ強くなった事がだ」

一気にウーロン茶を飲み干すシグナム……まぁ、ビールじゃないからいいかな。

「でも同時に不安になったのだ……これまで主を守ってきた私が、誰かに守られる…と言う事に」

「……いいんじゃねぇか、あたしらだって守ったり守られたりだったじゃんか」

ヴィータが真っ赤な顔だが目は真剣だ。

「大体深く考えすぎなんだよシグナムは、好きなら好きで…それでいいじゃないか」

「私もそう思うよ……シグナムだってフィルが大好きなんでしょ？」

「それは……そうだが、何かこう…胸が変になると言うか…このまま告白を受けるのに躊躇いがある。私はなぜ……返事を保留したのかが…分からないんだ」

こんなに弱気なシグナムは初めて見た。
ヴィータもこんな同じ事を思っているのか2人で顔を見合わせてしまった。

「……フィルが強くなったのは、嬉しいんでしょ？」

「あぁ…まだ戦法に危ういところはあるが、それでも、しっかりと守る強さを身に付けたのは嬉しい」

あの時シグナムに勝った戦法は、見方によれば命がけの戦法とも見えた。
でも、なのはと話していた時になのはが……

『でも、あの戦い方……私は嫌いじゃないよ。ちゃんと前に進む為の戦い方に見えたからね……』

自分が教えたかった事とは、また少し違った成長をした事になのはは嬉しそうだった。

「ふふふっ……」

「い、いきなり何を笑いだすんだテスタロッサ！！」

「あ、ごめんね。だって……フィルの話をする時のシグナムってなんだか…普段と違って」

「うん、女の子らしい」

「なっ！？　普段は女らしくないのか！？　そもそも私は騎士だ、女らしさなどとは……」

「はいはい、いいから飲もう飲もう」

無理やりヴィータがビールをシグナムに飲ませる…あーあ、知らないよ私。

「ぷはっ、いきなりにゃにをするヴィーチャ！」

「……へっ？」

「シグナムってお酒弱いの…知らなかったの？」

本当にお酒で顔を真っ赤にしちゃった…

「ヴィーチャ！　わたしゃがおんにゃのこらしくて何が悪い！」

「い、いや……誰も悪いだなんて…むしろ、可愛いと……」

「可愛い……かわ……いい……それはフィルにいわれたいんら～！！」

「落ち着いてシグナム！　フィルはきっとそう思ってるから！！」

「ほんと？　ほんとうにフィルそうおもってるかな？……こくはくをほりゅうにしたのに」

うわっ、何この涙目シグナム…めちゃくちゃ可愛い！
ヴィータがむせてるし……

「ほ、本当だよ。だからシグナムはもっと自分に自信もっていいから」

「うん……てしゅたろっさがいうなら……もっとじしんもつ～」

「なんだ……なんなんだよ、このシグナムは！！」

ヴィータが壁に頭を打ち付けてる…気持ちはよ～くわかるよ。
でも、壁がそろそろ限界だよ！　ヒビ入ってるよ！

「よぉ～っし！　わたし……がんばりゅ～！」

誰かこのシグナムを止めて～！
ついでにおかしくなりそうな私とヴィータも止めて～！！
はやて～こうなるのが分かってて、今日は逃げたね！！

＊　　＊　　＊

この日俺は休みだ。
どこかに出かけようかと思ったその時、シグナムさんが部屋を訪れ勝負を挑まれた。
この前のリベンジ、らしいが…どうしたんだろうか？
そして、訓練場に向かう途中で、なぜか頭に包帯を巻いたヴィータさんとフェイトさんに、生温かい眼差しでサムズアップをされた。

「うぅ～頭痛い……二日酔いかな」

「いや、それだけじゃないと思うよ…それよりシグナム、どういう結論に出たのかな？」

「しらね……でも、これでまだ結論出さないなら、あたしが強引にでも出させる！」

「それじゃあ行くよ……始め！」

なのはさんの合図でシグナムさんが一直線に迫ってくる。
この前は俺が先手を取ったけど、今回は逆だ。

「フォトンランサー・ファランクスシフト！」

「飛竜一閃！」

ガキンッ！

・・・・・・

・・・・・

・・・

・・

・

「はあ……負けました」

「あぁ、私の勝ちだな」

決着はこの前と真逆だった。
俺が大地に倒れ、レヴァンティンを突き付けられている。

「では、今回は私が勝ったと言う事で、私からお前に話がある」

「えっ、あっ、はい……」

何を言われるのか、もしや…断りか!?

『お前は私より弱い…だから、告白は断る。私は強い女がすきだ!!』

うっわぁ～なんか変な想像しちゃったけど…なんだかしっくりきてるかも!?

「フィル……何か変な想像をしていないか？」

「いえ、してません!!」

「そうか……お前は私を守ると言った。だが私はお前に勝った……私は守られる程弱くはない」

「……」

「しかし、お前は私に一度勝った…これはどういう事だろうか？」

「それは……」

「答えは簡単だ……私もお前も…互いに守ったり守られたり出来ると言う事だ」

そう言いながらシグナムさんは微笑みながら俺に手を差し伸べた。

「フィル、私より強くなったから、私がお前を好きになる……なんて事はないんだぞ？」

「……はい」

「強かろうが弱かろうが……私だって……お前の事が好き、なのだからな」

「はい……えっ？」

顔を赤く俯いたシグナムさんは、急に俺に抱きついてきた。

「…何度でも言ってやる！　私はお前が好きだ！　好きな人に守られるだけは嫌なんだ！だから…お前は私が守る、だからお前も私を守れ…それで…いいだろ？」

耳まで赤くしながらのシグナムさんの言葉が耳から入り…全身を駆け巡る。

「……は、はい！」

「…これから、もっと強くなろう……これからは2人でな。お互いを守れるように」

「シグナムさん…」

「……シグナム」

「えっ？」

「せっかく私からも告白してそれに答えたんだ、もう…他人行儀にさんづけや敬語はよせ。もちろん、公私混同は良くないぞ？　でも今日は休日は…だから」

「えっと…コホン、分かり…分かったよ、シグナム」

「……あぁ、フィル」

シグナムの顔が目の前にある、そして段々と近付いてきて……

「あ、あの～？　お二人さん？　そういうのは部屋でやってくれないかなぁ～？」

「「……あっ」」

見ると、なのはさんだけでなくフェイトさんやはやてさんにみんなが俺達を見ていた。

「わ、わわわっ！　み、みんないつの間に！？」

「邪魔するつもりはなかったんだけど……ねぇ？」

「ともかくフィル……一発殴らせろ」

「私も…一発斬らせて」

「私は一発撃たせて」

あれ～？　ヴィータさんに、フェイトさんになのはさん、何でリミットブレイクしてるのかな？
なんだか殺傷設定ＯＮになってないかな？

顔は女神の笑顔だけど……オーラは魔王も裸足で逃げそうなのはなんでかな？

「「「まてーーーー！！！」」」

「い～～～や～～～！！」

「あ、フィル！！」

フィルを追いかける魔王3人と、それを止めようと追いかけるシグナム。
他のメンバーは我関せずと、かなり距離を取った場所にいる。

「おめでとう、フィル、シグナム♪　やっと2人が恋人になれたんやな」

「ホント……いつまでかかっているのか」

「あれ？　はやてさんとティアは気付いてたの？」

「僕も気付いてましたよ……六課襲撃の時のシグナムさんのあれで……」

「うん…シグナムさん、フィルさんが犠牲になった時にすごく取り乱れてたから…」

「えっ？えっ？……エリオにキャロも？……ひょっとして私だけ気付いてなかったの！？」

「はぁ……どれだけ鈍いのよスバル……」

＊　　＊　　＊

「…あいたたた……体が痛い……」

「大丈夫か……フィル？」

あの地獄のような魔王の攻撃になんとか耐え切り、はやてさんとティアを中心に、皆から冷やかされ、今俺とシグナムはやっと安らぎの時間を得た。

はやてさんの計らいで明日と明後日は休みをもらい、今は2人で俺の部屋のベッドにいる。

「もう少し手加減してくれてもいいのに……しかもヴァイスさん達まで混ざってきたし……」

「それだけ、お前が人気者だと言う事だ……」

「まぁ…いいかな、やっとシグナムに自分の気持ちを伝えられたから……」

「……私もだ…思えばずっと長い間待ち焦がれていた。つくづくそう感じる」

「俺は…もう何十年も待っていた気がしますよ……」

「そう……だったな、フィルは過去へ行ったりと、沢山の年月を過ごしてきたのだな……すまない」

「そういう意味じゃないですよ…確かに、未来で戦ったり、過去で

も戦ったりしてきましたけど……」

「……それだけの間、ずっと私を思っていてくれたのだな。他に告白とかはされなかったのか？」

その言葉に俺は絶望の未来でのティアと過去世界でのフェイトさんが頭に浮かんだ。

直接告白はされなかったが……

別れの時のフェイトさんのあの顔……

言いかけた言葉は……

「……告白はされてませんよ。仮にされたとしても…多分断ってました」

「……そうか」

「だって……俺がどんな未来や過去へ飛んでも、俺が愛するのは目の前にいるシグナムだけだから」

「……馬鹿もの…」

真っ赤な顔を見られるのが恥かしいのか、布団を被りベッドにもぐりこんでしまった。

「…そう言うところも可愛くて好きだよ、シグナム」

「〜〜〜〜！！」

潜り込んだシグナムに布団の中に引きずり込まれ……

唇に柔らかい感触が……

「私もだ…フィル…あの時の続きを…」

「こんな事まで、あそこでする気だったんですか？」

「ば、ばばばばか！　言葉のあやという……あっ」

これ以上赤くなって爆発でもされたら困るので、優しく熱を冷ませないと……

「…ばかもの、そんな事をされたら…もっと……熱くなる…」

「それじゃ……もっとしようか……」

そう言って、俺はシグナムの服の中に手を入れ、その豊かな胸を何度も揉む……

「んっ……んんん……」

普段ならこんな声を出す事はない。
シグナムは必死に快楽を押さえようとしている。
だけど、今はそれに溺れて欲しい……
俺はシグナムの全身を求め……

「はぁ……はぁ……フィル……」

シグナムは瞳で訴える。

「ああ……一つになろう……」

そして……

俺とシグナムは一つになる……

それは失っていた物を補完し合うように、何度も……

何度も……

求め合った……

＊　　＊　　＊

5年後

とある一軒家

「フィル、朝御飯が出来たぞ」

「あぁ、シグナム。今行くよ……」

あれから5年、六課が解散して皆がそれぞれの道を進んでいる。
俺とシグナムは、遠距離と近距離型の新しい地上の名コンビとして活躍中だ。

2人で喧嘩もしたが、喧嘩をした数以上に…愛し合った。

そして、2年前に結婚した。
もっとゆっくりと付き合ってからと思っていたが…急展開を見せた。

それは……

「パパ～」

「おはよ～」

リビングへと戻った俺にかけよる2つの小さな影。

「お～ルリにアロマ、2人とも起きてたか」

この2人は俺とシグナムの双子の娘、ルリ・グリードにアロマ・グリード。

そう……

3年前シグナムが妊娠したのだ。
守護騎士プログラムである私が妊娠など…と最初は信じなかったシグナムだが、すくすくと自分の体の中で新しい命が育つのを感じ、ようやく実感した。

はやてにリイン、ヴィータ、シャマルの喜びようはなく、皆涙を流して喜んだ。
他のみんなも任務を終えて、すぐに俺達の元へと来てお祝いの言葉をかけてくれた。

俺はと言うと、最初から責任を取るつもりは、もちろんあったので……
そうでなかったら、愛する女性を求めることはしないから……

レジアスの親父さんやオーリス姉……沢山の人の祝福の中、盛大な結婚式が行われた。
そして、今…4人家族となった俺達は充実した毎日を過ごしている。

「……夢のようだな」

「んっ？　どうしたシグナム？」

「私が愛する夫と娘に囲まれた生活を送る…まるで夢のようだ、と思ってね」

「ママ、夢みてるの？　ねむってるの？」

「はやくおきてまま～」

夢を見ているのをどう勘違いしたのか、２人の娘がしきりにシグナムを揺らす。

「あははは、夢じゃないよルリ、アロマ。だから安心しなさい」

「うん…」

「よかったぁ～」

「どうだ、シグナム。夢じゃないだろ？」

「そうだな……フィル…もっと幸せになろう」

「もちろん、２人で…いや、４人で強く生きよう」

「……もっと増えてもいいかもな…」

「シ、シグナム？　冗談…だよな？」

「さて…私は冗談はあまり言わないと自分では思っていたが…違ったかな、あ・な・た♪」

やれやれ…何人家族になるのかなぁ…

でも……

これが……幸せなんだな……

あっちの世界の皆……

俺は、俺たちは……

今、すごく幸せだよ。

## GUN×SWORD（後書き）

今回はカガヤ先生より頂いたシグナムストーリーになります。

シグナム「うおおおおおおお！！　やっと……やっと私に日の目が！！　この駄作者が出来なかったことをとうとう！！」

アル「……悪かったな……どうせおいらは駄作者だよ」

シグナム「カガヤ先生、本当に礼を言わせてもらうぞ！！」

アル「自分からもお礼を言わせてください。本当に素敵なストーリーをありがとうございました！！」

# 番外編　NG集1（前書き）

今回の話は、ネタ話になってますので、本編の雰囲気が好きな方は読まれないことを進めます。
ネタが大好きな方は、どうぞお楽しみください。
それでは、どうぞ！！

# 番外編　NG集1

第16話　その日　機動六課　後編　ゼストに手紙を渡すシーンより

「これを……見てくれないか」

「これは？」

「あたしが世話になっている兄貴からの手紙さ」

旦那が手紙を受け取り、その内容を見ると旦那の顔が一変し、驚きを隠せないでいた。

「アギト、この内容に嘘はないんだな……」

「……ああ、フィルの兄貴がレジアスのおっさんから、預かってきたものだって言ってたからな」

「そうか……」

「ふ、レジアスめ…。いいだろう」

そう言って、顔を赤らめ、クネクネしだすゼスト

「だ、旦那？」

不思議に思ったアギトが後ろからそーっと手紙を見る…

『ゼスト……あの日は……最高の夜だった。またお前を抱きたい』

＊ガチホモになるためボツ

第９話　互いの思いとフィルの思い　なのは魔王化シーンより

「……少し……頭……冷やそうか……」

「クロスファイア……」

「わぁぁぁぁぁぁぁっ！！……ファントム、ブレイ」

「……シュート……」

ティアのファントムブレイザーよりも早く、桜色の魔力弾の渦はティアを吹っ飛ばしていた。

「ティア！！……っ！！　バインド」

「じっとして……よく見てなさい……」

スバルもいつの間にかバインドがかけられ身動きが取れなくなっていた。

さらになのはさんは、さっきと同じクロスファイアをティアに撃つつもりだ。

意識が朦朧としているのに……それでも、残された力で立ち続けるティアに向けて……

「っ！！　なのはさん！！」

スバルが悲鳴に誓い叫びでなのはさんに言ったが、全く意に介さず……

今にも砲撃が発射されようとしたとき……

ムニュ

「……あん……」

（な、なんだ？　目の前が真っ暗だな……それにこの手の柔らかい感触は？）

確か転移をして、ティアの前に出たはずなんだけど……

ま、まさか……

恐る恐る、上を見上げてみると……

「……そんなに……揉まないで……あん……」

なのはさんが頬を赤くしていて……

ということは、この俺の手にある柔らかい感触は……

「……わたしの……胸……だよ」

「ご、ごめんなさい！！」

急いで俺は手を離し、空中で土下座をした。
謝って済む事じゃない。
女性の胸を揉んでしまったんだから……

「フィル……本当に反省……してる」

「はい！！　それはもちろん！！」

これだけ嫌な思いさせてしまったんだ。
スターライトブレイカーを喰らっても文句は言えない！！

「……だったら……責任……取ってね……」

「えっ？」

「だから！！　責任取ってって言ってるの！！」

そう言ってなのはさんは真っ赤な顔をしながら、俺の腕を取り、他の人の視線を振り切るように、ものすごい力で俺を別室に連行した。

3ヶ月後……

「……フィル……赤ちゃん出来たみたいなんだ……」

＊なのはが六課離脱してしまい、六課が機能しなくなってしまうためボツ

第１５話　その日、機動六課　前編より

「はぁぁぁぁ！！」

「無茶です！！　この扉をこじ開けるなんて！！」

「そうです！！　わたし達も手伝います！！」

「下がっていろと言ったはずだ！！　ここは儂の仕事だ。お前達はやることがあるだろ！！」

「「レジアス中将……」」

「儂を……舐めるなぁぁぁぁぁ！！」

グキィ

「あぐぅぅぅ……こ、腰が……」

「やっぱり……」

「歳には勝てないよね……」

＊扉は開いたが、レジアスがぎっくり腰になってしまい、物語が進まないのでボツ

第１６話　その日、機動六課　後編　なのは達と合流シーンより

「ギン姉……ギン姉！！」

「どうしたの？スバル！！」

「ギン姉と通信が繋がらないんです！！」

「……おそらく……あたし達が交戦したあいつら以外にもいるのよ」

「ギン姉……まさかあいつらと！！」

「それはないわ！！　少なくてもあの二人は、フィルが命懸けで押さえてくれてるんだから！！」

「もしかして……フィル。やられちゃったんじゃ！！」

何ですって……

「やっぱりフィル一人じゃ無理だったんだよ！！　それであいつらがギン姉の方に！！」

ふざけないでよ……
あいつが今、どんな思いで戦ってると思ってるのよ！！

「スバル！！」

バキイイイイイイ

「ぷぎゃ！！」

「「「「「えっ……？」」」」」

あたしの拳はスバルの右頬に見事にめり込み、スバルは数メートル

吹っ飛ばされ、そのまま壁に激突し、さらに脆くなっていた壁が崩れてスバルは生き埋めになってしまった。

「あ、あははは……や、やりすぎちゃった……かな……」

「ティアナ……やり過ぎ……だよ」

＊スバルが戦線離脱してしまい、物語が進まなくなってしまいボツ

プロローグ　逆行シーンより

『それでは行き先はそれで良いんですね』

「ああ、頼む」

『分かりました。それでは行き先をイメージしてください』

俺はあのときのことをふり返っていた。
このイメージがしっかりしてないと送れないらしい。

俺の身体が光に包まれ、この場から消えていくのを感じた。

そして……

「……お兄ちゃん、誰なの？」

そこには写真で見た小さい頃のなのはさんが、俺のそばに来て話しかけてきた。

って、どこまで過去に戻してるんだよ！！

しかも海鳴市だし！！

＊女神が戻す時代を間違えてしまい、フィルとなのはが早く会いすぎてしまい、歴史が変わってしまったのでボツ

第１話　再会　ランク認定試験ゴールシーンより

「後、何秒」

「１６秒。まだ間に合う！！」

ティアが最後のターゲットを破壊し、これでオールクリアとなった。

後はゴールにはいるだけなのだが……

「魔力全開！！」

「ちょっとスバル、止まる時のこと考えてるんでしょうね」

「大丈夫だ！！　それは俺に任せておけ。全力で突っ走れ！！」

「いっけぇぇぇぇぇ！！」

リイン曹長がヤバイって表情をしているが、今回は秘策がある。
未来で覚えた風の魔法と、なのはさんが以前、この試験で俺たちに使ったあの魔法をやる。
あとはどのくらいの成功率なのだが……

「プリム、俺は、風の魔法でブレーキをかける。お前はゴールに飛び込む瞬間、念のために、前面にアクティブガードとホールディングネットを張ってくれ。……後、この作戦の成功率は！！」

《計算の結果、８０％以上の確率でうまくいきます。っていうか、私とマスターがやるんです。大丈夫、絶対成功させます！！》

「それでこそ俺の相棒だ！！……いくぜぇぇぇぇぇ！！」

「うわぁぁぁぁ」

「きゃぁぁぁぁ」

「いくぜ！！　ウインドブレス！！」

《Ａｃｔｉｖｅ　Ｇｕａｒｄ　ｗｉｔｈ　Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ》

俺はウインドブレスを使い、ブレーキをかけようとしたが、スバルのスピードが予想よりも早く、ブレーキの役目を果たせず……

「って、全くスピードが殺せない！！」

「うそぉおおおおお！！」

「この大バカあああああ！！」

さらにホールディングネットも貼り忘れてしまい、俺たちはそのまま地上に落下してしまったが、なんとかなのはさん達に助けられたが、試験は不合格になり、当然六課のスカウトもなかった。

＊ＳＴＳ自体が始まらないのでボツ

## 番外編　NG集1（後書き）

フィ「本当にやりたい放題だな……」

アル「まあね。これが好評なら今後やるか考えるけど……でも、多分これっきりの可能性が高いだろうけどね」

フィ「確かにな。本編の雰囲気台無しだからな。でも、見てくれる人がいたらいいな」

アル「本当にそう思うよ。皆様、感想お待ちしてます！！」

アル＆ａｍｐ；フィ「それでは！！」

# 番外編　ＮＧ集２（前書き）

今回は夏菜先生が書いてくださったＮＧ集をお送りいたします。
ギャグのセンスがない自分とは違い、センス溢れるＮＧ集をお楽しみください。

# 番外編　NG集2

『第１０話　大切な人』　未来ティアナとの遭遇から

「ここは……」

何だろう、この真っ白な空間は……
外敵反応は見られないけど……

『ここはクロスミラージュが作り出した異空間です』

「誰……ってティアナ！！　……でも雰囲気がちょっと違う？」

『そうですね……あたしは、あっちの世界のティアナ・ランスターなんです』

「そっか……」

『あたしはずっとクロスミラージュの中で、フィルのことを見守ってきました。そして同時にフィルのことを助けてあげられない自分に対して、ものすごく腹を立てていました。　だから一発殴らせてください』

そう言って、グーを握って私に近づいてくるティアナ。

「あ、あの…ティアナ？　じょ、冗談はほどほどに…」

『問答無用～！！』

＊ツンデレティアナじゃなくて、理不尽ティアナが出来上がったのでボツ。

＊　　＊　　＊

『２０話　最終決戦』　ゆりかご主砲発射シーンから

ゆりかご

「ふふっ。まず、最初は還る所を無くしてあげますわ～　自分の無力さを嘆きなさい。フィル・グリード」

ゆりかごの主砲は軌道ポイントにつかないと、最大のパワーは発揮できないが、一発撃つだけでしたら、今でも出来ますのよ。

「カイザージャッジメント、発射ですわ～」

「いけない！！」

とっさに俺は近くにあった巨大なコンクリートに手を触れて、一緒にテレポートをする。

ガァキン！！！

テレポートした場所は主砲の発射口。

発射口を塞いだ事を確認した俺はすぐに退避をした。

「ポチっとな」

クワットロがキーボードを操作し、起動スイッチを押すと、主砲が発射され、入り口で巨石にぶつかって揺り篭は自爆した。

オシマイ。

＊あれ～？ヴィヴィオは～？となったのでボツ。

＊　　＊　　＊

同『２０話　最終決戦』　聖王医療院ラグナ再会から

「たった今っす……今日は何日の何時っすか？」

「六課襲撃から丁度一週間だ。新たな事件が起こっている。動ける六課メンバーは全員出動している」

「ヘリ無しですか！！　くそ！！　俺はこんな大事なときに！！」

「ヘリはアルトさんが操縦するって、シグナムさんとアルトさんが教えてくれたの」

「ラグナ……」

ドアから入ってきたのは、ヴァイスの妹ラグナだった。
彼女の左目には眼帯がしてあった。

「それからフィルさんが、お兄ちゃん怪我して大変だから、お見舞いしてあげてって。お兄ちゃん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「そっか…じゃあ。お兄ちゃん……歯ぁくいぃばれぇ……！！」

そう言って、ラグナは右手を振り上げる。

若干どころか、相当アッパーカット気味で打ち抜かれたヴァイスの顎は粉々に打ち砕かれた。

カァンカァンカァンカァン！！！

そう、ゴングでも聞こえて着そうな、そんな良いパンチをもらったヴァイスは、『優しい…ってなんだろうな』と独り言を言いながら、大人しい妹がいる夢の国へと旅立って行った。

＊ヴァイスが来ない…＝なのはさん脱出失敗で死亡フラグじゃね？と思いボツ。

＊　　＊　　＊

『２１話　金の閃光』から

フィルは死ぬ気だ！！

「バルディッシュ！！」

《Ｇｅｔ　ｓｅｔ》

「オーバードライブ……真・ソニックフォーム」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ》

フェイトの身体が、金色の眩い閃光を放ち、魔力も爆発的に膨れ上がった。

高速戦闘型にしては鈍重なイメージだったバリアジャケットのコートとジャケットが消滅し、それを構成する魔力までもが速度上昇に回される、フェイト自身のリミットブレイク。

《Ｅｒｒｏｒ》

「え？」

濃縮された魔力はそのまま空気中に散り……

「それが真・ソニックフォームですか。お嬢様」

「か、過激ですね」

フェイトはマッパになっていた。

＊痴女発生！？と思ったけど、シリアスをもちろん壊すのでボツ。

＊　　＊　　＊

俺たちの目に映ったのは、ヴィヴィオが自分の力で立とうとしている姿だった。
何度も転んでいたが、それでも諦めようとせず、何度も立ち上がろうとしていた。

「ひとりで……たてるよ……」

「あ……ああ……」

「強くなるって……約束したから……」

なのはさんも俺も涙が止まらなかった。

「ヴィヴィオ！！」

「はいっ！！　立てた！！」

そう言ったヴィヴィオは逆立ちで立ち上がる。
俺もなのはさんも頭に？マークをつけたままボーっとしていると……

「こんな時は、こうやってボケるといいって、はやてさんが教えてくれたのに……」

……はやてさん。

なんて事を教えてるんですか？

＊ヴィヴィオに大道芸人の才能が生まれてしまったのでボツ

＊　　＊　　＊

エピローグ『約束の空へ』から

乗員は所定の位置に移動してください……繰り返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや！！」

俺たちはなのはさんがぶっ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

それに俺はここで、まだやるべき事がある。

「ウインド・ブレス！！」

「「「「きゃあぁぁぁぁ！！」」」」

ウインド・ブレスで、なのはさん達を吹っ飛ばしたが……

「くぅぅぅ……」

「はやてさん！！」

はやてさんが、俺のジャケットの端をつかみ、吹っ飛ばされないようにしていた。

ベリベリベリッ！！

《あまりの強風に服が破けたみたいです……》

はやてさんに掴まれた俺の服は、見るも無残に破られていて、それを見たはやてさんは……

「キャァ～！！　痴漢！！！」

と言って殴ってきた。

たぶん１００ｔはあったんじゃないか？
それくらいの勢いで飛ばされた俺は、そのままコアに激突しコアを粉々に破壊した。

「あっ……」

＊スパイラル＆ブラスターエクセリオンという危険物をワザワザ用意した、フィル君の苦労が報われなかったのでボツ。

# 番外編　NG集3（前書き）

試験勉強とレポートであまりにも発狂状態になってしまい、息抜きで書いてみました。

# 番外編　NG集3

第5話　自分の力、大切な物より　フリード召喚シーンから

（守りたい……本当の意味で、わたしに優しくしてくれた人を……わたしに笑いかけてくれる人たちを……自分の力で……守りたい！！）

《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

わたしはフィルさんの手を掴み、ケリュケイオンを起動させ、魔力で浮遊しフィルさんの身体を必死に抱きしめた。
フィルさんは気を失っているみたいだったが、大丈夫みたいだ。

「フリード、不自由な思いをさせててごめん。わたしちゃんと制御するから……いくよ！！」

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……」

「竜魂召喚！！」

ポン

「「えっ……？」」

現れたのは竜ではなく、とても可愛らしい黄色いくまの○ーさんだった。

「やぁ、ぼく○ー。ハチミツ大好きなみんなのアイドルだよ♪」

「「お前じゃないいいいいいいいいい！！」」

＊助からない上に色んな所から苦情が来るのでボツ

ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　キャロから

「俺も……恋人として……一人の女の子として、愛してるのは……キャロだけだから……」

「フィルさん……」

俺は、はにかんでいたキャロに、そっと唇を重ねた。
最初はフレンチキスだったが、やがて深いキスになり、しばらくの間二人はキスをしていた。

「ティア……どうしよう。これじゃ、中に入れないよ」

「ったく、あの二人は……」

しばらく二人のことをこっそり見ていると、次第に二人はエスカレートしていき……

「フィルさん……して……欲しいです……」

「ああ……俺もキャロのことが……欲しい……」

そして、フィルがキャロの服の隙間から胸をまさぐり始め……

「「病院で発禁状態はやめいいいいいいいい！！」」

結局あたし達は二人を全力で止める羽目になってしまった。

はぁ……

色んな意味で疲れたわ。

酒でも飲まなきゃやってられないわよ！！

＊フィルがロリコンな上、ここでは掲載できなくなってしまうのでボツ

ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ヒヨリより

「はい、フィル。あーん♪」

「やっぱ……しなきゃ駄目？」

「だーめ」

「だけど……みんな見てるし……」

そう、今はお昼時真っ最中。

六課食堂は、満員御礼だ。

ここでこんなシチュエーションをするのは、自殺行為だ。

そして、目の前に置かれたこの世の物とは思えない食べ物がそれを助長させる。

オドロオドロオドロ……

「……念のために聞くけど……これ、何？」

「んっ、ビーフシチュー♪」

これのどこがビーフシチューですか！！

いかにも色は禍々しいし、鍋の縁に至っては一部溶けているではありませんか！！

「……食べて……くれないの……」

ヒヨリがとても悲しい瞳でこちらを見ている。

ええい！！

神よ！！

俺に奇跡を！！

ゴクリ

「……う、……あああああ！！」

バタリ

「ちょっと、フィル！！　しっかりして！！　お願いだから目を開けてよ！！」

＊ヒヨリのポイズンクッキングを採用すると、間違いなくフィルが死んでしまうのでボツ

第１１話　機動六課のある休日より

「もう少し、そばに来てくれる……」

「うん」

そう言ってフィルは私を自分の方へ引き寄せた。
フィルがこんな事をするのには、ちょっと驚いたけど、フィルが私に心を開いてくれたんだなって思うとすごく嬉しかった。
私もフィルに甘えたかったので、フィルに身を任せた。

やがてどちらかとも無く、顔を寄せキスをしようとした時……

『こちらスターズ1、高町なのは。フェイト隊長、フィル応答して……』

それぞれのデバイスになのはからの通信が入ってきた。

でも……

プチン

「えっ……フェイトさん……？」

『えっ……ちょっと、フェイト隊長、フェイト隊長。ていうかフェイトちゃん。フェイトちゃぁぁぁぁぁぁぁん！！』

なのはさんが再び通信入れたけど、また同じように切ってしまった。

「……いいの……今は続き……しよう……」

俺たちはそのまま誰もいない海岸で、キスをし、そのままフェイトさんを押し倒し、そのままお互いを求め合った。

結局事件はなんとか無事片が付いたが、二人ともなのはさんに大目玉を食らうことになってしまった。

＊あまりにも無責任な二人が出来てしまったのでボツ

～　Ａｍｏｕｒ　Ｅｔｅｒｎｅｌ　～　喫茶店での一幕

「そういえば、この雑誌に載ってたぜ。かわいい母娘と素敵なマスターがいるって……」

「何だそりゃ？　かわいい母娘は分かるが……」

「フィル、少しは自覚するっす。視線に気づかないんっすか？」

ここに来ている女性客の半数は、フィルの方を見ていた。
相変わらず、この方面には疎いままである。

「……ノーヴェ」

「は、はい！！」

「その雑誌……見せて……」

なのははノーヴェから雑誌を取り上げると、その記事の所を確認していた。

「な、なんか……なのはさん、こわいぞ……」

「ノーヴェ、なんでそんな余計な物を持ってきたのよ！！　なのはさんにそんな話したら、こうなるって分かってたでしょう！！」

「ごめん、本当に悪かった……」

「ティア！！　そんなこと言ってる場合じゃないよ！！　見てよ、なのはさんを！！」

チャキ……

「ちょっと……なのはさん……何レイジングハートをセットアップしてるんですか……？」

「……何って……決まってるじゃない。フィルに言い寄る雌狐を消すに決まってるじゃない……」

そう言ってさらにブラスタービットを展開し始め……

「嘘ぉおおおお！！　ブラスタービットまで！！」

「いやぁぁぁぁぁぁあ！！　フィル、フィルうううううう！！　早く、早く来てぇぇぇぇぇえええええ！！」

結局フィルがやってくるまで、なのはさんの暴走は止まらず、あたしとノーヴェ、そしてスバルは、現役を退いたなのはさんにあっという間にノックアウトされてしまい、店は半壊、あたし達は一ヶ月入院することになってしまった。

＊なのはの嫉妬パワーがあまりにも恐ろしい状態になってしまったのでボツ

## 番外編　NG集3（後書き）

アル「いやぁ……すっきりした♪」

フィ「お前な……やり過ぎだろうが……」

アル「いいの、いいの。あり得ない設定だからNG集になったんだし」

フィ「おいおい……各地から苦情が来ても知らんぞ」

アル「その時はこれは削除するしかないかな……」

フィ「はぁ……あいかわらずの行き当たりばったりな奴だな……」

## 番外編　ＮＧ集４（前書き）

久しぶりに息抜きでＮＧ集を書いてみました。
暇つぶしにでも見ていただけたら嬉しいです。

それではどうぞ！！

# 番外編　NG集４

第３話　集結より

「よしっと。みんな聞こえる……」

「「「「「はい」」」」」

『じゃ、早速ターゲットを出していこうか。まずは軽く８体から』

『動作レベルC、攻撃制度はDってとこですかね』

『うん』

シャーリーさんが端末でターゲットの設定をし、８体の訓練用のターゲットを出現させた。

って、ターゲットがガジェットじゃない！！

俺たちの目の前に出現したのは……

「なんで、なのはさんが８人もいるのよ！！」

８体のガジェットならぬ、８人のなのはさんだった。

しかも、一体一体がなぜかスターライトブレイカーの体制に入っているし！！

「ちょ、ちょっと洒落になりませんから！！」

８人のなのはさんは桜色の魔力を集束させ……

『スターライト……ブレイカーァァァァァ！！』

その巨大な光は、俺たちを飲み込み……

「「「「「うぎゃあああああああああ！！」」」」」

訓練場一帯を吹っ飛ばし、大きなキノコ雲を作っていた。
さらにその後、その場に次元辰が発生し、機動六課どころか、ミッド全体がその次元辰に飲み込まれてしまい、その場には何も残らない無の空間であった。

結果、法の船が沈むという予言は、なのはさんの手によってなされてしまった。

＊なのはの手によって、ミッド崩壊、地上本部崩壊、スカリエッティ死亡というとんでもない結果になってしまうためボツ。

第１１話　機動六課のある休日より

「……ふふっ、だったらその挑戦を受けて立っちゃおうかな。ちょっと変わってもらって良いかな、フィル」

「良いよ。フェイトさん、思いっきり回して構わないから……」

「楽しみだな。バイクを運転するのって久しぶりなんだ……」

俺は近くの路肩に停車して、フェイトさんと運転を代わることにした。
フェイトさんは俺と入れ替わると、ハンドルを握りエンジンを勢いよく回していた。

あ、あの……本当に久しぶりなんですか。
慣らしの仕方といい、ギアの入れ方といい、明らかに熟練者のものですけど……
しかも……

「おらぁ！！　しっかり捕まってないと、振り落とすぜ！！」

どっかの亀有公園前のお巡りさんの知り合いみたいに、性格が完全に変わってしまっている。
目つきも完全に逝ってしまっていた。

「いくぜ！！」

フェイトさんはサンダーのスロットルを全開にすると、ホイルスピンをさせながら発進した。

「うわあああああああああああああああ！！」

その日、クラナガンの高速道路で、時速５００キロで走るバイクを目撃する人が続出し、それを見た人々は口をそろえてこう言ったという……

『金色の夜叉』と

＊フェイトのキャラが色んな意味で崩壊してしまうためボツ。

第１３話　命の理由より

「どういうつもりかって聞いてるんだよ……」

「待ってフィル！！　これは！！」

「ごめんフェイトさん。今は下がってもらえるかな。答えろ、シスターシャッハ。どういうつもりなんだ！！」

「そのままの意味です。あなたの話が本当なら、あの子が世界の破滅の鍵になっているじゃないですか。　それだったら、今の内にあの子を何とかすれ……ば……」

「……ふざけるな……」

な、何なのこの殺気は……
なにも力を解放してないのに、この押しつぶされそうなプレッシャーは。

「少し……頭、冷やそうか。シスターシャッハ……」

「ちょっとフィル！！　それなのはの台詞！！　しかも眼もハイライトを無くしてるし！！」

既にフィルはプリムに魔力を集束させ、スターライトブレイカーの発射態勢に入っていた。
しかもシスターシャッハはバインドで身動きが取れなくなってしまっていた。

「……う、嘘ですよね。こんな所でそんな強力な魔法……」

「嘘かどうか……喰らってみろ」

「い、いやあああああああああああああああ！！」

「スターライト……ブレイカーァァァァァァ！！」

ドゴオオオオオオオオオオン！！

「バイバイキン～～～～～～」

大きな炸裂音と共にシスターシャッハがお空の☆となってしまった。
でも、なぜ、ばいき○まん？

＊シスターシャッハのキャラ崩壊と、あまりにも作風にそぐわないのでボツ。

ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　アリサより

六課に戻ってきて、いきなりアリサがなのはさん達を集めて、みんなの前で爆弾発言をした。

それは……

「みんな、あたしはフィルと正式に付き合ってるから、誰も手を出すんじゃないわよ！！」

その発言を受け、最初はぽかんとしていた六課メンバーだったが……

『えええええええええ！！』

部屋一帯に響き渡る大声で、全員が驚き、その後、俺は尋問状態になってしまう。

しかも……

「アリサ……それ、どういうつもりかな」

「言葉の通りよ、フェイト。あんたがいつまでもグズグズしているから、あたしが貰ったのよ」

「少し……話しようか。アリサ」

「構わないわよ。別に」

二人とも静かな口調なんだけど、とんでもなく怖いぞ。

「アリサ、フィルのコアの怪我はわたしとコアをつなげ治すから、心配しなくて良いよ。だから地球に帰って良いよ」

「ご心配ありがとう、だけど、フィルの身体はあたしが治すから余計なことは結構よ」

「アリサ、フィルとコアが繋がっていうのは、ほんの一時的なことだよね。治ったら、コアは元通りなんだよ……」

「そうね。でも、フィルはあたしとずっと一緒にいてくれるって言ったわ。だから、フェイトには関係ないでしょう」

「「フフフフフフフフフ」」

二人の笑い声は、静かなのだが、とんでもなくプレッシャーを感じる物であった。

なのはさんとはやてさんは早々に部屋を退室してるし、エリキャロに至っては、部屋の隅でぶるぶると震えている始末だった。

俺だって、正直言って怖くて仕方がないんだ。

なんで……

どうしてこうなってしまったんだ……

はぁ……

だれか教えてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

＊アリサとフェイトの最終戦争（ハルマゲドン）になってしまうためボツ。

# 番外編　NG集5（前書き）

久し振りのNG集ですw
この度、この小説家になろうで活動1周年を迎えることが出来ました。

その記念として、即興でNG集を書いてみましたw
久し振りに書いたのと、夏菜みたいにギャグセンスがない自分がやってますので、もしかしたら削除するかもしれませんが、お楽しみいただけたら幸いです。

# 番外編　NG集5

＊ｍｅｍｏｒｙ；０１　ヴィヴィオ初変身シーンより

「いくよクリス」

わたしの呼びかけにクリスが、ビシッっと右手を可愛くあげて反応する。
思い描くはあのイメージ！！

「セイクリッド・ハート！！」

「セ――ット・ア――――ップ！！」

セットアップが終わると、わたしが思い描いたとおり、あの姿になることが出来た。

「ちょ、ちょっとヴィヴィオ！？　何でそんな姿なの！？」

イメージしたのは、白のロングスカートに、フリフリの水色のエプロン。
そして……。

ニーソックス♪

わたしがイメージしたのは、地球で男の人が萌えを感じると言われるコスチュームの一つ。

メイドさんの姿だった――――――。

「やった――――――！！　これで、フィルさんのメイドになれるよ！！」

「ヴィヴィオ！！　何言ってるの！！　フィルは私の旦那様なんだよ！！　フィルにご奉仕するのは私だけなんだからね！！」

「フェイトママ、愛は奪う物なんです。フィルさんだって若いぴちぴちのわたしの方が良いと思うよ～」

結局、その後数時間にわたって、やれ金の魔力弾や虹色の魔力砲が飛び交い、高町家が半壊状態になってしまったが、最終的に二人で奉仕すると言うことで一件落着となった。

めでたしめでたし～♪

※高町家が崩壊する上に、魔王再臨（なのは）になるかもしれなかったのでボツ

＊ｍｅｍｏｒｙ：０２　フィル登場シーンから

「そんなに心配なら、ちょっとこっそり見に行くか？」

『『「えっ？」』』

後ろから声がして振り返ると、そこには黒のＧジャンとＧパンを履いた黒髪の青年。
私の旦那様、フィルがいた。

ちょうど良かった。

ヴィヴィオのことはともかく、ちょっと聞きたいことがあるんだよね――――――。

『『「フィル　（さん）！！」』』

「ただいまフェイト……って、ちょっと……フェイト……さん……

何そんなに怒っていらっしゃるのですか……」

「フフフフフ……フィル、私に何か隠していないかな……」

ヴィヴィオのことはまだ良いよ。なのははいってあったんだから――――――。

だけど、最近聞き捨てならない噂を聞くんだよね――――――。

ティアナと一緒に、逢い引きしているって噂を！！

「な、何も隠していないって！！　ヴィヴィオのことは、説明してあっただろ？」

「ふぅん……。じゃ、フィルのコートに絡んでいるこのオレンジ色の髪の毛は……」

「っ！！」

髪の毛を見て、フィルが明らかに顔色が変わった。

と言うことは本当に……。

「噂は本当だったんだね……。ティアナと浮気をしてるの……」

「ちょ、ちょっと待て！！　それは誤解だ！！」

「問答無用！！」

私はバルディッシュを起動させ、ザンバーモードにし、この浮気者を成敗するために全力全開の魔力を込める。

「雷光一閃……」

「話を……」

「プラズマザンバーァァァァァァァァァ！！」

「聞けえええええええええええええええ！！」

きらっ☆

私はフルスイングで、フィルをお空の星にし、その勢いでティアナの所に怒鳴り込んだ。
しかし、フィルが浮気をしたってのは真っ赤な嘘。

フィルがここのところ遅かったのは、私やエリオ達に内緒で、旅行をプレゼントするために、ティアナやスバルに協力をお願いしていただけだったのだ。

その後、フィルに何とか許してもらったんだけど、間を取り持ってもらったなのはやティアナに、しばらくの間頭が上がらなかったの

は言うまでもない――――――。

※フィルがまた再起不能になってしまうのと、ヒロイン交代の危機があったのでボツ

＊ｍｅｍｏｒｙ；０３　コロナとフィルの会話から

「本当なら、ヴィヴィオとか可愛い子の方が良かったと思いますが……。わたしでごめんなさい」

「……それ、本気で言ってる？」

「えっ？」

さっきまでとは違い、フィルさんの口調が少し怒っている感じがする。

「コロナの美点は、自分を過大評価しないことだけど、あんまり自分を下に見るのは良くない」

「でも……」

「コロナも充分に可愛いと思うよ。そうやって人のことを思いやれ

る心を持っているんだ。自信を持ちな」

「フィルさん……ありがとう……ございます……」

その言葉をそのままフィルさんに言いたい。

こうやって、わたしを元気づけてくれて、いつも、わたしやヴィヴィオのことを見守ってくれるフィルさん――――。

そんなひとだから、わたしは――――。

ちゅっ♪

「えっ……？　こ、コロナ！？」

「これは……わたしからの……お礼です♪　わたしのことをいつも見てくれている素敵な騎士様に」

今はこれが精一杯だけど、いつかちゃんと言葉にしていいますね。

だから、わたしがもう少し大きくなるまで待っていてくださいね♪

※コロナがマジヒロインになってしまうのと、ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇの時にネタ切れしてしまうため本気でボツ！！

＊ｍｅｍｏｒｙ；０５　ナカジマ家でのシーン

「フィル、おはよう。ごめんね、来てもらって早々朝ご飯を作らせて……」

「スバル、お前な。来た早々『フィル、久しぶりにフィルが作った御飯が食べたい！！』って、人をキッチンに立たせやがって……」

まぁ、只でナカジマ家に来るつもりはなかったから、一応俺が作ったマフィンは持ってきていたんだけど、その斜め上のことをさせられるとはな……。

だが、俺がタダで転ぶと思うなよ！！

「まったく……。スバル、あんたね。フィルは家政婦さんじゃないんだからね……」

「あたしも妹として恥ずかしいぜ。すまねえなフィル、お前も夜遅くに、あたしとこいつを抱えてバイクを走らせてくれたのに……」

「なあに。その趣旨返しとして、今日はシャマルさんが作った朝ご飯も持ってきたからな」

ピシッ

その瞬間、和やかな食卓に冷たい空気が流れる――――――。

「それ……マジなの？」

「……ああ、こないだシャマルさんが俺ん家に、大量に手作りジャムとパンを持ってきたんだ……。それを食べたフェイトが……」

そう――――――。

フェイトが出張というのは真っ赤な嘘。

本当は……。

「ま、まさか……」

「……ノーヴェ、お前の予想通りだ。フェイトは今でも入院している」

「「「「……はぁ……」」」」

結局、シャマルさんのパンとジャムは、ティアとスバルと3人で厳重に封印し、ロストロギア指定に認定し、今は局の第一級指定金庫に眠っている。

※朝の楽しい一時が、最後の晩餐になってしまうためボツ。

## 番外編　ＮＧ集５（後書き）

フィ「……何やってるんだよ。お前は……」

アル「ノリで書いてしまうって……恐いねｗ」

フィ「記念作品なら、短時間でやった即興ＮＧなんかにするなよ……」

アル「しょうがないでしょう……。こないだ２００万記念でｉｆｅｎｄｉｎｇ系はネタ使っちゃったんだから……」

フィ「確かに……」

アル「アインハルト達のは、まだもう少し話が進まないと、ちゃんとしたのが書けないのよ（涙）」

フィ「それでも、ちゃんとしたのが書けるかは疑問だがな……。三流作家」

アル「……それを言ったらお終いでしょう（ＴｏＴ）」

## ＮＧ番外編　王様ゲーム　ｉｎ　機動六課（前書き）

今回の話は、ヒヨリちゃんとリオスくんに特別出演していただきました。
これは、神崎先生に、以前書いていただいたヒヨリ編をベースにその一幕としてやってみました。

# NG番外編　王様ゲーム　ｉｎ　機動六課

「王様ゲェェェェェェェェェムッッッ！！」

「「「「「「「「イエ――――――――――イ！！」」」」」」」」

突如、ヴァイス陸曹のかけ声で始まったゲーム大会。
実は、なのはさんの故郷、地球ではやっているという王様ゲームをやってみようと言うことになり、せっかくなので、みんなを集めてやってみようと声をかけてみたら――――――。

主催のヴァイス陸曹になのはさんにフェイトさんにはやてさん、そしてキャロにルーテシア、リオスさんとヒヨリ、そして、俺も参加させられることになり、ここに機動六課王様ゲームを開催することになった。

ちなみにスバルとティアとエリオは、夜勤のため今回は参加不可能だった。

「それじゃ、フィル、説明よろしく！！」

「って、何で俺なんですか！？」

「仕方がねえだろ。野郎はお前とリオスしかいねえんだし、エリオとグリフィスじゃ真面目すぎて面白くねえしよ」

確かにグリフィスさんじゃ、こういったことはある程度黙認しても、自分が参加するって事は絶対にあり得ない。

「わかりました……。では、改めて説明します。ここに一番から七番まで書かれたクジと『王』と書かれたクジがあります。この王様のクジを引いた人は、他の番号の人に命令が出来ます」

例えば、一番が王の肩を揉むとか、二番が三番にしっぺをするとか、そう言ったことである。

そして――――――。

「「「「「「「「「王様の命令は絶対!!」」」」」」」」」

「それじゃ、始めるぞ!!」

「「「「「「「「「お――――――――――!!」」」」」」」」」

「よし、てめえら、覚悟は良いか!?」

ヴァイス陸曹がみんなに改めて、確認を取る。

というか、この王様ゲーム、絶対に平穏には終わらないな――――――。

「せ――――――――――――の！！」

「「「「「「「「「「王様だぁぁぁぁぁれだ！！」」」」」」」」」」

運命のイタズラというのは恐ろしい――――――――。

「よっしゃァァァァァ！！」

「さ、最悪や……」

「よりによって……ヴァイス陸曹に……」

「なんてこった……」

様々な声が飛び交っている。

確かに一番当たってはいけない人に当たってしまった気がする――――。

「それじゃ、命令だ。そうだな……」

お願いですから、無茶な命令はしないでくださいよ。

「五番と六番がレジアス中将の所に行って『好きです、付き合ってください』って告ってこい！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！！　それは洒落にならないよ！！」

「そ、そうだよ……。不名誉すぎるよ！！」

五番と六番のクジを持つなのはさんとフェイトさんが、ヴァイス陸曹に猛抗議をしている。
いきなり、これは洒落にならないぞ！！

「ダメやで♪　さっき、フィルが説明したばっかりやで」

「そうですよ、二人とも」

はやてさんは明らかに悪のりしてるし、ヒヨリに至っては、はやてさんに乗っかってきてさらに助長している。

「「「「「「「「「「王様の命令は！！」」」」」」」」」」

「「……絶対……」」

「「うわあああああああああああん！！」」

二人とも大泣きで、地上本部にいるレジアス中将に通信しに行く。

そして――――――。

「うっ……しくしく……」

「ひどいよ……」

戻ってきた二人は『私達は上司をからかったことを反省してます』のプラカードを首からかけさせられていた。
でも、この程度ですんでよかったよ。マジで……。

後で、俺から親父さんに謝罪しておこう――――――――。

「いいもん……。次で絶対に王様になって、みんなにも同じ目にあってもらうもん」

「2回戦、行くよ!!　せーの!!」

「「「「「「「「「「王様だぁぁぁぁぁれだ!!」」」」」」」」」」

そして、次の王様は――――――――。

「あっ、私だ」

今度の王様は、ヒヨリだった。
内心俺はほっとしていた。ヒヨリだったら、さすがに無茶な命令はしないと思っているから、しかし――――。
その俺の考えが砂糖よりも甘いと言うことに、このとき俺はまだ気づいてはいなかった。

「じゃ、いくわよ。えっと……」

ヒヨリがそれぞれのメンツを見て、誰にしようかと考えている。
頼むから、おとなしい命令にしてくれ!!

「二番が四番のほっぺに……軽いキスでもしてもらおうかな～♪」

「ほ、本当ですか!?」

そう言って、四番のクジを出したのはキャロ。

「あ、あの……。フィルさん、二番のクジを持ってるのは、フィルさんですよね……」

キャロは期待のまなざしで、俺に訊いてくる。
だが――――。

ちょんちょん

「あ、あああ……」

そう……。

俺が持っていたクジは三番。

今回二番のクジを持っていたのは……。

「いらっしゃい……キャロ」

「い、いやあああああああああああああああ！！」

今回番号を持っていたのはルーテシア。

そしてルーテシアも、悪のりが大好きなので、キャロのほっぺに思いっきりキスを何度もしまくっていた。

数分後

「ひっく……。ルーちゃんに穢されました……」

「……ごちそうさま」

ルーテシアが、舌をなめずりながら言っている。
頼むから、悪ふざけはそのくらいにしておいてくれ――――――。

「……わかりました。そういったちょっとエッチなのもありなんですね。それだったら、わたしも容赦しません！！」

チョットまたんかい！！
普通、エッチな命令は、女の子は敬遠するのが当たり前だろ。
それを助長させてどうするんだよ！！

「いきますよ！！　せーの！！」

「「「「「「「王様だぁぁぁぁれだ！！」」」」」」」

あれ、誰もクジを出さないぞ……？
俺は王様のクジは持っていないし、一体誰が……？

すると……。

「……あっ、私や」

「「「「「「「「「えっ……？」」」」」」」」」

さ、最悪の展開だ……。
ヴァイス陸曹と同じくらい危険な人に渡ってしまった！！
よりによって、はやてさんにとは……。

「あ、あああ……。すまんが俺は消えさせてもらう！！」

「待てェェェェェェ！！」

「逃がすもんですか！！」

ダッシュで逃げようとしたヴァイス陸曹を、俺とヒヨリがタックルで捕まえ、二人で羽交い締めをする。

「はなせ――――――！！　離してくれ――――――――！！」

「往生際が悪いですよ、ヴァイス陸曹！！」

「さあ、王様、ご命令を！！」

一人だけ逃げようとしたってそうはいかない。
はやてさんがどんなとんでもない命令が出るか分からないけど、さっきとんでもない命令をしたヴァイス陸曹にも、絶対罰を受けても

らう！！

「じゃ、ヴァイス君は、今から私に何をされても抵抗したらあかんで～」

「ちょ、ちょっと待ってください！！　一体俺に何する気っすか！？」

「そんなの恥ずかしくていえへんよ～♪」

絶対嘘だ！！
顔が明らかににやけていて、説得力皆無だし！！

「だけど、はやて、その命令は無効だよ。ちゃんと番号を言わなきゃルール違反だよ」

確かにフェイトさんの言うとおり、個人を名指しでするのはルール違反だ。
このままじゃ、はやてさんの命令は無効になる。

「ふっふっふっ♪　ヴァイス君の番号くらいわかっとるで～。四番やろ♪」

「……そうっす……」

番号を言い当てられてしまった以上、命令は有効になる。

「や、やめてくれェェェェ！！」

「ささ、ヴァイス君～♪　こっちに来いや！！」

「はやて～♪　私も一緒にやるよ～♪」

「それは願ったり叶ったりや～♪」

「みぎゃあああああああああああああああああああ！！」

またまた数分後～♪

「一体何があったのかな……」

「言わないでください。リオスさん。考えたくもないですから……」

「……そうだね」

戻ってきたヴァイス陸曹は、猿ぐつわをかまされ、なぜか亀甲縛りをされて、はやてさんに引きずられて戻ってきた。

「むぅ！！　むうむうむう！！」

猿ぐつわのせいで、まともな会話も出来ないヴァイス陸曹。
俺にはお気の毒様としか言えません――――――。

「もう、これでラストにするぞ。いい加減良い時間だしな」

「そうね」

「うん」

「じゃ、行くぞ」

「「「「「「「「「王様だぁぁぁぁぁれだ！！」」」」」」」」」

そして最後の王様は――――――――――――――。

「あっ、僕だ」

「「「「「「「「「マジで！？」」」」」」」」」

まさか、ラストでリオスさんに回ってくるとは思っていなかった。
となると、リオスさんの命令はきっと――――――――。

「じゃ、命令。一番から七番の全員は……」

「「「「「「「「ごくり」」」」」」」」

「前にシャマル先生の悪ふざけで、僕が女性化したときのデータ及び写真を、全て僕の目の前で焼き捨てて！！　もちろん隠し持ってるものも全てだよ」

「「「「「「「「そんな――――――――――――――――！！」」」」」」」」

「王様の命令は……絶対だったよね。み・ん・な」

リオスさんは、このときを虎視眈々と待っていたんだ！！
あの時の黒歴史を消去するチャンスを！！

かつて、シャマル先生が悪ふざけで性別逆転薬なんてものを作って、リオスさんに飲ませたことがあった。

その時のことを思い出すだけで、トラウマが蘇ってくると、良く俺にぼやいていた。
しかも、あの時、みんなおもしろがって写真やムービーに納めていて、何とか消去しようと奮闘したが、ここにいるメンバーからは奪還することが出来なかった。

だから、俺たちは今回ヴァイス陸曹の案に乗っかり、これを利用してやろうと思った。
でなかったら、こんな危険なゲームに参加するはずがないだろ！！

「そんな……。あんまりだよ！！」

「せめて……。写真一枚くらいは」

「だ・め・だ・よ。絶対に処分してもらうからね」

「「「「「「「「いやあああああああああああああああ！！」」」」」」」」

結局、みんなが持っていたデータと写真は、かなり抵抗されたが、なんとか全員分処分することが出来た。

ちなみにはやてさんが、別口で保存してたが、それもリイン曹長を引き入れて、隠し場所を訊きだして、全て処分してもらった。

こうして、色んな意味で混沌の一日となった、王様ゲームは二度と行われることはなかった――――――――――――。

# Ｓｙｍｂｏｌ　ｏｆ　ｆａｍｉｌｙ　前編（前書き）

本編のサイドストーリーになります。
この話は、エリオ達とフェイトが語り合う所になります。

前から考えていたのですが、ようやくまとまりましたので、今回アップいたしました。
それでは久しぶりのＲｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ、どうか楽しんでいただければ幸いです。

「なぁ、ティア。最近のフェイトさん達を見てどう思う？」

「どう思うって、あんたいきなりよね。どういう意味で言ってるの？　仕事のこと。それとも……」

ティアは少し考えてからこちらを向いて……

「あの３人の親子としての関係かしら……」

「……やっぱ、わかるよな」

「当たり前でしょう。エリオとキャロ、あの二人、フェイトさんに心配させたくないっていうのは分かるんだけど……」

「それが強すぎて、どこか親子としては遠慮してしまっている……んだよな」

「そういうことよ」

これは未来からずっと思ってきたことだ。
フェイトさん達の関係は、一見エリオ達が素直で良い子にしていて、何の問題もないと思うが、そうではない。

「あのままだと、あの3人は表面上の親子関係になってしまう」

「確か、あんたは以前のあの3人を見てきたのよね？」

「……俺が知る限りでは、結局最後まであのままだったよ。あの3人が本音で言い合う前に……」

「スカリエッティ達に殺されてしまった……のよね」

「……ああ」

もう少し時間があったなら、未来でも変わっていたのかもしれない。
だから、せめてこちらではこんな表面上の関係にはしたくない！！

「フィル、その様子だと、何か浮かんだみたいね」

「ティア、お前にも協力してもらうことになるけどいいか？」

「今更何を言ってるのよ。元からそのつもりだったんでしょう」

「済まないな……色々迷惑をかけて……」

「あんたが迷惑をかける事なんて、そうそう無いんだから、遠慮しなくて良いわよ。それにあたしもエリオ達にはちゃんと本音で語り合って欲しいしね」

「ティア……ありがとう」

「エリオ達は、あたしが何とかするから、あんたは自分の彼女をしっかり見守りなさいよ！！」

ティアは思いっきり俺の肩を平手打ちして、活を入れる。

「あいたたた……ったく、もう少し加減をしろっての……」

「そのくらいで丁度良いのよ。……鈍感のあんたにはね……」

「んっ……？　何か言ったか？」

「別に……何も……言ってないわよ」

最後の方は聞き取れなかったけど、ティアの励ましは嬉しかった。

フェイトさんと語るのとは違う心の安らぎがあるんだよな。ティアには。

「で、具体的にはどうするのよ。あの3人を一緒にするのは中々難しいわよ。3人が3人とも、遠慮してるから……」

「その辺は心配するな。こないだ、ユーノさんに相談したら、こんなのをくれた」

そう言って取り出したのは三枚のチケット。

「これは……って、これ、クラナガンの展望台レストランの招待券じゃないの！！」

「ああ、俺たちじゃ手も出せないところだけど、ユーノさんが手配してくれたんだ。良かったら使ってくれって……」

「あ、あの人なら納得いくわ。司書長クラスなら料金の心配もないからね」

「ユーノさんにフェイトさん達のことを話したら、すぐに手を打ってくれたからね。それにアルフからも聞いたんだけど、やっぱりあの3人はどこか遠慮しがちなところがあるって心配していたんだ」

ユーノさんに相談していたとき、丁度アルフもいて、この事を話したら、アルフ自身も心配していて何とかならないかって思っていたらしい。

「と言うことはあたしの役目は、エリオとキャロをうまく誘い出すことが仕事ね」

「ああ、俺が渡したんじゃ意味がないからな……」

フェイトさんって、甘えてくれるようにはなったけど、やっぱり基本は自分で抱え込むタイプだ。
本当はエリオ達のことをどうしたらいいか相談したいのに、それをリンディさんにもちゃんとは相談していない始末だ。

エリオ達がなまじ出来てしまうから、それで自分が出来ていないんじゃないか。
それをずっと抱え込んでしまっている。

だけど、これは俺があんまり出しゃばってしまっても駄目なんだ。
ヒントや切っ掛けは与えても、あくまで3人で解決してもらわなくちゃいけない。

「あんたも……損な性分ね」

「かもな……」

＊　　＊　　＊

「えっ……ユーノが私に用があるの？」

「うん、さっきいないときに通信があって、今夜7時にクラナガンの展望台レストランに来てくれって。通信でも良いけど、たまには食事でもって事らしいよ」

「ふぅ…ん……でも、フィルは良いの？　私がユーノと二人きりで食事に行ったりして……」

フェイトさんが少し拗ねた表情で、俺に話しかけてきた。

「そりゃ、全く焼き餅を焼かない訳じゃないよ。だけど、ユーノさんはドゥーエと付き合ってるんだしね。もし、フェイトさんとそんな関係をしていたら、まずドゥーエに折檻を喰らうと思うよ」

「ふふっ……確かにね」

「だから、心配はしてないんだ。せっかくのオフシフトなんだから、美味しい食事を楽しんできてね」

「それじゃ……ごめんね。私だけ……」

「いいって。そこの食事が美味しかったら、今度は二人で行ってみようか？」

「その言葉忘れないでよ。確かに聞いたからね！！」

「ああ、忘れないって、だからしっかり俺の分も食べてきてね」

「うん♪　じゃ、今から出ないと間に合わないから、私は自分の部屋に戻って着替えるね」

そう言ってフェイトさんは俺の部屋から出て行った。
レストランに行くのに、正装しないといけないからな。

「……どうやら、第1段階はうまくいったな」

後は、ティアがうまくエリオ達を誘い出してくれることを祈るだけだ。
八神部隊長となのはさん達には、事前に連絡済みだ。
だから、邪魔されることはない。

頼んだぞ……ティア……

＊　　＊　　＊

「えっ……？」

「お食事券……ですか？」

「ええ、今日あたし達はオフシフトじゃない。だから、スバルと二人でここに行こうとしたんだけど、スバルがクラナガンに行っていて、行けなくなっちゃったのよ」

「でしたら、日にちを変えたりしたらいかがですか？」

「そうもいかないのよ。これ、懸賞で当たった奴だから、日にち指定は解除できないのよ。券をフイにするのは悔しいし、一人では駄目だから、あんた達二人で行ってきなさい」

あたしは半ば無理矢理にエリオにチケットを手渡した。

こうでもしないと、受け取りそうにないから……

「……済みません。ティアさん」

「本当にごめんなさい……」

「だから、これは懸賞で当たっただけなんだから、あたしは損なんてしてないのよ。そんな顔してないで二人で楽しみなさいね」

「「はい！！」」

「それじゃ、もう時間はあまりないから、二人はさっさと着替えて、準備しなさいね」

二人はレストランに行くために、自分たちの部屋に着替えに戻った。

「……ふぅ、疲れた……エリオもキャロも、本当に遠慮しているわね。あんまりにも子供らしくないわ」

フィルが心配してるのはこの事なのね。

あのままじゃ、言いたいことも言えない子供になりかねない。

「フィル、こっちは何とかうまくやったわ……あとは、フェイトさ

ん達次第ね」

ここまでやったら、後は当人同士の問題だ。
あたしやフィルが出来るのはここまでだしね。

＊　　＊　　＊

「えっと……確かユーノが指定していた席ってここだよね？」

私は指定時間の１０分前に、このレストランに来ていた。
だけど、３０分が過ぎてもユーノが来る気配がない。
ユーノは時間を守る人だから、こういうときも必ず連絡が来るはずなのに……？
そんなことを思っていると……

「ここだね。ティアさんがくれたチケットはこの席だったね」

「うん、間違いないよ」

向こうからやってきたのは……
って、嘘でしょう！？

「エリオ！？　キャロ！？」

「「フェイトさん！？」」

一体どういう事なの。ユーノじゃなくて、この二人が来るなんて……

＊　　＊　　＊

「今頃あの3人、驚いてるだろうな……」

「それはそうだよ。何も知らされないで、顔合わせになったらね。
それにしても、フィルの大胆なこと考えたよね」

「なのはさん、すみません。勝手なことをして……」

「ううん、怒ってるんじゃないんだよ。ただ、はやてちゃんから聞

いたときはびっくりしたけどね……」

さすがに部隊長に何も言わないで実行するわけにはいかない。
だから、事前に部隊長には話して実行可能な日を決めたもらったのだ。
それが今日だったと言うことだ。

「でも、今日はフォワードはフィルだけなんだね。スバル達もオフシフトだし……」

「丁度良い機会でしたから、スバル達にも休んでもらったんです。あいつらもかなり疲れてますから……」

「フィル、それ以上にあなたの方が休まなきゃいけないと思うんだけどね。わたしは……」

「あ、あはは……俺は別の日に休みをもらいますよ。さすがに休み無しでは持ちませんから……」

「その言葉、いまいち信用できないんだよね。フィルって、隠れてやるからね」

や、やばい……
なのはさん、完全に見破っている。

さらに追及の手が来ようとしたが……

ヴィーヴィー……

「第２級形態体制！？」

『大変です！！　なのはさん、フィル』

「どうしたの、ルキノ」

司令室で監視していたルキノさんから通信が入り、事の詳細を聞いていた。
今回の事件は、クラナガンの海上でガジェットの大群が現れ、それをキャッチしたことで警報が鳴ったとのことだ。

『シグナム副隊長とヴィータ副隊長には、先に出撃してもらったんですけど、それでも数が多くて……』

「分かった。わたしとフィルも出撃するね」

『お願いします。それと今からフェイト隊長達にも連絡を……』

ルキノさんが通信を入れようとしたとき……

「ルキノさん、ちょっと待ってもらえないか……」

『「えっ……？」』

なのはさんとルキノさんが驚いて、一旦動きを止める。

『どういうこと？』

「隊長達には話してるんだけど、今フェイトさんとエリオ達は、大切な話をしているんだ。本当に大切な話をね……」

『だけど、このままじゃガジェットの進行は防げないよ！！』

『心配しなくてええよ。ルキノ、今回のことはレジアス中将も承認済みや。だから、なのはちゃんの限定解除許可ももらってるんや』

司令室にいた八神部隊長が、ルキノさんに事の詳細を説明してくれた。

『そこまで……してたんですか……？』

『私もレジアス中将から話を聞いたときは、腰ぬかしたで。フィル、あんたフェイトちゃん達のために、そこまでしてたんやな……』

「レジアスの親父さんのことは、保険だったんですけどね。まさか本当に役に立つとは思いませんでしたよ……」

本当は、こんな事にはなって欲しくなかった。
でも、結果的にしておいて正解だ。

『でも、フィル。戦局怪しくなったら、私は六課部隊長としてフェイトちゃんに連絡するからな。それはええな』

「はい！！」

これですぐにフェイトさんに連絡行くことはなくなった。
後は、俺たちがガジェットの始末をするだけだ。

絶対３人の邪魔はさせない！！

# Ｓｙｍｂｏｌ　ｏｆ　ｆａｍｉｌｙ　後編（前書き）

今回はいよいよガジェットとの戦いになります。
果たして、フェイトに気づかれず戦いを終わらせることが出来るのでしょうか？

本編でもありましたヴィータの言葉で『悪魔が二人になりやがった』という意味が、ここで明かされます。

それでは、どうぞ！！

「これ、美味しいですね。フェイトさん」

「うわぁ……これ見たこと無いです」

「二人はこういったところは初めてだもんね。……ごめんね。本当はもっと二人と一緒にいる時間を作らなきゃいけないのに……」

「そんなことないです！！　フェイトさんはいつもわたし達の心配をしてくれてます」

「そうですよ。それだけでも申し訳ないと思ってますのに……」

「エリオ、キャロ……」

二人とも本当に私に気を遣ってくれているのが、よく分かる。
それがかえって二人に申し訳ないと思う。

私は、フィルが前に言っていたことを思い出していた。

『フェイトさん、エリオ達は確かに良い子ですけど、良い子が故に遠慮している感じがする』

あの時は意味が分かっていなかったけど、こうやって向き合ってやっと分かった。
二人とも、私に気を遣いすぎて本音を出し切れていないんだ。

最初、エリオ達が来たときはびっくりした。
エリオ達はティアナからここのチケットを渡されたと言っていた。

そして私はユーノにここに来て欲しいと言われた。

しかも、その連絡を受けたのはフィルだった。

そのことを考えると……

まさか……

「そっか……」

「どうしたんですか、フェイトさん？」

「ううん、何でもないよ……」

この事を考えたのはフィルだ。

私は以前母さんには、エリオ達とのことを何となくだけど話したことはあった。

それを知っているのは、アルフだけだ。

無限書庫で一緒に働いているユーノに相談したとしてもおかしくはない。

そして、フィルも未来での私達のことを見てきている。

フィルはこの事をユーノ達に相談して、計画していたんだ。

そして、自分が全部しないのは、あくまで自分たちで解決しなきゃいけないと考えたから……

「ねぇ……エリオ、キャロ。二人は最近本当に色んな事をしっかりとしてくれている。それは本当に嬉しい。だけど……」

「「だけど……？」」

「二人があんまり良い子過ぎて、しっかりしすぎてて……私は本当に二人のために、ちゃんと出来ているのかなって思ってたんだ」

「「そんな！！」」

「僕たちこそ、フェイトさんにいつも心配をかけてしまって！！フェイトさんに心配かけちゃいけないと思って！！」

「だから、少しでもフェイトさんに負担をかけたくなくて、それで！！」

「……それは、違うよ。エリオ、キャロ。二人が私に何も言ってくれない方が、逆に悲しいんだ……」

そう、何も言ってくれなきゃ、二人がどう思っているか知ることが出来ない。
人間は言葉でちゃんと話し合って、それでお互いを知ることが出来るんだから……

「「フェイトさん……」」

「私もちゃんとエリオ達と話していなかったのがいけないんだよね。こうやってフィル達に心配されてしまったんだから……」

「フィルさん……ですか？」

「うん、この事を考えたのも、ユーノやティアナにお願いして、ここに私達を来させたのも、フィルが考えたことなんだよ……」

「そうだったんですね……だから、ティアさん、あの時わたしに半ば無理矢理、このチケットを渡したんですね」

「僕たちにフェイトさんと一緒に時間を作るために、そして……」

「私達がゆっくりと話し合うために……」

フィルの場合、全部やるのではなく、あくまで切っ掛けは作るが最後の大切なところは、当人に任せてくれる。

全部の答えを示すのではなく、最後は自分たちで答えを出す。

本当にフィルらしい……

「エリオ、キャロ。今日はいっぱいお話ししよう。今まで話せなかったことや、して欲しいことを、私に教えて欲しい」

「はい、僕たちもフェイトさんにいっぱい聞いて欲しいです。僕たちの思いも……」

「フェイトさん、わたしもエリオ君と同じです……」

「うん、今日はフィル達の好意に甘えよう。帰ったら、私がキャラメルミルク作ってあげるね」

「はい、楽しみにしてます！！」

「キャラメルミルク、甘くて大好きです♪」

「ありがとう、今はここの料理を3人で楽しもうね」

「「はい！！」」

フィル、みんな、本当にありがとう……

＊　　＊　　＊

「くそったれ！！　ガジェットは何てことないけど、こう数が多いとな……」

「そうだね……」

「おい、どうする。一気に片付けるにしても、限定解除しないと……」

限定解除許可をもらっているのは、なのはさんだけだ。
残念ながら、ヴィータ副隊長達はそのままだ。

「こうなったら、わたしとフィルが限定解除して、一気に殲滅するしかないね」

「ですね。なのはさん、せっかくですから、あれやります？」

「あれ……ね……いいね。あれで一気にカタ付けよう！！」

「お、おい……おめえら、何をする気だ？」

「ヴィータちゃん、シグナムさん、これからフィルと二人で広域殲滅をかけますから、二人は射程圏外に退避してもらえませんか」

「何言ってるんだよ！！　あたし達も残った方が！！」

「済みませんが、今からやる魔法は未完成なので、まだコントロールが不完全なんです。身体への負担はともかく、射程がうまくコントロールできませんので……」

この魔法は、まだ未完成でうまくいくか分からない。
だから、俺たち以外の人間は出来るだけ遠くに退避して欲しいんだ。

「わ、分かった……」

「なのは、フィル、無茶だけはするなよ。危なくなったら、あたし達はすぐに戻るから……」

そう言って副隊長達は俺たちからある程度距離を取り、そこで待機することになった。

「それじゃ、やりましょうか！！」

「うん！！」

俺となのはさんは、魔法陣を展開し、なのはさんはレイジングハートをエクシードモードにし、俺はプリムをブレイズモードにした。

「「リミット・リリース！！」」

リミットを解除すると同時に、なのはさんは桃色の魔力に身体が包まれ、俺は白銀の魔力に身体が包まれた。

「じゃ、始めようか。フィル」

「はい！！」

なのはさんと俺は辺り一帯の魔力を、出来るだけ集め始めた。
魔力をできるだけ集めて、それを攻撃用のエネルギーにする。

残存してるガジェットはおよそ４００。
例えスターライトブレイカーを撃っても、まだ全滅はさせられない。
だったら、シューター系の魔法をぶつけて一気にカタ付ける。

「これだけ集めれば、大丈夫かな？」

「ええ、現段階で集められるだけ集めましたしね……」

ブラスターを使えば、簡単なんだけど、まだクアットロには見せたくない。
ブラスターは最後の切り札だからな……

「じゃ、いくよ！！」

「こっちはいつでもＯＫです！！」

次の瞬間、二人の周りに無数のスフィアが展開された。
その数はおよそ８０。

「「いっけぇぇぇえ！！　アクセルシューター！！」」

二人から桃色と白銀のアクセルシューターが放たれ、さらに……

「「ブレイク！！」」

俺たちが指をパチンと鳴らすと、途中で分裂を繰り返し、その数は最初の三倍になる。

ドゴオオオン……ズガアアアン……

激しい爆音と共にガジェットの数は確実に減っていった。

「まだ……残ってるね」

「ですね……なのはさん、集めた魔力、まだ残ってますよね」

「半分くらいね……」

「じゃ、残りのガジェットは、集束砲で一気に殲滅しましょう」

「そうだね……フェイトちゃん達に余計な心配させたくないしね」

「そういうことです！！」

俺たちは残った魔力を、それぞれデバイスの先端と銃口に集中する。
白銀と桃色の魔力は、周囲の大気をふるえさせ、二人の真下の海上は荒波をあげていた。

＊　　＊　　＊

「お、おい……まさか、あの二人、ここでスターライトブレイカーをぶっ放す気じゃないだろうな……」

「そのまさか……らしい……」

「冗談じゃねえぞ！！　あたし達が近くにいるってのによ！！　さっきの魔法だって避けるのにギリだったってのによ！！」

なのはとフィルが放ったアクセルシューターの嵐は、コントロールがまだ未完成で、あたし達にまで飛んできやがった。

何とか避けることは出来たけど、なのは達が来るまでガジェットの掃討をしていたから、かなり体力は消耗していた。そこにきてこれかよ！！

「ヴィータ、急いで戦域から抜けるぞ！！」

「くっそう、マジで洒落にならねえぞ！！」

＊　　＊　　＊

「どうやら……射程外に行ってくれたみたいです」

「良かった……この魔法、まだコントロールが不安定だから……」

「それじゃ、思いっきりぶっ放しますよ！！」

「うん！！」

集束した魔力はさらに高まり、その魔力球は二回り以上もふくれていた。
なのはさんの方は、さらに一回り大きな魔力球を作り上げている。

「「スターライト……」」

俺たちの声が重なり……

「「ブレイカァーーーー！！」」

放たれた二つの魔力砲は、途中で三つに分裂し、合計６つの奔流はガジェットの集団を完全に飲み込み……

そして……

跡形もなく消し去った……

＊　　＊　　＊

「……マジで……悪魔が二人になりやがった……」

「ああ……スターライトブレイカーの分裂だと……考えただけでも

恐ろしい……」

「シグナム、悪いことは言わねぇ……あんまりあの二人に、模擬戦を申し込まない方が良いぞ……」

「……そう……だな」

昔、あたしがなのはのことを悪魔って表現したけど、あの時とは比較にならない。
二人ともとんでもないことしやがる！！
これじゃ、本当に悪魔じゃねえか……
あんまり、あの二人をからかうのは止めておこう……
あたしはまだアイスを食いたりねえしな……

＊　　＊　　＊

ブシュウウウウ……

レイジングハートとプリムから余剰魔力を排出し、戦闘態勢を解除

した。

このスターライトブレイカーは、本来ブラスターモードのビットを使ってやる魔法だ。
だから、ビット無しだと、コントロールが難しい。

「どうやら……うまくいきましたね」

「うん、ブラスタービットが完成していなかったから、出来るかどうか五分五分だったけどね」

「ただ、真っ直ぐに分裂させるだけなら、出来ると思いましたからね。やってみて正解でしたね」

ビットがあれば、もっとコントロールも楽なんだけどね。
この魔法は、単体で撃つ物じゃないからな。

「うーん。まだまだ改良の必要がありだね」

「それは、今後ブラスタービットが出来てからにしましょう」

「そうだね、元々ビットがあっての魔法だからね」

《あの……マスター、なのはさん、出来れば無茶はしないで欲しいんですけど……》

《プリムの言うとおりです。無茶前提で物事を進めないでください。ブラスターモードは出来れば使わない方が良いんですし、それに……》

《このスターライトブレイカーは、まだ、実戦では使えないですね。ビットがあってもコントロールが出来なければ、無駄撃ちになってしまいますしね》

今の段階じゃ、ゆりかご決戦には間に合わないな。
まずは、ブラスターの負担を軽くすることを最優先にしなくちゃな。

「確かにプリム達に言うとおりだ。無茶前提はまずいな……」

「そうだね……」

俺たちは一応サーチャーで周囲を検索してみるが、ガジェットの反応は見られなかった。

「これで、任務は完了だね。おつかれさま、フィル」

「ですね。なのはさん、ありがとうございました。無茶なお願いを聞いてくれて……」

「いいよ。フェイトちゃん達がちゃんとわかり合ってくれたら、その方がより良い未来になるからね。そうでしょう、フィル」

「なのはさん……」

「それじゃ、六課に戻ろうか。そろそろフェイトちゃん達も六課に戻って来ちゃうしね」

「はい！！」

こうして、海上ガジェット事件は幕を閉じた。

後日、フェイトさん達に、事件があったのを黙っていたことがバレてしまい、俺はフェイトさん達にマジで泣かれてしまった。
特にキャロとフェイトさんは大泣きをしてしまい、宥めるのに大変な想いをしてしまった。

そして、キャラメルミルクを3人に作ってあげて、その後4人で色々な話をして……

色々なことがあったけど、キャロ達もフェイトさんも、この事で本当の親子になった気がする。

良かった……
未来の時みたいに、よそよそしい親子にならなくて……
時間があったら、大丈夫だったんだけど、その前に殺されてしまったからな。

＊　　＊　　＊

訓練が終わった夜、俺は夜風に当たりたくて、隊舎屋上に来ていた。

「プリム……本当に良かったな。フェイトさん達、うまくいって……」

《まったく……マスターは絡め手過ぎるんですよ。単刀直入に言ってあげても良かったんじゃないですか？》

「それじゃ、駄目なんだよ……こういう事は自分たちで気づかないと。俺が出来るのは、あくまで切っ掛けだけだから……」

《本当、マスターらしいですよ。自分は影ながら支える……損な役回りばかりですね》

「いいんだよ。それが俺が戻ってきた本来の役目なんだから……」

俺はこの世界を、あんな未来にしないために戻ってきたんだ。
そのためなら、どんな裏方だって喜んでやるさ。

＊　　＊　　＊

（あんまり……無茶はしないでね。フィル……）

私は仕事が終わり、少し風に当たりたいと思い、屋上に来たんだけど、そこでプリムとの会話を偶然聞いてしまった。

「……いくら、私達のためだからと言って、自分がボロボロになったら、その方が辛いんだから……」

例えフィルに言ったとしても、ＪＳ事件が終わるまでは、無理し続けるだろう。
だから、私はそんなフィルが壊れないようにしっかり支えるんだ。
フィルがいてこそ、私も幸せなんだからね。

それを忘れないでね……

「おやすみ……そして、ありがとう……」

フィル、いつもあなたには助けてもらってばかりだね。
今回のことだって、フィルがいなかったら、エリオ達とあんなに本音で語り合えなかったかもしれない。
だから、今度は私があなたを助けるからね。
それがティアナとの約束だから……

フィルの心を支えるという、大切な約束……

ティアナ、私、あなたの分もフィルのこと支えるからね……

だから、フィルと私のことを見守っていてね……

## SPECIAL PROGRAM vol.1 if ending ヒヨリ

今回は、『魔法少女リリカルなのは～ヒヨリの日記』より、ヒヨリ・R・マクスウェルさんの物語になります。

今までと違う趣のｉｆ　ｅｎｄｉｎｇをお楽しみください。

あの日……昭人と別れてから10年の月日がたった。
あの日から、私は、昭人が戻ってくるのを信じて、ずっと待ち続けてきた。

クリスマスのあの日、私は昭人の想いを知り、そして、本当の自分の気持ちが初めて分かった。

でも……

昭人を失い……

そして、お母さんも失い……

どうして、私が好きになった人は、私のそばからいなくなるの……

「……教えてよ……お母さん……昭人」

目の前にあるのは、美月お母さんのお墓。
ここにお母さんが眠っている訳じゃないけど、それでもお母さんからもらった、たった一つの大切な物が眠っている。
ここに来ると、お母さんが何か応えてくれるような気がしてならなかった。

気のせいなのは、分かっているんだけどね。

「……ごめんね。こんな姿を見せてしまって……また、来るね」

＊　　＊　　＊

「ヒヨリ……」

俺はＪＳ事件が終わり、クアットロを倒し、ティーダさんのお墓に報告に来ていた。
そして帰ろうとしたとき、偶々、ヒヨリの姿を見つけた。

気になって、木陰で様子を伺っていたんだけど……

「やっぱり……あの時から、ヒヨリの時間は止まったままなんだな」

《マスターが、あの時……女神の力で、一旦時間をさかのぼり、四宝院事件で彼女を助けることはできました。でも……》

「彼女の心までは……救うことは出来なかったんだよな」

ヒヨリは今まで本当に悲しみを背負ってきた。

転生前の両親のこと……

転生後も、昭人さんとの別れ……

「……でも、これ以上は介入してはいけない。彼女と関わったのはあれまでだからな……」

《マスター……》

「……帰ろうか。プリム」

《……はい》

＊　　＊　　＊

「……ふぁ、ちょっと眠い……」

結局、私は墓参りから戻ってきて、一睡もせず、今日の訓練に参加することになってしまった。
最近、フォワードのみんなも成長してきてるから、相手をするのは大変なのは分かっているんだけど……

そんなことを考えていると、すでに訓練場では、なのはとフェイト、そしてフィルの変則模擬戦が行われていた。

どうやら、2対1での戦闘を想定した模擬戦らしい。
でも、いくらフィルがなのは達とそこそこやれるからといって、これはやり過ぎじゃないの？

「はあああああ！！」

フェイトがバルディッシュでフィルに斬りつける。
それをフィルは、動きを見きって最小限の動きでかわす。

「隙あり！！」

でも、なのはがその隙を突いて、アクセルシューターで攻撃をした。
３２ものシューターを受け止めるのは不可能だ。

だが、次の瞬間、信じられない物を見ることになった。

「……ラウンドシールド・リフレクター」

フィルは瞬時にラウンドシールド・リフレクターを作り、なのはのアクセルシューターをそのまま跳ね返した。
間一髪で、なのははそれをかわすが……

「う、嘘！！　あの一瞬であんな強力な魔法を！？」

なのはが驚くのは無理もない。
ラウンドシールド・リフレクターは、絶大な防御力を誇り、さらに相手にそのまま攻撃を跳ね返すことが出来るが、発動までの時間がかかりすぎる欠点を持つ。

だけど、さっきフィルはほんの一瞬で発動させていた。
でも、驚くのはこれで終わりではなかった。

「それじゃ、今度はこちらの番ですね！！」

そう言ってフィルは、もう一人分身を作り出した。
でも、フェイクシルエットなら、こんな事をしても意味無いのに？

「それじゃ、フェイクになっていないよ！！」

フェイトが、フィルに攻撃を仕掛ける。
しかし……

ガキイイイ……

「そ、そんな！！」

分身体であるはずのフィルが、フェイトの攻撃をプリムの刃で受け

止めたのだ。
しかも……

「アクセルシューター！！」

もう一人が、アクセルシューターをフェイトに放ったのだ。

「きゃあああああ！！」

いきなりのことでフェイトは防御も取れず、かなりのダメージを負わされてしまった。

「フェイトちゃん！！」

「よそ見をしていて良いんですか」

「えっ……？」

次の瞬間、フィルはなのはの懐にワープで近づいていた。

「し、しまった！！」

「ブラスト……」

なのはがプロテクションを貼ろうとするが、すでに遅く……

「ブレイザァァーー！！」

白銀の砲撃は、ゼロ距離でなのはの腹部に命中した。

「きゃあああああ！！」

「なのは！！」

ゼロ距離でまともに砲撃を受けてしまい、なのはは、吹っ飛ばされてしまったが、フィルが咄嗟に助け、事なきを得るが、これ以上なのはは、戦闘続行は無理だった。

そして、フィルは、地上になのはを降ろした後、また空に戻ってい

った。
フェイトは、ソニックフォームにチェンジし、高速でフィルに近づき、ライオットブレードで斬りつけたが……

次の瞬間、フィルの姿は消えてしまい、姿を見失ってしまった。

「ど、どこなの！？」

フェイトが必死で探すが、フィルの姿はどこにも見つからない。

そして……

「な、なに、これ！？」

さっきフィルが消えたところから、キャロのアルケミックチェーンに似たチェーンが出現し、フェイトの身体に巻き付き、身動きを封じてしまった。
しかも、発動用の魔法陣無しで……

「くっ……解けない！！　なんて強力なバインドなの！！」

あのバインドは軽く見積もっても、ＳＳランククラスの物だ。
いくらフェイトだって、そう簡単には解除できない。

「無駄ですよ……そのバインドはそう簡単には解けませんよ」

「フィル！！」

上から声がし、見上げてみると、フィルが、魔力を集束し始めていて、プリムをブレイズモードにし、スターライトブレイカーの発射態勢に入っていた。

「行きますよ……スターライト……」

フィルの声で、魔力はさらに増大し、その大きさはなのはが放つブレイカーに匹敵するほどであった。

そして……

「ブレイカァァァーーー！！」

フェイトはラウンドシールドで防御するが……

その凶悪な白銀の奔流は、フェイトを飲み込み……

「きゃあああああぁぁぁ！！」

フェイトは、さっきのなのは同様、吹っ飛ばされてしまった。
地面に激突する直前、フィルがワープで助け、そこで模擬戦は終了となった。

それにしても信じられない……

リミッター無しのあの二人を相手に勝つだなんて……

いくらプリムが高性能デバイスだからと言っても、限度がある。
普通のデバイスでは、あんなことは不可能だ。

フィル、一体あなた、何を隠しているの……

＊　　＊　　＊

いくら何でもおかしすぎる。
私はどうしてもフィルにそれを聞きたく、夜にフィルの部屋に行くことにした。

コンコン……

「フィル、少し話があるの……」

私はノックをするが、中からは何も反応はない。

「いないのかしら……あれ、ロックはかかっていない？」

悪いとは思ったけど、もしかしたら眠っているのかもしれないと思い、中にはいることにした。
すると、部屋には誰もいなく、そこには電源を入れっぱなしのパソコンだけがあった。

「いったい、何をやっていたのかしら……？」

「えっ……？　う、嘘でしょう……」

パソコンに映っていたのは、一つのデバイスの設計図。
ただのデバイスの設計図じゃない……

そのデバイスとは……

『フィンアクセレイター』

「そんな……これは、あの時……あの人に渡した物なのに……？」

フィンアクセレイターは、昭人が残した唯一のデバイス。
いくらフィルがデバイスマイスター並みの知識があっても、何も無しで作る事なんて出来ない。

いったい、どういう事なの……

私が混乱をしていると……

「……えっ……ヒヨリさん？」

「……フィル……」

フィルが自分の部屋に戻ってきてしまった。

「何で……ヒヨリさんが俺の部屋に？」

「……ごめんなさい。用があってフィルの部屋に来たんだけど、返事がなくて、でも扉のロックがかかっていなかったから、もしかしているのかと思って入ってしまったの……」

「そうだったんですね……」

「黙って入ったのは本当にごめん。だけど……」

どうしてもこれだけは聞かなくてはいけない。

フィンアクセレイターのことだけは……

「どうして、フィルがこれを知っているの……」

「！！」

フィルはパソコンに出したままだったことに気づき、一瞬だけど、表情を変えた。

「これは……実は、マリーさんと一緒に考案中の……」

「嘘！！　これは、昭人が考え出したデバイスよ。いくらフィルが知識があると言っても、これは考えることが出来ない！！」

「……」

「お願い……本当のことを話して……フィル、お願いだから話してよ……」

私は泣きながら、フィルの胸を何度もトントン叩いていた。

そんな私の様子を見て、ついにフィルは……

「分かった……本当のこと……話すよ……」

「ヒヨリさん……いや、ヒヨリ。何となく分かっていると思うけど、俺は、5年前四宝院事件で一緒に戦った、あのフィル・グリードなんだよ」

そう言って、フィルはプリムを起動させると……
いつもの漆黒ではなく、青に変化していた。

「……やっぱり、そうだったんだね。その青に輝くデバイスは、間違いなくフィンアクセレイターだから……」

「黙っていてごめん。でも、こんなことを言っても信じられないと思ったから……」

「私も、それを見るまでは信じられなかったよ。だけど、フィンアクセレイターは昭人が残した唯一のものだったから……」

あのデバイスは、昭人が残した唯一の完成品。
そして、それを知っているのは私と、それを渡した彼だけ……

「そっか……」

「あと、それだと色々合わないことがあるよね。年齢だってそうだし……」

「それも、話すよ。実は、俺は……3年後の未来から来たんだ……」

「未来から……？　いったい、どういう事なの？」

「俺がいた未来では、六課のみんなは、クアットロに殺されてしまい、世界は絶望しかない物になってしまった……」

「まず、四宝院事件で君が、ゆりかご決戦でティアと俺、スバル、ギンガさん以外のみんなが死んでしまった……」

「そ、そんな……」

私があの時、本当は死んでいたなんて……
しかも、なのは達もゆりかごの時に死んでしまったなんて……

「生き残った俺たちは、何とか戦闘機人達と戦い、ゆりかご決戦から3年後、色んな犠牲を払い、最後の戦いを挑んだんだ。そこで俺とティアはクアットロと戦い、勝つことは出来たんだけど……」

「……どうしたの……？」

「……いや……何でもない」

そんな風には見えない。
そんな悲しい目をしていて、何でもないってことないよ。

「……もしかして……フィル、あなたも大切な人を……」

「……」

「そう……なんだね」

おそらくフィルの大切な人ってのは、ティアナのことね。

そっか……

フィルは、私と同じなんだ。

「一つだけ……聞いて良いかな」

「……ああ」

「何で……何で、フィルは私と似た過去を持っているのに、どうしてそんな風にいられるの……？」

「そうだな……確かに、俺はティアを失ってから、人を好きになることがなかった。でも……」

「でも……？」

「過去に戻ってきて、ヒヨリと一緒にいて、スカリエッティを倒して、そして……何より……」

「四宝院事件で見せた、あの笑顔が忘れられなかったんだ。笑顔だったけど、その中にあった、あの悲しい目が……」

「な、何言ってるの……そんなわけ……」

すると、フィルが……

「ごめん……女神から全て聞いているんだ。昭人さんのことも、転生したことも、そして……」

「……美月さんのことも……」

「そう……だったんだね」

フィルは、全て知っていたんだ。

だから、あの時グラスを助けようとして、突っ込もうとしたときに、必死で止めてくれたんだ。

そして、泣きながら頬を叩いたときも……

「ヒヨリ……」

「俺では……昭人さんと美月さんみたいに、お前の心を支えられないか」

「フィル……」

「……ありがとう。フィルの言葉、すごく嬉しいよ。だけど……だけど……もう、これ以上大切な人を失いたくないの。怖いの！！」

もう、あんな想いをするのは嫌だ。

私が好きになった人が、次々と死んで行ってしまうのは……

すると、フィルは黙って私を自分の方へ抱き寄せ……

「あっ……」

「……分かるか……俺はここにいる……絶対ヒヨリのそばから消え

ないから……」

「……信じて……いいの……？」

「信じてほしい……俺は、ヒヨリのことが……」

「大好きだから……」

もう、涙をおさえなれなかった。

今まで、パパやママや、そして、なのは達が優しくしてくれた。

でも、昭人を失った悲しみを埋めることは出来なかった。

だけど……

この人は、私の最も欲しかった温かさをくれた。

「フィル……フィル！！」

私が泣きながら、フィルにギュッと抱きつくと、フィルはそっと包み込むように抱きしめてくれた。

そして私もフィルのぬくもりを、もっと感じたくてさらにギュッと

していた。

そして……

私は顔を見あげ、瞳を閉じ……

フィルは私の頬をそっと触れ……

私とフィルは……

月明かりが差し込む部屋で……

優しいキスを交わした……

「キス……しちゃったね」

「……ああ、そうだな……」

「フィル……私、すごく寂しがり屋だから……その……」

「分かってるよ……ずっと、一緒にいような。ヒヨリ」

「……うん、もう、撤回はきかないからね」

「しないし、するつもりもないさ……」

「フィル……」

「ヒヨリ……」

フィルはそんな私の気持ちを察し、またギュッと抱きしめてくれた。

フィル、私、本当に寂しがり屋だし、甘えん坊だからね。

だから、ずっと一緒にいてね……

＊　　＊　　＊

一週間後

「はい、フィル。あーん♪」

「やっぱ……しなきゃ駄目？」

「だーめ」

「だけど……みんな見てるし……」

そう、今はお昼時真っ最中。
六課食堂は、満員御礼だ。

ここでこんなシチュエーションをするのは、自殺行為だ。

「それこそ、今更よ。私達が付き合っているのは、告白してくれた次の日に、みんなの前で言ったんだし……」

そう、実は次の日、俺たちはみんなの前で、交際宣言をしたのだ。
これはヒヨリの提案で、どうせ隠してたってすぐにバレるんだから、それだったら先手を打って、先に言おうってことになった。

「それも……そうだな……」

「そういうこと。あーん♪」

ヒヨリは、俺にピラフを食べさせてくれ……

「モグモグ……なんか、こうやってしてもらうのって……いいかも」

「フィル、今度は私にもしてくれるかな」

「んっ？　それもそうだね。じゃ、あーん」

お返しに、俺もヒヨリにしてあげた。

「あーん。……モグモグ……なんか、同じ料理でも、違うね。好きな人とこうやって食べるとね」

「ヒヨリ……」

バアアアン

突然、テーブルを思いっきり叩いた音が食堂中に響き渡る。

「ああっ！！　もう、二人ともいい加減にして！！」

「フィル！！」

「は、はい」

「ヒヨリお姉ちゃん！！」

「なぁに？」

「二人が付き合っているのは分かってるよ。だけど、お願いだから、そういうのは二人きりの時だけにして！！」

「「ごめんなさい……」」

確かに俺もヒヨリも、少しやり過ぎたかも……

＊　　＊　　＊

「やりすぎちゃったね」

「ちょっとね……」

訓練が終わり、俺はヒヨリの部屋にお邪魔している。
告白したあの日から、俺たちは訓練が終わると、どちらかの部屋で深夜まで過ごすことが日課になってきている。

今も、俺たちはヒヨリのベッドに座って会話をしている。
ヒヨリはすごく寂しがり屋だ。
訓練以外の時は、出来るだけこうやって一緒にいる事にしている。
それに俺も好きな人とは、出来るだけ一緒にいたいしな。

「確かに、食堂でするのは、やり過ぎだったわ。でも……」

ヒヨリは俺の肩に、自分の頭をコトンと預けてきて……

「二人きりの時は……いいよね。思い切り甘えても……」

「……ああ、思いっきり甘えてくれ。その方が……俺もうれしいから……」

「……うん」

俺は反射的にヒヨリの頭を撫でていた。
こうやって、ヒヨリのゆるくウェーブのかかったロングヘアを撫でていると、ヒヨリも嫌ではなく、目を細めて俺に甘えてくる。

その後、俺たちはしばらくの間、無言で寄り添って、何もないけど、こうやってまったりと時間を過ごした。

そして、時間も深夜０時を回り……

「さてと、そろそろ失礼するね」

「えっ……？」

「さすがにこれ以上いるのは、ヒヨリに悪いしね」

そう言って立ち上がろうとしたとき……

ギュッ……

ヒヨリが俺の服の裾を掴み……

「……いや」

「ヒヨリ？」

「今日は……帰らないで」

「……その言葉の意味、分かっているのか」

恋人同士が一晩中そばにいるって事は、お互いを求めるって事だ。
俺だって男なんだ。ちゃんと性欲だってある。
まして、好きな人なら、求めたいってのは当たり前の感情だ。

「……分かってるよ。だからこそ……フィルに……して……欲しい」

「ヒヨリ……良いんだな？」

「うん……」

ヒヨリのエメラルドグリーンの瞳が、潤み……
そんなヒヨリの瞳に吸い込まれるように……

俺はヒヨリにキスをした。

ヒヨリも最初は、おずおずとしていたが、段々とフレンチキスから、お互いを求めるキスになり、息が続く限り、お互いを求め合った。

唇が離れたときは、お互いの間に銀色の糸がつながっているほどの情熱的なキスだった。

「あっ……」

俺はヒヨリをベッドに押し倒し、上着を脱がし、ブラの上から、ヒヨリの大きな胸に触れると……

「柔らかい……女の子の胸って、こんなに柔らかいんだ」

「そうだよ……女の子って、デリケートなんだからね。優しく……してよ」

「ああ……優しくするよ」

俺は、ヒヨリの残りの服を一枚ずつ脱がしていき、全ての衣類を脱がすと……

「……恥ずかしいから、あんまりじろじろ見ないで」

「綺麗だよ……ヒヨリ」

「……ば、ばかぁ……でも……ありがとう。フィル……私、その……初めてだから」

ヒヨリは顔を真っ赤にして、横に向いてしまい……

「さっきも言ったけど、優しく……するから」

「……でも、いっぱいフィルのこと感じさせてね。フィルがここにいるって、私のそばにいるって……感じたいから」

「……愛してる……ヒヨリ」

俺はヒヨリの頬にそっと触れ……

「私も……愛してる。フィル」

ヒヨリも、その俺の手に自分の手を、そっと重ねてた。

その夜……

月明かりが照らす部屋で……

俺とヒヨリは、初めて結ばれ……

その後も、お互いの体温を、何度も感じ合い……

その度にベッドは何度もきしみ……

その行為は、数時間にわたっていた。

＊　　＊　　＊

「う……うーん……あれ、ここは？」

「おはよう……フィル」

「おはよう……ヒヨリ」

「結局、朝までお邪魔しちゃったね……」

あの後、何度もヒヨリを求めてしまい、俺はそのままヒヨリのベッドで眠ってしまったのだ。

「いいよ……フィルだったら、いつでも……良いんだからね」

「ヒヨリ……」

「……今度は、フィルの部屋に泊まりに行くからね」

「ああ……いつでもいいよ」

「うん……そんなこと言ったら、今日泊まりに行くからね」

「……また、理性との戦いになりそうだな」

「我慢……しなくていいよ。私もフィルにギュッと抱きしめてもらうの、大好きだから……」

俺は、そんなヒヨリが愛おしくなり、またギュッと抱きしめてしまった。

「……やっぱり、温かいね。フィルのぬくもりって」

「ヒヨリの温もりも、すごく心が安らぐよ。こうしているだけで、優しい気持ちになれるから……」

好きな人と一緒にいるときは、人は優しい気持ちになれる。
本当にヒヨリといると、そういった気持ちでいっぱいになる。

結局俺たちは、訓練開始時間ギリギリまで、こうして一緒にいた。
二人で一緒に来たときは、なのはさんとフェイトさんに滅茶苦茶睨まれたけど……

＊　　＊　　＊

3日後

今、俺とヒヨリは、サンダーに乗って、ツーリングをしている。
実は、はやてさんから俺たちに一週間の臨時休暇を言い渡されて、せっかくだから、近くで良いから温泉でも入りに行こうって事になった。

色々調べてみたら、結構近場でもあることが分かり、俺たちは、さっそく宿を取り、そこに向かうことにした。

「それにしても、いきなりはやてさんから、休日を言い渡されたときはびっくりしたね」

「そうね。でも、理由が『あんたらが毎日毎日六課内でいちゃいちゃしてるから、私らみんな、砂糖吐きまくってるんや。ヴァイス君に至っては血の涙流してるんやで！！』だもの」

あの時のはやてさんの顔は、かなりの物だった。
そんなに、俺たちいちゃついていたのか……？

「でも、そのおかげでこうやって、ヒヨリと旅行が出来るんだから、感謝しなきゃね」

「確かにね。はやて達にはおみやげでも渡してあげないとね」

そうでもしないと、申し訳がない。
みんなが訓練してるとき、俺たちだけ休日をもらったんだから……

「それはそうと……その……もう少し……離れてくれないかな」

「……そんなことしたら、落ちるわよ」

「その……何だ。あんまりギュッと抱きつかれると、その……胸が……」

さっきから、ヒヨリの大きな胸が背中に当たって色々な意味で辛い。
そこまでギュッとしなくても……

でも、ヒヨリはそんな俺の意志とは逆に……

ギュッ……

さらに密着してきたのだ。

「あの……ヒヨリ……さん？」

「……こうしないと落ちちゃうわよ。それに……」

「こうしてると、フィルのことを感じられるから……」

「ヒヨリ……」

言った後、ヒヨリは恥ずかしくなったのか、俺の背中に顔を埋めていた。

なんか……俺まで照れてしまう。

《あの……マスター、ヒヨリさん。何、一昔前のラブコメなんてしてるんですか……》

《見ているこっちが恥ずかしいですよ。相棒……》

「あ、その……」

「……良いでしょう。好きな人の温もりを感じたいってのは、普通でしょう」

《……本当に、マスターのことが好きなんですね。ヒヨリさん》

《ああ……でも、それは相棒も同じですけどね》

プリムとサンダーの突っ込みに、俺たちは二人して顔を真っ赤になっていた。

《でも、さっきからマスターの心拍数は、上昇しっぱなしですよ。これは、理性の陥落も時間の問題ですね♪》

《これは、着いたら夜は激しい物になりそうです♪》

「「プリム！！　サンダー！！」」

ったく、こいつら、まるで、はやてさんみたいなことを言いやがる。勘弁してくれよな……

＊　　＊　　＊

「お風呂……気持ちよかったね」

「ああ……そうだな。だけど、一緒に入る必要あったのか。こっちはドキドキしっぱなしだったぞ」

「えへへ、せっかく家族風呂があったんだから、使わない手はないでしょう。それに、こんな時でもないとフィル、一緒に入ってくれないでしょう」

実は、ここは家族風呂があって、予約すれば誰でも使える物だ。
しかもいつの間にか、ヒヨリが旅館の予約をするときに取っていたらしい。

「当たり前だ。お前は俺の理性を飛ばしたいのか……」

「……それも……いいかな」

「おいおい……」

全く、何を言ってくれるんですか。
こっちの気も知らないで……

＊　　＊　　＊

「……フィルの……けだもの……」

「お前がずっと、俺の理性を吹っ飛ばすことしてるからだろうが…
…こっちだって限界だったんだぞ」

ここに来るときから、胸を背中に押しつけられたり、温泉に一緒に入ったりして、ヒヨリのプロポーションの良い身体を見続けてきたんだぞ。

限界にもなるっての……

「今日は……本当に激しかったね……」

「……すまん」

「……激しいのもたまには良いけど、やっぱり優しくギュッとされるのが、一番良いかな」

「こんな……感じか？」

俺はヒヨリをそっと抱きしめて……

「……うん。こうやって、フィルの胸の中にいると安心するんだ」

「そっか……」

「今日は……このまま眠りたい」

「俺も……同じさ。ヒヨリの温もりを感じながら眠りたい」

俺とヒヨリは、お互いの温もりを感じながら眠りについた。

＊　　＊　　＊

「ここ……すごく綺麗ね」

「そうだな……」

旅行の最終日、私たちは六課に帰る途中、少し遠回りをしてあるところに来ていた。

ここは昔、フィルが何かあったときに来ていた海岸らしい。

オフシーズンと言うこともあり、人は誰もいなかった。

「……どうしたの？」

「俺は、六課が解散してしまえば、ヒヨリとは別の道を歩むことになる」

「……そうだね」

フィルは、六課解散後フェイトの元で執務官補佐をすることになっている。

私も教導隊に戻って、また教導官をしなくてはならない。

「例え、離れていても、なんて言葉は嫌だから……」

そう言ってフィルは、私の左手の薬指に……

「これ……まさか……？」

薬指に輝くのは、エメラルドグリーンの宝石を彩った指輪。

まるで、私の瞳を表しているかのような……

「ああ……ヒヨリ、六課が解散したら、俺と……」

「俺と……一緒になって欲しい」

「あっ……」

私は、嬉しさで涙があふれ出してきた。
昭人とお母さんを失って、私は愛する人を作らない。

そう、決めていた。

だけど、フィルがそんな私の心を溶かしてくれた。
同じ悲しみを持ち、そして、それを乗り越えたフィルだからこそ、
その言葉は私の心に響いた。

「私こそ……私こそ、よろしくね。フィル……」

「ヒヨリ……」

私は、フィルの胸に飛び込み……

「幸せに……してね」

「ああ……幸せになろう。ヒヨリ」

同じ悲しみを持った同士の二人……

だけど、私は未来から来た青年によって、心を救われた。

その青年の真っ直ぐな心に……

昭人、美月お母さん……

私、幸せになるから、二人とも私達のこと見守ってね……

フィルと……

愛する人と共に……

幸せになるからね……

# SPECIAL PROGRAM vol.1 if ending ヒヨリ

SPECIAL THANKS

今回は、夏菜先生のヒヨリ・R・マクスウェルさんの物語です。
他作品からのキャラクターで、if endingシリーズを書くのはこれが初めてになります。

今まではゲスト出演という形でしたので……

今回の話のコンセプトは、ヒヨリの日記で、昭人君が戻ってこなく、そのままSTS編に突入し、そのままフィルと共に事件を解決したというコンセプトで書いてます。後、ヒヨリの日記の緑水晶編ともリンクしています。

この話は夏菜先生の監修を得てますので、また違ったヒヨリの物語を楽しんでいただければ幸いです。

＊補足

※フィンアクセレイター

能力

デバイスに関して、その潜在能力の１００％を出せるようにする。

その際、そのデバイスの基礎フレーム、使用金属、コアの構造、プログラムなども、最適なものに変化。

副次効果として故障や損傷完全回復。

フィンアクセレイターと融合したデバイスがどんなデバイスでも、その意思を消し去る事はせず、また、フィンアクセレイターの意思は消滅（もともと、意思と呼べるものは皆無）

効果として、デバイスと使用者の絆を強化し、術にかかる時間の高速化。
他者の使用は１００％不可能。

リンカーコアとの密接なパス　（絆）をもつことにより、今までのデバイスとは比べ物にならない魔力運用能力を誇る。

形状は、少し丸くなり、色が青く変化する。

※この小説でのヒヨリの設定

名前：ヒヨリ・Ｒ・マクスウェル
年齢：１９歳
身長：１５４ｃｍ
外見：金髪長髪・軽くウェーブがかかっている
スリーサイズ：フェイトよりスタイルは良いよ♪

# SPECIAL PROGRAM vol.2 if ending エミリア

今回の話は、神崎はやて先生作品『魔法少女リリカルなのはStrikerS ～氷翼の天使～』より、エミリアさんのif endingになります。

機動六課が解散してから、1年。
俺は、リオスさんの元で執務官補佐をしていた。

執務官になるため学ぶことは多いが、リオスさんと一緒にやっていると、毎日が勉強だ。
リオスさんが担当するのは、主に違法施設の摘発だ。

「……それにしても、本当に違法施設が多いよな」

《この一年、リオスさんと一緒にかなり叩きつぶしたんですけどね……》

「こればっかりは、虱潰しにやっていくしかないな……んっ？　あれは、リオスさんと……」

俺が窓の外を見ると、リオスさんが一人の少女と一緒に歩いている。
少女の外見は、黒く長い髪をしていて、背は少し低めだ。

「……一体誰なんだろ？」

《ちょっと、行ってみましょうか？》

俺は、少女のことが気になり、リオスさんの所に行くことにした。

＊　　＊　　＊

僕は今、ある任務で保護した少女と一緒に散歩をしている。
彼女は先日の任務で、違法施設から救出したのだが、そこで彼女の両親が彼女の目の前で殺されてしまい、そのショックで人に心を開かなくなってしまった。

そのせいで、僕以外の人間には誰にも心を開かない状態が続いていた。
そのことを考えてると……

「リオスさん！！」

「あっ……フィル。どうしたんだい？」

フィルが、こちらにやってきた。

「あっ……いえ、外を見ていましたら、丁度リオスさんが通りかかったので、あと……」

「……一緒にいる彼女が気になったんだね」

「はい……彼女は？」

「ああ、彼女はエミリア。実はね……」

僕がエミリアのことを話そうとしたとき……

ギュッ……

「えっ……？」

エミリアが、フィルの服の裾を掴んでいた。

「え、えっと……君は？」

「……エミリア」

「エミリア……良い名前だね」

「……ありがとう」

信じられない。今までどんなに他人に心を開こうとしなかったのに。
フィルには、自分から話しかけている。

「俺は、フィル・グリード。今、君が一緒にいたリオスさんと一緒に働いてるんだ」

「そう……」

「もし、よかったら、俺とも友達になってくれると嬉しいな」

そう言ってフィルが右手をエミリアに差し出す。
そして……

「……うん」

エミリアもフィルの右手を取り、握手をした。

「グロリアス……これ、もしかしたら」

《ええ……もしかしたら、フィルなら、彼女の心を開けてくれるか

もしれないですね》

可能性は低い。

だけど、今僕以外の人間で、心を開こうとしているのはフィルだけだ。

今はフィルに託すしかない。

フィル、彼女のこと頼んだよ。

＊　　＊　　＊

エミリアと初めてあった日から、三ヶ月がたった。

最初は、話しかけても一言二言しか返してくれなかったけど、段々と返してくれる言葉も増えてきて、エミリアも笑顔を見せてくれることが増えてきている。

「エミリア、そう言えば最近リオスさんと一緒に、行動しないね？」

「リオスじゃなくても、フィルがいるから……だから良いの」

「そう言う物か？」

「うん、そういうもの。……ごめんね。一緒にいてもおもしろくないでしょう」

「そんなこと無いよ。エミリアと一緒にいるの、楽しいよ」

「……嘘」

「嘘じゃないよ……」

嘘じゃなく、エミリアと一緒にいるのは、本当に楽しかった。
確かに会話は少ないけど、何て言ったらいいのかな。
エミリアと一緒にいると、落ち着くんだよな。
一緒にいるだけで、心が休まるっていうか……

「エミリアといるとね、何か心が休まるんだ。会話は少ないかもしれないけど、それ以上にエミリアと一緒にいることが楽しいし、嬉しいんだ」

「フィル……あ、ありがとう。……わ、私もだよ」

「んっ？　何か言ったか？」

「……何でもない」

エミリアは、突然顔を真っ赤にしてぷいっと反対の方へ向いてしまった。

一体どうしたんだろう？

《マスター……本当に分からないんですか》

「プリム、お前には分かるのか？」

《はぁ……もう良いです》

《（マスターの鈍感には、本当に困った物です。誰が見たってエミリアが、マスターのことを好きになっていることに気づきますよ）》

＊　　＊　　＊

数日後

「おーい、エミリア」

「！！」

俺が話しかけるが、エミリアは顔を真っ赤にして逃げていってしまう。

この数日、この行動がずっと繰り返されている。

俺がいくら話しかけようとしても、こんな風に逃げていってしまう。
俺、何かしたかな……？

「……というわけなんですよ」

理由が分からず、俺はリオスさんにこの事を相談した。
丁度なのはさんがリオスさんのお弁当を届けに来ていたところで、
女性の意見も聞きたかったので、なのはさんにも相談することにした。

「「はぁ……」」

二人がいきなりため息をつく。

「えっ……、俺、何かおかしいこと言いました？」

「フィル、それ、本気で言ってる」

「なのはさん？」

「……フィル、この事はもう少し自分で考えてね。丁度良い機会だから、女の子の事を勉強してね」

リオスさんもなのはさんの意見の同意らしく、今回のことは自分で考えろとのことだ。
もう、こうなったら、エミリア本人に聞くしかない。

＊　　＊　　＊

「エミリア！！」
「！！」
また、エミリアは逃げだそうとしたが……
「待ってくれ！！」
俺は、エミリアの右手を取ると、また逃げだそうとするが……
「エミリア、俺が嫌いになったなら、それでも良い。だけど、せめてその事を言ってくれないか！！」
「……そうじゃない」
「えっ……？」

「そうじゃない！！　私、フィルのこと嫌ってなんかいない！！」

エミリアの声に、俺は驚きを隠せなかった。
嫌いじゃないって事もそうだけど、エミリアがこんな大声で話すなんて事、今まで無かったから……

「だったら……どうして、この数日俺から逃げていたんだい？」

「……」

エミリアは、黙ってしまった。
だけど、ここで問い詰めても駄目だ。

今は、エミリアが自分で言ってくれるのを待とう。

そして……

「聞いて……くれる……？」

俺は、エミリアの真剣な瞳に、黙って首を縦に頷いた。

＊　　＊　　＊

このままフィルに誤解させたままは嫌！！
私は話すのが下手だ。

だけど、これだけはちゃんと伝えなきゃ駄目。
例え、どんな結果になったとしても……

「……好き……なの」

「エミリア？」

「フィルの事が……好き。誰よりも大好きなの！！」

とうとう言ってしまった。
いきなり言っても、フィル、迷惑なだけだよね。
私みたいな無口な女の子といても、面白くないよね。

「ごめんね……こんな事言われても……迷惑なだけだよね……」

＊　　＊　　＊

「エミリア……」

エミリアは、俺に告白してくれた後、その場で泣き崩れてしまった。

胸が痛い。

エミリアが泣いているのを見ていると、とても悲しくなる。

彼女が笑顔でいるときは、自分も心が温かくなるのに、泣いている姿を見ると、本当に悲しくなってくる。

まるで……

ティアと一緒にいた時みたいに……

「！！」

あの時、リオスさんとなのはさんが言っていたことがやっと分かった。

俺も……

俺も、エミリアのことが好きだったんだ。

エミリアと一緒にいると、優しい気持ちになれる。
なんでそんな風に思うのか分からなかった。
いや……
分からないように思いこんでいたんだ。

ティアを失ってから、自分を好きになってくれる人はいないだろう。
そう、思いこんでいた。
だけど……
エミリアは、俺を好きになってくれた。
必死で想いを伝えてくれた。
だから……

「エミリア……」
「フィル……？」

俺は、言葉でなく自分の気持ちを身体で伝えることにした。
エミリアに俺の気持ちが伝わるように……

「……分かるか。俺の胸がドキドキしてるの」

「……うん。フィルの心臓、ドキドキしてる」

「俺も……俺も、エミリアのことが好きだ。大好きだ！！」

「本当……本当……なの？」

「嘘じゃないよ。その証拠に、こんなにドキドキしてるんだ。大好きな人を抱きしめていて、こんなにドキドキしてる」

「……フィル……私も……私もドキドキしてる」

そう言って、エミリアは俺にギュッと抱きついた。

「フィル……」

エミリアは俺の方を見上げ……

「お願い……フィルの気持ち、もっと感じさせて……」

エミリアは、その赤き瞳を潤ませ……

「……キス……して」

瞳を閉じ……

「エミリア……」

俺も、エミリアに引き込まれるように……

やがて、どちらからともなく……

俺たちは、キスをした。

「……キス……しちゃったね」

「嫌だった。こういうの」

「……ううん、私ね。ずっとこうしたかった」

「エミリア……ありがとう。俺を好きになってくれて……」

「それ……私の台詞。私こそ……ありがとう」

こうしてエミリアを抱きしめてると、本当に優しい気持ちになれる。

言葉は確かに大切だ。

だけど、こうやって行動で示すことも、大事なことだ。

エミリアは、あの事件以来、心を閉ざしてしまっていた。

だから、言葉でなく、こうやって温もりを感じてもらい、エミリアへの愛を伝える。

嘘偽りない、俺の想いを……

「フィル……」

「……なんだい。エミリア」

「……もっと、フィルを感じたい」

「それって……」

「……うん」

いくら鈍感朴念仁と言われていても、今のエミリアの気持ちは分かる。

俺も同じ気持ちだから……

「……いいのか、本当に。もっと、落ち着いてからでも」

「……いや。今日が良い。だって……フィルと恋人になれた、大切な日だから……」

「わかった。もう、止められないからな……」

「うん……」

俺とエミリアは、俺が住んでいるマンションに行くことにした。

＊　　＊　　＊

「……なんか、ドキドキする」

「俺も……そうだよ」

部屋に付いた俺たちは、俺のベッドでこうやって二人寄り添って、色々なことを話した。

お互いに会話はスムーズじゃないけど、でも、エミリアが本当に一生懸命俺に自分の気持ちを伝えようとしてくれる。

俺はそれだけで十分だった。

そんなエミリアが愛おしくて、エミリアの綺麗な黒髪を何度も撫でている。

「……ふみゅ……気持ち……いい」

エミリアも髪を撫でられるのが、嫌ではなく、目を細めて俺に甘えてくる。

そんなエミリアを見て、さらにエミリアを自分の方へ抱き寄せた。

「エミリア……」

「フィル……」

俺たちは、キスをすると、最初はただ唇が触れあうキスをし、エミリアもキスの仕方が分かってきて、自分の舌を積極的に絡めてきて、段々情熱的なキスになって、それは息が続く限り求め合い、息継ぎを繰り返し、何度も求め合った。

唇が離れる度に、お互いの間に銀色の糸が出来、俺とエミリアの求め合う証になっていた。

「あっ……」

俺は、エミリアの上着を脱がし、ブラを取り、エミリアの形の良い胸に触れ……

「……柔らかい……それに温かい……」

「……ふみゅうぅぅ……恥ずかしい……」

普段のエミリアでは『ふみゅうう』なんて言わない。
恋人になって、色んなエミリアがみられて、本当に嬉しい。

「これから、もっとエミリアのこと求めるけど……」

「うん……私、あんまり女の子として……魅力無いけど」

どの身体がそんなこと言うんですか。
エミリアの身体は、少なくてもなのはさんくらいスタイルが良い。
胸も大きいし、全体のバランスだって良い。

「あのな……俺は、エミリアをもっと抱きたくて我慢してるんだぞ。
そんなこと言っているお前には……」

「あっ……んんっ……だめ……だめぇぇぇ！！」

俺はエミリアにどれだけ自分が魅力あるかってことを感じて欲しくて、いっぱいエミリアの身体を求めた。

「……はぁ……はぁ……フィル、私……わたし……」

「うん……エミリア。俺、エミリアのことが……欲しい」

「……フィル。私……初めてだから……」

「優しくするよ。エミリア」

「……うん。いっぱい……いっぱい抱きしめてね」

俺は、エミリアを優しく抱き……

その度に、ベッドはきしんだ。

その後、エミリアは俺のことを何度も求めてきて、それに俺も応え……

俺とエミリアは身も心もとけあった。

＊　　＊　　＊

「……おはよう、エミリア」

「……おはよう」

結局俺たちは、その後何度も求めてしまい、眠りについたのは朝3時を過ぎてからだった。
実質3時間も寝ていない。

「夢じゃ……ないんだな」

「……フィル……その……激しかった」

「……すまん。エミリアがすごく綺麗だったから……」

「……いいの。私もフィルをいっぱい感じられたから……」

「エミリア……」

エミリアは、ぎゅっと俺に抱きついてきた。
エミリアも俺も、今何も纏っていない状態だ。

そんなにされたら、また……

「あっ……」

「すまん……節操がないな」

「くすっ……いいよ。今日の夜も……いっぱい抱きしめてね♪」

「エミリア……」

エミリアの笑顔は、本当にあたたかい。
あの笑顔を見ているだけで、優しい気持ちになれるから……

＊　　＊　　＊

「しっかり、捕まっていろよ」

「……うん」

俺とエミリアは、サンダーでクラナガンにある遊園地に向かっている。
実は、あの朝出勤したとき、リオスさんとなのはさんがいて、俺たちのことを見るなり、いきなり俺たちのことを言い当てたのだ。
そして、なのはさんから、プレゼントと言うことで、クラナガンにある遊園地のフリーパスをくれたのだ。

リオスさんも俺たちにお祝いと言うことで、今日から3日間休暇をくれた。

「それにしても、申し訳ないことしたな」

「……リオスとなのは。私達のこと心から祝ってくれたね」

「だな。あの二人に感謝しなきゃな。休暇までくれたし……」

「うん……」

《マスター、エミリアさん、せっかくリオスさんが休暇をくれたんですから、いっぱい楽しんでくださいね。せっかく恋人同士になっての初めてのデートなんですから♪》

「「ぷ、プリム！！」」

ったく、プリムの奴、俺たちの反応を楽しみやがって……

でも、プリムも心から祝福してくれてる。

本当に良い相棒だよ……

＊　　＊　　＊

「……いっぱい、いるね」

「ああ……どこもカップルだらけだな」

でも、俺たちだってそんなカップルの一組なんだよな。
エミリアも同じ事を思ったのか、頬を赤らめてしまった。

「じゃ、じゃぁ……どこから回ろうか？」

照れてしまうのをこらえながら、俺は近くのアトラクションに移動することにしたが……

ギュッ

「エミリア……？」

エミリアが、俺の服の裾を掴み……

「手……繋いでくれる」

そっと自分の右手を差し出す。

俺は、エミリアの手を握ると、エミリアもギュッと握り替えしてくれた。

改めてすると、恥ずかしいけど、エミリアが喜んでくれれば良い。

俺たちは、まず、メリーゴーランドに乗り、あの白馬に一緒に乗った。

エミリア自身、あまり絶叫系が得意でないので、こういったおとなしめの乗り物を中心に攻めていった。

お昼になり、俺たちはパーク内のレストランで食事を取ることになった。

そこで、エミリアはとんでもない物を頼んだ。

「……カップル限定の、ジャンボパフェかよ……」

「……フィル、あーん……して」

そう言って、エミリアはアイスをスプーンですくって、俺の口元に持ってきた。

顔を真っ赤にしながらしてくれたんだ。

俺もそれに応えなきゃな……

「あ、あーん……モグモグ……」

「どう……？」

「甘い……なんか色んな意味で……」

「今度は……フィルが……して」

今度は俺がエミリアに食べさせてあげると、またエミリアがといった感じで、この繰り返しで俺たちは昼食を楽しんだ。

＊　　＊　　＊

夜になり、俺たちは観覧車に乗ってクラナガンの夜景を楽しんでいた。

ここから見るクラナガンの街は、どこか幻想的な輝きを放っていた。

でも、正直俺は夜景よりもエミリアに見とれていた。

「ふみゅ？　どうしたの……？」

「いや……エミリアに見とれていたんだ」

「……その……あの……ありがとう」

エミリアは頬を赤らめて、下に向いてしまった。

でも、本当に可愛いよな、エミリア。

「フィル……今日は、本当に楽しかった」

「俺も……楽しかった。エミリアとこうやって一緒にいられたから……」

「……フィル」

向かい合わせで座っていたが、俺はエミリアの隣に移動し、その肩をそっと抱いて……

「……ずっと……ずっと一緒にいてね」

「ああ……ずっと一緒だ。愛してるよ、エミリア」

「私も……愛してるよ。フィル」

星が照らすゴンドラの中……

俺とエミリアは……

誓いのキスをした。

＊　　＊　　＊

3年後

「フィル！！　早く！！」

「ちょっと待ってくれよ。もう少しゆっくりと行こうぜ」

「だーめ。もったいないでしょう。せっかくこうやってフィルとデートに来てるんだから♪」

あれから3年の月日がたった。

エミリアもリオスさんや俺、そして、俺の親友と交流を持つことで、本来の快活な性格が戻ってきて、今では人と話すことに抵抗を持つことが無くなってきている。

「そうだな、だったら今日も思いっきり楽しもうか」

「うん！！　フィル……」

「何だ……んんっ！！」

エミリアは、いきなり俺にキスをし……

「……大好きだよ。いつまでも、私のそばにいてね……」

「ああ……これからもずっと一緒だよ。エミリア……」

両親を目の前で失い、心を閉ざしてしまったエミリア。

その少女も今は幸せを掴み、大切な人を得た……

これからも二人の人生には、色々なことがあるだろう……

だけど、二人ならきっと乗り越えられる。

愛するエミリアと共に……

それが二人の幸せなのだから……

# SPECIAL PROGRAM vol.2 if ending エミリア

SPECIAL THANKS

今回は神崎先生のエミリアさんの物語です。

コンセプトとしましては、エミリアはリオスがとある事件で保護をし、その事件で両親を失い、リオス以外に心を開かない状態になってしまう。
そこにフィルがエミリアに話しかけ、そこから二人の切っ掛けが生まれ……

こんな感じです。

※この小説でのエミリアの設定

名前：エミリア
年齢：18歳
性格：無口、物静か。両親を失う前は快活な性格。
外見：氷翼の天使と同じ。
スタイル：大人の女性に近い（背は少し低め）

## ＳＰＥＣＩＡＬ　ＰＲＯＧＲＡＭ　ｖｏｌ．３　ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ノア（前）

今回は、カガヤ先生作品『魔法少女リリカルなのは～輝光戦記～』のノア・ナカジマさんとのｉｆ　ｅｎｄｉｎｇになります。
いよいよ、本格的に始動しましたＳＰＥＣＩＡＬ　ＰＲＯＧＲＡＭシリーズ。
他作品のヒロインとのストーリー、楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞ！！

《マスター……本当に良いんですね。クロスさんを助けるためには……》

「分かってるさ……でも、俺はもう、後悔したくないんだ。ノアさんのあの悲しい目を見たくないんだ……」

《それでは……行きますよ。暴走しているクロスさんは無敵ですよ》

「ああ……」

それでも、行かなくてはならない。
そのために俺は、この時代に来たんだ。

ノアさんの相棒だったクロスさんを助け

そして……

あの人の心に笑顔を取り戻すために……

＊　＊　＊

「ううう……」

「くっ……」

「マスター……！！」

私となのは達は何とかして、マスターを止めようとしたが、ゼストさん達もクロノ達もやられてしまい、今動けるのは、なのはと私だけになってしまった。

はやてと守護騎士達も、なのは達のおかげで復活して、一緒に止めようとしてくれたんだけど、今のマスターの前に全員倒されてしまった。

「ノアちゃん……何とか動けそう？」

「正直……厳しいですね」

「そっか……」

それでも、なのははレイジングハートを杖代わりにして、何とか立ち上がろうとする。

「こうなったら……私がマスターの中に入って、直接意識に呼びかけるしかないです！！」

「で、でも、そんなことをしたら、ノアちゃんが！！」

「……大丈夫ですよ。マスターは、絶対助けますから……」

私はマスターに強制ユニゾンをしようと、術式を展開しようとしたとき……

「それは、ちょっと待ってくれないか」

突然、私の前に黒髪の男性が現れ、男性が右手から魔力を放つと、魔法陣が消滅してしまい、術式を中止させた。

「う、嘘……私の術を、どうやって？」

「その術では、彼は助からないよ」

「何で、そんなことを言えるんですか！！」

「……知っているからさ」

「えっ……？」

どういう事ですか？
知っているって、この人は何を知っていると言うんですか？

「あなたは……何者なんですか？」

「……俺は、フィル・グリード。通りすがりの魔導師さ」

「フィル？　聞いたことありませんね。管理局の局員ではないみたいですけど？」

「……それも、後で話すよ。この戦いが……無事終わったらね」

確かにこの人の言うとおりだ。
今はマスターを助けることが先決だ。

「さっき、ユニゾンじゃマスターを助けられないって言いましたけど、どうしてそんなことを言うんですか？」

ユニゾンのことを知っていたのもそうだけど、あの術を強制解除したことも知りたい。
あの術は、私のオリジナルだ。
見たこともない魔法をああも簡単に解除はできない。

「……あのまま、ユニゾンをしたとしても、君の方が意識を持って行かれ、消滅してしまう。それくらい今の彼の力は強いんだ」

「……そうかもしれません。だけど、これしか方法がないんです！　だったら、あなたには他の方法があると言うんですか！！」

「……あるから、君を止めたんだ」

「えっ……？」

「……ノア、彼とではなく、俺とユニゾンしてくれないか」

「何ですって！！」

この人は一体何を言ってるんだ。
普通の人がユニゾンのことを知っていたのも驚いたけど、私とユニゾンをしてくれなんて……

「そんなこと……出来るわけ無いじゃないですか！！　私はマスターのデバイスなんですよ。見ず知らずのあなたになんて出来るわけ無いじゃないですか！！」

「それは百も分かってる。だけど、彼女たちは動けないし、今の君が彼に向かっていっても、やられるのが目に見えている」

「でも……」

「信じられないのは分かる。だけど、時間がないんだ。頼む、俺の心を覗いても良い……だから、俺を信じてくれ！！」

この人は、ユニゾンで自分の心に触れられるのを覚悟している。ごくたまにだけど、相手の心理が流れてきてしまうことがある。

それを知って、なお私とのユニゾンを……

「……分かりました。あなたの言葉を……信じます」

「……ありがとう」

私とフィルと名乗る男性は、ユニゾンをするべく魔力の同調をし……

「「ユニゾン・イン！！」」

そして、私達は一つとなる。

＊　　＊　　＊

「……ここは？　確か、私はユニゾンをして彼の中に入ったはずなのに……」

目の前には、なぜかミッドチルダの街が見えている。
私達は、海鳴の街にいたはず……

「そっか、ここは彼の心の中……本当に心の中に入ってしまったんですね」

と言うことは、彼はミッドの人間。
でも、街がより発展している気がします。

「……ミッドなんですけど、どこかが違うんですよね。まるで、未来？」

そんなことを考えていると、また場面が切り替わり、今度は一人の男女が海岸で座っていた。

『フィル……』

一人の女性が男性のことをフィルと言っている。
どうやら、本人の記憶らしい。

『……やっぱりここにいたんですね……ノアさん』

「えっ……？」

この女性が私？
少なく見ても１０年以上は経っている。

もう、分からないことが多すぎます。

『……うん、こんな日はどうしても思い出してしまうんだ。かつてのマスター……クロスロードのことを……あれから、１０年が経ってしまったんだね』

『……クロスさんが亡くなってから……ですね』

う、嘘でしょう……
マスターが……マスターが死んだだなんて……

『うん……ごめんね。こんな顔、本当はフィル達には見せてはいけない立場なのにね……』

『人には……誰にだって、泣きたいときがありますよ。俺だってそうでしたから……』

『ティアナのことだよね……』

『……はい』

『……私とフィルは似たもの同士かもしれないです。フィルは未来でティアナ達を、そして私はクロスを……』

私はマスターをこの時に失っていたんだ。
でも、どうして……？

『あの時、マスターの意識を取り戻そうとして、ユニゾンで内部に入ったのは良かったんだけど、逆に取り込まれそうになって、そしてそんな私を助けようとして、マスターは私を強制ユニゾンアウトし、その後闇の意志と共に自爆をした』

『……クロスさんの優しさ故の……悲劇ですね』

『本当に……優しいマスターでしたよ……クロスロードは』

『……ノアさん』

そんな……そんな……

マスターだけでなく、みんなまで死んでしまったなんて……

でも、おかしいです。

みんなが死んだと言ってるのは、未来でと言ってます。

これではまるで。

タイムトラベラー……

「また、場面が変わるんですね……」

再び景色が変わると、今度は真っ白い空間にフィルと金髪の女性がいた。

＊　　＊　　＊

『フィル……その決心変わりませんか』

『ああ、未来でみんなが殺され、それを変えることはできた。だけど、肝心なことを変えることが出来なかった』

『……自分が好きになった女性の心を……救えなかった』

そうさ、自分の好きになった人を救えなくて、なにがみんなを助けるだ。

これじゃ意味がないんだ。

『ノアさんの……ことですね』

『……俺の片思いだけどな』

あの人は今でもクロスさんのことを思っている。

『例え、もう一度過去に戻って変えたとしても、あなたは報われないのですよ。そして、今度タイムワープをしてしまったら……』

『……絆がない限り、魔力を使い果たしてしまったら消滅してしまうんだろ……』

『それが分かっていてどうして!?』

『……それが、俺なりのノアさんへの愛……だから。自分が好きになった人が、心から笑ってくれたら、それでいいから……』

そうさ、自分が好きになった人が、笑顔を取り戻してくれたら、それでいい……

そのために俺の命があるんだ。

『……ばかですよ……フィルは』

『……かもな』

『そこまで、覚悟してるなら私は止めません。これを、持って行ってください』

女神が取り出したのは、金色のカートリッジと、マイクロチップ。

『これは……？』

『ノアさんとのユニゾンを一時的に可能にする、プリム用のマイクロチップと……クロスロードさんの暴走を止める事が出来るエネルギーを込めたカートリッジです』

『……アルテミス』

『本当はあなたを止めたかった。自身の幸せを掴んで欲しかった。
でも、その覚悟を決めた瞳をみて、せめてあなたが好きになった人を助けるために手を貸します……それくらいしか、私には出来ませんから……』

『ありがとう、アルテミス……』

俺はマイクロチップとカートリッジを受け取る。
そして、アルテミスはさらに……

『そのカートリッジは、あなた一人では使うことは出来ません。ノアさんと融合して初めて発動することが出来ます。そして、マスター以外がユニゾンをすることは、その人の心の中を見られることになるんですよ。それでも……使いますか』

『……使うさ。それしかクロスさんを助けられないというなら』

『……フィル』

『アルテミス？』

アルテミスは俺を自分の方へ抱き寄せ、さらにギュッと抱きしめた。

『……ごめんなさい……ごめんなさい。私にもっと力があれば、あ

なたにこんな悲しみを背負わせなくて済んだのに……』

『それは、違うよ。アルテミスが力を貸してくれたから、俺は後悔しないで済むんだ。自分の好きな人を助けられるんだ。だから、そんな風に思わないで……』

『はい……はい……』

アルテミスの泣く声が聞こえてくる。

今は、泣いてる顔を見ないでおこう。

俺も自分の泣き顔を見られたくないから……

『……本当にありがとうな。アルテミス』

俺はアルテミスが作った魔法陣に飛び込み……

ノアさんが、そしてクロスさんがいる時代に向かった。

＊　　＊　　＊

「ヒック……ヒック……ぐす……」

なんで……なんで、ここまで私のためにしてくれるんですか。
未来でティアナ達が死んでしまい、それを元に戻すだけでなく、今度は私のために……

しかも、今度のタイムワープは自身の消滅を覚悟して……

「……マスター以外に、こんなに私のことを思ってくれる人がいたなんて……」

私は、マスター以外の男性には、正直言って興味がなかった。
だから、マスターの幸せが全てだった。

「フィル……あなたは……あなたは、そこまで私のことを……好きになってくれたんですか」

ここまでしてくれたフィルに、私が今してあげられるのはただ一つ。
この人と一緒に、マスターのことを助ける。

それが、この人のためにしてあげられるたった一つのことです。

＊　　＊　　＊

「ノア、ノア！！」

「あっ……」

「意識を取り戻したみたいだな。ユニゾンしてから、意識が飛んでいたみたいだからな……」

「フィル……」

どうやら、私は戻ってきたみたいですね。
一体どのくらいの時間が経ってしまったのだろう？

「どのくらい、意識を失っていたんですか？」

「大体、3分くらいだよ。そんなに時間は経っていない」

「そう……ですか」

あの空間にいた時間と、現実の時間は違うと言うことですね。
でも、おかげで全てが分かった。

私のこと、ユニゾンのこと、そしてマスターのこと。

フィルは全部知っていた。

そして……

自分の存在を犠牲にしてまで、助けに来てくれた……

「どうしたんだ？　ノア？」

「……何でもないですよ」

「……そっか」

フィルはおそらく感づいている。

自分の記憶を見られ、全てを知られていることに。

それでも、この人は……

「じゃ、始めるとしようか。これから俺たちはクロスさんに、これを撃ち込む。そのためにはまず、動きを封じなければならない」

「今のマスターは、そう簡単には動きを封じられませんよ」

「分かってる。だけど、彼は力に任せている状態だ。ああいうのは搦め手に……弱い！！」

「でも、どうやってするんですか？」

「それにはな……」

フィルが立てた作戦はこうだ。

まず、真正面に私達が立ち、マスターの意識をこちらに向ける。

同時に幻術で隠した、設置型のバインドを発動し、動きを封じる。

だけど、このバインドはもって数分だから、その間にカートリッジを使い、全力の融合魔力砲撃を放ち、マスターを目覚めさせる。

「……かなり、危険な賭ですよ」

「でも、これしか方法がないんだ。アルテミスから受け取ったカートリッジは一つだけだから。……見たんだろ、俺の記憶を……」

「分かっていたんですね……」

「言われていたからな。この事は……」

「フィル……私は……」

「今は……その話は無しだ。クロスさんを救うことに全力を尽くそう」

フィルの決意に、私はこれ以上は言えなかった。
覚悟を決めてしまっている。

悲しい……覚悟を……

「いくぞ！！」

私達はワープでマスターの正面に出て、マスターの意識をこちらに向ける。
あっちも暴走状態だけど、それに気づき私達の方にいくつものスフィアを飛ばしてくる。

「くっ……」

「きゃあああ！！」

融合しているとはいえ、今のマスターの攻撃に耐えるのはきつい。
ラウンドシールドも段々ひび割れを起こしてきている。

「……コ、コロス……ミンナコロス……」

今のマスターは破壊衝動に飲み込まれてしまい、本来の性格が眠ってしまっている。
破壊衝動の意志を消滅させられれば、マスターは……助かる！！

「クロスさん……目を覚ませ！！　自分の手で、大切な人を殺す気か！！」

「ダマレ……ミンナシンダンダ……オマエモコロス！！」

「なんだと……」

「コンナセカイニ……ナンノカチモ……ナイ」

「マスター……マスターァァァァ！！」

もうマスターには私達の声は届かないの。
あの優しかったマスターは、もう……

「ふざけるな！！」

「！！」

「価値が無いだと……自分を心配してくれる人がいる世界を……否

定するな！！　お前にはこうやって心底心配してくれる人がいるんだぞ！！」

「フィル……」

「もう、言葉で説得するのはやめだ。そんな分からず屋には……」

そう言ってフィルは、デバイスをモードチェンジし、マスターに銃口を構える。

「この俺が、きつい一発をぶち込んでやる！！」

＊　　＊　　＊

《ですが、マスター。クロスさんは完全に闇に飲み込まれてしまってますよ》

「ああ……このままじゃ、完全にクロスさんは化け物になってしまう。一か八か！！」

俺は、クロスさんにストラグルバインドをかけようとした。

クロスさんは、あっさりとバインドは打ち砕いてしまう。

だけど、そのバインドは本命じゃない。

本命は……

「グ……ガガガ……ウゴケナイ」

本命は、フェイクシルエットで隠していた、設置型のブラスタービットだ。

これでやるストラグルバインドが俺の本命だ！！

「よし、やったぞ！！」

「フィル、今ですよ！！」

《マスター、これが最後のチャンスです！！》

これが最後のチャンスだ。

このバインドを解かれたら、もう俺たちに打つ手はない。

「いくぞ、二人とも」

「《はい！！》」

俺はアルテミスから受け取ったカートリッジをセットし……

《行きますよ、ノアさん、マスター。エクセリオンカートリッジ・リリース！！》

次の瞬間、俺たちに多大な魔力が注ぎ込まれてきた。

「こ、これは……すごい魔力の奔流だ！！」

「一人では制御できません！！」

何とか二人で魔力を制御し、俺はその魔力をプリムの銃口に集中した。

集中した魔力は、巨大な魔力球を形成し、その大きさはなのはさんが使うスターライトブレイカーよりも遙かに大きな物になっていた。

「す、すごいです……これが……」

「アルテミスがくれた聖なる力……」

この力は俺たちの魔力だけではない、時の女神アルテミスの力も加わっていた。

「この力なら……闇の意志を完全に消滅させることが出来る」

「フィル、お願いです。これでマスターを目覚めさせてください！！」

「ああ……これで、これで決める！！」

魔力はさらに集まり、そして……

「「スターライト……」」

俺たちの声が重なり……

「「ブレイカァァァーーー！！」」

白銀の奔流は、クロスさんに向かい……

「ギ、ギイヤアアアアアア……」

クロスさんの身体から黒い霧のような物が抜け出し……

黒い霧は、断末魔とともに爆散し、完全に消滅した。
そして、クロスさんの姿も、もとの人間に戻ることが出来た。

意識を失っていたため、地面に落下していったが、何とかワープで受け止めることが出来、無事救出することが出来た。

こうして、クロスさんの暴走は止めることが出来、俺の役目も……終わった。

＊　　＊　　＊

「マスター……マスター！！」

「心配しなくても良いですよ。クロスさんは気を失っているだけです。闇の力も身体から無くなっていますので、もう、暴走の心配もないです」

「よかった……本当に良かったです……」

私はマスターの無事を心から嬉しかった。
フィルがいなかったら、私はマスターを失っていた。

「……これで、俺の役目も……終わりです」

次の瞬間、フィルの身体が光に包まれて、足下から消えていた。

「そんな……どうして、どうして！！」

「記憶……見たんですよね。これが俺の定めだったんです」

「いやです……いやです！！　どうしてあなたが消えなきゃいけないんですか！！」

「……これで良いんですよ。これで、本当にみんなの心を救えたんですから……」

フィルの身体は、足首から膝元まで完全に消えてしまってる。
消滅がどんどん進行しているんだ！！

「こんなの……こんなの酷いですよ……フィル、私のことが好きだってのは嘘なんですか！！　自分の好きな人に悲しみを背負わせて平気なんですか！！」

「……大丈夫ですよ。クロスさんも助かったんです。これからは、クロスさんと……楽しいことが待ってますから……」

さらにフィルの身体は消えて言っている。
もう、腰元まで肉体が消えてしまっている。

「最後だから、自分の口で言いますね。ノアさん、俺はあなたのことが……大好きでした」

「！！」

嫌です……こんな悲しい告白なんて嫌です。
私だって、フィルのことが好きになったのに……

私のために命まで投げ出してくれる人なのに……
フィルのために、私は何も出来ないんですか。

これじゃ、マスターが助かっても、私は大切な人を失ってしまいます。

どうしたら……どうしたら良いんですか！！

『絆がない限り、俺は消滅してしまう』

あの言葉がもし、本当なら……

「さよなら……俺の大好きな……ノアさん……」

フィルの身体が完全に消えてしまう。
もう、これしかないです！！

「フィル！！」

「ノアさん……んんっ！！」

私は、フィルの唇にキスをした。
私の気持ち……どうか伝わって！！

次の瞬間、フィルの身体が光り出し、フィルの身体が再生され、完全に元の身体に戻っていた。

「絆……出来ましたね。私との間に……」

「どうして……ノアさんはクロスさんのことを……」

「フィル……私のために自分の命をかけてまで、やってくれる人を

好きにならないわけ……ないです」

今まで、私は恋を本当の意味でしらなかった。
こうして、私のために自分の存在をかけてしてくれる人なんて、いままで現れなかった。

だけど、こうして自分の存在を失ってまでしてくれた。
そんなフィルに私はいつの間にか、心が惹かれてしまった。

フィルのことを思うと、どこか胸が苦しくなる。
そして、同時に温かい気持ちになれる。

「ノアさん……」

「さっきの告白の返事です。私も……フィルのことが大好きですよ」

「本当に……良いんですか。俺で？」

「フィル、私は嫌いな人にキスをする女の子じゃありませんよ。大好きだからこそ、自分との間に絆を作ったんですから……」

「……まさか！！」

「……私とフィルとの間に、ユニゾンのラインをつなげたんです」

もう、マスターとのユニゾンは出来なくなってしまいましたが、で

も、後悔はしていない。
自分の大切な人を助けられたから……

「……ごめんなさい。結局俺は大切な物を奪ってしまった……」

「そんな風に思わないでください。私は後悔なんかしてないですから。フィルが……大好きな人が消えなかったんですから」

「ノアさん……」

「今の私は9歳です。正直、向こうの私みたいに、スタイルとか良くないですけど……」

「関係ないですよ。ノアさんはノアさんですから。俺は、年齢とかで人を好きにはなりませんから……」

「……ありがとうです。フィル……」

フィルの気持ちが嬉しくて、私はフィルの胸に飛び込んでいた。

「ノアさん……」

「お願いです……ノアって、呼び捨てで呼んでください。今はフィルの方が年上なんですから……」

「ノア……」

「フィル……」

私とフィルは、お互いに瞳を閉じ……

そして吸い込まれるように……

優しい……そして温かいキスをした。

＊　　＊　　＊

1年後

次元漂流者という形になってしまった俺は、管理局で保護を受けることになり、その後見人にクイントさんとゲンヤさんが引き受けてくれることになった。

そして二人の強いすすめで、俺は嘱託魔導師になり、今は管理局の寮に住んでいる。

今日もナカジマ家にお邪魔して、ノアとこうして過ごしていた。

「はい、フィル。あーんしてください♪」

「ノア、ここでしなきゃ……駄目か？」

「駄目ですよ。みんなの前でしてほしいんです」

ここはナカジマ家で、クイントさんもスバルもギンガも見てるんだぞ。

ゲンヤさんはニヤニヤしていて、助ける気は全く０。

「それとも……やっぱり、私なんかじゃ嫌ですよね」

「だぁっ！！　分かった。分かったよ。こっぱずかしいけど、大好きなノアのためだ。……いいよ」

「えへへ♪　それじゃあーんですよ」

俺はポテトサラダをノアに食べさせてもらう。

「どうですか」

「美味しいよ。ちょっと……照れくさいけどね」

「良かったです。これ、私が作ったんですよ」

「ノアが？」

「はい、フィルに喜んで欲しくて、母さんに教わったんです」

なんかすごく嬉しい。

自分のために、手料理を作ってくれたことが……

「ノア……ありがとう。すごく…美味しかった」

「フィル……」

俺とノアがキスをしようとしたとき……

「あのね。ここ、一応私の家なのよ。二人でいちゃつくなら、フィル君の家に行ってくれるかな」

「「あっ……」」

「まったく……でも、ノア、本当に良い子をゲットしたわね。こんな子滅多に見つからないわよ。自分のために命をかけてくれるなんてね」

「はい♪」

1年前の事件のことは、クイントさんにも全部話している。

そこで俺が未来から来たことも話している。

「ノア、フィル君が浮気しないように、ちゃんと繋ぎ止めておきなさいね」

「クイントさん、そんなことしなくても俺はノアのことが……好きですから」

「フィル……」

「あらら、これはご馳走様。これだったら心配ないかな」

そんな感じで今日もノアと一緒に楽しく過ごした。
考えてみれば、この世界に来て俺は変わったと思う。

今までは自分を犠牲にしてもと言う考えだったけど、好きな人が出来たら、その考えはしなくなった。
今はノアと……大好きな人と一緒に生きていきたい。

それが今の俺の気持ちだ。

＊　　＊　　＊

6年後

俺とノアはあれからもずっと一緒にいた。
俺は嘱託魔導師から執務官になり、今ではフェイトさんと一緒に難事件を解決している。

かつて、自分の上司だった人と同期なるなんて、ちょっと不思議な気もするが、こういうのもありだろう。

そしてノアは俺の大切なパートナーとして、公私ともにいてくれる。
ノアも俺をサポートしてくれるため、捜査官から執務官に転向してくれた。

クロス君はノアとユニゾン出来なくなってしまったため、俺がインテリジェントデバイスを作って、それを使っている。

本当はノアを返してあげたかったけど……
それを言ったら……

「フィル、そんなに私と一緒なのが嫌なんですか！！」

ノアに滅茶苦茶怒られてしまい、この話題は二度としないことにした。
考えてみれば、ノアは俺を生かすために自分とのラインを繋いでくれたんだ。

こんなことを言うのは、ノアに対する侮辱以外の何者でもないからな。

＊　　＊　　＊

「フィル……気持ちいいです」

「ノアはこうして髪をすくのが好きなんだな……」

「だって、好きな人に触れられると、気持ちいいんですよ……」

「俺も……こうやってノアに触れていると、気持ちが安らぐ」

「えへへ♪」

俺たちはベッドに座って、まったりと過ごしていた。

こうして、ノアの髪に触れると、目を細めて甘えてくる。

俺もそんなノアの顔を見るのが好きで、ついいっぱい触れてしまう。

「フィル……もうすぐ、0時ですね」

「そうだな……」

そう、今日はノアの１６歳の誕生日だ。
俺たちが付き合ってから、あることを決めた。

それは、お互いを求めるのはノアが１６歳になってからにしようということだった。
最もそれ以外のことは、全部しているんだけどね。

ボーンボーンボーン

柱時計が０時を知らせる。

「これで……これで私は１６歳になりましたね」

「ああ、おめでとうノア」

「ありがとうです。フィル」

「これ、受け取ってくれるかな」

フィルが私にくれたのは、小さな箱。

「これは……？」

「開けてみてくれるかな」

フィルに言われて、箱を開けてみると、そこには……

「……綺麗な指輪です」

ブリリアンカットを施されたダイヤの指輪だった。

「これ……もしかして」

「ああ、16歳になったから正式に……プロポーズをさせてもらう。ノア、俺と……一緒になって欲しい」

「やっと……やっと言ってくれましたね。この6年の間、ずっと不安だったんですよ。フィルってすごくもてるから、他の女の子と一緒になるんじゃないかって……」

「俺が愛してるのは、ノアだけだから……不安にさせて……ごめん」

俺は泣いているノアをギュッと抱きしめ、ノアが泣きやむまでずっとこうしていた。

「フィル……これからはずっと一緒なんですね」

「ああ、ノアが俺を嫌いにならない限りはな……」

「それだったら、ずっと一緒です。だって……」

ノアは俺にキスをし、それは息が続く限り何度も繰り返して……

「……私はフィルのこと……愛してますから……」

「ノア……」

ノアの言葉に、今度は俺からノアにキスをし、さっきよりも激しく求め、そのキスが終わった後は、お互いの間に銀色の糸でつながっているほどだった。

「抱いてください……この不安を消してください……」

ノアは全ての衣類を脱ぎ去る。

月明かりに照らされたノアの身体は、神秘的な美しさがあった。

この数年でノアは女性らしい体つきになり、正直理性を保つのがきつくなっていたのだ。

はっきり言って、シグナムさんやフェイトさんよりもスタイルは……いい。

「ノア……もう、止められないからな」

「止めないでください……ここで止められる方が……悲しいです」

俺も衣類を全て脱ぎ去り、ノアをベッドに押し倒し……

「あ……ん……」

ノアの形の良い胸を何度も揉みし抱く。

「フィル……私、初めてですから……その……やさしく……して欲しいです」

「ああ、俺も愛する人に嫌な想いをさせたくない。優しく……するよ」

俺は何度もノアの身体に触れ、ノアの身体の準備を整えた。

「もう……いいですよ。きてください……」

「ああ……ノア、愛してるよ」

「私も……愛してます。フィル……」

月明かりが照らす中……

俺とノアは、一つになり……

その度にベッドは何度もきしみ……

それは、一度ではなく、何度も繰り返され……

俺たちの愛の行為は、夜中過ぎまで何度も繰り返された。

＊　　＊　　＊

「……う……ん……朝ですね」

「おはよう……ノア。目が覚めたんだな……」

私が目を覚ますと、横にはフィルが座っている。

そっか……

昨日、あれからずっと何度もフィルと求め合って……

「ノア、本当に……可愛かった。何度も求めたくなるくらいに……」

「ば、ばかぁ……でも、そう言われると嬉しいです」

きっと、今の私の顔は真っ赤になっているに違いない。

でも、嬉しい気持ちでいっぱいです。

愛する人と一つになれたんですから……

「フィル、私にはいっぱいしても良いですけど、浮気……しないで

ください ね」

「その気はないよ。だって、こんなに素敵な彼女がいるんだからな」

「だったら、もう一回してくれますか……」

「望むなら……何度でもな」

また、私はフィルと一つになるため、ベッドでお互いの身体を求め合う。

フィルがこうして私のことを愛してくれるのが、すごく嬉しい。

きっと、もう私達は離れられないと思う。

最も、私はそんな気は更々無いです。

フィル、私って自分が思ったより、嫉妬深いですからね。

覚悟してくださいね♪

＊　　＊　　＊

4年後

「フィル、今日は何しましょうか？」

「そうだな、今日はサンダーでクラナガンに買い物でも行ってみるか」

「良いですね。丁度私も買いたい服とかがありますし」

「服だけなら……良いんだけどな。クラナガンにいくと、その……色っぽい下着とかも買うし……」

俺とノアは、この世界でもはやてさんが造った機動六課に参加し、一緒にＪＳ事件を解決した。

その後俺たちは、またフリーの執務官になり、一緒に働いていた。

そして、六課が解散した後、正式に籍を入れ、今は俺のマンションに二人で過ごしていた。

本当は１６歳のあの時に結婚したかったんだけど、クアットロのことがあったから、それが終わってからと言うことにしたのだ。

「でも、フィルも私のランジェリー姿を見て、興奮したいでしょう♪」

「ば、馬鹿！！　何言ってるんだよ」

「えへへ♪　でも、フィルは理性を解放すると、本当けだものです。だから、そんなけだものさんを、さらに興奮させちゃうんです♪」

こうやって、ノアは俺を良くからかう。
だけど、俺もノアのそんな姿は見てると、うれしくなる。
未来では決して見られなかったノアの本当の姿だから……

「……覚悟しろよ。今日は絶対寝かさないからな」

「望むところですよ。いっぱい……いっぱい、してくださいね」

クロスさんを失い、心からの笑顔を失ったノア。

だけど、クロスさんが助かり、それを回避することが出来た。

そして、俺もノアに自分の気持ちを伝えることが出来、ノアもそれを受け入れてくれた。

そんなノアの優しさは、俺にとってかけがえのない物になっていた。

ノアがいてくれる限り、俺も強くなれるし、優しくもなれる。

人は一人では、生きていけないから……

だから、俺たちは二人でいる。

愛する人と……共に……

# SPECIAL PROGRAM vol.3 if ending ノア（終）

SPECIAL THANKS

今回はカガヤ先生のノアちゃんの物語になります。

今回のコンセプトは、9歳のノアにどうやって17歳のフィルとの甘い話にするかでした。そのため大分設定の方を変えさせていただきました。もし、カガヤ先生の原作通りのままですと、どうやってもくっつけるのは無理だと思いましたので……

※この小説でのノアの設定

名前：ノア・ナカジマ
性別：女
年齢：9歳

元々クロスのユニゾンデバイスだったが、フィルを消滅させないため、ノアが自分の意志でフィルとのラインを繋いでしまい、今はフィルのデバイスとなっている。

# ＳＰＥＣＩＡＬ　ＰＲＯＧＲＡＭ　ｖｏｌ．４　ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ハヅキ

今回の話は、ラモン先生作品『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～』より、ハヅキ＝ロックウェルさんのｉｆ　ｅｎｄｉｎｇになります。

「ねぇ、ハヤト。今日はクラナガンに遊びに行く？」

「それは良いけどよ。今日はヴァイス陸曹だってバイク使ってるぞ」

いつもなら、ヴァイス陸曹からバイクを借りるのだが、今日はあの人も使う用があって借りることが出来ない。

「そうね……」

「それだったら、俺のサンダーを使うといい」

「「フィル！！」」

「あんた、いつの間に！？」

「いつの間には無いだろ。ハヤトとお前がロビーでいちゃいちゃしていて、俺がいたのに気がつかなかっただけだろうが……」

フィルがため息をつきながら、そう答える。

そう言えば、あれだけいたスタッフがいつの間にかあたし達だけになっていた。

「あれ？　いつの間にいなくなってたんだ？」

「いつの間にじゃないだろう。ったく……ハヤト、お前らが付き合っているのは良いけど、その周りにいる奴らはいつも砂糖吐いてるんだぞ……」

「ま、マジで……？」

「大マジだ……これ以上お前らがいちゃついてるのを見てるのは、こっちも辛いんだ。せっかくの休みだ。サンダー貸してやるから、二人でどっかに行ってこい！！」

そう言ってフィルは、サンダーのキーをあたしに投げてよこしてくれた。

「おっと……」

「ティア、ロードサンダーはお前なら動かすことが出来るから、後は好きにしろ」

「ありがとう、フィル♪」

「ちょっと待て！！　なんで俺じゃ駄目なんだ！！」

ハヤトがフィルにロードサンダーを自分にも運転させろっていってるけど、それは無理だ。
その理由はいたって簡単。

ロードサンダーは、戦闘用バイクのため高性能のＡＩが搭載されている。

そのＡＩが自分で認めた人でないと、エンジンすらかけることが出来ない。
今のところ、フィル以外だとあたししか認められていない。

＊　　＊　　＊

「まったく、以前も言ったろうが、サンダーは俺かティア以外は認めていないから、運転するのはあきらめろって……」

「いやだぁぁぁぁ！！　俺も運転したい！！　運転したい！！」

ハヤトがあんまりにも駄々をこねているから、少しきついお説教をしようとしたとき……
ドキュンと、俺とハヤトの間を音速の魔力弾が通過していった。

いまのって、どう見てもインビジブル・シューターだよな……

「……え、えっと……」

「テ、ティア……ナ？」

「あんまり駄々こねてるんじゃないわよ。ハヤト……」

振り返ると、そこにはクロスミラージュを構え、とっても良い笑顔をしたティアの姿だった。
でも、目は全く笑っていない。

「は、はい！！　すんませんでした！！」

ハヤトもティアの目が笑っていないのが分かったのだろう。
すぐに直立不動の状態になり、敬礼までかましている。

「まったく……時間がないんだから、早く行きましょう」

そう言って、ティアはハヤトの腕に抱きつき……

「うおっ！！　こ、これは……ティアナの胸が……もろに！！」

「ば、馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ！！　ほらさっさと行く

！！」

ああは言ってるが、ティアはハヤトから離れようとはしなかった。
むしろ、さらに抱きついて自分の胸を押しつけているみたいだった。

ハヤトとティアは、腕を組んだまま格納庫に行ってしまった。

「まったく……ティアもハヤトも本当にバカップルだよな……」

《マスター、羨ましいんですか？》

「いや……あの二人は未来では結ばれなかったからな」

《そう……でしたね》

ハヤトは何とかディレトを倒したんだけど、その時の傷が深く結局ティアの胸の中で死んでいったんだ。
ティアのあの悲しみは今でも忘れない。

決戦前せっかく二人の気持ちがつながったのに、あんな形で大切な人を失ってしまったんだから……

そして、この時代では二人が幸せになってくれた。
それだけでも俺が頑張った甲斐はあった。

《……これで後は、マスターにも素敵な人が出来てくれたら、何も

言うことは何も言うことはないですね》

「俺か？　それは無いだろう。何より俺を好きになってくれる人がいないだろうし……」

《はぁ……駄目ですね。これは……》

プリムはため息をつき声になってしまった。

俺、何かおかしいことを言ったのか？

＊　　＊　　＊

「ハヤト……」

最近、ハヤトと話をする機会が無くてとても寂しい。

ハヤトは最近ティアナと恋仲になり、いつもティアナと一緒に行動している。

今までは「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と甘えてくれてたのに……

でも、ハヤトが心から幸せになってくれているのなら、我慢しなくてはな。

フィルからの話は聞いている。

私も含め、本来ならスカリエッティに殺されてしまっている。
それを食い止めるために、彼は未来から来て、一緒に戦った。
そして、フィルがいた世界では結ばれなかったハヤトとティアナが一緒になった。

「頭では分かってるのだが……寂しい物だな」

でも、いつまでも落ち込んではいけない。
愛しい弟の幸せを守ることこそ、姉として出来ることなのだからな。

ハヤトの事を考えていたら、少し疲れ気味のフィルが食堂で座って食事をしていた。
フィルのことは少し前から気になっていたので、ちょっと話しかけようとしたとき……

《マスター……お願いですから、少しは休んでくださいよ》

「休んでいるんだけどな……」

プリムとフィルが会話をしているのを聞いていると、改めてフィルが無茶ばかりしているのが分かる。
昔から彼は、自分のためよりも他人のために優先してしまう傾向がある。

今も、プリムがその事でフィルに怒鳴りつけている。

《そんなことを言って！！　こないだだって、ハヤトさんとティアナさんのクロスハートとクロスミラージュのフルメンテを寝ないで、ぶっ通しでやっていたではありませんか！！》

「……それは」

《こんな事ばかりしていたら、本当にマスターの身体が持ちませんよ！！》

確かにプリムの言うとおりだ。
どんな人間だって、休憩も無しで持つわけがない。

「それは分かってるさ。だけど、俺が出来ることはそれくらいだし、何より……」

「俺は……みんなを守りたいから……」

《マスター……》

結局私はフィルに声をかけることが出来ず、そのままフィルが去っ

ていくのを見つめていた。

「フィル……君の考えは確かに立派だ。だが……」

あのままにしておいたら、高町一尉の二の舞になってしまう。

「少し……話してみるとするか」

後日、私はフィルに声をかけ、訓練が終わった後、疲労回復をしてもらおうと、特製料理を振る舞うことにした。
フィルは最近食事の方も固形ブロックを食べていて、ろくな食事をしていなかった。
その証拠に、私の料理をまるで、スバルが食べる時みたいにがついている。
普段のフィルならそんなことは無いのだがな……

「なぁ……フィル」

「何ですか？」

「最近の君は、どこか無理をしすぎていないか。高町一尉から聞い

たが、訓練以外にもオーバーワークをしていると……」

これは彼女に限った事じゃない。
六課メンバー殆どに聞いても、同じような答えが返ってきた。
それだけ今の彼は無理をしすぎている。

「……そんなつもりは無いんですけどね」

こんなことを言っているが、彼の顔色は健康な状態ではない。
フェイクシルエットで誤魔化しているけれど、そんなのは私には通じない。

「……だったら、私を倒してみろ」

「ハヅキさん？」

「無理をしてないというなら、私と互角に戦えるはずだ。さぁ、ついてこい！！」

今の彼には言葉で言っても聞かないだろう。
だから、身体で分かってもらう！！

＊　　＊　　＊

「はぁ……はぁ……」

「どうした。これでお終いか……」

俺はハヅキさんに無理矢理模擬戦を申し込まれ、訓練場に来て模擬戦をしたが、俺のどんな攻撃もハヅキさんに見切られてしまい、攻撃を当てることが出来ない。

ブラストシューターも、ブラストブレイザーも、そして最後の切り札である、ワープを使ってのゼロ距離スターライトブレイカーも発動地点を予測されてしまい、逆にファングバスターをたたき込まれてしまった。

「くっ……まだ……まだ、戦えます……ぐぅぅ……」

「無理だな……普段の君ならゼロ距離スターライトブレイカーを決めることが出来たかもしれない。だが、今の君はワープアウトの時、ほんの僅かだが、魔力が漏れてしまってそれを隠せないでいるから、私に感知されてしまう。そんな状態では何度やっても同じだ」

確かにワープアウトの時、フェイクシルエットに回す魔力が、ほんの僅かにぶれてしまい、気配を完全に隠せないでいた。
だけど、それでもなのはさんクラスの相手でもなければ気づかないほどの物だ。
それを感知するなんて……

「それだけ、君は疲れ切ってしまってるんだ。そんな状態の君に負けるほど私は弱くない！！」

「ハヅキさん……」

「フィル、君は未来であんな事があったから、何でも自分がという考えになってしまう。だけど、それでは君が潰れてしまい、結果的に周りに迷惑をかけてしまうぞ」

「！！」

ハヅキさんの言うとおりだ。
無理して倒れたりなんかしたら、その方がみんなに迷惑をかけてしまう。
俺は……そんなことを忘れてしまっていた……

「フィル、君の性格から言って、誰かに頼るというのは難しいかもしれない。だけど、私の前くらいでは、弱さを見せても良いのだぞ」

「ハヅキさん……」

「そのくらいの度量はあるつもりだ。遠慮無く頼るが良い」

ハヅキさんの言葉に、どこか重い物が消えていく気がした。
今まではどこか全部自分でやらなくてはと思っていた。
こうやって言ってくれる人もいなかった。

「……それでは、お言葉に甘えさせてもらいます。ハヅキさん」

「うむ、遠慮は無用だぞ」

こうしてこの日を境に、俺は何か困ったことがあったら、ハヅキさんに色々相談をすることにした。

＊　　＊　　＊

「ねぇ、ハヤト」

「ん？　なんだ」

「最近、フィル、ピリピリした雰囲気が消えたと思わない？」

この1週間、フィルは変わったと思う。
今までは何でも自分がやっていたのだが、今のフィルは違う。
何か困ったことがあった場合は、ハヅキさんにかなりの割合で相談に行ったりしている。
こんなこと今までのフィルだったら無かったのに……

「まあな。俺もびっくりしてる。あのフィルがだぞ。今まで俺やティアナが、散々言ってきたのに……」

「ハヅキさん、何かしたのかな？　そうでなかったら、あの頑固者をああまで変えることは……」

「その可能性は大だな。フィルをあそこまで変えることが出来るのは、姉ちゃんくらいしか浮かばない」

「そうね……」

ハヅキさんなら、フィルのことをちゃんと分かってあげられると思う。
というか、フィルみたいに色々抱え込んでしまった人間には、ハヅキさんみたいな人が合うのかもしれない。

「それとな……最近の姉ちゃん、ちょっと変なんだ」

「変って？」

「あのな……俺が近くに行っても、前みたいに過剰な反応をしなくなった」

「嘘っ！！」

信じられない。あのハヤコンとも言えるくらい過剰な愛情を注いでいたハヅキさんが！！

「でも、フィルもちょっとおかしいのよね……」

「というと？」

「最近ね、ハヅキさんの名前を出すことが多いのよ……」

「おい、こりゃ……」

「かもしれないわね……」

フィルとハヅキさん、うまくいくといいわね。
特にフィルは、今まで辛い思いばかりだったから……

＊　　＊　　＊

「はぁ……一体私はどうしたのだろう？」

最近、フィルと良く会話をするようになり、よくフィルのことを考えるようになった。
フィルと話しているときはすごく楽しいのだが、時間になり別れるときになると、すごく寂しくなってしまう。

まるでハヤトと一緒にいる時みたいな……

「あれ、ハヅキちゃんじゃない？」

「シャマル女医……」

「どうしたの、今日は？」

「ああ……任務後の身体検査で少しな……」

「そっか……ハヅキちゃん。ちょっと時間あるかな？」

「別に……この後は何も予定は入っていないが？」

この後はしばらくの間、休暇になるから何も予定は入っていない。

「それじゃ、こっちの部屋で少しお話をしましょう」

私はシャマル女医に連れられて、隣の医務室に入った。
そこはシャマル女医が普段から使っている診察室だった。

「ハヅキちゃん、コーヒーが良いかしら、それとも紅茶？」

「それではコーヒーで……」

シャマル女医はコーヒーを二つ入れ、一つを私に渡してくれた。

「はい、どうぞ」

「すまぬな……」

良い香りだ。
やっぱりコーヒーは心が落ち着く。

「ねぇ、ハヅキちゃん、最近フィルと一緒にいることが多くなったわね」

「んっ？　ああ、確かに……な……」

ここ最近、私はフィルと一緒にいることが多い。
以前と違って、フィルもよく相談をしてくれるようになった。
無理しなくなったせいか、フィルの顔色も比べものにならないくらい良くなっている。

「フィルね、最近本当に良く笑うようになったわ。以前はどこか危なげな状態だったんだけど、今は心に余裕が出てきたって感じだわ」

「そっか……」

「そして、それはハヅキちゃんにも言えるのよね」

「私も……か？」

「ええ、以前はハヤト君が全てだったあなただけど、今は色んな人のことを見てあげられている。その代表格がフィルのなのよね」

「あっ……」

確かに、以前の私はハヤトが私の全てだった。
ティアナと一緒になったことは、確かに嬉しいのだが、それ以上にティアナに取られてしまったという感情が多かった。
でも、今はその感情は殆ど無い。

「ねぇ、ハヅキちゃん。フィルのことをどう思っている」

「どうって……私は……」

シャマル女医に言われて、フィルのことを思ってみる。
フィルと一緒に話していると、心が落ち着く。

今までロクな男がいなかったのもそうだが、フィルはどこか違っていた。

いつも仲間のことを考え、それ以上に自分のことを蔑ろにしてしまう。
そんな彼を見ていて、最初は手のかかる弟みたいな感じだったけど

……

「……話していると、心が落ち着く相手だな」

「そして、フィルがいなくなると、寂しくなったりする」

「……そうだな。それは感じる」

するとシャマル女医は、優しい笑みをし……

「それ……恋よ。ハヅキちゃん」

「恋……だと」

「ええ、今まで男性に関してあれだけ厳しいあなたが、フィルにだけには心を許している。そして、今の問答ではっきりしたわ」

「……恋…か」

今まで私は恋愛など関係ないと思っていたが、こんな風にハヤト以外の男性を意識するようになるとはな。

「ハヅキちゃん、一つだけいいかしら」

「何だ？」

「フィルのこと……決してふざけた答えを出して欲しくないの。あの子は未来でフェイトちゃんを失い、恋愛に関してすごく臆病になってしまっているの。これでもしあなたにまで何かあったら……」

そうだった。フィルは未来で仲間を目の前で失ったんだった。だから、彼は人一倍何かを失いたくはないと思うようになった。

でも……

「シャマル女医、その心配は無用だ。私を誰だと思っている。私はハヅキ＝ロックウェルだぞ。自分の大切な人くらい、私が守ってみせる。私の全力をかけてな！！」

今はっきりと分かった。

私はフィル・グリードのことを好きなんだ。

「そうだったわね。自分の気持ちに素直になったあなたは、誰よりも無敵だものね。ハヅキちゃん、フィルを……私の大切な弟をお願いね」

「ああ」

今はこの気持ちをフィルにきちんと伝えよう。
それが私が出来る誠意だからな。

＊　　＊　　＊

「確か、ここだよな」

訓練が終わった夜、俺はハヅキさんに呼び出され、訓練場に来ていた。
訓練が終わり、あとは部屋で寝るだけだったとき、突然メールが来て……

『話がある。今すぐ訓練場に来て欲しい。　　ハヅキ＝ロックウェル』

文は短かったが、ハヅキさんがわざわざメールをよこしたくらいだ。
大切な話があるんだろう。

そんなとき訓練室の扉が開き、ハヅキさんが入ってきた。

「済まなかったな。疲れているところを……」

「いえ……」

＊　　＊　　＊

正直さっきから心臓がドキドキしてしまっている。
こんなにドキドキしたことはないだろう。

フィルに気持ちを伝えるだけだというのに、こんなに緊張してしまっている。

「その……なんだ」

「？」

「大した話では……無いのだが」

どうして言えないのだ。
たった一言好きだと伝えるだけだというのに……

伝えるんだ。自分の気持ちを……
覚悟を決めろ！！

「わ、私は……」

「私は、ハヅキ＝ロックウェルは、フィル・グリードのことを愛している」

＊　　＊　　＊

「ハヅキ……さん」

突然の告白に驚きを隠せなかった。
俺は、あの日の模擬戦からハヅキさんのことがずっと気になっていた。

自分の間違いを正してくれたこともあったけど、それ以上にこの人に惹かれていく自分がいた。
厳しくも、だがそれ以上に俺の心を包み込んでくれる、大人の魅力

溢れるこの女性（ひと）に……

だけど……

「ハヅキさん……あなたの告白、すごく嬉しいです。俺もあなたのことが……大好きです。でも……」

俺に関わる大切な人は、みんな死んでしまう。

六課のみんなも、そしてフェイトさんも……

だから俺は大切な人を作れない。

その人を失うのをこれ以上見るのは……辛いから……

すると……

「フィル」

「あっ……」

ハヅキさんは、俺を自分の方へ抱き寄せ、ギュッと抱きしめて……

「大切な人達を失い、臆病になるのは分かる。だけど、私は死なない。自分の大切な人に悲しませたりはしない。だから……」

「せめて、私の前だけでも良いから甘えろ。私は全てを受け止める」

「俺は……人を好きになっても……良いんですか？」

「当たり前だ。誇りに思え。家族以外でこんなに男性を好きになったのは、君が初めてなのだからな」

俺は、ハヅキさんの胸の中で、声を殺して思い切り泣いた。

今までの悲しみを全部はき出すかのように……

「ハヅキさん……ありがとうございます。こんなに甘えさせてもらったのは、初めてです」

「ふふっ、これからはもっと甘えて良いのだぞ。私だけを見続けてくれるのならばな」

「……俺は、フィル・グリードは、ハヅキ＝ロックウェルさんのことを、誰よりも愛してます。これからもずっと……」

俺はハヅキさんの目をしっかりと見て、自分の気持ちを伝えた。

この人なら、全てを包み込んでくれる。

俺が最も欲しかった安らぎを与えてくれる。

そして、信じられる強さを持っている。

「フィル……」

「ハヅキさん……」

俺たちはお互いに瞳を閉じ……

ハヅキさんの頬に触れ、自分の方へ抱き寄せ……

その薄紅色の唇に……誓いのキスをした。

ハヅキさんはそんな俺を全て受け止めてくれ、キスが終わった後、しばらくの間ギュッと抱きしめてくれていた。

＊　　＊　　＊

「あ、あの……ハヅキさん？」

「何だ」

あれから俺たちは、ハヅキさんの部屋に行き、こうやってベッドに座って一緒に会話をしている。
ハヅキさんは以前、ハヤトにしていたようにスキンシップをしている。
今俺は、抱きしめられてハヅキさんの胸に埋もれている状態だ。

あの時、初めてハヅキさんにあったときは、ハヤトに対するスキンシップがものすごいと思っていた。
それをまさか自分が受ける側になるなんて、夢にも思わなかった。

「その……俺も男でして、そんなに胸を押しつけられたら……」

正直さっきから、ハヅキさんの巨乳の感触で理性を保つのにいっぱいいっぱいだ。
これ以上されたら、マジで暴走しかねない。

「……いいのだぞ」

「えっ……？」

「遠慮なんかしなくてもいい。言ったはずだ。私はフィルの全てを受け止めると」

一旦離れると、ハヅキさんは上着を脱ぎ、ブラも取り去り、その大きな胸を包み隠さず、俺に見せてくれる。

そして俺は、ハヅキさんを押し倒し……

「ハヅキさん……俺……」

「おいでフィル。お姉ちゃんがいっぱい甘やかしてやろう」

その言葉で俺の僅かに残っていた理性は完全に消え去った。
俺はハヅキさんにキスをし、俺のたどたどしい舌の動きを、彼女はリードしてくれ、それを何度も繰り返し、キスが終わると、お互いの唾液で作られた銀色の糸がつながっていた。

その後、俺はハヅキさんに思いっきり甘え、その大きな胸を何度も揉みし抱く。
そんな俺をハヅキさんは優しい笑みで包み込んでくれる。

そして……

「一つになろう……フィル」

ハヅキさんは初めてなのにリードしてくれ、俺はハヅキさんを何度も求め……

それをハヅキさんは全て受け止めてくれる。

そして俺もハヅキさんに少しでも自分の気持ちが伝わるように、何度も愛し……

その行為は、夜が明けるまで続いた。

＊　　＊　　＊

「……んっ……朝か」

結局俺は、あのままハヅキさんの部屋で朝を迎えてしまったのか。
俺は何度もハヅキさんを求めてしまい、そのまま眠ってしまったんだな。

でも、ハヅキさんは隣にいない。
すると、コーヒーの良い香りがしてきた。

「おはよう。よく眠れたか」

「おはようございます。はい……今までにないくらいぐっすりと」

こんなに安らいだ眠りは初めてだった。
きっとハヅキさんの……愛する人のそばにいたからだろう。

「そっか……」

ハヅキさんはコーヒーカップを渡してくれ、俺はそのコーヒーを口に含む。

「おいしいですね……これ」

「ああ、クラナガンにある有名なコーヒーショップの豆だからな。味は保証するさ」

「フィル」

「はい？」

「いつでも、私に甘えてくれ。そして抱え込むな。その方が私は辛いからな」

ハヅキさんの言葉に、俺は心の底から温かくなった。
こんな風に言ってくれる女性は今までいなかったから……

「そんなことを言ったら、遠慮なんかしませんからね」

この言葉が、後にとても後悔することになるとは、この時の俺には全く思っていなかった。

＊　　＊　　＊

「フィル、ほら、お姉ちゃんが食べさせてやるぞ」

ここは六課の食堂内、今は昼時で、満員御礼だ。
ここで、こんなシチュエーションをしろっていうのか！！

「あの……ここは六課の食堂ですよ」

「それがどうした。誰が見てようと良いではないか。それにハヤト達もしてるのだぞ」

ハヅキさんに言われて、ティア達の方を向いてみると、顔を真っ赤

にしながら、お互いにあーんをし合っているカップルの姿があった。
っていうか、あんたら何してくれてるんですか！！
これでは逃げ場がないだろうが！！

「それとも……私とこんな事をするのは……嫌か？」

ハヅキさんは上目遣いで俺を見つめている。
ええい、俺も男だ。覚悟を決めよう。

「お、お願いします……」

すると、ハヅキさんは太陽のような笑顔で、ランチをどんどん食べさせてくれた。
正直味なんて感じなかったけど、でも、ハヅキさんの笑顔を見ていると、それだけで嬉しくなる。

「おいしいか。今度また私が美味しい物をいっぱい作ってやるからな」

「はい、楽しみにしてますね。ハヅキさんの料理は美味しいですから」

「そうか。では早速今日の夜にでも作るとするか」

そう言ってハヅキさんはさらに上機嫌になり、デザートに至っては……

「んっ……んんんっ！！」

口移しでアイスを食べさせてくれるほどだった。

「美味しいか？　フィル」

「何か……甘いです。色々と……」

アイスの味より、ハヅキさんの味でいっぱいだった。

でも、これ以上ないくらい甘いデザートだな。

そんな俺たちとティア達を見ていたスタッフは、いつの間にかいなくなっている。

そして、はやてさんとフェイトさんがこっちに来て……

「あのな……あんたらな。ええかげんにしいや！！　あんたらがいちゃついていると、私らみんな砂糖と血を吐きまくってるんやで！！」

「正直……もう少し控えてくれると助かるんだけどね」

「「「「すみません　（すまん）」」」」

確かに、俺たちもハヤト達も人目を憚らずやり過ぎていた。
これでは、あの有名なＦＦＦ団が現れても不思議ではないな。

＊　　＊　　＊

3年後

「あれから……色んな事があったな」

六課が解散して一年後、俺は執務官試験を受け、資格も取得し、執務官として活動していく予定だったのだが、ハヅキさんが「お前は指揮官適正があるのだから、私が直々に鍛えてやる」と言って、半ば強引に指揮官補佐をすることになった。

確かに執務官資格を持っているから、指揮官試験を受ける資格はあるけど、まさか本当にこんな事になるとは思わなかった。

そして指揮官試験も何とか合格し、今ではハヅキさんのパートナーとして活動している。

「何を、考えていたのだ？」

ハヅキさんが後ろからギュッと抱きついてくる。
こんな事は、恋人同士になってから日常茶飯事だ。

仕事場でもこんな風に抱きついてくる物だから、正直理性を保つのがきつくて仕方がない。
しかも、ハヅキさんに物言う猛者は誰もいないから、ストッパーもいない。

最初は俺も仕事場では止めようと言ったのだが、その途端に大粒の涙で泣き出してしまい、仕事が完全にストップしてしまう始末だ。

その事が分かり、今では完全に公認状態で抱きつかれている。

「今までのことを……ね」

「そっか」

ハヅキさんとこうやっているとやっぱり心が安らぐ。
こんな風に甘えられるのは、ハヅキさんだけだから……

「愛してるぞフィル。まぁ……ハヤト、父さん、母さんに続いて４番目だがな」

「それでもいいですよ。家族以外では一番って事ですからね。いつか……俺もハヅキさんと家族になれば、一番になるんでしょう？」

ハヅキさんは一瞬驚いたが、すぐに……

「ふふっ、生意気を言うじゃないか。そうなりたいなら、私に甘えるのはやめて貰わなければな」

ハヅキさんがそう言うので、俺も少し意地悪で返し……

「本当に……いいんですか。それじゃ金輪際甘えないようにしますよ」

「本当に……意地悪だな。そんなことを望んでないことくらい……分かるだろ」

人に頼ることを教えてくれたハヅキさん……

そんな彼女は、俺の心の支えになってくれている。

甘えるだけでなく、いつかは本当に彼女を支えられるようになりたい。

愛すると言うことは、お互いを支え合ってこそ、本当の愛なのだから……

# ＳＰＥＣＩＡＬ　ＰＲＯＧＲＡＭ　ｖｏｌ．４　ｉｆ　ｅｎｄｉｎｇ　ハヅキ

ＳＰＥＣＩＡＬ　ＴＨＡＮＫＳ

今回はラモン先生のハヅキさんの物語です。

コンセプトは、今まではフィルは甘える女性というのは殆どいませんでしたので、甘えられる大人の女性との恋愛と言うことを書いてみました。

※この小説でのハヅキの設定

・名前……ハヅキ＝ロックウェル
・歳　……２４歳
・性別……女
・所属……地上本部陸士１０１部隊（ＪＳ事件後は六課に出向状態）
・階級……一等陸尉
・身長……１６８ｃｍ
・体重……５９ｋｇ
・３サイズ……９５／５６／９０
・性格……謹厳実直、ブラコン（病的）
・術式……ミッド式
・髪の色…金
・目の色…緑っぽい青（信号機の青）
・魔力色…真紅
・魔道師ランク……陸戦ＡＡＡ

・所持資格……バイク免許／普通自動車運転免許／指揮官免許

# Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ　Ｍｅｍｏｒｉｅｓ　～ｆｅａｔｕｒｉｎｇ　ＴＥＡＮＡ～

クリスマスＳＳ、未来ティアナ編になります。
不器用で似たもの同士のクリスマスイヴの物語を、お楽しみ頂ければ幸いです。

俺が過去の世界から帰還してから３ヶ月――

ＪＳ事件が無事解決し、機動六課も日々穏やかな日が続いていた。
あの事件以来、大きな犯罪は起こっていない……

俺とティアも、リオスさんとなのはさんからの地獄の訓練に明け暮れていた。
そんなある日、俺とティアははやてさんに呼び出されていた。

「クリスマス……パーティ……ですか？」

「せや、フィル達には馴染み無い風習やろうけど、地球では１２月の２４日と２５日はクリスマスといって、ちょっとしたお祭りがあるんや」

確かに、ミッドチルダにはそんな風習は存在していない。
地球の文化は、ある程度聞いたことがあったが、詳しくはないからな……

「そこで、２４日の夕方に、ささやかながら六課の食堂でパーティをやろうと思うんや」

「それは面白そうですね。地球の文化に触れる良い機会ですからね」

こんな機会は、地球の文化を知っている人がいるときでなければ出来ないことだ。
たまにはこういったイベントも良いと思う。

「そこでや！！　これだけの大人数の料理を食堂のスタッフだけじゃ、用意するのは難しいんや。普段の業務をしながら、さらに別にパーティ用の料理となると、負担も大きくなる」

「確かにそうですね」

六課の食堂は基本的に２４時間営業だ。
これは夜勤者が利用するため、どうしても夜も営業する必要がある。

「だから、パーティの料理を、私とフィル、そしてティアナの３人でしようと思うんや」

「「えええっ！！」」

「む、無茶ですよ！！　いくら何でも３人じゃ無理があります！！」

夜勤者が参加できないと考慮しても、参加予定人数は５０人は超える。
その料理を3人でこなすのはとても厳しいぞ。
せめてリオスさんがいてくれれば、話は変わってくるけど……

「大丈夫や、ティアナは知ってると思うけど、私もそこそこ料理は出来るし、フィルに至っては六課で1・2を争うほどの腕前や。ティアナもフィルの癖とかは熟知してるから、補佐としては最適やしな」

「そ、それは……そうかもしれませんが……」

確かにティアなら、俺の補佐として最高のパートナーになると思うが……

「それに、このパーティはリオス君となのはちゃんのお別れ会も兼ねてるんや。あの二人は今年いっぱいで管理局を辞めるしな……」

「「あっ……」」

そうだった。
リオスさんもなのはさんも、ＪＳ事件の時、リミットブレイクの多用で身体がボロボロになってしまった。
今俺とティアは、リオスさんとなのはさんから、それぞれの全てを受け取るために必死だった。

あの日……

病院で聞いた二人の想い……

その想いを無駄にしないためにも……

「だから、リオス君に頼むわけにはいかないんや……」

「ですね……」

「もし、引き受けてくれるなら、前日の２３日から２５日までを二人に休暇をあげるよ」

「「えっ……？」」

「準備期間もかかると思うし、それに……」

はやてさんは、ポンと俺とティアの肩に自分の手を乗せ……

「私からのせめてのクリスマスプレゼントや。パーティが終わった後は、二人で恋人の時間を過ごしてや……」

「「はやてさん……」」

はやてさんはとても優しい笑みでそう言ってくれた。
それは、まるで、母親が自分の子供に見せる慈しみの笑みだった。

「ありがとう……ございます。その仕事喜んで引き受けますね」

「あたしも、出来る限りお二人のサポートをします！！」

「ありがとうな。フィル、ティアナ。それじゃ前日の朝から料理の仕込みが大変になると思うけど、一緒に頑張ろうな」

「「はい！！」」

こうして、俺たち3人はクリスマスパーティに向けて、前日から徹夜で料理を作ることになった。
仕事に関しては、エリオ達が代わりにしてくれたので、支障は来さなかった。

ヴィータ副隊長に至っては……

『おめえとはやてが作る料理、期待してるからな。ギガうめえのを作ってくれよ！！』

完全にパーティの料理で頭がいっぱいで、仕事のことを言ったら……

『今のお前の仕事はうめえ飯を作ることだ。こっちのことは、あたしやなのはがしっかりするから、心配するんじゃねえよ！！』

そう言われ、隊員オフィスから追い出されてしまうほどだった。

「フィル、これは気合いを入れて作らなきゃね！！」

「ああ、みんなが俺たちの分まで頑張ってくれてるんだ。とびっきり美味しいのを作ってやるさ！！」

「期待しとるで、私もフィルの料理を楽しみにしてるんやで」

「はい、最高の料理を作りますよ！！」

みんながこれだけ期待してくれてるんだ。

俺もその期待にしっかりと応えなくちゃな！！

＊　　＊　　＊

「こんな所にいたんだね……フィル」

「リオスさん……」

今俺は、外に出て夜風に当たっている。
外の風が火照った身体をクールダウンしてくれて、とても気持ちいい。

実はパーティ中盤、俺はこっそり外に抜けだしていた。
あんまり騒がしいところが得意ではないのもあるんだけど……

「実は、リオスさん、あんまり騒がしいのは苦手ですか？」

「まあね。あんなに大人数だと少し気疲れしてしまうかな……」

「あはは……俺も似た様な物です」

「ふふっ……」

こんな風に話せるのもあと少ししかない……
リオスさんもなのはさんも、来年になってしまえば新しい人生の出発のため、殆ど六課での活動はしなくなる。

六課は４月に解散予定だけど、その前に色んな準備があるから、二人ともそのため来年の１月からは実質いないのと同じになる。

「でも、本当によかったよ……君が僕の全てを受け継いでくれて……」

「俺は……まだ、使いこなせていないですけどね」

リオスさんから託された力。
ストライク、グラスパー、ガーディアンの三つに加え、グロリアスに搭載していたフルドライブも、プリムに搭載したため、俺はその力を使いこなすため、リオスさんから特訓を受けていた。
特訓は苛烈な物だったけど、先日リオスさんから免許皆伝をもらい、何とか二人がいなくなる前に思いを受け取ることが出来た。

「大丈夫だよ。後は君がちゃんと使いこなすかだよ……」

「俺は、リオスさん達の想いに、応えられるんでしょうか……？」

この力は、ただの力ではない。
リオスさんの全てでもあり、なのはさんと二人が、俺とティアにそれぞれ託してくれた想いでもあるから……

「フィル、僕もなのはも、もう戦えなくなってしまったけど、でも、君とティアナが立派に僕たちの後を受け継いでくれる。きっと、なのはも同じ想いだと思うよ……だから……」

そう言って、リオスさんは俺の肩にそっと自分の手を置き……

「これからの未来は、君たちが護っていくんだ。頼んだよ、二代目『霜天の閃光』」

「リオスさん……はい！！」

俺は、改めてここに誓う。
二人から託された力と想い……

人々が笑っていられる未来を護るために使うことを！！

「さて、重い話はこのくらいにしよう。木陰で君のパートナーも待っているみたいだし」

リオスさんはいたずらっ子の表情をしながら、後ろの木陰を指さしていた。
すると、そこにはティアの姿があった。

「えっ……ティア！？」

「あ、あはは……なんか出るに出られなくなってしまって……」

「ということで、お邪魔虫は消えるとするね。後は二人で楽しんでね♪」

「り、リオスさん！！」

リオスさんは、そう言ってさっさと隊舎の中に入ってしまった。

「もう……リオスさんったら……」

「あ、あはは……何かあからさまにされると、反応に困るぞ……」

「本当よね……」

確かにティアと二人きりになるのは嬉しいけど、この事が後日、からかわれることになるのは嫌かな……。

でも、リオスさんはそんなことはしないか……。

「でも、やっと……二人きりの時間が出来たわね」

「そうだな……」

するとティアは、俺のそばに来て俺の肩により掛かってきた。
こうして、好きな人の温もりを感じているときはとても幸せを感じる。

「ねぇ……まだ25日にはなっていないわよね」

「ああ、まだ1時間は残っているな……」

時計を見ると午後11時を指していて、まだイブの時間は残されていた。

「だったら、あたし達の部屋にもどって……一緒に過ごさない？」

「だな……」

残った時間は、二人きりの……

恋人同士の時間だから……

＊　　＊　　＊

「さて、ケーキでも食べるとするか」

「ええ」

部屋に戻ったあたしたちは、さっそく明かりを消して、テーブルにケーキを用意しキャンドルに火を付ける。
用意したケーキは、事前にフィルが手作りでつくっておいたものだった。

「うん、美味しい♪　やっぱりフィルのケーキって何度食べても美味しいわね！！」

「そう言ってもらえると作った甲斐があるな」

本当、何度食べてもフィルが作るケーキは美味しいわね。
甘さもしつこくないし、何よりあたし好みの味なのよね。

それに……

「ねぇ……このケーキ……もしかして？」

「覚えていたか？」

「……当たり前でしょう」

そう、このケーキはあたしがフィルと出会って、一番最初に作ってくれたレアチーズケーキだった。
これを最初に食べたとき、あたしもスバルも本当にびっくりして、1ホールあったのに全部食べてしまったのだ。

「これを超えるケーキをどうしても作りたかったのに、最後まで超えられなかったのよね……」

「あはは、ティアは負けず嫌いだからな」

「ふふっ、確かにあの頃のあたしは躍起になって、これを超えたいと思っていたわよね」

あの頃、フィルに何度もレクチャーして貰って、何度も挑戦したんだけど、どうしてもこの味を作ることができなかった。
今もチャレンジしてるけど、未だにそれは出来ていない。

「でも、今はフィルがこうしてあたしのために作ってくれる。その方がずっと嬉しい」

「ティア……」

やっぱり大好きな人に作ってもらう方が何倍も美味しい。
例え自分で出来たとしても、こんな満足感は得られないと思うから……

「さてと、食べ終わったし、後片付けくらいはするわね」

「いいよ。俺がするって……」

ケーキを食べ終わって、後片付けをしようとしたとき、フィルが自分でしようとしていた。
せめて、これくらいしなきゃ悪いわよ……
でも……

「それだったら、俺が洗うからティアはそれを拭いてくれるかな」

「オーケー。任せておきなさい」

結局あたし達はこんな感じで、後かたづけを終えた二人はフロアに戻り、揃ってソファーに座り寄り添いながらまったりとしていた。
特に何かをするでもない。二人はただ寄り添いあい、お互いの暖かさを感じるだけ……

あたし達は普段は訓練漬けのため、どこかのアミューズメントパー

クに行くとかいうようなデートはほとんどなく、天気のいい日は芝生に二人で寝転がったり……などということがほとんどだ。

しかし二人とも言いたいことは一つだけ……

（二人でいる時間が大切だから……）

二人の時間……

それは暖かくも甘い……二人だけの宝物。

しかし……楽しい時間ほど短く感じるモノで……。

フィルはふと、部屋にある置き時計に目をやる。

時間は午前０時

「イブ……終わっちゃったね」

「でも、クリスマスは終わっていないだろ。だから……」

そう言って、フィルは棚から小さな箱を取り出し……

「えっと……メリークリスマス。ティア」

フィルはどこか照れくさそうな表情で、あたしにその箱を渡してくれた。

「……ありがとう……フィル」

ぶっきらぼうだけど、本当はどれだけあたしのことを思ってくれてるかは分かっている。

このプレゼントだって、必死で探してくれたに違いないから……

だからね……

「フィル……あたしもね……プレゼントがあるんだよ」

あたしもソファーの下に隠しておいた包みを取り出し、それをフィルに渡した。

「メリークリスマス……フィル」

「……ありがとうな。ティア」

フィルもまた笑顔で受け取ってくれた。
よかった……喜んでくれたみたいだ。

「開けても……いいか？」

「うん……その代わり、あたしも開けるから？」

「ああ……」

あたしとフィルは二人して、互いのプレゼントの包装を解く。
お互いのプレゼントは二つずつ。

あたし達は、まず大きい包みの包装を解いていった。
あたしが受け取ったフィルからのプレゼントは……

「これ……ライディング用のジャケットね」

「ああ、ツーリングが好きなティアにはもってこいだと思ってな……」

茶基調で、落ち着いたデザインのジャケットは着てみると、とてもしっくり来る物だった。

「ありがとう……とっても嬉しい」

そして、フィルも包みを開いていく。
フィルは何かに気がついた様子だった。

「……これ？」

あたしがフィルにプレゼントしたのは、黒いセーターとマフラー。

「……もしかして、手編みか？」

「うん。前からずっと編んでいたんだけど、こんな機会があって良かった。ずっと渡せないでいたから……」

フィルがセーターを自分の身体に合わせている。
袖の長さとかも問題ないみたいね。

「……大切にするよ。ティア」

「……うん、大切にしてね。頑張って編んだんだからね……」

そして、残るプレゼントはお互いに一つ……
偶然なのか、二人のプレゼントの大きさは殆ど同じ……

その包装を解いていく間、あたし達にはある種の予感があった。

（（もしかして……））

そして、包装紙はなくなり、品物が見えてきた。

「「あっ……」」

あたし達の漏れた声が重なっていた。
お互いの手元には……一本の腕時計。
銀色の落ち着いた意匠の時計だった。

両方とも、もちろん、男性用、女性用の違いはあるけど、それは明らかに同じデザイン。
それをみて、あたし達はすぐに顔を見合わせ……

「フィル……もしかして……？」

「……どうやら、そう、みたいだな……」

あたしとフィルはお互いのポケットからある物を取り出した。
それは……

お互いにプレゼントしたのと全く同じ腕時計……

この時計はもともとペアウオッチで売られていた物だ。
どうやら、あたしとフィルは同じペアウオッチを、お互いにプレゼントしてしまったみたいだ。
まさか、こんなところで気が合うとはね……

あたし達は呆然と顔を見合わせ……

そして……

最後は同時に吹き出し……

「「あっはははは！！」」

「何やってるんだろうな……俺たち」

「全くよね……」

二人は同じように、元々ポケットにしまっていた時計を再び戻し、
互いにプレゼントした時計を腕に嵌める。
そして、お互いに微笑んでいた。

「ありがとう……フィル。大事にするね」

「ありがとうな、ティア。大事にするよ」

お互いに腕に嵌めた時計を見せてから、あたし達は苦笑していた。

＊　　＊　　＊

「あのね……フィル」

「んっ？」

今日は、もう遅いからそろそろ寝ようとしたとき、ティアが……

「もっと……フィルのこと感じたいな」

「……いいのか？」

恋人同士がこうしていて、そんな言葉を言われる。

それが意味することは、限定される。

俺もいくら鈍感朴念仁とか言われていても、そのくらいは分かるつもりだ。
ティアも自分から誘ったが、顔は真っ赤になってモジモジしている。

「……うん、もうひとつだけプレゼントがあるんだ……」

「えっ……？」

そう言って、ティアはロングヘアだった髪を、リボンで結んでポニーテールにして……

「あたし自身も……プレゼントしたいから……」

ポニーテールにしたティアは、いつもの雰囲気とまた違った魅力に溢れていた。
それに可愛い恋人にここまで言われて何もしないなんて、アホがすることだ。

俺はティアを抱き上げる。
いわゆるお姫様抱っこだった。

「きゃっ！？」

「プレゼント……ありがたくもらうからな」

「うん……」

俺はティアを抱いたまま、寝室に足を踏み入れ……

「あっ……」

そのまま、ティアをベッドに下ろし、俺もティアの上に乗って……

「今日は……寝かさないからな」

「うん……いっぱい、いっぱい抱きしめてね」

俺はティアの唇を少し強引に奪う。

ティアもびっくりしていたけど、すぐに受け入れてくれ、互いの舌は何度も求め合い……

数分後……

キスが終わった後は、唾液で出来た銀の糸ができあがっていた。

「もっと……もっと感じたいよ」

「ああ、俺もだ……」

俺たちは互いに衣類を脱ぎ去り、その後は何度も互いの存在を確かめ合った。

唇

胸

身体

体温

それこそお互いの身体の全てを確かめ合うように求め合った。

そして……

「お願い……もう、きて……フィル」

聖なる夜……

俺たちは、何度も求め合い……

お互いの体温が感じる度に、お互いの存在が一つだと感じられ……

俺もティアも、その快感の海に溺れていった。

＊　　＊　　＊

「ねぇ……起きなさいよ。フィル」

なんか俺の身体が揺すられているようだが……

「んっ……」

「起きないわね……んもう……しょうがないわね」

すると、俺の頬になにか温かい感触が触れた。

ちゅっ

（えっ……）

この温かい感触、もしかして……
俺は慌てて起き出す。

「……やっと、起きたわね。お寝坊さん♪」

「……おはよう、ティア」

「おはよう、フィル」

やっぱり、あの感触はティアの……
そう思ったら顔が真っ赤になるのを感じた。

「……あたしだって恥ずかしかったんだからね。ばか……」

ティアも同じ事を思ったのか、やっぱり顔が真っ赤になっていた。

「でも、嬉しかった。こうして、好きな人に起こされるんだからな」

「……フィルのばか……でも、フィルが望むなら、いくらでもしてあげる……からね。だから……」

ティアは俺にぎゅっと抱きつき……

「これからもずっと一緒だからね。フィル♪」

俺の頬にキスをしてきた……

そして、俺も……

「ああ、ずっと、ずっと一緒だからな。ティア」

「うん♪」

聖なる夜……

俺たちは、お互いの絆をより深められた……

恋人同士の大切な一時……

クリスマスはそんな時間を与えてくれた……

これからもティアのことを大切にしていきたい。

二人のクリスマスは、これからもずっと続いていくのだから……

# Christmas Memories ~featuring NANOHA~

クリスマスストーリー　なのは編です。

ティアナ編では恋人同士のラブストーリーでしたが、なのは編では夫婦の愛をテーマにしてみました。

六課が解散して４年、わたしとフィルは管理局を引退して喫茶店を開いていた。
最初のころは、お客さんもまばらだったけど、今では連日大盛況の状態が続いている。

フィルのケーキは地球の翠屋の味を受け継いでいて、その味はミッドでもとても受けていた。
ヴィヴィオも休みの日は手伝ってくれて、その可愛らしい姿は一部のお客さんでファンが出来ているくらいです。

こうして親子３人、本当に幸せな日々を過ごしています。

今日も喫茶店『Ａｍｏｕｒ ｅｔｅｒｎｅｌ』は満員御礼です。
そんなある日、はやてちゃんから一つの話を持ちかけられました。

『なのはちゃん、フィル、久しぶりやな。元気にしとった？』

「はやてちゃん、本当に久しぶりだね。そっちも相変わらずだね」

「そうですね。八神家のみなさんもお変わりないようで何よりですよ」

実際通信の向こう側では、リインとアギトが食べ物の取り合いをしていて、その声がこちらにも聞こえてきていた。

『あのな……。実は、お店の予約をお願いしたいんやけど……』

「別に構わないけど、いつなの？」

『えっとな……2ヶ月後の12月24日なんやけど……』

「ちょっと待っててね。今調べてみるから……フィルお願い」

早速フィルは、店のパソコンを見て、予約状況を調べていた。
この一年、お店の方も軌道が乗り、いろんなパーティ客の予約が沢山入っている。

ピーク時だと、一月先まで埋まっていることもあるくらいだ。

「えっと……大丈夫ですよ。夕方でしたら空いてますよ」

『ほんまか！！　よかった……』

「でも、八神家の人数くらいでしたら、そんなに慌てなくても……」

確かに満員御礼だけど、時間帯によっては空いていることがある。

その時間に合わせれば、こんなに前から言わなくても……

『実はな……この日に久しぶりに旧六課メンバーを集めて、クリスマスパーティをやりたいと思っているんや』

「ええっ!?　それ本当なの、はやてちゃん!!」

『本当や。幸いミッドにはクリスマスという風習はないから、この日に合わせるのは苦労しなかったんや。みんなに声をかけてみたら、7割くらいは来てくれることになったよ』

「そうですか……みんなが……」

考えてみたら、わたしとフィルが管理局を引退してから、六課のみんなには久しく会っていない。
ティアナとか、フェイトちゃん達はよくお店に来てくれているけどね。

『というわけで、フィル、なのはちゃん。お店の貸し切りお願いできるかな?』

「任せてください。最高のおもてなしをさせて貰いますよ!!」

フィルが右腕の袖をまくって、自分の腕をパンと叩いてアピールしていた。
わたしもフィルに負けないように頑張らなきゃね。

『みんなを集めるのは任せておいてや。ほなら、またな……』

はやてちゃんから通信が切れると、わたしとフィルは早速スタッフを集めて、はやてちゃんからの話を話した。
ここのスタッフは、六課食堂のスタッフからスカウトしてきた人たちなので、管理局関係の話をしてもさほど問題はなかった。

たった一つだけ問題なのは、男性スタッフが殆どいないことくらいかな。
そんなことを考えていたら、フィルが話を始めていた。

「みんな、先ほど八神部隊長から店の予約が入った。みんなに話しておきたいことは、その日、旧六課メンバーを集めてパーティをすることになったからだ」

『おおっ！！』

スタッフから、「本当なの!?」とか様々な声が飛び交っていたが、フィルが一喝すると、静かになり、またフィルの方を注目する。

「何でも、地球の風習で12月24日はクリスマスという物があって、それで今回の企画になったらしい。クリスマスの詳しいことは、なのはに聞いてくれ。そこでだ、この日は早めに店をお終いにして、

パーティの準備にはいるから、みんなもそのつもりでいてくれ」

『はい！！』

「パーティの準備はわたしとフィルでするから、みんなは午前出勤で……」

これは、わたしとフィルが個人的に受けた物だから、スタッフのみんなに負担をかけるわけにはいかない。

わたしが当日の旨を言おうとしたとき……

「ちょっとまった！！」

「「えっ？」」

突然、スタッフの一人から待ったをかけられてしまった。

「フィル店長、なのはチーフ、水くさいことはいいっこなしですよ。お二人だけで５０人近くの用意は厳しいですよ」

「だけど、せっかくのパーティなんだから、みんなもそれなりの準備があるだろうし……」

「それは、お二人も同じでしょう。むしろ、お二人の方が色々やらなければならないと思いますよ」

「それに、お二人だけでこんな面白いことをするなんてずるいですよ。私達も参加させてください」

スタッフのみんなが、うんうんと頷いて今の言葉に同意していた。

「みんな……」

「……それじゃ、みんなお願いするね」

『おおっ！！』

こうして、当日は午前中でお店を閉めて、午後はみんなの協力で店全体の飾り付けと、５０人前の料理を用意することになった。
特に料理の方は、フィルが気合いを入れている物だから、スタッフもその熱気に当てられて、みんないつも以上の気合いが出ていた。

デザートはわたしと女性スタッフが中心となって、何とか５０人前を作ることができた。
最初はこれを二人でやろうと思っていたんだから、無茶にもほどがあったよね。

あとはみんながやってくるのは待つだけになった。
まず、お店にやってきたのは……

「おう、なのは、フィル。元気にやってたか」

「久しぶりだな。なのは、フィル」

「お久しぶりです、なのはちゃん、フィル」

はやてちゃんを筆頭に八神家のみんなだった。

「ひさしぶりやな。なのはちゃん、フィル。こうして直接会ったのは、1年ぶりくらいやな」

「そうですね。はやてさんは仕事柄中々時間が取れませんからね……」

「そうなんよ。フェイトちゃんやティアナからの通信で、なのはちゃん達のお店で美味しいケーキを食べたよって話を聞く度羨ましくてな。やっと、久しぶりにフィル達の料理を食べられるで」

「ふふっ、それじゃ今日はいっぱい食べていってね。はやてちゃん」

「今日は腕によりをかけて作りましたからね。例えスバルが3人いても大丈夫なくらいに……」

実際、今日の料理はいっぱい食べる人が多いから、かなりの量を作ってある。

予算も事前に参加者から受け取っているから、赤字になることもないし……

「それなら安心やな。ヴィータなんか昨日から楽しみにしていて、大好きなアイスも食べないできてるし」

「は、はやて！！　それは言わなくて良いだろ」

「「あはは！！」」

ヴィータちゃんはふくれっ面になって、そっぽ向いてしまった。
でも、本当にみんな変わっていないな。

「ったく……でもよ、フィル。久しぶりにうめぇ料理食わしてくれるんだろうな」

「それは任せてください。腕によりをかけて作りましたから」

「おう！！　そんじゃ、あたし達はそんまでみんなを待つとするか」

「そうやね。それじゃフィル、なのはちゃん。私は入り口で受付をしてるから、なんかあったら声をかけてや」

そう言って、はやてちゃん達は受付に行って、みんなを出迎える準備を始めた。

＊　　＊　　＊

「なのは、これから忙しくなるぞ。フェイトさんやティア達ももうすぐ来るからな」

「そうだね。フィル、これからが本番だね」

はやてさん達が来ただけで、この賑わいだ。
フェワードのみんなやフェイトさん達が来たら、もっと忙しくなる。
そんなことを考えていたら、また来客がやってきた。

「やっほー、フィル！！」

「あんたね……もう少し静かに入りなさいよ」

「お久しぶりです。なのはさん、フィルさん」

「お元気でしたか」

「ご無沙汰しています」

今度の来客はスターズとライトニングのフォワードのみんなだった。
ルーテシアに至っては、エリオと恋人つなぎで手を握っている。

あいつらも恋人同士になってからもう3年の月日が経っているからな。
すっかり人前でもいちゃつけるようになったか。

「おう、みんな久しぶりだな。といっても、スバルとティアは、よくうちの店を使ってくれてるから、そんなでもないか」

「確かにね。つい一月前にもコーヒーを飲みに来たしね」

「ええっ、ティア。ずるい自分だけ！！」

「ずるいって……あんたね。あたしだってたまの休暇で来ただけなんだから……」

「だけど、あたし本当に来る機会がないんだよ。いつも夜勤ばっかりだから、終わった後はいつもバタンキューだし……」

スバルの仕事、レスキューは夜間だろうと出動はかかる物だ。
しかもスバルは防災士長だから、部下も引き連れる責任もあるからなおさらだ。

「まあまあ、スバル。それだったら今日はわたしとフィルの料理をいっぱい食べていってね」

「はい！！　ありがとうございます。なのはさん」

「あんまり食べ過ぎて腹壊すなよ。スバル」

「ぶぅ……フィル、酷いよ」

「酷くないと思うわ。フィルの言っていることは的確だし」

「ティアまで……もう、いいもん！！　みんなの分まで全部食べてやる！！」

まったくスバルも相変わらずだよ。

でも、こうしてみんなが笑いあえるんだ。

本当に平和になったって、改めて思うよ。

俺がしてきたことは、決して無駄ではなかった。

＊　　＊　　＊

パーティが始まり、色んな所で盛り上がっていた。

ヴィータさんとスバルがデザートのアイスを取り合ったり……

ティアとフェイトさんが執務官の仕事のことで話し合ったり……

はやてさんはなのはと昔のことで懐かしんだり……

エリオはルーテシアに迫られて、タジタジになっているし……

本当、みんな変わっていないな。
なんか、少しだけ寂しい気持ちもあるけどな。

もう、みんなと一緒には戦えないから……

でも、その代わり今の俺は、こうしてみんなの安らぎの場所を作ることが大切な仕事なんだ。
みんなが笑って、楽しんでくれればそれが何よりの幸せだから……。

そして……

パーティも終盤になり……

はやてさんが壇上に上がって……

「さてと、みなさんパーティも終盤となりましたので、ここでプレゼント交換をしてみたいと思います。事前に各自に伝えてありましたので、プレゼントの方は用意していただいたと思います……」

事前にはやてさんから話を聞いていたので、みんなそれぞれプレゼントを持ち寄っている。

「それでは入り口で渡しました交換用のカード番号を見て、各自プレゼントを受け取ってください」

そして、俺が受け取ったプレゼントは……

「クッキーだな……」

「そうだね。誰のだろう？　手作りっぽいよね」

なのはの言うとおり、買ってきたという感じはない。
包み紙も可愛らしい物を使っているし、リボンもピンク色だ。

「あっ、それわたしが作ったやつですね」

「キャロ、これ、キャロが作った物だったんだ」

「はい、まさかフィルさんに当たるとは思ってませんでした。本職の方にはかないませんけど、一生懸命作ったんですよ」

キャロの言うとおり、このクッキーを見れば分かる。
早速一ついただいてみる。

「うん、甘さもほどよくて、とっても旨い」

「よかった。フィルさんに喜んでもらえて」

「キャロ、ありがとうな。んっ？　キャロが持っているその包み。もしかして？」

「はい！！　フィルさんのプレゼントですよ」

キャロが持っていたのは、俺が選んだケーキ用のヘラだった。
これは俺が普段から使っている物と同じで、とても使いやすい物だ。
クリームを塗るのに最適な長さをしていて、初心者でも扱いやすい。

「そっか……キャロ、それで美味しいケーキを作ってくれよ」

「はい！！　その時は是非フィルさん達に食べて貰いたいです！！」

「その時を楽しみにしてるよ。キャロ」

「それでは、エリオ君達が待っているので、この辺で失礼します」

キャロはエリオ達が待つテーブルに戻っていった。
ふと時計を見ると、午後９時を回っている。

そんなとき、フェイトさんが……

「なのは、フィル。そろそろヴィヴィオの所に行ってあげて……」

「フェイトちゃん……でも……」

フェイトさんの言うとおり、確かにこのパーティが終わったら、ヴィヴィオと3人でする約束をしている。

だけど、店をほったらかしていくわけには……

「大丈夫ですよ。お店の戸締まりとかは、私達スタッフがしておきますから、お二人はヴィヴィオちゃんの所に行ってあげてください！！」

「そうですよ。後のことは任せてお二人はさっさと行ってください！！」

「「さあ、さあ！！」」

「ちょ、ちょっと！？」

俺たちが抵抗しようとすると、マネージャーとフェイトさんが二人がかりで、俺となのはを外に追いやってしまった。

中に入ろうとしたら、フェイトさんがにっこりとゴーホームのサインをして、家に帰れと何度も合図をしている。

「ふぅ……これじゃ、今日は店には戻れないな」

「そうだね。マネージャーも最初からこのつもりだったから、きっと頑として中に入れてくれそうにないよ」

「……まったく、うちのスタッフは揃いもそろってお人好しばかりだよ」

普通なら、店長とチーフが抜けたらとってもまずいのだがな。

「フィル、せっかくのみんなの好意だし、家に戻って3人でクリスマスパーティの続きしよう」

「そうだな、なのは」

「うん♪」

すると、なのはが俺の右腕をとり、自分の腕を絡めてきて……

「なのは……」

「せっかくのイブだから……ね」

「だな……」

俺となのはは、家に帰り着くまでずっとこのまま歩き続けた。

＊　　＊　　＊

「おかえり！！　パパ、ママ！！」

「ただいまヴィヴィオ。ごめんね遅くなってしまって……」

「本当ならもっと早く帰りたかったんだけど……」

さすがにお店の責任者が、二人とも抜けてしまうのはかなりまずいんだけどね……

「大丈夫だよ。ちゃんとはやてさんから連絡は貰っているし、今日のことは前から知っていたんだもん。それに……」

「ママ達が遅く帰ってきてくれたから、お料理の方も間に合ったし」

そう言ってヴィヴィオの後ろを見てみると、テーブルには色んな料理が並んでいた。
コーンスープに鶏のもも肉の照り焼き、あとはサラダまである。

「えへへ♪　パパ達にはかなわないけど、わたしもちゃんとお料理はできるんだよ。今日は二人に食べて欲しくて頑張ったんだからね」

ヴィヴィオの指を見てみると、絆創膏が何枚も貼られていて、それがヴィヴィオの頑張りをすごく表していた。

「それじゃ、せっかくの料理が冷めないうちに一緒に食べようか」

「うん！！」

「そうだね」

「あとはこいつも……」

そう言ってフィルは自分が持っていた箱から何かを取り出す。
フィルが持っていた箱から出したのは、イチゴのクリスマスケーキだった。

「うわぁ……すごいね」

「美味しそう！！」

そのケーキは、イチゴの他にも色とりどりのフルーツが飾られていて、上には飴細工で作られた糸で作られた木とマジパンで作られた家とあと……

「これ……もしかしてわたしとヴィヴィオとフィル？」

そう……

ケーキの上に乗っていた人形は、わたし達3人を表していた。

「ああ、俺たち3人を表してみたんだ。これがなのはとヴィヴィオに贈るクリスマスプレゼントになるかな……」

「パパ……ありがとう。素敵なクリスマスプレゼントだよ！！」

「じゃ、わたしからもフィルとヴィヴィオにだね」

わたしも持っていたバックから、二人に贈るクリスマスプレゼントを取り出した。
わたしから贈るクリスマスプレゼントは――

「うわぁ、おそろいの手袋だ！！」

「なのは、これ……」

「うん、前からこっそり編んでいたんだ。二人にばれないように作るのに苦労したんだからね」

色は水色で統一してあるけど、それぞれの手袋には手の甲に当たるところにミッド文字で名前を刺繍してある。

「ママ、本当にありがとう!!　これ大切にするね!!」

「うん、ヴィヴィオ。それで手を冷やさないようにしてね」

「なのは、本当にありがとう……最高のクリスマスプレゼントだよ」

「わたしこそありがとう。このケーキ、あの忙しい中でよくこれだけの物を……」

正直言って、パーティ用の料理だけでも大変だったのに、その合間を縫って作ってくれたんだ。

「俺は……これくらいしか二人にしてあげられないからね」

そんなことないよ。

フィルのその優しさに、ヴィヴィオもわたしもどれだけ救われたか。

本当にありがとう、フィル。

「「「いたたきま～す！！」」」

わたし達は、ヴィヴィオが作ってくれた料理とフィルが作ってくれたケーキを食べながら、親子3人のクリスマスをいっぱい楽しんだ。

ヴィヴィオもフィルのケーキを食べるとき、口に入りきらない程にケーキを頬張り、口の周りにクリームをつけながら嬉しそうに笑っている。

「ほらヴィヴィオ、クリームが口の周りについてるよ」

そう言ってフィルがハンカチで口の周りを拭いてあげていた。

「えへへ、パパのケーキが美味しくてつい……」

「ったく……そんなに慌てなくても大丈夫だよ」

「はーい」

こうして、親子3人が一緒にいて笑いあえる一時が一番大好きだ。
わたしにとってヴィヴィオもフィルも大切な宝物なのだから――――

＊　　＊　　＊

「すぅ……すぅ……」

「ふふっ、ヴィヴィオ眠っちゃったね」

さっきまであんなにはしゃいでいたのに、今はこうして無垢な寝顔で眠っている。

「そういえば、さっきフィルから手紙を受け取っていたんだった」

夕食の時フィルから手紙を貰っていたんだけど、読む暇が無くてずっとポケットにしまったままだった。

今フィルは、ベランダで外の空気を吸っているから丁度良いかも……
早速わたしはフィルからの手紙を読んでみることにした。

『なのはへ……いつも上手く言えないけど、なのはの笑顔に俺は本当に救われた。今だから言うけど、俺は正直言って誰も好きにならないようにしていたんだ……』

えっ……？

どういう……ことなの？

『正確に言うと、誰かを好きになってしまうと、また俺のせいで失うんじゃないかってそればかりを考えていたんだ。実際ティアは俺のせいで死んでしまったんだから……』

違うよ。

プリムから聞いたけど、ティアナはそんなことは絶対思っていないよ。

『そして、こっちに戻ってきてみんなと一緒に戦って、なのはと一緒にヴィヴィオを助けて、全てが終わったとき、同時に俺の役目も終わったと思っていたんだ。でも……』

『あの日……なのはが俺に告白をしてくれたとき、そんな俺の殻を全部壊してくれた。【全部一人で抱え込まないで、わたしと一緒に幸せを見つけていこう】　なのはと初めて結ばれたときに言ってくれた言葉は今でも俺の心の支えになってる』

そうだよ……
フィルは一人で全部抱え込んじゃうから、だから少しでも良いから分けて欲しかった。
大好きな人がいつも心から笑っていて欲しかったから……

『俺は……そんななのはに何かしてあげられましたか？』

充分すぎるほどしてもらったよ。
フィルがいなかったら、わたしもヴィヴィオもこんなに幸せな日々は過ごせなかったんだから……

『なのはがいなかったら、俺はきっと……今でも一人だったから。だから……』

『ありがとう。そして、これからも俺の心の支えになってくれると嬉しいです。俺の大切なのはへ　　フィル・グリード』

わたしはもう涙を抑えられなかった。
この手紙はフィルの本当の気持ちが書かれている。

わたしも同じだよ。
フィルがいたからこそ、こんな風に温かい気持ちでいられるんだからね。

気付いたらわたしはベランダに向かって走っていた。

＊　　＊　　＊

「ふぅ……少し冷えるけど風が気持ちいいな」

少しお酒を飲み過ぎてしまったから、火照った身体をさますのには丁度良い。
今日は大分飲んでしまったからな。

そんなことを思っていたら、階段をパタパタと上がる音が聞こえてきた。

「はぁ……はぁ……」

「なのは？　どうしたんだい、そんなに息を切らせて……」

「フィル！！」

突然なのはが俺の背中からぎゅっと抱きしめてきて……

「……フィル、わたしも……わたしも同じだよ。フィルがいたからこそ、こんなに温かい気持ちになれたんだからね」

「なのは……そっか。手紙読んでくれたんだね」

「うん……フィルの気持ちがいっぱい伝わってきたよ。本当にたくさんね……」

「俺は、普段口下手だからあんな形にしかできなくて……ごめんね」

本当なら、ちゃんと言葉で伝えなきゃいけないんだけど、どうにも俺はこの手のことを伝えるのに緊張してしまう。

だから、少しでもなのはに伝えたくて手紙にしてみたんだ。

「いいよ。ジゴロみたいに口が上手い人より、不器用でも本音で言ってくれる方がずっと嬉しいから……」

なのはは俺の肩にコトンと自分の身体を預けてくる。

俺もなのはの温もりをもっと感じたくて、そっと自分の方へ抱き寄せた。

『ふふっ、どうやら二人とも幸せなようだね』

『心配して見に来たんだけど、大丈夫なようね。フィル』

「「えっ……？」」

ま、まさか、この声は……
そんなはずはない。二人はあの時に……

だけど、聞き間違えるわけがない。この声は……
俺となのはが後ろを振り向いてみると……

「お久しぶりだねフィル、そして……なのは」

「元気にしてたって、その様子だと大丈夫そうね」

「フェイトちゃん……」

「ティア……」

俺が、かつて愛したティアとフェイトさんがそこに立っていた。

「ティア……本当にティアなんだな」

「当たり前でしょう。まっ、確かにあたしやフェイトさんがここにいることは奇跡に近いんだけどね」

「クリスマスの奇跡とでも言うのかな。ほんの一時だけだけど、私達は二人に会いに来ることができたんだよ」

「そっか……」

理由なんかどうでも良い。
今ここに二人がいて、もう一度だけでも話をすることができる。
それだけで充分なんだ。

「なのは、フィル。私達はずっと向こうの世界で二人のことを見守っていたよ。特にフィルは未来から戻ってきて、ずっと一人きりだったから……」

「正直言って一緒にいられなかったことがどれだけ苦しかったか。本当なら一緒にいて支えてあげたかったんだけど……」

「ティアナ、あなた……」

「私もティアナと同じだよ。フィルに魔力は託したけど、でも最後まで一緒にはいてあげられなかったからね」

「フェイトさん……」

そんなことはない。
二人が色々支えてくれたからこそ、俺はこっちの世界で頑張って来られたんだ。

確かに今はなのはがいてくれる。
でも、二人が命までかけて託してくれた物があったからこそ、俺となのははこうしていられるんだ。

「なのは、フィルのこと絶対に離しちゃ駄目だからね。なのはのことをそこまで分かってくれるのって、フィルくらいなんだからね」

「にゃはは、大丈夫だよ。フィルが離れたいと言ったって、絶対に離れてあげないんだから！！」

「ふふっ、それを聞いて安心した。なのは、フィルといつまでも幸せにね」

「うん、ありがとうフェイトちゃん」

なのはとフェイトさんがあっちで二人だけの話をしている。
俺もティアと二人きりで話したかったから……

「ティア。こうしてもう一度会えるなんて夢にも思わなかった……」

「あたしもそうよ、フィル。でも、本当によかった。あんたちゃんと自分の幸せを掴んだのね」

「本当は……もう二度と好きな人を作らないつもりだったんだけどな……」

「フィル……」

「でも……俺は、なのはの優しさと心の強さに救われたんだ……」

きっとなのはに言われなかったら、今でも俺はティアのことを思い続けて生涯独り身だったと思う。

「もし、あたしのことで自分の幸せを犠牲にしてたら、引っぱたいてやるつもりだったけど、その心配はないみたいね」

「あはは……相変わらずだな、ティア」

「フィル、ちゃんと幸せになりなさいね。あたしやフェイトさんのことは気にしないで、あんたはなのはさんのことを愛しなさいよ」

「……ありがとうな。ティア」

俺は涙が出そうなのを必死でこらえていた。
今は泣くときではない。笑顔で二人に応えなきゃいけないんだ。
俺となのはは幸せに暮らしてますよって、伝えるためにも……

「フェイトちゃん……ティアナ！！　足が！！」

二人の全身が光り出し、両足が消えていき、それは上半身の方へ回っていた。

「……そろそろ、時間みたいね」

「そう……ですね」

二人は分かっていたみたいで、慌てる様子は全くなかった。
むしろ安心しきった表情で俺たちのことを見ていた。

「ティア、フェイトさん……」

「フィル、なのは……いつか二人の子どもができたら、また見に来るからね」

「そんときはあたしも一緒に来るからね」

「ああ……楽しみにしてる」

もう、二人に会うことはきっと無いと思う。
だけど、また奇跡が起こったら会えるかも知れないから……

「それじゃ、二人とも……」

「「あっ……」」

そして……

「「またね……」」

ティアとフェイトさんは、光と共に消えていった。

「……行っちゃったね」

「ああ……でも、また会えるさ。そんな気がする」

「そうだね……」

そうさ――――。

俺たちが心で願えば二人は俺たちの傍にいる。

「あっ……」

なのはがふと空を見上げると……

「雪だ……」

空から雪が降ってきて……

「ホワイトクリスマスだね。きっと……二人からの贈り物かな」

「だな。フェイトさんとティアからの……な……」

地球ではクリスマスに雪が降るとホワイトクリスマスと言う。
そして、そこで一緒に過ごせた男女は、永遠に幸せになれるということをなのはから聞いたことがあった。

「フィル……」

「んっ？」

なのはは、そっと俺の方に身体を預けて……

「ずっと……ずっと一緒だからね」

「ああ……なのはが嫌だと言っても離れないからな」

「そんなこと言わないよ。だって、フィルのことを世界で誰よりも愛してるんだもん♪」

純真無垢なのは――

そんななのはに、俺は何度も救われた――

そして、最愛の愛娘ヴィヴィオも――――

これからも俺たち3人には色んな困難が待っていると思う。

だけど、一人じゃない――――

3人でなら、きっと幸せになれるから――――

# 逆襲のカルテット　前編（前書き）

今回は神崎はやて先生の御厚意により、自分と夏菜のための記念作品を書いていただき本当にありがとうございました。

この作品が、少しでも皆様の励ましになっていただけたら、とても嬉しいです。

※今回の話は、かなりの長編な為、前編・後編に分けさせていただきます。

# 逆襲のカルテット　前編

その物語は、もう終わったはずだった。

正義が悪を下す。

その形を以って、事件は終焉を迎えた筈だった。

しかし、全てが幕を閉じたわけではなかった。

燻った火種は、既に舞台を降りた筈の女によって破られる。

「くくく……拘置所の警備がこんなに手薄なんて……時空を股にかける組織が、こんなことでいいのかしら」

女の足元には、気絶した男が数名。

その誰もが、ある一定の制服を身に纏っていた。

言うまでもなく、彼らを昏倒させたのはこの女であり、今も恍惚とした顔で尚、流れるような手つきで叩いているコンソールが齎す結果は、彼女がこの世界へ贈る復讐の贈り物、その前菜に過ぎない。

そう、これは前菜。この後には、彼女が用意したとっておきの絶望――――メインディッシュが待ち構えている。

「まあ、でもこんなだからこそ、こうして私をこんな目に遭わせた連中に一泡吹かせることが出来るんですもの。感謝したいくらいで

すわねぇ。そして、貴方にも」

そう言って、女はコンソールを叩きながら、後ろに控えていた男を見やる。

その男もまた地面に転がっている男達と同じ制服を身に纏っていたが、相違点が2つ。

未だ意識を保っていることと、その顔が醜い恐怖に彩られていることだ。

「貴方がいなかったら、脱獄なんてはっきり言って無理でしたものぉ。で・も、もう貴方も用済み。後は私がやりますから、大人しく見ていてくださいな？」

言い、女は手を翳す。

そこから光が生まれ、それが収まったときには――――断末魔の悲鳴を上げる間もなく、男の身体は髪の毛1つ残らず消し飛んでいた。

力を確かめるように手の握り開きを繰り返す女の腕で、壊れてスパークした何らかの機器が、鈍い爆発音を発する。

「あらあら、まだ実戦使用には程遠そうですわねぇ……本当、使えない子」

吐き捨て、女は腕に着いたそれを乱暴に引っぺがし、地面に叩きつける。

その衝撃に、それはバラバラに砕け散り、ついにスパークも上げぬ

ガラクタと成り果てた。

再びコンソールに向き直ると、驚異的スピードでウインドウを処理していく女。

「さあ。精々足掻いて踊り狂うがいいわぁ。哀れなお人形さん達……？」

とどめ、とばかりにコンソールのＥＮＴＥＲキーが押されると、ＳＥＱＵＥＮＣＥ　ＳＴＡＲＴの文字が浮かび上がる。

女はそれを目ににやりとほくそ笑むと、その場から忽然と姿を消した。

○アルフォンス×夏菜　カップル成立記念作品！

「はあああぁぁぁぁっ！」

「やあああぁぁぁぁっ！」

威勢のいい声が蒼天に木霊し、金属同士がぶつかり合う音が辺りに響く。

ここは、機動六課訓練場。

解散間近となった機動六課だったが、こうして精の出る模擬戦は進路を決め旅立っていくフォワードや隊長陣達の士気を上げ、最後の時へ向けて白熱している。

今日は、その六課での師弟対決。

リオス＝コーネルドと、フィル＝グリードの一戦である。

「フリーズシューター！」

「ブラストシュート！」

空色の魔力弾と、白銀の魔力弾がぶつかり合い相殺される。

そしてその爆発から生まれた爆煙を、空色の魔力弾がドーナツ状に

貫いて飛来する！

「ぐっ、ラウンドシールドリフレクター！」

咄嗟の攻撃をシールドを張り回避するフィル。
魔力弾を防御した後、突如として攻撃が止んだ。
目に見えない敵の姿に、警戒を解かずに魔力を探る。

そして――――――。

「……見つけた！　そこっ！」

抜き打ちで砲撃を放つ。

トンネルを掘削するように円形に爆煙を貫き、果たしてそこにあったのは――――――。

「お見事」

球形をした空色の粒子の膜に身を包んだ、リオスの姿だった。

漸く敵を見つけることが出来た安堵に、フィルの警戒が僅かに緩む。

その時――――――。

「けど、まだ甘い」

？彼の背後から？、そう評価を下す声が耳に届く。

冷たい感覚に瞠目するが、そこからのフィルの反応は見事だった。

素早くスキルの1つであるワープを起動させ、声の主の背後に回りこむ。

（獲った！）

魔力球を素早く形成する。これなら、目の前の彼がその手に持つ剣を振りぬくより、自分の砲撃が彼を飲み込む方が早い。

そう考えた、その時だった。

「甘い、甘いよ」

「僕がその程度の小細工しか用意していないとでも？」

「これじゃあ、まだまだ免許皆伝は出来ないね」

周囲、四方八方様々な方向から口々に聞こえる声に、フィルの中で動揺が広がる。

そんな彼の目の前で、杖を突きつけられていたリオスがニヤリと笑い、掻き消えた。

「分、身……！？」

愕然とするフィルの耳に、聞こえてくる複数の声。

『『『『Ａｓｔｒａｌ　ｂｒｅａｋｅｒ．』』』』

渦巻く暴風のような魔力に、それまで晴れることのなかった爆煙が

一瞬の内に吹き飛ばされていく。

その中から現れたのは、フィル＝グリードという1人を取り囲み、空色の魔力球をチャージしたランチャーを携えた、4人のリオスの姿だった。

「……終わりだね」

内1人がそう呟き、それが契機となって一斉にトリガーを引く。

空色の極大砲撃が、一斉にフィルへ向けて放たれる。

常人では、まず昏倒は免れぬ絶対零度。

しかし――――――。

「なっ！？」

リオスの顔が、初めて驚愕に彩られた。

格好の的であると思っていたフィルの姿は砲撃を受けると、リオスの分身同様幻影の如く掻き消える。

そして――――――。

「はあああぁぁぁぁぁっ！」

「上っ……！？」

太陽を背に急降下してきたフィルが、リオスの分身の1人を、反応

させる暇も与えぬ間に蹴り飛ばし、残りの分身を予め用意しておいた魔力球での砲撃に沈める。

「貴方が本物ですか……」

自分が蹴り上げ、消滅しなかった1人へ向け、とどめとばかりにこれまで以上の規模の魔力球を発生させる。

今度こそ終わった。

そう確信し、今度こそフィルは安堵する。

それをリオスは、蹴られた部位を庇うようにして、痛々しく睨んだ。

「ブラストブレイザアアァーーーーッ！」

集束砲であるスターライトブレイカーでは、リオスにリカバリーの隙を与えてしまう。

今使える手札の中で、最高の一撃をフィルは見舞った。

今度こそ勝った！　フィルの中で、それが確信へと変わる。

しかし。

「チェックメイト。だよね？」

「え……？」

背後から再び聞こえる声に、再び凍りついた。

と同時に、目の前にいた筈のリオスの姿が砲撃に飲み込まれ、？完全に消滅した？。

「あれも、分身……！？」

言いながら、おそるおそる振り返るフィルの目に、リオスの微笑みが映る。

首筋には、基本の長剣型である、ベーシックモードの彼のデバイス、グロリアスが突きつけられていた。

「……模擬戦終了。お疲れ様、フィル」

「ありがとうございました」

グロリアスを降ろし、微笑みからにっこりと笑ってそう告げるリオスに、フィルは完全に向き直り、一礼した。

と、そこへ。

「フィーーーールーーーーーーー！」

「リオスくーん！　お茶にしよーーーー！」

眼下から2つの叫び声が響く。

下を見下ろせば、茶の長髪をサイドテールを揺らす高町なのはと、金のウェーブがかった髪を靡かせたヒヨリ＝R＝マクスウェルがこちらへ手を振っていた。

と、そこへタイミングよく鳴り響く腹の虫。リオスからだった。

「はぅ……お腹空いちゃったね。行こっか、フィル」

「はい」

2人はゆっくりと垂直に降下していき、着地と同時にバリアジャケットを解いて、なのは、ヒヨリと共に食堂へ向かった。

☆★☆★☆★☆

「で、フィル。最近ヒヨリさんとはどう？」

食堂へ着くと、リオス、フィルの2人は席にに着いて、なのはとヒヨリがキッチンへ、作り置きしておいたケーキを取りに行った。

上記は、席についてお茶を一口啜ったリオスが発した台詞である。

「どう、ですか。一応、式を挙げる方向で調整してますけど、日取りやらお金やらがなかなか……」

「そっか。てことは、付き合い自体は順調なんだね。それならよかった」

そう言って、再び紅茶のカップを口へ持っていきながら、リオスは微笑んだ。

フィルの上司として師匠として、リオスはこれまでも数々の助言をしてきた。

それは戦闘訓練や、単純な局員としての能力だけではない。

もっと根本的なもの――――人間的側面についても教えられる限り教えてきた。

だが、そうして涼しい顔をして紅茶を飲んでいる彼とて、未だ２０近くの若造に過ぎない。故に――――。

「そういうリオスさんはどうなんです？　なのはさんとは」

「ぶっ！？」

――――弟子に、先を越されることもある。

盛大に紅茶を吹いてしまいそうになったのをなんとか堪えると、リオスの顔は忽ち真っ赤になっていった。

「な、なななななのはとなんて、べ、べべべ、別に、何にも……！！」

「……あったんですね」

「……ぁ、ぅ……」

その？あった？時というのを思い出したのか、リオスは顔を真っ赤にしたまま俯いてしまう。

今のところ、リオスが弟子であるフィルに明らかに劣っているもの。
それが、恋愛。

別に恋愛において落ち度があるとか、相手を困らせているとか、そういった迷惑なものではない。

彼の場合、羞恥心が邪魔をして踏み込むべき時に踏み込めないでいる。それが、相手であるなのはとの仲を進展させることを妨げているのだ。

更にはなのは自身もまたこの件に限っては奥手なのも手伝って、おかげで付き合い始めて早1年経つというのに、未だに一番進んでいることと言えばキス程度のものであった。

それ以上踏み込んだお付き合いなど、本人曰く「僕を悶死させる気っ!!??」だ、そうである。

「ふぃ、フィルはよく平気だよね。達観しているというか、何と言うか。やっぱり、未来から来た所為なのかな……」

「そこはあまり関係ないと思うんですけど……」

「そう、なのかなぁ……？」

苦笑しつつ、腕を組んで本格的に悩むリオスを目の前にしていると、向かい側からなのはとヒヨリが歩いてくるのが見えた。

「お待たせー！」

「今日はケーキだよー♪」

そう言ってケーキを配り、自分の席につくなのはとヒヨリ。

それぞれ男同士、女同士が向かい合うようにして、リオスの傍にはなのは、フィルの傍にはヒヨリがそれぞれ隣り合うようにして座った。

「ささ。今日のは私が作ったから、遠慮なく食べて♪」

「えぇ！？　大丈夫なの、ヒヨリちゃん？」

「あはは。大丈夫だよ、なのは。僕も監督したし」

「そ、そうなんだ……」

ヒヨリが作ったと聞き目に見えて動揺するなのはに、リオスの補足が入る。

それに顔をひくつかせて苦笑いするなのはだが、とりあえずは安心してケーキに口をつけた。

リオスが監督したなら大丈夫だろう。そう信じて。

果たして、その味は――――――。

「……ほっ。よかった、美味しいよー！」

「な、何も泣かなくても……」

「むぅ……失礼ね」

「ぐすっ……ごめん。でも、美味しいんだもん～～～～！」

あまりの感動に思わずほろりと涙を流してしまうなのはに、リオスは苦笑し、ヒヨリは頬を膨らませて拗ねる。

だが、なのはの反応も致し方ないこと。

ヒヨリの料理の腕は壊滅的であることはもはや有名なことであり、これまでも幾人かがその被害に遭っているのだ。

最近ではフィルら周囲の人々の特訓もあってほんの少しずつでも改善に向かっているものの、未だその腕は壊滅的と呼ばれる領域を抜け出てはいない。

唯一、彼女の料理を「美味しい」と言って食べてくれた奇跡の人物がいたにはいたが――――戦いの中で彼は力を使い果たし、逝った。

その後彼女は暫くの間、心を開かなかった。

表向きは明るかった。

――――否、明るい？ふり？をしていた。

だが、心の底ではどこか距離を置いていた。

数年間、誰1人にも恋に靡かなかったのがその証だろう。

しかし、それをフィルが変えた。

凍った心を、彼が解き放った。

それ以来、２人は恋人として支え合い、今日までやってきた。

更に暫く後には、結婚式も控えている。

いずれ始まるであろう2人の生活に、ヒヨリの料理に慣れる、もしくは彼女の料理を矯正することは急務であった。

直すことと慣れること。同時に進行を試みてはいるが、なかなか難しいものだとフィルがこの前零していたのを、リオスは未だ覚えている。

「まあまあ。俺は、ヒヨリの料理は美味しいと思うぞ？」

「……本当？」

「本当だって。もう何回でもおかわりできるよ」

「ふふっ。ありがと、フィルッ♪」

「……バカップルだなぁ、相変わらず」

公然とイチャつき始めるフィルとヒヨリに、リオスが変わらぬ苦笑で返しながら紅茶を啜る。

ケーキも食べてみたが、なのはが言うようになかなかに上手く出来ていた。

いつもこう作れればいいのに、と不思議に思っていると、横からなのはがケーキの乗ったフォークを差し出してくる。

彼女の顔を見上げれば、頬は真っ赤に染まっていた。

「なのは？」

「あの……その……。よ、よかったら……食べて？」

「う、うん……」

と、こちらはこちらで、まるでフィルとヒヨリの様子に触発されたかのように、段々と甘い空気を醸し出していく。

食堂の一角は、まるで侵入した瞬間胃もたれを引き起こしたと錯覚するような、甘い空間と化していた。

周りの席に座っていた局員が、「ああ、また始まったか」や、「くそぅ、俺だってその内……」などと口々に呟きながら、いそいそとその場を後にしていく。

おかげで４人の周囲は、まるで断崖絶壁でも存在しているかの如く、尽く空席となった。

そうして、決して何人たりとも寄りつくことの許されない空間がいつまでも展開されるかと思われた、その時。

『お呼び出し申し上げます。高町なのは』

「にゃ？」

『リオス＝コーネルド』

「はぇ？」

『フィル＝グリード』

「ん？」

『ヒヨリ＝Ｒ＝マクスウェル』

「あら？」

『以上４名、部隊長室までお越し下さいますよう、お願い申し上げます』

ピンポンパンポン、という馴染みのメロディと共に放送が終わり、４人は浮ついた空気から我に返る。

「何だろう？」

「さあ？」

「とりあえず、行ってみよう」

４人は示し合わせると、席を立つ。

「やれやれ……やっと行ったか」

ぱたぱたと音を立てて足音が遠ざかっていくと、周囲の局員達はどっと疲れた様子で机に突っ伏した。

☆★☆★☆★☆

「何だ、皆揃ってたんだ」

部屋に入ると、そこにはシグナムをはじめとするヴォルケンリッター、部隊長であり彼女らの主でもある八神はやて、そしてスターズ、ライトニング両フォワードのメンバーと、ライトニング隊長のフェイト。

機動六課前線メンバー、その全員が揃っていた。

しかし、その表情は険しい。

「何か……あったんですか？」

状況を察したフィルの問いに、はやてが頷きつつ口を開く。

「まずは、これ見てや」

言い、はやてはモニターを操作する。

すると空中に、大画面のスクリーンが現れた。

映っているのは、開け放たれた機械的な牢。

「これは……」

「そう。スカリエッティも投獄されとる、刑務所の特殊牢や。ここ

には、スカリエッティの戦闘機人、その４番目が収容されとった。
でもな、その戦闘機人、４番のクアットロが……」

「まさか……！」

「その、まさかや」

「そんなっ……」

戦闘機人が４番目、クアットロ。

天才科学者であり、先のＪ・Ｓ事件の主犯格である重犯罪者、スカリエッティが目的遂行のために作り出した１２体の人型生命体、その１人である。

スカリエッティ自身に最も似た思考を以って行動する彼女の思考は一言で言えば、残虐非道。
他人の不幸を嘲笑い、幸福を壊すことを何よりの悦びとする、最悪の思考の持ち主。

それが今、脱走したというのだ。

しかもその彼女は――――六課にとって、ある意味主犯のスカリエッティよりも凶悪な人物だった。

「あいつが……脱獄!?」

「でも、どうやって!?　軌道拘置所は、そうそう簡単に抜け出せる場所じゃないのに……」

「協力者がいたようだ。最後に奴がいたと思われる管制室に、身分証明証が落ちていた」

４人が驚愕すると、シグナムがそう補足する。

するとそれに答えるようにはやてが画面を切り替え、モニターにや焼け焦げ、煤のついた身分証明証が映し出された。

黒くない部分から、辛うじて読み取ることが出来る。

どうやら名は、ジム＝デルトリン。管理局准将と書かれていた。

「管理局、上層部……」

「たぶん、クアットロが個人的に取引を持ちかけたんやろな。その内容はよく解らへんけど……まあ、決していいものとは言えへんやろうな」

以前彼女が掌握していた太古のロストロギア、聖王のゆりかご。

その時もあれほどまで甚大な被害を管理局へ齎したのだ。今回、それと同等、もしくはそれ以上のことが起こったとしても、不思議ではない。

だからこそ、戦慄する。

彼女をこのまま野放しにはしておけないと、心が警鐘を鳴らしているのだ。

「だろうね……。それで、はやて。僕達を呼んだのは、そのクアットロをもう1度捕まえるためかな？」

「さすがリオス君、話が早くて助かるわ。今、クロノ提督が彼女の行方を捜してくれてる。それで見つかり次第、私達も出動を――――」

そうてきぱきと、はやてが命令を下しかける。

すると――――――。

『はぁい、機動六課の皆様？』

聞き覚えのある――――――否、決して忘れることは叶わぬだろう声が、部屋に響く。

『お久しぶりですぅ。元気にしていらっしゃいましたぁ？　あははははははっ！』

「……クアットロッ！」

嘲笑に、フィルは憎しみに手をきつく握り締めた。

『フフフッ、驚いてるようですわねぇ……』

暗く、モニターの光のみが照らす室内で、クアットロがそう身体を抱きしめながらそう恍惚と呟く。

彼女の目の前にあるモニターには今、彼女を驚愕の面持ちで見つめる？仇？共の姿がある。

本当に残虐なのはむしろ彼女であったが、この場合仇という表現が

一番堂に入るものであろう。

彼女を捕らえ、刑務所送りにしたのは紛れもない、彼女ら機動六課なのだから。

「クアットロ、どうして貴様がっ！」

『ふふふ。お久しぶりですぅ、フィル＝グリード？　そんなに怖い顔をしなくても。私はずぅっと、貴方に会いたかったんですよぉ？』

クアットロはそうして、仇敵であるはずの男をうっとりと熱の入った視線で見つめる。

しかしそれは決して、純粋なる愛に非ず。

言うなれば、妄執。

復讐という狂気に囚われた、歪んだモノでしかない。

『ずっと……ずぅっと……この時を待っていたんですから。貴方達に復讐する、その時をっ……！』

「逆恨みもいいところだね、４番目。そんなに死刑になりたいのなら、そうなるようにしてあげてもいいんだよ？」

『はったりはよしなさいな、霜天の閃光。いくら貴方でも、そんな権限があるとは思えませんわぁ。そ・れ・に、万が一にも私が捕まることなんて、ありえませんものぉ』

自信たっぷりに、リオスの挑発を嘲笑で返すクアットロ。

「大した自信やな。もうスカリエッティもおらん。アンタだけで、私達全員を相手に出来るとでも？」

『ふふふっ、私が相手するなんて誰が言いましたぁ？』

「何？」

訝しげに眉を顰めるフィルの目の前で、モニターに新たなウインドウが表示される。

そこに映っていたのは、１つの機械的な球状の物体。

「何、これ……！？」

『これは、爆弾です』

「ば、爆弾っ！？」

フェイトが愕然と呟いた声にすら、クアットロは反応し答を返す。

吃驚して叫びを挙げたスバルの声に、更に彼女は愉しげに笑った。

『そうですよぉ？　これを、クラナガンのとある場所に仕掛けましたぁ。……この前の事件の時、ドクターの玩具は殆ど失われてしまいましたけれど、これだけは残っていた。運命を感じませんかぁ？　はははははっ！』

「ふざけるなっ！」

怒りに任せてフィルが叫ぶ。

彼の怒りの根源を理解している六課のメンバーは息を呑むが、当の向けられる本人は、相も変わらぬ冷たい微笑みを浮かべるのみ。

『ああん、こわーい。でもぉ、貴方達には今度こそ止めることは出来ない。今度こそ、貴方達は本当の絶望を味わうことになる。……でも、ワンサイドゲームだとつまらないですわねぇ……。1つだけ情報を差し上げます』

言って、クアットロはニヤリと一層冷たく笑い、尚告げた。

『明日の正午。爆弾が爆発するのは、明日の正午ですぅ。さあ、機動六課の皆さん。止められるものなら止めてみなさいな？　あははははははははっ！』

背筋をぞくりと走り抜ける程冷たい嘲笑を残し、クアットロを映していたモニターは消滅した。

「フィル……」

ヒヨリは、気遣うようにフィルを見つめた。

彼は、この時代の人間ではない。

件の女、クアットロによって齎された、滅亡の未来。

それを救うべく、彼は未来の世界から女神の力を借りて過去へ渡った。

自分のいた未来の世界を、過去から変え、救いを齎すために。

或いは、それはある種の傲慢なのかもしれない。
しかし彼の体験してきた?未来?とはあまりにも残酷で――――
地獄だった。

そんな未来を変えようと過去へ渡った彼を、それをよしとした女神を、誰が責められようか。

そうして彼は過去へ渡り、見事絶望に満ちた未来を修正して見せた。

しかし、今ここに、再び危機が齎されようとしている。
他ならぬ、クアットロの手によって。

気に触れぬわけがないと、そう憂慮して伺った彼の顔に浮かんでいたのはやはり、怒りと苦しみだった。

「……はやてさん。すぐに捜索を開始しましょう」

恐らくは怒りを無理矢理沈め、絞り出したであろう彼の言葉が痛々しい。

また思いつめてはいないかと、心配になるのをぐっと堪え、はやては頷いた。

彼女は部隊長。
人命を預かっている身ならば、ここで私情を用いては事を仕損じてしまう。

「……せやな。総員、戦闘配備準備。ロングアーチは広域探索にて、爆弾の在り処を解析して!」

『了解！』

素早くはやてがモニターを複数開き命を下し、それに、部屋やモニターから複数の返答が重なって、前線メンバーもまた、フィルのことを気遣いつつも、出撃準備のために部屋を後にしていく。

そうして皆が退室しかけた、その時。

「フィル。大丈夫？」

「リオスさん……」

フィルの目の前には、気遣う視線を向けるリオスとヒヨリの姿があった。

「大丈夫です」

「大丈夫、じゃないでしょ？　そんな顔してる」

「解っているとは思うけど、今回のことも君1人の責任じゃない。皆で協力して、頑張ろう？」

「……はい」

ヒヨリとリオスの言葉に、フィルはぎこちなく笑った。

「……さあ、僕らも探しに行こうか。？お宝？を、さ」

そう、悪戯っぽく皮肉るリオスの言葉にくすりと、今度こそ本心から笑ったフィルは、責任という重圧が圧し掛かった心が幾分軽くな

るのを感じ、胸を撫でた。

☆★☆★☆★☆

「うーん、見つからないな……」

「そうね……」

数時間後。

ペアを組んで捜索に出ていたフィルとヒヨリの2人は、飛行を止めて海上に滞空する。

六課の前線メンバーは皆方々に散り、彼ら2人と同様に、連携して爆弾の捜索にあたっている。

フォワード4人はライトニングはシグナム、スターズはヴィータが陣頭指揮にあたり、なのははリオスと共に出た。

フェイトは何やら協力者にあてがあるとかで、別方向へ飛び立っていった。

「しかし……まさか今この時も、自分達の命に関わる事態が刻一刻と進んでいるなんて、想像すらしてないんだろうな」

そう呟いて、フィルは飛行ミッドチルダの町並みを見つめる。

いつもどおりの、平和な筈の日常。

それが一瞬にして脆くも崩れ去ったら、この町の人々はどんな思いを抱くのだろうか。

絶望に泣き叫ぶ、そんな混沌とした世界が訪れるのか。

自分が来た、未来の世界のように――――――。

「――――――……ル！　フィル！」

「えっ！？　ど、どうしたんだ、ヒヨリ！？」

いつの間にか考え込んでいたらしく、気付けばすぐ目と鼻の先の位置でヒヨリが呼んでいて、フィルは吃驚して素っ頓狂な声を上げた。

目の前の彼女はその頬を膨らませて、不貞腐れる。

「もう。さっきから呼んでるのに、全然反応ないんだから」

「ああ、すまん。ちょっと考え事をしてた」

「むぅ。……まあ、いいわ。許してあげる」

「それはどうも」

笑い合って、そろそろ別の区画も探してみようか、ということで合意する2人。

その時だった。

「……ん？」

不意にフィルが、何もない海面の方も向く。

本当に何もない、開けた場所。

だがフィルは、確かにその場所に？あるもの？を感じ取った。

微弱な――――本当に気を集中していなければ気付くことも出来ないだろう、魔力の乱れを。

「……なあ、ヒヨリ」

「何かしら？」

「爆弾って、当然遠隔操作だよな？」

「そりゃ……そうでしょうね。あのクアットロが、まさか自分がミッドチルダを壊滅させられるほどの爆弾のすぐ近くにいるとは思えないし。きっと、遠隔操作か、時限式の爆弾を使っている、はず……」

フィルの問いに、当前の如く並べ立てていたヒヨリの顔つきが変わった。

彼女も至ったのだ。フィルと同じ1つの？結論？に。

「まさか……」

「ああ。……たぶん、そのまさかだ」

頷き、下を見下ろすフィルに倣うように、ヒヨリもまた眼下を見下ろす。

いつもと変わらぬはずの穏やかな波が、２人の目の前で飛沫を上げた。

☆★☆★☆★☆

「海底だって！！？」

再び六課の部隊長室へ顔を揃えた前線メンバーの面々の驚きを、リオスが代表して言葉に表す。

フィルから伝えられた、爆弾の場所。
それはミッドチルダ付近の海の海底。

海底とはいっても町には充分近く、爆発による振動、津波は近隣の住民に大きな被害を齎すだろう。

あのスカリエッティが残した爆弾だ。生半可な威力は持ち合わせていない筈。

そう思うと、気が急いた。

『こちらでも確認しました。爆弾の位置は、フィルさんが送ってくれた座標の海底でほぼ間違いありません』

「場所は解った、けど……」

モニターからのルキノの説明に苦い顔をするフェイトに、シグナムが同意する。

「……厳しいな。そんなに海の底深くにあるとなれば、砲撃は勿論届かないし、生身の人間では水圧で押し潰されてしまうだろう」

「光の届かない、深海……」

ティアナの呟きが部屋に響き、同時に静まり返る一同。

砲撃で貫こうにも、海水に邪魔されてしまい、おそらく攻撃は爆弾まで届かない。

否、そもそも相手は爆発物。たとえ砲撃が届いたとしても、下手な衝撃を加えたとあれば、その拍子に爆発してしまう可能性もある。

それでは本末転倒だ。

そして直接どうにかしようにも、深海の極限環境下では、人間の身体では耐えられない。

魔力でフィールド防御をかけていればいくらかは耐えられるかもしれないが、それも僅かな間のことだ。

最低でもなのはやシャマルほどのシールドがなければ、爆弾のある深度に到達することすら出来ないかもしれない。――――否、2人でも難しいだろう。

『さらに1つ、悪い知らせが。爆弾周囲にはどうやら、強固なプロ

テクションが展開されているようです。おそらく、爆弾の防衛機能であると思われます』

『相当の攻撃を通さないと、封印は至難でしょう。ましてや、海上からなんて……』

ルキノの説明にそう、グリフィスが更なる絶望的結論を纏め上げる。

つまりは、何が何でも深海へ到達できなければ、封印は不可能だということだ。

何にせよ、状況は絶望的。

実質解除の方法は、全くと言ってもいいまでに失われてしまった。

それを皆理解したらしいことが、沈黙という形となって現れていた。

「……リイン、地上本部に連絡。レジアス中将に事の顛末を伝え、市民の避難誘導への強力を仰ぐんや！　グリフィス君、私もそっち行く！　ロングアーチは情報を整理して、最も被害が予想できる場所と避難経路の割り出し、急いでな！」

「了解です！」

『了解！』

いち早くはやてが指示を出すとモニターが消え、リインは早速どこかへと飛び去っていく。

レジアスへ連絡を取りに行ったのだろう。

地上本部の方とは待遇的問題でいくらか確執もあったが、その指揮官たるレジアス中将とフィルとが親しい間柄であるため、このように有事の際は連携がとり易い。

そこは感謝せねばなるまいと思う一方で、いつも助けられてばかりのフィルにはやては心の内で謝罪した。

「部隊長、私達は？」

「高町一等空尉、並びにハラウオン執務官は共に現状待機。爆弾への魔力線を辿って、クアットロの居場所がもうちょっとで判明しそうなんや。それが解ったら、スターズとライトニングの両隊には、協力してクアットロ逮捕へと向かってもらう。それでええな？」

「了解！……行ってらっしゃい」

「……うん！　シグナム、ヴィータ。行くで！」

「はっ！」

「解った！」

敬礼したなのはとフェイトは、そう一瞬だけ友の顔で微笑む。

はやてもそれに微笑み返すと、騎士の2人を引き連れて部隊長室を飛び出していった。

「さて。聞いてのとおり、私達は現状待機」

「彼女の居場所が解ればすぐにでも出撃することになるから、いつ

でも出られるようにしておいてね」

「はい！」

「解りました！」

元気のいいフォワードの返事を聞いて、まず隊長陣が。続いて、残されたフォワード陣が退出していく。

「……僕達も、とりあえず行こうか」

残された3人を包んでいた沈黙を、リオスが手を叩いて破る。

「……ええ」

「そうですね……」

微笑んでリオスの後に続くヒヨリとは対照的に、居た堪れない思いでフィルはその後を追った。

☆★☆★☆★☆

「本当に、もう打つ手はないの……！？」

リオスが作り置きをしておいたクッキーをつまみながら、ヒヨリがそう呟く。

ここは食堂。
部隊長室を出た3人だったが、それぞれが自室に1人でいても、このような状況では落ち着けるはずもない。
そう考え、暫くした後、こうして食堂にて顔を合わせていた。
もう、そろそろ時刻は夜になるかという頃合である。
よく見知ったこの町が、崩壊する危機。
それを間近にしながら、何も出来ない歯痒さは皆が感じていたことだ。
しかしこうして言葉にすると、どうしようもない無力感が湧き上がってきて、居た堪れなくなってしまう。
ヒヨリの言葉も、そんな思いが生み出したものであることは間違いない。
「……今のところは、ね。僕のフリーズフィールドでも深海へ行くまで魔力がもたないし、それはヒヨリの氷結魔法だって同じことでしょ？」
「そう、よね……。あー、もう！　何でこう厄介なところに置くのよおおぉぉ……」
「あはは。それは、ほら……クアットロだし」
「……今、妙に納得した自分がいるわ」
項垂れながら、そう呆れたように溜め息をつくヒヨリに、リオスは

苦笑した。

つまるところ、彼らの間でクアットロという女に対しての認識は、そういうところなのだ。

「……1つだけ」

言葉は、唐突。

不意に呟いたフィルの言葉が、2人の耳に届く。

リオスとヒヨリはそれに虚を突かれて、2人してその声の主を見た。

「1つだけ……方法がないわけじゃない」

「！　どんな!?」

藁にも縋る思いで、ヒヨリがフィルへ迫る。

それにどうするべきか困惑し、彷徨わせた視線の先に見えたリオスは、確りと頷いた。

「……話してみて」

「はい。俺の……俺の能力、ワープを使うんです」

「ワープを……!?」

「はい」

頷き、フィルは決意した表情で真っ直ぐに顔を上げる。

その真剣な眼差しから、リオスとヒヨリは悟ってしまった。

彼が、何を言うつもりなのか。

「俺がワープで深海へ潜って、砲撃で封印する。それしか、爆弾を取り除く方法はありません」

果たして、彼の口から語られた方法とは、2人の予想を裏切らぬものであった。

だが、それにリオスは異を唱えた。

「でも、たとえワープで深海へ潜ったとして、その後はどうする気？　シールドを張って、もったとしても数分ほどだ。それで更に爆弾のシールドを抜けるほどの砲撃なんて……君に本当に可能なの？」

リオスの私見は的を射ていた。

なのは達隊長陣やリオス、ヒヨリと違い、フィル自身の魔力はそれほど多いものではない。

言うなれば、局員の標準よりやや上な程度。

以前のJ・S事件の際には、女神から授かった未来のフェイトやティアナの魔力を使っていたこともあったが、今ではそれもない。

それはフィルも解っていたらしく、静かに頷き――――――そして、懐から白銀のカートリッジを取り出した。

「それは……？」

『マスター……まさか！？』

首を傾げるリオスを他所に、それまで黙っていた彼のデバイス、プリムが声を発する。

「そうだプリム。これはスパイラルシステムの起動キーとなる、特殊なカートリッジ。これを使えば……」

『いけません！』

彼の言葉を、覚悟を、フィルは最後まで言わすことなく遮る。

『確かに、それを使えばマスターの魔力は格段に上がります！　でも、それでは……』

当然だ。

？それ？を使うということは、自らのマスターが――――――。

『それを使ったら、マスターの命がっ！』

――――――この世から消えてなくなるということなのだから。

「どういう、こと……！？」

もう既にこの世の終わりのような顔をして、ヒヨリが瞠目しているのが見える。

その彼女の髪をすいて、フィルは言った。

「……プリムが言ったとおりさ。スパイラルシステム。これを使えば、俺の魔力量は格段に上がり、シールドも深海の水圧に耐え切ることが出来る。帰ってくることが出来るんだ」

「そうじゃない！」

今度は、ヒヨリが言葉を荒げた。

顔は俯き、表情を伺うことは出来ない。

だから、ふるふると震える彼女のウェーブがかった髪が揺れるのが怒りに拠るものか、悲しみに拠るものか――――――表情からはうかがい知ることも出来ない。

だが、その直後床に零れた雫が、彼女の心を如実に表していた。

「そうじゃない。今、プリムが言ったこと……フィルの命に関わるって、本当なの！？」

涙に滲んだ彼女の眼から眼を逸らすフィルに、今度はリオスが語りかける。

「……ノーリスクなわけがないよね。そこまでの魔力を引き出すものなら、当然リスクだってある。プリムの言葉から察するに、スパイラルシステムとは、魔力を生産するリンカーコアに働きかけ、生命力を無理矢理魔力へ変換するシステム。違うかな？」

「……仰るとおりです」

黙っていることは不可能と悟ったか、フィルは頷いた。

リオスはこれでも、メカニックの端くれ。
デバイスマスターであるシャーリーやフィル、そして今は亡きヒヨリの恋人、高坂　昭人ほどの知識はないが、趣味でデバイスを作り上げてしまう程度のものは持ち合わせている。
その知識と勘から、彼もその答に辿り着いたのだろう。

「駄目！　そんなの、駄目に決まってるじゃない……」

「ヒヨリ……でも、それしか方法が……」

「とにかく……駄目なものは駄目なのっ！」

「あ、ヒヨリッ！」

フィルの言葉についぞ我慢ならなくなったヒヨリは、食堂を飛び出していく。

遠くから、「フィルの馬鹿っ！」と叫ぶ声を残して。

「……フィル、今のは君が悪いよ」

「いやしかし、本当にそれしか方法が……」

「だとしても」

それ以上の弁明を許さず、リオスは言葉を遮る。

そして、溜め息をついて、改めてフィルに向き直った。

「だとしても、そんなことを考えちゃいけないよ。僕だって昔はそうだったけど……」

リオスはJ・S事件の折、1度無茶を犯したことがあった。

敵との戦闘で味方がピンチに陥り、割って入った際――――――彼のデバイス、グロリアスの最終システムを解放した。

エンジェルスシステム。

敵が制御するあらゆる事象の制御権を奪い、我が物として扱うことが出来る、無敵のシステム。

それにより窮地を脱した友軍はなんとか敵を退けることに成功するも、全てが終わった後、リオスは倒れた。

原因は、エンジェルスシステムによる脳の一部へのダメージ。

エンジェルスシステムとは、その強力な力に見合うが如く、非常にファッティーな代物である。

このシステムを使用するには、かなりの演算容量を必要とする。

グロリアスは亡き昭人やフィル、その他大勢のデバイスマスターが持てる技術を結集し、リオス自身の能力についてこれるよう性能を追求したオーバースペックな機体だが、その力をもってしても、エンジェルスシステムの演算量を受け止めきることが出来なかった。

そのため、無茶をしたのだろう。

リオスは脳の一部でそれを肩代わりしようとしたが、人間の脳で扱いきれる代物ではなかった。

結果、脳の一部にダメージを負った彼は記憶と心をなくし、暫くは目に光を宿すことなく、車椅子の生活を続けていたのだ。

こうして以前のような生活を送れるようになったのは、シャマル達医療スタッフのおかげというのもあるだろうが、殆ど奇跡に等しい。

そういえば、なのはと結ばれたのもちょうどその頃だっただろう。

献身的に彼の世話をしている内に、いつしか心惹かれるものがあったことに気付いたのだろうか。

兎に角、そんな事情があったからこそ、リオスの言葉には重みがあった。

「……そうですね。でも、俺は……」

「フィル……」

肩を震わせ、ぐっと拳を握り締めるフィル。

そんな彼を憂う表情で、更にリオスが声をかけようとした――――その時。

『リオス君！』

「なのは？」

不意にモニターが開いた。

モニター画面には、なのはの真剣な表情が映し出されている。

「どうしたの？」

『クアットロの居場所が解ったよ！　スターズ、ライトニングに出撃命令。リオス君も一緒に出撃してって、はやてちゃんが！』

「！……解った、すぐ行く！」

表情を変えて、そう返事をすると同時にモニターは消える。

リオスはそのまま食堂を出て行こうとして――――――1度だけ、フィルの方を振り返った。

「……フィル。僕は行くけど――――――絶対に、早まらないでね」

「……はい」

顔を俯かせながらも頷くフィルに微笑むと、すぐに表情を引き締めて、リオスは食堂を後にしていった。

「……俺はっ…」

青年は天井を仰ぐ。

悲しげな瞳で、それでも責任を果たそうとする決意との葛藤を宿して。

――――――そして。

「……」

戸惑いを強引にも決意の眼差しに変えた青年は、立ち上がる。

ずんずんと、迷いのない足取りで廊下を突き進み、辿り着いた先は――――昼間はここでリオスと激闘を繰り広げた、訓練場だった。

「ここなら、誰も来ないよな……」

彼がこれから成そうとしていること。それは、恋人を、恩師を裏切る行為なのかもしれない。

しかし、彼は止まれない。

それが、町を救う唯一の方法と信じているから。

「……ごめんな。ヒヨリ……」

1人の訓練場。

青年の、悔しげな絞り出すような声が――――駆け抜ける一陣の風に吹かれて消えた。

# 逆襲のカルテット　後編

「ああー、もう！　何で私だけ現状待機のままなのよーーーー！？」

自らにあてられた部屋の中で、ヒヨリは椅子に座り、いかにも苛々しているといわんばかりに腕を組んだ指で忙しなく二の腕を叩く。

前線メンバーとリオスが出払った数刻後。

ヒヨリは有事の際のための非常要員と、六課に駐留しての探索を任務として言い渡されていた。

本来なら地上部隊と共に避難民の誘導にあたるべきなのだろうが、以前のＪ・Ｓ事件にて、スカリエッティに六課を攻め落とされた際のことを警戒しているのだろう。

伏兵に備える。そういうことらしい。

「それにしたって、もう少しやりようというものがあるでしょ……？」

確かにリオスは出撃しているが、反則級という程ではなくとも高い能力を持つフィルも待機しているのだから、少しくらい出してくれてもいいのに――――と、落ち着きもなく考えてしまう。

クラナガンの住民の命がかかっているのだから仕方のないことではあるのだが、そう考えても焦りは晴れなかった。

「そういえば……今、フィルはどうしてるのかしら」

ふと、先程逃げ出すようにしてきてしまった恋人のことを思い浮かべるヒヨリ。

どうせこのままこうしていても、悶々とするばかりなのだ。

モニターによる通信であればこの隊舎の中にさえいればどこにでも通じるわけだし、今彼女が張っている探索魔法?魔力網?も、特に隊舎から出ない限りはどこでも異変を感じ取ることが出来る。

会いに行こう。そして、謝ろうと考えた。

彼は彼で、可能性の1つを提示したまでだというのに。

そんな彼を一方的に怒鳴りつけてしまい、反省もしていた。

そうして、彼女は椅子から立ち上がった――――が。

「――――……っ!?」

まさに立ち上がったその時、彼女の張った?網?が何かを捉えた。

(この魔力、は……?)

彼女は、感じ取った魔力の違和感に訝しげに眉を顰める。

違和感は2つ。

1つは、魔力反応が内から外へ流れていくように感じたこと。

通常侵入者や攻撃の場合、外から内へ力が加えられる影響で、魔力網にも似た感触を受ける。

だが、この反応は違った。

まるで――――否、実際にこの反応では、隊舎の中から魔力が出て行く感触だった。

そして、もう1つの違和感。それは――――。

「……まさかっ！？」

自分のよく知る最愛の人と、質があまりに酷似していることだった。

その可能性に思い至ったヒヨリは、急いで魔力網をフル活動させて、隊舎の中の魔力を探った。

ヒヨリの魔力網は魔力の出入りを感知する以外に、範囲内の魔力値やその数を把握することが出来る。

そうであってほしくない。そう信じて――――しかし、隊舎の中には目的の人物の魔力を感じ取ることが出来なかった。

居ても立っても居られなくなって、ヒヨリは部屋を飛び出し、フィルの部屋へ向かう。

途中誰かにぶつかっても、謝ることすらせずにひたすらに疾走した。

そうして、あっという間にフィルの部屋の前まで来ると、息を切らせて勢いよく開け放ったドアの先に――――彼は、いなかった。

彼女にとって、最悪の事態が――――現実となってしまったのだ。

「……馬鹿フィルッ！！！」

悪態をついて、ヒヨリは独自の転移スキル、ワープポータルを発動させる。
普段は転送ポートを使用するのだが――――――今は、はやてに許可をとっている時間すら惜しい。

一刻も早く恋人の下へ向かわねばならんと、発生した魔法陣にヒヨリの姿が飲み込まれていく。

そうして掻き消えた彼女の目に光っていたのは――――――頬を伝う、一筋の涙だった。

☆★☆★☆★☆

「あれか……」

スターズ、ライトニング両隊とともにヴァイスの操縦するヘリで移動していたリオスは、その窓から先に見える建物を眼に捉え、そう呟きを漏らす。

するとその呟きに、なのはが頷いて答えた。

「そう。あれが、クアットロが潜伏している可能性の高い廃墟。昔は違法研究所だったみたいだから、？そういう施設？が多くて、都合がよかったんだと思う」

そういう施設。
それだけで、あの中に何があるのか、その想像が出来てしまった一同は押し黙る。

だが、目を逸らしてばかりでもいられない。
これから自分達は、あの中へ向かうのだから。

「ヴァイス。どこか、なるべく近いところに着陸できる？」

「あー、一面森だからなぁ。ヘリを停められるつったら、やっぱ研究所につけるしかないと思うぜ」

リオスの問いかけにヴァイスがそう答え、リオスは思案する。
そういうことなら、空戦の出来る自分やなのは、フェイトはともかく、空戦適性のないフォワード陣は飛び降りるしかない。
が、潜入するのは何が待っているか解らない敵地。
不用意に飛び込むのは、あまりに自殺行為ではないだろうか。

「なのは、どうしよう？」

「……フリードは、皆乗せて降りられる？」

「えっと、私とエリオ君だけなら大丈夫だと思いますけど……」

「おそらく、全員となると無理だと思います」

キャロの言葉に、補足するように付け足すティアナ。

確かに、現状で全員を乗せて降りるのには、いくら白銀の飛竜と謳われるフリードでも厳しいものがあるのはなのはも把握してはいた。

だが、そうなれば――――――。

「……解った。じゃあ、エリオとキャロはフリードで出て。スターズは、スバルのウイングロードで出撃。いいね？」

「はい！」

威勢のいい返事を返す、フォワード陣。

そして、それと同時にヘリ内のアラートが、熱源の接近を告げた。

「ガジェット出現！　団体さんで来ますよ！」

ヴァイスの声に、前線メンバーは気を引き締める。

まだ完全に施設に接近しきってはいないが、仕方がない。

ここで出撃せねば、墜とされてしまう。

「……じゃあ、皆。行こうか」

フォワード陣が頷くのを見て、なのは、フェイトと揃ってハッチの前に立つ。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「グロリアス・ラスター！」

「「「セットアップ！」」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔ　ｕｐ.』

空色、桃色、黄金、それぞれの魔力の光に包まれる３人の姿。

そうして光が収まるとそこには、各々の鎧となるバリアジャケットを身に纏った３人の姿があった。

「いきます！」

飛び立ち、真っ直ぐに飛行していくと、どこに隠れていたのかというほどの数のガジェットが見えた。

「各員散開！」

なのはの言葉どおり、散開して各個がガジェットへと向かっていく。

因縁に終止符を打つ戦いが――――――ここに始まった。

☆★☆★☆★☆

一方――――海に面する、クラナガンの波止場。

もうすっかり人影もなく、ゴミが散らばるばかりの殺風景と成り果てたそこに、場違いな人影が１つあった。

茶の色をした、上等な制服を身に纏う人影は、寂れた風景にただ１つ飛び抜けていた。

「あれか……」

人影――――フィル＝グリードの視線の先には、渦を巻く水面がある。

爆発の時間が迫ってきて、いよいよ位置を隠す気もないらしい。

僅かに激しくなってきた魔力の乱れが、弱い渦という形で現れているのだ。

あまりにもそれらしい演出に、笑みすら浮かんでくる。

暗い夜の海が渦を巻く様子は極めて怪しげで――――闇に沈もうとしている自分の身を暗示しているかのようだった。

無言で、足を一歩踏み出す。

そうして、そのまま深海へ身を沈ませようとして――――。

「この馬鹿フィルッ！！！」

凛とした高音が辺りに響き――――振り返ると、そこにあったのは愛する人の姿。

そして。

――――――パンッ。

乾いた音が、波の音だけを反響していた波打ち際によく響いた。

「え……？」

何が起こったのか一瞬解らず、フィルは呆然とする。

だがやがて、それが彼女に頬を叩かれたのだと解ると、続いて吃驚したように彼女を見た。

「……私が、どうして今貴方を叩いたのか。解るでしょ？」

俯いて顔は伺えないが、彼女の肩は震えている。

だが、それに気付いていてもフィルは――――――目を逸らし、抱きしめることはしない。

「……ごめん。でも、これしかないんだ」

「これしかないって何よ！　方法がないなら皆と一緒に考えなさいよ！　考えて、試して、最後まで足掻きなさいよっ！」

「けどどうしようもないだろっ！？　あそこにいけるのは俺しかいない！　だったら……行くしかないじゃないか！」

怒鳴り返したフィル。

その頬に、再度ヒヨリの平手が襲った。

「……何するんだよっ！」

「何度でもしてやるわよっ！　俺が行くしかない？　何も考えないで何言ってるの！？」

「考えたさ！　でも……」

「ううん、全然考えてないわ！　貴方、私と……私達と一緒に立ち向かうことを少しでも考えた！？　私達の力を借りることを！……私達だって、貴方の力になりたいのに！　どうして、貴方はいつも私達を遠ざけようとするの！？　私だって、貴方の……力にっ……」

最後の方はもうほとんど叫びになって、女性――――――ヒヨリは、フィルに飛びついてその胸に拳を打ちつける。

叫びとはいえ、彼女の頬には今も涙が伝っていて、ぐしゃぐしゃになりそうな有様で尚、絞りだすように言う。

「貴方の傍に……いさせなさいよぉっ……」

もはや、手にも叩く力がなくなるほど弱々しく、ヒヨリはフィルの胸で泣いた。

フィルは、それを感じ取って初めて、彼女の気持ちを察した。
そして、後悔した。

彼女とて、大切なものを失う痛みは知っているというのに。

昭人を失い、悲しみに暮れ――――――漸くフィルという痛みを忘れさせてくれる大切な人に出会ったにも関わらず、彼女はそれすらも失おうとしているのだ。

平気でいられるわけがない。見過ごすなどありえない。

それは、未来の時代で自分が嫌というほど思い知ったことでもあるというのに――――――。

無事事件を解決することが出来、皆を救うことに成功したこの時代で、自分はそれすらも忘れてしまったというのか。

「ごめん……」

謝罪と共に、彷徨わせていた腕で、フィルは強く彼女を抱きしめた。

今度は固く――――――彼女の温もりを感じるために。

「俺、解らなかった。せっかく救ったはずの時代で、クアットロが皆を危険に晒して――――――本来、俺が救ったせいで本来起こるはずのなかった事件に、どう対処したらいいのか解らなくなって――――死んでも皆を救うことが、自分の責任だって思い込んでた……」

フィルはそう言って、彼女を抱きしめたまま独白する。
それに、未だ涙声でありながらも、ヒヨリもそっと彼の背中を擦った。
まるで、彼の中に溜まった悪いものを、吐き出させるかのように。
「いつだって……頼っていいんだからね。そのために、私達が――――仲間が、いるんだから」
「そうだったな……。……ごめん」
「いいの。思い出してくれたなら……」
そうして、2人は見つめ合い――――そっと口付けを交わした。
改めて互いの存在を確かめ合った2人は――――以前より遥かに美しく、輝いていた。
「でも……どうするんだ？」
そっと、どちらからともなく身を離すと、フィルがヒヨリへ問う。
もはや彼の中に自己犠牲により未来を勝ち取るという選択肢はないが、だからこそ気になる。
何の目算があって、ヒヨリがここに来たのかが。
「ふふっ。方法なら、ちゃーんと用意してあるわよ♪」
「でも、俺の力は使わないんだろ？　だったら、深海まで行く方法

がないじゃないか」

「勿論、貴方の力はあてにしているわ」

「おいおい……」

いよいよ、フィルには何がなんだか解らなくなった。

自分に「行くな」と説得に来た女が、今度は力をあてにしていると言う。

完全に矛盾した発言にフィルが訳も解らずにいると、ヒヨリは自慢げに胸を反っていたのを止め、呆れたように溜め息をついた。

「フィル。貴方、今言ったばかりじゃない。皆で協力するって。皆を頼るって」

「言ったけど、それがどうかしたか？」

「……もう。もともとそうだとは思っていたけど、ここまで鈍感だとは思わなかったわ」

え、とフィルが言う暇もなく、ヒヨリがフィルの両手を握った。

そして眼下には、上目遣いにフィルの方を見上げる双眸。

「私が……協力するの！」

「ヒヨリが？」

「そう。私の魔力と、貴方のワープ。この2つがあれば、海底の爆弾を封印できるかもしれない……ううん、絶対出来る！」

「あ……」

それまで、フィルには考えもしなかったことだった。

ワープの出来る自分だけが、果たさなければならぬことと誰が決めた。

自分にはいるではないか。こうして、支えてくれる人が。傍にいてくれる、最愛の人が。

そう思うと、まるで天命を受けたにも等しき思いを抱いていた先ほどまでの心が、まるで霞を払ったかの如く晴れていくのを感じた。

彼女が傍にいるだけで、不可能なんてないとすら思えてしまう。そんな不思議な力強さに包まれながら、フィルは頷く。

「……そうだよな。ああ、俺達なら出来る！」

「そうよ。……さあ、行きましょ？」

「……ああ」

言い交わし、2人は手を繋いだ。

その光景は、人と人とが繋がっていく証のようで――――――。

「「一緒に……」」

故に2人が消えた後も――――――転移魔法の残滓が、いつまでもその輝きと温もりをそこへ残していた。

☆★☆★☆★☆

「あーら、案外早く見つかってしまいましたわねぇ……」

研究所跡へ向かってくる1機のヘリと、ガジェットを迎撃する機動六課前線メンバーを複数のモニターに捉え、クアットロの眼鏡が怪しく光る。

室内の照明はついておらず、モニターが発する光のみが、彼女のいる周辺を明るく照らしていた。

「まさかあの霜天の閃光まで来るなんて……ちょっと予想外です～」

そう、僅かな冷や汗を滲ませた彼女が呟いた、その時――――――。

ドガアアアアアアアン！

「っ！？」

驚愕と共にクアットロは、ばっ、と身を翻して爆音のした方向を見やる。

果たして、その先には――――――。

「やあ。……久しぶりだね、４番目」

――――――彼女が最も畏れた男の姿があった。

「霜天の、閃光……リオス＝コーネルド」

忌々しげに吐き捨てる言葉に、彼女がいかにリオスを嫌悪しているかが伺える。

それも当然だろう。

リオスは実質、彼女を捕縛へ追い込んだ１人なのだから。

自らの自由を奪った男の出現に、クアットロは憎しみと共に、他の前線メンバーと共に現れることのなかった幸運に感謝した。

この男１人を、存分に嬲り、いたぶることが出来るのだから。

「……はっ、あはははははっ！　漸くお出ましですか、リオス＝コーネルド！」

爆破した壁から室内へ入り、そっと床に降り立つリオスに、クアットロはそう叫びかける。

だが、リオスに反応はない。

それが余計に勘に障ったのか、クアットロはなおも饒舌に口を開く。

「ほうら、見てください。貴方が罅を入れてくれた、聖王の鎧ですよぉ？　綺麗でしょう。まるで虹みたいに光ってますぅ。貴方がどう足掻いても罅を入れるだけで精一杯だったこの鎧も、今じゃすっかり元通り。貴方では……いえ、誰も！　そう、あの忌々しい女であっても！　私にもう傷１つつけることは出来ないんですよっ！　あはははははっ！」

まるで、嫌悪する相手を嘲笑して楽しんでいるように、クアットロは思いのままに、自らを包み込む鎧を指差す。

聖王の鎧。

嘗て栄えた聖王の武具として、絶対の防御性能を誇った魔力防御鎧。無論それは彼女が研究の末完成させたレプリカだが、性能は折り紙つき。

事実、このリオスですら破壊には至らなかったのだから、その強固さが伺えた。

しかし、それを眼にしても、彼女の嘲笑を耳にしても、リオスは身じろぎ１つせず真っ直ぐに彼女を見据えていた。

それは、彼女の言葉と鎧の完全修復に絶望したからでは無論ない。

そう。

この再会に憤りと嫌悪を感じていたのは――――――。

「……お喋りは、それだけかな？」

――――彼女だけでは、なかったのだ。

「出来ればもう、会いたくはなかったよ。でも仕方ない。君は本来受けるべき罰から逃げ、あろうことか再び罪を重ねた。……これでもはや、君に課せられた罪はどうしようもなく重く、また逃げることの出来ないものとなった」

言葉を紡ぐ度に、リオスの騎士甲冑が変貌を遂げていく。

より豪奢に、鮮やかに。

そして気品や神秘すら感じさせる純白と黄金との交わりは、見る者に天使の降臨を思わせる。

グロリアスの形態の１つにして、最強の姿、エンジェルスフォーム。

彼の本来の力の――――象徴。

「もう、何も迷うことはない。ただひたすら……」

最後に、現れた双剣を手に、その切っ先を真っ直ぐにクアットロへと向ける。

それこそが、宣戦布告とでも言うかのように。

戦いの始まりを告げる銀の煌きが、モニターの色を反射して様々に輝いた。

「……撃ち抜いて、切り刻む！」

叫び、リオスは一気に肉迫した。

確りと床を蹴り、クアットロの眼前へ一瞬にして躍り出る。

「くっ！」

腕についたデバイスらしき砲塔でクアットロは砲撃を放ち、迎撃する。

しかしその次の瞬間には既に、リオスの姿は彼女の眼前から掻き消えた。

砲撃を察知し、素早く横っ飛びのステップで視界の外へ出ると、双剣と化したグロリアスを振り下ろす。

しかし刃は聖王の鎧に弾かれ、スパークを上げて鍔迫り合う。

「無駄無駄～。あの時傷1つつけられなかったの、もう忘れたんですかぁ？」

上がるスパークに若干怖気づきながらも、余裕の表情を取り繕って嘲笑する。

見上げた根性だと思う反面、あまりにも滑稽な姿に、リオスの顔が笑みに歪んだ。

そして。

「はぁっ！」

斬れぬならば、弾いてしまえ。

その考えに至った彼こそが異常か。或いは、彼にはそれが当たり前なのだと、当然のことと受け止めるべきか。

しかし、クアットロの顔が驚愕に歪んでいるのを見れば、やはりその光景は異様なのだと知ることが出来る。

「相変わらず出鱈目なっ……！」

着地し、クアットロはすかさず正面、リオスがいるはずのその場所を睨みつける。

が、しかし――――――。

「き、消えたっ！？」

彼の姿は、忽然と消えていた。

そして、同時に周囲に聞こえる風切り音。

「これはっ……！」

その招待に気付いたクアットロへ、姿の見えぬ敵が牙を剥く。

空色の輝きを纏った剣戟が、目にも止まらぬ速さで容赦なく襲い掛かる！

「ぐ、ううぅぅぅ……」

手は出せない。

砲を放とうとするならば、それが発せられる前に忽ち砲塔ごと斬り飛ばされるのが関の山。
この嵐のような、暴風のような連打を、ただひたすらに耐えるしかない。

しかし、そんな状況下にあっても、クアットロから余裕は消えなかった。

彼女が纏うのは、最強の鎧。
それが破られるはずがないと、高をくくっているからだ。

だが。その最強の壁を目の前にしても、リオスが怯むことはない。

むしろ、砲撃を使わせまいと、

「はぁっ！」

攻めて、

「でぇやっ！」

攻めて、

「だあああぁぁぁっ！」

攻めまくるっ！

「く、ぁぁ……」

直接斬撃を受けているわけでもないのに、聖王の鎧を通じて伝わっ

てくる衝撃に、クアットロはよろけて体制を崩す。
そうして、攻撃を繰り返す内に――――――。

――――――ピシっ。

「なっ！？」

再び罅の入った鎧に、クアットロが驚愕に瞠目する。
そして、はっとして周囲を見回すと――――――。

「……っ！？」

周囲をぐるりと、十数人もの？リオス？が取り囲んでいた。
皆一様にランチャーモードに変形したグロリアスを構え、さらに、もはや数十基にも増殖したアサルトビットが、一様にクアットロへその砲口を向けていた。
まさに蟻の這い出る隙間もないまでに包囲されたクアットロに――――もはや逃げ場はなかった。

『Ａｓｔｒａｌ　ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ．』

一斉に、全ての砲塔からアストラル・ブレイカー並の空色の砲撃が

放たれ――――――室内を空色の極光が塗りつぶす。

眼も開けられぬほどの光芒。

１つ１つが魔力を凍結させ、粉々に粉砕する最強の魔力変換資質、氷塵を持つ砲撃。

そんなものが数十と襲い掛かり、いかに聖王の鎧を纏ったクアットロでも耐え切れるはずがなかった。

研究所は砲撃による爆発で見るも無惨に吹き飛び、光が収まったちょうどその時――――――クアットロが、瓦礫の下からその姿を現した。

「……僕の、勝ちだね。どうだ、天使の鉄槌の味は。よく効くだろう？」

「ば、化け物っ……」

ボロボロの身体で地面に這い蹲りながら、クアットロは、対照的に無傷のリオスを睨みつける。

「化け物で結構。僕は……僕なんだから」

言い残し、バインドをかけようとするリオス。

しかし。彼女の身体を締め付けるはずのバインドは何もない空間を縛って消え、そこにいた筈のクアットロも、その姿を忽然と消す。

「何っ！？」

はっとして、周囲を見渡す。

すると、黒く焼けた建物のすぐ傍、ちょうど六課にある転送ポートによく似たところに、クアットロの姿があった。

広域殲滅の影響で傷は深く息も絶え絶えになりながら、彼女はその中へと乗り込んだ。

「待てっ……えっ！？」

すかさず追おうとして、寸前でリオスはその場を飛びのいた。

彼に向けられた、底冷えするような殺意すら孕んだ気配。それを感じたからだ。

果たしてその予想は当たっており、次の瞬間、光学迷彩を解いたガジェットの鎌が先ほどまでリオスのいた場所を貫いた。

それだけではない。まるで地に落ちた角砂糖に群がる蟻の如く、ガジェット達は次々に現れては、リオスへと殺到する！

「ははははは！　残念でしたぁ、リオス＝コーネルド。縁があったら、またお会いしましょう？　あはははははははははっ！」

「くそっ、待てっ！」

双剣でガジェットの鎌を相手にしつつ、素早く空色の魔力弾、フリーズシューターを形成し、クアットロへ向けて飛ばす。

クアットロは、スカリエッティが作り出した戦闘機人の中でも幻影の扱いに長けた特殊な戦闘機人。
本来は戦闘に於いて彼女は、主に前線の戦いをサポートすることを目的としているのだ。
その一発で昏倒も狙えたが――――――。

「くっ！」

ガジェットが彼とクアットロの間に割って入り、フリーズシューターをその身に受ける。
ガジェットは光弾に貫かれ爆散したが、クアットロはその一撃のダメージを食らうことはなかった。

「あははは っ。それじゃ、またお会いしましょう？　ふふふふふっ……」

クアットロが転送ポートを操作する。
そうして、彼女の姿は転送ポートの中に消え――――――。

「クリムゾン……バスターーーーッ！」

――――――なかった。

突如空から降り注いだ真紅の砲撃が、クアットロのいた転送ポートを飲み込んだ。
リオスの絶対零度とは正反対の、灼熱の砲撃。

焼き尽くされ炎上する転送ポート。
にも関わらず、そこから投げ出されたクアットロの身体は煤がつき、焦げていても、非殺傷設定のおかげか、大きな傷は1つとして見つかることはなかった。

それだけではない。

今度は真紅の光弾が雨のように周囲に着弾し、次々にガジェットを貫き、爆散させていく。

「これ、は……」

呆然と、何が起こったのかすら解らずに立ち尽くすリオスは、ふと、頭上を見上げた。

見えたのは、まさに真紅とも言える人影。
紅い跳ねた短髪が風に揺れ、右手に持つアサルトライフル型のデバイスらしきものの銃口からは、煙が一筋立ち上っている。

「やれやれ。フェイトに言われて来てみれば……詰めが甘いぞ、霜天の閃光」

青年はそう呟き、溜め息をつく。

「君は……？」

リオスの問いに、青年は真っ直ぐに彼を見下ろし、銃をホルスターへ収めて答える。

「僕の名は、エルト＝クリーバー。霜天の閃光よ。縁があれば、またどこかで会おう」

そう、それだけを言い残し、青年エルトは振り返り、飛び去っていく。

「エルト、クリーバー……」

気絶したクアットロをバインドで捕らえながら、リオスはエルトの飛び去っていった方向を見上げる。

やがて、上空の全てのガジェットを殲滅したなのは達と合流し――

――戦いは、その幕を閉じた。

☆★☆★☆★☆

深海とは、死の世界。

日の光が届くことは決してなく、どこまでも続く暗黒の世界には、特有の進化を果たした生物でなければ、生きていくことは出来ない。

そんな闇の世界に今、フィルとヒヨリはいた。

今2人は、ヒヨリが張ったシールドによって一時的に、水圧による脅威から免れていた。

「これか……」

深海の闇にただ1つ、太陽のように大きな輝きを周囲に届けている物体が1つ。

周囲には魔法陣が形成され、その中に1つの巨大な球状の構造物が見える。

おそらくはそれが爆弾だろうと、2人は理解した。

「それで、どうするんだ？」

「どうするもこうするも……決まってるでしょ？」

ふふん、と笑って、ヒヨリは彼女の杖（デバイス）、パルミラをセットアップして、その先端を爆弾へと向ける。

「一緒にやれば、無理なんてしなくても大丈夫！」

「ははっ。言うと思ったよ」

苦笑し、フィルもまたプリムを爆弾へ向ける。

2つのデバイスの先に光が宿り、魔法陣が形成された。

「それ、アヴソリュート・ゼロだろ？　大丈夫なのか、そんなの使って？」

フィルは出現したヒヨリの側の魔法陣を見、一目でその魔法を言い当てる。

アヴソリュート・ゼロ。
その名のとおり絶対零度の冷気を齎す究極魔法で、ヒヨリの全魔力の3分の1を消費する。

消耗が激しいため、あまり使いたくはないものであるし、彼女の身体を気遣うフィルとしても、あまり使わせたくはないのだが――――。

「いいのよ。……でも、封印したらすぐに連れ帰ってくれると助かるわ」

「……あぁ。解ったよ」

暖かく笑い合って、2人は再び爆弾へ向き直る。

もうフィルの中には、1人でこのガラクタをどうにかしようなどという考えはなかった。

2人なら何でも出来る。そう、信じているからだ。

そうしている間にも、2人のデバイスに集う光は激しく臨界へ向かっていき――――――。

「いくぞ！」

「ええ！」

掛け声とともに、解き放った。

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ．』

『Ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｚｅｒｏ．』

白銀の砲撃と絶対零度の範囲攻撃が、周囲の海水を巻き込んで爆弾へ直撃する。

周囲に張られた強固なプロテクションシールドと激しく鬩ぎ合う――――が、フィルの魔力に加え、ヒヨリの強大なる魔力をも宿した攻撃に、耐えられるはずがない。

ややあって、爆弾を覆うプロテクションは――――――ゆっくりと、その身に罅を入れていった。

「「いいけえええええええええええええええっ！」」

絶叫と共に、プリムから薬莢（カートリッジ）が排出され、パルミラにはより一層の魔力の輝きが宿って、攻撃が一層強大に膨れ上がる！

もはや、完全に受け切ることができるはずもなかった。

プロテクションは完全に砕け散り、勢いの殆ど衰えぬ攻撃が爆弾へ直撃する。

「今だっ！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ．』

同時に、発現する封印魔法。

更なる光芒は攻撃のものに非ず、脅威を封じ込める、ただそのためだけのもの。

やがて光が収まると――――――？爆弾であったもの？は、その活動を完全に止めていた。
「やっ、た……？」
「っ……フィルッ！　早くワープを！　もう、きつくなってきたっ……」
いくらヒヨリが魔導師として反則級の能力を誇っているとはいえ、深海の水圧を一手に引き受けているのだ。
そろそろ限界が来るであろうことは、予想できた。
切羽詰った彼女の声に、フィルは我に返り、爆弾に手を触れながらワープの術式を起動させる。
忽然と消えた2人のいた空間を、待っていたとばかりに海水が忽ち流れ込んで埋め尽くす。
2人が去った後、残されたのは――――――どこまでも続く、変わらぬ死の暗黒だけだった。
☆★☆★☆★☆
「リオスくーん！　早く早くーーーーーー！」

「ちょ、ちょっと待ってよなのはぁ～～～……」

爆弾事件から、一週間後。

よく晴れた昼下がりの空に、２つの声が響く。

そこは、クラナガン市内の遊園地。

今、フィルとヒヨリ、リオスとなのはは揃ってここへ遊びに来ていた。

本来ならば両カップル共に仕事があるのだが、珍しく一斉に有休をとったおかげで、今回のＷデートが実現した、というわけだ。

「あはは、なのはさん元気一杯だな……」

リオスを目一杯連れまわすなのはを前に、苦笑するフィル。

その隣では、ヒヨリが呆れたように溜め息をつく。

「全くよね。いくら入院してて暫く会えなかったからって……私、ちょっとだけリオスに同情するわ」

ヒヨリの言うとおり、リオスは事件後僅かな間のみだが検査のために市内の病院に入院していた。

理由は、エンジェルスシステムを僅かながら使用したことによる後遺症の類を調べるため。

リオスの魔力と氷塵の変換資質を以ってしても、本来無敵に近い聖王の鎧を砕くことは至難である。

だから、リオスはエンジェルスシステムを自分に扱いきれる範囲で、かなり微小ながら解放し使用することで、聖王の鎧の制御をかき乱し、結果打ち砕くことに成功したのだ。

だが、微小にとはいえ、使用したのは事実。

結果的に何の異常も見当たらなかったのだが、暫くは精密検査のため検査入院が必要だった。

その間は面会も許されず――――結果、なのはへと溜まりに溜まったフラストレーションが今回のこの事態を引き起こしているのだった。

「ヒヨリも。心配してくれたのか？……痛っ！？」

言葉の途中で、フィルは突然痛みの走った足元を見下ろす。

思い切り、足を踏まれていた。

「な、何するんだよ！？」

「馬鹿。心配しないわけないでしょ？……好き、なんだから」

「そ、そうか。あり、がとう……」

「う、うん……」

2人の間に、なんとも言えない雰囲気が漂う。

互いに顔も合わせられず、言葉も出てこないままややあって――――――ヒヨリの手を、温もりが包み込んだ。

「えっ……」

真っ赤な顔で、見上げる視線の先には、同じく顔を真っ赤にした愛する人の顔がある。

「……俺達も、行こうか」

「……ええ」

不器用に、照れくさそうにそっぽを向きながら引いてくる手の力に満面の笑みを浮かべながら、ヒヨリは静かにその身を任せた。

これは、終わりではない。

これは、始まり。

彼らによって紡がれる、新たな物語のプロローグに過ぎない。

物語は、紡がれていく。

一歩一歩、彼らの手で。

その手に、大切な誰かの手を取って。

ずっと、ずっと――――――。

Fin.

## ２００万ＰＶ記念ＳＳ　『Ｐｕｒｅ　Ｈｅａｒｔ』（前書き）

この度、皆様のおかげでこの作品は２００万ＰＶを突破することが出来ました。
いつも応援してくださっている皆様に、感謝を込めて今回記念ＳＳを書いてみました。

これからもどうか、よろしくお願いいたします！！

# ２００万ＰＶ記念ＳＳ　『Ｐｕｒｅ　Ｈｅａｒｔ』

六課の解散まであと３ヶ月となった１月。
突然、はやてさんから部隊長室に呼び出しをされた。

基本的に遅刻も欠勤もしていないから、そう言った注意ではないとは思うんだけど――――――。

多分、新しい任務に付けって言うことだと思う。
だけど、その予想は斜め上の展開で裏切られることになった。

「フィル、あんた今日から３日間勤務禁止な」

「はい？」

俺ははやてさんの言葉に、一瞬ポカンとしてしまった。
勤務禁止って、俺何かしでかしたか！？

「一体どういう事ですか！？　休み返上というならともかく、任務禁止っていうのは！？」

俺の問いに、はやてさんは思いっきりため息を吐きながら――――――。

「あのな……。フィル、あんた六課に来てから、全然休んでないやろ。最低限の休暇を与えた時だって、マリーさんやユーノ君達と裏工作をしていて、全く休んでいなかったし！！」

「えっと……。それは……」

確かに休暇をもらっても、ＪＳ事件対策のため、全ての休みを準備に使っていた気がする。でも、その時は彼女に頼んで、口裏を合わせていたんだけどな――――。

「その彼女から、私にお願いされてたんや。フィルはずっと休んでいないから、どんな手を使っても良いから、休ませてくれってな……」

「……あいつが……そんなことを……」

いつも俺のサポートをしてくれた彼女――――。
どんなときも俺の心の支えになってくれていた。
だからこそ、俺の身体のことを心配してはやてさんに――――。

「そういうこっちゃ。ちなみに彼女も監視役をかねて、一緒に休み

にしてあるから、ちゃんと身体を休めてくるんやで！！」

「……わかりました。それじゃ、ありがたく休暇を頂きます」

事件が終わり、俺も少しは休んで良いのかもしれない――――。
はやてさんの話だと、彼女も一緒に休みにしてくれたことだし、せっかくなので、街に出てみるか。

俺はさっそく彼女を誘うために、彼女の部屋に行くことにした。

＊　　＊　　＊

「……フィルさん、これで少しは身体をいたわってくれたら良いんだけど……」

ここ最近、フィルさんは普段の行動に輪をかけて働きづめだった。
朝から、わたし達と一緒に訓練をした後、夕方からはロングアーチの業務の手伝いをしたり、夜は夜で資格試験の勉強で殆ど寝ていない。

こんなんじゃ、本当に倒れてしまう。
だけど、わたしから言っても、フィルさんはその場では止めてくれるんだけど、わたしが寝た後にこっそりやっていたりしていた。

だから、最後の手段で、八神部隊長から業務禁止命令を出してもらうようにお願いしました。

本来なら、こんなことは通らないけど、みなさんもフィルさんの無茶ぶりは何とかしたかったらしく、快く引き受けてもらいました。

「そうだ！！　せっかく一緒のお休みをもらったんだから、フィルさんを誘ってどこかに行こう」

フィルさんの彼女になっても、わたしはいつもフィルさんに頼りきりでした。

だから、今度はわたしがフィルさんの支えになってあげなきゃいけない。

未来の世界でティアさんがフィルさんの事を支えたように――――。

早速、よそ行きのお洋服に着替えて、フィルさんを誘いに行こうとしたとき……。

コンコン

「は、はい！？」

「キャロ、部屋にいるのか？　今入っても大丈夫か？」

「ちょ、ちょっと待ってください！？　今、着替えていますので！！」

昔だったら、フィルさんに裸を見られても恥ずかしくなかったんだけど、フィルさんと恋人になってからは、その……。こんなおっぱいもペタンな身体を見られるのは、恥ずかしくなっちゃったんです。

フェイトさんは、「年相応の身体なんだから、そんなの気にしないの。まぁ、女の子としての自覚が出てきたのは嬉しいかな」と言ってくれましたけど、やっぱり自信が持てないんです――――。

「そっか……。じゃ、着替えたら、声をかけてくれ」

「あ、あの……。別に入ってきても……良いです……よ」

とっても恥ずかしいけど、このくらいのことを言っても良いですよね。

「……止めておくよ。恋人が嫌がることをする気はない……」

「……フィルさん」

その言葉はとっても嬉しいんですけど、ちょっとだけ悲しいです。

確かにフェイトさんやティアさんみたいに、胸が大きくないですけ

ど、わたしだって女の子なんです。
ちょっとくらい反応してくれても良いと思います。

「キャロ、もう大丈夫か？」

「あっ、はい！！　もう良いですよ」

でも、今はフィルさんを困らせてる気はないですから、このくらいにしておきます。

＊　　＊　　＊

「お邪魔するよ……。って……」

俺がキャロの部屋にはいると、そこにはピンクのフリルの付いた洋服を来たキャロの姿があった。

「あ、あの……。フィルさん、似合いませんか……。これ？」

「……いや、凄く似合ってるよ。本当に可愛いよ。キャロ」

恋人の贔屓目無しで、今のキャロの姿は可愛いと思う。
年相応の格好なんだけど、最近のキャロには女らしさが出てきている感じがする。

もちろん、本当に色香があるわけじゃない。
だけど、いろんな事を学び、成長して、そういったことが歳以上の雰囲気を出しているのかもな――――。

「ありがとうございます。そう言ってもらえると……本当に嬉しいです。わたし、みなさんと比べて……スタイル……よくありませんから……」

「あのな……。キャロは、まだそこまでの歳じゃないだろ？　あと数年もすれば、フェイトさんやティアみたいなスタイルにはなるぞ」

キャロの歳で、あいつらみたいなスタイルをしていたら、かえってバランスが悪い。
身体っていうのは、ちゃんとバランスがとれているんだから、そこまで気にする必要はないと思うけどな。

「でも、やっぱり気になっちゃうんです……。本当にわたしがフィルさんの恋人で良いのかなって……」

「キャロ……」

あの時――――――。
ゆりかごの最深部で、スパイラルを使おうとした俺を必死で止めに来てくれたキャロ。

彼女の心からの言葉がなかったら、今頃俺は命を捨てていたと思う。
だから、キャロにそんな風に思って欲しくないんだ。

＊　　＊　　＊

「だったら、証明してやろうか……」

「えっ……？　んんっ！？」

いきなりフィルさんがわたしにキスしてきて、わたしの口の中を蹂躙する。
普段ならこんな乱暴なキスはしないのに、今日は激しく求めてきた。

「んっ……フィル……さん……んんんっ！！」

さらにフィルさんは、何度も求めてくる。

わたしもフィルさんとキスをするのは好きなので、求められればそれに応える。

それこそ、互いの唇が溶けあうがごとく――――――。

数分間――――――。

わたしとフィルさんは何度も、お互いの唇を求め合っていた。

「ぷはっ！！　もう……ちょっと乱暴です……」

「すまない。だけど、これで分かった？　俺がキャロのことをこんなに求めたいほど愛してるって事」

「あっ……」

そっか……。

フィルさんは、わたしが不安になっているのを見てわざと乱暴なキスをしてきたんだ。

忘れていた――――――。

ゆりかごでフィルさんが言ってくれた言葉を――――――。

“人を好きになるのは、歳は関係ない”

それをもう一度証明してくれたんだ。

「キャロに分かって欲しくて、あんな乱暴なキスをして……。本当にごめんな」

ううん――――――。

謝るのはわたしのほうです。フィルさんは一生懸命気持ちをぶつけてくれているのに、わたしが不安がっていたら、それこそフィルさんの恋人としている資格がない。

「良いんです。フィルさんが本気だっていっぱい……いっぱい伝わりましたから♪」

「だったら、もっとしてやろうか」

今度はわざとそう言ったことを言う。

フィルさんは、時々いたずらっ子なところがあります。ティアさんから聞きましたけど、心を開いている人たちには少し弄ったりすることがあるとのことです。

普段のフィルさんは、超がつくほど真面目な人なんですけどね。

でも、言い換えればこうやって冗談やいたずらをするってことは、本当にわたしのことを思ってくれているんですよね。

だから、わたしも――――――。

「はい……。もっと……して……ください」

さっきのキスで、もっとフィルさんとキスをしたくなっちゃってるんです。

さっきは驚いちゃったけど、ああいう深いキスももっとしてみたいんです！！

そして――――――。

わたしとフィルさんは、再び口づけをかわす。

今度は、互いの気持ちの交換のために――――――。

＊　　＊　　＊

「さてと、せっかく綺麗な服を着ているんだ。クラナガンにでも遊びに行くか？」

「はい♪」

最初は、リニアレールに乗って出かけるつもりだったんだけど、キャロがロードサンダーに乗ってみたいという希望で、今回はサンダーで出かけることになった。

「さてと、飛ばしていくからしっかりつかまっていろよ！！」

「大丈夫です。しっかりとつかまっていますから」

そういってキャロはギュッと俺に抱きついてくる。

「やっぱり暖かいです。フィルさんの背中……」

「そっか……。こんな背中で良かったらいつでも貸してやるよ」

「だったら、ずっと……ずっと……一緒にいてくださいね」

「ああ……」

キャロが望む限り、俺はずっとそばにいる。
俺を好きになってくれた大切な女の子だから――――――。

「さて、本気で飛ばすとしますか」

俺はサンダーのスロットルを全開にして、クラナガンに向けて走り出した。

＊　　＊　　＊

「ほら、キャロ」

「ありがとうございます」

クラナガンについた俺たちは、普段キャロが知らない所に行くことにした。
と言っても、俺が知っているのは、ゲーセンとかアウトレットくらいだけどな。
こうなるなら、もう少し雑誌を読んでおけば良かった。

早速俺たちは、ゲーセンに行き、キャロが好きそうなＵＦＯキャッチャーで、ねこのぬいぐるみを一つ取ってあげた。

キャロも女の子なので、こういったぬいぐるみは大好きだ。
その後は、記念とになると思い、プリクラで写真を撮った。

キャロは最初は、プリクラの文字の入れ方に苦労していたけど、慣れていくといろんな文字を入れていき、できあがった写真はかなり凝った作りになっていた。

ゲーセンで、しばらく時間をつぶした後、俺たちは甘い物が食べたくなって、今度はクラナガンで有名なアイスクリームショップに行くことにした。

ここはよくスバルやティアが行くところで、たまにおみやげで買ってきてくれることがあって、それで俺も知っていた。

せっかくクラナガンに来たのだから、ここに来ない手はない。

早速俺はバニラを、キャロはストロベリーを注文し、近くの公園で食べることにした。

「フィルさん、このアイス美味しいですね！！」

「ああ、久しぶりに食べたけど変わっていなかったな」

六課に入る前に、食べて以来だったけど、相変わらずのおいしさで安心した。
こういう有名店は、収益重視になると、とたんにコストを落として味が落ちるからな。

「あの、フィルさん、良かったらわたしの食べますか？」

「そうだな。それじゃ俺のバニラも食べるか？」

「はい♪」

早速俺はキャロにアイスを渡そうとしたが――――――。

「待ってください」

キャロが待ったをかけ、自分のアイスを口に含み、そして――――――。

「んっ！？　んんんっ……」

そのアイスを、口移しで食べさせてきた。

「……どう……ですか？　アイスの味は？」

「……すっごく甘いんだけど……。キャロの味もして……」

「……こ、今度は……フィルさんのアイスも……食べたいです」

顔を真っ赤にしながら話すキャロは、凄く可愛いと思う。

恥ずかしいのを我慢してしてくれたんだ。俺もそれに応えなきゃな。

俺も自分のアイスを口に含み――――――。

「んっ……」

さっきと同様、今度は俺がキャロに口移しで食べさせた。

「……とっても……甘いです」

「俺もな……」

さすがにお互いに、もう一度することは恥ずかしかったので、今度はお互いに普通に交換して食べた。

そして、夕方になり、そろそろ戻ろうと思っていたんだけど――――。

「もう少しだけ、一緒にいたいです……」

「キャロ……。そうだな」

こういう機会は中々無いし、せっかくのデートだしな。
でも、時間はあと少ししかない。

そう思っていたら、一つの観覧車が視界に入ってきた。

「あれは、確か……最近出来たクラナガン随一の高さを誇る観覧車だよな？」

「はい、確かこないだニュースでやっていましたね」

あの時は、恋人が出来るなんて思わなかったから、流していたけど、まさかあの情報が役に立つとはな。今後はちゃんとチェックしておこう。

「じゃ、あそこに行ってみるか？」

「はい！！」

＊　　＊　　＊

「綺麗ですね……」

「そうだな……」

わたしとフィルさんは、今観覧車に乗っている。
ここからの夜景は、いつも空から見ているのとは違って、とても煌びやかに見えた。

いろんな人たちが生きている証の灯り――――――。

それがとても綺麗な景色になっていた。

でも……。

「……フィルさん？」

「んっ？　ああ……。本当に綺麗だよな」

嘘だ――――――。

今のフィルさんは、景色を見ていて、一瞬だけど、瞳がとても悲しい色をしていた。

もしかして――――――。

「……フィルさん、間違っていたらごめんなさい。もしかして……未来のティアさんのこと……思い出していましたか？」

「っ！！」

「やっぱり……そうなんですね」

フィルさんがあの悲しい目をするときは、ティアさんのことを思い出しているときが殆どだった。

アグスタ事件の後、ティアさん達となのはさんの意見の食い違いの時――――――。

ヴィヴィオを連れ去られて、自分を責め続けたとき――――――。

そして――――――。

ゆりかごのコアを、スパイラルで壊そうとしたとき――――――。

「……やっぱわかっちゃうか」

「……分かりますよ。フィルさんの……大好きな人のことですから……」

「……そっか。でも、勘違いするなよ。確かにティアのことを思い出していたけど、それは恋愛感情とかじゃないんだ」

「えっ……？」

すると、フィルさんが真剣な表情で一言ずつ語り始めた――――――。

「……あの時、ティアが言っていた言葉が、最近やっと分かったって思ったんだ」

「ティアさんの……言葉ですか？」

「ああ……。未来からここに戻るとき、あいつが言った言葉さ……」

“あたしはあんたを縛り付ける存在にはなりたくない。あたしが何より望むのはあんたの幸せなんだから……。それだけは忘れない

でね”

「その言葉を最初に聞いたときは、はっきり言って分からなかったし、分かりたくもなかった。俺を愛してくれたのは、あいつだけだと思っていたから……」

フィルさんにとって、未来のティアさんは今でも心の一部になっている。

それはきっと永遠に消えることのない大切な宝物――――――。

「だけど、こっちも戻ってきて、お前という大切な人を得て、あの時のティアの言葉がやっと分かったんだ……」

「だから……」

そう言って、フィルさんがポケットから取り出したのは――――――。

「――――――これをキャロに受け取って欲しいんだ」

白く輝くカード型のデバイス――――――。

未来でティアさんが使っていたクロスミラージュだった。

「これはティアさんの形見!!　こんな大切な物受け取れません!

！」

これは、ティアさんがフィルさんの託した最後の思い。
そんな大切な物をわたしがもらうわけにはいかない！！

「いや、キャロだからこそ受け取って欲しいんだ。もう一度、愛することを思い出させてくれた……最愛の女性に……」

「フィルさん……ぐす……えぐ……フィルさん……」

わたしは涙を抑えられなかった。
あのクロスミラージュは、フィルさんにとってかけがえのない宝物なのに……。

「……きっと……あいつも喜んでくれるから……」

「……はい」

わたしはフィルさんからクロスミラージュを受け取る。

重い――――――。

重さがじゃない。これには未来のティアさんが、フィルさんに託したいろんな思いが込められているんだ。

そして、その思いをわたしに託してくれたんだ――――――。

ティアさん、今はあなたに敵わないですけど、いつかきっと貴女と同じくらい綺麗な女の子になって見せます。

だから、わたしとフィルさんのこと、見守ってください。

『心配しなくても、十分にフィルを愛せる素敵な女性になってるわよ。あの時、フィルのことを全部受け止めてくれたんだから――――』

「「えっ！？」」

「フィルさん、今ティアさんの声が……」

「ああ……。俺も聞こえた。あいつの……ティアの声が……」

きっと、ティアさんがわたし達に託してくれた最後の言葉。

ティアさんが、フィルさんのことをわたしに託してくれたんだ！！

そして、観覧車が一番高く上がり――――――。

「フィル……さん」

わたしとフィルさんは――――――。

「キャロ……」

クラナガンの夜景の中――――――。

誓いのキスをかわした――――――。

＊　　＊　　＊

5年後

「あれから、もう5年がたったんですね」

「そっか。もう、そんなに経つのか……」

ふと、わたし達は、あの時の観覧車でのことを思い出していた――――。

あれから5年――――――。

今ではわたし達はクラナガンに家を買い、そこに一緒に住んでいる。六課が解散してから、いろんな事があったけど、それでも二人で乗り越えてきた。

ひとりじゃ辛かったことも、一緒いたことで苦しみも幸せに変えられたから――――――。

今も一緒のベッドに眠っていて、フィルさんがわたしの髪を、何度も撫でてくれる。こうされると、とても気持ちいいんです――――――。

「でも、5年経っても、あんまりスタイルが変わりません。本当に……ごめんなさい」

自分の身体をみると、やっぱり恨めしい。
もう少し、おっぱいとかが大きかったら、フィルさんと一緒にいても違和感がないのに――――――。

「気にするなって。俺はスタイルで人を好きにはならないって、何度も言ってるだろ。昨日もその身体に何度も分からせたし……」

「……あん……んんっ……んんんっ！！」

そう言って、フィルさんはわたしの胸を何度も揉んでくる。

あんまり大きくない胸だけど、触れられると、とっても感じるんです。

昨日も、そうやって何度もされたんですから！！

「……もう……ばか。フィルさんの……ばか。でも……そうでしたね」

フィルさんは、わたしが自分の身体のことで落ち込んでいると、いつもわたしが欲しい言葉や態度を示してくれる。

だからこうやって、フィルさんがわたしのことを求めてくれるのは、本当に嬉しいんです。

自分でも、愛する人をちゃんと受け止められるって実感できるから――――――。

「そういうことだ。キャロもまだ成長しているんだ。スタイルとか

はこれからどうとでもなるよ。それよりも、その優しい心がいつまでも変わらない方が……ずっと良いさ……」

だったら、わたしの答えは一つだけです。

「それでしたら、ずっと……これからもずっと……わたしと一緒にいてくださいね♪」

外見じゃなく、わたし自身を見てくれるフィルさん――――――。

そんな素敵な男性を、わたしは心から愛しています。

いつか、心だけじゃなく、身体も成長して素敵な女性になります！！

だから、フィルさん、いつまでもわたしのそばにいてください！！

あなたがいてくれれば、わたしはわたしでいられるから――――――。

# ２００万ＰＶ記念ＳＳ　『Ｐｕｒｅ　Ｈｅａｒｔ』（後書き）

今回のイメージソング

水樹奈々『オルゴールとピアノと　－ｈｏｌｙ　ｓｔｙｌｅ－』

これはキャロとフィルが、観覧車の中で話しているときこの曲を聴きながら書いてみました。

もっと、この曲の方が合っているよって思いましたら、ご意見を頂けたら嬉しいです。

自分のレパートリーですと、限られてしまいますから――――――。

# 設定画　No.1

《ラフ画》

＞i19502―2565＜

今回、相方の夏菜から絵師様を紹介していただき、フィルとプリムの絵を描いていただくことになりました。

絵師様のお名前は、獅焔(しりあ)様です。

正直、ラフ画を頂いたとき、驚きを隠せませんでした！！

（「□」；）マジ！？　スゲェ……

本当にこんな感じでした。

特に、プリムのかわいさは、マジでヒロインになれます！！
第二部のヒロイン代えようかなと思ったほどですｗ

まさか、ほんの少しの情報だけで、これだけの絵を描いていただけるとは思っていませんでした。

しかも、今回アップしたのはラフ画ですから、色がついた絵でしたら……。

もう、私のテンションは鰻登りです！！

と言うことで、まずラフ画からアップいたします。

色つきのバージョンも作っていただけるとのことで、お忙しい中、本当にありがとうございます！！

## 設定画　Ｎｏ．２（前書き）

今回、獅焔（シリア）様の描かれたフィルとプリムのカラー版の絵になります。
これは本当にテンションＭＡＸになりました！！

# 設定画　No.2

〈フィル・グリード〉

＞i198894—2565＜

フィル・グリードの六課制服姿とバリアジャケット姿です。

元々、フィルはクロノのバリアジャケット姿をベースにしてますから、まさにこんな感じになります！！

目つきが多少きつめに感じるのは、未来で様々なことを経験して、甘さが抜けたためです。

本来はラフ画みたいな、若干甘さが残る青年です。

〈プリム〉

＞i19897―2565＜

やっぱりかわいいですな！！
本気でプリムにヒロイン代えちゃおうかしらｗ

そのくらい、すんばらしいです！！

しっかし……

何度見てもフィルにはもったいない女の子ですね（、・ω・、）キリ

## プリム　設定画

今回は、自分で書いてみましたプリムのデバイスイラストです。
はっきり言いまして、小学生レベルの物で泣きたくなります……。

誰か！！

おいらに画力をプリーーーーーーーーーーズ！！

《プリム　デバイスイラスト　ラフ画》

＞ｉ２１０８５―２８６７＜

プリムのモードは基本がガンモード、接近戦用のセイバーモード、
そして砲撃・長距離射撃用のブレイズモードの三種類になります。

最終兵器『スパイラルシステム』はブレイズモードを使用することに
になります。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０１　セイクリッド・ハート（前書き）

本当に長い間、お待たせいたしました。
この話よりＲｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔの物語も第２部に突入いたします。

これからも頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０１　セイクリッド・ハート

次元の海の中心世界『ミッドチルダ』

都市型テロ『ＪＳ事件』の発生と解決からは――――――

すでに４年が経過して――――――

対処に当たった『機動六課』も既に解散――――――

そして――――――

未来から来た戦士フィル・グリードも――――――

現在はその傷ついた心と体をひととき休めていた――――――

＊　　＊　　＊

わたし高町ヴィヴィオは、ミッドチルダ在住の魔法学院初等科の４年生。

『公務員』のママとふたり暮らしで……

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー。帰りにちょっと寄り道してくるけど」

「今日はママもちょっと早めに帰ってこれるから、晩ご飯は４年生進級のお祝いモードにしよっか？」

「いいねー♪」

やったね！！　わたし、ママの料理大好き！！

普段からママの料理はおいしいんだけど、こういったお祝いの時は、わたしの大好きな物がたくさん並ぶんだ！！

「さて、それじゃ」

「うん」

「「いってきまーす！！」」

わたしとママはハイタッチをする。こんな感じで結構仲良し親子です。
たまに……本当にたまにけんかもするけどね……。

＊　　＊　　＊

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院　初等科・中等科棟

「ヴィヴィオ！！」

「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

「おはよー」

「コロナ！！　リオ！！」

後ろから来たのは、ふたりの女の子。　コロナ・ティミルとリオ・ウェズリー。
髪をツインテールにまとめて、おとなしめの女の子がコロナで、髪が短く元気に話しかける女の子がリオ。
ふたりとも私の大切な親友です。

「クラス分けもう見た？」

「見た見た！！」

「３人一緒のクラス！！」

「「「いえーい♪」」」

嬉しくてわたしたちはハイタッチで喜んでいたんだけど……

「くすくす……」と言う声で我に返って……

「あらはしたない」

「だね……」

「あらあら、まあまあ」

＊　　＊　　＊

『選択授業で応用魔導学を選択したみなさんは、これから授業も忙しくなってくると思いますが……』

仲良しの友達と――――――

『しっかり学んでおけば将来きっと役に立ちますからね』

結構ハイレベルだけど、楽しい授業――――――

「はぁー、終わった終わった！！」

「ヴィヴィオ、寄り道してく？」

「もちろーん」

コロナの誘いは願ってもない。

学校帰りの寄り道が、何よりも楽しみなんだから！

「また図書館に寄っていこーよ！！　借りたい本があるし」

リオの言うとおり、今日は図書館に行きたい気分かも……

だけど……

「あ、その前に教室で記念写真を撮りたいな。お世話になってるみなさんに……」

「送りたいんだ」

なのはママ、フェイトママ、スバルさんにティアナさん……

ギンガさんにナンバーズのみんなに、ルールー、エリオにキャロ……

八神家のみなさん、聖王協会のみなさん、高町家のみなさん……

レジアスのおじさんにオーリスさん……

そして……

フィルさん……

みなさんのおかげで――――

ヴィヴィオは今日も元気ですよ……って……

＊　　＊　　＊

わたしの端末にメールが届き、メロディが鳴る。

「あ、メールが帰ってきた！！」

「そういえばヴィヴィオって、自分専用のデバイス持っていないんだよね？」

「それ、フツーの通信端末でしょ？」

「そーなんだよ！！　うち、ママとその愛機（レイジングハート）がけっこー厳しくって……」

そうなんです。

ママとレイジングハートは、基礎を勉強し終えるまでは、自分専用のデバイスとかいりませんということで、まだ専用のデバイスを持たせてくれないんです。

何も、フィルさんが作ってくれた最高級のデバイスじゃなくて良いから、デバイスが欲しいっていつも思ってるんだ。

「リオはいーなー。自分専用のインテリ型で」

「あははー」

《I'm sorry（すみません）》

そんなことを思っていたら、また端末にメールが届いた。

今度はママからだ。

「なにかご用事とか？」

「あーへいきへいき」

メールを開いてみてみると……

「『早めに帰ってくると、ちょっと嬉しいコトがあるかもよ……』だって」

「そっか」

「じゃ、借りる本を決めちゃお！！」

「うん！！」

＊　＊　＊

実はわたしは、その昔生まれ方関係でちょっといろいろあったりした。
なのはママとも血のつながった親子ではないし……

今は仲良しのみんなとも……

ほんの数年前には……

本当にいろいろなことがあった……

だけど、わたしを必死で助けてくれたいろんな人たち……

わたしがわたしのまま、高町ヴィヴィオとして生きることを許してくれた人たちのおかげで……

わたしは今……

なんだかすごく幸せだったりします……

「たっだいまーっ」

「おかえり！！　ヴィヴィオ」

「あれ？　フェイトママ！？　それにバルディッシュも！？」

「うん♪」

《Ｈｅｌｌｏ　ｌａｄｙ》

フェイトママはなのはママの大親友。
９歳の頃からだって話だ。フェイトママもこうやって時々、家に来てくれて一緒にいたりする。

一年前、フェイトママとフィルさんは結婚して、幸せな家庭を築いている。
フィルさんはフェイトママと一緒に執務官をしていたんだけど……

４年前のあの時……

わたしを助けるために、かなりの無理をしてしまって……

その時の傷や普段からの無茶がたたって、長期の休みが必要になってしまった。

ちゃんと休めば、また元のようになるので、今はフェイトママが一所懸命フィルさんのことをみている。

それでも、フィルさんは何も出来ないのは性に合わないと言って、休職中にメカニックマイスターとデバイスマイスターの資格を取って、さらに少しでもサポートできるようにって、司書資格まで取ってしまった。
だから、フィルさんは無限書庫に行って、自分で調べ物をすることが出来る。そうやってフィルさんは様々な所で、フェイトママの支えになっている。

フィルさんは、『これくらいしか凡人の俺には出来ないから……』とか言ってるけど……

はっきり言って、どの資格もかなり難関でそんな簡単にとれる物じゃない。
どこが凡人なんだかと、いつもママ達が言っている。

「フェイトママ、船の整備で明日の午後までお休みなんだ。だからヴィヴィオのお祝いをしようかなって」

「そっか……。ありがとフェイトママ」

「お茶を入れるから着替えてくるといいよ」

「はーい」

わたしは制服から普段着に着替えて、キッチンにやってきた。
フェイトママが焼いてきてくれたマフィンを一緒に食べながら、楽しく会話をする。

そういえばちっちゃい頃、わたしがなのはママと親子になるときに、フィルさんと一緒に後見人なってくれて……。

そのときなんだかわたしは、フェイトママのこともママって思っちゃったらしくて――――

以来ずっと、わたしにはふたりのママがいる状態。

まぁ、ちょっと変わっているけど、ふたりともわたしの大切なママです。

実は……フィルさんのこともパパって呼んでいたんだけど……

大きくなってフィルさんのことを意識し始めてからは、パパって呼ぶのは出来なくなっちゃった。

フェイトママと結婚しちゃったから、フィルさんのことをこんな風に好きになっちゃ駄目なんだけど、でも……。

今のわたしにとって、フィルさん以上の人っていないんだよね。

だから、わたしがもっと大きくなって、フィルさん以上の人が見つかるまでは無理かな。

＊　　＊　　＊

「ごちそうさまー」

「さて、今夜も魔法の練習しとこーっと」

立ち上がって、いつものように魔法の練習に行こうとしたとき……

「あ、ヴィヴィオちょっと待って！！」

「？」

なのはママに呼び止められた。
いったいなんだろう？

「ヴィヴィオも、もう４年生だよね」

「そーですが」

なのはママが今更のように聞いてきた。
わたしが４年生になったのは、もう分かっていることなのに？

「魔法の基礎も大分出来てきた。だからそろそろ、自分の愛機（デバイス）を持っても良いんじゃないかって」

「ほ…ほんとっっ！？」

今までどんなにお願いしても、決していいよって言わなかったなの

はママが……
やっと……やっと認めてくれたんだ！！

「実は今日、私がフィルから受け取ってきました。本当は自分で渡してあげたかったって言ってたけど……」

「調べ物がまだ終わらないから、パーティには間に合わないから、これだけでも渡してあげてって言われてね……」

フィルさんがわたしのデバイスを……
デバイスをもてるだけでも嬉しいのに、フィルさんがわたしのために作ってくれたなんて……

「ヴィヴィオ、あけてみて」

「うん！！」

一体どんなデバイスなんだろ？
期待に胸をふくらませて、箱を開けてみると……

「うさぎ……？」

そこに入っていたのはウサギのぬいぐるみ……

「あ、そのうさぎは外装っていうかアクセサリーね」
「中の本体は、クリスタルタイプだよ」
そう言われてもう一度見ようとしていたら……
フヨフヨ
「とっ…！？」
うさぎが飛んで、右手を挙げて『ども』ってした。
というか……
「ととと飛んだよっ！？　動いたよっっ！？」
「それはおまけ機能だって、フィルが……」
「フィルさんが……？」
「うん、普通に作るより、こういった可愛い機能があった方が、ヴィヴィオに馴染みやすいんじゃないかって……」
フィルさんらしい配慮だ。
ただ作るんじゃなくて、使う人のことをすごく考えてくれる。

ティアナさんのクロスミラージュも、フィルさんのプリムも本当に使う人に合わせて作られているから。

「フィルやわたし達がいろいろリサーチして、ヴィヴィオのデータに合わせた最新式ではあるんだけど……」

「中身はまだ、殆どまっさらな状態なんだ」

「名前もまだないからつけてあげてって」

暖かい……

このデバイスは、ママ達の、そして……フィルさんの思いがいっぱい詰まっているんだ。

フィルさんはサポートに回っても、仕事量が半端じゃないから、とっても忙しいのに……

それでもわたしのために、作ってくれたんだ……

ありがとう……

このデバイス、大切にします！！

「あのね……。実は名前も愛称も、もう決まっていたりして」

「そうだママ！！　リサーチしてくれたってことは、アレ出来る！？　アレ！！」

「もちろんできるよ！！　フィルが作るデバイスだよ。その辺は抜かりはないよ。セットアップしてみて」

「……？」

＊　　＊　　＊

「マスター認証……高町ヴィヴィオ」

わたしの足下にベルカ式の魔法陣が展開される。

「術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド……」

「わたしの愛機（デバイス）に個体名称を登録。愛称は『クリス（マスコットネーム）』」

そして……

「正式名称は『セイクリッド・ハート』！！」

これはずっと前から決めていたことだ。

自分の愛機を持ったら、ママのレイジングハートから名前の一部を

もらおって。

「いくよクリス」

わたしの呼びかけにクリスが、ビシッっと右手を可愛くあげて反応する。
思い描くはあのイメージ！！

「セイクリッド・ハート！！」

「セ――ット・ア――――ップ！！」

セットアップが終わると、わたしが思い描いたとおり、あの姿になることが出来た。
大人になった自分の姿に……

「ん……！！」

「やったあ――――！！　ママ、ありがとー！！」

「あ、上手くいったね！！」

《Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！！　（お見事です）》

ママもレイジングハートも、うまくいったことに笑顔で褒めてくれた。
だけど、フェイトママの様子が……。

「フェイトママ？」

フェイトママは膝から崩れ落ちてしまった。
そしてなのはママが思い出したように……。

「……あ」

そして……。

「なのは……ヴィヴィオがヴィヴィオがぁぁ――！！　なんで聖王モードに！？」

「いや、あの、落ち着いてフェイトちゃん。これはね……」

えっと……これ、明らかにフェイトママ何にも知らないって感じだよね。
まさかママ……。

「ちょ……！！　なのはママ！！　なんでフェイトママに説明してないの！！」

「いや、その……つい、うっかり……」

「うっかりってー！！」

うっかりじゃないよ！！
なのはママ、フェイトママに肝心なこと言って無いじゃない！！

「ごめーん、てっきりフィルがフォローしてくれたと思っていたから……」

「もーーーーーーうーーーーーーー！！」

いつもフィルさんに任せっぱなしだから、こうなっちゃうんだよ！！　フィルさんだって、全てのことが出来るんじゃないんだからね！！
なのはママが言わなきゃいけないことは、ちゃんと自分でしてよ！！

＊　　＊　　＊

陸士１０８隊隊舎　２０：３８

「……連続傷害事件？」

『ああ……まだ「事件」じゃないんだけど……』

「どういうこと？」

あたしとチンク姉達はナカジマ家で、ギンガからの通信を聞いていた。
でも、まだ事件じゃないってどういうことだ……？

『被害者は主に格闘系の実力者。そう言う人に街頭試合を申し込んで……』

「フルボッコってわけ？」

『そう』

おいおい、中々物騒なことをしてくれるじゃないか。
街中で喧嘩とは良い度胸してるぜ！！

「あたし、そーゆーの知ってるっス！！　喧嘩師！！　ストリートファイター！！」

「ウェンディうるさい」

ディエチがウェンディに一言注意してるが、ウェンディの興奮は収まりそうにない。
ったく……。もう少しおちつけっての。

『ウェンディ正解。そう言う人たちの間で話題になってるんだって。被害届が出ていないから、事件扱いじゃないんだけど、みんなも襲われたりしないように気をつけてね』

「そう……」

「気をつける」

つーか、見つけ次第、あたしが逆ボッコだ。

「ふむ……。これが容疑者の写真か」

『ええ。自称「覇王」イングヴァルト』

「それって……」

『そう……』

『古代ベルカ――聖王戦争時代の王様の名前』

この事件、どうやらやっかいなニオイがいっぱいしやがる。

フィル――――――。

出来るだけ、お前を巻き込みたくない。

この事件はあたし達できっちりカタつけるからな。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０１　セイクリッド・ハート（後書き）

今回の第2部を開始するのに、新しい話としてあげるか、Ｒｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔの続きとしてやるか最後まで迷いました。

悩んだ結果、夏菜との最後の絆であるこの物語を育てたいという、私個人の思いと、出来るだけの人に見ていただきたいという思いで、知っている人が多いＲｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔの続きとして書いていくことを決めました。

と言うことで、第2部ＶｉＶｉｄ編　今後ごひいきにしていただけたら幸いです。

それでは本日はこの辺で失礼します。　２０１１／０４／１６　アルフォンス

# Ｍｅｍｏｒｙ，０２　大切な人たちからのメッセージ

むかしむかし――――――。

「どこに行ってたの…？　心配したんだよ」

「ママ、いないの……」

「そっか。じゃあ一緒に探そうか」

花咲く庭でふたりは出会って――――

だけど訪れたのは――――――

残酷な現実――――――

「そうとも彼女こそが！！」

「旧きベルカの最強の人間兵器にして、最凶の戦船の起動鍵（キドウキー）」

「ゆりかごの聖王だよ」

なのはとヴィヴィオは、ぶつかって戦って――――

「パパとママと一緒にいたい。ママ……パパ……」

「助けて……」

「助けるさ……」

「いつだって……」

「「どんなときだって！！」」

思いを伝えあって――――

そして――――

抱きしめ合って、『親子』になって――――

なのはとヴィヴィオの時間（とき）は静かに優しく――――――

「流れていってるんだって思ってたんだけど……」

それがどうしてこんな事になったのよ！！
ヴィヴィオが聖王モードになっちゃってるし、もう何が何だか分からないよ！！

＊　　＊　　＊

「いや、あのねフェイトママ？」

「大人変化自体は別に聖王化とかじゃないんだよ」

「魔法や武術の練習はこっちの姿の方が便利だから、きちんと変身できるように練習もしてたの」

実は最初は、一人でやっていたんだけど、あるときフィルさんに見

られて、魔法のコントロールをきちんと出来るように、基礎プログラムとか作ってくれたんだ。

「なのはママやフィルさんにも見てもらって、もう大丈夫だねって。ねっ、なのはママ！！」

「そうなの！」

「でも……」

フェイトママは、まだ不安な顔をしてる。
心配してくれるのは嬉しいんだけどね……。

「ん……。クリス、変身解除（モードリリース）！！」

クリスに頼んで変身を解除してもらい、わたしはフェイトママの方へ行き、しっかりと瞳を見て自分の思いを伝える。

「なにより、変身したってヴィヴィオはヴィヴィオのまんま！！」

「ゆりかごもレリックも、もうないんだし……」

わたしの辛い思い出の象徴。
レリックとゆりかごはもう無い……。

フィルさんが自分の命をかけて、壊してくれたんだ。
そして、そのおかげでわたしはこうしていられる。

「だから、大丈夫。クリスもちゃんとサポートしてくれるって」

「うん……」

わたしにはフィルさんが、作ってくれたセイクリッド・ハートがある。
だから、大丈夫だよ。フェイトママ。

「心配してくれてありがとう。フェイトママ」

「でも、ヴィヴィオは大丈夫です！！」

「それにそもそもですね？」

「ママ達だって、今のヴィヴィオくらいの頃には、かなりやんちゃしてたって、フィルさんから聞いてるよ？」

昔、六課にいたときに資料とかも見ていたけど、フィルさんや色んな人からママ達のことを聞いたら、出るは出るはの武勇伝。
はっきり言って、わたしの変身魔法なんて、可愛い物だと思います。

「そ、それはその……」

「あははー」

特になのはママ、笑ってごまかしているけど、昔フェイトママにスターライトブレイカーを撃ったのは、どう考えてもやりすぎだと思う。

「そんなわけで、ヴィヴィオは早速魔法の練習に行ってきたいと思います」

「あ、わたしも！！」

一人じゃさすがに危ないけど、なのはママが一緒になら大丈夫。なのはママやフェイトママが駄目なときは、フィルさんが一緒に来てくれるんだけど、今日はまだお仕事が終わらないみたいで、まだ帰ってきていない。

ちょっとだけ、フィルさんが一緒のほうがいいなっておもったのは、ママ達には内緒です。

「いいですか。フェイトママ？」

「はい、気をつけてね」

「じゃ、フェイトちゃん。ちょっと行ってくるね」

「いってきまーす！！」

＊　　＊　　＊

「……ってことになっててね。本当にびっくりしたんだけど、キャロとエリオは聞いてたりした？」

なのは達が出かけて、私は辺境自然保護隊で活動しているエリオとキャロに、定時連絡をしていた。

もしかしたら、フィルがエリオ達には言ってるかもしれないと思ったから……。

『大人モードって単語だけはたまに』

『わたしもフィルさんから、少しだけ聞いていたんですけど、まさか変身制御の事とは思ってませんでした』

「やっぱりー？」

もしかしたらって思ってたんだけど、時々フィルっていたずらっ子な所がある。

私に内緒にして、何かを進めたりして脅かすのが好きだし……。
例えば、結婚記念日のことを忘れているふりをして、実は裏で綿密に計画を練って、プレゼントをくれたり、エリオとキャロの誕生日のときも、素っ気ないふりをして、当日にサプライズをしたりする。
そんな感じで、ごくたまにだけど内緒でやることがあるから、その辺はちょっとこまったさんかな。

『でも、フィルさんは、ヴィヴィオがしていることが危ないと思ったら、真っ先にフェイトさんに相談すると思いますよ』

『フィルさんが誰よりも信じているのは、フェイトさんなんですし……』

「エリオ、キャロ……。うん、そうだね！！」

今回私に言わなかったのは、まだなのは達でちゃんとしていたからだと思う。
実際、なのははヴィヴィオのことを知っていたんだしね。
ただ、私に言い忘れるってのは、ちょっと勘弁してよ。

『それに、ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、出来ることは何でも試してみたいんですよ』

『ヴィヴィオはあれでもしっかりしてます。心配ないと思いますよ』

「……うん」

そうだね。ヴィヴィオはなのはの娘だもん。
ちゃんとその辺は分かっている。

「そんなに心配なら、ちょっとこっそり見に行くか？」

『『「えっ？」』』

後ろから声がして振り返ると、そこには黒のGジャンとGパンを履いた黒髪の青年。
私の旦那様、フィルがいた。

『『「フィル　（さん）！！」』』

「ただいまフェイト。その様子じゃ、なのはさんから聞いていなかったんだな……」

フィルがふぅっとため息をついて言う。
この様子だと、なのはにはちゃんと言ってて、ちゃんと話してあったんだ。
私に内緒にしておくつもりじゃなかったんだ。

「こんなことなら、悪戯心を出さないで、俺からフェイトに言っておけば良かったな。心配をかけてごめんな」

フィルが真剣な表情で、頭を下げて謝ってくれた。

「ううん、良いよ。フィルがヴィヴィオのことをちゃんと言うつもりだったんなら。でも、今度はちゃんと私に言ってね」

私はフィルのおでこをツンとつついて、頬をふくらませながら、ちょっと怒ったふりをする。
もう怒ってないけど、言ってくれなかったのは寂しかったんだからね。

「でも、なのはさんも忘れることがあるんだな。伝言を頼んだのは、ヴィヴィオのデバイスを作るときだったのに……」

「そんな前だったの!?　じゃ、もう半月はたってるじゃない！！」

ヴィヴィオのセイクリッド・ハートは、既製品じゃなくワンオフだ。
だから、フィルが作るときに、半月の時間がかかるって言ってたのに……。
それじゃ、そのときからなのはは忘れてたんだ。

「もう、なのはったら、ケーキの一つでも奢って貰わなくちゃ」

「その辺はふたりでお任せするとして、エリオ、キャロ。2週間ぶりだな。元気でやってるか？」

『はい、今日も本当に平和でしたよ』

『今やっている希少種観測も、もうすぐ一段落ですから。来月にはフィルさん達の所へ帰れそうです』

『そっか。エリオ、お前はどうするんだ？　休暇はルーテシアの所に行くのか？』

エリオの彼女である、ルーテシア・アルピーノは現在休職していた。母親のメガーヌ・アルピーノと一緒に、無人世界カルナージで一緒に暮らしている。

これは、フィルがレジアスさんに頼んで、離ればなれになってた親子の時間を取り戻して欲しいという配慮で、一時、職務を離れるようにしたのだ。

だけど、ルーテシアの罪状は、ほんの少しだけ刑期が残っていたので、普通には休めさせられないので、それだったらメガーヌさんの休養もかねて、無人世界だけど、自然があふれていて、空気も良いところであるこの世界で、表向きは島流しという形でやることにした。

交通の便はちょっと不便だけど、エリオ達はポーターや、フィルのワープでよく逢ったりしているので、特に問題はないみたいだ。

『えっと、今回はフェイトさん達の所に一緒に帰ります。ルーとはこないだ逢いましたから』

『フィルさん聞いてください。エリオ君たら、ルーちゃんとあったときは本当にデレデレしてるんですよ！！』

『きゃ、キャロ！？　僕は別にそんな！！』

「エリオ、隠すことはないって。好きな子と一緒のときはそれが当たり前なんだからな。変に隠すとルーテシアにも失礼だぞ」

「フィルさん……はい！！」

エリオとルーテシアが付き合うようになって、もう４年がたつけど、本当にあのふたりはお似合いだと思う。

「むぅ……。フィルさんはエリオ君の味方なんですか……？」

「そうじゃないけどな。それだったらキャロも良い相手を見つけて、エリオに負けないくらいやってみろって……」

「……じゃ、フィルさん、わたしと一緒に付き合ってくれますか？」

「ま、待て！？　なんでそこで俺になる。もっと良い相手を見つけ

ろって！！」

「……だって、今のところフィルさん以上の人っていないんですもの」

キャロが六課時代からフィルのことが好きだったのは分かってる。

だから、こうしてよくフィルに言ったりすることがある。

小さい頃は、お父さんやお兄ちゃんになついているって感じていたけど、１４歳になってキャロも成長してきて、行動も大人じみたこともしてきている。

フィルのことは信じてるけど、ちょっとヤキモチも焼いちゃうかな。

『……まったく。キャロならすぐに良い奴見つかると思うけどな。まぁ、その相手が見つかるまでは、俺が付き合うよ』

『わーい！！　ありがとうございます！！　フィルさん、今度会うの楽しみにしてますね』

「もう……フィル、キャロに甘すぎだよ」

「かもな。でも、たまには良いだろ？」

「……ちゃんと、奥さんである私もかまってね。じゃないと拗ねちゃうからね」

「了解。じゃ、俺もフェイトに愛想尽かされないようにしないとな」

私がフィルのことを愛想尽かすことは無いよ。
だって、こんなに私のことを思ってくれて、エリオ達のこともちゃんと見てくれる人なんていないから……。

『それじゃ、僕たちはそろそろ失礼します』

『フェイトさん、フィルさん、次の休暇楽しみにしてますね♪』

エリオとキャロの通信が終わると、フィルは立ち上がって、吊してあった自分のコートから、一つの鍵を取り出し……。

「ほら」

それを私に放り投げた。

「えっ……？　これって、ロードサンダーの鍵（キー）だよね？」

私の手に渡されたのは、前に、私がプレゼントしたキーホルダーに付けた銀色に輝く鍵。

「ヴィヴィオのこと、心配なんだろ。だったら、ちょっと様子を見

に行くか？」

「フィル……」

いつもフィルはそうだ。

素っ気ないそぶりしてるけど、ちゃんと相手のことを見てくれる。

今だって、ヴィヴィオのことを心配してくれてる。

「うん♪」

「じゃ、行くとしますか」

私達はガレージに停めてあるロードサンダーの所に向かった。早速

私はキーを差し込みエンジンに火を入れる。

ブオオオンと心地良いエンジン音は、今日も絶好調の証。

「じゃ、サンダー。ちょっとお願いね」

《珍しいですね？　今日は、フェイトさんが運転するんですか？》

「うん、たまには風を感じたいしね。フィルじゃなくてごめんね」

《かまいませんよ。相棒も良いですけど、フェイトさんに使って貰うのも嬉しいですから》

「ふふっ、ありがとう。じゃ、早速飛ばすよ！！」

フィルが後ろに乗り込んだのを確認すると、私はスロットルを全開にして、ヴィヴィオとなのはがいる公園へ向かった。

＊　　＊　　＊

「やっぱいいなー。大人モード♪　ねっ、クリス」

クリスがピッと腕を上げて、答えてくれた。

「だよね～♪」

「ね、ヴィヴィオ？」

「はい？」

わたしがクリスとコミュニケーションを取っていたら、なのはママが話かけてきた。
この話し方は、まじめなお話のときの口調だ。

「大人モードはヴィヴィオの魔法で、自分の魔法をどう使うかは自分で決めることなんだけど……いくつか約束して欲しいんだ」

「――――うん」

「大人モードは魔法や武術の練習や実践のためにだけ使うこと。いたずらや遊びで変身したりは絶対にしないこと。ママと約束……」

「うん。遊びで使ったりは絶対にしません」

なのはママの右手の小指に、わたしの小指も絡ませ、誓いをする。
これは言われなくても、わたし自身の誓い……。

「天に誓って？」

「天と星と時に誓って」

例え神様に誓えなくても、なのはママとフィルさんには誓える。
ここまでわたしを思ってくれた人たちだから……。

「それに、魔法でママよりおっきくなったって……」

「心まで大人になるわけじゃないもん」

今のわたしじゃ、まだまだ子供……。
だから……。

「ちゃんと順番を追って大人になってくよ。普通に成長して、この姿になったときに恥ずかしくないように……」

そして……

「自分の生まれとなのはママの娘だって事に、えへんと胸を張れるように……」

いつかフィルさんと、ちゃんと向き合えるような素敵な大人になるように……。

それが、お世話になった大切な人たちへの恩返し――――――。

「ちょっと生意気！！」

「にゃっ！！」

なのはママがわたしの首をぎゅっとして、自分の方へ抱き寄せる。
ちょっと、そんなにしたら苦しいってば！！

「にゃー！！　せっかくイイ事言ったのに！！」

「あはは♪」

＊　　＊　　＊

「なっ、ヴィヴィオなら大丈夫だろ？」

「そうだね……。私が心配するまでもなかったね」

俺とフェイトは、少し前からふたりに見えない位置で、隠れて様子をうかがっていた。

もし、ヴィヴィオが浮ついた心で魔法を使っていたのなら、あの場でデバイスを取り上げるつもりだったんだけど、それは俺の杞憂だったな。

ヴィヴィオは俺なんかより、ちゃんと分かっている。

魔法を使う本当の心構えをな……。

「これ以上は、ふたりに野暮ってもんだぞ。フェイト」

「うん、じゃ、そろそろ行こうか？」

「だな。せっかくだから、少しツーリングでもするか？」

「じゃ、今度はフィルが運転してね。こうしてフィルのぬくもりをいっぱい感じたいから……」

サンダーに乗り込んで、フェイトは俺の身体にぎゅっと密着してくる。

あのな……。

そうされると、俺、本当にきついんだけどな……。いろいろな意味で……。

「じゃ、行くとしますか。しっかりつかまってろよ」

「うん♪」

ヴィヴィオ、俺が作ったデバイスを……大切に育ててな。

そして、セイクリッド・ハート、ヴィヴィオの助けになってくれ。

＊　　＊　　＊

「じゃ基本の身体強化系からね。それから放出制御」

「クリスの慣らしもあるんだから、いきなり全開にはしないんだよ」

「だーいじょーぶ！！」

大切な愛機（デバイス）だもん。

無茶して壊したりなんかできない。そんなことしたら、フィルさんやママ達に謝りきれない。

今日は本当に色んな事があった……。

帰ったら、リオとコロナにメールを送って、ノーヴェにも、明日からいっぱい練習しようねって伝えて……。

ああ……

それからまたあの子に会いに行こう。

わたしの故郷に咲いてた花と――――――。

綺麗な世界の写真を持って――――――。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０３　暖かさと優しさ

聖王教会本部　１３：４５

「いよーっす。オットー、ディード♪」

「久しぶり」

「ウェンディ姉様、ディエチ姉様」

「ふたりともごぶさた」

久しぶりに対面したあたし達は、ディード達が用意してくれたクッキーと紅茶でお茶を楽しむ。

「他のみなさんは？」

「チンク姉は、騎士カリムとシスターシャッハんとこ。なんかお話だって？」

「ヴィヴィオとノーヴェはイクスのお見舞い」

「イクス元気っすか？」

「健康状態には異常なし。静かにお休みだよ」

「陛下やスバルさんも、よくお見舞いに来てくださいますし……。きっと、楽しい夢を見ておいでなのかと……」

イクスはマリアージュ事件以来、ずっと眠り続けてしまっているっす。

だけど、きっといつか目を覚ましてくれるっすよね！！

＊　　＊　　＊

同時刻　協会内　カリム・グラシア執務室

「お話っていうのは……例の傷害事件の事よね？」

「ええ、我ながら、要らぬ心配かとは思ったのですが……」

「件（くだん）の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯。彼女を自称している『覇王』イングヴァルトと言えば……」

「ベルカ戦乱期……諸王時代の王の名ですね」

「はい」

時代は異なるけど、聖王教会で保護しているイクスヴェリア陛下や、ヴィヴィオの母体（オリジナル）である『最後のゆりかごの聖王』オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではない。

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと」

聖王家のオリヴィエ聖王女、シュトゥラの覇王イングヴァルト、ガレアの冥王イクスヴェリア――――。

いずれも優れた『王』だったから――――。

「ああ、もちろんかつての王達と今のふたりは別人ではあるのですが」

「ええ、それを理解しない者もいるという事ですよね」

「とはいえ、『覇王イングヴァルト』は物語にも現れる英傑です。単なる喧嘩好きが気分で名乗っているだけという可能性も大きいですよ」

「――――ですね」

それならばいいのだが、今のところは楽観視は出来ない。

「でも、犯人が捕まるまで、イクスの警戒は強化するわ。セインについてもらいましょう」

「ヴィヴィオについては……」

「それはこちらで、私と妹達がそれとなく……」

本来なら、フィルにもして貰いたいのだが、彼に頼んでしまうと、本当に自分を蔑ろにするから下手にはお願いできない。

現役復帰まであと少しなのだから、今は少しでも休んで貰いたい……。

＊　　＊　　＊

「みんなごきげんよう～♪」

「ああ、これは陛下」

四人でお茶会をしていたウェンディ達が立ち上がって、こっちにやってきた。

さっきからこっちに来るときに、甘いにおいがしていたのは、そこ

にあるクッキーだったんだ。

「陛下、イクス様のお見舞いはもう？」

「うんディード。いっぱい話したよ」

「あたしらはもう戻るけど、お前らは？」

「あー、あたしも」

「私はもう少し」

ウェンディはわたしとノーヴェと一緒に帰るけど、ディエチはもうちょっとここに残るみたい。

「陛下よろしければこれを。自信作のビスケットとクッキーです」

「わ♪　ありがとオットー♪」

オットーが渡してくれたのはかわいい動物型のビスケットとクッキー。

オットーって、見た目はちょっと男の子みたいだけど、でも本当はこういったお菓子作りとか大好きなんだよね。こういうところはやっぱり女の子なんだって思うよ。

「んじゃ、あたしは3人を送ってくるなー」

わたしとノーヴェ、ウェンディはオットー達と別れて、門先にでる。セインも買い物に行くということで、途中まで一緒に行くことになった。

「しかし良いのか？　ヴィヴィオ。双子からの陛下呼ばわりは」

「えっ？」

「前は『もー陛下って呼ぶのは禁止――――！』とか言ってたろ」

「あー」

ノーヴェの言うとおり、前は陛下って呼ばれるのは嫌だったんだけど、もう慣れちゃったのと、あれはふたりなりの敬意と好意の表現だってことが、最近分かってきたから……。ちょっとずれているところもあるかなって思うけど……。

「この後はいつものアレか。ん、ウェンディもやるんだっけ？」

「ま、ふたりにお付き合いっス」

＊　　＊　　＊

ミッドチルダ　中央市街地

「あ！！」

「リオ！！　コロナ！！　おまたせー！！　って、えええっ！？」

「よっ、ヴィヴィオ」

待ち合わせ場所に行ってみると、リオとコロナだけじゃなくて、なぜかフィルさんまで一緒にいた。
一体どうなってるの！？

「フィル。一体どうしたんっすか？」

「ん、ウェンディ。お前も一緒だったのか？　何？　ちょっと暇になってな。息抜きに外で散歩していたら、コロナに声をかけられてな。ちょっと話をしていたんだ」

実はフィルさんはコロナとは、あることがきっかけで知り合いになっている。フィルさんが忙しいから、普段はあんまり話とかはしないんだけど、何か悩みとかあったときは親身になって相談に乗ってくれる。

フィルさんは、今は執務官としてお休みをしてるけど、それでもハードワークには変わらない。

それでも、フィルさんはどんなに忙しくても、その人が本当に困っていると思ったら、どんなことをしても助けてくれる。

だから、コロナもすっごくフィルさんのことを好きなの。

「そうだったんですか。もう、コロナも通話で教えてよ！！」

「ごめんね。ヴィヴィオを驚かそうってフィルさんが……」

「悪いな。俺がコロナに言ったんだ。だから、あんまり言わないでやってくれ」

フィルさんは、そう言ってわたしの頭を撫でてくれる。

小さい頃からそうだけど、こうされると安心する。

でも、ちょっと子供扱いされてるって感じるのも事実だけどね。

「もう、フィルさんったら、もう良いですよ。そうそう、リオは3人とは初対面だよね」

「うん」

そしてリオはノーヴェとウェンディの方へ向いて……。

「はじめまして！！　去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりましたリオ・ヴェズリーです！！」

元気よくはっきりとした声で自己紹介をする。

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

「その妹のウェンディっス♪」

「フィルさんはヴィヴィオが来る前に紹介したから、ウェンディさんは、ヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生！！」

「よっ、お師匠様！！」

「コロナ！！　先生じゃないっつーの！！　むしろお前達の先生はフィルだろうが！！」

「おいおい、俺は普段は何もしていない只の怠け者だぞ。ふたりを一生懸命みてるのはお前だろノーヴェ」

「おいっ！！　誰が怠け者だ！！　誰が！！　嘘付くなっ！！」

ノーヴェにはいろいろ教えて貰っているのは本当だけど、だけど、フィルさんにも色んな所でお世話になってるんだよ。

フィルさんが怠け者だって言うなら、うちのママ達も怠け者になっちゃうから！！

「先生だよねー？」

「教えてもらってるもん」

「先生って伺ってます！！」

「ホラ」

「なっ」

「うっせ」

ウェンディとフィルさんにも言われてしまい、ノーヴェは照れてそっぽ向いてしまった。
ノーヴェってこういったところが可愛いって思うんだ。

＊　　＊　　＊

ストライクアーツ練習場（トレーニングベース）

「でも、やっぱ意外～！！　ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなぁ。初めてあったのも無限書庫だし」

「文系だけど、こっちも好きなの」

確かに本を読んだりするのも大好きだけど、こうやって身体を動かしたりするのも大好きなんだ。

「わたしは全然、初心者（エクササイズ）レベルだしね」

「ほんとー？」

コロナはああ言ってるけど、ノーヴェやフィルさんに見て貰っているから、結構なレベルになっている。

「さ、いくぞー」

「「「は――――いっ！！」」」

着替えも終わったし、フィルさんやウェンディも外で待ってるもんね。

急いで行かなきゃ！！

＊　　＊　　＊

「へ――――――!!　なかなかいっちょまえっスねぇ」

「だろ？」

「ああ」

ストライクアーツはミッドチルダで、最も競技人口の多い格闘技であり、広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称でもある。

「でもヴィヴィオ、勉強も運動もなんでも出来てすごいよねぇー」

「ぜ――――――んぜん!!　まだなんにもできないよ」

わたしは今、リオと組み手をしながら、会話をしている。
リオはわたしのことをすごいって言ってくれるけど、そんなことは全くない。

「自分が何をしたいのか。何が出来るのかもよくわからないし、だから今はいろいろやってみてるの」

「そっか」

だから――――――。

「リオとコロナといろんな事、一緒にできたら嬉しいな」

「いいね」

「「一緒にやっていこう」」

こんな風にいつまでもリオ達とできたら本当に嬉しい。
そのためにはもっと頑張らなきゃね。

「さてヴィヴィオ、ぼちぼちやってみっか？」

ノーヴェが右腕を回しながら、こっちにやってきて

「うん！！」

わたしとスパーをしよって言った。
わたしもやりたいって思っていたんだ！！

「さー出番だクリス！！　服はトレーニングモードでね」

早速わたしはクリスにお願いして、セットアップをする。
クリスもピッって右手を挙げて応えてくれた。

「セイクリッド・ハート！！　セット・アップ！！」

セットアップすると、トレーニングモードであるタンクトップＴシャツ、両手にプロテクターを付けた状態になる。

「すみません。ここ使わせてもらいまーす」

「失礼しまーす」

わたしとノーヴェが中央のスペースに行くと、周りが段々ざわめき始めてきていた。

＊　　＊　　＊

「な、なんかふたりとも注目されてない？」

「ふたりの組み手凄いからねー。リオもきっとちょっとびっくりするよ」

「そうだな。あのふたりはなかなかのレベルだからな」

「フィルさんもかなりの物だと思いますけど……」

フィルさんもストライクアーツではないけど、格闘技はすることが出来る。
一回ノーヴェさんとスパーしているのを見たけど、ふたりとも本気でやっていて、本当に凄いの一言だった。

「いや、俺のは我流だからね。本格的にやっている人とやったらかなわないよ」

「そんなこと無いと思いますけど……」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ」

「えへへ♪」

フィルさんは、わたしの頭をポンとして、そのまま優しく撫でてくれた。
ヴィヴィオじゃないけど、フィルさんにこうされると、とても嬉しくなる。
でも、フィルさんはもう少し自分のことをちゃんと見た方が良いと思う。
過小評価しすぎは駄目ですよ。フィルさん！！

＊　　＊　　＊

「いくよノーヴェ」
「おうよ」

わたしとノーヴェはお互いに戦闘の構えに入る。
やっぱりこの瞬間は緊張する。

先に動いたのはノーヴェ。
左のハイキック！！
そして、息もつかせず、すぐに右のアッパー。

「くっ！！」

何とか上半身を反らし、それをかわすが、躱しきれず、僅かにアゴをかすめてしまう。

「はっ！！」

つかさず、わたしも右のストレートで応戦！！

「ふたりともやるもんっスなぁ！！」
「はい」

「ああ、良い動きしてる」

その後、３０分ほどスパーした後、クールダウンをし、今日の練習は終了となった。

＊　　＊　　＊

「今日も楽しかったね。でも、今はちょっとだけ不満です～」

「てゆーか、びっくりの連続だよ!!　でも、ジャンケンに勝ったら、もっと良かったのに!!」

「あ、あはは……。ごめんねヴィヴィオ、リオ」

練習が終わり、わたしとリオ、コロナは、フィルさん達と一緒に帰ることになった。

実は、フィルさんがバイクで来ていたので、一人だけだけど、家まで送ってくれるって事になって、３人でジャンケンしたんだけど、勝ったのはコロナだったのだ。

「それじゃ、俺はコロナをサンダーで送るから、ノーヴェ達はヴィヴィオとリオを頼むな」

「まかせるっすよ!!」

「あっ、ウェンディ、悪い。リオ達を頼めないか？」

「あ、了解っす！！　なんか用事？」

「いや、救助隊。装備調整だって」

「そっか。それじゃコロナ、後ろに乗りな」

「はい！！　失礼します」

コロナはフィルさんから予備のメットを渡されると、それをかぶり、後ろに乗り込む。
そして、フィルさんがバイクのエンジンをかけると、勢いよく吹き上がる。
あーあ、じゃんけんで勝ってたら、わたしが一緒に帰れたのに……。

「それじゃ、みんな気をつけてな」

「じゃ、またな」

「「「おつかれさまでした！！」」」

フィルさんとコロナはコロナの家へ、ノーヴェはお仕事へ、そしてわたしとリオはウェンディにそれぞれのお家に送ってもらうことになった。

＊　　＊　　＊

「すみません、わざわざ送っていただいて……」

「気にするなって、元々送るつもりだったんだから、それよりも俺で良かったのか？　ウェンディ達と一緒の方が楽しかったろうに？」

「良いんです。フィルさんに送ってもらうのとっても嬉しいんです！！」

「そっか……。悪いな。もう少し会話上手なら良かったんだけどな……」

会話なんて、そんなに上手くなくても良いんです。
こうしてフィルさんの背中に抱きついていると、とっても暖かいんです。
それだけで、充分なんですよ……。

「本当なら、ヴィヴィオとか可愛い子の方が良かったと思いますが……。わたしでごめんなさい」

「……それ、本気で言ってる？」

「えっ？」

さっきまでとは違い、フィルさんの口調が少し怒っている感じがする。

「コロナの美点は、自分を過大評価しないことだけど、あんまり自分を下に見るのは良くない」

「でも……」

「コロナも充分に可愛いと思うよ。そうやって人のことを思いやれる心を持っているんだ。自信を持ちな」

「フィルさん……ありがとう……ございます……でも……」

「ん？」

「過小評価しすぎは、フィルさんには言われたくないですよ。フィルさんの方が酷いと思います！！」

わたしも自分を下に見ることが多いけど、フィルさんはそれに輪をかけている。

いろんな資格を持っていて、あれだけ気配りが出来て、すっごく優しいのに、怠け者とか、凡人とか、本当に過小評価しすぎています！！

「そ、そっか？　俺の評価は当たっていると思うが……」

「絶対に違います！！　それだけははっきりと言えます！！　フィルさんは、凄く素敵な人です！！」

「……コロナ」

フィルさんは、奥さんのフェイトさんだけじゃなく、いつも周りの人のことを考えてくれている。
それは、ノーヴェさん達だけじゃなく、ヴィヴィオ達もいつも言っている。

フィルさんという人は、自分よりも周りの人の幸せを考えている人だって……。
そんな優しい人が、素敵じゃないなんて絶対にないから！！

「コロナ……ありがとうな……」

「えっ？」

「そうやって言ってくれるのは、やっぱり凄く嬉しいよ。フェイトはよく言ってくれるんだけどな……」

メット越しだけど、フィルさんが照れていることは声の感じで分かる。

「ふふっ、奥さんはフィルさんの良いところがちゃんと分かっているんです。でも、わたしも分かりますから……」

確かにわたしの思いは、憧れもあるかもしれない。
でも、フィルさんが本当に素敵な人だって事は、一緒にいる人ならわかるから……。

「フィルさん、少しだけお時間ありますか？」

「ん？　ああ、今夜はもう帰るだけだから、暇だけど？」

「だったら、少しだけ遠回りして帰りたいです……」

わがまま言っているのは分かっている。
でも、もうちょっとだけ、こうしてフィルさんの背中の暖かさを感じたいなぁ……。

「じゃ、ちょっとそこで止まって、暖かいコーヒーでも飲むか。バイクに乗って身体が冷えてるしな」

「はい♪」

フィルさんは、近くのコンビニでバイクを止めて、暖かい缶コーヒーを二つ買ってきてくれて、一つわたしに渡してくれた。
缶コーヒーを飲み終わった後、またバイクに乗り、フィルさんは少しだけ遠回りのコースを走ってくれた。

この辺からなら、バイクなら10分もあれば着いちゃうんだけど、30分かけてわたしの家に向かってくれた。
フィルさんは、普段はとても真面目な人なんだけど、こうやって融通も利いてくれる。

だから、ヴィヴィオも、わたしもフィルさんのことが好きになったんだと思うな。

フィルさん、今日は本当にありがとう――――。

＊　　＊　　＊

「やっと仕事が終わったぜ……」

あたしはヴィヴィオ達を別れた後、救助隊で一仕事をしてたんだけど、おもったより時間がかかってしまって、今の時間になってしま

った。

「ったく……、人使いが荒いっての」

あたしは少し急ぎ足で帰ろうとしたが……。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

声がした上を見上げると、そこには――――。

「貴女にいくつか伺いたいことと……」

碧銀の長い髪の女が――――。

「確かめさせて頂きたいことが」

街灯の上に立っていた――――。

## Ｍｅｍｏｒｙ；０４　ファースト・コンタクト（前書き）

今回は、文章が本当にまとまらなくて、相方に何度も見てもらいましたが、正直言いまして自信がありません。

もしかしましたら、削除するかもしれませんが、どうかお楽しみください。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０４　ファースト・コンタクト

救助隊の仕事も終わり、後は家でのんびりするだけだと思っていた。
だが――――――。

そこに現れたのは……。

「貴女にいくつか伺いたいことと、確かめさせていただきたいことが」

このところ賑わせている通り魔事件の犯人らしき人物が、あたしの前に現れた。

「質問するならバイザー外して名を名乗れ」

「失礼しました」

そう言って、碧銀の女がバイザーを外すと……

「カイザーアーツ正統、ハイディ・Ｅ・Ｓ・イングヴァルト。『覇王』を名乗らせていただいています」

やっぱり、予想通りの噂の通り魔か……。
こいつはやっかいなことになりそうだ。
あたしは心の中でそうつぶやいた。

「噂の通り魔か？」

「否定はしません」

女は街灯の上から、地面に降りてきてさらに……。

「伺いたいのは貴女の知己である『王』達についてです」

なんだと――――。
こいつ、一体何が目的なんだ？

「聖王オリヴィエの複製体（クローン）と冥府の炎王イクスヴェリア」

「貴女はその両方の所在を知っていると……」

その言葉に、あたしはカチンと来た。
クローンだと、あいつはそんなんじゃねえ。

「知　ら　ね　え　な」

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と、知り合いになった覚えはねえ！！」

そうさ――――。

「あたしが知ってるのは……」

ヴィヴィオも――――。

「一生懸命生きているだけの……」

イクスも――――。

「普通の子供達だ！！」

一生懸命生きようとしている普通の女の子だ！！

「――――理解できました。その件については、他を当たるとします。では……もう一つ確かめたいことは……」

「あなたの拳とわたしの拳……。一体どちらが強いのかです」

＊　　＊　　＊

「防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

こんな茶番に、まともに付き合ってられるか。

「そうですか」

「よく見りゃまだガキじゃねーか。何でこんな事してる？」

「――――――強さを知りたいんです」

「ハッ！！　馬鹿馬鹿しい」

こういう馬鹿は、きっついのをお見舞いして、さっさと終わらせてやる。

あたしは、不意打ちの飛び膝蹴りで胸を狙う。

「くっ！！」

女はあたしの不意打ちの膝蹴りは、腕を使ってガードをする。
だけど、その一撃はあくまでフェイク。

本命は――――――。

右腕から繰り出す、スタンショット。
こいつが本命だ。

それに反応して、今度は胸部だけでなく、頭部もガードに入った。
スタンショットは、そのガードごと女を吹っ飛ばすが、威力は殺されてしまった。

ガードの上からとはいえ、不意打ちとスタンショットをマトモに受けきった。
ち、言うだけのことはあるってか！！

仕方がねえ。
使いたくはなかったけど……。

「ジェットエッジ」

《Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ》

あたしは相棒であるジェットエッジを起動して、バリアジャケットと武装を身にまとう。
フィルが修理・改良してくれた新型ジェットエッジ。

こんな私闘には使いたくなかったんだけどな……。

でも、そんなことは言ってられねぇ。

「ありがとうございます」

「強さを知りたいって正気かよ？」

「正気です。そして今よりも強くなりたい」

「なら、こんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ！！」

「単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ。ジムなり道場なり、良いところ紹介してやっからよ」

こんな事したって、何も得る物なんかありはしねえんだ。

「御厚意痛み入ります。ですが、わたしの確かめたい強さは――――生きる意味は……」

「表舞台にはないんです」

構えを取った――――――。

この距離で？　空戦（エリアル）？　射砲撃（ミドルレンジ）？

「――――って！！」

突撃だと！！

あたしは何とか、右のストレートを辛うじてかわすが……。

「がはっ！！」

ステップを切り替えて、あたしの懐に飛び込んできて、腹に思いっきりアッパーをぶちかまされた。

やべえ……。

今のはかなり効いたぜ……。

「はぁ……はぁ……」

「列強の王達を全て斃し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です」

「寝ぼけたこと抜かしてるんじゃねえ！！」

「昔の王様なんざ、みんな死んでる！！　生き残りや末裔達だって、みんな普通に生きてるんだ！！」

ヴィヴィオだって、イクスだって、みんな必死で生きようとしてる

んだ。
そんな昔の因縁なんか、今のあいつらには関係ない話だ！！

「弱い王なら……」

「この手で……只屠るまで……」

何だと――――。

「このバカったれが！！」

もう我慢の限界だ！！
ヴィヴィオやイクスのことを、何もしらねえくせに、勝手なことばかりいいやがって！！
今を必死に生きてる奴を、自分の身勝手な理由で、それを壊して良いわけねえだろうが！！

「ベルカの戦乱も聖王戦争も！！」

「ベルカって国そのものも！！」

「もう、とっくに終わってるんだよ！！」

あたしは得意のエアライナーを発動し、あたしは女の頭上を取った。
ローラーを駆使しての動きに、あいつは目で追ってはいるが、完全には追い切れていない。

「っ！！」

そして――――――。

バインドで、両手両足を完全にロックする。
このバインドは、素人には簡単には解除できない。

「喰らいな！！」

ローラーの機動力をフル活用した、あたしの必殺の蹴り！！

「リボルバー・スパイク！！」

あたしの蹴りは、左首にまともに命中し手応えも充分！！
これで終わりだ！！
だが……。

「！？」

女は左手で、あたしの足をつかむと……。

「終わってないんです」

バインドでこちらの動きを封じてしまった。
油断していたあたしは、完全に動きをロックされてしまう。

どうかしてやがる！！
防御を捨てて、反撃準備をするなんて……。
普通の神経じゃねえ！！　いかれてるとしか思えねえ！！

「私にとってはまだ何も……」

女は、あたしが仕掛けたバインドを無理矢理壊し……。

右腕を振り上げ……

「覇王……」

その拳は……。

「断空拳」

練り上げられた力と共に振り下ろされた……。

「がはっ！！」

背部にまともに喰らって、息ができねえ……。
すまねえ……ヴィヴィオ……。

「弱さは罪です。弱い拳では……」

「誰のことも……」

「守れないから……」

＊　　＊　　＊

「やば、かなり遅くなってしまったな」

コロナを無事家に送り届けた俺は、サンダーのスロットルを全開にして家に向かっていた。
コロナのお願いで、少しだけ遠回りして送り届けたんだけど、調子に乗って俺も予定より多く一緒にいたもんだから、こんな時間になってしまった。

《でも、相棒、家に戻ってもフェイトさんは……》

「そうなんだよな……」

実は、フェイトは今朝から出張が入ってしまい、しばらく家には帰ってこない。
ここしばらくは出張はなかったから、ずっと一緒だったけど、やっぱり誰もいない家に帰るのはちょっと寂しいな……。

「しょうがないさ。とりあえず、近くのコンビニで弁当でも買って帰るか」

《相棒、今日は自分で作らないんですか？　いつもなら、ちゃんと自炊するのに？》

「さすがにこの時間じゃ自炊は勘弁かな？」

《ですね……》

もう少し早い時間だったら、買い物をして何か作るんだけど、こんな遅いとさすがに自炊する気はなれない。
フェイトが一緒だったら、頑張って作るんだけど、一人だったら、多少手を抜いても良いかな？

「というわけでサンダー、近くのコンビニを探してくれないか？」

《了解です。サーチを開始しますね》

＊　　＊　　＊

「はぁ……はぁ……」

あの時の彼女の一撃――――。

凄い打撃だった――――。

正直言ってかなり危なかった。
この身体は……。

間違いなく強いはずなのに……。

私の心が弱いから……。

「武装形態……解除……」

武装形態である姿を解除して、私は元の姿に戻る。
そして、コインロッカーから、私物を取り出し、家に帰るため歩き出す。

帰って、少しだけ休もう。目が覚めたらまた……。

「！？」

突然激しい頭痛が私を襲う。
これは、さっきの一撃が……。

疲労とダメージでもう意識を保てない……。

駄目……。
こんな所で倒れたら……。

＊　　＊　　＊

「さて、弁当も買ったし、帰るとするか」

《そうですね。でも、また唐揚げですか？　外で食べるときや買って食べるときはそれが多いですね》

「仕方がないだろ。安くてボリュームがあるのって、それしかないんだからな」

お腹いっぱいになって、安く上げられるのって、唐揚げ弁当かファーストフードくらいしかない。
無駄にお金は使えないからな。

「じゃ、帰るとしますか」

俺がサンダーのエンジンに火を入れようとしたとき……。

「ん？」

視界に誰かが倒れてるのを見つけた。
よく見ると、小さな女の子か？

「サンダー」

《ええ、行ってみましょう。それに、あの子からノーヴェさんが使っている発信器の反応があるんです》

「どういうことだ？」

《分かりません。ですが、倒れている人を無視するのは駄目でしょう。相棒》

「だな」

いろいろ分からないことだらけだが、とにかく今はあの子の保護が最優先だ。

俺は、急いで女の子の元に向かった。

＊　　＊　　＊

「ジェット無事か？」

《Ｉ'ｍ　ＯＫ》

あいつの最後のカウンター――――。

あれは半端じゃない攻撃だった。

今もダメージで立つことができねえ――――。

だけど、只じゃころばねえ。スパイクをぶち込む瞬間、発信器を付けてやった。

これであいつを捕縛できるはずだ。

後は、なんとかスバルに連絡を……。
そう思っていたら――――――。

「こちらフィル・グリード。ノーヴェ、聞こえるか」

「フィル!?　どうしておめえが!?」

フィルから、通信が入り、あたしの目の前にスクリーンが現れた。
やっばいな……。この状況で、よりによって、フィルからかよ。
正直、あいつを巻き込みたくなかったんだけどな……。

「実は、お前が使っている発信器の反応が、今保護した女の子からあってな。ちょっと聞きたかったんだけど……。って、おい、どうしたんだ!?」

「すまねえ……。ちょっと、喧嘩で負けて動けねー」

「喧嘩って……。ってことは、この子としたのかよ……?」

「……まぁな」

もう隠しておくことはできねえ。
こうなったら、フィルに協力してもらう方が良い。

でも、ティアナとフェイトさん、絶対に怒るだろうな……。

「理由は、後で聞くとして、とりあえずお前も助けに行くよ。悪いけど、今俺ん家はフェイトがいないから、この子の保護もお願いできるか？」

「ああ、最初からスバルに頼むつもりだったからな。願ったり叶ったりだ……」

「じゃ、全速でそっちにいくからな」

そう言って、フィルからの通信が切れた。
１０分後、ロードサンダーに乗ったフィルがやってきて、前に保護した少女と、後ろにあたしを乗っけて、ナカジマ家に向かった。

フィルは執務官のため、非常時はバイクの変則乗りは認められている。

事前にフィルがスバルに連絡を入れてくれたため、すぐに少女はスバルに抱えられて、あたしもフィルとギンガに肩を貸してもらって、何とか自分の部屋に付くことが出来た。

その後、フィルはすぐに帰ってしまったけど、保護した少女のことがあるから、明日の朝、またナカジマ家に来るとのことだった。

何にしても、今後のことは、明日になってからだな。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０５　アインハルト・ストラトス

「……う……ん……」

「！？」

確か、私はあの時道端で倒れてしまったはず……。
しかも、着ている物まで変わってる……。
ここは一体どこなんだろう？

「よう、やっと起きたか」

「……あの、ここは……？」

私は今の現状が把握できなくて、頭の中が混乱していた。
そう思っていたらさらに……。

コンコン

ドアのノックする音がして……。

「はい」

「入って良いかしら」

「ああ、いいぜ」

「お邪魔するわね」

ドアを開けて入ってきたのは、オレンジ色の長い髪をした女性。
どこか凛とした雰囲気を持った感じだ。

「おはようノーヴェ。それから……」

「自称、覇王イングヴァルト。本名はアインハルト・ストラトス。
Ｓｔ（ザンクト）ヒルデ魔法学院中等科１年生」

「ごめんね。持っていた荷物出させてもらったの。安心して、ちゃんと全部持ってきてるから」

そう言われて指差された方を見ると、私の荷物が全部置いてあった。
そっか、そこから私の学生証をみて分かったんだ。

「制服と学生証を持ってってとは、ずいぶんとぼけた喧嘩屋だな」

「学校帰りだったんです。それにあんな所で倒れるなんて……」

私だって、まさかロッカーから荷物を取って、すぐに倒れるなんて思っていなかったんです。

「あー、みんなおはよー」

「「スバル」」

今度は青い髪の女性が部屋の中に入ってきた。
どこかノーヴェさんに近い雰囲気を持っている感じだった。

「みんなそろってるみたいだね。下でフィルが朝ご飯を作ってくれたから」

「フィルがか？」

「あいつ、もう来てたんだ。まったく、相変わらずこういったことは律儀にするのね」

「えへへ、でも、久しぶりにフィルの料理が食べられるよ♪　それと……初めましてだねアインハルト。スバル・ナカジマです」

「事情とか色々あるかと思うけど、まずは朝ご飯でも食べながら、お話聞かせて聞かせて嬉しいな」

＊　　＊　　＊

「おっ、みんなやってきたな」

「フィル、おはよう。ごめんね、来てもらって早々朝ご飯を作らせて……」

「スバル、お前な。来た早々『フィル、久しぶりにフィルが作った御飯が食べたい！！』って、人をキッチンに立たせやがって……」

まぁ、只でナカジマ家に来るつもりはなかったから、一応俺が作ったマフィンは持ってきていたんだけど、その斜め上のことをさせられるとはな……。

「まったく……。スバル、あんたね。フィルは家政婦さんじゃないんだからね……」

「あたしも妹として恥ずかしいぜ。すまねえなフィル、お前も夜遅くに、あたしとこいつを抱えてバイクを走らせてくれたのに……」

「気にするなって。困ってるときは助けるのは当たり前だろ。とりあえず、冷める前に食べてくれ」

今回用意したのは、家で作ってきたマフィンと、食パン。こっちで作ったベーコンエッグと野菜スープ。

「あ、相変わらず手が込んでいるわね……」

「そうでもないぞティア。この前お前が家に来たときの方が、よっぽど作ったぞ」

「そ、それはそうだけど……」

ティアとは仕事のことで、よく家でフェイトと3人で食べたりすることが多い。
基本的に俺やフェイトが作るが、時々ティアも作ってくれたりするので、3人で食べたりするときはとても賑やかな食事になる。

当初は、ティアは料理はそんなに出来る方じゃなかったけど、俺やフェイトと一緒に作ったりしていくうちに、かなりのレパートリーが出来るようになっていた。

「話は後だ。さぁ、みんな席に着いたついた！！」

＊　　＊　　＊

「んじゃ、一応説明しとくぞ」

「ここはこいつ……あたしの姉貴、スバルの家」

「うん」

「で、その姉貴の親友で、本局執務官兼デバイスマイスターの……」

「フィル・グリードです。よろしくな」

そう言って、ふたりが私に自己紹介をしてくれた。

「特にフィルは、あたしとお前をここまで連れてきてくれたんだからな。感謝しろよ」

「別にたいしたことはしてない。たまたま通りかかっただけで、運が良かっただけだ」

「あんたって、いつもそう言ってるわね。たまには素直に好意を受け取りなさいよ」

「ティア、別に俺は……」

別に俺は、助けようとしてやった訳じゃない。
たまたまコンビニで買い物をしていたときに見つけて、当たり前のことをしたに過ぎないんだけどな――――。

「はいはい、フィルに素直になれって言ったあたしがバカでした。あっ、あたしはティアナ・ランスター。よろしくね」

「あっ、それはそうとノーヴェ。ダメだよ。いくら同意の上での喧嘩だからって、こんなちっちゃい子に酷いことしちゃ」

「確かにな。ちょっとやり過ぎだぞノーヴェ」

「あのな……。こっちだって思いっきりやられて、まだ全身痛ェんだぞ」

確かにノーヴェのダメージは、かなりの物だった。
ストライクアーツ有段者であるノーヴェをあそこまでやるなんて、この子はかなり強いんだと分かる。

「格闘家相手の連続襲撃犯があなたっていうのは……本当？」

ティアの問いかけに、アインハルトはしばらく考えて――――――。

「――――――はい」

「理由、聞いてもいいかな」

アインハルトが答えるのをためらっていると、代わりにノーヴェが――――――。

「大昔のベルカの戦争が、こいつの中ではまだ終わっていないんだと。んで、自分の強さを知りたくて」

「後はなんだ。聖王と冥王をブッ飛ばしたいんだったっけ？」

すると、今までノーヴェの言葉に、ずっと俯いたままだったアインハルトが――――。

「最後のは……少し違います」

「古きベルカのどの王よりも、覇王のこの身が強くあること。それを証明できれば良いだけで……」

ぐっと左拳を握りしめて答える。

「ということは、聖王家や冥王家に恨みがある訳じゃない？」

「はい」

「そっか……」

それを聞いて安心した。
もし、恨み言で聖王家や冥王家を狙うのであれば、かなりやっかいだったけど、でも、この子は純粋に強くなりたいという心で動いていただけなんだ。

「よかった。実はな、俺たちは、そのふたりと仲良しだからな」

「そうなの」

「そういうこと」

「……あっ」

アインハルトがどこか複雑な表情をしてる。
でも、この件は何とかなりそうだな。

「さて、御飯を食べたら、後で一緒に近くの署に行くとするか。聞くところによると、被害届は出ていないそうだし、もう路上で喧嘩しないって約束してくれるなら、すぐに帰れるはずだからな……」

「そうね」

「あのさ、フィル、ティアナ。今回のことについては、先に手ェ出したのはあたしなんだ」

「あら？」

「だから、あたしも一緒に行く。喧嘩両成敗ってやつにしてもらおう」

なるほどな――――――。

もし、このまま行ったら、いくら被害届が出ていないとはいえ、怪我人も出ている事件だ。そう簡単にはすまない。

だけど、喧嘩両成敗って形なら、お互いの同意の上でやったことで、そこそこの注意ですむ。ノーヴェらしい優しさだよ。

「お前もそれでいいな？」

「はい……ありがとうございます」

＊　　＊　　＊

「ごめんねティア、フィル、せっかくの非番なのに」

「それはあんたも一緒でしょう」

「それに俺は今は休職中だしな。暇をもてあましてるよ」

「それにしてもスバル、あんたってばベルカの王様とよく知り合うわね」

「ねー」

確かにヴィヴィオといい、イクスといい、本当に俺たちはベルカ関係に遭遇することが多いな。しかも王族関係。

「でも、あの子。アインハルトも色々抱え込んじゃってるみたいだし。このまま放ってはおけないかも」

「そうね……。でも、その前にあんたの可愛い妹とお節介バカが、一肌脱いでくれそうじゃない」

「おい、こらティア。誰のことだ!!　お節介バカって言うのは!?」

「あんたに決まってるでしょう。自分の身体を省みないで人のために動いているんだから!!」

「ティアの意見に賛成。だから身体壊して休職してるんでしょう!!　少しは自分を大事にしてよ!!」

悔しいが反論できない。

確かに一年前、無茶しすぎて執務官を一時的に休職しなければなら

なくなってしまった。
結果的に身体も休めて、いろんな事も学べて、プラスにはなったけど、一歩間違ったらなのはさんのような状態になっていたとのことだ。

「そうだな……。今回は、サポートに徹するよ。あんまり無茶もしない」

「あんたの無茶しないと言う言葉は、いまいち信用できないけど……。いいわ、あたしが出張中のフェイトさんの代わりに、しっかりと見張ってるから！！」

「ははっ……。お手柔らかになティア」

俺はティアの迫力に、思わず引きつり笑いをしてしまった。
こういうとき本気で怒らせると、ティアもフェイトも怖いからな……。

そう思っていたら……。

「ねぇ、フィル……」

「ん？　なんだ？」

「……もう、無茶はしないでね。あんな思いは二度とごめんよ。フェイトさんもあたしも……」

「ティア……」

執務官の仕事をずっとフェイトと3人でやってきたティアにとって、俺が無茶していたことは今でも心に傷を残している。

あの頃の俺は、フェイトやティアを守りたいという一心で、本当に無茶の繰り返しをしていた。

六課時代になのはさんが言っていたことすら忘れるくらいに……。

昔、俺がティアやスバルに言ったことを俺がしていたんだから、笑い話にもならないよな――――――。

「大丈夫さ。今度はあんな過ちはしない。自分の大切な人たちを悲しませることはしないから……」

「――――――うん」

「あの……。お二人さん。なに二人だけの世界を作ってるのかな？特にフィルは妻帯者でしょう。ティアを口説いてどうするの！？」

「あのな……。俺はそんなつもりはないし、口説いてもいない！！」

「そ、そうよ！！　あたし達はそんなつもりじゃないわよ！！」

スバルのやつ、なんかおもしろいオモチャを見つけた目をしやがって……。

後でティアと一緒にお仕置きしてやる！！

「っと、バカな話はこのくらいにしておく。ちょっとアインハルトの所に行ってくる」

さっきから、ソファーに座って、ずっと俯いたままだからな。
ノーヴェが来るまで、ちょいと元気づけてやるとしますか。

＊　　＊　　＊

私はなにをやっているのだろう――――。
やらなきゃいけないこと沢山あるのに――――。

「ほら」

「ひゃっ！！」

「ははっ、覇王を名乗る子も、こうしていると普通の女の子だな」

いきなり冷たい缶ジュースを、私の左頬にぴたっとつけてきた。
突然のことで、私は思わずおたおたしてしまった。

「……酷いですよ」

「悪い。ちょっとやりすぎたかな。まぁ、これでも飲んで機嫌直してくれ」

「……いただきます」

ちょうど喉が渇いていたから、冷たい飲み物はとてもありがたい。
私はフィルさんから、飲み物を受け取りそれを口に含んだ。

「あれ？　この飲み物って……？」

私が好きな飲み物の一つ、オレンジジュース。
どうしてこれが好きだって分かったんだろう？

「ん、ああ、今日の朝ご飯で、果物がいくつか出ていたのに、オレンジをよく食べていたからな。もしかしてって思ったのさ……」

「そうですか……」

驚いた――――――。
朝ご飯のあんな短い時間だったのに、本当に広範囲にわたって物事を見ている人なんだ。

「さてと、もうすぐ解放だと思うけど、学校はどうする？」

「行けるのなら、行きます」

「そっか……」

フィルさんは、ふと笑みを浮かべてそう言った。
無理に私を学校に行かせようとはしないみたいだ。

「まっ、学校のことはそれくらいにして、少し話は変わるが、ノーヴェもスバルもティアも、局員の中ではかなり優秀な連中だ。古代ベルカ系に詳しい専門家も沢山知っている……」

「アインハルトが言う「戦争」というのが何なのかは分からない。だけど……」

「俺たちで出来ることなら、いくらでも協力する」

「だから……聖王達には手を出すなってことですか……？」

そう思っていたら、フィルさんが――――――。

「ちょっと違うかな。そう言う意味で言ったんじゃない。俺は君の瞳を見ていろんな事を思ったんだ。ノーヴェとも言っていたんだけ

ど……。アインハルト、君は」

「格闘技（ストライクアーツ）が……好きだろ？」

「えっ……？」

「これでも、まがりなりにも執務官をしてるからな。人を見る目はあるつもりだ。こうして話してみて分かった。君の目は澄んだ心を持っている。そのオッドアイを一緒で綺麗な心をね……」

「フィルさん……」

そんなこと言われたこと無かった。

自分の瞳は、人とは違って片目ずつ色が違っている。

この事で小さいときは、周りから虐められることもあった。

それを綺麗だなんて言ってくれる人なんて、今までいなかったのに……。

「……すまない。違っていたら謝る」

「いえ、好きとか、嫌いとか、そう言う気持ちで今まで考えたことがありません」

「覇王流（カイザーアーツ）は……」

「私の存在理由の……全てですから……」

そう……。
この記憶と共に、覇王流は私の全て……。

「――――そっか。良かったら、聞かせてくれないか。誰かに話したら、少しは胸の苦しみが軽くなるよ……」

こんなことを言ってくれる人は今までいなかった。
もしかしたら、この人たちになら、私のことを少しは話しても……。

言ったところでどうなる物じゃないのは分かっている。
だけど、今はこの人に聞いて欲しいという気持ちが強いから――――。

「――――私は」

話してみよう。

私の覇王の悲しい記憶を……。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０６　本当の気持ち

古代ベルカ諸王時代

それは天地統一を目指した諸国の王による戦いの歴史

『聖王女』オリヴィエや『覇王』イングヴァルトも――――――。

そんな時代を生きた王族の人間である。

いずれ優れた王とされる両者の関係は、現代の歴史研究においても、明確になっていない――――――。

＊　　＊　　＊

「3人とも、せっかくの休暇だろ？　何もこっちに付き合わなくてもいーのに」

「「あははー」」

ティアナとスバルがそれぞれの飲み物を飲みながら、笑いで返してくれた。

「特にフィルは、執務官休職中だろ。それなのに……」

そう、ティアナ達と違って、フィルは今はデバイス関係で活動しているけど、執務官としてはまだ復帰はしていない。

「気にするなって。俺もアインハルトのことは気になったからな。あのまま放っておくわけにはいかないだろ」

「……すまねえな」

こういう時のフィルは頑固だから、何を言っても無駄だ。

はぁ……。

こうなると分かっていたから、出来るだけフィルには知らせたくなかったんだよ。

「まぁ、フィルが協力してくれるのは、本当に助かるんだけど、問題はさ……」

「なんでお前らが揃っているかってことだ！！」

あたしが呼んだのは、ティアナとスバルとフィル、それにチンク姉だけだぞ！！
どうしてディエチやディードにオットー、さらにウェンディまでいるんだよ！！

「えー別にいいじゃないッスか！！」

「時代を超えた聖王と覇王の出逢いなんて、ロマンチックだよ」

「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし」

「護衛としては当然」

こいつら、好き勝手なことばかりいいやがって！！
本当に頭が痛くなるよ。あたしは……。

「すまんなノーヴェ。姉も一応止めたのだが」

「ううん」

「まっ、見学自体はかまわねーけど、余計な茶々は入れんなよ？」

「そうだな。ヴィヴィオもアインハルトも、色々繊細だからな。そ

の辺は気をつけてくれよな」

「「「「は――――――い！！」」」」

とりあえず、フィルが言ってくれたから、変な茶々は入れないと思う。

というか、これで変なことをしたら、フィルの奴本気でウェンディ達を叩き出すだろうしな。

フィルの奴は普段は優しいけど、曲がったことをすると、例え自分の奥さんのフェイトさんや親友のティアナでさえ、本気のお説教をするからな。

そんなことを考えていたら、こっちにヴィヴィオ達がやってきた。

＊　　＊　　＊

「ノーヴェ、みんな！！」

「あれれ？　スバルさんとティアナさん、それにフィルさんまで！！」

「こんにちはー！！」

ナンバーズのみんながいるのは聞いていたけど、スバルさん達も一緒だったなんて思わなかったな。
リオはスバルさん達の所へ、コロナはフィルさんの所に行って一緒にお話を始めた。

「あー、やかましくて悪ィな」

「ううん、全然！！」

実はさっきノーヴェから連絡があって、紹介したい女の子がいるって聞いてやってきたんだけど――――――。

「ノーヴェ、紹介してくれる子って？」

「ああ、さっき連絡あったからもうすぐ来るよ」

「何歳くらいの子？　流派は？」

わたしは興奮して、ノーヴェの肩に手をかけ、さらに質問をしていた。

「お前の学校の中等科の１年生、流派はまぁ……。旧ベルカ式の古流武術だな」

「へー」

「あとアレだ。お前と同じ虹彩異色」

「ほんとー!?」

旧ベルカ式の古流武術というのも驚いたけど、わたしと同じ虹彩異色だなんて!!

「まぁ、ヴィヴィオ、座ったら?」

「そうそう」

「だな。飲み物でも飲んでちょっと落ち着け」

「あっ、そうですね」

フィルさんから、ジュースをもらうとそれを一口頂く。

あれ、ちょっと待って!?

これって、さっきまでフィルさんが飲んでいたジュースだよね――――。

うわぁ……。意識しちゃったら、顔が真っ赤になっちゃうよ!!

「失礼します」

ふと、後ろから声をかけれらて振り返ると……。

「ノーヴェさん、フィルさん、皆さん」

「アインハルト・ストラトス参りました」

ツインテールの碧銀の髪の女の子がそこに立っていた。

＊　　＊　　＊

「すみません、遅くなりました」

「いやいや遅かねーよ」

本当はもう少し早くこれれば良かったのだが、授業が終わらなくて、この時間になってしまった。

「それで、アインハルト。こっちにいる女の子が……」

「え、えと、はじめまして！！　ミッド式のストライクアーツをや

ってます、高町ヴィヴィオです」

この子が――――――。

「ベルカ式古流武術アインハルト・ストラトスです」

小さな手――――――。

脆そうな身体――――――。

だけど、この紅と翠（ロート　グリューン）の鮮やかな瞳は――――――。

覇王（わたし）の記憶に焼き付いた――――――。

間違うはずもない――――――。

聖王女の証――――――。

「あの、アインハルト……さん？」

私は彼女の呼びかけでハッとする。

「――――ああ、失礼しました」

「あ、いえ！！」

「まぁ、二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより、手合わせでもした方がはやいだろ？」

「場所は、俺の方で取っておいたから、行くとするか」

ノーヴェさんとフィルさんに言われ、私達は区民センター内のスポーツコートに行くことになった。
私と彼女はそれぞれウェアに着替え、ウォーミングアップをし、身体をほぐす。

「じゃ、あの、アインハルトさん！！　よろしくお願いします！！」

「――――はい」

本当にこれで分かるのだろうか……？

フィルさん達が言っていたように、彼女は覇王（わたし）の拳を受け止めてくれるのだろうか……？

＊　　＊　　＊

数時間前

諸王戦乱の時代。
武技において最強を誇った一人の王女がいた。
名をオリヴィエ・セーゲブレヒト――――――。
後の『最後のゆりかごの聖王』

かつて、『覇王イングヴァルト』は彼女に勝利することが出来なかった。

「……なるほどな。それで、時代を超えて再戦……か？」

「覇王の血は歴史の中で薄れていますが、時折その血が色濃く蘇ることがあります」

「碧銀の髪や、この色彩の虹彩異色。覇王の身体資質と覇王流（カイザーアーツ）。それらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます」

そっか……。
この世界では、覇王の記憶を持った女の子は少し事態が違うんだな。

かつて俺がいた未来の世界――――。

最終決戦前、俺とティアは、ゆりかごの制御を止めるために、ゆりかごの駆動炉に向かっていた。

その時見た光景は――――。

そこでは、ヴィヴィオの代わりにゆりかごの起動鍵として、駆動炉に埋め込まれていた少女がいた。

何とか、駆動炉を止めることは出来たけど、クアットロの手で完全に洗脳されてしまい、元に戻すのは不可能だった。

だから俺があの時――――。

自分の手で――――。

この子を――――葬った。

せめて、魂だけでも救われることを願って――――。

だけど、そんなのは俺のエゴだけどな――――。

そしてアインハルトの言葉はまだ続く――――――。

「私の記憶にいる『彼』の悲願なんです。天地に覇を持って和を成せるそんな『王』であること」

「弱かったせいで……強くなかったせいで」

「彼は彼女を救えなかった……守れなかったから！！」

「！！」

「そんな数百年分の後悔が……私の中にあるんです」

救えなかった……か……。

俺もあの時、なのはさん達やティアを救うことは出来なかった――――。

女神の力で過去に戻り、やり直せたけど、それでもあの時のことは決して忘れられない――――――。

あの時のことは、今でも俺の中で後悔しているのだから――――――。

「だけど、この世界にはぶつける相手がもういない。救うべき相手も……守るべき国も……世界も！！」

悲しみのあまり、アインハルトは声を殺しながら泣いていた。

数百年分の後悔か……。

そんな悲しい記憶は、本来こんな小さな少女が背負う物じゃない。

だけど、彼女はそれでも受け止めて、自分の一部としている。

強いけど、それはあまりにも悲しい。

「――――いるさ」

「えっ……？」

「少なくてもここに一人いる。君の拳も、そして、その悲しい思いも……。俺が受け止める」

「……同情で言わないでください！！　大切な人を失ったことがないあなたに、何が分かるんです！！」

同情か……。

たしかに、そう取られても仕方がないよな……。

「やめなさいアインハルト！！」

声がし、振り向くとそこにはいたのは――――。

「フィルは決して同情なんかで言ってるんじゃないわ！！」

本気で怒っていたティアの姿だった。

だけど、さっきまでスバルと向こうで話していたはずだが……？

「ティア……お前、聞いていたのか？」

「……ごめん。あんまりにも遅かったから、少しだけ聞いちゃったの」

「そっか……」

時計を見ると、あれから結構時間がたってしまっていた。

ティアは少しだけと言っていたけど、おそらくは全部聞いていたと思う。

それでも、俺のことを信じて黙ってくれていたんだ。

こういうところは、フェイトとそっくりなんだよな。

＊　　＊　　＊

（同情なんかじゃない……？　でも、この人に何が分かるの）

覇王の記憶は、確かに私自身が経験している物じゃない。
だけど、その悲しみは痛いほど伝わってきて、その思いは本物なんだ。

「アインハルト」

「はい……」

「確かにあんたの悲しみは、痛いほど伝わってきたわ。だけどね……」

するとティアナさんは、私の目を真っ直ぐ見つめて……

「こいつはね……こいつはね……」

何度も話すのを躊躇っている。
だけど、意を決したのか……。

「大切な人たちを何人も失ってきたのよ！！　だから、フィルがあ

んたに言った言葉は、決して同情なんかじゃないのよ！！」

「ティア……お前……」

「だから、フィルの言葉を、ちゃんと聞いて欲しいの。あたし達じゃ、あんたの思いは受け止められないけど、だけど、こいつならちゃんと受け止めてくれるから……」

「ティアナさん……」

ティアナさんの言葉は、決して冗談やその場で繕った言葉なんかじゃないってことは、ティアナさんの目を見れば分かる。

涙を流して、それを拭おうともせず、必死で伝えようとしているのだから……。

「フィルさん……一つだけ……聞いても良いですか」

「ああ……」

これだけはどうしても聞きたい。

ティアナさんが言っていた大切な人を失ったって言葉……。

あの言葉を言ったとき、フィルさんは一瞬だけど、本当に泣きそうな表情をしていた。

「あなたは……本当に……大切な人たちを……？」

「……」

フィルさんは、俯いたまま答えようとはしない。

だけど、言わなくても、あの言葉が本当だってことは分かった。

フィルさんのあの辛そうな眼を見れば……。

「ごめんなさい……。さっきは無神経なことを言ってしまって……」

「いや、こっちこそ、アインハルトの気持ちを考えないで言ってしまったんだ。謝るのはこっちだよ……」

結局どっちも謝っていたため、ノーヴェさんがやってきて、どっちもどっちだと言うことで、この話は終わりになった。

＊　　＊　　＊

あの後、学校に戻るために、私はフィルさんのバイクで送ってもらうことになった。

最初は申し訳ないので断ったのだけど、一応警察のお世話になったので、ちゃんと事情を説明する必要があるとのことで、一緒に行ってもらうことになった。

正直、私はバイクに乗ったことがなかったので、乗るときにオロオロしてしまった。

だけど、フィルさんが乗り方を教えてくれたので、何とか乗ることが出来た。

学校までの短い距離だけど、本当に風が気持ちよくて、もやもやが消えていくようだ。

「不思議ですね……。こうしていると、いろんな事がリセットされていくみたいです」

「それが分かるなら、16歳になったら免許取ってみな。自分で運転するのはもっときもちいいからな」

「ふふっ……はい」

こんな風に気持ちの余裕が持ったのは、いつ以来だろう。

覇王の記憶が強く出てきてからは、いろんな事に余裕なんて無かったから……。

だけど、それでも……。

「本当に……」

「ん？」

「本当に……私の拳を受け止めてくれる人が……いるんですか？」

思わずぽつりと言ってしまった言葉だった。

だけど、フィルさんはそれを聞いてくれていて……。

「――――大丈夫、ちゃんといる。この世界には聖王である女の子もいるんだ。俺が駄目でも、その子なら、ちゃんと受け止めてくれるさ……」

「あっ……」

本当にこの人は、人の悲しみをちゃんと受け止めてくれる人なんだ。

警察署での言葉も、ティアナさんが言っていたように同情なんかじゃなかったんだ。

「ありがとう……ございます。今なら、その言葉を……信じられる気がします」

「そっか……じゃ、今度会って、自分の思いをぶつけると良い。私

念じゃなくそのためなら、俺はいくらでも手助けするからな……」

「はい……」

そして――――――。

＊　　＊　　＊

今私の目の前にフィルさんが言っていた子がいる。

この子が本当に覇王の拳を――――――。

覇王の悲願を叶えてくれる――――――？

「んじゃ、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃と拘束（バインド）はナシの格闘オンリーな」

そして……。

「レディ」

ノーヴェさんの合図と共に――――――。

「ゴー！！」

開始となる。

開始早々、いきなり懐に飛び込まれ、下からアッパーを喰らいそうになる。
それでも何とか両腕のガードで防ぐことができた。
その後も速攻で攻撃の手を休めない――――――。

「ヴィ……ヴィヴィオって、変身前でも結構強い？」

「練習頑張っているからねー」

「確かに強いと思う。けど――――――」

「けど、何よ？」

「それは見ていればわかるさ……」

上段の蹴り――――――。

確かに早いし威力もある。

だけど……。

真っ直ぐな技――――――。

きっと、真っ直ぐな心――――――。

だからこの子は――――――。

私が戦うべき『王』ではない――――――。

私は掌底の応用で、彼女の胸に打撃を与え場外に吹き飛ばす。

勢いが強すぎて、壁に激突するかと思ったけど、フィルさんが彼女を受け止めて事なきを得た。

「す……すごい！！」

あのまぶしいくらいの笑顔――――――。

――――私とは違う。

＊　　＊　　＊

「お手合わせ……ありがとうございました」

「えっ……」

突然アインハルトさんが振り向いて、試合場から出て行こうとしていた。
何かわたしが悪いことをしてしまったのだろうか!?

「あの……あのっ!!」

「すみません。わたし何か失礼を……」

「いいえ……」

「じゃ、じゃあ……あの、わたし……弱すぎました?」

「いえ」

それじゃ、一体何がアインハルトさんの事を不愉快にさせてしまったのだろうか?

「趣味と遊びの範囲内でしたら、充分すぎるほどに」

「申し訳ありません……。私の身勝手です」

そう言って、アインハルトさんは去ろうとする。

駄目だ!!　今この人をこのまま帰してしまったら……

「あのっ!!　すみません……。今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります!!」

「今度はもっと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか!!」

今日じゃなくても良い――――――。

明日でも来週でも良い!!

アインハルトさんがフィルさんと目あわせをしている。

お願いフィルさん、私にもう一度だけチャンスをください!!

「……ヴィヴィオ」

「は、はい！！」

「その気持ち、嘘偽りはないな」

フィルさんの少し低めの声に、思わず声が裏返ってしまった。
この声の時は、いつもの優しいフィルさんじゃない。
本気の答えを求めているときの声だ。

「はい！！」

わたしがはっきりと自分の意志を伝えると、フィルさんは優しい笑みをして――――――。

「……良い返事だ。よし！！」

フィルさんはパンパンと手を叩き……。

「それじゃ来週、もう一回するとしよう。今度はスパーではなくて、正式な練習試合としてな」

「ああ、そりゃいいっすね！！」

「二人の試合楽しみだ」

「はい」

フィルさん達の方を見ると、ノーヴェがウェンディに絡まれて、困っている感じだった。

「――――――分かりました。時間と場所はお任せいたします」

「ありがとうございます！！」

フィルさんのお陰で、もう一度だけチャンスをもらえることが出来たんだ。
このチャンス絶対に無駄にはしない！！

結局わたし達は、あの後すぐに解散となり、アインハルトさんはフィルさん達が送っていくことになった。

＊　　＊　　＊

１８：４８　高町家

――――――あの人からしたら、わたしはレベル低いのに不真面目で

……。

がっかりさせちゃったんだ……。わたしがよわすぎて……。

わたしだってストライクアーツは『趣味と遊び』だけじゃないけど――――――。

いろんな事を考えていたら、ママから通信が入り……。

「晩ご飯だよ。ヴィヴィオ」

今はママの美味しい御飯を食べて、少しでも元気にならなきゃ！！

「ヴィヴィオ、今日はなんか元気ないね？」

「えっ？」

「そそ、そんなことないよ！！　元気元気！！　ねークリス！！」

クリスと一緒にガッツポーズを取って、何とか元気だとアピールするけど……。

「そお？」

ママの目はごまかせない。
あの目は今のわたしのことが分かっている目だ。

そうだよ――――。

「えっと……。実はね？」

落ち込んでちゃ駄目――――。

「新しく知り合った人と、来週練習試合をするんだ。そのことを考えててちょっとね……」

「そっか。じゃ、しっかり食べて練習して、うんと頑張らなきゃね」

「うん！！」

あの人の――――。

アインハルトさんが求めている物は分からないけど――――。

精一杯伝えてみよう――――。

高町ヴィヴィオの本当の気持ちを！！

# Ｍｅｍｏｒｙ，０７　はじめまして

区民公園　ＡＭ６：０８

わたしとノーヴェは、いつもの日課である朝練をしていた。
軽いウォーミングアップの後、公園の周りをジョキング。
これがいつもの日課になっていた。

「アインハルトのこと、ちゃんと説明していなくて悪かった」

「ううん」

「ノーヴェやフィルさんにも、何か考えがあったんでしょう」

ノーヴェとフィルさんはきっと何かあるからこそ、わたしにアインハルトさんを紹介したんだと思うから――。

そしてわたし達は、ジョキングを止め、池の柵に寄りかかって、ノーヴェの話を聞くことになった。

「あいつさ、お前と同じなんだ。旧ベルカ王家の王族――――――。
『覇王』イングヴァルトの純血統」

「――――そうなんだ」

そっか――――。
ノーヴェから旧ベルカの古流武術を使うとは聞いていたけど、わたしと同じ王家の血を引いていたんだ。

「あいつも色々迷っているんだ。自分の血統とか王としての記憶とか……。でもな、救ってやってくれとかそーゆーんでもねーんだよ。まして聖王や覇王がどうこうとかじゃなくて……」

「わかるよ。大丈夫」

わたしも自分の生まれとか、過去のこととか、いろんな事を思ってきたから――――。

「だけど、伝えあうのって難しいから、思い切りぶつかってみるだけ」

今のわたしに出来るのは、思いっきりぶつかって伝える。
それが一番わたしらしいから――――。

「それに、仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

「ああ、あそこか……。いいかもな」

あの庭に咲く花とか、あの人と一緒にみられたらとっても嬉しい。
それにイクスのことも紹介したいしね。

「悪いな。お前には迷惑かけてばっかりで。本当なら、フィルの方がこういったことはあっているんだけどな。だけど……」

「……うん」

ノーヴェから、フィルさんとアインハルトさんの警察署での会話のことは聞いている。
フィルさんはアインハルトさんのために、自分の過去を知られるのを覚悟で、彼女の力になろうとしていた。

そして、その一部始終を見ていたティアナさんが泣きながら怒っていたことも――――。

「これ以上あいつにばかり負担をかけさせたくないんだ。ヴィヴィオも知っていると思うが、あいつは本当に自分のことを顧みないでやりやがる」

「そうなんだよね――――」

フィルさんは、自分の大切な人達のためなら、自分のことを顧みない。
それは昔から変わらないから。

「だから、あたし達で出来ることは、自分たちでやりたいと思うんだ。その分今回、お前に負担をかけてしまうけど……」

「迷惑なんかじゃないよ!!　友達として信頼してくれるのも」

「指導者(コーチ)として教え子(わたし)に期待してくれるのも、どっちも嬉しいんだもん」

「だから頑張る!!」

フィルさんの負担を減らすこともだけど、何よりわたし自身、あの人に思いを伝えたいから――――。

＊　　＊　　＊

アラル港湾岸埠頭　１３：２０
廃棄倉庫区画　試合時間開始　１０分前

「お待たせしました」

「アインハルト・ストラトス参りました」

「来ていただいてありがとうございます。アインハルトさん」

彼女ヴィヴィオさんが、頭を下げて挨拶をしてくれた。

「本来ならフィルが立会人をする予定だったが、都合がどうしても付かず、あたしがすることになった。ふたりとも異存はないな？」

「はい！！」

「ありません」

「ここはな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可も取ってあるから、安心して全力出して良いぞ」

「うん、最初から全力で行きます」

彼女はデバイスを取り出して――――。

「セイクリッド・ハート　セット・アップ！！」

魔法で変身し、戦う構えを取っていた。
この魔法は、私の使う変身魔法と殆ど一緒。身体強化系の魔法だ。
彼女は本気だ。

「――――武装形態」

本気の相手には、本気でぶつからなくては失礼以外の何者でもない。
私も身体強化の魔法で、肉体を大人の状態にし、戦闘態勢に入る。

「「アインハルトさんも大人モード！？」」

「今回も魔法はナシの、格闘オンリー５分間一本勝負」

そして――――。

「それじゃ試合――――」

ノーヴェさんの右腕が上げられ――――。

「開始！！」

開始の合図がされた。

私は構えを取り、戦闘態勢に入る。
彼女の構えをみて、私は以前と違うと言うことに気づく。

綺麗な構え――――。
油断も甘さもない。

良い師匠や仲間に囲まれて――――。

この子はきっと格闘技を楽しんでいる。

フィルさんはあの時、彼女なら受け止めてくれると言っていたけど――――。

でも、私とは何もかもが違うし、覇王（わたし）の拳を向けて良い相手じゃない。

＊　　＊　　＊

すごい威圧感――――。

一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたんだろう。

彼女の構えやプレッシャーで、それが嫌と言うほど伝わってくる。

勝てるなんて思わない。

だけど――――。

だからこそ、一撃ずつで伝えなきゃ……。

『このあいだはごめんなさい』と――――。

彼女の右ストレートが鋭い早さで、私の身体を捉えようとする。

何とか腕でガードするが、重い一撃のため腕がしびれてしまった。

さらに連撃はつづく。

強い――――。

今のわたしじゃ、相手にならないかもしれない。
だけど、それでも伝えなくちゃ行けないんだ。
わたしの全力――――。

「うわあぁぁぁあああ！！」

私の格闘戦技（ストライクアーツ）！！

わたしはありったけの力で、彼女のお腹に右ストレートを撃ちはなった。
思いを、ありったけ乗せて――――。

＊　　＊　　＊

彼女の一撃を食らってしまった私は、後方へ飛ばされてしまう。
何とか足で踏ん張ったが、それでもかなりのダメージを負ってしまった。
さらに――――。

今度は彼女の速攻が、私を追い詰めていく。

連撃の僅かな隙を突いて、なんとか反撃するが、それでも彼女は自分の身を顧みないで、私の顔面にクリーンヒットをさせてきた。

「っ！！」

「やった！？」

「はぁぁぁあっ！！」

彼女にもダメージをかなり与えているのに、それでも何度も何度も向かってくる。

この子はどうして……？

こんなに一生懸命に……？

師匠や尊敬する人が組んだ試合だから？

友達が見ているから？

分からない……？

＊　　＊　　＊

大好きで大切で――――。

守りたい人がいる――――。

小さなわたしに強さと勇気を教えてくれた――――。

なのはママは、世界中の誰より私のことを幸せにしてくれた。
フィルさんとフェイトママは、そんなわたしを陰から見守ってくれた。

だから――――。

そんな優しい人たちを守るために、強くなるって約束した――――。

あの時――――。

ゆりかごでわたしを命がけで助けてくれたときに――――。

「あああぁっ！！」

強くなるんだ！！

どこまでだって！！

渾身の力と思いを乗せて、わたしは一撃を放った。
だけど――――。

わたしの一撃は、彼女の左腕のプロテクターを破壊しただけで、ダメージにはなっていなかった。

そして――――。

「覇王」

彼女の渾身の一撃が――――。

「断空拳」

わたしの身体を捉え、瓦礫置き場まで吹っ飛ばされてしまった。

「――――1本！！」

「そこまで！！」

＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオ、大丈夫か？」

「怪我はないようです……。大丈夫」

試合が終わり、彼女は先ほどの一撃で意識を失って、変身が解けてしまい、
付き添いの女性の膝元で眠ってしまっていた。

「アインハルトが気をつけてくれたんだよね。防護（フィールド）を抜かないように」

「ありがとっス、アインハルト」

「「ありがとうございます」」

「ああ、いえ……」

正直紙一重だったから、うまくいくかどうか分からなかったけど、
怪我をさせなくて良かった。

と思っていたら……

「……！？」

「おっと……。大丈夫？」

先ほどまでいなかった、金色の長い髪の女性に支えられていた。

『フェイトさん！？』

「フェイトさん、どうしてここに！？」

「実はね……。心配になって出張から戻ってきて、すぐにこっちにやってきたんだ。フィルも来ているよ」

『ええっ！！』

そう言われ、女性の向いている方を見てみると――――。

「よっ、どうやら決着が着いたみたいだな」

『フィル　（さん）！？』

そこには黒髪の男性、フィルさんの姿があった。

さっき、ノーヴェさんの話じゃ、ここには来られないと言ってたのに……？

「思ったより早く仕事が終わってな。ちょうどフェイトも帰ってきていたから、心配になって様子を見に来たんだ。ノーヴェに任せきりじゃ悪いからな」

「こんな事言ってるけど、フィルは朝からフル活動で働いていたんだよ。それで無理言って早退してきたんだから……」

「……そういうことは言わなくて良い」

「ふふっ♪」

この二人、本当に相手のことを信頼しあっているのがよく分かる。ちょっとした言葉で、フィルさんの口調がいつもと違うのが感じられる。

どこか優しさを感じる口調――――。

そんな感じだ。

「すみません……。もう大丈夫です」

何とか立ち上がろうとしたが――――。

「おっと……。無理するな」

今度はフィルさんに抱きかかえられてしまった。
さっきの何倍も恥ずかしいです。

「ラストにカウンターが掠っていて、それが時間差で効いてるんだ。じっとしてろ」

「フィルの言うとおりだよ。今はじっとしていてね」

「……はい」

これ以上無理しても、二人に申し訳ない。
私はお二人の御厚意に甘えることにした。

＊　　＊　　＊

「断空拳は、さっきのが本式なのか？」

「足先から練り上げた力を、拳足から打ち出す技法そのものが『断空』です」

私は、まだ極めていないため、拳での直打と打ち下ろしでしか撃てない。

「なるほどな……。で、ヴィヴィオはどうだった？」

フィルさんは、彼女のことを聞いてきた。
彼女と戦って、私が感じたこと――――。

それは……。

「彼女には謝らなくてはいけません。先週は失礼なことを言ってしまいました。――――訂正しますと」

「そっか……」

その答えにフィルさんの表情も綻んでいる感じがする。
この人は、こんな感じで笑うこともあるんだ。

「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

ノーヴェさんも同様に笑顔で答えてくれた。

確かに彼女は覇王（わたし）が会いたかった聖王女じゃない。

だけど、私は、この子とまた戦えたらと思っている――――――。

だから――――――。

「はじめまして……。ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

私は彼女の手を取って、自分の名前を伝えた。

「アインハルト、それ起きているときに言ってやれ」

「……恥ずかしいので、嫌です」

フィルさんは、ああ言っているけど、まだ私には面と向かって言うのは恥ずかしいんです。
今はこれで許してください。

「さてと、ヴィヴィオもアインハルトも、どこかゆっくりと休めるところへ連れて行こう」

「そうだね。ヴィヴィオは私が運ぶから、フィルはアインハルトをお願い」

「了解。ヴィヴィオのことはそっちに任せるよ、フェイト」

そう言って金髪の女性、フェイトさんはヴィヴィオさんをそっと抱き上げ、自分の乗ってきた車の方へ運んでいった。

そして――――――。

「ほら、アインハルト」

「えっ？　わわっ！？」

フィルさんは、私にメットを放って、それを何とか受け取る。

「乗りごこち悪いバイクで悪いが、家まで送ってくよ」

「すみません……」

「気にするなって、可愛い女の子を放っておくわけにはいかないだろう」

フィルさんはウインクをして、おどけた口調で言ってきた。

言った後、顔を真っ赤にしているのがちょっとびっくりです。

「か、可愛いって……。わ、私が……ですか？」

「充分可愛いと思うよ。まぁ、こんなふざけた言い方をしたら、信じられないと思うけどな。でも、ヴィヴィオもアインハルトも女の子なんだから、無理しないこと！！」

今度はさっきと違って、真剣な表情と口調で言ってきた。
この人は、やっぱりこっちの性格が本来の性格なんだ。

真面目で、人のために自分のことを顧みない。
でも、ちょっと悪戯好きなところもある。
さっき私に言ってきた言葉が、それを感じさせる。

「ふふっ、はい。それじゃ、あんまり無理はしないようにします」

「そっか……」

きっと、この人は私なんかより、いろんな経験もしてきたんだ。
こないだは感情的になっていて、考えもしなかったけど、ちょっと考えれば分かることだ。

いつか、この人と戦ってみたい。

覇王とか関係無しに、私自身――――。

アインハルト・ストラトスとして――――。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０８　ブランニュー・ハート（前書き）

今回は第2部始まって以来の長い話です。
普段もこれくらい書ければいいのですが――――。

戦闘がない日常は、本当に書きやすいです！！

# Ｍｅｍｏｒｙ；０８　ブランニュー・ハート

ｐｉｐｉｐｉ

「ん……朝か」

目覚ましの音で、目が覚めカーテンを開けると、空も晴れ渡っていて、最高の天気だった。

「というか、この目覚ましはちょっと勘弁して欲しいよな……」

というのも、目覚ましは普通の目覚ましじゃない。
フェイトがマリーさんに頼んで、特別に作ってもらった2頭身のフェイト型目覚ましだ。

最初の目覚ましで起きなかった場合、今度はフェイトの声が入ったメッセージでおこされるんだけど、そのメッセージが、かなり照れてしまう物が入っているから質が悪い。

だから俺はメッセージが再生する前に、目覚ましを止めるのが日課になってしまったのだ。

「さてと、あんまりダラダラしていたら、フェイトが直接起こしに来てしまうからな」

俺は普段着に着替え、フェイトが待つキッチンに降りていった。

「おはようフィル。朝ご飯出来ているよ」

「ああ……。いつもありがとうな」

「ふふっ、どういたしまして♪」

テーブルを見ると、サラダとパンとスクランブルエッグ、後はコーンスープが並んでいた。

どんなに忙しいときでも、朝ご飯は欠かしたことはない。

基本的に食事はフェイトが作ることが多い。最初の頃は俺がやっていたんだけど、フェイトが『フィルにばかりやらせてたら、奥さんとしての立場無くなっちゃうから!!』ということで、今ではフェイトが作ってくれることが多くなってる。

「「いただきます」」

俺たちは席について、朝ご飯を一緒に食べる。

相変わらずフェイトの作る御飯は美味しいよな。味とかもそうなん

だけど、何より優しい感じがするんだよね。

身内贔屓と言えばそれまでなんだけど、でも俺はフェイトと一緒にいるこの時間が大好きだ。

「そう言えばフィル。今度の週末、お休みとれそう？」

「ああ、それは大丈夫。今日の仕事が終わったら、休暇はもらえるように交渉済みだ。前々から言っていたし、元々メカニックは副業だしね」

「でも、執務官をやっていた頃と同じくらい忙しいよね。フィルの場合」

「た、確かに……。命の危険が少ないだけで、労働時間はそう変わらないかも……」

執務官を休職中、俺はいろんな資格を取り、様々な仕事を手伝っていた。

無限書庫の司書やマリーさんの助手。さらにシャーリーさんとデバイス作成。

こういったことをやっていたら、いつの間にかバイトではなく、本業以上にやるようになってしまった。

でも、さすがにそろそろ執務官として復帰も考えなきゃいけないから、副業も控えないとな――――――。

「でも、私はフィルが無茶をしなくなった分、今のままでも良いかなっておもうんだ。フィルが執務官をしていたときは、私もティアナも本当に心配していたんだからね」

「……ぐっ、反論出来ない」

「フィル、もうマリアージュ事件の時のような無茶はしないでね。あの時のことは、ティアナも私も本当に悔やんでいるんだよ。フィルに無茶させてしまったことに……」

「……ああ」

マリアージュ事件

あの事件は、ティアが執務官になって、最初に本格的に担当した事件だった。
あの時はスバルやギンガさん、そして俺が一緒に協力することになったんだけど、
イクスを助けるとき、スバルが負傷してしまい、それを助けに行ったとき、俺自身もかなりの負傷をしてしまった。

マリアージュを全て片付けたのは良かったが、魔力を殆ど使ってしまい、さらに二人をかばうために、瓦礫の下敷きになってしまった。

ティアがスターライトブレイカーで救出口を作って、何とか俺たちは助かることは出来たけど、その時の怪我と今までの無茶がたたっ

て、当分の間は戦闘禁止を言い渡されてしまった。

なにより、あの時――――――。

病室で泣きじゃくっていたフェイトとティアの姿を見たら、俺が二人をどんなに傷つけてしまったのかを痛感した――――――。

だから、俺はしばらくの間執務官を休職し、身体を休めることにしたのだ。

そのお陰で、いろんな事を学び、いかに自分がまだまだ未熟だったかを知ることが出来たしな――――――。

「あの事件以来、フィルが私とティアナの補佐的なことをしてくれたおかげで、私達は安心して任務をすることが出来てるしね」

「今の俺には、二人のサポートをすることしかできないからな。だから、二人がちゃんと帰ってこられるようにするのは、当たり前のことだ」

「……そのおかげで、最近ティアナに、奥さんとしての立場を取られそうになってるけどね」

フェイトが思わず苦笑いでそう答えた。

確かに最近、ティアはフェイトが出張でいないときは、フェイトの代わりに、色々と手助けをしてくれる。

ある意味、奥さんであるフェイトよりも俺の近くにいることが多くなっている気がする。

「あのね……」

「だから、私もっと頑張って、フィルの奥さんは私なんだって事を、ちゃんと分かってもらわなくちゃね！！」

フェイトが可愛く握り拳を作って、ガッツポーズをして意思表示をする。

「だったら、俺も、もっと頑張らないとな。奥さんが頑張ってるのに、旦那がちゃらんぽらんじゃかっこ悪いからな……」

「……フィル」

俺たちはお互いを見つめ合う――――――。

言葉は要らない――――――。

今はお互いが一つになりたい。ただそれだけ――――――。

「ん……んんっ……」

俺たちは口づけをかわし、さらに深く求め、互いの口を蹂躙する。
その度に、お互いの心が解け合う感覚にとらわれ、その快楽に身を任せていた。

数分間味わった後、俺たちは唇を離し、名残惜しむ。

「ねぇ……」

フェイトが瞳を潤ませ、こちらに熱い視線を送ってくる。
夜なら、このまま寝室に行ってお互いを求め合うが、さすがに朝からそんなことはしてはまずい。

「今は、これくらいにしておこう。後は夜……でな……」

「……うん」

正直、俺もしたい気持ちでいっぱいだけど、それはいろんな意味でよろしくないからな。

「じゃ、仕事場に行ってくるよ」

「待って、途中まで一緒に行こう。たまには……良いでしょう？」

「そうだな……。フェイトは今週からお休みだし、たまには良いか」

「うん♪」

食事も食べ終わり、後片付けをした後、俺たちは外に出て、愛車のエンジンをかけに行く。
今日は車で行きたい気分なので、ロードサンダーではなく、俺の愛車のスポーツカーで行くことにした。

「さて、久しぶりにこいつを動かすとしますか」

ガレージの中にある車は三台。
フェイトの仕事用の黒のスポーツカー。
なのはさん達と一緒に行動するときに使う高級ワゴン車

そして――――――。

「やっぱ、地球の古い車は、デザインが良いよな……」

ボンネットの前方中心にある『ＸＸ』のエンブレム。
フォルムは無駄が無く、リトラクタブルヘッドライトでスタイルを阻害する物が全くない。

例えるなら、地球の日本刀のような鋭いスタイル。
その美しい白の車の名は――――――。

『ＴＯＹＯＴＡ　ＣＥＬＩＣＡ　ＸＸ』と言う。

「あいかわらず、この車はすごいね……」

「ああ、これはわざわざ地球まで行って買ってきた車だからな。俺のお気に入りだよ」

実は、フェイトが持っていた車雑誌に載っていたのを、たまたま見つけて、どうしても欲しくなって、わざわざ地球まで行って買ってきたのだ。

だけど、ミッドチルダの燃料じゃ、そのままじゃ動かすことは出来ないので、マリーさんと俺が半年をかけて、レストアをして、こっちでも使えるようにしたのだ。

外見以外、中身は殆ど入れ替えなので、性能的にはフェイトが持っている車と大差がないマシンになってしまった。

「じゃ、早速出発するか」

「そうだね」

俺たちは車に乗り込み、エンジンかけると、〝ブロロロン〟とマフラーから爆音を奏でる。

その音は、ターボではなく、ＮＡエンジンならでの重低音。
車乗りにとっては、最高のサウンドだった。

「じゃ、いくぞ！！」

俺はギアをローギアに入れ、ホイルスピンをさせながら発進した。

＊　　＊　　＊

「そういえばヴィヴィオ。新しいお友達。アインハルトちゃんだって？　ママにも紹介してよ」

「んー、お友達っていうか先輩だからねー。もっとお話したいんだけど、なかなか難しくて」

「そっか」

そう――――――。

出会ったのは少し年上の女の子。

中等科の一年生、アインハルト・ストラトスさん。

アインハルトさんは、すごく強い格闘技者で、真正古流ベルカの格闘武術、覇王流（カイザーアーツ）の後継者。

それからベルカ諸王時代の王様。覇王イングヴァルト陛下の正統な子孫。

「あっ！！　アインハルトさん」

「はい」

「ごきげんよう、アインハルトさん」

「ごきげんよう、ヴィヴィオさん」

わたしもこないだ試合させてもらったけど、まだまだ全然敵わなくて――――――。

できれば今よりももっと仲良くなって、一緒に練習したり、お話ししたりしたいんだけど――――――。

「――――ヴィヴィオさん、あなたの校舎はあちらでは？」

「あ！！　そ、そうでしたっ！！」

しまった……。
アインハルトさんと一緒に登校しているうちに、初等科の校舎を通り過ぎちゃったよ！！
まわりの先輩にくすくすと笑われてるし、恥ずかしい！！

「それでは」

「あ」

アインハルトさんは、くるっと向いて校舎の中に入っててしまった。

「ありがとうございます。アインハルトさん」

中々上手くいかなったりしてますが――――。

「――――遅刻をしないように」

「気をつけてくださいね」

それでも――――。

「はいっ！　気をつけます！！」

何気ない一言が嬉しかったりと、そんな一喜一憂の日々だけど
今はもう無くなってしまった旧ベルカの出身同士――――。

『強くなりたい』格闘技者同士。
触れあえるときはきっとあるから……。

「……ていうかー」

「今日も試験だよー！！　大変だよー！！」

「そうなんだよね～～！！」

実は、初等科も中等科も、ただいま一学期前期試験の真っ最中です。
コロナはこういったことが得意だから、そんなに慌てていないけど、
わたしとリオは、試験が大の苦手です。

「でも、試験が終われば土日と合わせて、４日間の試験休み」

「うん！！　楽しい旅行が待ってるよ！！」

「宿泊先も遊び場も、もう準備万端だって！！」

「「おおー！！」」

今回のお休みは、ママ達の引率でみんな一緒に異世界旅行！！
しかも、今回はフィルさんが企画しているところもあるから、とっても楽しみです！！

「よーし、じゃあ楽しい試験休みを笑顔で迎えるために！！」

「目指せ１００点満点！！」

「「お――――――っ！！」」

せっかくの楽しい旅行が待っているんだ。
今は頑張って良い結果を出さなくちゃね！！

＊　　＊　　＊

同時刻　高町家

「エリオ、キャロ、そっちはどう？」

『はい、さっき無事に引き継ぎが終わりました』

『予定通り、週末からお休みです！！』

高町家で私は、なのはと一緒にエリオ達に、週末の休みが取れたかを確認するために通信を入れていた。

どうやら無事休みが取れそう。

「そう、よかった！！」

「じゃ、予定通りみんなで行けるね。春の大自然旅行ツアー＆」

「ルーテシアも一緒にみんなでオフトレーニング！！」

こうやってみんなで揃うのは久しぶりだもんね。

フィルはルーテシアやエリオ達とは頻繁にあっているけど――――。

＊　　＊　　＊

同時刻　ナカジマ家

「みんなで旅行。あたしもいきたかったッス～～～！！　ノーヴェとスバルだけってズルイっス～～！！」

「あーうるせーな。あたしらだって別に遊びに行く訳じゃねー。スバルはオフトレだし、あたしはチビ達の引率だ」

「とかいって、通販で水着とか川遊びセットを買ってるのを、おねーちゃんがしらないとでも？」

「！！！」

「なんだ。そうなのか」

ちょっとまたんかい！！

ディエチ、なんでお前がその箱を持っているんだ！！

そして、なんで中身を知っているんだよ！！

「おまえヒトの物勝手にッ！！」

「いや、配送データに中身書いてあるし……」

そう言われてみると、確かに思いっきり書いてあった。

くそっ！！　中身を書かないでくれとするべきだった！！

「まあ、いいじゃない。ノーヴェはバイトと救助隊の研修も頑張ってるんだし」

「まったくだ」

「だから遊びじゃねーって」

普段はチンク姉はこういったことは言ってこないのに、たまにフィルみたいにからかってくることがある。

ある意味チンク姉とフィルって、似たもの同士かもしれない――――。

「そういえばあの子……。アインハルトも一緒か？」

「そのつもり、これから誘うんだけどね」

早速あたしはアインハルトに通信を入れることにした。

それとウェンディ、いい加減にあたしから離れろ！！

さっきからうっとうしいぞ！！

「合宿……ですか？」

「すみません……。私は練習がありますので……」

アインハルトの答えは、あたしの予想通りの物だった。
だけど、これであたしが退くと思ったら大間違いだ。

「だからその練習のために行くんだって！！　あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオも来る。それに何よりフィルの奴も来る！！　練習相手には事欠かねー。しかも！！」

「魔導師ランクＡＡからオーバーＳのトレーニングも見られる」

「はい……」

おっ、フィルの名前と、トレーニングのことを言ったら少し食いついてきたな。
よし、もう少しだ！！

「ついでに歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とかも持っているお嬢もいる。まぁたった４日だ。だまされたと思って来てみろって。つまんなかったら、走り込むなり、一人で練習するなりしてもいいんだし」

「あ、あの……」

「良いから来い！！　絶対に良い経験になる！！」

今回のことは絶対アインハルトの奴に良い経験になる。
せっかくのチャンスを生かさない手はない！！

「詳しいことは後でメールすっから、とりあえず今日の試験頑張れな」

「……はい……」

ちょっと強引だったけど、これであいつも来るだろう。
それにヴィヴィオやフィルと一緒にいれば、あいつの視野ももっと広がるしな。

「ノーヴェのああ言う強引さって、つくづくスバルと姉妹だよねぇ」

「ああ……そうだな」

「ううー　あたしも行きたかったッス～」

＊　　＊　　＊

そして――――。

そんなこんなで試験期間も無事終了。

「試験終了おつかれさま」

「みんなどうだった？」

「花丸評価を頂きました！！」

「３人揃って」

「優等生です！！」

わたし達、３人ともテストは９割以上キープ。
成績は上位を取って、無事試験を突破しました！！

「わーみんなすごいすごーいっ」

「これならもう堂々とお出かけできるね」

「よくやったな３人とも」

だって、この旅行のために一生懸命頑張ったもん。
これで赤点を取りましたなんて言ったら、なのはママ達とフィルさんに大目玉だもん。

「じゃ、リオちゃんとコロナちゃんは、一旦おうちに戻って準備しないとね」

「「はいっ」」

《Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ》

「ありがとうレイジングハート」

「おうちの方にもご挨拶したいから、車出すね」

「あ、じゃあ準備をすませてわたしも行く！！」

わたしが着替えに行こうとしたとき――――――。

「あーヴィヴィオは待ってて。お客様が来るから」

「おきゃくさま？」

一体誰が来るんだろう？

わたしにおきゃくさまって……？

そう思っていたら――――――。

ピンポーン

《Ｉｔ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｈａｖｅ　ｃｏｍｅ．（いらっしゃったようです）》

チャイムが鳴り、玄関に行ってみると――――――。

「こんにちは」

「よう」

「アインハルトさん!?　とノーヴェ!!」

そこにはアインハルトさんとノーヴェが一緒に来ていた。

「異世界での訓練合宿のことで、ノーヴェさんにお誘いを頂きました」

「同行させていただいても、宜しいでしょうか？」

「はいッッ!!　もー全力で大歓迎です!!」

まさか、アインハルトさんと一緒に行けるなんて夢にも思わなかっ

た！！
フィルさんの方を見ると、クスクスと何かうまくいったという笑みを浮かべている。
もしかして、フィルさんとノーヴェが、アインハルトさんに！？
やられた！！
こんなサプライズを用意してあったなんて！！

「ほら、ヴィヴィオ。上がってもらって」
「あ、うん！！」

いけない――――――。
ここが玄関だって事をすっかり忘れていた。

「アインハルトさんどーぞ！！」
「お邪魔します」

うわぁ……。
まだ胸がドキドキしているよ。

「あの子が同行するって、教えなかったの正解だねノーヴェ」

「はい。予想以上に」

わたしはアインハルトさんをリビングに案内し、ソファーの埃も払い、周りも綺麗にする。

「「こんにちは」」

リオとコロナが挨拶した後――――――。

「はじめましてアインハルトちゃん」

なのはママがアインハルトさんに自己紹介をしていた。
考えてみれば、これが初対面なんだよね。
フェイトママとフィルさんは会ったことがあるけど――――――。

「ヴィヴィオの母です。娘がいつもお世話になってます」

「いえ……。あのこちらこそ……」

「格闘技が強いんだよね？　凄いねぇ」

「は、はい……」

ママがいつもの押しで、アインハルトさんの手を握って話していた。

「ちょ、ママ！！　アインハルトさん物静かな方だから！！」

「えー？」

うちのママ、積極的なのは良いのですが、時々強引なところもありますから、とっても困ってしまいます。

アインハルトさんが、ビックリしてしまっていなければいいのですが――――――。

「さて、ここから出発するメンバーは揃ったな」

「そうだね。それじゃ、途中でふたりの家に寄って、そのまま出かけちゃおうか」

「「「はぁ――――――い！！」」」

「あ、ヴィヴィオ、着替え着替え！！」

しまった。

そのことをすっかり忘れていた！！

「クリス、手伝って！！」

わたしは急いで部屋に戻って、服を着替えに行った。

「賑やかになりそうですねー」

「ああ」

「ノーヴェさん、そういえばスバルさんたちは別行動なんですか？」

「スバルは次元港で待ち合わせ。ちょうど仕事終えてるころじゃねーかな」

＊　　＊　　＊

同　特別救助隊オフィス

「それでは司令！！」

「スバル・ナカジマ防災士長。本日只今より、４日間の訓練休暇に入ります！！」

「おう、頑張ってこいや。今回の訓練は例の執務官殿二人と一緒だ

ったか？」

「はい。ランスター執務官とグリード執務官と一緒に、色々鍛え直してきます！！」

久しぶりのフィルとの訓練。

フィルはこの訓練次第で、また執務官に復帰するかを考えるらしい。

あたし個人としたら、これ以上無茶はして欲しくはないんだけどね。

＊　　＊　　＊

本局　次元航行部第３オフィス

「オフトレとはいえ、本格的な戦闘訓練はちょっと久しぶりよね」

「気合い入れなきゃ！！　ヴィヴィオやアインハルト達にダメなところは見せられないし！！」

《Ｙｅｓ　ｍａｓｔｅｒ》

それに、フィルも今回の訓練は参加する。

本当なら、もう少し休んでいて欲しかったけど、でも、半年間よく休んでくれたという方が正しいわね。

だから、あたしもフィルに負けないように、仕事でフェイトさん以上のパートナーになれるように頑張らなきゃね。

「でも、その前にこのデータ整理を終わらせなきゃ！！」

《Ｌｅｔ' ｓ　ｗｏｒｋ　ｈａｒｄ　（がんばりましょう）》

＊　　＊　　＊

無人世界カルナージ　アルピーノ家

「じゃ、それで人数確定ね」

『はい。すみません、メガーヌさん。４日間お世話になります』

事前にフィルから聞いていたので、準備の方は万全にしてある。

一人二人増えたところで、どうってことはない。

「いいえ～♪　じゃ待ってるわね～」

さてと、これから大忙しになるわね。
ルーテシアも、このためにロッジの改装や温泉設備の増築、訓練場の新築を張り切ってしていたものね。

訓練場の新築は、時々フィルに聞いていたりしていたけど、その他はあの子が全部やったんですものね。

元六課の皆さん、そしてフィル。

アルピーノ家のおもてなし、存分に楽しんでくださいね！！

＊　　＊　　＊

「さて、サンダー出発するぞ」

《了解です》

ワゴン車は7人乗りなのだが、一人分のスペースは荷物置き場になるため、俺は自分のバイク『ロードサンダー』で空港に行くことになった。

そしてエンジンをかけようとしたが――――。

キュルルルルル

「あれ？　かからないぞ？」

もう一度キーを回して試してみたが、結果は同じだった。

一体どういう事だ？

昨日もちゃんと整備して、準備万端にしたはずなのに？

《どうやら、電気系統の故障のようですね。数十分あれば直りますが、今からですと時間がありませんね》

サンダーに自己診断プログラムでチェック入れてもらったら、ヒューズが切れていて、交換するのにはちょっと時間が足りない。

「しかたがない。俺はみんながカルナージに着いてから、ワープで合流するか？」

さすがに荷物置き場の所をどかすわけにはいかないし、もう一台車を出すのは効率が悪いしな。

そう思っていたら――。

「あの……。どうしたんですか？」

コロナが車から降りてきて、こっちにやってきた。

「ああ、コロナ。ちょっとサンダーの調子が悪くてな……」

「そうですか……」

＊　　＊　　＊

フィルさんがバイクを弄っていて、中々エンジンがかからないのに気づいて来てみたら、そんなことになっていたんだ。

「こうなったら……俺は後で出発するしかないな」

「えっ……？」

そんな――――。
せっかくの旅行なのに、フィルさんだけ後で一人で来るなんて――――。
何か良い方法は……？

「あ、あの……。フィルさんが良かったら、わたしの席に座りませんか？」

「だけど、それじゃコロナは……？」

「ですから……その……」

「？」

恥ずかしいよ……。
でも、これしかフィルさんと一緒に出かけられないから、ファイトだよ、わたし！！

「フィルさんの……ひ、ひざに……座らせて……もらえ……ませんか……」

きっと今顔は真っ赤になっているよ。
フィルさんも、いきなり何を言ってるんだと思うよね。

「……良いよ。っていうか、俺の膝で良いのか？　何なら効率は悪いけど、車は出すから」

「良いんです！！　みんなで一緒に行った方が楽しいですし、それに……」

「フィルさんだけ、一人だなんて……嫌ですから」

「コロナ……」

一人でも大丈夫だなんて、そんなこと絶対にない！！
フィルさんは、一人でも行ける手段はいくらでもあると思う。
だけど、フィルさんだけ一人にするなんて、わたしは嫌だから――。

「……それじゃ、お言葉に甘えさせてもらうよ。コロナ」

「はい♪」

結局、ワゴン車についたわたしとフィルさんは、途中までフィルさんの膝に座ってフィルさんと一緒に楽しい会話をしていたんだけど、

リオとヴィヴィオの『いいないいな～』の視線に負けてしまい、交代で座ることになりました。

フィルさんは、誰の時でも笑顔で対応してくれて、一緒にいるときは本当に楽しかった。

リオもヴィヴィオも、本当に心から笑っていて、ワゴン車内は笑い声で溢れていた。

やっぱり旅は、こうやってみんなで楽しまなきゃ！！

＊　　＊　　＊

同時刻　グリード家

《どうやら、相棒は行ったようですね……》

本当は故障なんてしてはいない。

相棒が念入りにチェックを入れて、私も自己解析でやっているんですから――――。

《たまには相棒はみんなと一緒に行って、輪の中で楽しんだ方が良いんです。いつも裏方ばっかりしてるんですから……》

コロナさんが来るのは予想外でしたけど、ああやって相棒のことを見てくれたのはとても嬉しかったです。

少女ながら、本当に優しい心の持ち主なんだと思います。

《いつかあの子達が、免許を取ったら、私を運転させてあげたいですね……》

普通のバイクに乗せるより、私がバイクのすばらしさを、たっぷりと教え込みますよ。

そして、みんなでツーリングとかもしてみたいです。

相棒、みなさん、良い休暇を！！

## Ｍｅｍｏｒｙ；０８　ブランニュー・ハート（後書き）

セリカＸＸ　諸元表（１９８５年版）

車両形式：Ｅ－ＧＡ６１

全長：４６６０
全幅：１６８５
全高：１３１５

原動機型式：１Ｇ－ＧＥＵ
排気量：１９９８
最高出力（ＰＳ／ｒ．ｐ．ｍ）：１６０／６４００

基本スペックは弄ってませんが、足回りは完全にフルチューンをしてますので、外見はノーマルでも、中身はレーシングマシンに近いかもしれません。

# Ｍｅｍｏｒｙ；０９　少しだけ、一緒に歩けたら

無人世界カルナージは、首都クラナガンから臨行次元船で約４時間。
標準時差は７時間。

一年を通して温暖な大自然の恵み、豊かな世界。
その世界に住むアルピーノ親子の所に、今回お世話になることになった。

「みんな、いらっしゃ～い♪」

「こんにちはー」

「お世話になりまーすっ」

「すみません、こんな大勢で……」

本当なら、女性ばかりのメンバーだから、俺は抜けても良かったんだけど、それをヴィヴィオ達に言ったら、えらい剣幕で怒られたからな……。

「みんなで来てくれて嬉しいわー。食事もいっぱい用意したから、ゆっくりしていってね。特にフィル」

「あっ、はい？」

「この４日間は、仕事のことは忘れなさい。せっかくのお休みなんですからね」

「そう……ですね」

ここ最近、こんな風に休めるときがなかったからな。
ここはメガーヌさんのお言葉に甘えるとしよう。

＊　　＊　　＊

「ルーちゃん！！」

「ルールルー！！　久しぶり～！！」

「うん、コロナ、ヴィヴィオ。そういえば、リオは直接会うのは初めてだね」

「今までモニターだったもんね」

リオとは通信では何度もやりとりをしていたけど、こうして合うのは初なんだよね。

「うん、モニターで見るより可愛い」

「ほんとー？」

私はリオの頭を撫でてあげると、照れながらとっても可愛い笑顔で応えてくれた。
コロナもそうだけど、本当に素直で可愛いんだよね♪

「あ、ルールー！！　こちらがメールでも話した……」

「アインハルト・ストラトスです」

ヴィヴィオが紹介してくれたのは、碧銀の女の子。
この子が、ヴィヴィオが話していた女の子ね。

確かに物静かな女の子って感じかな――――――。

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオの友達で１４歳」

「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ」

「えっへん」

といっても、無限書庫で司書のバイトをやっているフィルさんには敵わないんだけどね。
でも、普通の人よりはいっぱい知っているんだよ。

「あれ、エリオとキャロはまだ来ていないんだ？」

「ああ、ふたりは今ねぇ」

スバルさんが二人のことを探していると――――――。

「こんにちは！！」

「おつかれさまでーすっ！！」

『エリオ、キャロ♪』

実は、みんなより数時間前に着いていて、少しだけお手伝いをしてもらっていた。
最初は断っていたんだけど、エリオが「ルーにだけ、負担をかけたくないから」と言ってくれて、そのお言葉に甘えて薪割りをお願い

をした。

キャロもエリオだけにさせるのは悪いと言って、エリオの手伝いをしてくれていた。

本当なら、お客さんなんだから、そんなに気を遣わないで欲しいな。

「わーお！！　エリオまた背伸びてる！！」

「そ、そうですか？」

「わたしもちょっと伸びましたよ！？」

この数年、エリオは本当に大きくなっている。

六課時代なんて、今のキャロくらいだったのにね。今は、私と殆ど同じくらいだけど、あと2～3年もすれば、背丈はフィルさんくらいになっていくんだろうな。

恋人としては、彼氏が格好良くなるのは嬉しいしね♪

そして、そんなエリオ達を、フェイトさんがアインハルトに紹介していた。

「アインハルト、紹介するね」

「あ、はい」

「ふたりとも私の家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

こうして二人が一緒にいると、本当に仲の良い兄妹って感じなんだよね。

「一人ちびっこがいるけど、3人で同い年」

「なんですと!?　1．5?も伸びたのに!!」

「あ、あはは……」

エリオが私の言葉に苦笑いをしてる。
しょうがないでしょう。キャロって、本当におもしろい反応を見せてくれるんだから、これでからかうなってのは無理でしょう。

フィルさんは、こういった人の事を馬鹿にする言葉は大嫌いなんだけど、私が本気で言ってないって事は分かってるから、それを止めたりはしない。

キャロもこの数年、私とのやりとりで大分揉まれたので、このくらいのことで凹んだりはしなくなった。

「ど、どうも、アインハルト・ストラトスです」

「うん」

「よろしくね、アインハルト」

現にキャロはもう立ち直って、アインハルトと自己紹介をしあっていた。

そろそろ、魚を捕りに行ったガリューが戻ってきても良いんだけど――――――。

そう思っていたら、草をかき分ける音がして、そっちを見ると、ガリューが魚を捕ってかえってきたみたい。

「！？」

ガリューを見て、アインハルトが、ファイティングポーズを取って、身構えてしまっている。

「あー！！　アインハルトさんごめんなさい！！　大丈夫です！！」

「あの子は……」

あっ、しまった！！
コロナ達は知っていたけど、アインハルトはガリューのことは知らなかったんだ。
だから、さっきガリューを見て構えてしまったんだ。

「ごめんね。ちゃんと紹介しておくね。私の召喚獣で大切な家族。ガリューって言うの」

私の声でガリューは頭を下げて、挨拶をする。

「し、失礼しました」

「わたしも最初はびっくりしましたー」

コロナも最初ガリューを見たときは、ビックリしていたからね。
ああなっちゃうのはしょうがないかな。

でも、セイクリッド・ハートがファイティングポーズを取っても、全然こわくも何ともないから、可愛いとしかいえないんだよね。

＊　　＊　　＊

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ。子供達はどこに遊びに行く？」

「やっぱり、まずは川遊びかなと、お嬢も来るだろ？」

「うん！！」

「アインハルトもこっちに来いな」

「えっと……」

アインハルトがこっちを見て、どうしようか迷っている。
正直言って、なのはさん達と一緒のトレーニングは、まだアインハルトには向いていないと思う。

「今回はノーヴェ達と一緒にいってきな。ヴィヴィオ達も喜ぶしな」

「はい……」

「あれ？　フィル。あんたはこっちのトレーニングに参加しないの？」

ティアは、俺がトレーニングに参加する物だと思っていたから、驚いて、こっちに訊いてきた。

「ああ、とりあえず午前はメガーヌさんと一緒にお昼の支度をして、午後の訓練から参加させてもらうよ」

「本当に大丈夫？　午後の訓練かなりハードになるから、身体ならしておいた方が良いよ」

フェイトが心配して言ってくれるのはありがたいのだが、なにせこれだけの人数の食事を用意するのに、メガーヌさん一人にさせるのは大変だからな。

「大丈夫、それまでにはちゃんと慣らしをしておくよ」

「そっか……」

正直、あのメンバーを相手に、いきなりやるのはきついかもしれないけど、俺だってこの半年間何もしなかった訳じゃない。

フェイトやティアに隠れて、自己鍛錬はしてきているんだ。

後は実践感覚を取り戻すだけだ――――。

「じゃ、お昼はフィルとメガーヌさんに任せて、わたし達は着替えてアスレチック前に集合しよう！！」

「「「「「はいっ！！」」」」」

「こっちも水着に着替えて、ロッジ裏に集合！！」

「「「「「は――――――いっ！！」」」」」

こうして、なのはさん達はトレーニングに、ノーヴェ達は川に遊びに行くことになり、残った俺とメガーヌさんは、ロッジでお昼の支度をすることになった。

＊　　＊　　＊

「でも、本当によかったの？　みんなと一緒に行かなくて？」

今俺たちは、昼ご飯のバーベキューとカレーを用意している。
野菜を切る作業はそんなでもないけど、さすがにこれだけの人数のカレーを用意するとなると、結構力作業になるからな。

「これで俺までどっちかに行ったら、メガーヌさんの負担がきついですよ」

俺が今、みんなのために出来ることといったら、これくらいしかな

い。
元々俺はサポートを特化する人間だ。
だから、こうしてみんなが楽しんでくれれば、それが何より嬉しいから――――――。

「やっぱり……優しいわねフィル。こうやって、心配してくれるのは嬉しいけど、あなたも楽しんでもらわなくちゃ、何の意味もないのよ。だから……」

メガーヌさんは、俺の肩に手を置き、そして――――――。

「後のことは心配しないで、フィルもヴィヴィオ達の所に行ってあげて。トレーニングは、後でも出来るけど、あの子達と一緒にいてあげられる時間は、とっても少ないんだからね」

「メガーヌさん……」

「ささ、分かったら、さっさと合流してあげなさい！！」

そうだな――――――。
せっかく、こうやってみんなと一緒に来ているんだもんな。
たまには、羽を伸ばすのもいいかな――――――。

「……分かりました。それではお言葉に甘えさせてもらいます」

「よろしい♪」

「じゃ、ガリュー。カレーの仕込みは任せるぞ。後は時間まで焦がさないようにしていてくれればいいから……」

ガリューは俺と交代して、大鍋をかき回して、焦がさないように丁寧に作業をする。
これは普段からガリューも炊事をしているな。手つきを見ていればそれは分かる。

「さてと、水着を持って行かないとな……」

俺は自分の部屋に戻り、水着を持ってヴィヴィオ達がいる川沿いに向かうことにした。

＊　　＊　　＊

「おや、水切りをしてるのか？」

「フィルさん！？　どうしてここに！？」

「……あ、あはは、メガーヌさんに、アシスタント失格と言われてな」

フィルさんが、おちゃらけてこんなことを言ってるけど、絶対にあり得ない！！
フィルさんが失格なんて言われるなら、大抵の人が失格と言われるよ。

以前、フィルさんが私達の所に来てくれて、いろんな事を手伝ってくれたけど、殆どフィルさんがしてくれて、私やママはほんの少し手伝ったくらいだもん。

「ルーテシアは、もう泳がないのか？」

「ちょっとだけ、休憩してます。あとでまた泳ぎますよ」

「そっか……」

でも、フィルさんがこっちに来てくれたのは嬉しいかな。
エリオがなのはさん達と一緒に、トレーニングに行っちゃったから、ちょっと寂しかったんだよね。

「そっか。それじゃ私達と一緒に遊びましょう♪　フィルさんも、これだけの美少女達に囲まれて嬉しいでしょう♪」

「……ノーコメント」

「ふふっ、言わなくても顔を見れば十分ですよ♪」

フィルさんって、本当に女の子には弱いと思う。
正確に言えば、心を許している人たちに弱いと言った方が良いかな。
別に普通に女性を見ていても、何の反応もないけど、ティアナさんや私達みたいに、フィルさんのカテゴリーにいる人たちには、本当に弱い。

ちょっとからかうだけで照れて、初心な反応をしてしまう。
それは、年齢とか関係ない。私はフィルさんを5つ以上離れているけど、それでも女性として反応をしてくれる。

もし、エリオが彼氏じゃなかったら、きっとフィルさんを好きになっていたんだろうな――――――。

「じゃ、せっかくだから、一緒に泳ぐか？　相手がエリオでなくて悪いが……」

「いいですよ。たまには大人の男性と一緒にいるのも楽しいですから♪」

エリオとフェイトさんには悪いけど、今のこの時間だけは、フィル

さんと一緒に楽しもう。
ヴィヴィオやコロナ達は、水切りの練習で夢中になってるし、私もちょっとだけいいかな。
私の大切なお兄ちゃんと一緒に楽しむ時間をね♪

＊　　＊　　＊

「アインハルトちゃん、楽しんでくれてるかな？」
「ヴィヴィオ達も一緒ですし、きっと大丈夫です」

多分、ノーヴェがその辺は上手くやってくれると思う。
あの子は、ああ見えても、その辺の気配りはとっても上手いから。

「それにしても、ティアナ。本当に体力が付いたよね。わたしやスバルについてきて、息切れしていないんだから」
「大分、鍛えましたから……。あの時から……ずっと……」
「……そう……だったね」

ティアナは、マリアージュ事件以来、本当にレベルアップしてきて

いた。
あの時の後悔は、今でもティアナの胸の中でずっと残っている。
フィルをあんな風にさせてしまったことを――――――。

「ところで、みんな大丈夫？」

わたしは頂上から、残ったメンバーに声をかけると――――――。

「大丈夫だよ」

「はぁ……はぁ……」

「ぜぇ……ぜぇ……」

フェイトちゃんは、息を整えて余裕があるけど、エリオとキャロがちょっといっぱいいっぱいかな。
これはもうちょっと鍛え直す必要があるかも。

＊　　＊　　＊

「エリオ、キャロ、ほら、もう少しだよ。頑張ろう」

「は、はい……はぁ……はぁ……」

「ぜぇ……ぜぇ……フェイトさん、どうしてそんなに余裕なんですか……」

「……私も、それなりに鍛え直したからね……」

あの日――――――。

フィルが倒れ、病院に搬送され、変わり果てたフィルの姿を見て、自分の無力さと絶望を痛感した。

ティアナやスバルが一緒だから、絶対に大丈夫だと思っていた。

だけど、その考えは甘すぎた。

自分の大切な人のためなら、自分の身は二の次にしてしまうフィル。

だからこそ、親友の危機にその身を擲(なげう)って助けようとした。

あの時は、私は別の任務をしていたため、一緒に行動することが出来なかった。

でも、きっとあの場所にいたとしても、結果は変わらないと思う。

体力があまりない私じゃ、長期戦は厳しい。

あの現場は、かなり長期戦になっていたから、きっと私じゃ手助けすることは出来なかった。

だから、二度と後悔しないように、私自身もう一度鍛錬をし直した。
体力がないなんて言い訳をしないために――――――。

そして――――――。

フィルの背中を私の手で守るために――――――。

＊　　＊　　＊

「さ、お昼ですよー！！　みんな集合――――――♪」

「「「はーいっ！！」」」

「おかえりー。みんな遊んできた？」

「もーバッチリ！！」

どうやら、みんなちゃんと楽しんできたみたいだな。
こっちはルーテシアと一緒だったから、ヴィヴィオ達のことをそこまで見ていなかったけど、ノーヴェがしっかりと見ていてくれたから心配はしていない。

「体冷やさないように、暖かいものも用意したからな。沢山食べてくれよ」

「「ありがとうございます！！」」

「あらあら、ヴィヴィオちゃん、アインハルトちゃん、大丈夫？」

「いえ……あの」

「だ、だいじょうぶ……です」

体をぷるぷるさせながら言っても、説得力が全くないぞ。
一体何をしていたんだ？

「こいつら、二人で水切り練習をずーっとやってたんですよ」

「あらー」

「やれやれ……」

数時間も全身の筋肉を使う水切りをしていたんじゃ、こうなるのも当たり前だよな。負けず嫌いの二人のことだ。出来るまでずっとやっていたんだな――――。

「はい、おまたせー！！」

「「わ――――――！！」」

スバルがコロナ達の所に、焼きたてのバーベキューをいっぱい置くと、二人とも目を輝かせていた。
やっぱり、これだけの物が来たら、誰でもこうなるな。

「じゃあ、今日の良き日に感謝を込めて」

『いただきます！！』

みんなでいただきますの声を言い、楽しい昼ご飯のはじまりだ。

「おぉ――――いし――――いっ！！」

「ほんと……！！　いいですね。これ！！」

「えっへん。自慢のソースです♪」

「確かに美味しいよな。これ」

俺も料理を作る身として、美味しい料理は出来るだけ覚えたい。
アルピーノ家の味付けは、かなりの物だ。

「えへへ、フィルさんにそう言ってもらえて良かったです。結構苦労したんですよ」

「本当にこれは良い味付けだ。ルーテシア、これならエリオのハートも、胃袋もしっかり捉えておけるな」

「えっへん♪」

エリオ、お前も俺に料理を習って、大分できるようになったけど、ルーテシアはもっと練習していたみたいだぞ。

＊　　＊　　＊

『ごちそうさまでしたー！！』

昼ご飯も終わり、わたし達は後片付けをしていた。
みんな、それぞれ別れて、わたしとアインハルトさんは皿洗いをしている。

「ヴィヴィオさん達は、いつもあんな風に、ノーヴェさんからご教授を？」

「あ、そんなに『いつも』でもないんですが……。わたしは最初スバルさんに、格闘の基礎だけを教わったんです。それから、独学で

頑張っていたら、ノーヴェが声をかけてくれて……」

あの時、ノーヴェに『そんなんじゃ体壊すぞ』と指摘を受けて、その時から、ノーヴェが時間を作っては、色々教えてくれた。

そして、フィルさんにも練習しているところを見られてしまい、ノーヴェとフィルさんが交互に教えてくれるようになった。

「なんだかんだで、ノーヴェもフィルさんも、コロナとリオのことを見てくれるようになって、本当に優しいんです。二人とも……」

「――――わかります。少し羨ましいです。私は……」

「私は……ずっと、独学（ひとり）でしたから」

「あっ……」

そうだった。

この人は、今までずっと一人で覇王流を学んできたんだ。

悲しい過去と一緒に――――。

「でも、これからはもう、ひとりじゃないですよね？」

「あ……その、流派とかはあくまで別にしてですよ！？」

「いえ、あの、大丈夫です、わかります」

古流武術（カイザーアーツ）と近代格闘術（ストライクアーツ）

同じ道はたどれないかもしれない――――。

だけど、時々こんな風に――――。

少しだけ一緒に、歩いていけたらと思うから――――。

## Ｍｅｍｏｒｙ，１０　望んだ強さ

「ベルカの歴史に名を残した、武勇の人にして初代の覇王。クラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルト。彼の回顧録。もちろん、現物じゃなくて、後世の写本だけどね」

わたしとリオは、ルーちゃんに古代ベルカの写本、覇王のことが書かれている本を見せてもらっていた。

この本には、アインハルトさんの前世である、イングヴァルトのことが書かれている。

「ルーちゃん。アインハルトさんの事は……？」

「ノーヴェとフィルさんから、大体聞いているよ。覇王家直系の子孫で、初代覇王の記憶を伝承してるって……」

＊　　＊　　＊

「記憶といっても、覇王の一生分全てというわけではないんですが、途切れ途切れの記憶をつなぎ合わせれば、彼の生涯を自分の記憶として思い出せます」

「彼にとっての思いでは、そのまま私の思い出なんです。乱世のベルカは、悲しい時代でしたから……」

雲に覆われた薄暗い空と枯れ果てた大地――――。

人々の血が河のように流れても、終わらない戦乱の時代――――。

誰もが苦しんで乱世を終わらせたいと願いながら――――。

だけど、そのためには力を持って戦うしかなかった時代――――。

「そんな時代に生きた覇王としての、短い生涯の記憶とそして……」

たくさんの心残りを――――。

「すみません。せっかくの旅行中に暗い話で」

「いえ、そんな！！」

「その、もちろん、悲しいことばかりでもなかったんですよ」

楽しい記憶、幸せな記憶も、ちゃんと私の中に受け付いているから――――――。

「たとえば、オリヴィエ聖王女殿下との日々とか……」

「オリヴィエって、クラウス陛下と仲良しだったんですか？」

「仲良しというのは、少し違うような気もしますね……」

どちらかといえば、同じ武を歩む同士といった方が正しいかもしれません。

私の中にある記憶も、そういった感じですから――――――。

＊　　＊　　＊

「オリヴィエ・セーゲブレヒト――――――。聖王家の王女にして、後の『最後のゆりかごの聖王』」

「クラウスとオリヴィエの関係は、歴史研究でも諸説あるんだよね」

「そもそも生きた時代が違うって説が主だよね」

「うん……。でも、この本ではふたりは姉弟みたいに育ったってな

ってる」

これぱっかりは、その時代に生きた訳じゃないから、本当に正しいかは分からないんだけどね。

「オリヴィエって確か、ヴィヴィオの……複製母体（オリジナル）だね」

「まあ肖像画とか見る限りあんまり似てないし、普通に『ヴィヴィオのご先祖様』で良いと思うけど」

「だよね！！」

それにクローンとか、そんなのは今必死で生きているあの子には関係ない。

あくまでオリヴィエはオリヴィエなんだし、ヴィヴィオはヴィヴィオなんだから――――――。

「でも、なんで聖王家の王女様と、シュトゥラの王子様が仲良しだったんだろうね？」

「あ、そういえば」

コロナの疑問はもっともだ。

そのことも、一部分だけど、この本に記されているみたいね。

「オリヴィエがシュトゥラに留学って体裁だったみたい。シュトゥラと聖王家は国交があったしね。ただ、オリヴィエはゆりかご生まれの正統王女とはいえ、継承権は低かったみたいだから……」

「要は人質交換だったんじゃないかな」

「戦国時代の人質って、アレだよね？　歴史小説にも良く出てくる……」

「裏切ったら人質を処刑しちゃいますって……」

「それそれ」

でも、この本を見る限りだと、そんなことは関係なかったみたいね。この本の途中は、オリヴィエ殿下とのことばかり書かれているし――――。

＊　　＊　　＊

「オリヴィエってどんな人だったんでしょうか……？」

「私が知る記憶では、太陽のように明るくて、花のように可憐で、何より……魔導と武術が強い方でした」

「ただ、そんな彼女も乱世の最中に命を落とされました」

「ゆりかごの運命通りに……ですよね」

そう――――。

覇王は……。クラウスはその運命を止めることが出来なかった。

「皮肉な話ですが、彼女を失って、彼は強くなりました。全てを擲って、武の道に打ち込み、一騎当千の力を手に入れて……」

「それでも、望んだ物は手に入らないまま、彼も短い生涯を終えました」

「望んだもの……？」

「本当の強さです」

守るべきものを守れない悲しみを、もう繰り返さない強さ。

大切な人を守れなかった悲しさ――――。

「彼が作り上げ、磨き続けた覇王流は、弱くなんかないと証明すること」

それが、私が受け継いだ悲願だから――――――。

＊　　＊　　＊

「……似ているんですね。クラウスも……フィルさんも……」

「えっ……？」

「フィルさんも……昔は全然強くなかったって聞いています。だけど……」

未来で、なのはママやフェイトママ、スバルさん達を失って、敵討ちをするために強さを身につけた。

わたしがストライクアーツを学ぶときに、フィルさんが昔話を混ぜて、強さの本当の意味を教えてくれた。

その時、初めて本当の意味で、フィルさんのことを知ることが出来た。

フィルさんは、色んなひとの悲しみを背負っていることも――――――。

＊　　＊　　＊

「それでも、目的のために、それこそ血のにじむ思いで強くなったって聞いています……」

「あの人が……ですか？」

「……はい」

正直、私はまだフィルさんのことはあまり知らない。
だけど、ティアナさんもノーヴェさんも、そしてヴィヴィオさん達も、あの人のことを悪く言う人がいない。

「良かったら、フィルさんの訓練の様子……見に行きませんか？
言葉より、実際見てもらった方が……分かると思いますから……」

「――――――はい」

そして、私達はトレーニング場に向かうことになった。
そこで私は、信じられない物を見ることになるとは、このときは全く考えもしなかった。途中で、ノーヴェさんと合流した私達は、一緒にトレーニング場に向かっていた。

「えっ？　ヴィヴィオさんのお母様も模擬戦に……？」

「はい！！　ガンガンやってますよー！！」

「お二人とも家庭的で、ほのぼのとしたお母様で、素敵だと思ったんですが……。魔法戦にも参加されてるなんて少し驚きました」

「えっと、参加というかですね。うちのママ、航空武装隊の戦技教導官なんですよ」

＊　　＊　　＊

《Ｓａｃｒｅｄ　ｃｌｕｓｔｅｒ》

「拡散攻撃（クラスター）来るよティア、フィル！！」

「オーライ！！　コンビネーションカウンター行くわよ！！」

「了解！！」

あたしはなのはさんの拡散攻撃に合わせ、シュートバレットで対応する。

このくらいの数だったら、ガンモードで十分対処できる。

「おおおおおおおっ！！」

すかさずスバルが、ウイングロードでなのはさんの正面に出て、そのまま迎撃をする。
なのはさんにそれを読まれ、レイジングハートで止められたけど、それがあたし達の狙い！！

「っ！！」

フィルが高速移動で背後に回り、スバルがなのはさんの相手をしている内に仕留める！！　これが本命よ！！

「くっ！！」

フィルがプリムのセイバーモードで上段から振り下ろし、なのはさんの背中を切りつける。
だけど、なのはさんも自動防御でフィルの攻撃を間一髪で防ぐ。

「ちぃぃ……。やっぱりダメか……」

現役のフィルだったら、間違えなく捉えていたタイミング。
やっぱり、ずっと戦っていなかったせいで、ソニックムーヴにほんの少しだけタイムロスがあって、それをなのはさんに読まれてしまったんだ。

「ふぅ……。あぶなかった……」

「どこがですか。完全にこっちの動きを読んでいたくせに……」

「にゃはは～」

でも、ちょっとおかしいのよね……。
確かに現役を離れていたというのもあるけど、なんか今のあいつの動きは、制限をかけているって感じなのよね……。
まるで、自分でリミットをかけているみたいな――――――。

「スバル、とりあえず一旦退くぞ。態勢の立て直しだ!!」

「うん!!」

フィルとスバルが、なのはさんから距離を取って、陣形を整える。
スバルは、なのはさんの空域ギリギリで待機して、フィルは一旦あたしの所に戻ってきた。

「すまんな。やっぱりダメだった」

「仕方がないわよ。今日が久し振りの実戦ですもの。でも……」

「な、何だよ！？」

あたしはフィルの瞳をじっと見て、問いただす。

「フィル、あんた……。なんか制限をかけてるでしょう」

「な、何のことだ……」

「とぼけないで。あたしには分かったわよ。あの動き、いくら久し振りだからといって、あんなに制限がかかった動きになるはず無いでしょう！！」

普通にブランクがあるだけなら、ある程度動けば勘を取り戻し、普段通りになる。

ましてフィルは、半年間執務官を休職していたとはいえ、トレーニングは欠かさなかった。

だから、実戦感が戻れば、昔のフィルに戻るはずだ。

だけど、今の動きは、明らかにおかしい。

体術も魔力も、何かに押さえつけられているって感じだった。

ソニックムーヴで何とか背後に回れたけど、それでもタイムロスが大きすぎる。

「……正解。今の俺は、リミッターを付けてる。魔力と体力を鍛えるためにな……」

そう言って見せてくれたのは、魔力鍛錬用のリストバンドと上着。これは特殊な素材で出来ていて、重みも平均男性の約半分くらいある上着を着ている。

だから、動きも抑制されて、キレがなかったんだ。

「ったく……。その状態でよくなのはさんと戦っていたわよね」

リミッターを付けて、全力じゃないとはいえ、制限がないなのはさんと戦おうなんて無茶にもほどがある。

模擬戦とはいえ、オーバーSクラスの魔導師相手に何考えてるのよ!!!

「とはいえ、さすがに明日はこのままじゃまずいよな……」

「……当たり前でしょう。明日はちゃんとリミッターを外しなさい

よね……」

「分かってる。でも、出来るだけギリギリまで鍛えたいんだ。模擬戦とはいえ、戦闘はトレーニングの何倍の効果があるからな」

「……フェイトさんには内緒にしてあげるから……無理だけはするんじゃないわよ……」

フィルも、現役復帰のためにこの半年間必死で特訓をしてきた。
その甲斐があって、実はさっきまでリミッターを付けていることに気づかないほどだった。

でも、それは、それだけ過酷なリハビリと訓練をしてきたという証拠でもあるんだ。
あいつが今、どれだけの力を身につけたかは予想は出来ないけど、あたしだって力を付けたんだ。

あのお人好しの背中を、守ってあげるためにね――――――。

＊　　＊　　＊

「すごい……」

私はさっきから、フィルさん達の模擬戦を見て驚きを隠せなかった。
魔力戦の迫力もそうだけど、何よりフィルさんのあの動き――――。

冷静に局面を見て、すぐさまヴィヴィオさんのお母様に攻撃を仕掛けている。
これが本当に、昔は弱かった人なんだろうか――――――。

そして、横を見ると、今度はアルザスの飛竜が、エリオさんとキャロさんを乗せて飛んでいた。

「えへへ、キャロさんは竜召喚師なんです」

「エリオさんは竜騎士！！」

「で、フェイトママは空戦魔導師で、フィルさんと同じく執務官をやってるんです」

そして、フィルさんの奥さんのフェイトさん。
あの人も普段は優しい雰囲気を持っているのに、戦闘になると顔つきも変わって戦う人の顔になっていた。

もっと、見てみたい――――――。

だけど、無情にも終了のアラームが鳴らされる。

「はい、一旦終了～」

「「「ありがとうございました！！」」」

「3人はこの後、ウォールアクトやるんだっけ？」

「はいっ」

「フェイトさんとエリオも一緒です」

そう言ってティアナさんとスバルさんは、フェイトさんとエリオさんを誘って、また別の訓練を始めた。

そしてフィルさんは――――――。

「それじゃ、なのはさん、キャロ一緒にしましょうか？」

「うん」

「お願いしまーすっ！！」

なのはさんとキャロさんと一緒にシュートコントロールの訓練を始めた。

しかし、只のシュートコントロールじゃない。

制御する魔力弾の数が半端じゃない。

「こうしてみますと、みなさんずっと、動きっぱなしですね」

「そうだな」

魔法訓練も凄いけど、あんなフィジカルトレーニングまでやっている。

それに――――――。

フィルさんはさっきから、魔力弾の数を徐々に増やしだして、今ではなのはさんと同じくらいの数を制御している。

「局の魔導師の方たちは……皆さんここまで、鍛えていらっしゃるんでしょうか」

「ま……まあな。スバルは救助隊だし、ティアナは凶悪犯罪担当の執務官。フィルだって、今でこそ現役を離れてるけど、ティアナと同じ執務官だ」

「他のみんなも頻度の差はあっても、みんな命の現場で働いてるわけだしな。力が足りなきゃ救えねーし、自分の命だって守らなきゃならねぇ」

「ノーヴェさんも、救助訓練はガッツリやってますもんねー」

「ま、まあ……な……」

体がうずく――――――。

これだけの見ちゃうと、今すぐ体を動かしたい――――――。

そう思っていたら、ヴィヴィオさんから肩をつんつんとされる。

「アインハルトさん、見学抜けますか？」

「あ、ええと……」

ヴィヴィオさんのお誘いは、とてもありがたい。

だけど、私の我が儘だけで、ヴィヴィオさんに気を遣わせるのは申し訳ない。

「こういうのを見ちゃうと、体動かしたくなりますよね。ですから、良ければ向こうで軽く一本！！」

「はい……是非」

私とヴィヴィオさんは、ノーヴェさん達に一言言って、森の中で体を動かすことにした。

＊　　＊　　＊

「ヴィヴィオとアインハルトさんもやる気モードになっちゃったねぇ」

「あたしたちも頑張らないとだー！！」

なんかみんな燃えてるよね。
これはわたしも、リオやヴィヴィオに負けてられないよ！！
新たに決意をしていると、ルーちゃんから声をかけられて――――。

「そうそう、実はねコロナ。内緒にしてたけど、例のアレもう完成してるんだ」

「ほんと！？」

アレが完成してたんだ。
ルーちゃんが作ってくれたアレが――――――。

「ほんと、あとはコロナが起動調整するだけ」

「アレってもしかして……！？」

「ルーちゃんお手製のわたしのインテリジェントデバイス！！」

「えっへん！！　コロナ専用のカッコカワイイやつだよ！！　と言っても、今回のはデザイン以外は、フィルさんが基礎設計から見直して、かなり高性能になってるよ！！」

「えっ……？」

そんな話は、全く聞いていない。

フィルさんはそんなこと一言も言っていなかったのに――――――。

「やっぱり、フィルさん、コロナに言っていなかったんだね。全く……あの人は相変わらず悪戯好きなところがあるね」

「フィルさんが……？」

フィルさんが、わたしにデバイスを考えてくれるきっかけになったとしたら――――――。

もしかして、あの時――――――。

むかし、フィルさんに魔法のことで相談に乗ってもらったとき、いつかデバイスが欲しいなってポツリと漏らしたのを覚えていてくれたんだ……。

「フィルさん、このデバイスを考えるとき、本当にコロナのことを思って考えてくれたんだ。最初私が考えたのとは、別物に仕上がってるよ」

「おいおい、それって完全にオーバースペックじゃないか！？」

「確かにノーヴェの言うとおりかもしれないね。でも、フィルさんは、コロナなら、間違った使い方はしないからって、本気で設計してくれたの」

「……フィルさん」

デバイスマイスターのフィルさんが、本気で考えたと言うことは、大人が使うデバイスと全く同じ物に作っているということだ。

以前、フェイトさんから聞いたことだけど、フィルさんは認めた相手じゃなくちゃ、どんな人にもデバイスは考えないって言っていた。

そのフィルさんがわたしのために考えてくれたって事は――――――。

「わたしも勉強のために、デバイス作成をフィルさんから教わってるけど、今回のアレは本当に凄いと思うよ」

「……うん」

フィルさん……本当にありがとうございます。
フィルさんとルーちゃんが作ってくれたデバイス、絶対に大切にします！！

「これは、あたしらも負けてられないね、ソル！！」

《Ａｙｅ　Ｒｉｏ．》

「よーし、あたしも明日の練習では、新魔法とか披露しちゃうもんね！！」

「「「おお――――――っっ」」」

リオも刺激されて、すっごく燃えている。
明日はわたしも、リオやヴィヴィオに負けないように頑張らなきゃね。

何より――――。

わたしのために、本気でデバイスを考えてくれたフィルさんとルーちゃんのために――――。

# Ｍｅｍｏｒｙ，１１　こころ…ひとつに…

「じゃあ、午後のトレーニングはこれまで！！」

「「「「お疲れ様でしたー！！」」」」

「あっ、片付けは俺がやっておくから、お前らは先上がって良いぞ」

夕食まで、まだ時間もあるし、もう少し体を動かしたいしな。
それにティアたちは、ノーヴェたちと一緒の時間を楽しんで欲しいしな。

「じゃあ、私達と一緒に練習する？　私もなのはも、もう少しやってから上がるつもりだったし」

「……そうだな。それじゃお言葉に甘えさせてもらおうかな」

一人でやっているより、なのはさん達と一緒の方が良い練習になるしな。
俺はフェイトの言葉に遠慮無く甘えることにした。

＊　　＊　　＊

「それにしても、やっぱりずっとやってたんだ」

「あはは、ちょっと気合いが入っちゃって」

少しだけミット打ちをやるつもりだったんだけど、思いの外、気合いが入っちゃって、こんな時間までやっちゃった。

「アインハルト、近代格闘技のミット打ちも中々面白いだろ？」

「はい……。良い練習になりました」

「キャロさん、ママ達とフィルさんはまだ？」

「少し残って練習の仕上げだって」

「3人で飛んでるんじゃないかな」

ママ達は予想していたけど、フィルさんまで居残ってやっているんだ。

フィルさん、まだ本調子じゃないのに、無理しなきゃいいけど――。

「さて、お楽しみはまだまだこれから！！　ホテルアルピーノ名物、天然温泉大浴場にみんなで集合ね！！」

「じゃ、僕はみんなが上がってくるまでに、夕食の支度を手伝っているよ」

ということで、みんな揃って温泉にはいることになりました！！
エリオさんは、ルールーにからかわれて、一緒に入ろっかっていわれていたけど、顔を真っ赤にして全力全開でお断りしていた。
ルールーもエリオさんの性格が分かっているから、あんなことを言ってるのは分かっているんだけど、さすがに一緒は恥ずかしいよ――――。

＊　　＊　　＊

「あ～～。すっごい、いい湯加減～～」

「ほんとです～～」

ティアナさんとキャロさんは、早速温泉につかって、のんびりとし

ている。
ルールーの案内でわたし達は、他の所も案内してもらっていた。

「あっちの岩造りのところが熱〜いお湯ね」

「わーい、熱いの好き〜♪」

リオは、あっついのが好きなんだけど、わたしとコロナはもうちょっとぬるいのが好きなんだよね。

「で、向こうの滝湯はぬるめだから、のんびり出来るよ」

「「滝湯!?」」

ルールーが指差したのは、本格的に作られた滝のオブジェから流れ出てくる大量のお湯。

「新しく作ってみたんだけど、けっこうオシャレじゃない?」

「すごいすごーいっ!!」

「あっ、ちょっとぬるめで気持ちいい〜!!」

早速滝湯の湯に手を入れて、湯加減をみると、本当にちょうど良い

湯加減でとっても気持ちいい！！

＊　　＊　　＊

「ゆっくり楽しんでね。みんなも湯加減どう？」

「もお、サイコ～」

「まったく。しかしアレだな……。前来たときよりもパワーアップしてんな」

ノーヴェの言うとおり、あたしが前に来たときよりも、色々と設備が変わっていた。以前は、ここまでお風呂も大きくなかったのに――。

「休職中で、今はママと一緒だから、いろんな勉強をする時間があって、その中で一番凝ってるのが建築デザインとか設備設計なんだけど、やってみると本当に楽しんだよね」

「ま、この温泉も、ロッジの改築もお遊びレベルだけど、ちなみにこれ設計図♪」

そう言って、ルーテシアがスクリーンに出したのは、ロッジと温泉の設計図。
ちょっと待って。これ明らかに素人が作る物じゃないでしょう！！

「「いやいやいや！！」」

このロッジと温泉は、フィルも絡んでいるから、明らかにお遊びレベルじゃないのは一目で分かる。

全く、ルーテシアもフィルも本当に凝り性だから――――。

「まぁ、みんなに評判良いのは嬉しいかな。みんなが泊まりに来てくれて、笑顔になってくれたら凄く嬉しい」

「んなもんめちゃめちゃ笑顔だっつーの！！」

「ほんとほんと♪」

あたし達が温泉で暖まっていると、突然キャロが立ち上がって――――。

「ふぇっ！？」

「キャロ、どうしたの？」

「何かこう、柔らかいものがもにゅっと……」

キャロが辺りをきょろきょろ見わたすが、特に変わったことは見あたらない。

そう思っていたら、今度は……。

「ひゃっ！！」

今度は、ティアもビックリして立ち上がって、キャロと一緒に慌てて温泉から出てきた。

「いる！！　何かいるッッ！！」

「なんだかぬるっと！！　ルーちゃん！？　湯船の中で何か飼ってたりしないッッ！？」

「えー？　飼ってないよ」

ルーテシアが、指を顎に当ててそう答える。

「第一、温泉に住むような珍しいペット飼ってるなら、真っ先に紹

介してるし」

（（確かにそうだ！！））

でも、ルーテシアも知らないとしたら、一体何が温泉の中にいるの！？

＊　　＊　　＊

「なんか、騒がしいね？」

「動物でも出たのかな？」

私がコロナさんと一緒に、騒ぎのあった方に行こうとしたとき――。

「はわわっ！！」

「きゃあっ！！」

ヴィヴィオさんとコロナさんは、二人とも何かに、おしりを撫でられ、そして――――。

「～～～～！！」

私も胸とおしりを触られる。
一体誰の仕業か知らないですけど、痴漢行為は絶対許しません！！

私は力の限り、思いっきり拳を振り抜き、目標めがけて放った。
すると、水面が割れ、さっきまでいくらやっても出来なかった水斬りが出来ていたのだ。

「……あっ」

そっか……。
さっきまでは、拳のスピードを早くしなくてはとおもってやっていた。

だけど、今は力を全身に回して、無駄のない打ち方が出来ていた。
だから、水面が真っ二つに割れたんだ。

＊　　＊　　＊

（あービックリした。アレが噂の覇王っ子か）

（しかしセインさんの敵じゃーなかったね）

あたしのＩＳ『ディープダイバー』
この能力は、地面や岩石の中を自由に移動できるだけでなく、無機物なら、その内部に潜って進むことが出来る。
それは水中も例外じゃない。

（ふふふ、みんな驚いてるな）

覇王っ子もそうだけど、みんなちゃんと成長してるみたいで、なかなかのさわり心地でしたよ～。

って、これじゃあたしは親父かっての！？

「あっ！？」

「ふぇっ？」

「うわっ！！」

よっしゃよっしゃ！！
わはははは！！　残るはあとひと――――り！！

（ヴィヴィオの友達の元気っ子！！）

あたしはそっと背後から気づかれないように近づき――――。

「がお――――っっ！！」

後ろから、可愛い胸を鷲掴みにした。

《Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ．　Ｐｏｗｅｒｄ－Ｓｙｓｔｅｍ　Ｓｅｔｕｐ．》

「ええっ！？」

突如、温泉のお湯が紫電と共に、ドオンと大きな音を立てて、あたし達の周りから水柱となっている。

しかも……。

がしっ！！

「いいっ!?」

リオが変身していて、あたしの腕をがっちりとつかんでいる。
しかも、放電現象だけでなく、その周りには炎も一緒に纏っていた。

「や――――ッ!!」

「ちょ、ちょっと!?」

「絶招（ぜっしょう）　炎雷砲（えんらいほう）」

あたしは腹に思いっきり蹴りをもらってしまい、そのまま上空高く飛ばされ――――。

そして――――。

ドボ――――――ン!!

思いっきり温泉に叩きつけられてしまった。

「リオ!!」

「リオ、大丈夫!?」

悪戯したのは悪かったけど、だれか、あたしの心配もちょっとはしてくれても良いんじゃない――――――。

＊　　＊　　＊

「もーダメだよセイン。こういうイタズラは!!　みんなが転んでケガでもしたら、笑い事じゃすまなかったんだし」

「セクハラも犯罪なんだからね」

うっ……。

「私が営業妨害で訴えたら捕まるしね」

うぐっ!!

「まったくこんなのが、あたしより年上かと思うと、涙が出てくるわ」

うぐぐ……っ

「う……うう……」

「なんだよ～～。ちょっとみんなを楽しませようとおもっただけじゃんかよ～！！」

ケガしないように、ちゃんと気をつけてたっつーの！！
これでも聖王教会のシスターだぞ！！

「あ、あの……」

「おいおい……」

「おまえら楽しそうなのに、あたしだけ差し入れ渡したらすぐ帰るとか、切なすぎるじゃんかよ～！！」

「自慢じゃねーが、あたしはお前らほど精神的に大人じゃーないんだからな！！」

こうなったら開き直ってやる！！
どうせあたしはみんなみたいに、大人じゃないですよ！！

「えーと、とりあえずセインは、リオちゃんに謝った方が良いと思うよ」

「あ、そうだった」

キャロの言うとおり、あんなに泣かせてしまっては悪戯が過ぎた。
ちゃんと謝らないと――――――。

「そのごめんな。ちょっと調子に乗りすぎた」

「あたしこそごめんなさい。思い切りやっちゃって……」

あんな酷いことをしたのに、蹴ったことを謝ってくれる。
やっぱりヴィヴィオの友達は、みんな良い子ばっかりだね。

結局、その後、ルーお嬢様からの交換条件として、今夜と明日の朝ご飯を作ることで許してもらえることになった。

「それにしても、リオも『大人モード』が出来るんだ？」

「ヴィヴィオやアインハルトさんのとは、ちょっと方式が違うんですが、一応同系の身体強化魔法です。格闘魔法戦用に自己流で組んでみました」

「「「へ――――――！！」」」

「さっきの凄い蹴りだったけど、あれはストライクアーツ？」

確かにあれだけあたしを吹っ飛ばせるって、かなりの強さじゃなくちゃ出来ないよね。
でも、ストライクアーツにしては、ちょっと変則的だったみたいだけど？

「うちの実家の方の格闘技なんです。子供の頃から習ってて」

「へ――」

「変換資質があるの？　炎と電気が両方出てたけど……」

キャロの言うとおり、あの時、見間違いでなければ、確かに両方出ていた。
ということは……。

「一応両方……」

リオがもじもじと、照れながらそう答えてくれた。

『え――――――！？』

「それ凄い！！」

こうしてみると、本当にヴィヴィオもコロナもリオも、凄い子ばっかりなんだな。

＊　　＊　　＊

「リオさんも凄いんですね」

こうしてみると、ヴィヴィオさんも、皆さんも凄い人ばかりです。

「はい、変換資質は知ってましたが、大人モードは初めて見ました」

「リオね、ヴィヴィオとアインハルトさんに触発されて、頑張って完成させたんだって。本当は、明日の練習会で見せて、びっくりさせる予定だったみたいだけど」

「いや、十分びっくりしたした！！」

「練習会……？」

コロナさんの言葉で、ふと車の中でのことを思い出した。

そうだった。たしか日程表に――――――。

「そうです。練習会！！　オフトレツアー二日目恒例行事！！　大人も子供もみんな交ざっての陸戦試合（りくせんエキシビジョン）」

「なに明日の話ー？」

「そー！！」

「あたしは初体験だから、すっごい楽しみ！！」

「前回は、本当に凄かったんだよ。八神司令達も一緒だったし、それにフィルさんもまだ執務官現役の頃だったから……」

コロナさんの話によると、前回はフィルさんも試合をしていて、奥さんのフェイトさんと一緒に大活躍だったらしい。

「今回はちょっと人数が少ないから、１ｏｎ１の機会が増えそうだね」

「チーム分けはどうなるのかな？」

「うーん、燃えてきたー！！」

実は、フェイトさんとフィルさん。

この二人のコンビは、一騎当千の戦力になるため、今回はおそらく敵同士になる。

前回は開始早々、たった二人で殆ど倒してしまい、試合にならなかったとのことだ。

「試合で戦うんですか――――――？　皆さんやヴィヴィオさんのお母様達と」

「はい！！　二組に分かれてのチームバトルで、相手チームを全滅させるまでの勝負です」

「大人チームは最大出力に制限が付きますが、それ以外は全力です」

「純粋に戦技と戦術の勝負ですね」

戦える――――――。

あの凄い人たちと戦える――――――。

あの人たちに覇王（わたし）の拳は届くのかな――――――？

いや、違う！！

届かせるんだ――――――。

どんな相手にだって、私と彼の覇王流（カイザーアーツ）を！！

「組み合わせはまだ分かりませんが、敵チームになっても負けませんよ」

「わたしもです」

「あたしだって！！」

「望むところです」

明日は、絶対に負けたくない。
あの人達に、絶対私の拳を届かせるんだ！！

＊　　＊　　＊

「これが、明日の組み合わせ？」

「うん、ノーヴェが作ってくれたの」

「出来たんだな。明日の組み合わせが」

俺たち3人は、クールダウンの後、なのはさんが持っている、明日のチーム戦の割り振りを見ていた。

「綺麗に割り振ってあるねえ。同ポジション同士が接戦になりそう」

「ほんと」

「ああ、でも、エリオにはすまないことをした。人数を合わせるのに、俺の代わりに交代してもらうことになって……」

実はノーヴェが最後まで、バランスを考えてくれたんだけど、どうやっても、俺が入ることでパワーバランスが崩れてしまい、うまくいかなくなってしまった。

当初は俺が抜ける予定だったんだけど、エリオが、「フィルさんの復帰戦を見たいので、今回は見学に回りますね」と言ってくれて、エリオのポジションに俺が入ることになった。

本当なら、エリオも戦いたかったはずなのに、本当にすまないことをした。

そして、最終的にできあがったのは――――――。

§ＴＥＡＭ　ＲＥＤ

ＣＧ：ティアナ・ランスター
ＧＷ：フェイト・Ｔ・グリード
ＦＡ：ノーヴェ・ナカジマ

ＦＡ：アインハルト・ストラトス
ＦＢ：キャロ・ル・ルシエ
ＷＢ：コロナ・ティミル

§ＴＥＡＭ　ＢＬＵＥ

ＣＧ：高町なのは
ＣＧ：フィル・グリード
ＦＡ：スバル・ナカジマ
ＦＡ：高町ヴィヴィオ
ＦＢ：ルーテシア・アルピーノ
ＧＷ：リオ・ヴェズリー

「フィル、エリオの分もしっかりとしなくちゃね」

「ああ……。フェイト、今回は敵同士だな。だけど、エリオの分もある。全力全開で勝ちにいくからな！！」

「負けないよ、なのは、フィル」

「わたしだって！！」

エリオが、自分から辞退してくれてまで俺を出させてくれたんだ。
みっともない戦いは絶対に出来ない！！

「じゃ、そろそろロッジに戻ろうか。みんな待っていると思うし」

「そうだね。エリオとメガーヌさんが美味しい御飯を作って待ってるし……」

「いや、もう一人いるみたいだぞ」

「「？」」

「さっき、ティアから念話があって、セインがイタズラをして、罰として俺たちの食事係になったらしい……」

さっき、温泉の方から、人影が吹っ飛ばされたのが見えたけど、あれがセインだったというわけだな。

「「あ、あはは……」」

「ということで、行きましょうか。さすがにみんなお腹をすかしてますからね。俺たちが戻らないと、ご飯も始まらないですしね」

「「うん！！」」

ロッジに戻った俺たちを待っていたのは、エプロンをしたセインが一生懸命夕ご飯の支度をしていた姿だった。

ちなみに夕食はセインが相当気合いを入れて作ったため、かなりの量もあり、みんな大満足だったことはいうまでもない。

＊　　＊　　＊

「ふぅ……。やっと、お風呂でゆっくり出来るよ」

男性は俺とエリオしかいないため、入浴時間が必然的に後の方になってしまうのだ。
エリオは先に入ったので、後は俺だけなのだ。

「さてと、そろそろ出ようかな……」

そう思っていたら、入り口の方からガラガラと扉が開く音がした。

「ちょ、ちょっと待て!?　確か、扉には札を下げたよな!?」

女性陣が入ってこないように、扉には『男子入浴中』の札をかけておいたはず。

こんな所で鉢合わせになったら、間違いなく俺は女性陣にしばかれるぞ！！

「な、何とか外に出ないと！！　どっか緊急用の出入口はないのか！！」

俺は必死で非常口をさがすが、無情にも扉は開かれてしまう――――。

すると、そこに立っていた女性は――――――。

「フェイト……」

「えへへ♪　フィル、一緒にはいろっか」

俺の奥さんのフェイトだった。

ったく……。心臓が止まるかと思ったぞ。

「まったく……びっくりさせるなよ。マジで誰かが入ってきたのかと思ったぞ……」

「ごめんね。でも、こんな機会じゃないと、一緒に入ってくれないじゃない」

「……それは……そうだけどな」

はっきり言って、恥ずかしいんだよ。

フェイトみたいな綺麗な女性が、一緒の浴室に入ってきて、俺の理性が持つ自信がないんだ。

いくら自分の奥さんと言っても、親しき仲にも礼儀ありというしな。

「でも……。本当にゆっくりできるね。ここは……」

「そうだな……」

フェイトが俺のそばに来て、そっと俺の肩に自分の頭をコトンと預ける。

俺も、フェイトの綺麗な金髪をそっと撫でていた。

「フィル……。明日は敵同士になっちゃたね」

「ああ……。さすがに前回のことが響いているのかな」

前回、俺とフェイトは同じチームで戦ったんだけど、開始早々、俺のワープとフェイトの速攻で、殆ど壊滅状態に追い込んでしまったのだ。

そのため、今回は俺のワープは回数制限がかかってしまい、俺とフェイトも敵同士になってしまったのだ。

「……ワープの使用回数があるのは仕方がないとして、フィル、リミッターはちゃんと外してね」

「……気づいていたんだな」

もしかしたらと思っていたけど、やっぱりフェイトには気づかれていたんだな。
ティアと話しているとき、そんな視線でみていたからな。

「当たり前でしょう。ティアナが気づいてるのに、奥さんの私が気づかない訳ないでしょう」

そう言って、フェイトは俺のおでこをツンとしてきた。

「でも、ティアナには言って、私には言ってくれなかったのは……ひどいよ」

フェイトはぷくっと頬をふくらませて、「私、怒ってるんです」とアピールをしている。
でも、本気で怒っている訳じゃなくて、どちらかといえば、ティアにばかりかまっているってヤキモチみたいな物だ。

「ごめんな……。といっても、向こうも俺の動きで気づいたみたい」

「……本当、ティアナ、フィルのことを見ているよね……」

確かにティアは、本当に俺のことを見てくれている。
仕事の時も、普段の時も――――――。
だけど――――――。

「でも……。いつもこうやって、俺の心の支えになってくれるのは……フェイトだから……」

「……うん」

アグスタ事件の後、俺がどうしようかと迷っていたときだって――――。

最終決戦前、フェイトの力を失って、弱気になっていたときだって――――――。

そして――――――。

マリアージュ事件で、動けなくなってしまって、必死で俺の看病をして、俺のことをずっと信じてくれたあの時も――――――。

「俺は……フェイトがいてくれるからこそ……俺が、俺でいられるんだ。だから……」

その続きを言おうとしたとき、フェイトが俺を自分の方へ抱き寄せ……。

「……私も……私も同じだよ。フィルがいてくれたからこそ……私は今まで幸せだったんだからね……」

「フェイト……」

「だから、明日は、フィルの全力を受け止めてあげるからね」

そうだ――――――。

フェイトは、こうしていつも俺のことを受け止めてくれた。
だからこそ、俺はこの人を愛し、守りたいと思うんだ。

「……ああ、受け止めてくれ。俺の全てを……な……」

「うん……。でも、今は……」

「……ああ」

今はフェイトのぬくもりを、感じていたい――――――。
だから――――――。

月明かりが照らす中――――――。

俺たちは、互いを感じるために口づけをかわす――――――。
互いが満足するまで……何度も……何度も……。

「……フィル、今日は……いいよね」

「だけど……。いいのか？　明日……きつくなるぞ」

「いいの……。フィルと一つに……なりたいの……」

結局、俺たちは寝室に戻った後も、互いを何度も求め合ってしまい、就寝したのは、丑三つ時を過ぎた頃になってしまった。

そして――――――。

運命の二日目の朝が……やってきた。

# Ｍｅｍｏｒｙ，１２　コロナとルーテシアの決意（前書き）

はぁぁぁ――――――――――――――――――。

ここからしばらくの間、戦闘シーンが満載で、戦闘描写が超苦手なおいらにとってはまさに地獄（ヘル）ロードになっていきます……。

だれか私に文才をください！！

# Ｍｅｍｏｒｙ；１２　コロナとルーテシアの決意

試合当日の朝、わたしは少し早く目が覚めてしまったので、デバイスに慣れるために練習をしていた。

せっかく、デバイスが良くても、使う人が活かしきれないんじゃ宝の持ち腐れだもんね。

練習も一段落して、ロッジに戻ろうとしたとき、ルーちゃんがパジャマ姿のまま背伸びをしていた。

「ルーちゃん、おはよ！！」

「おはよー、コロナ。ブランゼル、調子はどう？」

「うん、さっきも一緒に練習してたんだけど、すごくいい子！！賢いし、わたしに合わせてくれるし」

フィルさんが考えてくれたわたしのデバイス『ブランゼル』本当に、わたしの為に合わせて作ってくれたのがよく分かる。

「そっか。綺麗な名前ももらったんだから、ご主人様のために頑張るんだよ？」

《Ｙｅｓ．Ｍａｉｓｔｅｒ》

わたしとルーちゃんは、朝ご飯を食べるために一緒にロッジに戻ることにした。
すると、ちょっと離れたところで――――――。

「はっ！！　はぁぁぁぁ……」

フィルさんが、タンクトップとＧパン姿で、朝から汗をいっぱいかいてトレーニングをしていた。

プリムを使っての、射撃練習、斬撃練習。
その後は、腕立て伏せを１００回以上……。

「……相変わらず……ストイックだね」

「うん……。朝ご飯を食べたら試合開始になるのにね」

しばらくの間、わたしとルーちゃんは、フィルさんのトレーニングに見惚れていた。
すると、向こうがわたし達に気がついて――――――。

「ん？　よっ、こんな朝早くどうしたんだ二人とも？」

フィルさんがトレーニングを中断して、こっちにやってきた。

「おはようございます、フィルさん」

「おはよーフィルさん」

「おはよう、コロナ、ルーテシア。朝ご飯にはちょっと早い時間だぞ？」

フィルさんが持っていた腕時計で、時間を教えてくれた。

確かに朝ご飯には、まだ1時間くらい早かった。

「ちょっと早く目が覚めちゃったんで、ブランゼルと一緒に練習してたんです」

「……そっか。ルーテシアが一生懸命作ってくれたデバイスだもんな」

やっぱりフィルさんは、自分が関わったことは、一言も言ってくれない。

昔からそうだったけど、自分が頑張ってやったことを自慢したりする人じゃない。

「……フィルさん」

「ん？　何だ？」

だから、わたしからフィルさんにちゃんとお礼を言うんだ。

「ほんとは……フィルさんも、一緒に考えてくれたんですよね……。ルーちゃんと一緒に……」

すると、フィルさんが頭をポリポリとかきながら、照れくさそうにして――――。

「……ルーテシア、お前だな。コロナに言ったのは……」

「あったり～♪」

「ったく……。基礎設計はお前が考えたんだから、俺の事なんて言わなくてもいいだろうに……」

フィルさんは、ふぅっとため息をつきながらそう答える。

「フィルさん、本当にありがとうございます。わたしのために、こんな素敵なデバイスを……」

「……まぁ、ばれてしまったんじゃ、もう隠しておいても仕方がないな。コロナ、一つだけ……言っておくことがある」

フィルさんは、しゃがんで、視線をわたしに合わせて、さっきまでとは違い、真剣な表情と目でわたしを見つめて――――。

「デバイスも魔法も……使い方次第では、人を活かす相棒にもなれば、殺しの道具にもなる」

「……はい」

フィルさんの言うとおりだ――――。
魔法もデバイスも、使い方次第で人を傷つける道具になってしまう。

「だから……ブランゼルを正しい使い方をするのも……コロナの心次第なんだ。それだけは……覚えていてくれ」

「――――はい！！」

それでも、フィルさんはわたしを信じて、わたしのために、ルーちゃんと一緒にデバイスを考えてくれた。

そして、わたしを一人前としてみてくれたんだ――――。

「……コロナなら、間違った使い方をしないと信じてるから……」

フィルさんは、わたしの肩に手を添えて、そう言ってくれた。
今のフィルさんの瞳は、本当に優しい目をしている。

「さてと、朝ご飯も支度しないとな……」

フィルさんは、スクッと立ち上がって、歩き出そうとしていた。

「……あ、あの……」

「ん？　どうしたんだ？」

きっと今のわたしは、顔が火照って真っ赤になってる。
でも、フィルさんに、ちゃんとわたしの感謝の気持ちを伝えたいから――――。

「ちょ、ちょっとだけ、かがんでくれませんか……」

「あ、ああ……良いけど？」

フィルさんは、わたしの背の高さに合わせて屈んでくれた。

そして――――――。

ちゅっ♪

「あらっ♪」

「なっ!?」

わたしは、ありったけの思いを込めて、フィルさんの左頬にキスをした。

「……こ、これは……わたしのありったけの気持ちです」

「コロナ……」

勢いでやってしまったとはいえ、もう、わたしはフィルさんの顔をまともには見られないよ!!

「そ、それじゃ、失礼します!!」

わたしは恥ずかしくなってしまい、その場から走って離れた。

＊　　＊　　＊

「フィルさん……」

「……何だ」

「顔……真っ赤ですよ」

「あたりまえだろうが……。コロナにいきなりあんな事されたんだからな……」

いきなり、コロナから頬にキスをされてしまい、フィルさんの頭の中はパニック状態になっているみたい。
でも、コロナも普段からは考えられないくらい大胆なことをするよね～。

「フィルさんって、自分の領域（テリトリー）にいない人には、全く反応示さないんだけど、なのはさん達や私達みたいに、大切な人たちって認識している女性に、本当に弱いですよね……」

「……ノーコメントだ」

「ふふっ、その反応で十分ですよ♪　でも、フィルさん、お礼を伝えたいのは、コロナだけじゃないんですよ」

「えっ……？」

ブランゼルを一緒に考えてくれたとき――――――。

フィルさんは、本当に一生懸命一緒に考えてくれた。私が基礎設計をして、それを何度もチェックを入れてくれて、足りない部品とかも、フィルさんが自費で作ってくれて、そう言ったことを全く自慢もしない……。

昔からそうだった――――――。

私をクアットロの洗脳から解き放ってくれたときも――――――。

六課で話しづらそうにしていたときも、フィルさんが間に入ってくれて仲間とのコミュニケーションを取りやすくしてくれたときも――――――。

そして今も――――――。

ママの養生のために、私がママと一緒にいられるように、ワザとカルナージに飛ばして、休職扱いにしてくれたことも――――――。

だから――――――。

ちゅっ♪

「な、ななな……」

私もありったけの感謝の気持ちを込めて、フィルさんの右頬にキスをする。

「えへへ♪　これは私からの感謝の気持ちだよ。本当はこれくらいじゃ、全然足りないんだけどね～」

「……充分すぎるお礼だっての……」

フィルさんは、顔をさらに真っ赤にしてしまい、プイッと反対の方に向いてしまった。
でも、本当にエリオがいなくて、フィルさんがフェイトさんの旦那さんじゃなかったら、間違いなくアタックしたんだけどな――――。

それくらい、素敵な男性だって事なんだけど、本人は全く自覚無しだし。

「フィルさん、それじゃ私も先に行ってますね～！！」

試合じゃ、私はフィルさんと一緒のチームだ。
向こうは、キャロが必死でフェイトさんとコロナ達のサポートをしてくる。

だけど、サポート合戦だったら、絶対にキャロに負けるわけにはいかない！！
まして、今回はフィルさんの復帰戦なんだから――――――。

フィルさん――――――。

フィルさんのサポートは、私が全力でしますから、一緒に頑張りましょうね！！

＊　　＊　　＊

試合開始　１０分前

一旦全員集合し、まずは、準備運動と試合のルール説明をすることになった。

「はい、全員揃ったね」

「じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんから！！」

「あ、あたしですか？」

ノーヴェはちょっと照れくさそうな顔をしながら、試合の説明を始めた。

「えー……。ルールは昨日伝えたとおり、赤組と青組六人ずつのチームに分かれたフィールドマッチです。ライフポイントは、今回もＤＳＡＡ公式試合用タグで管理します」

そう言ってノーヴェは、カウンターの付いたタグを取り出す。

「あとは皆さん、怪我のないよう正々堂々頑張りましょう」

『はーいっ』

そして、赤組、青組に別れて全員セットアップをし、最後の作戦会議を行う。

ちなみにそれぞれのライフポイントは――――――。

§ＴＥＡＭ　ＲＥＤ

ＣＧ：ティアナ・ランスター：２５００

ＧＷ：フェイト・Ｔ・グリード：２８００

ＦＡ：ノーヴェ・ナカジマ：３０００
ＦＡ：アインハルト・ストラトス：３０００
ＦＢ：キャロ・ル・ルシエ：２２００
ＷＢ：コロナ・ティミル：２５００

§ＴＥＡＭ　ＢＬＵＥ

ＣＧ：高町なのは：２５００
ＣＧ：フィル・グリード：２５００
ＦＡ：スバル・ナカジマ：３０００
ＦＡ：高町ヴィヴィオ：３０００
ＦＢ：ルーテシア・アルピーノ：２２００
ＧＷ：リオ・ヴェズリー：２８００

「序盤は多分同ポジション同士の１ｏｎ１」

「均衡が崩れるまでは、自分のマッチアップ相手に集中ね。でも、フィルだけはどういう動きするか分からないから、要マークだよ」

『おー！！』

向こうは、フェイトさんとティアナが、中心となって作戦会議をしてる見たいね。
フィルの動きをマークして、動きを呼んでいく作戦みたいね。

「向こうは前衛と中盤に突破力の高い子が揃ってる」

「序盤が守備を固めて、向こうの足を止めていくぞ」

『はいっ！！』

「ちょっと待ってくれ。外す物があるんだ……」

そう言って、フィルが上着とリストバンドを外すと、上着がガシャッと金属音をして、地面にめり込みコンクリートがひび割れてしまった。

「ちょ、ちょっとこの上着、持ってみて良いかな？」

「え、ええ……。どうぞ」

なのはさんが上着を持ってみると――――――。

「よっ……。って、も、持ち上がらない！？」

その後、なんとか持ち上げたが、重さに耐えきれず、なのはさんはすぐに地面に下ろしてしまった。

「フィル……。今までこんな重い上着とリストバンドを着けて訓練していたの……？」

「ええ……。半年間のブランクを少しでも埋めるために、ちょっときつめの訓練してたんです」

「……にしたって、５０ｋｇ以上のおもりを付けて、平然としてられるなんて……超人だよ」

『えええええええええええ！！』

なのはさんの言葉に、青組のメンバーが全員驚きを隠せないでいた。
確かに人間一人を背負って、普段の生活をしてるなんてありえないものね。

そして、どうやら、お互いに作戦が決まったみたいね。
それでは、私も試合開始の銅鑼を鳴らしましょう。

「それではみんな元気に……」

「試合開始～！！」

＊　　＊　　＊

「ウイングロードッ！！」

「エアライナーッ！！」

赤と水色の魔力で作られた道が、バトルフィールド全域に縦横無尽に展開され、そこを陸戦魔導師達は駆けあがる。

「行くよリオ！！」

「オッケーヴィヴィオ！！」

「コロナさん、リオさんの相手をお願いしても？」

「はい、お任せくださいッ！！」

アインハルトの相手は、ヴィヴィオ、コロナの相手はリオと、相手が決まると、散開し、それぞれのバトルフィールドに別れていった。

＊　　＊　　＊

「フェイトか……」

「どうやら、私の相手はフィルみたいだね……」

「そのようだな……」

フィルとの一対一なんて、久し振りだけど、復帰したてだと油断してたら、速攻でやられる！！

青組の中でマークが外せないのは、なのはとフィル。

だったら、私がフィルを止めるまで！！

「久し振りだよな……」

《ええ……。久し振りだからと言って、すぐに落ちないでくださいよ》

「分かってるって、今日は全力で行くぞ！！」

《了解です！！》

＊　　＊　　＊

「さて、FB（フルバック）として、どっちがチームをしっかり支えられるか？」

「負けないんだから！！」

ルーちゃんが、フィルさんの一緒のチームというのが、ちょっと悔しいけど、わたしも赤組のＦＢとして、チームを全力でサポートしてみせる。

絶対にルーちゃんには負けないんだから！！

＊　　＊　　＊

（なのはさんに大きいのを撃たれたら、一撃で全滅の危険がある）

それに今回はなのはさんだけじゃない。

フィルにだってやられたら、やっぱり戦局大きく傾いてしまう。

それだけは避けなきゃならない！！

（ティアナの徹甲狙撃弾は、わたしのよりも速いし固い。撃たせたら味方もわたしも危ない）

（必勝の一撃は――――――）

（（数の均衡が崩れた瞬間！！））

＊　　＊　　＊

「「おおおおっっ！！」」

あたしのリボルバーナックルと、ノーヴェのジェットエッジが互いに、シリンダーをフル回転させて激突し、赤と水色の魔力が火花を散らして、放電現象を起こす。

「さすがにやるねノーヴェ！！」

「ッたりめーよ！！」

あたしは一旦ノーヴェから離れ、後方のウイングロードに飛ぶ。

「仕事じゃともかく、格闘戦技（ストライクアーツ）じゃ……！！」

《Ｒｅｖｏｌｖｅｒ　ｓｐｉｋｅ．》

「とはいえ、あたしもおねーちゃんだから……！！」

《Ｃａｌｉｂｅｒ　Ｓｈｏｔ．》

あたしは、ウイングロードを使い、加速を付けてノーヴェに向かっていく。

「負けないッッ！！」

「負けねーッッ！！」

今度は蹴り同士の激突。
意地と意地のぶつかり合い。あたしも一歩も引くわけにはいかない。
やっとフィルが現役復帰することになる最初の試合。
絶対に勝って一緒に喜びたいんだ！！

＊　　＊　　＊

（立ち合うのはこれで3度目）

（格闘技では、まだまだアインハルトさんにはかなわないけど……。
魔法もありなら！！）

（来る！！）

私はヴィヴィオさんの攻撃に備え、構えを取る。
正面から突っ込んでくるかと思いきや、フェイントで上空高く飛び上がり――――――。

「一閃必中！！」

左手に魔力球を作り出し、それを右の鋭い拳の振りで打ち出す！！

「ディバインバスター」

虹色の砲撃は、恐ろしい早さで向かってくるが、それを何とかかわすことが出来た。
だけど、完全にはかわしきれず、かすってしまう。

アインハルト　ＤＡＭＡＧＥ　３００　↓ＬＩＦＥ　２７００

（高速砲――――――！！）

（カスっただけでも上出来――――――！！　まだまだここから！！）

「！？」

態勢が完全に整っていない隙を狙って、ヴィヴィオさんがバインドで動きを封じようとしてくる。
それでも、なんとか飛び上がって発動を回避する。

「は――――――っ！！」

ヴィヴィオさんの右足の蹴りが私を襲う。
ガードで受け止めるが、蹴りの威力が大きく僅かながらダメージ換算されてしまう。

アインハルト　ＤＡＭＡＧＥ　１００　→ＬＩＦＥ　２６００

「あらっ！？」

私は足払いで、ヴィヴィオさんの体勢を崩し――――――。

「がはっ！！」

一撃をヴィヴィオさんの胸に叩き込んだ。
勢いで、地面に叩きつけることが出来、距離も取ることが出来た。

ヴィヴィオ　ＤＡＭＡＧＥ　４００　→ＬＩＦＥ　２６００

なるほど……。

ヴィヴィオさんは魔法もまっすぐだ。

だけど、覇王流に生半可な射砲撃は通じない！！

（構えた――――――。アインハルトさんにも中距離（ミドルレンジ）が！？）

（でも、魔法の撃ち合いなら――――――！！）

「ソニックシューター！！」

ヴィヴィオさんの周りに、虹色のスフィアがいくつも展開される。

良いでしょう――――――。

「覇王流『旋衝破（せんしょうは）』」

あなたの攻撃、受けて立ちます――――――。

＊　　＊　　＊

「くっ！？」

リオの魔力弾の嵐が、わたしを捉えようと、速いスピードで放たれる。
何とかかわすが、このままじゃいつか捉えられてしまう。
こうなったら――――――。

「おっ、追いかけっこはもう終わり？」

「跳んだりはねたりはちょっと苦手……。だから、ここで戦うよ」

「オッケー！！」

ここで、リオと正面から戦う！！

（コロナの魔法は個性的だし、後手に回ったらあたしがヤバイ。止まってくれたんなら先手必勝ッ！！）

リオがベルカ式の魔法陣を足下に展開し、炎と雷の魔力を出し構えを取る。

あっちもいよいよ本気になってきた。

でも、わたしだって――――――。

わたしはポケットから、水晶を取り出す。

このクリスタルは、わたしの魔法のためのコア。

（わたしは格闘技も魔法戦も、そんなに上手くないけど、ひとつだけ誇れる物があるんだ！！）

「行くよコロナッ！！　双龍円舞ッ！！」

炎と雷の龍がリオの手で作り出され、まるで龍が舞っているかのような美しさと激しさがある。

でもね――――――。

（昔、ヴィヴィオとフィルさんに褒めてもらって、嬉しくて、それからずっと練習してたこと）

「創成起動（クリエイション）――――――」

わたしはフィルさんが作ってくれたブランゼルに口づけをし――――――。

（端末（クリスタル）を核に魔力を込めて練った物質を……）

端末に反応し、地面が盛り上がり、やがてそれは――――――。

（望む形に変えて自在に操る）

巨大なゴーレムを作り出す。

（それがわたしのゴーレム創成（クリエイト）！！）

ブランゼルのお陰で、只のゴーレムじゃなく、鎧も纏った戦士として作り出すことが出来た。今までは作ることは出来るが、こんなに早く作るのは、この子無しでは無理だった。

「行くよリオ！！　正々堂々！！」

「試合開始ッ！！」

リオ、今までのわたしと思ったら痛い目に遭うからね。

全力全開、本気の勝負だよ！！

# Ｍｅｍｏｒｙ，１３　ＭＡＸＩＭＵＭ（前書き）

約２ヶ月ぶりの本編更新です。

しかも、今回は神崎はやて先生にお力を貸していただいて、何とか書くことが出来ましたので、助っ人がいない状態ですと、さらに更新速度が落ちそうです（涙）

# Ｍｅｍｏｒｙ；１３　ＭＡＸＩＭＵＭ

「いやあ、みんな元気にやっとるねえ」

「ほんとうにねえ」

「ですね。ＣＧ（センターガード）同士も足止めてますし、陣形も崩れてませんね」

「うん、綺麗な戦闘だわ。でも、エリオ君本当にごめんなさい。本当なら参加できていたのに……」

「いいえ、これは僕が自分で決めたことですから……」

こうしてみんなの戦いを見ているのも、充分に勉強になる。
欲を言えば、フィルさんと戦ってみたいという気持ちがあるけど、今はそれよりも復帰したフィルさんの力がどのくらいなのか、その方が興味あるから。

現在のライフポイントは――――――。

§ＴＥＡＭ　ＲＥＤ

ＣＧ：ティアナ・ランスター：２５００

GW：フェイト・T・グリード：２８００
FA：ノーヴェ・ナカジマ：２９００（－１００）
FA：アインハルト・ストラトス：２６００（－４００）
FB：キャロ・ル・ルシエ：２２００
WB：コロナ・ティミル：２５００

§TEAM　BLUE

CG：高町なのは：２５００
CG：フィル・グリード：２５００
FA：スバル・ナカジマ：２９００（－１００）
FA：高町ヴィヴィオ：２６００（－４００）
FB：ルーテシア・アルピーノ：２２００
GW：リオ・ヴェズリー：２８００

「FB（フルバック）の二人も支援のセッティングがそろそろ済む頃だし、アタッカー達のバランスも崩れ始めるここからが見物よ」

＊　　＊　　＊

「ソニックシューター、ファイアッ！！」

虹色の魔力弾が、アインハルトさんに向かって放たれる。
数も威力も充分。当たれば間違いなくライフを削ることが出来る。

（良し！！　アインハルトさんが受けに入る！！）

足を止めてくれれば、着弾の隙に回り込んで攻撃することが出来る。
わたしは全速でダッシュし、攻撃態勢に入る。

だけど――――――。

「いっ！？」

アインハルトさんに。全部のバレットを受け止められてしまう。
しかも、弾殻（バレットシェル）を壊さないで、しかもそれだけで終わらず――――――。

「覇王流……」

わたしのバレットを受け止めたまま、そのまま野球ボールを投げるように、わたしのバレットを使い――――――。

（これってまさか！？　まずい！！）

つかさず防御態勢にはいるが――――――。

「旋衝破」

わたしのバレットは、全てアインハルトさんに投げ返されてしまった。

（反射技（リフレクト）――――――！？）

ヴィヴィオ　ＤＡＭＡＧＥ　１９００　→ＬＩＦＥ　７００

何とかとっさに受け身を取って、最悪のダメージは逃れたけど、それでもかなりのライフを持って行かれてしまった。

＊　　＊　　＊

「すっげー！！　何今の！？　弾丸反射！？」

「いえ、違います。おそらくあれは……」

「エリオ君の想像通りよ。あれは反射（リフレクト）でも弾丸反射でもないわね。

あれは、受け止めて投げ返したの」

「そんな事できんの？」

「真正古代（エンシェント）ベルカの術者なら、理論上はね」

それにしても、あの年齢であの技術――――。

一体どれだけ苛烈な修練を積んだというの――――？

「あれ？　覇王っ子、なんか様子が……」

スクリーンに映し出されたアインハルトを見ると、右肩の所から魔力爆発が起こり、アインハルトにもダメージ計算がされる。

アインハルト　ＤＡＭＡＧＥ　３００　→ＬＩＦＥ　２３００

「うおお！！　なになに？」

「ヴィヴィオの反撃ですよ。あの一瞬、カウンターで右肩に当ててたんですよ」

「ちょっとズレてたら、結果は逆だったかもね」

これでフロントアタッカーが崩れ、おそらく赤組は攻撃を仕掛けるわね。
さてさて、フィルになのはちゃん。
この状況、どう切り抜けるかしら――――。

＊　　＊　　＊

「アインハルト、ストップ！！」

あたしは、ヴィヴィオに追撃をかけようとしたアインハルトをストップさせる。

「今のダメージなら、ヴィヴィオは一旦下げられる。この隙に戦陣突破で斬り込んで！！　目標は……」

「青組のＣＧ（センターガード）なのはさんのところ！！」

「――――――はいっ！！」

フィルは、フェイトさんが足止めしてくれてるから、そっちはフェイトさんに任せればいい。
向こうは、フィルとなのはさん、指揮が出来る人間が二人いる。

どっちかを早めに叩いておかないと、間違いなくこっちが危ない！！

＊　　＊　　＊

「凄い、凄い――――――！！　あんな技があるんだ！！　でも、わたしだって！！」

「うん、ヴィヴィオに火がつき始めた。とはいえ……」

さっきのアインハルトからの反撃は、無視できるものじゃない。
ライフ３桁で、これ以上追撃させるのは得策じゃない。

「ヴィヴィオ、治療するから一旦戻って」

「ええ――――ッ？」

スクリーンに映し出されたヴィヴィオは、明らかに不満な顔をしている。
確かにアインハルトと早く戦いたいのは分かるけど――――。

「ヴィヴィオ、そんな状態で戦っても、フィルさんの足手まといに

なるだけ。こんな序盤で落ちる方がまずいのよ」

「……うん」

「私ね……。今回は絶対に勝ちたい。フィルさんに勝利をプレゼントするためなら、どんな手だって考える。例え手段が汚いって言われても！！」

「ルールー……」

フィルさんって、普段は勝負事でも、あまり率先して勝ちたいという気持ちは出さない。
そんなフィルさんが今回の紅白戦、勝ちたいってはっきりと言った。
だからこそ勝ちたい。勝ってフィルさんと一緒に喜びたい！！

「だから、お願い。ここは一旦戻ってライフを万全にして！！」

「うん！！」

フィルさん、サポートは私に任せて、フィルさんは全力で戦ってください。
全力全開、おもいっきりやっちゃってください！！

＊　　＊　　＊

「「はあああああああ！！」」

プリムとバルディッシュの激突。
プリムの白銀の魔力刃をバルディッシュの柄で受け止め、その激突で火花がほとばしる。

激突の衝撃を利用し、私とフィルは、互いに距離を取り構えを取り直す。

（フィル、本当に強くなった。さっきから全力で撃ち込んでるのに、クリーンヒットが取れない）

今までのフィルだったら、これだけの打撃を放ったら、もっとダメージを受けている。
だけど、今のフィルは本当に強い――――。

それだけ、この半年間苛烈な修練をしてきたって事だ。

フィル　ＬＩＦＥ　２３００（－２００）
フェイト　ＬＩＦＥ　２５００（－３００）

《フィルさん、こちらルーテシア。ヴィヴィオの復帰まであと少し。それまでフェイトさんの足止めをお願いします》

「了解だ。こっちは任せろ」

まずいな――――。

正直言って、今のフィルを相手にするのはかなり厳しい。

しかも、フィルはまだ切り札を出していない。

「……そろそろ頃合いだな。プリム、いよいよ『アレ』を使うぞ」

《アレですね……。良いですよ、いつでもオッケーです！！》

そう言った直後、フィルが六つのビットを展開させる。

そのビットは、今までのブラスタービットとは違い、青く細長い銃口のような形をしている。

「……な、何、あれ？　ブラスタービットとは違う？」

「驚くのはまだ早いよ。この新モード『マキシマムモード』の力、存分に見せてあげるよ」

「マキシマムモード……？　これがフィルの新しい力……」

「散開しろ！！　『マキシマムビット』！！」

《ｍａｘｉｍｕｍ　ｂｉｔ　Ｓｐｒｅａｄ　ｏｕｔ！！》

私は、そのビットの動きに注意していたが、その瞬間――――――。

全てのビットが消え――――――。

「……き、消えた！？　ま、まさか！？　きゃあああっっっ！！」

気づいたときは、すでに目の前に六つの白銀の砲撃が迫っていた。

何とかシールドで防いだけど、勢いを殺しきれないで吹っ飛ばされ、ダメージもかなり負ってしまった。

フェイト　ＤＡＭＡＧＥ　１５００　↓ＬＩＦＥ　１０００

何とか迎撃しようと、プラズマランサーでビットを撃ち落とそうと狙いを定める。

しかし――――――。

「……なっ！？」

フィルのビットがさらに動きを増した。

その動きは、まるで神速の領域。
目で捉えることはできず――――――それ故、狙いなんて定められることなど無理だ。

かろうじて、ビットが放つ白銀の光や、残像が残って見えるほどだ。
ビットに向けてプラズマランサーを放つが、ランサーは残像を貫くのみで、ビット本体を捉えることは出来ない。

そして、再びビットから白銀の砲撃が放たれる――――――。

「……くっ！！」

間一髪、オーバル・プロテクションで攻撃を防ぎ、はじき飛ばす。

「……なるほどね。やっと……わかった。まさかビットに、ソニックムーヴをかけて飛ばすなんて……」

今までの動きを見て、やっとビットの特性をつかむことが出来た。
あのビットから放たれていた白銀の光――――――。

あの光は、私やフィルが加速魔法のソニックムーヴを使うときに僅かに発する物。

あの光のおかげで、やっとマキシマムビットの高速移動の秘密が分かった。
それにしても、ビットにソニックムーヴをかけるなんて、本当にフ

ィルは戦いの天才だよ。

「……なんとか打開策を見つけないと……あれ？」

息を整えながら考えてた私の目に映ったのは、その場から殆ど動かないフィルの姿。

さっきから、いくらだって私に決定打を与えるチャンスがあったはず。

だけど、さっきからビットを使っての攻撃以外、殆ど動いていない――――――。

「……そっか！！」

私の予想が当たっているなら、あのビットの弱点は――――――――！！

「それじゃ、そろそろとどめを刺させてもらう。マキシマムビット・フルバースト！！」

フィルはビットの動きを、さらに速くし、ビットの残像もさらに増す。

残像と本体からの砲撃――――――――。

その数は２０を超える。

「一か八か！！　バルディッシュ、ライオット！！」

《Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

バルディッシュのカートリッジをロードし、ライオットブレードが二本に分裂させる。

激しく帯電した、金色に輝く、二振りの刃――――――ライオットザンバー・スティンガー。

「ライオット……か。でも、それでどうするんだ！？」

「フィル、あなたのマキシマムビットの弱点、それは……」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｒｅｌｅａｓｅ　ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ.（プロテクション解除、ソニックムーヴ）》

砲撃を防いでいたシールドを解除し、直後に一瞬にして急加速する。

それに認識が遅れたビットの放った砲撃が、先程まで私がいた空間を貫いていく。

「はぁあああああっっ！！」

それと同時にソニックムーヴで、フィルの懐に一直線で突撃する。
それに気づいたフィルが、ビットで迎撃をするが、ビットの高速移動のスピードよりも速く動き、その攻撃を全てかわす。

「マジかよ……。真ソニックを使ってないのに、あの動き……」

「……そうだよ。防御力が犠牲になってしまう真ソニック。それを解消するために、私も鍛え直したんだからね！！」

真ソニックの弱点。
それは、防御力の低下――――――。

ジャケットを極限までなくすことで、高速移動に魔力を回せるが、反面、一撃を食らってしまうと、大ダメージになってしまう。

最初は新しいフォームを考えていたんだけど、根本的な問題、私の体力の無さを克服しない限り、どんなフォームを考えたって使いこなすことは出来ない。

だから、私はこの半年、ひたすら身体強化をし、インパルスフォームでも真ソニック並のスピードで動けるようになった。

その結果、防御力を落とすことなく、パワーアップすることが出来た。

「切り裂け！！　ライオットブレード！！」

「ちいぃいい！！」

上段から振り下ろされたライオットブレードは、フィルのバリアジャケットを切り裂き、胸元の一部があらわになる。

フィル　ＤＡＭＡＧＥ　１５００　↓ＬＩＦＥ　８００

「……よくわかったな。マキシマムの弱点……」

「……高速移動で仕留めるのがフィルのスタイルなのに、全然動かなかったからね」

マキシマムビットの弱点――――――。

おそらく、ビットを操ることにかなりの演算領域を使用しているため、自身の行動にまで、それを振り分ける余地がない。

ソニック・ムーヴまで取り入れる荒業を使っているんだ。有り得ないことではない。

「だけど、勝負はまだこれからだ。マキシマムの能力は、これだけじゃない！！」

「うん、フィルの全力全開。私が全部受け止めてあげる！！」

互いにライフを削られたが、勝負はこれからが本番。
フィル、この勝負絶対に負けないからね！！

＊　　＊　　＊

「まずいわね……。フィルさんが予想以上にダメージを受けてしまってる」

本来なら、フィルさんがあのマキシマムビット・フルバーストで圧倒する予定だった。
だけど、フェイトさんが弱点に気づき、一気に互角に持ち込んできた。

本当ならフィルさんを戻して、回復させたい。
だけど、ここでフィルさんを戻したら、間違いなくフェイトさんがなのはさんの所に行ってしまう。

ここはフィルさんを信じるしかない。

「青組一同、ヴィヴィオが復帰したら例の作戦に移ります。いつでも動けるようにお願いします！！」

『了解ッ！！』

この作戦がうまくいけば、フィルさんの負担も軽くすることが出来る。

フィルさん、もう少しだけ持ちこたえてください。

＊　　＊　　＊

『ティアさん、ルーちゃんが何か企んでいます！！』

「あの子の悪巧みは洒落にならないのよね」

ルーテシアの悪巧みは、本当に洒落にならない。

あの子が考えることは、どちらかというとフィルに近い。

あっちにフィルがいるだけで頭が痛いのに、ルーテシアまでいるから本当に質が悪い。

「アインハルト！！　向こうの作戦の要は、まず間違いなくフィルかなのはさんよ。今のところフェイトさんがフィルを押さえてるから、全力でなのはさんを止めて！！」

「承りました！！」

フィル、あんたには悪いけど、この勝負負けられない！！

あんたも自分の強さを証明したいのと同じで、あたしも証明したいの――――――。

あんたのパートナーとして、一緒にいるためにもね！！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3634l/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 〜Remember my heart〜

2011年7月30日12時44分発行